

平成 27 年度 博士学位請求論文

ディープンカラシュリージュニャーナ研究

望月 海慧

ディーパンカラシュリージュニャーナ研究

序論	1
第1部 予備的考察	
第1編 生涯と著作	
第1章 はじめに	7
第2章 Dīpaṃkaraśrījñāna の著作	21
第3章 従来の研究	49
第2篇 Dīpaṃkaraśrījñāna の思想背景	
第1章 Dīpaṃkaraśrījñāna の Nāgārjuna 観	69
第2章 Śāntideva への依拠	75
第3章 中観の師 Bodhibhadra	87
第4章 中観と唯識を融合する「大中観」とは何か	101
第2篇 テキスト研究	
第1部 小部文献	
第1章 『菩提道灯論』『菩提道灯論細疏』	109
第2章 『入二諦論』	133
第3章 『中観説示』	139
第4章 『心髓集』と『心髓撰集』	199
第5章 『無垢宝書翰』『菩薩摩尼鬘論』『菩薩行略教訓』	211
第6章 『輪廻出離意歌』『行歌』『法界見歌』	227
第7章 『一念説示』	255
第8章 『入菩薩初学道説示』『行集灯論』	261
第9章 『帰依説示』	271
第10章 『大乘道成就語句撰集』『大乘道成就撰集』	279
第11章 『自作次第勸誡語句撰集』『上師所作次第』	293
第12章 『経義集説示』	301
第13章 『十不善業道説示』	311
第14章 『業分別論』	321
第15章 『三昧資糧論』	337
第16章 『罪過懺悔儀軌』『読誦読経前行儀軌』『波羅蜜乘甄仏造作儀軌』 『超世間七支儀軌』『一切業障摧破儀軌』	375
第17章 『発心律儀儀軌次第』	385

第 18 章 『種姓誓願』	397
第 2 部 注釈文献	
第 1 章 『般若波羅蜜多撰義灯論』	405
第 2 章 『般若心解説』	433
第 3 章 『経集撰義』	445
第 4 章 『業障清浄儀軌解説』	453
第 5 章 『入菩薩行論釈』	467
第 6 章 『十万頌般若撰義』	509
第 3 部 アンソロジー文献	
第 1 章 『大経集』	523
第 2 章 執事を説く経典	539
第 3 章 非行境を説く経典	547
第 4 章 星宿を排除する経典	553
第 5 章 『大経集』における『般若経』の引用	561
第 6 章 『大経集』における『正法念処経』の引用	571
第 4 部 真言乗文献	
第 1 章 秘密集会文献	585
第 2 章 ターラー成就法文献	607
第 3 章 『金剛座金剛歌』	623
第 4 章 『根本過犯注』	641
第 5 章 <i>Dīpaṃkaraśrījñāna</i> の顕教文献における密教文献への言及	659
第 5 部 チベット仏教に与えた影響	
第 1 章 『ラムリム・タルゲン』に引用される『菩提道灯論』	685
第 2 章 『ラムリム・チェンモ』に言及される <i>Dīpaṃkaraśrījñāna</i>	697
第 3 章 <i>Bu ston rin chen grub</i> の『法行楽道』について	709
第 4 章 <i>Co ne Grags pa bshad sgrub</i> による『菩提道灯論釈』	755
結論	791
附論 チベット語訳校訂テキスト	
1 菩提道灯論 (<i>Bodhipathapradīpa</i>)	799
2 菩提道灯論細疏 (<i>Bodhimārgadīpapañjikā</i>)	809
3 入二諦論 (<i>Satyadvayāvatāra</i>)	931
4 一念説示 (<i>Ekasmṛtyupadeśa</i>)	937
5 中観説示 (<i>Madhyamakopāśa</i>)	941

6 中觀說示開寶篋 (<i>Ratnakaraṅdoghāṭa</i>)	945
7 經集撰義 (<i>Sūtrasamuccayasamcayārtha</i>)	993
8 心髓集 (<i>Garbhasaṃgraha</i>)	997
9 心髓撰集 (<i>Hṛdayanikṣepa</i>)	1001
10 菩薩摩尼鬘論 (<i>Bodhisattvamāṇyāvalī</i>)	1005
11 菩薩行略教訓 (<i>Bodhisattvacaryāsūtrīkṛtāvavāda</i>)	1009
12 入菩薩初學道說示 (<i>Bodhisattvādhikarmikamārgāvatāradeśanā</i>)	1015
13 歸依說示 (<i>Śaraṇagamanadeśanā</i>)	1021
14 大乘道成就語句撰集 (<i>Mahāyānapathasādhanavarṇasaṃgraha</i>)	1025
15 大乘道成就撰集 (<i>Mahāyānapathasādhanasaṃgraha</i>)	1039
16 自作次第勸誡語句撰集 (* <i>Samcodanasahitasvakṛtyakramavarṇasaṃgraha</i>)	1041
17 經義集說示 (<i>Sūtrārthasamuccayopadeśa</i>)	1045
18 十不善業道說示 (<i>Daśākuśalakarmapathadeśanā</i>)	1053
19 業分別論 (<i>Karmavibhaṅga</i>)	1057
20 行集燈論 (<i>Caryāsaṃgrahapradīpa</i>)	1071
21 發心律儀儀軌次第 (<i>Cittotpādasamvaravidhikrama</i>)	1075
22 罪過懺悔儀軌 (<i>Āpattideśanāvidhi</i>)	1083
23 誦誦誦經前行儀軌 (* <i>Adhyayanpustakapāṭhanapuraskriyāvidhi</i>)	1085
24 波羅蜜乘軛仏造作儀軌 (* <i>Pāramitāyānasācchanirvapaṇavidhi</i>)	1087
25 上師所作次第 (<i>Gurukriyākrama</i>)	1089
26 般若心解說 (* <i>Prajñhṛdayavyākhyā</i>)	1091
27 般若波羅蜜多撰義燈論 (<i>Prajñāpāramitāpiṇḍārhapradīpa</i>)	1101
28 業障清淨儀軌解說 (<i>Karmāvaraṇaviśodhanavidhibhāṣya</i>)	1139
29 一切業障摧破儀軌 (<i>Sarvakarmāvaraṇaviśuddhikaravidhi</i>)	1151
30 無垢寶書翰 (<i>Vimalaratnalekha</i>)	1153
31 種姓誓願 (<i>Kulapranidhāna</i>)	1159
32 三昧資糧論 (<i>Samādhisambhāraparivarta</i>)	1161
33 輪廻出離意歌 (<i>Saṃsāramanoniryāṇīkāranāmasaṃgīti</i>)	1163
34 行歌 (<i>Caryāgīti</i>)	1169
35 法界見歌 (<i>Dharmadhātudarśanagīti</i>)	1173
36 超世間七支儀軌 (<i>Lokottarāṅgasaptakavidhi</i>)	1197
参考文献	1199

略号

- B 中華大蔵経 (*bsTan 'gyur* 〈*dpe bsdur ma*〉). Edited by Krung go'i bod kyi shes rig zhib 'jug lte gnas kyi bka' bstan dpe sdur khang. Beijing: Krung go'i bod kyi shes rig dpe skrun khang, 1997)
- C チョネ版チベット大蔵経 (アメリカ議会図書館所蔵マイクロフィルム, W1GS6603)
- D デルゲ版チベット大蔵経 (東京大学文学部印度哲学印度文学研究室編『デルゲ版チベット大蔵経論疏部』世界聖典刊行協会, Cf. W23703)
- G 金写版チベット大蔵経 (中国民族文化宮整理『丹珠爾』天津古籍出版社, 1988年 W23702)
- N ナルタン版チベット大蔵経 (チベット・ハウス図書館所蔵、ニューデリー, W22704)
- P 北京版チベット大蔵経 (西藏大蔵経研究会編『影印北京版西藏大蔵経—大谷大学図書館蔵』西藏大蔵経研究会, 1955-1961年)
- T 大正新脩大蔵経 (高楠順次郎・渡辺海旭・小野玄妙編『大正新脩大蔵経』大正一切経刊行会, 1924-34年)
- W チベット仏教文献センター (Tibetan Buddhist Resource Center) 電子データ

凡例

Dīpaṃkaraśrījñāna の偈頌で著された文献については、原則としてパーダの番号で数える。

人名については、アルファベットで表記したが、和訳においてはカタカナを用いている。

序論

11 世紀にチベットに仏教を伝えるためにインドのヴィクラマシーラ僧院からチベットに招かれた *Dīpaṃkaraśrījñāna* (982-1054) は、その後のチベット仏教の形成に大きな影響を与えたと言われている。同論は、チベット王の要請によりチベットに伝えるべき仏教の教義をまとめたものであるから、そこには彼が最も重要視した教義が提示されていると考えられる。また、チベット仏教思想を大成した *Tsong kha pa Blo bzang grags pa* が『菩提道灯論』に基づいて『ラムリム・チェンモ』を著したことで、同論がチベットにおける道次第の思想の基盤を作った、とされている。このことから、従来の *Dīpaṃkaraśrījñāna* に対する研究の多くは、その主著ともされる『菩提道灯論』に基づいて彼の思想を論述することがなされてきた。

本研究は、『菩提道灯論』だけでなく、彼のすべての著書を総合的に解説することで、彼の思想を解明しようとするものである。そのための研究対象となるものは、チベット大蔵経のテンギュルに収録されている彼の著書全体である。ただし、顕教文献を中心に考察している。密教文献は、特定の者を対象にして説かれたものであり、それを顕教文献と同列に扱うことはできないからである。*Dīpaṃkaraśrījñāna* 自身は、自らの著書が顕教か密教なのかという判断基準を持っており、後者は不特定の者に説いてはならないものである、という認識を有していたはずである。それ故に、彼の思想を考察する場合も、顕密の区別を行う必要があるからである。

第1部では、著作を考察する前提として、彼の思想形成の元となる資料を提示する。その第1編では、予備的考察として、まず、彼の名称について検討した。チベットにおいて、*Atiśa* として知られているが、そのサンスクリットの意味が曖昧だけでなく、テンギュルに収録されている彼の著書では、その著者はこの名称で呼ばれていない。すなわち、これらの文献を対象とする本研究において彼を *Atiśa* と呼ぶ根拠はないので、ここでは彼を *Dīpaṃkaraśrījñāna* とする。続いて、彼の伝記を紹介した後、インドにおける彼の活動について考察する。また、本研究で扱う文献の書誌情報を提示するとともに、従来の研究を簡単に紹介する。ただし、著作のうち密教文献については考察の対象となっていないために、著者性の曖昧なものもリストに含まれている。また、テンギュル所収の文献を研究対象としたために、蔵外文献についてはリストから外している。

第2編では、彼の思想を形成する背景として、先行する論師の思想的影響を考察する。まず、彼自身が中観論者と自認しているために、彼の *Nāgārjuna* 観を考察する。続いて、彼の著書において最も多くの著書が引用される *Śāntideva* への依拠について考察する。従来の研究では、チベット宗義書の影響で、彼の思想を *Candrakīrti* の系譜で捉える傾

向にあるが、先行する論師で最も依拠しているのは Śāntideva である。また、彼は Bodhibhadra を中観の師と述べており、彼の論書も多く引用している。それ故に、彼の中観思想を形成する上で直接の師となった Bodhibhadra との関係についても考察する。最後に、これらの先行する師に基づいて形成された彼の中観思想について考察する。それは、後代のチベット学者が見るような、中観自立論証派と帰謬派というような思想体系ではなく、瑜伽行唯識派の止の修行体系の上に中観の無自性論証の観を獲得する実践的修習に基づくものであり、その上に特別なコースとして真言乗をともなっている。このことは、彼独自の見解というよりも、当時の時代的傾向に従ったものである。

第2部では、彼の個々の著作を取り上げ、それぞれの内容を明らかにする。第1編では、小部文献を取り上げる。テンギェルには、彼の小部文献の多くが二種類収録されている。このことは、テンギェル以前に彼の著作集が編纂されており、それらの著書がテンギェルに再録された可能性を示すものである。ただし、すでに一つの文献が収録されているのに、同じ文献をもう一度取り上げた意図については明らかではないが、彼の小部集が大蔵経の別巻として存在しており、古いナルタン版では中観部の最後の巻に移動したのであろう。新しいデルゲ版でそれが小部集として独立しているのは、この移動を修正したように思える。ただし、この小部集に収録されている著書についても、編纂者の意図があるために、いくつかの問題を含んでいる。すなわち、そこには菩薩行を説く顕教文献が中心にまとめられているのだが、テンギェルで密教文献とされる文献も数点含まれている。これは、彼の著作分類に対してテンギェルの編纂者と小部集の編纂者の見解が異なったからである。個々の文献については、ここで言及しないが、小部集に含まれない文献についても本研究では言及する。『菩提道灯論細疏』と『中観説示開宝篋』については、それぞれ『菩提道灯論』と『中観説示』との関連文献なので、ここで取り上げる。『罪過懺悔儀軌』と『一切業障摧破儀軌』については、小部集に収録されていないが、他の儀軌文献と一緒に本編で考察を行う。また、『種姓誓願』も小部集に収録されていないが、顕教の小部文献であるために本編で考察を行う。

第2編では、注釈書文献を取り上げる。般若部に収録されている『般若波羅蜜多撰義灯論』と『般若心解説』については、前者は Maitreya の『現観莊嚴論』に対する概説書であり、後者は『般若心経』の解説書である。蔵外文献に、Atiśa に帰される『十万頌般若撰義』があり、それについても本編の最後に加える。同論は、『十万頌般若経』を讀誦用にまとめた小部文献である。経典の注釈書としては、もう一つ、『三蘊経』の懺悔儀軌に対する解説書である『業障清浄儀軌解説』がある。また、中観の論書に対する注釈書としては、Nāgārjuna の『経集』の概説書である『経集撰義』と、Śāntideva の『入菩提行論』に対する注釈書である『入菩薩行論釈』がある。これらの注釈書文献

についての考察を本編で行う。

第3編では、大部のアンソロジーである『大経集』を取り上げる。テンギユルの中観部には Nāgārjuna の『経集』、Śāntideva の『集菩薩学論』、著者不明の『修習次経集』と並んで彼の『大経集』が収録されている。本論については、すでに、*A Study of the Mahāsūtrasamuccaya of Dīpaṃkaraśrījñāna, 2 vols., Minobu: Minobusan University, 2001-4* として、その概要と校訂テキストを公表しているが、ここでは、第七章の執事を説く経典、第十八章の非行境を説く経典、第三十二章の星宿を説く経典について考察する。また、全体を通して引用が多い『般若経』と『正法念処経』についても、彼の他の著書での言及も合わせて考察する。

第4編では、密教文献を取り上げる。本研究では、彼の密教思想を研究対象としていないのだが、若干の論書を取り上げる。まず、秘密集会タントラ関係の文献については、彼の伝記資料にその書誌情報が記されているので、その記述を論証するために、著作内容を考察する。ターラー成就法については、顕教文献においてもターラーへの言及が見られることから本論に加えている。『金剛座金剛歌』については、小部集に収録されている『行歌』と対になる著書であるために、その注釈書とともに考察すべき対象となる。『根本過犯注』については、小部文献の『十不善業道説示』における Aśvagoṣa の著作との同一性の問題に関連して、新たな問題が明らかになった。すなわち、『根本過犯』については、Aśvagoṣa によるものと、Dīpaṃkaraśrījñāna の師でもある Advayavajra のものがあるが、この注釈書はその著者として第三者を提示している。このことは、Aśvagoṣa に帰される小部文献の著者性について新たな問題を提示することになる。最後に、彼の顕教文献における密教文献への言及を取り上げる。これらの密教文献は、彼の思想基盤の形成に重要な役割を果たしているために、顕教の著作においても無視できないものとなっている。そのために、彼が顕教文献において密教文献をどのように利用していたのかは、考察すべき対象である。

第5編では、彼の思想がチベット仏教に与えた影響について考察する。これについては、彼の『菩提道灯論』を基軸にしてラムリム思想が形成されているために、同論を中心に考察する。すなわち、タクポ・カギユ派の開祖である sGam po pa bSod nam rin chen の『ラムリム・タルゲン』とゲルク派の開祖である Tsong kha pa の『ラムリム・チェンモ』を取り上げ、それらにおける『菩提見道灯論』への依拠を考察する。また、Bu ston rin chen grub の『法行楽道』については、初学者文献である Dīpaṃkaraśrījñāna の『入菩薩初学者道説示』との関係から、ここで考察する。また、チベット仏教における『菩提道灯論』に対する注釈書について分析を行い、その注釈の系譜を明確にするために Grags pa bshad sgrub の注釈を取り上げる。

本研究では、以上のような観点から、Dīpaṃkaraśrījñāna の小部文献を中心に整理して、それらの文献に説かれている内容を考察することで、彼の思想体系を解明することを目的としている。彼が、中観論者であることは、自らが明言している。そこで、従来の研究では、彼の中観に関する論書、特に『入二諦論』を中心に彼の思想を論じ、それを彼の中観思想として分析してきた。そこには後代のチベット宗義書が行ったような中観の学派分類の見地から論じるものが多く、彼を帰謬派の論者と断定するものもあった。しかしながら、上記の文献をすべて考察すれば、そのような理解は一部の著書の僅かな語句に基づく判断でしかない。本研究では、彼の中観理解だけでなく、瑜伽行唯識思想の理解、菩薩行の実践論、さまざまな儀軌の解説、大乘経典を含む経論に基づく聖典観、真言乗に対する言及に基づく密教観などを含めたさまざまな観点から彼の思想を総合的に考察する。これらを分析することで、彼の思想体系を明らかにすることが本研究の目的である。

第 1 部 予備的考察

第 1 編 生涯と著作

第1章 はじめに

第1節 「アティシヤ」の名称について

Dīpaṃkaraśrījñāna（或いはAtīśa / Atīśa）の研究に関して論じる前に、最初に避けられないことが、彼の名称に関する問題である。従来の日本の研究者の多くは、彼のことを「アティーシャ」と呼んでおり、御牧克己¹はこの呼称を強調している。それに対して、ヘルムート・アイマー (Helmut Eimer) により「アティシヤ」と記すべきであるという見解が出されてからは、ヨーロッパの学者の間では後者が優勢となった²。学会などで彼の文献に関する研究を発表するたびに、この何れを支持するのかという質問を受けた。残念ながら、どちらがサンスクリットとして適当なのかを判断することができない、と明確な判断を避けていたのだが、それと同時にこれらの呼称を用いることに疑問を感じるようになった。少なくとも、本研究で扱う文献のコロフォンからはこれらの呼称を得ることはできず、そこには Dīpaṃkaraśrījñāna に相当するチベット語が記されているだけである。第三の呼称を持ち出すことにより、さらなる混乱を引き起こすことを恐れ、従来の説の何れを選択すべきなのかの判断をしばらくの保留していた。しかしながら、彼に関する研究論文をいくつか発表する者の立場として、このような曖昧な態度では問題があると思い、何れかを選択すべき責任を感じるようになった。そこで、私の選択は Dīpaṃkaraśrījñāna という呼称を選択した。その理由は、私の研究しているテキストのコロフォンにはこの名称が現れているということである。デイヴィッド・セイフォート・ルエッグ (David Seyfort Ruegg) の『インドにおける中観学派文献(*The Literature of the Madhyamaka School of Philosophy in India*)』においても、彼は Dīpaṃkaraśrījñāna と表記されている。しかしながら「アティーシャ」の方が呼びやすいというのも事実である³。

そこで、この「アティーシャ」あるいは「アティシヤ」という名称に関して、説明する必要がある。アイマーがそれを整理して再論している⁴ので、それをまとめると次のようになる：

まず、その名称の典拠となっているものは、カダム派に伝わる二つの伝記資料である。それによると、彼はある王より “A ti sha” という名称を授与され、その意

¹ 御牧 1996: 239.

² それ以前に、芳村 1946 は「アティシヤ」と表記し、矢崎正見も同じように表記する。小林 1990: 299 は、「アティーシャ(Atīśa, Dīpaṃkaraśrījñāna, Jo bo)」とするものの、「厳密には Atīśa」とする。

³ なお、『岩波 哲学・思想事典』(福田 1998) では、アイマーの説を受けて「アティシヤ」とする。

⁴ Eimer 1997: 10-12. Cf. Eimer 1977: 20-22.

味は“phul du byung ba”で、「特別に勝れている (khyad par du 'phags pa)」に一致するとされる。その資料の一つに見られる語源的な説明によると、「意樂 (adhyāśaya)」を備えているので“a dhya sha”と呼ばれ、ある言語学者は“a ti sha”は「とても寂靜である(atiśānta)」という意味をもつと述べている。これらの文章から、14世紀末までには異なる説が流布していたことがわかる。

アラカ・チャッタウパディヤーヤ (Alaka Chattopadhyaya) は、“Atiśa”を“ati+īśa (the super lord or the great lord)”と説明し、Pāṇini の文法書からの引用をその根拠としている。“atiśa”を説明するためにこの法則を用いると、それは「主 (īśa)を超えている」と理解できる⁵。

ラーフラ・サーンクリトヤーヤナ (Rāhula Sāṅkrītyāyana) によると、“Atiśa”はサンスクリットの“atiśaya”に由来すると理解し、短母音の“i”とされる。しかし、どうして最後の音節の“ya”が落ちたのであろうか。プラークリットでは、サンスクリットの“ya”を単語の中程では落としやすいが、語末ではない。パーリ語における語尾の“-ya”は、しばしば“-a”と短縮されている。しかしサンスクリットの語尾の“-ya”がチベット語の翻訳で“-a”と直されている平行句を引用することができるかもしれない。

これに基づき、アイマーは「アティシャ」を主張するのだが、御牧は前述のように「アティーシャ」を主張する。では、この二つの見解のいずれを選択すべきであろうか。与えられた資料におけるチベット文字による表記が“a ti sha”であり、この語を基本にすることは妥当な方法であると思われる⁶。“atiśānta”などの語源的な説明の伝承が正しいのならば、「アティシャ」という短母音を選択せざるをえない。しかし、いずれかの王から授かった敬称であることを考えると、「卓越するもの」というよりも「自在神を超えた」という方が意味を持つのではないだろうか⁷。ただし、それ以前の問題として、本研究では、彼の呼称としては *Dīpaṅkaraśrījñāna* とすべきであることを主張する。

第2節 *Dīpaṅkaraśrījñāna* の生涯

チベットでは、偉大な聖者に対して伝記を著す習慣があり、*Dīpaṅkaraśrījñāna* に対

⁵ アイマーは、「この語はシヴァ神を意味し、はたして仏教学者にこのような名称を用いるであろうか」と述べている。

⁶ ただし、チベット文字には、サンスクリットの長母音を表記する記号はあるものの、チベット語の表記にその区別はないために、“a ti sha”を「アティシャ」とも「アティーシャ」とも発音することができる。

⁷ もちろん、いつ誰により与えられたのか、という問題も生じている。すなわち、チベットの王により与えられたとするのならば、彼のインドの言葉に対する知識も問題となる。

する伝記も複数著されており、それらの伝記資料については、ヘルムート・アイマーによる詳細な研究がある⁸。また、チベットの仏教史を著した gZhun nu dpal (1392-1481) の『テプテル・ゴンポ』では、カダム派の章において彼の伝記がまとめられており、これについても羽田野伯猷による研究がある⁹。ここでは、これらの先行研究に基づいて、彼の生涯を簡単にまとめてみる¹⁰。

入蔵前

Dīpaṃkaraśrījñāna は、東インドのサホール（ベンガル地方）のヴィクラマプuriにおいて領主である Kalyāṇaśrī とその妃 Śrīmāricī の三子の第二子として誕生したとされる。

幼少時は Candragarbha と称し、ターラー尊などを目の当りにする体験などがあり、密教文献などの聴聞のために他国に出かけるようになった。そこで、密教を学び、Rāhulagupta からヘーヴァジュラ・マンダラの灌頂を受け、Jñānaguhyavajra の秘密名を授かった。さらに師を求めて、Avadhūtipa に出会い、彼に七年間従事した。その後も、オッディヤーナ国で聚輪の行などの真言乗の修行を続けていた¹¹。

そのように修行を続けている際に、夢の中で釈尊による出家の勧告を受け、二十九歳の時に、Buddhajñāna を相承した大衆部の持律師 Śīlarakṣita のもとで出家し、Dīpaṃkaraśrījñāna と名付けられた。それから三十一歳になるまでに大小乗の三蔵を学び、オタンプーリ寺院において Dharmarakṣita より『大毘婆沙論』を学んだ。

この間に彼が教えを受けた師としては、Jitāri、Kṛṣṇapāda、Ḍombipa、Nāropa などがあげられるが、特に Bodhibhadra から中観の教義を、Ratnākaraśānti から唯識の教義を、スヴァルナドヴィーパ（スマトラ島）出身の Dharmakīrti (gSer gling pa) から発菩提心を主体とする論書を学んだとされる。そのように波羅蜜乗と真言乗の教義を学ぶことで、ヴィクラマシーラ寺院の上座となり、彼の名声は広まっていった。

チベット招請

西チベットの王家の Ye shes 'od とその甥の Byang chub 'od はチベットに仏教を広めるために、インドのカシミールに二十一名のチベット人を派遣したが、環境の違いから Rin chen bzang po を含む二名しか残らなかった。そこで、Ye shes 'od は、インドか

⁸ Eimer 1977, 1979.

⁹ 羽田野 1986: 46-191.

¹⁰ その他にも、Chattopadyaya 1967, 伏見 2010 などがある。また、Tsong kha pa の『ラムリム・チェンモ』にも、彼の小伝が述べられている。ツルツィム、藤仲 2005: 30-34.

¹¹ 静 2013: 102-103.

らチベットに偉大な学者を招くことを考え、brTson 'grus seng ge に金を託して Dīpaṃkaraśrījñāna を招こうとするが、うまくいかなかった。

その後、Byang chub 'od が Tshul khriṃs rgyal ba (1011-1064)¹²にさらなる金を託して、ヴィクラマシーラ寺院にいる brTson 'grus seng ge と二人が Dīpaṃkaraśrījñāna に、チベットに来られることを請願した。Dīpaṃkaraśrījñāna は、尊母ターラーや瑜伽母ダーキニーに尋ねると、「チベットに行けば短命になるものの、教えと優婆塞に利益である」という答えが出たので、チベットに行くことを承諾した。

Dīpaṃkaraśrījñāna は、ネパールにあるスヴァヤンブーの仏塔を拝観するために、二人とともに出発準備をした。その際に、同寺の長老の Śīlākara は、Dīpaṃkaraśrījñāna を三年で送り返すように Tshul khriṃs rgyal ba に伝えた。このようにして、1040年に五十九歳でインドを発ち、ネパールに一年滞在してから、1042年にガリ（西チベット）に到着した。

ガリ（西チベット）滞在

ガリでは、Byang chub 'od に歓迎され、チベットに正法を広めることを依頼されたので、『菩提道灯論』を著した。また、Rin chen bzang po¹³によりトリン寺に招かれ、彼にタントラの解説をした。その際に、彼の翻訳した『八千頌般若経』と Haribhadra による注釈書のチベット語訳の再校訂の依頼もなされた。さらに、Byang chub 'od が、『秘密集会タントラ』と観世音菩薩を信じていることを伝えると、ジュニャーナパーダ流の『秘密集会』の主尊を観世音菩薩にした現観と、マントラと、礼讃の著書も著した¹⁴。

ウ・ツァン（中央チベット）への招聘

約束の三年間のガリ滞在の後にインドに戻る途中、プランのギェルシンで 'Brom stong (1006-1064) と出会った¹⁵。彼は Dīpaṃkaraśrījñāna の評判を聞き、師事するためにガリに向かっていた。二人が出会って三日後に、キーロンに着くと、戦乱のために通行ができなくなった。そこで 'Brom stong は、Śāntarakṣita、Kamalaśīla がいたサムイェ寺を紹介し、ウ（中央チベット）に招くと、Dīpaṃkaraśrījñāna は承諾した。この際に、Tshul khriṃs rgyal ba は、三年で戻す、という長老との約束が心配になるが、Dīpaṃkaraśrījñāna は彼を安堵させた。

¹² 川越 2000, 2001.

¹³ Tucci 1933, 川越 1981, 1982.

¹⁴ 望月 2011c, 2012a.

¹⁵ 井内 2000, 井内、吉水 2011: 23-29.

サムイェに到着すると、そこで Tshul khri sm rgyal ba と Vasubandhu の『撰大乘論釈』の翻訳を行った。その後、ニェタンに移り、Maitreya の『現觀莊嚴論』の講義などを行った。ニェタン滞在の間に、Legs pa'i shes rab¹⁶ が Dīpaṃkaraśrījñāna をラサに招き、そこで Tshul khri sm rgyal ba と Bhavya の『中觀心論釈思挾炎』を翻訳し、大小の二つの『中觀説示』を著述した。その後、イェルパにも出かけ、Byang chub 'byung gnas の請願によって Asaṅga による『宝性論』の翻訳を行った。また、ランパでも多くの説法が行われたので、これらの四地域は Dīpaṃkaraśrījñāna が多くの法を説いた地とされている。

ニェタンに戻ると、Dīpaṃkaraśrījñāna は体力が衰弱していった。最期は、'Brom stong に教えを付嘱して、1054年の9月18日に亡くなった。

第3節 ヴィクラマシーラ僧院における Dīpaṃkaraśrījñāna

インドからチベットへの仏教伝承に重要な役割をはたした Dīpaṃkaraśrījñāna は、インドのヴィクラマシーラ僧院において活躍していたと伝えられている。しかしながらそのインドでの活動の実態については、それほど明確な情報は残っていない。彼の生涯や著作に関する情報のほとんどは、彼がチベットに至ってから著されたものであり、インド資料から彼の情報を入手することが困難なことにもその一因がある。彼と同時代のインドの論師たちによる彼への言及などがあれば、彼のインドにおける活躍の実態を知ることができるが、そのような報告は知られていない¹⁷。我々が知り得るのは、チベットにおいて著された歴史書や伝記を通してのみである。ここでは、それらの著作を通して、彼のヴィクラマシーラ僧院での活動がどのように伝えられていたのかを明らかにしてみたい。

伝記資料

最初に、彼の伝記を記録した資料を見る。チベット仏教では、偉大な聖者に対する伝記文献群が存在するが、多くの伝記資料がそうであるように、それらも脚色などをもなっている可能性もあり、必ずしも史的事実をすべて伝えているという訳ではない。またその情報源が重複する場合もあり、伝記資料の系譜を考える必要もある。ここでは、そこまでを明らかにすることを目的としていないため、彼とヴィクラマシーラ僧院の関係を記録する情報を並記するのみにする。

¹⁶ 加納 2006, 2007, 2009.

¹⁷ Chattopadhyaya 1967: 127-142 を参照。

彼の伝記については、アイマーによる詳細な研究¹⁸が発表されており、彼により出版された *Jo bo rje dpal ldan mar me mdzad ye shes kyi rnam thar rgyas pa* (= *rNam thar rgyas pa*) を取り上げる。ヴィクラマシーラの名称が見られる最初の記述は、教えの相承を述べた箇所に出ている。

gSer gling pa である **Dharmakīrti** は慈愛が大きいので **Maitrīpa** とも言われる。三人の **Maitrīpa** が誕生した。王子の **Maitrīpa** は尊者 **Maitreya** であり、大徳 **Maitrīpa** は尊者 (**Jo bo**) がヴィクラマシーラから追放したのがそれであり、この **gSer gling pa Maitrīpa** と言われるものがそれであると説かれている¹⁹。[055]

これは、彼の師の異名を説明しただけのものであるが、ここでは彼がヴィクラマシーラ僧院において僧院に適さない人物を追放できる立場の人物であったことがわかる²⁰。続いて彼の経歴を述べる際に、同僧院への言及が見られる。

そのように利他を一心になされた師であるこの偉大な尊者自身がヴィクラマシーラに招かれたような物語に加えて、ヴィクラマシーラが建てられた物語が補足で説かれている²¹。[170]

この言葉で始まるセクション [170-196] には、彼の同僧院での活動がまとめられている。**Kambala** が同僧院の影像を見た話に始まり、同僧院とパーラ朝の諸王の関係が述べられ、翻訳官の讃歌が「ヴィクラマシーラには百名の出家者がいた」と引用された後に、次のように述べられる。

そのようなパンディタと一人の天なる宝がおり、**Devapāla** 王の後継となった **Mahāpāla** 王がなされた吉祥なる恩恵でヴァジュラーサナからヴィクラマシーラに招いてから、そこにいるすべての者も頂上の宝石のように尊敬した²²。[183]

このことから、彼が僧院に招かれたのは、**Mahāpāla** の時代ということになる。またこ

¹⁸ Eimer 1977.

¹⁹ Eimer 1979, 1 Teil: 168, 2 Teil: 39. また括弧の数字は、Eimer がテキストに付した番号であり、彼の著書では下線が付されている。

²⁰ 静 2015.

²¹ Eimer 1979, 1. Teil: 205, 2. Teil: 124.

²² Eimer 2009, 1 Teil: 209, 2 Teil: 132-133. これと同じ内容が、[207]でも再び言及される。

こには、同僧院の入り口の右に Nāgārjuna の絵が、左に Dīpaṃkaraśrījñāna の絵が飾られていたことも伝えられている。

続いて、彼がチベットへ招かれる経過を述べる項において、ヴィクラマシーラ僧院が言及される。

今度は、チベットに有益なパンディタを招くならば招いて、招いていないならば会いに行く必要があると考えて、インドの乞食者に報酬を約束してからチベットに有益なパンディタがいるのか、いないのかをあらゆる方向で尋ねさせたが、得られなかったから、ヴィクラマシーラ僧院に至ってから、チベットに有益なパンディタがいるのか、いないのかを尋ねたので、尊者の名前が与えら、「ここでは王族から出家し、仏教徒の頂上の宝石のようなものになっており、五百人の一切智者の第二になられた者がいる。あなたが招かず、彼がいなければ、チベットに益はない」と言われた²³。[206]

ここでは、チベットからの使者がヴィクラマシーラ僧院において彼と出会う経緯が示されている²⁴。これに続き、翻訳官となる rGya Brtson 'grus seng ge と Tshul khriṃs rgyal ba との関係が述べられているが、その中にヴィクラマシーラにおける彼の著述に関する情報も見ることができる。

Gung thang 出身の善知識者 (Tshul khriṃs rgyal ba) はインドに2年間おられて rGya brTson seng にアビダルマを聞き、翻訳も学んだので、賢者の特別に述べたものを知ってから、インドで自分でも法を翻訳し、『入二諦論 (Satyadvayāvātāra)』とその注釈書と、師自身が著した『心髄撰論 (Garbhasaṃgraha²⁵)』とその注釈書である Sa'i snying po による著作と、『中観宝鬘論(*Madhyamakaratnāvalī)』と、『瑜伽論(Yogācāra)』とその撰義 (piṅḍārtha) とをヴィクラマシーラで [rGya と Nag tsho の] 大小の二人の翻訳官が翻訳した²⁶。[213]

ここに記されているテキストには未確認のものもあり、実際にインドで著されたものか

²³ Eimer 1979, 1. Teil: 217, 2. Teil: 148.

²⁴ この経緯の後に、彼をチベットに招くことにしたとチベット王へ報告することは、[222]に述べられている。Eimer 1979, 1. Teil: 222, 2. Teil: 163-164.

²⁵ 望月 2005a: pp. 47-48 を参照。ただし *Garbhasaṃgraha* の訳者は Tshul khriṃs 'byung gnas であり、*Hṛdayanikṣepa* のコロフォンには、チベットのニェタン寺で著されたとある。

²⁶ Eimer 1979, 1. Teil: 219, 2. Teil: 154-155.

については、さらなる調査を必要とするが、彼をチベットに招くために来た二人によりインド滞在中に彼の著作をチベット語に翻訳する作業が行われていたことが伝えられている。

これらのことから確認できたことをまとめると次のようになる。チベットからの派遣者はヴィクラマシーラに至り、彼の名声を知り、複数の候補者の中から彼を選び、チベットに招来することになった。また、彼らが同僧院に滞在している間に、**Dīpaṃkaraśrījñāna** の著作の翻訳が行われている。ただし、このことは、すでにインドの言葉で著されていた著作が、彼らにより新たにチベット語に翻訳されたことを必ずしも意味しない。むしろ、彼らが教えを聞いて、それを直接にチベット語に訳したものがそのまま伝えられたということも推測可能である。

インド仏教史

インドでは、残念なことに、仏教の歴史を記述する文献は著されなかったが、チベット人によるインド仏教史が複数存在する。そのうち、数点を取り上げ、**Dīpaṃkaraśrījñāna** とヴィクラマシーラ僧院との関係を述べた情報をまとめてみる。

まず **Bu ston rin chen grub** (1290-1364) による仏教史 (*bDe bar gshegs pa'i bstan pa'i gsal byed chos kyi 'byung gnas gsung rab rin po che'i mdzod*) には、次の記述を見ることができる。

Byang chunb 'od は **Nag tsho Tshul khrim s rgyal ba** などの五人に金を託し、翻訳官 **rGya brTson 'grus seng ge** を長に任命してからよいパండిタを招来するように言われたので、東方の王である **Kalyāṇaśrī** の息子で、ヴィクラマシーラ僧院でよく学んだ **Dīpaṃkaraśrījñāna** が招かれ、ターラーによる授記によって来たので、**rGya brTson seng** が途中で亡くなり、**Nag tsho** の翻訳官がやって来た²⁷。

ここでは、**rGya brTson 'grus seng ge** と **Nag tsho tshul khrim s rgyal ba** の二人が彼の招来に同僧院に来たことが述べられているが、**Dīpaṃkaraśrījñāna** については、同僧院でよく学んだとしか記されておらず、そのポジションに関する言及は見られない。

続いて、**gZhun nu dpal**²⁸ (1392-1481) による『テプテル・ゴンポ』には、**Dīpaṃkaraśrījñāna** とカダム派に関するまとまった記述を見ることができる。ヴィクラマシーラ僧院との関係を示す最初の記述は、伝記の最初に誕生から出家を経て仏教を学

²⁷ Szerb 1990: 86, Obermiller 1932: 213.

²⁸ 羽田野 1987: 55-65.

ぶ経緯を記した箇所において、その師を列挙した後に、次のように述べられている。

gSer gling pa のもとにおられ、最高の発菩提心を主体とする無量の解説をお聞きになられた。主としてヴィクラマシーラ僧院の偉大な座主になられた偉大であるとの名声が十方に遍満してから、lHa btsun pa Byang chub 'od が何度にもわたり多量の金で請願して招待する者を派遣した²⁹。

すなわち、Jñānaśrīmitra から Dharmakīrti (gSer gling pa) までの十六名の師に学んだ後に、僧院の座主になったこと、またその名声がチベットに招く根拠となったことが伝えられている。続いてインドより帰国した Tshul khriims rgyal ba が彼の招請を依頼され、インドに迎えに行くことになり、ヴィクラマシーラ僧院での二人の出会いが次のように述べられている。

道中で盗賊の恐怖が生じて、巧みな方法で寂靜にした。ヴィクラマシーラに、或る夜に到着した。そこでチベットの言葉で読誦をしたならば、rGya brTson 'grus seng ge が門館の上においたので、聞いて、「あなたたちはチベット人なのか。明日確かに会おう」という言葉を大きな声で放った³⁰。

ヴィクラマシーラ僧院の座首として知られている方を招聘するために、チベットから Tshul khriims rgyal ba が同寺に至ったこと、またそこにはチベット語を理解する rGya brTson 'grus seng ge がいたことが伝えられている。もちろん、この二人は後に Dīpaṃkaraśrījñāna のテキストのチベット語への共訳者でもある。この翌日に三人で会い、rGya brTson 'grus seng ge が Tshul khriims rgyal ba の意図するところを伝え、それに対して Dīpaṃkaraśrījñāna は次のように答える。

しかも、ヴィクラマシーラの上座が我々を放つことは難しいので、何らかの巧みな方法を作る必要がある³¹。

彼自身の言葉は、同寺における自らの立場を明言するものではないが、同寺には彼よりも上座の者がおり、その言葉に従わなければならない立場であったことがわかる。また、

²⁹ Cf. *Deb ther sgon po*, Si khron mi rigs dpe skrun kang, 1984: 299; 羽田野 1987: 72.

³⁰ Cf. *Deb ther sgon po*: 301; 羽田野 1987: 74.

³¹ Cf. *Deb ther sgon po*: 302; 羽田野 1987: 75.

彼自身は同寺には必要な人物であることを自認していたようである。これらの『テプテル・ゴンポ』の記述をまとめると、次のようになる。Dīpaṃkaraśrījñāna はヴィクラマシーラ僧院の座首としてチベットに知られており、彼をチベットに招くために Tshul khriṃs rgyal ba が同寺で面会したが、彼は同寺を離れ難い立場にいたことになる。

チベット仏教のチヨナン派の Tāranātha Kun dga' snying po (1575-1634) が著したインド仏教史 (*dPal gyi 'byung gnas dam pa'i chos rin po che 'phags pa'i yul du ji ltar dar ba'i tshul gsal bar ston pa dgos 'dod kun 'byung*) にもヴィクラマシーラ僧院における Dīpaṃkaraśrījñāna に関する記述を見ることができる。そのパーラ王に関する項において、次のように述べられている。

それから Bheyapāla 王は王国を三十二年間だけ治めても、過去の相続を損なわずに守る面から説かれたものに対する所作が対象に現れることは大きくは生じなかった。ヴィクラマシーラでは七十名のパンディタの称号を越えて設けられず、それ故に、これも七代のパーラに至らなかった。この王の時には、六賢門が過ぎ去った次だけで、吉祥をもつ尊者 Atiśa として知られている Dīpaṃkaraśrījñāna が座主として招聘された。彼はオタ Tantra プーリも守った³²。

これと同じ内容が後のヴィクラマシーラ僧院における密教に関する項で再び言及され、六賢門の後の数年は座主がおらず、Dīpaṃkaraśrījñāna が座主になり、その後の七年は再び座主がいなかったと述べられる³³。また、彼が僧院に招かれたのは Bheyapāla 王の統治年代であったことがわかる。

彼のチベットへの出発については、次のように述べられている。

その Bheyapāla 王の子が Neyapāla である。尊者がチベットに赴いたのはこの王の統治時代にあたると信頼できる伝記に解説されている。ネパールから彼に送った一つの書簡³⁴も見られる³⁵。

以上のことから、Tāranātha による Dīpaṃkaraśrījñāna への言及は、パーラ王とヴィクラマシーラ僧院との関係で言及されている。その内容は、彼が Bheyapāla の統治時代

³² Schiefner 1868: 185; 寺本 1928: 326.

³³ Schiefner 1868: 198; 寺本: 351.

³⁴ この書簡については、以下の *Vimalaratnalekha* の項目を参照。

³⁵ Schiefner 1868: 184; 寺本: 326.

に同僧院の座主であり、その息子の *Neyapāla* の統治時代にチベットに発ったというものである。

インドにおける著述

Dīpaṃkaraśrījñāna の著作のコロフォンを見ていると、その多くはチベット人の翻訳官との共訳であることから、チベットの地に至ってから著された著作が多いように思える。アイマーは、彼の著作のうち、そのコロフォンなどから著述場所の情報が得られるものをまとめているが³⁶、そのうちヴィクラマシーラ僧院において著述されたものは、『輪廻出離意歌 (*Saṃsāraṃaniryaṇīkāranāmasaṃgīti*)』と『身口意善住 (*Kāyavāccittasupraṭiṣṭhā*)』であり、翻訳されたものは『ターラー三宝讚 (**Triratnātārāstotra*)』と『ターラー天女讚真珠鬘 (*Āryatārādevīstotramuktikāmālā*)』とである。

まず、『輪廻出離意歌』のコロフォンには、

インドのその賢者自身と偉大な翻訳官 *rGya Brtson 'grus seng ge*³⁷ が、ヴィクラマシーラ僧院で翻訳した³⁸。

と記されている³⁹。また『身口意善住』のコロフォンにも、

インドの賢者 *Dīpaṃkara* と翻訳官 *rGya Brtson 'grus seng ge* がヴィクラマシーラで丁寧に翻訳し、校訂し、決定した⁴⁰。

と記されている。この記述から、この二書は著者がインド滞在時に、それも同時期に著述されたものであると思われる。したがって、ヴィクラマシーラ寺院においてインドの仏典のチベット語への翻訳が行われており、*Dīpaṃkaraśrījñāna* もインドに発つ前にチ

³⁶ Eimer 1977: 114. ただし同書は、『開宝篋 (*Ratnakaraṇḍoghāṭa*)』もヴィクラマシーラ僧院で著述されたとするが、そのような確定はできない。また、その他のインドに滞在中の翻訳として、ナーランダール僧院における『聖金剛手青衣儀軌陀羅尼注釈 (*Āryanīlāmabādhāravajrapāṇīkalpanāmadhāraṇīṭīkā*)』とゾーマプリにおける『中觀宝灯論 (*Madhyamakaratnapradīpa*)』があげられている。

³⁷ 羽田野 1987: 99, n. 20 において、「蔵の *Stag tshal* の人、優婆塞なり」とするが、Chattopadhyaya 1967 は、彼を「インド人の *Vīryasiṃha*」とする。

³⁸ D. No. 2313, Zhi 254b6-7 (D. No. 4473, P. Nos. 3152, 5386, 望月 2007, 2011: 5).

³⁹ ただし、彼の伝記には、彼がチベットのウに滞在中に同論を説いたという記述がある。この短い歌がインドにおいて書かれ、翻訳され、その文献を所持あるいは記憶して、チベットで歌ったということなのだろうか。しかしながら初出ではない歌が歌われたことをわざわざ伝記に記録するのも不自然であり、どちらかの伝承が誤りである可能性もある。

⁴⁰ D. No. 249, Zi 260a1-2 (P. No. 3322, Tshi 322a1)

ベット語をある程度マスターしていた可能性がある⁴¹。また、いずれの文献もチベット大蔵経のテンギユルの秘密部に収録されており⁴²、タントラに関連する著作をインドにおいて著していたことになる。

さらに、『ターラー三宝讃』のコロフォンには、

インドの賢者 *Dīpaṃkaraśrījñāna* とチベットの翻訳官 *Tshul khriṃs rgyal ba* によりヴィクラマシーラ寺院において、翻訳し、校訂し、決定した⁴³。

とある。同じく『ターラー天女讃真珠鬘』のコロフォンにも、

インドの賢者 *Dīpaṃkaraśrījñāna*、チベットの仏教徒の翻訳者であるナクツォの翻訳官 *Tshul khriṃs rgyal ba* によりヴィクラマシーラ寺院において、翻訳し、校訂し、決定した⁴⁴。

とある。これらの記述から、この二書も同時期にヴィクラマシーラ僧院において翻訳されたと考えられる。また、共訳者が *Tshul khriṃs rgyal ba* であることから、彼もヴィクラマシーラ僧院に滞在中に、仏典のチベット語への翻訳を行っていたことがわかる⁴⁵。もちろんチベット人だけではなく、同僧院には他にも周辺各国からの多くの留学僧が滞在していた可能性がある。

さらに、『経義集撰義 (*Sūtrasamuccayasañcayārtha*)』のコロフォンには次のような記述がある。

軌範師 *Dīpaṃkaraśrījñāna* にチベットの比丘 *Tshul khriṃs rgyal ba* が金 14 両の蜂蜜の花を供えてから、チベットに来ることをお願いしてから、修習の浄化を完全にするために軌範師は十六ヶ月の間 [チベットへの] 道に入らなかった。それからチベットに発つ上で心が清浄な弟子たちが遺言を授けることを請願するの

⁴¹ ただし、インドの僧院においてインド人が自らの著作をチベット人の翻訳官とともに他国の言葉であるチベット語に翻訳するということには、疑問の余地がないわけではない。もしこの情報が事実であるならば、ヴィクラマシーラ寺院にチベット語に堪能なインド人がいたとともに、インド文献をチベット語に翻訳する需要があったことを意味している。このようなケースを調査することにより、ヴィクラマシーラ寺院におけるチベット人留学生の存在は注目すべき問題となる。

⁴² 前者は、テンギユルの中観部にも収録されている。

⁴³ Tib. D. No. 1695, Sha 52a7-b1 (P. No. 2567).

⁴⁴ Tib. P. No. 4869, Zu 181a7-8.

⁴⁵ 『テプテル・ゴンポ』によると、彼は *Gung thang* 生まれで、インドで学び、*Dīpaṃkaraśrījñāna* の教えを受けた、とされる。羽田野 1987: 74 を参照。

で、経典の意味の概説を著した本書を遺言として与えて下さった。その時にインド人の rGya Brtson 'grus seng ge が翻訳を請願なさって、確定した⁴⁶。

これらの記述からは、その著述場所は明らかではないが、インドからチベットに立つ際に著されたものとなる。ここに登場する Tshul khrim s rgyal ba と rGya Brtson 'grus seng ge は、上記の文献のコロフォンからも、Dīpaṃkaraśrījñāna とヴィクラマシーラ僧院との関係結びつける人物である。それ故に、それらと同時期に同じ場所で著されたテキストであると推測することもできる。

また、『中観優婆提舍開宝篋』には、パーラ王との関係が記されている。その末尾の偈には、次のように述べられている。

シャーキャの比丘で、鋭い慧と智慧と悲と戒をもつ Tshul khrim s rgyal ba と言うよい弟子が請願してから書いた。

Devapāla の誓願によりヴィクラマシーラと言う大寺院において聖なる先生たちが説かれたように、その Dīpaṃkaraśrījñāna が書いた⁴⁷。

この文章からは、「誓願により」と「大寺院において」が「説かれた」にかかるのか、「書いた」にかかるのかで、意味合いが異なってくるが、『テプテル・ゴンボ』の「彼がラサで大小の二つの『中観説示』を著した⁴⁸」という記述にしたがうならば、著者はヴィクラマシーラ寺院に滞在しており、自分の先生たちに対してパーラ王が著述の誓願を行ったと理解することが適当であろう。少なくとも、彼あるいは彼の師たちは同僧院にいたことは明らかであり、全く関係がなかったわけではない。

また、『無垢宝書翰 (Vimalaratnalekha)』の第一偈とコロフォンには次のように述べられている。

偉大な趣に生まれてから、仏説を広め、王政を法により守り、Neyapāla は王になりなさい。[1]

Vimalaratnalekha とする長老で偉大な賢者 Dīpaṃkaraśrījñāna がパーラ王に送っ

⁴⁶ Eimer 1977: 117, Chattopadhyaya 1967: 463.

⁴⁷ 宮崎 2007: 118 参照。

⁴⁸ Chattopadhyaya 1967: 457, Eimer 1977: 114 は、本書がヴィクラマシーラ寺院で著されたと読むが、『テプテル・ゴンボ』の「ラサにおいて大小二つの『中観説示』を著した」(羽田野 1987: 86) という記述から、チベットにおいて著されたと推測できる。

たものを完成する⁴⁹。

前述の *Tāranātha* の仏教史の記述から、この手紙はおそらくネパールにおいて *Neyapāla* 王に宛てて記されたものであろう⁵⁰。ただし、この文献については、同じ著者の『菩薩摩尼鬘論 (*Bodhisattvamaṅyāvalī*)』と内容が重複していることから、成立に関する疑問がないわけではない⁵¹。すなわち、パーラ王との関係を強調するために、本書が編集された可能性もないわけではない。

まとめ

以上の資料から、*Dīpaṃkaraśrījñāna* のヴィクラマシーラ寺院での滞在情報をまとめると次のようになる。パーラ王との関係は、*Mahāpāla* の時代に僧院に招かれ、*Bheyapāla* の時代に座首となり、*Neyapāla* の時代にチベットへ発った、ということになる。同僧院ではチベット人の *Tshul khriṃs rgyal ba* と *rGya Brtson 'grus seng ge* と著作のチベット語への翻訳が行われた。ただし、彼らが *Dīpaṃkaraśrījñāna* をチベットに招く経緯についてはテキスト間に相違がある。またテキストの翻訳についても、小さなテキストであるために、どのような形態で翻訳されたのかについては、さらなる考察が必要である。

⁴⁹ Dietz 1984: 302-3, 318-319. ただしディーツは、王の名前を *Niryapāla* と修正する。

⁵⁰ 寺本 1928 を参照。

⁵¹ Eimer 1981: 327 を参照。ただし、『菩薩摩尼鬘論』にも、版により偈頌の順番が大幅に違うために、こちらのテキストの方に問題がある可能性もある。望月 2016b を参照。

第2章 Dīpaṃkaraśrījñāna の著作

はじめに

Dīpaṃkaraśrījñāna の著作については、顕教と密教にわたり多数のものが伝えられているが、サンスクリットで書かれたものは現存せず、すべてがチベット語に翻訳されたものである。それらはチベット大蔵経のテンギユルに収録されており、その多くが小部なものである。これらの小部文献のいくつかは、「小部集」としてもまとめられており、それらの文献も再びテンギユルにも再録されている。ここでは、チベット大蔵経のテンギユルに基づき、それらを顕教と密教にわけ、その書誌情報を提示する。

まず、顕教文献としては、次のものがある。

I. 般若部

1. 『般若波羅蜜多撰義 (*Prajñāpāramitāpiṇḍārthapradīpa*, *Shes rab kyi pha rol tu phyin pa'i don bsdu sgron ma*) 』 Dīpaṃkaraśrījñāna, Tshul khriṃs rgyal ba 訳
C. Tha 236a1-245a7.
D. No. 3804, Tha 230b1-240a7.
G1. Tha 337a1-350a6.
G2. Nyo 568a1-582b4.
N1. No. 3192, Tha 261b2-272a3.
N2. No. 3865, Nyo 435b7-447a5.
P1. No. 5201, Tha 253a5-262a8.
P2. No. 5873, Nyo 463a5-475a7.
2. 『般若心経解説 (**Prajñāhṛdayavyākhyā*, *Shes rab snying po'i rnam par bshad pa*) 』
Dīpaṃkaraśrījñāna, Tshul khriṃs rgyal ba 訳
C. Ma 313a1-317a7.
D. No. 3823, Ma 313a4-317a7.
G. Ma 443a3-449b6.
N. No. 3213, Ma 342b6-348a7.
P. No. 5222, Ma 333a6-338b4

II. 中観部

3. 『入二諦論 (*Satyadvayāvatāra*, *bDen pa gnyis la 'jug pa*) 』 Dīpaṃkaraśrījñāna,
brTson 'grus seng ge 訳
C. A 71b5-73a2

D1. No. 3902, A 72a3-73a7.

D2. No. 4467, 5b3-6b6.

G1. Gi 7b1-9a2.

G2. Ha 90a4-92a2.

N1. No. 3289, Ha 65a3-66b1

N2. No. 3371, Gi 7a1-8a4.

P1. No. 5298, Ha 70a5-71b2.

P2. No. 5380, Gi 6b7-8a8

4. 『一念説示 (*Ekasmṛtyupadeśa*, *Dran pa gcig pa'i man ngag*) 』 Dīpaṃkaraśrījñāna,

Tshul khriṃs rgyal ba 訳

C. Ki 96b4-97b2

D1. No. 3928, Ki 94b-9561

D2. No. 4476, 20a –b7

G1. A 144b5-46a3

G2. Gi 26a6-27b1b1-9a2

N1. No. 3314, A 103b1-104a7

N2. No. 3380, Gi 21b5-22b2

P1. No. 5323, A 104a7-105a8

P2. No. 5389, Gi 25a6-26a8.

5. 『中観説示 (*Madhyamakopadeśa*, *dBu ma'i man ngag*) 』 Dīpaṃkaraśrījñāna,

Tshul khriṃs rgyal ba 訳

C. Ki 97b2-98b2

D1. No. 3929, Ki 95b1-96a7

D2. No. 4468, 6b6-7b3

G1. A 147b1-149a3

G2. A 181b1-182b5.

G3. Gi 9a2-10a4

N1. No. 3315, A 104a7-105b4

N2. No. 3317, A 128b3-129b3

N3. No. 3372, Gi 8a4-9a2

P1. No. 5324, A 105a8-106b6.

P2. No. 5326, A 132b4-133b6

P3. No. 5381, Gi 8a8-9b2.

6. 『中觀說示開寶篋 (*Madhyamakopadeśaratnakaraṅḍodghāṭa, dBu ma'i man ngag rin po che'i za ma tog kha phye ba*) 』 Dīpaṃkaraśrījñāna, brTson 'grus seng ge, Tshul khriṃs rgyal ba 訳
- C. Ki 98b2-119b4
D. No. 3930, Ki 96b1-116b7
G. A 150a1-180a5
N. No. 3316, A 105b4-129b4
P. No. 5325, A 106b6-132b3.
7. 『經集撰義 (*Sūtrasamuccayasamḥayārtha, mDo kun las btus pa'i don bsdus pa*) 』 Dīpaṃkaraśrījñāna, brTson seng ge 訳
- C. Ki 341b5-343b4
D. No. 3937, Ki 338b7-340b7
G. A 510a1-513a6
N. No. 3324, A 395a6-398a2
P. No. 5333, A 395a4-397b6.
8. 『菩薩行略教訓 (*Bodhisattvacaryāsūtrikṛtāvavāda, Byang chub sems dpa' spyod pa mdo tsam gdams ngag tu byas pa*) 』
- C. Khi 241a1-242a5.
D1. No. 3946, Khi 237a3-238a6.
D2. No. 4472, 10a5-11b1.
G1. Ki 375a3-376b6.
G2. Ki 470a3-472a4.
G3. Gi 13b4-15a4.
N1. No. 3333, Ki 269a3-270b1.
N2. No. 3339, Ki 338b1-339b7.
N3. No. 3376, Gi 11b6-13a2.
P1. No. 5342, Ki 273a3-274b1.
P2. No. 5348, Ki 343a2-344b1.
P3. No. 5385, Gi 13a3-14b3.
9. 『菩提道燈論 (*Bodhipathapradīpa, Byang chub lam gyi sgron ma*) 』 Dīpaṃkaraśrījñāna, dGe ba'i blo gros 訳
- C. 242a6-245a6.
D1. No. 3947, Khi 238a6-241a4.

- D2. No. 4465, 1-4b4.
 G1. Ki 377a1-381b5.
 G2. Gi 1-6a5.
 N1. No. 3334, Ki 270b1-273b5.
 N2. No. 3369, Gi 1-6a2.
 P1. No. 5343, Ki 274b1-277b6
 P2. No. 5378, Gi 1-5b5.
10. 『菩提道灯論細疏 (*Bodhimārgadīpapañjikā*, *Byang chub lam gyi sgron ma'i dka' 'grel*) 』 Dīpaṃkaraśrījñāna, Tshul khriṃs rgyal ba 訳
 C. Khi 245a6-299b5.
 D. No. 3948, Khi 241a4-293a4.
 G. Ki 382a1-463b5.
 N. No. 3335, Ki 273b5-335a1.
 P. No. 5344, Ki 277b6-339b2.
11. 『心髓撰集 (*Garbhasaṃgraha*, *sNying po bsdus pa*) 』 Dīpaṃkaraśrījñāna, Tshul khriṃs 'byung gnas 訳
 C. Khi 299b5-300a7.
 D1. No. 3049, Khi 293a4-293b6.
 D2. No. 4469, 7b3-8a5.
 G1. Ki 464a1-465a6.
 G2. Ki 10a4-11a2.
 N1. No. 3336, Ki 335a1-b5.
 N2. No. 3373, Gi 9a2-b4.
 P1. No. 5345, Ki 339b2-340a7.
 P2. No. 5382, Gi 9b2-10a7.
12. 『心髓要決 (*Hṛdayanikṣepa*, *sNying po nges par bsdu ba*) 』 Dīpaṃkaraśrījñāna, Tshul khriṃs rgyal ba 訳
 C. Khi 300a7-301b1.
 D1. No. 3950, Khi 293b6-294b6.
 D2. No. 4470, 8a5-9a5.
 G1. Ki 465a1-468b1.
 G2. Gi 11a2-12a6.
 N1. No. 3337, Ki 335b5-337a2.

- N2. No. 3374, Gi 9b4-10b5.
 P1. No. 5346, Ki 340a7-341b4.
 P2. No. 5383, Gi 10a7-11b5.
13. 『菩薩摩訶鬘論 (*Bodhisattvaṃyāvalī*, *Byang chub sems dpa' nor bu'i phreng ba*) 』
 C. Khi 301b2-302b4.
 D1. No. 3951, Khi 294b7-296a1.
 D2. No. 4471, 9a5-10a5.
 G1. Ki 468b2-470a3.
 G2. Gi 12a6-13b4.
 N1. No. 3338, Ki 227a2-338a7.
 N2. No. 3375, Gi 10b5-11b6.
 P1. No. 5347, Ki 341b4-343a2.
 P2. No. 5384, Gi 11b5-13a3.
14. 『入菩薩初學道說示 (*Bodhisattvādikarmikamārgāvatāradeśanā*, *Byang chub sems dpa'i las dang po pa'i lam la 'jug pa bstan pa*) 』 *Dīpaṃkaraśrījñāna*, Tshul khriṃs rgyal ba 訳
 C. Khi 302b4-304b3.
 D1. No. 3952, Khi 296a1-297b6.
 D2. No. 4477, 20b7-22b4.
 G1. Ki 473a1-476a6.
 G2. Gi 27b1-30a1.
 N1. No. 3340, Ki 339b7-342a4.
 N2. No. 3381, Gi 22b2-24a7.
 P1. No. 5349, Ki 344b1-346b4.
 P2. No. 5390, Gi 26a8-28b6.
15. 『歸依說示 (*Śaraṇagamanadeśanā*, *sKyabs su 'gro ba bstan pa*) 』
 C. Khi 304b3-306a2.
 D1. No. 3953, Khi 297b6-299a5.
 D2. No. 4478, 22b4-24a3.
 G1. Ki 477a1-479b5.
 G2. Gi 30a2-31b5.
 N1. No. 3341, Ki 342a4-343b6

- N2. No. 3382, Gi 24b1-25b6.
 P1. No. 5350, Ki 346b4-348a5.
 P2 No. 5391, Gi 28b7-30b3.
16. 『大乘道成就語句撰集 (*Mahāyānapathasādhanavarṇasaṃgraha, Theg pa chen po'i lam gyi sgrub thabs yi ger bsdus pa*) 』 Dīpaṃkaraśrījñāna, dGe ba'i blo gros 訳
- C. Khi 306a2-309b5.
 D1. No. 3954, Khi 299a5-302b6.
 D2. No. 4479, 24a3-27b4.
 G1. Ki 480a1-486a2.
 G2. Gi 31b5-36a6.
 N1. No. 3342, Ki 343b7-348a3.
 N2. No. 3383, Gi 25b6-29a6.
 P.1 No. 5351, Ki 348a5-352a8.
 P2 No. 5392, Gi 30b3-35a1.
17. 『大乘道成就撰集 (*Mahāyānapathasādhanasaṃgraha, Theg pa chen po'i lam gyi sgrub thabs shin tu bsdus pa*) 』 Dīpaṃkaraśrījñāna, dGe ba'i blo gros 訳
- C. Khi 309b5-310a5.
 D1. No. 3955, Khi 302b6-303a6.
 D2. No. 4480, 27b4-28a4.
 G1. Ki 487a1-488a4.
 G2. Gi 36b1-37a1.
 N1. No. 3343, Ki 348a3-b5.
 N2. No. 3384, Gi 29a6-b5.
 P1. No. 5352, Ki 352a8-353a1.
 P2 No. 5393, Gi 35a2-35b2.
18. 『自作次第並勸誡語句撰集 (**Saṃcodanasahitasvakṛtyakramavarṇasaṃgraha, Rang gi bya ba'i rim pa bskul ba dang bcas pa yi ger bris pa*) 』 Dīpaṃkaraśrījñāna, Tshul khriṃs rgyal ba 訳
- C. Khi 310a5-311a6.
 D1. No. 3956, Khi 303a6-304a6.
 D2. No. 4481, 28a4-29a3.
 G1. Ki 488a4-489b5.

- G2. Gi 37a1-38a4.
 N1. No. 3344, Ki 348b5-350a1.
 N2. No. 3385, Gi 29b5-30b5.
 P1. No. 5353, Ki 353a1-354a3.
 P2 No. 5394, Gi 35b3-36b5.
19. 『經義集說示 (*Sūtrārthasamuccayopadeśa, mDo sde'i don kun las btus pa'i man ngag*) 』 Dīpaṃkaraśrījñāna, Tshul khriṃs rgyal ba 訳
 C. Khi 311a6-314b6.
 D1. No. 3957, Khi 304a6-306b6.
 D2. No. 4482, 29a4-31b3.
 G1. Ki 490a1-494a6.
 G2. Gi 38a5-41a6.
 N1. No. 3345, Ki 353a1-354a6.
 N2. No. 3386, Gi 30b5-33a4.
 P1. No. 5354, Ki 354a3-356b8.
 P2 No. 5395, Gi 36b5-39b6.
20. 『十不善業道說示 (*Daśākuśalakarmapathadeśanā, Mi dge ba bcu'i las kyi lam bstan pa*) 』 Dīpaṃkaraśrījñāna, Tshul khriṃs rgyal ba 訳
 C. Khi 314a1-315a3.
 D1. No. 3958, Khi 362b6-307b7.
 D2. No. 4483, 31b3-32b5.
 G1. Ki 495a1-497a4.
 G2. Gi 41b1-42b6.
 N1. No. 3346, Ki 353a1-354a6.
 N2. No. 3387, Gi 33a434a5.
 P1. No. 5355, Ki 356b8-358a4.
 P2 No. 5396, Gi 39b6-41a3.
21. 『業分別論 (*Karmavibhaṅga, Las rnam par 'byed pa*)』 Dīpaṃkaraśrījñāna, Tshul khriṃs rgyal ba 訳
 C. Khi 315a3-320a6.
 D1. No. 3959, Khi 308a1-312b3.
 D2. No. 4484, 32b5-37b2.
 G1. Ki 498a1-506a6.

- G2. Gi 42b6-49a4.
 N1. No. 3347, Ki 354a6-360a2.
 N2. No. 3388, Gi 34a5-39b1.
 P1. No. 5356, Ki 358a5-364a1.
 P2. No. 5397, Gi 41a3-46b8.
22. 『行集灯論 (*Caryāsaṃgrahapradīpa, sPyod pa bsdus pa'i sgron ma*) 』
 Dīpaṃkaraśrījñāna, Tshul khriṃs rgyal ba 訳
 C. Khi 320a7-321a7.
 D1. No. 3960, Khi 312b3-313a7.
 D2. No. 4466, 4b-5b3.
 G1. Ki 507a1-509a3.
 G2. Gi 6a5-7b1.
 N1. No. 3348, Ki 360a2-361a3.
 N2. No. 3370, Gi 6a2-7a1.
 P1. No. 5357, Ki 364a2-365a6.
 P2. No. 5379, Gi 5b5-6b7.
23. 『大經集 (*Mahāsūtrasamuccaya, mDo kun las btus pa chen po*) 』 rGyal ba kun
 dga', Nyi ma grags pa, mDo sde 'bar 訳
 C. Gi 1-209b1.
 D. No. 3961, Gi 1-198a7.
 G. Khi 1-300a6.
 N. No. 3371, Khi 1-225b1.
 P. No. 5358, Khi 1-231a2.
24. 『發心律儀儀軌次第 (*Cittopādasamvaravidhikrama, Sems bskyed pa dang sdom
 pa'i cho ga'i rim pa*) 』 Dīpaṃkaraśrījñāna, dGe ba'i blo gros 訳, Dīpaṃkara-
 śrījñāna, Tshul khriṃs rgyal ba 改訂
 C. Gi 256a3-259b3.
 D1. No. 3969, Gi 245a2-248b2.
 D2. No. 4490, 40a5-43b5.
 G1. Khi 373b5-379a6.
 G2. Gi 54a-59a3.
 N1.No. 3355, Khi 273a1-276b7.
 N2. No. 3394, Gi 42a6-46a3.

- P1. No. 5364, Khi 284a1-288a6.
P2. No. 5403, Gi 50a1-54a5.
25. 『罪過懺悔儀軌 (*Āpattideśanāvidhi, lTung ba bshags pa'i cho ga*) 』 Dīpaṃkara-
śrījñāna, Tshul khriṃs rgyal ba 訳
C. Gi 256a3-259b3.
D. No. 3974, Gi 266a3-b2.
G. Khi 389b5-390b3.
N. No. 3360, Khi 284a4-b5.
P. No. 5369, Khi 297a4-297b7
26. 『波羅蜜乘軌造作儀軌 (**Pāramitāyānaśāṅkanirvapaṇavidhi, Pha rol tu phyin
pa'i theg pa'i sātstsha gdab pa'i cho ga*) 』
C. Gi 267a2-b2.
D1. No. 3976, Gi 256a2-256b1.
D2. No. 4488, 39a2-b2.
G1. Khi 394b3-395a6.
G2. Gi 51a5-52a2.
N1. No. No. 3364, Khi 287b3-288a4.
N2. No. 3392, Gi 41a2-42b3.
P1. No. 5373, Khi 301b2-302a5.
P2. No. 5400, Gi 48a4-48b4.
27. 『上師所作次第 (*Gurukriyākrama, Bla ma'i bya bai rim pa*) 』
C. Gi 267b2-278a3.
D1. No. 3977, Gi 256b2-257a4.
D2. No. 4489, 39b2-40a4.
G1. Khi 395a6-396a5.
G2. Gi 53a1-54a5.
N1. No. No. 3365, Khi 302a5-303a4.
N2. No. No. 3393, Gi 41b3-42a6.
P1. No. 5374, Khi 302a5-303a4.
P2. No. 5400, Gi 49a5-50a1
28. 『誦誦經前行儀軌 (**Adhyayanapustakapāṭhanapuraskriyāvidhi, Kha ton dang
glegs bam bklag pa'i sngon du bya ba'i cho ga*) 』
C. 266b3-267a2.

- D1. No. 3975, Gi 255b3-256a2.
 D2. No. 4487, 38b3-39a2.
 G1. Khi 398a1-b30.
 G2. Gi 50b3-51a5.
 N1. No. 3367, Khi 290a4-b5.
 N2. No. 3391, Gi 40b3-41a2.
 P1. No. 5376, Khi 304b6-305a8.
 P2. No. 5401, Gi 48b4-49a5.
29. 『輪廻出離意歌 (*Saṃsāramanoniryāṇīkārasaṃgīti*, 'Khor ba las yid nges par 'byung bar byed pa'i glu) 』 Dīpaṃkaraśrījñāna, brTson seng ge 訳, Dīpaṃkaraśrījñāna, Tshul khrims rgyal ba 改訂
 C. Zhi 253a5-254b7.
 D1. No. 2313, Zhi 253a6-254b7.
 D2. No. 4473, 11b1-13a2.
 G1. Tsi 346b5-349a5.
 G2. Gi 346b5-349a5.
 N1. No. 1152, Tsi 257a2-258b6.
 N2. No. 3377, Gi 13a2-14b4.
 P1. No. 3152, Tsi 267b1-269a8.
 P2. No. 5386, Gi 14b3-16b2.
30. 『法界見歌 (*Dharmadhātudarśanaṅgīti*, Chos kyi dbyings lta ba'i glu) 』
 Dīpaṃkara, Tshul khrims rgyal ba 訳
 C. 254b7-261a4
 D1. No. 2314, Zhi 254b7-260b5
 D2. No. 4475, 14a6-20a2.
 G1. Tsi 349a5-357b4.
 G2. Gi 19a3-26a6.
 N1. No. 1153, Tsi 258b7-265a5.
 N2. No. 3379, Gi 16a4-21b5.
 P1. No. 3153, Tsi 269a8-276a4.
 P2. No. 5388, Gi 18a5-25a6.
31. 『行歌 (*Caryāṅgīti*, sPyod pai glu'i) 』 Vajrapāṇi, Chos kyi shes rab 訳
 C. Zha 216a4-217b2.

D1. No. 1496, Zha 215a6-216b4.

D2. No. 4474, 13a2-14a6.

G1. Ba 291b1-293a5.

G2. Gi 17a6-19a3.

N1. No. 211, Pa 231a4-232b6.

N2. No. 3378, Gi 14b5-16a4.

P1. No. 2211, 218b8-220b1.

P2. No. 5387, Gi 16b2-18a5.

32. 『三昧資糧論 (*Samādhisambhāraparivarta, Ting nge 'dzin gyi tshogs kyi le'u*) 』

Dīpaṃkaraśrījñāna, Sākya blo gros 訳

C. Zi 134b5-135a6.

D1. No. 2460, Zi 134b6-135a6.

D2. No. 4485, 37b2-38a3.

G1. Tshi 203a6-204a4.

G2. Gi 49a5-50a1.

N1. No. 1286, Tshi 146b6-147b1.

N2. No. 3389, Gi 39b1-40a2.

P1. No. 3288, Tshi 169a2-169b5

P2. No. 5397, Gi 46b8-47b2;

33. 『超世間七支儀軌 (*Lokātūtasaptāṅgavidhi, 'Jig rten las 'das pa'i yan lag bdun pa'i*

cho ga) 』 Dīpaṃkaraśrījñāna, Shākya blo gros 訳

C. Zi. 135a6-b6.

D1. No. 2461, Zi 135a6-b7.

D2. No. 4486, 38a3-b3.

G1. Tshi 204a4-205a1.

G2. Gi 50a1-b3.

N1. No. 1287, Tshi 147b1-148a2.

N2. No. 3390, Gi 40a2-b2.

P1. No. 3289, Tshi 169b5-170a8.

P2. No. 5399, Gi 47b2-48a4.

III. 經疏部

34. 『業障清淨儀軌疏 (*Karmāvaraṇaviśodhanavidhibhāṣya, Las kyi sgrib pa rnam par sbyong ba'i cho ga'i bshad pa*) 』

- C. Ji 195b4-200a5.
- D. No. 4007, Ji 184a3-198b6.
- G. Ji 290a1-297b6.
- N. No. 3499, Ji 229b6-236a2.
- P. No. 5508, Ji 236a3-242b7.

IV. 書翰部

35. 『無垢宝書翰 (*Vimalaratnalekha, Dri ma med pair in po che'i phrin yig*) 』
- C. Nge 70a3-71b5.
 - D1. No. 4188, Nge 70a3-71b5.
 - D2. No. 4566, 204b7-206b1.
 - G1. Gi 257a3-259a5.
 - G2. Nge 391b2-394a1.
 - N1. No. 3471, Gi 234a3-236a4.
 - N2. No. 3679, Nge 316a1-318a3.
 - P1 No. 5480, Gi 245b6-247a8.
 - P2. No. 5688, Nge 320a1-322a4.

V. 雜部

36. 『入菩薩行積 (**Bodhisattvacaryāvatārabhāṣya, Byang chub sems dpa'i spyod pa la 'jug pa'i bshad pa*) 』
- G. Nyo 521a1-567a5.
 - N. Nyo 399b2-435b3.
 - P. No. 5872, Nyo 426b2-463a4.
37. 『一切業障摧破儀軌 (*Sarvakarmāvaraṇaviśuddhikaravidhi, Las kyi sgrib pa thams cad rnam par 'thag par byed pa'i cho ga*) 』 *Dīpaṃkaraśrījñāna, Tshul khriims rgyal ba* 訳
- G. Nyo 582a1-583a5.
 - N. No. 3866, Nyo 447a6-448a3.
 - P. No. 5874, Nyo 475a8-476a7.
38. 『種姓誓願 (*Kulapranīdhāna, Rigs kyi smon lam*) 』
- C. Nyo 322a4-b4.
 - D. No. 4389, Nyo 319a4-319b2.
 - G. Mo 381b4-382a5.
 - N. No. 3925, Mo 299a4-299b3.

P. No. 5933, Mo 306b5-307a5.

これらの文献のうち、29『輪廻出離意歌』、30『法界見歌』、31『行歌』、32『三昧資糧論』、33の『超世間七支儀軌』は秘密部にも収録されている。特に、『行歌』は、秘密部所収の『金剛座金剛歌』とそれぞれの注釈書とともに、対になっている。もちろん、これらの著書が顕教なのか、密教なのかは、テンギユルの編纂者の判断によるものであるが、中観部所収のものは、「小部集」のものが再録されたものであるために、テンギユル編纂の段階では秘密部の文献と理解されていたことになる。また、小部集に収録されていない著書は、大部の『菩提道灯論細疏』と『中観説示開宝篋』、『般若経』関係の『般若波羅蜜多撰義灯論』と『般若心解説』、注釈文献である『経集撰義』と『業障清浄儀軌疏』と『入菩薩行釈』、アンソロジーである『大経集』、儀軌文献の『罪過懺悔儀軌』と『一切業障摧破儀軌』、誓願文の『種姓誓願』である。

密教文献

密教文献としては、次のものがある。

39. 『現観分別 (*Abhisamayavibhaṅga, mNgon par rtogs pa rnam par 'byed pa*) 』
Dīpaṃkaraśrījñāna, Tshul khriṃs rgyal ba 訳
C. Zha 185b5-203a7.
D. No. 1490, Zha 186a1-202b3.
G. Pa 247a1-270a6.
N. No. 205, Pa 195a6-215b1.
P. No. 2205, Pa 185b8-204a5.
40. 『吉祥輪律儀成就法 (*Śrīcakrasaṃvarasādhana, dPal 'khor lo sdom pa'i sgrubs thabs*) 』 Dīpaṃkaraśrījñāna, Rin chen bzang po 訳
C. Zha 203a7-205b4.
D. No.1491, Zha 202b3-204b5.
G. Pa 271a1-274a6.
N. No. 206, Pa 215b1-218a5.
P. No. 2206, Pa 204a5-206b5.
41. 『吉祥薄伽梵現観 (*Śrībhagavadabkīsamaya, dPal bcom ldan 'das kyi mngon par rtogs pa*) 』 Rin chen bzang po 訳
C. Zha 205b4-208a3.

- D. No. 1492, Zha 204b5-207a3.
 G. Pa 275a1-278b2.
 N. No. 207, Pa 218a1-221a4.
 P. No. 2207, Pa 206b5-209b1.
42. 『一勇者成就法 (*Ekavīrasādhana, dPa' gcig pa'i sgrub thabs*) 』 Tshul khriims
 rgyal ba 訳
 C. Zha 208a3-209a2.
 D. No. 1493, Zha 207a3-208a2.
 G. Pa 278b3-279b6.
 N. No. 208, Pa 2221a4-222a7.
 P. No. 2208, Pa 209b1-210b3.
43. 『金剛座金剛歌 (*Vajrāsana vajragīti, rDo rje gdan gyi rdo rje'i glu*) 』
 C. Zha 209a3-210b1.
 D. No. 1494, Zha 208a3-209b1.
 G. Pa 280a1-281b4.
 N. No. 209, Pa 222a7-224a3.
 P. No. 2209, Pa 210b3-212a5.
44. 『金剛座金剛歌釈 (*Vajrāsana vajragītivr̥tti, rDo rje gdan gyi rdo rje'i glu'i 'grel
 pa*) 』 Dīpaṃkaraśrījñāna, Tshul khriims rgyal ba 訳
 C. Zha 210b1-216a4.
 D. No. 1495, Zha 209b1-215a5.
 G. Pa 282a1-290a4.
 N. No. 210, Pa 224a3-231a4.
 P. No. 2210, Pa 212a5-218b7.
45. 『行歌釈¹ (*Caryāgītivr̥tti, sPyod pai glu'i 'grel pa*)』 Dīpaṃkara, Tshul khriims
 rgyal ba 訳
 C. Zha 217a3-219b6.
 D. No. 1497, Zha 216b4-219a1.
 G. Pa 293a6-296b2.
 N. No. 212, Pa 232b6-244b2.

¹ 45 『行歌釈』には著者情報が付されていないのだが、対となる 43 『金剛座金剛歌』とその注釈の 44 『金剛座金剛歌』、ならびに本偈である 31 『行歌』が Dīpaṃkaraśrījñāna の著書とされており、翻訳者も同じであるために、彼の著書に加えた。

- P. No. 2212, Pa 220b1-223a3.
46. 『金剛瑜祇母讚 (*Vajrayoginīstotra, rDo rje rnal 'byor ma la bstod pa*) 』
 Dīpaṃkara, Rin chen bzang po 訳
 C. 'A 103a7-104a1.
 D. No. 1587, 'A 103b1-104a3.
 G. Pha 544a1-545a1.
 N. No. 298, Pha 385a1-b3.
 P. No. 2298, Pha 420b3-421a8.
47. 『宝莊嚴成就 (*Ratnālaṃkārasiddhi, Rin po che rgyan gyi sgrub pa*) 』
 C. 'A 109b6-111a6.
 D. No. 1591, 'A 110a2-111b1.
 G. Pha 554a1-556a2.
 N. No. 302, Pha 392a5-393b7.
 P. No. 2302, Pha 428b5-430a8.
48. 『金剛亥母成就法 (*Vajravārahīsādhana, rDo rje phag mo'i sgrub pa'i thabs*) 』
 C. 'A 111a6-112a7.
 D. No. 1592, 'A 111b1-112b2.
 G. Pha 556a3-557b4.
 N. No. 303, Pha 394a1-395a3.
 P. No. 2303, Pha 430b1-431b6.
49. 『吉祥金剛瑜祇母成就法 (*Śrīvajrayoginīsādhana, dPal rdo rje rnal 'byor ma'i sgrub thabs*) 』
 Dīpaṃkaraśrījñāna, brTson 'grus seng ge 訳
 C. 'A 112a7-113a2.
 D. No. 1593, 'A 112b2-113a5.
 G. Pha 558a1-559b2.
 N. No. 304, Pha 395a3-b7.
 P. No. 2304, Pha 431b6-432b5.
50. 『金剛瑜祇讚 (*Vajrayoginīstotra, rDo rje rnal 'byor ma la bstod pa*) 』
 Dīpaṃkaraśrījñāna, Ne tsho 訳
 C. 'A 113a2-b5.
 D. No. 1594, 'A 113a5-114a1.
 G. Pha 559b2-560b3.
 N. No. 305, Pha 395b7-396b4.

- P. No. 2305, Pha 432b5-433b3.
51. 『供物儀軌 (*Balividhi, gTor ma'i cho ga*)』
 C. Ta 189a7-191a5.
 D. No. 1295, Ta 185b1-187a5.
 G. Zha 692b1-695a5.
 N. No. 418, Zha 520b7-523a5.
 P. No. 2418, Zha 585a4-587a7.
52. 『吉祥喜金剛成就宝灯 (*Śrīhevajrasādhanaratnapradīpa, dPal dgyes rdo rje'i sgrub thabs rin po che'i sgron ma*) 』 Dānaśrī, Glan dar ma blo gros 訳
 C. Ta 28b4-34b6.
 D. No. 1268, Ta 28b4-34b7.
 G. Za 42a1-50b4.
 N. No. 424, Za 31a7-37b4.
 P. No. 2424, Za 34b8-42b4.
53. 『菩提心大樂要門 (*Bodhicittamahāsukkāmnāya, Byang chub kyi sems bde ba chen po'i man ngag*) 』 Dīpaṃkaraśrījñāna, dGe ba'i blo gros 訳, Pho brang byang chub 'od 改訂
 C. Sha 52b1-53a2.
 D. No. 1696, Sha 52b1-53a2.
 G. La 168b5-169b4.
 N. No. 618, La 124b4-125a6.
 P. No. 2619, La 138a7-139a2.
54. 『吉祥黑尊供物 (*Śrīmahākālabali, dPal mgon po'i nag po'i gtor ma*) 』 'Brom ston 訳
 C. Sha 256b3-258a6.
 D. No. 1765, Sha 256b4-258b1.
 G. La 351a2-353b5.
 N. No. 633, La 257a6-259a7.
 P. No. 2634, La 282b2-284b4.
55. 『吉祥秘密集会世自在成就法 (*Śrīguhyasamājalokeśvarasādhana, dPal gsang ba 'dus pa 'jig rten dbang phyug gi bsgrub pa'i thabs*) 』 Dīpaṃkaraśrījñāna, Rin chen bzang po 訳
 C. Pi 221b5-232b4.

- D. No. 1892, Pi 230b6-231b5.
 G. Thi 329a1-344b3.
 N. No.754, Thi249a1-262b6.
 P. No. 2756, Thi 263a7-277b4.
56. 『聖觀世自在成就法 (*Āryāvalokitaśvarasādhana*, 'Phags pa sbyan ras gzigs 'jig rten dbang phyug sgrub pa'i thabs) 』
 C. Pi 232b4-234a2.
 D. No. 1893, Pi 231b6-233a4.
 G. Thi 344b3-346b1.
 N. No. 755, Thi 262b6-264a7.
 P. No. 2757, Thi 277b4-279a8.
57. 『吉祥秘密集会讚 (*Śrīguhyasamājastotra*, dPal gsang 'dus pa'i bstod pa) 』
 Dīpaṃkaraśrījñāna, Rin chen bzang po 訳
 C. Pi 234a2-b5.
 D. No. 1894, Pi 233a4-233b7.
 G. Thi 346b2-347b4.
 N. No. 756, Thi 264a7-265a7.
 P. No. 2758, Thi 279a8-280a8.
58. 『黒閻魔敵成就法 (*Kṛṣṇayamārisādhana*, gShin rje gshed nag po'i sgrub thabs) 』
 Prajñāśrījñānakīrti 訳
 C. Mi 64b3-65a3.
 D. No. 1936, Mi 64b5-65a5. (著者は Śrīpaṇḍita)
 G. Pi 97b6-98b4.
 N. No. 799, Pi 68a7-69a1.
 P. No. 2801, Pi 78b8-79b2.
59. 『閻魔敵遍照現觀 (*Vairocanayamāryabhisamaya*, gShin rje gshed rnam par snang mdzad kyi mngon par rtogs pa) 』 Prajñāśrījñānakīrti 訳
 C. Mi 65a3-b5.
 D. No. 1937, Mi 65a5-66a1.
 G. Pi 98b4-99b5.
 N. No. 800, Pi 69a1-69b5.
 P. No. 2802, Pi 79b2-80a8.
60. 『閻魔敵宝生成就法 (*Ratnaśaṃbhavayamārisādhana*, gShin rje gshed rin chen

- 'byung ldan gyi sgrub thabs) 』 Prajñāśrījñānakīrti 訳
- C. Mi 65b5-66a7.
D. No. 1938, Mi 66a1-66b3.
G. Pi 99b6-100b6.
N. No. 801, Pi69b5-70b2.
P. No. 2803, Pi 80a8-81a6.
61. 『無量光心貪闇魔敵成就法 (Amitābhahṛdayarāgayamārisādhana, 'Od dpag tu med pa'i snying po 'dod chags gshin rje gshed sgrub pa'i thabs) 』 Prajñāśrījñānakīrti 訳
- C. Mi 66a7-67a2.
D. No. 1939, Mi 66b3-67a6.
G. Pi 100b6-101b6.
N. No. 802, Pi 70b2-71a7.
P. No. 2804, Pi 81a6-82a4.
62. 『闇魔敵金剛銳利成就法 (Vajratīkṣṇayamārisādhana, gShin rje gshed rdo rje rnon pos grub thabs) 』 Prajñāśrījñānakīrti 訳
- C. Mi 67a2-b4.
D. No. 1940, Mi 67a6-68a1.
G. Pi 102a1-103b1.
N. No. 803, Pi71a7-72a3.
P. No. 2805, Pi 82a4-83a1.
63. 『金剛心樂成就法 (Vajracarcikāsādhana, rDo rje sems ma bde ba'i sgrub thabs) 』 Prajñāśrījñānakīrti 訳
- C. Mi 67b4-68a6.
D. No. 1941, Mi 68a1-68b4.
G. Pi 103b1-104b2.
N. No. 804, Pi 72a3-73a1.
P. No. 2806, Pi 83a2-83b7.
64. 『金剛荼枳尼瑜祇母成就法 (Vajradākinīyoginīsādhana, rDo rje mkha' 'gro ma rnal 'byor ma'i sgrub thabs) 』 Prajñāśrījñānakīrti 訳
- C. Mi 68a6-69a1.
D. No. 1942, Mi 68b5-69a6.
G. Pi 104b3-105b3.

- N. No. 805, Pi73a1-73b5.
P. No. 2807, Pi 83b7-84b4.
65. 『金剛大樂弁財天成就法 (*Vajragītisukhrddhāsādhana, rDo rje bde rgyas dbyangs can ma'i sgrub thabs*) 』 Prajñāśrījñānakīrti 訳
C. Mi 69a1-b2.
D. No. 1943, Mi 69a6-70a1.
G. Pi 105b3-106b2.
N. No. 806, Pi 73b5-74a7.
P. No. 2808, Pi 84b4-85a7. (P は著者不明)
66. 『業白金剛成就法 (*Karmavajragaurīsādhana, Las kyi rdo rje gau ri'i sgrub thabs*) 』 Prajñāśrījñānakīrti 訳
C. Mi 69b2-70a4.
D. No. 1944, Mi 70a1-70b3.
G. Pi 106b2-107b2.
N. No. 807, 74a7-75a3.
P. No. 2809, Pi 85a4-86a4. (P は著者不明)
67. 『忿怒得閻魔敵成就法 (*Mudgarakrodhayamārisādhana, Khro bo tho bag shin rje gshed kyi sgrub thabs*) 』 Prajñāśrījñānakīrti 訳
C. Mi 74b2-75a3.
D. No. 1948, Mi 75a3-75b4.
G. Pi 113b1-104a5.
N. No. 811, Pi 79a7-80a2.
P. No. 2813, Pi 91a1-91b4.
68. 『罰閻魔敵遮成就法 (*Daṇḍadhṛgvidārayamārisādhana, dByug pa gshin rje gshed nam par 'joms pa'i sgrub thabs*) 』 Prajñāśrījñānakīrti 訳
C. Mi 75a3-b4.
D. No. 1949, Mi 75b4-76a5.
G. Pi 104a5-105a4.
N. No. 812, Pi 80a2-b5.
P. No. 2814, Pi 91b4-92a6.
69. 『劔閻魔敵阿修羅成就法 (*Caṇḍakhadgayamārisādhana, Ral gri gshin rje gshed gtum po'i sgrub thabs*) 』 Prajñāśrījñānakīrti 訳
C. Mi 75b4-76a4.

- D. No. 1950, Mi 76a5-76b6.
 G. Pi 105a4-106a4.
 N. No. 813, Pi 80b5-81a7.
 P. No. 2815, Pi 92a6-93a4. (P は著者不明)
70. 『蓮華閻魔敵智慧樂有成就法 (*Prajñāsukhapadmamārisādhana, Padma gshin rje gshed shes rab bde ba can gyi sgrub thabs*) 』 Prajñāsrījñānakīrti 訳
 C. Mi 76a4-b5.
 D. No. 1951, Mi 76b6-77a7.
 G. Pi 106a4-107a4.
 N. No. 814, Pi 81a7-82a2.
 P. No. 2816, Pi 93a4-93b7.
71. 『根本過広注 (*Mūlāpattiṭikā, rTsa ba'i ltung ba'i rgya cher 'grel pa*) 』
 Dīpaṃkaraśrījñāna, Tshul khriṃs rgyal ba 訳
 C. Zi 192b5-197b6.
 D. No. 2487, Zi 192b6-197b6.
 G. Tshi 282a1-290a1.
 N. No. 1311, Tshi 204b7-210b4.
 P. No. 3313, Tshi 238b2-245a1.
72. 『身口意善住 (*Kāyavākcittasupraṭiṣṭhā, sKu dang gsung dang thugs rab tu gnas pa*) 』
 Dīpaṃkara, brTson seng ge 訳
 C. Zi 254b6-260a1.
 D. No. 2496, Zi 254b7-260a2.
 G. Tshi 382a3-389b2.
 N. No. 1320, Tshi 275b2-281a2.
 P. No. 3322, Tshi 316a1-322a1.
73. 『不動成就法 (*Akṣobhyasādhana, Mi 'khrugs pa'i sgrub thabs*) 』 Dīpaṃkaraśrī-
 jñāna, Tshul khriṃs rgyal ba 訳
 C. Ju 322b3-324a2.
 D. No. 2653, Ju 306b5-308a2.
 G. Gu 413a1-415a5.
 N. No. 1475, Gu320b2-322a5.
 P. No. 3477, Gu 337a3-338b6.
74. 『薄伽梵不動成就法 (**Bhagavadakṣobhyasādhana, bCom ldan 'das mi 'khrugs*

- pa'i sgrub thabs*) 』 Dīpaṃkaraśrījñāna, Tshul khriṃs rgyal ba 訳
- C. Ju 324a2-b1.
D. No. 2654, Ju 308a2-7.
G. Gu 415a5-b6.
N. No. 1476, Gu322a5-b5.
P. No. 3478, Gu 338b6-339a7.
75. 『一切業摧破儀軌 (*Sarvakarmāvaraṇaviśtodhanamaṇḍalavidhi, Las kyi sgrib pa thams cad rnam par sbyong ba'i dkyil 'khor gyi cho ga*) 』 Dīpaṃkara, Rin chen bzang po 訳
- C. Ju 324b1-325b6.
D. No. 2655, Ju 308b1-309b3.
G. Gu 415b6-417b4.
N. No. 1477, Gu 322b5-324a6.
P. No. 3479, Gu 399a7-340b7.
76. 『護摩儀軌 (*Homavidhi, sByin sreg gi cho ga*) 』
- C. Ju 327b6-328b1.
D. No. 2659, Ju 311a7-b7.
G. Gu 420a6-421a5.
N. No. 1481, Gu326b3-327a5.
P. No. 3483, Gu 343a4-343b7.
77. 『文殊瞿沙成就一勇者成就法 (*Siddhaikavīramañjughoṣasādhana, 'Jam pa'i dbyamhs dpa' bog cig tu sgrub pa'i sgrub thabs*) 』 Dīpaṃkaraśrījñāna, dGe ba'i blo gros 訳
- C. Nu 70a3-72a1.
D. No. 2702, Nu 70a3-72a2.
G. Nyu 162a1-165a1.
N. No. 1526, Nyu 118b3-121a1.
P. No. 3527, Nyu 88b8-90b8.
78. 『吉祥金剛手讚 (*Śrīvajrapāṇistotra, dPal phyag na rdo rje la bstod pa*)』 Dīpaṃkaraśrījñāna, brTson 'grus seng ge 訳
- C. Nu 241b2-242b7.
D. No. 2889, Nu 240a3-241a5.
G. Nyu 415a6-417a1.

- N. No. 1710, Nyu 313b6-315a5.
P. No. 3714, Nyu 289a5-290b3.
79. 『聖馬頭成就法 (**Āryahayagrīvasādhana*, 'Phags pa rTa mgrin gyi sgrub thabs) 』
C. Pu 111a4-114a6.
D. No. 3057, Pu 109b4-112b2.
G. Tu 155b6-160a6.
N. No. 1876, Tu 117a1-120a3.
P. No. 3881, Tu 125b7-129a4.
80. 『吉祥馬頭成就法 (**Śrīhayagrīvasādhana*, dPal rTa mgrin gyi sgrub thabs) 』
C. Pu 114a6-115a3.
D. No. 3058, Pu 112b2-113a6.
G. Tu 160a6-161b3.
N. No. 1877, Tu 120a3-121a1.
P. No. 3882, Tu 129a4-130a4.
81. 『忿怒王聖不動讚 (*Āryācalakrodharājastotra*, Khro bo'i rgyal po 'phags pa mi g-yo ba la bstod pa) 』 Dīpaṃkaraśrījñāna, Tshul khriṃs rgyal ba 訳
C. Pu 118a4-b7.
D. No. 3060, Pu 116a4-b6.
G. Tu 166b5-167b6.
N. No. 1879, Tu 166b5-167b6.
P. No. 3884, Tu 133b3-134b1.
82. 『忿怒王聖不動讚 (*Āryācalakrodharājastotra*, Khro bo'i rgyal po 'phags pa mi g-yo ba la bstod pa) 』 Dīpaṃkaraśrījñāna, Tshul khriṃs rgyal ba 訳
C. Pu 118b7-120a2.
D. No. 3061, Pu 116b6-117b7.
G. Tu 167b6-169b1.
N. No. 1880, Tu 124b5-125b7.
P. No. 3885, Tu 134b1-135b4.
83. 『一切如来三摩耶守護成就法 (*Sarvatathāgatasamayarakṣasādhana*, De bzhin gshegs pa thams cad kyi dam tshig bsrung ba'i sgrub thabs) 』 Dīpaṃkaraśrījñāna, Tshul khriṃs rgyal ba 訳
C. Pu 179a2-b4.
D. No. 3079, Pu 175b1-176a3.

- G. Tu 239a1-240a5.
 N. No. 1893, Tu 176a6-177a2.
 P. No. 3898, Tu 189b8-190b3.
84. 『五制多建立儀軌 (**Pañcacaityanirvapaṇavidhi, mChod rten lnga gdab pa'i cho ga*²) 』
 C. Pu 179b4-180a5.
 D. No. 3080, Pu 176a3-176b4. (著者不明)
 G. Tu 240a5-242a4.
 N. No. 1894, Tu 177a2-b4.
 P. No. 3899, Tu 190b3-191a2.
85. 『無垢頂髻陀羅尼儀軌 (**Vimaloṣṇīṣadhāraṇīvidhi, gTsug tor dri ma med pa'i gzungs kyi cho ga*³) 』
 C. Pu 180b6-181a6.
 D. No. 3082, Pu 177a6-b6.
 G. Tu 242a4-243a4.
 N. No. 1896, Tu 178a7-179a1.
 P. No. 3901, Tu 192a2-b3
86. 『多羅母成就法 (**Tārābhaṭṭārikāsādhana, rJe btsun sgrol ma'i sgrub thabs*)』
 Dīpaṃkaraśrījñāna, dGe ba'i blo gros 訳
 C. Mu 322a2-324a4.
 D. No. 3685, Mu 315a2-317a4.
 G. Du 453a5-456a6.
 N. No. 2503, Pu 369a1-371a4.
 P. No. 4508, Du 414b5-417b7.
87. 『八難救脱 (**Aṣṭasabhayatrāṇa, 'Phags pa brgyad las skyob pa*)』
 C. Mu 329b1-330a1.
 D. No. 3687, Mu 322b1-323a1.
 G. Du 465a1-b4.
 N. No. 2505, Du 376b3-377a4.
 P. No. 4510, Du 424b2-425a5.
88. 『聖多羅母讚 (*Āryatārāstotra, 'Phags ma sgrol ma la bstod pa*)』 Dīpaṃkaraśrī-

² D. *Sāccha lnga gdab pa'i cho ga*.

³ C. No. 3044, D. No. 3081, N. No. 2693, P. No. 3900, 191a3-192a2 も同じタイトルだが著者名を欠く。

- jñāna, Tshul khriṃs rgyal ba 訳
- C. Mu 330a1-b2.
D. No. 3688, Mu 323a1-b2.
G. Du 465b4-466b1.
N. No. 2506, Du 377a4-b4.
P. No. 4511, Du 425a5-425b8.
89. 『聖多羅母成就法 (*Āryatārāsādhana*, 'Phags ma sgröl ma'i sgrub thabs) 』
Buddhakaravarman, Chos kyi shes rab 訳
- C. Mu 330b2-331b7.
D. No. 3689, Mu 323b2-324b7.
G. Du 466b1-468b1.
N. No. 2507, Du 377b4-379a3.
P. No. 4512, Du 426a1-427b5.
90. 『一切三摩耶集 (*Sarvasamayasaṃgraha*, *Dam tshig thams cad bsdud pa*) 』
Dīpaṃkaraśrījñāna, Tshul khriṃs rgyal ba 訳
- C. Tshu 43b5-49a7.
D. No. 3725, Tshu 44a1-59b1.
G. Nu 311a1-318b6.
N. No. 2542, Nu 254b4-260b6.
P. No. 4547, Nu 253b6-259b8.
91. 『聖歡喜天貪金剛三摩耶讚 (*Āryagaṇapatirāgavajrasamayastotra*, 'Phags pa tshogs kyi bdag po chags pa rdo rje'i dam tshig gi bstod pa) 』 Dīpaṃkaraśrījñāna,
Tshul khriṃs rgyal ba 訳
- C. Tshu 74b5-75a4.
D. No. 3739, Tshu 74b5-76a4.
P. No. 4561, Nu 289b4-290a4.
92. 『甘露生供物儀軌 (*Amṛtodayabalividhi*, *bDud rtsi 'byung ba'i gtor ma'i cho ga*) 』
Dīpaṃkaraśrījñāna, dNgos grub 訳
- C. Tshu 212b4-220b3.
D. No. 3778, Tshu 212b4-220b3.
G. Nu 523a1-534a4.
N. No. 2587, Nu 429a5-439a4.
P. No. 4596, Nu 429b1-438a7.

93. 『水供物離垢書 (**Jalabalivimalagrantha, Chu gtor dri ma med pa'i gzhung*) 』
Dīpaṃkaraśrījñāna, Tshul khriṃs rgya1 ba 訳
C. Tshu 220b3-221b2.
D. No. 3779, Tshu 220b3-221b2.
G. Nu 534a4-535b3.
N. 2588, Nu 439a4-440a6.
P. No. 4597, Nu 438a8-439b4.
94. 『龍供物儀軌 (*Nāgabalividhi, Klu gtor gyi cho ga*) 』 Rin chen bzang po 訳
C. Tshu 221b2-222a5.
D. No. 3180, Tshu 221b3-222a6.
G. Nu 535b3-536b4.
N. No. 2589, Nu 440a6-441a3.
P. No. 4598, Nu 439b1-440a6.
95. 『供物供養儀軌 (**Balipūjavidhi, gTor mas mchod pa'i cho ga*) 』 Rin chen bzang
po 訳
G. Pu 198a1-204a5.
N. No. 2620, Pu 130a7-134b6.
P. No. 4631, Pu 135b1-140b1.
96. 『金剛瑜祇母成就法 (*Vajrayoginīsādhana, rDo rje rnal 'byor ma'i sgrub thabs*) 』
Dīpaṃkaraśrījñāna, Rin chen bzang po 訳
G. Phu 23a6-b3.
N. No. 2662, Phu 19a3-6.
P. No. 4671, Phu 18a7-18b3.
97. 『聖六字成就法 (*Āryaṣaḍakṣarīsādhana, 'Phags pa yi ge drug pa'i sgrub thabs*) 』
G. Zu 151a1-152b1.
N. No. 2830, Zu 118a4-119a1.
P. No. 4839, Zu 122b3-123a7.
98. 『夜叉大將青衣執金剛手成就法 (*Mahāyakṣasenāpatinīlāmbaṛadharavajrapāṇi-
sādhana, gNod sbyin gyi sde dpon chen po lag na rdo rje gos sngon can gyi bsgrub
thabs*) 』 Dīpaṃkaraśrījñāna, Rin chen bzang po 訳
G. Zu 183a1-188b4.
N. No. 2839, Phu 137b2-141b7.
P. No. 4848, Zu 142a5-146a1.

99. 『入密咒義 (*Mantrārthāvatāra, sNgags kyi don 'jug pa*) 』
 G. Zu 217a1-219b3.
 N. No. 2847, Zu 162b7-164b6.
 P. No. 4856, Zu 164b6-166a7.
100. 『灌頂優婆提舍 (*Sekopadeśa, dBang gi man ngag*) 』
 G. Zu 219b3-220b5.
 N. No. 2848, Zu 164b6-166a1.
 P. No. 4857, Zu 166a7-167a6.
101. 『三摩耶秘密 (*Samayagupti, Dam tshig sbas pa*) 』
 G. Zu 220b5-222a3.
 N. No. 2849, Zu 166a1-167a4.
 P. No. 4858, Zu 167a6-168a7.
102. 『堆薪儀軌 (*Citāvidhi, Tsha tsha'i cho ga*)』 *Dīpaṃkaraśrījñāna, Zla ba'i 'od zer*
 訳
 G. Zu 234a3-235a6.
 N. No. 2859, Zu 176b6-178a1.
 P. No. 4868, Zu 177b4-178b5.
103. 『忿怒王不動成就法 (*Krodharājācalasādhana, Khro bo'i rgyal po mi g-yo ba'i*
bsgrub pa'i thabs) 』
 G. Zu 322a1-326b4.
 N. No. 2883, Zu 242b5-246b1.
 P. No. 4892, Zu 243a3-246b4.
104. 『勝義兇暴大忿怒成就法 (*Caṇḍamahāroṣaṇasādhanaparamārtha, gTum po khro*
bo chen po'i sgrub pa don dam pa) 』 *Nivāṇaśrī, Tāranātha* 訳
 G. Zu 330a1-332a6.
 N. No. 2887, Zu 248b7-250b2.
 P. No. 4896, Zu 248b8-250b2.
105. 『握鉞智尊自生誦讚 (*Kartaridharajñānanātmotpādanajapastotra, Ye shes mgon*
po gri gug can gyi bdag bskyed bzlas pa bstod pa) 』
 G. 'U 18a5-19b5.
 N. No. 2934, 'U 16a1-17a3.
 P. No. 4943, 'U 14b7-16a5.
106. 『吉祥歡喜天寂靜成就法 (*Śrīgaṇapatiśāntisādhana, dPal tshogs kyi bdag po zhi*

- ba'i sgrub thabs*⁴) 』
- G. 'U 125a1-126b6.
N. No. 2977, 'U 91b3-92b4.
P. No. 4986, 'U 97b5-99a1.
107. 『歡喜天秘密成就法 (*Gaṇapatiguhyasādhana, Tshogs kyi bdag po'i gsang ba'i sgrub thabs*) 』
- G. 'U 129a3-130b5.
N. No. 2981, 'U 94a7-95b3.
P. No. 4990, 'U 100b5-102a4.
108. 『主財神五眷属讚令降寶雨 (*Vasupatyupādhipañcakastotravasumeghāveśa, Nor bdag gtso 'khor lnga'i bstod pa dbyig gi char 'bebs*) 』 *Dīpaṃkaraśrījñāna*, brTson 'grus seng ge 訳
- G. 'U 252a4-253a1.
N. No. 2991, 'U 109b5b3-110a7.
P. No. 5000, 'U 117a2-117b4.
109. 『ディーパンカラシュリージュニャーナ法歌 (**Dīpaṃkaraśrījñānadharma-gūtikā, Dī paṃ ka ra śrī jñā na'i chos kyi glu*⁵) 』
- C. No. 2327, Zi 10a6-b1.
D. No. 2374, Zi 10a6-b2.
G. Tshi 13a3-6.
N. No. 1201, Tshi 11b1-4.
P. No. 3202, Tshi 12b2-6.

以上の密教文献については、著者名が曖昧なものも含まれており、検討の余地があるものも含まれている。また、近年に中国で出版された『阿底峽全集(*Jo bo rje dpal ldan A ti sha'i gsung 'bum*)』(中国藏学出版社, 2006)には、テンギェルに収録されている上記の著書以外のものも含まれている。

⁴ 著者は、Jo bo とされる。

⁵ 本書は、*Dīpaṃkaraśrījñāna* による著書ではないが、関連文献として最後に付しておく。

第3章 従来の研究

はじめに

チベット仏教の研究が盛んになるにともない、Dīpaṃkaraśrījñāna に関する研究も多く見られるようになってきた。それらは主として、二つの側面からのアプローチにより行われてきた。その一つは、チベットにおいて書かれた仏教史や伝記などの史的資料によりチベット仏教史における彼の客観像を浮かびあげるものであり、もう一つは彼の主著ともいえる『菩提道灯論』を通して彼の思想内容に焦点を当てるものである。しかしながら、チベット仏教史における彼の知名度と『菩提道灯論』の数度にわたる現代語訳に比べ、膨大な数のその他の著作に対する研究はそれほど進んでいない状況である。以下に、これまでの研究をまとめるが、密教行者としての彼の姿に関する報告は少なく、未だに定かではない点が多い。『菩提道灯論細疏』に見られるタントラに対する区分の部分、彼のタントラ理解として引用されるものの、彼が著わした密教文献に関する研究は極僅かである。

黎明期

アイマーの指摘によると¹、ヨーロッパにおいて彼の名称が最初に記されているのは、宣教師である A.A. ゲオルギウス (A. A. Georgius) による1762年の著作である『チベットのアルファベット (Alphabetum Tibetanum)』に「アティシア (Atiscia)」への言及が見られる。そのアイマーによる注記によると、それは宣教師であるフランチェスコ・オラツィオ・デラ・ペンナ (Francesco Orazio della Penna, 1680-1747) に基づいている。この時点で彼の名称がヨーロッパの著書に最初に登場したのであるが、彼に関する研究の開始までにはその後200年の時を要することになる²。

サラート・チャンドラ・ダスによる『菩提道灯論』の英訳

1893年に『仏教文献協会誌 (Journal of the Buddhist Text Society)』の第一巻³において発表されたサラート・チャンドラ・ダス (Sarat Chanra Das) による『菩提道灯論』のチベット語訳テキストとその英訳により、Dīpaṃkaraśrījñāna の研究の幕が落とされたといえる。以後、一世紀が経つが、同論のチベット語テキストと英訳は、その後もそれ

¹ Eimer 1977: 23-24.

² Eimer 1977: 25 によると、この間に、Isaac Jacob Schmit, *Forschungen im Gebiete der älteren religösen, politischen und literarischen Bildungsgeschichte der Völker Mittelasiens*, St. Petersburg 1524, Carl Friedlich Koppen, *Die Lamaische Hierarchie und Kirche*, Berlin 1971 がある。

³ Das 1893.

どれ五回以上も発表されている。これは本研究が完全なものとは言えないからであろうが、それ以上にこのテキストの人気を物語っている。いずれにせよ、このチベット仏教史において最も認知度の高い文献を仏教学の研究の場に提示した最初の研究である。

羽田野伯猷によカダム派研究

1959年に『宗教学研究』160号に「密教者としてのアティーシャ」として発表された論文をはじめとする羽田野伯猷による一連の *Dīpaṃkaraśrījñāna* に関する研究論文は、それまでの研究をまとめた形で1986年に『チベット学・インド学集成』として刊行された⁴。そのうちの「菩提心法者としてのアティーシャ」は、*Dīpaṃkaraśrījñāna* の小部文献への言及も見られるが、その他のものは彼の伝記資料に基づいた研究である。特に1954年に発表された「カーダム派史⁵」は、チベット仏教史に関する著作である『テプテル・ゴンポ⁶』のカダム派の章の和訳を収めており、*Dīpaṃkaraśrījñāna* の生涯に関する情報だけではなく、その後のカダム派の経過を知る上でも重要な研究である。彼とその弟子たちとの関係がどのようなものであったのに関して、豊富な資料を提供している。

稲葉正就による中観論書のチベット訳者の研究

1966年に『仏教学セミナー』の第四号と第五号に発表された「チベット中世における般若中観論書の訳出⁷」は、そのタイトルが示すように、チベット大蔵経のテンギェルの中観部に収められている論書のうち、後伝記に翻訳されたテキストの翻訳者に関して論じたものである。その一項目に *Dīpaṃkaraśrījñāna* があげられており、そのコロフォンの記述から、彼の伝記資料に基づく経歴に沿って、翻訳時期を推定している。そこには、その共訳者の名前も並記されており、有益であるのだが、さらにいくつかの疑問点も指摘している。『テプテル・ゴンポ』には、「ゴクのレクペーシェーラブが彼をラサに招待し、懇願するので、*Bhavya*の『思釈炎』を翻訳し、大小の『中観優婆提舍』を著した」という記述があるのだが、『中観優婆提舍開宝篋』のコロフォンには、インドのヴィクラマシーラ寺で *Tshul khriṃs rgyal ba* に対して説いたものであるという記述がある。稲葉はこれを「インドで著したこのテキストを新たに著した小さな『中観優婆提舍』と共に一対として示したのか、それとは異なるテキストを著したのであろう」とするが、いずれにせよ、これらの記述には整合性のない矛盾も含まれていることを示している。また稲葉は「翻訳に従事したアティーシャは既に高齢であったから、どの程度

⁴ 羽田野 1986-87.

⁵ 羽田野 1854.

⁶ Roerich 1949.

⁷ 稲葉 1966.

までチベット語に通達していたか疑問なしとしない」と結んでいる。

アラカ・チャッタウパディヤーヤの『アティーシャとチベット』

1967年にカルカッタにおいて出版されたアラカ・チャッタウパディヤーヤ (Alaka Chattopadhyaya) による『アティーシャとチベット(*Atīśa and Tibet*)』は、その後も版を重ねることからも、Dīpaṃkaraśrījñāna 研究における試金石である、と言える。本書も基本的には彼の伝記資料に基づいて、インドからチベットに至る経過を詳細に述べた研究書であるが、いくつかの注目すべき点についても触れている。

まず、第四章「名前」では、彼のテキストのコロフォンに見られるDīpaṃkaraśrījñāna の名称に相当するチベット語の訳語のいくつかに対する複数のパターンについて考察している。結論としては、Śrī Dīpaṃkarajñāna などの相違によっても、それらは同一人物に帰されるとする。

続く第五章「何人のディーパンカラか」では、H.P. シャーストリ (H.P. Shāstri) により主張された、「アーチャーリヤ」などのその著者に対する尊称の形容詞により複数のDīpaṃkaraśrījñāna を仮定する説を取り上げ、これを排除している。

また、本書の付論には、現在でも有益な多くの情報が付されている。その最初には、五つのチベット資料からの彼の伝記に関する記述を取り上げ、英訳をなしている。そして何よりも、彼のすべての著作のコロフォンの英訳は、多少の問題はあるものの、大変に有益なものである。テキストの著作やその翻訳に関する情報を収めているこの奥書きの情報が、いつ誰の手により著されたものかについては慎重な取り扱いを要するものの、それらの資料がここにまとめられており、伝記資料との整合性を求めるための貴重な資料となる。

一方、巻末に付されたムニナルカンティ・ガンガーウパディヤーヤ (Mrinalkanti Gangopadhyaya) による還元サンスクリットは必要のないものである⁸。

江島恵教による Dīpaṃkaraśrījñāna 研究

1970年に『印度学仏教学』第19巻第1号において、江島恵教により「Atīśaの無自性性論証」が発表される⁹。これは『菩提道灯論』と『菩提道灯論細疏』に説かれる四大論証¹⁰に基づく無自性性の論証箇所について、その思想的史的な位置付けを試みたものである。それによると、Kamalaśīla の『中観光明論』の五論証形式との一致する点があ

⁸ Eimer 1985.

⁹ 江島 1980: 239-248 に再録されている。

¹⁰ (1) 四選択肢の生起の否定 (存在・非存在・存在非存在・非存在非非存在)、(2) 金剛片 (自・他からの生起の否定)、(3) 離一多性、(4) 縁起の四つである。

るものの、直接そこからとってきたとは考えられない。むしろ Dīpaṃkaraśrījñānaがその翻訳者ともなっている Bhavya¹¹ の『中観宝灯論 (*Madhyamakaratnapradīpa*)』や『中観義集 (*Madhyamakārthasaṃgraha*)』に説かれる四大論証に基づいて展開したものであるとされている。

1983年には、「アティージャの二真理説」が壬生台舜編集の『龍樹教学の研究』において発表される¹²。この論文は Dīpaṃkaraśrījñāna の『入二諦論』に対する和訳とチベット訳テキストを中心にその内容を解説した後に、彼の二諦説の思想史的位置付けを行なったものである。ここにおいても Dīpaṃkaraśrījñāna が翻訳した Bhavya の『中観宝灯論』における二諦論との比較検討を行ない、その典拠が同論にあることを論証している。これらの研究により、Dīpaṃkaraśrījñāna の中観思想の理解が、Bhavya の『中観宝灯論』に多くの影響を受けていることが解明された。

トウプテン・ケサンらによる『アティージャ』

1974年にタイのバンコクにおいて出版されたトウプテン・ケサン (Lama Thubten Kalsang) らによる『アティージャ:ある高名な仏教聖者の伝記 (*Atisha - A Biography of the Renowned Buddhist Sage*)』は¹³、六十頁に満たない小著である。そこにはグルガナ・ダルマカラナマ (*Gurugana Dharmakaranama*) による「アティージャ伝 (*The Biography of Atisha*)」と「アティージャのスヴァルナドヴィーパへの旅 (*Atisha's Journey to Suvarnavipa*)」とのチベット語テキストからの英訳と、ダラムサーラのチベット教育大学 (*Tibetan Teachers' Training Collage*) により編集された「チベットにおける仏教の伝播 (*The Spread of Buddhism in Tibet*)」からなっている。しかしながら、前二者の著者とされるダルマカラナマがどのような人物なのかや、そのテキストがいずれの資料に基づいているのかなどに関する情報は提供されておらず、その伝記資料の源泉がいずれなのかという注記もなく、その取り扱いに慎重さを要するものである。

ヘルムート・アイマーの研究

1977年に『アジア研究 (*Asiatische Forschungen*)』の第五十一巻として出版されたヘルムート・アイマー (Helmut Eimer) の『アティージャの生涯に関する報告 (*Berichte über das Leben des Atiša (Dīpaṃkaraśrījñāna)*)』¹⁴は、彼の学位論文をもとにしたものである。その資料としては、最初に『プトン仏教史』に始まる歴史文献に見られる

¹¹ 『中観心論』の著者とは別人とされる。江島 1980: 33-34.

¹² 江島 1983.

¹³ Thubten 1974.

¹⁴ Eimer 1977.

Dīpaṃkaraśrījñāna に関する記述を報告し、続いてカダム派全書における Dīpaṃkaraśrījñāna の伝記資料を取り上げ、さらに彼の著作のコロフォン、後代の学者による彼に関する記述、カタログや地方の年代記における記述、讃歌などのチベットに伝わるすべての伝記資料を総合的に分析している。それにより彼の伝記資料が、どのように展開していったのかまでを論じている。

翌1978年には、同じく『アジア研究』の一卷として『菩提道灯論¹⁵』に関する研究の集大成を発表する。同書は「『菩提道灯論』の成立」、「チベット文献における『菩提道灯論』の評判」、「『菩提道灯論』の韻文形態と区分」、「『菩提道灯論』の現代語訳」、「テキスト刊行の際の処置と補足資料の報告」を詳細に論じた上で、テキストの校訂に入っている。そこで用いられた『菩提道灯論』に関する一次資料は十六種類であり、さらに数点の二次資料をも取り扱っており、利用可能なすべての資料がここに用いられていることがわかる。チベット語訳とそのドイツ語訳が見開きに対照されている。ここで最大の特徴はこのテキストを偈頌の番号では数えておらず、パーダごとに数えていることである¹⁶。これに付論として、「『菩提道灯論細疏』の構造に関する所見」、「『菩提道灯論細疏』の区分に関するさらなる資料」、「『菩提道灯論細疏』における論証された引用」と Dīpaṃkaraśrījñāna の自注である『菩提道灯論細疏』に関する研究が続き、余論として「ロンチェン・ラップチャンパ (Klong chen Rab 'byams pa) による『菩提道灯論』からの引用」、「『ドンマー・ナムシェー(sGron ma'i rnam bshad)』と『プルチュン・ゲーペー・チェーチン (Phul byung dgyes pa'i mchod sprin)』の区分」、「『シュンドウン・セルウェー・ニーマ (dZhung don gsal ba'i nyi ma)』の区分」として、チベットにおける『菩提道灯論』に対する注釈書に関して詳細に論じ、最後のものに関してはそのテキストの提示もなされている。このように、本書はチベットに伝わる『菩提道灯論』に関する資料を用いて調査した研究である。

1979年には、同じく『アジア研究』第六十七巻として Dīpaṃkaraśrījñāna の伝記の一つである『詳伝 (rNam thar rgyas pa)』に対する研究¹⁷を発表する。その第一巻はドイツ語訳からなり、第二巻はチベット語の校訂テキスト、及びその他の伝記資料との平行句の提示がなされている。

アイマーは、以後も Dīpaṃkaraśrījñāna に関する論文を多数発表しており¹⁸、2003年

¹⁵ Eimer 1978.

¹⁶ 彼のほとんどのテキストにおいて、四パーダを一偈として数えることが困難なケースが多数存在し、解釈者により偈頌の番号が異なる事例があるので、このような数え方は有効である。本研究においても、彼の偈頌で書かれた著作については、パーダの番号で数えることにする。

¹⁷ Eimer 1979.

¹⁸ Eimer の著作論文リストについては、M. Hahn, J.-U. Hartmann and R. Steiner ed., *Suhrlekhāḥ, Festgabe für Helmut Eimer*, Swisttal-Odendorf 1996, XIII-XXIII を参照。

には『八十頌讃歌：ディーパンカラシュリージュニャーナを賞讃する初期の讃歌 (*Testimonia for the Bstod-pa brgyad-cu-pa: An Early Hymn Praising Dīpaṃkaraśrījñāna (Atiśa)*)』を出版した。同論は、彼と同時代の翻訳官である Tshul khriṃs rgyal ba による Dīpaṃkaraśrījñāna に対する讃歌の校訂本である。

ロプサン・ダルゲイによる『アティシャの《菩薩摩尼鬘論》』

1978年にスイスのチューリッヒのチベット研究所の叢書 (*Opuscula Tibetana*) の一つとして出版されたロプサン・ダルゲイ (Lobsang Dargyay) による『アティシャの菩薩摩尼鬘論 (*Atiśa's 《Juwelenkranz des Bodhisattva》*)』¹⁹は四十頁に満たない短い著作であり、序論につづき、『菩薩摩尼鬘論』に対するドイツ語訳、チベット文字によるテキスト、ローマ字表記されたチベット語訳のテキスト、注、偈頌の対照表から成っている²⁰。本論は『カダム派全書 (*bKa' gdams glegs bam*)』に挿入されていることから、同派においては重要なテキストとして位置付けられていたことが判るが、いくつかの問題を含んでいる文献でもある。チベット大蔵経の中の「中観部」に収められたテキストおよび「アティシャ小部集」に収められたものと『カダム派全書』に収められたものでは偈頌の順番が異なっている。さらに、このテキストの多くの偈頌が同じ Dīpaṃkaraśrījñāna の『無垢宝書簡』と一致することである。それゆえ本書に付されたコンコードダンスは実に有益であるが、『無垢宝書簡』との同一性に関しては触れられていない²¹。

チベット語のテキストに関しては、『カダム派全書』に収められたものも校訂に用いられているが、デルゲ版とナルタン版は用いられていない。また偈頌に番号が付されているのだが、その第一偈に相当するものとして、チベット語訳の題名と三つの帰敬文との四句を偈頌として数えていることは問題であろう。Dīpaṃkaraśrījñāna による偈頌からなるテキスト自体が、その数え方に解釈の相違を有するものではあるが、内容上も音韻数からも適切なものとは判断できない。いずれにせよ、カダム派における本テキストの重要性にも焦点をあてた研究書である。

クリスチャン・リントナーによる Dīpaṃkaraśrījñāna の『入二諦論』研究

¹⁹ Dargyay 1978.

²⁰ 本書と同時期に、ブライアン・ベレスフォードによる『菩薩摩尼鬘論』の英訳『崇高な友人からの助言 (*Advice from a Spiritual Friend*)』(Beresford 1977)も出版されている。本書は、チベット人の Geshe Ngawang Dhargyey による口頭による解説をともなっており、さらにカダム派の 'Chad kha ba と 'Brom ston pa のそれぞれの小論の英訳も収めている。

²¹ Eimer 1981.

1981年に『インド哲学研究 (*Journal of Indian Philosophy*)』に発表されたデンマークのクリスチャン・リントナー (Christian Lindtner) による「アティシャの『入二諦論』とその典拠 (Aīśa's Introduction to the two truths, and its sources)」は、Dīpaṃkaraśrījñāna の『入二諦論』に対するチベット語訳テキストとその英訳²²付すものである。その本論では、このテキストに説かれている二諦説の典拠が考察されており、Nāgārjunaに帰される『無畏論』から始まり、『空性七十論』、『六十頌如理論』、『般若灯論』、『入菩提行論』までの二諦説の展開が論じられている。前述の江島恵教による同論に対する研究が Dīpaṃkaraśrījñāna の翻訳によるBhavyaの『中観宝灯論』との直接的な関係を論じているのに対して、本稿は中観思想史における二諦説の変遷を論じたものとなっている²³。

また付論には、さらに『菩提道灯論』189-208 の偈頌部分とその注釈書の英訳も付されている。そこには Dīpaṃkaraśrījñāna による中観思想の分類が見られ、彼が中観思想の系譜をどのように理解していたかがわかる。

デイヴィッド・セイフォート・ルエッグの『インド哲学の中観派文献』

1981年に、『インド文献史 (*A History of Indian Literature*)』の第八巻として出版されたセイフォート・ルエッグの『インド哲学における中観派文献 (*The Literature of the Madhyamaka School of Philosophy in India*)』は、中観派文献をその思想的な展開を踏まえて詳細に論じた著書である。その「インド中観学派の最後の時代 (The last period of the Indian Madhyamaka school)」という章の中に、“Bodhibhadra, Dharmakīrti (Dharmapāla) and Dīpaṃkaraśrījñāna” という項目がある。Dīpaṃkaraśrījñāna に関しては、略伝に続き『菩提道灯論細疏』から「四大因による無自性論証²⁴」や中観学派の伝承に関するトピックスを紹介し、さらに『二諦分別論』を簡単に解説して、その他の小論に触れている。ここで注目すべき点は、中観派の思想史を論じる本書において彼の名称は Atiśa ではなく Dīpaṃkaraśrījñāna とされていることである。

リチャード・シェルバーンによる『菩提道灯論細疏』の英訳

1983年にロンドンで出版されたリチャード・シェルバーン (Richard Sherburne, Jr.)

²² Lindtner 1998: 244-247 には同テキストのデンマーク語訳がなされている。

²³ リントナーは、同じ頃に Dīpaṃkaraśrījñāna が翻訳したバヴィヤの『中観宝灯論』に対する論文をいくつか発表しており、本稿においてその関係が論じられていないのは、前述の江島恵教の論考とくらべると、残念なものである。

²⁴ 江島 1970.

による『菩提道灯論細疏』の英訳²⁵は、Dīpaṃkaraśrījñāna の主著に対する自注の最初の現代語訳として価値のあるものである。しかしながら、すでに指摘されているように、いくつかの問題点もある²⁶。すなわち、使用したテキストは十分に校訂されたものではないことや、引用されるテキストが英語訳の題名であるために経典名の把握し難いことや、その英訳語の索引に対応する言語が付されていないことなどである。それにもかかわらず、最初の翻訳作業として評価されるべきであり、同論を研究する際に、いくつかの有益な点も提供してくれる研究書でもある。

2000年には、前書をさらに完全にする形で『アティシャ全集 (*The Complete Works of Atiśa*)』を出版した。これは、『菩提道灯論細疏』の英訳に二十六の下部文献の英訳を加え、それらがチベット語訳テキストと対照されている。

ドブーン・トゥルクらによる『アティシャとチベット仏教』

1983年には、ドブーン・トゥルク (Doboom Tulku) とグレン・M・ミュリン (Glenn H. Mullin) により、ニューデリーのチベット・ハウスより『アティシャとチベット仏教 (*Atisha and Buddhism in Tibet*)』が出版される。わずか七十五頁の小冊子であるが、そこにはTsong kha pa の『ラムリム・チェンモ』に見られる Dīpaṃkaraśrījñāna の小伝に続いて、彼の『大乘道成就語句撰集』、『無垢宝書簡』、『入二諦論』のミュリンによる英訳、そして最後に第十四世ダライラマによる「戒・定・慧」に関する講義²⁷が収められている。

『大乘道成就語句撰集』に関しては、同論の要点を凝縮した『大乘道成就撰集』というテキストが存在するのだが、両者の関係に関しては全く論じられていない。一方の『無垢宝書簡』に関しては、『菩薩摩尼鬘論』との類似性が指摘されている²⁸。『入二諦論』に関しては、Bhāviveka と Candrakīrti の解釈の相違などに関しては何も論じられていない²⁹。翻訳に用いたテキストなどに関する記述はなく、詳細な注記も付されていないことから、学術的意図の下に出版されたものとは思われない。しかしながら、彼の下部文献をまとめて取り上げ、その翻訳を発表した点は評価できる。

ジークリンデ・ディーツによる『無垢宝書簡』³⁰の独訳

²⁵ Sherburne 1983. Cf. Eimer 1983.

²⁶ Eimer 1983b, Cabezón 1984.

²⁷ His Holiness The Dalai Lama, “The Three Higher Trainings.”

²⁸ Tulk 1983: 72-73.

²⁹ 年代的に先行する Lindtner 1981 に対する言及は皆無である。

³⁰ 同論はその後、K. A. Lahuli によるヒンディー語訳を伴って出版された。Cf. Lahuli 1987.

1984年に『アジア研究』の第八十四巻として出版されたジークリンデ・ディーツ (Siglinde Dietz) の『インド仏教の書簡の文献 (Die buddhistische Briefliteratur)』³¹は、六百頁近くに及ぶ大著であり、チベット大蔵経におさめられた十二の書簡のテキストに関する調査研究と、そのうち九つの校訂テキストとドイツ語訳がなされている。その中の一つとして、Dīpaṃkaraśrījñāna による『無垢宝書簡』が収められている。

はじめのテキストの概要を示す部分においては、「手紙の差出人と受取人」、「動機と目的」、「著述日時」、「内容と文法上の特徴」の四点よりテキスト分析が行われている。その宛先人はコロフォンと第一偈より、ニルヤパーラ王として知られ、両者の関係がチベットにおいて書かれた Dīpaṃkaraśrījñāna の伝記³²からも明らかであるとす。この伝記の記述から、著作時期を彼がチベットへ旅立つ1040年頃と推定している。著作の動機は明らかではないが、目的に関しては、第三十九偈をあげ、「王の輪廻の苦しみを終わらせるため」と指摘している。テキストの内容に関しては、アイマー³³の指摘を受け、同じ著者による『菩薩摩尼鬘論』との平行句の問題に触れるが、それ以上の疑問点を提示するには至っていない。テキスト全体を構成する区分はないものの、そのほとんどが動詞の命令形で終わっていることから、宛先人へ倫理的・宗教的在り方を要請するものではないかと指摘されている。

ロプサン・ノルブ・シャーストリによる『菩提道灯論』の翻訳

1984年にインドのサルナートにある「高等チベット学中央研究所 (Central Institute of Higher Tibetan Studies)」において出版されている「インド・チベット学叢書 (Bibliotheca Indo-Tibetica)」の第七巻としてロプサン・ノルブ・シャーストリ (Losang Norbu Shastri) の『菩提道灯論』³⁴が出版された。本書は、チベット語と英語による短い序論に続いて、チベット語訳、還元サンスクリット、英訳が各偈頌ごとに並べられ、最後にインデックスが付されている。この還元サンスクリットに関しては、アイマーによって批判されているように³⁵、意味があるものとは思えない。

モーリス・サレンのアティシヤの中観思想研究

1986年にパリで出版されたモーリス・サレン (Maurice Salen) による『チベット仏教

³¹ Dietz 1984: 65-78, 302-319. なお本論は Chattopadhyaya 1967: 520-524 において英訳が、Lindtner 1998: 249-251 にはデンマーク語訳がなされている。

³² Cf. Eimer 1979: [159]-[160].

³³ Eimer 1981: 325-326.

³⁴ Shastri 1984.

³⁵ Eimer 1986.

とは何か (*Quel Bouddhisme pour le Tibet?*)』は、百五十頁程のそれほど長くない研究書であり、前半においては、中観の意味、インド・チベットにおける中観思想の伝承、アティシャ伝、カーダム派などに関する概要が述べられ、その最後には「アティシャとプラーサンギカ学派」という項がある。これは *Thu'u bkwan Blo bzang chos kyi nyi ma* (1737-1802) による宗義書の記述に基づいているのだが、本書の著者の視点もここに立っていると思われる。

後半には彼の『入二諦論』と『中観説示』のチベット語訳テキストとフランス語訳が収められているが、前述のリントナーの研究には触れられていない。

なお本書においては、彼の名称の表記は *Atīśa* であり、その文献表にはアイマーの名称は見られない。

望月海慧による研究

筆者による *Dīpaṃkaraśrījñāna* の研究も、いくつか記しておく。それらは、チベット大蔵経のテンギュルの中観部に収められた彼の著作を対象とするものである。1988年に『菩提灯論』ならびにその注釈における「帰依」に関する部分に関する研究³⁶から始まり、チベットにおける同論の解説書の研究までにおよび、その成果の一部を『全訳アティシャ 菩提道灯論』としてまとめている³⁷。

1996年には、『中観優婆提舍開宝篋』の中心テーマである発菩提心の項目のドイツ語訳を発表している³⁸。

1995年には、多くの経典や論書からの引用からなるアンソロジーである『大経集』に対する研究が発表されている。そこでは、同論に引用されている経論をすべて採取し、それらの典拠の確認を試みている。その成果については、チベット語校訂テキストを出版し³⁹、関連研究⁴⁰も発表している

その他には、やはりテンギュルの中観部に収められた小部文献に対する研究も発表している。すなわち、『帰依説示』の和訳研究⁴¹、*Dīpaṃkaraśrījñāna*の『十不善業道説示』と *Aśvaghōṣa* に帰されるものとの同一性に対する研究⁴²、『業分別論』に対する和訳研究⁴³、『経義集説示』に対する研究⁴⁴、二つの『心髓撰集』に対する研究⁴⁵、『入菩薩初

³⁶ 望月 1988.

³⁷ 望月 1998a, 1999a, 2000a, 2001d, 2002b, 2002g, 2003a, 2004c, 2015a.

³⁸ 望月 1996a.

³⁹ 望月 2002a, 2004a.

⁴⁰ 望月 1995, 2001b, 2001e, 2001f, 2002c, 200d, 2006f, 2015d.

⁴¹ 望月 1990.

⁴² 望月 1996b.

⁴³ 望月 1996c.

学道説示』に対する研究⁴⁶、『中観説示』とその *Prajñāmokṣa による注釈書に対する和訳研究⁴⁷、二つの『大乘道成就撰集』に対する研究⁴⁸、Dīpaṃkaraśrijñāna と二人の師による『三昧資糧論』に対する研究⁴⁹、三種の讃歌に対する研究⁵⁰、四種の儀軌文献に対する研究⁵¹、『発心律儀儀軌次第』と先行する儀軌との比較研究⁵²、『一念説示』と彼の Nāgārjuna 観に関する研究⁵³を発表している。

経論に対する注釈書については、『般若心経』に対する注釈書の研究⁵⁴、Nāgārjuna の『経集』に対する注釈書の研究⁵⁵、Śāntideva の『入菩薩行論』に対する注釈書の校訂テキストと研究⁵⁶、『三蘊経』の業障清浄儀軌に対する研究⁵⁷、Maitreya の『現観莊嚴論』の概説書に対する校訂テキストと和訳研究⁵⁸、『十万頌般若経』の読誦用テキストの校訂と和訳研究⁵⁹を発表している。

密教文献としては、『金剛座金剛歌』とその自注に対する研究⁶⁰、四種のターラー成就法関連文献に対する研究⁶¹、三種の『秘密集会タントラ』の関連文献⁶²、『根本過犯集』に対する注釈書の研究⁶³を発表している。

チベットにおける『菩提道灯論』に対する注釈書の研究も行ない、これまで Blo bzang dpal ldan bstan 'dzin snyan grags (19C.)⁶⁴、パンチェン・ラマー世である Blo bzang chos kyi rgyal mtshan (1570-1662)⁶⁵、Co ne grags pa bshad grub (1675-1748)⁶⁶、パンチェン・ラマ六世である Thub bstan chos kyi nyi ma (1883-1937)⁶⁷、lCang skya Rol pa'i rdo rje

⁴⁴ 望月 1997.

⁴⁵ 望月 1998b.

⁴⁶ 望月 2000b.

⁴⁷ 望月 2002e, 2003b.

⁴⁸ 望月 2004d.

⁴⁹ 望月 2005d, 2006a, 2006b.

⁵⁰ 望月 2006c, 2007a, 2011d.

⁵¹ 望月 2007b, 2014c.

⁵² 望月 2014b.

⁵³ 望月 2015b.

⁵⁴ 望月 1991.

⁵⁵ 望月 1991b.

⁵⁶ 望月 1998c, 1999b.

⁵⁷ 望月 1999c.

⁵⁸ 望月 2000c, 2001c.

⁵⁹ 望月 2001g, 2002a.

⁶⁰ 望月 2008a.

⁶¹ 望月 2011b.

⁶² 望月 2011c, 2012a.

⁶³ 望月 2013c.

⁶⁴ 望月 2002f.

⁶⁵ 望月 2003c.

⁶⁶ 望月 2005b.

⁶⁷ 望月 2004f.

(1717-1786)⁶⁸、dKon mchog rgyal mtshan⁶⁹による注釈書の和訳研究を發表している。

またチベット仏教に与えた彼の影響については、Bu ston Rin chen grub (1290-1364)⁷⁰、sGam po pa bSod nams rin chen⁷¹、Tsong kha pa Blo bzang grags pa (1357-1419)⁷²との関係についての研究が發表されている。この他にも、彼の大中観思想の関連で、チョナン派の Dol po pa Shes rab rgyal mtshan (1292-1361) と Tāranātha Kun dga' snying po に對する研究も行っている。

高等チベット学中央研究所によるテキスト研究

1992年に「高等チベット学中央研究所」の「インド・チベット文庫」の第二十四巻としてラメーシュ・チャンドラ・ネーギ(Ramesh Chandra Negi) による『アティシヤによる十一の著作 (Atīśaviracitā Ekādaśagranthaḥ)』が出版された⁷³。そのタイトルが示すように、Dīpaṃkaraśrījñāna による十一篇の小部文献のチベット語訳の校訂テキスト、サンスクリットへの還元、ヒンディー語の翻訳を中心として成り立っている。サンスクリットへの還元が有効なものとは思えないが、ヒンディー語の翻訳は現代のインド人を対象とする研究としては有効であろう。その前半部分において、まずチベット語による解説があり、テキスト末尾にはチベット大蔵經に収められている彼のテキストだけではなく、彼により翻訳された經論に関して詳細に分類している。チベット語訳テキストに関しては、諸版も対照しており、注記も丁寧になされている。

同じ研究は、1999年にロブサン・ドルジェ・ラプリン (Lobsang Dorjee Rabling) により『アーチャーリヤ・ディーパンカラシュリージュニャーナの五論書 (Five treatises of Ācārya Dīpaṃkaraśrījñāna)⁷⁴』として彼の五篇の小部文献のチベット語訳の校訂テキスト、サンスクリットへの還元、ヒンディー語への翻訳が發表されている。彼は、2001年に『聖三蘊經とその三種の注釈書 (Āryatriskandhakasūtram and its three Commentaries)⁷⁵』として、Nāgārjuna と Jitāri と Dīpaṃkaraśrījñāna による注釈書について、同様の研究書を發表している。

さらに2000年にはソナム・ラプテンが『アーチャーリヤ・ディーパンカラシュリージュニャーナの『二諦分別論』などの四論書 (Satyadvayāvātārādigranthacatuṣṭa: Four

⁶⁸ 望月 2008b, 2008d.

⁶⁹ 望月 2008c.

⁷⁰ 望月 2003d.

⁷¹ 望月 2004e.

⁷² 望月 2005c.

⁷³ Negi 1992.

⁷⁴ Lobsang 1999.

⁷⁵ Lobsang 2001.

Treatises – Entering into the Two Truths etc. of Ācārya Dīpaṃkaraśrījñāna)⁷⁶』が発表されている。

宮崎泉による『中観優婆提舍開宝篋』の研究

1993年に、宮崎泉により発表された「『中観優婆提舍開宝篋』について⁷⁷」は、同論に焦点をあてた最初の論文であり、大変に貴重な成果を残している。特に、「IV. 諸学派とその論師」と「V. ナーガールジュナについて」は、Dīpaṃkaraśrījñāna が仏教思想史をどのように捉えていたのかを知る重要な資料であり、全体の校訂テキストと和訳も発表されている⁷⁸。さらに、論理学に対する批判的態度⁷⁹や、BhavyaとCandrakīrtiに対する態度、Bhavyaの『中観宝灯論』との関係などを考察し、彼の中観思想について詳細に検討している⁸⁰。また、『発心律儀儀軌次第』に基づき、彼の菩薩戒受戒儀についての研究も発表している⁸¹。

ドナルド・ロペスによる『般若心経釈』の英訳

1988年にドナルド・ロペス (Donald S. Lopez, Jr.) は、インドにおいて著された『般若心経』に対する注釈書の研究である『般若心経の注釈 (*The Heart Sutra Explained*)』⁸²という研究書を出版する。本書は『般若心経』の原文に沿って、インドにおいて書かれた七つの注釈書を対比しながら解説を加えたものであり、後半においてチベット人である bsTan dar lHa ram pa (1758-1839) と Gung thang dKong mchog bstan pa'i sgron me (1762-1823) による注釈書を英訳したものである。従って本書においてすでに Dīpaṃkaraśrījñāna による注釈書もその他の注釈書と並べて翻訳されているのだが、経典自身の文章を中心にした立体的な構造であるが故に、その他の注釈書との解釈の相違がわかりやすくなっている。その中で、ロペスの解説によると、彼の注釈書は他のものと比べ最も年代が遅れてチベットにおいて著わされ、その構成は経典の部分と修行に関する五道に関する部分より、同注釈書は Vimalamitra と Dīpaṃkaraśrījñāna の注釈書に従っているとされている。

さらに、1996年に出版された『空性に関する推敲 (*Elaborations on Emptiness*)』⁸³は、

⁷⁶ Sonam 2000.

⁷⁷ 宮崎 1993.

⁷⁸ 宮崎 2007.

⁷⁹ 宮崎 2005.

⁸⁰ 宮崎 2009, 2012.

⁸¹ 宮崎 1999, 2003.

⁸² Lopez 1988.

⁸³ Lopez 1996.

これまで続けてきたチベット大蔵経に収められたインドで著された『般若心経』の注釈書に関する研究をまとめたものである。本書においては、Dīpaṃkaraśrījñāna による注釈書⁸⁴も含む七つの注釈書の英訳の間に『般若心経』に関する論考を折り込み、最終章はポスト・モダニズムの思想との関係にまで言及されている。その第二章において、Vimakamitra と Dīpaṃkaraśrījñāna の注釈書が英訳されている。この二世紀も離れた時代に表わされた二つのテキストを同じ章において訳した理由については、聴衆とその質の問題に関して十分に提起しており、また後者は明かに前者の復注であるとの判断からであるとする。

釈如石の『《菩提道燈》抉微』

1997年に台湾において中華仏学研究所論叢の第十二巻として出版された本書⁸⁵は、『菩提道燈論』と自注に対する中国語による翻訳である。先行するシュルバーンのものに比べると、書誌情報をともなう丁寧な注記も付されており、自注に対する最初の本格的な翻訳研究である。巻末には、彼の小部文献から『入二諦論』と『中観説示』と『一念説示』と二つの『心髄撰集』に対する中国語訳が付されている。序論において、論書の特徴の解説や、チベット仏教への影響などがまとめられているが、簡単なものとなっており、詳細な議論はなされていない。また、ここで選ばれた小部文献からも、中観論者としての見地から彼の思想を捉えている。

ソナム・リンチェンの『菩提道燈論』の注釈

1997年にルース・ソナム (Ruth Sonam) により出版された『アティシャの菩提道燈論 (Atisha's Lamp for the Path to Enlightenment)』は、チベットのセラ寺でゲシェとなり、現在はダラムサーラでチベット仏教を教えているゲシェ・ソナム・リンチェンによる『菩提道燈論』に対する解説を英語に訳し、チベット文字によるテキストを付したものである。その末尾にはチベットの注釈書としては Dīpaṃkaraśrījñāna の自注と dKon mchog rgyal mtshan (1764-1853)⁸⁶と Pan chen Thub bstan chos kyi nyi ma (1883-1937)⁸⁷のものをあげるが、本書においてそれらがどのように活用されているのかは、不明である。

ラームプラサッド・ミシュラによる『菩提道燈論』研究

1998年にラームプラサッド・ミシュラ (Ramprasad Mishra) により出版された『ディ

⁸⁴ 望月 1991, 1992a, 1993: 61-65..

⁸⁵ Shih Ru-shi 1997.

⁸⁶ *Byang chub lam gyi sgron me'i 'grel pa phul byung dgyes pa'i mchod sprin.*

⁸⁷ *Byang chub lam gyi sgron mai rnam bshad mdor bsdus thar lam bgrod pa'i thebs skas.*

ーパンカラ・シュリージュニャーナの菩提道灯論 (*Bodhipathapradīpa of Dīpaṃkara Śrījñāna*)』は、「序論: 仏教と『菩提道灯論』」、「『菩提道灯論』の著者 Dīpaṃkara Śrījñāna」、「『菩提道灯論』のサンスクリット・テキスト」、「『菩提道灯論』の英訳」、「『菩提道灯論』の思想」、の全五章からなる著書である。サンスクリットはチベット語から還元したもので、すでにアイマーが指摘しているよう、あまり意味のある作業ではない。また、本論となる最終章では『菩提道灯論』の菩薩行の思想背景として『八千頌般若経』や『法華経』などの大乘経典にも言及している。これらがどの程度の精密性をもつのかは検討の余地があるが、方法論の視点としては有効である。

長島潤道の Dīpaṃkaraśrījñāna 帰謬派説

長島潤道は、その論文「後期中観派における自立論証派と帰謬派の区別：アティシヤとバヴィヤ (The Distinction between svāntrika and prāsaṅgika in late Madhyamaka: Atiśa and Bhavya as prāsaṅgikas)⁸⁸」において、チベット仏教の宗義書に見られる中観思想の分類を実際のインド仏教文献に基づいて考察したものである。ここでは、Dīpaṃkaraśrījñāna の『入二諦論』と『中観説示開宝篋』、ならびに彼がチベット語に翻訳した Bhavya の『中観宝灯論』を取り上げ、彼の思想的立場を考察している。ただし、限定した著書のみから彼の思想的立場は決定できず、また彼が自立論証派と帰謬派というような考え方がインドにおいて成立していたのかも検討の余地がある。

ジェームス・アップルによる中観文献の研究

中国の百慈蔵文戸籍研究室によるカダム派全書⁸⁹の出版による新たな資料の公開により、Dīpaṃkaraśrījñāna の研究も著しい発展をとげた。中でも、ジェームス・アップル (James B. Apple) は、『中観説示開宝篋』、『入二諦論』、『中観説示』に対する英訳研究を発表している⁹⁰。特に、後者の二論については新出のカダム派文献にある注釈書の英訳もとれない、Dīpaṃkaraśrījñāna に新たな方法論を提示している。

静春樹の『ガナチャクラと金剛乗』

本書⁹¹は、インド、チベットにおける聚輪儀軌文献の和訳研究を主体とするものであるが、その第一部に Dīpaṃkaraśrījñāna に関する既出の論文、「アティシヤと秘密・般

⁸⁸ 長島 2004, 2007.

⁸⁹ dPal brtsegs bod yig dpe rnying zhib 'jug khang, 2006b, 2007, 2009.

⁹⁰ Apple 2010, 2013, 2014.

⁹¹ 静 2015a.

若智灌頂の禁止の問題⁹²と「アティシャと金剛の行⁹³」を収録している。前者は、『菩提道灯論』の 257-260 に説かれる「秘密と智慧の灌頂を梵行者は受けるべきではない」に関して、彼に先行する Vāgīśvarakīrti と Abhayākara Gupta の見解と比較した上で、その後のチベットに与えた影響を論じたものである。後者は、Dīpaṃkaraśrījñāna の伝記に基づいて、彼の金剛乗阿闍梨としての側面を論じたものであり、また彼をとりまく密教行者との関係を考察した研究もある⁹⁴。

カダム派文献の研究

チベットでは、Dīpaṃkaraśrījñāna の死後に弟子たちによりカダム派が形成されていくのだが、その伝統を継ぐ文献についても研究がなされてきた。『カダム典籍 (bKa' gdams Glegs bam)』などのこれらの文献については、早くからローケーシュ・チャンドラ (Lokesh Chandra) や、ケルサン・ルンドゥブ (Kalsang Lhundup) により出版され⁹⁵、トゥプテン・ジンパ (Thupten Jinpa) による英訳も公表されている⁹⁶。特に、前述の百慈蔵文戸籍研究室の『カダム派全書』については、加納和雄が目録を作成し⁹⁷、以後のカダム派全書の研究を容易にした。また、井内真帆⁹⁸や西沢史仁⁹⁹は、カダム派文献やチベットの宗義書などから、カダム派寺院の歴史研究している。これらの、ポスト Dīpaṃkaraśrījñāna の文献資料も彼の思想解明の重要な手掛かりになるものである。

その他の研究

その他の研究として、Dīpaṃkaraśrījñāna を主体的に取り上げたものばかりでなく、その周辺を含めた研究に関して報告しておく。

矢崎正見¹⁰⁰の『ラダックにおけるチベット仏教の展開』¹⁰¹はラダック地方における仏教の受容を歴史的見地から研究した論文をまとめたものであるが、その中の一節に「アティシャの入蔵とガリの貢献」¹⁰²という論考がある。その内容はチベットの歴史書に述べられた彼の入蔵に関する部分の和訳を並記するのみであるが、付論として「アティシ

⁹² 静 2012.

⁹³ 静 2013.

⁹⁴ 静 2015b, 2015c.

⁹⁵ Chandra 1983, Kalsang 1973-4.

⁹⁶ Thubten 2008.

⁹⁷ 加納 2007, 2009.

⁹⁸ 井内 200, 2004, 210a, 2010b, 井内、吉水 2011.

⁹⁹ 西沢 2011, 2012.

¹⁰⁰ 矢崎 1999 においては、『菩提道灯論』のチベット語テキストとその語彙を掲載するが、チベット語文法の初学者のための練習用テキストである。

¹⁰¹ 矢崎 1983.

¹⁰² 矢崎 1987.

「チベットにおける戒律の伝統について」は、『菩提道灯論』に基づいて、彼の戒律観に関して論じたものである。

遠藤祐純の「Atiśa その世界」¹⁰⁴は、その副題「戒律を中心として」とあるように、彼の戒律に関する見解への考察を詳細に論じたものである。まずその伝記資料から彼の生涯を簡略にまとめている。続いて『菩提道灯論』の概要を述べた後に、『菩提道灯論細疏』を考察し、その戒律に関する見解は『瑜伽師地論』の「菩薩地戒品」に基づいていることを指摘している。さらに度々引用される彼の師の Bodhibhadra の『菩薩律儀二十細疏』との比較を行い、彼による戒律の受容が Asaṅga、Bodhibhadra と流れてきたことを明かにしている。また彼の密教文献をも調査し、彼が小乗には別解脱律儀、大乘には菩薩律儀、密教には真言律儀の存在価値を認め、最終的には密教が勝れているとすることを指摘している。

磯田熙文の「pūjā について」¹⁰⁵は、「供養」という儀礼に関して大乘仏教の論書である『菩薩地』、『大乘莊嚴經論』の記述をまとめた後に、Dīpaṃkaraśrījñāna の『菩提道灯論細疏』の「七種供養」に関する部分を和訳、考察したものである。和訳部分は、文献上の典拠も詳細に調べられており、詳細な研究である。本論の供養に関する記述は、その本頃の記述からも明らかのように、『普賢行願讚』に依拠しているのだが、Dīpaṃkaraśrījñāna は「ある師の説」として、三つの解釈を引用した後に、いずれのものも矛盾はないとし、次いで自説として、供養を「愛染供養」と「正行供養」とに分類し、それぞれに七種供養として、『普賢行願讚』の文章を対応させている。氏は、この正行供養に関して、「無着の著作中になお比定することはできないが、瑜伽行派の説として意識して引用している」とする。確かに、前記の瑜伽行派の文献との関連も考えられるが、同種の記述は Śāntideva の『菩提行論』や、彼の師ともされる Jitāri の著作などにも見られる記述でもあるので、そのような断定は検討を要するものである。

川越英真は、Dīpaṃkaraśrījñāna に対する直接の研究はないが、周辺の研究から彼に

¹⁰³ 氏は、これに先立つ「アティシャの入蔵と其の功罪」（矢崎 1954）という論考において、彼の密教を排除しない態度が後のチベット仏教の密教化に拍車をかけたとする。

¹⁰⁴ 遠藤 1981。なお同氏には十不善業道に関する論考があり、アシュヴァゴーシャの『十不善業道説示』を Dīpaṃkaraśrījñāna のよる著作と同一であると触れているが、それ以上の考察はなされていない。同論に関しては、望月 1996b 参照。

¹⁰⁵ 磯田 1989。望月 1988 も参照。

対する重要な資料を提示している。特に、彼と一緒に仏典のチベット語訳を行った Rin chen bzang po¹⁰⁶、Tshul khriims rgyal ba¹⁰⁷、Blo ldan shes rab¹⁰⁸ について、Dīpaṃkaraśrījñānaの伝記資料などを用いて考察している。また、「Dīpaṃkara-rakṣita について¹⁰⁹」では、Dīpaṃkaraśrījñāna の別名とされていた Dīpaṃkararakṣita を Bharo であるということを論証している。

ビレーシュワル・プラサド・シンハ (Bireshwar Prasad Singh) による「アティーシャのチベット歴訪に関して (On Atisa's Itinerary in Tibet)」¹¹⁰は、わずか五ページの小論であり、著者独自の見解が見られるほどの論稿ではない。基本的にはローケーシュ・チャンドラにより出版された『パクサムジョンサン (dPag bsam ljon bzang)』の中に見られる年表から、Dīpaṃkaraśrījñāna に関するものを抜き出して並べただけのものである。従ってここでその評論をすべき程のものでもないが、彼に関する年表が一覧できる。多少の注によりその他の年代記への言及もあることも有益であろうが、そこまでするならばチベットにおける歴史書すべてを利用して彼の行動に関する年表を作製すべきであろう。

最後に、2013年にシャシバラ (Shashibara) によりインドのインディラ・ガンジー国立芸術センターにおいて「アティーシャ・ディーパンカラ・ジュニャーナシュリーと文化的ルネッサンス (Atīśa Dīpaṃkara Jñānaśrī and Cultural Reneissane)」という国際学会が開催されたことを記しておく。三日にわたり開催された学会には、インド国内から十七名、国外から二十名の研究者が参加した。筆写の基調講演で始まった学会では、三十を越える研究発表が行われ、思想的研究だけでなく、歴史学、考古学、芸術学、社会学などのさまざまな見地からの研究成果が発表された。また、学会と同時に同じタイトルの展示会も行われ、詳細な解説が付された目録も出版された¹¹¹。

¹⁰⁶ 川越 1981, 1982, 2002.

¹⁰⁷ 川越 1984.

¹⁰⁸ 川越 2000, 2001.

¹⁰⁹ 川越 1993.

¹¹⁰ Singh 1977.

¹¹¹ Shashibara 2013.

第2編 Dīpaṃkaraśrījñāna の思想背景

第1章 Dīpaṃkaraśrījñāna の Nāgārjuna 観

はじめに

Dīpaṃkaraśrījñāna は、中観思想の論者とされるように、Nāgārjuna の著作を多く引用している。『菩提道灯論細疏』では、無自性論証の解説において彼の『中論 (Mūlamadhyamakakārikā)』を引用するだけでなく、根本偈においても彼の論書を見るべきことが述べられている。ここでも Nāgārjuna は、中観思想の開祖としての存在である。しかしながら、Dīpaṃkaraśrījñāna の時代の Nāgārjuna 観というものは、中観の論者としての存在だけではなく、密教論者としての立場も認められ、彼に帰される多くの密教文献も伝えられている。Dīpaṃkaraśrījñāna もこのことを認識しており、『中観説示開宝篋』では彼の密教文献への言及もみられる。それ故に、中観思想の枠組みだけで両者の関係を捉えると、偏向的な見方になってしまう。本章では、彼の著作における Nāgārjuna への言及を確認して、その Nāgārjuna 観を再確認してみる。

Nāgārjuna の名前への言及

彼の顕教文献における Nāgārjuna への言及を Dīpaṃkaraśrījñāna の著書別に数えると、次の通りになる¹。

『菩提道灯論細疏』

246b4 (*Paramārthastava* 9cd-10), 249b3, 250b1, 250b3, 252b4, 253a1 (*Bodhicarāvatāra* 5.106²), 259a2 (*Nirupamastava* 21), 260a2, 270b4 (*Saptāṅga-vidhigāthāviṃśkā* 21³), 274a2 (*Ratnāvalī*), 274a5 (典拠不明), 279b4 (MMK), 280a5, 280a6, 281a2, 281b2 (*Bodhicittavivaraṇa*), 281b5 (*Bodhicittavivaraṇa*), 282a1 (*Bodhicittavivaraṇa*), 282a2, 282b6, 283a3, 283a6, 284b3, 284b4, 284b, 284b6, 284b7, 285a1, 285a5 (典拠不明), 285a5-6 (*Bodhicittavivaraṇa*), 291a7, 291b2.

『中観説示開宝篋』

96b1, 96b3, 96b6 (*Piṇḍīkṛtasādhana* 3), 96b7 (*Bodhicittavivaraṇa* 75), 97b4 (*Bodhicittavivaraṇa*⁴), 97b5 (*Bodhicittavivaraṇa* 73), 98a5 (*Bodhicittavivaraṇa* 43), 100b6 (*Bodhicittavivaraṇa* 74-75), 101b5 (*Ratnāvalī*), 102b2, 106b2; 107a2, 107b7,

¹ 数字は、デルゲ版における言及箇所である。括弧内は、言及される文献を示している。

² これは、ここに引用される Śāntideva の *Bodhicarāvatāra* の偈の中に Nāgārjuna が言及されているもので、間接的な言及となる。

³ Tib. P. No. 5428, G. 150b2 (= *Ratnāvalī* 5.85).

⁴ この引用は、偈ではなく散文部分である。Lindtner 1982: 184.

108b6, 109a4, 111a3, 111b2 (*Niraupamyastava* 9, *Kudṛṣṭinirghātana* 3), 112a7 (*Ratnāvalī*), 112b2, 112b7, 114b6 (*Mañjuśrīmūlakalpa*⁵), 115a5, 115b2.

『入二諦論』

72b4-5, 73a5.

『一念説示』

94b4, 95a5 (*Bodhicittavivarāṇa* 43), 95a6 (*Kudṛṣṭinirghātana* 3).

『般若波羅蜜撰義灯論』

930⁶.

『経集撰義』

338b7.

これらの言及数をまとめると六十五回となる。この数は、インドの諸論師への言及数としては最も多いものであるが⁷、大部である『菩提道灯論細疏』の三十五回と『中観説示開宝篋』の二十三回がほとんどで、その他は、『一念説示』の三回、『入二諦論』の二回、『般若波羅蜜撰義灯論』と『経集撰義』との各一回しかない。『入二諦論』は、題名が示すとおり、二諦説を解説した短い論書であり、その他の中観の論師たちも言及されている。また、最後のものは Nāgārjuna に帰される『経集 (*Sūtrasamuccaya*)』の概説書でもある。彼の著作の中で、Nāgārjuna の名前が言及されるのはこれらの六論書だけであり、そのほとんどが、中観に関する論書ということになる。その著作数のわりに、彼の名前の言及が見られる著作はそれほど多くないことがわかる。ただし、著作への言及はこれに含まれていないので、それを含めると、もう少し印象は変わる。

Nāgārjuna の著作への言及

続いて、同じく *Dīpaṃkaraśrījñāna* の顕教文献における Nāgārjuna の著作の引用とそのタイトルへの言及をあげてみると次のようになる⁸。

⁵ Nāgārjuna の授記の典拠として、*Mañjuśrīmūlakalpa* を引用したものである。

⁶ この数字のみ、パーダの数である。

⁷ その他の論師のうち、多いものをあげると、次の通りである。

Śāntideva 40, Asaṅga 33, Haribhadra 20, Āryadeva 19, Maitreya 19, Candrakīrti 15, Bodhibhadra 14, Āryavimuktisena 14, Dharmakīrti (gSer gling pa) 12, Ratnākaraśānti 12, Vasubandhu 10, Bhavya (Bhāviveka) 10

このうち、*Abhisamayālaṃkāra* の注釈者たちの言及のほとんどは *Prajñāpāramitāpiṇḍārthapradīpa* におけるものである。Bodhibhadra, Dharmakīrti (gSer gling pa), Ratnākaraśānti は *Dīpaṃkaraśrījñāna* が自らの師として言及する。Śāntideva については、*Bodhi(sattva)caryāvatāra* や *Śikṣāsamuccaya* への言及や、前者への注釈の著述などによる。その一方で、Asaṅga, Maitreya への言及数が多いことも注目すべきである。

⁸ 略号は次のとおり。ESU = *Ekasmṛtyupadeśa*, KV = *Karmavibhaṅga*, KVVb = *Karmāvaraṇa-viśodhanavidhibhāṣya*, CSVK = *Cittotpādasamvaravidhikrama*, DDG = *Dharmadhātudarśanaḡīti*, DKP =

Akutobhayā: BMDP 280b3, 280b7
Akṣaraśataka: BMDP 280b3-4; RKU 113b1
Acintyastava: RKU 110a7, 113b2
Arapacanasādhana: RKU 113b4
Aṣṭāpadīkṛtadhūpayoga: RKU 113a6
Kalyānakāmadhenuvivarṇa: RKU 113b5
Kudrṣṭinirghātanā: RKU 106a2-3, 111b3-4, 111b5-6
Khasarpasādhana: RKU 113b4
Guhyasamājamaṇḍalavidhi: RKU 113b3
Guhyasamājahāyogotpattikramasādhanasūtramelāpaka: RKU 113b4
Catuḥpīṭhatantratīkā: RKU 113b4
Cittavajrastava: RKU 113b2
Jīvasūtra: RKU 113a7
Trisamayavyūhavidhi: RKU 113b5
Dharmadhātustava: RKU 113b2; DDG 1-4, 14-84, 171-174
Dhūpayogaratnamālā: RKU 113a6
Nāmasaṃgītībhāṣya: RKU 113b4
Niruaupamyastava: BMDP 259a2; RKU 111b3-4, 111b5, 113b2
Pañcakrama: RKU 111a5, 113b4
Paramārthastava: BMDP 246b4-5; RKU 110b7, 110b1, 113b2
Piṇḍīkṛtasādhana: RKU 113b5
Prañidhānaratnarāja: BMDP 286a3; RKU 102b2
Prajñāśataka: RKU 113a5
Pratītyasamutpādacakra: RKU 113a5
Pratītyasamutpādaḥṛdayavyākhyāna: RKU 113b3; DDG 374-348
Bodhicittavivaraṇa: BMDP 281b3-4, 281b5-6, 281b6-7, 282a1, 285a5-6, 285a6; ESU
 95a5; RKU 96b7, 97b4, 97b5, 98a5, 98b2, 100b6-7, 111a4-5, 113b1
Bodhicittopādavidhi: CSVK 245a7-b2, 245b4-246a1; RKU 113a7

Dasākuśalakarmapathadeśanā, PPP = *Prajñāpāramitāpiṇḍārthapradīpa*, PHV = **Prajñāḥṛdayavyākhyā*,
 BĀMA = *Bodhisattvādīkarmikamārgāvatāradeśanā*, BCABh = *Bodhisattvacaryāvatārabhāṣya*, BPP =
Bodhipathapradīpa, BMDP = *Bodhimārgadīpapañjikā*, MPSV = *Mahāyānapathasādhanavarnasaṃgraha*, RKU
 = *Madhyamakopadeśaratnakaraṇḍodghāta*, ŚD = *Śaraṇagamanadeśanā*, SA = *Satyadvayāvatāra*, SASU =
Sūtrārthasamuccayopadeśa, SMS = *Saṃsāramanoniryāñīkārasaṃgīti*, SSA = *Sūtrasamuccayasamcayārtha*.

Bhavasamkrānti: RKU 113b1
Bhāvanākrama: RKU 113b1
Mahāyānaviṃśaka: BMDP 280b3; RKU 113b1
Mūlamadhyamakakārikā: BPP 206; BMDP 279b4-5, 280a2, 280b3, 280b6; RKU 113a5; SA 72a3-4, 73a1; DDG 112-115, 147-150, 151-154, 155-158
Yukitiśaṣṭikā: BPP 205; BMDP 280a1, 280b3; RKU 113b1; DDG 129-134, 139-142
Yogaśataka: RKU 113a6
Ratnāvalī: BMDP 274a2, 280b3; RKU 101b5-6, 112a5-7, 112b1, 113a6; DDG 163-166, 590-593
Lokātītastava: RKU 110a4-95, 113b2
Vāgīśvarasādhana: RKU 113b5
Viśrahavyāvartanī: BMDP 280b3; RKU 113b1
Vaidalyaprakaraṇa: BMDP 279a5; RKU 113b1
Śālistambakasūtraṭīkā: BMDP 280b4; RKU 113b2
Śūnyatāsaptati: BPP 205; BMDP 280a1, 280b3; RKU 113b1
Siddhaikavīrasādhana: RKU 113b5
Suhr̥llekha: RKU 113a6
Sūtrasamuccaya: BMDP 253a1, 270b7, 278b4; RKU 113a7
Cho ga nyi shu pa: RKU 113b3
gTor ma sum cu pa: RKU 113b5
brTag pa bcu gnyis pa: RKU 113a5
bDud rtsi'i snying thigs: RKU 113a6-7
Byang chub sems pa'i spyod pa gsal ba: RKU 113a7
Sbyor ba sum cu rtsa gnyis pa dang nyi shu pa: RKU 113a6
Tshig sbyin gzhon nu: RKU 113b5
Yi ge drug pa: RKU 113b4
Sangs rgyas mnyam sbyor gyi rdzogs pa'i rim pa'i man ngag chen po: RKU 113b5-6

五十二の著作名を確認できるが、その著作の存在を確認できていないものや、『中論』の著者と同一人物ではない者による著作も含まれている。少なくとも、中観論書だけでなく、密教文献を含む多様な Nāgārjuna 像が浮かび上がっている。

このリストから引用と言及数が最も多いものは、前述の『菩提心積 (Bodhicittavivarāṇa)』の十五度であり、引用される偈の数の十一偈は、テキスト全体 112

偈の一割にあたる。これは彼の大作である『菩提道灯論細疏』と『中観説示開宝篋』の前半部分で菩提心が詳しく論じられているためであるが、その説明に紙数を割いていることは、菩提心が彼の思想の主要テーマの一つであり、その論拠として Nāgārjuna の『菩提心釈』に依拠していたことがわかる⁹。

続いて多いのが主著とされる『中論』の十二度で、引用される偈の数は七偈となる。引用は、『菩提道灯論細疏』に一度、『入二諦論』に二度、『法界見歌 (Dharmadhātudharśanagīti)』の四度である。『入二諦論』は、二諦説を論じる文献であり、Candrakīrti の『入中論 (Madhyamakāvātāra)』と並んで引用される。『法界見歌』は、Nāgārjuna の『法界讃歌 (Dharmadhātustava)』を多用しており、全体で二十偈を引用している。

その次は、『宝鬘論 (Ratnāvalī)』の八度で、引用される偈の数は八偈である。一般的な大乘の教義が説かれている偈頌で書かれたテキストなので、引用し易かったのかも知れない。

『菩提道灯論』205-208 において無自性を説く論書として『中論』と並記される『六十頌如理論 (Yukitiśaṣṭikā)』と『空性七十論 (Śūnyatāsaptati)』については、前者は六度 (二偈の引用)、後者は4度言及されるだけである。

Ratnakaraṇḍoghāṭa における Nāgārjuna の著作一覧

上記の言及のほとんどは『中観説示開宝篋』においての Nāgārjuna の著作をまとめて言及する箇所一覧¹⁰に見られるものであるが、そこに列挙されたテキストを言及されるべき対象ごとに分類すると次の通りである¹¹。

1. 普通の人: *rTen 'brel gyi rtsis dang mo'i rnam pa.*
2. 大臣: *Prajñāśataka, brTag pa bcu gnyis pa.*
3. 王: *Suhr̥llekha, Ratnāvalī.*
4. 福德の少ない者: *Dhūpayogaratnamālā, Aṣṭāpadikṛtadhūpayoga.*
5. 医者: *Yogaśataka, sByor ba sum cu rtsa gnyis pa, Nyi shu pa, bDud rtsi'i snying thigs, Jīvasūtra.*

⁹ 他に *Bodhicittopādaavidhi* が三度言及されるが、*Cittopādasamvaravidhikrama* に見られるように、発心の儀軌としてのものである。

¹⁰ 他にも *Bodhimārgadīpapañjikā* において根本偈 205-206 「*Śūnyatāsaptati* と *Mūlamadhyamakakārikā* などから」の「など」の語の解説箇所の Nāgārjuna のテキストとして *Akutobhayā, Vighrahavyāvartanī, Ratnāvalī, Mahāyānaviṃśaka, Akṣaraśataka, Śālistambakasūtraṭīkā* が列挙されるが、無自性を説く論書だけに言及したものである。

¹¹ 宮崎 1993, 2007: 110-113.

6. 大乘に入った者: *Bodhicittotpādaividhi*, *Byang chub sems dpa'i spyod pa gsal ba*, *Sūtrasamuccaya*.
7. それらの上: *Mūlamadhyamakaprajñā*, *Vigrahavyāvartanī*, *Śūnyatāsaptati*
8. その支分: *Yuktiśaṣṭikā*, *Mahāyānaviṃśaka*, *Bhavasamkrānti*, *Bhāvanākrama*, *Vaidalyaprakaraṇa*, *Akṣaraśataka*, *Bodhicittavivaraṇa*, *Dharmadhātustotra*, *Paramārthastava*, *rNam par mi rtog par bstod pa*, *Acintyastava*, *Lokātīstava*, *Cittavajrastava*, *Śālistambakasūtratīkā*, *Pratītyasamutpādahṛdayavyākhyāna*
9. マントラの器になった者: *Śrīguhyasamājamaṇḍalavidhi*, *Cho ga nyi shu pa*, *Piṇḍīkṛtasādhana*, *Sūtramelāpaka*, *Pañcakrama*. *Catuḥpīṭhatantraṭīkā*. *Nāma-saṃgīti-'grel*, *Kharsapanasādhana*, *Yi ge drug pa*, *Arapacanasādhana*, *Vāgīśvara-sādhana*, *Tshig sbyin gzhon nu sgrub thabs*. *Trisamayavyūhavidhi*, *Siddhaikavīra-sādhana*, *Kalyāyanakāmadenuvivarāṇa*, *gTor ma sum cu pa*, *Sangs rgyas mnyam sbyor*¹⁵ *gyi rdzogs pa'i rim pa'i man ngag chen po*.

ここでは普通の人から始まり、大臣・王・医者などの知識をもった人たちを経て、大乘の者、金剛乗の者たちに至っている。大乘の論書が多くなっているものの「中観」と限定するものではなく、さまざまな内容の著作があげられている。少なくとも、彼は、これらの著書を Nāgārjuna によるものと認識していたわけなので、彼の Nāgārjuna 観は『中論』の無自性論者としてだけのものではないことがわかる。

まとめ

以上をまとめると、Nāgārjuna と Dīpaṃkaraśrījñāna の関係については、次の通りである。

1. Dīpaṃkaraśrījñāna が最も多く言及、引用する Nāgārjuna のテキストは『菩提心積』である。
2. 『中論』の引用は次いで多いものの、その他の中観論書はそれほど言及されない。
3. Dīpaṃkaraśrījñāna の Nāgārjuna 観は、中観派の開祖である空性論者としてのものだけでなく、それを含めた大乘仏教の祖としてのものであり、それは金剛乗の著者にも及ぶものである。

第2章 Śāntideva への依拠

はじめに

Śāntideva は、インドの中観論者としてチベット仏教においてよく知られているだけでなく、現代の読者にもよく読まれている論者の一人である。これは、その主著である『入菩提行論 (*Bodhi(sattva)caryāvatāra*)』が大乗仏教の基本的教義を簡略にまとめているからであろうが、他方において、インド仏教思想史における彼の位置づけについては、それほど確定的なものはない。その年代を確定する資料がそれほど残っていないだけでなく¹、『入菩提行論』がもつ成立年代の問題もある²。チベットの宗義書には、彼を帰謬派の論師とするものもあるが³、それも明確な根拠があるものとは思えず、Candrakīrti との思想的関係も調査する必要がある。

本稿では、この歴史的年代と思想的立場の二つの問題について、後代の Dīpaṅkaraśrījñāna⁴ が彼をどのように認識していたのかを考察する。最初に、彼に帰される Śāntideva の『入菩提行論』に対する注釈書を『入菩薩行論釈 (*Bodhisattvacaryāvatārabhāṣya*)』を取り上げ、彼が同論をどのように理解していたのかを明らかにする。続いて、彼の顕教文献における Śāntideva への言及を考察し、Dīpaṅkaraśrījñāna が Śāntideva をどのように理解していたのかを明らかにする。最後に、彼による経典のアンソロジーである『大経集 (*Mahāsūtrasamuccaya*)⁵』を Śāntideva によるアンソロジーの『集菩薩学論 (*Śikṣāsamuccaya*)⁶』と比較し、両者の関係を考察する。これらのことを通して、十一世紀のインドの論師の Śāntideva 観が明らかになる。

『入菩薩行論釈』

Śāntideva の主著として知られている『入菩提行論』であるが、チベット大蔵経のテ

¹ Clayton 2006: 32 によると、Śāntideva の年代は、Tāranātha: c.650, Krishnamacharya 1926: c.691-743, Pezzali 1968: c.685-763, Seyfort Ruegg 1981: c.700, 斎藤 1996: c.725-765 と推定されている。Śāntarakṣita は *Tattvasiddhi* において *Bodhi(sattva)caryāvatāra* を引用するので、年代判定の起点となるが、*Madhyāmakālaṅkāra* や *Kamalaśīla* の注釈などの中観論書で引用されない。斎藤 1994 も参照。

² Saito 2010: 22 によりその成立年代をまとめると、八世紀前半に九章本の *Bodhi(sattva)caryāvatāra* が著され、後半にそのモチーフに基づいて *Śikṣāsamuccaya* が著され、十世紀後半に十章本の *Bodhi(sattva)-caryāvatāra* が著された。

³ Cf. Mimaki 1982: 29-38.

⁴ 彼もチベットの宗義書では帰謬派に帰される場合があるが (Mimaki 1982: 30)、チベット仏教における Śāntideva の思想的位置による影響があるように思える。しかしながら彼自身にはそのような認識がないことから、彼の思想的立場を偏向して捉えているものであり (Cf. 望月 2007c)、同じことは、Śāntideva に対しても言える。

⁵ 望月 2001a, 2004a.

⁶ Bendall 1897-1902, 1922.

ンギュルの「雑部」には *Dīpaṃkaraśrījñāna* に帰される注釈書が収録されている⁷。ただし、その伝承には問題があるために⁸、その著者性にも問題があり、本論に見られる *Śāntideva* 観が *Dīpaṃkaraśrījñāna* によるものであると断定することは躊躇が必要である。またテキスト自体にも問題があり、その中程でテキストを一度結んだ後に、敬礼文とともに、再び始まっている。その前後で内容が異なるのならば、セクションの区切りと理解できるのだが、前半と後半の内容はほぼ同じものである。それ故に、異なる伝承で伝えられた二つのテキストが一つに合わされたような印象が与えられる。テキストの最初と最後に *Akṣayamati* と *Mañjuśrī* の問答に言及することも、前後を統一させるためであるようにも思える。このようなことから、本論は彼による真作ではない可能性もあるが、そのような場合でも著者を *Śāntideva* と結びつけようとする意図があるはずである。そのような背景も含めた上で、本論を考察する。

本論は『入菩提行論』に対する注釈書とされているものの、本偈からの引用はテキストの末尾に第九章からの六偈しかない⁹。その引用も、偈に対する解説のためではなく、自らの解釈の論拠を示すためのものである。すなわちこの注釈書は本偈に対する解説を目的とするものではなく、同論の概要を示すものである。その第一部は、同論の十章のタイトルを、想、意樂、誓願、鎧、入、忍、証得、資糧、結果、利他の十義により説明した後に、世間の十地として十章を解説し、出世間の十地として順解脱分と順決択分を解説し、『十地経 (*Daśabhūmikasūtra*)』の十地に十章を配置して説明したものである¹⁰。第二部では、世間道として順解脱分と順決択分を十章で説明し、出世間道として前述の十義に基づく十章を『十地経』の十地を引用しながら解説し、十山、大海とマニ宝の十喩などにより説明し、最後に仏の色身と法身により前半の八章と後半の二章に分類する。このように、本論においてはテキスト本文に対する説明は意図されておらず、著者独自の見解によりそのテキスト全体の構成を解析したものである。そこで依拠された経典が『十地経』であるが、*Candrakīrti* の『入中論』も同経にもとづいて著されており、*Dīpaṃkaraśrījñāna* もそのことを認識した上で、『入菩提行論』の構成を同経に基づいて解析した可能性がある。

⁷ Tib. *Byang chub sems dpa'i spyod pa la 'jug pa'i bshad pa*. P. No. 5873, Nyo 426b2-463a4; N. No. 3864, Nyo 399b2-435b3; G. No. 5873, Nyo 521a1-567a5. Cf. 望月 1999b, 2005a: 61-91.

⁸ 本論はテンギュルの「中観部」ではなく、「雑部」に収められており、またデルゲ版とチョネ版は欠けている。同論の注釈も書いた *Bu ston* の仏教史の目録などにもその情報はないことから、本論はその伝承に問題があったことがわかる。またその翻訳も、“*duḥkha*”や“*loka*”などの語にも音写語を用いるなど、同じ著者の他のテキストの翻訳とことなっている。

⁹ *Bodhi(sattva)caryāvatāra* 9. 1ab, 33ab, 35-38. 他の引用は、*Daśabhūmikasūtra* と *Maitreya* の *Abhisamayālaṃkāra* 8.33-34 である。

¹⁰ 十義による説明は、彼の師である *Dharmakīrti* (gSer gling pa) による二つの *Bodhi(sattva)caryāvatāra* に対する小論に基づいている。Cf. 斎藤 2003a, 斎藤 2003b.

その一方で、論拠として言及される文献は『瑜伽師地論 (Yogacārabhūmi)』、『阿毘達磨雜集論 (Abhidharmasamuccaya)』、『大乘莊嚴經論(Mahāyānasūtrāṅkāra)』、『現觀莊嚴論(Abhisamayāṅkārasāstra)』などの瑜伽行唯識派の文献であり、Śāntideva が属するとされる中観派の文献は引用されない。筆者は本論を菩薩の修行階梯を説く論書と理解しており、その論拠として瑜伽行派の文献にも依っていたことがわかる。もちろん、彼がこの両学派の差異をどのように認識していたのかはさらなる考察を要する。

『菩提道灯論細疏』

Dīpaṅkaraśrījñāna は初学者のための菩提行に関する多くの著作を著しており、そのチベット語訳がテンギェルの「中観部」に収められている。その主著としてチベットでよく読まれたものが『菩提道灯論¹¹』であり、同論には自注とされる『菩提道灯論細疏¹²』がある。それは彼の顕教文献の中でも大部のものであり、多くの経論が引用され、Śāntideva に対する言及も多く見られる。

その『菩提道灯論細疏』における最初の言及は、注釈書の帰敬偈において、瑜伽行唯識派の開祖である Maitreya と Asaṅga、直接の師である Dharmakīrti (gSer gling pa) と Bodhibhadra、さらに Mañjuḥṣa と並記され、敬礼対象とされている¹³。このことは、同注が、大乘經典の引用も含め、彼に依拠する部分が大きいことを示している。また Nāgārjuna などの中観論者の名称がここにはないことから、中観の立場として彼が言及されているわけではない。

本論では、『普賢行願讚 (Bhadracaryāpraṇidhāna)』の七種供養に言及する『菩提道灯論』29-30¹⁴に対する解説のうち、心で作られた財物の供養について、『入菩提行論』のタイトルが『宝雲經 (Ratnameghasūtra)』などの經典と並んで言及される¹⁵。さらに、無上の供養の論拠として、『集菩薩学論』と『入菩提行論』が引用される¹⁶。これらの引用は衆生を喜ばせることが如来を喜ばせることになり、それが無上の供養であるとするものであり、經典¹⁷を引用した後に、その仏説を補強するための引用したものである。

発菩提心の解説においては、その儀軌の典拠として『普賢行願讚』と『入菩提行論』

¹¹ Tib. *Byang chub lam gyi sgron ma*. D. No, 3947, Khi 238a6-241a4; P. No. 5343, Ki 274b1-277b6, No.5378, Gi 1-5b5. Cf. Eimer 1978.

¹² Tib. *Byang chub lam gyi sgron ma'i dka' 'grel*. D. No, 3948, Khi 241a4-293a4; P. No. 5344, Ki 277b6-339b2.

¹³ Tib. D. Khi 241a6. 望月 2015a: 39. ただし、帰敬偈であるために、著者によるものではない可能性もある。

¹⁴ *Bodhipathapradīpa* の対応箇所を、Eimer 1978 による偈の数え方で示しておく。

¹⁵ Tib. D. Khi 244a5. 望月 2015a: 47.

¹⁶ *Śikṣāsamuccaya*, Bendall ed., pp. 156-157, *Bodhi(sattva)caryāvatāra* 6.119cd. 望月 2015a: 50-51.

¹⁷ この *Sāgaramatiparipṛchāsūtra* と *Anupūrvasamudgatasūtra* からの文章は、*Śikṣāsamuccaya* にも引用されている。

が言及され、Śāntideva が Nāgārjuna や Asaṅga などのインドの先師らとともにあげられ¹⁸、菩提心自身、その儀軌、それを生じる在り方、学ぶ在り方により、彼らの意図するものは様々とされる。しかしながらこの三名については、誓願の菩提心を起こす儀軌に区別がなく、師である Bodhibadra と gSer gling pa とともに、著者自身も僅かな儀軌についてこの三名に従う、とされる¹⁹。この発菩提心に先行するものに、心の浄化と師への供養があり、前者には『普賢行願讚』によるものと『入菩提行論』によるものがあるとされる。それから Śāntideva の儀軌と Asaṅga の儀軌により四無量の修習を先行させ、無上の菩提心を起こすべきであるとされる²⁰。また、その菩提心は損なわれずに広がりとして『入菩提行論』第一章第十二偈が引用され²¹、二種の菩提心のうちの願心を述べる『菩提道灯論』47-48 が引用され、その利益を説いたものとして Śāntideva が言及される²²。また、菩提心を理解するための經典の読誦を述べる『菩提道灯論』51-54 について『集菩薩学論』²³と『入菩提行論』第五章第百四偈、第百六偈が引用され、師に聞くことについては、Asaṅga と Śāntideva に言及する²⁴。この菩提心を昼夜三度起こすことを説く『菩提道灯論』53-54 の意味についても、『集菩薩学論』²⁵が引用され、二種の菩提心のもう一つの入心を説く『菩提道灯論』75-78 の解説で、『集菩薩学論』と『入菩提行論』が引用される²⁶。このように『菩提道灯論』の菩提心については、Śāntideva による二種の菩提心に基いており、その注釈書においても彼の二つの論書が繰り返し言及されている。

続く比丘の律儀を説く『菩提道灯論』83-86 の解説で、菩薩蔵の律儀を保持する者は Nāgārjuna と Śāntideva から継承した言葉をもつ者とされ²⁷、清浄なる比丘は得難いとして『入菩提行論』第九章第四十五偈²⁸が引用される。さらに律儀を受ける儀軌を説く『菩提道灯論』89-90 について、Asaṅga 流と Śāntideva 流があるとし、『菩薩地』の「戒品」と後者の二書が言及される²⁹。この儀軌について、師がいない場合の儀軌は『集菩薩学

¹⁸ Tib. D. Khi 249b3. 望月 2015a: 59.

¹⁹ Tib. D. Khi 249b3. 望月 2015a: 62.

²⁰ Tib. D. Khi 250b2-6. 望月 2015a: 62. またこの後に引用される *Akṣayamatīnordesāsūtra* の引用についても、*Śikṣāsamuccaya* に引用されるものと一部重なっている。

²¹ Tib. D. Khi 252a3-4. 望月 2015a: 65.

²² Tib. D. Khi 252b4. 望月 2015a: 66.

²³ *Śikṣāsamuccaya*, Bendall ed., 41, 10-12, k. 6cd

²⁴ Tib. D. Khi 252b6-253a2. 望月 2015a: 66-67.

²⁵ *Śikṣāsamuccaya*. Bendall ed., 9, 7-8. Tib. D. 255b6. 望月 2015a: 72-73.

²⁶ *Śikṣāsamuccaya*, Bendall ed., 8, 15-16, 18-19, *Bodhi(sattva)caryāvatāra* 1.16. Tib. D. Khi 257b4-6. 望月 2015a: 77-78.

²⁷ Tib. D. Khi 260a2. 望月 2015a: 84.

²⁸ Tib. D. Khi 262a7-b1. 望月 2015a: 89.

²⁹ Tib. D. Khi 265a5-7. 望月 2015a: 95.

論』に説かれているとし³⁰、二書が引用される³¹。律儀を捨てる原因としては『集菩薩学論』に説かれる十四の損害が言及され³²、その過失の懺悔の方法として同論が引用される³³。また、この戒の功德を説く『菩提道灯論』133-136 についても、二書が引用され³⁴、この Asaṅga 流と Śāntideva 流の律儀に制御される者は菩提の資糧を完成する、とされる³⁵。このような律儀を備えた初学者は、廻向を退けることなく³⁶、經典の意味をまとめたものを見るべきである、として二書が言及され³⁷、『入菩提行論』第五章九十八偈の引用で結ばれている³⁸。ここでは大乘の儀軌としての Asaṅga 流と Śāntideva 流が言及されており、前者については彼の師である Bodhibhadra による『菩薩律儀二十論細疏 (*Bodhisattvasaṃvaraviṃśakapañjikā*)』が言及されるものの、後者の二書に対する言及も多く、經典の引用も『集菩薩学論』からの孫引きと思われるものも多く見ることができる。

さらに、三昧の解説において、戒に依って三昧が成立する論拠として『集菩薩学論³⁹』と『入菩提行論』第四章第四十二偈⁴⁰が引用され、この三昧により起こされる神通を説く『菩提道灯論』141-144 について、Bodhibhadra の『三昧資糧論 (*Samādhisambhāraparivarta*)』が引用された後、『入菩提行論』第八章第二十二偈が引用される⁴¹。この引用に続き、『発志楽経 (*Adhyāśayasamcodanasūtra*)』からの引用が続くが、これらの引用は『集菩薩学論』にも引用される句であり、同論からの孫引きである可能性もある。さらに神通を成立させるための止の修習を説く『菩提道灯論』165-166 の解説の最後に『集菩薩学論』の第十八章のタイトルが言及される⁴²。このヨーガの止についても師である Bodhibhadra に依っていることが確認できるが、ここでも Śāntideva の二書にも依拠していると言える。

止に続く観の解説において、方便と智慧の関係を説く『菩提道灯論』181-184 において、関連する經典の意味をまとめたものとして『経集』と『菩薩地』と並んで Śāntideva

³⁰ Tib. D. Khi 265b2-3. 望月 2015a: 96.

³¹ *Śikṣāsamuccaya*, kk. 3-4, Bendall ed., 12, 2-5, *Bodhi(sattva)caryāvatāra* 5.100ab. Tib. D. Khi 265b5-266a3. 望月 2015a: 96-98.

³² Tib. D. Khi 266a5. 望月 2015a: 98.

³³ *Śikṣāsamuccaya*, 19cd. Tib. D. Khi 266b1-3. 望月 2015a: 99.

³⁴ *Śikṣāsamuccaya*, Bendall ed., 17-18, *Bodhi(sattva)caryāvatāra* 3.26c-27. Tib. D. Khi 266b7-267a4. 望月 2015a: 99-100.

³⁵ Tib. D. Khi 268b1. 望月 2015a: 103.

³⁶ Tib. D. Khi 270b4. 望月 2015a: 106.

³⁷ Tib. D. Khi 270b7. 望月 2015a: 108.

³⁸ Tib. D. Khi 271b1. 望月 2015a: 109-110.

³⁹ *Śikṣāsamuccaya*, Bendall ed., 121, 3-5, 10. Tib. D. Khi 272a5-b1. 望月 2015a: 111-112.

⁴⁰ Tib. D. Khi 272a5-b1. 望月 2015a: 113.

⁴¹ Tib. D. Khi 274a1. 望月 2015a: 116.

⁴² Tib. D. Khi 276b2. 望月 2015a: 122.

の二書が言及される⁴³。この観の内容となる智慧による無自性を論証する四大因の四支生滅を説く『菩提道灯論』193-196の解説において『入菩提行論』第九章第百四十六偈から第百五十偈が引用され⁴⁴、無自性を説く『菩提道灯論』205-208の解説において無自性論者として Śāntideva がその他の論者と並んで列挙される⁴⁵。この智慧のまとめとして、無分別を解説する『菩提道灯論』221-224においても、彼の名称が言及され⁴⁶、他の中観論者とともに列挙される⁴⁷。さらにまた、この般若波羅蜜を証得した聖者として、同じように中観論者とともに列挙され⁴⁸、無分別の修習を説く『菩提道灯論』233-236について『入菩提行論』第九章第三十五偈、第三十三偈が引用される⁴⁹。これらのことから彼は中観論者として認識されていたことがわかるが、ここで言及される中観論者の並び順は、

1. Āryadeva, Candrakīrti, Bhavya, Śāntideva, Bodhibhadra
2. Āryadeva, Candrakīrti, Bhāviveka, Śāntideva
3. Nāgārjuna, Āryadeva, Candrakīrti, Bhavya, Śāntideva
4. Nāgārjuna, Āryadeva, Candrakīrti, Śāntideva, Bhāviveka, Aśvaghōṣa, Candragomin

となる。多少の相違はあるものの、Śāntideva は Candrakīrti や Bhāviveka よりも後代の存在と認識されて、彼らの間の思想的相違は認識されていないように思える。また、ここでは Śāntarakṣita と Kamalaśīla への言及がなく、Aśvaghōṣa と Candragomin が言及されていることにも注意すべきである。

これらのことから、『菩提道灯論細疏』では、発菩提心、菩薩律儀、三昧、無自性の論拠として Śāntideva が言及されていることがわかる。引用については、『集菩薩学論』と『入菩提行論』のそれぞれから見られるだけでなく、前者の經典引用の孫引きと思えるものもある。これらの言及数は、他の論師や論書に比べても多いものであり、本書を著す上で Śāntideva の論書を参考にしたことがわかる。ただし、本論の全体の構成が Śāntideva の論書に基づいているというわけでもなく、仏教教義の論拠を引き出すために有益な論書と認識されていたような印象である。

⁴³ Tib. D. Khi 278b4. 望月 2015a: 127.

⁴⁴ Tib. D. Khi 279a6-b2. 望月 2015a: 129.

⁴⁵ Tib. D. Khi 280a6-b4. 望月 2015a: 132.

⁴⁶ Tib. D. Khi 282b2. 望月 2015a: 137.

⁴⁷ Tib. D. Khi 283a3. 望月 2015a: 138.

⁴⁸ Tib. D. Khi 284b3-7. 望月 2015a: 142.

⁴⁹ Tib. D. Khi 285a6-7. 望月 2015a: 143-144.

『中観説示開宝篋』

Dīpaṅkaraśrījñāna の顕教文献の中で、『菩提道灯論細疏』について長いテキストが『中観説示開宝篋⁵⁰』であり、多くの経論への言及を見ることができる。本論における Śāntideva への最初の言及は、菩提心の摂受の説明において、それを保持すべき論拠として彼の二書が引用される⁵¹。また菩提心を捨てる弊害と他者の発菩提心を喜ぶ功德について『入菩提行論』が言及され⁵²、他者の発菩提心を阻害することの弊害について同論の第四章第九偈が引用される⁵³。さらに、菩提心を増大させる三種の戒の解説において、中根の者に与える律儀として『虚空蔵経 (Ākāśagarbhasūtra)』の十八の根本罪過と並んで Śāntideva の説く十四の罪過が言及される⁵⁴。さらに二種の菩提心の功德を解説し、願心については『入菩提行論』第一章第九偈、第十偈が、入心については同論の第一章第十七偈、第十九偈が引用される⁵⁵。本論の前半のテーマが発菩提心であることからであろうが、その解説は Śāntideva の二書、特に『入菩提行論』に依拠していることがわかる。

本論の後半ではインドの諸論師の分類がなされており、ここでは Śāntideva は Candragomin、Śūra、Sāgaramegha、Luntaka と並記され、「心を生じたばかりの初学者のために四無量、四摂事、波羅蜜などをどのように受持するかの大なる行の典籍を広く著した」とされる⁵⁶。この前後が、「中観」と「究極の中観」とされるため、彼らも中観論者と認識されていた可能性もあるが、前者の Bhavya、Buddhapālita、Śāntarakṣita などや、後者の Nāgārjuna、Kambara、Candrakīrti などとの相違も認識していたことになる。

本論のタイトルに中観の名称が付されているが、ここでは Nāgārjuna について詳論されるものの、中観独自の教義的な議論は見られない。本書の主要テーマの一つは発菩提心であり、それについては、『菩提道灯論細疏』と同じように、『入菩提行論』への依拠を確認できる。また、本論では中観における菩薩行を説く論者として彼が言及されており、そのことは諸論師の分類において明言されている。

小部集

⁵⁰ Tib. *dBu ma'i man ngag rin po che'i za ma tog kha phyé ba*. D. No. 3930, Ki 96b1-116b7; P. No. 5325, A 105a8-106b6. Cf. 宮崎 2007.

⁵¹ *Bodhi(sattva)caryāvatāra* 5.26cd, 25cd, Śik. 27cdb. Tib. D. Ki 102b7-103a1. 宮崎 2007: 87.

⁵² Tib. D. Ki 104a1-2. 宮崎 2007: 90.

⁵³ Tib. D. Ki 104a5-6. 宮崎 2007: 90.

⁵⁴ Tib. D. Ki 105a1. 宮崎 2007: 92.

⁵⁵ Tib. D. Ki 105b6-106a1. 宮崎 2007: 94.

⁵⁶ Tib. D. Ki 112b6. 宮崎 2007: 109.

Dīpaṃkaraśrījñāna の大乘の論書の多くは小部であり、偈頌のスタイルで書かれたものも多く、引用経論はそれほど多く見られない。それらの中でも、業について論じた『業分別論 (*Karmavibhaṅga*⁵⁷)』は散文で書かれ、論書の引用を見ることができる。そこで、業を声聞と大乘、境と想、重と軽に区分し、大乘の想の重いものは悲心に関するものとされ、『入菩提行論』第六章第一偈が引用される⁵⁸。その内容は、千劫にわたって集めた善業も一度の怒りで砕かれてしまうというものであり、業に関して論じるものではなく、ここで引用される必然性も感じられない。おそらく、大乘の論書で業論を具体的に論じる文献がなく、本偈が引用されたのであろう。Nāgārjuna などの中観文献に一般的な菩薩行を論じるものがあまりないために、『入菩提行論』が言及されているように思える。

『業清浄儀軌解説 (*Karmāvaraṇaviśodhanavidhibhāṣya*⁵⁹)』は『三蘊経 (*Triskandhaka-sūtra*)』の注釈書であり、経文の語句の解説に対して論書の引用がなされている。そこで「無上なる智の善根」の解説で、無上なる智とは一切智であるとし、その原因として空性を修習することの論拠として『入菩提行論』第九章第五十五偈が引用される⁶⁰。さらに「懺悔」などの七種供養の解説で、昼夜三度、同経を読誦すべきであるという同論第五章第九十八偈が引用される⁶¹。同経には中観論者の Nāgārjuna と Jitāri の注釈書も知られているものの、それらに対する言及はない。また同論の他に引用されるものは、瑜伽行唯識派の Maitreya と Vasubandhu の著書である。もちろん、本論のテーマは初学者の菩薩行としての業障浄化であり、そのための論拠として同論が引用されている。

『経義集説示 (*Sūtrārthasamuccayopadeśa*⁶²)』は、諸經典に説かれる教義を五十の意味にまとめた論書であり、その第十二項として商主のようなものは『集菩薩学論』の十四の罪過の対立項とされる⁶³。本論で引用される経論は、他に『俱舍論 (*Abhidharmakośa*)』と『菩薩藏経 (*Bodhisattvapiṭakasūtra*)』と『講演大乘経 (*Mahāyānopadeśasūtra*)』であり、『迦葉品 (*Kāśapaparivarta*)』と『宝雲経 (*Ratnameghasūtra*)』が言及されるだけであり、經典に説かれる教義の典拠として經典のアンソロジーである同論が言及されている。また、この十四の罪過については前述の『菩提道灯論細疏』と『中観説示開宝篋』においても言及されている。このことから、Dīpaṃkaraśrījñāna は、この教義を『集菩

⁵⁷ Tib. *Las rnam par 'byed pa*. D. No. 3959, Khi 308a1-312b3; P. No. 5356, Ki 258a5-364a1, No. 5397, Gi 41a8-46b8. Cf. 望月 1996c.

⁵⁸ Tib. D. Khi 310b1-2. 望月 1996c: 13.

⁵⁹ Tib. *Las kyi sgrub pa rnam par sbyong ba'i cho ga'i bshad pa*. C. Ji 185b4-190a5; D. No. 4007, Ji 194a3-198b6; N. no. 3499, Ji 229b6-236a2; P. No. 5508, Ji 236a3-242b7; G. Ji 290a1-297b6.

⁶⁰ Tib. D. Ji 197b1-2. 望月 2005a: 119-120.

⁶¹ Tib. D. Ji 198b2. 望月 2005a: 121.

⁶² Tib. *mDo sde'i don kun las btus pa'i man ngag*. D. No. 3957, Khi 304a6-306b6; P. No. 5354, Ki 354a3-356b8, No. 5395, Gi 36b5-39b6.

⁶³ Tib. D. Khi 304b6. 望月 2005a: 123-124.

薩学論』における主要な議論の一つとして認識していたことがわかる。

『大経集』

チベット大蔵経のテンギェルの中観部には、四つのアンソロジー文献が収録されている。すなわち、Nāgārjuna に帰される『経集』と、Śāntideva に帰される『集菩薩学論』と Dīpaṃkaraśrījñāna の『大経集』と、編者不明の『修習次第経集 (*Bhāvanākramasūtra-samuccaya*⁶⁴)』である⁶⁵。これらのアンソロジーは、ほとんどの大蔵経を電子版で容易に入手できる今日とは違い、それが編集された時代の僧院における經典の収蔵状況などに関する情報を提供する貴重な資料である。ここでは、Dīpaṃkaraśrījñāna と Śāntideva の関係に焦点をあてて、彼らのアンソロジーに引用される經典を比較する。

『集菩薩学論』には、八十八の經典が引用され、引用数は三百六十になり⁶⁶、『大経集⁶⁷』には八十三の經典が引用され引用数は二百七十三になる。そのテキストの長さはほぼ同じで、前者のチベット語訳は百九十二葉で、後者のチベット語訳は百九十八葉である。その内容については、『集菩薩学論』は十九章からなるのに対して、『大経集』は三十七章からなり、後者の方が豊富なテーマ設定になっている。

この二つのアンソロジーに共通に引用される経文については、十三の經典からの二十の引用を確認することができる⁶⁸。

1. MSS 1.6⁶⁹ = Śik 6.22 (*Ratnameghasūtra*)
2. MSS 5.2⁷⁰ = Śik 4.23 (*Sarvadharmavaipulyasaṃgrahasūtra*)
3. MSS 6.10⁷¹ = Śik 4.14 (*Śraddhābalādhānāvātāramudrāsūtra*)
4. MSS 7.2⁷² = Śik 3.19 (*Ratnarāśīsūtra*)
5. MSS 7.3⁷³ = Śik 5.7 (*Adhyāśayasamcodanasūtra*)
6. MSS 10.2⁷⁴ = Śik 15.2 (*Ratnameghasūtra*)

⁶⁴ Tib. D. No. 3933.

⁶⁵ Cf. Mochizuki 2006f.

⁶⁶ Mochizuki 2006f では 359 としたが、ここに訂正する。

⁶⁷ Tib. *mDo kun las btus pa chen po*. D. No. 3961, Gi 1-198a7; P. No. 5358, Khi 1-231a2, No. 5397, Gi 41a8-46b8. Cf. Mochizuki 2004a.

⁶⁸ MS = *Mahāsūtrasamuccaya*, Śik = *Śikāsamuccaya*. 略号の次の数字は、アンソロジーの章の番号と經典の番号である。1.6 は、第一章の第六番目の經典を意味する。また、複数回重複が確認される經典は、*Ratnameghasūtra* の六度と *Adhyāśayasamcodanasūtra* の三度である。

⁶⁹ Tib. P. No. 897, Dzu 92a1-2, Chin. T. No. 489: 738c5-6, No. 658: 231c1-3, No. 659: 267c22-24.

⁷⁰ Tib. P. No. 893, Tshu 196b4-197a8, 198a3-7, Chin. T. No. 489: 382b12-c5, 382c27-383a6.

⁷¹ Tib. P. No. 867, Chin. T. No. 305.

⁷² Tib. Silk 1994b: 437-455, P. No. 760(45), 'I 159a5-162b3, Chin. T. No. 310(44): 643a13-644b1.

⁷³ Tib. P. No. 760(25), Zi 149a5-150b3, Chin. T. No. 310(25): 527a26-b20, No. 327: 50c24-51a15.

⁷⁴ Tib. P. No. 897, Dzu 109a8-110b8, Chin. T. No. 489: 746b12-747a9, No. 658: 237a20-c1, No. 659: 273c23-274b3.

7. MSS 11.3⁷⁵ = Śik 5.7 (*Adhyāśayasamcodanasūtra*)
8. MSS 18.4⁷⁶ = Śik 5.8 (*Ratnameghasūtra*)
9. MSS 18.7⁷⁷ = Śik 3.2 (*Saddharmapuṇḍarikasūtra*)⁷⁸
10. MSS 19.2⁷⁹ = Śik 3.8b⁸⁰ (*Ratnameghasūtra*)
11. MSS 20.3⁸¹ = Śik 2.5 (*Gaṇḍavyūhasūtra*)
12. MSS 24.9⁸² = Śik 10.3 (*Akṣayamatisūtra*)
13. MSS 25.4⁸³ = Śik 5.6 (*Adhyāśayasamcodanasūtra*)
14. MSS 26.2⁸⁴ = Śik 3.5 (*Sāgaramatisūtra*)
15. MSS 28.4⁸⁵ = Śik 7.30 (*Ratnameghasūtra*)
16. MSS 29.3⁸⁶ = Śik 8.28 (*Maitreyavimokṣasūtra*)
17. MSS 29.8⁸⁷ = Śik 4.15 (*Niyatāniyatāvatāramudrāsūtra*)
18. MSS 30.3⁸⁸ = Śik 3.8b (*Ratnameghasūtra*)
19. MSS 31.4⁸⁹ = Śik 3.9 (*Ratnakūṭasūtra*)
20. MSS 36.6⁹⁰ = Śik 15.4 (*Gaganagañjasūtra*)

『大経集』におけるこの数 (20/273) は、全体の引用数の七パーセントであり、重複する引用は少ないことがわかる。これらの引用についても、あるものは『集菩薩学論』よりも長く、ある場合は短い。前者からは、『大経集』における引用は『集菩薩学論』からの孫引きとは言えず、原典から直接に引用したものと推測することができる。上述したように、その内容の相違からも、Dīpaṃkaraśrījñāna は『経集』や『集菩薩学論』のスタイルを借りて、新たなアンソロジーを編纂している。そこではテキストの独自性を出すために、先行するものとの差別化を図ることが意図されたのであろう。

⁷⁵ Tib. P. No. 760(25), Zi 141a1-142a6, Chin. T. No. 310(25): 523c23-524a29, No. 327: 47c7-48a11.

⁷⁶ Tib. P. No. 897, Dzu 91b5-6, Chin. T. No. 489: 738b25-28, No. 658: 231b22-24, No. 659: 267c16-18.

⁷⁷ Chap. 13 kk. 1-18ab, Skt. Kern ed., 278.8-281.7, Tib. P. No. 781, Chu 120a5-121a1, Chin. T. No. 262: 37b19-c13, No. 263: 107c19-108a26.

⁷⁸ 望月 2001f: 295-324.

⁷⁹ Tib. P. No. 897, Dzu 82b2-8, Chin. T. No. 489: 735a4-17, No. 658: 228c15-24, No. 659: 264c12-24.

⁸⁰ Mochizuki 2006f: 45 では、この引用を数えていないが、ここに訂正する。

⁸¹ Skt. Suzuki 1934-36: 462-465, Tib. P. No. 761, Hi 179b8-181b8, Chin. T. No. 278: 768c18-769b16, No. 279: 421b10-422a12, No. 293: 811c8-814a3.

⁸² Tib. Braarvig 1993: 61-63, Chin. T. No. 397(13): 195c5-196a4, No. 403: 595b12-c13.

⁸³ Tib. P. No. 760(25), Zi 133a7-b2, Chin. T. No. 310(25), pp. 520c25-521a1, No. 327, p. 44c17-28.

⁸⁴ Tib. P. No. 819, Pu 110a7-111a4, Chin. T. No. 397(5), No. 404, *om*.

⁸⁵ Tib. P. No. 897, Dzu 15b6-16a1, Chin. T. No. 489: 709c14-20, No. 658: 213b8-12, No. 659: 246a1-7.

⁸⁶ Skt. Suzuki 1934-36: 494-406, Tib. P. No. 761, Hi 203a6-216b6, Chin. T. No. 278: 775b17-780a1, No. 279: 429b25-434b8, No. 293: 825a7-830b24.

⁸⁷ Tib. P. No. 868, Tzu 80a7-8, Chin. T. No. 645: 705b11-14, No. 646: 710c16-19.

⁸⁸ Tib. P. No. 897, Dzu 82b5-6, Chin. T. No. 489: 735a9-11, No. 658: 228c18-19, No. 659: 264a16-19.

⁸⁹ Skt. Staël-Holstein 1926: 6, Tib. Staël-Holstein 1926: 6, Chin. Staël-Holstein 1926: 7.

⁹⁰ Tib. P. No. 815, Nu 215a1-6, Chin. T. No. 397(8): 96b15-27, No. 404: 616c3-13.

さらに、これらのことから、彼が滞在していたであろう十一世紀のヴィクラマシーラ僧院では、この二百七十三の聖典が読める状況であったと推測することができる。もちろん、それらが筆記された状態だったのか、記憶された状態だったのか、あるいは断片だったのかは不明であるが、僧院には多くの聖典が収蔵されており、それを講読することができたのであろう。このことは、『集菩薩学論』に関しても類推することができ、八世紀のナーランダール僧院などの蔵書に関する情報を推測することができ、両者に引用される経典の相違は僧院の違いである可能性もある。

むすび

Dīpaṃkaraśrījñāna の『菩提道灯論』などの顕教文献を読むと、智慧である空性理解を目的にしているものの、それに至るための方便の解説に饒舌である。もちろん、彼は、後者の完成なしに前者の獲得はなく、前者が菩薩の目指すべきものであることを理解している。また、自らと Śāntideva を中観論者と認識していたはずである。そのような態度で引用された Śāntideva のテキストは次のようになる。

『入菩提行論』について、Dīpaṃkaraśrījñāna が引用した偈は、第一章第九偈、第十偈、第十二偈、第十六偈から第十九偈、第三章第二十六偈、第二十七偈、第四章第九偈、第四十二偈、第五章第二十五偈、第二十六偈、第百偈、第百四偈、第百六偈、第六章第一偈、第百十九偈、第八章第二十二偈、第九章第三十三偈、第四十五偈、第五十五偈、第百四十六偈から第百五十偈である。この数はその他のインドの論師の著書に比べても少ないものではない。このことは、同論が彼にとって重要なテキストの一つであったことを意味している。特に、後のチベットにおいてよく言及される二種の菩提心については、同論に多くを依拠している。

『集菩薩学論』について、Dīpaṃkaraśrījñāna が引用した偈は第三偈、第六偈、第十九偈、第二十七偈であり、他に第一章の散文を四度、第二章と第六章の散文を一度、第七章の散文が二度引用される。この数は、『入菩提行論』に比べると少ないものの、同論に引用される経典と重複する引用も多く確認することができる。これらの経典の引用が『集菩薩学論』からの孫引きなのかは、さらなる調査を要するが、同論を把握していた著者が、引用しようとする経文が同論にも引用されていることを認識していた可能性は排除できない。

以上のことから、Dīpaṃkaraśrījñāna にとって Śāntideva は重要な先師の一人であったことは明らかである。ただし、彼が認識していた師は、中観論者としてよりも菩薩行者としてである。このことはその思想的立場が中観論者であると認識されていなかったことを意味するものではないが、彼が Śāntideva に求めていたものは中観の空性論証

ではなかったことが確認できる。むしろ *Dīpaṃkaraśrījñāna* は、ラムリム思想の基盤を形成する重要な論拠として *Śāntideva* の著書に依拠していたと言える。

第3章 中観の師 Bodhibhadra

はじめに

Dīpaṃkaraśrījñāna は、『菩提道灯論細疏』において、自らが仏教を学んだ師として Bodhibhadra、Ratnākaraśānti、Dharmakīrti をあげている。この中でも、Bodhibhadra に対する依拠は大きく、同論においても彼の『三昧資糧論』と『律儀二十頌細疏』を多く引用するだけでなく、前者については他の論書においても言及している。しかしながら、この両者の関係については、Bodhibhadra の側から情報を得ることはできない。ここではその弟子と自称する Dīpaṃkaraśrījñāna の著作における Bodhibhadra への言及を取り上げ、両者の関係を考察する。

Bodhibhadra について

チベットへの仏教伝承に大きな役割を担った Dīpaṃkaraśrījñāna については説明の必要もないであろうが、Bodhibhadra の生涯に関する詳しい情報はあまり多くは得られない。Śāntarakṣita (ca 725-783) のテキストに対する注釈書を著しており、彼より後の時代に生存した者であると断定できる。また Dīpaṃkaraśrījñāna は、彼のことを「現在の私の師」と述べていることから年長の同時代者である可能性があるが¹、両者の師弟関係が同時代の直接的なものであったのかどうかは不明である。従って八世紀から十一世紀の間に生存した者と考えられるが、御牧克巳は「十一世紀頃」とし、松本史朗は「1000年頃」とする²。いずれも、Dīpaṃkaraśrījñāna との関係、および『智心髓集釈』に説かれる唯識派と中観派の分類に関する記述に基づいて年代を引き下げたように思える。

チベット大蔵経には Bodhibhadra の著作として次のものを見ることができる。

『瑜伽相真实論(Yogalakṣaṇasatyā)³』

『智心髓集釈(Jñānasārasamuccayanibandhana)⁴』

『三昧資糧論(Samādhisambhāraparivarta)⁵』

『菩薩律儀儀軌(Bodhisattvasaṃvaravidhi)⁶』

¹ 羽田野 1987: 72.

² Mimaki 1976: 7, 松本 1987: 235.

³ Tib. D. No.2458, Zi 132b5-134a3; P. No.3286, Tshi 166b1-168a3, No.5450, Gi 186b1-188a1.

⁴ Tr. by Śāntibhadra and Klu'i rgyal mtshan. Tib. D. No.3852, Tsha 28a3-45b4; P. No.5252, Tsha 31a3-53a3; Mimaki 1976, pp.190-207.

⁵ Tr. by Vīryacandra and Chos kyi shes rab. Tib. D. No.3924, Ki 76b7-91a6; P. No.5319, A 87a-100a8, No.5444, Gi 166b2-179a4. Cf. Dolkar 2004 同論の和訳については、望月 2005 を参照。なお、チベット大蔵経には『三昧資料論』というタイトルのテキストが三種収録されている。他の二つは、Kṛṣṇapāda と Dīpaṃkaraśrījñāna であり、いずれも師弟関係がある。

『菩薩律儀二十細疏(*Bodhisattvasaṃvaraviṃśakapañjikā*)⁷』

唯識部に収められた最後のものを除くと、いずれもが中観部に収められているが、最初のものについては、秘密部にも収められている。第二のものは *Āryadeva* に帰されるテキストに対する注釈書であり、最後のものは *Candragomin* の『菩薩律儀二十論』および *Śāntarakṣita* の同注に対する複注である。これらの注釈書はそれなりの分量があるテキストであるが、彼独自の著作である残りの三論は比較的小部な文献である。これらの文献の内容を詳細に検討する必要があるが、そのほとんどがチベット大蔵経の中観部に収められていることから、チベット大蔵経が編纂された時点において、彼の思想的立場は中観論者と認識されていたと推測できる。しかしながら彼が正統的な中観論者であったかどうかについては、慎重な調査を要する。

Dīpaṃkaraśrījñāna の伝記に見られる Bodhibhadra に関する記述

Dīpaṃkaraśrījñāna の伝記のうち、『詳伝 (*rNam thar rgyas pa*)』と『詳伝一般 (*rNam thar yongs grags*)』に見られる Bodhibhadra に関する記述を見てみる。彼の名前は次の三箇所に見ることができる。

まず 012⁸ において、

師たちの中から、根本の師は十二名である。

と述べられ、その中に Bodhibhadra が含まれている。

続く 034 では、

マントラと波羅蜜の相続は、軌範師 Nāgārjuna、Āryadeva...

などと述べられ、Nāgārjuna からの相続が Mañjuśrībhadra、Bodhibhadra、Ratnākaraśānti、Dīpaṃkaraśrījñāna とされている。この記述からは、Bodhibhadra が Ratnākaraśānti に先行する可能性がある。

最後の 048 では、

⁶ Tr. by Sunāyaśrimitra, Darma grags. Tib. D. No.3967, Gi 239a4-241b6, No.4491, 43b5-46a7; P. No.5362, Khi 276b6-280a4, No.5404, Gi 54a5-57b1.

⁷ Tr. by Kṣelakagana, Byang chub shes rab. Tib. D. No.4083, Hi 154b3-217b5; P. No.5584, I 213a2-251a2; 藤田 2002. Cf. 藤田 1983b, 2000.

⁸ 以下の下線が付された数字は Eimer 1979 により設定されたセクションの番号である。

翻訳者の賞讃に常に依存する師は Śānti pa と Bhadrabodhi と Jñānaśrī である。

と述べられている。以下に見る『菩提道灯論細疏』の記述を見ると、この Bhadrabodhi は Bodhibhadra とみなすことができる。

また『テプテル・ゴンポ』では Dīpaṃkaraśrījñāna の十六名の師の第十四番に彼の名前が見られる⁹。

Dīpaṃkaraśrījñāna の著書に見られる Bodhibhadra

Dīpaṃkaraśrījñāna が自らの師とする Bodhibhadra であるが、残念ながら後者の著書から両者の関係をうかがうことはできない。そこで Bodhibhadra の著作の引用が頻繁に見られる Dīpaṃkaraśrījñāna の著作を通して、両者の関係について考察する。

まず、最初に彼の主著とも言える『菩提道灯論』とその自注とされる『菩提道灯論疏』において言及される Bodhibhadra を取り上げることにする。最初のもは、冒頭の偈において、

Maitreya、Asaṅga、師の gSer gling pa、Mañjuḥṣa、Śāntideva、Bodhibhadra という諸師に献身的に敬礼してから、太陽の光のような細疏を著述します。

と述べ、注釈の冒頭において、

ここに聖なる師 gSr gling pa と聖なる吉祥な尊者 Bodhibhadra の宝の瓶のようなお口から甘露と蜂蜜のような助言の水滴で、王族の弟子である Byang chub 'od と長い間近くで仕えていた弟子の比丘 Tshul khriṃs rgyal ba の二人が何度も請願する面前で教誡の滴をまき散らしたものを、ここで師の御口や経典などに従順してからまとめられるべきである¹⁰。

と述べている。これらの記述から、Dīpaṃkaraśrījñāna は師である gSer gling pa と Bodhibhadra からの教えを Byang chub 'od と Tshul khriṃs rgyal ba に伝えるために『菩提道灯論』を著したということになる。この同じ内容は、『菩提道灯論』23-24 の

⁹ ただし、羽多野 1986: 72 は、この Byang chub bzang po を Bhadrabodhi とし、Bodhibhadra とは別人とする。

¹⁰ 望月 2015a: 39-40.

「師たち」という語句の解釈に、

そのうち「師たち」とは尊者で吉祥なる Bodhibhadra と師 gSer gling pa たちである¹¹。

というところにも述べられている。さらには、『菩提道灯論』46の菩提心の起こす儀軌について解説したところで、

そして、ここにまず軌範師聖 Nāgārjuna と、軌範師聖 Asaṅga と、軌範師聖 Śāntideva たちには、この誓願の菩提心を起こす儀軌の在り方には区別がなく、共通しており、現在の私の師である吉祥なる尊者 Bodhibhadra と、師である gSer gling pa の尊者たちもこれらの聖者に従っており...¹²

と述べ、Bodhibhadra が「現在の師である」として、彼と同時代の者であった可能性がある。

続いて『菩提道灯論』79-82の波羅提木叉の七部を解説する際に、

ここにある者が、

あなたは、最初に、「その人は最高である。正しい衆生で、最高の菩提を望んでいる者たちに対して」と言わなかったのか。また、ここでそのように述べたものは、どのように真実を説いたものであるか。前者は不浄なる依根として設定されており、これは清浄なる依拠として認められるものである。

と言う。この意味は師である吉祥なる尊者 Bodhibhadra が『[菩薩] 律儀二十細疏』にお説きになられている。すなわち、

次のように波羅提木叉の律儀は菩薩の律儀の支分となっているものであり、[その] 一部として知るべきである。それ故に「他の波羅提木叉の律儀をそなたはこれにより菩薩の律儀を正しく領受する器となっており、学ぶべきこの言葉も与えられるべきである」という意味である。ここに、殺生などから退く別なる儀軌は存在せず、それからも退いており、菩薩律儀を領受する器となっても、存在することはない¹³。

¹¹ 望月 2015a: 62. Cf. 藤田 2001.

¹² 望月 1999, p.31.

¹³ Tib. P. No.5584, Ku 215a8-b2.

とお説きになられている¹⁴。

と述べている。ここに述べる声聞乗の波羅提木叉と次のセクションで述べる波羅蜜多乗の菩薩律儀の区分を **Bodhibhadra** の『菩薩律儀二十論』に基づいて解説している。さらに続く『菩提道灯論』83-86 対する注釈箇所において、**Asaṅga** の『瑜伽師地論』と「戒品」にも七部と説かれていると述べた後に、

そのような偉大な衆生を嫌悪し、嫌疑するならば、自分自身を惨めにしている。師である尊者 **Bodhibhadra** が『[菩薩] 律儀二十細疏』に次のように、

そして律儀戒は波羅提木叉の七部の律儀を受けることである。そして、比丘と沙門と比丘尼との区別により、出家の方は五種である。在家の方は二種である。すなわち、優婆塞と優婆夷との区別による。一日の学処は難行ではなく、欲望による性行為をなすことなく、しばらくの間[性的な]結合もしないので、これは波羅提木叉の部分として適切ではないと説かれてはいない¹⁵。

とお説きになられている。その師は菩薩蔵の律を保つ偉大な方であり、聖 **Nāgārjuna** と軌範師 **Śāntideva** のそれぞれから継承した言葉の教義があるから、その偉大な賢者に従うべきである¹⁶。

次の菩薩律儀に関するセクションでは、『菩提道灯論』95-98 の師がいない場合の律儀の受ける儀軌と同論における『文殊仏国土莊嚴經』の引用 99-128 に続き、戒の異門を述べるところにおいて、「軌範師 **Śāntideva** はすべての経典を三種の人の学ぶべきものとして著している」として『集学論』第三偈と『入菩提行論』第五章第百偈を引用した後に、

吉祥なる師 **Bodhibhadra** も [『菩薩律儀二十細疏』に]、

このように菩薩たちの学ぶべき基本でこれら実際に生じたものがまとめられている。さらにまた、菩薩たちの学処は無量であり、終わりが無いものであるから、それぞれに示されたものに従ってから、過失になるものと、過失にならないものを知るべきである¹⁷。

¹⁴ 望月 2015a: 79-80.

¹⁵ Tib. D. Hi 186b2-4.

¹⁶ 望月 2015a: 83-84.

¹⁷ Tib. P. Ku 250a5-7, D Hi 217a3-b4.

とお説きになられている¹⁸。

と引用している。律儀を捨てる原因について *Asaṅga* の方法¹⁹と *Śāntideva* の『集学論』に依拠して述べた後に、

師 [Bodhibhadra] が、

学処の基本を知らず、憶えておらず、混乱し、尊敬していないことである²⁰。

と『律儀二十細疏』にお説きになられている²¹。

と引用している。さらにまた戒の功德について、*Asaṅga* の「戒品²²」と *Śāntideva* の『集学論²³』を引用した後に、

師も、

そのようならば、これらのその瞬間に悪趣に行くことが中断され、生じないであろう。

と言い、また、

彼は悪趣に生じないし、百度生じたとしても、ひどい苦しみを受けることなく、速やかに解脱し、そこに住していても他者を成熟させる²⁴。

と『律儀二十細疏』にお説きになられている²⁵。

と引用している。さらに菩薩律儀により菩提資糧が完成するという『菩提道灯論』133-136 に対する注釈箇所において、

「律儀により制御される者たち」とは聖 *Asaṅga* の方法にある菩薩の律儀と軌範師 *Śāntideva* の在り方にある菩薩の律儀である。このような二つの大きな車の道に住してから、励み、努力をすれば、福德と智慧の両方の資糧が完全になる。すなわち「完全な菩提になるであろう」と師たちはお説きになられている。師 [Bodhibhadra]

¹⁸ 望月 2015a: 97.

¹⁹ *Bodhisattvabhūmi*, 荻原 1971: 159-160.

²⁰ Tib. P. Ku 232a.

²¹ 望月 2015a: 98.

²² *Bodhisattvabhūmi*, 荻原 1971: 187.

²³ *Śikṣāsamuccaya*, Bendall 1897-1902: 17-18.

²⁴ Tib. P. Ku 224b4-5.

²⁵ 望月 2015a: 100.

が、

そのような戒の三つの学処は、正しく保ち、随順することにより、自他のためや、有益で喜ばしいものになるので、善である。菩薩の無量なる学処が集められているので、無量である。一切衆生に対して有益で喜ばしいものを明らかに成立させるので、役立つものである。無上なる完全な菩提の結果を受けるので、大きな結果と知られる²⁶。

と『律儀二十細疏』にお説きになられている²⁷。

と引用している。さらに菩薩律儀のセクションの結びに、

そのような昼夜に無意味に住することのないそのヨーガは、三つの完全なものを備えている。すなわち師が [Bodhibhadra が『菩薩律儀二十細疏』に]

三つの完全なものによる楽しみを感じるであろう。次のように、行と、想と、以前の原因が完全なものである。そのうち行が完全なことは、身・口・意の過失を相續せず、罪を破壊することである。想の完全なことは、次のように自分が法の想によるが、誤った生活などの非法によることはない。自分も、大菩提のために励むが、世間の楽しみのために励まないことである。そして過去の原因が完全なことは、彼が前世に福德をなし、善をなしたことにより、今生で、衣服や、食物や、器物に貪することなく、他者に分ける性質をそなえていることである²⁸。

とお説きになられている²⁹。

と引用している。このように『菩提道灯論細疏』の菩薩律儀のセクションにおいて師とされる Bodhibhadra の『律儀二十細疏』が五度引用されている。このことは、Dīpaṃkaraśrījñāna が菩薩律儀に関して論じる際に、やはり多くの引用が見られる Asaṅga の『菩薩地』「戒品」と Śāntideva の『集学論』と並んで重要な役割を果たしていたとすることができる。

続く神通に関するセクションでは三昧により神通を起こすことが説かれ、『菩提道灯論』141-144 に対する注釈箇所において、

²⁶ Tib. P. Ku 215a1-4, D Hi 186a6-b1.

²⁷ 望月 2015a: 103.

²⁸ Tib. P. Ku 250a7-b6, D Hi 217a4-b2.

²⁹ 望月 2015a: 110.

師 [Bodhibhadra] も [『三昧資糧論』に]、

そのように聞そなえた菩薩は、法を述べることから退くべきである。すなわち、神通を得ていないので、聞だけでは、他者に対する利益は説かれない³⁰。

と述べ、また [同じ『三昧資糧論』に] 説かれている。

それ故に多聞だけでは法は説かれず、神通を得てはじめて利他がなされる³¹。と述べ、また同論に、

神通を得ていない弟子は、完全に熟することができず、自分自身が死んでしまう。軌範師 Śāntideva が、

衆生は種々なる信解をもち、勝者も喜ばせることがないのに、どうして私のような者ができようか。それ故に世間を思うことは捨てられるべきである³²。

と典拠を添えてから『三昧資糧論』にお説きになられている³³。

と引用している。ここに『入菩提行論』第八章第二十二偈が孫引きされるように、この文脈で数度引用される『発志樂所問経』なども Bodhibhadra の『三昧資糧論』と重なっている。さらに神通を起こすためには止を完成せせる必要があり、止の支分が損なわれていたら三昧は完成しないという『菩提道灯論』157-160の解説において、

「止の支分」とは、師 [Bodhibhadra] が著した『三昧資糧論』の捨てられるべきものなどの九つである。[根本偈の] 他の部分は理解しやすい。それ故に支分を損なっていれば、止を完成することはないので、私の師である吉祥なる尊者 Bodhibhadra が『三昧資糧論』において九つの支分をお説きになられたものについては、

次のように、「捨てられるべきものと、前行と、退けられるべきことと、苦悩を断じることと、意を生じさせることと、功德を記憶すべきことと、精進すべきことと、結びつけるべきことと、住する方法である」と言われる。そのように支分を知って、それを存続させるべきである³⁴。

と師がお説きになられている。それらの意味は『三昧資糧論』自身を見るべきであ

³⁰ Tib. P. Gi 168b7-8, D Ki 82a1-2.

³¹ Tib. P. Gi 169a7-8, D Ki 82a7-b1.

³² Tib. P. Gi 171a2-4, D Ki 84a2-3.

³³ 望月 2015a: 115-116.

³⁴ Tib. P. Gi 166b6-7, D Ki 80a3-4.

る³⁵。

と引用されている。このことについては根本偈においても

それ故に『三昧資糧論』に説かれた支分によく出ており [161-162]

と述べられている。さらに続けて、

ここでも最後の支分の意味を少しばかり書かなければならない。すなわち、師が『三昧資糧論』に、次のように、

そのような八支をそなえた人は、場所に相応した食物と、行道に相応した衣服と、友人に相応したものを備えたならば、心を平静にするべきである³⁶。

と言い、またお説きになられて、

彼が平静に瞑想をしない場合も、『般若経』の読誦と小像制作と右邊などの福德の資糧を励むべきである³⁷。

と言い、またお説きになられて、

心を平静にしようとする人は、捨てることの八つの行を修習すべきであり、それに従わない法はこうである。[『中辺分別論頌』第四章第四偈に]

五つの過失とは、怠惰と、教授の忘却と、[意識の]沈み込みや昂りと、なさないことと、なすこととである。これらが五つの過失と認められる。[と説かれており、] それらに対立する八つの捨てる行も [その『中辺分別論頌』第四章第五偈に]、

依存されるものと、それらに依存するものと、原因であるものと、結果であるものとである。対象を忘れないことと、沈み込みと昂りを理解することと、それを捨てようと明らかにすることと、止の際にヨーガに入ることとである³⁸。

と引用されている。この箇所においても『中辺分別論』の引用も含めて『三昧資糧論』が引用されている。さらに根本偈 163-164 の解説において、

「適当な一つの対象に対して」とは、相をもつ止と相のない止とである。それも師

³⁵ 望月 2015a: 118.

³⁶ Tib. P. Gi 174b6-7, D Ki 87a7-b1.

³⁷ Tib. P. Gi 177a5, D Ki 89b3.

³⁸ Tib. P. Gi 177b3-6, D Ki 90a1-3. 望月 2015a: 119.

が、

次のように、ここで止は二つである。すなわち有相と無相とである³⁹。有相に二つある。内部に見られるものと、外部に見られるものとである。内部に見られるものに二つある。すなわち、身体を対象とするものと、身体に依存するものを対象とすることである。身体を対象とするものに三つある。すなわち、身体自身を尊の相として対象とするものと、骸骨などを不浄な相として対象とするものと、天杖などを特殊な相として対象とするものである。身体に依存するものにも五つある。すなわち、呼吸を対象とするものと、微細な相を対象とするものと、心滴を対象とするものと、光線の支分を対象とするものと、喜びや楽しみを対象とするものとである。外部に見られるものに二つある。すなわち、特殊なものと、共通なものとである。特殊なものにも二つある。身体を対象とするものと、口を対象とするものとである。これが止に入る支分である⁴⁰。

と言われ、無相の止は、また同論に、

無相の止である妙観察智から、無相の観である無分別智が生じる、と言う⁴¹。

と言われ、また同論に、

有相の止に依ること無相の止を把握してから観が起こされるというこの主張は賞讃される。何故ならば、そこにとどまることが堅固にされ、何らかの止により煩悩が除かれ、制圧されることにより、それは結果に相応する原因となるからである⁴²。

とお説きになられている。また同論に、

例えば修習をここでは述べない。何故ならば著書がとて大きくなることを恐れているからであり、聖なる師が領受した教誡に頼ることは正しいが、修習の教誡は文字では知り難いからであり、正確には止と観を説いてから解説されるからである⁴³。

とお説きになられている。「そのようなヨーガ行者が止を完成した後に、前に説明をした五神通を完成することに疑いはない」と師⁴⁴が説かれている⁴⁵。

³⁹ ただし『三昧資糧論』には、有相と無相に関する記述はない。

⁴⁰ Tib. P. Gi 177b6-178a2, D Ki 90a3-7.

⁴¹ Tib. P. Gi 178a6-178b1, D Ki 90b5.

⁴² Tib. P. Gi 178b8-179a1, D Ki 91a3-4.

⁴³ Tib. P. Gi 178a2-4, D Ki 90a7-b1.

⁴⁴ 『三昧資糧論』には、この句はなく、この師が誰なのかは不明である。ただし、『菩提道灯論』165-166の内容と一致する。

⁴⁵ 望月 2015a: 120-121.

と述べ、止の分類について、**Bodhibhadra** の『三昧資糧論』をそのまま引用している。
さらに続く智慧と空性を説くところでは、

師 **Bodhibhadra** が次のように、

般若波羅蜜多以外の施波羅蜜多などの一切の善の資糧を勝者は方便と説かれて
いる。[181-184]

とお説きになられたものが私の根本偈に述べられている⁴⁶。

として、『菩提道灯論』の偈がそのまま **Bodhibhadra** の言葉とされている。続く空性を
説くセクションでは、インドの論師を列挙する際に、

軌範師 **Nāgārjuna** が説かれた心髓を解説すると、彼は智慧波羅蜜の意味を、存
在と非存在を超えた大中観の意味と理解しており、他の賢者の密教文献にもそのよ
うに説かれている。そのように師 **Bodhibhadra** と尊者 **Kusulpa** もそのように意図
している。

聖 **Nāgārjuna** の甘露のようなお言葉により、**Āryadeva**、**Candrakṛīti**、**Bhavya**、
Śāntideva、**Bodhibhadra** まで満たされ、私に少しずつ注がれる⁴⁷。

と述べられている⁴⁸。ここでは **Bodhibhadra** が中観の論師であり、その教えを彼から相
続したことが述べられている。この **Nāgārjuna** から **Bodhibhadra** へ教義の相続につい
ては、

聖 **Nāgārjuna** の教誡により成立したものを得た後に、聖 **Mañjuḥṣa** の許可を
得て、神通を得て、すべてのタントラとすべての経典とすべての律の聖典の意図を
一時に心に明らかにし、真実を見る、そのことを一つ一つ相続した師がこの吉祥な
る **Bodhibhadra** なので、このお方に随順すべきである⁴⁹。

と述べている。さらに続く偈においても、

⁴⁶ 望月 2015a: 126.

⁴⁷ 望月 2015a: 131-132.

⁴⁸ この前には **Asaṅga** は般若波羅蜜の意味を唯識と説き、彼の師の **gSer gling pa** と **Śānti pa** もそのように
説かれている。

⁴⁹ 望月 2015a: 136.

一切智者により授記された聖 Nāgārjuna から相承した Bodhibhadra に従った後に〔他の〕いかなる宗義も受けるべきではない⁵⁰。

と述べられている。

以上のものを数えあげると、彼の自著で最も大部であるこの『菩提道灯論細疏』において言及された彼の名前と引用された著書を数えると、名前に関しては二十二度（うち九度は師とあるだけである）であり、『菩薩律儀二十細疏』の引用が八度、『三昧資糧論』の引用が十一度となる。引用される箇所は論書全体に及び、特に菩薩律儀に関する箇所では『菩薩律儀二十細疏』に基づき、止に関する箇所では『三昧資糧論』に多くを依拠していたことがわかる⁵¹。

その他の小部文献では、前述の『菩提道灯論』161-162 では、『三昧資糧論』が言及されており、181-184 は Bodhibhadra の言葉をそのまま述べたものとなる。

また『入菩薩初学道説示⁵²』においては、

Bodhibhadra が著しになられた『三昧資糧論』に説かれた九支分を知るべきである。

として、前述の九支分がここでも言及されている。

さらに『大乘道語句撰集』319 は、

『三昧資糧 [論]』をよく学ぶべきである⁵³。

と読むことができる。

これらのことから、瑜伽行的な止の行を中観において論じる際に、Dīpaṃkaraśrījñāna は Bodhibhadra の『三昧資糧論』に依拠していたことがわかる。もちろんこのことは、それ以前の Kamalaśīla の『修習次第』の影響も考察する必要がある。

Dīpaṃkaraśrījñāna による Bodhibhadra の呼称

⁵⁰ 望月 2015a: 139.

⁵¹ 直接の言及はないものの、続く方便と智慧との関係に関する箇所では『維摩経』と『伽耶山頂経』が引用されるものも、『三昧資糧論』からの孫引きである可能性もある。カマラシーラの『修習次第』から Dīpaṃkaraśrījñāna の『菩提道灯論』への伝承については、Mochizuki 2005, p.31 を参照。

⁵² *Bodhisattvādhikarmikamārgāvatāradeśanā*. Tib. D. No.3952(=4477), Khi 297a. 望月 2005a: 34.

⁵³ Tib.: ting 'dzin tshogs la legs par bslab. 望月 2005a: 58.

以上の引用について、Dīpaṃkaraśrījñāna が『菩提道灯論細疏』において Bodhibhadra のことをどのような尊称を付して呼んでいるのかを見てみる。二十二度をその言及順とともに示すと、次のようになる。

1. 師 Bodhibhadra (N1, 18-19)
2. 聖なる吉祥なる尊者 Bodhibhadra (N2)
3. 吉祥なる尊者 Bodhibhadra (N3, 7)
4. 現在の私の師である Bodhibhadra (N4)
5. 師である尊者 Bodhibhadra (N5, 6)
6. 師 (N8-13, 15-17)
7. 私の師である吉祥なる尊者 Bodhibhadra (N14)
8. Bodhibhadra (N20, 22)
9. 吉祥なる Bodhibhadra (N21)

となる。すなわち、「師 (bla ma)」、「聖者 (dam pa)」、「尊者 (rje btsun)」、「吉祥 (dpal)」、「現在の私の師 (da ltar bdag gi bla ma)」という呼称が名前に付されていることになる。特に第四のものを考えると、Dīpaṃkaraśrījñāna は Bodhibhadra を同時代の師であると認識していた可能性がある。ただし、直接的な関係があったのか、またそれはどのようなものだったのかは不明なままである。

まとめ

以上において、Dīpaṃkaraśrījñāna のテキストを中心に Bodhibhadra と Dīpaṃkaraśrījñāna の関係を見てみた。このことから現時点で言えることをまとめると次のようになる。

1. Dīpaṃkaraśrījñāna の『菩提道灯論』は Bodhibhadra のテキストに依拠して著されたものである。
2. Dīpaṃkaraśrījñāna は Bodhibhadra を同時代の中観思想の師であると認識している。

ただし Dīpaṃkaraśrījñāna の言及が見られない Bodhibhadra のその他の著書との関係の詳細な調査も行った上で、両者の関係を断定する必要がある⁵⁴。

⁵⁴ Dīpaṃkaraśrījñāna は *Dharmadhātudharśanagīti* 後半の宗義に関するセクションにおいて Āryadeva の *Jñānasārasamuccaya* を見ており、そのことから Bodhibhadra の *Jñānasārasamuccayanibandhana* も見ていた可能性がある。

第4章 中観と唯識を融合する「大中観」とは何か

Dīpaṃkaraśrījñāna の思想背景

インド仏教史において中観思想の最後に出てくる論師の一人が、十一世紀のチベットにおける仏教復興に重要な役割を演じた Dīpaṃkaraśrījñāna である。彼はチベット王に招聘されて、その地に正しい仏教を伝えるように請願され『菩提道灯論』を著わした。その内容は、菩提を得るためには、三宝への帰依をし、菩提心を起こし、小乗の戒に身を律し、菩薩戒を守り、禅定により止を獲得してから、般若智の観を得るというものである。この最期の項目において、Nāgārjuna の中観思想に依拠していることから、彼の思想的立場は中観派に分類され、チベット大蔵経でも彼の著作の多くは「中観部」に収録されている。さらに後代のチベットでは、彼の思想的立場を Candrakārti から Tsong kha pa に相続される中観帰謬論証派に位置づけている¹が、これについては慎重な判断を要する²。それは、『菩提道灯論』では般若智の上部構造にタントラを設けており、同論に対する自注などの著作から、彼自身が中観の帰謬論証と自立論証との対立をどれほど認識していたのかは検討の余地があるからである³。

そして何よりも、彼の思想背景には瑜伽行唯識派の教義が明確に存在している。『菩提道灯論疏』において、彼の師とされる Ratnākaraśānti、gSer gling pa から瑜伽行思想を学んだことを明言している。この後に、現在の師である Bodhibhadra から中観思想を学んだとも述べている。

彼の師の一人とされる瑜伽行唯識派の Ratnākaraśānti は、中観思想の祖とされる Nāgārjuna に対して、次のような認識を持っていた。まず、彼は瑜伽行唯識派の祖である Maitreya、Asaṅga の次に位置する論師であり、Asaṅga との思想上の同一性が強調されている。また Nāgārjuna のテキストを Asaṅga のテキストと同様に瑜伽行唯識派の聖教として引用している。もちろん Ratnākaraśānti の思想的立場は瑜伽行唯識派のものであり、瑜伽行唯識思想と中観思想の融合を意図していたのかについては検討の余地があるが、少なくとも Nāgārjuna については否定対象として認識してはいない。

もう一人の瑜伽行唯識派の師である gSer gling pa は中観派の Śāntideva の『入菩薩行論』に対する概説書を現しており⁴、彼はこれらの概説書に基づいて自らも注釈書を著している。そこでは中観思想の教義についてはほとんど言及されず、むしろ Maitreya

¹ 例えば、ICang skya Rol pa'i rdo rje (1717-1786) の『大宗義書』など。これについては、御牧 1982: 30 を参照。また長尾 1954: 31-32, 立川 1973: 71-72 も参照。

² 長島 2004, 2007

³ 山口 1989: 58-59, 2004: 225-231, 宮崎 2000, 2012.

⁴ 斎藤 2003a, 2003b を参照。

に帰される『現観莊嚴論』に基づいた著述がなされている。彼は自らの中観思想を論じることはなく、むしろ師の解釈に従いながら瑜伽行唯識派の修行体系を論じているのである。

では『菩提道灯論疏』において *gSer gling pa* と並記され、彼が中観の師とする *Bodhibhadra* の思想的立場はどうであろうか⁵。彼に帰される著作には *Āryadeva* による仏教綱要書である『智心髓集』に対する注釈書があるものの、*Candragomin* の『菩薩律儀二十論』および *Śāntarakṣita* の同論の注釈書に対する複註はテンギュルの唯識部に収められている。また中観部に収められた『三昧資糧論』は中観の装いで真言乗に依拠しつつ瑜伽行の修行体系を論じたものである。彼自身は、弟子とともに中観論者であるという認識を持っていたかもしれないが、それは瑜伽行唯識派の教義を排除するものではない。これらのことから彼らには、中観と唯識という教義の相違は意識されていたものの、それは排他的な学派意識を形成するものではなかったのかもしれない。

『菩提道灯論』を著した時点では、彼自身の中に中観論者という意識があったのであろうが、はたして彼は真の中観論者であったのか、あるいは彼が意図した中観思想とどのようなものであったのか。それを解明する手がかりになるものが、「大中観 (*dbu ma chen po*)」というタームである。以下に、この言葉を手がかりとして、彼が中観学派にとって否定対象であった、唯識学派との融合をどのように試みたのかについて考察してみる。

「大中観」とは何か

Dīpaṃkaraśrījñāna もこの *Ratnākaraśānti* の教えに忠実に従い、自身の著書においても *Nāgārjuna* と *Asaṅga* を「二つの偉大な乗り物」として両学派の開祖を並記する。このことは、彼が瑜伽行唯識思想と中観思想とを対立する思想体系と認識していたというよりも、むしろ両者の教義を自らに取り入れて菩提への道次第の教義を確立させ、それが「大中観」の名のもとで展開されていると言える。

では、この「大中観」という語はどのような意味であり、どのようなことを意図して用いられているのであろうか。この語義の解釈については、中観を越えた上部概念の思想体系として理解するだけでなく、「大きな」という形容詞により中観が修飾された「偉大な中観」と理解することも可能である。しかし *Dīpaṃkaraśrījñāna* の用例を見てみると、前者を意図していたように思える。この語の用例を見てみると、彼の『菩提道灯論細疏』では次の五箇所に見られる。最初のもは、波羅提木叉を守る者が菩薩の律儀を

⁵ 両者の関係については、望月 2006a, 2006b を参照

もつという根本偈に対する注釈において、

また大乘である大中観の教義を完成したならば、次のように、

大乘の器とはならない者は誰もいない。一切の衆生は一つの種姓であり、如来蔵をもつ者である。

と説かれており、

地上では、福分は有るものでも無いものでもなく、すべてのものは仏となるものである。それ故に完全なる仏になるために、怠惰をなすべきではない。

と説かれている⁶。

と述べている。ここでは大中観の教義について具体的に定義することはないが、この教義が「一切衆生が如来蔵をもつ」ということと「一切衆生が皆悉く成仏する」と言うことに展開することが述べられている。すなわち大中観が如来蔵思想と関係をもつものであることは明らかである。

この他の用例はいずれも彼の中観思想の解釈を述べた智慧を学ぶことに関するセクションに見られる。まず Nāgārjuna の諸テキストが諸存在の無自性を説いているという根本偈に対する注釈において、Asaṅga は智慧波羅蜜を唯識として説き、自分の師である gSer gling pa と Ratnākaraśānti もそのように意図しているとした上で、

軌範師 Nāgārjuna が説かれた心髄を解説すると、彼は智慧波羅蜜の意味を、存在と非存在を越えた大中観の意味と理解しており、他の賢者の相承でもそのように説かれている⁷。

と述べている。ここでは大中観は智慧波羅蜜であり、有無を越えたものである、としている。最初の二項目については中観思想の基本のようにも見えるが、それは瑜伽行唯識派においても取り入れられているものである。またそれは『大日経』や『秘密集会タントラ』にも説かれているものである。

この言及に続いて、Nāgārjuna の言葉が Āryadeva 以後の中観論者に受け継がれているとして偈頌のスタイルで、

そのように四大因により、一切の法は生じることはないと論証されている。昔の

⁶ 望月 2015a5: 80-81.

⁷ 望月 2015a: 131.

軌範師たちに従い、大中観の教義に住すべきである⁸。

と説かれている。ここでは『菩提道灯論』の般若智を成立させる根拠となる諸存在が無自性であることが不生などの四つの証因により論証されることを述べ、先行する中観論者に従うことが述べられているものの、ここでも大中観の定義については言明されていない。

続く諸存在の空性を述べる偈に対する注釈において四大因により他学派の排除を著書が大きくなってしまおうという理由のために省略した上で、大中観の定義については、

ここでは我々は「大中観の宗義は次の通りである」と言うだけで、宗義の詳細は書かない。何故ならば、瑜伽行を領受しようとする者たちに対して、少しまとめてから示したものであるから⁹。

と述べている。このように彼自身、「大中観」という概念を定義することはないが、瑜伽行を前提とすることを示している。

この語の最期の用例は、

有無のようなものを超越し、常断は捨てられ、知と所知を脱することが、大中観の教義である¹⁰。

というものである。一見すると Nāgārjuna の『中論』を引いているような印象を与えるが、これはそのまま Maitreya (および Asaṅga) により説かれた『中辺分別論』の内容と同様なものである。彼は瑜伽行唯識思想と中観思想の空性の解釈の相違を認識していなかった印象さえ与えるものである。

また、菩薩たちの法を五十の喩例にまとめた同じ著者の『経義集説示』では、その第三十九番目に、

暗闇のようなものとは、大中観の対象(dbu ma chen po'i don)に常にあるものである¹¹。

⁸ 望月 2015a: 132.

⁹ 望月 2015a: 133.

¹⁰ 望月 2015a: 138.

¹¹ 望月 2005a: 127.

と説かれている。ここでは「大中観」に関する具体的な記述は述べられないが、菩薩の教えの一項目としてその言葉が用いられている。

以上の用例から明らかなのは、彼は「大中観」という教義を立てるものの、それがどのようなものかと明確に定義することはなかった。「有無を越えたもの」というものは、事物の存在を智慧により分析することよりも、ヨーガによる禅定により言語的表現を越えた法性などの究極的実体を把握することを意図するものである。それは、「中 [観]」の名を用いているものの実質的には中観に瑜伽行唯識思想を融合したものに他ならない¹²。

「大中観」の与えたチベット仏教への影響

この「大中観」は、チベットではチヨナン派の Dol po pa Shes rab rgyal mtshan (1292-1361) において積極的に説かれるようになる。彼は、自らの「他空説」に、「大中観」を結びつけているのだが、そこに説かれている内容は中観の名称が付されているものの、中観の思想を大きく逸脱したものである¹³。そのことは、Dīpaṃkaraśrījñāna の説く「大中観」に対して誤った解釈を行ったためというわけではなく、むしろ彼の説に忠実に従った結果である。Dol po pa が大中観としてあげる聖典は『大乘莊嚴經論』や『中辺分別論』や『入楞伽經』などの瑜伽行唯識派の基本文献であり、それらは Dīpaṃkaraśrījñāna によっても多く引用される文献である。Dol po pa が、「一時的に唯心を説くが、究極的にはそれをこえた大中観の教義を示す」という記述や真言乗と大中観を並列するような記述は、唯識と中観の思想的立場の相違を認識するというよりも、両者の融合を試みた Ratnākaraśānti、Dīpaṃkaraśrījñāna の系譜に連なるものである。

このような彼の思想は、sGra tshad pa rin chen rnam rgyal (1318-1388) がチヨナン派の如来蔵説として定義されている。すなわち『如来蔵の麗飾・註解』において、

『大般涅槃經』『解深密經』『入楞伽經』『如来蔵經』『勝鬘經』『大法鼓強』『央掘魔羅經』などは了義を説き、それらは「大中観」の經典であるから、それらに説かれたことは了義と理解すべきである。それゆえに究極的仏、法身、如来蔵、勝義諦、光明、法界、自生智、浄楽常の究極、区別なく遍満するもの自体が一切諸存在の基盤であり...¹⁴

¹² 袴谷 1989a: 131-135.

¹³ 彼の「他空説」と「大中観」の関係については、Broido1989: 86-90, 谷口 1993, 望月 2011a を参照。

¹⁴ 山口 1982b: 590-591, 袴谷 1989b: 200.

などと説かれている。この説明によると、「大中観」とは如来蔵思想である、と定義することができる。すなわち、それは本来中観思想が否定してきた諸存在の基盤を肯定する考え方になっている。

Dīpaṃkaraśrījñāna が「大中観」という語を用いた際に、明確に如来蔵思想を想定していたのかは明らかではないが、おそらく瑜伽行唯識派の体験主義的思想体系の上に中観思想を確立しようとしたのであろう。しかしながら本来は有とか無というあり方を否定していただけのものが、否定だけではなく、「有無を越えたもの」という法性などの実体を認める考え方になっている。

まとめ

Dīpaṃkaraśrījñāna は自らの師について、Ratnākaraśānti と gSer gling pa を瑜伽行唯識思想の師として、Bodhibhadra を中観の師として明言している。しかしながら gSer gling pa を除く三者は、それぞれ真言乗のテキストも著している。Dīpaṃkaraśrījñāna、Bodhibhadra の著書にはアーラヤ識説・三性説は述べられないものの、彼らの空性理解は瑜伽行唯識派の修行体系の上に成立するものである。そのような意味でも、これらの論者の思想の根底には中観と唯識の両立があったと言える。

はたしてそのような異なる思想体系の両立は、成功したのであろうか。後のチベット仏教では、彼の思想がラムリム思想として広く受容されることから、このシステムは受け入れられたのであろう。しかしながら、それは中観思想の批判性を骨抜きにするものであり、中観思想の文脈で彼の著作が引用されることは極めて少ない。今回の事例では、「大中観」という語の背景に瑜伽行唯識思想と中観思想という対立する思想体系の両立の試みを見ることができる。

第2部 テキスト研究

第1編 小部文献

第1章 『菩提道灯論』『菩提道灯論細疏』

はじめに

『印度学仏教学研究』 第五十巻第一号所収の「『中観ウパデーシャ』の「ヴァスバンドゥ二人説とアティーシャの中観の見解」において、ツルティム・ケサンは『菩提道灯論 *Bodhipathapradīpa* (= BPP¹)』に対する自注とされる『菩提道灯論細疏 (*Bodhimārgadīpapañjikā* =BMDP²)』の著者について、「しばしばアティーシャ自身の作とされるが問題もある」とし、Tsong kha pa の見解を引用している³。同注釈書は、根本偈である同論のすべての偈に対して解説を行なっているわけではなく、また翻訳者も異なることから、両者の関係には著作時期の相違があることは明らかである。ここでは、その両者の間に存在する根本偈にかかわる微妙な差異について考察を行うことで、この問題に関する新たな資料を提供する。

『菩提道灯論』と『菩提道灯論細疏』のタイトルについては、すでにアイマーにより指摘されている。すなわち、そのチベット語タイトルが *Byang chub lam gyi sgroma* と *Byang chub lam gyi sgrom ma'i dka' 'grel* であり、そのサンスクリットは *Bodhipathapradīpa* と *Bodhimārgadīpapañjikā* である。patha と mārga、pradīpa と dīpa はいずれも同義語であるが、このことは次の推測を呼ぶ。(1) サンスクリットのタイトルはチベット語から還元されたものである。(2) この還元は異なる場所において行われた。さらに、次の憶測までも可能とする。(3) 両者は同一人物による著書ではない。(4) これらのテキストのサンスクリットは本来存在しなかった。両者のタイトルがテンギユルの編者により付されたものであるならば、これらの推測は意味のないものである。しかしながら、この段階でテキストの伝承に何らかの問題があったのではないか。少なくとも、誰により付されたのは明らかではないが、両者のサンスクリットのタイトルが異なる人物によりなされたと考えるのは妥当であろう。

『菩提道灯論細疏』は、『菩提道灯論』のすべての偈頌について注釈を試みているのではない。直接に引用がなされている偈を列挙すると、1-4, 17-21, 23-27, 29-32, 36-38, 46-48, 51-54, 71-99, 128-145, 153-160, 163-164, 167-168, 175-185, 189-208, 212-213, 218-219, 224, 237-244, 247-251, 257, 269-272 となる⁴。全二百七十六パーダのうち、百四十一パーダであり、全体の半分となる⁵。従って、『菩提道灯論細疏』の著者は、根本

¹ D. Nos. 3947, 4465, P. Nos. 5343, 5378. 望月 2015: 33-38.

² Tib. No. 3948, P. No. 5344. 望月 2015: 39-193.

³ ツルティム 2001: 227.

⁴ 『菩提道灯論細疏』に引用される根本偈とそのヴァリエーションは、Eimer 1978: 146-151 に列挙されている。

⁵ これは明らかに引用された偈の数であり、偈頌の語句への言及までを指摘すると、もう少し増えるであ

偈をすべて解説しているというものではなく、重要あるいは難解と思われる偈頌のみを引用し、注釈を行ったということになる。

『菩提道灯論』の構成について

『菩提道灯論細疏』自身に全体の構成を述べた記述を求めると、BPP 24の「正しい方法」を解説した箇所に見られる。すなわち、

「正しい方法」とは、[三宝]に帰依することと、二種の菩提心と、神通を起こした後に特殊な利他をなす方法と、方便と智慧が結合する二資糧をあつめる方法と、自利と利他をすぐに完成する偉大な大乘であるマンドラの特別な見解の二つを集める方法とである。

と述べている。これらをまとめると、(1) 帰依、(2) 発菩提心、(3) 神通、(4) 方便と智慧、(5) 真言となる。英訳者⁶は、第二項目の後に、「波羅提木叉」と「大乘の律儀」を加えている。「神通」のセクションには、「神通は止に依存し、止も戒に依存するので、最初に戒を示した」と述べられているので、この二項目はこのセクションに含まれていると考えることも可能である。

また、『菩提道灯論細疏』では、「今度は (da ni)」という語で、テーマの転換を行っている。これを上記の区分に見てみると、(1) BPP 37、(2) BPP 79、(3) BPP 87、(4) BPP 174、(5) BPP 175、(6) BPP 177、(7) BPP 224、(8) BPP 241の引用の前に見られる。このうち、(1) は発菩提心、(2) は波羅提木叉、(3) は大乘の律儀、(4) は方便と智慧、(8) はマントラのセクションの始めに相当するものである。

根本偈に対する解説

以下に、『菩提道灯論』の根本偈の個々の引用事例について見てみる⁷。

序論 BPP 1-4, 17-21, 23-24

BPP 1-4は⁸、三宝への敬礼と『菩提道灯論』の著作動機を示したものである。『菩提道灯論細疏』では、Byang chub 'odの請願をより詳細に次のように述べている：

ろう。

⁶ Sherburne 2000.

⁷ 『菩提道灯論』の偈と『菩提道灯論細疏』に引用される語の相違については、すでに Eimer 1978: 79-86 においても詳論されている。

⁸ D. 241b7, P. 278b2-3.

チベットのこの地方では仏が説かれたこの大乘の道を誤って理解した人が、師や善知識たちが完全に把握していないものをお互いに論争し、自分自身の論理により深くて広大な意味を自らの考察で分析しており、それぞれ相違する点が多くありますので、彼らの疑惑を取り除くことをお願いいたします。

というものである。これに続いて、『菩提道灯論』の本論の始まりと終わりとして、BPP 21 と 272 を引用する⁹。

BPP 5-16 は、最初の「劣った」という語が引かれるだけで¹⁰、「語の意味は理解しやすい」と述べるだけである。

続いて、BPP 17-20 が引用される¹¹。この箇所は、Tsong kha pa の『ラムリム・チェンモ』にも引用される、いわゆる上中下の三種の人 (pudgala) を説いたものである。これは、『菩提道灯論細疏』の引用からもわかるように、『阿毘達磨俱舍論 (Abhidharmakośabhāṣya¹²)』に引用される経典の記述に基づくものである。

『菩提道灯論』が説かれるべき対象者を述べた BPP 21-22 は、ここでは引用されていない。BPP 23-24¹³の「師たち」としてあげられているのは、Bodhibhadra と Suvarṇadvīpa である。「正しい方法」としてあげられているものは、帰依、菩提心、神通、方便と智慧、真言である。これらの方法を示す最初と最後の偈頌として、BPP 25 と 272 を引用する¹⁴。

帰依: BPP 25-27, 29-32, 36

まず、BPP 25-26¹⁵などの 12 パーダにより「三宝帰依が示される」とし、帰依に関するセクションが始まる。そのうち、BPP 27¹⁶を財物の供養、BPP 30¹⁷を成就の供養とする。

続く BPP 29-30¹⁸において指摘される『普賢行願讚 (Bhadracarīprañidhānarāja)』の解釈については、三人の先師の異なる説を引用するものの、どの説にも矛盾はないとする。

⁹ D. 242a4, P. 278b8.

¹⁰ D. 242a4, P. 278b8.

¹¹ D. 242a5-6, P. 279a1-2.

¹² Pradhan 1967: 182.

¹³ D. 242b5-6, P. 279b2.

¹⁴ D. 243a1, P. 279b2.

¹⁵ D. 243a2, P. 279b7.

¹⁶ D. 243a6, P. 280a5.

¹⁷ D. 243a7, P. 280b5.

¹⁸ D. 243a7-bl, P. 280a6-7.

続いて、前述の二種の供養をさらに詳細に説明する。

BPP 31-32¹⁹については、「菩提座」と「不退転の心」に対する注釈が行われている。

最後の BPP 36²⁰については、帰依の意味をまとめてから述べられるとし、解説が続いている。そこには、同じ著者の『帰依説示 (Śaraṇagamanadeśana²¹)』からの引用と思われる部分もあり、両者の前後関係は『菩提道灯論細疏』の方が後に著されたと推測することができる。

発菩提心: BPP 37-38, 46-48, 51-54, 71-78

「以上のように帰依の特殊性を示した後に、今度は菩提への発心を示すために」と述べて、BPP 37 を引用し²²、これらの 34 パーダ、すなわち BPP 34-70 により発心が示される、とする。

BPP 38-46 については、最初²³と最後²⁴のパーダを引用し、解説を付すものの、BPP 39-45 については、「七パーダはそのような長さのものである」とされるだけである。これに続き、『菩提道灯論細疏』は、「菩提心」についてインドの昔の賢者たちの意図するところは種々であるとし、(1) 菩提心自身、(2) 菩提心の儀軌、(3) 菩提心が生じる方法、(4) 菩提心を学ぶ方法の相違点が列挙されている。

BPP 47-48²⁵については、菩提心の功德が述べられるのだが、次の BPP 51-54²⁶については、問題がある。まず、この偈を示すと次の通りである：

その経典を読誦し、師 [の説くこと] を聞いて、完全なる菩提心の限り無ない功德をよく理解し、それが存在する理由から、繰り返し [菩提] 心を起こすべきである²⁷。

『菩提道灯論細疏』は、前半の語句解説と経証を行った後、「根本偈に入るべきである」

¹⁹ D. 246b6, P. 284a7.

²⁰ D. 247a4, P. 284b5.

²¹ 望月 1990.

²² D. 248b6, P. 286b4.

²³ D. 249a2, P. 286b8.

²⁴ D. 249a3, P. 287a2.

²⁵ D. 252a5, P. 290b5-6.

²⁶ D. 252b5, P. 291a7-8.

²⁷ BPP 51-54:

de yi mdo klog pa'am bla ma la mnyan to //
rdzogs pa'i byang chub sems kyi yon tan mtha'med pa //
rnam par shes par byas la de gnas rgyu mtshan du //
de ltar yang dang yang du sems ni bskyed par bya //

とし、再び根本偈を引用をする²⁸。しかし、そこで引用される根本偈は、前述のものとは異なり、

昼夜、そのように繰り返し、心を起こすべきである²⁹。

と引用し、「昼に三度、夜に三度、常に繰り返しその心を広げるために菩提心を起こすべきである」と補っている。ここでは「理由 (rgyu mtshan)」という語が「昼夜 (nyin mtshan)」に入れ代わっている。この変換が『菩提道灯論細疏』の著者により意図的になされたのか³⁰、それとも根本偈を誤って読んで生じたものかは明らかではない。両者のチベット語の表記が似ていることから、この変換がチベット語の段階で行われた可能性がある。もしそうであるのならば、次のことが推測される。(1)『菩提道灯論細疏』はチベット語で著された可能性がある。(2)『菩提道灯論細疏』の著者は『菩提道灯論』の著者と異なる人物である。また、どちらかの読み方が誤りであるのならば、どちらが正しいものであろうか。『菩提道灯論細疏』の著者は、両方の読み方を引用するものの、その解説部分では「昼夜」という読み方をとっている。従って彼はこの読み方を選択している。もしもこちらの読み方が正しいのならば、根本偈のテキスト自身の読み方が間違っていて伝承したということになる。あるいは、根本偈の誤りを自身の注釈書で訂正したとも考えられる。残念ながら、いずれの推測が正しいのか判断することはできないが、根本偈の読み方としては「昼夜」を選択した方が、自然に読める。また、この部分がデルゲ版とチョネ版には欠けているということは、この読み方が根本偈の読み方として正しいという意図で挿入されたのか、あるいは根本偈の読み方と矛盾するために削除された、という推測も可能なものにする。

BPP 55-70³¹に対して、『菩提道灯論細疏』は言及しない。この偈は『施勇所問經 (Vīradattaparipṛcchāsāūra)』からの引用をまとめたものなので、『菩提道灯論細疏』では根本偈とは判断されずに、注釈が行われなかったような印象を与える。少なくとも、根本偈の著者はそのことを認識しているわけで、注釈書の著者も同一であるのならば、注釈を行わない理由も明確になる。

²⁸ P. 294a6. ただし、デルゲ版とチョネ版はこの箇所を欠く

²⁹ Sherburne 2000: 94:

... nyin mtshan du //

de ltar yang dang yang du sems ni bskyed par bya //

ただし、この前半部分を根本偈の一部と取らないならば、以下の憶測は意味のないものとなる。

³⁰ 一つの文字にダブル・ミーニングをもたせ、注釈において二通りの読み方を提示したということである。

³¹ この前の根本偈は一パーダが十一音節で、後の根本偈は一パーダが九音節であり、パーダの長さには相違が見られる。

BPP 71-74³²については、菩提心の功德を大きくするためとして、自身が著した『発心律儀儀軌次第 (Cittotpādasamvaravidhikrama³³)』を引用する。従って、『菩提道灯論細疏』の著述時期はこのテキストよりも後に著されたことになる。

続いて、BPP 75-78 が引用され³⁴、Śāntideva が説く二種の菩提心が言及される。

波羅提木叉: BPP 79-86

BPP 79-82 は、菩提心の後に「戒律の特殊な依処を示そうと望んでから」と述べ、引用されている³⁵。これは「波羅提木叉を保持する者は、[大乘の] 菩薩の律儀も有している」というものであるが、その典拠として彼の師である Bodhibhadra の『律儀二十論細疏』を引用している。『菩提道灯論細疏』では、ここで「大中観 (dhu ma chon po)」という語句が最初に登場し³⁶、如来蔵説をその根拠としている。

BPP 83-86 の引用³⁷については、「比丘の律儀は共通ではない」と述べて、解説を行っているが、この箇所には注目すべき記述がいくつか見られる。まず、比丘の戒を二百五十三項目とすること、複数の部派の伝承を引用すること、羯磨への言及、律師の伝承に関する記述などである。また、ここには懺悔の方法について、自身の『過犯説示 (Āpattideśanā³⁸)』への言及³⁹が見られることから、『菩提道灯論細疏』著述時期はこの論所よりも後に著されたことになる。

このセクションの最後には、「声聞乗の機会を完成した⁴⁰」とあり、次の「大乘」のセクションと明確に区別している。

律儀: BPP 87-99, 128-136

「今度は大乘の道を示す」として、BPP 87-88 が引用され⁴¹、『菩提道灯論細疏』では指摘される『菩薩地 (Bodhisattvabhūmi)』の「戒品」が引用される。続いて「その儀軌はどのようなものか」とし、BPP 89-90 が引用され⁴²、さらに「よい師とはどのような者か」として BPP 91-94 が引用される⁴³。また、律儀を受ける儀軌については、『戒品』

³² D. 256a3-4, P. 295a7-8.

³³ Tib. D. Nos. 3969, 4490, P. Nos. 5364, 5403.

³⁴ D. 256b5-6, P. 296a2-3.

³⁵ D.258a5-6, P. 297b5-6.

³⁶ D.258b5, P. 298a7.

³⁷ D. 259b2-3, P. 299a5-6.

³⁸ D.No3974,P.No5369.

³⁹ D. 263b5, P. 304a5.

⁴⁰ D. 264a2, P. 304b2.

⁴¹ D.2645-6, P. 304b6-7.

⁴² D.264b1, 265a4, P. 305a2, 305b7.

⁴³ D. 264b2, P. 305a3.

と私が著した儀軌を見るべきである」とするが、後者は同じ著者の『発心律儀儀軌次第』のことである。

上記の「よい師」に対して、「師のいない場合」として **BPP 95-99, 128** が引用される⁴⁴。 **BPP 100-127** が引用されない理由としては、この部分は『文殊仏国土莊嚴經 (*Mañjuśrībuddhakṣetrāṃkārasūtra*)』からの引用から成り立っているからであり、前の『施勇所問經』の事例と同じ理由である。また、このセクションにおいて、律儀に関する *Asaṅga* と *Śāntideva* の流儀が言及される。

BPP 129-130⁴⁵については、身口の浄化は律儀戒、意の浄化は撰善法戒と衆生利益戒によるとし、**BPP 131-13**⁴⁶を引用する。戒の三学の解説については「戒品」からの引用をそのまま用いている。

BPP 133-136⁴⁷については、完全な菩提を得ようとし、その原因である福德を望めば、菩薩の律儀を励み、努力することで、福德の集まりが完全になるとし、*Bodhibhadra* を始め、多くの経論が引用される。

神通: **BPP137-145, 153-160, 163-164**

このセクションは、「戒だけでは菩提心は十分に保たれず、三昧と智慧を起こすべきである」と始まり、三昧により神通を起こすことを示して、**BPP 137-140**⁴⁸が引用される。続いて、「まとめた後に示したものである」として偈頌が引用されている。『菩提道灯論』を著した後に示したという意味であろう。そして喩例として、**BPP 141-144** が引用されている⁴⁹。ここにおいても、『菩提道灯論』の「神通力 (*mngon shes stobs*)」を『菩提道灯論細疏』では「神通を得る (*mngon shes thob*)」と読んでいる。これもチベット語の文字を筆記する上での誤りであろうが、『菩提道灯論細疏』にはこの偈に対するコメントがないことから、これがどの段階で、どちらが誤って読んだのかは明らかではない。

BPP 145⁵⁰については、**BPP 145-152** の二偈は「そのような長さのものである」として、コメントは付されない。

BPP 153-156⁵¹は、「戒から止が生じ、止から神通が生じる」として引用されている。

⁴⁴ D. 263a7-bl, P. 3()6a4-5.

⁴⁵ D. 267a5 P. 308a6.

⁴⁶ D. 267b2-3, P. 303b5.

⁴⁷ D. 268a6-7, P. 309b3-4.

⁴⁸ D. 272b2, P. 314b34.

⁴⁹ D. 272b4, P. 314b5-6.

⁵⁰ D. 274a6, P. 316b4-5.

⁵¹ D. 274b1, P. 316b7-8. ただし、デルゲ版とチョネ版は、**BPP 153** を引用しない。

そのために止を完成させるためとして、BPP 157-160 が引用される⁵²。ここには引用されない BPP 161-162 が示すように、これらは Bodhibhadra の『三昧資糧論』からの引用に基づいて詳細に解説されている。このことは、続いて引用される BPP 163-164⁵³についても同様であり、ここでは神通よりもそれを得るための止の解説に重点が置かれている。

また、『菩提道灯論細疏』には、「そのようなヨーガ行者が止を完成させた後に、前に説明をした五神通を完成することには疑いが無い、と師がおっしゃっている⁵⁴」という記述がある。この部分は BPP 165-166 の「ヨーガ行者が止を完成させれば、神通も完成させるであろう⁵⁵」という偈と同じ内容を述べたものである。これが根本偈を補足したものならば、ここにあげられた「師」とは Dīpaṃkaraśrījñāna 自身のことを指すのであろうか。それとも、根本偈の内容が Bodhibhadra のものであることを示しているのであろうか。

方便と智慧: BPP 167-168, 175-185, 189-208, 212-213, 218- 219, 224, 237-240

「今度は福德の集まりと智慧の集まりの関係を完成すべきである」として、BPP 167-168 が引用される⁵⁶。『菩提道灯論細疏』は、この句に「観に依存すべきである」という語を補っている。

「今度は方便と智慧が詳しく解説されるべきである」とし、BPP 175⁵⁷と 176⁵⁸が引用され、その間に『維摩経 (Vṃlalakīrtinirdeśa)』からの句が引用されている⁵⁹。しかし、これはここには引用されない BPP 173-174⁶⁰と同じ内容を述べたものであり、『菩提道灯論細疏』の著者は引用と認識していたと思われる。

「方便と智慧」を説明するために、BPP 177-180 が引用される⁶¹。その経証として、

⁵² D. 274b2-3, P. 317a2-3.

⁵³ D. 275a6, P. 317b7-8.

⁵⁴ BMDP, D. 275b7-276a1, P. 318b3-4:

de lta bu'i rnal 'byor pas zhi gnas grub par gyur nas sngar bshad pa'i mngon par shes pa lnga po dag 'grub par 'gyur ba la the tshom med do zhes bla ma gsung ngo //

⁵⁵ BPP 165-166.

⁵⁶ D. 276b5, P. 319b3.

⁵⁷ D. 276b6, P. 319b5.

⁵⁸ D. 276b7, P. 319b6. ただし、『菩提道灯論』の“de phyir”を『菩提道灯論細疏』では、“de bas”と訳している。

⁵⁹ BMDP, D. 276b7, P. 319b5-6:

thabs dang bral ba'i shes rab ni 'ching ba'o // shes rab dang bral ba'i thabs kyang 'ching ba'o //

ただし、北京版は、後半部分を欠いており、前半の直後にそのまま BPP 176 を並べている。Cf. *Bhāvanākrama*, G. Tucci 1958: 194.

⁶⁰ BPP 173-174:

thabs dang bral ba'i shes rab dang // shes rab bral ba'i thabs dag kyang //

⁶¹ D. 278a1, P. 321a2.

Bodhibhadra の説として、BPP 181-184 が引用される⁶²。すなわち、『菩提道灯論細疏』の著者はこの根本偈を *Dīpaṃkaraśrījñāna* 自らの言説ではないと認識している。

BPP 185 の引用⁶³は、「長さのままである」と述べるだけである。

BPP 189-192 の引用⁶⁴は、蘊・界・処などの一切のものは不生であり、自性を欠くものであると知ることが「智慧」であるとする。

続いて、諸存在の不生の四大因が、(1) 生滅の四句、(2) 金剛片の因、(3) 離一多性の因、(4) 縁起の因としてあげられ、それぞれ BPP 193-196⁶⁵、197-200⁶⁶、201-204⁶⁷、205-208⁶⁸が引用されている⁶⁹。この後に、中観派の文献が列挙されている。

BPP 212⁷⁰については、「大中観の宗義は次の通りであると言うだけで、詳しくは説かない」とし、瑜伽行を領受しようとする者たちにまとめてから示したものであるとし、引用されている。

BPP 213⁷¹は、「本文の通りである」とされる。

BPP 218⁷²については、「いかなる法も見ることがないものであることを、最高の真実と見る」と経典に説かれているとする。また、それを理解する心さえも存在しないとして、BPP 219⁷³が述べられている。続いて、分別さえも捨てるべきであるとして、BPP 224 が引用されている⁷⁴。

次に、「論理の観点から、一切法不生を論証した後に、今度は聖教の観点から一切法不生を示す」として、BPP 224 と 225 の間に挿入される「そのように世尊により」という句⁷⁵が引用されている⁷⁶。BPP 228 と 239 の間には、「とお説きになられている。『入無分別陀羅尼 (*Avikalparaveśadhāraṇī*)』にも⁷⁷」という句が挿入され、BPP 232 の後にも、「とお説きになられている」という句が見られる。『菩提道灯論細疏』のこの箇所引用されている句は、七音節で成り立っているが、その他は韻律には関係ないもので

⁶² D. 278a3-4, P. 321a5-6.

⁶³ D.278b4-5, P. 321b3.

⁶⁴ D. 278b6-7, P. 322a3.

⁶⁵ D. 279a4-5, P. 322b1-2.

⁶⁶ D. 279b2, P. 322b7-8.

⁶⁷ D. 279b5-6, P. 323a5.

⁶⁸ D. 280a1-2, P. 323b1.

⁶⁹ 江島 1980: 240-241.

⁷⁰ D. 281a5, P. 324b8-325a1. ただし、『菩提道灯論』の “*phyir ni*” を『菩提道灯論細疏』では “*don du*” と訳している。

⁷¹ D. 231a6, P. 325a2.

⁷² D. 281a6, P.325a2. ただし、『菩提道灯論』の “*gang zhiḡ*” を『菩提道灯論細疏』では “*gang gi*” と訳している

⁷³ D. 281a1, P. 325a5.

⁷⁴ D.232a2, P. 325b8.

⁷⁵ Tib.: *de ltar yang bcom ldan 'das kyis //*

⁷⁶ D. 283a7, P. 327b3.

⁷⁷ Tib.: *zhes gsungs so // mam par mi rtog par 'jug pa'i gzungs las kyang /*

あり、偈頌で著された『菩提道灯論』の構成要素としては異質なものとなっている。従って、『菩提道灯論』では引用文として表現されている BPP 225-232 については、『菩提道灯論細疏』では引用しないものの、根本テキストの一部として把握していたと思われる。ただし、『菩提道灯論細疏』はこの後に経証として種々のテキストを引用するものの、根本偈に引用される文章には言及しない。

この後に、経証となる經典名の列挙に続き、諸軌範師を列挙し、BPP 233-236 をまとめているものの、『菩提道灯論』からの引用はなされていない。

BPP 237-240⁷⁸のこのセクションのまとめの偈を述べた後、『菩提道灯論細疏』は Maitreya の『現觀莊嚴論 (*Abhisamayālaṅkāra*)』とその Haribhadra と Āryavimuktisena の注釈により説かれる五道を学ぶべきである、とする。そして最後に、「波羅蜜乗を完成した」と述べて、このセクションを終えている⁷⁹。

マントラ: 241-244, 247-251, 257, 269-272

「今度は無上乘で、大乘の真言乗が述べられるべきである」として、BPP 241-244 を引用して⁸⁰、本節は始まっている。

BPP 247 を引用し⁸¹、よく知られているタントラの区分が説かれている。

BPP 247 の末尾を補うものとして、BPP 248-249⁸²、250-251⁸³が引用され、軌範師からの灌頂について詳論されている。続く BPP 250-256 についての言及は見られない。

続いて引用される偈は、BPP 257⁸⁴のみである。この「『從本初仏出現タントラ (*Ādibuddhamahātantra*)』に」という引用に続いて、タントラから引用されている。この BPP 257 の二度目の引用⁸⁵について、『菩提道灯論細疏』は「などの十二バーダの意味については *Ser gling pa* の教誡に依存している」として、彼のテキストを引用する。

BPP 269-271⁸⁶については、梵行だけではなく、軌範師からの灌頂の必要性を説いている。

最後の BPP 272 の引用⁸⁷については、先師の説に言及して、密教經典の不過失性を論証している。

⁷⁸ D. 285b1-2, P. 330a3.

⁷⁹ D. 286b3, P. 331a3.

⁸⁰ D. 286b6-287a1, P. 331b5-7.

⁸¹ D. 287a4, P. 332a4.

⁸² D. 287b7-288a1, 288b4, P. 333a2-3, 334a1-2.

⁸³ D. 288b6, P. 334a4.

⁸⁴ D. 289a3, P. 334b2.

⁸⁵ D. 290a6-7, P. 336a1-2.

⁸⁶ D. 290b4-5, P. 336a8-bl.

⁸⁷ D. 291a2, P. 336b6.

『菩提道灯論細疏』における補足偈について

『菩提道灯論細疏』に引用される根本偈は以上であるが、『菩提道灯論細疏』では根本偈とは別に、著者自身が著した偈頌が見られる。最初のもの⁸⁸は、

Byang chub 'od がいつの時も私に七句の問いにより、「根本 [偈] における意味が明らかではない」という請願 [をするので、そ] のために著される⁸⁹。

と、『菩提道灯論細疏』の著作理由を述べたものである。続いて、Vasubandhu の『釈軌論 (Vyākhyāyukti)』を引用した後、

経典などの聖教と論書と、師たちによる著書のように、菩薩たちの道が私により確実に解説されるであろう⁹⁰。

と述べ、『菩提道灯論』の冒頭の偈の解説に入っている。

続いて、『菩提道灯論細疏』の読者がそれぞれの儀軌において述べるべき句があげられている。帰依のセクションでは、三宝に供養をした後、

最高の人よ、心に留めて下さい。無始以来これまで私は生死を転じております。苦しみにより疲れ果てています。何であれ苦しみの終わりを生み出すその道を、あなたは私に示して下さい⁹¹。

という偈を三度述べることを説き、また、発菩提心のセクションにも、

一切智の束をお持ちで、生存の輪を浄化する方よ、あなたの足元の蓮の華を除いて他の主に帰依をすることはありません。有情の英雄である偉大なムニよ、私に大徳をお与え下さい。最高で無上なる菩提を、かの聖者よ、私にお与え下さい⁹²。

⁸⁸ これ以前に、『菩提道灯論細疏』の冒頭に帰敬偈が述べられているが、その作者については、テキストの著者なのか、訳者なのか、明らかではない。

⁸⁹ D. 241b4, P. 278a7.

⁹⁰ D. 241b6-7, P. 278b1-2.

⁹¹ D. 248a5-6, P. 286a3-4.

⁹² D. 249a5-6, P. 287a5-6.

と三度述べることを説いている。これらの句は、Dīpaṃkaraśrījñāna 自身が『菩提道灯論細疏』を著す際に作ったものか、すでに存在していた句の引用なのかは明らかではない。いずれにせよ、これらは『菩提道灯論』を説明するものではなく、儀軌の際に述べる句をここに提示しただけのものである。

律儀を説くセクションにおいて、二度目の BPP 89-90 を引用した後に、

律儀を受ける儀軌と、異門と、律儀を捨てる原因と、捨てない原因をもつことと、戒の功德とである⁹³。

と述べられている。『菩提道灯論細疏』では、以下の注釈をこれらの五項目に基づいて行っている。従って、この偈は、このセクションのまとめの偈になる。また、同じセクションの最後には「ここに言う」として、

三宝を尊敬し、対象に執着することが捨てられ、死を憶念し、戒を第一にし、師を尊敬することをそなえ、騙すことがなく、悪友は捨てられ、[六]時に加行をそなえている。

六時を[三つずつ]十八部に分ける。晨朝に三つがあり、初分や、中分に過失が生じたら、その後分において菩提心を忘れ、菩薩は損なわれるだろう。

後の五時もそれにより繰り返される。各時によく治すのが、最高の人である。中位の人の中分においてである。後分に治すのは、劣ったである。

最高に優れた人は、第一の刹那において治す。最高の中位の人、第二の刹那において治す。最高の最後の人、最後の刹那において治す。

そのようになるので、上位と中位の九つ人の後のすべての人にもそれにより、繰り返されるべきである⁹⁴。

と十八パーダよりなる偈が引用されている⁹⁵。

神通のセクションには、BPP 137-140 と BPP 141-144 の引用の間に、

二資糧を集めようとする事と、常に利他をなそうとする事により、神通が起さされなければ、盲人の行いや、狂った者の行いや、家畜の行いのように、自利も

⁹³ D. 265a4, P. 305b7-8.

⁹⁴ D. 271b7-272a3, P. 313b7-314a3.

⁹⁵ この前後には Bodhibhadra の *Bodhisattvasaṃvaraviṃśakapañjikā* とある偉大な賢者の説が並記されていることから、著者自身の句ではない可能性もある。

完成できずに、どうして利他也成立できようか⁹⁶。

という偈頌が述べられている。『菩提道灯論細疏』では、この偈に「まとめた後に示したものである」と添えられており、『菩提道灯論』をまとめた後に説いたものと解釈することができる。

方便と智慧のセクションでは、BPP 189-192の「智慧」を説明した後に、

[六] 波羅蜜と、[四] 摂事と、四無量と、七支分と、十法行と、その他の善なる行為と、聖なる七宝と、六念などと、

マンダラ [を捧げること] と、小像制作などが方便であり、受用と変化身 [の原因である] と智慧波羅蜜の一つだけが知恵であり、法身の原因である⁹⁷。

という偈頌が述べられている。またインドの中観論師の相統を述べて、

聖 Nāgārjuna のお言葉のその甘露により、Āryadeva、Candrakīrti、Bhavya、Śāntideva、Bodhibhadra まで満たされ、私に少しずつ注がれる。

そのように四大因により、一切の法は生じることはない、と論証されている。昔の軌範師たちに従い、大中観の教義に住すべきである⁹⁸。

というものと、

今は、衆生や、時や、煩惱や、見解や、寿命の汚濁 [の時代に] なっている。諸教義を聞く必要がないから、核心の意味であるヨーガを修習すべきである。

今の時代では、船と同じ広大な諸教義を聞く時間がないので、意を惑わすすべてのものを捨てるべきであり、聖者の近くに示された何れかのものを修習すべきである。

この寿命は短く、知るべき相は多い。寿命もどれだけなのかわからないので、鷺鳥が水から乳を取るように、自分が望むものを受ければよい⁹⁹。

という偈頌が述べられている。この後に「根本 [偈] 自身にも解説されている」として、

⁹⁶ D. 272b2-3, P. 314b4-5.

⁹⁷ D. 279a1-2, P. 322a5-7.

⁹⁸ D. 280a6-7, P. 323b7-324a1.

⁹⁹ D. 280a1-2, P. 324a1-4.

根本偈を解釈している。さらに、BPP 224 の解説箇所において、「Bodhibhadra に従うべきである」とし、

真実において考察するならば、顕現する法をそなえるすべてのものと、宗義などにより考察されたものはすべて、迷乱であり、虚偽である、と認められる。

例えば、眼病者が病気という過失により、針や、髪を結ぶ糸や、二つの月や、蜜蜂のあつまりを見たり、それを把握する知も存在する。

例えば、眠っている時に、眠りの力による薫習により、楽と苦や、物質などを領受し、それを把握する知も存在する。そのように、無始の時より、無明の限病という病の過失により、内外の事物を領受し、それを把握する知も存在する。

また、無始の時より、無明の大熟睡という誤りにより、四つの薫習の夢を見、それを把握する知も存在する。

勝義において考察すれば、諸法の法性により、それらの誤った分別が、存在や非存在を論証することはできない。

例えば、眼病者が健康でない際に、髪を結ぶ糸が存在しないとは言えず、限病者が適当である際も、髪を結ぶ糸は存在するとも言えない。

例えば、無明の睡眠から醒めれば、夢を見ることはできないし、睡眠から醒めない限り夢が存在しない、とも言えない。

眼病を克服して、夢から醒めたならば、髪を結ぶ糸などや夢を把握する知も存在しない。

同じように、無明の限病と無明の熟睡から醒めれば、顕現し、考察されるすべてのものを領受する知も存在しない。

「中断する」とか、「中断しない」と述べられるものが存在する、というそれも中断する。法性には、それが存在しない。突然に童子が考察したに尽きている。

それ故に、軌範師 Śāntideva は、中断することをここではお認めにならず、その教誡は存在せず、「中断の教えである」と言う。

ここには、明らかにされるものは何も存在しないし、設定されるものも僅かばかりも存在しない。真実であるものを、真実と見べきであり、真実を見れば、解脱するであろう。

自らと他者との宗義で、ある者は「諸法は存在する」と論証し、他の者たちは「諸法は存在しない」と言う。真実として考察すれば、「存在する」とか、「存在しない」と言うものは、究極の真実においては、それらは存在しない。それ故に、どこにおいても論証できないのである。

師の相續を離れた者たちは、推論の知恵により、有、無、常、断などを論証しても、疲れてしまい目的に至らないであろう。

Dharmakīrti や、Dharmottara が多くの著書を著したように、外道の論難を退けるために、賢者たちが著している。

それ故に、「勝義において修習すべきものには論理学は必要ない」と私は他所で述べているので、まずここでは述べる必要がない。

それ故に、推論を最高のものとしている論理の諸著書を投げ捨て、聖 Nāgārjuna の聖典を相續する教誡を修習すべきである。

有でなく、無でなく、有無でなく、両者でないものでもない、四つの極端から脱しているそのことが、中観論者により知られる。

常でなく、断でなく、常でも断でもなく、両者でないものでもない、四辺より脱しているそのことが、中観論者により考察される。

有無のようなものを超越し、常断は捨てられ、知や所知を脱するこのことが、大中観の教義である。

推論を最高のものとしてから、有、無、常、断などを説いても、その法性には従わず、増益や、損減をするに尽きている。

例えば、金と、虚空と、水などは、自性がなくても、過失と結びついているように現れても、それらの過失には従わない。

増益や、損減は捨てられ、すべての仮設されたものから確実に脱した真実たるものを修習すべきであり、宗義にとどまるべきではない。

聖 Nāgārjuna と、Āryadeva と、Candrakīrti と、Bhavya と、Śāntideva とを相承した教誡だけを修習すべきである。もし相承がないのならば、彼らにより著された文献を何度も見るべきである。

すべての法は、「ア」の門をそなえている。本来生じることはなく、滅することもない。本質により涅槃であり、自性としては清浄である。

見ることも、見ないことも、見られるものも、見る者も、見ることを知ること、何も存在しない。ムニは常に、心を等しく瞑想している。

すべての分別が捨てられ、法界にとどまる際に、大ヨーガの知恵において、生じることや入ることを彼は望まない。

それ故に、瞑想に従って得た者たちは、仏を自分自身に望まず、[菩薩] 地に住していると『無分別陀羅尼』より解説される。

この意味は、ここでは詳しく著さない。私の著書を把握している師を尊敬などにより供養して、何度も尋ねるべきである。

一切智者により授記された聖 Nāgārjuna から相承をした Bodhibhadra に従った後に、[他の] いかなる宗義も受けるべきではない¹⁰⁰。

という 129 パーダよりなる偈頌が述べられている。また、BPP 237-240 を解説する箇所には、

爰から把握して、すなわち加行道と、見道などの十地と、三身などの設定は、著書が大きくなってしまふ恐れがあるので、ここには書かない。経典や論書を明らかに、注意して見るべきである¹⁰¹。

という偈頌が述べられている。このセクションに説かれている偈は、根本偈を補う形で説かれたものである。

また、マントラのセクションの最後には、

如意宝のような変化身が去り、聖 Nāgārjuna などの偉大な賢者たちも存在せず、ムニの正法も沈みかけている今この時に、狂者のような誤った理解の人が多く生じている。

師が相承した教誡を離れて、経典や論書の経函を見ることにより、深い大海のような御言葉の意味を修行している。彼らは盲人のようになっており、大乘の最高の道を彼は知らない。それ故に、誤った理解に従うべきではない。

よいものが生じる場所である大乘の道を、師の目のようなものが存在しないことで、[これまで] 見ておらず、[現在も] 見ず、[これから] 見ないであろう。

大乘は大海のように深く、虚空のように広大である。師がいなければ、自分が喜ぶように説き、その経典と論書の経函を見ることだけで満足して、師に頼らない。

彼らは大乘の話の順序さえも知らないので、深く広大な意味を見ることがどこにあるか。大乘のよい薫習がある正しい師が摂受した人は、何れかの賢者に従う。説法が減び、大きな恐怖がある今この時に生まれたので、分別をもつ賢者たちは放逸することなく、よい師を相承した人がどの国や地方にいるのか尋ねる。

[師を] 得てから、何ヵ月も何年も仕えて、奉仕を正しい在り方の通りになし、喜ばすべきである。その人の身体と言葉の行がとても悪い在り方で行われても、それを見ずに、正法を取るべきである。

¹⁰⁰ D. 282a4-283a2, P. 326a3-327b2.

¹⁰¹ D. 285b7-286a1, P. 330b2-3.

例えば、蜜蜂が花を把握した時に、蜂蜜を運び去った後に花を忘れてしまうように、その賢者もそれと同じように行じる。すなわち、[師の]行が正しい在り方[かどうか]を見ずに、その教誡を聞いているのである。

その教えのために心を修習すれば、今生に菩提が得られるので、『チャクラ・サンヴァラ (*Cakrasaṃvara*)』などのタントラの教誡を師から相承した方をお願いするべきである。

第二灌頂を捨て、マントラの教義を知らなければ、多くの分別に縛られてしまい、速やかに成仏しないであろう¹⁰²。

という偈頌が述べられ、続いて、

ムニの華やかな教えを損なっており、師の正法を壊す者が、今この時に説法を壊すならば、仏自身の弟子以外の外道や凡夫は、ムニの教えを誰も壊すことはできない。

特に出家者が壊す。ある者は、真言のタントラに従って誤った行をなし、他者にも誤って示す。ある者は、智慧波羅蜜の真実の意味を知らずに、因果などの世俗を否定し、「自性は清浄である」と言う。

ある者は、波羅提木叉と律の学処に説かれた限りのものを捨ててから、在家の者と一緒に経堂でも国土や利益などについて色々な話をなす¹⁰³。

という偈頌が述べられている。これは、マントラの箇所をまとめただけでなく、全体をまとめた形で説いたものと思われる。

『菩提道灯論細疏』の最後は、正法を滅ぼす者について、『入楞伽經 (*Laṅkāvatāsūtra*)』と『俱舍論 (*Abhidharmakośa*)』を引用した後に、

この聖者の教誡を詳しく述べたものを、仏説が存続する限り、その悲心である菩提心をそなえた者は、精進して、昼夜修行しなさい¹⁰⁴。

という偈頌を述べて、注釈を終えている¹⁰⁵。従って、『菩提道灯論』とは別の結びの偈

¹⁰² D. 291b2-292a3, P. 337a8-338a2.

¹⁰³ D. 292a3-5, P. 338a2-6.

¹⁰⁴ D. 292b2, P. 338b3-4.

¹⁰⁵ 『菩提道灯論細疏』のチベット語訳テキストは、この後に弟子により著された偈頌と編者の偈頌が添えられている。

が用意されていたことになる。『菩提道灯論細疏』は、偈頌で書かれた根本テキストに対する散文の注釈書であるが、そこには根本偈を補足する偈頌が説かれている。これに対する著者の明解な説明はなく、その意図は不明のままである。また、これがどの時点で著されたものであるかも明らかではない。Dīpaṃkaraśrījñāna のテキストの多くは偈頌で書かれていることなども、何らかの理由になるであろう。

まとめ

以上見てきたとおり、『菩提道灯論細疏』に引用される根本偈と『菩提道灯論』自身のテキストの間には、いくつかの相違点が見られる。中でも、BPP 51-54 の問題については、両者の間に溝があることを示している。これがそのまま『菩提道灯論細疏』の著者の問題を解決するまでには至らないが、疑惑の根拠となりうるものであろう。

また、『菩提道灯論細疏』では、『菩提道灯論』の中でも経典の引用をまとめた偈頌に対しては注釈が行われていない。このことは、『菩提道灯論細疏』の著者は、引用であることを明らかに認識した上で、注釈を行ったと推測できる。 .

『菩提道灯論細疏』には、Dīpaṃkaraśrījñāna の他の著作への言及が見られる。従って、『菩提道灯論細疏』は、これらの著書の後で著されたことになる。すなわち、『菩提道灯論』、『帰依説示』、『発心律儀儀軌次第』『過犯説示』の三つの著書は、『菩提道灯論細疏』に先行することが確定する。また、根本偈とは異なる補足偈を多く述べていることから、『菩提道灯論』の著作よりしばらく時をおいてから『菩提道灯論細疏』は著されたように思える。

『菩提道灯論』和訳

インドの言葉で、*Bodhipathapradīpa*

チベットの言葉で、『菩提道灯論』

菩薩マンジュシュリー法王子に敬礼する

三時におけるすべての勝者たちと、その法と、僧たちに対して大いなる尊敬をもって敬礼をする。善妙なる弟子のチャンチュップ・ウーが請願するので、菩提への道の灯をよく明らかにするべきである。[1-4]

劣った者、中位の者、優れた者となっているので、人を三種として知るべきである。それらの特徴を明らかにして、それぞれの区別が著わされるべきである。[5-8]

何らかの方法で輪廻の楽しみだけを自分自身のために求めているその人は劣った人と知るべきである。[9-12]

存在の楽しみに背を向けて、罪となる行いから退くことを本質として、自分の寂静だけを求めているその人は「中位」と言われる。[13-16]

自らが相続している苦しみにより、他者の苦しみをすべて完全に尽くすことを何よりも望んでいるその人は最高である。[17-20]

正しい衆生で、最高の菩提を望んでいる者たちに対して、師たちが説いた正しい方法が解説されるべきである。[21-24]

完全なる仏の像などと聖なる塔に向かってから、花や香や物といった価値のあるものを供養すべきである。『普賢行願讃』に説かれた七種の供養も〔なすべきである〕。[25-30]

菩提座に至るまで不退転の心により三宝を明確に信じ、膝を地面につけてから掌を合わせた後に、最初に帰依を三度なすべきである [31-36]

それから一切の衆生に対する慈愛の心が先行するので、三悪趣に生まれることなどや死などにより苦しんでいる全ての衆生を見て、苦による苦しみや、苦を苦しむ原因から有情を救おうと望むことにより、退くことなく誓願する菩提心を起こすべきである。[37-46]

そのように願心により起こされた功德となるものは、『入法界品』にマイトレヤが明らかに解説している。[47-50]

その経典を読誦し、師〔の説くこと〕を聞いて、完全なる菩提心の限りのない功德をよく理解すべきであり、その〔菩提心〕があることからの理由から、そのように繰り返し心を起こすべきである。[51-54]

『施勇所問経』にこの福德がよく説かれており、それを三偈だけにまとめて、ここに著わすべきである。[55-58]

菩提心の福德であるものに形態があるのなら、虚空界に遍満し、それはさらに広がるであろう。[59-62]

ガンジス河の砂の数ほどの仏国土を人が宝石で満たし、世間の守護者に施をなすことよりも、誰であれ掌を合わせて、菩提に心向ければ、この供養はさらに勝れたものになり、それには終わりはない。[63-70]

菩提を願う心を起こしてから、多くの努力によりあまねく広げるべきであり、これを他の生においても思い出すために、解説された通りの学処をよく護るべきである。 [71-74]

〔菩提に〕 入る心を本質とする律儀なしに、正しい誓願を広げることはない。完

全な菩提を願う [心] を広げようと望む者は、そのために努力によりこれを確かに受けるべきである。[75-78]

七部の波羅提木叉の他の律儀を常に保持する者たちには菩薩の律儀の部分があるが、他の者にはない。[79-82]

波羅提木叉を七部として如来がお説きになられた中、吉祥なる梵行が最高のものであり、比丘の律儀とお認めになられている。[83-86]

『菩薩地』の「戒品」に説かれた儀軌により正しい特徴を所持するよい師から律儀を受けるべきである。[87-90]

律儀の儀軌をよく知り、自分自身も何れかの律儀に住しており、律儀を与えることに耐え、悲をそなえているよい師を知るべきである。[91-94]

それを努力しても、これと同じ師を獲得できていないのならば、その他の律儀を受ける儀軌が正しく説明されるべきである。[95-98]

そこで、過去時にマンジュシュリーがアンバララージャになって菩提心を起こしたことが『文殊仏国土莊嚴經』に説かれているように、そのようにここに明らかに記すべきである。[99-104]

守護者の目の前で完全なる菩提に心を起こして、一切の有情を招き、彼らを輪廻から救う。[105-108]

害心や、怒りの心や、貪欲や、嫉みを今から菩提を獲得するまでの間、起こすべきではない。[109-112]

梵行を行うべきであり、罪悪と欲望は捨てられるべきである。戒律を喜ぶことで、仏に従って学ぶべきである。[113-116]

自分自身は、速やかな在り方により菩提を得ることを望まずに、一人の衆生のために最後の終わりまでとどまるであろう。[117-120]

無量で不可思議な国土を清浄にすべきであり、名称から把握すべきであり、十方に知られている。[121-124]

私は身と口との行為をすべて清浄にし、意の行為も清浄にするべきで、不善なる行為をなすべきではない。[125-128]

自分の身口意は清浄であるので、[菩提に] 入る心の主体は律儀にとどまっている。戒の三学処をよく学ぶことで戒の三学処に対する尊敬が大きくなる。[129-132]

それ故に清浄である完全な菩薩の律儀により制御される者たちは、努力することで完全な菩提の資糧が完成するであろう。[133-136]

福德と智慧を本質とする資糧が完全である原因を、一切の仏が神通を起こしたものとのお認めになられている。[137-140]

例えば、翼が破れて広げることができない鳥は空を飛ぶことができないように、そのように神通を得ることを離れた者は、衆生の利益をなすことはできない。

[141-144]

神通をもつ者の昼夜の福德は、神通を離れた者には百の生においでも存在しない。

[145-148]

速やかに完全なる菩提の資糧を完成しようとする者は、努力して神通を完成させるであろうが、怠惰によりなされるものではない。[149-152]

止を成立させずに神通は生じないであろうから、それ故に止を完成させるために、繰り返し努力するべきである。[153-156]

止の支分を損なっている者は、努力し修習したとしても、千年にわたっても三昧は完成しないであろう。[157-160]

それ故に、『三昧資糧論』に説かれた支分によくとどまり、適切な一つの対象に対して意識をよく集中するべきである。[161-164]

ヨーガ行者が止を完成させれば、神通も完成するであろう。智慧波羅蜜の行を離れていれば、障害は尽きないであろう。[165-168]

それ故に、煩惱と所知の障害を残らずに捨てるために、智慧波羅蜜をヨーガ行者は常に方便をともなって修習すべきである。[169-172]

方便を離れた智慧と智慧を離れた方便も、何故ならば「縛られている」と説かれているので、それ故にどちらも捨てるべきではない。[173-176]

「智慧とは何か」、「方便とは何か」という疑念は捨てられるべきでなので、方便と智慧の正しい区別を明らかにするべきである。[177-180]

智慧波羅蜜を除く布施波羅蜜などの善の資糧集のすべてを勝者は方便と解説している。[181-184]

方便を修習することにより、自分自身で智慧を正しく修習する人は、菩提を速やかに得るが、無我だけの修習では得られない。[185-188]

「蘊界処は生じることがないものと理解し、自性を欠くものであると知ることが、智慧である」と正しく説明されている。[189-192]

「存在しているものは生じる」というのは正しくない。存在していないものも、虚空の花のようなものである。二つの過失になってしまうので、どちらのものも生じることはない。[193-196]

事物は自らより生じないし、他のものからも、その両者からでもなく、無因からでもない。それ故に本質として自性は存在しない。[197-200]

また一切の諸法を一と多により考察するならば、自性は認識されないので、自性

は存在しないものとして確定する。[201-204]

『空性七十論』『根本中論』などからも、諸事物は自性を欠くものとして成立すると説明される。[205-208]

何故ならば、著書が大きくなるので、それ故にここでは広げず、完成した宗義だけを修習するために明らかに解説する。[209-212]

それ故に、すべての法の自性は認識されないので、無我を修習するそのことが智慧を修習することである。[213-216]

智慧によりすべての法のいかなる自性も見られず、その智慧自身の論理を解説し、分別することなく、それを修習するべきである。[217-220]

分別から生じたこの存在は、その分別の主体である。それ故にすべての分別を捨てることが最高の涅槃である。[221-224]

そのようにまた世尊も、[225+]

分別は大無明であり、輪廻の大海に落とすものである。無分別の三昧にとどまる者は、虚空のように無分別を明らかにする。[225-228]

と説かれている。[228+]

『入無分別陀羅尼』にも、[229+]

この正法を勝者の子が分別することなく思えば、越え難い分別を越えて、次第に無分別を得るであろう。[229-232]

と説かれている。[232+]

聖教と論理により、一切諸法は生じることのない自性の存在しないものであると確定してから、分別することなく修習すべきである。[233-236]

そのようにそのことを修習してから、次第に煖などを得てから、歓喜地などを得るようになり、仏の菩提は遠くない。[237-240]

マントラ力から成立した息災と増益などにより、賢瓶の成就などの八大成就などの力によっても、安楽に菩提の資糧を完全にすることを望み、所作と行などのタントラに説かれているマントラの行を望むのならば、その時に阿闍梨の灌頂のために、尊敬と宝などの布施とお言葉の成就などのすべてにより正しい師を喜ばすべきである。[241-252]

師を喜ばすようになったことで完全なる阿闍梨の灌頂によりすべての罪を浄化した主体そのものは、成就を完成する福分をもつようになる。[253-256]

『従本初仏出現タントラ』に、努力により禁じられているので、秘密と智慧の灌頂を梵行者は受けるべきではない。[257-260]

もし灌頂を受けるならば、梵行の勤苦にとどまることで禁じられていることを行

うことになるので、その勤苦と律儀を損なっている。[261-264]

その禁戒をもつ者は波羅夷罪を生じるであろうし、彼は悪趣に確実に墮ちるので、成就もありえない。[265-268]

すべてのタントラを聞き、解説し、護摩と供養などをした者が、阿闍梨の灌頂を得るようになり、真実を理解した者に過失はない。[269- 272]

長老ディーパンカラシュリーが経典などの法から解説しているのを見たチャンチュップ・ウーが請願して、菩提への道の解説がまとめられた。[273-276]

『菩提道灯論』という偉大な軌範師ディーパンカラシュリージュニャーナによる著作を完成した。

インドのその偉大な賢者自身と主任翻訳官ゲウエ・ロドゥが翻訳し、校正し、決定した。

この法は、シャンシュンのトリン寺で著された。

第2章 『入二諦論』

はじめに

チベット大蔵経のテンギュルでは、Dīpaṃkaraśrījñāna の顕教文献の多くが中観部に収録されている。また、後にチベットで著された仏教の宗義書では、彼は中観帰謬派に配属されることがある。彼の著作の中に、『中観説示』という論書があり、また主著である『菩提道灯論』においても、智慧波羅蜜の内容が中観の立場での無自性の把握とされていることから、中観思想を顕教の中で最も重要な教えと認識していたことがわかる。しかしながら、それらの著書に彼の思想的立場を中観帰謬派と断定する根拠を見いだすことは難しい。彼を中観帰謬派とする判断基準は、Candrakīrti との関係に基づくことになる。そのために、彼が Candrakīrti の二諦説をどのように理解していたのか、ということが論点の一つになっており、その判断の根拠となったのが『入二諦論 (Satyadvayāvatāra)』である。しかしながら、このような視点は、Candrakīrti や『入二諦論』という限定的な視点から彼の思想的特徴を判断しようとするものであり、Bhavya や他の著書の視点から見れば、それとは異なる印象になる。

この『入二諦論』については、すでに江島惠教¹、クリスチャン・リントナー²による詳細な研究があり、近年ジェームス・アップル³がチベットで著された注釈書に基づく研究を発表している。これらの成果を踏まえて、宮崎泉は Dīpaṃkaraśrījñāna の中観理解の問題点を簡潔にまとめている⁴。本章では、これらの先行研究に基づいて、本論を簡略に紹介する。

『入二諦論』の構成

本論は、Dīpaṃkaraśrījñāna による二諦の定義で始まっている。まず、全体の構成を簡単に示すと、次のとおりになる。

1. 二諦の区別 [1-4]
2. 世俗諦の定義 [5-12]
3. 勝義諦の解説 [13-36]
4. 論理学批判 [37-67]
5. 勝義と世俗をつなぐもの [68-84]

¹ 江島 1983, 2003.

² Lindtner 1981.

³ Apple 2013.

⁴ 宮崎 2009, 2013.

6. 世俗の解説 [85-100]
7. まとめ [101-104]
8. 著作理由 [105-120]

全体の構成は、このように簡略なものであり、まず二諦を、「世間の世俗諦」と「真如の勝義諦」と区別した上で、前者には、誤った世俗諦もあることを示し、正しい世俗諦と区別した上で、前者を水の中の月と誤った宗義との喩例で解説し、後者を、単に喜ばしいだけの生滅の法で、効果的作用をともなうものと説明をする。

二諦の区別に続いて、勝義諦が説明される。それは、法性たるものであるから不二であるとし、経証を引用する。それにより、不生不滅として見られるもの、無分別による空性、不可言説、無為などの異門により勝義を説明する。「ヨーガ行者の理解により二障が捨てられるが、現量と比量により空性は理解されることはない」と言うことを述べており、勝義は三昧などの瞑想修行により獲得する境地であり、論理学的方法で獲得するものではない、とも述べている。

これに続いて、論理学批判が少し詳細に述べられている。論理学的手法は、外道の論難を退けるために賢者が作ったものであり、それは仏教と外道に共通な形式である、と述べている。そのために、二量で空性が理解できるのならば、外道も法性を理解することになってしまうのである。その根拠として **Bhavya** に言及した上で、空性の真実を見た **Nāgārjuna** と **Candrakīrti** を相承した教えにより法性の真実が理解されるとする。空性と法性が述べられているが、法性とは仏の教えのすべてが入っているものであり、空性の理解で解脱に至るとなる。すなわち、ここでは論理学は勝義に至る方法ではないことが説かれている。

勝義に続いて、勝義と世俗を繋ぐものが説明される。ここでは、空性の理解には真実の世俗の理解が必要であることを述べ、その根拠として『六十頌如理論』第三十一偈と『中論』第二十四章第二偈を引用する。勝義は言語を超越しているものの、その理解は言語に依らざるを得ないことが示され、世俗諦の階梯の上に勝義諦があることが説かれている。

世俗と勝義の関係を述べた後に、世俗諦が解説される。すなわち、世俗諦は、因と縁により成立する顕現するままのものであるが、それが断たれて成立しないものが誤った世俗となる。

最後にまとめの句として、二諦の見解に誤りがなければ悪趣に行かず、解脱に至ることを説いて本論が終わる。

著書は、さらに音韻数を九音に増やした四偈が続いている。そこでは、著作理由が、

短い寿命で知るべきことが多いので、この二諦説の解説が著されたと、と説かれているが、本論が書かれた後に付された句であり、そこに時間的差異を推測することもできる。また、ここで、スヴァルナドヴィーパの王が二度言及され、彼は師 **Pāla** とも言われる。先行する和訳では、チベットで **gSer gling pa** として知られる **Dharmakīrti** とするが、**Dīpaṃkaraśrījñāna** が彼を「王(rgyal po)」と呼ぶのかは、確認が必要である。「スヴァルナドヴィーパの師」の語に引っ張られれば **gSer gling pa** となるが、「**Pāla** 王」に依ればパーラ朝の王を推測させることになる⁵。

まとめ

Dīpaṃkaraśrījñāna を **Candrakīrti** と結びつける根拠の一つが本論における勝義諦理解である。**Bhavya** や **Śāntarakṣita** が二義的勝義を説くのに対して、**Candrakīrti** は一義的勝義を説くという理解に基づき、本論では二義的勝義が説かれないので、**Candrakīrti** 説に依拠した、というものである。しかしながら、本論ではそれが説かれていないというだけであり⁶、**Bhavya** や **Śāntarakṣita** の解釈を批判することはなく、**Bhavya** には自らの論拠として言及までしているのである。ただ単に説かれなかっただけであり、そのことだけで **Candrakīrti** の説を選択したということまでは断定できないのである。むしろ、この解釈の相違を知っていたのかどうかは明らかではないが、この小論ではそれに言及しなかったと考える方が自然である。

現代の我々は、中観の論師たちを自立論証派と帰謬派という見方で後期インドの論師たちも見るとある傾向にある。しかしながら、そのような見方は現実を誤って見てしまう可能性がある。テキストが語っている以上のことを脚色することなく、単純にテキスト自体が語っていることを性格に理解すべきである。

『入二諦論』和訳

インドの言葉で、*Satyadvayāvatāra*

チベットの言葉で、『入二諦論』

大悲者に敬礼する。

諸仏の説法は、二諦に正しく依っている。世間の世俗諦と、真如の勝義諦とである。

[1-4]

⁵ ただし、「スヴァルナドヴィーパの王である師パーラ」となり、師と王の語を入れ替えての解釈となる。

⁶ 宮崎 2012: 158.

世俗は二種と認められる。すなわち、誤ったものと、正しいものである。最初のものに二つあり、水の中の月と、悪い宗義とである。[5-8]

考察されずに単に喜ばしいだけの生滅の法で、効果的作用をともなうものが、正しい世俗であると認められる。[9-12]

勝義は、ただ一つである。他の者たちが二種と主張しているものは、如何なるものとしても成立しない。その法性たるものが二つ、三つなどということが、どこに成立しようか。[13-16]

説かれた言葉の結合により、不生、不滅などと述べられる勝義は、別異がない在り方により、有法も法そのものも存在しない。[17-20]

空性には、別異は僅かばかりも存在しない。「無分別の在り方で考察すれば、空性を見る」と言説で設定されている。[21-24]

「見えないことそのものが、それを見ることである」と甚深なる経典に説かれている。そこに、見えるものと、見るものとは存在せず、始めと終わりもなく、寂静である。[25-28]

事物と事物がないことは捨てられ、無分別で、所縁を離れ、場所はなく、とどまることはなく、行くとはなく、去ることはなく、比べるものを離れている。[29-32]

言説として存在せず、見られることがなく、変化することがなく、無為なるものである。ヨーガ行者がそれを理解すれば、煩悩と所知の障碍は捨てられる。[33-36]

「直接知覚と推論のその二つを仏教徒は把握しており、二つにより空性は理解される」と此岸を見る愚者は言う。[37-40]

外道や声聞たちも、法性を理解することになってしまうであろうし、識論者は言うまでもない。中観者と異なるものがないからである。[41-44]

それ故に、すべての宗義も量により量るので同じものになる。すべての論理は同じではないので、量により量られる法性も多くものになってしまうのではないか。[45-49]

直接知覚と推論は、必要がないものであり、外道の論難を退けるために、賢者たちが作ったものである。[50-52]

聖教にも明らかに、「有分別と無分別の二知により無分別を知る」と軌範師である賢者バヴィヤが説いている。[53-56]

「空性は誰が理解したのか」と言うのならば、如来により授記され、法性の真実を見たナーガールジュナと弟子のチャンドラキールティである。それから相続した教説により法性の真実が理解されるであろう。[57-62]

八万四千の法蘊を説かれたすべてのものがこの法性に入っている。空性を理解するものは解脱するであろうが、残りの修習はそれを目的とするものである。[63-67]

真実の世俗を見下して空性を修習すれば、世俗の因果や善悪などは、他の世間を欺くものとなる。[68-71]

僅かばかりを聞くことに依り、真実の意味を知らず、福德を行わないそれらの劣った人たちは、破滅する⁷。空性を見ることに過失があれば、智慧の少ないものたちは、災いとなる⁸。[72-77]

軌範師チャンドラキールティが、次のように言う。「方便となった世俗諦と、方便から生じた勝義諦の二つの区別を知らない者たちは、誤った理解により悪趣に行くであろう⁹」[と]。[71-82]

言説に依らずに、勝義は理解されないであろう。正しい世俗の階梯がなければ、真実の大きな宮殿の上に行くことは、賢者にもあり得ない。[83-88]

世俗のこの顕現したままのものを論理により考察しても、何も得られない。その得られないものが勝義であり、本来より存在する法性である。[89-92]

因と縁により生起したのならば、世俗の顕現したままのものは成立する。もしも成立していないのならば、水月などは誰が生起させるのであろうか。[93-96]

それ故に、種々なる因と縁により起こされるので、すべての顕現は成立する。諸縁が断たれば、世俗においても生じない。[97-100]

そのように見ることで、迷うことなく、行はととも清浄になれば、悪い道に行かず、究竟処に行くであろう。[101-104]

寿命は短いのに、知るべきことは多い。寿命の量もどれくらいなのかを知ることはないので、鷺鳥が水中で乳を得るように、自分の清浄なる望みを得なさい¹⁰。[105-108]

此岸を見る愚かな者たち¹¹は、二諦を決定できなくても、師たち説いたものに依ってから、聖ナーガールジュナの学派の二諦を説いたものがこれである。[109-112]

スヴァルナドヴィーパの王の前で著されたこれを、現在の信を成立させた人もよく理解して受持するであろうが、信のみと、尊敬のみではなされない。[113-116]

スヴァルナドヴィーパの王である師パーラ¹²により、比丘デーヴァマティが遣わされ、彼のために著したこの『入二諦論』は、現在の賢者たちにより理解されるものと知られている。[117-120]

⁷ *Yuktiṣaṣṭikā* 31.

⁸ *Mūlamadhyamakakārikā* 24.2ab.

⁹ *Madhyamakāvātāra* 6.80.

¹⁰ この句以下の三偈は、九音節からなり、七音節からなる前の偈と異なっている。

¹¹ 版により、「たち (dag)」と「私 (bdag)」の違いがあり、江島は後者を取り「私」とするが、「自分で(bdag gis)」と読むことも可能である。

¹² 江島 1983, Lindtner 1981 のいずれもが、*Dharmapāra* とし、前者は *gSer gling pa* のことだとする。しかしながら、「王」の語からパーラ朝の王の可能性も検討する余地はある。

『入二諦論』と言う軌範師である偉大なパンディタであるディーパンカラシュリージュニャーナによる著作を完成する。

そのパンディタ自身と、ギャの翻訳官ツォンドゥ・センゲが翻訳師、訂正し、決定した。

第3章 『中観説示』

はじめに

チベット大蔵経のテンギュル「中観部」には、Dīpaṃkaraśrījñāna に帰される二つの『中観説示』が収録されている。一つは『中観説示(Madhyamakopadeśa)¹』であり、もう一つは『中観説示開宝篋(Ratnakaraṇḍoghāṭanāma-madhyamakopadeśa)²』である。近年、後者に関する研究がいくつか発表されている³が、ここでは前者の短い方の『中観説示』について考察する。

『中観説示』には、*Prajñāmokṣa (Shes rah thar pa) なる人物による注釈書『中観説示注 (Madhyamakopadeśāvṛtti⁴)』が伝えられている。彼がどのような人物であるのかは明らかではないが、その奥書きの情報から次のことがわかる。彼はインド人のパンディタと伝えられていることから、本注釈書は最初にインドの言葉で書かれた(説かれた)ものである。このテキストの翻訳者が彼自身と Tshul khriṃs rgyal ba であり、後者は Dīpaṃkaraśrījñāna のテキストの共訳者としても知られておることから、この三名は同時代にチベットにおいて生存していた、と考えられる。

『テプテル・ゴンポ』には、

そこ (Lha sa) において、rNgog (Legs pa'i shes rab) がお願いしたので、翻訳官 (Nag tsho) とパンディタ (Dīpaṃkaraśrījñāna) は、『思釈炎 (Tarkajvaia)』を翻訳し、Atiśa (= Dīpaṃkaraśrījñāna) がその概説 (upadeśa) として大小二つの『中観説示』を著作なされた。再びニェタンに入住なされた⁵。

¹ *dBu ma'i mang ngag ces bya ba*. Dīpaṃkaraśrījñāna, Tshul khriṃs rgyal ba 訳. C. Ki 97b2-98b; D1. No. 3929, Ki 95b1-96a7, D2. No. 4468, 6b5-7b3; G1. A 147b1-149a3; G2. A 181b1-182b5; G3. Gi 9a2-10a4; N1. No. 3315, A 104a7-105b4; N2. No. 3317, A 128b4-129b3; N3. No. 3372, Gi 8a4-9a2; P1. No. 5324, A 105a8-106b6; P2. No. 5326, A 132b4-133b6, P3. No. 5381, Gi 8a8-9b2. 金写版、ナルタン版、北京版には、三種類のテキストが収められている。チベット大蔵経に収録されている Dīpaṃkaraśrījñāna の小部文献については、中観部のものと彼の小部集のものとの二種類が収められているのだが、この著書についてはもう一つの伝承があったことがわかる。また、本論については、フランス語訳 (Salon 1986: 121-144)、英訳 (Sherburne 2000: 361-365, Apple 2014: 4-6)、ヒンディー語訳 (Sonam 2000) がすでに発表されている。

² *dBu ma'i rñang ngag rin po che'i za ma tog kha phye ba shes bya ba*. Tr. Dīpaṃkaraśrījñāna, brTson 'grus seng goe, Tshul khriṃs rgyal ba. D. No. 3930, Ki 96b1-116b7, G. A 150b1-182b5, N. No. 3316, A 105b4-129b4, P. No. 5325, A 106b6-132b3.

³ 宮崎泉 1993, 1995, 2007, 望月海慧 1996a, ツルティム・ケサン 2001, Apple 2010.

⁴ *dBu ma'i martg ngag ces bya ba'i 'grel pa*. Shes rah thar pa (Prajñāmokṣa), Tshul khriṃs rgyal ba 訳. C. Ki 119b4-126b2; D. No. 3931, Ki 116b7-123b2; G. A 183b1-193a2; N. No. 3318, A 129b4-137a3; P. No. 5327, A 133b6-142a4. 本論には、ヒンディー語訳 (Sonam 2000)、英訳 (James Apple 2014) がある。なお、Apple 2014 は、著者のサンスクリット名を Prajñāmukti とするが、そのチベット語訳にはインドの言葉で著されたものとしては違和感を生じさせるものもある。

⁵ 羽田野 1986: 86.

と伝えている。また『中観説示』の奥書きに、

ラサの大昭寺 ('Phrui snang gtsug lag khang chen) で Dīpaṃkaraśrījñāna という賢者にチベットの尊者 Legs pa'i shes rab がお願いをしてから、私 (Tshul khriṃs rgyal ba) が翻訳をした。

と偈頌の形で述べられている。これらの記述から、本テキストは著者がラサに滞在している間に著されたものであることがわかる。さらに、Bhavya の『思釈炎』のチベット訳の副産物であり、その二つの概説書の短い方であったと推測できる。ただし、二つの概説書と『思釈炎』との関係は、あまりないように思える。『開宝篋』については、『思釈炎』からの引用が見られるものの⁶、その中心テーマは「発菩提心」であり⁷、それは『思釈炎』においてはあまり関心が払われていないからである。

『中観説示』と『開宝篋』の関係

前述のように、二つの『中観説示』は同時期に著されたと伝えられている。『開宝篋』の方にも、『中観説示』のタイトルが付されていることから両者の内容にも多くの共通項があるように思われる。そのような視点で調査を試みてみたが、思っていた程の類似点を見つけることはできない。著作内容に関して見てみると、『中観説示』は「二諦説」から始まるのに対し、『開宝篋』ではその主要テーマが「発菩提心」であり、それぞれのテーマはもう一つのテキストでは排除されている。従って、『中観説示』は『開宝篋』に説かれている内容を圧縮したというものではない。

では、何の関係もない二つのテキストが、たまたま同時期に著されたことから、同一のタイトルが付されたのであろうか。そこで、短い方の『中観説示』に説かれている語句を、長い方の『開宝篋』に求めてみる。まず、『中観説示』では最初に二請説を示した後に、三昧に入る具体的な記述として、「心地よい座具に結跏趺座をして座り⁸」と説かれている。『開宝篋』においても、テキストの冒頭箇所に「三宝の影像の御前で柔らかい座具や絨毯に座り⁹」と説かれている。後者には、さらに詳細な具体的な記述が続いている。完全に一致するものは「座具に座る (stan la 'dug)」という語句のみであるが、著書の導入部分に、ほぼ同じことを述べる文章が見られる。

続いて、三昧を通して事物を物質的存在と非物質的存在に分類した上で、後者を「心」

⁶ ただし、その引用箇所の比定はできていない。

⁷ 望月海慧 1996a.

⁸ Tib: stan bde ba la skyil mo krung bcas te 'dug la /

⁹ Tib. D. Ki96b4-5: dkon mchog gsum gyi gzugs brnyan gyi spyang sngar stan 'jam zhing 'bol ba la 'dug la /

と定義する箇所には次の記述が見られる。

色がなく、形態を離れており、虚空と同じように成立しておらず、一多を離れており、不生であり、自性により輝いているものなどであり、論理の武器により考察し、調査すれば、成立していないものと理解される。

これとほぼ同じ表現が『開宝篋』においても、先ほどの記述の直後の「心」の語義を解説する箇所において、次のように述べられている：

心には色がなく、形態がなく、自性により輝いて、本来生じるものではない¹⁰。

このように「心」という語を解説する際に、全く同じ説明がなされている。

同じ著者が同一時期に著したとされる二つの著書に同じ解説が述べられていることは極自然なことである。この部分の両者の構成は、まず三昧に入り、心を統一し、一切法が無自性であることを認識するというものであり、ほぼ同一である。ただし『開宝篋』は、この後に「発菩提心」などのテーマが続く。これらのことから両者の関係を考えると、まず著者にとっての「中観の概説」とは、三昧を通して一切法無自性を認識することの解説である。小さい方の『中観説示』はこれが著書の全内容になっており、他方『開宝篋』の方は、テキストの最初の部分にこのことが述べられるものの、そこに説かれるテーマはさらに広がり、結果的には『中観説示』とは異なる内容であるような印象を与えている。

『中観説示』の構成

『中観説示』は小部であるために、全体の構成を分類することは難しいが、Prajñāmokṣa による註釈に基づいて、『中観説示』の構成を見てみると、次の通りである。

0 帰敬偈

0.1 功德を述べることでの供養

0.1.1 利他の円満

0.1.1.1 原因¹¹

¹⁰ Tib. D. Ki 97a6-7: sems ni kha dog med pa / dbyibs med pa / rang bzhin gyis 'od gsal ba / gdod nas ma skyes pa'o //

- 0.1.1.2 結果¹²
- 0.1.2 自利の円満¹³
- 0.2 敬礼による供養
- 1 概説の主要部分
 - 1.1 まとめた意味¹⁴
 - 1.2 支分¹⁵
- 2 概説の修習次第¹⁶
 - 2.1 ヨーガ¹⁷
 - 2.2 正行¹⁸
 - 2.3 後行¹⁹

これらの区分からもわかるように、**Prajñāmokṣa** は冒頭に説かれている帰敬偈に対する区分を詳細にする一方で、テキストの主要部分については語句解説を行うものの、著書全体の中でその語句がどのような位置にあるのかというような構成を分類することはない。「修習次第」を三項目あけているものの、それぞれの項目が本論のどの句にあたるのかまでの明確な記述は見られない。しかし、これらの項目から次のことが言える。すなわち、「中観の概説」とは、二諦説である。本テキストは、それを把握するための修行次第の三段階を説いたものである。

『中観説示』における二諦説

『中観説示』の最初の部分に説かれている記述に基づいて、**Dīpaṃkaraśrījñāna** が本論において二諦説をどのように説いているのかをまとめてみる。まず、全文をあげておく。

¹¹ *Madhyarnakopadeśa* の「お言葉の光により」という句がこれにあたる。

¹² 「我などのすべての障害の心髓の蓮華を開花させ」という句がこれにあたる。

¹³ 「最高の聖者」という句がこれにあたる。

¹⁴ 「大乘の中観の概説はこうである」という句がこれにあたる。そのうち、「大乘」とは大智と大悲であり、「中観」とは二諦であるとする。

¹⁵ 「世俗においては」から「理解すべきである」というまでの二諦説を説いた句がこれにあたる。

¹⁶ 以下の区分のように、この項目を三項目に分類しているものの、*Madhyarnakopadeśa* のどこからどこまでがそれぞれに相応するのかという記述は *Madhyamakopadeśavṛtti* には見られない。従って、以下の分類は筆者の判断によるものである。

¹⁷ ヨーガを通して、物質的存在と非物質的存在とが考察し難いものであることが説かれている。

¹⁸ 前述のように、*Madhyamakopadeśavṛtti* には「正行」を指摘する記述はないが、ヨーガにより獲得した智慧に関する箇所がこれにあると判断する。従って、「そのように両者はいかなる自体にも成立せず」から、「そのようなものに智慧を存続させるべきである」までとなる。

¹⁹ 「出てこようとするならば、結跏趺座から起き上がる」以下の句がこれにあたる。

世俗においては、一切の法はこちら側で見る限り、因果などの在り方すべては顕現するままに真実であるけれども、勝義或いは真実としては、その世俗の顕現するままのものだけを大きな論点で調べ、明らかにすれば、髪の毛の先端を百に裂いた量さえ把握されない、と確かに理解するべきである。

ここに説かれている二諦の区分を表示すれば、次のようになる。

世俗…顕現するままに真実である
勝義…顕現するものは把握できない

世俗を「顕現するままのもの」とすることは、すでに指摘されているように²⁰、瑜伽行唯識派の影響をうかがうことができる。しかし、『入二諦論²¹』に見られるような、世俗を正しい世俗と誤った世俗に二分する記述は見られない²²。では、ここに説かれている世俗とは、このどちらであろうか²³。顕現するものが因果関係により成り立つものであること、真実であるとされていること、また **Prajñāmokṣa** による註釈において「考察しなければ歓ばしいもの (*avicāraikaramya*)²⁴」と説かれていることから、ここでの世俗は正しい世俗である。世俗と勝義を誤ったものと真実のものという二項対立で設定していないことから、ここに説かれていない誤った世俗という概念をその背後にあることは推測できる。そうであるのならば、本テキストに説かれている二諦説は同じ著者の『入二諦論』と矛盾するものではなく、彼がチベット語の翻訳者でもある **Bhavya** による『中観宝灯論 (*Madhyamakaratnapradīpa*)』の影響²⁵も排除されないものとなる。

まとめ

Dīpaṃkaraśrījñāna にとっての中観とは、二諦説であり、一切法無自性を認識することであったのは明らかである。彼にとっては、それを認識するための具体的な方法が重要であったように思える。すなわち二諦説の内容を論じるよりも、それを知覚するため

²⁰ 江島 1983: 369.

²¹ Tib. D. Nos. 3902, 4467, P. Nos. 5298, 5380. Tr. *Dīpaṃkaraśrījñāna*, brTson seng ge.

²² 江島 1983: 369 によると、*Satyadvayāvatāra* の二諦の区分は、次の通りになる。

勝義：分別的思惟を離れ表現不可能な、不生不滅なる法性

世俗：(i)正しい世俗 考察されることなく単に歓ばしいだけの、現実的作用の能力のあるもの

(ii) 誤れる世俗 現実的作用の能力のないもの

²³ 彼は、*Satyadvayāvatāra* においてこの二分類を行っており、また **Bhavya** の *Madhyamakaratnapradīpa* の訳者でもあることから、この区分を知らなかったということは考えられない。

²⁴ 一郷 1985: 119 と注(3)を参照。

²⁵ 江島 1983: 380-382.

のヨーガという手段とそれにより把握された内容の方に重点が置かれているように思える。そのために、他の中観論者の説く中観の説示とは異なる印象が生じている。

ただし *Prajñāmokṣa* による注釈書を通して読むと、『中観説示』に対する印象は、多少異なって見えてくる。そこでは、先行する *Śāntarākṣita* のテキストからの引用も論理学のタームも述べられている。彼がどのような人物なのかや、*Dīpaṃkaraśrījñāna* が自分のテキストに対する注釈書を読んでいたのかが不明であるために、この二つのテキストがどのような関係にあったのかは判断できない。もちろん *Dīpaṃkaraśrījñāna* のその他のテキストから、彼が *Śāntarākṣita* や論理学を知っていたことは明らかである。しかし『中観説示』を著すにあたり、彼らの思想に対する言及は行われてはいない。

『中観説示』和訳

インドの言葉で *Madhyamakopadeśanāma*

チベットの言葉で『中観説示』

世間主に帰依をする。

言葉の光線により我²⁶などのすべての障害の心髄の蓮華を開かせる最高の勝者に敬礼する。

大乘の中観の概説はこうである。すなわち、世俗においては、一切の法はこちら側で見る限り、因果などの在り方すべては顕現するままに真実である²⁷けれども、勝義や真実としては、その世俗の顕現するままのものだけを大きな論点²⁸で調べ、明らかにすれば、髪の毛の先端を百に裂いた量さえも取られない、と確かに理解するべきである²⁹。

心地よい座具に結跏趺座をして座わり、この様にまず事物は二つである。すなわち、物質的存在と非物質的存在とである。そのうち物質的存在は原子が集まったものであり、それも部分の区別により開いて調べれば、極微さえも残らず³⁰、よく顕現するものでもない。非物質的存在とは心である。それも、このように過去の心は滅し消えており、未

²⁶ *Madhyamakopadeśavṛtti* は、「我などとは軌範師自身などであって、理解しやすい」とあり、「我」をアートマンではなく、「自分」と読んでいる。

²⁷ *Satyadvayāvatāra* 93-94: rgyu rkyen dag gis bskyed pas na // kun rdzob ji ltar snang ba grub //

²⁸ 「四大因」のことである。*Dīpaṃkaraśrījñāna* の四大因については、江島 1980: 239-248 を参照。

²⁹ *Satyadvayāvatāra* 89-92: kun rdzob ji ltar snang ba 'di // rigs pas brtags na 'ga' mi rnyed // ma rnyed pa nyid don dam yin// ye nas gnas pa'i chos nyid do//

Cf. 江島 1983: 366.

³⁰ G1, N1, P1 には、この後にテキストの混乱がある。

来の心は未だ生じておらず起こっておらず、現在の心はこのようにとても考察し難い。すなわち色彩がなく、形態を離れており、虚空と同じなので成立しておらず、また一と多を離れており、生じておらず、またそれは自性により輝いているものなどであり、論理の武器により考察し調べれば、成立していないものと理解される。

そのように、二はいかなる自体にも成立せず、存在していないだけであるのならば、その妙観察智自身も成立しない。例えば、二本の木がお互いに擦れることにより火が生じるという縁により、二本の木が燃えなくなってしまうことに従い、何らかのものにより燃やされたその火自身も自ずと消えるように、自相と共相により一切の法が存在しないものとして成立しているだけであるのならば、その智たるものは顕現することなく、光明はいかなる自体も成立せず、沈み込みと昂りなどの過失となるものはすべてが取り除かれる。すなわち、その場合に識はいかなるものも考察せず、何も把握せず、記憶と作意のすべてが捨てられている。すなわち特徴や考察の敵や、泥棒が出てこない限り、そのようなものに識が存続させられる。

いつであれ [三昧から] 出てこようとするならば、ゆっくりと結跏趺座から起き上がる。すなわち幻のような意により身口意による善がどうにかして作られる。そのように尊敬し、長い間、連続して完成していれば、福分をもつ者たちがこの同じ時を喜ぶことが見られる。

すなわち一切の法は虚空輪のように、努力や苦勞なしに、自らの性質により自然に成立することが明らかに知られる。それに従って得られるので、一切の法は幻などであると知られる。いつであれ金剛のような三昧を明らかにした後には、後に得るものは存在しない。すなわち一切時にわたって等しく座っている。そのようであれば、「菩薩との差異はいかなるものがあるか」などという論理と聖教をここでは述べない。他者の利益を無量の劫にわたって集め、誓願をなす力により教化された者たちは望む通りになるであろう。聖教と論理はとてもたくさんなので、ここでは広げない。

『中観説示』という賢者ディーパンカラシュリージュニヤーナによる著作を終わる。

インドのその賢者自身と、校訂の翻訳官で比丘のツルティム・ゲルワがラサの大昭寺で翻訳、校訂し、編集した。

ラサの大昭寺³¹でディーパンカラシュリージュニヤーナという賢者にチベットの尊者レクペー・シェーラブがお願いをした後、私が翻訳をしたのである。大徳ディ

³¹ Tib: lha sa 'phrul snang gtsug lag khang chen.

ーパンカラシュリージュニヤーナによる教義は三種の人を把握しており、迷乱の道には行かない、とナクツォーのツルティム・ゲルワは言う³²。

Prajñāmokṣa 著『中観概説注』和訳

インドの言葉で、*Madhyamakopadeśavṛtti*

チベットの言葉で、『中観概説注』

聖なる世間の自在主に敬礼する。

有情の苦しみを取り除き、白[業]を増益する原因である菩薩³³に敬礼してから、『中観概説』を明らかにする。

不顛倒の分別により、輪廻の泥に沈んだ者たちが概説書の道に依存してから正しく菩提を完成させるために、概説書の意味だけが解説される。

まず「お言葉の光により」などと言うことにより、功德をもつ対象に初めに帰依をする。その軌範師自身は高貴なる聖者として知られており、障害の邪魔ものを滅し、解説を誓われているので意趣のあるものである。この偈頌により、二つのまとめた意味を説いている。すなわち、功德を述べることによる供養と敬礼による供養とであり、功德も利他の円満と自利と考えるべきである。利他にも原因と結果がある。すなわち、「お言葉の光により」と言うことにより、原因の円満を説いている。「我などのすべての障害の心髄の蓮華を开花させ」と言うことにより、結果の円満を説いている。「最高の聖なる人」ということにより、自利の究極を説いている。「たち」とは、たくさんである。「敬礼する」とは、帰命の言葉である。

[今度は]部分の意味が解説されるべきである。すなわち、「何れかの」とは、作者の言葉か一般の言葉であっても、他の対象を捨ててから頼るべき仏だけに入ることが明らかである。仏の功德を述べることによる供養と、敬礼による供養の時機であって、「忿怒仏母」というのと同じである。すなわち、一般の言葉でも、乳を必要とする時機に牛が忿怒母に入ることである。「お言葉の光」と言うことにより、お身体、お言葉、お心

³² 奥書きの後に付されている二偈（前半は九音節、後半は七音節からなる）については、D1, G1, N1, P1のみにしか見られず、その他の版では欠けている。内容は、奥書きに書かれていることと同じであるが、「とツルティム・ゲルワが言う」とあることから、この偈は翻訳者によるものでもなく、それ以後に第三者により付された可能性もある。Cf. Chattopadhyaya 1967: 455.

³³ Tib: byang chub sems「菩提心」ともとれるが、Dīpaṃkaraśrījñāna のことと解釈し「菩薩 (byang chub sems dpa')」の略と読む。

の光も説かれている。白と赤と青と日月の光と同じである。日が昇ることで、光が大暗黒を除き、花などを開花させ、種々なる薬草と果実を熟させ、霜などの寒さの感触の害を滅し、暖かさの感触により衆生を喜ばせ、道と道でないものと明らかではないものを明らかにし、星などのその他の光を圧倒している。そのように世尊のお身体、お言葉、お心の門から不可思議なる伝承の説法の光により有情たちの無明の闇を取り除き、智慧の蓮華を開花させ、未熟な相續を成熟させ、魔などの害を滅し、一切の衆生の苦を滅し、無上の喜びをもたらし、悪見を取り除き捨てて、天などの成熟した光により制圧もなされる。さらにまた、「暗黒にすること」ということも説かれている。「光により」とは、作者のなすことを示している。「開花させる」とは、行為をなすことを示している。

「我など」とは軌範師自身などであって³⁴、理解し易い。「障害」とは、真実の意味が明らかになっていないからである。「すべての³⁵」とは、世尊の悲心は、はかないものではなく、すべてに満ちており、一切のためになすことにお入りになられるからである。

「心髄の蓮華を開花させる」とは、心の依処になる心髄であって、依処の名称に頼って考察されている。それ故に、「心³⁶の蓮華を開花させる」と言われる。さらにまた、蓮華と同じである。すなわち、蓮華を見れば、喜びが生じ、種々なる香りと色と蜂蜜などが生じる場所であり、泥から生じても泥を身につけておらず、特に素晴らしい。そのように心も、種々なる喜びへの欲求の場所であり、一緒に生じる甘露を味わい、菩提の宝の生じる場所になっており、突然の汚れをもっても、自性により輝き、清浄となる。さらにまた、

水界と金と虚空が清浄であるように、清浄であると認められる³⁷。

と言うものと、

心の自性が仏であって、仏は他所に求められない。

と言うことによっても説かれている。「開花させる」とは蓮華を開花させることと同じ

³⁴ *Madhyamakopadeśavṛtti* の著者は、チベット語の “bdag” をここでは「自分、私」と解釈し、「軌範師 (= *Dīpaṃkaraśrījñāna*)」のこととする。*Madhyamakopadeśa* は格助辞を欠くので、「私などにより(gis)」と「アートマンなどの(gi)」の両方の読み方が可能である。

³⁵ 注釈書がインドの言葉で著されているとしたならば、「すべての (sarva)」の解説は、「障害」よりも先に来るのではないだろうか。

³⁶ *Madhyamakopadeśa* でも *Madhyamakopadeśavṛtti* の他所でも「心髄 (snying)」とあるが、ここでは「心 (sems)」とある。

³⁷ *Madhyāntavibhāga* 1.16cd. Nagao 1964: 24, 長尾 1976: 236.

である。五種の学問について智慧を広げることである。さらにまた、

何らかのものを把握し、取り出し、浄化して、他者に質問し、聞いたことを理解するその人の智慧は、太陽の光により蓮華のように開花する。

と言うものと、また、

五つの学問に長けていなければ、最高の聖者はいかなる者であっても、一切智を完成しないであろう。それ故に他の者たちは抑制に従って把握したり、自分自身で修習することで、それを彼は精進している。

と言うことによっても説かれている。「最高の聖なる人」とは、捨てられるべきものと智慧を円満な自体としており、三身の主体である。彼に「敬礼する」とは、帰命することであって、身口意の三善業である。

今度は、概説の主要部分として説かれるべきである。まず「大乘の中観の概説はこうである」などは、原因である聞思修の三智をまとめて示したものである。そのうち、「乗」は原因の乗と結果の乗であって、原因は諸菩薩の道である。何故ならば、ここから行くからである。それも、仏乗の在り方として解説したものと波羅蜜乗の在り方として解説したものであって、他のものに解説されている通りである。結果の乗は、三身自体である。何故ならば、歩き回るからである。高僧は智慧と悲心などが大きい。さらにまた、

捨が大きく、智慧が大きく、力が大きい³⁸。

ということによっても説かれている。そのうち、大智とは、一切法を幻のように知り、何に対しても執着しないことである。大悲は、衆生の利益を中断しないので、「方便と智慧を結び付ける」と言われ、諸菩薩の道である。智慧と悲心などが小さいことが、「小乗」と言われる。さらにまた、

方便がなく、智慧が離れた者は、声聞たるものに墮ちる。

³⁸ *Ratnagūṇasaṃcayaḡātā* 1.18a.

ともお説きになられている。それ故に、声聞は涅槃の極に堕ちて、有余依と無余依の涅槃を明らかにしてから、衆生の利益を看過している。それぞれの人たちは輪廻の極に堕ちて、種々なる苦を領受している。菩薩は、それらの極を捨てて、大智により輪廻の極にとどまらず、大悲により涅槃の極にとどまらないので、それは「二極にとどまらない涅槃」と言われる。さらにまた、「無住处涅槃」と言われ、

空と悲心は不分離で、いずれかの相続³⁹に依存する世間主の完成した方便であつて、これが一切の仏により解説されている。

と言うものも説かれている。それ故に「大乘」とは智慧と悲心である。「中」とは、一切の極端を離れ、核心の意味での「中」であり、さらに言葉と意味である。意味の「中」は、二諦であり、後に解説される。言葉の「中」は、「中」を述べる言葉であり、二極を捨てる語が設定されているだけである。その概説は、尊重されるべきである。少ない労力で大きな意味を理解するものが「概説」であつて、「それを修習すべきである」と合わされ、後に説かれている。「無始より」とは、輪廻の始めと終わり⁴⁰がないことである。事物に執着することは真実に執着することである。能取と所取などである。「二諦として設定される」とは、真実としては一と異とではないものと説かれている⁴¹。同一ならば、世俗が捨てられるように、勝義も捨てられるものになってしまい、世俗が種々であるように、勝義も種々になってしまう。世俗が汚れをともなっているように、勝義も汚れをともなうであろう。異なるならば、法をもつものと法自身にもならないであろう。有為の性質を制圧することにもならず、道を修習することも無意味になる。それ故に、一や異と述べられることはない。詳しくは、他所に解説されている通りである。さらにまた、どのようにか、と言うならば、

行と界と勝義の相は、一と異より解放されている。一と異として考察されるものはいかなるものも正しい在り方ではなく、誤って入っている。

と説かれており、また貝殻の白さのように、同一であることと異なることから解放されている、と説かれており、まとめた意味である。

支分が詳しく解説される。まず「世俗において一切の法は」などは、聞と思より生

³⁹ G, N, P は、「原因 (rgyu)」とする。

⁴⁰ G, N, P は、「終わり (tha ma)」を欠く。

⁴¹ Tib.: gcig dang tha mi dad par bstan to. 「同一で異なるものとして説かれている」となる。

じた智慧により一切の法は二諦の在り方として学ぶものであると説かれている。そのうち「世俗」は迷乱の智慧であり、真実の意味における障害は他所に解説した通りである。「一切の法」は、すべての意味であり、理解し易い。「こちら側で見る」とは、真実を見ない者たちである。「考慮すれば」とは、執着の想と合わされる。「因果など」は、蘊界処などである。「顕現するまま」とは、考察しなければ喜ばしいものであって、顕現には自性がないという意味である。さらにまた、

何であれ依存してからの諸事物は、水月のように、真実ではなく、転倒したものでないと主張する者たちは邪見により奪われない⁴²。

と言うものによっても説かれている。「諦」とは、効果的作用としての諦であり、顕現のみとして真実であり、分別し考察すれば、真実としては成り立たないという意味である。さらにまた、

論理により考察すれば、真実ではない。それとは異なるものとして真実である。それ故に、事物が同一であることについて真実と真実でないものがどのように矛盾しようか⁴³。

と言うものによっても説かれている。「勝義として」とは、真実の智慧である。真実の意味には欺瞞がなく、正しい結果を引き出す者が求めるので、正しいものであり、それにより考察すれば、いかなるものも成立しない。「世俗の顕現するままのもの」とは、外と内の事物である。「大きな論点」とは、理由を成立させることに欺瞞がないので、論点である。

言説の量から自性に関係することがあれば、意味により理解される。

と言うものによっても説かれている。「大きい」とは、煙りなどの言説の理由によることで、大きいものであり、それらは言説の意味に欺瞞はないものである。ここに真実の意味において欺端がなく、事物の差別をすべて制圧し、悪見のすべての魔を滅し、戯論のすべての極を排除しているので、大きいのである。それ故に、

⁴² *Yuktiṣaṣṭikā* 45. Lindtner 1982: 114, 瓜生津 1974: 73, Tola 1995: 32, 39.

⁴³ *Satyadvayavibhaṅgavṛtti*. Eckel 1987: 172. 松下 1985: 29.

すべての勝者の空性が、すべての見解を確実に取り除いている。

と言うものによっても説かれている。「たちにより」とは、四大因であり、それも、

何であれ縁起生のものは、滅がなく、生がない⁴⁴。

と言うものと、

自ら⁴⁵からではなく、他からではなく、両者からではなく、無因でもない。事物はいかなるものも、どこにおいても、生ずることが決してないものである⁴⁶。

と言うものと、

多により事物は一とならず、多により多にもならない。一により多の事物となさず、一により一となすこともない。

と言うものと、

自身と他者とが説くこれらの事物は、真実としては、一と多の自性を離れているので、無自性であり、影像のようである⁴⁷。

と言われ、合わさる部分の一つだけである。詳しくは、他所に解説されている通りである。「調べ、明らかにする」とは、部分の区別であって、十六や十などの部分の考察による。「髪の毛の先端を百に割いた量」とは、とても微塵の量である。「領受する」とは、聞と想の智慧により一切法を二諦の在り方として学ぶべきであると示されている。さらに有学に先行するものが聞と想の智慧であり、聞と想をなして修習することが、さらにまた、

⁴⁴ *Mūlamadhyamakakārikā* の帰敬偈。三枝 1985: 4-7。ここで引用されている句はチベット語訳の前半であるが、サンスクリットだと第一パーダと後半の第一パーダである。このことは、*Madhyamakopadeśavṛtti* のチベット語訳者（すなわち著者自身）はこのチベット語訳を念頭にしていた可能性がある。

⁴⁵ Tib: rang. *Mūlamadhyamakakārikā* のチベット語訳は“bdag”である。

⁴⁶ *Mūlamadhyamakakārikā* 1.1. de Jong 1977: 1, 三枝 1985: 8.

⁴⁷ *Madhyamakālaṃkāra* 1. Ichigo 1985: 22, 一郷 1985: 120, Ichigo 1989: 190-191.

多くを聞く者は、森の中で、壮年期の者たちの場所を喜ぶ。

と言うものと、

真実の智慧を求めることを先にして⁴⁸、

と言うものによっても説かれている。

今度は、概説の修習の次第が説かれている。すなわち、概説は上に解説しており、修習は、前行と正行と後行の三種である。「心地よい座具に結跏趺座で座り」ということにより、三昧の前行が説かれている。一切の衆生を捨てないという想と、無量なる大精進により大菩提を完成する心である。「まず事物は二である」とは、考察されるものである。「物質的存在と非物質的存在」は、相互に排除し、場所の相が矛盾するものなので、すべての事物を満たし、第三の集合を排除している。そのうち「物質的存在か」ということにより物質的なものが成立しないことを示しており、それも因果として認められる。そのうち原因は、極徴の四大であり、それも水を多と認識することで、部分のない一は成立しない。一が成立しなければ、多自身も成立せず、多は一などの自体である。そのように一と多に属さない他の集合は成立しない。

一と多とに属さない他の面をもつ事物はあり得ない。何故ならば、この二つは相互に排除して、存在するからである⁴⁹。

と、そのように解説されている通りである。そのようにまた極徴が成立しなければ、結果である物質的なものも成立しない。例えば、種子がなければ、芽が滅してしまうように。さらにまた、

そのように始めるものがないので、実体などが明らかになる⁵⁰。

と言うものによっても説かれている。「よく顕現することもない」と言われ、顕現は相である。縛る原因であるので、「相は生じない」という意味である。今度は、心の相を把握できないものと示すので、「非物質的存在である」という。そのうち、効果的

⁴⁸ この句は、Śāntaraksīta の *Madhyamakālamkāravṛtti* の末尾に説かれている偈の最初のパーダである。一郷 1985: 193, Ichigo 1985: 332.

⁴⁹ *Madhyamakālamkāra* 62. Ichigo 1985: 188, 一郷 1985: 158, Ichigo 1989: 210-211.

⁵⁰ *Tattvāvatāravṛtti*, D. No. 3892, Ha 40a.

作用は刹那的であるので、刹那の部分が区別されており、さらに過去は事物が滅している
るので、存在しない。存在するならば、現在のものになってしまう。未来は、事物がまだ
生じていないので、存在しない。存在するならば、現在と同じで、未来のものになら
ないであろう。それ故に、「現在の心はとても考察し難い」と説かれている。「考察
し難い」とは、求めても把握できないからである。「色彩と形を離れている」とは、
青と黄などと、長短などを離れていることによる。「一と多⁵¹を離れている」とは、一
と多により考察することに耐えられないことで、他所に解説した通りである。「生じてい
ない」とは、有と無が生じないことによる。「自性により輝いている」とは、自身を
考察せず、汚れを離れているので、自性により輝いている。「など」と言うことは、四
大因を離れ、自と他と両者と無因などの生を離れており、真実においては有無の極を超
えて、幻のようである。「論理の武器により」とは、論理たるものは武器と同じで、
切り裂き、壊滅させるからである。『智光明莊嚴 [経]』にも、

諸仏は、いつも常に一切の諸法を思うこと得ず、法智を把握することがない者に
対して敬礼することを賞讃している⁵²。

と説かれている。「成立しないと理解される」とは、ヨーガの智慧による。

「そのように二はいかなる自体にも成立しない」とは、三昧により示すことであ
る。二とは、物質的存在と非物質的存在である。「成立しない」とは、勝義において成
立しないことであって、他の考察は排除される。「その妙観察智自身も成立しない」
ということにより、自身の考察が排除されている。智慧は事物の区別であるので、事物
が成立していなければ、その智慧自身も成立しない。樹が成立していなければ、鹿など
が排除されているように。

さらにまた、燃料が燃えた火は、燃料が燃えた後に残っていないように。

と言うのと、また上にまとめた在り方により、心が成立しなければ、心所も成立しない。
太陽と光線のようなものである。

心はそのように否定されるので、心所も排除される⁵³。

⁵¹ G, N, P は、「多」を欠く。

⁵² *Jñānālokāṃkārasūtra*. 梵語仏典研究会 2004. ただし、典拠の確認はできていない。

⁵³ *Tattvāvatāravṛtti*, D. No. 3892, Ha 40b-41a.

と言う。「例えば二本の樹が擦れてから火が生じる縁により」などは、聖經の門から解説をしており、妙観察智が存在しないことと同じで、一切の考察は薪と同じであると説かれている。例えば、

有情の一切法は識の火の薪であると認められる。例えば、それらが開く火により焼かれれば、消滅してしまう。

と言われ、

妙観察の火の中で不善なるすべての考察は燃やされるので、

と説かれている。「自〔相〕と共相」とは、共相は空と無我などである。自相は喜びと欲望などである。「その智慧たるもの」とは、その禅定の智慧自身である。「顕現することなく」とは、自と他の考察を離れていることである。さらにまた、

いつであれ知と所知自身は見られないから、その時に相は生じないので、場所に依存する⁵⁴ために立ち上がらない⁵⁵。

ということによっても説かれている。「光」は、自性により清浄であるからである。極を離れていることは、常と断を離れていることである。「どこにも成立しない」とは、一と多などはどこにも成立しないからである。「沈み込みと昂り」などのすべては、三昧の過失で、さらに沈み込みは、内なる不活発さである。昂りは、心が動くことである。「など」とは、他の相もである。「その際」とは、その禅定の際にである。「どこにも把握されず」とは、能取と所取の考察を離れているからである。「記憶と作意のすべてが捨てられる」とは、過去と未来を認識する考察が捨てられることである。ものが可愛いなどということが捨てられることである。「考察の敵や泥棒」は、敵や泥棒と同じで、三昧の宝を奪うので敵である。それ故に、正知の偵察員がそれらを捨てるのである。さらにまた、例えば、

誤って行く心の象は、対象の棒杭に固定して、記憶の綱で確実に縛ってから智慧

⁵⁴ G, N, P には、「堅固にする (brtan)」とある。

⁵⁵ *Satyadvayavibhanga* 39. Eckel 1987, 松下 1985: 44.

のフックで制圧すべきである⁵⁶。

と説かれている。言説として大火を認識すれば、髪の毛の逆立ったものの区別を否定するように。それ故に、二つの集まりを集め、二としての顕現が生起させられることは正しくない。もし「世尊は、幻の学者のように、幻を幻自身と知り、真実たるものと執着することが生じないので、彼自身は迷乱していない」というならば、その通りならば、「我を説く者たちも我を常住な我として知っており、声聞も事物を事物たるものと知っており、唯心論者も自証を勝義たるものと知っており、それ自身に迷乱はない」という言う場合に、言うままになってしまう。もしも「我などの事物は所知には存在せず、量により害され、量により成立しないので、設定されただけのものに尽きているので、それを把握することは迷乱たるものになるが、幻だけとしては量により成立し、量により害されず、ありのままに知ることが迷乱にならないであろう」と言うのなら、それは正しくない。不転倒智の所知に幻のように存在するものは、どこにおいても成立しない。迷乱していない知の所知に眼翳などが存在しないように。もし世俗が顕現するままに知られないならば、一切智とならないであろうと言うのなら、その通りならば、過失のない感覚器官の直接知覚には幻の馬と眼翳などは顕現しないので、直接知覚ではないものになる。それ故に迷乱を捨てた智慧を虚偽とするのは正しくない。虚偽が顕現するならば、その智慧自身も迷乱になるから。例えば陽炎を水と認識するように。その通りでなければ、その対象自身も事物たるものになり、知はいかなるものも迷乱するものとはならない。それ故に、究極の智慧に二として顕現する相はどこにも生じない。二としての顕現と迷乱の相は、名称だけが種々であるが、意味は種々ではない。經典に、例えば、

スプーティよ、物質的ものが相である。声が相である。

と言うものと、また、

仏よ、大仙人と太子たちの三昧は、相を捨てたものである。世間の者たちは相をともなっている。

などと言う通りである。もしも「世俗が存在しないことを恐れる恐怖により恐れてから、智慧に世俗が顕現しない場合に顕現が明らかになるであろう」と言うのなら、そ

⁵⁶ *Madhyamakahrdayakārikā* 3.16. 江島 1980, pp. 272-273, 413, Lindtner 2001: 9; Lindtner 1998: 127.

れは正しくない。顕現しないものを明らかにすることにより満たされないので、不確定なものになってしまう。過失のない感覚器官の知に第二の月と眼翳などは顕現しない。その知によりそれらは明らかになるのではないように。智慧と知により考察したならば、真実と虚偽、有と無と、法はいかなるものも存在することがないので、「不住の中」と言われる。例えば、

智慧が有と無を超え、不住なるそれらのものは、深い知覚されない縁の対象として修習するべきである。

と説かれている。これにより聞と思の順序も解説されている。それより他に言説の量の対境にすべての世俗が存在するので、排除されない。「三昧」とは、対象に心を統一することで、そのすぐ後に不可思議なる三身を成立させる原因の可能性は妨げられることがないものである。「明らかにした後に」とは、完全なる仏地を得た後は、正等覚による智の区別が種々であっても、法界の性質として一つである。ガンジス河とシンドゥー河とパクシュ河などの水の区別が異なっているとしても、大海の本質として一つである。例えば、

法界に区別はないので、種姓は種々ではありえない⁵⁷。

と言うものと、

所依の法の区別により、その区別が明らかに解説される⁵⁸。

と説かれている。「後に得られるものはない」とは、相が生じないからである。「時」とは、前後などである。「等しく座っている」とは、法界から動かないからである。例えば、

象が座っていても等しく座っており、象が起き上がっても同じく起き上がる。

と説かれているように。「そのようであれば」とは、二としての顕現の相が生じないならば、ということである。「差別がない」とは、有学の道に住することと差別がな

⁵⁷ *Abhisamayālaṅkāra*, 1.39ab. Stcherbatsky1929: 6.

⁵⁸ *Abhisamayālaṅkāra*, 1.39cd. Stcherbatsky1929: 6.

く、所取と能取の迷乱を理解することは捨てられず、等しく菩提になるので、二としての顕現の相が生じることは正しくない。例えば、

菩提は虚空の相である。何故ならば、一切の相が捨てられているから。

と言うものと、

またスプーティよ、智慧に対象はない。智慧に対象があるならば、智慧を知らないであろう。

と説かれているので、相はどこに生じるのか。もし二としての顕現が生じないならば、智慧の顕現は中断し、誓願し資糧をあつめることも意味がない、と考えて、「利他」などが述べられている。これにより無分別の本質から色身が二つ生じ、不可思議なる衆生利益をなすことを説いている。考察することがなくても、衆生利益が生じることに矛盾はない。大海から波が生じ、太陽から光が生じ、如意宝から欲望が生じるように。他からも、先行する供養などの例えにより考察することがなくても、衆生の利益が生じる、と説かれている。「論理」とは、害をともなう量である。「聖教」とは、仏のお言葉である。「述べられない」とは、多くなることを恐れている。「利他」とは、世間と出世間の意味である。「無量劫」とは、数を超えていることである。「集める」とは、原因の意味であり、福德と智慧の集まりである。「誓願をなす」とは、利他をである。「教化される者たち」とは、弟子たちであり、相続を浄化した者たちである。「望む通りに」とは、何れかの教化される者とその主体として顕現するものである。種々なる種姓のように、信解する通りになるであろう。例えば、

多くの信解した衆生に種々なる行が説かれている。深い法性を説いた後には、もし信解していなくても、責めることをなさず、不可思議なる法性を伴っている。

と説かれている。実体としては、世尊に仏身などと二として顕現する相はない。さらにまた、

法界から動かず、考察されない性質に存在する。

さらにまた、例えば、

自分を物質的と見るものは、

とお説きになられている。それ故に、法身は虚空の如くであり、虚空には辺境と真中、多くの色などの区別がいかなるものも存在しなくても、衆生が辺境と真中、青と黄と多くの区別を理解する。もし「色身などを理解することがなければ、衆生の利益をなすことは正しくない」と言うのならば、その意味はすでに上に解説した。太陽を理解することがなくとも、種々なる光が生じ、事物を明らかにする。その日輪自身は光ではない。その日輪自身が光であるならば、家の中などと、この対象自身にも存在し、その輪自身も別なるものとなる。その光自身も日輪ではない。同じものならば、その虚空自身に存在し、すべての事物を照らすことにもならない。それ故に、そこにある同じものが光でなくとも、それから光が生じ、すべての事物を照らす。まさにそれ故に、經典に、

仏は虚空のようであり、諸衆生はありのままである。

と説かれているので、不可思議である。

ディーパンカラの意図は測り難く、中の大きな意味を智慧の対象としなくとも、知らないことの解説を望むことを示す目的のために、概説を明らかにすることをプラジュニャーモークシャが著した。

この善の福德を得た者が地水火風空に住する間は、説法の大宝が世間に存在してから、有情は菩提の地位を得なさい。

『中観概説註』、パンディタであるプラジュニャーモークシャによる著書を完成する。

そのインドの賢者であるプラジュニャーモークシャ自身と比丘ツルティム・ゲルワが翻訳し、報告し、編集した。

『中観説示開宝篋論』和訳

インドの言葉で、 *Ratnakaraṅḍodghāṭa-madhyamanāma-upadeśa*

チベットの言葉で、『中観説示開宝篋』

至尊マンジュヴァジュラにきえ敬礼する。

三宝に敬礼する。

軌範師ナーガールジュナを相承する教義が著されるべきである。

これは、誰であれ、自分と残りのすべての有情の無始以来の輪廻をともなう苦を憶えていることで、胡麻粒さえも存在にも執着せず、世間の事物やすべての造られたものを唾の滴のように捨て、最初に受け入れるべき律儀戒 [などの] 三つを損なわず、清浄であり、聞と思の知恵を持つており、本質的に慈悲があり、正法のためには身体や生命も顧みない、そのような人が、軌範師聖ナーガールジュナを伝承する教義がある優れた人を探して、彼が長い間によいことをした後、初学者となって、大きな収容所や大きな都城や、荒野や、辺境などの生活のしやすいところに住み、三宝の影像の前で柔らかい織毯や、座具の上に座り、次のように、衆生の生まれを、卵生と湿生と化生と、有色と無色と、有想と無想といった五つの有情としてよく観察して、すべてのものは自分の母親であり、これらの母たちは私のために罪を犯し、集めたので、その異熟により現在多くの苦を領受しているのである。聖ナーガールジュナが、

分別という誤った考えの過失により、三有情が心を混乱させていることを智慧をそなえた者がよく観察してから、輪廻の場所から引き出すべきである⁵⁹。

と説かれており、また、聖ナーガールジュナが、

存在という監獄の中に暮らし、煩惱の火により干上がされた衆生達はどんな人であってもみんな、以前には父母や朋友や親族となり、とても有益なことをしてくれたことにより、彼らに私が苦しみをなしたので、今度は楽をさせなければならぬ⁶⁰。

と説かれていることにより感謝を知り、「私はこれらの人たちを救済し、解放し、安楽にさせ、完全な満足を与える」と言い、四無量による菩提に心を起こし、そのために二資糧を集めるべきである。夢の心も離れていない者が、この虚空界は三宝により胡麻粒の箱のように満たされており、七人の聖なるものと、七つの憶えているべき想と、記憶すべき偈頌も述べる。すなわち、六つの対立するものの観点から、身体の形をしたものを作った後、敬礼し 供養し、懺悔し、随喜し、勧請し、懇請し、帰依し、菩提に心を起こし、身体を提供し、律儀を受け入れ、大乘の道にとどまることを誓うが、それらは

⁵⁹ *Pinḍikṛtasādhana* 3.

⁶⁰ *Bodhicittavivaraṇa* 75.

大菩提に廻向すべきである。それらはいずれもが法界に成立したのである。すなわち、それらすべての供養の対象と供養の集まりは、最初にどこから現れ、そしてどこに去るのか、と考えるのならば、どこからも顕現せず、どこにも去らない。これらの内外の法も真実のままであるから、すべてのものは自らの心の幻が変化した虚偽のように顕現し、顕現するままに虚偽であるから、それらは身体に収まり、それも心に収まり、心には色がなく、形がなく、自性により輝き、本来生じるものではない。その妙観察智自身も輝いたものである。その間に、いかなる知もなく、どこにも存続せず、どこにも成立せず、いかなる相にも生じず、一切の戲論が寂滅し、秋の日中の空のように、特徴の塵がすべて去ってしまった虚空金剛三昧の無顕現にできる限りとどまる。修習しないことで心が錯乱した場合も、その同じところに戻ってとどまる。他の更でもそれと同じようになすべきである。多くの更において短時間なすべきである。いつの時に修習して、少しでも堅固になったならば、徐々に長くなすべきである。五障をそれぞれの対治により滅すべきである。それから目を開いて「ああ、何と不思議なことか。法界にはいかなるものも存在せず、どこにも現れないというこのことは大変に不思議なことである。これらは、自らの心性が、虚偽の神変のように現れ、現れたままに虚偽である。幻の八喻により述べたものが顕現しても、自性は存在しないものである」と観察して、誓願をなしてから、結跏趺座をとぎ、立ち上がり、小像制作などの何れかの善なる行をなすべきである。それらは、六更の間に二資糧を集めることに励むべきである。睡眠のときに空性を修習し、その自然のままに眠るべきである。それから最後の更に、慈愛と悲心から生じた菩提心により起きあがろうと思う。それ故に、勝義の菩提心を生じるのである。食べ物は四部に分けるべきである⁶¹。軌範師ナーガールジュナが、

勝義の菩提心は、真言の門の行を行う菩薩が修習の力により起こすべきものである⁶²。

と説かれている。そのように、尊敬し、長い間不断の努力をすれば、衆生に対する悲心も間接的に生じる。すなわち、軌範師聖ナーガールジュナが、

そのように瑜伽行者たちがこの空性を修習したならば、心が利他を喜ぶことには疑いがない⁶³。

⁶¹ *Bodhisattvādikarmikamārgāvatāradeśanā*. D. No. 3952, Khi 297a6, P. No. 5349, Ki 346a3-4.

⁶² *Bodhicittavivaraṇa*, Lindtner 1982: 184.

⁶³ *Bodhicittavivaraṇa* 73.

また、

本来生じることがないというこの意味を、心により深く理解してから、輪廻の泥に沈んでいるものに対して悲心が自然に生じるであろう⁶⁴。

と説かれている。そのように、その瑜伽行者が内に入定すれば、勝義の菩提心は修習され、それより立ち上がれば、世俗の菩提心が修習されるので、空と大悲の心髓をそなえた二つの菩提心を堅固にするべきである。『大日経』に、

菩提とは虚空の特徴であり、すべての考察が捨てられている⁶⁵。

とあり、『般若波羅蜜多宝徳蔵偈』に、

得られるべき法は塵たりとも存在しない。菩提を存在と把握して、固執してはならない。その初学者には、そのように説かれてれている⁶⁶。

とあり、『仏母十万頌般若経』に、

私は、何も得なくても、菩提座で悟ったのである⁶⁷。

と説かれている。『聖法集経』にも、

そこで、菩薩の少欲とは何か、と言うのならば、いかなる菩提も望まないことである。知足とは何か、と言うのならば、菩提心に対して過剰に執着しないことである。

と説かれている。他の多くの教典や、真言乗のたくさんのタントラにこの同じ意味が説かれている。『秘密集会タントラ』に、

⁶⁴ 現時点で典拠の確認はできていない。

⁶⁵ *Vairocanābhisaṃbodhi*, Tib. D. No. 494, Tha 226b7-227a1; P. No. 126, Tha 191b6.

⁶⁶ *Ratnaguṇasañcayagāthā* 15.3cd.

⁶⁷ 現時点で典拠の確認はできていない。

一切の存在を離れ、蘊界処と、能取と所取を捨て、法無我において平等であり、自心は本来生じるものではないことが、空たることの本質である⁶⁸。

とあり、『八千頌般若経』にも、

シャーリプトラよ、何であれ心でないものは、心が存在しないものである。何であれ心が存在しないものは、心の自性により輝いている⁶⁹。

と説かれている。聖ナーガールジュナも、

心は、一切の仏が見ることのないものを見ない。無自性の自性をどうやってみようか⁷⁰。

と説かれている。尊者アーリヤデーヴァも、

心により心は存在しないと考察するので、いつであれ修習をなすべき時に、心は見えないであろう⁷¹。

と説かれている。『聖法集経』にも、

天子たちよ、さらにまた、菩提心に執着することとも魔の行為である。心を幻と知らずに、心を存在として把握している。すなわち、無上である菩提心を起した者は、告白し、懺悔すべきである。

と説かれている。数えられないほど以前の生において大乘を修習し、相続をよく浄化した鋭根の人は、その世俗の菩提心自体が勝義の菩提心を起こすことを知っている。すなわち、空性と大悲をそなえているので、一切の相の最高のものを有する空性にとどまっている。この意味を意図して、軌範師ナーガールジュナが、

我や蘊などと、識を考察することにより妨げられることのない諸仏は菩提心を

⁶⁸ *Guhyasamāja*, 松長 1978: 10.

⁶⁹ *Aṣṭasāhasrikāprajñāpāramitāsūtra*, Vaidya 1960b: 3.

⁷⁰ *Bodhicittavivaraṇa* 43.

⁷¹ *Jñānasārasamuccaya* 33abc.

空性の特徴としてお認めになられている⁷²。

と説かれている。では、どのようにか、と言うのならば、世俗において幻の人や変化の人が菩提心を起こすように、起こすべきである。次のように『聖海龍王経』に、

サーガラナーガよ、一つの法により諸菩薩は速やかに無上正等覚を完成する。
一つの法とは何かといえ、すべての衆生を見捨てることのない菩提心である⁷³。

と説かれているので、それを起こすべきである。

その心が生じる原因と、縁と、本質と、相と、浄化することと、把握することと、護ることと、増大することと、その功德と、捨てる原因と、捨てた過失と、他者に起こさせる功德と、他者が起こしたことを喜ぶ功德と、他者が起こすことを中断させる過失とを知るべきである。

そのうち、原因とは、円満な種姓の特徴をそなえていることである。すなわち、次のように『聖大薩尼乾子所説経』に、

彼は大〔乗〕を喜ぶので、小〔乗〕を喜ぶことはない。彼は、本来大悲をそなえているので、白い功德をそなえている。彼は悪友を捨てているので、善知識によく護られている。言葉通りのことをなすので、欺くことがない。仏が世間を歩くことを喜ぶので、歓喜を備えている。身口意の行為に罪悪がないので罪を捨てている。高い志に過失がないので、意志を堅固にしている。味覚を味わうことに執着しないので、すべてを分け与える習慣を持っている。魔の摂受を離れている。善根を集めているので、善行を行っている。大悲の行境としているから、衆生に対して慈悲を持っている。資具を多く布施しているので、すべてに対する執着は僅かである⁷⁴。

と説かれている。軌範師聖アサンガも、

原因は四つである。種姓と、善知識と、慈悲の心と、輪廻の苦しみに耐えることである⁷⁵。

⁷² *Bodhicittavivarāṇa* 2.

⁷³ *Sāgaramatiparipṛcchā*, Tib. D. No. 152, 58b7-59a1; P. No. 819, Pu 63b4-5.

⁷⁴ *Bodhisattvagocaropāyaviṣayavikrvaṇanirdeśa*, D. No. 146, Pa 87a7-b5, P. No. 813, Nu 42b7-43a5.

⁷⁵ *Bodhisattvabhūmi*, p. 15.

と説かれている。

縁は二つである。行為の縁と想の縁である。そのうち、行為の縁は、資糧を集めることと、相續を浄化することと、特殊な帰依をなすことである。

資糧を集めることとは、昼に三度、夜に三度、七支〔の供養〕をし、甚深なる般若波羅蜜多を読み、唱え、陀羅尼を唱え、三宝に対する供養を広く行い、サンガへの供施の法会を催し、童子の宴会や孤独なもの達に広大な施を与え、夜に徘徊する者たちに広大な施食を与えることなどをなすべきである。

相續を浄化することも、前と同じように甚深なる般若波羅蜜多〔經〕を唱え、読み、陀羅尼を唱え、七支をなし、『三蘊經』を繰り返し、『浄業障經』や『金光明經』の偈頌などの教義により懺悔することである。

特殊な帰依とは、七種の特殊により特に勝れている。すなわち、依るべき人の特殊性と、帰依処である三宝の特殊性と、時の特殊性と、想の特殊性と、行為の特殊性と、学処の特殊性と、功德の特殊性である⁷⁶。

そのうち、帰依処たる三宝の特殊性について、小乗の帰依処は、次のように、『俱舍論』に、

誰であれ三帰依をなす者は、仏と僧を作る法に対しても、そのように帰依し、涅槃にも帰依をなす⁷⁷。

と説明している。この特殊性について、三宝は三種である。すなわち、真実の三宝と、眼前の三宝と、現觀の三宝とであって、この意味の詳しくは師に尋ねるべきである⁷⁸。

また、学ぶべきもののある特殊性が述べられる。すなわち、三宝の特殊性と功德を思い出す観点から、三宝を身体や生命のために放棄することはなく、繰り返し帰依し、大きな恩恵を思い出す観点から、常時あるいは時々供養すべきで、きれいな水の容器と似たものであっても供えるべきであり、食べ物も新しいところを供えるべきである。いかなる行為をなし、いかなる目的があるのかは、三宝に勸請をしてからなすことであるが、世間の他の方法を捨て、他の有情に対してもこの方法の通りにさせるべきである。乘に共通な学ぶべきものは、仏に対する帰依なので、世間の天に対しては帰依をしないことなどで、三宝それぞれの学ぶべきことである。

⁷⁶ *Bodhimargadīpapañjikā*. 望月 2015a: 54.

⁷⁷ *Abhidharmakośa*, 4.32.

⁷⁸ *Bodhimargadīpapañjikā*. 望月 2015a: 44.

想の縁は、次のように『聖如来智印三昧経』と『悲華経』に、

仏の菩提への発心と、正法が滅する時の発心と、衆生の苦を見た後の発心と、菩薩の発心と、よい供養や供犠をなした後の発心と、他の天を見た後の発心と、如来身を見た後の発心とである。そのうち、始めの三つは真実の菩提心である⁷⁹。

と説かれており、『聖十法経』にもお説きになられている。すなわち、

仏と菩薩などにより促された後の発心と、菩提心の利益を見た後の発心と、衆生の苦を見た後の発心と、仏と菩薩の円満を見た後の発心とである⁸⁰。

と説かれている。『莊嚴経論』には、五つの縁が説かれている。すなわち、

友人の力と、原因の力と、根本の力と、聞くことの力と、善を修習する力であって、堅固と堅固でないものが生じる⁸¹。

と説かれている。聖アサンガは、四縁と四力をお説きになられている。

四縁は、如来が円満であることを見た後の発心と、利益を見た後の発心と、正法が滅する時の発心と、衆生の苦を見た後の発心とである⁸²。四力は、原因の力と、行為の力と、自らの力と、他者の力とである⁸³。

そのように、原因と縁を集めた時に、菩提心が生じるであろう。

生じることの本質とは、求めることと、望むことと、願うことと同義である。次のように聖マイトレーヤが、

発心は他者のためであるから、円満な菩提と認められる⁸⁴。

と説かれている。願望と悲心とが結びついた意識が特別な対象を認識することが〔発菩提心の〕本質である。すなわち、白法のすべての収穫を生じさせる善なる大地のような

⁷⁹ *Tathāgatajñānamudrāsamādhi*, Tib. D. No. 131, Da 240a7-b7; P. No. 32, Thu 261a7-b7.

⁸⁰ *Daśadharmaka*, Tib. D. No. 53, Kha 168a1-7; P. No. 760 (9), Dzi 187a5-b4.

⁸¹ *Mahāyānasūtrāḷkāra*, 4.7

⁸² Cf. *Bodhisattvabhūmi*, 荻原 1971a: 13-15.

⁸³ *Bodhisattvabhūmi*, 荻原 1971a: 17.

⁸⁴ *Abhisamayāḷkāra*, 1.18ab.

ものであって、願望は、大地のような菩提心である。

相とは、それ自身の特殊性や、差異である。すなわち、欺きなどのいかなる過失によっても汚されず、無垢である。例えば、純金には汚れや石や土といった欠点がないようなもので、まさにその心が善妙なる想で、金のようなものである。その意味は、詳しくは『聖無尽慧経』に、

高貴なシャーリプトラよ、その菩提心はどのような相を思うことを生じているのか。[答えて] 言う。善男子よ、その心は小乗と混ざっていないのできれいな相を生じる⁸⁵。

などと詳しく説かれている。

それを浄化することとは、その心が、まず、いかなるものからも来ず、最後にはどこにも去らず、いかなるところにもとどまらないことである。すなわち、色がなく、形がなく、本来生じておらず、最後に滅することなく、自性を欠いており、光明の本質であるとして繰り返し念じることである。また慈愛と大悲は、その菩提心を修習することにより堅固にされ、とても清浄にされる。すなわち、心のそれぞれの瞬間に念を連続してなすべきであり、念と、正知と、如理を思うことと、不放逸によりとどまるべきである。

菩提心を把握することは、四つの衆生を捨てないことと、八つの聖なる人の考察と、十の内なる善巧方便と、六つの外なる善巧方便と、自と他を入れ換えることと、自と他を等しくすることと、『聖普賢行願讃』やヴァジュラドヴァジャの十大廻向などを求めることである⁸⁶。

そのうち、衆生を捨てないこととは、自らに有益な衆生を捨てず、自らを害するものを捨てず、実際に苦しむことと苦の原因などを捨てず一般的な衆生を捨てないことである。

まず、自らに有益な衆生を捨てないとは、恩を知り、恩に報いる心により捨てないことである。すなわち、軌範師ナーガールジュナが、

無始以来の輪廻から、煩惱の火により干上がされることにより、存在という監獄の中に暮らし衆生達はどんな人であっても、以前には父母や親友や親族となつて、とても有益なことをしてくれたので、なされたことに対して報いるべきであ

⁸⁵ *Akṣayamatīnirdeśa*, p.20; D. No. 175, Ma 90a2-3; P. No. 842, Bu 94a4-5.

⁸⁶ Cf. *Bodhimargadīpaṇjikā*. 望月 2015a: 108.

る。彼を私が苦しめたので、今度は楽をさせなければならない⁸⁷。

と説かれている。この意味の詳しくは経典を見るべきである。

この生の父母や親戚や友人などの自らへの利益に対する恩を知り、恩に報いなければならない。もしも、そのようでないのならば、

行為に対する恩返しをしない⁸⁸。

という小さな過失も起きてしまうであろう。

自らに害をなす衆生を捨てないこととは、行為を我所とする心により捨てないことである。すなわち、次のように、

ジャンブー州の優れた人は、善い答はよい人が持つており、間違った答も善い人が持っている⁸⁹。

というのと、『八千頌般若経』にも、

菩薩は、他の者が大きな過ちを犯しても、彼と争うことをせず、彼を傷つけたり、心を乱すべきではない。もしも、殺生をしても、彼らを憎むべきでない。どんな衆生であっても憎むべきでない。菩薩たちはしっかりとした想を起こすべきである⁹⁰。

と説かれており、また次のように、

菩薩は、一切の衆生に対して、父母と男子と女子の想をなす。自らが楽を望むように、他の衆生にも楽を与えるべきである。すべての衆生を苦から解放すべきである。いかなる衆生も捨てない。彼らは自分の身体の何百という部分を切り裂いても彼らを傷つける心をなさず、慈愛と悲心を起こす⁹¹。

⁸⁷ *Bodhicittavivaraṇa* 74-75.

⁸⁸ *Bodhicittavivaraṇa* 18c.

⁸⁹ 現時点で典拠の確認はできていない。

⁹⁰ Mochizuki 1996, note 50.

⁹¹ *Aṣṭasāhasrikāprajñāpāramitāsūtra*, Vaidya 1960b: 14.

と説かれており、尊師アーリヤデーヴァも、

ひどい害が生じたならば、過去の行為を知るべきである⁹²。

と説かれている。もしも、そのようでないのならば、

他者が懺悔しても聞かず、怒りから他者を責め、他者が述べた罪を捨てて、怒る者たちを捨てたまま、悪口を何度も言ったりすることなどである⁹³。

という重罪や小さな過ちが生じるであろう。

実際に苦しむ衆生を捨てないこととは、暑さ、寒さ、飢え、渴きなどと、[五] 無間などと、学処を害することと、種々なる苦により干上がっていることを見たならば、大悲の心により [彼らを] 捨てないことである。尊師アーリヤデーヴァが、

十二のヨーjanyaの大きさの鉄で作られた輪が、頭の上で回っており、菩提心が生じた直後に、存在しないものとなる、と聞いている⁹⁴。

と説かれており、軌範師シューラも、

病人の子供に対して特別に母親は愛情を起すように、同じように菩薩たちも優れていないものを特別に愛する⁹⁵。

説かれており、軌範師バヴィヤも、

激しい苦により悩まされて苦しむ者を見たとき、悲心が骨の底から生じ、彼に利益をなす⁹⁶。

と説かれており、詳しくは経典を見るべきである。

苦の原因などの衆生とは、慈悲の心を捨てないことである。すなわち、学処を害す

⁹² 現時点で典拠の確認はできていない。

⁹³ *Bodhisattvasaṃvaraviṃśaka* 7ab, 13abc.

⁹⁴ *Cittaviśuddhaprakaraṇa* 32.

⁹⁵ *Catuhśataka* 5.11.

⁹⁶ *Madhyamakahr̥daya*, 3.296cd, 397ab, 301ab.

ることと、[五] 無間をなすことと、殺生と、種々なる罪過の行為をなすというそれら
のことから転じなければならない。次のように、『聖正法念住經』に、

善い禁戒を受けた後に、善く護ることのない者は、確実に肉と骨を粉々にする
火の灰で焼かれる⁹⁷。

と説かれており、

聖者は、利得と欲望にとどまり、戒を破る者を見た後に、「この有情はどこに生
じるであろう」と述べて涙も流すに違いない⁹⁸。

と説かれており、軌範師ナーガールジュナも、

世間において、常に罪を犯そうとするすべての衆生は、常に損害がないように、
退けなさい⁹⁹。

と説かれている。

一般的な衆生を捨てないこととは、慈愛の心により捨てないことである。すなわち、
『聖弁意所問經』に、

菩薩は、一切の衆生を子供のように見るべきであり、自らの身体のようにみる
べきである¹⁰⁰。

と説かれており、『莊嚴經論』にも、

例えば、自らの子供を極愛する鳩が自らの子供を抱いているように、苦しんで
いる衆生たちに対して慈愛をもつ菩薩も同じである¹⁰¹。

と説かれており、『聖甚妙慧本統』にも、

⁹⁷ 現時点で典拠の確認はできていない。

⁹⁸ *Gaganagañjaparipṛcchā*, D. No. 148, Pa 323a7-b1; P. No. 815, Nu 286a1-2.

⁹⁹ *Ratnāvalī*, 5.82.

¹⁰⁰ *Pratibhāṇamatiparipṛcchā*, D. No. 151, Pa 339a3; P. No. 818, Nu 302a1-2.

¹⁰¹ *Mahāyānasūtrālamkāra*, 13.22.

菩薩は自らの楽に執着せず、自らの苦により悩まず、他者の苦により苦しむであらうし、他者の楽を菩薩は喜ぶ¹⁰²。

と説かれており、『吉祥金剛空行神タントラ』と『吉祥最勝第一大王経』にも、

例えば、輪廻の場所に最高の賢者がいるようになれば、その限り比類のない衆生利益を涅槃せずになす¹⁰³。

と説かれている。詳しくは経典を見るべきである。

八つの優れた人の考察とは、「ああ、いつになったら私は、衆生に生じた苦しみをなくすることができるであろうか。同じように老苦と病苦と死苦はなくなるであろうか。まだ解脱していない衆生たちは解脱できるであろうか。いまだ安穩ではない衆生たちと涅槃に至っていない衆生たちはいつ涅槃に至ることができようか」と思うそれぞれの瞬間において、記憶をしっかりとすべきである。

十の内なる善巧方便とは、他者の苦を自らのものとなし、自らの苦により他者の苦を取り除き、自らの楽と他者の苦を交換し、他者の苦により、自らが常に苦しむことに悩まされることである。すなわち、次のように『聖甚妙慧大本タントラ』に、

菩薩は自らの楽に執着せず、自らの苦から解放されても、他者の苦により心を苦しめ、他者の楽を菩薩は喜ぶ¹⁰⁴。

と説かれている。他者の罪過を自らの罪過として懺悔し、他者の善を自らの善にしてから随喜し、自らの善を他者の善に廻向してから随喜し、他者の善は自らの善にした後に廻向する。

外の善巧方便とは、四摂事と、五明処と、十善と、六波羅蜜と、四無量などによりすべての衆生を熟することである。すなわち、把握し、叱責し、唆し、脅かし、与えるものを減らしたり、報酬を与えたりすることである。

『聖金剛宝幢十廻向』と『普賢行願讚』と軌範師ナーガールジュナが著された『誓願

¹⁰² 現時点で典拠の確認はできていない。

¹⁰³ *Śrīparamādhyamantrakalpakaṅḍa*, Tib. D. No. 488, Ta 173b3-4; P. No. 120, Ta 178b5-6.

¹⁰⁴ 現時点で典拠の確認はできていない。

二十¹⁰⁵』と『有情喜讚十一』などにより衆生を捨てるべきではない¹⁰⁶。『聖迦葉品』に、

命のためにも嘘をつかず、衆生たちのために悪意のない高い志によりとどまるべきであり、発心の人に対して師の思いを起し、成熟させるそれらの衆生はすべて無上の大菩提を成熟するが、声聞と独覚はそうではない¹⁰⁷。

同じように、『聖觀自在所問七法大乘經』にも、

善男子よ、発心直後の菩薩は七法を学ぶべきである。すなわち、分別ですら欲望を行わなければ、二根による二つの結合は言うまでもない。睡眠中でさえも、悪友に頼ることはせず、鳥と同じ心で執着をなくし、方便と智慧を知ること、我慢と我執をなくし、有と無を捨ててから空性三昧をしっかりと修習し、真実ではない分別を滅することにより、輪廻を喜ばないことである¹⁰⁸。

まとめるのならば、憶念と、正知と、如理のままに思うことと、不放逸とを離れないことである。すなわち、

正知がないという過失があるので、過犯の汚れをもつものになるであろう。穴のあいた瓶のように、憶念にそれはとどまらない¹⁰⁹。

また、

憶念と正知と如理のままに思うことと不放逸とを離れずに¹¹⁰、

と軌範師シャーンティデーヴァは説かれている。心のそれぞれの刹那において忘れずに、憶念を連続させることにより菩提心をよく把握するべきである。もしもそのようになさないのであれば、

¹⁰⁵ *Saptāṅgavidhivimśakakārikā* (Tib. D. No. 4515, P. No. 5428) のことである。Cf. 望月 2015a: 178, n. 272.

¹⁰⁶ Cf. *Bodhimargadīpaṇjikā*. 望月 2015a: 108.

¹⁰⁷ *Kāśyapaparivarta*, [4].

¹⁰⁸ *Avalokiteśvaraparipṛcchāsaptadharmaka*, Tib. D. No. 150, Pa 331a7-b2; P. No. 817, Nu 294a3-6.

¹⁰⁹ *Bodhicaryāvatāra* 5.26cd, 25cd.

¹¹⁰ *Śikṣāsamuccaya* 27cdb.

守護者がおらずに苦しんでいるものに、物惜しみにより法と財を与えず、法を望むものに施をせず、病人に奉仕することをせず、義務のために行くことをせず、衆生利益についてなすことはごく僅かである¹¹¹。

という重罪や小さな過ちが生じるであろう。

菩提心をよく護ることとは、心を忘れてしまうことや、傷つけることや、捨てることから護ることである。例えば『聖迦薬品』に、

他者が後悔しないのに後悔させることと、先生と軌範師と供養すべき人を欺くことと、衆生に対し偽りやまやかしを受容し、高い志によらないことと、発心の人に対して恥ずべき言葉で話すこととである¹¹²。

と説かれている。『聖集一切福德三昧経』に次のように、

ナーラーヤナよ、四つの法により菩提心が忘れられるであろう。すなわち、増上慢と、法を敬わないことと、善知識を軽蔑することと、嘘をつくことである。さらに四つある。すなわち、声聞と独覚と親しくすることと、低い乗を望むことと、菩薩を嫌って誹謗することと、法を惜しんで伝えないことである。さらに四つある。すなわち、悪巧みをなすことと、偽りをする事と、師に対して二枚舌を使うことと、利得や尊敬に執着することとである。さらに四つある。すなわち、魔の行為を理解しないことと、業障により覆われていることと、高い志の力が少ないことと、方便と智慧がないこととである。それらによって、菩提心を忘れてしまうであろう¹¹³。

と説かれている。『海龍王所問経』に、

ナーガ王よ、その一切智とは、二十二の邪見と邪道を離れたものである。すなわち、声聞の心を離れないことと、独覚の心を離れないことと、我慢と増上慢と、欺きと、唯物論者のマントラと、誤ったものに入る事と、生による恐怖と、高慢さと、論難と、貪欲と、憎悪と、愚行と、業障と、法障と、自賛と他者の誹謗

¹¹¹ *Bodhisattvasaṃvaraviṃśaka* 6cd, 10c, 17dc, 11b.

¹¹² *Kāśyapaparivarta*, [3].

¹¹³ *Sarvapuṅyasamuccayasamādhī*, Tib. D. No. 134, Na 101a4-7; P. No. 802, Du 105a3-b3.

と、法を惜しむことと、失念と、悪友と、師を背くことと、六波羅蜜に従わないことと、断滅と恒常と、方便を知らない者による四摂事と、すべての罪悪から離れないことで、それらにより菩提心を忘れてしまうであろう¹¹⁴。

と説かれている。『入法界品』にも、

ああ、勝者の子たちよ、菩薩の中に相互に悪心を生じるといふ誤った行為より大きいものは見られない¹¹⁵。

と説かれている。同じように『信力入印法門経』などに詳しく説かれているので、經典を見るべきである。

過犯が生じる原因は、種姓がないことと、悲心が少ないことと、輪廻の苦を恐れないことと、悪友につかまることと、大菩提を遠いものと思うことと、魔による加持と、低い乗の人に頼ることと、小乗の教義を励むことと、衆生を愛惜しないで見捨てることと、菩薩に悪言を言ったり悪心を起こしたりすることと、菩提心に反する主張を捨てないことと、さらに無知と、放逸と、不敬と、多くの煩惱である。

捨てることの過失は、三千大千〔世界〕の衆生が阿羅漢になっても、彼らすべてを殺し、五無間をなしてしまうことより、これはとても大きな罪悪である。さらにまた、虚空に満ちた塵の数を仏が知っていても、「この罪悪の量はこれだけである」と仏が知ることはない。この意味について、詳しくは經典と『入菩提行論』などを見るべきである。

さらに、発心を喜ぶ功德は『八千頌般若経』に、

世間界のすべての量を知ることができるが、他者が起こしたのものに入る功德は、

大乘の經典と『入菩提行論』などを見るべきである¹¹⁶。

十方の仏と菩薩たちは知ることはない。他者が菩提心を起こしたことを喜ぶ功德の量は知ることができない¹¹⁷。

¹¹⁴ 現時点で典拠の確認はできていない。

¹¹⁵ 現時点で典拠の確認はできていない。

¹¹⁶ この句は、『八千頌般若経』の引用の中に挿入されており、テキストに混乱がある。おそらく直前の同じくが、ここでもう一度筆写されてしまった可能性がある。

¹¹⁷ *Aṣṭasāhasrikāprajñāpāramitāsūtra*, Vaidya 1960b: 216.

と説かれているので、詳しくは経典を見るべきである。

他者の発心を中断させる過失は『聖撰持善根経』に、

シャーリプトラよ、誰であれ発心を中断させようと望んだり、中断する者には、
シャーリプトラよ、涅槃におもむく福分はない。

と説かれており、

三千 [大千世界] のガンジス河の砂ほどたくさんの阿羅漢を殺したり、五無間
をなすことによりも大きな罪悪である¹¹⁸。

と『聖八千頌般若経』に説かれている。『入菩提行論』にも、

誰であれ菩提心を起こす福德を妨げる者は、衆生利益を損なっているので、彼
の悪趣に終わりはない¹¹⁹。

と説かれているので、詳しくは経典を見るべきである。

その菩提心が増大することは、その同じ心である菩提心が三種に増大することである。
すなわち、菩提心の律儀戒と、菩提心の撰善法戒と、菩提心の衆生利益戒とであり、例
えば上弦の月がだんだん大きくなっていくように、この心も増大するであろう。それも、

広大であることと、広大な利益をなすことと、善なるものにより勝っているの
で、意志は高い志となる¹²⁰。

と『莊嚴経論』に説かれている。高い志は新月のようであって、入っていくことが菩
提心ともいわれる。『菩薩地』「戒品」からも、戒は三種である。すなわち、自性戒と、
習戒と、正受戒とである。

そのうち、自性戒は、すべての衆生が一つの種姓であることと、如来蔵をもつことと、
大乘の種姓をもつことで、成就させるならば、成就の福分があっても、四種の過失によ

¹¹⁸ *Aṣṭasāhasrikāprajñāpāramitāsūtra*, Vaidya 1960b: 193.

¹¹⁹ *Bodhicaryāvatāra* 4.9.

¹²⁰ 現時点で典拠の確認はできていない。

り覆われているのである。すなわち、『莊嚴經論』に、

煩惱の繰り返しと、悪友と、欠乏と、他に依存することと、まとめれば、衆生の過失は四種であると述べられる¹²¹。

と説かれているので、その種姓をもつ人が、自性による大悲と自性による波羅蜜の功德を相續おいて備えることで、「自性戒をもっている」と言われている。

習戒は、三種である。過去の生までの大乘における修習を大きくしたものと、修習の中位をなしたものと、無量の生において修習したものとである。それ故に、マイトレイヤも、

諸仏を尊敬し、そこに善根を起し、善知識により護られた者が、これを聞く器である。仏への尊敬と、質問と、施と、戒などの行うことで器である、と聖者たちは知る¹²²。

と説かれている。

そのうち正受戒は、軌範師が三つの考察によりよく考察してから、器の次第に従って戒が与えられる。すなわち、前に述べた人と、その波羅提木叉の四重罪の助伴と、大乘の四重罪と同じものと、四十六の小過が与えられる。その中位の人には、中位の人の律儀が与えられる。その上に、『聖虚空藏経』などの十八の根本罪と、軌範師シャーンティデーヴァが説かれた十四の害が与えられる¹²³。その第三の人には、それらの上に『聖七百頌般若経』に説かれている四百の戒律と、大乘経典に説かれている資糧道の菩薩のすべての学処を護るべきである。資糧道では、律儀戒が最も重要である。加行道では、撰善法戒が最も重要である。出世間道では、衆生利益戒が最も重要である。一人の人の相續を数えるならば、資糧道の小さい時の人は、最初の学処を努力すべきである。資糧道の中位の時の人は、中位の学処を努力すべきである。第三の人は、第三の学処を努力すべきである。前に説明した習戒を意図してから、『聖浄信修習経』に、

大乘を信じる習気が菩薩に従うことは、そのように従う。すなわち、彼は歩いていても、座っていても、横になっていても、眠っていても、酔っていても、昏睡し

¹²¹ *Mahāyānasūtrālamkāra*, 3.7.

¹²² *Abhisamayālamkāra*, 4.6, 7abd

¹²³ Cf. *Bodhimargadīpapañjikā*. 望月 2015a: 98.

ていても、狂っていても、常に大乘を信じるであろう。菩薩が生が変わっても、他の生において大乘を信じるので、菩提心を忘れてしまっても、それぞれの生においても劣った者や、劣った福分の心の者にならないであろうし、悪友や声聞や独覚と交わっても心を奪われないだろうし、どうして異教徒により心が奪われようか。大乘であるから大乘を信じる縁を少しでも得ているので、速やかに集中的に常に大乘のために大乘の信をなすのである。それ故に、大乘を信じる習気に導かれるその人も、生の流れにおいて増大し、無上正等覚に至るであろう¹²⁴。

と説かれている。

そして、菩提心の功德は二種である。すなわち、願の功德と、入の功德である。

願の功德は、無量である。簡略にすれば、世間において三宝の相續を中断しないことと、一切の百法の原因や種子であることと、罪惡を制圧することと、過犯から脱することと、非人と疫病のすべての障害をなくすことなどである。『聖摂持善根經』に、

シャーリプトラよ、初発心の福德の束は、僅かばかりでも、少しばかりでもない。このように、百劫や、千劫や、十万劫にわたっても述べることができないので、菩薩たちが発心の福德の量を知ることがどうしてできようか¹²⁵。

と説かれている。『仏母八千頌』にも、

所縁をもつ人は、ガンカーの川の砂ほどたくさん劫において善根を積んだものなので、他の誰かが一日や、半日や、指をはじく瞬間においても菩提心を起こすならば、福德は大きくなる¹²⁶。

と説かれている。『入菩薩行論』にも、

菩提心が生じるやいなや、輪廻の牢獄に縛られた憐れむべき人たちは善逝の子と言われ、人天を伴う世間で敬礼されるようになる。

金になる油の優れた面のように、この不浄なる身体を捉えてから、勝者の身体は価値のつけようのない宝に変身するので、菩提心の宝をよく堅固に把握するべきで

¹²⁴ *Mahāyānaprasādhaprabhāvanāsūtra*, Tib. D. No. 144, Pa 15a6-b3; P. No. 812, Nu 16b2-7.

¹²⁵ *Kuśalamūlasaṃparigrahasūtra*, Tib. D. 101, nGa 134a1-2; P. No. 769, Gu 142b7-143a1.

¹²⁶ Cf. *Aṣṭasāhasrikāprajñāpāramitāsūtra*, Vaidya 1960b: 54-67.

ある¹²⁷。

などと説かれている。

入の功德も『入菩提行論』に、

菩提を願う心から、輪廻の時に大果を生じても、例えば、入の心のように、福德が不断には生じない¹²⁸。

というのと、また、

それ以来把握して、眠りを好み、放逸を起こした人にも 絶え間ない多くの福德の力が、虚空のように生じる¹²⁹。

と説かれている。すなわち、『菩薩地』と広く経典を見るべきである。

仏と菩薩たちには、衆生を輪廻より救済すること以外の行為は何もない。聖ナーガールジュナが、

利他の円満が、結果の最勝であると認められ、仏を喜ばせることなどというそれ以外のことは、彼らのための結果とお望みになされている¹³⁰。

と説かれている。それ故に、仏身と、智慧と、功德と、正しい行為は、利他だけを行うことより成立したものである。次のように、

世尊であるシャーキャの守護者も、述べることもできないほど昔の劫の彼方において、如来で、阿羅漢で、正等覚者である帝幢という仏になってから、現在の仏でありと、聖観自在も、如来で、阿羅漢で、正等覚者であった法幢という明らかに悟った仏になってから、現在も極楽において世尊無量光が黄昏時に涅槃した夜明けに観自在は仏となるであろう¹³¹。

¹²⁷ *Bodhicaryāvatāra* 1.9-10.

¹²⁸ *Bodhicaryāvatāra* 1.17.

¹²⁹ *Bodhicaryāvatāra* 1.19.

¹³⁰ *Kudṛṣṭinirghātana* 3.

¹³¹ *Māyopamasamādhi*, Tib. D. No. 130, Da 227a7-b2; P. No. 798, Thu 246b4-7.

と言われ、

尊者ヴァジュラパーニも、過去のガンジス河の砂ほどたくさん九十二劫の彼方で、智灯という如来のもとで仏となってから、現在もこの賢劫に続いて金剛歩如来として仏となるであろう¹³²。

と説かれている。次のように、輪廻には始まりも終わりもないので、聖マンジュシュリーにも始まりがなく、本初仏である。三時のすべての仏の心が智慧である。一切の仏は六種にまとめられ、六種の心の中にヴァジュラティークシュナなどの智慧薩埵がおり、『秘密集会タントラ』の諸尊のうち最高であるマンジュヴァジュラサマンタパドドラと、マンジュヤマリーの衆の最高のも、吉祥なるヴァジュラバイラバがヘルカとして顕現したものと、『吉祥チャクラサンヴァラ』の釈タントラである『アビダーナ』の諸尊の最高のも、シンハナーダと、クムダと、ジャナパドドラと、マンジュシュリーの言葉を与えた童子などが所化の信解に応じて顕現している。現在も、東方において成仏するであろうことを『文殊師利仏国土功德莊嚴經』が説いている。

仏と菩薩たちが衆生を捨てないので、輪廻をなくさない限り、身口意の所作と、二十七の所作と、三十五の所作と三大神通などを中断せずに輪廻から救い出しても、輪廻する衆生が尽きることはないであろう。なせならば、輪廻には始まりと終わりがないからである。この意味を明らかにするために、聖観自在が衆生たちを輪廻から救い出すことを誓願してから、衆生界を見るので、頭が開いた時に世尊無量光が頭にお座りになっている。仏と菩薩のすべてが、一切の衆生のために無量の苦痛を身体にお受けになられている。次のように、世尊シャカムニも、三無量劫のそれぞれの生の時に、棄捨と、大棄捨と、極端な棄捨の布施と、戒律と、忍辱と、精進と、禪定など[により]、衆生のために無量の苦痛を身体に受けられているから。『衆生喜讚』に、次のように、

妻たちと、子供や孫と、国政と、大自在天と、肉や血や脂肪と、身体や目と、他者の樂のために、私は与えるのである。いかなる衆生であれ利益をなせば、私に対する最高の供養である。衆生たちに害をなしたのならば、私に害をなすことである。

などと十一の偈頌に説かれている。今でもこのジャンプ州において、軌範師ナーガールジュナが頭を棄捨したことと、軌範師アーリヤデーヴァが目を棄捨したことと、軌

¹³² *Tathāgatācintyaḡuhyānirdeśasūtra*, Tib. D. No. 47, Ka 227a7-b2; P. No. 798, Thu 246b7-7.

範師マートリチェータ、アシュヴァゴーシャが年老いた虎に身体を棄捨したことで、私の師で大バラモンであるジターリは年老いた虎に足を打ち砕いてからふくらはぎを与えた時のことが伝えられている。その人たちは、慈愛と悲心が相續を潤す菩提心を清浄になされている。すぐれた菩薩は、加行道において菩提心を正しく生じる。次のように、『菩薩地』に、

信解行地において善根を堅固にした者に菩提心が生じる¹³³。

と説かれているから。それ故に、菩薩は他者を慈しまなければならないので、自と他を交換することにより菩提心を清浄にするべきである。自分が以前にソーマプリーの森のなかにいた時に、世間自在主が目の前で説かれたものに、

善男子よ、速やかな成仏と、利他を望むならば、菩提心を清浄にすることと増幅のために精進しなさい。

と説かれて、後は現れない。また金剛座を廻っている時に、尊母ターラーと、尊母ブリクティーが、

速やかに成仏することを望むものは、菩提心に対して努力するべきである。

と説かれている。また、金剛座に座るとっている時に、窓から、

バダンタよ、お前は菩提心を清浄にしようと望んでいるのならば、慈愛と悲心を修習しなさい。

と説かれており、尊師セルリンパは、

長老よ、慈愛と悲心から生じた菩提心を清浄にしなさい。それが清浄でないと、ベンガリーの瑜伽行者のようにはなれない。菩提心は大乗のすべての法の基本であり、原因であり、種子となるものである。

¹³³ *Bodhisattvabhūmi*, 荻原 1971: 326.

[と説かれている。] 吉祥なる『大日経』に、

一切智の原因が菩提心である。基本は大悲である¹³⁴。

と説かれているので、心のそれぞれの刹那において憶え、正智により慈愛と悲心の菩提心を中断することなく起こすべきである。そのタントラには、次のように説かれている。

犯したならば、修復できない法は四つである。すなわち、菩提心を捨てることと、衆生に害をなすことと、その法を捨てることと、物惜しみすることである¹³⁵

[と説かれている。] そのうち、菩提心を損なっていなければ、他の三つは修復できるが、それが損なわれていれば、三つが損なわれていなくても、修復できない。それ故に、生じる原因を知るべきで、把握し、成就させ、清浄にし、増大させることをとても堅固にするべきである。この意味の詳しくは、『聖入慈大乘経』や、『聖海龍王所問経』や、『聖集一切福德三昧経』や、『聖虚空蔵所経』などの経典を見るべきである。

最初に正受した三つの戒は、眼の実のように護りなさい。戒を牛の尾のように護りなさい。因果を知ってから、それを無駄にしてはならない。確実にすぐに死ぬであろう。ジャンブー州の寿命は不確定で、現在は寿命の汚れがあるので、長くとどまる力はない。死を憶えているべきで、「内外の一切のものは、三無常により尽きるので、確実にすぐに無となるであろう」と思い、すべての罪過と過犯を四力により浄化するべきである。さらに、菩提心を起こせば清浄になる。

声聞たちも害より転じて大乘にとどまることにより、一切の衆生に対し子供のように慈愛をなす。慈愛と悲心を起こすことにより以前になしたその罪過を浄化する

¹³⁶。

と軌範師ナーガールジュナも説かれている。特別な陀羅尼を唱えることと、『過犯懺悔』と『断除業障経』と『三蘊経』などにより明らかになる。

また、「過犯と罪過であるものが生じていないことを知れば清浄である」と経典に説かれており、一切法を平等なものを知れば、清浄であるので、平等を見なければならな

¹³⁴ *Vairocanābhisambodhi*, D. No. 494, Tha 153a5; P. No. 126, Tha 117a8.

¹³⁵ *Vairocanābhisambodhi*, D. No. 494, Tha 220b5-7; P. No. 126, Tha 185b4-6

¹³⁶ 現時点で典拠の確認はできていない。

い。衆生に依ってから仏が生じるので、衆生を第一とするべきである。『中観思釈炎』に次のように、

結果を望む束縛に縛られているものたちは、施をなすところを選んで求めている。他の人たちが飢えと渇きなどで苦しんでいることを鎮めるために、器を数えずに与えれば、法の平等性を理解しているであろう。次のように経典に、

他所で¹³⁷、一法により菩薩は速やかに明らかな悟りを得る。一切の衆生に対して等しい心で思い、区別をしない。「三宝は自身の功德の国土であり、畜生などにはない」と思うならば、その菩薩は法を平等なものと考えていないであろう。それ故に、「三宝と師は施をなされるべき善妙なる国土であり、畜生などにはない。不毛な土地に種を撒くのと同じである」と思うのならば、菩薩の法は誰に成立しようか。

と説かれているので、菩薩は高い志を堅固にし、悲心で潤った心相続により、布施をなすところを選ぶべきではない¹³⁸。

と『思釈炎』にお説きになられている。軌範師聖ナーガールジュナは、『有情喜讚』にもお説きになられている。他の大乘経典にも説かれている。勝者インドラブーティは、

一切の身体をもつものに対して、平等な正しい心を起こすべきである。いかなるものであれ平等でないものがあれば、前中後から解脱したその心は生じないであろう¹³⁹。

と説かれている。

鈍根で、未熟な初学者であり、智慧に長けておらず、悲心を修習せず、悲心が少ないものは、国土を選ぶべきである。経典とタントラと法を広く解説したものなどから成立することが説かれている。その初学者が、三昧をなさない時、一切の行道を思いだし、正智により把握するべきで、凡夫の人とは弾指の間さえも一緒にいるべきではない。愚かな話を捨てて、餓鬼に絶えず施食を与え、『般若経』を読み、唱えるべきである。神通を得ていない間は法を解説せず、空にとどまり、衆生を捨てず、言葉通りのことをなし、「善逝の加持」というそのような功德をもつべきである。夢の中の心の場合も、悲

¹³⁷ *Tarkajvālā* では、「童子(gzhan nu)」とある。宮崎 2007: 98, 注 76.

¹³⁸ *Tarkajvālā*, Tib. D. No. 3856, Dza 51a7-b3; P. No. 5256, Dza 54b4-8.

¹³⁹ *Jñānasiddhi* 8.24cd, 25d, 26ab.

心を離れるべきではない。日常の一切の行道も『聖法雲経』に説かれるようになすべきである。いかなる場合も、他者を喜ばせ、欲は少なく、足りていることを知り、寂静で、穏やかでいるべきである。八つの世間の法を制圧するべきである。十善の力をもつべきである。一切の事物に対する愛着と執着を少なくすべきである。一切法を平等にし、煩惱と小煩惱の対治を成立させるべきである。他者の苦を見たならば、彼が出家者である場合は資具でないものを与えるべきであり、在家者であるならば資具に執着することなく与えるべきである。

自分の身体と、財産と、三時に善を生じたものを一切の衆生の利益のために際限なく与えるべきである¹⁴⁰。

尊師アヴァドゥーティパは、

自分の過失を考察するのは鋭い目の者のように、他人の過失を考察するのは盲者のように。正直で我慢がなく、常に空性を修習するべきである。

直接または間接に悲心により、自らと他者を交換するべきである。何故ならば、自分より衆生を慈しむためである。

と師ナーローパが説かれている¹⁴¹。

と言い、菩薩は自分より他者を慈しむべきなので、自らと他者を交換するべきである。慈愛と悲心の菩提心はマントラの主題でもある。『十四根本過犯』に、

衆生たちに対する慈愛を捨てることが第四である、と勝者は説かれている。法の根本は菩提心であり、それを捨てることが第五である¹⁴²。

と説かれている。他者を責めないで、他者の罪過を縁とせず、百由旬にわたって行くべきである。

出家の菩薩には、どこであれ論争のある場所から百由旬の彼方へ行くべきである。

¹⁴⁰ *Śikṣāsamuccaya*, 4ab, 5.

¹⁴¹ 現時点で典拠の確認はできていない。

¹⁴² *Mūlāpattisaṃgraha* 3.

もしも行かないのならば、菩薩は損なわれるであろう¹⁴³。

と説かれている。六波羅蜜をできるだけ行いなさい。資糧道の十三法と、聖なる七宝と、六念と、四摂事と、正しい人の十六の考察を憶えているべきである。特に菩薩の八つの考察を憶えているべきである。聖ナーガールジュナが説いた七つの輪廻の罪過と、聖アサンガが説いた七つの無常なる輪廻の罪過を憶えているべきである。五妙欲の罪過を知り、対治に依るべきである。いかなる非法もなすべきではない。慈愛と悲心の直接または間接的随念により衆生利益をなすべきである。「ああ、いつかこれらのものたちを輪廻から救い出そう。ああ、これらのものをどのようにしよう」と思い、繰り返し思い出すべきである。

この仏乗に出離することを望むものは、すべての衆生に対し等しい心で、父母の想と、利益の心と、慈愛の心により、とどまるべきである。怒りがなく、親切に優しい言葉で話すべきである¹⁴⁴。

と説かれているようになすべきである。僅かな善もすぐに廻向しないのならば、アパラーラやアータヴァカの古い伝説と同じになってしまう。そのように尊敬し、長い間連続してその菩薩が禪定に入っていないときも説明した通りのその法を領受してから、禪定に入っている時には先に説明した虚空金剛三昧を修習し、勝義菩提心が少しばかり明らかになれば、自らの身体が存在を感受せず、諸煩惱も少しばかり鎮まり、世間の所作と言説を曖昧に述べ、内外のすべての事物も曖昧模糊で弱々しいものと見て、身体は微細で、知は軽く、遍満さや、柔軟さや、軽やかさや、喜びや、安樂が生じる。

さらにまた、『聖宝徳蔵偈』に説かれている特徴も生じる。すなわち、

種々なる想を離れ、論理をともなった言葉を語る¹⁴⁵。

などという二十四偈が説かれている。四念住と、四正動と、四神足と、信と精進と念と定と慧を修習することにより、資糧道にとどまることと、初学者の地と信解行地にとどまることと、順解脱分の善根が起こされるのである。それから順決択分の諸善根を起こすために、説明した通りに、尊敬して長い間連続して努力をし、次第に五根と五力と、

¹⁴³ 現時点で典拠の確認はできていない。

¹⁴⁴ *Ratnagaṇaṣaṅcayagāthā* 16.6.

¹⁴⁵ *Ratnagaṇaṣaṅcayagāthā* 17.2a.

光明を得て、光明を増大し、真実義において一方に入り、無間三昧を得て、勝義諦を理解するようになってから、初地の歡喜地を得るのである。その時に、四忍と四平等も生じる。それから十波羅蜜を完成し、十自在と、八光明と、四莊嚴と、十六悲などを得るのである。地の設定は『十地経』に説かれている。どのように十地の間に禅定に入り、それに続くものを得るのかは、次のように、『聖入無分別陀羅尼』に、

その菩薩が、内において入定した時に、一切の法を虚空のように見るが、その後
に得たものに対しては、幻の八喩のあり方のように見る¹⁴⁶。

と明らかに説かれている。分別が尽きた金剛喩三昧を証得した時に、後に得るものは何もなく、法界に転じてから法身を明らかに証得するのである。その時に把握してから、虚空にとどまっている限り、法身に入るので、後に得るものもないのである。

私を色と見たり、私を声で知る人は、誤った道に入ってしまったので、その人は私を見ていない。諸仏は法身であり、導く者たちを法により見るのである¹⁴⁷。

と説かれており、『吉祥金剛鬘タントラ』に、

すべてのものは識に入り、その識も光明であり、涅槃で、すべては空で、法身とも説かれている¹⁴⁸。

と説かれており、『聖法集経』にも、

仏そのものは、生じることはない¹⁴⁹。

と説かれ、『聖出世間偈』にも、

諸仏は法身で、清浄で、虚空のようである¹⁵⁰。

¹⁴⁶ 現時点で典拠の確認はできていない。

¹⁴⁷ *Vajracchedikā* 26.

¹⁴⁸ 現時点で典拠の確認はできていない。Cf. *Piṇḍīkṛtasādhana* 43cd, 44ac.

¹⁴⁹ 現時点で典拠の確認はできていない。

¹⁵⁰ 現時点で典拠の確認はできていない。Cf. *Buddhāvataṃsaka*, D. No. 44, Ka 81b5; P. No. 761, Yi 88b5-6.

と説かれ、ディグナーガも、

般若波羅蜜は不二であり、その智慧は如来である¹⁵¹。

と説かれ、軌範師自身も、

虚空のように汚されることなく、戯論がなく、変化しない本質を見る者が、如来を見る。

聖なる功德を完成したあなたと、世界の師である仏を、月や月光のように、賢者たちは区別を見ない¹⁵²。

と説かれ、また軌範師自身が、

一切の善法にとどまらず、法界そのものとなっており、最高の甚深を得ている甚深なるあなたに敬礼する¹⁵³。

と説かれ、また、

法界と諸仏は、それ故に実際に区別がない¹⁵⁴。

と説かれ、また、

不生の本質により、あなたには生じることはない。守護者には、行くこともとどまることもない。実体のない方に敬礼する¹⁵⁵。

と説かれと、また、

諸仏は常に、法性にこのようにとどまっている¹⁵⁶。

¹⁵¹ *Prajñāpāramitāsamgraha* 1ab. 服部 1961: 120.

¹⁵² *Prajñāpāramitāstotra* 2-3.

¹⁵³ *Paramārthastava* 8.

¹⁵⁴ *Acintyastava* 42ab.

¹⁵⁵ *Paramārthastava* 3.

¹⁵⁶ 現時点で典拠の確認はできていない。

などとたくさん説かれており、まず置いておく。

尊者アーリヤデーヴァが、

まず、この事物は、虚空の森から生じた蓮華のように、存在するものではない。二つとは異なるものも、兎の角のようなものである。解脱の相はいかなるものが存在しようか¹⁵⁷。

と説かれ、『吉祥智金剛集タントラ』にも、

諸仏も、利他をなさらない時には、真実の究極にとどまってから、一切の戲論を滅してお座りになっている¹⁵⁸。

と説かれており、軌範師聖アサンガも、次のように、

一切の衆生が明らかに悟った後に法身になったとき、一切の仏はすべて清浄たる法界になってから、その本質におられるのである¹⁵⁹。

と『撰決択分』にお説きになられているので、この軌範師も真実において不二の智慧もお認めになっておらず、無分別の後に得られるものもお認めになられていない。何故ならば、三地の自在を得ているので、一切法の不生を理解しているからである。この意味から導かれてから『金剛鬘タントラ』に、

これは勝義諦であり、顕現がなく、特徴がない。勝義諦と言われるものは、すべての仏がおられるところである¹⁶⁰。

と説かれている。軌範師チャンドラキールティも、

不生である法性がムニの場所であり、仏である、と説かれている¹⁶¹。

¹⁵⁷ 現時点で典拠の確認はできていない。

¹⁵⁸ *Vajrajñānasamuccaya*, Tib. D. No. 447, Ca 286a2; P. No. 84, Ca 294a8.

¹⁵⁹ 現時点で典拠の確認はできていない。

¹⁶⁰ Cf. *Piṇḍīkṛtasādhana* 45.

¹⁶¹ *Triśaraṇasaptati* 22ab.

と説かれている。

無始以来の事物に執着することで二諦の在り方を知らない者たちが、[言う]。

あなた方中観派のようであるのならば、諸仏がたくさんの無量劫において菩薩となった時に行った数え切れないほどの難行や、数え切れないほどの福德の資糧が無意味なものになってしまい、法とサンガも存在しないものになるであろう。衆生たちを輪廻から救い出すことがないので、その罪過をもつ見解を遠くに置かなければならない。これは白法の収穫物に対する霰であり、外道の断滅論者よりもこれは大きいので、次のようにこれは隠して秘密なものとして知るべきである。

中観派のものが [答えて] 言う。

あなたは、智慧が清浄でなく、愚かなものである。『大雲経』や『入楞伽経』や『大法鼓経』や『文殊師利根本タントラ』などで何度も授記された聖ナーガールジュナの教義を損滅する彼らは、自らを惨めなものにしている。そのお認めになられた教義により、諸仏は法身で、その知恵も一切の分別を捨ててから法界になるので、それ故に界と知恵と対象と対象をもつものは存在しないので、無分別智にどのような所作が存在しようか。

軌範師も、

過去が存在しないので、それ故に、未来も存在しない。とどまるどころが解っているので、現在はどこにあらうか¹⁶²。

と説かれ、

入定することとしないことは、どこにもこれらは存在しない。有と無を捨てたものが、双運であると説者は説いている¹⁶³。

と説かれているので、無分別智は認められていない。その時に無分別智は存在しないことで、すべての戲論が寂滅したものとなるから、後に得るものがどのように存在しよう

¹⁶² *Bodhicittavivarāṇa* 31.

¹⁶³ *Bodhicittavivarāṇa* 16abd, 15c.

か。存在しないものである。『入楞伽經』に、

一切の迷乱を捨ててからも、もしも迷乱が顕現するのならば、それは真実の迷乱である。眼病が真実ではないように¹⁶⁴。

と説かれている。そのうち、眼病は三つある。眼病をもつ無知な者と、眼病をもつ賢者と、眼病を浄化した賢者とである。諸仏は眼病を浄化しているので、さらに眼病が現れることはないであろう。では、「仏には身体や、知恵や、功德や、所作もないのか」と言うのならば、答えて言う。三つの原因と一つの縁により調伏されるべきいずれかの本質に現れるのである。調伏されるべきものの区別により身体も種々なるものとして現れるのである。知恵も自ら生じる大智である。師アヴァドゥーティパと、師タームラドヴァイーパが、

知恵は法界と異ならず、法界において自ら生じる智慧と名づけられる。不可思議で、言語の戯論を離れており、その調伏されるものの本質を五種とお説きになられている。

と軌範師ナーガールジュナは説かれている¹⁶⁵。

と説かれている。そのように、十力などと、三神通と、二十五の所作と、三十二の所作とが、調伏されるべきもののいずれかの本質に現れる。それ故に、軌範師自身が、

守護者には、心がなく、分別が動くことがなくても、あなた自身は自然に衆生に対して仏の所作をなすであろう¹⁶⁶。

また、

一切の分別は、大風による如意樹のように、動かないけれども、それでも一切の衆生の想いを円満にされている¹⁶⁷。

また、

¹⁶⁴ *Laṅkāvatāra* 2.166-167 (= 10.127-128).

¹⁶⁵ 現時点で典拠の確認はできていない。

¹⁶⁶ *Nirāpamyastava* 24. Cf. *Kudṛṣṭinirghātana* 2.

¹⁶⁷ *Kudṛṣṭinirghātana* 4.

守護者よ、あなたに衆生の想が作用することは全くなくても、苦をもつ衆生に対しては悲心という利益をお与えになられているのが、あなたである¹⁶⁸。

また、

利他の円満が結果の最高であると認められる。仏性などのそれ以外のものなどは付随的なものと認められる¹⁶⁹。

と説かれている。また、軌範師アーリヤデーヴァが、

たぐさんの無量劫にわたり常に利他だけをなし、究極の法身を得たならば、有情利益がある限り、涅槃せずに利他をなされている。それ故に、菩薩は利他でない行いをなすべきではない。自利だけを励むことは、五趣のすべてが行うことである。常に悲心もち、利他を領受する最高の人は、有情の父母であり、とても喜んでいる¹⁷⁰。

と説かれている。三身の設定は、軌範師が他のところで説かれているので、ここでは省略した。以上のように、法身の加持から、三つの原因と一つの縁による色身と深大な法を示している。身体の所作は、輪廻が空になるまで生じる。この意味を意図してから、タントラに、

種々なる思惟を多く信解する衆生により、多くの差異が生じる。一つであるのに、水器に多くある月の影像が現れることと同じである¹⁷¹。

と説かれており、尊者アーリヤデーヴァも、

宝石と、貝と、珊瑚と、瑠璃と、銅の器を配置してから、そこに一つの月が虚空
中より変化してから、形がそれぞれに異なって現れるように、そのようにその守

¹⁶⁸ *Niraupamyastava* 9.

¹⁶⁹ *Kudṛṣṭinirghātana* 3.

¹⁷⁰ 現時点で典拠の確認はできていない。

¹⁷¹ 現時点で典拠の確認はできていない。

護者の真実の金剛心が有情の集まりに多様なものとして遍満しているのである¹⁷²。

と説かれている。福德の少ない劣根のものには、身体は決して現れない。『莊嚴經論』に次のように、

例えば、器が壊れた後には月の影像が見えないように、悪い衆生には仏の影像も現れない。

と説かれている。そのように、そのお言葉も、調伏される器に応じてから生じるのである。

諸仏は調伏されるものに対して、信解に応じた法を説かれている。ある者には、罪過より転じる法を説かれている。

ある者には、因果の二つは尽きることがないという法を説かれている。ある者には、二諦に区別した法を説かれている。

甚深なるものに疑惑をもつ者たちには、空性と悲心の心髓をもつ信解に応じた法をお説きになられている¹⁷³。

と軌範師ナーガールジュナが説かれている。また、清浄ではない器には現れない。梵天勸請の時に、

甚深で、情欲を離れ、甘露で、無為で、甘露のような一法を私は得た。誰に説いても理解しないであろう。私は、ただ一人で森で修習すべきである¹⁷⁴。

と説かれている。軌範師も、

何故ならば、そのような甚深なる法は器ではない有生には現れないので、それ故に賢者たちは、仏の一切智を知っているのである¹⁷⁵。

と説かれている。それ故に、この意味は『聖如来不思議秘密經』に説かれている。それ

¹⁷² 現時点で典拠の確認はできていない。

¹⁷³ *Ratnāvalī* 4.94cd, 95, 96.

¹⁷⁴ *Lalitavistara* 25.1

¹⁷⁵ *Ratnāvalī* 1.74.

故に聖ナーガールジュナに従う中観派には、いかなる過失も存在しない。この教義を誹謗する者たちは、甚深で広大な法を捨てた地獄の苦しみを長い間受けることであろう。

昔の軌範師たちにより、それぞれの主張がなされている。

軌範師ディグナーガと、ダルマキールティなどは認識論の著作を詳しく著した。

軌範師ダルマトラータと、軌範師ブツダデーヴァと、ヴァスミトラと、ゴーシャカと、マノジュニャたちは、声聞の毘婆沙師の聖典を詳しく著した。

軌範師シュバグプタと、ダルモータラと、先のヴァスバンドゥなどは、声聞の経量部の著作を詳しく著した。

軌範師アサンガと、ヴァスバンドゥと、スティラマティと、プラジュニャーカラグプタと、カリンカと、デーヴェーンドラブッディと、高貴な優婆塞のアスヴァバーヴァなどは、有相と無相の著作を詳しく著した。

軌範師バヴィヤと、ブツダパーリタと、デーヴァシャルマと、アヴァローキタヴラタと、シャーンタラクシタと、カマラシーラなどは中観の著作を詳しく著した。

軌範師チャンドラゴーミンと、軌範師シューラと、軌範師サーガラメーガと、軌範師シャーンティデーヴァと、軌範師ルンタカなどは、発心直後の初学者のために四無量と四摂事と波羅蜜などをどのように受けるのかという広大な行の著作を詳しく著した。

軌範師ナーガールジュナと、軌範師アーリヤデーヴァと、軌範師マートリチュータと、軌範師カンバラと、軌範師チャンドラキールティの五人の軌範師が著した中観の著作はすべての中観派の教義の底本である。一切の中観派の著作の根本であるから匹敵するものがないものである。

次のように、真言の著作も、軌範師ブツダグヒヤと、軌範師シャーキャミトラと、軌範師プラジュニャーシッディと、軌範師アーナンダガルバなどが、瑜伽タントラと所作タントラの意味を明らかされた。

軌範師インドラブーティと、軌範師ブツダジュニャーナパーダなどは『吉祥秘密集会タントラ』の意味だけを明らかにした。

軌範師チャリヤーパーダと、軌範師ヴァジュラガンターと、軌範師ルーイパーダなどは『吉祥サンヴァラタントラ』の意味を明らかにした。

軌範師ドンビーヘールカと、サロールーハヴァジュラなどは『ヘーヴァジュラタントラ』の意味だけを明らかにした。

軌範師クックリパーダと、ダルマパーダなどは『吉祥マハーマーヤー』の意味を明らかにした。

軌範師は、すべての衆生に対するこの恩恵が大きいのである。

凡夫たちに利益をなすために『縁起算学骰子相』を著した。

大臣たちに利益をなすために『般若百論』と『十二考察』などを著した。

王たちのために『勸誡王頌』と『宝行王正論』を著した。

四衆に属する福德の少ない者たちのために『香混合偈』などを著した。

医者たちのために『百瑜伽論』と『三十二瑜伽』と『二十瑜伽』と『甘露心髓』と『寿命経』などを著した。

大乘に転じた人たちのために『発心儀軌』と『菩薩行解明』と『経集』などを著した。

またそれらの上に『般若根本中頌』と、それを広げた『廻諍論』と『空性七十』を著した。その支分として『六十頌如理論』と『大乘二十論』と『大乘破有論』と『修習次第』と『広破論』と『百字論』と『菩提心积』と『讚法界頌』と『勝義讚』と『無譬讚』と『不可思議讚』と『超世間讚』と『心金剛讚』と『稲竿経広疏』と『縁起心論积』 [を著した]。

そのように、鋭根の者でも鋭い大乘の真言の器となった者たちには、『秘密集会タントラ』の意味である『吉祥秘密集会曼荼羅灌頂儀軌』と『儀軌二十頌』と『成就法略集』と『修習法経合集』と『五次第』を著した。『吉祥金剛四座大タントラ広疏』を著した。『ナーマサンギーティ积』と尊者カサルパナの『成就法』と『六字論』とアパラチャナとヴァーギーシュヴァラと語施童子¹⁷⁶などのたくさんの成就法を著した。『三三昧莊嚴儀軌』と『一勇者成就法』とその概説である『善如意牛』と『供物三十頌』と『一切仏集合タントラ究竟次第大説示』など多く著した。

この正しい人は、仏そのものなので、彼が著した教義を心に堅くするべきである。それは何故か、と言うのならば、『大雲経』に、

天子たちよ、リッチャヴィの童子であるこの一切衆生喜見と言う者は、過去の無量劫の彼方においてナーガクラディーパ如来が世間に生じたとき、大精進龍という転輪聖王と、持法と、持妙法蔵という大臣がおり、王と大臣の二人は仏の遺骨の有無の論争をなし、王の善説でその時の衆会に驚きが生じてから、その世尊に尋ねると、「その王は 甚深なるもの知っている」と述べられたことで、その世尊が王の功德を解説しており、経典を見るべきである。

それから王は衆会をともない、仏に手にいっぱい宝石を撒き、誓願を立てて、「未来時に仏シャーキャムニの教えが滅する時に、そこで私は出家して、法の最後になったならば、大きな声で三度唱え、法衣を着るだけで、髪を剃っただけで、国を出ます。正法が生じるように。正法のために自らの生命を捨てます」と誓願

¹⁷⁶ Tib. Tshig sbyin gzhon nu. 人名の特定ができていない。

を立てた。それに続いて、大臣と王妃も誓願を立てたのである¹⁷⁷。

天子たちよ、私が去ってから何百年もたった後に、南方の種族にシャータヴァーハナという王が現れるであろう。その時に、正法が滅するまでの百年しか残さない時に、私の声聞が生じるであろう。正法を引き出し、正法の輪を廻し、大乘を他者に広く説くであろう¹⁷⁸。

と説かれており、また、

比丘よ、その授記を聞きなさい。それは私に有益で、私の座を大きくし、重荷を運び、私のシャーキヤの童子である。私が去った後に、南方の種族でリシュヤークという国にプンヤヴァティーの大城市の北方に生まれるであろう。清浄なる偉大なカルジュリーカ¹⁷⁹という一族はシャカの種姓である。

一切衆生喜見というリッチャヴィの童子は、私の法を広めるために、この最高である菩薩の偉大な種姓の王族に生まれるであろう。その親族のすべてはその名から付けられる。彼が出家した後、その衆会も正法のために命を捨てて、法を説く¹⁸⁰。

また、それに続いて、次のように、

その教義を信解する者は少なく、多くは信解しない。四法を備えれば、それを信解して、信賴するであろう。以前の仏たちにその教義を聞いて信解することと、善知識により把握されることと、高い志を起こして善根を堅固にすることと、広大に信解することである。それを信解せず、信賴しない者はすべて、魔により加持される愚者である。それを信解し、信賴する者たちは、仏の心を知っている¹⁸¹。

彼を尊敬すれば、三時のすべての仏を尊敬することになる。そのお言葉を聞けば、三時のすべての仏のお言葉を聞いたことになる¹⁸²。

また、それに続いて、

¹⁷⁷ *Mahāmeghasūtra*, Tib. D. No. 232, Wa 180a4-181b1; P. No. 898, Dzu 197a3-198a4.

¹⁷⁸ *Mahāmeghasūtra*, Tib. D. No. 232, Wa 187a5-7; P. No. 898, Dzu 204b1-3.

¹⁷⁹ Tib.: bhra go can. Cf. J.S. Negi, *Tibetan-Sanskrit Dictionary*, vol. 9, Sarnath: Central Institute of Higher Tibetan Studies, 2002, p. 4074a: 'bra go can, Kharjūrikā.

¹⁸⁰ *Mahāmeghasūtra*, Tib. D. No. 232, Wa 187b5-188a3; P. No. 898, Dzu 205a1-7.

¹⁸¹ *Mahāmeghasūtra*, Tib. D. No. 232, Wa 188b2-6; P. No. 898, Dzu 205b7-206a4.

¹⁸² *Mahāmeghasūtra*, Tib. D. No. 232, Wa 1889a4-5; P. No. 898, Dzu 206b2-3.

彼が死ぬ時に、私の正法は滅んでしまう。彼と同じ人はおらず、決してあり得ない¹⁸³。

また、多くの話に続いて、

その主張をなす者と、その教義を広める者と、その衆会と、その教義を保持する者たちが、仏教徒においてその衆会の最高となるであろう。この賢劫に続く六十二劫には、仏は生じない。その後七仏が生じる。その後浄光という世間界において智蔵光という如来で阿羅漢の正等覚者が明らかに悟るであろう¹⁸⁴。

などと多くの教義が説かれている。ここに概略だけを書いた。さらにまた、『聖文殊根本タントラ』に、

ナーガールジュナという比丘が生じ、無自性の真実の意味を知る。「孔雀」という陀羅尼を成就させてから、六百年生きるであろう¹⁸⁵。

などとたくさん説かれている。『聖入楞伽経』にも、

マハーマティよ、あなたは知りなさい。南方のヴェーダリーという地方に吉祥で偉大な名声の比丘がおり、彼の名前はナーガという¹⁸⁶。

と述べられてから、

歓喜地を成就してから、彼は極楽に行くであろう¹⁸⁷。

と説かれており、『聖大法鼓経』にも授記されている。『聖金光明最勝経』にも、受記の話はないが、仏の遺骨に関してバラモンのカウンディニヤとこのリッチャビの一切衆生喜見が論争をなしたものがある。さらにまた、軌範師チャンドラキールティも、

¹⁸³ *Mahāmeghasūtra*, Tib. D. No. 232, Wa 190a6; P. No. 898, Dzu 207b7.

¹⁸⁴ *Mahāmeghasūtra*, Tib. D. No. 232, Wa 190a7-b3; P. No. 898, Dzu 208a1-5.

¹⁸⁵ *Mañjuśrīmūlakalpa*, 53.449acf, 150ab. Śāstrī 1925: 116-117.

¹⁸⁶ *Laṅkāvatārasūtra* 10.164c, 165abc.

¹⁸⁷ *Laṅkāvatārasūtra* 10.166cd.

そのように、大軌範師聖ナーガールジュナは、自身の意義を得てから、それぞれが自分で理解する大持金剛三昧を世間の人たちに説いてから、天と人の樂を越えて、外道と声聞と独覚たちの禅定と等至の樂も越えて、生滅を離れた如来身の一切の相の最高なものをもっており、身体を見ることで満足せず、十力と四無畏などの仏の一切の功德により莊嚴されたものを得てから極樂に行き、功德の八つの自在をもっておられる¹⁸⁸。

と『灯作明』に説かれている。それ故に、以上のように軌範師ナーガールジュナの教義を知り、理解しており、その相承の甚深なる教誡があり、[それらを]領受しているその人は、無量の生において大乘を行じている。仏の教えがある限り、その教誡は断たれない。尊師アーリヤデーヴァは、

世尊シャーキャムニは、夜半の時に、明らかな悟りの三昧を現前させてから、仏の教えが存続する限り、軌範師聖ナーガールジュナ以降、師から師に伝えられたものであり、師のこの教誡は、仏と菩薩のすべてと、金剛ダーキニーのすべてが加持するものである¹⁸⁹。

と説かれている。軌範師チャンドラキールティが、

ヨーガ行者で、この生で成仏を望む者たちも、軌範師から与えられた真実たる甚深なる教誡は得難いもので、この宝に等しい軌範師たちが宝の瓶に甘露の水を注ぐように、口から口へ、耳から耳へと伝授され、これは仏シャーキャムニの法が存続する限り、これも滅びないであろう¹⁹⁰。

と説かれている。軌範師聖ナーガールジュナの異熟した身体そのものは、現在シュリーパルヴァタ山におられる。ある時に、シャータヴァーハナ王の子がシュリーパルヴァタ山に行ってから、軌範師の頭を請うたので、軌範師は「王子よ、切って持っていきなさい」と言われて、剣を五度振り下ろしても切れないので、軌範師は「祭式用の草を少し取りなさい」と言われ、王子はそれを取って与え、軌範師自身が首に草をまくことで、

¹⁸⁸ *Pradīpodyotanāṭikā*, XVII, p. 226.

¹⁸⁹ *Caryāmelāpakapradīpa*, Tib. D. No. 1803, nGi 90a2-4; P. No. 2668, Gi 101b8-102a2.

¹⁹⁰ 現時点で典拠の確認はできていない。

頭が地面に落ち、王子の手に添えられた。王子は、運ぶことなく、そこにおいて去って行った。現在も、頭と胴体は宝石の光を放つ宮殿で宝の座に置かれ、天と夜叉とガンダルヴァなどが昼と夜に常に供養をなしている。これには、長い話の続きがあるが、ここで置いておく。

誓願の身体は、極楽におられる。世尊である無量光により智宝菩薩と名付けられ、身体は白く、二手をもち、右は与願印で、左は白蓮華を持っている。師である尊者アヴァドゥーティパが、

私の師で偉大な尊者で瑜伽自在のアヴァドゥーティパは、神通で過去にいたようにお顔を見て、法を聞いている。時に、シュリーパールヴァタで見ておられ、聖者の弟子である尊者ナーガボーディに現在の吉祥なるシャバリーパとして知られている者も常に法を聞いている¹⁹¹。

と師であるアヴァドゥーティパが説かれている。

自らの苦を捨ててから、他の苦の火で焼かれ、鋭根の中でも鋭く、甚深なる法を怖れずに信解し、自分の成就を離れずにこの生での成仏を望み、利他を難なく速やかになし、神通を速やかに生じることを望む者は、特別な方便をもつ乗に入るべきである。善妙な師に金剛阿闍梨の灌頂をお願いし、最高の成就をなすべきである。秘密と般若智は、解脱道の梵行者は与えてはならず、弟子も受けてはいけない。それは梵行を尽くしてしまい、仏の教えを滅ぼすので、師と弟子の二人は疑いもなく地獄に行くであろう。もしも秘密の真言を行じるならば、灌頂を受け、瓶灌頂を得た者が、いずれかのタントラの門にも入り、自分が望む尊の三昧と唱えるマントラを師に尋ね、最高の成就をなし、三摩耶と二十律儀をととも清浄に護り、成就するべきである。能力が生じた時に、四つの所作と世間の八つの成就により利他をなすことに困難はなくなるであろう。それ故に、タントラに、

マントラの大海は、成就の波が覆うものであり、比喻や無記の語や推論の智慧により理解することはできない¹⁹²。

と説かれている。私の師であるヤヴァドヴィーパの乞食アヴァドゥーティパは、

¹⁹¹ 現時点で典拠の確認はできていない。

¹⁹² 現時点で典拠の確認はできていない。

二乗を捨てていても、ここにいて、大印契を得る。それ故に、この真言乗を、どんな賢者が行をなさないであろうか¹⁹³。

と説かれている。

同一の意義でも、迷わずに、方便が多く、困難はなく、鋭根により、真言乗は特に優れたものである¹⁹⁴。

と説かれている。

ここでは、灌頂を得ることをしないで、これに入ることはないので、尊の修習と陀羅尼を唱えるべきでない。許可を得ていないので、真言と波羅蜜の両方の解脱を混同しているから。金剛菩提心であるすべての戲論を離れた円満な次第の教誡は、器ではない者に説いてはならない。円満な優婆塞の貪欲道の者は、二灌頂を受けることに過ちはない。

自らの妻で足りていることを知り、他の女性のところには行かず、邪淫を捨てた優婆塞は、善趣である¹⁹⁵。

と経典にお説きになられている。

「二障を速やかに取り除き、二資糧を速やかに集めるために、真言乗を行じるべきである」とディーパンカラシュリージュニャーナは言う。

シャーキャの比丘で鋭根と智慧と悲心と戒をもつツルティム・ゲルワという優れた弟子がお願いしてから書いた。

デーヴァパーラの本願のヴィクラマシーラという大寺院において優れた師達がお説きになられた通りに、そのディーパンカラシュリージュニャーナが書いた。

僅かな食物や財産だけを見ることなく、よく考察していない者に、これを与えない。聖ナーガールジュナの教義を信解しないで、甚深なものを捨てることで地獄に行く。

『大乘中観説示開宝篋論』という偉大なるパンディタのディーパンカラシュリージュニ

¹⁹³ 現時点で典拠の確認はできていない。

¹⁹⁴ *Nayatrāyapradīpa*, Tib. D. No. 3707, Tsu 16b3-4; P. No. Nu 17b5-6.

¹⁹⁵ 現時点で典拠の確認はできていない。

ヤーナが著されたものを完成した。

インドの賢者ディーパンカラシュリージュニヤーナ自身と翻訳官で偉大な優婆塞の
ギャ・ツォンドゥー・センゲと比丘のツルティム・ゲルワが翻訳し、校正し、決定した。

第4章 『心髄集』と『心髄撰集』

はじめに

チベット大蔵経の中観部に収められた *Dīpaṃkaraśrījñāna* のテキストの中には『心髄撰集』と呼ばれるテキストが二つ存在する。そのデルゲ版¹の目録によると、3949 番の『心髄集』と 3950 番の『心髄撰集』であるが、そのチベット語訳タイトルがほぼ同じなのに対し、与えられたサンスクリットによるタイトルは全く異なっている。また前者に説かれている偈頌に関しては、多少の相違もあるが、そのすべてが後者に収められている。すなわち、前者を長くしたものが後者である、或いは後者を短くしたものが前者であるという具合である。本章では、この両者のテキストの内容を比較検討し、その成立に関して考察する。

タイトルに関して

まずそのチベット語に訳されたタイトルは、『心髄集』の方は *sNying po bsdu ba* であり、『心髄撰集』の方は *sNying po nges par bsdu ba* である。それに対するサンスクリット名は、『心髄集』の方は *Garbhasaṃgraha* という名称であり²、『心髄撰集』の方は *Hṛdayanikṣepa* と異なる³。チベット語訳のタイトルの違いは僅かなものであるが、サンスクリットの方の違いは甚だしい。

まず「心髄 (snying po)」に対する原文が *garbha* と *hṛdaya* と異なっている。前者の *garbha* は、「はらむ」を意味する $\sqrt{\text{grabh}}$ を語根とし、「つかむ」を意味する $\sqrt{\text{grah}}$ と同義であり、「のみこむ」を意味する $\sqrt{\text{gr}}$ と同類である。これらから「内に何かを取り込む」が考えられ、「胎」を意味する語となった。さらには、ものの内部にあるものの意味でも用いられ⁴、「胎児」での用例が多く見られるようだ⁵。後者の *hṛdaya* は、「心臓」や「核心」の意味をもつ語である⁶。このことから、両者は本質的には別な言葉であることは明らかである。しかしながら、この二つの異なった語が、チベット語ではどちらも *snying po* と翻訳されている⁷。従って、異なるサンスクリットの言葉が同

¹ ここでは、二つの大小のテキストを区別するために、デルゲ版の中観部に収められたものの番号により区別する。同じ著者に帰されるその他の小部文献と同じように、本論もチベット大蔵経の中にはそれぞれ二つの版が収められている。これは東北目録にみられるように、*Dīpaṃkaraśrījñāna* の小部集としてまとめられていたもの (No. 4469, No. 4470) が大蔵経に挿入されたのであろう。

² 原文では、*Samgrahagarbha* となっている。

³ 原文では、*Hṛdayanikṛipta* となっている。

⁴ 高崎, 1974: 55-59 参照。

⁵ 原 1987: 23-38 参照。

⁶ Cf. Monier-Williams, *A Sanskrit-English Dictionary*, p. 1303, Lopez 1988: 30.

⁷ Chandra 1971: 897b, 900b-901a.

じチベット語に訳されていることになるが、garbha / hr̥daya が具体的に何を指しているのかも問われよう。

次に、「撰集」に対する訳語に関しては、『心髄集』が bsdu ba であり、『心髄撰集』ではそれに nges pa が付されたものである。nges pa を副詞にとり、「確かに収められたもの」と解すれば、それほどの差異がある語とは思われないのだが、それぞれの原文は saṃgraha と nikṣepa⁸ と全く異なっている。nikṣepa に相応するチベット語を『翻訳名義大集 (Mahāvīyutpatti)』により調べてみると bzhag pa, btam pa, gtams pa, 'jog pa という例が見られるのだが⁹、ここに見られる nges par bsdu ba という用例¹⁰を他に確認することはできなかった。その原語の意味を考えて見ると、前者は前出の「つかむ」を意味する語根 √grah に接頭語に「一緒に」を意味する前接辞が付され、「つかまえること、集めること」を意味する語である。後者は、「投げる」を意味する語根 √kṣip に「下に」を意味する前接辞が付され、「置く、下ろす」を意味するものである。従って、両語も、拡大解釈をすれば似た意味を想定することも可能であろうが、本質的には別な語であると言える。

このように、チベット語では、ほぼ同名なテキストではあるが、その原語とされるサンスクリット語では全く異なるタイトルである。意味を取り、都合よく解釈をすれば、「内部におさめられるもの」と「核心」、「集めたもの」と「置かれたもの」と、同じ意味とも言えないことはない。しかし、インド人が同一内容の二つの著作に、別な語を用いて、サンスクリット語のタイトルをつけることがあるのだろうか。両者が全く異なる内容の文献であるのなら、さらなる推測をなす必要もないのであるが、前述のように、『心髄集』のほぼ全文が『心髄撰集』に含まれており、両者の間には何らかの関係があることは明らかである。そこで、このサンスクリット語に相違が現れた可能性を考えてみる。最初に、全く異なるテキストが異なる空間において別なるタイトルで表わされ、偶然にも内容が類似することから、翻訳の際に似たタイトルが付されたと想定できる。次に、異なるタイトルではあるが、何らかの関係がある二つのテキストが、翻訳の際に似たタイトルで訳された。最後に、本来チベット語でしか知られていないテキストにそれぞれ別なるタイトルが想定されたという可能性もある。これらの変形を考えれば、さらなるパターンも推測可能であり、そこには著者に関する疑惑をも浮上させることに

⁸ 実際のテキストでは、nikripta となっており、この語やそれに近い形の語をも推定し、考察する必要もあろう。例えば、Abhidhānaviśvalocana には「nges par 'dus pa / nikurambaka」というケースも見られる (Lozang Jamspal 1995: 30)。

⁹ Mahāvīyutpatti, Nos. 7222, 8387. また『俱舍論』には、「'dor ba / 捨」という用例がある (平川 1973: 208)。

¹⁰ 『藏漢大辞典』においても、この語を見出すことはできなかった。私が極わずかな資料を見ただけなので、その他のテキストでの用例がないとは言い切れない。また、前述のように、nges pa を副詞とするならば、辞書の項目に上げるべき複合語ともならないであろう。

なろう。

テキストに関する情報

最初に、チベット語訳のコロフォンに述べられる記述を見ることにする。『心髄集』の方は、その著者と翻訳者¹¹に関する情報が付されているだけであるが、『心髄撰集』の方はさらなる情報が添えられている。すなわち、「軌範師で、偉大なる賢者である *Dīpaṃkaraśrījñāna* がウのニェタン寺¹²において著わしたものを終わる」とある。これによると、本書は彼がニェタン寺にいた頃に著わされたものであり、その著作年をある程度限定することができる¹³。さらに、著書の最初の句には「『心髄を集めたもの』が解説されるべきである」と述べられている。これは、『心髄集』の存在を示すのか、あるいはこのテキスト自身を示すのか、あるいはある特定の概念を指しているのか、これらの何れかであろう。

次に、*Dīpaṃkaraśrījñāna* の伝記である *rNam thar rgyas pa*¹⁴ には、

その時、善知識 *Gung thang*¹⁵ はインドに二年間おられてから、翻訳者 *rgya brTson seng* にアビダルマを聞き、翻訳も学んだので…インドにおいて、ヴィクラマシーラ寺院にて『入二諦論』とその注釈、師自身が著わしになられた『心髄撰集』とその注釈である『地蔵論¹⁶』と『中観宝鬘論』と『瑜伽論』とその要約とが翻訳された¹⁷。

とある¹⁸。これらの記述から『心髄集』にあたると思われる著書には注釈が存在し、ともにインドにおいて翻訳されていたと推定することができる。この注釈書と思われるものは、『心髄撰集』に相当する可能性が生じる。ただし、前述のコロフォンの記述と矛

¹¹ 『心髄集』の翻訳者は著者自身と *Tshul khriṃs 'byung gnas deb rtse* とあり、『心髄撰集』の方は、著者自身と *Tshul khriṃs rgyal ba* とある。

¹² Cf. Ferrari 1958: 165, n. 668. 地理的位置としては、ラサの南西約 20km にあり、彼が亡くなった地でもある。

¹³ 彼が、ニェタンに向かったのは、1046 年とされており、それから 1054 年に亡くなるまでの間に著わされたことになる。

¹⁴ Cf. Eimer 1977: 110-111. 本書の著作年代は、「1469 年以前」とされている。

¹⁵ 翻訳官 *Tshul khriṃs rgyal ba* のことである。Cf. Eimer 1979, 1. Teil: 353.

¹⁶ 原文は *de'i 'grel sa'i snying pos mdzad pa* とあり、「地蔵 (*Kṣitigarbha*) が著わしになられたその注釈」と読むことも可能であろうか。

¹⁷ Eimer, 1979, 213. 2. Teil: 154-155: *de'i dus su dge bshes gung thang pas rgya gar du lo gnyis bzhugs nas lo tstsha ba rgya brtson seng la mngon pa yang gsan / lo tstsha yang bslabs pas mkhas pa'i phul du skyol bar shes nas / rgya gar rang du yang chos bsgyur ba la bden pa gnyis la 'jug pa dang / de'i 'grel pa dang / bla ma nyid kyis mdzad pa'i snying po bsduṣ pa dang / de'i 'grel sa'i snying pos mdzad pa dang / dbu ma rin po che'i 'phreng ba dang / yo ga tsar ya dang / de'i pi ṅa rtha dang rnamṣ br ka mar lo tstsha ba che chung gnyis kyis bsgyur /*

¹⁸ 川越 2000: 297.

盾する内容になる

両者の記述には一致しない点も見られるが、『心髄撰集』という著書には、その注釈が存在していたと可能性がある。以下にその内容の異同の分析を試みるが、ここにおいて取り上げている二つの著書が、根本テキストとその注釈という関係であると推定できる。

『心髄撰集』の内容概観

本テキストの内容を簡略にまとめておく。まず『心髄撰集』は、冒頭において著作意図を述べており、そこでは同論を「輪廻の恐怖を取り除くものとしている。これに続いて、説かれる内容に関して、「輪廻の特徴である苦と業と雑染とが考察される」、「解脱の特徴は菩提である」と述べられている。『心髄集』には見られないこの挿入句により、以下に続いている本論の内容が簡略に示されている。

最初に、三界の苦から出離するという目的が述べられ、その原因である煩惱が述べられる。続いて、それから脱する方法として、縁起を修習すること、自他の利益、六波羅蜜などが述べられる。最後に、菩提心をもってから[これらの]心髄を集めるべきである、と展開している。従って、基本的には『心髄撰集』の冒頭の句に見られるように、輪廻という苦の原因とそれを取り除いた解脱を推奨することが説かれたものである。

タイトルにあげられた「心髄」が何を指すのかを考えてみる。これに関しては、『心髄集』の 39-42 (=『心髄撰集』77-80)に「菩提座の種子から善なる苗が熟したものが、すべての仏の心髄である。これが、心髄を集めたものである」と説かれている。ここでは喩例が用いられているが、この句以前に説かれた輪廻の苦から脱することを指すのであろう。また、ここでの「心髄」の意味であるが、「仏の胎内にあるもの (garbha)」とも、「仏の核心 (hrdaya)」とも、何れにも取れるものである。これが「如来蔵」のようなものを指しているのならば、前者の方が適合するであろうか。

二つのテキストの重複箇所

これらのテキストのうち、『心髄集』の全文が『心髄撰集』の中にみられることはすでに述べたが、その重複箇所を具体的に指摘することにする¹⁹。テキストの大きさから、『心髄集』に見られる句が『心髄撰集』にどのように収められているのかということを示す。

まず『心髄撰集』1-14 は、『心髄集』には見られない。続く『心髄撰集』15-20 は、

¹⁹ 以下において七音節よりなる一パーダを一行として、数える。これは彼の著作に見られる偈頌が、四句を一偈と数えない場合があり、研究者により偈頌に付された番号が異なるという事態が生じるからである。

『心髓集』1-6 に一致するが、『心髓集』7 は少し離れた『心髓撰集』25 に見られる²⁰。

『心髓撰集』21-23 は、『心髓集』8-10 と一致するが、続く『心髓撰集』24 は『心髓集』には見られない。『心髓撰集』26-27 は『心髓集』11-12 に一致するが、『心髓撰集』28 は『心髓集』には見られない。『心髓撰集』29-30 は『心髓集』13-14 に一致するが、『心髓撰集』31 は『心髓集』には見られない。『心髓撰集』32-38 は『心髓集』15-20 に一致するが、ただし『心髓撰集』34-35 が『心髓集』17 であり、また『心髓撰集』39-40 は『心髓集』には見られない。『心髓撰集』41-42 は『心髓集』21-22 に一致するが、『心髓撰集』43-44 は『心髓集』には見られない。『心髓撰集』45-48 は『心髓集』23-26 に一致するが、『心髓撰集』48-49 の二パーダが『心髓集』26 である。続く『心髓撰集』50-63 までは、『心髓集』には見られない。『心髓撰集』64-66 は『心髓集』27-29 に一致するが、『心髓撰集』67 は『心髓集』には見られない。『心髓撰集』68-80 は『心髓集』30-42 に一致するが、『心髓撰集』81-82 は『心髓集』には見られない。最後の『心髓撰集』83-97 は『心髓集』43-56 に一致するが、ただし途中の『心髓撰集』88 は『心髓集』には見られない。

これを整理すると、『心髓撰集』1-14, 24, 28, 31, 39-40, 43-44, 50-63, 67, 81-82, 88 が『心髓集』には見られない句である。これらの重複していない句の内容に関して検討してみる。最初の 1-4 は著作意図を述べたものであり、それにともない 5-8 は輪廻に関して、9-14 は解脱に関して述べたものである。これらは『心髓集』の解説書を著わす上で述べられたものと考えられる。24 の「自他に執着することから生じたものである」という句は『心髓集』10-11 を補うものとしてその間に挿入されていたと考えられるが、『心髓集』7 に相当する句がこの次に来ることに関しては、自然の流れとして読むことも可能なものである。『心髓撰集』28 は、前の句を補足したものである。『心髓撰集』31 は、続く 32-33 において「縁起などの論理」との関係において、「疑いのない聖教」を並べた句と考えられる。『心髓撰集』39 は直前の句²¹を、40 は直後の句を補ったものである。『心髓撰集』43-44 は、前後の句を補う形で挿入されたものであろう。しかし、『心髓撰集』50-63 は、それ自身で独立した三句と見ることができる。内容的には、帰依をなし、善戒をもつ者が〔菩提を〕願う心と〔それに〕入る心²²を起こすべきであるということを述べたものである。発菩提心を述べた句と六波羅蜜を述べた句の間に、二つの句を繋げるものとして挿入されたのであろうが、解説をなすというよりは、全く

²⁰ ただし、『心髓集』では、最初に「それらは (de dag)」とあるのに対して、『心髓撰集』では「さらにまた (gzhan yang)」となっている。

²¹ 「すべての特徴を離れた本質を、虚空のように知るべきである」という句に対して、その方法を述べたものであろう。

²² Cf. *Bodhicaryāvatāra* 1.15.

の独立した句である。『心髄撰集』67 は、前後を補う形で挿入されたものである。『心髄撰集』81-82 は、ここに挿入されるべき積極的理由をみつけるのは、多少困難である。

『心髄撰集』88 は、次のパーダの主語を補ったものであろう。

このように、『心髄撰集』におけるパーダで、『心髄集』に見られないものは、後者を解説するために、その内容を補う形で挿入されたものであると判断できる。しかしながら偈頌という形態で著わされているために、詳細に解説するという形もとれず、このような中途半端な解説となったのではないであろうか²³。

二つのテキストの重複箇所の相違点

前項では、重複しない箇所の句に関して考察したが、ここでは重複する偈に見られる相違点に関して考察する。

まず、『心髄集』5 の「それら貪と瞋などの」という句は、『心髄撰集』19 では「それら痴と貪と瞋など」となっている。煩惱の内容を述べているものであり、三つのものを並記した後の方が明確なものである。ただしその順序が多少気になるのだが、シラブル上の都合から、このようになったのであろうか。

『心髄集』14 には、「自他の解脱を求めるので」とあるのに対して、『心髄撰集』30 では、「自他のすべてを解脱させるべきなので」とある。前者の「求める (don gnyer)」の代わりに、後者では「すべて (ma lus)」と訳されている。

『心髄集』17 は、『心髄撰集』34-35 に相当する。従って前者の一パーダが、後者では二パーダにより説かれており、饒舌になっている。後者が前者の注釈書であるとすれば、補足説明することにより長くなったとも考えられるが、いずれの時点で長くなったのかは判断できない²⁴。

『心髄集』18 は「内外のすべての諸法は普く」とあるが、『心髄撰集』36 では「そのように内外の諸法は」とある。前者の「すべての (thams cad)」の代わりに、後者では「このように ('di ltar)」が挿入されている。

続く『心髄撰集』37 では、thams cad を kun の一語で訳すことにより、『心髄集』19 には見られない「本質 (rang bzhin)」の語が挿入されている。

『心髄集』24 は「大悲が先行するので (sngon 'gro bas)」とあるのに対し、『心髄撰集』46 は、「大悲が無量なので (tshad med pas)」とあり、続くパーダにおいても、

²³ それでも、両者が独立したテキストであるという可能性を完全に排除できたわけではない。また、『心髄集』を補う形で『心髄撰集』が著わされたのではなく、その反対に『心髄撰集』の重要な句のみを残したものが、『心髄集』である可能性も残っている。

²⁴ チベット語への翻訳の際に、長くなった可能性もある。

前者は「自他の利益が生じる（'byung ba）」とあるのに対し、後者には「自他の利益が成立する（'grub pa）」とある。前者の違いは翻訳以前のテキストにおける相違とも思われるが、後者に関しては翻訳上の違いとも考えられる。さらに次の『心髄集』26 は、『心髄撰集』では 48-49 の二パーダを要し、語を補ったものである。

『心髄集』27 の「菩提行」は、『心髄撰集』64 では「菩薩行」となっているが、これは続くパーダも含めた翻訳上の違いであろう²⁵。しかしながら、いずれが正しいのかは判断できない。

『心髄撰集』70 には、『心髄集』32 には欠けている「次ぎのように（'di ltar）」が見られ、続く二つのパーダにおいても動詞の時制の相違などが見られるが、これも翻訳上の違いであろう。

しかし続く『心髄集』35 の「空性（stong nyid）」は、『心髄撰集』73 では「法身（chos sku）」となっている。これが何れの時点で入れ替わったのかは判らないが、法身＝空性という解釈が存在していたと言える。後者が前者の注釈書と考えるのならば、空性を意図的に法身と言い換えたということになるのであろうか。

『心髄撰集』79 には、『心髄集』41 には見られない「三時（dus gsum）」という語が見られ、次のパーダにおいては「これ（'di）」という指示代名詞の格が異なっている。また『心髄撰集』83 にも、『心髄集』43 には見られない「論争（rstod pa）」という語が見られる。これも、やはり『心髄集』を補うために添えられたものであろうか。

『心髄集』50 の「崖の淵（g-yang sa）」は、『心髄撰集』91 では「輪廻の苦（'khor ba'i sdug bsngal）」となっており、これは前者の比喩的な表現を後者ではより明確な表現に変えたのであろうか。

『心髄集』53 の「福德（bsod nams）」は、『心髄撰集』94 では「善（dge ba）」となっている。また、続くパーダでは「すべての」という語に対して、thams cad と ma lus などの訳語の違いも見られる。

以上のような相違点が見られるが、これらのことから両者に見られる平行句のオリジナルが異なっていたと断定することはできない。これはあくまでも翻訳された二つのテキスト上の相違点であり、いずれの時点で相違が現れたのかは不明である。少なくとも、翻訳テキストとしては違いが目立つことから、同時期に翻訳されたものであると判断することは躊躇しなければならないであろう。

まとめ

²⁵ 同じような例としては、Śāntideva の *Bodhicaryāvatāra* は、チベット語訳のテキストに従うと、*Bodhisattvacaryāvatāra* となる。

以上のことから、確認できたことをまとめてみる。まず、この二つにテキストのタイトルの類似性といい、内容が重複していることからみても、両者の間に何らかの関係が存在することは明らかである。また、後代に与えられた情報から、『心髄撰集』というテキストに注釈が存在していた可能性があり、『心髄撰集』4の「『心髄撰集 (snying po bsdu ba)』を解説すべきである」という記述からも、これが『心髄集』の解説書として著わされたものであると推定することができる。ただし、両者の偈にみられる翻訳上の相違点、さらにはそのサンスクリット語のタイトルの違いなどから、これらの二つのテキストが同時期に著わされた、少なくとも同時期に翻訳されたとは思えない。

また、タイトルの問題に関しては、関係する二つの著書が、類似した内容ではあるのに、全く異なる表題をもつことは、あまり考えられないことである。それ故に、本来別なるタイトルであったというよりは、チベット語からサンスクリット語への還元の際に相違が生じたと考えられる。その原因としては、サンスクリットのタイトルが伝わっていなかったからというものから、チベット人による著作であるからというものまで、さらに幅広い可能性が生じる。そのことはまた、Dīpaṃkaraśrījñāna 以外の者により著わされたという、著作自体の疑惑を生むことにもなる。我々が得ている情報は、インド人の学者が、二つの類似した著書を著わし、自らがチベット人の翻訳者とともにチベット語に翻訳したということだけである。これがテングルに編纂されるまでの間にタイトルの相違が生じた可能性は、十分に存在するであろう。

『心髄集』和訳

インドの言葉で、*Garbhasaṃgrahanāma*

チベットの言葉で、『心髄集』と言われる

大悲をもっている人に敬礼する。

三界における苦しみという大海の波によりひどくかき乱され、善と不善などの有漏なる業より出離する。[1-4]

それらは貪や瞋などの煩惱を原因として起こされたものである。それらが生じる原因自身も、意に沿うものと沿わないものなどの二つに執着するものより生じたものである。[5-9]

一切のものが生じる原因たるものは、常、遍満、一などという、事物に執着する魔である。それ故に、幸福な人は自他が救われることを求める。[10-14]

何であれ縁起などの正理であるものを修習することにより、事物に執着することから

転じるべきである。内外の一切の法は一切の特徴を離れた虚空のように知るべきである。

[15-20]

事物に執着する魔に憑かれているすべての有情を対象としてから、苦しみ的大海を干上がらせるもので、大悲が先行することにより自他すべてのために生じる宝である菩提心を起こすべきである。[21-26]

菩薩行の大きな波により六波羅蜜などの禪定から立ち上がる行により五道の順序通り歩くべきである。二種の障疑を取り除き、二資糧を完成してから、結果である三身を完成させるべきである。[27-33]

三身より生じる特徴自身も、空性は虚空の如きであることから、努力せずに悲の雲を生じ、二身は甘露の水の流れにより三界の終わりに [その] 流れを現す。[34-38]

菩提座の種子から善なる苗が熟することが、すべての仏の心髄である。すなわち、これが心髄を集めたものである。[39-42]

最後の時に成立するので、寿命が短く、病気が多く、貧しい財産と、悪い縁による多くの損害により長い間あった力もなくなってしまうので、言葉に従い [それらを] 断じることができないが、優れた善知識に頼るべきである。[43-48]

よく精進をする心をもっているので、崖の淵を憶えているべきである。すなわち、自他の解脱をなすために、心髄をすぐに集めたものである。[49-52]

愛によりこれをなした福德により悪い部分の一切の衆生も菩提心を伴うようになった後に、心髄をすぐに集めなさい。[53-56]

『心髄集』という、軌範師で大賢者ディーパンカラシュリージュニャーナによる著作を終わる。

その著者自身と翻訳官で比丘のツルティム・チュンネ・テップツェが翻訳し、校訂し、編集した。

『心髄撰集』和訳

インドの言葉で、*Hṛdayanikṣepanāma*

チベットの言葉で、『心髄撰集』

三宝に敬礼する。

明らかなる高所に出離することを授け、三宝に敬礼した後に、輪廻の恐怖を取り除く『心髄を集めたもの』が解説される。[1-4]

輪廻の特徴である苦と業と雑汚とを考察する。すなわち、それらは因果の順序をもっており、輪廻をまとめた後に説かれるものである。[5-8]

解脱の特徴は菩提である。智慧と方便と行と五道と二資糧から涅槃の三身が生じる。それも因果の順序をもっており、解脱をまとめた後に説かれる。[9-14]

三界における苦しみという大海の波によりひどくかき乱され、善と不善などの有漏なる業より出離する。[15-18]

それらは痴や貪や瞋などの煩惱を原因として起こされたものである。すなわち意に沿うものと沿わないものなどの二つに執着するものより生じたものである。[19-22]

一切の生じる原因たるものは、我や我執から生じたものである。さらに生じる原因たるものは、常、一、遍満などの事物に執着する魔であり、智慧をもつことにより〔それらを〕捨てるべきである。[23-28]

それ故に、幸福な人は自他のすべてを解脱させるために、疑いのない聖教と縁起などの何れかの正理に修習することで、事物に執着する大魔を残らず退けるべきである。[29-35]

次のように、内外の一切の法は一切の特徴を離れており、性質は虚空のようであると知るべきで、常に修習を成立させるべきである。[36-39]

無始の輪廻の始まりがないときから事物に執着する魔に憑かれているすべての有情を対象としてから、すべてのものに恩恵により無量なる大慈愛が先行するので、苦しみ的大海を干上がらせる無量なる大悲により、自他のために成立させた菩提心という宝を本当に堅固に起こすべきである。[40-49]

自他の十円満をもつ者は、輪廻の法を不安に思うべきである。一切の恐怖から護る三帰依処をもつその方は、別解脱に善く住するべきである。[50-54]

善戒をもち、大乘の種姓があるその人は、帰依処のない人を護るために帰依処に先行し、〔菩提を〕願う心を起こすべきである。[55-59]

意樂をともなうことにより〔菩提に〕入る心が起こされるので、以前のその願心自体は広大に増幅する。[60-63]

菩薩行の大きな波により六波羅蜜などの禪定から立ち上がる行によりこの資糧道を堅固にすることが成立するであろう。五道を順序通り歩くべきで、二障を取り除いてから、次のように二資糧を完成させるべきである。すなわち、結果である三身を完成させるべきである。[64-71]

三身が完成した特徴自身も、法身は虚空の如きであることから、努力せずに慈悲の雲が生じるので、二身は甘露の水の流れにより、三界の最期の相続を湿らす。[72-76]

菩提座の種子から善なる苗が熟することが、三時の仏がお説きになられたこの心髄を

まとめたものである。輪廻の苦を捨てようとするのならば、それを精進することを努力すべきである。[77-82]

争いの時の最後において、寿命が短く、病気が多く、貧しい財産と、悪い縁による多くの損害により、長い間あった力もなくなってしまうので、言葉に従い [それらを] 断じることができないが、[大乘の] 種姓に住しているその人は最高の善知識に頼るべきである。[83-89]

よく精進する心により輪廻の苦を憶えているべきである。自他を解脱させるために、心髄をすぐに集めるべきである。[90-93]

愛によりこれをなした喜びにより、幸福なる一切の衆生は残らず菩提心による相續を湿らし、心髄をすぐに集めなさい。[94-97]

『心髄を確かに集めたもの』という、軌範師で大賢者ディーパンカラシュリージュニャーナが中央のニェタン寺において著したものを完成する。

その著者自身と偉大な翻訳官で比丘のツルティム・ゲルワが翻訳、校訂し、編集した。

第5章 『無垢宝書翰』『菩薩摩尼鬘論』『菩薩行略教訓』

はじめに

チベットの Tāranātha が著した仏教史では、後期インド仏教の論師たちと同じように、Dīpaṃkaraśrījñāna も、ヴィク라마シーラ僧院とパーラ王との関係で言及されている。彼にはパーラ王に対して著したとされる書翰とされる『無垢宝書翰 (Vimalaratnalekha)』がテンギェルに収録されており、彼のパーラ王との関係を示す根拠にもなっている。しかしながら、この『無垢宝書翰』には、同じ著者の『菩薩摩尼鬘論 (Bodhisattvaṃyāvālī)』との間に多くの平行句があることも報告されている。そのことは、前者はパーラ王との関係を意図的に捏造するために作られたという疑惑も生じさせる。その一方で、後者にはテンギェル版とカダム全書版の二つのテキスト伝承があり、偈頌の順番が若干異なっている。このことは、『菩薩摩尼鬘論』の著述にも疑問が生じることになる。さらに、この二つの著書の平行句は、『菩薩行略教訓 (Bodhisattvacaryāsūtrikṛtāvāda)』も巻き込むものとなっている。本章では、Dīpaṃkaraśrījñāna とパーラ王の関係を明らかにするとともに、これらの三つのテキスト伝承問題を考察する。

Dīpaṃkaraśrījñāna とパーラ王

Dīpaṃkaraśrījñāna (982-1054) の生存年代については、チベット資料から明らかになっているが、それと統治年代が重なるパーラ王は Mahīpāla I と Nayapāla である¹。彼は、1040年にインドを発ち、ネパール滞在の後に、1042年にチベットのガリに到着したとされている。彼がパーラ王と関係しているのは、インドを発つ前である。

彼の伝記資料は、Nayapāla との関係を伝えている²。そのうち、*Jo bo rje dpal ldan mar me mdzad ye shes kyi rnam thar rgyas pa* (= *rNam thar rgyas pa*³) における記述を取り上げる。最初の言及は、Neyapāla (Nayapāla) と戦争をした異教徒の Karuṇa 王が Dīpaṃkaraśrījñāna の信者になる記述に見られる。

多くの有情のためにも、慈愛の門からなされており、尊者が金剛座に就かれた時

¹ パーラ朝の諸王の統治年代については、諸説あるが、Sonderon2009: 87によりまとめると、次のようになる。Dharmapāla (r. c. 775-812), Devapāla (r. c. 812-850), Mahendrapāla (850-865+), Nārāyanapāla (r. c. 865+917), Vīgrahapāla II (r. c. 972-977), Mahīpāla I (r. c. 977-1027), Nayapāla (r. c. 1027-1043), Vīgrahapāla III (r. c. 1043-1070), Rāmapāla (r. c. 1072-1126), Madanapāla (r. c. 1143-1161).

² 彼の統治年についても、諸説あり、田中 2007: 212によりまとめると、次のようになる。1. 1015-1050. Debiprasad Chattopadhyaya: Tāranātha's History of Buddhism in India, Simla 1970: 310; 2. 1027-1043. Sircar, "The Pāla Chronology Reconsidered"; 3. 1038-, HB. Chattopadhyaya: 96; 4. 1042-1058. S.L. and J.C. Huntington, *Leaves from the Bodhi Tree, The Art of Pala India*, Dayton 1990: 542, chart I.

³ Eimer 1977.

に、マガダ国の **Neyapāla** 王と、西方のカルナの外道の王の両者に大きな争いが生じ、**Karuṇa** 王がマガダに軍隊を引き連れてきた時に、町を制圧してから居住地域に侵入したことにより、四人の比丘と一人の優婆塞の五人が殺された。多くの資具も与えてしまった時に、尊者には怒りはなく、恨むこともなせずに、慈愛と悲心と菩提心を修習しておられた。そこで、誤った戦争からカルナのすべての兵士は殺害に対して心から堪えられなかったので、王と兵士のすべてを守護したので、その **Karuṇa** 王は尊者を信じてから、西方に尊者を招いて大きな供養をなした。尊者も、二人の王を取り囲む生活の資具とは別の手にあるすべてのものを和解させた。身命を見ない間は大河があるところを渡ってから、その二人が和解してから親しくなり、衆生は喜びを表した⁴。

ここでは、**Dīpaṃkaraśrījñāna** と **Neyapāla** の直接の関係を述べるものではなく、彼と外道の王との関係を述べることで、彼の徳を報告したものである。それ故に、この記述からは彼とパーラ王の関係は明らかではない。

続いて、彼のヴィクラマシーラ寺院における活動について述べられるが、僧院の建立について、

それ故に、**Gopapāla** 王の息子の **Dharmapāla** がなされた統治がとても大きなものであり、[**Kambala** が] その息子として生まれたのである⁵。(後略)

それから朝、王の身体を墓場に運んだ際に、その王は死んでおらず、すべての不思議が生じてから、彼自身に王になるようお願いした。そこでその王は、牛飼いのものではなくても、その代わりであったので、王の名前は、**Gopapāla** と言われ、「牛を守る」という意味である⁶。

そこでその王に 500 人の妃がいた。それぞれの王妃に帰依処として 500 名の比丘尼がおり、(中略) 王妃にひとりの子どもがいても、王に渡したと言われている。彼女が渡したその子どもが **Dharmapāla** である⁷。

⁴ Eimer 1979, 2. Teil: 118, 159. これに続く 160 は、翻訳官がこのことを賞讃の偈にまとめたものにも、「**Neyapāla** 王と西方の **Karuṇa** 王の二人に大きな争いが生じた時に、西方の **Karuṇa** 王がマガダに軍隊を引き連れて来て、(後略)」と同じ言及が見られる。

⁵ Eimer 1979, 2. Teil: 125, 171.

⁶ Eimer 1979, 2. Teil: 126, 173.

⁷ Eimer 1979, 2. Teil: : 127, 174.

そこでその **Dharmapāla** 王は、部族がとても大きいので、その時期だけ **Tārā** 妃を成就したヨーガ行者がいると思ひ、インドの方では外道がとても多いので、外道の説が減びることを願ひ、**Tārā** に請願することで授記してから、**Dharmapāla** 王に尋ね、説かれた⁸。

そのヨーガ行者が **Dharmapāla** 王に向かって尋ねたので、王が許可して、ベンガルだけに軍を率いて行く途上で、それ程遠くないところからゆっくりと一人の黒い男が来た⁹。(後略)

これらのパーラ王は、その統治年代が **Dīpaṃkaraśrījñāna** の同時代の王ではなく、彼との直接関係はない。ここでは、僧院の説明のための言及と考へてよいであろう。

Dīpaṃkaraśrījñāna とパーラ王の関係を示すものとしては、彼がヴィクラマシーラ僧院に招かれることが次のように述べられている。

そのようなパンディタと一人の天なる宝がおり、**Devapāla** 王の後継となった **Mahāpāla** 王がなされた吉祥なる恩恵でヴァジュラーサナからヴィクラマシーラに招いてから、そこに在るすべての者も頂上の宝石のように尊敬した¹⁰。

この記述は、彼が **Mahāpāla (Mahīpāla I)** 王によりヴィクラマシーラ僧院に招かれたことを示しているが、そこに直接的関係があつたのかは明らかではない。ただ単に、**Mahāpāla** 王の統治年に招かれたことを示しているのかもしれない。そうであるのならば、パーラ王は年代特定の尺度でしかない可能性も排除できない。

パーラ王との直接関係を示す記述は、次のものだけである。

その時に、**Neyapāla** 王に送った手紙を師自身と翻訳官との二人が翻訳した。それからネパールのオルカに滞在し、尊者の助伴の独りである唾の長老が施主となりひと月滞在した¹¹。(後略)

ここでは、**Neyapāla** 王に送った手紙をチベット語に翻訳した、とあるだけで、それが

⁸ Eimer 1979, 2. Teil: 127-128, 175.

⁹ Eimer 1979, 2. Teil: 128, 176.

¹⁰ Eimer 1979, 2 Teil: 132-133, 183. これと同じ内容が、207 でも再び言及される。

¹¹ Eimer 1979, 2 Teil: 184, 247.

いつどこで著されたのか、は明らかではない。書翰であるが故に、このネパールから出したものを帯同者であるチベット人とともにチベット語で翻訳した、と理解することも可能であるが、両者が手紙を著すような関係であったことを説明する記述はない。

このように、Dīpaṃkaraśrījñāna の伝記資料にはパーラ王への記述は多数あるが、いずれもが彼とパーラ王の直接関係を示すものではない。それ故に、Tāranātha のインド仏教史に見られるように、パーラ王との関係で彼の伝記を論じようとする意図を見ることが出来る。

『無垢宝書翰』について

ここで言及される手紙は、『無垢宝書翰¹²』である。ただし、162 パーダの偈で著されたものであり、実際の書翰というよりも、書翰を模した著書であろう¹³。その冒頭の三偈に、

偉大な趣に生まれてから、仏説を広め、王政を法により守り、Neyapāla は王になりなさい。

あなたは、以前に布施と十善と布薩と忍と精進を修習しているので、天よ、あなたは、現在円満である。

師たちのお言葉や経典などの法に従うこの人は尊敬を頭の上で受け、自他の両者に有益なことをなすであろう。

と、著書が Neyapāla 王に宛てた言葉が述べられている。また、結びの三偈にも、

人身を得ることは意味があり、見える法において涅槃に入る。自利と利他を完成してから、優れたものを得るであろう。

「春のかっこうの子供は美しい声で鳴く」と言うが、孔雀の子は美しい声で鳴かないであろうか。多くの方法に説かれたものがあるが、王よ、痛みを断じるために書いたものである。

利益の心を備えたこの教誡をよく考え、分別をもった他の人に話しなさい。常に、六天を思い、約束を清浄にしなさい。王政を法により護り、自分にも耐えなさい。

¹² Dietz 1984.

¹³ 同じような論書として、Nāgārjuna の『宝鬘論 (Ratnāvalī)』などがある。

と説かれており¹⁴、王に対して述べられた著書であることを述べている。この間にある本論が王に説いた菩薩行ということになるのだが、次に示すように、そこに説かれる138 パーダのうち 87 パーダは同じ著者の『菩薩摩尼鬘論』と重なっている。同じ著者の作品であるので、似た表現があることは当然であるが、この一致はどちらかが一方の句を借用したことを示すものである。また、『無垢宝書翰』冒頭の三偈の直後の句と、末尾の三偈の直前の句が『菩薩摩尼鬘論』の冒頭と末尾の句になっていることから、パーラ王との関係を示すこれらの句は意図的に挿入されたものである可能性を導いている。このことは、さらに、本論は実際にパーラ王に宛てた書翰ではなく、*Dīpaṃkaraśrījñāna* とパーラ王との関係を捏造するために編集された著書ということも推測させる。もちろん、現時点でそれを論証する他の資料はないのであるが、本論の成立過程について慎重にならざるをえないことは明らかである。

『無垢宝書翰』と『菩薩摩尼鬘論』の平行句

この『無垢宝書翰』と多くの平行句をもつ『菩薩摩尼鬘論』は、百十一パーダからなる偈頌で書かれた小論である。この両論に見られる平行句を後者に基づいて示すと、次のようになる。

BM 1-8 = VR 13-20¹⁵

BM 9-26 = VR 25-42

BM 34-39 = VR 43-48

BM 40-43 = VR 50-53

BM 44 = VR 56

BM 45-46 = VR 59-60

BM 47-54 = VR 73-80

BM 56 = VR 84

BM 58 = VR 85

BM 59-61 = VR 89-91

BM 62-64 = VR 92-95

BM 66-73 = VR 98-105

BM 74 = VR 107

¹⁴ ただし、最初の偈と後の二偈は音韻数が異なるために、最後の二偈のみが王に宛てた言葉である可能性もある。

¹⁵ BM = 『菩薩摩尼鬘論』、VR = 『無垢宝書翰』とする。

BM 76 = VR 108
BM 77-88 = VR 110-122
BM 89 = VR 125
BM 90-91 = VR 123-124
BM 92-95 = VR 131-134
BM 106 = VR 144
BM 108-110 = VR 149-151

これらの平行句である八十七パーダは、百十一パーダからなる『菩薩摩尼鬘論』から見ると、全体の八割ほどが一致することになり、『無垢宝書翰』から見た一致率よりも高くなる。『菩薩摩尼鬘論』のコロフォンには、著作経緯を示す言葉はなく、両者の先後関係を示す資料はないのだが、平行句の割合から『菩薩摩尼鬘論』は『無垢宝書翰』から抜粋した句に基づいて著されたものと推測することができる。

さらに、この『菩薩摩尼鬘論』にはさらなるテキスト問題がある。すなわち、同論には、テンギユルの「中観部」と『カダム派全書(*bKa' gdams glegs bam*¹⁶)』の二つのテキスト伝承があり、偈の順番に相違がある。後者の偈を前者版の順番に従いパーダで示すと、次のようになる。

1-10, 12, 11, 13-14, 19-20, 15-18, 21-26, 34-99, 102-111¹⁷, 27, 29, 28, 30-33, 100-101

後者では、11-12の句が逆であり、19-20が14の後に挿入され、27-33, 100-101が末尾に移動している。このうち、末尾に移動した句は『無垢宝書翰』には見られないものであることから、『無垢宝書翰』から抜き出した句により『菩薩摩尼鬘論』が作られたと考える方が自然に思える¹⁸。

『菩薩行略教誡』について

以上の、『無垢宝書翰』と『菩薩摩尼鬘論』の平行句をめぐる問題については、さらに『菩薩行略教誡』の問題も巻き込んでいる。同論は、百十八パーダからなる偈頌で著された小論であり、その著作経緯に関する情報はコロフォンには記されていない。そのテキスト伝承について、その他の小部文献と同じように、テンギユルには「中観部」に

¹⁶ Kalsang Lhundup 1973-4, Eimer 1981a, Geshe Lobsang Dargyay 1978, Thupten Jinpa 2008.

¹⁷ Kalsang Lhundup のテキストは 105 を欠く。

¹⁸ もちろん、同論のカダム派内における受容経緯についても調査する必要がある。

収められたものと小部集に収められたものが収録されているのだが、北京版、ナルタン版、金写版では第三の版が収録されており、もう一つのテキスト伝承があったことがわかる。

本論の内容は、そのタイトルに「菩薩行の簡略な教誡を著した」とあるように、菩薩がなすべき行を簡略にまとめたものである。その内容を簡単にまとめると、次のようになる。

- 1 悲心を普く見る [1-4]
- 2 菩提心を起こして心を調伏する [5-9]
- 3 見と行の成就のために難行を精進する [10-17]
- 4 三智を根本にし、戒をもち、前行、本行、結行に従い成就をなす [18-27]
- 5 過失を捨て、善を広げ、功德をもつ者に敬礼する [28-40]
- 6 恩を憶え、妬みや軽蔑なく、殺生を捨てる [41-46]
- 7 他者の過失を見ずに功德を見て、自らの功德を数えない [47-48]
- 8 財産を捨て、死を憶え、少欲知足である [49-60]
- 9 世間の八法を捨て、法に従って成就する [61-69]
- 10 執着せず、資糧を広げることには臆病にならず、慢心や名声を捨てる [70-81]
- 11 悲心と利益の想をもつ [82-95]
- 12 自心浄化して他心を把握する [96-101]
- 13 菩薩行の誓願を堅固にする [102-105]
- 14 人身を浪費せずに、精進する [106-108]
- 15 我見を断ち、輪廻の相續を断じる [109-112]
- 16 二障を浄化し、二資糧を円満にし、利他が成就する [113-118]

これらは便宜上まとめただけのものであり、すべてを記述すればさらに多くなる。ここに説かれる教義は、悟りに向かう際の否定的な項目を排除し、肯定的な項目をなすべきである、という一般的な菩薩行を説くものであり、同じ著者の『菩提道灯論』などにも見られるものである。ただし、『菩提道灯論』のように、全体の構造を熟考した上で著された、と言うよりも、順不同に菩薩行の項目が列挙されているような印象である。

そのために、同じ著者の他の著書との平行句も見ることができる。例えば、本論の10-11の翼が不完全な鳥の例えは、『菩提道灯論』では、

例えば翼が破れて広げることができない鳥は空を飛ぶことができないように、そ

のように神通を得ることを離れた者は、衆生に利益をなすことはできない。

[141-144]

と説かれている。ただし、例えられる内容は、『菩提道灯論』では「神通がなければ」とあるのに対して、本論では「見と行」とあり、異なっている。

23 の「成就を熱心になす」の句は、『菩薩摩尼鬘論』2 と一致し、『無垢宝書翰』14 とほぼ同じである¹⁹。

39 の「水から乳を取る」例えも、『菩提道灯論細疏²⁰』、『入二諦論』107、『輪廻出離意歌』82 にも見ることができる。

52-53 の「財産を捨てて [七] 宝で身体を飾るべきである」という句は、『菩薩摩尼鬘論』25-26、『無垢宝書翰』41-42 の、

一切の財産を捨て、聖者の宝により飾るべきである。

と同じである。

54 の「蒙昧と怠惰と錯乱を捨てて」は、『菩薩摩尼鬘論』3、『無垢宝書翰』15 の「蒙昧と怠惰を捨てて」と類似する。

60 の「少欲知足」の句は、『大乘道成就語句撰集』208、『無垢宝書翰』35 と一致する。

63-64 の「自らの過失と他者の過失」については、多少の表現の違いはあるものの、『大乘道成就語句撰集』188、『無垢宝書翰』21-22 と類似し、『中観説示開宝篋』では Nāropa の説として孫引きされている。

93 の「何かに対する執着を捨てるべきで」は、『菩薩摩尼鬘論』49、『無垢宝書翰』75 と一致する。

105 の「[菩薩] 行の誓願を堅固にすべきである」は、『菩薩摩尼鬘論』76、『無垢宝書翰』108 の「常に誓願を堅固にすべきである」と類似する。

これらの平行句は、同一語句の用例ではなく、フレーズが同じものを指摘しただけであり、用語の使用例を指摘すれば、さらに多くの類似を他書に見ることができる。もちろん、これらの語句は、菩薩行を説く文献に一般的に見られるものであり、ましてや同一著者の文献に類似表現が見られることは当然である。しかしながら、『菩薩摩尼鬘論』や『無垢宝書翰』との平行句は複数箇所を見ることができ、注目に値するものである。

¹⁹ 『菩薩摩尼鬘論』の句の 80% は、『無垢宝書翰』に一致することは、望月 2016c: 274-285 を参照。

²⁰ 望月 2015a: 132.

まとめ

『菩薩摩尼鬘論』と『無垢宝書翰』との両者の関係にある問題点はすでに論じられているが、さらに『菩薩行略教誡』も含めて、彼の著書の中に句の借用関係があったことが明らかになった。このことは、著者自身が菩薩行に関する句を複数もっており、それらを断片的に再編集することで著作を著した可能性を示している²¹。これらの著書が再編集されたものであるのならば、それは *Dīpaṃkaraśrījñāna* ではない他の者によりなされた可能性も排除できない。もちろん、一致しない句がある以上、これらの三論は全く異なる著書であるのだが、その成立背景に関係があることは明らかである。

『無垢宝書翰』和訳

インドの言葉で、 *Vimalaratnalekha*

チベットの言葉で、 『無垢宝書翰』

師たちに敬礼する。

尊母ターラーに敬礼する。

偉大な趣に生まれてから、仏説を広め、王政を法により守り、ニルヤパーラは王になりなさい。 [1-4]

あなたは、以前に布施と十善と布薩と忍と精進を修習しているので、天よ、あなたは、現在円満である。 [5-8]

師たちのお言葉や経典などの法に従うこの人は尊敬を頭の上で受け、自他の両者に有益なことをなすであろう。 [9-12]

一切の疑惑を捨て、成就をととても熱心にしなさい。倦怠と怠惰をすて、常に精進するべきである。 [13-16]

憶念と正智と不放逸とにより、根の門を常に守り、昼と夜、繰り返し心の相続を考察するべきである。 [17-20]

自らの過失を考察する際は、目のある人のようにするべきであり、他者の過失を考察する際は、盲者のように。憶念し、我慢なく、空性を常に修習するべきである。 [21-24]

自らの過ちを明らかにするべきで、他者の迷乱を求めるべきではない。他者の功德を

²¹ もちろん、これらの一致はチベット語訳におけるものであり、サンスクリットでの一致を示すものではない。しかしながら、そのことは、サンスクリットのオリジナルがそもそも存在していなかった可能性を示すものでもある。

明らかにするべきで、自らの功德を隠すべきである。[25-28]

利得と尊敬を捨てるべきであり、自慢と名声を常に捨てるべきである。慈愛と悲心を修習すべきで、菩提心を堅固にするべきである。[29-32]

十不善を捨てるべきで、常に信を堅固にするべきである。欲は少なく、足りていることを知り、なされたことに対する感謝をもつべきである。[33-36]

怒りと我慢を捨てるべきで、控え目な心をもつべきである。誤った生活を捨て、法の生活により生活するべきである。[37-40]

一切の財産を捨て、聖者の宝により飾るべきである。常に混雑するところを避け、静かなところにとどまるべきである。[41-44]

意味のない言葉を捨てるべきで、常に言葉を制御するべきである。師や賢者を見たならば、尊敬により敬恭を起こすべきである。[45-48]

特別な人と、法の目をもつ人と、初学者の衆生に対して、師の想いを起こすべきである。[49-52]

苦しみにより苦しんでいる一切の衆生を見たとき、菩提心を起こすべきである。父母が子と孫の想を起こすように。[53-56]

世間のすべての行為を捨てるべきで、常に三昧を修習しなさい。悪友を捨てるべきであり、善知識に頼るべきである。[57-60]

戒を破る比丘と、法が貧しい他の者と、悪行を見たとき、彼らを見過ごすべきではない。[61-64]

一切の不善の友と、一切の悪友と、三宝や、師や、賢者や、軌範師を尊敬せず、なされたことを感謝せず、この時だけを憶念し、さらに信が少ない者と、三日以上すごすべきではない。[65-72]

憎しみや不快の地を捨て、どこであれ楽なところに行くべきである。いかなるものに対しても執着を捨てるべきであり、執着なしにとどまるべきである。[73-76]

執着により善趣を得ず、解脱の人生を断じ、どこであれ善知識のいるところに、常にとどまるべきである。[77-80]

常に師に依って、常に経典を見るべきである。最初に始めたもの、それ自身をまず完成させるべきであり、他に二つのものは成立しない。他所で懺悔し、最高の福德を積むべきである。[81-87]

世間の行に従い、常に彼岸の心を護り、どこであれ高い心を生じたとき、その時は我慢を破るべきであり、どこであれ不放逸を離れたとき、師の教誡を思い出すべきである。[88-93]

落胆の心が生じたとき、心の昂りを賞讃するべきである。完全な智慧を憶えており、

戯論を残りなく寂滅しなさい。[94-97]

どこであれ執着や嫌悪の対象が生じたとき、幻の変化のように見て、耳障りな言葉を聞いたとき、こだまのように知りなさい。[98-101]

身体に害が生じたとき、以前の業を見るべきである。辺境や静かな場所にとどまり、野生の鹿の屍のように、どこにおいても、誰にも知られずに、自分で自分を隠すべきである。[102-107]

常に本尊を堅固にするべきである。欲と害心と眠気と昏睡と怠惰と疲労が心に生じたとき、その時に自分における罪を数え、戒禁の心髓を思い出すべきであり、無常と死のことを思うべきである。[108-113]

他者の前にいるとき、その静かさにより誠実に話し、怒った表情や笑った表情を捨てるべきで、常に微笑して、とどまるべきである²²。[114-117]

常に他者を喜ばすべきであり、貪心がなく、施を喜び、常に嫉妬を捨てるべきである。他者の心を護るべきであり、一切の論難を捨てるべきである。[118-122]

お世辞なく、新しい助伴がなしに、常に力のあるものを制圧するべきである。常に忍辱を備え、少欲と知足をなしなさい。[123-126]

最下層の人や奴隷を思いなさい。恥を知り、差恥があり、他者が喜ぶことに励みなさい。自らを律儀で縛りなさい。[127-130]

他者に対する軽蔑を捨てるべきで、尊敬のあり方によりとどまるべきである。他者に教誡をなすときは、悲心と利益の心をもつべきである。[131-134]

仏法を敬い、正法を決して捨てず、常に三宝を敬い、三輪を清浄にしなさい。慈悲が先行することにより、昼夜に三度、七種供養として知られる「三蘊経」を唱えるべきである。[135-142]

有情の苦しみを取り除こうとする者は、広大な願行を保持し、衆生の願と菩提を望み、すべてを大菩提に廻向する。[143-146]

長い間、誓願してから、常に精進を備えるべきである。そのようになれば、二資糧は円満になり、二障は尽きるであろう。[147-150]

人身を得ることは意味があり、見える法において涅槃に入る。自利と利他を完成してから、優れたものを得るであろう。[151-154]

「春のかつこうの子供は美しい声で鳴く」と言うが、孔雀の子は美しい声で鳴かないであろうか。多くの方法に説かれたものがあるが、王よ、痛みを断じるために書いたものである。[155-158]

²² Cf. *Bodhicaryāvatāra* 5.71.

利益の心を備えたこの教誡をよく考え、分別をもった他の人に話さない。常に、六天を思い、約束を清浄にしない。王政を法により護り、自分にも耐えなさい。[159-162]

『無垢宝書翰』という、尊敬すべき大賢者ディーパンカラシュリージュニャーナがニルヤパーラ王に送ったものを終わる。

その同じ時に、師自身と翻訳官で比丘のツルティム・ゲルワが翻訳した四十頌である。

『菩薩摩訶論』和訳

インドの言葉で、 *Bodhisattvamaṇyāvalī*

チベットの言葉で、『菩薩摩訶論』

大悲に敬礼する。

信じている天に敬礼する。

師たちに敬礼する。

一切の疑惑を捨て、成就を熱心に努力するべきである。倦怠と怠惰を捨てるべきで、常に精進をするべきである。[1-4]

憶念と正智と不放逸により根の門を常に守り、昼と夜三度繰り返す心による相續を考察するべきである。[5-8]

自らの過失を明らかにするべきで、他者の迷乱を求めるべきではない。他者の功德を明らかにするべきで、自らの功德を隠すべきである。[9-12]

利得と尊敬を捨てるべきであり、自慢と名声を常に捨てるべきである。慈愛と悲心を修習すべきで、菩提心を堅固にするべきである。[13-16]

十不善を捨てるべきで、常に信を堅固にするべきである。欲は少なく、足りていることを知り、なされたことに対する感謝をもつべきである。[17-20]

怒りや我慢を引き裂くべきであり、控え目な心をもつべきである。誤った生活を捨て、法の生活により生活するべきである。[21-24]

一切の財産を捨て、聖者の宝で飾るべきである。信の宝と、戒律の宝と、謙遜や恥じらいを知る宝と、聞の宝と、棄捨の宝と、智慧そのものの宝の七つである。これらの宝の相は尽きることのない七宝蔵で、人でないものには述べるべきではない。[25-33]

常に混雑を避け、静かなところにとどまるべきである。意味のない言葉を捨てるべきであり、言葉を常に制御するべきである。[34-37]

師や賢者を見たならば、尊敬による敬恭を起こすべきである。法眼をもっている人と

初学者の衆生に対して師の想を起すべきである。[38-42]

一切衆生を見たとき、父母が子供や孫の想を起し、悪友を捨てるべきで、善知識に頼るべきである。[43-46]

憎しみや不快の地を捨て、どこであれ楽なところに行くべきである。いかなるものに対しても執着を捨てるべきで、執着なしにとどまるべきである。[47-50]

執着により善趣を得ず、解脱の人生を断じる。何であれ善法を見たとき、それを常に励むべきである。[51-54]

最初に始めたものは、最初に完成させるべきである。その如くであれば、すべてはよくなされ、他に二つのものは成立しない。[55-58]

常に罪過を喜ぶものを離れるべきで、どこであれ高い心を生じたとき、その時は我慢を破るべきであり、師の教誡を思い出すべきである。[59-62]

落胆の心が生じたとき、心の昂りを賞讃するべきであり、常に空性を修習するべきである。どこであれ、執着や嫌悪の対象が生じたとき、幻や変化のように見るべきである。[63-67]

耳障りな言葉を聞いたとき、こだまのように見るべきである。身体に害が生じたとき、以前の行為を見るべきである。[68-71]

辺境や静かな場所にとどまり、野生の鹿の屍のように、自分で自分を隠すべきであり、執着なくとどまるべきである。[72-75]

常に本尊を堅固にするべきで、怠惰や汚い心が生じたときは、その時の自分にある罪を数え、戒禁と心髓を思い出すべきである。[76-79]

もしも他の人たちを見たならば、その静かさにより誠実に話し、怒った表情や笑った表情を捨てるべきで、常に微笑んでとどまるべきである。[80-83]

常に他者を見たとき、貪欲がなく施を喜び、常に嫉妬を捨てるべきである。他者の心を護るために一切の論難を捨てるべきで、常に忍辱をもつべきである。[84-89]

お世辞なく、新しい助伴なしに、常に強いものを制圧するべきである。他者に対する軽蔑を捨てるべきで、尊敬のあり方によりとどまるべきである。[90-93]

他者に教誡をするときは、悲心と利益の心をもつべきである。法を損滅すべきではなく、何であれこの信解を望むべきである。[94-97]

十種の法行の門から、昼夜の区別なく努力するべきである。多くのものの中で言葉を考察し、一人で座しているときは心を考察する。[98-101]

三時の善根を集めたものを無上の大菩提に廻向し、福德が衆生を覆い、常に七支の大願を請願するべきである。[102-106]

そのようになせば、福德と大資糧のどちらも完全になり、二障も尽きるであろう。人

身を得ることは意味があるので、無上菩提を得るであろう。[107-111]

インドの賢者ディーパンカラシュリージュニャーナが著した『菩薩摩尼鬘論』を完成する。

『菩薩行略教訓』 和訳

インドの言葉で、*Bodhisattvacaryāsūtrīkṛtāvavāda*

チベットの言葉で、『菩薩行略教訓』

仏と菩薩のすべてに敬礼する。

確実によい菩提と明らかな善趣を得ようとする者は、三宝を尊と把握してから、最初に悲心を普く見る。[1-4]

それから、菩提心を起こして、方便をとまなう行により自らの心そのものを最初に調伏させる。最初に自性を調伏しなければ、他者を調伏することがどうしてできようか。

[5-9]

例えば、翼が不完全な鳥は空を飛ぶことができないように、見と行がない人はどのよう
に解脱しようか。[10-13]

それ故に、その二つを成就させるために、困難な大きな努力をなすべきである。難行
により修練せずに、易行により修習することにどうしてなろうか。[14-17]

鎧を着て重荷を運ぶその勝者の子は、善知識に依って、三智を根本にもってから、最
高の位に行くが、見そのものを第一に修練し、清浄な戒の衣を着て、成就を熱心になす。

[18-23]

法に続いて成就させるために、すべての時と機会においても、前行と本行と結行の三
つにより業を憶えることで成し遂げるべきである。[24-29]

過失を捨て、うまく成就して意味あることをなし、行道を無意味になさず、常に自分
の功德を修練する。[30-31]

善の方向の加行を広げるべきで、落胆して心を失わず、過失を捨て、善なる功德を広
げる助伴を求め、それに順応した心を把握し、功德をもつ者に対して敬礼すべきである。

[32-36]

煩悩が生じる助伴を方便により捨てて、高低の助伴すべてに対しても、水から乳を取
るように、過失を捨てて、善を取るべきである。[37-40]

なされたことに対する恩を憶え、再び利益をなし。他者の罪過を縁とせず、善の中

断すべきではない。[41-43]

高所に円満な者に対する妬みはなく、助伴と低い者に対して軽蔑する方便と、特に殺生そのものをなすべきではない。[44-46]

自分の過失と他者の功德を数え、他者の過失を述べず、自らを賞讃しない。[47-48]

これよりも後のものを第一のものと把握して、九つの行為を法に従ってなすべきである。この財産を捨てて、[七] 宝で身体を飾るべきである。[49-52]

苦を楽と把握せず、蒙昧と怠惰と錯乱を捨てて、確実に死の想を起こすべきである。[53-55]

小善も努力により成就させ、小さな罪過も捨て、法のためではない食事や衣を求めず、少欲知足をなすべきである。[56-60]

世間の八法を捨てて、お世辞や媚びへつらいなどをなすべきではない。自分に過失があることを感受せずに、他者の過失を考察するべきではない。[61-64]

話を喜ぶことを認めることを大胆になしてから、そのように成就しないことを捨てるべきである。狡さや偽りをなすべきではなく、誤った生活を捨てて、法に従って成就すべきである。[65-69]

親族などへの欲求により執着するべきでなく、部分的な執着は偏るべきではない。他者への要求は少なくするべきである。[70-73]

不善業を賞讃せずに非難し、必要のない喧騒を捨てて、ばかげた話を喜ぶべきではない。[74-76]

欲求による執着の希求を排除し、功德を得て、資糧を広げる業に対する臆病と恥を捨てるべきである。慢心と傲慢を対治により裂き、心を苦しめる傲慢な名声を捨てるべきである。[77-81]

本質と相続によりすべての衆生が親族となるので、身口意の三の無垢により彼らすべてを子のように見るべきである。[82-85]

悲心のままに微笑んで本音で話し、喜びの目ですべてを見なさい。まわりの助伴の高低と遠近を等しくして、[86-88]

賞讃と恭敬を自慢せず、誹謗と侮辱に対して怒らず、貧者を悲心で利益に縛りつけることをなすべきである。[89-92]

何かに対する執着を捨てるべきで、劣った者に対する悲心と利益の思いで教誡をなすべきである。衆生に対する種々なる思いによりなすべきことの大義を考察してなすべきである。[93-97]

すべてを喜ばすことを誰ができようか。しかも後悔がないことにより、苦を見下して、楽に執着せずに、自分の心を浄化し、他の心を把握する。[98-101]

輕蔑や罪過の生起などの対治の業と虚妄による修練をそのように見て、菩提行の誓願を堅固にすべきである。[102-105]

人身の宝を浪費せず、確実な死で盲目にならず、精進を火のように激しく行う。
[106-108]

執着する我見の根本を断ち、三時の輪廻を対治により断じ、顛倒の崖を捨て、輪廻の相續を断じてから水を飲む。[109-112]

三悪趣の門を断ち、三苦の病を寂滅し、善趣の解脱の福分に上り、二障を浄化し、二資糧を完成し、身と知の地を得て、努力なしに利他が成就する。[113-118]

『菩薩行略教訓』偉大な軌範師ディーパンカラシュリージュニャーナによる著作を完成する。

第6章 『輪廻出離意歌』『行歌』『法界見歌』

はじめに

Dīpaṃkaraśrījñān の小部集には、三種の歌 (gīti) 文献¹を見ることができる。すなわち、『輪廻出離意歌 (*Samśāramanoniryāṅikāranāmagīti*)²』と『行歌 (*Caryāgīti*)³』と『法界見歌 (*Dharmadhātudarśanagīti*)⁴』である。しかしながら、これらの三つの文献にはもう一つのテキスト伝承があり、それらはテンギユルの秘密疏部にも収録されている⁵。その秘密疏部には、同じ著者に帰される歌文献として『金剛座金剛歌 (*Vajrasānavajragīti*)⁶』があり、著者と訳者不明であるが『ディーパンカラシュリージュニャーナ法歌 (**Dīpaṃkaraśrījñānadharmagīti*)⁷』という関連する短い歌文献も収録されている。

これらの五つの文献は、いずれもそのタイトルに「歌」が付されており、偈頌で書か

¹ gīti とは韻律スタイルであり、チベット語訳では十一パーダで翻訳されることが多いが、これらの文献では、チベット語訳の韻律形態は同一テキスト内でも複数あり、また『法界見歌』はそのほとんどが引用文献であり、その典拠となる文献はシュローカで書かれたものもあることから、著者はサンスクリットで著す時点においてすでに gīti という韻律スタイルを理解していなかった可能性もある。

² Tib.: *'Khor ba las yid nges par 'byung bar byed pa zhes bya ba'i glu*. Śrī Dīpaṃkaraśrījñāna, brTsong seng, Tshul khriṃs rgyal ba 訳. C. Zhi 253a5-254b7; D1. No. 2313, Zhi 253a6-254b7; D2. No. 4473, 11b1-13a2; G1. Tsi 346b5-349a5; G2. Gi 15a4-17a6; N1. No.1152, Tsi 257a2-258b6; N2. No. 3377, Gi 13a2-14b4; P1. No. 3152, Tsi 267b1-269a8; P2. No. 5386, Gi 14b3-16b2. Cf. Sherburne 2000: 396-405.

³ Tib.: *sPyod pa'i glu*. Vajrapāṇi, Chos kyi shes rab 訳. C. Zha 216a4-217b2; D1. No. 1496, Zha 215a6-216b4; D2. No. 4474, 13a2-14a6; G1. Ba 291b1-293a5; G2. Gi 17a6-19a3; N1. No. 211, Pa 231a4-232b6; N2. No. 4473, Gi 11b1-13a2; P1. No. 2111, Pa 218b8-220b1; P2. No. 5387, Gi 16b2-18a5. Cf. Chattopadhyaya 1967: 505-510; Sherburne 2000: 406-413.

⁴ Tib.: *Chos kyi dbyings su lta ba'i glu*. Dīpaṃkaraśrījñāna, Tshul khriṃs rgyal ba 訳. C. Zhi 254b7-260b5; D1. No. 2314, Zhi 254b7-260b5; D2. No. 4475, 14a6-20a2; G1. Tsi 349a5-357b4; G2. Gi 19a3-26a6; N1. No. 1153, Tsi 258b7-265a5; N2. No. 3379, Gi 16a4-21b5; P1. No. 3153, Tsi 2698a8-276a4; P2. No. 5388, Gi 18a5-25a6. Cf. Lobsang 1999: 66-214, Sherburne 2000: 414-415.

⁵ 同じ著者の著作で、テンギユルの「秘密部」と「小部集」の両方に収録されている文献としては、*Samādhisambhāraparivarta* (*Ting nge 'dzin gyi tshogs kyi le'u*, Tib. D1. No. 2460, Zi 134b6-135a6; D2. No. 4485, 37b2-38a3) ならびに *Lokottarāṅgasaptakavidhi* (*'Jig rten las 'das pa'i yan lag bdun pa'i cho ga*, D1. No. 2461, Zi 135a6-b7, D2. No. 4486, 38a3-b3) がある。これらのテキストのヴァリエーションから考察すると、「秘密部」所収のテキストの方が古い形を保持している印象である。もちろん、その他のスモール・テキストと同様に「中観部」の二番目のテキストや彼の「小部集」収録のものほどここから抜き出してきたものと考えられることから、同様の結論が導かれる。前者については、望月 2006a、後者については望月 2007b, 2014c を参照。

⁶ Tib.: *rDo rje gdan gyi rdo rje'i glu*, Tib. P. No. 2209, Pa 210b3-212a5. 本テキストは、百四パーダからなり、その韻律は 9, 48, 51, 55-57, 60, 62-64, 72-74, 76-77, 83-87 が十一音節、それ以外が九音節からなる。その韻律が不規則であることから、チベット語訳の段階で生じた可能性もある。また、同じ著者による注釈書 *Vajrasānavajragītivṛtti* (Tib.: *rDo rje gdan gyi rdo rje'i glu'i 'grel pa*. Dīpaṃkaraśrījñāna, Tshul khriṃs rgyal ba 訳. Tib. P. No. 2210, Pa 212b3-218b7) がある。

⁷ Tib.: *Dī paṃ ka ra śrī jñā na'i chos kyi glu*, Tib. P. No. 3202, Tshi 12b2-6. Chattopadhyaya, 1967: 519. 本テキストは、九音節の十四パーダからなる (ただし、3, 5, 14 には「さあ (kye)」が付されており、十音節である)。その内容は、怠惰をなさず、戒を守り、三昧に入り、真実の修習により輪廻から解脱するので怠惰をなすべきではないということを示しており、*Caryāgīti* 41-52 に類似するものである。このことは本論が Dīpaṃkaraśrījñān の言葉から成立していることを裏付けるとともに、独立したテキストではなく、先行文献から編集されたものである可能性がある。

れた小部の文献である。チベット語訳しか現存しないので、その韻律スタイルが統一されたものかは、明らかではない。

本章ではこれらの歌文献のうち、彼の小部集に収録されている三つの文献を取り上げ、その内容を明らかにするとともに、秘密疏部に収録されているテキストが小部集や中観部に再収録された意味について考察する。

『輪廻出離意歌』について

本歌の執筆時期は、そのコロフォンの記述から、著者がインドのヴィクラマシーラ寺院に滞在している頃である。翻訳者はインド人の著者自身と **brTson seng** であり、著者はすでにインドの地にいる時から自著のチベット語への翻訳に携わっていただけでなく、そこにはインド人のチベット語翻訳官も存在していたことがわかる。これが著者自身と **Tshul khriims rgyal ba** とにより改訂されていることから、チベットの地に移ってからその翻訳が修正されたのであろう。

翻訳テキストは、百二十三パーダからなるが、その音韻数は一定しておらず、間に呼びかけも挿入されている⁸。その内容を簡単にまとめると次の通りである。

- 1-4 苦から守護する薬王への帰依
- 5-38 輪廻の原因
- 9-38 業論：十二支縁起、四苦
- 39-83 生死の喩例
- 84-96 修習：師の概説
- 97-119 迷乱の原因：意、悪書、分別
- 120-123 縁起道

このように、そこでは輪廻の原因がまず示されている。それに続いて、輪廻の具体例である今生での生老死の過程が描写され、それを取り除くための修習方法が述べられている。

また、88-92 には、次のように著者の聖典観が述べられている。

⁸ 以下において三つの文献に関しては、すべてパーダの番号で数えることにする。ただし本テキストのみ、偈の間に呼びかけとなる句（「おい、さあ、汝らよ(kye kye kwa ye grogs po dag)」など）が九度挿入されているが、これは数えていない。また韻律に関しては、七音節が 9-18, 44-47, 72-75、九音節が 1-8, 19-43, 48-59, 76-123, 十一音節が 60-63, 68-71, 十五音節が 64-67 となる。

七種の因明と四種の声明とアビダルマと『瑜伽師地論』と、経と律とアビダルマ⁹の文献に述べられるものを残らずすべて、「見ず、聞かず、解説せず、書かない」と言う。

これらに対する師の概説書を求めることが述べられているとともに、排除すべき文献については 109-112 に、

女性の特徴と人の特徴と薬と象を考察したり、星宿と暦と武器を考察したり、馬の形を臆説したり、悪い論書を学び、読誦することを捨てるべきである。

と述べられている。これらは出家者の修行には必要がない世俗的な内容の文献を示しているのだが、星宿などは真言乗においても取り入れられるものである。このことは、輪廻からの出離を説いた対象が顕教の菩薩行を実践するものであることを示している。

『行歌』について

本テキストは、十一音節の九十四パーダからなる小さなテキストであるが、著者不明の注釈書『行歌釈 (*Caryāgūtivṛtti*)¹⁰』がタントラ部に本論と並んで収録されている。北京版のコロフォンには、その翻訳者は **Paṇḍita Dīpaṃkara, Tshul khriṃs rgyal ba** とある。前者は **Dīpaṃkaraśrījñāna** 自身と思われ、後者は彼の多くの著書を共訳しているものの、本論の翻訳者 **Vajrapāṇi** と **Chos kyi shes rab** と相違する点には注意を要する。前述のように、同じ著者に帰される『金剛座金剛歌 (*Vajrasānavajragīti*)』とその自注『金剛座金剛歌釈 (*Vajrasānavajragūtivṛtti*)』がこの直前に収められている。『行歌釈』の記述によると、『金剛座金剛歌』は滅諦と勝義諦が、『行歌』は道諦と世俗諦が説かれるとする。これらのことから、これらの二つの文献は対であり、その注釈書も含めていずれもが **Dīpaṃkaraśrījñāna** の著書として認識されていたと言える。

その注釈書により、『行歌』の内容を簡略にまとめると、最初に智慧の眼により見られるべき対境として、影像のような存在しないものの本質 [1-10]と、存在するものの本質が述べられている [11-20]。また戒と忍と三昧などの資糧をともなって三業や無知などを浄化することが述べられている [21-84]。その後の具体的な修習 [85-94] について注釈書は、

⁹ 前述のアビダルマとともに、**mngon pa** としか記されていないため、**abhisamaya** の可能性もある。

¹⁰ Tib. *sPyod pa'i glu'i 'grel pa*. D. No.1497, Zha 216b4-219a1; P. No. 2212, Pa 220b1-223a3. Chattopadhyaya 1967: 511-518.

ムニの説法である菩提心などを聞き、修習すべきである。それを聞いてからそれと矛盾する業をなさない。無間地獄を、そうではない者は誰も把握できないから。それを聞いた後にそのように浄化してから時期の結果である善趣において究極の結果である菩提を得る。無明の闇に対する法で、帰依と菩提心などと、最後の大楽の三昧までが灯火である。自性により光り輝いているから。それ故に、存在の大海から救い出す船と筏なので、確かに頼って修習すべきである。

と述べている。「帰依」「菩提心」などは、同じ著者の『菩提道灯論』などにおいても繰り返し言及される項目である。

以上のことから、本歌は前述の道諦と世俗諦というテーマに従って、世俗的な世界において悟りに向かうための行について簡単にまとめただけのものである。それ故に、その内容からこの著書は、小部文献において密教文献として区分されずに、顕経文献として扱われたのであろう。

『法界見歌』について

本テキストは六百七パーダからなり、544-551 が一パーダ十五音節からなるものの、他のパーダは七音節からなる。その内容は、前半 1-100 が法界を、後半 101-589 が見解をテーマにしており、この二つに対する歌により構成されている。その関係としては、「法界」から「見」に主題が移行する箇所、

法界に区別がないので相違する見解は適切ではない。しかしながら知恵の区別により相違する見解がわずかのみ述べられる。[97-100]

と述べられている。すなわち悟りの世界とも言える法界は無差別なので主義主張の相違は適当ではないが、現実的には思想的に相違する学派が存在するということになる。テキスト全体の八十三パーセントがこの相違する宗義を概説していることから、本歌が意図したものは、法界の定義と言うよりも、当時のインドの諸宗派の思想をまとめた宗義書である。

「法界」のセクションに関しては、その七十五パーセントにあたる 1-4, 14-84 が Nāgārjuna に帰される『法界讃歌 (*Dharmadhātustava*)』からの引用であり、さらに 89-92 は Maitreya に帰される『宝性論 (*Ratnagoṭravibhāgaśāstra*)』第一章第八十七偈からの引用であり、97-100 は同じ『現解莊嚴論 (*Abhisamayālaṅkāraśāstra*)』第一章第四十

偈からの引用と確認できる。残りの句が著者自身によるものか、引用なのかは明らかではないが、「法界」については、『法界讃歌』に基づいた記述がなされ¹¹、それを Maitreya のテキストにより補足している。その内容は、「法界」の語を真如、自性清浄、涅槃の語で説明し、それを牛乳 [18-25]、灯火 [26-37]、瑠璃宝 [38-48]、麦殻 [49-56]、妊婦 [57-60] の喩例を提示し、無自性を無為 [81-88]、無差別 [89-100] で補足したものである。

「見解 (darśana)」のセクションに関しては、その語が示すように、仏教内の諸学派および他学派の哲学的見解が簡単にまとめられている。これらの偈も、「法界」のセクションと同じように、多くが先行文献からの引用より成っている。それぞれの学派とその教義をまとめると、次のようになる：

- 101-186 中観派 二諦説、戲論寂滅、空性、不二、離四辺
- 187-267 瑜伽行唯識派 三性説、識転変、アーラヤ識、自証説、法身説
- 268-292 声聞乗 無我、一切法有、四諦、修行道
- 293-323 声聞部派 二部（毘婆沙師・経量部）、四部（大衆部、説一切有部、上座部、正量部）
- 324-396 独覚 十二支縁起、輪廻と涅槃
- 397-403 外道 変化するもの、自ら相續するもの
- 404-413 禪定派 六十二見
- 414-445 サーンキヤ学派 三グナ、根本原質
- 446-448 ヴァイシェーシカ学派 六義
- 454-459 裸行派 九義
- 460-467 ニヤーヤ学派 十六義
- 468-475 ミーマーンサ学派 四義
- 476-498 ヴィシュヌ学派 最高神、十変化身
- 499-552 シヴァ学派 八功德、自在天
- 552-565 時論学派
- 566-579 自性因学派

¹¹ ただし、5-13, 85-88 は前後関係を繋げる為に、*Dharmadhātustava* を短くまとめたものと思われ、実質的には本セクションは同論からの引用から成っていると云える。また同論のチベット語訳者は、*Kṛṣṇapaṇḍita*, *Tshul khriṃs rgyal ba* である。前者は *Dīpaṃkaraśrījñāna* の師の一人でもある *Kṛṣṇapāda* を連想させ、また後者は彼の多くの著書の共訳者でもあるだけでなく、ここに取り上げている著書の翻訳者でもある。その引用関係だけでなく、同論は本論の著者と密接な関係にあった、あるいは本論はそのような関係づけを行うために編集された可能性がある。*Dharmadhātustava* に関しては、*Seyfort Ruegg* 1971, 早島 1987, *Liu* 2015 を参照。

以上のように、「見解」のセクションとは、各学派の教義を、それぞれの学派の論書に基づいてまとめた宗義書のような内容である、先行する同種の文献としては、Āryadeva に帰される『智心髓集 (*Jñānasārasamuccayakārikā*)』ならびに *Dīpaṃkaraśrījñāna* の師にあたる *Bodhibhadra* による同論の注釈書がある。このセクションも先行文献からの引用により成り立っており¹²、特に後半の他学派に関する情報は *Āryadeva* の同論に基づいていたことは明らかである。師弟関係を考えると、*Bodhibhadra* による注釈も見ていた可能性は十分にある。

「法界」から「見解」に至る根拠については、97-100 において前者は無差別なのに、知恵の区別により後者の差別が述べられている。しかしながら、このことは内容の連続性よりもむしろ断絶の印象を与えるものである。むしろその内容よりも、*Dīpaṃkaraśrījñāna* の *Nāgārjuna* と *Bodhibhadra* 或は *Āryadeva* からの相続の正統性を示すために本テキストが編纂されたように思える。

まとめ

以上の三種の歌文献のテーマは、類似した内容を説くものではない。また、その韻律スタイルも同様のものではない。したがって、これらの三種のテキストには *gīti* の語が付されている以上の類似性は見られない。ただし、タイトルに「歌」と付されている以上、歌の形で著されたものであるはずである。

¹² 確認できた引用テキストを示すと、102-103 = *Bodhicaryāvatāra* 9.2; 104-107 = *Satyadvayāvatāra* 2; 112-115 = *Mūlamadhyamakakārikā* 18.9; 122-124 = *Madhyāntavibhāgākārikā* 1.14; 129-134 = *Yuktiśāstika* 30; 137-138 = *Samdhinirmocanasūtra* D. No.106, Ca 6b; 139-142 = *Yuktiśāstika* 46; 147-158 = *Mūlamadhyamakakārikā* 24.11, 13.8, 15.6; 159-162 = *Laṅkāvatārasūtra* 83, 163-166 = *Ratnāvali* 1.57, 167-170 = *Madhyamakālaṃkārikākāvṛttimadhyamakapratipādasiddhi* D. No.4072, Shi 103a2, 192-203 = *Triṃśikākārikā* 20-22c, 210-211 = *Ālokaṃālā* 3cd, 212-213 = *Jñānasārasamuccaya* 26ab, 214-217 = *Prajñāpāramitopadeśa* D. No.4079, Hi 152a1-2, 222-225 = *Madhyamakālaṃkārikākārikā* 16, 226-229 = *Suksumanāmadvikramatattvabhāvanāmukhāgamavṛtti* D. No.1866, Di 96a6-7, 230-239 = *Prajñāpāramitopadeśa* Hi 154a5-7, 240-245 = *Ālokaṃālā* 12c-13, 246-249 = *Prajñāpāramitopadeśa* Hi 154a6-7, 250-257 = *Ālokaṃālā* 25-26, 258-267 = *Prajñāpāramitopadeśa* Hi 154a7-b1, 275-280 = *Abhidharmakośākārikā* 6.1ab, 6.2, 285-292 = *Abhidharmakośākārikā* 6.5ab, 6.51-52ab, 308-323 = *Samayabhedoparacanacakraṅkāyābhedopadeśasaṃgraha* 1-4, 324-327 = *Ratnāṃālā* 4, 328-329 = *Abhisamayālaṃkārikākārikā* 1.8, 330-359 = *Abhidharmakośākārikā* 3.20-3.26, 28ab, 374-378 = *Pratītyasamutpādayākārikā* 3, 383-390 = *Vinayavastu* D. No.1, Nga 227b2-3, 422-429 = *Jñānasārasamuccayanibandhana* D. No.3852, Tsha 38a3-5, 430-433 = *Madhyamakālaṃkāravṛtti* D. No.3885, Za 80a6, 476-789 = *Devātīśayastotraṅkā* 10.21-23, 490-493 = *Tarkajvāla* Tib. D. Dza 296a, 500-543 = *Jñānasārasamuccayanibandhana* D. No.3852, Tsha 37a7-b4, 544-547 = *Bodhicaryāvatārapañjikā* D. No.3872 La 262b2-3, 548-551 = *Jñānasārasamuccayanibandhana* D. No.3852, Tsha 40b5-6, 552-561 = *Jñānasārasamuccayanibandhana* D. No.3852, Tsha 37b.6-7, 562-565 = *Jñānasārasamuccayanibandhana* D. No.3852, Tsha 38a1, 566-575 = *Canaka: Cāṅkayanūtiśāstra*, D. No.4334, Ngo 137a-8a, 581-589 = *Tattvasaṃgrahākārikā* 5.110-112, 590-593 = *Ratnāvali* 4.79, 594-601 = *Catuhśatakakārikā* 12.11, 12.10 となる。

チベット大蔵經におけるそれらのテキストの編集については、『行歌』とその注釈書がタントラ部に所収されていることから、まず、こちらにまとめられたと考えられる。すなわち、大蔵經編纂時には、これらは密教文献の一つであると認識されていたことになる。その一方で、これらのテキストの内容は密教の教義やその儀礼などに直接関係するものではないため、彼の顕教文献をまとめた小部集にも収録されたのであろう。大蔵經編纂と小部集の先行関係は明らかではなが、これらの文献が顕教文献と同等に認識されていたことは明らかである。

チベット大蔵經のタントラ部には、同じ著者のタントラ文献が多く存在する。もちろん著者のタントラへの興味は多く知られており、これらのテキストは彼の密教観を考察する上でも重要な文献となる。その一方で、今回の事例のように、そこには顕教文献も含まれている。それ故に、彼の密教観を明らかにするとともに、そこに収められている密教文献の内容を新たに考察する必要がある。

『輪廻出離意歌』 和訳

インドの言葉で *Saṃsāramanoniryāṇīkāranāmagīti*

チベットの言葉で、『輪廻出離意歌』

師たちに敬礼する。

三宝に敬礼する。

ああ。

行苦と壊苦と苦苦などの百十の一切の苦から守って下さるその薬王に敬礼をする。

[1-4]

おい、さあ、友らよ！

輪廻の原因は煩惱と業で、煩惱が三界にあるのならば、九十八である。汚れた川と交わり、領受と原因と対境と結合する力により生じる。[5-8]

おい、さあ、友らよ！

これらの種々なるものから業が生じ、それも煩惱の力から生じたものである。善と不善と無記であり、見て領受するものと、生まれてから領受するものと、他所で領受するものであり、不確定の白と黒との混合とである。[9-14]

輪廻の業は重いものと、近いものと、修習であり、その以前になした業は、前の前のものの異熟である。[15-18]

友らよ、考えなさい。無始より無明などの十一は老死の辺際であり、十二支の三つの

部分は死の在り方である。内の縁起が繰り返し輪廻する。[19-22]

無量のそれぞれの世において生と老と病と死の諸苦により繰り返し苦しみ、迷乱から輪廻したし、輪廻し、輪廻するであろう。[23-26]

ああ。

存在の道に疲れた客人たちは、苦を楽と見てからは疲れない。汝は、その意に常に執着しており、家畜と殊勝は存在しない、と師は説かれている。[27-30]

師により把握された賢い人たちよ、刹那刹那に五趣のすべてにおいて輪廻の苦という棘が刺さったような者に対して、骨の底から悲心を誰が起こさないであろうか。[31-34]

悪業によりこの輪廻の大海に何度も生まれ、老い、病気になり、何度も死ぬであろう、というこのことを考えずに、境に執着して、自分はどのようになすべきか。[35-38]

おい、さあ、友よ！

その三有の中にあるすべての苦も人による苦である、と私は見る。子宮の苦はこのように存在する。すなわち、卵形、凝固体、楕円形、長方形、血肉位、結実、手足と次第に完成する。[39-43]

乳とバターにより栄養を取り、とても僅かな力でその背中で眠っている。少年が壮年と青年と老人となって再び少年になる。[44-47]

寿命は無常で、とても流動的で、瞬時にある力も存在するものではない。自分は確実に死ぬであろう、とは考えない。友らよ、その人はとても珍しい。[48-51]

輪廻の過失と罪過を知らないので、四顛倒に住してから、自分は確実に死ぬであろう、とは考えずに、対境に執着して、昼夜無意味に過ごしている。[52-55]

ジャンブー洲で非時に死んで、確信を得ても、尽きることになるので、「繰り返し確実に死ぬ」と思うことは正しい。さあ、美しい者たちよ。[56-59]

「初夏に花が広がるこの時が生じるであろう。月の明かりにより照らされるこの秋が生じるだろう」と言うことをすべての人は喜び、自分のこの寿命が尽きてしまうだろう」ととても喜ばなくなることはない。[60-63]

「今日、これをすべきである。今、これをすべきである。その後で、これとこれをすべきである」と、存在が動く本質を知らずに、無意味に意を堅固にすることを求める九生は、自身が、マカラの口に船が入るように、所作は彼岸に至らずに境という水の波間に落ちる。[64-67]

「これは明日すべきである。これはすぐ後にすべきである。これはどこかですべきである」と人が考えるならば、ヤマ天の棍棒が足りないと縁から見て、赤い眼で怒り、喜ばせず、笑いなさい。[68-71]

すべての瑜伽行派の論書と多くの行を正しく知っても、「今日すべきである。明日す

べきである」と言い、思いをもって死ぬであろう。[72-75]

寿命には多くの害があり、風で広がった水の泡よりも無常であるならば、息を吐き、息を吸うことで睡眠による顛倒から眼を覚まし、そこにあるものは何でもとても珍しい。

[76-79]

おい、さあ友よ！

寿命は束の間である、と知るべき相は多く、寿命の量もどれほど知らないのに、鷺鳥が水から乳を取るように、自分の望むものを自分のために取りなさい。[80-83]

おい、さあ、友よ。

世間の所行を興味深く見たならば、一切の所作は無意味で、苦の原因である。何を考へても利益にならないので、自らの心を見ることを修習しなさい。[84-87]

おい、さあ、友よ！

七種の因明と四種の声明とアビダルマと『瑜伽師地論』と、経と律とアビダルマの教義に述べられるものを残らずすべて、「見ず、聞かず、解説せず、書かない」と言う。

[88-92]

それを求めることを起こさない美形の者たちよ、「師の教誡」と言われるものは甘露の味である。三昧に入る者はそれだけで、正しく求めるべき多くの教義に何が必要であろう。[93-96]

一切の意は、迷乱させる原因である。この輪廻の場所は不確定であるから、父母などが父母として確定しないので、親族関係に執着することを捨てなさい。敵も不確定なので、彼を憎むことを捨てなさい。[97-101]

病気がなく、円満な壮年で、五欲樂を自性により執着することを捨てなさい。利得と尊敬と名声と種姓と姓名と偈頌を捨てなさい。弟子も学ぶ法関係を捨てなさい。

[102-106]

おい、さあ、友よ！

世間は虎と蛇と火と毒に似ている、と考えてから、捨てて、寂処に住すべきである。女性の特徴と人の特徴と薬と象を考察したり、星宿と暦と武器を考察したり、馬の形を臆説したり、悪い論書を学び、読誦することを捨てるべきである。[107-112]

境を明らかに喜ぶ心が生じ、それらの分別が生じたならば、自分は確実に死ぬことを記憶すべきであり、後から生じる諸対治により退けるべきである。[113-116]

多くの分別を、息を数えることにより制圧し、貪欲の心が生じた分別を、本質は不浄なる骨格と見ることで退けるべきである。[117-119]

怒りに対して慈愛の水を注ぎ、愚かさに対しては縁起の道による。不浄と慈愛と縁起の概説を師の御前から生じた通りになすべきである。[120-123]

『輪廻出離意歌』偉大な軌範師ディーパンカラシュリージュニャーナの著作を完成する。

インドのその賢者自身と、偉大な翻訳官のギャ・ツォンドウ・センゲがヴィクラマシーラ寺院において翻訳した。後にその師自身と翻訳官のツルティム・ゲルワが改訂し、決定した。

『行歌』和訳

インドの言葉で *Caryāgīti*

チベットの言葉で『行歌』

聖マンジュシュリー童子に敬礼する。

吉祥なる金剛座に敬礼する。

影像に似ているものが、有情の存在である。自らの本質を考察するならば、自性は存在しないものである。自らの本質は影像に似ているという認識を起こさないで、さあ、愚かな心で汝は無知でいないように。[1-4]

無垢なる虚空と広大な宝と鏡に関して、そこには明らかに顕現する自分と一切の有情がいる。例えば、凡夫が影像に迷乱するように、自他を区別する迷乱にどうして住するのか。影像を常に認識し、分別する者は、家畜と同じで影に抵抗するものである。[5-10]

マンダラの輪の修習を堅固にするべきであり、真実を知るヨーガ行者はここには住しない。述べられるべきものは「最高なる大楽」と言われ、そのマンダラをまとめて、堅固にするべきである。[11-14]

汝が考察し、起こした在り方のものを、真実の本質であるとどのように考えるであろうか。真実の本質を正しく知らない限り、無上菩提がどのように成立しようか。分別という戯論はすべて実体のないものであり、それらは最高なる大楽の本質である。[15-20]

世間の八法は等しく、三昧の資糧に住するようになるべきである。住するならば、とても清浄になり、戯論の行はすべて捨てられるべきものである。[21-24]

種々なる分別により起こされた実体は、最高なる清浄の本質ではない。戯論と分別はすべて存在するものではなく、それが真如で、最高のなる清浄の実体である。[25-28]

真如の三昧は大火が燃えることであり、煩惱という藁をすべて燃やすものである。世間を正しく知るようになれば、その時に一切の有情は虚空のようになる。[29-32]

有情の本質を、虚空のように眩惑し、分別という眼翳により愚かさを起こさないよう

に。以前のものに似ている有情は、後も同じであり、前世と来世と現世には差別は存在しない。[33-36]

眼翳を持つ者は、虚空に髪の毛を見ることと、分別という眼翳で世間を見ることに差別は存在しない。分別の本質は虚空と同じ本質である。考察される本質をすべて修習しなさい。[37-40]

罪過の異熟は、盗賊を恐れて見ことで、さあ、戒律という大宝を守るために夜警しなさい。存在という長い夜に愚かに寝てしまうことで、さあ、心が放逸しないように夜警しなさい。[41-44]

太陽がなければ昼が存在しないように、戒という宝を離れて禅定がどこに存在しようか。寝室に盗賊が入ることにより、さあ、汝の戒の宝が盗まれてはいけないから。[45-48]

刹那さえも悪い行為に執着せず、真実という太陽が登らない間は、夜警しなさい。真実という太陽が昇らない限りは、存在を宝のようにどうして喜んで行じようか。[49-52]

我とは、有情とか汝などというものであり、自他を区別する内なる害をなすべきではない。分別というこの内なる害を打ち負かすべきであり、毒蛇のように甘露味により静められるべきである。[53-56]

内なる害は、多くの頭がある毒蛇のようであり、すべての有情の種々なる分別を知ったならば、その真如の「甘露味」と言うものは大ヨーガの心の休息の場となるものである。[57-60]

大甘露味を常に味わうならば、大楽の最高の涅槃を知るであろう。裸行者と火儀をなす者はバラモンではなく、長髪を受け入れており、種姓と相続によるのではない。[61-64]

「身口意を浄化した者はバラモンである」と仏はお説きになられている。十の罪過となるものを捨てるべきで、十善の功德の力を備えるべきである。[65-68]

低い種姓に生まれても、何時であれこれが死なない間は非法を行うべきではない。忍法を保持することで怒りに打ち勝ち、境の楽を望むことをすべて捨てるべきである。[69-72]

楽の法の海に常に浴するべきで、欲望の過失と恐れと無知を起こすべきではない。繰り返し骨格に乗ることをし、常に不浄が漏れることを障害により感受しないのか。[73-76]

欲と無知と悪趣の道を捨てるべきで、さあ、考えなさい。汝は、自分で自分の垢を洗い落としなさい。尊敬により正しい師の泉に依存すべきであり、大きな無知の垢により着いたものを尽くすべきである。[77-80]

その師の教誡自身は無垢なる水なので、それを受けてから、自分で沐浴することを知

るべきである。考えなさい。汝は、正しく理解することで自分を正しく見て、無知の大きな垢を浄化すべきである。[81-84]

ムニの説法を聞かない人は、水と森の火と同じである。確実に世間において将来彼岸に行くので、ムニの説法は聞くべきものである。[85-88]

ムニの法を聞いてからは非法に住すべきではない。無間に行くことを誰も理解しようと尋ねないので、法を聞いてから法の目的の通りに修習する者は、善趣という解脱の結果を得る。愚かな者の暗闇にとって法は灯火で、存在の海から救い出す筏である。[89-94]

偉大な軌範師ディーパンカラジュニャーナが著した『戒行歌¹³』を取ることを完成する。

パンディタであるヴァジュラパーニと翻訳官で比丘のチューキシェラップが翻訳し、校訂し、決定した。

『行歌注』和訳

インドの言葉で、*Caryāgītivṛtti*

チベットの言葉で、『行歌注』

マンジュシュリー童子に敬礼する。

一切相の最高をともない、双運の身に帰依する。『行歌』の意味を区別し、利他の智慧により書く。

ここでも真実の見解の二種に関して、『金剛歌』により光明と滅諦と勝義諦を主に説いてから、『行歌』により我の加持と、道諦と世俗諦が説かれるので、「**影像に似ているもの**」などと言うものに対して、ここに智慧の眼により見られるべき対境は、二つである。無と有の自性である。無は、そうではないのにそこに顕現することで、例えば眼翳者の認識のようなものである。

影像に似ているもの[1]

¹³ ここでは、タイトルに「戒の(tshul khriims kyi)」が付されている。

と言うそれに三つ。腐食していない鏡と近くにある顔と障害に覆われることのない虚空に物体が顕現する。そのように心と風の変化から無明により特別に作られたものとして三有の有情が明らかに顕現して、それも顕現のみから意味として成立したものは何もない。それ故に、

自らの本質を考察したならば自性は存在するものではない。 [2]

と言う。どのように考察により存在しないと知るのか、と言え、我と三界自身の本質は影像のように顕現のみとして知り、生じないと知る。

それは「さあ [4]」と叫んでから、教授する。影像を迷乱せず、影像の自性を知らないままでないと、言うことである。

そのようにまとめて説いてから喩例の意味の特徴を詳しく説くために、

無垢なる虚空と [5]

などと言い、無垢なる虚空と宝と清浄な鏡との三面にまとめてから、影像が顕現するそのように心と風と業と無明から我と三界の影像が顕現する。それを迷乱して、常住で真実と認識することは、獅子が自分の影を横切って海で死んでしまうのと同じで、愚かである。また印を知らない童子が自分の影像を引っ掻くのと同じで、愚かである。そのように我と三界が影像のように顕現することを自と他とに何故に迷乱しよう。「迷乱しない」と言う。それも経典に、

鏡に自分が顕現しても、そこには存在しないように、そのようなものが諸事物の本質である。

と述べられ、また、

対象が存在しないことが心自身で、習気により掻き乱された意は、対象に顕現が生じたものである。

と説かれているので、我と三界の事物となるこちら側に見える知と所知を残らず虚空の花のように知るべきである。

今度は、有の自性を見ることに関して、

マンダラの輪の修習を堅固にすべきで、[11]

と言うそれに五つ。縁起に力があることと、そうであることと、それを知ることと、それを修習することと、加持が生じることである。そのように有ではない対象を除いてから心と風の両者が無漏の功德により特別に作られた時に、依ることと依られる天の輪として顕現し、取の原因である心と同時になす縁の風と無漏の功德の三つにまとめてから意生身は幻などとして顕現する。それも本質として無漏の一切の功德の自性であることを知らなければ、存在しないものである。それも認識をする真実の善知識に依存してから自分は加持の本質としての三喩と十二の門から述べて認識し、さらにまた五根に関して修習して、それから加持の一切法は幻のように顕現するという確実な認識が生じる。他の天による守護などはアーリヤデーヴァによる解説から知るべきである。

真実を知るヨーガ行者はそこにいない。[12]

と言うのは、幻と知っても、幻により作られた女性に対する執着が生じるのと同じく、執着が存在するので、光明により浄化すべきである。

述べられるべきものは「最高の大楽」と言われ [13]

と言う二語は理解しやすい。

汝が考察し、起こした在り方であるもの [15]

とは、二諦の相をともしなわぬ考察されたヨーガを否定しており、理解しやすい。

真実の本質を知らない限り、無上菩提がどのように成立しようか。[17-18]

とは、光明と双運とである。

分別という戲論はすべて存在するものではない。[19]

とは、世間の百六心である。「それらは最高なる大楽が光明の自性により浄化されたも

のである」と言われる。その原因は何かと言えば、

世間の八法を平等になし、三昧の最高に住するようになる。[21-22]

それに二つ。共通なる資糧は、戒をそなえ、財産に頼らず、忍をもち、誓願を堅固にし、喧騒を捨て、正知をもち、二諦を乱すことなく記憶し、なすべきこととそうでないことを知り、五障を捨て、食事の量を知り、世間の行に智慧を休めて行くことである。共通ではないものは、四根をよく得て、菩提心を堅固にし、師を尊敬することである。そのような資糧に住して、身口意の三つと三障がとても浄化され、

戲論の行はすべて捨てられるべきものである。分別 [24-25]

という二語は、戲論のヨーガを否定しており、理解しやすい。

三有と、どこかに顕現する世間の心の戲論と、分別はすべて意味があるものではないので、それ故にその除かれたものは、その通りに、

最高なものに浄化される本質である。[28]

そして五根に応じる三昧の火により煩惱の藁という世間の心が燃やされるので、何時であれ三世間と世間の諸の心を虚空の中央のように正しく知る時に、すべての有情の分別が沈んでから虚空のように成立する。そのように、一切法の顕現に対する確実な認識が生じる垢を浄化しなければならない、とお説きになられている。

分別と言う眼翳により愚かさを起こさないように。[34]

と言う。それは何故か、と言えば、三有情は自性を浄化しながら特殊性は何もないのに、分別により区別されている。その意味を詳しく説くために「**眼翳者**」[37]などと言われ、理解しやすい。

今度は、光明の三昧により業と煩惱が生じることを浄化しない間は、とても微細な業果も避けなければならないことを示すために、

罪過の異熟は盜賊を恐れて見ることにより [41]

などと言われ、理解しやすい。真実という太陽の光明の三昧により業の働きを断じてから、その忍をそなえるように、自らの相続において善心を完成させるなどの時に、それは不要なので、

その限りどうして喜んで行じようか [52]

と言われる。それ故に、「その限り」などと言われ、理解しやすい。

そのように見解と行を浄化した者を、

バラモン [66]

と言うが、種姓などではないことを説くために、「裸行者」などと述べ、理解しやすい。不退転の道をとるならば、種姓に依存しないことを説くために、

低い種姓に生まれても [69]

などと言う。迷乱により常に輪廻することから退くことを述べたものが、

繰り返し [75]

となどと言うことにより結ばれて述べられている。「さあ」と叫んでから、

考えなさい。汝は自分で自分の垢を洗い落とし [80]

と言うことについて、顔の汚れを鏡で見てから取り除くように、鏡と同じ師と水と同じ解説により無明の垢が着いたものを尽くすべきである。それ故に、師の解説の水で分別の垢を洗い落とすべきである。在り方はどのようなのかと言えば、

考えなさい。汝は正しく理解することで自分を正しく見て、無知の大きな垢を浄化すべきである。[84]

と述べ、一切法を心と風の変化と理解すべきで、自己に対する自己であり、風と心の自性に入り、「虚空と同じように見なさい」と言われる。そのようなムニの説法を聞かず、

その不幸は火のように顕現する。それ故に、確実に世間の彼岸に行かなければならないと決意し、ムニの説法である菩提心などを聞き、修習すべきである。それを聞いてからそれと矛盾する業をなさない。無間地獄をそうではない者は誰も把握できないから。それを聞いた後に、そのように浄化してから時期の結果である善趣において究極の結果である菩提を得る。無明の闇に対する法で、帰依と菩提心などと、最後の大楽の三昧までが灯火である。自性により光り輝いているから。それ故に、存在の大海から救い出す船と筏なので、確かに頼って修習すべきである。

『行歌注』を完成した。

パンディタであるディーパンカラと翻訳官のツルティム・ゲルワが翻訳した。

『法界見歌』和訳

インドの言葉で、 *Dharmadhātudarśanagīti*

チベットの言葉で、『法界見歌』

一切智者に敬礼する。

誰であれすべてを知らなければ、三有を輪廻するので、一切衆生に確かにある法界に敬礼してから¹⁴、法界を見て他のものを見ずに、それらを順序通りに述べるべきである。

[1-6]

甚深で寂靜で戲論を離れた真如で、光り輝き、無為なるものは、不生不滅で本来より清浄であり、自性は涅槃である。[7-10]

法界は辺際と中心がないことを、微細で、分別を離れ、沈みこみと昂ぶり翳のない知恵の目で見ると。[11-13]

輪廻の原因となったそのものを浄化した後に、その浄化が涅槃であり、法身も同じである。[14-17]

例えば、牛乳を混ぜてもバターのコアは顕われないように、煩惱を混ぜても法界も見えない。[18-21]

例えば、牛乳を浄化することでバターのコアが無垢となるように、煩惱を浄化することにより法界はととも無垢になる。[22-25]

例えば、灯火が容器の中にあればわずかたりとも見えないように、煩惱が容器の中に

¹⁴ *Dharmadhātustava* 1.

あれば法界も見えない。[26-29]

あらゆる方向から瓶の穴が作られて、それぞれの方向から光の自性が生じるであろう。

[30-33]

三昧という金剛がその瓶自身を破壊した時、それは虚空の辺際にまで顕れる。[34-37]

法界は不生であり、決して滅することがない。いかなる時も煩惱がなく、最初と中間と最後に垢を離れている。[38-41]

例えば、瑠璃宝は一切時において光輝いても、宝石の内部ではその光は輝いていない。そのように煩惱に覆われた法界は垢がなくても、周りに光輝いていない¹⁵。[42-48]

例えば、殻により遮断された大麦は実を望めないように、煩惱により遮断されたそれは仏を認識することが考えられない。[49-52]

例えば、殻から抜け出せば実が現れるように、そのように煩惱から解脱するならば、法身自身が輝く¹⁶。[53-56]

例えば、妊婦の胎内に子供がいても見えないように、煩惱に覆われた法界も見えない¹⁷。[57-60]

法界は我でなく、女性でなく、男性でなく、一切の所取から解放されているので、どうして能取として考察されるのか¹⁸。[61-64]

不浄と無常と苦という三種により心が浄化される。空性は師の經典で、勝者が説かれたものである。[65-68]

それらはすべて煩惱を退けており、その界を損なうものではない。その心を浄化する最高の法は無自性である¹⁹。[69-72]

例えば、兎の頭にある角は考察されるものであっても、存在するものではないように、一切の法も考察されるものであっても、存在するものではない。[73-76]

極微の塵の自性により牛の角も知覚できないように、どうして前者の通りに後者もなるのか。それを考察することがどうしてなされようか。[77-80]

依存してから生じるものと依存してから滅するものと存続し続けるものも、存在するものでなければ、凡夫がどのように考察しようか²⁰。[81-84]

法界の自性は、虚空界のように無因で無縁で、生と老と住と滅がなく、無為である。[85-88]

仏法は区別がなく、その種姓はそのまま得られ、虚妄がなく、欺瞞がなく、妨害がな

¹⁵ *Dharmadhātustava* 2-10c.

¹⁶ *Dharmadhātustava* 12-13

¹⁷ *Dharmadhātustava* 27.

¹⁸ *Dharmadhātustava* 24.

¹⁹ *Dharmadhātustava* 26, 22.

²⁰ *Dharmadhātustava* 30-32.

いので、初めから自性が寂靜である²¹。[89-92]

それは大海のように言葉と喩例と知恵により底と対岸は得られないので、とても甚深なものである。[93-96]

法界に区別がないので相違する見解は適切ではない。しかしながら知恵の区別により相違する見解がわずかのみ述べられる²²。[97-100]

中觀論者たちは、その意味を二諦として主張する。世俗と勝義である²³。[101-103]

二諦の区別を知る者たちは、ムニのお言葉を不明瞭にしていない。彼らはすべての資糧を集めてから円満なる彼岸に赴いた者である²⁴。[104-107]

我と我所と、常と断と、煩惱と淨化、原因と結果、能取と所取としての戲論が世俗諦である。[108-111]

空性と無我と寂靜たるもので、戲論により汚されず、相違する意味がなく、無分別たるものが、勝義諦である²⁵。[112-115]

完全なものと不完全なもの、異門と異門ではないものによりその二つをそれぞれ区別すべきである。[116-118]

考察されただけのものと顕現したものと知られたものと事物と言説と迷乱と幻と世俗たるものが、異門である。[119-121]

空性と完全なものと究極と無相と勝義と法界が、異門である²⁶。[122-124]

障疑により世俗であり、変化がないので勝義である。完全なるものと不完全なるものの認識が二つなので、二諦である。[125-128]

完全なる認識はない、と言うのならば、真実であり、言説としてのみ存在するのである。真実を求める者には、最初に一切は存在すると述べられる。意味が考察され、執着がなく、後に寂靜の意味となる²⁷。[129-134]

二諦は、同一でも異なるものでもなく、四四の過失が説かれているから。同一と相違を分別する者は、不合理に入るものである²⁸。[135-138]

事物と認められるものが存在するならば、貪欲と忿怒が尽きることなく生じ、正しくない見解に執着して、それから生じた論争となる²⁹。[139-142]

所縁の想をもつ者には、得がなく、現觀がない。随順する忍も存在しなければ、涅槃

²¹ *Ratnagotravibhāgaśāstra* 1.87.

²² *Abhisamayālaṅkāraśāstra* 1.40.

²³ *Bodhicaryāvatāra* 9.2.

²⁴ *Satyadvayāvatāra* 2.

²⁵ *Mūlamadhyamakakārikā* 18.9.

²⁶ *Madhyāntavibhāgakārikā* 1.14.

²⁷ *Yuktiśāstika* 30.

²⁸ *Samdhinirmocanasūtra*. D. No.106, Ca 6b.

²⁹ *Yuktiśāstika* 46.

を説く必要があるか。[143-146]

空性を見ることに過失がある、と言うならば、少ない智慧の者は衰亡するであろう。例えば、蛇を把握した過失と、明呪を誤って成立させもののようなものである³⁰。[147-150]

すべての勝者により、空性はすべての見解を確実に取り除くと説かれている。空性を見る者は成就することはない、と説かれている³¹。[151-154]

自己の存在と他の存在を存在とか非存在と見る者は、仏が説かれたものを完全なるものと見ていない³²。[155-158]

非存在は存在の反対により導かれたものであり、存在も非存在の反対により導かれたものなので、それ故に、非存在と述べるべきではないし、存在するものとしても考察すべきではない³³。[159-162]

存在論者は善趣に行く。非存在論者は悪趣に行く。真実の通りに正しく知るので、二に依存しないものは解脱するであろう³⁴。[163-166]

二つの在り方の車に乗ってから正理の手綱を保持する者は、それ故に、意味のままに、大乘たるものを得る³⁵。[167-170]

色などがあるのまま顕現してから善趣の間は、すべての法を兎と牛の角の喩例により中たるものを修習すべきである³⁶。[171-174]

有でなく、無でなく、有無でなく、二でなく、我としても存在せず、四辺から確実に解放されているものを中と賢者はお認めになられている³⁷。[175-178]

中が辺際から解放されているならば、辺際を離れているので、中も存在しない。辺際と中が存在しないと見る者は真実を見て、無上の見解である。[179-183]

知恵をもつ者は常に修習しており、その見解に入る者は一切智を得る。[184-186]

唯識論者は、自性を三と主張する。遍計所執性と依他起性と円成就性である。考察されたものと原因から生じたものと変化しないものなので、順序通りである³⁸。[187-191]

考察することにより事物は考察される。その遍計所執の自性はそれが存在しないことである。[192-195]

依他起性は分別であり、縁から生じたものである。円成就性はそれに先行している。常に非存在となるものである。[196-199]

³⁰ *Mūlamadhyamakakārikā* 24.11.

³¹ *Mūlamadhyamakakārikā* 13.8.

³² *Mūlamadhyamakakārikā* 15.6.

³³ *Laṅkāvatārasūtra* 83.

³⁴ *Ratnāvali* 1.57.

³⁵ *Madhyamakālaṃkārikakārikā* 93.

³⁶ *Dharmadhātustava*

³⁷ *Jñānasārasamuccaya* 28.

³⁸ *Madhyamakālaṃkārikakārikāvṛttimadhyamakapratipādasiddhi*. D. No.4072, Shi 103a2.

有と無の二極により、それ故に、それ自身は依他起性より異なるものではなく、異なるものでもない。無常などの通りに述べられる³⁹。水晶や瑠璃の喩例により三性説を知るべきである。[200-205]

我と法として考察され、清浄と不浄、不変と不顛倒、順序通りそれぞれ二つずつである。[206-209]

一切のよい智慧のある者は、内心を精進する⁴⁰。所取と能取から解放された識は、勝義において存在する⁴¹。[210-213]

諸法はいかなるものも、生と滅は僅かたりとも存在しない。識だけが生じ滅するのである⁴²。[214-217]

それらの存在しない諸法は顕現するが、無生物からでなく、他からではなく、無からではなく、二つの過失があるので、それ故に、識の自体が存在するのである⁴³。[218-221]

識は無生物の自性とは別に明らかに生じるものである。非生物でなければ、その自性はここでは自体を知るものと認められる⁴⁴。[222-225]

虚空と大地と風と太陽と海と方向と大河は完全なる内部の心の一部であり、外部のもののように顕現している⁴⁵。[226-229]

明らかな自性として顕現するので、それらと関係したものは隠されることがない。関係により知るものは、その知られるべきものを知るであろう。[230-233]

「剣の刃と指先のように知恵により自身が把握したものを捨てるならば、自身の顕現を捨てるのではない」と『解深密経』に説かれている。[234-237]

それ故に、知恵の相は自証として成立するものである⁴⁶。それ自身を認識することは難しいので、この性質は考察できない。[238-241]

その自証も微細なので、諸仏は微細なものと見られている。自らに存在しても、自らに似ているものにより妨げられているので、見えるものではない⁴⁷。[242-245]

顕現と知恵は自体との関係があるので、知恵のみである。識の自性は真実であり、相が虚妄と迷乱である⁴⁸。[246-249]

心が混乱しているので、一つのもものが二つとして顕現している。どうして所取と能取

³⁹ *Triṃśīkākārikā* 20-22c.

⁴⁰ *Ālokaṃāla* 3cd.

⁴¹ *Jñānasārasamuccaya* 26ab.

⁴² *Prajñāpāramitopadeśa*. D. No.4079, Hi 152a1-2.

⁴³ *Madhyamakālaṃkārikā*kāvṛttimadhyamakapratipādasiddhi D. No.4072, Shi 104b.

⁴⁴ *Madhyamakālaṃkārikā* 16.

⁴⁵ *Suksumanāmadvikramatattvabhāvanāmukhāgamavṛtti* D. No.1866, Di 96a6-7.

⁴⁶ *Prajñāpāramitopadeśa*. D. No. 4079, Hi 154a5-7.

⁴⁷ *Ālokaṃāla* 12c-13.

⁴⁸ *Prajñāpāramitopadeśa*. D. No. 4079, Hi 154a6-7.

の区別をよく知るものではないのか。[250-253]

所取の相は動かないので、外部のもののように顕現している。能取の相はよく動くので、内部のもののように顕現している⁴⁹。その特徴が捨てられてから、知恵を虚空のように修習すべきである。[254-259]

心の自性は無漏であり、有漏の種子は尽きることなく、アーラヤ識の住処でそれ自身が尽きてから無漏の界になる。[260-263]

解脱身と、常に太陽と日光のように仏法は存在するので、救済者の法身である⁵⁰。
[264-267]

声聞乗に入る者たちは、我と我所を離れ、蘊と界と処と、五根と三時もあてはまる。
[268-271]

一切の存在は把握されるものである。所縁をもつものにより把握するのである。その両者は勝義として認められる。[272-274]

真実を見て修習した後に煩悩が捨てられる、と解説される。諦は四種である。苦と同じく集と滅と道であって、その如くならば、それらは現観の順序通りである⁵¹。[275-280]

苦は領受される蘊である。集は業と煩悩である。滅は二つの涅槃である。道は三十七分法である。[281-284]

戒の住処は、聞と思をともない、修を正しく修行すべきである。沙門の在り方は無垢なる道であり、結果は有為と無為である。[285-288]

それらは八十九である。解脱道は、尽きることをともなっている。四果が設定されれば、五因がありうるから⁵²。[289-292]

声聞は四種である。変化と円満な菩提になるものと一向趣と宗義を保持するものである。それは、二と四と十八である。二とは、毘婆沙師と同じく経量部である。[293-298]

「無相の識により色などの対象を知る」と主張する者が毘婆沙師である。「何らかの対象により設定された色の影像を領受することで対象を知る」と主張する者が経量部である。[299-304]

四は、大衆部と説一切有部と上座部と正量部である。十八は、東山部と西山部と雪山部と出世説部と施設部との五部が大衆部である。[305-311]

根本一切有部と迦葉部と化地部と法護部と多聞部と紅衣部分別説部が、説一切有部である。[312-316]

祇多林部と無畏部と大伽藍部が上座部である。商拘梨柯部と不可棄部と犢子部が正量

⁴⁹ *Ālokaṃāla* 25-26.

⁵⁰ *Prajñāpāramitopadeśa*. D. No. 4079, Hi 154a7-b1.

⁵¹ *Abhidharmakośakārikā* 6.1ab, 6.2.

⁵² *Abhidharmakośakārikā* 6.5ab, 6.51-52ab.

部の三種である。場所と目的と師の区別により異なる十八である⁵³。[317-323]

独覚の菩提を求める者は、所取の分別を捨て、能取を捨てないので、所依の犀のような道⁵⁴を百劫の辺際まで修習することで菩提に触れるであろう⁵⁵。[324-329]

彼は縁起の十二支分を三部にする。先と後の二つずつと中間の八つとで完備される。
[330-333]

無明は、前世の煩惱であり、行は前世の業であり、識は結合した蘊である。名色は、それ以後である。[334-337]

六処は、出現以後である。それは三つが過ぎてからである。触は、楽と苦などの原因を認識できてからである。[338-341]

受は、性交より前である。愛は、物資と性交と食欲をもつことで、取は、享受を得るために走ることである。[342-345]

その存在が結果として生じることになるその業自身が有である。昼夜結合することが生である。受の間が老死である。[346-349]

これは期間として認められている。最高のものなので支分が述べられている。前と後と中間において障害を退けているからである。[350-353]

煩惱は三種で、業は二種である。事は七種で、その通りに結果である。原因と結果の二つにまとめられる中間の推測からである。[354-357]

ここに生じるものが原因であり、生じたものが結果として認められる⁵⁶。それら十二支分のうち、原因が五種で、結果が七種である。[358-361]

投げるものと投げられたものと明らかに成立させるものと成立したものと過失の支分であり、三と四と三と一と一が順序通りである。[362-365]

行苦と壊苦と苦苦が順序通り、五と二と五である。[366-368]

三界では、順序通り、十二と十一と十により入る。化生は十一支分により、胎生と卵生は十二により、暖[生]と湿生は何れかの種に入る。そのように五趣に合わせられる。

[369-374]

三から二つが生じて、二から七つが生じて、七からも三が生じて、その存在の輪も何度も廻る⁵⁷。[375-378]

輪廻の本質と相は、何れかのものが、何れかの場所で、何れかのものにより、どのようにかして、有らん限りの無限の過失の集まりにより入ることである。[379-382]

⁵³ *Samayabhedoparacanacakraṅkāyabhedopadeśasaṃgraha* 1-4.

⁵⁴ *Ratnamālā* 4.

⁵⁵ *Abhisamayālaṅkārikā* 1.8.

⁵⁶ *Abhidharmakośakārikā* 3.20-3.26, 28ab.

⁵⁷ *Pratītyasamutpādayakārikā* 3.

始めるべきで、生じるべきで、仏法に入るべきである。葦の家にいる象のように、死の主を裂くべきである。[383-386]

不放逸にこの法と律を行じる者は、生の輪を正しく捨ててから 苦を最後になすであろう⁵⁸。[387-390]

涅槃とは、何れかのものが、何れかのものにより、何れかの時に、何れかのところで、何れかの理由で、どのようにかして、有らん限りの本質と相と得たものと区別と働きと功德の集まりにより退けることである。[391-396]

外道は二種である。変化する者と自ら相続する者とである。それは、生を得るものと結合して生じるものとである。[397-399]

生を得たものは種姓を罰し、邪見とへの愛着を持つもので、結合により生じたものは禪定と論理学である。禪定は神通力により六十二見として考察される。[400-403]

常住を説く四と、ある部分を常住と説く四と、辺際が存在するなどの四と、懷疑論の四と、無因の二つは、過去の辺際を考察するものである。[404-407]

想が存在すると説く十六と、存在しないと説く八と、同じく存在するものでもなく存在しないものでもないと言説く八と、断滅を説く七と、現世での涅槃を説く五とが未来の辺際を考察する見解である。[408-413]

論理学者は、サーンキヤ学派などである。量による宗義を保持している。サーンキヤ学派は、三種のグナを述べている。純質と動質と暗質である。[414-417]

喜悅と喜びと歡喜と樂と寂靜の心が時々顕われる。それらが純質のグナである。[418-421]

不喜と苦しみと悲痛と欲望と耐えられないことがどこかに顕現する証因によりそれらが動質の特徴と認められる。[422-425]

妄想と同じく憂鬱と放逸と睡眠と動くことが何度も顕現する。それらが暗質のグナである⁵⁹。[426-429]

三つのグナの自性は最高であり、見える道に成立するものではない。見える道に成立するものは幻のように集められたものである⁶⁰。[430-433]

自性から大が、それから三種の自大が生じる。それから十一器官と五微細元素が、その五から五粗大元素が生じ、二十四が根本原質と相となる。[434-439]

それらは心があるものではない。プルシャは、一切を知る心をもつものである。それらを二十五と知るならば、長髪や頭頂や髪房の者が何れかの住居でそれを喜んで解脱す

⁵⁸ Vinayavastu D. No.1, Nga 227b2-3.

⁵⁹ Jñānasārasamuccayanibandhana D. No.3852, Tsha 38a3-5.

⁶⁰ Madhyamakālamkāravṛtti D. No.3885, Za 80a6.

ることは、ここでは疑いがない。[440-445]

ヴァイシェーシカ学派は六を主張する。実体と性質と運動と普遍と特殊と内属関係の六種である。[446-448]

実体は九、性質は二十四、運動は五、普遍は二、特殊は二、同じく内属関係も二種である。真実の六を知ることが知識の最高であり、すべてのヴェーダの完成したものである。[449-453]

裸行派の者は九義を説く。命と漏と律と確実な老いと死と業と罪過と福德と解脱という九義である。見た者は清浄である。[454-459]

ニヤーヤ学派は、十六義を主張する。認識手段と認識対象と疑惑と目的と喩例と定説と論証肢と吟味と決定と論議と論争と論詰と誤った理由と詭弁と誤った非難と論破とであって、十六により確実に生じている。[460-467]

ミーマーンサ学派は、四義を述べる。地と水と火と風であり、それらは無為であり、常に生滅がなく存続するので、それ故に、業果は存在しない。最初と最後の辺際も同様に存在しない。そのように考察する者は見るだけで解脱するであろう。[468-475]

ヴィシュヌを創造主と説く者たちは、太陽の中にヴィシュヌが入っている。星の中では光がある月であり、風の中では自分は光線をもつ者であり、光を放つものには太陽である。[476-480]

ヴェーダの中では『サーマ・ヴェーダ』であり、天の中ではインドラであり、感覚器官の中では意である。大種の中では地であり、私は安穩を作るルドラでもある。[481-485]

ラクシャとヤクシャの中では財主であり、財天の中では火天であり、主は、山の中ではメール山であり、主は文字の中では「あ」である⁶¹。[486-489]

魚と亀と野猪と人獅子と矮人とパラシュラーマとラーマとクリシュナとブッダとカルキンの十である⁶²。ヴィシュヌの功德を常に修習すれば安穩を得るであろう。[490-495]

シヴァを創造主と主張する者たちは、これらの一切の有情の造作主がシヴァである。[496-498]

彼は八つの功德を持っている。微細と軽さと最高に値し主にあり、支配者となり、どこにも至り、所欲をもち、同じく喜愛して住する。[499-503]

手と足と眼と顔と身体により多くのものを生み、破壊するので、それ故に、微細と述べられている。[504-507]

⁶¹ *Devātīśayastotraṅkā* 10.21-23.

⁶² *Tarkajvāla* Tib. D. Dza 296a.

虚空と風と大地と水と火が存在するようにして、集め、広げるので、それ故に軽いと述べられている。[508-511]

三種の世間での最高となり、とどまるものと動くものと一切の生物により敬われるので、それ故に最高に値するものである。[512-515]

一切の生物を支配し、とどまるものと動くものと、望むことは何でも作るので、それ故に「主たるもの」と呼ばれる。[516-519]

自分に依存し、自分を自在にし、誰に対しても恐怖があることがなく、一切を支配するので、それ故に「支配者」と言われる。[520-523]

さらにまた、意により思われたものを [一つの喩例の次の二パーダが出ている⁶³] 意に追随して行くものを集めずに⁶⁴、天界に行くすべてのものに遍満するので、それ故に「どこにも至る」と言われる。[524-527]

精力と微細と闇の三つがどこにおいても存在するように、眼を開くだけでなするので、それ故に「所欲をもつ」と言われる。[528-531]

解脱してもさらにまた天の身体でも、自分自身が望むものと一切が望むことのもので得られるので、それ故に、「喜愛して住する」と言われる。[532-535]

微細となって一人で生まれてから存在し、彼はこのすべての生と滅をなす。彼は自在主で、最高の布施と天の供養をなし、功德を作る者は、寂静を得る。[536-539]

この人には知恵がない。自分の楽と苦を自分で制御することがなく、自在天が送られても天界や深淵に行くだけであろう⁶⁵。[540-543]

自在天が陶工のように、この種々なる変化をなすものでなければ、この山は成立せず、この大地はなく、大海もない。この太陽と月をもつもののようなこの莊嚴は視界に存在しないだろう。存在するので、自在天は「有情を作るもの」とある者が言う⁶⁶。[544-547]

微細で不可思議な薄いものを作り、すべてを知り、すべてをなす、ヨーガの修習により得た知恵を持つ者は禅定者の禅定の対象である。太陽と月と地と水と火と風と方向と虚空の身体をもつ。寂静の楽と喜びを求める者は自在天を修習すべきである⁶⁷。

[548-551]

時を見ることを説く者たちは、一切の事物は時により変化するものとする。叔父が財天で父のダナンジャヤである者は畏怖がなく怒りがなくても殺されるので、時は越え難いものである。[552-557]

⁶³ D2 のみ、この句が挿入されている。

⁶⁴ この二パーダは、テキスト間に混乱が見られる。

⁶⁵ *Jñānasārasamuccayanibandhana* D. No.3852, Tsha 37a7-b4.

⁶⁶ *Bodhicaryāvatārapañjikā* D. No.3872 La 262b2-3.

⁶⁷ *Jñānasārasamuccayanibandhana* D. No.3852, Tsha 40b5-6.

大種は時によりもたらされ、九生のものを集めることを時がなし、時は睡眠を退けて起こすので、時は越え難いものである⁶⁸。[558-561]

守護者が三つの物語で、壕が大海で、歩兵の人が羅刹で、財産が増長天で、論書を取り除いた量が同じその羅婆那も、時の力により損なわれる⁶⁹。[562-565]

自性因を説く者は、諸事物は自性により成立するとする。火の赤さと聖者の利他性と正しくない御心がないこととの三つは自性により成立したものである。[566-571]

角が鋭くなるのは誰が作ったのか。獣や鳥の模様は誰が作ったのか。砂糖黍の甘さと山豆根の苦さとこのらはすべて自性により成立したものである⁷⁰。[572-575]

太陽の暖かさと月の涼しさと人の執着とムニのそうではないことと樂の満足さと苦の苦痛のこれらの六つは自性により成立したものである。[576-579]

無因を説く者は、一切が原因に依存することはなく諸事物は生じるとする。[580-582]

太陽と蓮華の雌蕊など種々なるものは誰が作ったのか。孔雀の羽の目などの種々なるものも誰が作ったのか。[583-586]

例えば、雨や風などは突然生じるので無因であるように、苦などは原因のないものである⁷¹。[587-589]

とても広大で深淵なものを怠惰で浄化せず自他を説く者たちは痴によりそのように大乘を非難する⁷²。[590-593]

戒より上の状態であるが、正見からは何もない。戒により天界に行く。正見により位も最高になるであろう。[594-597]

痴により妨げられ、完全に障害をなす者には、善の趣もなく、解脱もないとどうして言う必要があるか⁷³。[598-601]

損害の種子になる外道がなしたものを多く見てから、解脱を求める者には、悲心が成立することがあろうか。それ故に、解脱を求める者たちは法界を見るべきである。[602-607]

『法界見歌』という偉大な軌範師ディーパンカラシュリージュニャーナによる著作を完成する。

インドの賢者自身とチベットの翻訳官で比丘のツルティム・ゲルワが翻訳した。

⁶⁸ *Jñānasārasamuccayanibandhana* D. No.3852, Tsha 37b.6-7.

⁶⁹ *Jñānasārasamuccayanibandhana* D. No.3852, Tsha 38a1.

⁷⁰ *Cāṇakyanītiśāstra*, D. No.4334, Ngo 137a-8a.

⁷¹ *Tattvasaṃgrahakārikā* 5.110-112.

⁷² *Ratnāvali* 4.79.

⁷³ *Catuhśatakakārikā* 12.11, 12.10

『ディーパンカラシュリージュニャーナ法歌』和訳

仏に帰依する。

分別という世間の盗賊への恐怖を認識するならば、戒という宝を守るために夜警しなさい。さあ、怠惰をなさない、という心の夜警により痴と睡眠による輪廻の夜を離れなさい。

さあ、怠惰をなさない、という心夜警をしなさい。眠ってしまえば、家の中に盗賊が来て、汝の戒という大宝を奪うであろう。その戒という宝がなければ三昧はない。

それがなければ、陽が上ることはない。真実の陽を修習することで夜警しなさい。

一刹那もわずかな宝を他になさず、その時に真実の陽が上り、このようにその時に輪廻の夜明けが成立する。さあ、怠惰をなさない心の夜警をしなさい。

『ディーパンカラシュリージュニャーナ法歌』を完成する。

第7章 『一念説示』

はじめに

Dīpaṃkaraśrījñāna の顕教文献の多くは、チベット大蔵経のテンギェルにおいて「中観部」に収録されている。その理由は、編纂者がインドの諸論師の著書をステレオ・タイプの分類する過程において、彼には『中観説示』のような「中観」の語を付す著作があることから、「中観部」にその著書が収録されたからであろう。このような「中観」や「唯識」という分類はインド仏教思想史を俯瞰するのには大変に便利な分類となっているが、後期インド仏教の現状をそのまま示しているわけではない。確かに、『菩提道灯論細疏』などに見られるように彼は中観と唯識の教義の相違を認識し、Nāgārjuna の教義を高く評価しているが、Maitreya や Asaṅga の教義を拒絶しているわけではない。その著作内容も中観思想に限定されるものだけではなく、多岐に及んでいる。

このことは、彼の著作の顕密の分類にもあてはまる。彼の著作のおよそ半分はテンギェルの「密教部」に収められているが、この顕密の分類もテンギェルの編者によるものである。しかしながら、前者とは異なり、密教文献は説かれた対象者が限定されていることから、著者自身は顕密の区分は自覚していたはずである。それでも、彼のいくつかの著作は「秘密部」と「中観部」の両方に収録されている¹。このことは、「小部集」として編集された彼のテキストをテンギェルの「中観部」に再編入したことに起因している。

本章では、チベット大蔵経の「中観部」に収録されている彼の『一念説示 (Ekasmṛtyupadeśa²)』を取り上げ、その内容を考察する。この小片テキストは中観思想を論じるものではないが、その内容を見てみると、本論と他の論書との関係やテンギェル編纂者の意図などを知ることができる。

『一念説示』の配置

その内容は、彼の多くの小部文献と同様に特に中観思想を論じるものではないが、その収録位置はそれらの文献とは離れて配置されている。例えば、テンギェルの北京版の例をあげると、『入二諦論』が最初に Ha の巻にあり、二十四のテキストが続いた後に A

¹ *Saṃsāramanoniryāṇīkārasaṃgīti, Caryāgīti, Dharmadhātudarśanaṅgīti, Samādhisambhāraparivarta, Lokāṭīta-saptāṅgavidhi* の五文献である。ただし、小部集の vidhi 文献のうち最後のものだけが「秘密部」に最収録されている。

² *Ekasmṛtyupadeśa (Dran pa gcig p'ai man ngag)*. Tr. Dīpaṃkaraśrījñāna, Tshul khriṃs rgyal ba. B. No. 3157, Vol. 64: 279-282; C. Ki 96b4-97b2; D1. No. 3928, A 94b4-95b; D2. No. 4476, 20a2-b7; G1. A 144b5-46a3; G2. Gi 26a6-27b1b1-9a2; N1. No. 3314, A 103b1-104a7; N2. No. 3380, Gi 21b5-22b2; P1. No. 5323, A 104a7-105a8; P2. No. 5389, Gi 25a6-26a8.

の巻に本論があり、『中観説示』と『中観説示開宝篋論』が続き、さらに八つ後に³『経集撰義』がおかれている。彼の主著とされる『菩提道灯論』とその自注が現れるのはさらに八つのテキストの後に同じ著者の『菩薩行略教訓』に続いて Gi の巻である。

テンギュルの配置は編集者の意図を示すものであるが、もちろん他のテキストとの関係も影響するものである。そのために、彼の著作をまとめて並べることができなかつたのであろうが、『菩提道灯論』に先行するテキストのいくつかを見てみると、その意図を推測することもできる。まず、中観思想の代表的な教義を論じる『入二諦論』と「中観」をタイトルに付す二つの『中観説示』が先行したのであろう。前者の前後の文献は Candraripāda の『宝鬘論 (Ratnamālā)』と Abhayākara Gupta の『牟尼莊嚴論 (Munimatālaṃkāra)』であり、『入二諦論』がそこに収録されている意図は解りづらいものである。それに対して『中観説示』は、彼の中観の師である Bodhibhadra の『三昧資糧論』と二つの禪定文献に続いて、『一念説示』とともに登場する。Dīpaṃkaraśrījñāna の中観派における相承が Bodhibhadra の次と認識されていたことがわかり、これらのテキストが彼の中観思想を論じるテキストと認識されていたこともわかる。『経集撰義』は Nāgārjuna の『経集』の概説書でもあり、瑜伽行唯識派とされる Ratnākaraśānti の注釈書と並んで中観の論書ということになる。しかしながら、『入二諦論』と『中観説示』とともに、彼の小部文献の中で『一念説示』だけが先行するのはどのような理由なのか。その意味を考える前に、本論の内容を見てみる。

『一念説示』の内容

本論の著作目的は、冒頭に示されるように、大灌頂を得ていない者に方便と智慧の所作を示すものである。しかしながら、そのタイトルの「一念」との関係は明示されていない。

智慧の所作は、「一切法が無始不生で、法界である」と知ることであり、初学者は常時にそれを修習するべきである、とされる。方便の所作は、菩提心を起こし、衆生利益のために身口意の所作を行うことである。ただし智慧は法身を獲得した後のものなので、具体的な所作はなく、方便の所作は衆生を対象とし、人我により苦しむ衆生のために悲心を起こすことである。この衆生も縁起生の名称として設定されただけのものであり、最初から存在しないものとされている。

引用される経論は、『善勇猛般若経 (Suvikrāntavikrāmiparipṛcchāprajñāpāramitāsūtra)』

³ ただし『中観説示』の再録と Prajñāmokṣa の注釈も含まれている。これは前者の大小のテキストを並べた後に、その注釈書とも並べるために再録されたのであろうか。あるいは、『中観説示』については、大小のテキストによる伝承と Prajñāmokṣa 注釈をとまなう伝承との二つのテキスト伝承があったのであろうか。

と Nāgārjuna の二度の引用であり、知恵の対象が存在しないことと、無自性の自性は存在しないことと、利他の円満が最高であることが述べられている。『善勇猛般若経』の引用については、『菩提道灯論細疏』において根本偈 225-228 パーダ⁴の解説箇所においても引用されている⁵。それは中観の無自性と空性を論じた後の経証の箇所であり、『月灯三昧経』や『入楞伽経』などと並んで引用されている。『菩提道灯論細疏』との先行関係は不明であるが、著者はこの引用を無自性と空性の論拠と認識していたことがわかる。

Nāgārjuna の引用は、『中論』のような空性や無自性を説く文献ではなく、最初の引用は『菩提心釈』の第四十三偈に確認できる。同論は、そのタイトルが示すように菩提心をテーマにした偈頌で著された比較的短い文献である。Dīpaṃkaraśrījñāna は本論を多く引用しており、彼の顕教文献では十四度の引用と一度の言及を見ることができる。引用する著書は、『菩提道灯論細疏』において六度見られ⁶、『中観説示開宝篋論』では七度の引用と Nāgārjuna の著作リストにおける一度の言及がある⁷。ここで引用される第四十三偈は、これら二つの論書の双方において引用されており、彼が本偈を好んで利用していたことがわかる。

第二の引用は、『悪見除滅論 (Kudṛṣṭinirghātana)』の第三偈に確認できる。この論書は、『中観説示開宝篋論』においてもタイトルは付されないものの Nāgārjuna の偈として三度の引用を見ることができ、第三偈は二度引用されている⁸。ただし、この論書は Advayavajra の著作としても伝承されており、テンギェルでは「秘密部」に収録されている⁹。ここでの引用には著作名は付されていないので、他の文献の可能性も排除できないが、彼はこの文献から複数の偈を引用している。また、彼が誤って Nāgārjuna としたのか、Nāgārjuna に帰された著書が Advayavajra に帰されるようになったのかは明らかではないが、後に真言乗の文献として伝承される文献が Nāgārjuna の著書として引用されていることになる。なお、Advayavajra は Dīpaṃkaraśrījñāna の師の一人とされ、その著作集に収録されている『根本過犯集 (Mūlāpattisaṃgraha)』に対する注釈書も彼は著しているが、彼は同論を Advayavajra の著作と認識してはいない¹⁰。

⁴ 「そのようにまた世尊も」と言う句に続いて、「分別は大無明であって、輪廻の大海に落とすものである。無分別の三昧にとどまる者は虚空のように無分別を明らかにする」と述べられ、根本偈においても經典の引用と認識されている句である。

⁵ 望月 2015a: 140-141.

⁶ BMDP, D. 281b3-4 (43), 281b5-6 (25-27), 281b6-7 (29), 282a1 (2), 285a5-6 (50cd), 285a6 (51).

⁷ RKU, D. 96b7 (75), 97b4 (p.184), 97b5 (73), 98a5 (43), 98b2 (2), 100b6-7 (74-75), 111a4-5 (31), 113b1 (Nāgārjuna's works).

⁸ RKU, D. 106a2-3 (3), 111b3-4 (2, 4), 111b5-6 (3).

⁹ 密教聖典研究会 1988: 10-11; Tib. D. No. 2229, P. 3073.

¹⁰ 望月 2013c: 61-77.

この Nāgārjuna の二つの引用は、同じ著者の『中観説示開宝篋論』にも見ることができ、その先行関係は明らかではないものの、本論との関係を推測することができる。ただし、同論には本論の前半で論じられる方便と智慧の関係を論じる文章は見られず、その関係は Nāgārjuna の引用のみとなる。むしろ方便と智慧の関係が論じられるのは『菩提道灯論』とその自注においてであり、Jñānakīrti の『波羅蜜乘修習次第解説 (Pāramitāyānabhāvanākramopadeśa)』を引用して、方便は智慧の完成の前提と論じられている¹¹。

まとめ

以上のことから、次のようなことがわかる。

1. 『一念説示』は、方便と智慧の所作をテーマとする小論であり、経証として引用されるテキストは『聖善勇猛所般若経』と Nāgārjuna の論書である。
2. Nāgārjuna の論書は『菩提心積』と『悪見除滅論』であり、同じ引用を『中観説示開宝篋論』にも確認できる。
3. 『一念説示』がテンギェルにおいて大小の『中観説示』の前に配置されるのは、『中観説示開宝篋論』との関係に依るものと判断できる。
4. Dīpaṃkaraśrījñāna は Advayaavajra に帰される『悪見除滅論』を Nāgārjuna のテキストとして引用する。

『一念説示』和訳

インドの言葉で、*Ekasmṛtyupadeśa*

チベットの言葉で、『一念説示』

世尊である自在主に敬礼する。

一切智者に敬礼して、聖ナーガールジュナに礼拝してかアヴァドゥーティに [礼拝する]。速やかに入る解説を書く。

ここで菩薩は最初の心を起こしてから近くに捉えて、大灌頂を得ていない間は、その所作は二つで、智慧の所作と、方便の所作である。

そのうち智慧は、一切法は始めから生じないものであり、その最初から法界であるこ

¹¹ 望月 2015a: 123-125.

とを知ることである。その所作は、初学者がそれ自身から灌頂を得ていない間は、昼夜常時にそれ自身を修習するべきである。

方便は、衆生を捨てない菩提心である。その所作は、身口意の一切の所作で、衆生のためではないものは何もなく、直接的か相続によるかである。

これも、衆生を把握するものと把握しないものとの次第である。その次第は、こうである。賢くない者は眼翳をもち、賢い者は眼翳を浄化する。何時であれ法身を直接知覚した以後に智慧が存在し、知恵そのものになってから存続する。智慧の所作は存在せず、修習してから究竟をなすから。その方便の所作は所縁がなく、自らの内により自然に成立し、精進や努力なしに生じる。初学者の菩薩には、人我が存在するので、「衆生」と名付けられ、それにより苦しんでいる者に対する悲心が起こされる。それ故に、修習してからは、「衆生」と言うものは最初から存在しないが、突然に名称を設定しただけである。その他に「縁起の蘊と界と処のみとは別にここに何も存在しない」と考え、また「これらは自らの心のみに尽き、この他に何も存在しない」と考えるならば、それにより苦しんでいる者たちに対して悲心が生じる。何時であれ、仏地を把握しない境は存在しない。『聖善勇猛所問』に次のように、

仏世尊の知恵は何も見られない。それは何故か、と言え、知恵の対象がないからである¹²。

と説かれている。ではその時に、「知恵はあるのか」「ないのか」、と言うのならば、聖ナーガールジュナは承認しておられない。次のように、

心は、一切の仏は見ておらず、見ず、見ないであろう。無自性の自性をどのようなものが見るであろうか¹³。

と説かれており、相続の解説がこれである。それ故に、他者の利益に属さないその他の所作は何もなく、このように他者の利益は、望まれるべき利益の結果の最勝である。次のように聖ナーガールジュナは、

他者の利益の円満は結果の最勝と認められる。仏性などのそれ以外のものはそれ

¹² Cf. *Suvikrāntavikrāmipariṣṛchāsūtraprajñāpāramitāsūtra*. Hikata 1958: 7-8.

¹³ *Bodhicittavivaraṇa* 43.

らの利益の結果と認められる¹⁴。

とお説きになられている。真実性に入る解説も心にとどめるべきである。

ツルティム・ゲルワの請願により、ここにまとめてから説いたものである。詳しくはナーガールジュナの教誡と大乘の経典を見なさい。

『一念説示』パンディタであるディーパンカラシュリージュニャーナによる著作を完成する。

そのパンディタ自身と翻訳官のツルティム・ゲルワが翻訳した。

¹⁴ *Kudṛṣṭinirghātana* 3.

第 8 章 『入菩薩初学道説示』『行集灯論』

はじめに

チベット大蔵経のテンギユルの中観部に *Dīpaṃkaraśrījñāna* に帰される『入菩薩初学道説示 (*Bodhisattvādikarmikamārgāvatāradeśanā*)』というテキストがある¹。これは初発心の菩薩が行なうべき日課となる修行方法が記されている文献²であり、わずかに二葉よりなる散文で書かれたテキストである。彼がチベットに招かれ、その地でチベット人の僧侶たちに説いたテキストであることから、当時のインドの修行者たちの生活スタイルをどのようにチベットに伝えていたのかをこの文献から知ることができる。

本テキストには、同じ著者の『行集灯論 (*Caryāsaṃgrahapradīpa*)³』が言及されていることから、その著作年代は同論以降に著されたことが確定する。彼の伝記資料⁴によると、彼がインドを発ってからネパールのウルカの寺院に一ヶ月滞在している間に、「説教ではマントラと波羅蜜との両方が菩提に導くことを強調し⁵、そして『行集灯論』を著し、翻訳官と一緒に翻訳をした」と説かれている。このことから『入菩薩初学道説示』はこれ以後、おそらく彼がチベットの地に至ってから著されたことになる。また、その内容には『菩提道灯論』などの他のテキストとの平行句が多く見られることから、その説教の内容が固定してきてからの比較的后代に著されたものと思われる。

『入菩薩初学道説示』と『行集灯論』の内容

まず、『入菩薩初学道説示』の内容は、前述のように初学者が日々行なう修行の日課をまとめたものである。記述スタイルとしては、「さて (*'di na*)」から始まり、次のセクションには「それから (*de nas*)」の語で移項している。そこで説かれている内容をまとめると、次のようになる。

- 1 善知識となる師を求め、三宝に帰依し、大菩提に発心し、菩薩戒を受けるべきである。
- 2 資糧道にいる菩薩は、身口意の三業を意味のないものにしない。すなわち、食事

¹ Tib. C, Khi 3002b4-304b3; D1, No.3952, Khi 296a1-297b6; D2, No.4477, 20b7-22b4; P1, No.5349, Ki 344b1-346b4; P2, No.5390, Gi 26b1-28b6; G1, Ki 473a1-476a6; G2, Gi 27b1-30a1; N1, No.3340, Ki 339b7-342a3; N2, No.3381, Gi 22b2-24a7. また Negi 1992 には、同テキストのチベット語テキストと還元サンスクリットとヒンディー語訳が収められている。

² 類似する文献の報告としては、高橋 1992 1993 があるが、その内容は、ここで扱う文献とはあまり一致しない。

³ Tib. D. Nos.3960, 4466, P. Nos.5357, 5379.

⁴ Eimer 1979, 247, 1. Teil: 230.

⁵ *Caryāsaṃgrahapradīpa* の第一偈には、このことが述べられている。

の量を知り、感覚器官の門を制限し、微塵のような罪さえも恐れ、昼夜ヨーガに励むべきである。

- 3 夜後分に起床し、排泄行為をし、沐浴する。そして菩提心を起こして、三宝の前で手を合わせて、礼拝し、財物を供養する。
- 4 罪過の懺悔、善の随喜、法輪を廻すことの勧請、誓願、善根の菩提への回向をすべきである。
- 5 七種の供養を行なってから、三帰依の言葉を三度述べるべきである。
- 6 菩提心を起こすべきである。
- 7 自らの身体を与えることと仏の教えの道に住することを誓うべきである。
- 8 自分の座に足を組んで座り、Bodhibhadra が説いた三昧の九支分を知るべきであり、止観のヨーガを修習すべきである。
- 9 三昧から起き上がり、内外の事物を縁起の在り方で現れていることを知るべきである。
- 10 一切の衆生に法を説明するために、分別ある者が大乘經典を読誦することを勧請すべきである。
- 11 食事の時は、満腹のためや味に執着すべきではない。また、その食べ物は、(1) 三宝と師、(2) 自分自身、(3) 子供や孤独な者、(4) 動物とに四つに分けるべきである。
- 12 昼初分と夜後分に述べた通りのことをなすべきである。他の四分においても儀軌を完成すべきであり、資糧道と順解脱分の善根を起こそうと望む初学者は昼夜無意味に住しないで、師の解説により修行方法を知るべきである。

テキストに述べられた記述を並べただけであるが、それを簡単にまとめると、帰依→七種の供養→発菩提心→誓願→止観のヨーガ→大乘經典の読誦→食事という次第になる。前半の三宝に帰依し、菩提心を起こし、菩薩戒を受け、止観行を行うことは『菩提道灯論』の構成と同じであるが、後半の読誦や食事作法については、同論に見られないものである。このことは、『菩提道灯論』が悟りに向かうための道を示すことを目的として著された論書であるのに対し、本論は初学者が具体的に日々実践すべき行動をマニュアル化して示すことを目的としたものであるからであろう。それ故に、後半に読誦や食事作法なども付す必要があったのである。

食べ物を四分割することの説明箇所『行集灯論』が言及されていることからわかるように、本論はこの文献を参照して著されている。この二つの論書を比較してみると、さらにいくつかの平行句を見ることができる。本テキストに平行句が見られる『行集灯

論』の句をパーダの数字とともにあげると、次のようになる。

11 = 菩薩の律儀を守るべきである。

17-19 = 身口意の三 [業] により説明される律儀を過失なく、純粹に守るべきである。

21 = 食事の量を知るべきである。

22 = 諸感覚器官の門を守るべきである。

23-24 = 夜の初分と後分に寝ずにヨーガに励むべきである。

25-26 = 微塵なる過失にさえも恐怖を起こすべきである。

27-28 = 夜を三つに分割し、最後の部分において起きるべきである。

29-32 = 顔を洗っても洗わなくてもよく、快い座に座ってから諸法の法性を思い出すべきである。

34-35 = 起きあがって事物の顕現をすべて幻のように近くで観察する。

37 = 七支を完成させるべきである。

40-45 = それから食事の時に、「この心髄のない身体により聖なる心髄を求めるべきである」と言う。身体を船と違って、満腹のためには食わず、味覚に執着して食べるべきではない。

46-51 = 食事を四つの部分に分ける。すなわち、第一に天に食べ物をきれいに献上し、その次に法の守護者に食物の供養を広大に与え、自分が食べたり飲んだものの残りをすべての生き物に与える。

以上のように、『行集灯論』の全八十九パーダからなる小論の三割は重複する内容となっている。著作順は、『入菩薩初学道説示』が後であるために、『行集灯論』が前者をまとめたという訳ではないが、『入菩薩初学道説示』の著述には『行集灯論』が下敷きになっていたことがわかる。

まとめ

以上のように、『入菩薩初学道説示』には『行集灯論』との多くの類似する句が見られるが、それだけではなく、その他の『菩提道灯論』や『菩提道灯論細疏』などとの平行句も多く見いだせる。このことは、著者が本論を著すにあたり、先行する自身の著書において述べられている教義をここにおいても繰り返し述べたにすぎないであろう。ただし、そのタイトルが示すように、説かれる相手としてチベットの初学者を対象に著されたものである。

また、これらの論書を著す上で、文献上の根拠となりえたテキストとしては、Bodhibhadra の『三昧資糧品』の名称があげられているが、その他にも『声聞地』にその典拠を求めることができる内容もある。これらのことから著者は瑜伽行派の修行体系を背景において、これらの論書を著していたことがわかる。

『入菩薩初学道説示』和訳

インドの言葉で、*Bodhisattvādikarmikamārgāvatāradeśanā*

チベットの言葉で、『入菩薩初学道説示』

正しい師に帰依をする。

悪趣に輪廻することを克服し、明らかな高所に出離することを努力なさっている十方のすべての三宝と師の御足に敬礼をする。

さて、自性により大悲と大智をともなう大乘の種姓をもち、また過去の生において大乘を修習したことがある人で、輪廻に対する記憶を思い出して死を追想し⁶、内外の一切の存在に対する執着が少なく、「一人の正しい善知識に「大乘の転倒することのない道を聞けば、何が不相当であろうか、自身で正しい人を求めるべきである」と考えている者は、善知識として適した師を求め、他所で示したように、特別な三帰依と⁷、すべての有情を対象とした、善妙なる想をもつことで、無上なる大菩提に不共なる心を起こし、善妙なる意樂をもつことで、虚偽を離れて入る大菩提心により菩薩戒の三学処⁸をよく受けるべきである。

それから犬やアウト・カーストや奴隷の想をもち⁹、虚偽を離れたその菩薩は資糧道の者なので、昼夜、身口意のすべての所作を意味のないものにしないであろう。次のように、その心により食べ物の量を知るべきであり¹⁰、感覚器官の門を縛り¹¹、微細な罪

⁶ *Ratnakaraṇḍoghāta* (D. No. 3930, Ki 96b2) には、「無始以来の輪廻をともなう苦の記憶により胡麻粒さえの存在にも執着せず」という句が見られる。

⁷ *Ratnakaraṇḍoghāta* (D. No. 3930, Ki 99a6-b5) には、「帰依の特殊性とは、七つの相により特別に勝れている。すなわち、依るべき人の特殊性と、帰依処である三宝の特殊性と、時の特殊性と、想の特殊性と、行為の特殊性と、学ぶべきことの特殊性と、功德の特殊性とである」と説かれている（望月 1996a: 55-56）。より詳しくは、同じ著者の *Śaraṇagamanadeśanā* (D. Nos. 3953, 4478, P. Nos. 5350, 5391) に説かれている（望月 1990）。

⁸ *Bodhipathpradīpa* 131-132, *Bodhimargadīpapañjikā* (D. No. 3948, Khi 267a3-4), *Ratnakaraṇḍoghāta* (D. No. 3930, Ki 104b1-2) には、「戒の三学とは、律儀戒・撰善法戒・衆生利益戒である」と述べられている。Cf. *Bodhisattvabhūmi*, 荻原 1971: 138.

⁹ Cf. Dietz 1984: 312-313.

¹⁰ *Śrāvakaḥmūmi*, Shukla 1973: 10, 声聞地研究会 1998: 18-19, 117-149:

に対しても恐怖を見、昼夜ヨーガに励むべきである¹²。

それから入出の呼吸法¹³も、他のためになることを認める者は、夜の後分に起きて、大便と小便などの排出などの行道をよくしてから、中部や辺境の区別により沐浴し、すべての有情を把握して、四無量により菩提心を起こし、三宝の影像の前で列をうまく作り、花や、味香や、花卉をうまく投げてから、それらの前で両膝を地に着けてから掌を合わせて、十方の世界間の一切の仏と、すべての法と、大乘のサンガの前で、身体の莊嚴を無量で言葉にもできないほどに変化させて、それらそれぞれの御足に礼拝するべきである。それらに対する、無量で、広大で、計り知れない財物の供養¹⁴で歓喜すべきである。

それから、それぞれの身体に言葉にできないほどの頭を、それぞれの頭に言葉にできないほどの舌を変化させて、自他の罪を残らず懺悔すべきである¹⁵。自他の善を随喜すべきである。仏世尊が正等覺してからしばらくの間受けていない者たちは、法輪を廻すことを勧請すべきである。法輪を廻してから寿命という行を捨てた者たちに対して、輪廻している限り涅槃しないことを誓願すべきである。それらの一切の善根を無上正等覺に回向すべきである。経典に出ているように、それらそれぞれそれぞれをととても広い言葉で述べるべきである。

それから七つの供養¹⁶に随行するすべてのものを把握して、三帰依の言葉を三度の間述べるべきである。

それから、菩提心を起こすべきであり、儀軌に出ている通りになすべきである。

さらにまた、次のように、

bhajane mātrajñatā katamā / sa tathā samvṛtendriyaḥ pratisamkhyāyāhāram āharati na darpārthaṃ na madārthaṃ na maṇḍanārthaṃ na vibhūṣaṇārthaṃ yāvad evāsya kāyasya sthitaye yāpanāyai jighatsoparataye brahmacaryānugrahāya iti /

すなわち、放蕩のため・熱情のため・美容のため・装飾のために食べるのではなく、身の安住・資養のため・飢渴を除くため・梵行を利するためである。

¹¹ *Bodhisattvamaṇyāvalī* 6: dbang po'i sgo rnam s rtag tu bsrung //

Cf. Lobsang Dargay 1987: 11.

¹² CSP 24-27 には、「食事の量も知るべきである。感覚器官の門を縛り、夜の初分と後分に眠らずにヨーガに励むべきである」と述べられている。

¹³ Cf. *Abhidharmakośabhāṣya*, Pradan 1967: 339-341, 桜部、小谷 1999: 88-97. *Śrāvaka bhūmi* に説かれる「入出息」の呼吸法については、惠敏: 191-199 も参照のこと。

¹⁴ *Bodhimargadīpaṇjikā*, Tib. D. No. 3948, Khi 244a2-7. Cf. 望月 2015a: 46-48, 磯田 1989: 563-565.

¹⁵ *Bodhimargadīpaṇjikā*, Tib. D. No. 3948, Khi 244b1-2. Cf. 望月 2015a: 49-50. ここで懺悔と随喜と勧請と回向が述べられるのは、*Bodhimargadīpaṇjikā* と同様である。懺悔に関しては、望月 1999c: 138-142. も参照。

¹⁶ *Bodhipathpradīpa* 25-30 には、「完全なる仏像などと聖なる塔に向かってから、花や香や物といった何れかの価値ある供養をすべきである。『普賢行願讃』にお説きになされた七種の供養も [すべきである]』と説かれている。Cf. *Bodhimargadīpaṇjikā*, Tib. D. No. 3948, Khi 243a6-244a2, 望月 2015a: 45-46, 磯田 1989: 561-563. これによると、七種の供養に関しては、当時既に種々なる説が存在していたことがわかる。

仏と法と集まりの最高の者たちに、菩提にいる限り私は帰依をします。私が布施などをなしたこれらのことにより有情利益のために悟りを完成しなさい。

と三度述べるべきである¹⁷。

それから、自らの身体を与えることと、その後で大士の宗教であるその大乘の道にとどまることを誓うべきである。

それから、自分の座で結伽跏座し、師である尊者吉祥なるボーディバドラが著しになった『三昧資糧品¹⁸』に説かれた九支分¹⁹を知るべきであり、止と観のヨーガを修習すべきで、それと沈み込みと昂り²⁰などの過失となったものすべてを取り除いて、修習すべきである。

それから、目を開いて、息を吐き、内外のものを見たならば、「ああ、珍しい。ああ、珍しい。虚空のような生じることのないものから縁起の力により種々に現れ、存在するこれは、ああ、珍しい」と思い、幻の八つの例えの在り方²¹を知るべきである。

それから、大悲の想により顕われていない一切の衆生に法を説明するために、何らかの分別のある者が大乘経典を読誦するべきである。

それから、食事の所作のときに、三十六の不浄なる実体に満ちた心髄がなく最後に滅するこの身体²²で「仏の法身のその心髄を求めるべきである」と思って、満腹のためでなく、味に執着することもなく、船のような心で食べるべきである²³。食事の量も知るべきで、医方明のタントラである『八支心髄集²⁴』に、

¹⁷ この句は同じ著者の *Bodhimargadīpapañjikā* (望月 2005a: 71)、*Cittopādasamvaravidhikrama* (Tib. D. No. 3969, Gi 246a3) にも見られる。

¹⁸ *Bodhibhadra, Samādhisambhāraparivarta*. Tib. D. No. 3942, P. No. 5319.

¹⁹ Tib. No. 3924, Ki 80a3-4. それによると、(1) 捨てるべきもの、(2) 前行、(3) 退けるべきこと、(4) 苦悩を断じること、(5) 意を生じさせること、(6) 功德を記憶すること、(7) 精進すべきこと、(8) 結びつけること、(9) 住する方法である。

²⁰ Cf. ツルティム、小谷 1991: 183-185.

²¹ *Mahāyānasūtrālaṅkāra* 9.30. Cf. 長尾 1982: 369-373. 八喻とは、(1) 幻術、(2) 陽炎、(3) 夢、(4) 映像、(5) 光影、(6) こだま、(7) 水月、(8) 化作である。同じ著者の *Ratnakaraṅghāṭa* (D. No. 3930, Ki 97b2, 110a1)、*Mahāyānapathāsādhanaṣaṅgraha* (D. No. 3954, Khi 302b1) にも同様の句を見ることができる。

²² *Śrāvakabhūmi*, Shukla 1973: 202-203, 声聞地研究会 2007: 58-60. それによると、(1) 髪、(2) 毛、(3) 爪、(4) 歯、(5) 串皮、(6) 垢、(7) 皮、(8) 肉、(9) 骨、(10) 筋、(11) 血管、(12) 腎、(13) 心、(14) 肝、(15) 肺、(16) 小腸、(17) 直腸、(18) 胃、(19) 大腸、(20) 脾、(21) 大便、(22) 涙、(23) 汗、(24) 痰、(25) 洩、(26) 膏、(27) 黄水、(28) 髓、(29) 脂、(30) 胆汁、(31) 痰、(32) 膿、(33) 血、(34) 脳髄、(35) 脳膜、(36) 尿である。Cf. 恵敏前掲書, pp.134-140.

²³ *Caryāsaṅgrahapradīpa* 40-45 には、「それから食事の時に『心髄のないこの身体により心髄となる聖者を求めるべきである』と言い、身体を船と違って、満腹のために食わず、味覚に執着することにより食べない」と述べられている。

²⁴ *Vāgbhaṭa, Aṣṭāṅgharḍayasamhitā* 1.9.46cd-47ab (44cd-47ab), Das & Emmerick 1998: 26.

annena kukṣer dvāv aṁśau pānenaikam prapūrayet // 46

āśrayaṃ pavanādīnāṃ caturtham avāśeṣayet /

Negi 1992: 12 は、Tib. D. He 66a7 をあげる。

食事の三つの部分は食べることにより、第二の部分は飲むことによる。風などの場所に一つの部分を空にしておくべきである。

と解説されている。その食べ物を四つの部分に分けるべきで²⁵、最初の部分を三宝と師に布施するべきである。一つは自分自身が受用するべきである。一つの部分は子供と孤独な者たちに与えるべきである。一つの部分は犬と老いた鳥などの動物に与えるべきである。ある者たちが行をまとめたものは他所にも述べている。他の在り方は、『行集灯論』に説明した通りである²⁶。

それから、昼初分も夜後分にも、述べたとおりのすべてをなすべきである。夜中分と昼後分と夜初分と夜中分のすべての時²⁷に、述べた通りにすべての儀軌を完成させるべきである。そのように、「そのヨーガ行者には入睡や眠っている時を確定することはできない」と師たちが説いている。そのようなヨーガ行者で資糧道と順解脱分の善根を起すことを望む初学者で、昼夜、意味なく住しないその者には、罪過はどこに生じるであろうか。もし悪い習気の力により過犯が生じたならば、次のようにすぐに修復して、それも、次のように、それら六つの時間を十八の小さな部分に分けてから、五十四の刹那となる。菩薩も上中の九つになる。師の教誡により修行の方法を知るべきである。

聖者たちが解説する善妙なる道をチャンチュップ・ウーなどの弟子が請願した。大乘の種姓をもつ者たちが歩いた後に、両足尊の所に行きなさい。

尊者であり、師である菩薩に比丘チャンチュップ・ウーが請願し、比丘のツルティム・ゲルワが請願してから翻訳をした大乘仏教徒の行としなさい²⁸。

『入菩薩初学道説示』[という]、軌範師ディーパンカラシュリージュニャーナによる著作を完成する。

その賢者自身と翻訳官のツルティム・ゲルワが翻訳をした。

²⁵ Cf. *Ratnakaraṇḍoghāta*, D. No. 3930, Ki 97b4.

²⁶ *Caryāsaṃgrahapradīpa* 46-51 には、「食事を四つの部分に分けるべきである。すなわち、最初に天に食べ物をきれいに献上し、その次に法の守護者に食べ物の供養を広大に与え、自らが食べたり飲んだりしたものの残りをすべての生き物に与える」と述べられており、ここに述べられているものと若干の違いがある。

²⁷ Cf. 声聞地研究会 1998: 150-151.

²⁸ この部分は *Chattopadhyaya* 1967: 454 に英訳されている。

『行集灯論』 和訳

インドの言葉で、*Caryāsaṃgrahapradīpa*

チベットの言葉で、『行集灯論』

世間主に帰依をする。

何れかのお声の光により、我などの障害を残さず、心髄の蓮華を開いているその最高の聖なる人に敬礼する。[1-4]

「真言乗〔乗〕と波羅蜜〔乗〕に依存してから菩提を完成した」と師である仏がお説きになられているので、その意味を私が著すべきである。[4-8]

この真言乗〔乗〕の部分は述べられず、波羅蜜〔乗〕の在り方の行である菩薩行の經典だけを私が解説すべきである。[9-12]

発心を先に行なった者は、菩薩の律義を受け、すべての經典をあまねく見て、すべての論書を聞くべきである。[13-16]

身口意の三つにより解説されるとおりの律儀を過失なく純粹に護るべきで、戒を清浄にするべきである。[17-20]

食事の量も知るべきである。諸根の門も縛り、夜の初分と後分に寝ずにヨーガに励むべきである。[21-24]

微塵なる過失さえもとても恐れるべきである。夜を三つの部分に分割し、最後の部分において起きるべきである。[25-28]

顔などは洗っても、洗わなくてもよく、快い座布団に座ってから諸法の法性を思い出すべきである。[29-32]

相により動くことができないのならば、起きあがり、事物の顕現をすべて幻のように近くで観察する。[33-35]

その場合も、善を修習し、七支を完成させるべきである。誓願を広大に増やし、また以前の修習を修習すべきである。[36-39]

それから食事の時に、「この心髄のない身体により聖なる心髄を求めるべきである」と言う。身体を船と違って、満腹のためには食わず、味覚に執着して食べるべきではない。[40-45]

食事を四つの部分に分ける。すなわち、第一に天に食べ物をきれいに献上し、その次に法の守護者に食物の供養を広大に与え、自分が食べたり飲んだものの残りをすべての生き物に与える。[46-51]

その場合にも、寓話の伝承と、希有なる話もなすべきである。それから起き上がって、少し中断し、また塔のまわりをまわるべきである。[52-55]

[経を] 唱え、読み、また善逝の肖像を作るべきである。微塵も生じない限りは、[法輪を] 廻すことが動かされずになされることに対して広大な誓願をなす。[56-60]

まとめると、尊者マイトレヤにより説明された十の法行である。記憶は全く動くことなく、幻のように念により行われる。[61-64]

もし存在するのならば、サンガに供養し、また童子の宴会を行い、保護者のない者たちに施をなすことは、ヨーガの福德を集めることになる。[65-68]

昼間になすべきことを完全にし、夜の部分は、最初に法性と戯論を離し、智も戯論と離しておく。[70-72]

夜の真ん中に至ったとき、所有しているものや現れたものの想により、ちょうど獅子が眠るような善なる眠りは戻される。[73-76]

まとめると、禅定の心が堅固であるならば、身と口の善は中断しない。また、禅定が明らかでなければ、世間に従がうべきであるから、身と口の善にいかなる効果があるか。[77-81]

世間の心に従わないのならば、「これは自分の法ではない」と言い、善良なる心を以前に捨てており、世間の慣習を問うべきである。[82-85]

ネパールの地において、私の友人が熱心に願ってから著した。マントラの在り方を望まなければ、このようになし、敬われる。[86-89]

『行集灯論』という聖者で偉大な賢者のディーパンカラシュリージュニャーナによる著作を完成する。

インドの賢者でパンディタであるディーパンカラシュリージュニャーナ自身と、翻訳官のツルティム・ゲルワが翻訳し、編集した。

第9章 『帰依説示』

はじめに

仏教徒がその修行を始める際に、最初に行うべき所作の一つが三宝帰依である。この自らが仏弟子であることを自覚する儀軌は、『普賢行願讃』の七種供養の項目にも含まれている。Dīpaṃkaraśrījñāna も、『菩提道灯論』においてこの七種供養を解説した後に、「最初に帰依を三度なすべきである」と説かれている¹。彼の小部文献には、この帰依の意味を解説した『帰依説示 (Śaraṇagamanadeśanā)』がある。本章では、彼がこの帰依の所作をどのように解説していたのかを考察する。

『帰依説示』の構成

本論では、帰依の意味を十五種に分類して解説が行われている。テキストの冒頭に、次のような偈が述べられている。

ここに、帰依を解説する。まとめると、(1) 所依と、(2) 処と、(3) 想と、(4) 時と、(5) 本質と、(6) 行動の法則と、(7) 理趣と、(8) 学処と、(9) 語源解釈と、(10) 行為と、(11) 喩例と、(12) 区別と、(13) 過失と、(14) 目的と、(15) 功德とであって、十五を説く。

これと同じ記述を『菩提道灯論細疏』にも見ることができる。すなわち、

帰依の意味をまとめて説く。(1) 処と、(2) 所依と、(3) 想と、(4) 時と、(5) 学処と、(6) 本質と、(7) 行動の法則と、(8) 理趣と、(9) 行為と、(10) 区別と、(11) 語源解釈と、(12) 喩例と、(13) 過失と、(14) 目的と、(15) 功德とである²

と述べられている。本論に示されるものと順序は若干異なるものの、その内容は一致している。これだけでは、どちらが先に著わされたのか、という先後関係を決定することはできないが、注釈は、補足説明として十五種に訳していることから、すでにこの概念が設立しており、本論が先に著された、と考えることができる³。

¹ 望月 1988.

² 望月 2015a: 54.

³ Eimer1978: 177 は、本書が *Bodhimārgadīpapañjikā* に引用された、とする。

『帰依説示』の依拠した文献

次に、本書を著わす上で著者が依拠した文献について考えてみる。最初に、『俱舎論』における「帰依」の解釈を参照していたことは確かである。そこでは、仏教徒としての絶対必要条件としての「三宝帰依」が示されている。それはどのようになかという、

仏に帰依するところの者は、 仏を成ずる諸の無学法に帰依するのである…僧に
帰依するところの者は、僧を成ずる諸の学と無学の法に帰依する…法に帰依する者
は、すなわち択滅である涅槃に帰依する⁴。

と述べられている。ここに述べられている三宝は、並列的なものではなく、「仏」と「僧」との上部構造に「法」をおいたものであり、その「法」は、涅槃に変換可能なものとなっている。この『俱舎論』に述べられた三宝の説明を著者は「小乗の説」として引用している。大乘と小乗を区別することは、大乘の優位性を強調するため、と考えられることから、彼は『俱舎論』を引用するものの、あくまでも「小乗の著書」と認識していたことになる。ただし、後の『ウダーナヴァルガ (*Udānavarga*)』の引用は、同論からの孫引きと考えられるので、十分にその内容に熟知していたことは明らかである。

大乘の文献については、Maitreya の『大乘莊嚴經論』第二章「帰依品」との関係を考えてみる必要がある。同論では「帰依」に関してまとめて論じられており、Dīpaṃkaraśrījñāna は、『菩提道灯論細疏』において同論を数度引用しているからである。その第二章の第一偈と第二偈は、次のように述べられている。

最上の乗において、実に、[三] 宝の帰依におもむく、その人ことは諸の帰依におもむいたもののうち、最高のものである、と知るべきである⁵。

衆生のためになるものを持する大義が成立したので、最上の乗、ここにおいて、最上の帰依の義がある⁶。

ここにおいて、最上の乗である大乘としての帰依を強調することにより、本書は始まっている。大乘を強調することは、小乗に対する優位性を示すためであり、その区別を明

⁴ Skt. Pradan 1967: 216, Tib. P. Gu 212a4-2, Chin. 76b24-c15. Cf. 舟橋 1987: 180-181.

⁵ Skt. Lévi 1907: 8, 舟橋 1985: 17, Tib. P. No. 5521, Phi 3a3-b1, No. 5527, Phi 141b2-3, Chin. T. No. 1604: 593a6. Cf. Lévi 1911: 19, 宇井 1961: 61.

⁶ Skt. Lévi 1907: 9, 舟橋 1985: 17, Tib. P. No. 5521, Phi 3b1-2, No. 5527, Phi 141b6, Chin. T. No. 1604: 593a15. Cf. Lévi 1911: 19, 宇井 1961: 62.

確にするためである。このことは、Dīpaṃkaraśrījñāna が、帰依について大乘と小乗との区別を強調していることと同質である。

次に、第四偈に対する注釈部分には、次のように述べられる。

ここに、三種の特殊性として認められるものの区別を示す。願の特殊性は、次のように、真実たる仏に帰依することが最初に求められる。その功德の特殊性を知ることにより、多くの歓喜があるが故に。修習の特殊性は、次のように、すべての仏と平等なものとなることである⁷。

この部分の「願と修習と逮得」の功德の特殊性は、『帰依説示』の「原因と過程と結果」の功德にトレース可能である。

さらに、第七偈、第八偈に関して考察してみる。まず第七偈の前文の注釈において、

また、そのよき生まれの人は、仏の後裔を断絶させない項に、別の偈により示す⁸。

として偈を述べている。そこでは、四つの原因により王家の後裔が断絶しないという喩例により、仏種が断絶しないことを示している。また第八偈の前文には、

また、そのよき特殊性は、大臣のように、別の偈により示す⁹。

と述べ、王に対する大臣の功德の喩例により、菩薩の功德を示している。この以上の二つの偈の部分に、『帰依説示』の「喩例」がトレースできよう。そこでは、喩例として、王と大臣との臣民の従属関係が示されており、この場合の喩例と同じ内容を示している。

以上の三つの点に関してだけでは、Dīpaṃkaraśrījñāna が『大乘莊嚴經論』に依拠していたという積極的証拠とはなりえない。ただし、彼がその他の自著において同論に依拠していること、この三つの類似からも、彼が『帰依説示』を著わす上で、『大乘莊嚴經論』を参考にして、十五項のいくつかを設定していたと考えることができる。

まとめ

⁷ Tib. No. 5527, Phi 142a5-7, Chin. T. No. 1604: 593b3-7. Cf. Lévi 1911: 20, 宇井 1961: 63.

⁸ Tib. No. 5527, Phi 142b8-143a1, Chin. T. No. 1604: 593b23-24. Cf. Lévi 1911: 21, 宇井 1961: 65.

⁹ Tib. No. 5527, Phi 143a5, Chin. T. No. 1604: 593c4-5. Cf. Lévi 1911: 22, 宇井 1961: 66.

以上の考察から、次のことがわかる。Dīpaṃkaraśrījñāna は、帰依の意味を十五項目にまとめた上で、本書を著している。その典拠としては、『大乘莊嚴經論』の第二章「帰依品」に基づいている。また、帰依処を大乘と小乗に区別しており、小乗に関しては『俱舍論』を典拠としている。帰依に関する先行文献としては、Candrakīrti の『帰依七十論』を参照している。これらの論書を典拠に本論が著されていることがわかる。

また、『菩提道灯論細疏』において本論は引用されているので、その著述時期は同論に先行すると考えられる。したがって、彼の帰依に対する見解をまとめたものが本論であり、自らの論書においても帰依に関する文脈で言及されている。

『帰依説示』和訳

インドの言葉では、*Śaraṇagamanadeśanā*

チベットの言葉では、『帰依説示』

三宝に敬礼する。

三悪趣と五趣の苦を残りなくお除きになり、天上と涅槃との樂を与えてくださる、そのお方に敬礼をする。

0 帰依の概略

ここに、帰依を解説する。まとめると、(1) 所依と、(2) 処と、(3) 想と、(4) 時と、(5) 性質と、(6) 行動の法則と、(7) 理趣と、(8) 学処と、(9) 語源解釈と、(10) 行為と、(11) 喩例と、(12) 区別と、(13) 過失と、(14) 目的と、(15) 功德とであって、十五を説く¹⁰。

1 所依

そのうち、[帰依の] 所依たる人は、二つである。大乘の種をもつ者と、小乗の種をもつ者とである。

2 帰依処

[帰依] 処は、二種である。大乘と小乗の区別に依る。

2.1 大乘の処

そのうち、大乘の説によると、三宝は次の通りであって、(1) 眞実たる三宝と、(2) 現觀の三宝と、(3) 現前にある三宝とである¹¹。

¹⁰ *Bodhimārgadīpapañjikā*, D. Khi 247a4-7, P. Ki 284b6-7.

¹¹ *Bodhipathapradīpa* 25-26 では、帰依処として現前三宝を示しており、*Bodhimārgadīpapañjikā* (D. Khi

2.1.1 真実たる三宝

それも、次の通りに、所知を誤りなく理解し、無分別たる不二智を [もち]、法界にとどまる [人] と、清浄法界たる智慧の完成に至ることと、入定している時に一切法を虚空のように知る菩薩の大地にとどまる人と、

2.1.2 現観の三宝

また、次の通りに、二種の色身と、四諦、菩提分の三十七法、[十] 地、[六] 波羅蜜などの教えの相続を保持するものと、修行の過程の菩薩と、

2.1.3 現前にある三宝

また、以下の通り、肖像と彫像と鑄像と壁像などと、九部経よりなる経巻と經典などと、資糧の過程の菩薩とである。

2.2 小乗の処

小乗の説は

三 [宝] に帰依する者は、仏と僧とを成ずる法の無学と [学の] 両方と、涅槃に帰依する¹²。

とある。

3 想

そのうち、想については、大乘の者は、一切の衆生のために想うことである。一つ (小乗) は、自分だけのために想うことである。

4 時

そのうち、時については、大乘の者は菩提座の間であり、一つ (小乗) は生きている限り誓願することである。

5 自性

そのうち、自性は、漸愧をもつことと、表示されないものを生じることである。

6 行動の法則について

そのうち、行動の法則は、是認と、救護と、表示しうるものを示すことである。

7 理越

そのうち、理越は、帰依の儀軌であって、師に尋ねるべきである。

8 学処について

243a6, P. Ki 280a4)では、真実の三宝と現前三宝に言及する。

¹² *Abhidharmakośa* V.32. Skt. Pradhan 1967: 216, Tib. P. No. 5591, Gu 212a3-4, T. p. 76b22-23. Cf. Poussin 1971: 76, 舟橋館 1987: 180.

そのうち、学処は、共通なものと共通でないものであって、師の口から知られるであろう。

9 語源解釈

そのうち、語源解釈は、臣民たるもの、あるいはその他の主人たるものを求めているものが、救護を求めて行くことである。

10 行為

そのうち、行為は、菩提心の大樹が生じる根本となること、解脱の大城市的の門に入ること、断食などのすべての律儀の拠り所となることである。

11 喩例

そのうち、喩例は、王や大臣や臣民は、その命令に逆らわないで、何らかのものにより喜ばされる如きである。

12 区別

そのうち、区別は、共通なものと、共通ではないものとを区別することである。

13 過失

そのうち、過失は二種である。帰依処を壊すことと、知らないことである。捨てたり、破壊したりすることは、チャンドラキールティが、

所依の最高のものを領受してから、もう一度低いものに依るのならば、悪しきものをもつ場所にとどまっているので、それは最高のものが笑うだろう¹³。

と説かれており、実際に示されている。

14 目的

そのうち、目的は、世尊が、次のように、

恐怖に怖れている人たちは、多くの山や林や園林や供養処たる大樹に帰依する。その帰依は尊くなく、その帰依は最高のものではない。その帰依によりすべての苦から解放されることはない。

どんな時であれ、誰もが、仏と法と僧に帰依すれば、苦と苦を生起させるものと苦の超克と涅槃に趣く八正道との四聖諦を知により見る。

その帰依は尊く、その帰依は最高のものとなり。その帰依によりすべての苦から解放されるであろう¹⁴。

¹³ *Triśaranasaptati* 36. Sorensen 1986: 36~37. Cf. 小川 1975: 213~216.

¹⁴ *Udānavarga* 27.31-35 (Tib. 29-33, = *Dhammapada* 188-192). Bernhard 1965: 348-350, Dietz 1990: 282-283.

と説かれている。帰依の目的は、以上の如くである。

15 功德について

そのうち、功德は、三つである¹⁵。原因の時の功德と、過程の時の功德と、結果の時の功德である。

15.1 原因の時の功德

原因の時については、この世と他の世とである。

15.1.1 この世の功德

この世の功德は、八大恐怖から解放させることと、無間断であることと、教えに対して喜ぶ天たちが保護をする助力をなすことと、死ぬ時に歓喜すること、などである。

15.1.2 他の世の功德

他の世の功德のものは、輪廻の苦と悪趣の苦から導くことをなすことと、涅槃と天上の樂を与えることである。

15.2 過程の功德

過程の功德とは、四諦と八正道と七菩提分などを修習することである。

15.3 結果の功德

結果の功德は、二つの涅槃と、三身の獲得である。

16 結び

これらは略されたものであり、詳細は師から聞くべきである。

『帰依説示』という、師ディーパンカラシュリージュニャーナ菩薩による著書を完成する。

Udānavarga と *Dhammapada* の比較に関しては、水野 1981: 162-165 に示されている。また、本頌は、*Abhidharmakośabhāṣya* の「業品」第三十二偈の直後に引用されている。Cf. Pradhan 1967: 217, Tib. P. No. 5591, Gu 213a1-5, Chin. T. No. 1558: 76c20-29, Poussin 1971: 80, 舟橋 1987: 182-183. なお、本偈は『阿毘達磨大毘婆沙論』(Chin. T. No. 1545: 177a4-13), *Abhidharmadīpa* (Jaini 1977: 127, 三友 2007: 431-432)などにも引用されており、それなりに知られていた偈であったと考えられる。しかし、ここでは、前述の *Abhidharmakośa* の本偈とともに *Abhidharmakośabhāṣya* からの孫引と考えられる。

¹⁵ 三種の功德に関しては、*Bodhimārgadīpapañjikā* (P. ki 286b1-2, D. Khi 284b4)にも述べられている。Cf. *Mahāyānasutrālamkārahāṣya* 2.4 の注釈部分 (Tib. P. No. 5527, Phi 142a5-7, Chin. T. 1604: 593b3-7, Lévi 1911: 20, 宇井 1961: 63-64.

第10章 『大乘道成就語句撰集』『大乘道成就撰集』

はじめに

チベット大蔵經のテンギュルの「中観部」には、Dīpaṃkaraśrījñāna に帰される二つの『大乘道成就撰集』が存在する。一つが『大乘道成就語句撰集 (Mahāyānapathasādhanavarṇasamgraha¹)』であり、もう一つが『大乘道成就撰集 (Mahāyānapathasādhanasamgraha²)』である。これらのテキストは、同じ著者の多くの小部文献と同じように偈頌のスタイルで書かれており、また著者自身がチベット人とともにサンスクリットからチベット語に翻訳したとされている³。前者には「語句(varṇa; yiger)」という語が付されているものの、ほぼ同一タイトルである。しかしながらその分量に関しては、前者が三百四十六パーダ⁴から成るのに対し、後者は三十八パーダであり、前者の十分の一の長さである。本章では、この二つのテキスト⁵の関係とそこに述べられている内容について考察する。

『大乘道成就撰集』の内容概観

最初に、この二つのテキストの内容を簡略に概観する。短い方のテキストが長い方のテキストを凝縮したのか、或いは短い方のテキストを大きなテキストに増広したのかは、現時点で判断できないが、いずれの場合であっても、『大乘道成就撰集』のエッセンスのみを残したものが短い方のテキストに見られると推定していいであろう。そこで、まず短い方の『大乘道成就撰集』の内容をパーダごとにまとめると次のようになる。

1-4 帰敬偈

5-8 目的

9-11 三帰依、戒律

¹ Tib.: *Theg pa chen po'i lam gyi sgrub thabs yi ger bsdus pa*. Tr. Dīpaṃkaraśrījñāna, dGe ba'i blo gros. C. Khi 306a2-309b5; D1. No. 3954, Khi 299a5-302b6; D2. No. 4479, 24a3-27b4; G1. Ki 480b1-486a2; G2 Gi 31b5-36a6; N1. Ki 343b7-348a3; N2. Gi 25b6-29a6; P1. No. 5351, Ki 348a6-352a8; P2. No. 5392, Gi 30b4-35a1. また英訳として Dönuun Tulku 1983 がある。

² Tib.: *Theg pa chen po'i lam gyi sgrub thabs yi ger bsdus pa*. Tr. Dīpaṃkaraśrījñāna, dGe ba'i blo gros. C. Khi 309b5-310a5; D1. No. 3955, Khi 302b6-303a6; D2. No. 4480, 27b4-28a4; G1. Ki 487b1-488a4; G2 Gi 36b1-37a1; N1. Ki 348a4-b5; N2. Gi 29a6-b5; P1. No. 5352, Ki 352b1-353a1; P2. No. 5393, Gi 35a2-b2. またヒンディー語訳が、チベット語テキストとその還元梵文とともに、Negi 1992 に収録されている。

³ 両方のテキストのコロフォンからは、タイトルと著者と訳者の情報のみしか得られない。

⁴ この後に十三音節よりなる八パーダが付されているが、著者のことを「私の師」と言い、また著書のタイトルが入れられていることから、本偈ではないと判断する。

⁵ 同じ著者の二つのテキストをめぐる問題については、二つの『心髄撰集』に同じ事例を見ることができるとする。

- 12-17 菩薩乘、仏地
- 18-21 菩薩行
- 22-24 方便と智慧
- 25-30 修習
- 31-38 有情利益

このうち、『大乘道成就撰集』1-4 の内容は帰敬偈であり、また『大乘道成就語句撰集』が『大乘道成就撰集』5-8 と同じ句から始まっていることから、本論から除外してもいいであろう。また『大乘道成就撰集』31 には「この『大乘道成就撰集』を」という記述により本テキストの学習を勧めていることから、本論のテーマはこれ以前に終わっていると判断できる。従って、『大乘道成就撰集』の本論は 5-30 と考えられる⁶。以上のことから、『大乘道成就撰集』に説かれている内容を簡単にまとめると、無上菩提を成就するために、菩薩行を行い、方便と智慧とにより修習すべきである、ということになる。このような偈のみからどのような教義体系がここに説かれているのか、或いはどのような思想背景がそこにあるのかを明確に求めることも困難であるが、彼の『菩提道灯論』の内容をさらに簡単にしたとも言えないことはない。現時点では、詳細な情報は得られないので、明確な断言はできないが、大乘仏教の道を完成するとはどのようなことか、という問いに対して、それは菩薩行であると簡略に答えたようなものであろう。

では、『大乘道成就撰集』の十倍の長さである『大乘道成就語句撰集』は、上記の内容をどのように拡大したものであろうか。それを簡単にまとめると次のようになる。

- 1-24 目的
- 25-83 欲望、輪廻
- 84-106 帰依、戒律
- 107-140 菩提心
- 141-146 菩薩乘、仏地
- 147-277 菩薩行
- 278-309 方便と智慧
- 310-336 止観
- 337-342 階位
- 343-346 著者のまとめ

⁶ ただし、*Mahāyānapathasādhanasamgraha* 1-4, 31-38 が著者自身によるのか、編集者によるものかは、ここでは判断できない。

全体の流れとしては、まず無上菩提を成就することが目的として説かれている。続いて、その成就を損なう原因として、欲望への執着と、それにより引き起こされる輪廻が説かれている。その否定的要素を取り除くための「大乘への道」が続き、最初に帰依をなし、戒律を守ること⁷が説かれている。続いて、大乘の法門に入るために最初に菩提心を起こし、仏地を得るためのさまざまな菩薩行が説かれている。その具体的項目としては、六波羅蜜、不放逸、憶念、正智、如意、四念処などである。これらの概念は、同じ著者の他の文献においても頻繁に見られるものである。これらをまとめたものが方便と智慧とされ、この二つの心髓が止と観のヨーガとされている⁸。この止と観を学ぶことで、四決択分や十地などの悟りへの階位が順序に従って獲得され、それにより利他が自然になされるとする。また、『大乘道成就語句撰集』319には著者の師とされる Bodhibhadra の『三昧資糧論』が言及されている。彼は、止と観を学ぶためのテキストとして同論に依拠すべきであることを述べている⁹。

これらの二つのテキストの概要から、『大乘道成就撰集』の内容をまとめてみる。その根本主題は、『大乘道成就語句撰集』に説かれている、無上菩提を成就するために菩薩行を行うべきであり、そのためには方便と智慧が不可欠である、というものになる。そのように菩薩行を成就すれば、利他行が自然と行われるということになる。すなわち、大乘道とは菩薩行であり、それにより利他行が完成することが本論の主題である。

二つのテキストの異同

続いて、二つのテキストの重複箇所を指摘する。短い方のテキストの偈頌を中心に見てみると、

『大乘道成就撰集』5-8 = 『大乘道成就語句撰集』1-4

『大乘道成就撰集』12-17 = 『大乘道成就語句撰集』141-146

『大乘道成就撰集』18-21 = 『大乘道成就語句撰集』148-152

『大乘道成就撰集』25-27 = 『大乘道成就語句撰集』323-325

『大乘道成就撰集』28-30 = 『大乘道成就語句撰集』340-342

⁷ 「発菩提心」の前に「戒律」が説かれている点は、同じ著者の『菩提道灯論』とは異なっている。

⁸ 『菩提道灯論』では、止と観の後に方便と智慧の不離性が説かれている。

⁹ このことは、やはり『菩提道灯論』とその自注においても述べられている。

となる。

まず、『大乘道成就撰集』12-21が『大乘道成就語句撰集』141-146, 148-151となっている点について検討する。すなわち、『大乘道成就語句撰集』147の「帰依と残りの戒と¹⁰⁾」が『大乘道成就撰集』において削除されたのか、或いは『大乘道成就語句撰集』において挿入されたのかという可能性についてである。ここで後者では欠けている『大乘道成就撰集』9-11を見てみると、

それにより三〔宝〕に帰依し、一切の不善より退くことで、残りの戒を浄化することを守るべきである¹¹⁾。

とあり、『大乘道成就語句撰集』147とほぼ同じ内容である。このことから、『大乘道成就撰集』9-21と『大乘道成就語句撰集』141-151は同じ偈頌であり、チベット語訳での編集の際に訳語とパーダの順番の相違が生じた可能性がある。

続いて、『大乘道成就語句撰集』に欠けている『大乘道成就撰集』22-24について検討してみる¹²⁾。ここに説かれている内容は「方便と智慧」であり、「止と観」に対する喩例を述べている『大乘道成就語句撰集』323-342の直前に説かれているものである。『大乘道成就語句撰集』278-309の内容をまとめたものが『大乘道成就撰集』22-24であるとすることもできる。ただし『大乘道成就撰集』22-24は、

それが収められた方便と智慧とを、無住处涅槃のために学ぶべきであり、その心髄は二種である¹³⁾。

というものであり、「無住处涅槃」という『大乘道成就語句撰集』には見られない句も出ていることから、『大乘道成就語句撰集』323-342の内容を三パーダにまとめたというよりは、「方便と智慧」に関する偈を新たに加えた、という印象を与えるものである。

Tson kha pa の『ラムリム・チェンモ』における引用

『大乘道成就撰集』は、後にラムリム思想を大成した Tsong kha pa の著書『ラムリ

¹⁰⁾ Tib.: skyabs 'gro lhag pa'i tshul khriims dang /

¹¹⁾ Tib.: de yis gsum la skyabs 'gro zhing // mi dge kun las ldog pa yis // lhag pa'i tshul khriims dag par bsrung //

¹²⁾ *Mahāyānapathasādhanaśaṅgraha* 1-4, 31-38 については、前述のように本論から排除して考えることも可能であるので、ここでは検討しない。

¹³⁾ Tib.: de bsdus thabs dang shes rab la // mi gnas mya ngan 'das phyir bslab // de yi snying po rnam pa gnyis //

ム・チェンモ』に複数回引用されている¹⁴。まず、三種のブドガラに関するセクションにおいて、

そのような道の設定の身体は『[菩提] 道灯論』に説かれており、道次第によってもそのように導く。他の著書でも偉大な尊師は説かれている。すなわち『大乘道成就撰集』に¹⁵

と述べて『大乘道成就語句撰集』1-8, 72-79, 147-152, 310-311 が引用される。さらに発菩提心のセクションにおいて、

生起すればそれで良いが、生起しなければそのままにせず、そのことを教えてくれる師に常に仕えて、そのように心を訓練する友と常に交わり、そのことを教える聖教と論とを閲覧し、その原因となる資糧を集め、それを妨げる障害を清め、自らそのように心を訓練するのである。その時に必ずや種が蒔かれるから、この[菩提心の修習という]行いは決して些細なことではなく、正しく喜ぶべきことなのである。尊者は¹⁶、

と述べられ、『大乘道成就語句撰集』107-110 が引用される。また、続く儀軌により菩提心を把握するあり方の箇所においても、『大乘道成就語句撰集』113-117 が引用される。

さらに学処としての四摂事を述べるセクションにおいて、同じ著者の『心髄撰集』64-67 を引用した後、

禅定の本質である止と般若波羅蜜を本質とする観を等至においても修習し、最初の三つの波羅蜜と禅定と智慧のある部分は後得においても保持される。精進は等し至と後得の両者にも至るが、忍の一方である甚深なる法を確実に思うことは等至でも生じる。尊者が¹⁷、

¹⁴ 望月 2005c: 195-208.

¹⁵ *Byang chub lam rim che ba bzhugs so*, Tibetan Cultural Printing Dharamsala 1991, pp. 94-95. ツルティム、藤仲 2005b: 158.

¹⁶ ツルティム、小谷 1991: 74-75, ツルティム、藤仲 2014: 44-45, ツルティム 2001a: 35.

¹⁷ *Byang chub lam rim che ba bzhugs so*, Tibetan Cultural Printing Dharamsala 1991: 466. ツルティム、藤仲 2014: 181.

と述べて『大乘道成就語句撰集』329-336 が引用される。これは禪定の際には止と観が同分であることを述べた偈である。

これらの引用から、次のことが確認できる。まず、Tson kha pa は『大乘道成就語句撰集』を *Dīpaṃkaraśrījñāna* 自身のテキストと認識しており、『菩提道灯論』を補足するものとして引用している。また最初の引用では、テキスト名を *Theg chen gyi lam gyi sgrub thabs bsdu pa* としている。すなわち『大乘道成就語句撰集』の *yi ger* が欠落しており、『大乘道成就撰集』のタイトルで『大乘道成就語句撰集』の偈を引用したことになる¹⁸。このことは、彼が二つの『大乘道成就撰集』の違いを意識していなかったのか、或いは『大乘道成就撰集』の方を知らなかった（或いは無視した）という可能性を導く。まず前者の場合は、彼が『大乘道成就撰集』よりも大きなテキストの『大乘道成就語句撰集』を優先して用いていたということになる。後者の場合も、彼が『大乘道成就撰集』として認識していたテキストは『大乘道成就語句撰集』と言うことになる。

まとめ

以上のことから、ここに説かれている菩薩行・方便と智慧・止観という項目は、同じ著者の『菩提道灯論』などの著書にも見られるものであり、同一著者の著書に説かれている項目として一貫したものである。しかしながら、このような項目は彼に先行する Śāntideva や Kamalaśīla などの著書にも述べられており、本論から彼独自の思想を抽出することはできない。従って、『大乘道成就撰集』の二つは、あくまでもチベット人に対して大乘の道を簡略に説明しただけのテキストである。

続いて、この二つのテキストの関係をまとめてみる。両者は、ほぼ同一内容を説くものであることから、全く異なるテキストとして存在するものではない。おそらく同種のテーマで説いた内容が、二つのテキストとして存在したのであろう。前述の『大乘道成就撰集』と『大乘道成就語句撰集』の間に平行句が見られることから、チベット語に訳される以前に、それぞれのサンスクリットで説かれたテキストが存在していた可能性がある。また、平行句の翻訳に相違が見られることから、同一人物¹⁹により異なる時期に翻訳されたものであるように思える。これはあくまでも筆者の推測でしかないが、最初に『大乘道成就語句撰集』の方がサンスクリットで説かれ、チベット語に翻訳された。この内容を記憶しており、他所でこの内容を簡略にした『大乘道成就撰集』が説かれ、翻訳されたのではないだろうか。

最後に、本テキストが、*Dīpaṃkaraśrījñāna* のその他のテキスト同様に、チベット語

¹⁸ ただし、*Mahāyānapathasādhanaśāstra* のタイトルでは *shin tu* も欠けている。

¹⁹ 訳者は、著者自身と *dGe ba'i blo gros* である。

に翻訳される以前にサンスクリットで筆記された文献として存在していたのであろうか。この問題については、筆者は懐疑的である。今回のテキストの検討からは、むしろチベット語訳以前にサンスクリットのテキストが存在したことが明らかになったが、そのテキストのチベット語訳が筆記されたものに基づいているのか、あるいは同時通訳のような形で行われたのかについては検討の余地がある。

『大乘道成就語句撰集』和訳

インドの言葉で、*Mahāyānapathasādhanavarṇasamgraha*

チベットの言葉で、『大乘道成就語句撰集』

仏と菩薩とすべてに敬礼する。

大いなる不可思議がある無上菩提を得ようとするのならば、菩提を成就させた者に依存することで成就を領受することを心髄とするべきである。[1-4]

完全な円満なる身体はとても得難く、後にもとても得難いものであるので、成就を努めることにより意味があることとなる。[5-8]

仏が生じることと比丘と人身を得ることは得難いことであり、善知識にも会い難いので、意味のないことを行うべきではない、とお説きになられている。[9-12]

風の中の灯火のようにこの時に存在しているという確信がないので、頭や身体で火が燃えているように成就をすぐに努めることを始めるべきである。[13-16]

出世間と世間のすべての円満も成就の力から生じたものであると知り、成就を第一になす知恵のある者は、ここや他所で楽しんでおり、いかなる賢者が疑いを抱くであろうか。それ故に、知恵のある者は成就を心髄となすべき、と知っている。[17-24]

欲望の根本に執着することの原因により成就の行道を損なう人は、出世間と世間の一切の円満からとても離れてしまっている。[25-29]

輪廻の牢獄の中で悲惨な目に会い、種々なる煩惱の縄に縛られることで苦痛な目に会い、輪廻の無量の苦により真実の相続を楽しまないであろう。[30-34]

それ故に、知恵のある者は欲望の根本に執着することを捨てている。何故ならば、法の成就を第一になすべきで、欲望への執着は離れるべきであるから。[35-38]

無量なる欲望の過失について教義にでているものを考察したならば、常に正しい在り方の意をなすべきである。[39-41]

取るにたらない多くの過ちを、毒のある飲み物のようなものとして見るべきである。非法が苦の原因となるので、草の火のようなものとして知るべきである。[42-45]

「欲望が満たされることなく、喉の渇きの渴愛が増大して塩水を飲んでしまうようなものである」とムニの根本聖典に出ている。[46-49]

多くの害がある欲望は木の最上部の実や道端の木の実と同じで、童子らが何度も欲望の根本に執着することで腐り始め、多くの欲望の過失が成立する。[50-55]

彼は、いかなるものも存在しない、と知るべきである。彼の行為は苦を起し、無始の時からも欲望に執着することで、常に輪廻している。[56-59]

欲望の大河の流れの力により輪廻の輪を廻し、それにより無量の過失が生じている。輪廻の過失の辺際により、過去の辺際から現在、未来の辺際まで苦しんでいたし、苦しんでおり、またこれからも苦しむであろう。[60-65]

その為に常に修習すべきであり、牢獄のような輪廻における囚人のように疲れた者も修習すべきである。例えば、囚人は監獄の多くの苦しみを領受するというそのことを憶えていることで、悲痛な心が常に本質的に生じる。[66-71]

例えば、囚人は牢獄から逃げる可能性が生じたときに、それ以外の重要なことと比べることなくその場所から逃げ出すように。[72-75]

この輪廻の大海から出る可能性が生じたのなら、それ以外の重要なことと比べることなく存在という家から出るべきである。[76-79]

自らと他者との輪廻の苦しみを終わりにするためにも、知恵のある者は欲望を火のようにすぐに捨てる。法を成就することを第一になすべきことを知らない、とでもいうのか。[80-83]

成就を望む人は、大地のように法性を根本としているので、最初に帰依をよく行い、その学ぶべき法を学び、六念処を常に修習すべきである。[84-88]

仏の功德の辺際を成就する者は記憶すべきで、それへの信を堅固にするべきで、一切法の根本を信じるべきである。[89-92]

草の先端にある露の滴のように、長いこととどまらないこの時のために、賢者は罪過を犯さなくても、その結果である悪趣の苦は生じる。[93-96]

十善戒を清浄にし、別解脱の律儀も能力の次第により浄化することを守るべきである。それは一切の聖なる宝の原因であり、多く聞くことが宝となるので、それを具すべきである。[97-101]

戒の宝を損なうように多聞の宝を損なった人は再び後悔することは必然である。自分に対する我慢を引き裂き、説法者に対しても尊敬すべきである。[102-106]

大乘の法門に入ることを望む者は、闇を取り除き、欲望を寂滅する。日月のような菩提心は、劫にわたる努力により生じることもできる。最初にそれを起し、修養することで、メール山のように堅固にするべきである。[107-112]

それを起こし修養しようとする望むことで慈愛などの四梵住を励む者は、長いこと修習したので、執着や嫉妬は捨てられ、正しい儀軌をなすことにより〔菩提心は〕生じる。

[113-117]

不放逸の法を損なった者は、一切法を損なう。その法をヨーガにおいて行うべきである。[118-120]

一人子を両親が守り、目が不自由な人が片方の目を守り、旅人が案内人と大きな薬木の実を〔守る〕ように、不放逸の法によりその心を守る。[121-125]

その心が菩提の根本である、と説かれており、菩薩行の輪はすべて菩提心の力から生じたのである。[126-129]

その最高の心を備えていない者は、施から智慧に至る六つの行を学んでも、依所を離れたものであるから、彼岸という名称もない。[130-134]

声聞の六匹の犀のように、一切の福德の集まりである三昧の心を起こさなければ、四禪と四無色の三昧を何度得たとしても、存在の海より出ることはできない。[135-140]

菩提心の乗り物に依ってから、死を記憶する鞭を何度も打ち、存在の道への恐怖の大地であるこの道をすぐに通るべきであり、恐怖のない仏地に至るべきである。

[141-146]

帰依と残りの戒と誓願の根本に住することにより、菩薩の律義をよく受け、六波羅蜜などの一切の菩薩行を能力に応じ正しく行うべきである。[147-152]

〔菩提に〕入る行を第一位に説いた經典を見るべきで、論書も同じく、法に満足しない湖の人はマニ宝の海のようなものである。[153-156]

功德があまねく生じる場所となる大乘の典拠から賞讃されるべき善知識に長く正しい在り方で依拠することは、大海に対する川のようなものである。[157-160]

その依処に対する功德を思い、彼は菩薩行に長けるであろう。大菩薩行への信を堅固にすべきである。[161-164]

不放逸と憶念と正智と如意によりあらゆる雑染を把握し、自心が流浪することから退く。[165-168]

仏法の対象に常に集中すべきである。そのように学んだ仏子は誰でも、その行を損なうことはないであろう。[169-172]

善知識の教えのように、始めのものをすべて大乘の典拠に同意して始めるべきで、論説の内部を法に向けるべきである。[173-176]

法に矛盾するものはいかなるものも捨てられ、法に従う行が行われる。知恵のある者は、すべての始まりにおいて、法を第一位になす吉祥なる人である。[177-180]

それを、ここや他所でも喜んでいる間は、疑惑がない。聞くことを少なくし、衆会を

拒絶し、辺境の静寂なところに住むべきである。[181-184]

その寂静と穏やかさが結びついたところで精進し始めるべきである。家はどこにも見られず、他者の過失を考察せずに、自らの過失を見るべきである。[185-188]

他の悲心を得ない言葉も、知者は久しく捨てるべきである。これらを備えた仏子は後時に損なわれず、楽しんで解脱する、とムニはお説きになられている。[189-193]

他者を軽蔑し、特に殺したり責めたりすることで自分を損なうであろう。あらゆるところで師の想いを浄化し、法門に入る者と仏子は特にその知恵を浄化すべきである。

[194-198]

出家者にとっての強い束縛が利得と名声とである。その根本への執着を捨てるべきである。その束縛から解放された者は、火の中の蓮華のように、知者を驚かせるものになるであろう。[199-204]

出家を成就した者は、一切の仏法が生じる原因である。聖なる四種姓にいる者は、少欲と知足を知るべきである。浄化の十二の功德をそれにより学ぶべきである、とムニはお説きになられている。[205-210]

家財を少なくして住み、一切の保持したものに背を向けて住すべきである。未知の場所にある村を歩き、鳥のような生活をすぐに求めるべきである。[211-215]

自心を浄化することに精を出すことが、素晴らしいムニの経典に説かれている。教化し難い心情となるものを捨ててから、名声など世間の法のために、昼夜のすべての時に論争を学ぶために論争を浄化し、聞いたものの解説などの法に入る。[216-222]

人生は無意味にすぐに過ぎて、最高の道よりそれを害するであろう。死が自分の近くに成立したとき、後悔してその相続を求めるであろう。世間の法に対して等しい心学ぶべきで、それにより子どもを誘惑する。[223-228]

世間のいかなる知者にも、自身の名前がなく、自身の身体の骨のかけらの極僅かさをも世間になくなる時が生じる。[229-233]

その時に利得や名誉や名声が存在せず、どうして恐怖があろうか。その時に知者は自分に何らかの寂静を考察したものを得る。[234-237]

初学者の人は、身体の寂静に依存せずに心の寂静を得難いので、混雑を離れた中に住すべきである。[238-241]

混雑に慣れ、執着をするそのことで、輪廻の輪を廻す。そのように混雑を捨て、常に不放逸をなすべきである。睡眠を楽しむことを捨て、一切法のために、そこに住することを彼は努力し始める。[242-247]

それにより一切法が完成し、四念処を修習し、四顛倒を捨て、話を喜んでも、意味を考えるべきである。[248-251]

砂糖きびも木の皮には甘い汁は何もなく、喜ばれる味は中にある。皮を食べる人は砂糖きびの味のおいしさを得ることができない。[252-255]

その砂糖きびのようにここに説いたので、味のようにこれの意味を考えるのである。それ故に、非論理的な説は捨て、常に不放逸により意味を考えなさい。[256-259]

虚空の周囲の衆生のために、鎧を身に付けていることを知りなさい。ある者のために成就の行を損なうべきではない。[260-263]

衆会と利得と名声と友を望む思いを起こしてから話を喜ぶ心が生じたならば、成就の障害となる魔はその自分の心であると知りなさい。[264-268]

朋友などにも、愛惜を求める需要を少なくするべきである。需要の門から損なわれ、法にも多くの障害が生じる。[269-272]

行為を喜ぶことを捨て、教化し難い衆生を教化することを喜んで行うべきである。戯論を喜ぶことを捨て、忍に穏和になることで自分を飾り、忍の大きさは無量である。[273-277]

利得と名声などの六法を過失と見るべきである。無量なる菩薩行もまとめれば、方便と智慧との二つである。[278-281]

方便と智慧との父母により仏子は生まれる。善逝が子を求めるので、方便と智慧が父母である。成就がこの二つを結びつけるべきである。[282-286]

成就がこの二つを離してしまったならば、仏子が生まれることはありえない。男性と女性がそれぞれ単独には存在しないように。何故ならば、分離を縛ることが説かれているから。[287-291]

一切の法の根本に正しく説かれた願望を常に修習すべきであり、上弦の月のように成就の知恵を常に増やすべきである。力をもつものとなすべきである。[292-296]

成就の知恵が広がれば、湿気のある山頂の草木のように、成就が広がることに疑いはない。成就の知恵による力があれば、行の重荷を長い間負っても疲れたり、弱ったりしない。[297-302]

十種の法行などの資糧を集めた一切の門より、二資糧を集めたものに精を出すべきである。学んでいるときに、その大きなものに依存して一切の法が生じ、衆生利益に力を持ち、身体と智慧に結果が生じる。[303-309]

方便と智慧の心髄である止と観のヨーガが修習され、出世間と世間の一切の法はその二つの結果と説かれている。[310-313]

神通力をもつべきで、無漏の道を起こすために最初に止を起こすべきである。止の資糧が損なわれていれば、長い間努力しても成就しないであろう。[314-318]

『三昧資糧品』をよく学ぶべきであり、三昧の一切の害を捨てるべきである。相応す

る対象を捨てる八行とともに求めるので、擦られる木のように執着という湿気を離れることで常に連続して修習すべきである。[319-325]

煩悩という敵を征服するために止に依ってから観を修習すべきである。観が成就することで、禅定から立ち上がったときに、幻の八喩のように一切の法を見ることが修習されるので、続く理解を浄化し、方便を第一に学ぶべきである。[326-333]

禅定の時に止と観は同分で、それを連続して常に修習するべきである。[334-336]

そのように正しく学んだ力で煖などの四決択分を得てから十地の智慧を順次起こす。それにより速やかに彼は悟り、宝の如く利他を自然になすであろう。[337-342]

まとめすぎてしまえば理解できないだろうし、広げすぎれば大きな書物になってしまう。知者がよく考察すれば、理解できる量として私は教授する。[343-346]

私の師には多くの功德があり、大海と同じである。世間の法を見ず、利他のための成就を心髄と把握している。世間の無明により盲目となった智慧の目を開く力が多くあることにより、教誡の意味と経典と論書から解説されたものを学ばなければならない、と言う。[347-350]

他者に利益が生じることがある、と思い、文字で著す。信と智慧という宝をもつ成就を心髄としようと望む者に、この『大乘道成就語句撰集』に対する信解があるならば、この通りになすべきで、自他の利益になるであろう。[351-354]

『大乘道成就語句撰集』偉大な軌範師ディーパンカラシュリージュニャーナが著したものを完成する。

インドの賢者自身と翻訳官で比丘のゲウエ・ロドゥが翻訳、校訂し、編集した。

『大乘道成就撰集』和訳

インドの言葉で、*Mahāyānapathasādhanasamgraha*

チベットの言葉で、『大乘道成就撰集』

仏と菩薩とすべてに敬礼する。

過去と現在の一切の善逝を産みだした父母となった成就法を敬い、口と意を清浄にして敬礼する。[1-4]

大いなる不可思議がある無上菩提を得ようとするのならば、菩提を成就させた者に依存することで成就を領受することを心髄にするべきである。[5-8]

それにより三 [宝] に帰依し、一切の不善より退くことで、残りの戒を浄化すること

を守るべきである。[9-11]

菩提心の乗り物に依ってから、死を記憶する鞭を何度も打ち、存在の道への恐怖の大地であるこの道をすぐに通らざるべきであり、恐怖のない仏地に至るべきである。

[12-17]

誓願の根本に住することにより、菩薩の律義をよく受け、六波羅蜜などの一切の菩薩行を能力に応じ正しく行うべきである。[18-21]

それが収められた方便と智慧とを、無住処涅槃のために学ぶべきであり、その心髄は二種である。[22-24]

火を求めるので、擦られる木のように執着という湿気を離れることで常に連続して修習すべきである。[25-27]

それにより速やかに彼は悟り、宝の如く利他を自然になすであろう。[28-30]

この『大乘〔道〕成就撰集』を、縁があるもの達は良く学ぶべきである。心に甘露の滴が現れ、師が浄化されたことにより、慧により触ることは難しい。[31-34]

この集められた善により、一切の有情は大乘を成立させるものを領受しなさい。自分自身も、仏地を得た後に有情を導くことをしなさい。[35-38]

『大乘道成就撰集』偉大な軌範師ディーパンカラシュリージュニャーナが著したものを完成する。

インドの賢者であるパンディタ自身と翻訳官で比丘のゲウエ・ロドゥが翻訳、校訂し、編集した。

第 11 章 『自作次第勸誡語句撰集』『上師所作次第』

はじめに

チベット大蔵經のテンギユルの「中観部」には、Dīpaṃkaraśrījñāna に帰される二つの「所作次第」が収められている。すなわち、『自作次第勸誡語句撰集 (*Saṃcodanasahitasvakṛtyakramavarṇasamgraha¹)』と『上師所作次第 (Gurukriyākrama²)』であるが、これらの二つのテキストに相互の関連性はない。それぞれのテキストのチベット語訳のタイトルに「なすべきことの次第」という語が付されているだけであり、誰が何をなすべきなのか、ということによりこれらの論書が説かれるべき対象も、その説かれるべき内容も異なるものになる。また、いずれもが、真言乗の所作タントラとも関連はない。これらの全く関係のない二つの論書を所作次第というタームでまとめただけであるが、そこで説かれている内容については、類似点も見ることができる。

『自作次第勸誡語句撰集』について

本論は、九十五パーダからなる偈頌で著された小論である。タイトル部分には相応するサンスクリット名は付されておらず、その著作経緯に関する情報もコロフォンに記されていない。冒頭には、原本の表紙に記されていたであろうチベット語の「自らがなすべきことの次第を促すことをともなうことを文字として書いた³」という句があるのみである。実際の著作として認識されていた上で翻訳された文献というよりも、Dīpaṃkaraśrījñāna の口述による講義をチベット語で通訳したものが筆記されたものである可能性がある⁴。

その著作目的は、タイトルに「所作次第を促す」と示されているように、実際の修行項目を教示するものではなく、修行を促す言葉をまとめることである。具体的な項目をまとめると、次のようになる。

¹ Dīpaṃkaraśrījñāna, Tshul khriṃs rgyal ba 訳. C. Khi 310a5-311a6, D1. No. 3956, Khi 303a6-304a6, D2. No. 4481, 28a4-29a3, G1. Ki 488a4-489b5, G2. Gi 37a1-38a4, N1. No. 3344, Ki 348b5-350a1, N2. No. 3385, Gi 29b5-30b5, P1. No. 5353, Ki 353a1-354a3, P2. No. 5394, Gi 35b3-36b5. Cf. Sherburne 2000: 466-471.

² C. Gi 267b2-278a3, D1. No. 3977, Gi 256b2-257a4, D2. No. 4489, 39b2-40a4, G1. Khi 395a6-396a5, G2. Gi 53a1-54a5, N1. No. No. 3365, Khi 302a5-303a4, N2. No. No. 3393, Gi 41b3-42a6, P1. No. 5374, Khi 302a5-303a4, P2. No. 5400, Gi 49a5-50a1. Cf. Sherburne 2000: 532-535.

³ Sherburne 2000 は、“Encouragement in One’s Daily Practice” と訳している。「所作次第と勸誡」と読む可能性もあり、その場合は、1-60 が所作次第で、61-95 は勸誡ということにな、後半部分を前半の総論と捉えるのではなく、前半と並列関係と捉える、ということになる。

⁴ 彼のその他の著書の多くが筆者自身により翻訳されていることを考えると、その翻訳は後日行われたというよりも、著述と同時に考えられる。その著述も、小部文献であるが故に、筆記ではなく口述の可能性もある。

- 1 煩悩と苦が生じる時を憶えておくこと [1-6]
- 2 内心を制御して外敵を制圧すること [7-12]
- 3 敵を制圧するために努力をすること [13-22]
- 4 心の対象は、煩悩と無記と善とで、煩悩に大中小があること [23-30]
- 5 善が生じた福德を廻向して、資糧を広げること [31-45]
- 6 善心を広げ明らかな悟りを獲得すること [46-51]
- 7 死を憶えて、菩提を成就させること [52-60]

最初に、修行の動機付けとして、輪廻の原因である煩悩とその結果である苦を記憶することが述べられる。その煩悩は心の対象となるものであり、それを取り除くことが内心の制御となる。そのために、心の対象である煩悩の対治である資糧を努力して善を起こし、その善心により悟りが獲得されることになる。また、「死を憶えておくこと」とは生死を繰り返す輪廻の苦を認識することで、その認識が今生での悟りの獲得の動機付けとなるのである。すなわち、修行の目的は悟りの獲得であるのだが、そのための修行を促すために、輪廻の苦を認識することが説かれているのである。

著書の後半には喩例が列挙されており、それをまとめると次のようになる。

- 1 凡夫が火や崖を恐れないように、無知なる者は悪趣を恐れない [61-64]
- 2 病人が食事をも求めないように、愚者は方便の区別を求めない [65-70]
- 3 食を求める人が食べ続けるように、愚者は罪過を行ってしまう [71-76]
- 4 雄弁な人は、話に必要なことを成就させるように、善を勧める [77-80]

これらの喩例により、愚者のようにならずに、悪趣を認識し、悟りへの方便を求め、罪過をなさず、善業をなして悟りに向かうことが述べられている。

テキストの末尾では、さまざまなタイプの人々が列挙される。

- 1 心に意味を成立させない者 [81-82]
- 2 凡夫の行をもつ者 [83-85]
- 3 適切なものと適切ではないものを行う者 [86-87]
- 4 何れかの縁のままになる者 [88-89]
- 5 自身は清浄でも助伴により煩悩が生じる者 [90-91]
- 6 正しい助伴により善業を請願する者 [92-94]
- 7 善を促すことを必要としない者 [95]

これらは、そのようにならないことを示すための否定的な人を述べているものの、最後の二項目はそうあるべき人を示している。特に、最後のタイプの人、ここで述べられている教え自体を必要としない者となる。前半では、そのようになるべきではない人を示し、後半では目標となるべき人を示すことで、菩薩行を促している。

以上のように、本論は修行を促すための言葉をまとめたものであるが、そこで述べられる内容は、実際の菩薩行と重なっている。それ故に、その内容は同じ著者の菩薩行を説く著書と異なるものにはなっていない。説かれる目的は異なるものの、それを説く対象は菩薩行を行う者であり、そこで説かれる教義は著者に一貫したものとなっている。

『師所作次第』について

本論は、散文で書かれた小論であり、その著作経緯に関する情報はコロフォンには記されていない。内容に関しては、師が弟子に対してなすべき行為が、「それから」の語で順次並べられている。項目を簡単にまとめると、次のようになる。

- 1 弟子に信を起こさせること
- 2 供養と賞讃をなすこと
- 3 七種供養と二種の菩提心を伝えること
- 4 菩薩行の内容を説くこと
- 5 誓願を述べさせること

そのタイトルには軌範師が弟子に対して行うべき行為とあるが、実際の内容は、弟子が行うべき行為をまとめたものである。それ故に、師はなすべき行為とは、弟子が正しい修行次第を伝えることであり、その伝えるべき概要がここに説かれている。ただし、伝えるべき所作を実践させるためには、師と弟子の信頼関係が必要となるので、最初に弟子に対して師に対する信を起こさせることが述べられている。それ故に、冒頭に、

最初に、正しい認識根拠である軌範師が弟子に対して信と信頼と浄信を起こさせ、それから菩提心の功德を述べて、広げること起こすべきである。

と、自らに対する信頼を起こさせることが述べられている。

その後の伝えるべき内容は、仏への供養と賞讃、並びに七種供養という儀軌に続いて、菩提心を起こして菩薩行を行うべきである、というものであり、彼の他の著書に述べら

れている教義と同じものである。

また、末尾には本論の趣旨が次のようにまとめられている。

これは、軌範師が説くべき行為の次第である。弟子も、理趣が説かれた通りに学ぶべきである。これは、大乘の発心の特徴と、学処を説いた理趣の道の次第を大略のみ説いたものである。詳細は、他のものから知るべきである。

すなわち、説かれている内容は、彼の他の著書に説かれる菩薩行を簡略にまとめたものであるものの、説かれた対象はそれを修行すべき者ではなく、その修行を伝えるべき軌範師となっている。これが、具体的に誰に対して行われたものなのかは明らかではないが、チベットにおいて軌範師たる者たちに、そのあるべき姿勢を伝えるために著された著書となる。

まとめ

以上、Dīpaṃkaraśrījñāna の小部文献に収録される二つの所作文献について考察を行った。『自作次第勸誡語句撰集』は、自らがなすべき所作を促すために著された小論である。しかしながら、菩薩行を志す者に対して、彼らが日々の修行でなすべき行為の次第を説いたものであるために、実際に本論で説かれている内容は菩薩行であり、菩薩行を説く他の著書にも見られるものと類似する教義が説かれている。また、その菩薩行を促すために、そうであってはならない姿勢とそうであるべき姿勢が示されている。

それに対して、『上師所作次第』は、説かれる対象が異なり、師となるべき人である。その構成は、その師が伝えるべき教義としての菩薩行が説かれている、という二重構造になっている。それ故に、そこで実際に説かれている教えは、同じ著者の他論書に説かれている教義と類似するものとなっている。

これらの二論は、同一著者によるものであるから、その内容が類似するのは、当然のことである。では、その類似は著者の同一性によるものなのか、或は、時代的な同一性なのだろうか。いずれもが一般的な教義であるために、これらの項目が彼独自の教えなのかを確認する必要がある。もちろん、それが先行文献に基づくものなのか、共時的なものか、ということも含めてさらに考察する必要がある。

『自作次第勸誡語句撰集』和訳

『自作次第勸誡語句撰集』

仏と菩薩のすべてに敬礼する。

無始の輪廻より無量の煩惱と習気により悪い領域の縁と結合してから、煩惱と苦が生じる時に、自らの記憶のためにこれをなす者がその時を記憶しておきなさい。[1-6]

内心が調伏されたならば、この外敵は損なうことができない。自分の内心が動くならば、この外敵が縁となってからこの内なる敵が自らの相続を燃やす。[7-11]

それ故に、この内敵を制圧するべきである。毒をもつ器が食べ物を破壊するように、内なる垢が善の資糧を破壊する。対治の水で洗ってから、清浄になることで、大楽を得る。[12-16]

どんな場所であれ、どんな時に、何れかの垢が生じ、この内なる敵が生じる時に、種々なる方便を説くことで捨てて、敵を制圧し、垢を洗い落とすために、その時に大きな努力をするべきである。[17-22]

自分のこの相続から内を見て、自分の心を考察する者は、その時に境から知が生じる。知が生じる境は三種で、煩惱と中程と善とに生じる。因縁と境の区別により、煩惱が生じるものに三つある。大と中と小である。[23-30]

対治の次第は、その通りであり、大が生じるその境に依って大きな資糧が努力により起こされる。中の境には中であり、小には小である。[31-35]

すべての大が生じれば最高であり、中は無記でも、憶念により尽きたその心による動機に従って善に変わる。種々なる方便の門によるのである。[36-40]

善の大中小が本性から生じるその境に、前行と本行と結行より特別に優れた福德をすべて廻向すべきである。知れば、どこにおいても資糧が広がるであろう。[41-45]

無始の時より、自分が三時に執着するので輪廻する。生死が続く限り、業が浪費される。善心が広がる限り、仏が明らかな仏になる。[46-51]

自分が無知の闇により覆われており、暗闇に閃光が現れただけでどうにかして憶念を獲得した時、その時に努力により成就すべきである。[52-55]

死を確実に憶えており、存続する力を与えることもないが、「私は、しばらく死なない」と言う記憶を捨てて、菩提を成就しなさい。他者も成就させなさい。[56-60]

例えば、凡夫には、無明により火や崖などに対する恐怖がない。そのように、無知な有情たちは、悪趣に対しても恐怖はない。[61-64]

例えば、最高の味の食事を病人に与えた時、食事を拒絶し、求めないように、これらの方便の区別を煩惱をもつ患者に説いても、それと同じことである。[65-70]

例えば、食事を喜ぶ人は、食べたものが無くなり、集めた功德を憶えていても、欲により損なわれずに食べるように、前後の因果を憶えていても、煩惱に執着する力を憶え

ており、不善なる種々なる罪過を行っている。[71-76]

例えば、雄弁な人が、「話すことに必要なことすべてを成就させえる」と言い、他の憶念を起こした時、「そのように善をなす必要がある」と言う。ある者は、口出しをして、心に意味を成立させることをなさない。[77-82]

ある者は、結果の大義を捨ててから小さななすべきことを成就させ、さらに凡夫の行をもつ。ある者は、想が風のように動き、適切なことと、適切ではないことの両方をなす。[83-87]

ある者は、白い色のように、何れかの縁をともなってそのようになる。ある者は、自分自身の本質により清浄でも、助伴による扇動で煩惱が生じる。[88-91]

ある者は、縁がなく、原因をもつ助伴もより把握されたならば、罪過を捨てて、善をなすことを請願する。ある者は、善を勧めることを必要としない。[92-95]

『自作次第勸誡語句撰集』と言う軌範師で偉大な賢者ディーパンカラシュリージュニャーナによる著作を完成する。

インドの偉大な賢者自身と、シュチェンの翻訳官である比丘のゲウエロドゥが翻訳し、校正し、決定した。

『上師所作次第』和訳

インドの言葉で、*Gurukriyākrama*

チベットの言葉で、『上師所作次第』

仏と菩薩に敬礼する。

最初に、正しい認識根拠である軌範師が、有学に対して信と信頼と求める信を起こして、それから菩提心の利益を述べることに對して歡喜を起こすべきである。それから特別な住居で特別な供養の資糧は位置し、優れたサンガを招いて、敬礼し、足を洗い、座を提供し、有上と無上の供養の資糧によりうまく供養し、供養の雲のマントラも三度述べるべきである。

賞讃をなすことで善逝の特別な功德を導く門から尊敬による賞讃し、それぞれを拡大する言葉も述べるべきである。

それから、懺悔と、隨喜と、勸請、請願と、廻向などをなすべきである。それから信をもつ弟子は軌範師に敬礼し、請願などにより菩提心の二相をうまく起こし、それらの本質と区別と特殊性も述べるべきである。

それから、菩提の行である六波羅蜜と、四摂事と、四無量などの特徴と、因果と、学処の次第と、害と無害の過失と功德と、理趣のままに学ぶことなども詳しく説かれるべきである。

さらにまた、「不放逸と、正智と、憶念により尽くすべきである」ということを学ぶべきである。それらの特徴と、次第と、害と無害の過失と功德なども学ぶべきである。

それらの行為に対して激しい精進を起こし、何も考えず、苦の領受に耐え、散乱のない禅定と、智慧の無自性を知るべきである。「三学処か三智に等至し、行道の理趣により学ぶべきである」と説かれている。

最後に、「誓願により完成させなさい」と述べるべきである。

これは、軌範師により説かれた業の次第である。有学も理趣が説かれた通りに、学ぶべきである。特徴である大乘の発心と学処を説いた理趣の道の次第を大略のみ説いたのである。詳細は、他のものから知るべきである。

『上師所作次第』の概略で、軌範師である偉大な賢者ディーパンカラシュリージュニャーナによる著作を完成する。

第12章 『経義集説示』

はじめに

Dīpaṅkaraśrījñāna の小部文献は、思想的な問題を深く論じるというようなものではなく、一般的な仏教概念を多くの者に知らせようという意図で著わされたものである。本章では、その中の一つである『経義集説示 (Sūtrārthasamuccayopadeśa)』について考察する。

本論は、彼のその他の著書と同じようにチベット語訳しか現存せず、デルゲ版などでもわずか二葉の短いものである。翻訳者は著者自身と著者との多くの共訳があるツルティム・ゲルワである。彼には、類似したタイトルである『経集撰義』という Nāgārjuna の『経集』に対する注釈書もあるが、本論とは異なる内容の文献である。すなわち、本論は『経集』とは関係がなく、字義通りに經典に説かれる教義の意味をまとめて概説したものである。

五十の教えとその喩例

本論の著作目的は、帰敬偈に述べられるように、諸々の經典に説かれている生じがたい教えの意味を説示することであり、それらが諸菩薩の宝のような法である經典に説かれている教義として五十項目にまとめられている。その内容も、各教義に対してそれぞれの喩例を添えただけのものであり、教義の内容に関する解説はほとんどなく、その典拠が示されているものは極僅かである。それ故に、筆者には喩例が經典のどの部分から引いてきたものが明らかであるのかもしれないが、典拠が示されていないために、その喩例が具体的にいかなる經典を示しているのか、を理解することは容易ではない。まず、これらの五十項目をその喩例とともに示しておく。教えには「」を付し、続いてその喩例を示す。

- 1 「菩提心」 生命
- 2 「空性と悲心」 父母
- 3 「死と学ぶべきことと業により集められたものを数えること」 妻
- 4 「十善」 住居
- 5 「聖者の七宝と少欲と知足」 宝石
- 6 「加行は三界でも想は涅槃であり、施を与えても異熟を望まず、不生を知っていても異熟を排除せず、無我を知っていても大悲を起こすこと」 友人
- 7 「信と聞と捨と忍」 根
- 8 「戒」 国土

- 9 「十波羅蜜」 親族
- 10 「六念」 軌範師
- 11 「『迦葉品』の菩提心を忘れない四法」 教師
- 12 「『集学論』の十四の害に対立するもの」 商主
- 13 「四無量」 姉妹
- 14 「四摂事」 奴隷
- 15 「我慢を打ち壊すこと」 庶民
- 16 「想と意樂を清浄にすること」 眼
- 17 「善知識」 乳母
- 18 「三宝」 王
- 19 「三輪清浄」 水の混ざった肥料
- 20 「念と正知と如理心と不放逸と四顛倒の対治に依存すること」 樵
- 21 「衆生を捨てず、援助すること」 皮膚
- 22 「信と戒と捨と聞と慧」 飾り
- 23 「事物に執着すること」 病苦
- 24 「在家の者が『いつ梵行をするだろう』と思うことと、出家の者が『いつ衆生を救うことができるであろう』と思うこと」 輕蔑
- 25 「在家の者が国土を捨てないことと、出家の者が偽善を捨てないこと」 怠惰
- 26 「如理の心をもつこと」 よい性格
- 27 「他者の過ちや迷乱、自らの功德を述べず、他者を責めないこと」 吃り
- 28 「他者の迷乱を見ないこと」 盲者
- 29 「正法が滅する時に法を保つこと」 窃盜を捕まえること
- 30 「よく言われ、年齢の割に活発であり、交際を喜び、育てやすく、満たしやすく、足りていることと知っていること」 童子
- 31 「菩薩の意義と多くのなされたことと心より大きなもの」 使者
- 32 「誓願を堅固にすること」 大臣
- 33 「衆生を嫌悪せず、親切にすること」 賢者
- 34 「昼夜三度師に仕え、福德の資糧を集め、律を育てること」 弟子
- 35 「衆生が仏教徒となってから自らが成仏することを望むこと」 歓迎して受け入れること
- 36 「自身が仏教徒となった後に利他をなすこと」 盲人の杖
- 37 「行道と戒と生活と儀軌と見解が完全であること」 第一位の者
- 38 「すべての行道を他者に廻すこと」 望みをもっている人
- 39 「大中觀の対象に常に住すること」 暗闇
- 40 「誤った見解を生じさせること」 死刑執行人
- 41 「放逸と不敬」 盜賊
- 42 「無恥と放逸」 敵者
- 43 「念と正知がないこと」 患者
- 44 「四つの黒くなるもの」 酔った者
- 45 「学ぶべきことの在り方を知らないこと」 家畜

- 46 「大悲をはなれた行道をもつこと」 屠殺者
- 47 「別解脱の律を捨てること」 なされたことに対する恩を返さないこと
- 48 「善巧方便を離れること」 孤児
- 49 「なすべきこととなすべきでないことを知らないこと」 狂乱者
- 50 「障碍となるものを知らないこと」 魔によりとらわれた者

五十項目の特徴

この五十項目について、いくつか特徴的なものを取り上げてみる。最初に、「菩提心」があげられており、著者にとって重要な教義と理解されていたことがわかる。同じ著者の『中観説示開宝論』や『菩提道灯論』においても、まず、発菩提心が菩薩道に入る最初の段階において大切なものとして詳細に論じられている。ここでは、さらに菩提心の譬えである生命について補足して『俱舍論』の「界品」からの偈頌が引用されている。ただし、それは命根を解説するものであり、菩提心と結びつくものではない。

第二項では、「空性と悲心」が取り上げられ、菩薩は空性と悲心から生じるので、父母とされている。菩提心をそなえた者が、最初に理解すべき概念として、正しい智慧により「一切の存在は自性を欠いていること」という空性と、それを菩薩道において実践する利他心としての悲心が述べられている。このことは、第六項においても繰り返されており、一切法を無我と認識した上で、大悲により衆生利益を行うことが述べられている。

第十一項に説かれる『迦葉品』の四法とは、他者が後悔しないのに後悔すること、先生と軌範師と供養すべき人をそそのかすこと、衆生に対して偽りや幻や受容以上の志によらないことと、発心の者に対して恥ずべき言葉で話すこととである。この四法は、同じ著書の『中観説示開宝論』や『菩提道灯論』においても、言及されてるものであり、著書の菩提心論において重要な典拠の一つである。

第十二項における Śāntideva の『集菩薩学論』の十四の害に対する言及は、同じ『中観説示開宝論』にも見られるものである。そこでは『虚空蔵経』などに説かれる十八の根本罪と並んで言及されているものの、本論では具体的な経典には言及していない。

第二十三項から、第二十五項は、その喩例として「病苦」、「嫌悪」、「怠惰」と否定的な内容が述べられている。最初の内外の事物に対する執着は、苦の原因としての病苦に例えられている。後の二つは、いずれもが在家の者と出家の者による否定されるべき行為を述べたものである。

第二十七、二十八項では、吃音者と盲者が喩例にあげられているが、いずれもがネガティブなものとして述べられているのではなく、他者の過ちなどを述べず、見ないこと

の喩例として述べられたものである。これについては、同じ著者の『菩薩摩訶薩論』に、

自らの過失を明らかにするべきで、他者の迷乱を望むべきではない。他者の功德を明らかにするべきで、自らの功德を隠すべきである。

と述べたものに対応するものである。

第三十項では、童子が喩例としてあげられているが、童子の特徴が列挙されているだけであり、それが經典の教義とどのように関係があるのかについては、何も述べられていない。これに続く、使者、大臣、賢者、弟子の喩例では、それぞれ教義が添えられている。

第三十九項では、「暗闇のようなものは、大中觀の意味に常に存在する」とある。暗闇が具体的に何を示すのか、あるいはそれが大中觀においてどのような意味のものなのか、それらについての説明はなされていない。この「大中觀」の語についても、後のチベット仏教のチヨナン派では特別な意味をもつ語であるが、ここでは「偉大な中觀の教義」と理解し、そこに常に存在する暗闇とは、その否定対象となる見解のことと考えていいであろう。

第四十項以降は、否定されるべき事項に対する教義が述べられており、喩例もそれに従い、好ましくないものが述べられている。第四十四項目の「四黒」のとは、四黒業のこととである。

最後の第五十項では、『菩薩藏經』ならびに『講演大乘經』の「宝女品」からの引用がある。それぞれ、障碍となる五十五法と三十二法が列挙されている。実際の經典が引用されているのは、第二十五項における『戒蘊經』と、この最後の項目においてのみであることから、それ以前の項目では意図的に省略した上で、最後のみに実例を示したと考えられる。

まとめ

最後に、本論が宗教的な意味合いを考えてみる。まず、タイトルに「經典の意味をまとめる」とあるが、ここにあげられた教義に対して、具体的な典拠が付されたものは六項目のみであり、うち二例は經でなく、第一項における『俱舍論』と第十二項における『集菩薩学論』の論書である。また、經典の引用は第二十五項における『戒蘊經』と第五十項における『菩薩藏經』ならびに『講演大乘經』の二項目、三例のみであり、第十一項における『迦葉品』と第三十八項における『宝雲經』については經典名が言及されるのみである。むしろ、その他の四十四項目については、經典名の言及はなされない。

各項目については、最初の「菩提心」が生命の譬えで述べられているように、それがなければ菩薩道の教えが成り立たないものと考えられていたことがうかがえる。次の「空性」と「悲心」も父母の譬えで述べられていることから、最初のこれら二項目が仏教の教義の根本的なものと考えられていたことがわかる。しかしながら、以下に続く項目に順番の法則性を見いだすのは困難であり、事物や人物のさまざまな形態を取り上げ、それに仏教の教義が添えたような印象を与えられる。そこにあげられる教義も、特定の経典を推測させるものではなく、いずれも大乘仏教に一般的な教えであり、彼の多くの著作にも見られるものである。その内容も、菩薩道に対して肯定的なものばかりではなく、否定的なものもある。そのために、個々の経典からそれぞれに説かれている特徴的な教義をまとめて本論が著されているのではなく、本論は、経典に一般的に説かれている教義を五十項目にまとめただけのもので言うことができる。

以上のことから、本論の著作の意図を推測するのならば、本論は専門的な知識を有する者たちに対して表わされたものではなく、数多くの経典を実際に読むことのない者たちに向けて経典の意味をまとめて示すために書かれたものと推測できる。経典の教義の思想的特徴を捉えるのではなく、むしろ著者の考える菩薩道における実践的な概念を経典の意味として述べたもの、とすることができる。

『経義集説示』和訳

インドの言葉で、*Sūtrārthasamuccayopadeśa*

チベットの言葉で、『経義集説示』

三宝に帰依する。

大海や虚空のように深く、広大な経典の蔵をすべての根源と見て、吉祥なる師の口から生じた得難い [教えの] 意味が著されるべきである。

ここに、菩薩達の宝の如き法は五十である。

[1] 生命の如き [法] など [とは、菩提心] である。それらを少しばかり説明しなければいけない。すなわち、次のように [『俱舍論¹』に]、

生命とは寿命のことであり、暖かさと識とに依存するものである。

¹ *Abhidharmakośakārikā* 2.45ab.

と述べられている。そのように、衆生達においては、生命が尊ばれ、生命に依存しているように、菩薩達にとっても、生命のような菩提心を尊び、それに依存している。

[2] 父母のような法とは、空性と悲心とである。すなわち、それにより起こされることのない菩薩は、生じないであろう。

[3] 妻のようなものとは、死と、学ぶべきことと、業により集められたものを数えることである。すなわち、昼夜三度唱える必要がある。

[4] 住居のようなものとは、十善である。何故ならば、これは、その住居たるものが悪趣の門を断ち切るからである。

[5] 宝石のようなものとは、聖者の七宝と、少欲と、知足である。

[6] 友人のようなものとは、加行を三界において行っても、想は涅槃に至っており、広大な施を与えても異熟を望むことがなく、すべての存在は生じることがないと知っていても業の異熟を排除することなく、すべての存在は無我であると知っていても衆生に大悲を起こしている。

[7] 根のようなものとは、信じることと、聞くことと、捨てることと、耐えることとである。

[8] 国土のようなものとは、戒である。

[9] 親族のようなものとは、十波羅蜜である。

[10] 軌範師のようなものとは、六念である。

[11] 教師のようなものとは、『聖迦葉品』の菩提心を忘れないという四法である。

[12] 商主のようなものとは、[シャーンティデーヴァによる]『集学処論』の十四の害の対立項である。

[13] 姉妹のようなものとは、四無量である。

[14] 奴隸のようなものとは、四摂事である。

[15] 庶民のようなものとは、犬と奴隸とアウトカーストのように我慢を打ち壊わすことである。

[16] 眼のようなものとは、想と意楽を清浄にすることである。

[17] 乳母のようなものとは、善知識である。

[18] 王のようなものとは、三宝である。

[19] 水の混ざった肥料のようなものは、三輪を清浄にすることである。

[20] 樵のようなものとは、念と正知と如理の心と不放逸と四転倒の対立項とに依存したものである。

[21] 皮膚のようなものとは、衆生を放棄せず、援助することである。

[22] 飾りのようなものとは、信じること、戒、捨てること、聞くこと、智慧である

[23] 病苦のようなものとは、内外の事物に執着する心である。

[24] 人を軽蔑するようなものとは、在家の菩薩が「私は、いつ梵行をするのだろうか」と思うことと、出家〔の菩薩が〕「私は、いつになったら生きるものたちを苦から救うことができるのだろうか」と思うことである。

[25] 怠惰のようなものとは、在家のものが国土を捨てないことであり、出家のものが偽善などを捨てないことである。『戒蘊経』に、

比丘たちよ、出家者が大きな象を争っているのを見た場合も、〔それは〕誤った生活である。

と説かれている。

[26] 良い性格のようなものとは、如理の心を持つことである。

[27] 吃りのようなものとは、他者の過ちや迷乱を述べず、自らの功德を述べず、他者を責めないことである。

[28] 盲人のようなものとは、他者の迷乱を見ないことである。

[29] 窃盗を捕まえることのようなものとは、正法が滅する時に正法を保つことである。

[30] 童子のようなものとは、善く言われることと、自分たちの年齢としては活発であり、交際を喜び、喜び易く、育て易く、満たし易く、足りていることを知っていることである。

[31] 使者のようなものとは、菩薩の多くの意義と、多くのなされたことと、心より大きなものである。

[32] 大臣のようなものとは、誓願をしっかりすることである。

[33] 賢者のようなものとは、衆生を嫌悪することなく親切にすることである。

[34] 弟子のようなものとは、昼に三度、夜に三度、師に仕えることと、福德の資糧を集めることと、律を育てることとである。

[35] 歓迎して受け入れるようなものとは、一切衆生が仏教徒になってからまず自身が成仏することを望むことである。

[36] 盲人の杖のようなものとは、自身が仏教徒になってから最初に利他をなすことである。

[37] 第一位の人のようなものとは、行道と戒と生活と儀軌と見解が完全なことである。

[38] 望みを持っている人のようなものとは、すべての行道を他者に廻すことであつて、すなわち『聖宝雲經』にでてゐる如くである。

[39] 暗闇のようなものとは、大中觀の対象に常にあるものである。

[40] 死刑執行人のようなものとは、誤つた見解を生じてゐることであり、捨てられるべきである。

[41] 盜賊のようなものとは、放逸と不敬であり、捨てられるべきである。

[42] 敵のようなものとは、恥じらいがないことと放逸とである。

[43] 愚者のようなものとは、念と正知とがないことである。

[44] 酔うことのようなこととは、四つの黒くなつたものである。

[45] 家畜のようなものとは、学ぶべきことのあり方を知らないことである。

[46] 屠殺者のようなものとは、大悲を離れた行道をもつことである。

[47] なされたことに対して恩恵を返さないようなこととは、別解脱の律を捨てることである。

[48] 孤児のようなものとは、善巧方便を離れたものである。

[49] 狂乱者のようなものとは、なされるべきこととなされるべきでないこととを知らないことである。

[50] 魔により摂受されるようなものとは、障疑となる五十五の法と三十二の〔法〕を知らないこととである。五十五とは何かと言へば、『菩薩藏經²』に出てゐる通りである。

すなわち、障疑となる法は一つであつて、(1) 放逸である。障疑となる法は二つあり、(2) 恥じらいがないことと、(3) 傲慢とである。三つあり、(4) 情欲、(5) 憎しみ、(6) 痴とである。四つあり、(7-10) 聖ならざる四趣のものである。五つあり、(11) 殺生、(12) 盜み、(13) 邪淫、(14) 妄語、(15) 飲酒である。六つあり、(16) 仏、(17) 法、(18) 僧、(19) 戒、(20) 軌範師、(21) 長老たちを敬わないことである。七つあり、(22-28) 七種の慢心である。八つあり、(29-36) 八つの誤りである。九つあり、(37-45) 九種の損害の事物と、(46-55) 十あり、十不善とである。

とでてゐる。障疑となる三十二の法も、『聖講演大乘經³』に出てゐる通りである。

² *Bodhisattvapiṭakasūtra*, Tib. P. No. 760(12), Wi 35b1-36a3; Chin. T. No. 310(12), p. 224c3-19.

³ *Mahāyānopadeśasūtra*, Tib. P. No. 836, Phu 320a8-b8; Chin. T. No. 397(3), p. 39c4-26, No. 399, p.472b29-c17.

次のように、女性よ、大乘の障疑の法は三十二ある。すなわち、これらの障疑により、一切智にすぐに確かに生じることがないであろう。三十二とは何かと言えば、(1) 声聞と独覚の乗を望むこと、(2) 帝釈と梵天とを望むこと、(3) 生まれたところに存続することで、すなわち梵行、(4) 一つの善根に執着すること、(5) 財産を持つものに対して妬むこと、(6) 衆生に対して等しく与えないこと、(7) 戒をゆるめること、(8) 他者の心を護らないこと、(9) 害心と、(10) 怒りたい気持ちをおこすこと、(11) それにより心が畏縮すること、(12) 忘れること、(13) 聞くことを求めないこと、(14) 考察がないこと、(15) 聖ならざる行、(16) 我慢以上の我慢を増やすこと、(17) 身と口と意の行為が不浄であること、(18) 正法をよく護らないこと、(19) 軌範師が法を隠すこと、(20) 四摂事を拒むこと、(21) 本当に喜ばしき法を捨てること、(22) 悪友に依存すること、(23) 菩提に回向しないこと、すなわち『三蘊経』に従っていないこと、(24) 少しの善根によって慢心をおこすこと、(25) 機会がなく墮落した理解、(26) さらに三宝の賞讃を言わないこと、(27) 菩薩に対して傷つけようと思うこと、(28) 聞いていない法を捨てること、(29) 魔の行為を心に印象づけること、(30) 唯物論者のマントラを保つこと、(31) 衆生が熟しないこと、(32) まわりのものにより疲れていないこととである。女性よ、これらの三十二は、大乘の障疑の一握りである。すなわち、それらの障疑により一切智が生じるということはない。そのようであっても、女性よ、大乘の功德がある限り、障疑もそれだけである。

とお説きになられている。さらにまた、無量なる障疑の法はたくさんの経典に見られるが、ここでは、典拠がたくさんになってしまうので記していない。この道の為にさらに大きくなる菩薩である初学者はそれぞれの経典を見るべきであり、受け入れることに励むべきである。

話すべきことはさらにたくさんある。すなわち、暴言や暴力に長い間苦しみ、耐えがたいことに耐えているこのことも、とてもめずらしい。四川が動いて、繰り返し骸骨の乗り物に乗るといふそれも、めずらしい。妻が家を捨てて、禁戒をよく護り、常に身口意を休養させるというこれも、とてもめずらしい。少しばかりの善根さえもなく、真実義たる仏智の探求を求めるというこのことも、とてもめずらしい。別解脱の学ぶべきことなしに、大乘の二つのすぐれた菩提を探求することを求めるというこのことも、とてもめずらしい。それを集めためずらしいことがたくさんあっても、インドの人の考察や行動を言うことがどこにできるであろうか。それによって、解脱を望む覚者は、あなたがたを彼ら狂信者たちと一緒に混同することなく、不放逸に住しており、次のように大

悲の境を多くすることを放棄しない。すぐれた道を説明しても、そこに入らずに、自分がなすままになすべきであり、正智を得ていない限りは、外の者たちが熟することができず、犀のように生活するべきである。善い師を求めるべきであり、常に経典を見るべきである。

『経義集説示』という軌範師で偉大なる賢者であるディーパンカラシュリージュニャーナによる著作を完成する。

インドのその大賢者自身と、主校翻訳官で比丘のツルティム・ゲルワが翻訳、校訂し編集した。

第13章 『十不善業道説示』

はじめに

十善業道 (daśakuśalakarmapatha)の思想¹は、阿含經典をはじめとし、諸々の大乘經典²にも説かれている。この概念は初期の段階では業論と関係づけられて戒として示されたが、律蔵が複雑化するにつれ戒としての性格が軽視されるに至った。しかし大乘仏教が誕生するにともない、菩薩の戒波羅蜜として説かれるようになった。このことは『十地經』第二地³等の文献にも見られるが、主に『般若經』において説かれており⁴、在家菩薩を対象としていた。

この十不善業道を簡略に説いた文献が、テンギユルの中観部に三種類収録されている。まず一つは Aśvagoṣa による『十不善業道説示 (Daśakuśalakarmapathadeśanā)⁵』である。このテキストのみサンスクリット⁶並びに漢訳⁷も存在するが、偈頌の形態で書かれたものはこのチベット語訳のみである。第二のものは、Dīpaṃkaraśrījñāna による『十不善業道説示 (Daśakuśalakarmapathanirśesa)⁸』である。このテキストの内容は Aśvagoṣa のものと全く同一である。第三のものは、Dhārmikasubhūtiḥgoṣa⁹による『十善業道説示 (Daśakuśalakarmapathanirdeśa)¹⁰』である。前二書とタイトルが異なるこのテキストは分量も若干多く、その中には Nāgārjuna¹¹や Vasubandhu¹²の著書からの引用も見られる。しかし説かれている内容は前二書とあまり変わらない。以上の三つのテキストはいずれも思想的な内容は含んでおらず、チベット大蔵経の中観部に入れられる必然的理由は見られない¹³。

¹ 「十不善業道」に関しては、佐々木教悟 1977, 北条 1981, 遠藤 1982 を参照。

² 大乘仏教における十善戒については、平川 1989: 3-78 参照。

³ 近藤 1936: 37-40, 荒牧 1974: 70-75, 平川 1989: 22-30 参照。

⁴ 平川 1989: 9-16, 梶山 1983 参照。

⁵ Tib. D. Nos. 4178, 4507, P. Nos. 5416, 5678. 北京版の後者とデルゲ版の前者は「書幹部」、デルゲ版の後者は「阿底沙小部集」に入れられている。また、訳者は、インド人である Ajitaśrībhadrā とチベット人の Śākya 'od である。

⁶ Skt. Lévi 1929: 226-271 参照。同稿は、彼に帰される他の小片とともに校訂テキスト・フランス語訳を含んでいるが、チベット大蔵経ではナーガールジュナに帰される『有情喜讚 (Sattvārādhanaṣṭava)』も含み、それぞれの著者についても慎重な判断を要する。

⁷ Chi. T. No. 727. 訳者は、日称等である。

⁸ Tib. D. No. 3958, 4483, P. Nos. 5355, 5396. 訳者は Dīpaṃkaraśrījñāna 自身とチベット人の Tshul khriṃs rgyal ba である。

⁹ Tāranātha の仏教史 (寺本 1928: 147, Chattopadhyaya 1980: 131-132) では、彼を Aśvagoṣa、Mātrceta と同一人物とする。また彼らの同一性と彼らのテキストがチベット大蔵経の中観部に入れられていることに関しては、Seyfort Ruegg 1981: 119-121 に詳細に論じられている。

¹⁰ D. Nos. 4176, 4504, P. Nos. 5417, 5676,.

¹¹ 引用箇所は確認できていない。

¹² Abhidharmakośa 4.70-71ab.

¹³ Seyfort Ruegg 1981: 119 参照。

次に、この中の *Aśvaghōṣa* によるテキストに関して若干の考察を示す。彼の所属学派に関しては、これまで様々に論じられているが¹⁴、彼の名に帰されたテキストに対して複数の著者を想定する傾向もあり、論点は二重構造となっている。まず前者に関してであるが、本テキストからはある特定の学派の特徴を示す内容を見つけることはできなかった。しかし、前述のように大乘仏教において十善業道の説示が在家菩薩を対象としていたことを考慮するならば、従来の説に対してある程度の限定が加えられるであろう。もっとも、このことは彼の複数性の問題と絡めて考察されなければならない。従来の研究に従い、仮に *Aśvaghōṣa* という名に帰されたテキストに説かれる内容から複数の人物を想定するのならば、まず第一に挙げられるべきなのは『ブツダチャリタ』などの著者として知られる仏教詩人である。続いて『大乘起信論』の著者としての馬鳴¹⁵と、密教行者¹⁶としての彼も想定されている。このような複数の *Aśvaghōṣa* が存在し、本テキストの著者が第二、第三の *Aśvaghōṣa* であるのならば前述の議論は無効となってしまう。本テキストからはこの著者性を決定する根拠は得られないが、漢訳の年代が遅れていること、或いはチベット語訳が意図的に偈頌の形態に変えられているなど、『ブツダチャリタ』などの著者と同一人物とするには、多少の疑惑が残る。ここでは結論を出さないが、彼の著者性に関する論争に多少の資料となるであろう。

『十不善業道説示』の著者

チベット大蔵経の中には前述の通り、二種の『十不善業道説示』が見られるが、それらは異なる著者により著された、或いは異なる著者に帰された同一内容のテキストである。¹⁷ここでは、そのうち、*Dīpaṃkaraśrījñāna* に帰されたテキストを中心に考察し、その著者性について考察する。

まず、二つのテキストの異同を指摘することにより、両者が全く同一のテキストと言えるかどうかを考えてみる。その具体的作業として(I) *Dīpaṃkaraśrījñāna* の著作のチベット語訳と *Aśvaghōṣa* の著作のチベット語訳の比較、(II) *Dīpaṃkaraśrījñāna* の著作のチベット語訳と *Aśvaghōṣa* の著作のサンスクリットの比較を行う。

(I) 両者の最大の違いと言え、*Aśvaghōṣa* の著作のチベット語訳が七音節の偈頌の形態で翻訳されている点である。このことから、両者は異なるサンスクリット文献をチ

¹⁴ 本庄 1987 によると、Sylvain Lévi の有部所属説、H. Shastri、松濤誠廉の瑜伽行派[の祖]説、E.H. Johnston の多聞部・鵝胤部説、Louis de la Vallée Poussin と金倉圓照の經量部説、辻直四郎の不確定説がある。また原 1974: 325 によると、Y. Haketa の説一切有部説がある。

¹⁵ 柏木 1981: 100-117 参照。

¹⁶ 頼富 1973、塚本 1989: 487-488 参照

¹⁷ ただし、Tsong kha pa は両者を別なものと認識している。ツルティム 2004: 187-188、ツルティム、藤仲 2005b: 217。

ベット語に翻訳したと考えることが妥当であろうが、*Aśvaghōṣa* の著作のサンスクリット並びに *Aśvaghōṣa* の著作の漢訳のどちらも全文が偈頌で書かれていることはなく、本来は散文の形態で著されたものであると考えられる。従って、チベット語の翻訳者が所持していた写本だけが偈頌で書かれたものであったという選択支と、仏教詩人たる *Aśvaghōṣa* の著者性を強調するために作意的にこのような形態で翻訳したという選択支が生じる。いずれにせよ、*Aśvaghōṣa* の著作のサンスクリット並びに *Aśvaghōṣa* の著作の漢訳の補足資料から、サンスクリット原典の伝承、或いはチベット語に翻訳する際に、後者の変換が行われたと推定できる¹⁸。それ故に、この最大の違いは、テキストの同一性に対する否定的根拠とはなりえないのである。次に、両者の相違を決定するために、実際の表現内容の同意を考察する。しかしながら、両者の違いは、翻訳語の決定に関するものを除いてはほとんど見られず、内容は実質的には同一である。以下にその異なる点のみ指摘する¹⁹。(1) *Aśvaghōṣa* の著作のチベット語訳は、偷盜の支分を六支とすること、(2) 邪淫の非処の項において、*Aśvaghōṣa* の著作のチベット語訳は「施主」と「師」を欠くこと、(3) 邪淫の非時の項において、*Aśvaghōṣa* の著作のチベット語訳は「昼中」と「月経」を欠くこと、(4) 両舌の項において、*Aśvaghōṣa* の著作のチベット語訳は「染汚心により」という表現を欠くこと、(5) 痴の項において、*Aśvaghōṣa* の著作のチベット語訳は「護摩がないこと (sbyin sreg med)」が「供施があることでない (mchod sbyin yod min)」となっており、また「此世がないこと」と「善行と悪行の業の異熟がないこと」とを欠くこと、(6) *Dīpaṃkaraśrījñāna* の著作のチベット語訳は *Aśvaghōṣa* の著作のチベット語訳の最後の偈の部分に欠くこと、の以上である。

では、これらのそれぞれについて考察する。(1)については、*Aśvaghōṣa* の著作のサンスクリットは五支であり、他の項も五支であることから、本来は五支であったものがいずれに時点かにおいて六支に変えられたと考えられる。(2)については、*Aśvaghōṣa* の著作のサンスクリットには欠けていないことから、偈頌の形態で翻訳する際、音節の関係上欠けてしまったのであろう。(3)については、*Aśvaghōṣa* の著作のサンスクリットが非時の項をすべて欠いているので比較はできないが、*Aśvaghōṣa* の著作の漢訳には見られることから、(2)と同じ判断ができる。(4)についても(2)と同じことが考えられる。(5)について、初めの項は、似ている語であることからチベット語の翻訳の際の

¹⁸ 可能性としては、*Aśvaghōṣa* とは全く異なる他の誰かによって著されたテキストを、彼に帰すために、このような翻訳上の作業が行われたのであろう。そのような例は他には報告されておらず、断定を下すことはできないが、偈頌で書かれたサンスクリット原典が見られないことから、このように判断する方が妥当である。

¹⁹ 内容上、ほとんど同一なテキストの違う点を指摘することは、訳語上の違い、写本の欠落、誤字や誤訳などを指摘することにもなってしまうが、それらの可能性も含めた上で考察する。

違いと考えられ、「此世」は次項の「他世」と混同した可能性がある。最後の項は、*Aśvaghōṣa* のもののサンスクリットや *Aśvaghōṣa* の著作の漢訳には見られることから、やはり *Aśvaghōṣa* の著作のチベット語訳のみの欠落と考えられる。(6) については、*Aśvaghōṣa* の著作のサンスクリットではレヴィによる注記によると、貝葉に空白が見られるところである。また *Aśvaghōṣa* の著作の漢訳はこの部分を欠いており、本来のテキスト部分としてあったものというより、後に付加された偈頌であると考えられる。以上の考察を考慮に入れるのならば、伝承上の多少の違いは存在するものの、ほぼ同一文献であったという仮説が成り立つ。さらには、*Dīpaṃkaraśrījñāna* の著作のチベット語訳は、*Aśvaghōṣa* の著作のチベット語訳よりも *Aśvaghōṣa* の著作のサンスクリットとの同一度が高い、ともいえる。

(II) 次に、前記の仮説を補強するために、*Dīpaṃkaraśrījñāna* の著作のチベット語訳と *Aśvaghōṣa* の著作のサンスクリットとの同一性について考察してみる。*Dīpaṃkaraśrījñāna* の著作のチベット語訳が *Aśvaghōṣa* の著作のサンスクリットと同一のテキストからの翻訳であるということが論証されれば、*Dīpaṃkaraśrījñāna* の著作のチベット語訳と *Aśvaghōṣa* のもののサンスクリットは同一であるということが確定しよう。これらもほとんど同じなので、違いのみを指摘することにする。それは、(1) *Aśvaghōṣa* の著作のサンスクリットは、「邪姪」の非時の項をすべて欠くこと、(2) 「邪姪」の非往の項において、*Dīpaṃkaraśrījñāna* の著作のチベット語訳の「王により護られる女」が、*Aśvaghōṣa* の著作のサンスクリットでは「金銭により取られた女」とあること、(3) 「痴」の項において、*Dīpaṃkaraśrījñāna* の著作のチベット語訳の「護摩」が、*Aśvaghōṣa* の著作のサンスクリットでは「食物」であり、また *Aśvaghōṣa* のもののサンスクリットには「此世」を欠いていることとである。まず、(1) について、*Aśvaghōṣa* のもののチベット語訳と *Aśvaghōṣa* の著作の漢訳はともにこの項があり、*Aśvaghōṣa* のもののサンスクリットには項のタイトルが見えることから、写本に写す際に誤って欠落したものと考えられる。(2) については、*Dīpaṃkaraśrījñāna* の著作のチベット語訳とは少し異なるものの、*Aśvaghōṣa* の著作のチベット語訳に「王女のところに住する女」という語があり、本来同じ語であったと考えられる。(3) は両者とも (I) と同じ事例である。以上の補足的論証からも、これら二つのテキストが異なるものであるということよりも、同一であるという可能性の方が高い、と言える。

次に問題となるのは、どちらがオリジナルであるのかということである。この程度の長さで、それほど深い内容の議論がなされないテキストであるのならば、異なる人物が他時に他処で同一内容のテキストを著したという可能性も、全くないわけではない。しかしこのようなことが起こる可能性は極端に低い上に、論書に関しては、同様の事例は

知る限り報告されておらず、またそれを支持する積極的根拠もないことから、ここではその可能性を排除して論を進める。まず両方のテキストの前後関係を考えることにより、その優先性を決定することを試みる。その作業として、それぞれの著者、チベット訳者、漢訳者の生存年代を考察する。すなわち、(A) *Aśvagoṣa* と *Dīpaṃkaraśrījñāna*、(B) *Aśvagoṣa* の著作のチベット語訳者である *Ajitaśrībhadra* とチベット人の *Śākya 'od*、*Dīpaṃkaraśrījñāna* の著作のチベット語訳者 *Tshul khriṃs rgyal ba*、(C) *Aśvagoṣa* のものの漢訳者日称と *Dīpaṃkaraśrījñāna* の三項により考察する。

(A) に関してであるが、ここでは *Aśvagoṣa* の複数性を考慮に入れて、それぞれについて考察しなければならない。そのうち『ブツダチャリタ』などの仏教詩人としての著者、並びに『大乘起信論』の如来藏論者としての著者に関しては、*Dīpaṃkaraśrījñāna* (982-1054) よりはるか以前とされていることから、この二者に関してはその先行性が支持されることになる。しかし第三の密教行者としての存在は、後代の密教思想を取り入れていることから、比較的時代を下った者と考えられ、この生存年代と *Dīpaṃkaraśrījñāna* の重複性が問題となる。*Tāranātha* の仏教史によると、この「後馬鳴 (*rTa dbyangs phyi ma*)」は中観派の中の帰謬論証派の者であり、インドの *Mahīpāla* 王の統治時代 (-916-) であり、またチベットの *Khri rol ba can* と同時代ともする²⁰。現時点ではこの資料からだけでは年代がはっきりせず、この三番目の著者により著されたと想定した場合に、年代の確定には、なお曖昧さが残ってしまう。

そこで、(B) のチベット訳者に関して、年代を比較考察する。*Aśvagoṣa* の著作のチベット語訳者者に関しては、*Ajitaśrībhadra* に対する情報が少ないので、*Śākya 'od*²¹ の年代を考察する。まず、*Bu ston* の仏教史では、彼を *Padmasambhava* と同時代、*Kamalaśīla* 以前のチベットの翻訳官としている²²。また *Tāranātha* の仏教史²³では *Gopāla* 王の統治時代におき、*Jñānagarbha* と同時代とする。これらによると彼は *Dīpaṃkaraśrījñāna* 以前に存在したことになる。一方、『テプテル・ゴンボ²⁴』では、「真言乗タントラの初期の翻訳官」の中におくのだが、フビライ (1251-1294) と同時代の翻訳官である *Chos kyi seng ge* の下で学んだとしている。さらに、テンギュルの中には、彼が *Dīpaṃkaraśrījñāna* の翻訳を校訂したというテキストも存在し²⁵、また *Dīpaṃkaraśrījñāna* 以降の *Śāntībhadra*

²⁰ 寺本 1928 によると、「AD 916-1141」と幅があり、疑問点も生じるがマイナス資料として示しておく。

²¹ 彼を *Śākyaprabha* と同一人物と判断していいのかという問題も生じる。芳村 1974: 566 では、*Śākya 'od* と区別してチムの *Śākyaprabha* をあげている。

²² Cf. 芳村 1974: 570, Obermiller 1931: 11.

²³ Cf. 寺本 1928: 277, Chattopadyaya 1980: 259, note 8.

²⁴ 『青冊史』四川民族出版社, 1985: 156, 201, Roerich 1949: 155, 159.

²⁵ P. No. 4531.

との共訳したものも存在する²⁶。これらのことから、時代的には古い前の二つの仏教史の記述の方が支持されるであろうが、後者の否定的資料も存在し、ここでも確定には至らない。

最後の (C) の中国資料により比較考察する。Aśvaghōṣa の著作の漢訳の訳者である日称は、インド人であって、北宋の仁宗慶暦六年 (1046) に中国に至り、嘉祐八年 (1063) に本テキストの翻訳を行っている²⁷。その彼が、もしもほぼ同時代の Dīpaṃkaraśrījñāna を知っていたのならば、どうして『十不善業道説示』を「馬鳴集」としたのか²⁸。また、どうしてこのテキストのみを漢訳し、彼のその他のテキストを漢訳しなかったのか、という疑惑が生じる。むしろ彼は Dīpaṃkaraśrījñāna の存在を知らなかったと考える方が自然である。このことから、Dīpaṃkaraśrījñāna と同時代、或いはそれ以前の中国、インドにおいて Aśvaghōṣa に帰された『十不善業道説示』というテキストが存在していたと考えられる。以上のことは推測の上に成り立ち、若干の否定要素を残してはいるものの、本テキストは Dīpaṃkaraśrījñāna 以前に存在していた可能性が高いと判断できる。

まとめ

上記の考察から得られた結果と残された課題とを以下にまとめると、まず Aśvaghōṣa に帰されたテキストと Dīpaṃkaraśrījñāna に帰されたテキストは同一であると判断できる。この結果を踏まえた上で両者の前後関係を考えると、Aśvaghōṣa に帰されたものの方が以前に存在していたと推測できる。従って、これを支持するのならば、次の問題が生じることになる。(1) 本テキストは Dīpaṃkaraśrījñāna の真作であるのか、(2) 真作であるのならば、なぜ Aśvaghōṣa のテキストを模倣したのか、(3) 偽作であるのならば、誰により著されたものなのか、(4) また、何故に Aśvaghōṣa のテキストを Dīpaṃkaraśrījñāna に帰したのか、という点である。これらに関しては、上記の結果を裏付けた上で考察されるべき課題であるが、現時点ではその論証は困難なものである。若干の可能性を考えるのならば、Dīpaṃkaraśrījñāna の『菩提道灯論細疏』などを含めた彼の他の著作との関連において考える余地がある²⁹。また、彼の伝記にも Aśvaghōṣa

²⁶ P. Nos. 5168, 5296, 5461, 5536, 5753, 5755, 5756, 5367. また、この他にも Dīpaṃkaraśrījñāna の師にあたる Ratnākaraśānti のテキストの翻訳も存在する。

²⁷ Cf. 『望月仏教大辞典 第五卷 改訂版』世界聖典刊行会、1974: 4069c, 『仏書解説大辞典別巻 仏教経典総論 改訂版』大東出版社、1986: 184-185. ただし、年号に関して、両者は多少異なる。

²⁸ 「集」とあるように、Aśvaghōṣa 著述のテキストとしては伝わっていなかったという可能性も残る。

²⁹ D. No. 3948, Khi 270b5 (望月 2005a: 108) に、彼の著書として『七十誓願 (sMon lam bdun cu)』(P. No. 5430. ただし、チベット大蔵経に伝わる著者は Parahitaghōṣa Āranyaka) に言及し、また、D. No. 3948, Khi 285a (望月 2005a: 142) では、「彼はアーリヤデーヴァの教えにより真実を見た」とし、中観派の論者と見なしている。

に対する記述が見られ³⁰、彼自身と *Aśvagoṣa* の関連も含めた上で考察すべきであろう。最後に現時点において有する結論を述べるのならば、*Dīpaṃkaraśrījñāna* の著者性も疑わしければ、仏教詩人としての *Aśvagoṣa* の著者性も疑わしく、全くの第三者による短いテキストであったという印象である。このことは、彼らがこのテキストを所持していたことが伝承され、彼らの著書とされた可能性を意味する。

結局、『十不善業道説示』の著者が誰なのかを断定することはできないが、*Dīpaṃkaraśrījñāna* と *Aśvagoṣa* に関連する著書に問題があることが明らかになった。このことは、本論だけではなく、前者の『根本過失犯注 (*Mūlāpattiṭṭikā*)』においても、後者に帰される『金剛乘根本過犯集 (*Vajrānamūlāpattisaṃgraha*)』および『事師五十頌 (*Gurupañcaśikā*)』をめぐってさらなる問題が生じている³¹。確認できることは、*Dīpaṃkaraśrījñāna* は『十不善業道説示』、『根本過犯』、『事師五十頌』を *Aśvagoṣa* の著書と認識していないことである。

『十不善業道説示』和訳

インドの言葉で、*Daśākuśalakarmapathā*

チベットの言葉で、『十不善業道説示』

三宝に敬礼する。

善趣を得ようとするものが、捨てられるべき十不善業道である自性による罪過をもつことは、こうである。

身業は三種で、口 [業] は四種で、意 [業] は三種で、これら十の不善が説かれる。

これらを区別してから解説するべきである。

そこで、まず身の [業] は、殺生と、偷盗と、邪淫行である。口の [業] は、妄語と、兩舌と、悪語と、綺語とである。意の [業] は、貪心と、怒りの心と、邪見である。

そのうち、殺生は、有情³²がおり、有情を思うことがあり、殺生の心が近くにあり、

³⁰ Cf. Eimer 1979, 1. Teil 1: 165, 171, 179, 2. Teil 2: 30, 45, 63. いずれも *Nāgārjuna* と *Asaṅga* と並記されている。また初めの二つは『経莊嚴論』を挙げるが、最後のものは『八支論 (*Yan lag brgyad*)』をあげる。

³¹ 望月 2013c.

³² 「命に執着する者 (*srog chags*)」

その方法もなし、命を奪うことで、それら五支分³³をともなうことが殺生となる。

そこで、「偷盜とは何か」と言えば、他者のものがあり、他者が保持しているも思い、窃盜の心が近くにあり、その方法もなし、場所から取り去ることで、それらの五支分をともなえば、偷盜になる。

邪淫行は四種で³⁴、非処と、非時と、非支分と、非往とである。

そのうち、「非処」とは、正法と、肖像などと、菩薩の住居と、軌範師と戒師と施主と父母などと師と近いところである。

「非時」とは、昼と、月経と、妊娠〔時〕と、乳児の養育〔時〕と、望まない〔時〕と、苦しんでいる〔時〕と、不快な〔時〕と、八齋戒に住している〔時〕である。

「非支分」とは、口と、大便道と、童子と童女の前後の穴と、自分の手である。

「非往」とは、他人の妻すべてと、法幢と種族に護られた者と、王により護られた者と、他者が取った娼婦と、親交がある者と、畜生である。そのように、自分の妻に依つてから邪淫行になる。

そのうち、「妄語」とは、事物として成立していないものと事物の状態から損なわれたものと、誤って思うことと、誤った方法も近くにあり、その方法もなし、虚偽の言葉を述べることで、それら五支分をともなえば、妄語になる。

「両舌」とは、染汚心によって他者を分ける言葉である³⁵。

「悪語」とは、他者の欠点をさらけだす、不快なる語である。

「綺語」とは、欲望と結合したり、執着と結合することにより述べるべきではないことを述べることである。

「貪心」とは、他者の物と自在と財産に執着する心が尽きないことである³⁶。

「怒りの心」とは、衆生を嫌悪し、「これらの衆生を殺すべきである。捕らえるべきである。打つべきである。締めあげるべきである」と思うことである³⁷。

「邪見」とは、「布施がなく、護摩がなく、この世間がなく、他の世間がなく、沙門

³³ 殺生の成就を四支分、あるいは五支分によって構成するということは、『摩調僧祇律』「有五事具足殺人犯波羅夷何等一者人二者人想三者興方便四者殺心五者断命是名五事」(T. Vol. 22: 257c)、『成実論』「是人具足殺罪因縁以四因縁得殺生罪一有衆生二知是衆生三有欲殺心四断其命」(T. Vol. 32: 304c)、『大智度論』(T. Vol. 25: 154)、『瑜伽師地論』(T. Vol. 30: 630b)、『阿毘達磨俱舍論』(T. Vol. 29: 36c, Pradhan 1967: 243)、『大乘阿毘達磨雜集論』(T. Vol. 31: 679a, 727b)などを参照。

³⁴ 邪淫を四種に区別することは、『阿毘達磨俱舍論』(T. Vol. 29: 87a, Pradhan 1967: 244)、『順正理論』(T. Vol. 29: 578c)にみえる。また『瑜伽師地論』(T. Vol. 30: 631a)では「非支、非時、非処、非量、非理」の五種を邪淫の諸相として挙げており、これと同様の記述は『大乘阿毘達磨雜集論』(T. Vol. 31: 727c)にも認められる。なお『阿毘達磨大毘婆沙論』(T. Vol. 27: 585a-b)、『大智度論』(T. Vol. 25: 156c)、『成実論』(T. Vol. 32: 304c)などにも全体的な意味において本テキストと同様な記述が見られるが、「非処」などの項目による区別は見られない。

³⁵ Cf. *Abhidharmakośabhāṣya*, Pradhan 1967: 246, 舟橋 1987: 357-358.

³⁶ Cf. *Abhidharmakośabhāṣya*, Pradhan 1967: 247, 舟橋 1987: 361.

³⁷ Cf. *Abhidharmakośabhāṣya*, Pradhan 1967: 247, 舟橋 1987: 361-362.

がおらず、バラモンがおらず、天がおらず、仏世尊がおらず、阿羅漢、独覚がおらず、善行がなく、悪行がなく、善なる行為と悪なる行為の業果の異熟もない」と言うことである³⁸。

世尊がお説きになられたものと、『聖正法念処大乘経』と、大乘経典に出ているこれらの十不善業道は大地獄の原因であり、十不善業道に依ることで地獄に墮ちるであろう。

『十不善業道説示』[という]偉大な軌範師ディーパンカラシュリージュニャーナの著作を完成する。

インドのその偉大な賢者自身と、偉大な翻訳官である比丘のツルティム・ゲルワが翻訳し、訂正して、決定した。

³⁸ Cf. *Abhidharmakośabhāṣya*, Pradhan 1967: 247, 舟橋 1987: 362.

第14章 『業分別論』

はじめに

インドにおける諸々の思想のほとんどが、輪廻転生を含んだ業思想をその根底においていることは、多くの者が認めるところであろう。人間は死後に生まれ変わり次の生を得るというこの考えが、彼らにとっては当然とも思われる共通認識事項であったからであろうが、その一方で自らが行った行為の影響が次の生に及ぶということが、悪い行為を予防するという倫理的規制に都合がよかったこともあるのでであろう。このような業思想は、仏教思想においても、その輪廻する主体を有の実体として批判的に考察する以上に、自らの学説に積極的に取り入れられていった¹。この概念は『俱舍論』を頂点とするアビダルマ文献において著しい展開を見せ、その議論の主題はより詳細な各論へとおよんでいったのだが、以後の仏教思想史における論点の移行に伴い、このテーマは話題の中心から離れ、それ以上の思想的発展を見せることがなくなった。しかし、その思想の根底にはこの業論の考えが常に存在していた²。

ここに、Dīpaṅkaraśrījñāna の著作における業論についての考察を試みるが、彼もこの業思想を自らのテキストにおいて受容していた。本章では、彼の中観部に収められた著書に基づいて彼の業論を考察する。真言乗の著書は考察の対象からはずれているので、一側面からの考察にとどまるが、彼自身が顕教と密教を区分して用いていることから、無意味な調査とはならないであろう。

彼の顕教文献の特徴を示すと、その多くの著書も比較的短く、菩提を得るための基礎的実践が主題となっているものがほとんどである。初学者に対して仏教の基本的思想を簡略に述べた入門書的なテキストでもあり、彼の独自の思想解釈はあまり見られず、深い議論に至ることは稀である。そこに説かれる主題を簡略にまとめるならば、「菩提に発心をなすこと」、「戒律に従った善業」、「慈悲に基づく利他行」、「正しい智慧をもつこと」などである。「業論」も、基本的にはこの第二項に含まれるものである。これは十不善業道を行わないことを別解脱の七部と並記して律儀戒としていることからもうか

¹ 業論に関する研究はすでに多く発表されており、ここにそれ以上の成果を公表することもない。仏教思想における業論の研究はアビダルマ文献に多くを負っており、今回もそれらの研究を参考にした。舟橋 1954, 1987, 福原 1982, 佐々木 1980, 1990, 袴谷 1987 を参照。ただし中観派のように、業思想を無批判に受け入れることに対し批判的な考え方もある。どちらが本来の仏教的な捉え方かは、ここでは論じないが、輪廻の主体に関する哲学的議論を行うよりも、倫理的な側面を強調したほうが大衆の理解を得やすいので、積極的に取り入れられたのではないか。

² 後期の仏教論理学においても、輪廻の論証が唯物論者との論争の上でテーマとなっている。唯識思想にみられる心の相続を受容しているこの学派では、輪廻の概念を受け入れ、その存在論証を試みている。生井 1996: 58-102 を参照。

がうことができる³。

『菩提道灯論』

まず、彼の主著とも言える『菩提道灯論』に見られる業論を考察する。本論は、そのタイトルが示すように、菩提を得るための実践的な階梯を解説したものである。しかしながら、その注釈も含めて業に関する議論はあまりみられず、「業」の語が出てくるのも三箇所のみである。そのうち業論に議論がおよんでいるといえるものは、一箇所のみであり、根本偈に次のように述べられている。

自分の身と口との行為をすべてを清浄にし、意の行為も清浄にすべきで、不善な行為をなすべきではない⁴。[125-128]

自注においても業に関する記述が見られるのは、この文脈においてのみであるのだが、そのテーマはあくまでも律儀戒、摂善法戒、衆生利益戒の三聚浄戒に従った善なる行為を行うことである。ここで用いられている“karma (Tib. las)”という語は、身口意の三業としてのタームではあるが、単に一般的な身体的、言語的、心的「行為」という意味合いしかもたないものである。これらの行為は、あくまでも菩提を得るために浄化されるべきものである。すなわち、戒律に従う規範的な行為としての善業を述べたものであるが、悪業により悪趣に生まれるというような輪廻思想に基づいた否定的要因を排除することを意図して、善業を勧めるというものでもない。したがって、この文脈においては、善なる行為を行うことが戒律に従った行為であることを述べているだけであり、それ以上の業論に関する議論は意図されていない。

2 『菩薩摩訶論』

『菩薩摩訶論 (Bodhisattvamañyāvalī)⁵』は、そのテキスト伝承に問題を含んでいるが⁶、以下の句は同じ著者により著わされた『無垢宝書簡 (Vimalaratnalekha)』にも見られ、本人の言説であることに疑いはないであろう。その内容は、菩薩にとって排除されるべき行為を捨て、正しい在り方を行うべきであるということを列挙したものである。

³ Bodhimārgadīpapañjikā, Tib. D. Khi 267b4, P. Ki 308b6-7. 遠藤 1981: 681 を参照。

⁴ Eimer 1978: 120.

⁵ Tib. D. Nos. 3951, 4471, P. Nos. 5347, 5384.

⁶ すなわち中観部に収められるものと、小部集に収められるものとは、偈頌の順序が大きく異なることと、その多くの偈は Vimalaratnalekha (Tib. D. No. 4188, 4566, P. Nos. 5480, 5688) の偈頌と一致することである (Eimer1981: 325)。

否定対象としての悪い行為と、菩薩が行うべき善なる行為を対照することにより、善業を勧め、悪業の排除を説く著書である。その中に、

身体に障害が生じた時、以前の行為を見るべきである⁷。

と述べられている。以前の行為とは前世における行為と解釈でき、それが現世における身体的な障害の原因となっていることを述べている。差別思想を助長するような表現としてもとれるが、むしろ同論のテーマを考えると、現在の身体障害の原因を指摘するよりも、以前の生における悪業が、以後の生における悪い結果を引き起こす原因となることに主題がおかれているのであろう。悪い行為に対する予防措置をとることにより、業思想のもつ倫理的な側面を強調したものである。同論には、その他「十不善（業）を捨てるべきである」という記述も見られる。

『十不善業道説示』

本論⁸は、そのタイトルが示すように「十不善業道」を身口意の三業に分類し、項目ごとにその構成要素をまとめたものである。そのうち、殺生と偷盗に関しては、行為のおよぶ対象があり、その対象を認識し、行為をなす意思を起こし、実行し、行為が終了するという五項目があげられている。また邪淫に関しては、行為を行うべきでない場所、時間、身体的肢分、交わるべきではない対象の四項目をあげ、具体的事例を示している。口業に関しては、妄語のみ、上記の五項目による規定にあてはめているが、その他の三項目、及び意業の三項目に関しては、いずれも『俱舍論』などのアビダルマ論書に見られる記述に依拠し、簡単な説明が付されている。最後に、「十不善業」を大地獄の原因であるとし、『正法念処経』に言及しているのだが、これは次に取り上げる『業分別論』にも共通して見られるものである。「十不善業道」というタームを用いるにあたり、同経典を意識していたことは明らかである。しかしながら、その末尾に述べられるように、彼にとっての「十不善業道」は衆生利益であり、菩提の本質を完成させることであった。

『業分別論』

本論⁹は、以下に和訳を提示するので、簡略にまとめるが、その構成は大きく二つに

⁷ Lobsang 1978: 26, Dietz 1984: 310 [26].

⁸ Tib. D. Nos. 3958, 4483, P. Nos. 5355, 5396. 全く同一内容のテキストとして Aśvaghōṣa に帰されるものがある (Skt. Levi 1929, Tib. D. Nos. 4178, 4507, P. Nos. 5416, 5678, Chin. T. vol. 17, No. 727)。詳しくは、望月 1996b 参照。

⁹ Tib. D. Nos. 3959, 4484, P. Nos. 5356, 5397.

分けることができる。前段では、Vasubandhu による『俱舎論』の「世間品」に基づいて五趣が述べられる。特に、地獄に関して饒舌であるが、人と天に関する記述は全くない。また、三悪趣の原因としての苦しみを説くことにより否定的要因をあげているのだが、これは善趣を得ることを強調するよりも、地獄などの否定的マイナス要因を強調することにより悪業の防止に重点がおかれていたのであろう。

後段において業の分析が行われるており、そこでは小乗の観点と大乘の観点から、対象と想が重いものと軽いものに分類される。前者に関しては、やはり『俱舎論』の「業品」に依拠して解説される。同じように、小乗と大乘とによる十不善業道の分類も行われ、前者に関しては貪欲と瞋恚と痴の三種の業により解析され、これも『俱舎論』の「業品」の記述と一致する。大乘に関しては、『大日経』からの引用による。このように、本テキストにおける業論は、まず輪廻思想の上に成り立つ苦の要因としての悪趣が述べられ、それを引き起こす原因としての不善業を述べたものである。いずれも『俱舎論』の記述に多くを依存しているが、それは小乗の見解と認識されており、大乘の見解としては他のテキストに依存しなければならなかったのである。

その他のテキスト

Dīpaṃkaraśrījñāna のその他の文献における「業」の用例をいくつか提示しておく。まず『心髓要決』には、

輪廻の特徴である苦や業や煩惱を分別する。すなわち、それは因果関係が順序通りであり、輪廻をまとめてから解説されるべきである¹⁰。[5-8]

と述べられている。業は輪廻思想の特徴の一つであり、両者には因果関係があることが述べられ、その背景には地獄などを含む輪廻転生が意図されていることがわかる¹¹。彼が業という語を用いる際には、苦しみの原因としての業であり、また輪廻思想の特徴としての業でもあり、これらが一体のものと考えられていたことがわかる。

また、アビダルマ文献に見られる業思想の分析的な用例としては、『菩薩行略教訓』に、

法に続いて成就させるために、すべての時と機会においても、前行と本行と結行

¹⁰ *Hṛdayanikṣepa* 5-8 (D. Khi 293b7).

¹¹ このような用例は、*Mahayānapathasādhanaṣaṃgraha* 57 (D. Khi 299b6) の「その業は苦しみを起こしている。無始の時からも欲に執着しているので、常に輪廻している」などという句にも見られる。

の三つにより業¹²を憶えることで成し遂げるべきである¹³。

とある。これは、アビダルマ文献に見られる業の分析的概念であるが、これと同じ用例は『業分別論』にも見ることができる。この偈は、「戒は清浄なる服を着てから、完成することに励むべきである」という句に続いて述べられたものであり、戒律に従った行いをする事と、行為を浄化することとが並記されて用いられたものである。

まとめ

以上の文献は、彼の著作量の割合からいえば一部のものであり、また「業」という語の頻出度もそれほど多くはないことから、彼は業論に関してあまり多くを語っていないと判断できる。このことは、彼の著書は、悟りを得るための実践的行為を主題としているものが多く、輪廻転生に基づく過去の種姓や、現在の行為の結果を受ける次の生を論じることは、『菩提見道灯論』で述べられるように、劣った人の考えである。しかしながら、彼が輪廻思想を含む業論を自らの著作に利用していたことは明白である。業論が語られる際には、輪廻、苦、不善業などといった排除されるべき否定的要因と一緒に語られているケースが多い。業という概念が有する意味合いから当然であろうが、彼はこの否定的面を強調することで、それを排除すべき悟りの道を得る方に昇華させる意図で用いており、あくまでも倫理的な側面から戒律を補足するものと考えていたようである。しかしながら、この業思想は悪業を犯さないという倫理的効果はあるであろうが、菩提の獲得という本来の目的のためには二次的なものである。また、この業論の受容についても、世俗的なものか、或いは勝義としても輪廻思想の上に成り立つ業論を認めていたのかは、彼の著作からは明らかではない。少なくとも、勝義において業思想を否定するという記述は見られないことから、彼がそのような中観思想的な考えを積極的に論じる意図は見られない。

『業分別論』和訳

インドの言葉で、*Karmavibhaṅganāma*

チベットの言葉で、『業分別論』

三宝に帰依をする。

¹² Cf. *Abhidharmakośabhāṣya*, Pradhan 1967: 239, 舟橋 1987: 314-315.

¹³ *Bodhisattvacaryāsūtrkṛtvāvavāda* 28 (D. Khi 237b).

0 序

現時のこれらの人たちは、善趣は楽なるものであったとしても、得難いならば、涅槃を望むことがなくなってしまうので、私こそが覚えておくために[本書は]著される。

有無、常断を離れ、楽しみの実現が円満であり、生あるものをよく熟させる聖なるその最高の人に敬礼する。

誰であれ世間と出世間の偉大なものを超越しており、特別に崇高なその尊敬されるべき方に敬礼してから、どのようになすべきなのかというならば、善と不善の業とを区別すべきである。

1 五趣

明らかな高所や、善趣や天 [に生まれること] や、人身を得ようとするのが律義戒である。それを損なうことにより悪趣に行くことが、これら地獄と餓鬼と畜生である。

1.1 天・人

天と人に関するこの詳しい記述は、『世間施設¹⁴』、『世間設定¹⁵』、『大毘婆沙論¹⁶』の中から、大略を集めた『俱舍論』の第三章¹⁷などを見るべきである。

1.2 地獄

次のように、

八熱地獄¹⁸に関しては、このインドの下、二万由旬に、大地獄がある。他の七つは、その上に順序通りある¹⁹。それらの寿命の次第は、人間たちの年の次第であり、欲界の天たちと、等活などの地獄との昼夜と月の年の次第を計算してから知るべき

¹⁴ Tib. 'Jig rten gzhaḡ pa. (D. No. 4086, P. No. 5587). Cf. de la Vallée Poussin 1914-1918, 松田 1982.

¹⁵ Tib: 'Jig rten gdags pa. いかなるテキストを指すのか、確認できていない。Phug brag 版のチベット大蔵経の目録にはこれと同一表記のテキストが見え(Eimer 1993, No. 402)、また、『業施設論』と『因施設論』は prajñapti に相応する語として gdags pa を当てていることから(春日井 1980: 126-132)、こちらの方が『世間施設論』であって、前項のテキストが確定不能なものかもしれない。或いは、真諦訳として漢訳のみ伝わる『立世阿毘曇論』(T. No. 1644, 松田 1982, n. 37 参照) や『世起経』(松村 1990) などのその他のテキストを指しているのだろうか(木村 1968: 143-174, 桜部 1969: 46-47 参照)。

¹⁶ T. Nos. 1545, 1546. Dīpaṃkaraśrījñāna は、『俱舍論』の「世間品」との関係がこのように考えていたことがわかる。

¹⁷ Abhidharmakośa 3.1, Abhidharmakośabhāṣya, Pradhan 1967: 166-171.

¹⁸ Mahāvīyutpatti, Nos. 4920-4927. 定方 1990: 166-167 参照。

¹⁹ Abhidharmakośabhāṣya, Pradhan 1967: 161.

である²⁰。何故ならば、次のように、人間の五十年を積み上げた後に、掛け算をしてから知るべきである²¹。

と説明されているから。寒地獄²²に関しても、雪山の下、それら前出のものの方にある。それらの寿命も、マガダ国の八十カーリになる胡麻のヴァーハによるチューリカーの中から、ある人が百年毎に胡麻を一粒ずつ取り除くことにより尽きてしまったときに、アルブダ地獄の寿命が尽きるのである。次のものたちの寿命は、二十倍となる²³。これらの意味も『サンキッチャ経²⁴』に解説が書かれている。

そのように、「それらの地獄は十六²⁵である」といわれ、越え難いもので、凶悪な者の業により満ちている。

それぞれにも、さらに十六あり、四つの壁と四つの門がある。すなわち、区別してそれぞれの部分に分けたのである。

鉄の壁により囲まれており、鉄が満ちたものである。多くの百由旬において、炎が充満しているところに住している。

と世尊がお説きになられている。『俱舍論』にも、

それら四辺にも、ククーラ、クナパ、クシャラマールガなどの川がある²⁶。

と説明している。昔のある偉大な賢者は、

熱地獄などのそれら七つは、無間地獄の右と左とにある²⁷。

²⁰ *Abhidharmakośabhāṣya*, Pradhan 1967: 171.

²¹ *Abhidharmakośa* 3.79abc.

²² *Mahāvīyūtpatti*, Nos. 4929-4936. Cf. 牧 1981.

²³ *Abhidharmakośabhāṣya*, Pradhan 1967: 175.

²⁴ Tib. *Cung zad tsam zhig mdo*. このチベット語に対応するサンスクリット語として *Kiñcinmātram* が報告されているが(J.S. Negi, *Tibetan- Sanskrit Dictionary* vol. 3, Sarnath, 1995: 1116b)、そのようなタイトルのテキストは確認できていない。類推できるものとして、*Samkiccajātaka* がある。このテキストを含めたこの引用の典拠に関しては、松田 1982, n. 37 を参照。この偈は『俱舍論』でも引用されるが、そこでは經典名は述べられていない(Pradhan 1967: 163)。Dīpamkaraśrījñāna がこのタイトルの經典を実際に見ていたのかは不明であるが、前後関係から『俱舍論』に引用されたものをそのまま引いてきた可能性もある。また Śamathadeva による注釈書では、同じく「世品」の前の部分で引用される經典を示す箇所、この偈を含む部分が引用されている(本庄 2014: 347-348)。

²⁵ Cf. 牧 1982-1991.

²⁶ *Abhidharmakośa* 3.59cd-60a.

²⁷ *Abhidharmakośabhāṣya*, Pradhan 1967: 163.

と述べられている。孤独地獄と近辺地獄には、場所の確定がない。川と山と荒野などの方向と、上にもある²⁸。詳しい説明は『正法念処経²⁹』と『世間施設』と『世間設定』などを見るべきである。

1.3 餓鬼

餓鬼の根本の住所は、大王舎城の下、五百由旬にある。そこには、餓鬼の王たる閻魔がいる。他のものは、それから広がっている³⁰。詳しい話は、餓鬼の考察を述べたものを見るべきである³¹。

1.4 畜生

畜生の根本の住所は、大海である。平原と水と川と山と墓地などに、そこから広がっている³²。詳しくは、それぞれを見るべきである。

[地獄と餓鬼と畜生の] 三つの住所には、楽がなく、苦の原因をもつという話は、経典と論書に明らかにされている。智慧をもつ方が見られている。

2 苦

地獄と餓鬼と畜生の苦しみの原因を持つことは³³、経典と論書において明らかにされている。人の百十の苦しきは、聖アサンガによる著作である『瑜伽師地論』を見るべきである³⁴。天にはその他の苦しみが無いと言っても、五つの死相と五つの死が近づく兆しが生じる。すなわち、[五つの死相は] 衣服に汚れが付着すること、花鬘が古くなること、両腋の下から汗がでてくること、身体に汚れが生じること、自分の座を楽しまなくなることである。五つの死が近づく兆しは、衣服や装飾品から不快な声が生じること、身体の光が小さくなること、沐浴の水滴が身体に着くこと、動く主体を持っていても心が一つの対象に執着してしまうこと、眼の開閉があるようになることである。五つの近づく兆しは不確定である³⁵。

²⁸ *Abhidharmakośabhāṣya*, Pradhan 1967: 165.

²⁹ 同経第三章「地獄品」(Chin. T. No. 721, pp. 27-91, Tib. P. No. 953, U 115a6-327a5) を参照。

³⁰ *Abhidharmakośabhāṣya*, Pradhan 1967: 165.

³¹ 具体的に如何なるテキストを指すのかは定かではないが、前項同様『正法念処経』の第四章「餓鬼品」(Chin. T. No. 721: 91-102, Tib. P. No. 953, U 327a5-Ya58a5) や『施設論』などを指すのであろう。

³² *Abhidharmakośabhāṣya*, Pradhan 1967: 165.

³³ Cf. *Bodhipathapradīpa* 39-41.

³⁴ *Bodhisattvabhūmi*, 荻原 1971: 243-247, Dutt 1978: 167-170 (T. No. 1579: 536a2-c23).

³⁵ *Abhidharmakośabhāṣya*, Pradhan 1967: 157. Cf. 本庄 2014: 426-427.

3 境と想の区分による業論

それらの苦しみは何から生じたのか、と言うのならば、

業は重いものと軽いものとであって、境と想との区別により、声聞 [乗] と大乘の在り方の二種として知るべきである³⁶。

重いものは二つである。すなわち、境により重いものと想により想いものものである。軽いものも、それと同じである。それも、声聞と大乘との在り方により、重いものと軽いものとのそれぞれの違いを知るべきである。

3.1 声聞の業

まず、声聞の境による重いものは、次のように五無間より父を殺すことを除いた四つである。その中でも、僧の輪を破ることが [最も] 重い³⁷。さらにまた、慈悲の三昧に入定し、金剛のような三昧と、有頂の三昧から起き上がったヨーガ行者と、賢者と、軌範師と、比丘と、比丘尼と、父母と、最後身の菩薩と、病人と、法を説く者と、確定した地に住する菩薩と、預流果・一來・不還・阿羅漢 [の四果の者] たちを殺すこと、彼らを殴り、鉄の杭などに縛ること、彼らの家具を盗むことと、塔廟とサンガと法と仏の資具を盗むことと、上記のそれらの人たちと三宝に対して嘘をつくことと、暴言を吐くことと、彼らを相互に分けてしまうことと、毀謗することとが、境による重いものである。

想による重いものとは、大きな邪見が生じることと、意による大きな過ちである。

境による軽いものとは、畜生と墓場の食肉鬼を殺すことである。

想による軽いものとは、それら以外のものである。

3.2 大乘の業

そして、大乘の境による重いものとは、次のように、師たちと、初発心などの菩薩と、父母と、本当のヨーガ行者と、自分の天と、三宝などに対して、前の在り方と同じようになすことである。この同じ意味を意図して、世尊は、『密修習大金剛尖タントラ³⁸』に、

³⁶このように、大乘と小乗による二項分類は、彼のテキストにはよく見える。望月 1990: 5-6 参照。

³⁷ *Abhidharmakośavyākhyā*, 荻原 1971b: 430.

³⁸ *Vajraśikharamahāguhyayogatantra*. D. No. 480, P. No. 113. *Dīpaṃkaraśrījñāna* は、*Bodhimārgadīpapañjikā* (D. Khi 287b4, P. Ki 332b6) におけるタントラの分類において、このタントラを大瑜伽タントラに分類している (遠藤 1987, n. 26)。以下の引用については、現時点で確認できていない。

次のように、

密教行者の主よ、それらの過失は重くなつたものと、普通のものとである。そのうち、父母となつた人などを殺したり、殴つたりすることは、身体の重い過失である。殺生などの他の三つが、身体の普通の過失である。正法を捨てること、諸天に対して暴言をはくこと、父母や師になつた人などに対して悪口を述べるのが、口の重い過失である。ある人が信仰により善を領受して始めた話の際に、「世間には彼岸がない」という言葉を、出世間の虚妄として言うことは、口の重い悪行である。善を中断する冗談の言葉の言うことと、密かに罵ることと、不善業の話とは、口の普通の過失である。意の過失は三つである。すなわち、真実から心を損なうことと、心所の過失と、無明の過失とである。さらにまた、同じ十善業道に執着しないことが、心の過失である。傲慢、我慢、怒り、衆生に暴力をふるうこと、貪心により他者の女性を愛すること、他者の生命を奪うこと、師として現れた人に対して正直でなく、嫌悪することが心所の過失である。十善業と六波羅蜜を投げ捨て、忘れてしまうこと、疑惑が生じることと、意を妨げてしまうことが、無明の過失である。

とお説きになられている。

そのうち、想による重いものとは、大乘教徒の慈悲の心に関してであり、一切衆生が捨てずに執着することによる重さは、次のように憎しみだけである。すなわち、軌範師シャーンティデーヴァが、

千劫にわたって積み重ねられた布施と善逝への供養などの善なる行いすべてを、一つの怒りが打ち砕く³⁹。

とお説きになられている。これと同じ重いものとなるたくさん原因があるが、まずは設定されよう。

軽い業も、この在り方により知られる。

4 三不善根による分類

これら二乗において、重い業と軽い業が説明される。貪瞋痴により三種となる⁴⁰。

³⁹ *Bodhicaryāvatāra* 4.1.

⁴⁰ *Abhidharmakośabhāṣya*, Pradhan 1967: 240.

4.1 殺生

まず貪より生じた殺生は、次のように身体の支分のため、財産のため、遊びのため、自身と友人を救うための殺生である。

瞋より生じたものは、論難と怒りによりなされたものである。

痴より生じたものは、祭式をなすことと、王の法律家を根拠としてから法の慧により殺すことと、澄んでいない人たちを罰により断じる際、「王の福德の器に赴く」と言ってから殺すようなものと、ペルシャ人たちが次のように、

父母が老いたり、大病に堕ちいるならば、殺す。蛇や蠍や土蜂などは人間に害をおよぼすので殺す。鹿と家畜と鳥と水牛などは受用のために殺す⁴¹。

と述べられている如くである。

4.2 偷盜

貪より生じた盗みは、何らかの目的で求めているその人が[そのものを]奪い取ったり、他者のものの獲得や、尊敬や、名声のために、自分と友人とを救うために奪い取ることである。

瞋より生じたものは、前の通りである。

痴より生じたものは、王の法律家を根拠としてから、澄んでいない人たちを罰により断じてから奪い取るようなことと、バラモンたちが「これらすべては梵天がバラモンたちに与えたものであるが、今は、バラモンたちは傷つけられているので、他の生まれのものが使ってしまったとはいえども、それ故に、バラモンが[彼らからそれを]奪い取っても、盗んでいるのではない。バラモンは自分自身のものを領受したのであって、自分自身の食べ物と、自分自身の飲食と、自分自身の衣服と、自分自身の布施である」という通りである⁴²。

4.3 邪淫

そのうち、貪より生じた欲望による邪淫は、他者の妻に対して執着し、獲得や、尊敬のために、自分と友人を救うために非梵行を行うことである。

瞋より生じたものは、前の通りである。

⁴¹ *Abhidharmakośabhāṣya*, Pradhan 1967: 240-241.

⁴² *Abhidharmakośabhāṣya*, Pradhan 1967: 241.

痴より生じたものは、ペルシャ人たちが、

母などと性交し、牛祭の祭式において儀軌をともなって、水を飲む。草を切る。母の近くに寝ている人のところへ行く。姉妹の近くと、同族の近くへ行くべきである。

と述べられているものと、

牛などに対しても使われるべきである。

と述べられているものと同じである⁴³。

4.4 妄語など残りの不善業

その如くなので、このように生じたとき、

王よ、笑っているときと、[女性に対するとき⁴⁴と]、花嫁を得るときと、殺されるときと、すべての財産が盗まれるときは、嘘をつくことに害はない。五つの妄語は罪に陥ることはないと説明されている。

と述べられているものと、いかなるものであれ、邪見の妄語を述べることである。残りの不善も前に述べた通りである。意の三つのものは貪などの三つの末尾に生じている。

5 十不善業道

5.1 声聞の十不善業道

殺生は、思った通りに誤りなく他者を殺す場合である。盗みとは、他者の財産を力によったり、こっそりと自分のものにするものである。邪淫は、交ってはならないものところに交うことである。思っていることが他に変わってしまうことが妄語の語義である。染汚の心により他の側と分離することが悪口で、不快である。お世辞と歌と踊りと悪い論書と混乱した話である。貪心は、他者の財産に執着することである。悪意とは、

⁴³ *Abhidharmakośabhāṣya*, Pradhan 1967: 241.

⁴⁴ *Abhidharmakośa* の「笑ってなすものと、女性に [対するとき] と」(Tib. P. Gu 234b7-8) により補う。本テキストには“bzhad gad lta bu byed pa dang”とあり、何れかの時点で誤写が起きたのであろう。いずれにしても、ここには四つの妄語しか列挙されておらず、欠けている項が補われるべきである。

衆生に対して憎悪することである。因果関係がないものが邪見である⁴⁵。

5.2 大乘の十不善業道

そのように、大乘のものは、次の通りである。すなわち、それも『大日経』に世尊がお説きになられている。

菩薩のために思ってから、殺生からも退くべきである。[殺生の] 棒を捨てて、遺恨さえも捨てるべきである。それにより、自分自身に対するその通りに、他者の命も護るべきである。

盗むことから退くべきである。それにより、他者が護っている財産に執着を起すべきでもなく、他者が護っている財産を盗むことは言うまでもない。

欲望による邪淫から退くべきである。それにより、他者が護っている妻と種族と特徴と、法により護られているものに対して執着を起すべきでもなく、正しくない身体の支分と交わることと、二身と交わることとは言うまでもない。

妄語を述べることから退くべきである。それによっても、思ってから、いかなることによっても、仏の菩提をそそのかす妄語は、命のためにも言うべきではない。

悪口より退くべきである。すなわち、それにより、衆生に対して楽しく、穏やかで、心を開いたような言葉を述べるべきである。それは何故か、と言うのならば、秘密主よ、菩薩は一切の衆生の利益をなすことを第一にして行くことが、快い言葉であるからである。

両舌から退くべきである。それによって、いかなるものからも異なることのない言葉と、傷つけることのない言葉のように成立させられた菩薩たちが、衆生の区別を設定しないことである。

お世辞から退くべきである。それによって、境と時と目的を持ったものに従うので、一切衆生に対して好ましく適度に用いた言葉を述べるべきである。それは何故か、と言うのならば、菩薩は善妙なる言葉を持っているからである。

貪心より退くべきである。それにより、他者の家財と他者の財産とに執着する心を起すべきでもない。それは何故か、と言うのならば、菩薩は、心に執着しないものである。もしも菩薩が自らの心に執着するのならば、一切智性の門の一方向から損なわれるだろう。秘密主よ、菩薩の歡喜を起こしたものは、次のように思うべきである。すなわち、誰であれ、なされるべきものとそれにより自然に生じたもの

⁴⁵ *Abhidharmakośa* 4.73, 74, 76-78.

は良いものであると考えてから、それら衆生の家財を浪費せずに、繰り返し歓喜を起こすべきである。

秘密主よ、さらにまた悪意より退くべきである。すなわち、それにより、あらゆるところにおいても、忍耐をもち、慈愛をもち、怒りがなく、等しく思うべきである。それにより、朋友に対するのと同じように敵に対しても同じようにする。それは何故か、と言うのならば、秘密主よ、それ故に、菩薩は悪意をもっておらず、菩薩は本性により想が清浄である。秘密主よ、それ故に、菩薩は悪意から離れるべきである。

秘密主よ、さらにまた、菩薩は邪見より退くべきである。すなわち、それにより正しい見解と、向こうの世間を恐れる見解と、動くことなく、陰謀がなく、誠実であり、仏と法と僧を思うこととを確実にするべきである。それは何故にか、と言うのならば、秘密主よ、邪見は菩薩の大きな過ちであり、一切の善根を断じてしまうであろう。これは一切の不善根の祖母である。秘密主よ、その如くなので、笑うだけのときでさえも、邪見を起こしてはならない⁴⁶。

とお説きになられている。

5.3 十不善業道の分析

境と想と煩惱と時と数と支分などは、小と中と大である。すなわち、三種として知るべきである。

それらの十善業道も、それら境などにより小と中と大となる。

そのうち、境により成立するものは、前に述べたその在り方によって知るべきである。

そのうち、想により三つになるものは、無知によりなされたものが小である。放逸によりなされたものが中である。不敬によりなされたものが大である。

そのうち、煩惱により三つになるものは、雑染などの煩惱の小と中と大 [の区別] により殺生などの行為もその通りになすことである。

そのうち、時により成立するものは、加行と根本と後起で⁴⁷、一つをともなっていれば小である。二つをともなっているものが中である。それら三つを完成しているものが大である。

⁴⁶ Tib. P. Tha183b5-185a4, Chin. T. No. 848, p. 39b4-c25.

⁴⁷ *Abhidharmakośabhāṣya*, Pradhan 1967: 239.

そのうち、それら十善業道が数により成立するものは、一度なされたものが小である。二度なされたものが中である。三度以上なされたものが大である。

そのうち、支分により成立するものは、殺生などのそれらの支分がほとんど不完全なものが小である。ほとんど完全なものが中である。すべてが完成しているものが大である。

「など」とは、それら殺生などから何れかを一度なしただけのものが小である。それを悔いることがないことが中である。それに対立するものに依存していないことが大である。

[殺生などに] 縛られていることが小である。裂かれることが中である。征服されることが大である。

遊びと他者の従う声をともなってなされたものが小である。自身に汚染と過失がなくとも叱責し、他者の罪をなすことの縁をなすことが中である。自身に過失があつて他者により行われたことが大である。

さらにまた、悪友と善くない友人により自身の自由なしになされたものが小である。名声のためになされたものが中である。熟することを恐れないことが大である。

さらにまた、これら十業道の意味は、詳しくは『聖正法念処経⁴⁸』と、軌範師でありバラモンのダールミカスブーティゴージャ⁴⁹による著作と、聖アサンガにより著された「撰決択分」などの『大瑜伽師地論⁵⁰』を見るべきである。

6 まとめ

さらにまた、

作為と、完全と、悔いないことと、対立するものがないことと、随行者と、異熟とから「積集の業」と言われている⁵¹。

また、

輪廻の業は、何らかの重いものと何らかの近くのものとは何らかの習慣とである。

⁴⁸ 同経第一章「十善業道品」(Chin. T. No. 721, pp. 1-12, Tib. P. No. 953, U 88a1-115a6)を参照。Dīpamkaraśrījñānaは、『十善業道説示』においても、同経に言及している(D. No. 3958, Khi 307b6)。

⁴⁹ 彼による関連文献としては、『正法念処頌』(Tib. D. Nos. 4179, 4502, P. Nos. 5415, 5679)、『十善業道説示』(Tib. D. Nos. 4176, 4504, P. Nos. 5417, 5676)がある。

⁵⁰ Chin. T. No. 1579: 630a25-bl. また、本地分の「有尋有伺等三地」(T. No. 1579: 315a22-317a12, Skt. Bhattacharya 1957: 170-180)にも説かれている。

⁵¹ *Abhidharmakośa* 4.120.

それら以前になされた何らかのものが業であり、以前のその前のものが熟するのである。

また、

よく意を把握することと その業が新たになされることと、繰り返しなされることにより慣れ、その中から何れかを以前に受用している。

見える法から受けることと、生まれ変わってから受けることと、他の生において受けることと、必ず受けるであろうかは確定していない。

業は白と黒と [それらが] 混ざった業との三種であり、経典と論書に明らかにされている。

それ故に、

諸業は百劫にわたっても尽きることなく、確かに集積してから異熟した後の有身のものたちに、結果として示すのである。

と言われている。そのようなものも確かに信頼される。

五趣の一切の生きるものと、この世界に生まれたものは十善を行った。徐々に善い師に頼った後に、無漏の戒を得なさい。

7 奥書き

『業分別論』という軌範師で大賢者のディーパンカラシュリージュニャーナによる著作を完成する。

インドの学者自身と主校翻訳官で比丘のツルティム・ゲルワが翻訳、校正をした。

第 15 章 『三昧資糧論』

はじめに

チベット大蔵経のテンギユルの「中観部」には三種の『三昧資糧論 (*Samādhisambhāraparivarta*)』が収められている。最も大きなテキストが Bodhibhadra によるもの¹であり、その著作スタイルを真似てコンパクトな内容にまとめたものが Kṛṣṇapāda によるもの²であり³、最も小さな偈頌で著されたものが Dīpaṃkaraśrījñāna によるもの⁴である。彼ら三人の関係については、チベット仏教史である『テプテル・ゴンポ⁵』によると、前二者が Dīpaṃkaraśrījñāna の師であったと伝えられている⁶。同一の伝承に属する三名が著した同一名のテキストには、相互に何らかの関係があった可能性もある。本章では、これらの三種の『三昧資糧論』の関係を考察し、最後にその和訳を提示することにする。

Bodhibhadra の『三昧資糧論』の構成

本論の主題は、三昧を行う上での必要事項をまとめたものであり、瞑想修行のための準備段階とその実践が主要テーマとなっている。テキスト全体の構成は、その冒頭に次のように述べられている。

そして三昧の資糧の支分は九種である。すなわち、(1) 捨てるべきものと、(2) 前行と、(3) 退けるべきことと、(4) 苦悩を断じることと、(5) 意を生じさせることと、(6) 功德を記憶すべきことと、(7) 精進すべきことと、(8) 結びつけるべきことと、(9) 住する方法と言われるものである。

¹ Vīryacandra, Chos kyi shes rab 訳. Tib. D. No.3924, Ki 76b7-91a6; P. No.5319, A 87a8-100a8; Dolkar 2004:31-99.

² Nag po shabs, Chos kyi shes rab 訳. Tib. D. No.3925, Ki 91a7-92b7; P. No.5320, A 100a8-102a6; Dolkar 2004, pp.101-108. 彼については、石田 2004:57-58 を参照。訳者のもう一人は、Bodhibhadra のテキストのチベット人翻訳者でもある。

³ Dolkar 2004 には、この二論のチベット語訳校訂テキストとヒンディー語訳が掲載されている。

⁴ Dīpaṃkaraśrījñāna, Shākya blo gros 訳. Tib. D. No.2460, Zi 134b6-135a6, No.4485, 37b2-38a3; P. No.3288, Tshi 169a2-b5, No.5398, Gi 46b8-47b2; Negi 1992, pp.72-75.

⁵ 羽田野 1987:72. ただし羽田野は、Nag po zhabs chen po を Mahākṛṣṇapāda (Baliṃ Acārya?) とし、Byang chub bzang po について、Bodhibhadra とは別人であるとする。Dīpaṃkaraśrījñāna の伝記における、Bhadrabodhi という記述を参考にすると、そのサンスクリット名については注意が必要である。

⁶ Dīpaṃkaraśrījñāna の伝記である『詳伝 (*rNam thar rgyas pa*)』と『詳伝一般 (*rNam thar rgyas yongs grags*)』の記述によると、Bodhibhadra との関係は Eimer 1979, 012, 034, 048 に師の一人として列挙されており、Kṛṣṇapāda との関係は Eimer 1979, 021 に Yamāri の教えの相統者としてあげられている (下線はアイマーによるセクション番号)。Cf. 望月 2005b:2.

この記述に基づいて、三昧の資糧が九つのセクションに分類されている。そこで論じられる内容を示すと、次のようになる。

0 概略 (D. Ki 79b1)

1 捨てるべきも (D. 80a4)

1.1 魔 (D. 80a4) : (1) 蓮華の鬘をもつ欲天、(2) 四世間守護、(3) 魔種の餓鬼

1.2 魔の業 (D. 80a5)

1.2.1 欲天の業 (D. 80a5) : (1) 自慢すること、(2) 障害となること、(3) 普く障害となること、(4) 沈めること、(5) 無心にする事

1.2.2 四世間守護の業 (D. 80a7) : (1) 論争させること、(2) 散乱させること、(3) さらに執着させること、(4) 想を顛倒させること

1.2.3 魔種の餓鬼の業 (D. 80b7) : (1) 夢中で恐怖を起こさせること、(2) 禅定を中断させること、(3) 禅定中に大声で叫ばせること

1.3 魔の業は精進から生じる (D. 81a3)

1.4 魔の業を退ける (D. 81a5)

1.5 邪魔 (D. 81a7) : (1) 天子の魔、(2) それ以外

1.6 邪魔を退ける方法 (D. 81b1)

2 前行 (D. 81b3)

聞の智慧

3 退けるべきこと (D. 82a1)

多聞から退くこと→有情利益のための神通を得る

4 苦悩を断じること (D. 82b1)

戲論を捨てること

5 意を生じさせること (D. 83a6)

無執着

6 功德を記憶すべきこと (D. 84b6)

三昧の功德の記憶

7 精進すべきこと (D. 85b3)

功德の対治を意識することで功德を広げること

8 結びつけるべきこと (D. 86a6)

止と観、方便と智慧の双運

9 住する方法 (D. 87a7)

9.1 場所に相応しい食物と行道に相応しい衣服と友人

- 9.1.1 相応しい場所 (D. 87a7)
- 9.1.2 相応しい食事 (D. 87b5)
- 9.1.3 相応しい友人 (D. 88b2)
- 9.1.4 相応しい衣服 (D. 88b6)
- 9.1.5 随順する行道 (D. 89a1)
 - 9.1.5.1 よく住すること (D. 89a2)
 - 9.1.5.2 苦を制圧すること (D. 89a5)
 - 9.1.5.3 特別な行道 (D. 89b3)
- 9.2 ヨーガによる心の平静 (D. 89b7)
- 9.3 止 (D. 90a3)
 - 9.3.1 内観により得られるもの (D. 90a4)
 - 9.3.1.1 身体を対象とすること (D. 90a4) : (1) 天の相、(2) 不浄、(3) 特殊な相
 - 9.3.1.2 身体に依存するもの (D. 90a5) : (1) 呼吸、(2) 微細な相、(3) 精液、(4) 光線の支分、(5) 喜樂
 - 9.3.2 外観を対象とすること (D. 90a6)
 - 9.3.2.1 特殊なもの (D. 90a6) : (1) 身体、(2) 言葉
 - 9.3.2.2 共通なもの
- 9.4 観 (D. 90b1)
- 9.5 無分別智 (D. 90b4)
- 10 まとめ (D. 91a4)

本論で述べられる内容は、冒頭の三昧の資糧を九つの分類したものにに基づき、それぞれの項目に対する経証を提示したのものである。そこで引用される経典は、十四度の『妙臂菩薩所問経 (Subāhupariṣcchāsūtra)』を筆頭に、三度の『忿怒勝義儀軌秘密タントラ (Krodhaviṣayakalpagaḥyatantra)』などの密教経典が目立っている。ただし、その引用内容は密教独特の教義を述べたものを引用しているわけでもない。大乘経典に関しては、四度の『入法界品』と二度の『十地経 (Daśabhūmikāsūtra)』が複数回引用されている。論書では、Śāntideva の『入菩薩行論』が十三度引用され、最も多い。この他には、Nāgārjuna¹⁹⁾の『親友書翰 (Suhṛllekha)』が五度、Saraha の『ドーハー・コーシャ (Dohākośa)』が三度、Candragomin²⁰⁾の『弟子書翰 (Śiṣyalekha)』が二度引用されている。このようなことから、彼は中観の教義の上にタントラの実践を取り入れようとしたという印象が得られる。前者は、中観思想の核となるテキストではなく、その修行体系に関するものであものの、少なくとも Bodhibhadra は、この両者が並立するもので

あると認識していたように思える。

しかしながら、彼が顕教では中観思想の立場に立っていたと断定することには、慎重な判断を要する。ここで引用される中観論書はその思想的立場を代表するものは引用されておらず、むしろ止の文脈で重要な役割を果たしているのは、瑜伽行唯識思想の『中辺分別論 (*Madhyāntavibhaṅga*)』であり、『大乘莊嚴經論』の引用も見られる。このようなことから、**Bodhibhadra** の思想的立場は、やはり **Dīpaṃkaraśrījñāna** と同様に、瑜伽行の修行体系の上に中観思想を成立させ、**Nāgārjuna** と **Asaṅga** の両立させるものであったように思える。この背後には、真言乗の実践も否定しないものとなるであろうが、このような判断は、彼の他の著作内容を検討した上で判断すべである。

Dīpaṃkaraśrījñāna が言及する **Bodhibhadra** の『三昧資糧論』

Bodhibhadra を自らの師の一人であると宣言する **Dīpaṃkaraśrījñāna** は自らの著書においてしばしば **Bodhibhadra** とその著書に言及する。『菩提道灯論』161-162 では、

それ故に、『三昧資糧論』に説かれた支分によくとどまり、

と述べられており、同論に説かれる九つの支分に言及する。同じく、181-184 の、

智慧波羅蜜を除く布施波羅蜜などの善の資糧のすべてを勝者は方便と解説している。

という偈は、その自注の『菩提道灯論細疏』では **Bodhibhadra** の言葉とされている⁷。この注釈書では、律儀の解説において **Bodhibhadra** の『菩薩律儀二十論細疏⁸』からの引用と並んで、神通の解説において『三昧資糧論』が十一度⁹引用されている¹⁰。続く止を説く偈に対する注釈箇所においても、**Bodhibhadra** が説いた九支分に言及し、同論が引用されている。同論の引用だけでなく、『ドーハー・コーシャ』や『中辺分別論』な

⁷ 望月 2015a: 126.

⁸ *Bodhimārgadīpaṃjīkā*, Tib. D. No. 3948, Khi 258a7, 259b7, 265b6, 266a6, 267a1, 267a1, 267a2, 268b2, 271b3 の八箇所である。引用される箇所は、*Bodhisattvasaṃvaraviṃśakapaṃjīkā*, D. No. 4083, Hi 186b4-6, 186b2-4, 217a3-b4, 202a5-6, 194b6, 194b7, 186a6-b1, 217a4-b2 となる。

⁹ *Bodhimārgadīpaṃjīkā*, Tib. D. No. 3948, Khi 273b6, 273b7, 273b7, 274b4-5, 274b6-7, 276b7-275a1, 275a1-3, 275a7-b4, 275b4-5, 275b5-6, 275b6-7 の十一箇所である。引用される箇所は *Samādhisambhāraparivarta*, D. Ki 82a1-2, 82a7-b1, 84a2-3, 80a3-4, 87a7-b1, 89b3, 90a1-3, 90a3-7, 90b5, 91a3-4, 90a7-b1 となる。

¹⁰ この他に、**Bodhibhadra** の名前の言及については、gSer gling pa との並記 (Tib. D. No. 3948, Khi 242b6, 250b2)、中観の教義の継承者としてのもの (D. No. 3948, Khi 280a6, 282a3, 283a7) などがある。

どの引用文献なども **Bodhibhadra** のテキストと重なる部分もある。これらのことから『菩提道灯論』とその自注における神通から止への文脈は、その引用経論も含めて、**Bodhibhadra** の『三昧資糧論』に基づいて著されたことは明らかである。

その他にも、『入菩薩初学道説示¹¹』では、前述の同論の九支分が言及されている。また『大乘道成就語句撰集』319も、**Bodhibhadra** の『三昧資糧論』を学ぶべきである、と説いている¹²。これらのことから、同論は **Dīpaṃkaraśrījñāna** にとって重要なテキストの一つであったことがわかる。

Kṛṣṇapāda の著作

チベット大蔵経には **Kṛṣṇapāda** に帰される著作¹³のうち、タントラに関係する著書は五十六を数え上げることができる¹⁴。その一方で『三昧資糧論』と同じく顕教に関する著書としては、次の五書が中観部に収められている。

『中観縁起 (*Madhyamakapratītyasamutpāda*)』 (P. No. 5257)

『入菩薩行難解処決定書 (*Bodhisattvacaryāvatāraduravabodha[-pada-]nirṇayanāma-grantha*)』 (P. No. 5276¹⁵)

『身遍観修習次第 (*Kāyaparīkṣābhāvanākrama*)』 (P. Nos. 5316, 5455)

『三昧資糧論 (*Samādhisambhāraparivarta*)』 (P. No. 5320)

『三蘊成就法 (*Triskandhasādhana*)』 **Dīpaṃkaraśrījñāna**, Tshul khriṃs rgyal ba 訳 (P. No. 5509)

また、彼は翻訳者としても知られ、真言乗の文献の翻訳としては、二十三書を数え上げることができる¹⁶。その一方で顕教に関する文献としては、次の五書が中観部に収められている：

『入菩薩行難解処決定書』 (P. No. 5276)

¹¹ Tib. D. No. 3952 (= 4477), Khi 297a.

¹² 望月 2005a: 58. ただし、この句を一般名詞として「三昧の資糧を学ぶべきである」と読むこともできる。

¹³ ただしその著者名の表記については、**Nag po**, **Nag po pa**, **Nag po zhabs**, **Kṛṣṇa pa** というものが見られ、これらから **Kṛṣṇapāda** というサンスクリット名が想定される。Dolkar 2004: 9 は、彼を八十四密教行者の一人である **Kāṅhapa** (= **Kṛṣṇacārin**) とする。

¹⁴ 北京版の番号のみを列挙すると、次のようになる：Nos.2164-2170, 2177, 2251, 2313, 2317, 2325, 2381-2389, 2430, 2507, 2509, 2512, 2683-2686, 2811, 2819, 2820, 3032, 3035, 3127, 3139, 3215, 3318, 4543, 4664, 4667, 4818, 4822, 4961, 4974, 4976-4980, 4987, 4989, 5029, 5134, 5180, 5181.

¹⁵ 本論については、石田 2004 を参照。

¹⁶ 北京版の番号のみを列挙すると、次のようになる：76, 134, 2148, 2150, 2381-2384, 2387, 2650, 2682-2686, 3118, 3725, 3318, 3891, 4534, 4543, 4687, 4822.

『身遍観修習次第』 (P. No. 5316, 5455)

『三昧資糧論』 (P. Nos. 5320, 5445)

Ratnākaraśānti『経集解説宝光荘厳論 (Sūtrasamuccayabhāṣya-ratnālokālamkāra)』 (P. No. 5331¹⁷)

*Guhyajetāri『初学地修観 (Ādikarmikabhūmiparikṣā)』 (P. Nos. 5341, 5407)

いずれも中観部に収められているが、最初の三書は自らの著書の翻訳でもある。これらの情報から、彼は密教論者である一方で、顕教としては中観の修習法に関心があったように思える。もちろん、このことは後代のチベット大蔵経の編纂者が彼の論書の中観部に収録したことによるが、このような傾向は他の二つの『三昧資糧論』の著者である Bodhibhadra と Dīpaṃkaraśrījñāna と同じものである。この秘密行中観派と命名¹⁸できるような思想系譜は、三者の関係を裏付けるものでもある。

Kṛṣṇapāda の『三昧資糧論』の内容

Kṛṣṇapāda の『三昧資糧論』の内容も、Bodhibhadra の『三昧資糧論』の内容と同じように、三昧のための資糧を支分ごとに分類したものである。それを列挙すると、次のようになる。

1 前行

1.1 根本に対する信

1.2 善知識への依存

1.3 尊敬をすること

1.4 大きな心

1.5 精進

1.6 失望しないこと

1.7 自慢を捨てること

2 高貴なあり方を損なわないこと

2.1 他者の過失を考察しないこと

2.2 自分の功德を自慢しないこと

2.3 恥を知ること

¹⁷ Tshul khriims rgyal ba 訳. Cf. 望月 2005e, 2006e, 2007d, 2008e, 2009, 2010.

¹⁸ もちろん私自身によるものだが、このような命名がすでに先人によってなされていて何の不思議もないものであり、その場合は私の知識不足である。

- 2.4 三律儀を行うこと
- 2.5 力をもって住すること
- 2.6 タントラを量として修行すること
- 2.7 不殺生
- 3 障害を捨てること
 - 3.1 少欲知足
 - 3.2 食欲の増大を捨てること
 - 3.3 怠惰を捨てること
 - 3.4 過多を知ること
 - 3.5 大義に入らないこと
 - 3.6 非如理をなそうとしないこと
 - 3.7 対治に行く者に頼ること
- 4 自分で自分を鼓舞すること
 - 4.1 人身と仏法を宝と思うこと
 - 4.2 その成就是大きな意味をもつと思うこと
 - 4.3 世間の所作は無意味だと思うこと
 - 4.4 他者の苦を自分の対治を思うこと
 - 4.5 魔の掌握と死を思うこと
 - 4.6 積集を知るべきこと
 - 4.7 自分の皺や白髪を考察しない
- 5 欲望を中断する支分
 - 5.1 仏智をすべて述べることはできないこと
 - 5.2 人が喜び難いことを思うこと
 - 5.3 愛憎を捨てること
 - 5.4 兄弟や朋友は客人の道をまとめたもの似ていると思うこと
 - 5.5 利得と尊敬などは誘惑するものであると知ること
 - 5.6 利得と欲望などは毒や武器と同じであると知ること
 - 5.7 内外の事物を幻のように考察すること
- 6 目的を速やかに成就する支分
 - 6.1 寂処に住むこと
 - 6.2 天を喜ぶこと
 - 6.3 精進を強くなすこと
 - 6.4 期待と懷疑と欲望と恐怖を捨てること

- 6.5 誓願を成就させること
- 6.6 夢などに対して悲喜を起こさないこと
- 6.7 夢の意味を知ること
- 7 身体を護り損害を明らかにする支分
 - 7.1 衣服と食物と薬などの適切なものを行じること
 - 7.2 人と非人を損害から護ること
 - 7.3 適切な場所に住すること
 - 7.4 身体と心を疲労させる行為をなさないこと
 - 7.5 夜中と正午と病気の時に精神集中の努力をしないこと
 - 7.6 疲労時に哀痛を滅除すること
 - 7.7 ヨーガによる身体の等至
- 8 補足の支分
 - 8.1 怠惰などが生じた際にその対治を起こすべきである
 - 8.2 身体や心に損害が生じた際にそれらを治すべきである
 - 8.3 師の許可などがあつたらタントラの四行を知るべきである
 - 8.4 煩悩ではないものなどを経典から知るべきである

三昧資糧を七つの支分の七項目に分類したというスタイルは **Bodhibhadra** の分類に基づいたものと言える。これに補足項目として第八番目の支分として四項目が添えられている。ここに示した項目は、そのまま実際の著書のほぼ全内容にもなるものである。

Dīpaṃkaraśrījñāna の『三昧資糧論』の内容

前二書と異なり、**Dīpaṃkaraśrījñāna** の『三昧資糧論』は、四十五パーダからなる偈頌で書かれたものである。この十一偈にあたるテキストの内容を、便宜上まとめると次のようになる。

- 1 菩提心を堅固にすること [1-4]
- 2 正法の行を精進すること [5-8]
- 3 成就の増益 [9-12]
- 4 マントラの理趣に住すること [13-24]
- 5 三昧の支分 [25-43]
- 6 まとめ [44-45]

最初の菩提心は、著者が他の著書でも強調する項目である。ここで注目すべきことは、著者が三昧をマントラの理趣と同一レベルにあるものと捉えていることである。また、三昧の支分の細目については、戒、忍、正知、随念、五障の捨、食事の量を知ること、行道、等心、器物の滅となる。

三昧資糧とは何か

以上に見てきた『三昧資糧論』の内容から、彼らが述べる「三昧資糧」とは何かを考えてみる。

まず **Bodhibhadra** による著作内容を簡単に示すと、(1) 魔の業を捨て、(2) 聞智の前行をなし、(3) 多聞を退けて神通による利他をなし、(4) 戲論を捨てることで苦悩を断じ、(5) 衆生に対する思いを起し、(6) 三昧の功德を記憶し、(7) 功德の対治を意識して精進し、(8) 精進により方便と智慧を結びつけて空性を修習し、(9) 三昧に相応しい場所で止観を行じることで無分別智を得る、となる。基本的には聞思修の三学を基本としており、三昧資糧とは止観行に至る修習をまとめたものとなる。このような在り方は、先行する **Kamalaśīla** の『修習次第』の構成に基づいたものである。

続いて、**Kṛṣṇapāda** による著作内容を示すと、(1) 前行をなし、(2) 高貴なあり方を損なわず、(3) 障害を捨て、(4) 自身を鼓舞し、(5) 欲望を断じ、(6) 目的を成就し、(7) 身体を護る、となる。ここにも前行という項目がも設けられているが、その詳細は前書とは異なっている。続く項目においても細目は異なっているが、最後に具体的な三昧のあり方が述べられている点は類似している。

最後の **Dīpaṃkaraśrījñāna** によるものについては、25-43 に列挙される項目が彼にとっての三昧資糧となる。そこに述べられる教義を並べると、(1) 戒、(2) 財富を見ないこと、(3) 忍の誓願、(4) 混乱の捨、(5) 業の正知、(6) 仏への尊敬と賞讃の記憶、(7) 随念の堅固、(8) 五障の捨、(9) 食事の量を知ること、(10) 行道、(11) 心の等至、(12) 器物の滅となる。前二書に比べると、全体の構成を考えた上でこれらの細目が設定されたという印象は得られず、むしろ三昧のための資糧を講義する際に、これらの項目が口述されたように思える。

これらの論書に共通する内容としては、前半に三昧の資糧となる具体的行為があげられている。それらは、三昧に対する否定的な要素の排除と、肯定的な行為の推奨である。しかしながら、これらは三昧という行為に限定されるものではなく、六波羅蜜に共通するものもあり、広く菩薩行の項目で並べても違和感はないものである。しかしながら、最後には三昧に関する項目が述べられており、菩薩の修習としての三昧をまとめた形になっている。

まとめ

これらの三種の『菩提資糧論』の関係は、どのようなものであったのだろうか。まず三者の関係は、チベット資料によると、Bodhibhadra と Kṛṣṇapāda は Dīpaṃkaraśrījñāna の師とされていることから、最後の著者によるものが最も新しいものであると推測できる。Bodhibhadra の著作と Kṛṣṇapāda の著作は、内容の構成は類似するものの、その細目に関しては異なっている。それが意図的なものかどうかは不明であるが、著者自身の解釈を述べたものとなっている。その一方で、Dīpaṃkaraśrījñāna による著作は小論であるために断定はできないが、前二書との関係は薄いように思える。もちろん先行する著書を読んでいた可能性があるが、同論を著す際に、それらのタイトルは念頭にあったものの、その内容を記憶した上で著述したものとは思えない。

最後に、これら三書の内容をまとめると、Bodhibhadra と Kṛṣṇapāda のものは密接に関係しており、Dīpaṃkaraśrījñāna によるものはそのタイトルのみを借用して著されたように思える。

Bodhibhadra の『三昧資糧論』和訳

インドの言葉で、*Samādhisambhāraparivarta*

チベットの言葉で『三昧資糧論』

仏と菩薩のすべてに敬礼する。

0 序

存在する限りおられる仁王の御子がおられる方々に敬礼して、真言の経典と般若経典に従う三昧資糧の頌が述べられる。

現在の人ほとんど魔の釣針により捕らえられ、家という監獄にしっかりと入っている。魔の世間の四守護が行進することにより護られ、愛欲などの束縛によりとてもしっかりと縛られている。律儀を始めた者たちもほとんど魔の世間の四守護に支配され、沙門の場所と理趣を捨てた在家の者たちと行が同じである悪趣の深淵に明らかに向かい、天上を捨てるであろう。それ故に、これは自分自身の記憶のためになすが、利他を望むことはない。それでも自分と同分の者がいるこの場所を喜ぶならば、正しい理解により述べるこれを聞きなさい。

そして三昧の資糧の支分は九種である。すなわち、(1) 捨てられるべきものと、(2) 前

行と、(3) 退けられるべきことと、(4) 苦悩を断じることと、(5) 意を生じさせることと、(6) 功德を記憶すべきことと、(7) 精進すべきことと、(8) 結びつけるべきことと、(9) 住する方法と言われるものである¹⁹。

1 捨てるべきもの

そのうち捨てられるべきものは魔の業である。その魔とは何か、その業は何か、と言うのならば、魔とは、「罪をもつ」と言う妻の蓮華の鬘をもつ欲天と、四種の周りの世間を護るものと、魔の種である餓鬼をともなうものである。

それらの業は、その妻がもつ頭上に五つの花の矢がある欲天は、こうである。すなわち、「自慢をすることと、障害となることと、普く障害となることと、沈めることと、無心になすこと」と言うものである。その花がそれらを刺して傷つけてから、五煩惱の大部分をそれが傷つけるだけで燃え上がるだろう。その勢力に至って、解脱と明高を損なうであろう。

その四種の周りの世間を護るものは、この通りである。すなわち、「論争をさせることと、動かすことと、さらに執着することと、想を顛倒させること」と言うものである。それらの魔の業は種々である。

このように、その論争をさせる魔は、道を修習する者たちを論争と論難と争いに入らせ、その縁を努力により成立させる。

その動かす魔は、道を修習する者たちの睡眠と昏睡を広げたり、法を聞く者たちも睡眠に結びつけたり、ある者の心を散乱させながら留まっている。

さらに執着する魔は、一般に家に住するものを中断させるもので、布施の時に近くにおいて、「息子と娘と妻と自分自身を何かに利用する」と言って、自分の肉を切断しようという思いを近くに成立させるる。

想を顛倒させる魔は、一般に出家者の方向を破するもので、このように出家の心が近くにある際に、性交の楽しみと、食物と飲物の楽しみと、自分の人の集まりと、歌舞などの記憶による愛着と、その自分の人による誘惑と詐欺と威嚇と捕獲によりその出離を中断させることに入る。出家者たちにも女性の姿を思うことと、先に笑うことと、遊びを記憶することと、交易と農業と、自分の結合と意を許せるべき心を起こし、夢の中で女性に変化し、それにより愛着と種子を生じさせ、種々なるものによっても出家から降下し、彼らの梵行を有垢なものにする。

これらの四つと、ジャンブードヴィーパの者たちを苦しめるために凶暴な龍たちを勧

¹⁹ *Bodhimārgadīpapañjikā*. Tib. D. No. 3948. Khi 274b4-5. 望月 2015a: 118.

請し、非天たちを勧請し、収穫を腐らせ、非法をもつ者の命を奪い、身体に種々なる病気を与える。例えば、四王が非法を修行する者たちに罰を与えるように、これらは法をもつ者たちに対して罰を与えている。

魔の種の餓鬼は、餓鬼の三十六種からこれらを一つの種に計算したものである。それらの魔の業は、禪定をなす者たちの夢の中で恐怖を起こし、仏身の相と種好による飾りを近くに示すことで中断させ、禪定で瞑想する際に大声で叫ぶことをなす。まとめれば魔と魔の種に属するものたちは正しく入るすべての者に執着を起こさせ、恐怖を起こさせることにより中断させている。

そのようにまた、『忿怒勝義儀軌秘密タントラ』に、

尽きることのない禁行を保持する成就に魔の種がある。天女が望む身体と同じく他の身体でも種々なる相をもつ身体により根が縛られたものを損なう²⁰。

と説かれており、ここに禁行が近くに設定される。業に相応するすべての心に対しても、それは近くで損なうことをなす。

そのようなそれらの魔の業は何から生じるのか、と言え、想を浄化することで正しい精進から生じる。例えば、『聖文殊師利神變経』に説かれている。

「マンジュシュリーよ、菩薩の魔の業は何から生じる、と知るべきか」。マンジュシュリーが言う。「天子よ、菩薩の魔の業は精進から生じる、と知るべきである。それは何故か、と言え、不精進な者に対して魔が何をなすべきか。それ自身が魔であるから²¹」。

と述べられている。そのように、魔の業を知ることによりそれを退けるべきである。例えば、『聖天子最勝宝所問経』に説かれている。

何時であれ魔の業を考察するそのような場合には、罪過は存在しない。魔の業を退けたものはそのような欠点がないものである²²。

と述べられている。それを退けずに、解脱は得られないだけである。例えば、『聖妙臂

²⁰ *Krodhaviṣṭakalpaguhyatantra*. Tib. D. No. 604, Pha 286a3.

²¹ *Mañjuśrīvikurvāṇaparivartasūtra*. Tib. D. No. 97, Kha 242b4. Cf. 一島 1990, pp. 338-339.

²² *lHa'i bu rin po che mchog gis zhus pa*.

菩薩所問經』に説かれている。

邪魔は、福德を残らず尽くしてしまう。それ故に、人に真言を成立させない。例えば、月が雲から抜けるように、そのように邪魔から解放されることを明らかにする²³。

と述べられ、ここに邪魔も二種である。完全なる菩提を破壊するために結合する天子の魔とそれ以外のものとであり、例えば、『聖妙臂菩薩所問經』に、

施食を望み、遊戯をなそうとし、秘密のために身体を下げてる²⁴。

と述べられ、ここにその両者を退けるべきである。いかなる方便により退けられるのかと言え、例えば『秘密金剛頂大瑜伽タントラ』に説かれている。

「自分の心が魔である」と説かれている。自分の心自身が邪魔である。一切の分別を捨てるべきである。邪魔は、すべて分別から生じる²⁵。

と述べられている。さらにまた、魔の業を退ける方法は、『聖無憂施授記經²⁶』と『聖獅子所問經²⁷』から知るべきである。これは捨てるべき支分である。

2 前行

誰であれ聞の自性により智慧を起こしていない者は、魔の業を退けることができず、心の等至もあり得ないので、最初に聞性を先行させるべきである。例えば、

智慧を広げることが聞である。思との二つが存在するならば、それから修を合わせるべきであり、それから無上の成就を得る。

と解説されており、『聖菩薩十莊嚴説示品』にも、

²³ *Subāhupariṣcchātantra*. Tib. D. No. 805, Wa 125a4.

²⁴ *Subāhupariṣcchātantra*. Tib. D. No. 805, Wa 140a3.

²⁵ *Vajrasekharamahāguhyayogatantra*. Tib. D. No. 480, Nya 205b2.

²⁶ *Aśokadattavyākaraṇasūtra*. Tib. D. No.76.

²⁷ *Seng ge lung bstan pa. Siṃhupariṣcchāsūtra*. Tib. D. No. 81.

ああ、王子よ、その初学者の菩薩は、最初のものとして読経に励むべきである。多く聞いてから寂靜に住することを励むべきである²⁸。

と説かれており、その意味のように、『聖郁伽長者所問經²⁹』と『聖方広總持宝光明經³⁰』に説かれている。そのように『聖入法界品』にも、

最初に聞こうとする師に奉仕することに耐え、それによりなされ、無自性の法を正しく理解する禪定を得て、善逝たることを考察する有情は飢渴の心を制圧し、その法性と同じように修行して速やかに善逝を得るであろう³¹。

と説かれている。そのように『聖声聞波羅提木叉經』にも、

多く聞いて森の中で青年期を過ごす者たちの住処は樂である³²。

と説かれている。それ故に、聞の智慧自身は目的を成就させる前行である。これは前行の支分である。

3 退けられるもの

そのように聞をもつその菩薩は説法に入ることを退けるべきである。というのは、神通を得ずに多聞だけにより他者の利益を勝者は説かれていない³³。それ故に、『聖菩薩十莊嚴説示品』に、

その初学者の菩薩は、最初のものとして読誦を奨励される。多くを聞いてから寂靜処に住することを奨励される。寂靜処にとどまる者になってから善知識となることを奨励される。善知識となってから我々の年を楽しむことを奨励される。我々の年を楽しんでから時を知ることが奨励される。時を知ることになってから無畏を奨励される。無畏になってから意味を知ることが奨励される。意味を知る者になってから法に従うことを奨励される。法に従う者になってから障害がないことを奨励される。障害がないものになってから笑うことを奨励される。それは何故か、と言え

²⁸ Tib.: *Byang chub sems dpa'i rnam par dgod pa bcu bstan pa'i le'u*. Tib. D. No. 44, Ka 247a3.

²⁹ *Gṛhapatyugrapariṣchāsūtra*. Tib. D. No. 63.

³⁰ *Ratnolkādhāraṇīsūtra*. Tib. D. No. 145.

³¹ *Gaṇḍavyūhasūtra*. Tib. D. No. 44, Ka 203a1.

³² *Prātimokṣasūtra*. Tib. D. No. 2, Ca 2b3.

³³ *Bodhimārgadīpapañjikā*. Tib. D. No. 3948. Khi 273b6-7. 望月 2015a: 116.

ば、それによっても大部分において一切衆生への大悲が先に設定され、どんな場所で聞いても、それを自分自身で修行し、自分と他者の信頼に頼るべきではないからである。ああ、王子らよ、これは初学者の菩薩の笑うことである³⁴。

と説かれている。この同じ意味は『聖郁伽長者所問經』と『方広総持宝光明經』にも説かれている。さらにまた、『聖発志樂所問經』にも、

「私は成就を損なった今、何をなすべきなのか」と童子は死の時に困難をなす³⁵。

などと多くを聞いた者が寂靜に頼らずに法を説いたならば、とても多くの過失の相が説かれているので、それを正確に見るべきである。それ故に、多聞だけでは法は説かれず、それから退いて神通を得て初めて有情の利益がなされる³⁶。これは退けるべき支分である。

4 苦悩を断じること

そのように説法から退き、戲論を捨てるそのことは、こうである。それでも自分が蘊を知っても完全に到達することはない。界と処に巧みであっても成就には到達しない。それらを知ることがなければ、解脱も得られない。例えば、『大乘莊嚴經論』に]、

五明処を精進せず、最高の聖者にも一切智性は成立しない。それ故に、他者を責めることを保持し、自分で普く知るべきなので、それを彼は精進する³⁷。

と説かれているから、と考えて、さらにまた弟子との学ぶ関係と、利得と尊敬と名声と言葉と偈頌の楽しみを望むことを浄化すれば、それは確実に退けられる。法を聞いてから修習することにより浄化されないならば、何も賞讃されない。例えば、『聖入法界品』に説かれている。

この正しい仏の説法は、聞だけでは成立できない。例えば、河により力なく流されてしまう者が溺れて死んでしまったように、修習されない法もその如くである³⁸。

³⁴ *Gaṇḍavyūhasūtra*. Tib. D. No. 44, Ka 247a3.

³⁵ *Adhyāśayasāñcodanasūtra*. D. No. 69, Ca 145b3.

³⁶ *Bodhimārgadīpapañjikā*. Tib. D. No. 3948. Khi 273b7. 望月 2015: 116.

³⁷ *Mahāyānasūtrālamkāra* 11.60.

³⁸ *Gaṇḍavyūhasūtra*. Tib. D. No. 44, Ka 207b3.

と述べられ、また、[同経に] 説かれている。

例えば、大海で瞑想する者がすべての人を救っても、自分自身の中で死んでしまうように、修習されない法も、その如くである³⁹。

などと言う修習により浄化しない過失がとて多く説かれており、詳細は同じものから知るべきである。それ故に、心を瞑想に設定できる者は、教授だけで満足して心の性質が一瞬にして生じても、師に尋ねて修習すべきである。因明学の七論と声明学の四論とアビダルマ七論書と『声聞地』などの相により意は乾かない。例えば、『ドーハー・コーシャ』に、

誰であれ師の教授という甘露水を望むことなく涼しさに満足して飲まない者は、論書という多義の砂漠の平原で渇きに苦しんで死ぬ⁴⁰。

と解説されており、無量劫にわたり疲れてしまっても、言説を近くに結びつけたものは尽きることがないが、寿命に到達してしまう。それ故に、『外部ヘルカ』にも、

ヨーガ行者は外を巡り、その界に尽きるであろう。それ故に、外部をすべて捨てて、ヨーガの側により住すべきである⁴¹。

と説かれている。そのように、『ドーハー・コーシャ』にも、

諸対境を彷徨い、欲望により苦しめられても、サハジャを得ない者は過失により捕らえられている⁴²。

と解説されている。蘊と界と処を知ることもヨーガの力により同一時に成立するが、それらを次第に学ぶことからではない。例えば、『聖金剛頂』に、

³⁹ Tib. D. No. 44, Ka 207b7.

⁴⁰ Tib.: *Don dam pa'i rigs pa. Dohākośa* 44. Tib. D. No.2224, Wi 73b7. 奈良 1965: 31.

⁴¹ Tib.: *bDe mchog phyi ma.*

⁴² *Dohākośa.* Tib. D. No. 2224, Wi 74a7.

それから知が生じるであろう。聞かなくても知るであろう⁴³。

と説かれており、『妙臂菩薩所問經』にも、

言葉は把握される意味があり、精通することで、修辭学とは書くことに長けていることである⁴⁴。

と説かれている。これらもヨーガの力から生じたものであるが、順番に学ぶ機会ではない。『阿毘達磨俱舍論』にも、

尽きることを知ることは有漏であっても⁴⁵。

と説かれている。利得と尊敬という欲望を望むことは、意を生じる支分から知るべきである。これは苦悩を中断する支分である。

5 意を生じること

一切の相において衆会への意を生じることなく修習することでは浄化をなすことはできないので、それへの意を起こすべきである。例えば、『入菩提行論』に解説されている。

最初に止を求めるべきであり、それはまた世間に対する無執着を喜ぶことによる成立する⁴⁶。

と説かれており、ここで友人を明らかに喜び、敵を嫌うことによる執着と、無病と年齢などに対する執着と、自性による有に対する執着と、利得と尊敬と名声と声と偈頌に対する執着は捨てられるべきである。例えば、『妙臂菩薩所問經』に説かれている。

しばらくすれば敵も朋友になり、朋友も敵にもなるものである。そのように、ある者も中間になり、その中間の者も敵になり、そのように朋友になることを知ってから、知恵をもつことで決して執着すべきではない。友人を喜ぶ心の考察を退けて

⁴³ *rDo rje gtsug tor*. Cf. *Dhyānottaraṇālakrama*. Tib. D. No. 808, Wa 225a6.

⁴⁴ *Subāhupariṣcchāntra*. Tib. D. No. 805, Wa 127b4.

⁴⁵ *Abhidharmakośakārikā* 7.26c.

⁴⁶ *Bodhicaryāvatāra* 8.4cd.

から善のうち好ましいものを設定すべきである⁴⁷。

と言われる。聖ナーガールジュナ [が『親友書翰』に] も、

父は子になり、母は妻になり、敵は味方になり、反対になることもあるので、それ故に、輪廻する者にはいかなる確定もない⁴⁸。

と解説されている。それ故に、友人と敵に対する執着が完全に捨てられる。そのように、『無常経』に、

無病は無常で、若さは常住でなく、長寿は無常で、円満も常住ではない⁴⁹。

と説かれているので、それらに執着することも完全に捨てられる。利得と尊敬と名声と言葉と偈頌に執着することも捨てられるだろう。次のように、『入菩薩行論⁵⁰』に説かれている。

「私は多くの利得があり、尊敬される。私を多くの人が喜ぶ」というようなことを思う者が衰えたならば、死後に恐怖が生じるであろう。

と述べられ、また同じものに、

利得を得たものが多く生じ、名声が生じても、利得と名声を集めてどこに去ったのか知らない。

私を責める他の者がいるところで、賞讃されて私が喜ぶことがどうしてあろうか。私を賞讃する他の者がいるところで、非難されて喜ばないことがどうしてあろうか⁵¹。

と解説されており、また同じものに、

⁴⁷ *Subāhupariṣcchātantra*. Tib. D. No. 805, Wa 122a2.

⁴⁸ *Suḥṛllekha* 66.

⁴⁹ *Anīyatāsūtra*. Tib. D. No. 309, Sa 155b2-3.

⁵⁰ *Bodhicaryāvatāra* 8.17.

⁵¹ *Bodhicaryāvatāra* 8.20-21.

衆生に利得がなければ非難し、利得があれば軽蔑する。本質的に関係し難い彼らが喜ぶことがどうして生じるであろうか⁵²。

と解説されている。さらにまた、『聖発志樂所問經⁵³』に、利得と尊敬という過失をとても多く説くので、その業を知るべきである。ここに弟子と、また学などに執着することは悲の主体ではない。どのようにそれを捨てることを知るのか、と言え、そうではない。時機ではない悲は低いものである。神通を得ることなく弟子は完全に熟することはできず、自身の死に尽きてしまう。次のように、その『入菩薩行論』自身に説かれている。

衆生の信解は種々である。勝者も満足させられないのに、私のような低い者が何を言えようか。それ故に、世間の者を思うことは捨てられる⁵⁴。

と説かれている⁵⁵。また同じものに、

衆生たちに執着するならば、正しいものに対する障害となる。悲惨に思う心も滅し、最後に困難に苦しめられるであろう。それを思う者はこの時に意味なく過ぎ去るであろう。無常なる友により常住なる法も滅するであろう⁵⁶。

と解説されている。それ故に、弟子などを知る結果による関係と世間の者の言説の関係の両者に対する悲心だけから執着することなく寂靜処に住すべきである。存在に対する自性による執着も捨てるべきである。例えば、『妙臂菩薩所問經』に説かれている。

世間の者に対して虎と蛇と火に似たものを想像してから捨てて、寂靜を喜ぶべきである。女性の相と人の相と薬と象を調べたり星の考察や武器を調べたり馬の考察を自ら作ったり、悪い論書を学んだり読んだりすることを捨てるべきである⁵⁷。

と述べられている。また同じものに、

⁵² *Bodhicaryāvatāra* 8.23.

⁵³ *Adhyāśayasāncodanasūtra*. Tib. D. No.69, Ca 142a5.

⁵⁴ *Bodhicaryāvatāra* 8.22.

⁵⁵ *Bodhimārgadīpapañjikā*. Tib. D. No. 3948. Khi 273b7-274a2. 望月 2015a: 116.

⁵⁶ *Bodhicaryāvatāra* 8.7-8.

⁵⁷ *Subāhupariṣcchāntra*. Tib. D. No. 805, Wa 132b6.大塚 2001: 48.

象と馬と鷺鳥と鳥と犬と雷鳥と山ウズラと家鴨と男性と女性と童子と羊などと、戦いと争いを見るべきではない。変化の話と自在者と依存される者と軍隊と力士と年少の話と寓話と謎語と過去の歴史の話と貪欲と娼妓の話をなすべきではない。秘密のマントラを読誦することに励み、夏の三月は一人で住すべきである⁵⁸。

と出ている。また同じものに、

業の主人たる主体がなく、守護者がなく、所依がなく、世代から世代への身体の相伝に従って行き、その付随する善と不善が随行し、生活と朋友と分かれて、醜いものと結合し、欲望により望み、悪趣に生まれ老と死の苦をもつ。対境はどこに行っても存在せず、肉蠅や暑さと寒さや飢えと疲れなどでどこに行っても苦たるものなので、対象を喜ぶ心が生じたならば、その考察により退けるべきである。貪欲が大きな者は、不浄なものや肉と脂肪と皮膚と骨を見ることにより退けられる。慈愛と悲心の水が与えられた者は瞋恚を、無痴は縁起の道による⁵⁹。

と説かれている。聖ナーガールジュナも『親友書翰』に「世間の多くの過失を説いてから、

そのようにこの世はすべて無常で、無我で、帰依処もなく、護られるものもなく、住処もなく、後に輪廻は芭蕉の樹の心髄がないものであり、最高の人であるあなたは、御心を起こすべきである⁶⁰。

と解説している。さらにまた『入菩薩行論』と『七童女阿波陀那⁶¹』と『親友書翰』と『弟子書翰』などの著書に依存して、存在に対する自性による執着を捨てるべきである。これは意を生じさせる支分である。

6 功德を記憶すること

そのように対立する方向を捨ててから、三昧の功德を記憶するべきである。そのうち、ここに功德は二種である。見える法を領受するであろうこととそれ以外とである。どのようなのか、と言え、身体を喜んで住し、言葉を喜んで住し、心を喜んで住し、法を

⁵⁸ *Subāhuparipṛcchātantra*. Tib. D. No. 805, Wa 132b7.

⁵⁹ *Subāhuparipṛcchātantra*. Tib. D. No. 805, 121b6-122a2. 大塚 2001: 55.

⁶⁰ *Suḥṛllekha* 58.

⁶¹ *Guhyaḍatta, Saptakumārikāvadāna*. Tib. D. No. 4147.

守る者たちは喜び、その人が身体を得ることは意味があり、先生と父母と師の記憶を思い出し、人でない者により傷つけられず、病気は少しになり、寿命は長くなり、死の時に後悔がなく、賢者たちにより賞讃され、食物と飲物と座具と病の薬と衣服を容易に得て、煩惱と業を損なう。これらが最初の功德である。

何れかの望んだ仏国土に生まれ、三悪趣を捨て、残りの難を捨てて、女性に生まれず、鋭い能力と三宝を離れることなく、そこでも三昧を喜び、正等覚を成立させる。これは第二の功德である。

浄化することは、「寿命は与える者により与えられ、天の住処にこの寿命の時に行く」と言われる。この同じ意味を考えて、尊主チャンドラゴーミンが自分の弟子のために『弟子書翰』に、

月輪の明かりにより飾られ、中腹に宝雲を帯びている山の頂上にある森のその空間で執着することなく、風のように動く性質の寿命が尽きるのは大きな梯子である。

森の中で動物を追って彷徨う者たちが依存し、普く美しいところで楽しいものが喜ばしい森林で天女の臀部に階段で来られる石板をもつものにも存在するのか。

美しく静かで好ましい川岸がある森の中に天女の美しい香りをつけたおさげ髪の飾りが連続する花を集めた美しさにより調伏された天の川にも存在するのか。

幅広い峡谷にいる人は弱ることなくとても楽しみ、受容品が広大で森林の周辺を先に生まれて行列で行進し、川岸に聞こえる溪流の流れの声を刈り取るように聞く者が「我々は雑染をとまなう対象ではない」と招宴を宣言するように⁶²。

と説いており、軌範師シャーンティデーヴァも（『入菩提行論』に）、

森の中で追われる動物たちや樹たちは聞かずに述べることもなく、一緒にいれば楽しい彼らといつ一緒に私は住するだろうか。

洞窟や空き寺や木の根に住して、後ろを見ずに執着がなくなるだろうか。

自分が所有するものがなく自由で広々とした大地で自在に行じ、執着なく自分の場所になろうか。

鉢などの僅かなものと誰も欲しがらない衣を着て、この身体を護らなくても恐怖なく住するだろうか。

⁶² *Śiṣyalekha* 68-70, 72. Hahn 1998: 96-101. Hahn 1998: 98 によると、第七十一偈はチベット語訳のみで、サンスクリットでは欠けている。この偈は、引用でも欠けており、本来は存在せず、これ以後に挿入された可能性がある。

墓場に行ってから他者の白骨と自らの身体を世間の法をもつものとして比べるであろうか⁶³。

と解説されている。そのように『聖月灯三昧経⁶⁴』などから三昧の功德を詳細に知るべきである。これは功德を記憶することにより広げる支分である。

7 精進すべきこと

そのように功德を見てからその広がったものにより対治を意識することで正しく広げるべきである。次のように『入菩薩行論』に、

例えば、忍耐した者は精進を始めるように、精進の上に菩提は存在する。風がなければ動くことがないように、福德は精進なしに生じない⁶⁵。

と説かれているように。次のように、自分で精進することにより望む目的が成立しないのならば、この時にとても動くので意を堅固にすべきであり、「長く住するようになる能力がないので一刹那だけでも心を乱すべきではない」と思うべきである。この意味を御心におかれてから聖ナーガールジュナが『親友書翰』に]、

この寿命は災いが多く、風により吹かれた水の泡よりもはかないので、息を吸うことと息を吐くことと、眠りを退けることから、退けることができる者はとても珍しい⁶⁶。

と説かれており、また『親友書翰』に]、

頭や衣服に突然火が降りかかると、それらを取り除いた後にも、また生じることがないように努力しており、これよりも最大のなすべきことは他にない⁶⁷。

とシャータバールハナ王のために教誡している。尊主チャンドラゴーミンも自分の弟子に対して『弟子書翰』で] 次のように、

⁶³ *Bodhicaryāvatāra* 8.26-30.

⁶⁴ *Sarvadharmasvabhāvasamatāvipañcitasamādhirājasūtra*. Tib. D. No. 127.

⁶⁵ *Bodhicaryāvatāra* 7.1.

⁶⁶ *Suḥṛllekha* 55.

⁶⁷ *Suḥṛllekha* 104.

人の状態はとても得難く、得てからも目的として考察したそのものを勤勉に完成させるべきである。灯火の強烈な炎が風により揺らぐような寿命が刹那に存在するという確信もありえない。

「これは明日して、これはすぐ後にやろう、これはいつかやろう」と人が思うならば、閻魔が黒棒で打った側を見れば、目の根本は赤く、怒って喜ぶことなく笑って何かを考えを投げかける。

「春の花が咲く時にこれが生じ、月が明るいという特徴の秋にこれが生じる」と言う。すべての人が喜び、「私のこの寿命が尽きる」と言うことをとても喜ばない者はいないであろう⁶⁸。

と教誡をなしている。軌範師シャーンティデーヴァも [『入菩薩行論』に]、

意を堅固にすることに関係なく、この私の死は、なすべきこととなすべきでないことを持たずに、病気と病気でないこととのすべてによっても突然であり、意は堅固にされない⁶⁹。

と解説されている。そのようにヴァーギーシュヴァラキールティも、

「これをなす最中に再びこれをなし、それ以外のことをなす」と言う。存在が動く性質を知らずに無意味に意を堅固にすることを求める九生は、死を支配する口で、鯨の口の中に舟が入るように、なすべきことが完了せずに対境の水の波の中に落ちる⁷⁰。

と解説されている。そのように軌範師サラハも [『ドーハー・コーシャ』に]、

その遠いものをそのまま明日考える人は、財産を円満にすることを望んでも水により満たされた枡が漏れているように、明らかにならないようなものである。ああ、美貌なものたちよ⁷¹。

⁶⁸ *Śiṣyalekha* 65-67. Hahn 1998, pp. 94-97.

⁶⁹ *Bodhicaryāvatāra* 2.34.

⁷⁰ *Vāgīśvarakīrti, Saptāṅga*. Tib. D. No. 1888, Pi 202b2. ただし翻訳は一致しない。

⁷¹ Tib. D. No. 2224, Wi 73a2.

と説かれている。これは対治を意識することにより精進すべき支分である。

8 結びつけるべきこと

そのようにその精進により二つの支分を結びつけるべきである。次のように止と観と方便と智慧である。何故か、と言え、止を堅固なものにしない観は堅固に存在することはない。灯火と風のように。観を離れた止により障害の網を残らずに浄化することはできない。例えば、色と無色などの止は、天を輪廻する如くである。それ故に、『入菩薩行論』に、

止を明らかにともなう観により煩惱を滅ぼすことを知ってから、最初に止を求めべきであり、そして世間の無執着を明らかに喜ぶことが成立する⁷²。

と解説されている。そのように方便と智慧もどのようなのか、と言え、二種の身体を成立させるものと二種の障害を捨てることであるから。それ故に、『聖維摩經⁷³』と『聖伽耶山頂經⁷⁴』に、

方便を離れた智慧は束縛である。智慧を離れた方便は束縛である⁷⁵。

と説かれている。そのように『聖入法界品⁷⁶』に誓願を成就させないために法の知恵を内に入れることを成就させない魔である。十魔のうちの一つとして説かれている⁷⁷。何故に空性のみからそれらが成立しないのか、と言うのなら、成立しない。何故ならば、結果は原因に追従するから。それ故に、『聖入法界品』に説かれている。

言う最高のものは何でも適切である。一法により生じることはない。いかなるものも生じたものは存在するものではなく、生じるように存在しないものである⁷⁸。

と言われる。そのように『聖金剛帳タントラ』にも、

⁷² *Bodhicaryāvatāra* 8.4

⁷³ *Vimalakīrtinirdeśasūtra*. Tib. D. No. 176, Ma 201b1.

⁷⁴ *Gayāśīrṣasūtra*. Tib. D. No. 109, Ca 289a1.

⁷⁵ この句は、Kamalaśīla の *Bhāvanākrama* や *Dīpaṃkaraśrījñāna* の *Bodhipathapradīpa* 175 にも引用される。*Bodhibhadra* は *Bhāvanākrama* における引用を知っていた可能性があり、*Dīpaṃkaraśrījñāna* は本テキストにおける引用を知っていた可能性がある。Cf. 望月 2015a: 123.

⁷⁶ *Gaṇḍavyūhasūtra*. Tib. D. No. 44, Ga 246a2.

⁷⁷ 中村 1978.

⁷⁸ *Gaṇḍavyūhasūtra*. Tib. D. No. 44, Ka 208a5.

もしも空が方便ならば、その際に仏性は成立しないだろう。原因より結果は異なるから。方便は空性ではない⁷⁹。

と説かれている。では、何故に聖教に空性のみを修習することで十分であると説かれているのか、と言えば、これは我見などの空性と矛盾するものに入っている彼らのために空性の偉大さが説かれている。そのように、また同じ『聖金剛帳タントラ』に、

諸見を誤っている者たちと我見を求める者たちが我執を退けるために、勝者たちは空を説いたのである。それ故に、「輪を廻す」という方法が楽の律儀である。仏は自慢のヨーガにより仏性を速やかに成立するであろう⁸⁰。

と「空性だけに依存することなく、天身を修習すべきである」と説かれている。それ故に、完全なる菩提を得たならば、悲の心髄をともしなう空性を修習するが、空性だけではない。聖教は意趣をもっている。例えば、マンダラを与えられてから六波羅蜜を得ることを説いたように。それ故に、聖教を言葉の通りに把握しておらず、しかも空性を修習することに卓越していれば、一切の善業が自分の中から生じる。最初に衆生利益のために空性に入ってから、声聞のように寂靜たるものにはならない。空性が堅固である限り衆生はそのように無分別に悲を生じる。例えば、聖ナーガールジュナが『菩提心積』に] 解説している。

そのようにヨーガ行者たちがこの空性を修習したならば、智者は利他を喜び、変化することに意味がない⁸¹。

と言う。さらにまた、

法を無我と知る者は無自性を修習しているので、顛倒から生じた煩惱を障害なく捨てている⁸²。

と『中観莊嚴論』に解説される論理により煩惱は捨てられるであろう。誰であれ悲も捨

⁷⁹ *Dākinīvajrapañjaramahātantrarājakaḥpa*. Tib. D. No. 419, nGa 31a6.

⁸⁰ *Dākinīvajrapañjaramahātantrarājakaḥpa*. Tib. D. No. 419, nGa 31a7.

⁸¹ *Bodhicittavivaraṇa* 73. Lindtner 1982: 206-207.

⁸² *Madhyamakālaṃkāra* 83.

てて、煩惱も寂靜にした者には、世間と出世間の功德が困難なく成立するであろう。それ故に、因の最高のものになり、それは何らかのものから多くの功德を生じることを意図している。『聖大毘盧遮那成仏神變加持經』に、

相をともなうものは相をともなうことにより正しい成就を勝ち取る、と言われて
いる。無相に住することにより相をともなったり成就したりするので、一切相にお
いて無相に依存すべきである⁸³。

などと説かれている。空性だけで十分に説かれたものである。これが結びつけるべき支
分である。

9 住する方法

そのように八支をもつ者が場所に相応しい食物と、行道に相応しい衣服と、友人が随
順するようにして、心を等しく設定すべきである。そのうち相応しい場所は、『妙臂菩
薩所問經』に説かれている。

独覚と善逝自身が生まれ、勝者は以前におり、福德をもち、意が喜び、天と非天
などに敬礼して供養をする場所で、布薩の律儀をもつ者は自分自身を清浄にするた
めに依拠すべきである。そのようなものを得なくても、他にも大河や川や小川があ
り、蓮華や青蓮華により飾られた湖や、生き物があまり往来せず、きれいでおいし
い水が多くあり、凶暴な魔もおらず、綺麗な花と果実があり、薬林や種々なる樹木
に覆われ、地面に臥せるのにとてもきれいであり、虎や豹や獅子がおらず、快く平
で棘がなく、人の成就の場所と呼ばれた所である。岩谷と洞窟で灰と梳いた髪と埃
と石炭と硝の塊をもつものを捨てて、そこで粘土を練ってから住居に壁を作り、日
中に固めて、泥で表面を塗るべきである。東や北や西に門を向け南には決して門を
向けない⁸⁴。

と説かれている。これは相応しい場所である。食事も続く執着がなく、量に尽き、身体
の力に適当なだけ食べる。それ故に、聖ナーガールジュナが [『親友書翰』に]、

食事は薬に似ていると知ることにより、食欲と瞋恚なしに頼るべきである。食料

⁸³ *Mahāvairocanābhisambodhivikurvatyadhiṣṭhānavaipulyasūtra*. Tib. D. No. 494, Tha 190a4.

⁸⁴ *Subāhupariṣcchāntara*. Tib. D. No. 805, Wa 119b6-120a3. 大塚 2001: 51.

のためではなく、傲慢のためでもなく、太るためでもなく、身体を保持するだけのためである⁸⁵。

と解説している。執着する罪過は、例えば、『聖富楼那所問経』にも説かれている。

甘い味を欲して執着して、諸過失を見ることがなければ、魔による時機を得るであろう。釣針により捕らえられた魚のように⁸⁶。

と説かれている。そのように『妙臂菩薩所問経』にも、

傷の治療を排除するために、病気の者に薬が与えられるように、そのようにここでも飢えの苦を排除するために勝者は食物を食べることを説かれている。ある者が疲れて道を行く時に、飢渴により苦しんで自分の子供の肉を食べるように、ヨーガ行者は心を低くして寿命と飲食物のために食べるべきではない。多く注ぐことにより努力なく高処に行き、そのように少しの時は重さが低くなり、釣り合いをとることで一刹那等しくなるように、有身の者は食事をそのように食べるべきである。例えば、古い家が壊れないために人がよい柱を添えるように。そのように身体の迷乱である輪廻に住することと、車の眼を汚すように食事を食べる。「欲界は食物により住する」と勝者は一法としてお言葉を述べられている。身体は芭蕉のようである、と知るべきである。心は飲食などに執着すべきではない⁸⁷。

と説かれている。そのように身体の感受が低いようならば、一切のヨーガ行者も断食して住すべきではない。例えば、『聖蘇悉地羯羅経』に説かれている。

疲れてしまう過失があるので、断食して住することは非難されるものと解説されている⁸⁸。

と言う。もし身体に疲れがないようならば、身体を正しくするために一切のヨーガ行者も断食して住すべきである。例えば、『妙臂菩薩所問経』に、

⁸⁵ *Suhrillekha* 38.

⁸⁶ *'Phags pa Gong pos zhus pa*.

⁸⁷ *Subāhupariṣcchātantra*. Tib. D. No. 805, Wa 120b6.

⁸⁸ *Susiddhikaramahātantrasādhanopāyikapāṭala*. Tib. D. No. 807, Wa 206a5.

「一子が身体を浄化するために断食をなすべきである」と善逝は決して説いていなくても、この身体は不浄で、皮膚と肉と血液と骨髓と脳汁と腸と脾臓と肝臓と腎臓と脂肪と胆汁と痰と精液と大便と尿と鼻水と毛髪と骨と、眼耳鼻と口と肛門を特徴とする身体の九穴の傷から種々なる不浄な汚れが流れ出るとは常に生じるものである。そのように一切の支分を集めることと、地水火風虚空を備え、業に従ってもたらされる身体と、すべてを備えた身体に住し、糞尿と唾と痰のこれらを尽くすために断食することを説いている。垢が尽きてから人身が浄化されれば、自らの円満のために成就に喜んで入る⁸⁹。

と説かれている。友人が存在しなくても、随順するものに依存する。例えば、世尊がそれぞれの経典で説かれている。

多くの者では論争するであろう。二人では話をするであろう。少女の腕輪のように一人で住すべきである。

と言われる。

随順については、『妙臂菩薩所問経』に説かれている。

決して一輪の車が馬をともなっても道を進めないように、成就者が仲間がいなければ、身体をもつ者は成就を得ることはないであろう。彼は智慧をもち、美しい容姿で、高貴な生まれで、法に帰依し、とても勇敢に勇ましく、根を制御し、愛語し、布施をなし、悲心をもち、飢えと渇きと煩惱に耐え、バラモンと他の天に供養せず、聡明で記憶したことを憶えており、三宝を信じる者が仲間である。そのような功德をすべてそなえた者は、論争の時にとっても価値があるので、功德の半分、あるいは四分の一、あるいは八分の一をもつ者をそのように真言行者は仲間として頼るべきである⁹⁰。

と言う。ここでは戯論を断じ、戯論を離れることにより友人がいなくても、随順する友人をもつべきである。そのように損害を守る限りの衣服に頼り、困難をともない、とても執着することになる衣服と臥座に依存すべきではない。『妙臂菩薩所問経』に説かれている通りである。

⁸⁹ *Subāhupariṣṭchātantra*. Tib. D. No. 805, Wa 125b2.

⁹⁰ *Subāhupariṣṭchātantra*. Tib. D. No. 805, Wa 119b3-5, 大塚 2001: 53-54.

周羅髪を残して髪を剃り、出身の色で衣の色を変えるべきである。白衣と、樹葉や麻や胡麻の樹皮の衣を着るべきである⁹¹。

とされている。また『聖聖蘇悉地羯羅經』に、

マントラを繰り返す在家の知者は色の変った衣服を着ない⁹²。

と説かれている。これらは容易に得て、自慢することを禁止する意味である。

随順する行道は三種である。よく住することと、苦を制圧することと、特別に行くこととである。

そのうち、よく住するとは、どのような行道により住してもそれにより心に傷は生じない。次のように、『聖入法界品』に、

菩提心を損なう善根を始めることはすべて魔の行為である⁹³。

と説かれており、『入菩提行論』にも、

心を守る禁戒がなければ、禁戒が多くても何をなそうか⁹⁴。

と解説されており、また同じものに、

私は利得と尊敬と身体と生命はなくてもいいし、さらに善も損なわれてもいいが、心はいかなる場合も損なわれるべきではない⁹⁵。

と説かれている。それ故に、一切の時と機会においても心を損なわない行道が行じられる。それ故に、軌範師ドンミパが [『俱生成就』に]、

学習とは、学習を行うことであり、バラモンの場合も浄行であり、常に浄行をな

⁹¹ *Subāhupariṣcchātantra*. Tib. D. No. 805, Wa 120a5, 大塚 2001: 49.

⁹² *Susiddhikaramahātantrasāadhanopāyikapaṭala*. Tib. D. No. 807, Wa 173b3.

⁹³ *Gaṇḍavyūhasūtra*. Tib. D. No. 44, Ga 246a3.

⁹⁴ *Bodhicaryāvatāra* 5.18cd.

⁹⁵ *Bodhicaryāvatāra* 5.22.

すべきで、心を損なうものではない⁹⁶。

と解説されている。

苦を制圧することは、道を作意することで寒さと暑さや飢渴などの一切の苦により動かされない。『入菩薩行論』に次のように説かれている。

漁師や旃陀羅などは自分の生活だけを思い、寒さと暑さなどの害に耐えているのに、有情利益のために私にはそれが耐えられないのか⁹⁷。

と言われている。そのように、『妙臂菩薩所問経』にも、

欲に執着せず、身体による煩悩に耐える⁹⁸。

と説かれており、同じように、『聖忿怒勝義儀軌秘密タントラ』にも、

身体の煩悩を行じてから三種の成就を得るであろう⁹⁹。

と説かれている。そのように『吉祥秘密集会タントラ』にも、

大欲という大きな苦により自らの苦を滅するべきである¹⁰⁰。

と説かれており、苦という結果をもつものはとても喜ぶように依存すべきであるが、心の本性を前と同じものにすべきではない。それ故に、『妙臂菩薩所問経』に、

天の喜びと、円満と、寿命と、力と、完全なる身体と、多聞と美しい光彩と、一つに意を集中することと、大きな威力とすべての困難を制御する力により得られる

¹⁰¹。

と説かれている。

⁹⁶ *Sahajasiddhi* 3. Tib. D. No. 2223, Wi 70a4.

⁹⁷ *Bodhicaryāvatāra* 8.40.

⁹⁸ *Subāhupariṣcchātantra*. Tib. D. No.805, Wa 126a6.

⁹⁹ *Krodhavijayakalpagaḥyatantra*. Tib. D. No.604, Ba 17b2.

¹⁰⁰ *dPal gsang ba 'dus pa*.

¹⁰¹ *Subāhupariṣcchātantra*. Tib. D. No.805, Wa 137b5.

特別な有情の行道は、それにより平静に瞑想をなさない場合に、『般若経』の読誦と小像制作と巡回などの福德の資糧を敬うことこそをなすべきである¹⁰²。そのようにまた、『聖忿怒明王六面タントラ』に説かれている。

起き上がったから『世尊母般若波羅蜜多経』を読誦する¹⁰³。

と説かれている。『妙臂菩薩所問経』にも説かれている。

寂靜なる浄土の地方で泥や砂で作られた善逝の塔で縁起を心髄とするものを罪過を浄化するために常に造るべきである¹⁰⁴。

と説かれている。そのように『聖忿怒勝義儀軌秘密タントラ』にも、

賢者が塔から作り、そのように正法も読誦する。善が僅かな他の者たちも、僅かなものが尽きてからこれらも最高の成就を得ようすることで常に衆生たちに回向する¹⁰⁵。

と説かれている。それ故に、心を損なうことのない福德と知恵の集まりを散逸することをもつ者たちは、衆生利益を望むことによりとても尊敬されることが始められる。これが随順する行の三種である。

そのように、その資糧を得ることにより四種の行道の何れかに喜んで住して、有相や無相のヨーガで心を平静にすべきである。そのように、心を平静にしようとする者は、五過失を捨てるために八つの捨の行為を保持すべきである。そのうち五過失は『中辺分別論頌』に、

怠惰と、教授の忘却と、沈み込みと昂りと、なさないことと、なすこととである¹⁰⁶。

と説かれている。その対立項を捨てる八つの捨の行為もその同じものに説かれている。

¹⁰² *Bodhimārgadīpapañjikā*. Tib. D. No. 3948. Kḥi 274b7-275a1. 望月 2015a: 118.

¹⁰³ *Khro bo'i rgyal po gdong drug pa'i rgyud*.

¹⁰⁴ *Subāhupariṣṛchātāntra*. Tib. D. No.805, Wa 119b2. 大塚 2001: 45.

¹⁰⁵ *Krodhavijayakalpagaḥyatantra*. Tib. D. No.604, Ba 12b3.

¹⁰⁶ *Madhyāntavibhaṅga* 4.4.

場所と、そこに住することと、原因と、結果である。対象を忘れないことと、沈み込みと高揚を理解することと、その捨を明らかにすることと、止の時にヨーガに入ることである¹⁰⁷。

と言われる¹⁰⁸。

そのように支を完成した者が止と観を修習すべきことに関して、次のようにその止は二種である。内部に見られることにより得られるものと外部に見られるものを対象とすることとである。

そのうち内部に見られるものにも二種ある。身体を対象とすることと、身体に依存するものを対象とすることとである。

そのうち身体を対象とするものにも三種ある。身体自身を天の相と認識することと、骸骨などを不浄として認識することと、天杖などを特殊な相として認識することとである。

身体に依存するものにも五種ある。すなわち、呼吸を対象とするものと、微細な相を対象とするものと、精液を対象とするものと、光線の支分を対象とするものと、喜樂を対象とするものとである。

外部に見られるものを対象とするものにも二種がある。特殊なものと、共通なものである。特殊なものにも二種がある。身体を対象とするものと言葉を対象とするものである。

これが止に入る支分である¹⁰⁹。どのように修習するかをここでは述べない。何故ならば、著書がとて大きくなくなってしまう恐れがあり、正しい師が領受した教誡に依存することを正しいとするが、修習すべき教誡は文字に依っては知り難く、正確には止と観を説いてから解説するからである¹¹⁰。

止の結果が観であり、観の結果が止と観の双運である。それもいかなる事物も存在しないので、事物が存在しないことを区別して見て、その同じ時に心を一点にすることで多くの対象を急いで滅して存在するから。それ故に、止と観の双運のこの場合に、知恵の対象となるものと、理趣の通りに存在する知恵と、ヨーガ行者の止と観、我々中観の止と観の双運に特に何があるか。自分の知恵を広げることにも耐えても、ここでは領受される方法だけを明らかにしようとするが、宗義の組織を脇に置こうとするのではなく、

¹⁰⁷ *Madhyāntavibhāṅga* 4.5.

¹⁰⁸ *Bodhimārgadīpapañjikā*. Tib. D. No. 3948. Khi 275a1-3. 望月 2015a: 119.

¹⁰⁹ *Bodhimārgadīpapañjikā*. Tib. D. No. 3948. Khi 275a7-b4. 望月 2015a: 120.

¹¹⁰ *Bodhimārgadīpapañjikā*. Tib. D. No. 3948. Khi 275a6-7. 望月 2015a: 121.

聖ナーガールジュナなどが明らかにされてから、僅かでも誰も述べていないので、広大に広げない。

今度は、この別なものを述べるべきである。何らかの相をとまなう止を現前になさずに観が生じるのは適切なのか、と言うのならば、それは適切なものである。無相の止である妙観察智から無相の観である無分別智が生じる¹¹¹。そのようにまた、『聖迦葉品』に、

二本の木がこすり合ってから火が生じ、その生により自身を燃やしてしまうように、そのように智慧の能力が生じてからも、その生によりそれ自身を燃やしてしまう¹¹²。

と説かれている。妙観察智は止ではなく、多くの相により認識される、と言うのならば、その如くならば、止も止ではない。何故ならば、多くの刹那と多くの部分を認識するから。さらにまた、止から観に入る場合も、例えば、妙観察智により結合しない。それをなさないことは一部に尽きる。そしてこの次第も身体のみを考察することで成就する。聖ナーガールジュナが [『超有譚』に]、

世間は分別から生じ、分別は心から生じ、心も身体から生じるので、それ故に、身体を考察すべきである¹¹³。

と解説し、聖ナーガールジュナも [『菩提心釈』に] 解説して、

身体が存在しないという意識は「存在しない」ということを考察することによる¹¹⁴。

と解説され、経典にも「意識は身体を超えない」と説かれている。それ故に、一切法は心に収められ、心は身体に収められ、身体を法界に近づけて、ヨーガにおけるこの所作が教誡である¹¹⁵。

また種々なる身と意を対象とすべきであり、この教誡は仏を随念してから知るべきで

¹¹¹ *Bodhimārgadīpapañjikā*. Tib. D. No. 3948. Khi 275b4-5. 望月 2015a: 121.

¹¹² *Kāśyapaparivartasūtra* [69]. Stael-Holstein 1926: 102

¹¹³ *Bhavasamkrāntiparikathā*. Tib. D. No. 4162, Ge 165b4.

¹¹⁴ *Bodhicittavivarāṇa* 36ab. Lindtner 1982: 196.

¹¹⁵ *Bodhimārgadīpapañjikā*. 望月 2015a: 142-143.

ある。それ故に、有相の止に依ることで無相の止を認識してから観が起こされるというこの主張は、賞讃される。何故ならば、その場所が堅固にされ、何らかの止により煩惱が制圧されて除かれ、結果に相応する原因となるから¹¹⁶。

ここに私の師の教誡から生じたこれを書くことで、増益する善のその無垢なる月光により有情の無知という眼翳と闇を排除し、欲望が寂滅される。智慧の眼により真如の行境を明らかに得なさい。自身も心の散乱などや風などを寂滅して闇を取り除いてから速やかにムニと一つの行境を見なさい。

『三昧資糧論』という軌範師ボーディバドラによる著作を完成する。インドの賢者ヴァールヤチャンドラ¹¹⁷に尋ねて、チベットの翻訳官で比丘のチューキ・シェラップが翻訳し質問して、校訂した。

クリシュナパーダの『三昧資糧論』和訳

インドの言葉で、*Samādhisambhāraparivarta*

チベットの言葉で、『三昧資糧論』

仏と菩薩のすべての敬礼する。

1 前行の支分

最初に、人身の宝を浪費せずに人身を得ることを有意義と認める人は、最初に前行の七支分をもつべきである。すなわち、(1) 根本に対する信をもち、(2) 縁である善知識を頼りその功德を受け、(3) 尊敬をもち、(4) 大きな心で疑わしいものを食わず、(5) 精進をもち、(6) すべてのものに対する失望はなく、(7) あらゆるところで自慢を捨てることである。以上が前行の支分の七種である。

2 高貴なあり方を損なわない支分

(1) 一切の時と相において他者の過失を考察せずに過失を述べず、(2) 自分の功德を自慢する心を起こさず、(3) 恥を知り謙遜が先行することで自分を護り、(4) 三種の律儀を切実に行い、(5) お世辞と新たに知り合うことと高所を捨てて常に力をもって住し、(6) 場所と時と時機により他のタントラを量ることを知る門から修行すべきで、(7) 他

¹¹⁶ *Bodhimārgadīpaṇjikā*. Tib. D. No. 3948. Khi 275b5-6. 望月 2015a: 121.

¹¹⁷ 北京版には、Bināya tsandra とある。

者に対する軽蔑を捨てて特に不殺生をなすべきである。以上が世間の罪過を身につけず高貴な在り方を損なわない支分の七種である。

3 障害を捨てる支分

(1) 常に少欲と知足で、(2) 欲望と食欲を大きくし執着を大きくすることを捨て、(3) 怠惰と無精を捨て、(4) 多くなりすぎてしまうことを知るべきであり、(5) 大きな目的に変わらない話と行為などを捨てて入らず、(6) 如理ではないことへの作意を捨てて、(7) 何れかの対治に行く者に依存することを知るべきである。以上が障害を捨てる支分の七種である。

4 自分で自分を鼓舞する支分

(1) 人身を得ることと仏法を行じ成立させることが宝であると思うことと、(2) そのような成就是大きな意味をもつと思い、(3) 世間の所作をなすことは確実に無意味だと知るべきであり、(4) 他者の苦を自分の対治として頼ることを知るべきであり、(5) 自分は常に魔に掌握されておりすぐに死んでしまうと続けて思い、(6) 一切の積集を確実に集めることを知るべきであり、(7) 自分の皺と白髪などを常に考察せずに哀痛すべきである。以上が自分を自分で鼓舞する支分の七種である。

5 欲望を断じる支分

(1) 仏の知恵は深くて広大でお言葉と経典は沢山あり、自分は知恵が劣り障害に対する怠惰が大きいので一切を述べ知ることはできず、自分自身の寿命が尽きてしまうことを思い、(2) この言葉と文字に従う解説の知恵により他者を制することや利益にはならず、人が喜びがたいことを思い、(3) 自と他の成就の辺際に対する愛憎の二種を捨てて乱用せずに、(4) 兄弟と親族と朋友などは確実に客人の道にまとめたものに似ていると思い、(5) これらの世間の利得と尊敬と賞讃と叱責などは確実に誘惑するものであると知るべきであり、(6) 世間の利得と欲望と渴愛と利益と名声と自慢と傲慢などのこれらは確実に火と毒と武器と同じであると知るべきであり、(7) 内外のこれらの事物を幻や夢のように相続して考察するべきである。以上が欲望を中断する支分の七種である。

6 人の目的を速やかに成就する支分

(1) 混乱を喜ぶことを捨てて寂処に住むべきであり、(2) そこでも自分の教義のままに天を喜ぶべきであり、(3) 天を明らかにする三種を努力し精進を強くなすべきであり、(4) そこでも期待と懷疑と欲望と恐怖を捨てて住すべきであり、(5) 大悲をもち雄心

で勇敢な門から取捨なしに「この私が成就する門から望んでいる目的が成立しない間は身体と生のためにも捨てない」という誓願を成就させ、(6) そこでも夢などの特徴と相が生じるいかなるものに対しても喜んだり喜ばなかつたりせずに他者に述べず、(7) そこでも天の夢と特徴は教誡から知るべきで特に殺生をしない。それらが人の目的を速やかに成就させ明らかに成立する支分の七種である。

7 身体を護り損害を明らかにする支分

(1) そのような人身は極稀で価値があるので身体を護るべきで衣服と食物と薬などに好ましいままに行じ、(2) 人と非人の損害を護り、(3) 適切な場所で快くて損害がないところに住し、(4) 身体と心が疲れて疲労させる行為と所作をなさず、(5) 夜中と正午と消化の時と身体に病気の状態が生じた時に対象に対して努力をせず、(6) 身体と心が疲れて疲労している時に哀痛を滅除して対象を振り回すことは教誡より知るべきであり、(7) 常に行道のヨーガにより身体を等至する。それらは身体を護り損害を明らかにする支分の七種である。

8 補足の支分

(1) そのように住することにより哀痛と善に対して怠惰となすべきことと所作の分別が生じたならば自分で自分に鞭を打ち対治を起こすべきである。(2) 身体における損害が突然に生じ、識の区別が異なって生じる場合に自分の経験と教誡により治すべきであり、さらにまた他の賢者にも尋ねるべきである。(3) 勝者のお言葉と自分に能力があることと他者の利益を見たならば、四種の行為を『金剛頂髻タントラ』と教誡より知るべきである。(4) 煩悩に似ていないものと衆生の分別に似ていないものに対する対治に似ていないものを広大な經典から知るべきである。それらは補足や付録の支分の四種である。

9 コロフォン

『三昧資糧論』というクリシュナパーダによる著作を完成する。

インドの賢者クリシュナパーダ自身と主校翻訳官で比丘のチューキ・シェーラップが翻訳し質問し、校正した。

Dīpaṃkaraśrījñāna の『三昧資糧論』和訳

インドの言葉で、*Samādhisambhāraparivarta*
チベットの言葉で、『三昧資糧頌』
世間主に敬礼する。

最初に悲の力から生じた完全なる菩提心を堅固にすべきである。存在を享受する楽しみに執着せず、執事することを打つことによる方向である。[1-4]

信などの財産を円満にし、師と仏を等しく尊敬し、彼が説いた正法を行じることを完全に守ることを精進する。[5-8]

瓶と秘密の灌頂を師の親切により完全に得て、身口意が浄化された成就者は成就を増益する。[9-12]

三昧の支分から生じた資糧を完全にしてから速やかに成就を得て、そのようにマントラの理趣に住するのである。[13-16]

三昧の支分を損ない、その対立する方向に住するのならば、百億の生によっても三昧を成立することはないであろう。[17-20]

三昧を成立させるためにマントラの行に住するヨーガ行者はそれ以外の心を捨て、乱れることなく精進に励むべきである。[21-24]

三昧の支分と対立する方向のものを確定させるために、その三昧の支分と対立する方向のものをまとめてから解説すべきである。[25-28]

円満な戒と、財富を見ないことと、忍をとまなうという誓願を堅固にすることと、人の混乱は捨てられる。[29-32]

身口意の業に対する正知を備え、仏を尊敬し、賞讃を記憶する身体の随念を正しく備えている。[33-36]

何れかの時に何れかの所作を随念することを堅固にし、五障を捨て、食事の量を知り、行道を釣り合わせ、[37-40]

世間法のすべてに対して心が等しく、器物を減らすこれが支分であって、顛倒は対立する方向である。[41-44]

『三昧資糧頌』を述べたその福德により、有情は三昧を金剛のように得なさい。[45-46]

『三昧資糧頌』という偉大な軌範師で賢者のディーパンカラシュリージュニャーナの著作を完成する。

インドのその賢者自身と主校翻訳官で比丘のシャーキャ・ロドゥが翻訳し質問し、校正した。

第 16 章 『罪過懺悔儀軌』『読誦読経前行儀軌』『波羅蜜乘輒仏造作儀軌』
『超世間七支儀軌』『一切業障摧破儀軌』

はじめに

チベット大蔵経のテンギユルの「中観部」と「雑部」には、顕教文献としての Dīpaṃkaraśrījñāna による儀軌 (vidhi) を説く文献が五点収録されている。

1. 『罪過懺悔儀軌 (*Āpattideśanāvidhi, lTung ba bshags pa'i cho ga*)』 dPal mar me mdzad ye shes, Tshul khriims rgyal ba 訳. D. No.3974, Gi 255a3-b2; P. No. 5369, Khi 297a4-b7.
2. 『読誦読経前行儀軌 (**Adhyayanapustakapāṭhanapuraskriyāvidhi, Kha dog dang glegs bam klag pa'i sngon du bya ba'i cho ga*)』 D1. No. 3975, Gi 255b3-256a2, D2. No. 4487, 38b3-39a2, P1. No. 5376, A 304b6-305a8, P2 No. 5401, Gi 48a4-b4.
3. 『波羅蜜乘輒仏造作儀軌 (**Pāramitāyānasañcakanirvapaṇavidhi, Pha rol tu phyin pa'i theg pa'i tsha tsha gdab pa'i cho ga*)』 D1. No. 3976, Gi 256a2-b1, D2. No. 4488, 39a2-b2, P1. No. 5373, Khi 301b2-302a5, P2. No. 5401, Gi 48b4-49a5.
4. 『超世間七支儀軌 (*Lokāṭītasaptāṅgavidhi, 'Jig rten las 'das pa'i yan lag bdun pa'i cho ga*)』 Dīpaṃkaraśrījñāna, Śākya blo gros 訳. D1. No. 2461, Zi 135a6-b7, D2. No. 4486, 38a3-b3, P1. No. 3289, Tshi 169b5-170a8, P2. No. 5399, Gi 47b2-48a4.
5. 『一切業障摧破儀軌 (*Sarvakarmāvaraṇaviśuddhikaravidhi, Las kyi sgrib pa thams cad rnam par 'thag par byed pa'i cho ga*)』 Dīpaṃkaraśrījñāna, Tshul khriims rgyal ba 訳. P. No.5874, Nyo 475a8-476a7.

最初の四論は「中観部」で、最期のものが「雑部」である。これらの儀軌文献は「秘密疏部」以外に収録されており、テンギユルの編者により顕教文献と把握されていたことになる¹。

また、儀軌に関して、さらに二つの文献が「中観部」と「雑部」に収録されている。

6. 『発心律儀儀軌次第 (*Cittotpādasamvaravidhikrama, Sems bskyed pa dang sdom*)』

¹ ただし、*Lokāṭītasaptāṅgavidhi* は「秘密疏部」にも収録されている。このような伝承をもつ文献は、他にも *Caryāgīti* (D1. No. 1496, D2. No. 4474, P1. No. 2211, P2. No. 5387), *Saṃsāramanoniryānikārasaṃgīti* (D1. No. 2313, D2. No. 4473, P1. No. 3152, P2. No. 5386), *Dharmadhātudarśanaṅgīti* (D1. No. 2314, D2. No. 4475, P1. No. 3153, P2. No. 5388), *Samādhisambhāraparivarta* (D1. No. 2460, D2. No. 4485, P1. No. 3288, P2. No. 5397) がある。Cf. 望月 2007b, 2014c.

- pa'i cho ga'i rim pa*)』 Dīpaṃkaraśrījñāna, dGe ba'i blo gros 訳, dPal mar me mdzad ye shes, Tshul khriṃs rgyal ba 改訂. D1. No. 3969, Gi 245a2-248b2, D2. No. 4490, 40a5-43b5, P1. No. 5364, A 284a1-288a6, P2. No. 5403, Gi 50a1-54a5.
7. 『業障清浄儀軌疏 (*Karmāvaraṇaviśodhanavidhibhāṣya, Las kyi sgrib pa rnam par sbtong ba'i cho ga'i bshad pa*)』 Dīpaṃkaraśrījñāna, Tshul khriṃs rgyal ba 訳. D. 4007, Ji 184a3-198b6, P. No.5508, Ji 236a8-242b7.

この二論は、それぞれ儀軌次第と儀軌解説とタイトルに付されているので、直接的に儀軌を提示するものではない。前者は「中観部」と「小部集」に収録され、発菩提心と律儀について先行する Nāgārjuna と Bodhibhadra の儀軌文献を引用するものであり²、後者は「経疏部」に収録され、『三蘊経』に説かれる懺悔の儀軌を解説したものである³。さらに、テンギュルの「秘密疏部」には、次の儀軌文献が収録されている。

8. 『供物儀軌 (*Balividhi, gTor ma'i cho ga*)』 D. No. 1295, 185b1-187a5, P. No. 2418, Zha 585a4-587a7.
9. 『一切業障摧破曼荼羅儀軌 (*Sarvakarmāvaraṇaviśodhananāmamaṇḍalavidhi, Las kyi sgrib pa thams cad rnam par 'joms pa zhes ba ba'i dkyil 'khor gyi cho ga*)』 Tr. Mar me mdzad, Rin chen bzang po. D. No. 2655, Ju 308b1-309b3, P. No. 3479, Gu 339a7-340b7.
10. 『護摩儀軌 (*Homavidhi, sByin sreg gi cho ga*)』 D. No. 2659, 311a7-b7, P. No. 3483, Gu 343a4-343b7.
11. 『五制多建立儀軌 (**Pañcacaityanirvapaṇavidhi, mChod rten lnga gdab pa'i cho ga*)』 D. 3074⁴, Pu 171b3-171b6, P. No. 3899, Tu 190b3-191a8.
12. 『無垢頂髻陀羅尼儀軌 (**Vimaloṣṇīśadhāraṇīvidhi, gTsug tor dri ma med pa'i gzungs kyi cho ga*)』 D. No. 3082, 177a6-b6, P. No. 3901, Tu 192a2-b3⁵.
13. 『甘露生供物儀軌 (*Amṛtodayabalividhi, bDud rtshi 'byung ba'i gtor ma'i cho ga*). Dīpaṃkaraśrījñāna, dNgos grub 訳. D. No. 3778, Tshu 212b4-220b3, P. No. 4596, Nu 429b1-438a7.
14. 『水供物儀軌 (*Peyotkṣepavidhi, Chu gtor gyi cho ga*)』 Dīpaṃkaraśrījñāna, Tshul

² 望月 2014b.

³ 望月 1999c, 2005: 115-121. その内容な *Triskandhakasūtra (Upāliparipṛchāsūtra)* に対する注釈書である。

⁴ ただし、デルゲ版は著者情報を欠く。

⁵ D. No. 3081, Pu 176b4-177a6, P. No. 3900, 191a3-192a2 も同タイトルの異本であるが著者名を欠く。

khirms rgyal ba 訳. D. No. 3779, Tshu 220b3-221b2, P. No. 4860, Zu 169a7-170a4.

15. 『龍供物儀軌 (*Nāgabalividhi, Klu gtor gyi cho ga*)』 Rin chen bzang po 訳. D. No. 3780, Tshu 21b3-222a6, P. No.4598, Nu 439b1-440a6.

また、デルゲ版とチョネ版には欠けているものの、次の儀軌文献もある。

16. 『供物供養儀軌 (**Balipūjavidhi, gTor mas mchod pa'i cho ga*)』 Rin chen bzang po 訳. P. No. 4631, Pu 135b1-140b1.

17. 『堆薪儀軌 (*Citāvidhi, Tsha tsha'i cho ga*)』 Dīpaṃkaraśrījñāna, Zla ba'i 'od zer 訳. P. No. 4868, Zhu 177b4-178b5.

18. 『護摩儀軌(*Homavidhi*)』 P. No. 4861, Zu 170a4-171a5.

これらの内容についての詳細は別稿において論じるが、儀軌を説く文献は概ね真言乗の文献として認識されていたことがわかる。

小部集の儀軌文献

これらの文献のほとんどはテンギユルの「秘密疏部」に見られ、その内容は儀礼に関するものである。しかしながら、これらの中でも、『読誦読経前行儀軌』、『罪過懺悔儀軌』、『発心律儀儀軌次第』、『波羅蜜乘甄仏造作儀軌』、『超世間七支儀軌』はテンギユルの「中観部」や彼の「小部集」に収録されており、また『業障清浄儀軌疏⁶』と『一切業障摧破儀軌』は「雑部」に収録されている。このうち『発心律儀儀軌次第』と『業障清浄儀軌疏』を除いた五つの小部なテキストを取り上げ、その儀軌内容を明らかにするとともに、これらの儀軌文献が「秘密疏部」ではなく「中観部」に収められた意味について考察する。

『罪過懺悔儀軌⁷』は、わずか一葉に満たない長さの散文で書かれた短いテキストである。その内容を簡単にまとめると、これまでに行った罪過を師の前で懺悔する具体的儀軌を説いたものである。そこで実際に述べるべき言葉も列挙されており、次のようなものである：

⁶ 本論については、望月 1999c: 138-142, 望月 2005: 115-122 を参照。

⁷ *Itung ba bshags pa'i cho ga*. C. Gi 256a3-259b3; D. No.3974, Gi 266a3-b2; G. Khi 389b5-390a3-b2; N. No.3360, Khi 284a4-b5, P. No.5369, Khi 297a4-b7.

- 1 諸尊の前で自分の名前を述べること
- 2 懺悔のより樂を感受するようになること
- 3 罪過から抜け出す功德と教えの随喜

これらの言葉を述べた上で罪過を懺悔することが述べられていることから、本論は懺悔の前行となる儀軌を述べた著書である。この懺悔というものは、以下のテキストにも見られるように、彼が『菩提道灯論』の最初において言及する『普賢行願讃』に基づく七種供養の一項目である。それは菩提への発心をなす前に行うべき行為をまとめたものである。本論は、この七種供養のうち、実際の懺悔の方法をまとめたのであろう。

『読誦読経前行儀軌』も、わずか一葉に満たない長さの散文で書かれた短い著書である。その内容を簡単にまとめると、経典の読誦するにあたり、七種供養を行い、衆生に対する慈愛の心を起こした後に述べる具体的儀軌を説いたものである。そこで述べるべき言葉には、罪過により理解力が弱っているが、経典を読誦すべきであり、この読誦によりより衆生の耳に世尊の法が伝わることが述べられている。このことは、自分が経典を読んでその内容を理解することよりも、その経典を声を出して読むことにより、その教えが衆生に伝わることを意図するものである。

『波羅蜜乘軌造作儀軌』も、わずか一葉に満たない長さの散文で書かれた短い著書である。そこに説かれる内容を簡単にまとめると、マントラを述べた後に、菩提心を起こして仏像を造ることが述べられている。そこでは関連するマントラの読誦や供物が供えることも言及されているものの、ここで実際に述べるべき言葉としては、苦から衆生を救い出すということの意味する偈頌があげられている。小さな仏像を造る意図は、衆生を苦から解放させることにあることを意味しており、そのことがタイトルの「波羅蜜乘」と関係している。ただし、本論は、今回取り上げた他の著書とは異なり、マントラなどの密教的要素をとまなうものである。「中観部」に挿入されることに違和感が生じるが、おそらくそのタイトルの「波羅蜜乘」に引きずられたのであろう。このことから推測すると、大蔵経編纂の際に、その内容を検討することなく、テキストの分類が行われた可能性もある。

今回取り上げた文献で『超世間七支儀軌』のみ「秘密疏部」と「中観部」あるいは「小部集」という二つのテキスト伝承をもっており、七音節四十パーダの偈頌のスタイルで翻訳されている。その内容は、礼拝 [1-4]、供養 [5-8]、懺悔 [9-12]、随喜 [13-16]、勧請 [17-24]、懇請 [25-30]、廻向 [31-40]となる。これは、『普賢行願讃』の七種供養を偈頌の形で説いたものである。それ故に、実際に行うべき儀軌を示した他の儀軌文献とは異なり、その概要をまとめたものである。

『一切業障摧破儀軌』は、上記の文献とは異なる伝承をもっている。すなわち、上述のようにテンギユルの「雑部」に収められているが、それはナルタン版、北京版、金写版のみであり、デルゲ版、チョネ版では欠けている⁸。その内容は、薬師如来の儀軌を述べたものであり、業障を浄化するための方法として菩提心を堅固にすることや、福德の資糧を集めることが述べられている。このことは、彼の顕教文献と共通する内容であるが、唱えるべきマントラが二箇所述べられている。

まとめ

今回は、Dīpaṃkaraśrījñāna に帰される儀軌文献のうち、「秘密疏部」以外に収録された文献のみを取り上げた。そこで明らかになったことは、『波羅蜜多乘仏造作儀軌』を除いた四つのテキストは『普賢行願讚』の「七種供養」に関連するものであり、同じ著者の『菩提道灯論細疏』にも関連する内容が説かれている。『波羅蜜乘軌造作儀軌』と『一切業障摧破儀軌』にはマントラが含まれており、真言乗の要素が含まれている。

これらの著書が、テンギユルにおいて、「秘密疏部」や「中観部」に収められているのだが、その判断は大蔵経の編集者によるものである。また「中観部」に収められているテキストに関しても、中観思想に関連する内容を説いたものではない。おそらく、そこに厳密な判断基準があったと考えるよりも、いずれかのセクションに配属しなければならぬために、タイトルや同じ著者の他の著書との関係からこれらの儀軌文献は「秘密疏部」や「中観部」に収められたのであろう。

『罪過懺悔儀軌』和訳

インドの言葉で、*Āpattideśanāvidhi*
チベットの言葉で、『罪過懺悔儀軌』
仏に帰依をする。

「師である偉大な持金剛などの十方にお座りのすべての仏と菩薩よ、私を護念下さい。尊者よ、私を護念下さい。私はこういう名前である」と言うことで、無始の輪廻から現在に至るまでの間の食欲と怒りと無痴とによる身口意に関する十不善をなしたことと、五無間罪と、近五無間罪と、別解脱の律義を破ることと、菩薩の学ぶべきことに反することと、真言の教義に反することなどと、簡略にすれば天上と解脱の障碍となり、輪

⁸ これと並んで、同じ著者の『入菩薩行註 (**Bodhisattvacaryāvatārabhāṣya*)』と『般若波羅蜜多撰義灯 (*Prajñāpāramitāpiṇḍārthapradīpa*)』が収録されている。ただし後者は、「般若部」にも収録されている。

廻と悪趣の原因となった過失の罪過が集まったものであるそれらすべてを、師である持金剛などの十方においてになるすべての仏と菩薩と尊者の目の前で懺悔し、告白すべきである。「かくさない。懺悔し、告白をすれば、自身に幸せを感じるようになるであろうが、懺悔せず、告白しなければ、そのようにはならないでしょう」と三度述べられる。

それから、見ること、制御すること、質問することに関する方法である。「よろしいです」と言われる。最初に修行する儀軌は、「私はこういう名前です」と言って、無始以来の輪廻のたくさんの煩惱と放逸などの力により過失の罪過の多くの集まりを持って、[そらが]見えるので、それらを僧の目の前で告白しようとすることにより、「心から把握しようとする」と言い、最後に「罪過から抜け出したことはとても大きな功德です」と言い、「教えの通りになされたことを随喜いたします」と言うべきである。

『罪過懺悔儀軌』 [という] 軌範師ディーパンカラシュリージュニャーナによる著作を完成する。

インドのその賢者自身とチベットの翻訳官で比丘のツルティム・ゲルワが翻訳、校訂し、編集した。

『読誦読経前行儀軌』 和訳

『読誦読経前行儀軌』

仏と菩薩のすべてに敬礼をする。

最初に、まず、法の読誦をなすことを望み、経巻として作られたものを読むことを望む菩薩は、十方の世間界のすべての仏と菩薩に請願して、心であらゆるものを把握し、菩薩摩訶薩の『普賢行願讃』の儀軌による帰命などの七支の在り方としての諸供養で正しく供養をする。それに続いて、一切の衆生に対し慈愛の心を設定し、正しい意樂でそのように思ってから、言葉を三度述べるべきである。すなわち、

世尊がお説きになられた法の一語の意味が、一切法であります。しかし、私は自分の業の罪過により智慧が少なく、理解力が弱っています。その通りであったとしても、世尊の經典を把握してから、それにより自分で読誦をして、その法の声は衆生の耳を通して聞こえ、如来の信頼を獲得できますように。

世尊がお説きになられた法の一語の意味が、一切法であります。しかし、私は

自分の業の罪過により智慧が少なく、理解が弱っている。その通りであったとしても、自分で經典として作られた法を読経して、その法の声は衆生達の耳を通して聞こえ、如来の信賴を獲得できますように。

と三度述べるべきである。

『読誦読経前行儀軌』[という] 軌範師で大賢者であるディーパンカラシュリージュニャーナの著作を完成する。

『波羅蜜乘輒仏造作儀軌』和訳

インドの言葉で、*Pāramitāyānasañcakanirvapaṇavidhi*
チベットの言葉で、『波羅蜜乘輒仏造作儀軌』
仏と菩薩のすべてに敬礼をする。

世尊、ヴァイローチャナ光王、如来、阿羅漢、等正覚に帰命する。同じく、オーン、忍耐があり、等しく、静静で、増益し、非難なく、高く響き、光り輝き、美麗で、偉大な輝きをもち、岸を去り、涅槃された、すべての如来よ、心髄よ、守護尊よ、守護女尊よ、幸あれ。(namo bhagavate / vairocānāya / tathāgatāya / arhate samyaksambuddhāya / tadyathā / om sukṣme same samaye / śānte dānte asamārope anālaṃbhe / taraṃbhaya śobati mahāteja / nīrakule / niribaṇe / sarva-buddha-adhiṣṭhāna-adhiṣṭhite svāhā)

このダラニを泥の上や砂の上で二十一度唱えて、塔を作るべきである。その塔に微塵の数ほどもある十万の塔が作られる。微塵の数ほどもある天と人たちの円満な生を得るであろう。誰かがどこかに生まれる場合、[前] 生を憶えているだろう。速やかに無上等正覚において明らかな悟りを得るであろう。

最初に泥を捏ねて、自分や他者に対する慈愛と悲心により菩提に心を起こし、捏ねるべきである。それから粘土の塊を加持し、究竟におられる世尊、ヴァイローチャナ光王、如来、阿羅漢で等正覚に帰依することを思い、真言の数を前と同じように述べる。それから縁起の真言を唱えて、型に入れるべきである。

それから穀物や花に対し縁起の真言を三度か七度唱える。それから、

この福德によりすべての見えるものを得てから、罪過という敵は制圧され、老と病と死の波の中で乱す存在という湖から有情を引き上げなさい。

と誓願をしなさい。

『波羅蜜乗の仏像を作る儀軌』[という] 軌範師で大賢者のディーパンカラシュリージュニャーナによる著作を完成する。

oṃ ye dharmā hetuprabhā hetdunteṣān tathāgato hyabadat / teṣāñ ca yo nirodha evaṃ
bādī mahāśramaṇa //⁹

『超世間七支儀軌』 和訳

インドの言葉で、*Lokātūtasaptāṅgavidhi*

チベットの言葉で、『超世間七支儀軌』

仏と菩薩のすべてに敬礼する。

吉祥なる金剛薩多に敬礼する。

帰依処と、帰依をなすことと、帰依者は、いつも異なるものと把握されない。それがここでのマントラの帰依であり、「金剛の帰依」と述べられている。[1-4]

供養処と、供養をなすことと、供養者は、いつも種々なるものと把握されない。それが偉大な供養であり、「金剛の供養」と述べられている。[5-8]

懺悔されるものと、懺悔することと、懺悔者は、いつでもヨーガ行者により見られない。自性が清浄で真実を見るそれが、ここでの懺悔の最高である。[9-12]

随喜されるすべてのものと、自分と、随喜そのものは、ヨーガ行者により等しく見られない。[それが、] 正しい随喜である。[13-16]

幻による変化した仏には、幻により変化した身体が備わっているので、こだまのような諸法が説かれることを正しく請願する。[17-20]

変化したものと同じものに掌を合わせてから、お願いして、金剛瑜伽を等しく見て、請願の最高を求める。[21-24]

涅槃された諸仏が生死を変化するように、衆生を変化させるために、入ることを請願

⁹ 本論は、Skilling 2008: 260 に英訳がなされている。

するそのことを知り、出世間するので、それがここで最高の請願と認められる。[25-30]

所縁をとまなうものとして働くすべてのものは世間のものである。円満な菩提は夢に似て、真実を知ることにより夢に似ていることを知る。夢のような存在に住しているのである。[31-35]

衆生たちに利益をなそうとすることで法界のように無量な一切の善を完全に廻向するならば、それをここに廻向することは正しく、すべての仏により正しく賞讃される。[36-40]

『超世間七支儀軌』[という]偉大な軌範師ディーパンカラシュリージュニャーナが吉祥なるサムイェの自然に成就した精舎で著したものを完成する。

『一切業障摧破儀軌』和訳

インドの言葉で、*Sarvakarmāvaraṇaviśuddhikaravidhi*

チベットの言葉で、『一切業障摧破儀軌』

尊主ターラーに敬礼する。

師のお言葉の教えにより心の蓮華が開花し、悲心により相続を潤し、菩提心が堅固になった者が、マンダラなど前行の儀軌をなし、悲心により等正覚を堅固にしてから、福德の資糧を集めるべきである。

om akāro mukhaṃ sarvadharmāṇaṃ ādyanutpannatvata (オーン、阿字門よ、一切法の本来無生なるものよ)

言葉の意味の随念によりできる限り休息すべきである。誓願の随念により真実から動かないように、心そのものが声に変化することなどで色身が明らかに生じるであろう。

青色の顔で、一つの口と、二本の手で、アルラと甘露の鉢をもつ [薬師如来と]、黄色と白の日光と月光の二人の薩埵に礼拝し、清浄な言葉を円満にし、他のすべてを菩提座に置いてから、世尊の法身の記憶を堅固に修習し、正しい師の教誡の [マントラを]

om bhaiṣajye bhaiṣajye mahāṣajye samudgate svahā (オーン、薬師よ、薬師よ、偉大な薬師の来生よ、スヴァーハー)

とできる限り読誦して、世尊の前に座り、賞讃すべきである。世尊であるその尊者自身の十二大誓願を一度述べるべきである。

それに続いて夢の知により善業を努力すべきである。

座間にクンビーラなどの十二大夜叉に供物を供えるべきである。

さらにまた、座間にその世尊自身の経典の経函を読誦し読経すべきである。もし業障がとても大きいのであれば、その経典自身に説かれる儀軌を完成すべきである。

『一切業障摧破儀軌』[という]偉大な軌範師ディーパンカラシュリージュニャーナによる著作を完成する。

そのパンディタ自身とナクツォの翻訳官ツルティム・ゲルワにより翻訳された。

吉祥あれ。

第 17 章 『発心律儀儀軌次第』

はじめに

Dīpaṃkaraśrījñāna の小部文献からは、インド仏教における同時代の実践的儀軌を知ることができる。本章では、『発心律儀儀軌次第 (Cittotpādasamvaravidhikrama)』を取り上げ、当時のインド・チベットにおいて発心と律儀の儀軌がどのように実践されていたのかを明らかにする。

彼の著作の多くが偈頌で書かれた小論であるが、本論は、散文で書かれた著作である。その内容は、以下に示すように、『瑜伽師地論』の「戒品」からの引用で構成されており、彼がチベットに伝えようとした受戒儀軌が示されている。そこには彼独自の思想的解釈は見られないが、彼が滞在していたインドのヴィクラマシーラ僧院で行われていた受戒儀軌を伝えるものとも言える。

菩薩律儀の系譜

チベット大蔵経のテンギュルには、藤田光寛がすでに指摘するように¹、発心と律儀に関する次の著書を見ることができる。

- 1 Nāgārjuna 『発心儀軌²』
- 2 Bodhibhadra 『菩薩律儀儀軌³』
- 3 Jitāri 『発菩提心誓願受持儀軌⁴』
- 4 Dīpaṃkaraśrījñāna 『発心律儀儀軌次第⁵』
- 5 Abhayākara Gupta 『菩薩律儀受持儀軌⁶』

これらの著作に対する Tsong kha pa の紹介についても、藤田により論じられており、それをまとめると、Nāgārjuna の著作は発心の儀軌が説かれているが、受戒の儀軌は説かれていない。Bodhibhadra と Abhayākara Gupta の著作は、Nāgārjuna と Asaṅga の教義を融合したものであり、Dīpaṃkaraśrījñāna の著作もそれに従っている。Jitāri の著作は、発心と誓願受持の儀軌を説いたものとなる⁷。詳細な内容については個々のテキスト

¹ 藤田 1983: 100-99.

² *Bodhicittopādavidhi*. Tib. D. Nos. 3966, 4492, P. Nos. 5361, 5405.

³ *Bodhisattvasamvaravidhi*. Skt. 藤田 2000, Tib. D. Nos. 3967, 4491, P. Nos. 5362, 5404.

⁴ *Bodhicittopādasamānavidhi*. Tib. D. Nos. 3968, 4493, P. Nos. 5363, 5406.

⁵ *Cittotpādasamvaravidhikrama*. Tib. D. Nos. 3969, 4490, P. Nos. 5364, 5403.

⁶ *Bodhisattvasamvaragrahaṇavidhi*. Tib. D. No. 3970, P. No. 5365.

⁷ Tatz 1986: 138-139, 藤田 1983b: 99-98.

トのさらなる解説を要するが、Nāgārjuna の発心の儀軌と Asaṅga の『菩薩地』「戒品」の受戒の儀軌が受容されていたことがわかる。

これらの著作のうち、Bodhibhadra と Jitāri は Dīpaṃkaraśrījñāna の師とされる論師であり、前者は中観思想の師と『菩提道灯論細疏』に述べられている⁸。この三師の著作を比べると、Tsong kha pa が指摘するように、Dīpaṃkaraśrījñāna の著作は Bodhibhadra の著作と関連するが、Jitāri の著作は異なる構成を持っている。

このボーディバドラの儀軌において受戒儀軌の典拠となった「戒品」では、菩薩戒が九項目により解説され、その第二の一切戒を三聚浄戒により説明した後に、菩薩の受戒法が具体的な実践行為とともに述べられる⁹。Bodhibhadra は、「戒品」をそのまま引用するかたちで儀軌を述べており、Dīpaṃkaraśrījñāna の儀軌も同様である。ただし、後者には前者では引用されない「戒品」の儀軌も述べられているので、孫引きではなく、「戒品」から直接に引用されたことになる。

これらのことから、Nāgārjuna の発心儀軌が最初にあり、それに基づいて Jitāri の儀軌が著されたと言える。それに対して、Bodhibhadra の儀軌は Nāgārjuna の儀軌を参考にするものの、それに「戒品」の受戒儀軌を加えており、Dīpaṃkaraśrījñāna の儀軌は、Bodhibhadra の儀軌に基づいて二つの儀軌を説示している。また、Dīpaṃkaraśrījñāna の儀軌は、インドにおいて受け入れられた儀軌を再現したというよりも、彼が Bodhibhadra から受け継いだ儀軌であろう。

『発心律儀儀軌次第』の成立について

『発心律儀儀軌次第』は、そのチベット語訳のみが現存する散文で書かれたテキストである。その内容が先行する儀軌を要約する形で著されていることから、本論は著者独自の受戒儀軌に対する解説書というよりも、当時のインドにおいて実際に行われていた儀軌を伝えている。

その翻訳についてはコロフォンに、著者と dGe ba'i blo gros が翻訳し、さらに著者と Tsul khriṃs rgyal ba が訂正し、確定した、と記されている。それがどのような形態で行われたのかについての情報は記されていないが、インドの言葉で著述したテキストが存在し、それを筆者がチベット人とともにチベット語に翻訳したというよりも、著者が口述したものを同時にチベット語に翻訳したのであろう。ただし、翻訳の改訂があることから、その翻訳が一度チベット語で筆記された後に、別のチベット人とともに改訂された、と考えることもできる。

⁸ 望月 2015a: 131-132.

⁹ 藤田 1989: 42-45.

本論の著述年代と場所などに関する情報は、コロフォンには何も記されていないが、前記によるとネパール滞在時に著されたことになる¹⁰。また、同じ著者の『菩提道灯論細疏』と『入菩薩初学道教示』に引用されていることから、これらの著作よりも前に著されたものである。この二書の奥書にはその著作年代を示すような情報はないが、いずれもが著者自身と Tshul khriims rgyal ba であり、本論の訂正者と同じである。それ故に、訂正の時期は、これらの二書と近いのかもしれない。

『発心律儀儀軌次第』の構成

本論の主題は、そのタイトルが示すように、発心と律儀の儀軌であり、テキストの構成も基本的にこの二つからなるが、その冒頭に請願と帰依の儀軌が添えられている。その内容を、儀軌文に従って区分すると、次のようになる。

- 1 三帰依
- 2 請願¹¹
- 3 発菩提心
 - 3.1 衆生利益の発心
 - 3.2 菩提心の拡大
- 4 受戒
 - 4.1 受戒の懇請
 - 4.2 受戒の問い
 - 4.3 受戒の懇請
 - 4.4 菩薩戒の承認
 - 4.5 戒の授与
 - 4.6 戒の領受
 - 4.7 二資糧の増大
 - 4.8 受戒の制限

これらの内容を Nāgārjuna、Bodhibhadra の儀軌文献の内容と比較してみる。前者は発菩提心の儀軌を、(1) 礼拝、(2) 懺悔、(3) 随喜、(4) 三帰依、(5) 身供養、(6) 発菩提心、

¹⁰ Eimer 1979: 247.

¹¹ 白崙 1990: 52 は、この前に「礼拝」の項を設けるが、テキストの本論ではないと判断し、項目を立てない。

(7) 廻向の七種供養に基づいて構成されたものであり¹²、後者は、(1) 懺悔、(2) 三帰依、(3) 発菩提心、(4) 廻向の四種供養に「戒品」の受戒儀軌を前後に添えた構成になっている¹³。いずれもが、支分の構成要素の相違はあるものの、七種供養に基づいて儀軌が構成されていることがわかる。それに対して、本論は、冒頭の敬礼文を礼拝として数えるならば、(1) 礼拝、(2) 請願、(3) 三帰依、(4) 発菩提心の四支として数えることもでき¹⁴、前二儀軌と同じように、七種供養を前提としていると考えることもできる。もちろん、著者は『菩提道灯論細疏』において七種供養について詳論しているのだが、本論では前二儀軌に見られる懺悔が欠けている。請願と三帰依も、普通の儀軌の前行と考えるならば、七種供養に基づいて本論が構成されているとも断定できず、そのタイトルが示すように、発菩提心と受戒の二つの儀軌を説示しただけの著書である。ただし、前半の発菩提心の儀軌については、Nāgārjuna の儀軌と Bodhibhadra の儀軌と重なるものであり、後半の「戒品」に説かれる受戒儀軌への依拠については、Bodhibhadra のものとほぼ同じである。このことから、本論は Bodhibhadra の『菩提律儀儀軌』に基づいて著されたのは明らかである。

次に、これらの先行文献に見られない *Dīpaṃkaraśrījñāna* 独自の著述に本論の独自性を見ることができる。まず、最初の請願儀軌については、他の儀軌文献には見られないものである。その前文に「敬礼と供養などの儀軌が先行する」と述べていることから、他の支分の儀軌は述べられないものの、七種供養を前提とした儀軌文となっている。また、儀軌文については、後に出てくる「戒品」の文章に類似したものである。

続いて、発心儀軌の末尾に、菩提心を損なう四法と損なわない四法が述べられている。これは、その典拠については言及がないものの、同じ著者の『菩提道灯論細疏』において本論が引用された後の『迦葉品』の引用に見られる文章である¹⁵。これに続く『観自在所問七法経』への言及も同論と重なる部分である¹⁶。「戒品」の最後の受戒儀軌を引用した後に、Bodhibhadra は、「戒品」の後半で説かれる自誓受法を引用するものの¹⁷、本論では、福德と知恵の二資糧の拡大に言及する句が述べられる。これは、「戒品」に説かれるものでも、Bodhibhadra が言及するものでもない。

また、本論では、ここで「戒品」に説かれる受戒すべきではない者が言及されるが、それは Bodhibhadra の儀軌では引用されない句である。すなわち、両論の最後の「戒

¹² 白寄 1990a: 46.

¹³ 白寄 1990a: 52.

¹⁴ 白寄 1990a: 52-53.

¹⁵ 『迦葉品 (*Kāśapaparivartasūra*)』(長尾 1974: 9-11) が引用される。この引用は、同じ著者の『中観優婆提舍開宝篋』(Mochizuki 1996a: 65, 67, 宮崎 2007: 87-88) と『大経集』においても見られる。

¹⁶ 望月 2015a: 74-75.

¹⁷ 藤田 1983b: 91-90, Dutt 1978: 124-125, 荻原 1971: 181-182, 藤田 1991a: 20-22.

品」からの引用は異なるものとなっている。

以上のように、Bodhibhadra の儀軌と Dīpaṃkaraśrījñāna の儀軌は、テキストの最初と最後、および発心儀軌と受戒儀軌のつなぎ方が異なっている。本論は Candragomin の『菩薩律儀二十論 (Bodhisattvasaṃvaraviṃśaka)』と「戒品」に言及して結ばれているが、前者に対しては、Bodhibhadra が注釈書『菩薩律儀二十細疏(Bodhisattvasaṃvaraviṃśakapañjikā)』を著している。そのことも含めて、本論が Bodhibhadra の儀軌の解釈に依っていたことは明らかである。同じ著者の『菩提道灯論細疏』においても同論と彼の『三昧資糧論¹⁸⁾』の引用が多く見られることから、Dīpaṃkaraśrījñāna にとって Bodhibhadra は偉大な師であったことは明らかである¹⁹⁾。

『発心律儀儀軌次第』和訳

インドの言葉で、*Cittotpādasamvaravidhikrama*

チベットの言葉で、『発心律儀儀軌次第』

マンジュシュリー童子に敬礼する。

一切の悪趣を滅し、一切の障碍より解放され、正等覚の位を受けられた菩薩に帰依する。

正等覚者と正法と菩薩の衆会についても、そのように菩薩の律儀の次第を書くべきである。

そこで最初に、仏と菩薩のすべてに対する敬礼と供養の儀軌などが先行するので、善知識に説く想が起きてから、次のように請願をなすべきである。

例えば、以前の如来で阿羅漢の正等覚者たちと菩薩の大地におられる者たちが最初に無上正等覚に御心を起こしたように、私、「この名前」の者も、軌範師による無上正等覚への発心を請願する。

と三度まで述べられる。

そのように請願してから、三宝への帰依は、

¹⁸⁾ 望月 2005d 参照。

¹⁹⁾ 望月 2006b 参照。

軌範師に懇願します。私、「この名前」の者は、この時から把握されてから、菩提座にいる間は、二足の最高である仏世尊に敬礼いたします。

軌範師よ、懇願します。私、「この名前」の者は、この時から把握されてから、菩提座にいる間は、諸法の最高である寂靜で欲望を離れた諸法に敬礼いたします。

軌範師よ、懇願します。私、「この名前」の者は、この時から把握されてから、菩提座にいる間は、衆会の最高である聖なる菩薩で不退転の菩薩のサンガに敬礼いたします²⁰。

と三度述べる。

そのように特別な帰依をなしてから、世尊シャーキャムニと十方の仏と菩薩のすべてを心により認識して、敬礼と何らかの財物の供養などをなし、軌範師の前でなして、右膝頭を地面に着けるか、屈んで座り、掌を合わせてから発心をなす。

十方にいる仏と菩薩のすべてよ、私は懇願します。軌範師よ、懇願します。私、「この名前」の者は、この生と他の生において布施の自性と戒の自性と修習の自性の善根を私がなしたことと、なしていることと、なすことを随喜するその善根により、以前の如来で阿羅漢の正等覚者たちと、大地におられる偉大な菩薩たちが無上正等覚に御心を起こされたように、私、「この名前」の者は、この時に把握されてから菩提座にいる限り無上正等覚に発心をするべきである。未だ越えていない衆生を越えさせる。解脱していない者たちを解脱させる。安穩に至っていない者たちを安穩にする。完全な涅槃に至っていない者たちを完全に涅槃させる²¹。

と三度述べるべきである。

そのように軌範師がいなくても、自分が菩提に発心する儀軌は、如来であるシャーキャムニと十方の如来のすべてを心に想って、敬礼と供養の儀軌をなしてから、懇願と「軌範師」と言う言葉を除いた帰依などの次第を前のようになす。そのように発心した人の菩提心を広げるために昼に三度、夜に三度、

²⁰ この句は、Nāgārjuna と Bodhibhadra の儀軌を短縮したものである。藤田 2000: 241, 245, 藤田 1983: 93-92.

²¹ この句は、多少の相違はあるが、Nāgārjuna と Bodhibhadra の儀軌と同じである。藤田 2000: 241-242, 245-246, 藤田 1983b: 92. ただし、この儀軌文は、次に出てくる『瑜伽師地論』「戒品」の儀軌に類似したフレーズなので、「戒品」に基づいて作られた儀軌文であるのならば、Nāgārjuna の儀軌は「戒品」以後のものとなり、その著者性に問題があることになる。もちろん「戒品」の著者が Nāgārjuna の儀軌を参考にした可能性もある。

仏と法と僧の最高に対して菩提にいる限り私は敬礼する。私は、これらの布施などの行為により有情利益のために悟りを完成させなさい²²。

と言い、菩提に発心する。

菩提心を損なう四法を退けるべきで、四法とは何かと言えば、師と供養に値する者を欺くことと、他者が後悔する場ではないものに対して後悔させることと、発心した菩薩に対して忿怒により相応しくない言葉を述べることと、一切衆生に対して偽善と詐欺をなすことである²³。

菩提心を損なわない四法を学ぶべきで、四とは何かと言えば、生命のためにも想った通りに虚偽を述べないことと、一切衆生に対する想いを浄化することによりとどまるべきで、偽善と詐欺によるのではなく、発心の菩薩に対して師の想いを起こし、善を確立したそれらの衆生たちは無上正等覚を確立することで、声聞と独覚にはない。特に、現観を速やかに得ようとする菩薩は、『聖観自在所問七法』という大乘経を学ぶべきである²⁴。菩提心を利益は、『入法界品』などから知るべきである。

そして、最初に儀軌の通りに菩提心を起こした菩薩が一切の菩薩の戒の学処を学ぼうとすることで、菩薩は菩薩律儀に住し、菩薩の律儀の儀軌を知り、菩薩の律儀を与える門から弟子を受け入れる能力がある善知識に敬礼して、その御足に触れてから懇請することが²⁵、

軌範師よ、あなたから私が菩薩の戒律を正しく受けることをお願いします。それに害がなければ、私に慈愛のために、少しでもお聞きになり、授けて下さい²⁶。

と、そのように三度の間、懇請するべきである。

²² この句は、同じ著者の『菩提道灯論細疏』（望月 2015a: 71, 74）と『入菩薩初学道教示』（望月 2005a: 33, Tib. D. No. 3952, Khi 296b7-297a1）においても引用される。このことから、この儀軌文は、「戒品」などからの引用にからなる他の儀軌文とは異なり、著者のオリジナルと認識されていたことになる。

²³ この四法と次の四法については、*Kāśapaparivarta*, Staël-Holstein 1926: 6-10, 長尾、桜部 1974: 9-11. またこの句は、同じ著者の『菩提道灯論細疏』や『開宝篋』においても引用される。望月 2015a: 74, n. 132.

²⁴ *Avalokiteśvaraparipṛcchāsaptadharmakasūtra*. Tib. P. No. 817. 同経は、本論の訳者と同じ、*Dīpaṃkaraśrījñāna* 自身とゲウエ・ロドゥにより翻訳されている。また、同じ著者の『菩提道灯論細疏』（望月 2015a: 75, 86）と『中観優婆提舍開宝篋』（Mochizuki 1996a: 65-66, 宮崎 2007: 87）においても言及される。

²⁵ 宮崎 2000: 101-102.

²⁶ 宮崎 2000: 102. この儀軌文は *Bodhibhadra* においても引用されるが（藤田 1983: 95-94, 藤田 2000: 239）、その前文については、*Bodhibhadra* のものは「戒品」（Dutt 1978: 105, 荻原 1971: 153, 藤田 1989: 42）と一致するが、本論では書き改められている。

善男子よ、あなたは聞きなさい。あなたは、次のように、まだ越えていない衆生を越えさせ、解脱していない者たちを解脱させ、安穩に至っていない者たちを安穩にさせ、涅槃していない者たちを涅槃させ、仏の種の相続を中断させないことを望んでいるのか。それからあなたは発心を堅固にし、誓願を堅固にすべきである。他者を導くためではないのか。他者の強要により受けようとするのではないのか²⁷。

と質問をする。

その後、如来であるシャーキャムニの仏像や図像の前に座り、如来であるシャーキャムニなどの十方の世間界のすべてにいる仏と菩薩のすべてを現前に思い、何れかの効力の後の五供養により供養し、敬礼し、その直後に高座に座った善知識に対して師の想により敬礼して、右膝を地につけるか、屈んで座り、掌を合わせてから善知識に対して菩薩の律儀を受ける者は、次のように懇請すべきである。

軌範師よ、菩薩戒の律儀を正しく受けることを私に速やかに授けるようお願いします²⁸。

と、そのように三度、善知識をお願いしてから、それから善知識は座るか、起きるかして、彼は菩薩の律儀を受ける彼らに、次のような質問をなすべきである。

「この名前」のあなたは、菩薩なのか。菩提への誓願を懇請したのか。

と尋ねたならば、受けるその菩薩は、

懇請した²⁹。

と承認すべきである。それから「無尽で、無量で、無上の福德の大宝となった一切の仏の功德の大宝が生まれる場所の菩薩の律儀を遠からずに得るであろう」と思い、心がとても清浄になることで喜びをもつ者は、何も言わずに、掌を合わせて、座るべきであ

²⁷ 宮崎 2000: 103. 宮崎が指摘するように、この部分は「戒品」のチベット語訳にしか存在せず（藤田 1989: 42-43）、*Bodhibhadra* の儀軌には見られない。それ故に、本論と「戒品」のチベット語訳の距離を縮めるものの、*Bodhibhadra* の儀軌との距離を遠ざけるものでもある。

²⁸ 宮崎 2000: 103. この儀軌文は、前文は多少異なるものの、*Bodhibhadra* の儀軌（藤田 1983b: 94, 2000: 239）ならびに「戒品」（Dutt 1978: 105, 荻原 1971: 153, 藤田 1989: 43）にほぼ一致する。

²⁹ この問答は、*Bodhibhadra* の儀軌文（藤田 1983: 94, 藤田 2000: 239-240）ならびに「戒品」（Dutt 1978: 105, 荻原 1971: 153, 藤田 1989: 43）にほぼ一致する。

る。

それからその善知識が三時の一切の菩薩の学処のすべての基本と戒である律儀戒と撰善法戒と衆生利益戒と概略を弟子に理解させるべきである。

一切の菩薩の学処の基本とそれらの一切の菩薩戒の何れかを私から受けることを望むのか。

と弟子に尋ねるべきである。

彼が、

そのように受けることを願います。

ということが承認されたならば、菩薩の律儀を与えるべきである。

尊者や長老や善男子よ、「この名前」のあなたは、この名前の菩薩である私から、過去のすべての菩薩の学処の基本となったものと、戒となったものと、まだ現れていないすべての菩薩の学処の基本となるものと、戒となるものと、現在の十方の世間界における現在のすべての菩薩の学処の基本となっているものと、戒となっているものの学処の基本と戒であるもので、過去のすべての菩薩が学び、未来のすべての菩薩がこれから学び、十方の現在のすべての菩薩が現在学んでいる菩薩の学処の基本と菩薩戒のすべてである律儀戒と撰善法戒と衆生利益戒を受けるか。

と聞き、彼も、

受けます³⁰。

と言い、そのように軌範師が三度「受けるか」と述べ、弟子は、「明らかに受けます」と三度述べることで律儀を受けるであろう。

それからその善知識が弟子に菩薩の律儀を与えてから、十方の仏と菩薩のすべてに五支による敬礼の前行により掌を合わせて、このように三度述べるべきである。

³⁰ この問答も、続く三度の繰り返しも含め、Bodhibhadra の儀軌（藤田 1983b: 94-93, 2000: 240）ならびに「戒品」（Dutt 1978: 105-106, 荻原 1971: 153-154, 藤田 1989: 43）にほぼ一致する。

この名前の菩薩は、私、この名前の菩薩から、菩薩戒の律儀を正しく受けるべきことを三度にわたり正しく受けています。この名前の菩薩は、菩薩戒の律儀を正しく受けて、私、「この名前」の者が見ており、聖者の最高の者は見えなくても、十方の最後の世間界が掘り出す一切法を見る御心がすべてのものを知ることを懇請します³¹。

と三度にわたり十方の仏と菩薩たちに述べて、敬礼してから師と弟子は起き上がるべきである。

それから起きて、善知識は菩薩の律儀を受けた菩薩に次のように述べるべきである。

菩薩である「この名前」のあなたは聞きなさい。これは法性である。何時であれ菩薩が菩薩の律儀を正しく受ける行為を述べたことが完成したその時に、十方の一切の仏国土において仏と菩薩たちに次のような予兆が生じるであろう。それらの仏と菩薩が、次のように、「何れかの仏国土においてこの名前の菩薩がこの名前の菩薩から、菩薩の律儀の正しい領受を受けた」と正しく知るであろう³²。そして、それらの仏世尊とその菩薩たちが、法の慈愛により子と兄弟の想をなし、そのように意図することで、福德と知恵の集積を広げるであろう。

と述べるべきである。

それからその善知識は、その菩薩にこのように述べるべきである。

「この名前」の菩薩よ、あなたは聞きなさい。この菩薩の律儀を正しく受けることを信のない者たちの前で述べるべきではない。何故ならば、信のない者たちに菩薩の律儀を明らかに示したならば、それらの信のない衆生は菩薩の律儀を信じないので、捨ててしまうので、それ故に、菩薩が菩薩の律儀にとどまるために福德の集積をとまなうのと同じくらい、福德ではないものの束をそれらの信のない者たちはともなうであろう。何故ならば、菩薩は、衆生を一切苦から護るべきなので、他者を罪から退けるべきで、それ故に、最もよい菩薩は秘密にするべきである³³。

³¹ この儀軌文も、Bodhibhadra の儀軌（藤田 1983b: 91, 2000: 242-243）ならびに「戒品」（Dutt 1978: 106, 荻原 1971: 154, 藤田 1989: 44）にほぼ一致する。

³² この儀軌文も、Bodhibhadra の儀軌（藤田 1983b: 91, 2000: 243）ならびに「戒品」（Dutt 1978: 106, 荻原 1971: 157, 藤田 1989: 44）にほぼ一致する。

³³ この儀軌文は、「戒品」（Dutt 1978: 107-8, 荻原 1971: 154-155, 藤田 1989: 46）にほぼ一致するが、Bodhibhadra の儀軌では言及されない。

それから学処の根本である利益の場所となっている律儀を滅する原因が示され、罪惡をなす過犯である煩惱をともなうものと煩惱をともなわないものも説かれるべきである。善知識がまとめた『菩薩律儀二十論³⁴』と『菩薩地』の「戒品」を解説すべきである。

『菩薩発心と菩薩律儀の儀軌』という偉大な軌範師シュリーデーパンカラジュニャーナによる著作を完成する。

インドのそのパンディタ自身と主任翻訳官で比丘のゲウエ・ロドゥが翻訳した。前のそのパンディタ自身と翻訳官で比丘のツルティム・ゲルワが訂正し、確定した。

³⁴ 藤田 1983b, 藤田 2002 を参照。

第 18 章 種姓誓願

はじめに

チベット大蔵經のテンギユルの「雑部」には、四つの *Dīpaṃkaraśrījñāna* の著書が収められている。すなわち、『入菩薩行積』と『般若波羅蜜多撰義灯』と『一切業障摧破儀軌』と『種姓誓願 (*Kulapraṇidhāna*¹)』である。このうち、前三者は並んで収録されているのに対して、最後の著作だけは離れている。これは、雑部の末尾に、誓願、廻向、善樂偈、吉祥偈がまとめられており、その他の誓願文と並べられているからである²。そのうち、誓願文をあげてみると、次のようになる。

1. *Bhadracaryāpraṇidhānarāja* (D. 4377, P. No. 5924)
2. **Maitrīpraṇidhāna*³ (D. 4378, P. No. 5925)
3. **Suvarṇaprabhāsottamasūtrendrapraṇidhāna* (D. 4379 P. No. 5926)
4. *Rājasuvarṇabhujapraṇidhāna* (D. 4380)
5. *Subhāparipṛcchāsūtrodbhavapraṇidhāna* (D. 4381)
6. **Dānānvayapraṇidhāna* (D. 4382, P. No. 5927)
7. Nāgārjuna: **Rājākathāratnavalināmodbhavapraṇidhānagāthāvimśaka* (D. 4388, P. No. 5928)
8. Śāntideva: **Bodhisattvacaryāvatārodbhavapraṇidhāna* (D. 4383, P. No. 5929)
9. Nāgārjuna: *Vajrapraṇidhāna* (D. 4384)
10. Nāgārjuna: *Bodhyākarapraṇidhāna* (D. 4385, P. No. 5930)
11. Candragomin: *Candragomīpraṇidhāna* (D. 4386, P. No. 5931)
12. Nāgārjuna: *Nāgārjunapraṇidhāna* (D. 4387, P. No. 5932)
13. *Dīpaṃkaraśrījñāna*: *Kulapraṇidhāna* (D. 4389, P. No. 5933)
14. Buddhaśrījñāna: **Jinamārgāvatārodbhavapraṇidhāna* (D. 4391, P. No. 5935)
15. Parahitaḥṣoṣa Āraṇyaka: *Praṇidhānasaptati* (D. 4392, P. No. 5936)
16. Kamalaśīla: **Praṇidhānaparyantadvaya* (D. 4393, P. No. 5937)
17. *Susiddhikaratantrabhāṣitapraṇidhāna* (D. 4394, P. No. 5938)
18. *Praṇidhānaratnarāja* (D. 4395, P. 5100)
19. *Agracaryāpraṇidhāna* (D. 5396, P. No. 5939)

¹ *Rigs kyi smon lam*. Tib. C. Nyo 322a4-b4, D. No. 4389, Nyo 319a4-319b2, G. Mo 381b4-382a5, N. No. 3925, Mo 299a4-299b3, P. No. 5933, Mo 306b5-307a5.

² ただし、これらの誓願文には、カンギユルの「秘密部」の末尾と「律部」に収録されているものもある。

³ 釋舍 1977: 3.

20. *Prajñāpāramitāpakṣaprañidhāna* (D. 5397, P. No. 5940)

これらの誓願文のうち、最初の著作は『入法界品⁴』、第三は『金光明最勝王經⁵』、第五は『善臂所問經⁶』、第七は Nāgārjuna の『宝行王正論⁷』、第八は Śāntideva の『入菩提行論⁸』、第十四は Buddhaśrījñāna の『入勝者道⁹』、第十七は『蘇悉地羯羅經¹⁰』からの抜粋であり、元のテキストから誓願文として独立した文献も含まれている¹¹。

このうち、第七の『誓願二十頌』については、Dīpaṃkaraśrījñāna が『菩提道灯論細疏』において、

聖ナーガールジュナも『誓願 [二十頌]』に、

衆生たちがここに何人かいて[も、その中の]一人の衆生が救われなければ、
無上なる菩提を得ていても、その限り彼のために行をなすべきである。

とお説きになられている¹²。

と引用している。もちろん、この偈は同じ著者の『宝行王正論』第五章第八十五偈に相当するわけであるが¹³、彼は『宝行王正論』ではなく、わざわざ『誓願二十頌』として引用している¹⁴。このことから、Dīpaṃkaraśrījñāna の時代に『誓願二十頌』が『宝行王正論』から独立して流布していたことを示している。

また、第十五の『七十誓願』については、テンギユル所収のテキストのコロフォンでは Parahitagoṣa Āraṇyaka の著書としているが、『菩提道灯論細疏』では、

さらにまた、彼の誓願は退くことがないものである。すなわち、『聖普賢行願讚』

⁴ *Gaṇḍavyūhasūtra*. Skt. Suzuki 1934-1936, Tib. D. No. 44, P. No. 761, Chins. T. No. 278, 279, 293-297.

⁵ *Suvarṇaprabhāsottamasūtreṇḍra*. Skt. Nobel 1937, Tib. D. Nos. 556, 557, P. Nos. 175, 176, Chin. T. Nos. 663-665.

⁶ *Subhāhupariṣṭchāsūtra*. Tib. D. No. 45.26, P. No. 460.26, Chin. T. No. 310.26.

⁷ *Rājāparikathāratnavali*. Skt. Hahn 1982, Tib. D. No. 4158, P. No. 5658, Chin. T. No. 1656.

⁸ 同論の第三「菩提心掇受品」第六偈から第九偈、第十四偈後半から第二十一偈と第十章「廻向品」第一偈から第五十七偈までが抜粋されている。ただし、第十章第十六偈の位置は第二十二偈の後に入る。

⁹ *Jinamārgāvatāra*. Tib. D. No. 3964, p. No. 5359.

¹⁰ *Susiddhikaramahātantrasāadhanopāyikapāṭala*. Tib. D. No. 807, P. No. 431, Chin. No. 893)

¹¹ 釈舎 1977: 1.

¹² 望月 2015a: 145.

¹³ すなわち、『誓願二十頌』は『宝行王正論』の第五章第六十五偈から第八十六偈に相当するだけでなく、テンギユルには『宝行王正論』の第五章第六十五偈から第八十七偈に相当する『儀軌二十頌 (**Ratnāvalyudbhavasaptāṅgavidhigāthāviṃśaka*)』という文献も存在し、前者は Dīpaṃkaraśrījñāna の小部集に収録されている。瓜生津 1974: 311-314, 津田 2010.

¹⁴ 同じ『菩提道灯論細疏』では、廻向の解説において「ナーガールジュナの二十の福德の資糧」と述べており、これも『誓願二十頌』のことである可能性もある。望月 2015a: 108.

や、『聖十地経』の十大願や、『仏説薬師如来本願経』の十二大願や、軌範師アシュヴァゴーシャが著した『七十誓願』などである¹⁵。

と言及され、『七十誓願』の著者を *Aśvaghōṣa* とみなしている¹⁶。後のチベットでは *Aśvaghōṣa* の多くの異名が伝えられているが¹⁷、*Parahitaghōṣa* も異名の一つであったのか、あるいはテキスト伝承の過程で *Aśvaghōṣa* から変わったのか、それとも *Dīpaṃkaraśrījñāna* が誤って理解していたのかは明らかではない。しかしながら、*Aśvaghōṣa* の著作問題が *Dīpaṃkaraśrījñāna* の回りに複数存在していたことを示している¹⁸。

本章では、これらの誓願文のうち、第十の *Dīpaṃkaraśrījñāna* の誓願文について考察を行う。

『種姓誓願』のタイトル

本論のタイトルのサンスクリットは、*Kulapraṇidhāna* とあり、そのチベット語訳は *rigs kyi smon lam* とある。サンスクリットの *kula* の用例については、すでに今西順吉が考察しており¹⁹、それをまとめると、(1) 家族、(2) 家族の住む場所、(3) 良家、(4) 群・種族・カーストとなり、その構成員は、血縁関係にある親族に限定されず、奴婢までも含んでいる。また、*kula* はカースト (*jāti*) と姓 (*gotra*) の中に位置する、とされている。

このサンスクリットの *kula* に対するチベット語訳は *rigs* となっている。この *kula* に対する訳語の用例を『翻訳名義大集 (*Mahāvvyūtpatti*)』により見てみると、次のようになる。

1. No. 79, *ikṣvāku-kula-nandanah, bu ram shing pa'i rigs dhga'*, 甘蔗王種喜
2. No. 1011, *kulamkulaḥ, rigs nas rigs su skye ba*, 有上品、家々
3. No. 3862²⁰, *kṣatriya-mahāsāla-kulam, rgyal rigs shing sā la chen po lta bu*, 大力王種
4. No. 6797, *kula-śulkam, gnyod*, 結納金
5. No. 7611²¹, *rāja-kula, rgyal po gzhugs pa*, 王座、王宮

¹⁵ 望月 2015a: 108.

¹⁶ ただし、*Dīpaṃkaraśrījñāna* が翻訳した *Bhavya* の『中観宝灯論』では、その著者は *Mātrceta* とされている。Lindtner 1984: 102-104, 1988.

¹⁷ 小林 1991.

¹⁸ すなわち、*Dīpaṃkaraśrījñāna* と *Aśvaghōṣa* の『十不善業道説示』の同一内容であること、*Dīpaṃkaraśrījñāna* が注釈を著した『根本過犯注』では、本偈の著書を *Aśvaghōṣa* とはしないことである。

¹⁹ 今西 1986.

²⁰ *Mahāvvyūtpatti* (=MV) Nos. 3863-3864 は、*kṣatriya* を *brāhmaṇa*, *grhapati* に入れ替えた用例である。

6. No. 8380, kula-dūṣakaḥ, khyim sum 'byin pa, 処俗家
 7. No. 8465²², sabhojana-kula-niṣadyā, nyal po byed pa shom pa'i khyim na gnas pa,
 知有食家強座
 8. No. 8508, kula-caryā, grong rgyu ba, 遊城
 9. No. 8521, kula-sīkṣā-bhaṅga-pravṛttiḥ, khirms dral te gron du 'gor, 学家受食
 10. No. 9204, kula-paryāyeṇa..., khyim rim gyis..., 家族の次第により
 11. No. 9413, kula-pratisamvedakaḥ, khyim so sor bsngo ba, 一分付各家

これらの用例から、種、家という意味を取ることができるが、前者に対する訳語として種姓を意味する rigs をあてているのに対して、後者には明確に家を意味する khyim をあてており、その意味により訳語を使い分けていることがわかる。

本論のチベット語訳タイトルのみから想像してしまうと、そのサンスクリットのタイトルを gotra, jāti, varṇa などを想定してしまいそうだが、ここでは kula の語が付されている²³。しかしながら、その意味するところは、来世での生まれを意味する言葉であり、gotra, jāti, varṇa でも意味を含むものになる。もちろん、その誓願される kula は良家を意味するものであり、本論で「法をもつ家 (chos ldan rigs)」というということになる。すなわち、本論のタイトルが意味しているものは、来世においても仏教徒の家に生まれることを誓願する、ということになる。

『種姓誓願』の構成

本論は、三十一パーダ偈頌で著された小著であり、四有の輪廻観に基づき、来世でも菩薩行を行うことを説いたものである。

まず、1-5 では死有から中有に至る過程が述べられており、中有においても知恵を理解すべきことが説かれている。死の瞬間に、五根を明らかにすることで、断末魔の苦から解放されることが示される。また、この状態では、善趣のために自らが何かを行うことはできないので、知恵を把握しなければならない。

6-10 では、中有から生有に至る過程を説が説かれており、自在を得ることで再び人に生まれるべきことが説かれている。そこでは、来世において菩薩行を実践するために

²¹ MV, No. 7612 は rāja を yukta に入れ替えた用例であり、No. 6434, 6436 はこの両者に付加語をつけた用例である。

²² MV, No. 8466 は、niṣadyā を sthāna に入れ替えた用例である。

²³ もちろん、前述のように、kula にもこれらの意味があるので問題はないのであるが、彼の『菩提道灯論』とその自注や、二つの『心髓撰集論』に見られるサンスクリットのタイトルの問題のように、タイトルのサンスクリットが後で付された可能性も排除できない。

は、仏教徒の種に生まれなければならない。

11-15 では、来世の本有が説かれており、仏教徒の家系に生まれるだけでなく、仏道修行を实践する環境づくりが説かれている。すなわち、仏教徒の友人を作り、三宝に供養し、三律儀に従う生活をしなければならない。

その上で、16-18 に菩薩行の实践を行うことが説かれており、その具体的な項目として、空性の修習、聞法の記憶が説かれている。この菩薩行の实践については、本論では来世で行う内容になるために、ここでは詳細な实践項目は必要のないものとなる。

19-28 には、菩薩行の本質としての利他行が、「自分のためになすべきではなく、他者の苦を自らのものし、他者のためになすこと」として説かれている。

29-31 のまとめでは、この利他行により五智をともなう三身が完成することが説かれており、これが来世での結果の成就となる。

まとめ

本論は、今生ではなく、来世において菩薩行を行うことが説かれた文献である。すなわち、今生での解脱を目的として説かれたものではなく、来世での解脱を目指すことを前提としている。同じ著者の『菩提道灯論』では、三種のブドガラを説き、来世の善趣を望む者を劣った者としていることから、本論の対象は、この劣った者ということになる。もちろん、彼が法を説く対象を三種に区別していたわけではなく、利他行を促すために、否定対象として劣った者が想定されただけでしかない。従って、本論が、実際にこの劣った者を意識して説かれたものというわけではない。

しかしながら、そこでは、今生の死の後に転生することを前提にして、来世で菩薩行を行うことが説かれている。このことが意味することは、現世で菩薩行を实践できない者を対象にしていることになる。すなわち、出家修行者を対象とする著書ではなく、在家あるいは一般の人に向けて著されたものとなる²⁴。すなわち、在家信者が来世での菩薩行を誓願するための文書であり、おそらく彼らが唱えるための誓願文のようなものが伝承し、それが著書としてテンギルに収録された可能性がある。その説かれた状況を示す情報は付されていないので、断定することはできないが、彼の多くの小部文献と同じように、本論は筆記されたものというよりも、彼が行った説法を直接にチベット語に翻訳したものが誓願文として流布していたものである可能性がある。

『種姓誓願』和訳

²⁴ 彼には、多くの小部文献があるが、師たるものに対して説かれた『上師所作次第』のような著作もあり、説かれた対象は一様ではない。

インドの言葉で、 *Kulapraṇidhāna-nāma*
チベットの言葉で、『種姓の誓願』
聖母ターラに帰命する。

自分が死ぬその時に、感覚器官を明瞭にして死に、断末魔の苦しみはなく、中有にいる間も自ずと生じる知恵を理解しなさい。[1-5]

自ずと生じる知恵を理解してからも、いかなる生においても、自在があるようにしなさい。どこであれ生じたその地においても、染汚の少ない仏教徒の種に生まれなさい。
[6-10]

仏教徒の種に生まれた後にも、仏教徒の友人とつき合いなさい。仏教徒の友人とつき合ってから、最高の三宝に供養をし、三律儀において暮らしなさい。[11-15]

三律儀において暮らしてから、聖なる空性を修習し、聞くべき法を憶えなさい。
[16-18]

聞くべき法を憶えてからも、大乘の法を知ってから、自分の為に最高なことをなすのではなく、輪廻するすべての衆生の苦しみを自らにおいて熟しなさい。[19-23]

苦しみを自らに熟してから、身口意を損なうことなく、莊嚴の行により怠情にならずに、他者の為を対象とする心によりすべての他者の為になることをしなさい。[24-28]

すべての他者の為になることの究極に至ってから、五智を伴う三身を自然に完成しなさい。[29-31]

『種姓の誓願』と言われる偉大な賢者である軌範師ディーパンカラシュリージュニャーナによる著作を完成する。

第 2 編 注釈文献

第1章 『般若波羅蜜多撰義灯論』

はじめに

チベット大蔵經のテンギュルの「般若部」には、Dīpaṃkaraśrījñāna に帰される二つの著書が収められている。一つは Maitreya の『現觀莊嚴論 (Abhisamayālamkāra)』に対する解説書の『般若波羅蜜多撰義灯論 (Prajñāpāramitāpiṇḍārthapradīpa)¹』であり、もう一つは『般若心經 (Prajñāpāramitāhṛdayasūtra)』に対する注釈書の『般若心釈 (*Prajñāhṛdayavyākhyā)²』である³。本章ではこのうち、前者を取り上げ、彼が『現觀莊嚴論』をどのように注釈していたのかについて考察する。

Dīpaṃkaraśrījñāna は、その主著である『菩提道灯論』の自注とされる『菩提道灯論細疏』において『現觀莊嚴論』を引用している⁴。彼は、翻訳者としても Dharmakīrtiśrī (Chos kyi grags pa dpal) の *Durbodhālokaṭīkā*⁵ をチベット語に訳しており、さらに『八千頌般若經 (Aṣṭasāhasrikāprajñāpāramitāsūtra)⁶』とその Haribhadra の注釈書『現觀莊嚴論積光明論 (Abhisamayālamkāraloka)⁷』のチベット語訳に対して改訂を行っている。彼の師でもある Ratnākaraśānti も『現觀莊嚴論』の注釈書⁸を著していることや、その伝記資料⁹からも、彼にとって『現觀莊嚴論』が重要なテキストの一つであったことがわかる。また『テプテル・ゴンポ』には、

ニェタンに法を聞きに集まった多くの者たちに『現觀莊嚴論』を一度お説きになられた。[しかし] 要約だけしかお与えになられなかったので人々は満足せず、ま

¹ Tib. *Shes rab kyi pha rol tu phyin pa'i don bsdus sgron ma*. C. Tha236a1-257; D. No. 3804, Tha 230b1-240a7; GI, Tha 337a-350a6; G2, Nyo 268a-282b4; N1, No. 3192, Tha 261b2-272a3; N2, No. 3865, Nyo 435b7-447a5; PI, No. 5201, Tha 253a6-262a8; P2, No. 5873, Nyo 463a5-475a7. ここに示したように、G、C、P では「般若部」だけではなく、「雑部」にも収められている。そこには同じ著者の *Bodhisattvacaryāvatārabhāṣya* (P. No. 5872)、*Sarvakarmāvaraṇaviśuddhikaravidhi* (P. No. 5874) が並んでおり、これらの三つのテキストは彼のその他のテキストと異なる伝承を有していたと考えられる。また C、D のテキストは、その他の版の「般若部」のものよりも「雑部」のものに近く、「雑部」のものは修正された新しい形である印象を受ける。

² Tib. P. No. 5222. 望月 1991a: 203-206, Lopez 1996: 70-77 も参照。

³ この他にもチベットに伝承した蔵外文献に、Atīśa に帰される *Śatasāhasrikāprajñāpāramitāsūtra* に対する彼の注釈書 *Shes rab kyi pha rol tu phyin pa stong phrag brgya pa'i don ma nor bar bsdus pa* がある。望月 2001g: 13-39。

⁴ Tib. D. No. 3948, Khi 257b7 (1.18ab), 258a2-3 (1.19-20).

⁵ Tib. D. No. 3794, P. No. 5192.

⁶ Tib. D. No. 12, P. No. 734. 最初の校訂は Subhāṣita と Rin chen bzang po により、二回目のものが Dīpaṃkaraśrījñāna と Rin chen bzang po により、三回目のものが Dīpaṃkaraśrījñāna と rGyal ba'i 'byung gnas により行われている。したがって Dīpaṃkaraśrījñāna は二度の校訂を行ったことになる。

⁷ Tib. D. No. 3791, P. No. 5189. 翻訳者は、Subhāṣita と Rin chen bzang po であり、『八千頌般若經』の最初の翻訳と同じであるが、Rin chen bzang po は Dīpaṃkaraśrījñāna との改訂作業も行っている。

⁸ *Sarottamā*, Skt. P.S. Jaini ed., Tib. D. No. 3803, P. No. 5200. *Śuddhamatī*, Tib. D. No. 3801, P. No. 5199.

⁹ *rNam thar rgyas pa* には、「gSer gling pa より『現觀莊嚴論』を学んだ」という記述が見られる (Eimer 1979, Teil 1: 169)。

た詳細だけをお与えになられた後にそれを *Pha dar ston pa* が記録したことにより、カム流の般若波羅蜜として知られている¹⁰。

と述べられ、彼がチベットにおいて『現観莊嚴論』の講義を行ったことが伝えられている。ここに説かれているどちらの解説が『般若波羅蜜多撰義灯論』であるのか、それともどちらも全く別なものかは明らかではない。ここに説かれる『現観莊嚴論』の解説は容易に理解できるものでもない、という記述や、『般若波羅蜜多撰義灯論』のコロフォンによる他者により書きとめられた可能性からも¹¹、このいずれかが『般若波羅蜜多撰義灯論』である可能性は認められる。『般若波羅蜜多撰義灯論』についてはすでに *Tsong kha pa* が、自身の『現観莊嚴論』に対する注釈書である『セルテン(*Legs bshad gSer phreng*)』において、その著者性に対する問題を指摘し、「ある弟子か他のチベット人により作られたものである」としている¹²。このことは前述のコロフォンの記述からも推測できることであり、その著者性に対する疑問を断定することはできないにしても、『般若波羅蜜多撰義灯論』が *Dīpaṃkaraśrījñāna* 以外の者によりまとめられたテキストであることは明らかである。

『般若波羅蜜多撰義灯論』の内容

本論は、七音節づつの偈頌の形態で著されており、全体で九百九十四パーダから成っている¹³。分量的に『現観莊嚴論』よりも短いことから、著述スタイルは根本テキストの全体に対して注釈をなすのではなく、部分的にその概要を説いたものである。また偈頌という制約を受けているために、その内容が理解しにくい部分も少なくはない。全体を三智と四加行と法身とに区分している [44-47] が、その内容を八句義七十義¹⁴に基づいて解説するのは困難である。『般若波羅蜜多撰義灯論』の内容を整理し、その構成を同テキストのパーダ数と共に示すと、次のようになる：

¹⁰ 『青史』(四川民族出版社, 1984), p. 318, Roerich 1949: 258, 羽田野 1987: 85 を参照。

¹¹ *Prajñāpāramitāpiṇḍārthapradīpa* 997-994 には、「ベンガル出身の *Dīpaṃkaraśrījñāna* が『般若波羅蜜多撰義灯論』を著した」という記述がある。これを本偈ととらえるのならば、『般若波羅蜜多撰義灯論』が *Dīpaṃkaraśrījñāna* の手を離れたところで成立していたことになる。そのコロフォンには *Dīpaṃkaraśrījñāna* 自身が翻訳したとあり、その場合は、この句は本偈から外して、著者以外の者による句である可能性もある。

¹² *Shes rab kyi pha rol tu phyin pa'i man ngag gi bstan bcos mngon par rtogs pa'i rgyan 'grel pa dang bcas pa'i rgya cher bshad pa'i legs bshad gser phreng*. Ngawang Gelek Demo, *The Collected Works of rje Tsoṅ kha pa blo bzang grags pa*, Vol. 25, New Delhi, 1977, Tsa 7b6. Cf. Obermiller 1933: 11, note 6.

¹³ その他の彼の著書と同様に、四パーダを一偈にまとめられてはいない。従って、ここでもパーダで数えることにする。なお C, D はこれより一パーダ多く、G2, N2, P2 は六パーダ少ない(ただし G2 には、繰り返しが六パーダあり、結果的に同数となる)。

¹⁴ Cf. Onoda 1983, 兵藤 1991. なお、『現観莊嚴論』の諸注釈における八句義七十義の対照については、兵藤 2000: 481-502 を参照。

序論

1 帰敬偈 [1-4]

2 現観 [5-40¹⁵]

3 撰義 [41-67]

相智 [68-97]・道智 [98-117]・事智 [118-133]・一切相現等覚 [134-144]・頂現
観 [145-156]・次第現観 [157-175]・一刹那現観 [176-187]・法身[188-189]

第一章 相智

1 発心 [190-228]

2 教誡 [229-248]

3 順決択分 [249-263]

4 [行の] 所依 [264-279]

5 所縁 [280-298]

6 所期 [299-310]

7 被鎧 [311-318]

8 発趣 [319-325]

9 資糧 [326-332]

10 出離 [333-345]

第二章 道智

1 道智の依 [346-367]

2 道智の自性

2.1 声聞・独覚の二乗 [368-372]

2.2 菩薩

2.2.1 見道 [373-428]

2.2.2 修道

2.2.2.1 修道の作用 [429-434]

2.2.2.2 有漏の修道 [435-447]

勝解 [448-463]・理向 [464-469]・随喜 [470-482]

2.2.2.3 無漏の修道

¹⁵ *Asaṅga* の説では、現観は [相、道、事の] 三智と法身とで、[一切相現等覚、頂現観、漸現観、一刹那現等覚の] 四加行は明らかな主張である。*Vimuktisena* の説では、現観は四加行だけであり、三智と法身は対境と結果である。*gSer gling pa* と *Śāntipa* の説では、般若波羅蜜の本体と結果である法身との七である。*Haribhadra* と *Buddhaśrījñāna* の説では、八句義である。

成就行 [483-491]・畢竟清淨 [492-498]

第三章 事智

- 1 事智 [499-509]
- 2 加行 [510-521]
- 3 加行の平等性 [522-531]
- 4 見道 [532-542]

第四章 一切相現等覺

- 1 行相 [543-566]
- 2 加行 [567-589]
- 3 功德 [590-595]
- 4 過失 [596-602]
- 5 相 [603-635]
- 6 順解脱分 [636-651]
- 7 順決択分 [652-653]
煖 [654-664]・頂 [665-672]・忍 [673-682]・世第一法 [683-692]
- 8 不退転 [693-714]
順決択分 [715-722]・見道 [723-726]・修道 [727-731]
- 9 有と寂靜 [732-748]
- 10 国土淨化 [749-758]
- 11 善巧方便 [759-774]

第五章 頂現觀

- 1 微相 [775-784]
- 2 増進 [785-796]
- 3 堅固 [797-812]
- 4 心安住 [813-816]
- 5 見道 [817-851]
- 6 修道 [852-866]
- 7 無間三昧 [867-874]
- 8 誤認 [875-884]

第六章 次第現觀

六波羅蜜・六隨念・[一切法無自性の] 勝義 [885-896]

第七章 一切那現觀

一刹那現等覺の四義 [897-903]

第八章 法身

- 1 身の数¹⁶ [904-919]
- 2 自性身 [920-930]
- 3 法身 [931-942]
- 4 受用身 [943-970]
- 5 變化身 [971-973]
- 6 法身の業用 [974-986]

終章

- あとがき [987-994]

『般若波羅蜜多撰義灯論』において言及される論師

本論において言及される論師を示すと、次のとおりである。

Asaṅga	9, 317, 322, 926
Dignāga ¹⁷	928
Dīpaṃkaraśrījñāna	988
Devendrabuddhi	205
Dharmakīrti (gSer gling pa)	15, 33
Nāgārjuna	930
Prajñākaramati	202, 353, 531, 626
Buddhaśrījñāna	20, 25, 509, 736, 755, 763, 770, 933, 981
Maitreya	221, 340, 907
Ratnākaraśānti	15, 23, 211, 434, 479, 526, 641, 722, 809, 949
Vimalamitra	307
Vimuktisena	10, 209, 278, 298, 332, 526, 745, 747, 758, 747, 758, 769, 964, 977
Haribhadra	19, 29, 69, 174, 207, 290, 304, 424, 432, 479, 507, 523, 538, 555, 643, 721, 735, 754, 769, 861, 915, 948

¹⁶ 『現觀莊嚴論』の注釈者たちに、第八章において三身説をとるか、四身説をとるかの解釈の相違があったことについては、佐久間 1991 を参照。『般若波羅蜜多撰義灯論』では、「数の確定はない」[905]と述べるものの、四身に対する説明が見られる。 Cf. Makransky 1997.

¹⁷ 彼には、般若経の概説書が存在する。 *Prajñāpāramitāsamgraha*. Tib. P. No. 5207.

言及の多いものは、Haribhadra が二十二度、Vimuktisena が十二度、Ratnākaraśānti が十度、Buddhaśrījñāna が九度、Prajñākaramati が四度、Maitreya が三度、Dharmakīrti (gSer gling pa) が二度である。

まとめ

『般若波羅蜜多撰義灯論』には、その内容を特徴付ける用語として繰り返し述べられる語がある。すなわち、(1) 区別、(2) 本質、(3) 相、(4) 地の境界、(5) 重複の過失がないこと、(6) 作用の六項目である。Dīpaṃkaraśrījñāna の注釈スタイルは、『現觀莊嚴論』に説かれている各項目をこれらに基づいて解折するものである。『現觀莊嚴論』の文句ではなく、その概要を彼独自の解釈により再構築している。そこには強引とも思われる分析が見られ、本書の内容を理解し難いものとしている。

また、『般若波羅蜜多撰義灯論』には先行する『現觀莊嚴論』の諸注釈者への言及もみられる。このうち最も多く言及される論師は Haribhadra である。Dīpaṃkaraśrījñāna 自身が彼の『八千頌般若經釈』のチベット語を改訂していることも考えると、Haribhadra の二つの注釈書¹⁸の影響下で『般若波羅蜜多撰義灯論』が著されたことがわかる。その一方で、彼の師の一人とされる Ratnākaraśānti に対する言及がそれほど多くないことは、彼のアビサマヤ文献についてはそれほど影響を受けていなかったことを示している。

最後に、『般若波羅蜜多撰義灯論』は、はたして Dīpaṃkaraśrījñāna の自著として考えていいものであろうか。テキスト本体に「Dīpaṃkaraśrījñāna が『般若波羅蜜多撰義灯論』を著した」と述べられていることから、本テキストが筆記される以前に『般若波羅蜜多撰義灯論』の原テキストが存在していた可能性もある。また、Dīpaṃkaraśrījñāna による講義であろうその原著も非常に解りに難いものであったことは、二次的資料からも明らかである。この講義録との比較を行うことができない現時点では、その著者性を判断することはできないが、『般若波羅蜜多撰義灯論』には Dīpaṃkaraśrījñāna 以外の者の手が加えられている可能性はある¹⁹。

『般若波羅蜜多撰義灯論』和訳

インドの言葉で、*Prajñāpāramitāpiṇḍārthapradīpa*

¹⁸ *Aṣṭasāhasrikāprajñāpāramitāvyaḥyāna Abhisamayālaṃkāra*. 荻原 1973, Tib. D. No. 3791, P. No. 5189, *Abhisamayālaṃkāraprajñāpāramitopadeśāśāstravṛtti*, 天野 2000, Tib. D. No. 3793, P.5191. 真野 1972.

¹⁹ 翻訳者ノートのところには (C, D は欠く)、Dīpaṃkaraśrījñāna がサムイェで講義した際の解説から抜き出したもので、清書したものとヴィヴァルタで書かれたものとインド語の書が存在したと言われている。

チベットの言葉で、『般若波羅蜜多撰義灯論』

世尊母である般若波羅蜜に敬礼をする。

序章

1 帰敬偈

三時における勝者を生んだ仏母である般若波羅蜜多に帰依してから『般若波羅蜜多の撰義』が解説される。[1-4]

2 現観

現観は四種である。すなわち [事智・道智・相智の] 三智と法身を直接知覚により理解するので現観であって、[一切相・頂・次第・一刹那現等覚の] 四加行は明らかな方向である。[5-8]

聖アサンガはそのようにお認めになられている。ヴィムクティセーナの著書によると、現観は四種である。四加行だけであって、三智と法身は対境と結果と認められる。[9-14]

スヴァルナドヴィーパ [の師] とラトナーカラシャーンティの二人は、現観の主体は七つでも、般若波羅蜜が [その] 主体と認められ、結果は法身を形成するものである。[15-18]

八つのもを現観とハリバドラとブッダシュリージュニャーナもお認めになられている。[19-20]

現観は識の相続の順序であって、八つのもが述べられるべきもので、章は述べるものとシャーンティパはお説きになられている。[21-23]

ある者は「八章による八つの人部分が縁である」と言う。ある者は「一切智者と菩薩と声聞の三つの道と説かれている」と言う。[24-28]

ハリバドラの著書は、「一切智の道では両者は完全なものと認められる。そのようであれば、完成しない」と述べている。[29-32]

師スヴァルナドヴィーパがお認めになられたものによると、「ある者が対象に入る際に、根本が不浄な時に八つの人道として認められ、不浄を清浄にする時に三つの人道として認められ、清浄な道を形成する時に一人の人道である」とお説きになられている。[33-40]

3 撰義

それからまとめた意味を解説したものが、数の確定と順序と重複を捨てることとそれぞれの本質を解説したものである。[41-43]

数の確定を説くならば、聞・思・境における三智と、修習の時ににおける四加行と、結果に至る法身である。[44-47]

聞と思の時に、結果と原因とに矛盾する方向で決定したものが完成している。修習の
時における加行と機会は、結果を堅固にすることと、究極の原因により完成している。
その通りならば、数が確定する。[48-54]

順序は、生じる次第である。すなわち、最初に聞と思をなすので、その境が先に解説
されている。[55-57]

さらにまた、最初に結果を知り、それから原因と捨てられるべきものが順序通りに設
定されている。[58-60]

四加行の順序も、一切相現等覚は資糧道から存在するので最初に説かれたのである。
それから[頂・次第・一刹那の]三つが順序通り生じる。そのように、それが順序であ
る。[61-65]

重複を捨てることは、一度に説かれたもので、それぞれの本質が解説されるべきであ
る。[66-67]

3.1 相智

一切智の十義もハリバドラにより二つにまとめられている。すなわち原因と結果とし
てである。[68-70]

原因は三種で、最初は発心と清浄な教誡を学ぶべきである。それから行の四種で、行
の所依と所縁と、行の所期と、行の事物とである。それは四種で、被鎧と発趣と資糧と
出離とである。[71-78]

地の境界によりあわせることにより四つと説かれている。結果と認められるものを説
いたのが、順決択分により示され、解説される。[79-81]

一切智をまとめた意味は、区別と自性と相と地の境界と重複を捨てることと行為とで
あり、六種としても認められる。[82-85]

区別は、原因の地と結果の地の智である。結果をあらん限り、あるがままに、すべて
を知ることである。[86-89]

自性は智慧と悲であって、相は一切智である。地の境界は、位が資糧道からで、結果
の地が仏地である。[90-93]

法身は重複せず、これはまとめて解説したものであり、法身は自らより生じるもので
ある。行為は、法輪を廻すことである。[94-97]

3.2 道智

道智もそのように六つである。区別すれば、仏と菩薩道と声聞道との三つとして認め
られる。また、三乗の道として認められる。一切に対する知と一切の知との二つとして
認められている。[98-103]

本質は智慧と慈悲である。相は三道において不生を知ることである。地の境界は、位

が発心からであり、完成が六地と認められ、究極には仏地である。[104-108]

ここに見道を解説したのは、相続に生じる部分から解説したものである。事〔智〕において見道を解説したのは、反対の部分から解説したものである。[109-112]

またここで解説するのは道智の部分から解説し、次に事智の在り方から解説する。それ故に、重複の過失を離れている。行為は衆生を熟することである。[113-118]

3.3 事智

事智もそのように六つである。区別は、捨てられるものと取られるものの二つである。取られる事智の本質は、智慧と悲である。捨てられる事智の本質は、智慧と主張するものである。[119-123]

相は、事〔智〕における二無我であり、智慧を把握する特徴である。人無我の知は、捨てられる事智の特徴である。[124-127]

地の境界は、位が現在の住处であり、完成は第八地である。究極は仏地である。
[128-130]

重複を捨てることは、道〔智〕における解説より知られる。行為は煩惱の障害を捨てることである。以上が三智をまとめた意味である。[131-133]

3.4 一切相現等覚

一切相現等覚は、そのように六つである。区別は、対象により二種である。位により十一²⁰である。本質は、智慧と慈悲である。[134-137]

相は、残らず生み出すことである。地の境界は、小さな資糧道からで、完成は第八地であり、究極は仏地である。[138-141]

重複を捨てることは、三智の特徴からここに相続において起こされたものからであり、国土の浄化と善巧方便が行為である。[142-144]

3.5 頂現観

頂と次第と刹那の三つも、六つずつと知るべきである。[145-146]

頂の区別は六つか七つである。本質は、観と止である。相は、頂好である。捨てるべきものを捨てることである。[147-150]

地の境界は、大熱から脱してから無間断の道に存在する。無間道の部分から解説して、刹那菩提の原因の法が一刹那に完成するので、重複の過失は離れたものである。

[151-156]

3.6 次第現観

²⁰ *Abhisamayālaṅkāra* 1.12-13 に説かれる、(1) 行相、(2) 加行、(3) 功德、(4) 過失、(5) 相、(6) 順解脱分、(7) 順決択分、(8) 有学の不退衆、(9) 有と寂静の平等性、(10) 無上国土の清浄、(11) 善巧方便との十一句義である。

次第による区別はその通りである。本質はその通りで、相は三智を順序通り修習することである。[157-159]

ある者は、「繰り返されるものである」と言い、著書から前のことが明らかにされる。[160-161]

頂をまだ得ていない者が〔それを〕得ることと堅固にすることが行為である。得ることの地の境界は〔六地〕から存在し、堅固にする地の境界は大熱の特別な道に存在する。

[162-166]

ここでは六波羅蜜は次第の部分から解説するのであり、他所ではそのように解説していないので、前の通り重複の過失を離れている。[167-170]

次第によるものは二種である。すなわち頂を得ることをなすことと、得たものを堅固にする行為である。ハリバドラは、堅固にすることは何らかのものを明らかにすることと解説している。[171-175]

3.7 一刹那現等覚

刹那の区別は四種であり²¹、本書から明らかに解説されている。本質は、止と観である。一刹那における原因の法である一切の白〔法〕を完成することが相として認められている。[175-181]

地の境界は、十地の無間道に存在する。ある者が、「解脱道に存在する」というものもある。作用は、法身を起こすことである。重複を捨てることは、前にすでに捨てている。[182-187]

3.8 法身

法身は後に示される。以上が、まとめた意味である。[188-189]

第一章

1 発心

その同じことを詳しく解説してから、最初に発心を解説したものが、区別とその理由と本質と相と地の境界と作用と重複の過失がないことである。[190-194]

その原因は、十²²と認められる。区別は願と入の〔発心の〕二種であり、さらに二十二²³とも認められる。取られるものと法性を得ることなどであり、『[大乘] 莊嚴経論²⁴』

²¹ (1) 未熟、(2) 異熟、(3) 無相、(4) 不二の四種である。

²² (1) 発心、(2) 教誡、(3) 順決択分、(4) 行の所依、(5) 所縁、(6) 所期、(7) 被鎧、(8) 発趣、(9) 資糧、(10) 出離の十句義のことか。

²³ *Abhisamayālaṅkāra* 1.19-20 の (1) 地、(2) 黄金、(3) 月、(4) 火、(5) 蔵、(6) 宝山、(7) 海、(8) 金剛、(9) 山、(10) 薬草、(11) 友、(12) 如意珠、(13) 日、(14) 歌、(15) 王、(16) 庫、(17) 大道、(18) 乗物、(19) 泉水、(20) 喜声、(21) 川、(22) 雲である。

²⁴ *Mahāvānasūtrālaṅkāra* 4.15-20. Cf. 磯田 1970.

などから解説される。[195-199]

「願 [の発心] には区別がなく、入 [の発心] に区別がある」とプラジュニャーカーマティは言う。[200-202]

「初発心が願であり、残りが入であると区別される」とデーヴェンドラブッディは言う。[203-205]

「区別の理由はよく知られている」とハリバドラは明らかに解説し、「認識対象により区別される」とアーリヤ・ヴィムクティセーナが解説している、と言う。「最初の本質の門から区別される」と残りの著名なラトナーカラシャーンティが説いている。

[206-211]

資糧 [道] に三つ、加行 [道] に一つ、十地に十、五つが勝進道で、三つが仏地においてである²⁵。[212-215]

ある者は、「地の境界は存在しない」と主張し、『莊嚴經論』と矛盾する。殊勝をもつものを所縁により意識することが本質と認められる。[216-219]

利他をブッダが主張したことを相としてマイトレーヤが解説している。重複を捨てることは、後に解説される。[220-222]

作用は五種である。すなわち異熟 [果] と等流 [果] と増上 [果] と離繫 [果] と土用 [果の五果] である。[223-225]

原因は多種であるけれども、最高の原因は悲であり、経典から正しく明らかに解説されている。[226-228]

2 教誡

教誡は特別な相であり、区別は対象により十²⁶である。作用により区別すれば、二種である。すなわち、教えと従属する教えとである。[229-232]

本質は、清浄な輪である。他者に教えることを引き起こすことが相である。得ていないものを得ることと得たものを損なわないことが、この作用であると認められる。発心から十地までの間がこの地の境界であると説かれている。[233-238]

「資糧 [道] では三つであり、加行 [道] では五つで、見 [道と] 修 [道] の二つではそれぞれであり、順序通りである」と、そのようにある者が主張するものがある。

[239-242]

次第は、生じる順序である。これだけにより完成することが数の確定である。

[243-244]

²⁵ *Abhisamayālaṅkāraprajñāpāramitopadeśaśāstravṛtti*, 天野 2000: 12.23-28.

²⁶ *Abhisamayālaṅkāra* 1.21-22 に説かれる、(1) 行、(2) 諦、(3) 三宝、(4) 無執、(5) 無疲倦、(6) 道の摂受、(7) 五眼、(8) 六神通、(9) 見道、(10) 修道とである。

これと道智の二つでも、成立するものを二つと解説しても、聞と修の部分から説くので、重複の過失は存在しない。[245-248]

3 順決択分

順決択分の区別は四種である²⁷。地の境界は加行道においてである。作用は、見道を生じることである。本質は、五根と五力である。修道から生じたものが智慧であると解説される。[249-255]

「道智では、順決択分は声聞の一切相の順決択分で世俗であるが、ここでは勝義の部分から説かれるので、重複の過失は存在しない」と ブッダシュリージュニャーナはこう主張する。[256-258]

順決択分は真実と理解され、その部分は苦と法と智慧と忍である。それに従うものが相である。加行道と信解行の部分に従うものが この名称の異門である。[259-263]

4 行の所依

所依の区別は、絞り出せば明らかになる。本質は法界であっても、その主張と矛盾している。功德を起こすことが相である。[264-267]

地の境界は六 [証得] 法²⁸が明らかにする。すなわち七つ²⁹が六法のそれぞれに存在するものとして分析すれば、明らかになる。[268-270]

例えば、煖の無間の対治の捨てることが解脱であるならば、四遠離が勝進道に存在する。六法がさらにまたそのように合わされる。[271-275]

ここに自性を認識して成立する部分を説いたので、重複の過失を離れていると、アーリヤ・ヴィムクティセーナがそのようにお説きになられている。功德を起こす作用が存在する。[276-279]

5 行の所縁

所縁の区別は十一³⁰である。順序は、生じる次第である。すなわち、これだけから所縁が完成するので、異門も十一だけから解説される。[280-283]

最初の三つは資糧道で、加行道と見道と修道と無学道の四つを順序通り二つずつ考察するので、そのように似て現れている。[284-287]

本質は一切法であり、相は、取と捨の二つとしての所縁である、と言われている。[288-289]

²⁷ (1) 煖、(2) 頂、(3) 忍、(4) 世第一法の四種である。

²⁸ 世間の順決択分の四種と、出世間の見道と修道とである。

²⁹ *Abhisamayālaṅkāra* 1.38 に説かれる六証得法以外の、(1) 対治、(2) 断、(3) 遠離、(4) 智慧と慈悲を伴うこと、(5) 不共法、(6) 利他次第、(7) 無相と無功用の智慧が生じることの七項目のことか。

³⁰ *Abhisamayālaṅkāra* 1.40-41 に説かれる、(1) 善法、(2) 不善法、(3) 無記法、(4) 世間法、(5) 出世間法、(6) 有漏法、(7) 無漏法、(8) 有為法、(9) 無為法、(10) 共法、(11) 不共法である。

ハリバドラの大註から、ある者は「十三から二つを捨てた善を認識してから、その両者のうち後者に残りのすべてをそのように混ぜられる。[290-294]

ここでは事物として、所期では相続の門からで、所縁は光線と交わるようなので、重複の過失は存在しない、とヴィムクティセーナが説いている。[295-298]

6 行の所期

所期は三種である³¹。本質は一切衆生である。その目的を成就することが相である。[299-301]

地の境界は、そのような対象から成立した衆生の[仏地]とハリバドラが認めている。捨てるものが金剛の如くであるならば、菩薩と理解されるものが仏地である。[302-306]

ヴィマラミトラの広釈³²に、本質は、自身と合わせることに他者に合わせることで共通ではなく、地の境界も共通ではない。[307-310]

7 被鎧行

被鎧の本質は、精進である。区別すれば、広注から六つ³³で、これから三十六として解説される。それぞれに六つずつにおいて善を修習することが相である。[311-315]

地の境界は、資糧道にあると偉大な軌範師アサンガがお説きになられている。ここでは信解[行地]だけによる。[316-318]

8 発趣行

発趣は明らかに発趣することであり、重複の過失は存在しない。発趣を区別する九つ³⁴は絞り出せば明らかになる。地の境界は、加行道にあると前のようにアサンガがお説きになられている。[319-322]

本質は、五根と五力である。相は六波羅蜜の六を事体において発趣することである。[323-325]

9 資糧行

資糧行は十七である³⁵。地の境界について、陀羅尼は資糧道以下、世第一法以下で完成すると言われる。[後の]二つは、見[道と]修[道]の二つにおいてである。[326-329]

本質は、智慧と悲である。相は、一切智の原因を完成することによるとヴィムクティセーナはお説きになられている。[330-332]

³¹ *Abhisamayālaṅkāra* 1.42 に説かれる、心・断・証得における三つの大性である。

³² *Saptaśatikāprajñāpāramitāṭīkā*, Tib. P. No.5214. 彼には、『般若心経』に対する注釈書 *Prajñāpāramitāhṛdaṭīkā* (Tib. P. No.5217) がある。

³³ 六波羅蜜のそれぞれがそれぞれに収められるので、三十六となる。

³⁴ *Abhisamayālaṅkāra* 1.44-45 に説かれる、(1)静慮・無色の定、(2)布施などの六波羅蜜、(3)見・修・無学・勝進の道、(4)慈悲などの四無量、(5)不可得、(6)三輪清浄、(7)所期、(8)六神通、(9)一切相智性とである。

³⁵ *Abhisamayālaṅkāra* 1.46-47 に説かれる、(1)大悲、(2-7)六波羅蜜、(8)止、(9)観、(10)双運道、(11)善巧方便、(12)智、(13)福德、(14)道、(15)陀羅尼、(16)地、(17)能対治である。

10 出離行

出離を八つ³⁶と解説してから、その数により存在するのではなくても、周りに近づくものを意図してから解説される。[333-335]

本質は、智慧と悲であり、出離が相である。第八地から仏地においてそれは存在し、大註にマイトレーヤによる譬喩を理解した後に解説される。[336-340]

ある者は、「行なので、仏地には存在しない」と言い、ある者は、「仏地だけに存在する。何故ならば行であるから」と言うものも最初だけ認められる。[341-345]

第二章

1 道智の依

一切智を広げるためと、天の誤解を取り除き、大欲のない菩提心の道を説くために道智が解説される。[346-349]

暗くすることなどを、ある者が所依などの言説として設定し、道の支分が説かれたとプラジュニャーカラマティは言う。[350-353]

器として適当なものにするために、光明による武器から慢心が破られる。菩薩だけが発心するので、対象は確定し、それを論難する。[354-357]

菩薩だけとは認められず、「五種姓」と言うので、五種姓は未了義であるから、「遍満している」と認められている。[358-361]

大欲のない菩提心により特に煩惱は捨てられないので、煩惱を捨てないことが本質である。では、何が成立するのか、と言うことの答えとして、衆生を成熟させる行為である。[362-367]

2 道智の自性

2.1 声聞・独覚の二乗

二乗は、修道を説明されない。各自は、以前から明らかである。菩薩については、解説されない。智慧も超えているので、修[道]ではないので、解説されない。[368-372]

2.2 菩薩

2.2.1 見道

加行道は明らかである。見道は、四諦を認識してから、十五と十六の刹那³⁷の二種の組み合わせが認められる。[373-376]

認められる対象は法忍と二界を所縁とする随忍である。忍と智慧の殊勝は、無間[道]

³⁶ *Abhisamayālaṅkāra* 1.72-73 に説かれる、(1) 説示、(2) 平等性、(3) 有情利益、(4) 無功用、(5) 二辺における出離、(6) 所得を相とする出離、(7) 一切相智性における出離、(8) 道を行境とする出離とである。

³⁷ *Abhisamayālaṅkāra* 2.12-16 は十六の刹那を説いている。

と解脱 [道] であって、そのようにそれぞれの諦に、二忍と二智が八つずつでもある³⁸。

[377-382]

ある者がこの道を解説して、「智慧の対象の一つの苦が相続して起こる対象である」と言うが、相続に生じるものは共通ではない。[383-386]

ある者が「見道の二つは煖と忍に存在する」と言い、ある者は「見道に存在しても、過った区別により種々である」と言う。[387-390]

そのように見道は三種である。すなわち、人に縛られることと法に縛られることと両者に縛られることを明らかにするもの³⁹が見道である。[391-393]

その所依は、「三洲の三種姓⁴⁰と天の六種である」と大註に解説されている。[394-396]

「地は六つに依存している」というものも、部派の者が二種主張している。大乘は、「第四禪に依存するものであり、起こし易い」と言われている。[397-400]

捨てられるべきものは共通に説かれている。百八の分別と百十二の煩惱とである。

[401-403]

順序により捨てられない。すなわち、「無間道においてすべてが捨てられる」と言うことが大乘の典拠で、「解脱道により捨てられる」と言うことが小乗の主張である。

[404-408]

本質は、止と観である。菩提の七支分が解説され、止と観が本質である。[409-411]

相は、見えないものと見えるものとの、法界における所縁である。「見道に随智は存在しない」と言うものがあるそれは典拠と矛盾している。「知は時を完成する」という解答である。[412-416]

大乘の主張は、刹那は十六により完成する⁴¹という説法を設定するのが戯論である。刹那が一つか二つ完成するのが勝義を理解することである。[417-421]

「二忍は所取と能取の両者において順序通り存在しないものと理解されるものである」とハリバドラがお説きになられている。[422-424]

「忍」というのは前の通りである。忍は不浄であると知ることが、諦を浄と認識することである。見道をまとめたものはそれだけである。[425-428]

2.2.2 修道

2.2.2.1 修道の作用

修道の六つの作用⁴²も、数の確定と順序は存在しないものである。「有漏と無漏の両

³⁸ Cf. *Abhisamayālaṅkāra* 2.11. 天野 2000:40.11-14.

³⁹ G1, N1, P1 は「明らかにする(gsal or bsal)」の代わりに格助詞 la がある。

⁴⁰ C, D には「六(drug)」とある。

⁴¹ *Abhisamayālaṅkāra* 2.12-16.

⁴² *Abhisamayālaṅkāra* 2.17 に説かれる、(1) 心の完全な制御、(2) 一切の者への帰依、(3) 煩惱に打ち勝つ

者による作事である」とハリバドラがお説きになられている⁴³。「無漏だけである」とシャーンティパが認められている。[429-434]

2.2.2.2 有漏の修道

最初に解説した者は、少しの者と結果を喜ぶ者なので、修道は二種で、有漏と無漏である。有漏を区別すれば、三種⁴⁴だけである。行と四事とにより随喜する際に、福德を集めることと、廻向することと、広げることによる。[435-442]

本質は、世俗智であって、相は極微が存在するので有漏であると述べたものが相である。ある者は、「対象は有漏である」と言う。生じる順序が、順序である。[443-447]

2.2.2.2.1 勝解

そして勝解の対象は、智慧であるものにより述べられる。その他の波羅蜜もそうである。[448-450]

本質は「七つである」と言われ、ある者が「知である」と言うものがある。二から十地までに従って存在するものが地の区別である。区別は、両者の本質を見ることにより、九掛ける三である⁴⁵。[451-456]

作用は、称讃と称揚と讃嘆⁴⁶の三つを自身と両者と他者により、順序通りに仏がお説きになられている。[457-459]

四地と七地と十地の間に三つの勝解を順序通り合わせるものが、項目による地の境界である。[460-463]

2.2.2.2.2 廻向

十二廻向⁴⁷は、数の確定がなく、顛倒の区別により解説される。本質は誓願で、相はそのように望まれる誓願である。福德が尽きないことが作用であり、地の境界は、九地に随順する智慧である。[464-469]

2.2.2.2.3 随喜

随喜の本質は、発心の智慧を浄化することである。相は明らかにすることで、作用は、他者がなした善を福德と同じく得ることと言われ、それ故に、自らが前になしたことも随喜により、福德を増やすことが作用である。[470-477]

区別は、勝義と世俗として認められ、シャーンティパとハリバドラは、両者が完全な

こと、(4) 害に蹂躪されないこと、(5) 完全な菩提、(6) 依処を供養することとである。

⁴³ 天野 2000:42.14-15.

⁴⁴ 天野 2000:42.15-46.

⁴⁵ 天野 2000:43.3-4.

⁴⁶ *Abhisamayālaṅkāra* 2.20. Cf. 荻原 1973: 208.

⁴⁷ *Abhisamayālaṅkāra* 2.21-23 に説かれる、(1) 殊勝、(2) 不可得、(3) 不顛倒、(4) 遠離、(5) 如来の善根の自性を憶念するもの、(6) 善巧方便をそなえたもの、(7) 無相、(8) ブッダによる悦可をもつもの、(9) 三界に属さないもの、(10-12) 大中小の福德を生じるものとしてである。

らば、その両者を区別することをお認めになられていない。地の境界は、九地に続いて存在する。[478-482]

2.2.2.3 無漏の修道

2.2.2.3.1 成就行

無漏が二種⁴⁸で、成就行は誤った区別により四種⁴⁹である。数の確定は、順序通り存在する。地の境界は、第九地の禪定により無間道において存在する。[483-487]

本質は、止と観であって、浄化を起こすことが作用である。重複は、教誡の時に解説した。努力により完成するものが相である。[488-491]

2.2.2.3.2 畢竟清浄

清浄を得る原因と得ない原因は、実際にまとめたものと区別したものと二つである。区別は四種で、声聞と独覚と菩薩と仏とである。[492-495]

地の境界は、二地と仏地である。本質は、障害を離れることであり、区別と相は、絞り出せば明らかになる。[496-498]

第三章

1 事智

事智が説かれたものは、二パーダにより本質を説いたのである。四 [パーダ] により事智を区別し、残りは事智の本体である⁵⁰。そのように言説として設定するものがある。[499-503]

事智を二つ説いたものも、修道と加行 [道] というものが存在する。取られるべきものを第一に説いた、と偉大な軌範師ハリバドラがお説きになられている。捨てるべきものを第一に説いた、と軌範師ブッダシュリージュニャーナがお説きになられている。[504-509]

2 加行

加行を十種⁵¹と説いたものも、数の確定と順序の確定は存在しない。加行の対象が四つであり、加行の事体が三つであり、二つが結果、一つが喩例である。そのようにまとめた作用が存在する。[510-514]

⁴⁸ 道智の十一句義の最後の二項で、成就行と畢竟清浄とである。

⁴⁹ *Abhisamayālaṅkāra* 2.25 は、(1) 自性、(2) 最勝性、(3) 無造作、(4) 不可得、(5) 大利益をあげている。

⁵⁰ *Abhisamayālaṅkāra* 1.10-11 に説かれる九句義、(1) 智慧により有に住しないこと、(2) 悲により寂靜に住しないこと、(3) 無方便により遠いこと、(4) 方便により遠くないこと、(5) 所対治、(6) 能対治、(7) 加行、(8) 加行の平等性、(9) 見道のうち、最初の四つと残りのことか。

⁵¹ *Abhisamayālaṅkāra* 3.8-10ab に説かれる、(1) 色など一切諸法、(2) 無常、(3) 不円満と円満、(4) 無執着、(5) 不変異、(6) 無作者、(7) 所期と加行と作事の三難事、(8) 果が得られないこと、(9) 他縁によらないこと、(10) 七種顕現智とである。

「見道に存在する」とある者は言い、「修道と加行 [道] にも存在する」[と 言い]、ある者が「加行道に存在し、加行道は説かれない」と説いたのもは、四つに説かれないことを意図してお説きになられたのである。[515-519]

重複の過失は前に捨てており、本質は、続く観と悲である。[520-521]

3 加行の平等性

自慢がないことの四種⁵²を説いたものも、ハリバドラの主張を絞り出せば明らかになる。色に対して、色により、色において、自分を自慢しないことである、とヴィムクティセーナとシャーンティパの二人がお認めになられている。[522-526]

地の境界は加行の通りである。本質は智慧であって、「十 [加行] のそれぞれにも四つずつの相が存在する」と軌範師であるプラジュニャーカラマティが述べている。[527-531]

4 見道

見道をまとめた意味は前に解説した。ここで解説した殊勝は、四番目に生じる在り方と、共通ではないあり方により説いたものであるという言説がある。「捨の在り方から説いた」とハリバドラはそのようにお説きになられている。[532-538]

修道を説かない理由は、前にすでに説いた。すなわち、加行道については、菩薩は一切智に依り、声聞は道智において説かれる。[539-542]

第四章

1 行相

一切相現観は、対境により二つである。すなわち、知と所知の二種である。また、知の相続を引いたものと、一切相の所知を取る順序と、所依と依存と結果との五つがある。[543-547]

所知の相は百七十三⁵³を説かれ、数の確定がなくても、[事と道と相の] 三智に依存してから、まずそれだけが述べられる。[548-552]

順序は生じる次第であり、地の境界は、「五道に存在する」と軌範師ハリバドラが[説かれている]。知恵の集まりは二十でも、道は、五つに合わされるからである。[553-557]

本質を主張するものは異なり、瑜伽タントラに生じるものと、四諦の相であるという

⁵² *Abhisamayālaṅkāra* 3.10cd の、(1) 色など、(2) 相など、(3) 戲論、(4) 証得との四念であろうか。Cf. 天野 2000: 51.

⁵³ *Abhisamayālaṅkāra* 4.2-5 に説かれる、事智の二十七の行相と、道智の三十六の行相と、相智の百十の行相とである。Cf. 真野 1972: 169-174.

ものと、声聞と菩薩と仏の知恵である、という三つの主張である。[558-562]

相を詳しくしたものと智をまとめたものは、また決択分と生起次第により説かれるので、重複の過失を離れたものである。[563-566]

2 加行

領受は、定と続く時において領受することである。定における加行は二十⁵⁴である。その功德は十四⁵⁵である。四十六⁵⁶が加行の過失である。加行の相は九十一⁵⁷である。[567-572]

加行の本質は、止と智慧であって、重複の過失はなく、加行の相に続く部分から、ここでは定の部分から説かれているからである。[573-577]

意味を繰り返すことが加行の相である。最初の二つは加行の自体であり、三つが結果であり、また対境が十五である。地の境界は修[道]からで、その理由により二十である。[578-582]

ある者は、地の境界を次のように主張する。五つはすべてに、一つは資糧[道]、授記は加行道であり、不退転は第七地以後、出離と続く三つは八[地]から十地の間、利他は以後の仏地である。ある者は、それとは異なった主張をする。[583-589]

3 功德

功德は、地の境界の確定がなく、経典ではあらゆるところにあることが見られる。加行の利益であるので、加行に続いて生じるのである。数の確定は存在せず、本質は不退転の利益である。[590-595]

4 過失

過失を捨てることに、地の境界は確定せず、まとめると第八地以下に過失が生じると経典から解説される。[596-598]

「その時に捨ててから修習すべきである」と、ある者は修習の財からと言う。まとめると、過失と功德は、智慧をなしてから、修習すべきである。[599-602]

5 相

九十一の相⁵⁸も、数の確定が存在しなくても、周辺の側においてそれだけを解説したものである。[603-606]

⁵⁴ *Abhisamayālaṅkāra* 4.8-11 に説かれる、(1) 色などに住しないもの、(2) それと結びつかないもの、(3) 甚深なもの、(4) 難解なもの、(5) 無量なもの、(6) 困難の後に覚るもの、(7) 授記を得るもの、(8) 不退転、(9) 出離、(10) 無間、(11) 菩提への親近、(12) 速やかなもの、(13) 利他、(14) 不増不減、(15) 法と非法を了得しないもの、(16) 不可思議な想が減るもの、(17) 分別しないもの、(18) 果宝を付与するもの、(19) 清浄なもの、(20) 限界をともなうものとする。

⁵⁵ Cf. 天野 2000: 61.

⁵⁶ Cf. 天野 2000: 61-62.

⁵⁷ *Abhisamayālaṅkāra* 4.14-31 に説かれる九十一種である。

⁵⁸ 兵藤 2000: 144-148 を参照。

順序は、生じる次第であり、生も粗大だけが生じるのである。地の境界は、加行に従っており、禅定の時にも認められるものがある。特徴は、完全なる仏である。[607-610]

現在の同分の機会から、これが加行の相である。行相を述べる、ともあり、それは本書にすでに明らかに解説されている。[611-614]

相にも相違がある。すなわち、共通ではない相と、証因と認められるものとの相である。[615-617]

さらにまた、加行は一度廻るものと、それぞれに認めるものとの種々である。不退転の量と加行のそれぞれの量の証因も種々である。[618-622]

知恵の殊勝を形成することが結果の証因であり、本質は自性を証因と主張するものがある。[623-625]

プラジュニャーカラマティは、「特殊性も自性である」と言い、ある者は「作用であり、異なる」と言う。三つとも、一つの証因に作用が存在し、それは成立しない。[626-630]

加行を測る目的は、大精進に入ること次第による修習の現観を「有益」と主張するものも種々である。多くの言説も、それだけである。[631-635]

6 解脱分

解脱[分]と順決択分により述べてから、続いて領受することが解説される。[636-637]

解脱[分]の所依は、三洲の人と聞と思の地であり、本質は、信などの五種⁵⁹である。[638-640]

ラトナーカラシャーティは初地などを区別した。資糧道を大中[小]の三つに、ハリバドラは区別している⁶⁰。恐れず、畏怖せず、怖がらないことの中[小]の徴相として解説している。[641-645]

涅槃が解脱であり、その部分は苦に耐えることである。それに従うことが確定である。それと同じことは、布施などを把握しないと尽きてしまい、順解脱分の相である。[646-651]

7 順決択分

順決択分のまとめた意味は、前に解説したので、続く領受の何らかのものが解説されている。[652-653]

7.1 煖

所縁は一切衆生であって、小さい相は平等と慈愛であり、中の相は利益と無障礙と無

⁵⁹ *Abhisamayālaṅkāra* 4.33 に説かれる、(1) 仏などを所縁とする信、(2) 布施などを対象とする精勤、(3) 意樂を完成する憶念、(4) 無分別なる定、(5) 諸法を一切行相において知る智慧とである。

⁶⁰ 天野 2000: 68.

害の三つである⁶¹。[654-657]

小の二相は、この時に他者を損なわないことである。中の三相は、後[時]に他者に利益をなすことである。[658-661]

大の[相は]、父など⁶²で、ここと後の両者において利益をなすことだけである。
[662-664]

7.2 頂

頂は、小の不善より退き、我を捨て、他に入ることと、中の布施などの善を自と他に合わせることに、他者を樂の相続と合わせることである。[665-669]

大の我も空と修習し、他者にも合わせて、他者における顛倒を捨てることであると認められる。[670-672]

7.3 忍

忍は、小の四諦を自と他に合わせることで、他者を勝進道と合わすことと認められる。
[673-675]

中は、等流などの五[果]を知り、明らかでないものを自と他を合わすことであって、他者は結果と合わされると認められる。[676-679]

大の菩提は、無過失と自他を合わせ、他者は仏に合わされる、と認められる。[680-682]

7.4 世第一法

世第一法は、小の衆生を成熟させ、対象として三乗を安立することである。[683-685]

中の自と他の両者も、菩提を明らかに知ることが生じ、衆生を菩提道に合わせることである。[686-688]

大の自身が一切相智を起こすことを望むことと、他者たちが円満により究竟を設定することである。[689-692]

8 不退転の衆

資糧道の所依はすでに解説したので、順決択分は見道と修道により不退転の三種の人を説くために、徴相の相から解説される。[693-696]

不退転は三種であって、ここでは乗の下の不退転の徴相を解説した。[697-699]

根の上中下により順決択分と見道と修道の八地に順序通り、不退転は三つである。
[700-703]

究極的に顛倒していなくても、場所が顛倒することがあるので、徴相があれば、機会の顛倒はないという徴相の門から測ることである。[704-708]

⁶¹ Cf. 天野 2000: 68.

⁶² Cf. 天野 2000: 68. これによると、(1) 父母の心、(2) 兄弟の心、(3) 子供への心、(4) 友の心、(5) 親族の心の五行相である。

自らを測るならば、原因を集めたものの自性だけの証因による。他者を測るならば、自性と結果の二つの証因による。測る目的は、軽蔑を起こすことを排除することである。[709-714]

8.1 順決択分

それをまとめたものの区別により、順決択分の徴相は二十であり⁶³、数の確定は存在しなくても、それだけが衆会の面で解説したものである。[715-718]

煖に十一、頂に六、忍に二つで、世第一法に一つであるというものが、ハリバドラの主張であり、ラトナーカラシャーンティはそのように区別していない。[719-722]

8.2 見道

見道の徴相は十六⁶⁴でも、続く部分からの徴相である。しかし「忍」は前の効能を述べるものである。[723-726]

8.3 修道

修道の徴相は、八甚深⁶⁵であり、ある者は「それぞれの地にそれぞれの甚深がある」という。それは合理であり、それぞれに八つが存在することも矛盾はない。[727-731]

9 有と寂靜の平等性

有と滅の平等性が行相であり、「上記のその二種の人が行相をこの通り修習する」と軌範師ハリバドラとブッダシュリージュニャーナがお認めになられている。[732-736]

二十の加行を繰り返さず、続く部分から解説される。順決択分により繰り返されず、ここでは幻の在り方からである。[737-740]

夢を水が取り除く譬喩を把握してから、「八地以前に存在する」と『仏華嚴経』より解説される。[741-743]

「有と滅の平等性により無学の所依が説かれた」とヴィムクティセーナがお説きになられている。「これだけが学ぶこととして存在する」とそのようにヴィムクティセーナがお説きになられているので、全く学ばない無学ではない。[744-748]

10 国土浄化

⁶³ *Abhisamayālaṅkāra* 4.40-45 に説かれる、(1) 色などの遠離、(2) 疑を滅すること、(3) 難を滅すること、(4) 自他を善法と結び付けること、(5) 布施など、(6) 甚深義を疑わないこと、(7) 慈悲に満ちた身体、(8) 五障をともしないこと、(9) 一切の随眠を断じること、(10) 念と正知、(11) 清浄衣、(12) 身体に虫が生じないこと、(13) 心が曲がっていないこと、(14) 頭陀行を行うこと、(15) 物惜しみしないこと、(16) 法性に相応すること、(17) 衆生のために地獄を望むこと、(18) 他に従わないこと、(19) 外道を悪魔と理解すること、(20) ブッダに随喜される行とである。

⁶⁴ *Abhisamayālaṅkāra* 4.47-51 に説かれる、(1) 色などの想の遠離、(2) 心の堅固、(3) 二乗からの遠離、(4) 禪定などの支分の滅、(5) 心身の軽安、(6) 欲の従事の善巧方便、(7) 常に梵行者であること、(8) 生活の清浄、(9) 蘊など、(10) 障、(11) 資糧、(12) 根、(13) 戦闘と関係し随順して住することの否定、(14) 少しの法も了得しないこと、(15) 三地に住すること、(16) 法のために身命を捨てることである。

⁶⁵ *Abhisamayālaṅkāra* 4.59 に説かれる、(1) 住、(2) 滅、(3) 真如、(4) 所知、(5) 知、(6) 行、(7) 不二、(8) 善巧方便である。

国土浄化は二種である。衆生と器の世間を浄化することである。衆生〔世間の〕浄化については飢えなどを離れることであり、三乗が器として適している。[749-752]

器世間を浄化することは、器を集めた金などをハリバドラは仏国土と認めており、ブッダシュリージュニャーナもその通りである。[753-755]

「浄化をなすことなので十地以後に存在する」とアーリヤ・ヴィムクティセーナはお説きになられている。[756-758]

11 善巧方便

十種の善巧方便⁶⁶も、数の確定が存在しなくても、順序は、「生起が生じる順序と成就の原因の順序とにより説かれている」とブッダシュリージュニャーナがお説きになられている。[759-763]

仏地に存在するので、利他は善巧方便である。それ自身により特徴であり、所作により結果となるものが、ここでは原因である。[764-767]

それ故に、その二つに重複はない、とハリバドラはお説きになられており、ヴィムクティセーナとブッダシュリーの二人は「第十地以後に存在する」〔と述べ〕、善巧方便の本質は仏の原因をよく知ることと認められるので、地の境界には矛盾はない。[768-774]

第五章

1 徴相

七つの頂のうち煖の頂を徴相により説いて、区別は十二⁶⁷を説いても、数の確定は存在しない。[775-777]

頂は、二つの徴相がそれぞれであって、徴相の頂が推測されると、ある者のそのような主張が存在する。[778-780]

ある者は、「二つの徴相が頂に認められ、徴相が推測される者は不退転と推測され、聖教からそのように推測される」と説かれている。[781-784]

2 増進

⁶⁶ *Aṣṭasāhasrikāprajñāpāramitāvyaḥyāna Abhisamayālaṅkāraloka* 4.63 に説かれる、(1) 超越、(2) 無所住、(3) 引發、(4) 不共相、(5) 無執、(6) 不可得、(7) 相と、(8) 願の尽きること、(9) 徴相、(10) 無量とである。

⁶⁷ (1) 一切法は夢の如くと見ること、(2) 声聞などの地に歓喜心を起こさないこと、(3) 如来などを見ること、(4) 仏の神通と変化を獲得すること、(5) 説法の心を起こすこと、(6) 地獄などの衆生を先に見て自分の仏国土における悪趣の断滅を憶念すること、(7) 城市などの火災を消す真理の加持を増大すること、(8) 夜叉などの非人を滅する真理の言葉を成就すること、(9) 自ら神通に邁進して善友に奉仕すること、(10) 一切種の智慧を学ぶこと、(11) 一切のものへの無執着、(12) 仏の菩提に近づくことである。Cf. 兵藤 2000: 156, 天野 2000: 82.

頂の十六の増進⁶⁸は数の確定は存在しない。順序も存在せず、これもこれも増進であると言われる。[785-788]

十六のいずれも存在するので、「その相続において善を増進することが頂である」とある者は言う。[789-791]

「十六のものが頂である」と、ある者がそのように主張するものも存在する。先にあるものにはならず、頂を得てから存在するので「増進」と述べられる。[792-796]

3 堅固

忍の頂は、三つの一切智性の法が完全である⁶⁹。その三つの法は、発心などを前に解説した通りである。[797-800]

忍を完成することを認めると考えるならば、捨てられるべき事智の完成と、道智の二種の完成と一切相〔智〕までの完成が完成する言説として設定されると言われる。[801-805]

頂は、九地以前に完成して存在するので、矛盾はないと、そのようにある者が述べている。[806-808]

シャーンティパが認めているので、一切智性の法の三種も、自ら生じたものと如来と一切智の三つとして認められる。[809-812]

4 心安住

世第一法の無量の頂も、三昧に依ってから、無量の福德⁷⁰が頂において解説されている。[813-816]

5 見道

見道の頂は、捨と分別と功德が「頂」と言われる。捨などを付帯することである。[817-819]

頂の事体は六波羅蜜であり、それぞれにも六つずつにおける完成である、とある者は言い、それ故に、見道の頂は続く機会に存在する、と言われる。[820-824]

捨てられるべき分別は、能取と所取の二つにまとめられる。精密に区別するならば、それぞれにも九つずつある⁷¹。[825-828]

⁶⁸ (1) ジャンブー州の三千世界の衆生の数ほどの如来を供養すること、(2) 殊勝による波羅蜜の作意、(3) 無生法忍を得ること、(4) 覚られるものと覚るものの法の不可得、(5) 十善、(6) 一切の諸天が近づくこと、(7) 一切の魔の調伏、(8) 師と同様な者と同じ状態、(9) すべてに対する善巧方便による清浄な学習、(10) 仏種姓となること、(11) 果としての仏位を得る因相、(12) 波羅蜜に対治する心を起こさないこと、(13) 色などと俱生する覚知を起こさないこと、(14) 波羅蜜を撰ずることを知ること、(15) 一切の円満を得ること、(16) 正等覚に近づくこととである。Cf. 兵藤 2000: 156-157, 天野 2000: 83.

⁶⁹ *Abhisamayālaṅkāra* 5.3.

⁷⁰ *Abhisamayālaṅkāra* 5.4. Cf. 天野 2000: 84.

⁷¹ Cf. *Abhisamayālaṅkāra* 5.6. これは *Abhisamayālaṅkāra* 5.8-16 に説かれる、(1) 参与の所取分別、(2) 遠離の所取分別、(3) 実有の能取分別、(4) 仮説の能取分別にそれぞれに九つずつの項目があることである。

三界の捨てられるべきものを区別するならば、百八の分別である⁷²。数の確定は理由と対境とにより、大と中により説いたものがある。[829-832]

本質は、迷乱の知であり、有分別と無分別とにより迷乱が二種であると言われる。所知障だけであって、煩惱障と所知障を有する者は「二つになる」と主張する。[833-838]

「我が存在すると分別することなどは劣った分別である」という主張と、「我は存在しないと分別することなどの悪い分別により対治している」という主張は認められない。[839-843]

ある者が二つに区別して述べている。これを説明するならば、最後に明らかになるものは、悪い分別は無量劫から、その対治の分別であり、世間の道に存在する。[844-848]

捨は、見道と無間道であるというのが大乘の主張であり、声聞は解脱道による。[849-851]

6 修道

海における水のように⁷³、無量の功德が集まることが修道の頂で、「第八地以前に存在する」とある者が主張することを考察すれば、十地の機会に存在することと似ている。[852-857]

捨てられるべき分別の相は前にすでに解説した⁷⁴ので、区別の相が説かれるべきである。[858-860]

ハリバドラの主張は「順決択分の時に存在する嫉妬である」と説くもので、ヴィムクティセーナは「修道の次の知の機会の有漏なる善である」と言う。[861-866]

7 無間三昧

無間の頂は、本質は止と観であり、間がいかなるものによっても中断せず、多くの功德の完成が相である。[867-870]

重複の過失は前に捨てており、地の境界は、金剛の如くならば、いずれかの禪定であるので、この所縁は非実有である⁷⁵。[871-874]

8 誤認

自らの相続などを誤認する十六⁷⁶が除かれて、生じるものである。誤認の本質は、煩

Cf. 兵藤 2000: 159-165.

⁷² Cf. 天野 2000: 95.

⁷³ Cf. *Abhisamayālaṅkāra* 5.36.

⁷⁴ これは見道の際と同じように、*Abhisamayālaṅkāra* 5.27-34 に説かれる、(1) 参与の所取分別、(2) 遠離の所取分別、(3) 実有の能取分別、(4) 仮説の能取分別にそれぞれに九つずつの項目がある。Cf. 兵藤 2000: 162-165.

⁷⁵ Cf. *Abhisamayālaṅkāra* 5.39.

⁷⁶ *Abhisamayālaṅkāra* 5.40-41 に説かれる、(1) 所縁の生起、(2) 自性の決定、(3) 一切相智者性の智、(4) 勝義と世俗、(5) 加行、(6-8) 三宝、(9) 方便、(10) ムニの正観、(11) 顛倒、(12) 道、(13) 能対治、(14) 所対治、(15) 相、(16) 修習とである。

悩と所知の障である。「二つおき」と言って、ある者は後者だけである、と主張する。
[875-880]

数の確定は存在せず、まとめて誤認の名称により、多くの解説があるので、詳しくここで広げるべきではない。[881-884]

第六章

次第〔現観〕は、六波羅蜜と六随念⁷⁷と〔一切法無自性の〕勝義〔の十三〕である。六波羅蜜と成就も、委託と順序であるので、重複の過失はない。すなわち、三宝はその如くなので、繰り返しの過失はないのである。[885-890]

布施と戒〔の波羅蜜〕の二つと喜捨と戒の随念も実体と結果の部分から説かれるので、重複の過失は存在しないものである。天と〔三〕宝は証人と所依の在り方なので、重複は存在しない。[891-896]

第七章

一刹那現等覚の四種⁷⁸は、顛倒により区別されるもので、順序により生じるものではない。[896-899]

最初の二つは結果であり、後の二つは行相〔である〕ので、数の確定が存在しなくても、すべての結果はそこにある。[900-903]

第八章

1 身の数

身は、一、二、三、四、五であり、〔数の〕確定⁷⁹は存在しないと認められている。自他の利益により「三身」とマイトレヤはお説きになられている。[904-907]

自利と法身の二つは、相続の浄と不浄の二種により対象において色身を二種と言う。
[908-910]

『大解脱経⁸⁰』より自性身を説いたものと、勝義諦と、三〔身〕では収まらないので、「四身」とハリバドラがお説きになられた。[911-915]

変化の变化〔身〕などが存在するので、五身と他の者たちが言う。自と他の受用の完成により五身を主張する目的は秘密である。[916-919]

⁷⁷ (1) 仏随念、(2) 法随念、(3) 僧随念、(4) 戒随念、(5) 捨随念、(6) 天随念

⁷⁸ (1) 不異熟、(2) 異熟、(3) 無相、(4) 不二の四種である。

⁷⁹ 佐久間 1991: 1-30 を参照。

⁸⁰ Tib.: mdo sde thar pa chen po.

2 自性身

自性身の本質は、実体の存続する在り方であり、法身を存続する在り方と理解するものである。[920-922]

智慧である。二身は、色として設定されるもので、その色〔身〕も、何らかの衆会の顕現として設定するのが、アサンガ兄弟の論書である。[923-926]

両者の顕現を設定するのがディグナーガなどであり、両者の顕現ではないと主張するのがナーガールジュナなどである。[927-930]

3 法身

五智を法身とある者が主張しており、ブツダシュリージュニャーナは、次のように主張している。〔大〕円鏡智は法身である。平等性〔智〕と妙観察〔智〕は、報身であり、化身は成所作智である⁸¹。[931-937]

そのように主張はさまざまである。「法性であるので、法身である」とある者がそのように主張するものがある。「法性を理解し、法を示すので法身である」という主張もある。[938-942]

4 受用身

確定は四つで、すなわち衆会と場所と師と法とで、それ故に、どのように認められるのかは、受用をなすので、受用〔身〕である。[943-946]

衆会の確定は、「何れかの十地の者である」とハリバドラはお説きになられている。シャーンティパは、「見道以前の菩薩である」と言う。[947-950]

場所は色究竟天で、法は大乗だけの法である。師は〔三十二〕相と〔八十〕種好により莊嚴した色〔身〕だけである。[951-954]

三十二相⁸²と八十種好⁸³として解説していても、それは無量なほど存在する。すなわち善住を述べてから無量なものが解説される。[955-958]

所化の側では、これだけにより大士を説明するので、相の相たるものとして解説される。[959-961]

本質は、総じて色であっても、大部分は五根に設定される。心の浄化を説明するので「種好」と、さらに特徴を莊嚴するので「種好」と主張するものがある。[962-967]

仏の相ではないものも、あるがまさに所化に変化するので、「色身」と述べられている。[968-970]

5 変化身

⁸¹ 四智と三身との関係については、佐久間 1987 を参照。

⁸² *Abhisamayālaṅkāra* 8.13-17.

⁸³ *Abhisamayālaṅkāra* 8.21-32.

四つの確定を離れてから、どのようなものがどのようになるのかと言えば、師は変化身である。[971-973]

6 法身の業用

それによる二十七の業用⁸⁴が自然に成就し、中断しない世間と出世間の建立と、仏を建立することをヴィムクティセーナはお説きになっている。[974-977]

また、あるがままのものとあらん限りのものは、「あらん限りのものは所依と四道と設定され、究極を設定することがあるがままのものである」とブッダシュリージュニャーナが言う。[978-981]

そのように無量の業用も、道諦を自性とする機会であって、涅槃を設定する結果と認められる。自然に成就し、相続が中断しないことも、ムニだけの業用とお認めになられている。[982-986]

終章 あとがき

ベンガルに生まれた比丘ディーパンカラシュリージュニャーナが著書と師のお言葉により『般若波羅蜜多撰義灯』を著した⁸⁵。[987-990]

彼は善で無垢なるものを得ているので、すべての有情が誤解を捨て去るであろう。般若波羅蜜を理解してからも、他者を利益するために示しなさい。[991-994]

翻訳者後書き

『般若波羅蜜の撰義の灯』というわれるディーパンカラシュリージュニャーナによる著書を完成する。そのパンディタ自身と翻訳官の偉大な賢者の中の偉大な方であるツルティム・ゲルワが翻訳した⁸⁶。

後の吉祥なる自然に成就する知が生じる場所であるサムイェにおいてディーパンカラシュリージュニャーナが二万[五千頌]を解説した時に、ここに解説から抜き出した。後に二人の翻訳官がヴィヴァルタ⁸⁷により説かれたものをきれいな本にした。この後の書とヴィヴァルタとインドの書の譬喩三つがチムにある。ヴァイローチャナが翻訳した十万の肉皮の中にあると言われている。

吉祥あれ⁸⁸。

⁸⁴ *Abhisamayālaṅkāra* 8.34-40. Cf. 天野 2000: 115.

⁸⁵ この偈以下の部分は、Chattopadhyaya 1981: 451-452 に英訳されている。

⁸⁶ C, D はここで終わり、以下の記述を欠いている。

⁸⁷ Chattopadhyaya 1981:452 によると、Vartula 書体のことである (Roerich 1949: 162)

⁸⁸ G1 は、さらに別のコロフォンが続く。

第2章 『般若心解説』

はじめに

チベット大蔵経のテンギュルには、Dīpaṃkaraśrījñāna に帰される二つの般若経に対する注釈書が存在する。一つはここに取り上げる『般若心経』に対する注釈書の『般若心解説¹⁾』であり、もう一つは、蔵外文献として Atiśa に帰される『十万頌般若経』の略義をまとめた『十万般若波羅蜜多(Śatasāhasrikāprajñāpāramitā²⁾』である。ただし、後者は経典の注釈ではなく、読誦用テキストとして同経を再編集したものである。彼が著した大乘経典に対する注釈書は、他に『三蘊経』の懺悔儀軌に対する注釈書のみである。もちろん、『般若経』がインドにおいて主流な経典の一つであったという理由もあろうが、彼が興味を持っていた経典の一つであったことがわかる。本章では、これらの注釈書のうち『般若心解説』について考察する。

『聖般若波羅蜜多心経解説』について

『聖般若波羅蜜多心経解説』のテキストは、チベット語訳³⁾のみが現存する。その著作の経緯などに関する情報については、そのコロフォンに、

比丘 Legs pa'i shes rab が Dīpaṃkaraśrījñāna に請願したよい解説であり、その意味を私が典籍として著した。

今日のこのチベットの王国では昔の悪しき習わしに執着することで、さらに正しい教授をよく解説したものを知らなくても、

しかも智慧をもつ者に対する利益を考え、悲心の思いで記した。勝者の母によく理解させ、嫌悪により述べることにならないように。

とある。この「私」が明らかではないが、本註釈は著者がチベットに招かれ、Legs pa'i shes rab に出会った後に著されたものとなる。

『般若心経』の解説に入る前に、著者は、第二法輪⁴⁾の『般若経』の意味をまとめたものを『現観莊嚴論』と『般若心経』とし、前者は『十万頌般若経』と『二万五千頌般

¹⁾ 望月 1991a.

²⁾ 望月 2001g, 2002a.

³⁾ D. Ma 313b4-317a7, C. Ma 313a1-317a7, P. Ma 333a6-338b4, N. Ma 342b6-348a7, G. Ma 443a3-449b6. このうちデルゲ版については、榛葉 1938 に影印版が掲載されている。

⁴⁾ 『解深密経』に説かれる三法輪より「空を説く様相をもって転じられたもの」である。袴谷憲昭 1994: 20-27、四津谷 2010: 5 を参照。

若経』と『八千頌般若経』を道として説いたものであり、後者は『七百頌般若経』などを力として説いたものとする。続いて『般若心経』の意味について、Vimalamitra による注釈書に説かれている八義と Dignāga による解説が言及される。前者は『般若波羅蜜多広疏⁵』の冒頭で述べられる『般若心経』の全体構成を、(1) 導入、(2) 時機、(3) 衆会、(4) 因縁、(5) 質問、(6) 回答、(7) 同意、(8) 讃の八つに分析したものであり、後者は『般若波羅蜜多円集要義論』の第二偈にまとめられる『般若経』のに説かれる内容を、(1) 依所、(2) 関係、(3) 作用、(4) 修習と、(5) 区別、(6) 特徴、(7) 罪過、(8) 功德の八つにまとめたものである。ただし、Dīpaṃkaraśrījñāna の説明は Dignāga の八義に直接言及せず、異なる解説をした上で同論の第三、四偈をさらに引用する。これらの先行する二つの解釈に対して、Dīpaṃkaraśrījñāna は、「Vimalamitra によりそれは否定される」として⁶、Vimalamitra の八義を採用する。その否定根拠は、編者が認識根拠となりうるのかという問題に対して、その目的を成立させることができず、証人にもなりえないからとする⁷。

Dīpaṃkaraśrījñāna の分析により『般若心経』の経文を八義により区分すると、(1) 導入は「このように私は聞きました」であり、(2) 時機は「ある時世尊が」以下であり、(3) 説者に属する衆会は「比丘の大僧団と」以下であり、(4) 因縁は「その時」などと三昧への入定を説いた句であり、(5) と (6) の質問と回答は続く「それから」から「そのように学ぶべきである」であり、(7) 同意が「如来たちも」以下であり、(8) 賞讃が「世尊により」となる。この解釈は、Vimalamitra の解釈に従ったものである。

注釈では同経の内容の解説として、質問と返答の解釈が論じられている。すなわち質問を「種姓をもつ者は菩提に発心することで五道をどのように学ぶべきなのか」と置き換え、それに対する十一の回答を五道により区別する。Vimalamitra が示した十一の回答は、鈍根者に対して五道を学ぶ在り方を区別した十に、鋭根者に対するマントラが加わり、十一種とされている。また十の回答については、さらに資糧道と集道の二つのそれぞれの回答と、見道の三つ、修道の一つ、無間道の一つ、仏地に三つとし、五道の最後に仏地を加えている。この五道の教義により『般若心経』を解説するものに関しては、Kamalaśīla の注釈書に五道への言及⁸は見られるものの、先行する Jñānamitra や Vimalamitra の注釈書には五道による解説は見られない。Dīpaṃkaraśrījñāna が

⁵ 大八木 2001, 2002, 2002b, 2009.

⁶ ただし、Vimalamitra による注釈書には Dignāga に対する直接の批判を見ることはできない。

⁷ 「認識根拠たりうる人 (pramāṇabhūtapuruṣa)」については、Silk 2002 を参照。

⁸ 芳村 1974: 169、大八木 2007: 5-7 参照。

Kamalaśīla を知った上で五道に言及したのかは明らかではないが、続いて引用する Maitreya の『現觀莊嚴論』に五道の教義が説かれていることから、『般若経』の概説書でもある『現觀莊嚴論』の五道の教義に基づいて『般若心経』を分析したと理解できる。

劣根の者への十の回答に対する五道による解説は、『解深密経』の「分別瑜伽品」に説かれる四種の所縁に基づいている⁹。すなわち、(1) 有分別の影像たる觀の所縁、(2) 無分別の影像たる止の所縁、(3) 事物の辺際の所縁、(4) 目的を成就した所縁の四つをそれぞれ資糧道、加行道、見道、無学道とし、修道については前三種の所縁に属しているとす¹⁰。

最初の資糧道と第二の加行道には「このように見るべきである」という返答が対応している。すなわち、資糧道においては種々なるものを考察する分別をともなって、空性などの種々なる様相を考察する智慧が説かれているから、とする。

第三の見道については、所縁とその所縁に入る様相とその様相によりみられる結果との三種に分類される。最初の所縁については、「それらの五蘊についても本質により空と正しく見た」という返答が対応している。所縁に入る様相については、「色は空である」という句が引用され、相の特徴と数の確定と順序の確定の三つがあるとされる。特徴に対する説明はないが、以下の説明から三解脱門のことであると解釈できる。数については心髄の意味の最高なものを三解脱門とし、その自性が「空性、無相、不生、不滅、不垢、不淨、不増、不減」の八義により否定されることで数が確定されとする。この箇所「空性と無相」の *sūnyatālakṣaṇa* の複合語については、漢訳を始めとする多くの解説書は「空相 (*sūnyatā-lakṣaṇa*)」と読むが、インドにおけるほとんどの注釈書は「空性と無相 (*sūnyatā-alakṣaṇa*)」と読んでいる。また三解脱門の順序の確定については、すべての経典が空性、無相¹¹、無願の順であるとし、それぞれを仏の見解と行と結果に対する執着の対治として順序通りに述べたものとする。様相により見られる結果となる智の顕現については、「シャーリプトラよ、その如くなので、その際に空性は」という句が引用される。すなわち「空性に色はなく」などの智が生じることが見道の結果とされている。

第四の修道については、「シャーリプトラよ、その如くなので」という句を引用し、その内容は理解し易いとする。

⁹ 野澤 1957: 115-151、兵藤 2010: 60-61 参照。なお同経は *Vimalamitra* の注釈においても引用される。

¹⁰ その根拠として *Dīpaṅkaraśrījñāna* は『現觀莊嚴論』の第四章第五十三偈を引用する。

¹¹ ただし、三解脱門の無相のサンスクリット語は *animitta* である。そのチベット語訳が同じであるために、三解脱門に言及したのであろう。そうであるのならば、本テキストのサンスクリット原典の著述と同時期に、そのチベット語訳が行われていた可能性がある。

第五の無間道については、「三時におられる」から「依拠してから」までとする。以上で五道は終わるのだが、Dīpaṃkaraśrījñāna は、五道の後に仏地に対する三つの返答として「無上」などと言及するものの、ここには「無上で、正しい悟りを、明らかに悟られた (anuttarāṃ samyaksambodhim abhisambuddhāḥ)」という三句があるだけである。注釈は、このうち最初のものが如量智であり、後の二つが如実智とする。

鋭根の者に対して第十一番目の回答がなされたとして、「シャーリプトラよ、それ故に」として真言の意味が解説されるとして、真言を含むパラグラフが対応している。また質問に対する返答の結びとして、「そのように学ぶべきである」と述べられるとして、注釈書は終わる。

このように本注釈書において言及される論師については、Vimalamitra が三度、Dignāga が二度、経論については Maitreya の『現観莊嚴論』と『解深密経』の引用がある。前者については、Dignāga の説を批判した上で Vimalamitra に言及するものである。また八義による『般若心経』の構造分析など、Dīpaṃkaraśrījñāna は Vimalamitra の注釈書に依拠していたことは明らかである。ただし、問答における返答部分を五道により解説することが本注釈書の独自性であり、そこにおいて、瑜伽行唯識派の文献である後者が引用されることは注目される。彼は、同経に説かれる三法輪説¹²を認識した上で注釈書を著している。また、『般若経』については、その心髄が説かれた文献として、『現観莊嚴論』と対比しつつ、そこに説かれる五道により『般若心経』を再解釈したとすることができる。

『般若心解説』和訳

『般若心解説』を尊者が著した。

般若波羅蜜多に敬礼する。

善逝が説かれた第二法輪の意味¹³をすべてまとめるならば、二つ。すなわち、現観の意味と心髄の意味である。そのうち経典を詳細と中程と〔簡略の〕三¹⁴により三種の人に關連して現観を最高のものと示すのであり、七百などにより心髄の意味が示されてお

¹² 袴谷 1994: 20-27 参照。第一法輪は初轉法輪の四諦説で、第二法輪が『般若経』の無自性説、第三法輪が『解深密経』の唯識説となる。

¹³ 伊藤 1975: 4-5 参照。

¹⁴ ロペスは、「三つの詳細なものの中程」と読み、前者を『十万頌般若経』と『二万五千頌般若経』と『一万八千頌般若経』とし、後者を『一万頌般若経』と『八千頌般若経』と『宝徳藏般若経』とするが、「簡略」を補って、『十万頌般若経』と『二万五千頌般若経』と『八千頌般若経』とする。このような表現は、ハリバドラの『現観莊嚴論釈』などにすでに見ることができる。真野 1972: 96-98 参照。

り、ここでもヴィマラミトラのように八義によりこの経の意味が残らず説かれている。

八義も、「今度は導入と」などと言うことにより身体を¹⁵最高のものとして示している。道である現観は、知恵により把握されるものの最高と示している。そして大と中の三による最高として現観が説かれている。また心髄の意味は力として説かれており、七百[頌般若経]などは最高として心髄の意味を説いており、現観はついでのものとして説かれている。

ここでも心髄の意味が説かれており、ここでもヴィマラミトラの如くならば、八義により経典の意味が残らず説かれている。八義も、「導入と」などと言うことにより身体が設定されている。それに対して軌範師ディグナーガなどにより経典の意味を他にも解説したものがある。すなわち、経典が生じる相続¹⁶と経典そのものとである。最初のものに二つある。導入と由来とである。この両者の違いは、言葉が生じる縁と経典が生じる因とである。これも、最初に生じたものと、続いて入るものとで、導入である。由来にも二つあり、共通なものと異なる由来とである。この両者の差異は、すべての経典に共通に存在するものと、この経典に存在し、他のものには存在しないものとである。共通なものに四つあり、時と師と場所と衆会とである。異なる由来に二つあり、勝者と衆会が三昧に入ることである。それがまとめた意味である。目的の意味は、編者自身が認識根拠たる人になるべきであるからであり、「その時のみにこの師にこれらの衆会とこの場所において聞いた」と言う証拠と意味の考察をともなう言葉を述べるならば、では「これを解説したこれは真実である」と言う編者を信じるであろう。すなわち、世間においても証拠と詳細な証明により「彼のそれは真実である」と考察されるように。そのように言うことも、軌範師ディグナーガにより [『般若経要義』第三、四偈に]、

信をもつ者が入る支分として自分自身が正しい認識根拠に明らかになるために、師と衆会の証人と場所と時などが説かれている。

集める者が世間において場所と時などを説いたものが証拠をともなう言葉を述べているならば、自分自身が正しい認識根拠になっている¹⁷。

と説かれている。これらの語義と言葉を合わせたものが明らかである。それ故に、すべての経典をそのように解説すべきであると『八千頌撰義』に説かれている。残りも同意

¹⁵ ナルタン版、北京版、金写版は、「示されており、ここでも Vimalamitra のように八義によりこの経の意味が残らず説かれている。八義も、『今度は導入と』などと言うことにより身体を」と言う句が欠けている。

¹⁶ ナルタン版、北京版、金写版は「相続 (rgyud)」と読み、チョネ版とデルゲ版は「原因 (rgyu)」と読む。

¹⁷ 服部 1961: 122, 大竹 2009: 336-338.

できる。

ここにヴィマラミトラによりそれが否定されている¹⁸。すなわち自分の意見を明らかにするために最初に反駁する。そこに二つの過失がある。すなわち、無効であることと証人にならないことである。そのうち無効とは、その目的を成立できないことである。今は、信により追随する者たちが入る支分として自身が正しい認識根拠たる者と論証するためにそれが説かれている。証人の目的も、後に彼に対して疑惑をもつことなどが生じただけで、それに至るのである。そのような場合に、神変と現観を得た者たちが經典の意味を決定することはできないであろう。ある証人は涅槃し、他のある者は留まっている。それも、

甚深で無限な經典の宝を聞くことを欲する者は、世間界のすべてにおいて利益をなして行くからである¹⁹。

と言う在り方による。ある者は、ここに留まっても見る福分がない。マハーカーシャパのように。その第二の過失は、その目的を論証できるものに入っても、証人たるものにならない。証人となるものを「これとこれである」と衆会の名前を説くことで証人となると主張するならば、「スプーティと」などと実際の名前を示すことがそのように証人となることに依るの場合に、「この經典のように衆会の名前がなく、証人にどうしてなろうか」と述べられている。それ故に、次のように解説される。前出の由来をもつ經典の解説の前にその導入をなすものが「このように私は聞きました」と説かれている。これは、損減させることなく正しく聞いたことを説いている。それにより衆会が退くことなく説かれたものを知ることで編者によく耳を傾けることなどが成立するから。

今度は、何れかに依ってからこの經典が生じる時機となったその状況を著して、それに入ることが「ある時世尊が」などと述べられる。

では、そのような時機に依ってから生じた經典に登場する人はどのようなのか、と考えてから説法に属している集りである。「比丘の大僧団と」などと述べられて、法を聞く福分がある集団を「説法に²⁰属している集まり」と言う。

特別な由来は何かと言えば、「その時」などと主と衆会との二つの三昧への入定が説かれている。

¹⁸ 望月 1991c: 62、大八木 2001: 15.

¹⁹ 現時点で典拠の確認はできていない。

²⁰ チョネ版とデルゲ版は、tshogs pa dang ldan par gtogs pa とあり、「法を聞く幸運がある集団をとまなうものに属している」と読んでいる。

では、その二つの由来を原因としてから始まっているその経典は何か、たとえば、質問と返答の二つにより示すものが、「それから」と言うものから「そのように学ぶべきである」までにより説かれている。では、それは如来が説かれたものではなく、「観自在が解説したこれは何であるのか」と考える衆会の誤った理解を取り除くために釈尊自身が同意したものが与えられている。では、これも五濁が広がった時に悟り、他の仏よりも光などが小さい者が「まさにその通りなのか、あるいはそうではないのか」と考えることに対して、「如来たちも随喜されるであろう」と言うことで「まさにそのようなものに尽きる」と考えることが意図されている。また「如来たちも」と述べられたものが随喜と結びついている。その如くならば、経典の宝の解説に対する喜びが生じてから随喜することが、「世尊により」などと述べられている。それは一般的な意味をまとめただけである。

そのうち質問が、「それから」などと述べられている。この意味については、所依の人は誰であれ望む者であり、区別なく²¹ [菩提] 心を起こした菩薩である。「どのように学ぶべきか」は資糧道と加行道と見道と修道と無学 [道] においてである。この五つも「想と加行と現実化と成就と理解」と述べられたものの自性である。ここでの教授はこうである。すなわち「種姓をもつ人は菩提に発心することで五道をどのように学ぶべきなのか」と言う質問の意味である。

答えは、道を五種に区別してから説かれているので十一になる。それにも二つあり、鈍根に関するものと鋭根に関するものである。そのうち鈍根の者は、五道を学ぶ時にそれぞれの道に関してもすべての相を円満に説いたものに依っており、その観点から五道を学ぶ理趣を区別するならば十になる。鋭根の者は頭に述べたものだけで理解しており、そのために前に十義を説いたそのものをまとめてから真言の意味として説いたので、その如くならば答えは十一になる。一般的にこの両者も鋭根であるけれども、それにも特別なものがあるので二つに分けられている。ここで鈍根の者に対して説いたそれも他の鈍根の者に依ってから真言になっている。何故ならば、秘密でないものも秘密に説かれた通りになっているから。さらに秘密なものとは心に存在するのであり、実際に説かれたものに違いはなく、師にも出し惜しみはないから。それ故にここでも真言の意味の解説自身は、前にも秘密に説いた通りに入るので、真言の語義をともなっている。

そこで最初に、経典における所依の種姓をもつ人で最高の菩提に発心した者が道を起こした所依の人なので、それを解説したものが「シャーリプトラ」と述べてられてか

²¹ チョネ版とデルゲ版は、「区別なく (byed brag med pa)」の代わりに、「区別を成立して (bye brag sgrub pa dang)」と読む。

ら、「ある誰か善男子、善女人」と言うことで種姓をもつ人が説かれており、「甚深なる般若波羅蜜」と述べるものと「行を實踐したいと願う」と言う二つにより理解される対象と望む相の発心のその二つの解説が順序通りである。これにより鋭根と鈍根を区別せずに総じて説かれている。

鈍根に関する十の答えも、『聖解深密経』において所縁を四種と解説した²²それにより意味の主要部分が設けられており、分別をともなう影像の觀の所縁と、無分別の影像の止の所縁と、事物の辺際在所縁と、目的を成就した所縁とである。この四つにより資糧道と集道と見道と無学道の四つが順序通りに説かれている、と知るべきである。ここで修道は、前の三つの所縁に属さない残りの所縁は他にないので別に説かれていない。そのお言葉としても尊主マイトレーヤにより [『現觀莊嚴論』第四章第五三偈に]、

順決択分と見道と修道自身において何度も考え、思量し、確実に理解することが修道である。

と解説されている。そこで分別をともなう影像の觀の所縁は、「このように見るべきである」と説かれている。これにより資糧道の位で存在の眞実性をそれぞれ考察する智慧が説かれている。見道では一切の所縁を平等と理解することで所縁を種々なる様相と見ることはなく、ここ [資糧道] では空性などの種々なる様相として事物を有と執着し、考察するから。分別は、似ていないものや種々なるものを考察することである。そのように分別の智慧自身は三昧がないので、觀のみの自性であり、見道において生じる無分別の影像だけであるので、分別をともなう影像が「觀の所縁」と言われる。それ故に「見るべきである」と出ているのは、「種々なる様相をそれぞれ考察すべきである」と説かれている。質問の際にも解説した。そのように資糧道が生じ、他の智により中断せずに煖などの順決択分が生じるので、この經典の言葉で無分別の影像である止の所縁もこれにより解説されている。そこで無分別は上に説いた聞と思の智を外から見て、種々なる所縁に対する分別をそのように分別せず、一つに内なるものを分別するものにまとめられる。それ自身も一切法を平等なものとして分別する觀が見道で生じることがそのように存在しなくても、止の自性が存在するので、無分別の影像の止の所縁で、前の通りである。

そのように二つの所縁を解説してから、今度は第三の事物の辺際在所縁を示す。そこで事物とは色などである。その辺際は自性や法性で、そこでの所縁は事物の辺際として

²² 野澤 1957: 115.

の所縁である。これは見道である。それにも三つ。所縁とその所縁に入る様相とその様相により見られる結果である。そこで「それらの五蘊についても本質により空と正しく見た」と述べたのは、上に説いたように事物と辺際とそれに対する所縁の三つを説いたことで見道の所縁が説かれている。語義は、注釈から明らかである。

その所縁に対して「いかなる様相により入れば正しく見て、顛倒せずに見ることになるのか」と言うのならば、「色は空である」などと述べられる。

ここでも三つ。すなわち、それぞれの相の特徴と数の確定と順序の確定である。そのうち、最初の「相の特徴」は明らかである。数の確定は、ここでは心髄の意味の解説であり、心髄の意味の最高のもも三解脱門である。三解脱門も、甚深な八義によりまとめられる。すなわち、諸事物の本質の空性と、解脱門の空性であり、空と無相との二つによっても自らの本質による空と一般的本質による空の二つを解説することで見解に関してその二つに空性のすべての意味がまとめられているので、それを解説した。「無相」とは理由を離れていることで、原因も結果に依ってから原因と設定されており、それも雑染の因果と清浄の因果との二つにまとめられているので、不生と不滅と垢がなく垢を離れることもなく、順序通りである。「無願」とは、結果を願う二種の領域である。過失を離れることと功德をもつことを願うことである。その両者を離れることが無願である。それ故に三解脱門の自性に対して、八つの否定対象を否定する相も八つだけと確定する。以上が数の確定である。

順序の確定は、一切の経典において善逝は空性の解脱を先に説いており、それから無相、最後に無願 [を説かれている]。ここではその同じものにより確定している。仏の見解と行と結果の三つが順に生じ、その三つに対する執着の三つの対治が順序通りに説かれており、その数の確定自身により順序も確定する。それ故に、この経典の第一に解説されるべきものも「甚深なる八義がこれである」と善友ヴィマラミトラにより解説されている。

今度は、その所縁についてこの八種の門から見る結果の智の顕現がどのように生じるのかと言うそれを説くために「シャーリプトラよ、その如くなので、その際に空性は」などと述べられている。「その如くなので」と述べるのは、そのように説かれた種類によりその所縁を見る場合である。「その際に」とは、その時に、見る時にである。「いかなる結果が生じるのか」と言えば、「空性に色はない」などと述べられ、空性を見る際に色などを真実として知覚しない智が生じるのである。それ故に、「その所縁に関してこの八種の門から修習をして、空性として顕現するこの智に似たものが生じることが見道の結果である」と説かれている。

そのように見道が生じて、修道が生じるので、それを示すものが、「シャーリプト

ラよ、その如くなので」などと述べられ、注釈に明らかである。「その直後に無間道の金剛のような三昧が生じるものからそれは説かれず、仏地の上品断が修道の二障の捨を引き起こす」と大いに主張するならば、それが修道と関係している、と認識させるために修道に続いて説かれている。さらにまた、ここで捨てるのは一度²³である。それは「心を覆うものはなく」と述べたものから、「至っている」までで、理解し易い。

無間道を説くために「三時におられる」と述べられるものから「依拠してから」までが述べられる。「一切の仏」と述べたのは、ここでは仏であり、「正しく完成した仏ではない」と出ていることから、十地の特別な道に住する菩薩である。その道は金剛のような三昧であると注釈書から明らかに解説される。

ここでは経典より大きな分別ととても勇猛な心の二つを第一に説いたものに付随してこの無間断の原因も付加して説かれている。そのように捨てられる我性を説いてから、分別の自体を二種説くために「無上」などと述べられるものに二つ。どれだけあるのかを知ることと、どのようなのかを知ること、とても勇猛な心と大きな分別が二つであるから、二つの答えとして設定されている。そこで「無上」と述べることで知覚される対象とそれに続いて成就する原因と結果を得ることが無上であり、その三つによりどれだけ知ることという知恵が説かれており、その三つをとまなうことで所知の一切の事物をマンゴーを掌に置くように知るのである²⁴。「正等覚を明らかに完成した仏である」と述べることでどのように知ることという知恵が説かれており、注釈から明らかに説かれている。

その如くならば、鈍根に関して資糧道と集道の二つに対するそれぞれの答えと、見道に三つ、修道に一つ、無間道に一つ、仏地に三つで、そのように十の答えにより五道を学ぶ理趣が上手く解説されている。

今度は²⁵、鋭根の者に関して般若波羅蜜多の意味をまとめてから真言の意味を解説したものが、「シャーリプトラよ、それ故に」などと述べられる。それらの五道を知る意味と守護の意味とその二つの利益と仏性が解説されており、以上が十一の答えである。

今度は、問いの際に「どのように学ぶべきか」と述べた質問の答えが「完成した」と説くために「そのように学ぶべきである」と説かれている。

比丘レクパー・シェーラブがディーパンカラシュリージュニャーナに請願したよ

²³ チョネ版とデルゲ版の「一度 (lan gcig)」に対して、ナルタン版、北京版、金写版は「一つの道 (lam gcig)」と読む。

²⁴ Vasubandhu の『無尽意経広註 (Akṣayamatīnirdeśaṭkā)』(D. No. 3934, Ci 159b3-4)に同じ句が見られる。

²⁵ チョネ版とデルゲ版は、「それは (de ni)」と読む。

い解説であり、その意味を私が典籍として著した。

今日のこのチベットの王国では昔の悪しき習わしに執着することで、さらに正しい教授をよく解説したものを知らなくても、

しかも智慧をもつ者に対する利益を考え、悲心の思いで記した。勝者の母によく理解させ、嫌悪により述べることにならないように。

インドの賢者ディーパンカラシュリージュニャーナと翻訳官の比丘ツルティム・ゲルワが翻訳し、校正し、確定した。

第3章 『経集撰義』

はじめに

チベット大蔵経の中には、Nāgārjuna に帰されている『経集』に対する注釈が、二種類存在する。その一つは瑜伽行派の Ratnākaraśānti による『経集釈宝明莊嚴論 (Sūtrasamuccayabhāṣyaṃ Ratnālokālaṃkāra)』である。ここでは『経集』の引用經典をそれぞれ引用し、注釈を加え、さらに彼の依拠する論書により補足説明を加えるものである。もう一つが、今回ここに取り上げる Dīpaṃkaraśrījñāna に帰されている『経集撰義 (Sūtrasamuccayasāñcayārtha)』である。しかしながら、こちらは二葉しかない短いものであり、『経集』の文書を引用するものではなく、全体の構造を解析し、それを七つに分割するものである。以下の考察は、この『経集撰義』にみられる『経集』に対する構造解釈に対するものである。

Dīpaṃkaraśrījñāna と『経集』の関係

『経集撰義』の考察に入る前に、チベットの伝承における Dīpaṃkaraśrījñāna と『経集』の関係を、若干示しておく。まず、『テプテル・ゴンボ』には、

彼が『経集』をもっており、シャラワパとシマタクとドーデーワルが翻訳した

とある¹。また、彼の伝記である『詳論 (rNam thar rgyas pa)』には、

彼とハツンの Bodhirāja が彼の『経集釈 (Sūtrasamuccayopadeśa)』を翻訳した²。

とある。また、『経集撰義』のコロンフォンには、

彼を Tshul khriṃs rgyal ba がチベットに招いた。チベットを去るときに、弟子達が經典の意味の解説 (sūtrārthopadeśa) をお願いし、その時ツォンドウ・センゲが翻訳を願いでて許された。

¹ 羽田野 1986: 109-110. このテキストは、その翻訳者から Dīpaṃkaraśrījñāna の『大経集 (Mahāsūtrasamuccaya)』 (D.ed. No3961, Mochizuki 2004a) である。

² Eimer 1979, Teil 1: 303, Teil 2: 251. なお、この著作は、その翻訳者から Sūtrārthasamuccayopadeśa (D. No. 3957) である。

とある³。以上の三つの伝承から、彼と『経集』、およびその注釈書の関係は一定して伝わっていないと判断できる。

『経集撰義』の構造

『経集撰義』では、經典の引用に対する語句説明は行われず、『経集』の構造を分析するスタイルで解説が行なわれている。その冒頭に、

聖ナーガールジュナにより著わされた宝の論を述べる『経集』の目的は、七種の説示の經典により成立する特別な方便が考察されるべきである。

と述べて始まり、この經典を七種に分類することが全体の主題であることが示されている。『経集』のタイトルは「経集」だけでなく、「宝要義」まで付されており、同論の漢訳タイトルを支持するものである。続く七種とは、以下に示す通り、「依る時分円満」、「所依たる信」、「根本たる菩提心」、「縁を断じるものを取り除く」、「成就の精進を蔵とする」、「慧を一乗において磨く」、「大道に功德によりおもむく」經典である。これに続き、これらの七種に対する説明を行ってから、『経集』に説かれている十一章のタイトル⁴がこの七種に配分される。

『経集撰義』の構造をその著わされている順に列挙すると、(1) 『経集』の七種の概要、(2) その七種に対する喩例と適用、(3) 七種の因縁果による分類、(4) 『経集』の十一章の七種への配分、(5) 発心に関する四理趣、となる。その内容をまとめると、次のようになる。

I 原因が作られる理趣

1 依る時分円満⁵の經典

1.1 喩例と適用

有が下に執着することはすべて、風輪に依ってから下に執着するように、一

³ Chattopadhyaya 1967: 463.

⁴ *Sūtrasamuccaya* には、明確な章の区分はないが、Ratnākaraśānti の *Ratnālokālaṃkāra* では十一章に分類されている (Lindtner 1982: 173-175 は十二章とする)。 *Sūtrasamuccayaśāncayārtha* は、この *Ratnālokālaṃkāra* の区分にしたがっており、*Dīpaṃkaraśrījñāna* は、本論を著わすにあたり、*Ratnālokālaṃkāra* を参照していたことがわかる。

⁵ Cf. T. Rigzin, *Tibetan-English Dictionary of Buddhist Terminology*, New Delhi, 1986: 190, 259. *Bodhicaryāvatāra* 第一章第四偈、*Śrāvakabhūmi*, Shukla 1973: 5-8 参照。「八難」に関しては、*Aṅguttara-Nikāya*, E. Hardy, ed., vol. 4, pp. 225-227 にも述べられている。また、*Prajñākaramati* (Vaidya 1998: 4-5) は、この *Bodhicaryāvatāra* の注釈において *Gaṇḍavyūhasūtra* (Vaidya 1960a: 89) を引用して、説明を加えている。

切の白法は依る時分円満の完成に依ってから生じる。

1.2 章の配分

第一章「仏が生じることに会い難い」により縁たる他の五円満⁶を示す。

第二章「人となることは得難い」により原因たる自らの五円満⁷を示す。

第三章「恵まれた人生は得難い」により因と縁を集めた十時分円満を示す。

2 所依たる信の経典

2.1 喩例と適用

果実のなる木や花や林や葉などは、すべて大地から生じるように、すべての
功德の法を摂受し増やす所依を信じることに依ってから向上する。

2.2 章の配分

第四章「如来の教えを信じることは得難い」により所依たる信を示す。

3 根本たる菩提心の経典

3.1 喩例と適用

不謬の根や種子から幹、枝、集、実といったすべてが次第により広く木に成熟するように、一切智性に発心する根本から一切智の果が生じるだろうが、声聞と独覚と世間の発心からは一切智とはならない。そのように、十波羅蜜、不共の三十七菩提分法、四無量、沙門の四果、根本・我・楽・常の波羅蜜を得ようとするにより一切智性を発心する根本を確かに把握する。

3.2 章の配分

第五章「菩提心は得難い」により境が仏に把握される発心を示している。

第六章「一切の衆生に対する大悲は生じ難い」により衆生に把握される発心を示す。

II 縁による理趣

4 縁を断じるものを取り除く経典

4.1 喩例と適用

小豆や、米などの種子をよく蒔き、根がよく育っても、冷害や雹や病害などにより生育が中断して穀の集まりは成熟しないし、段食の生活をする有身のものたちにも利益をしない。そのように、恵まれた人生を得、信に住することにより菩提心の完全な種子を蒔き、根がよく育っても、衆生は慧を捨て、菩提を

⁶ 声聞地研究会 1998: 12-17. 他円満は、(1) 諸仏が生じること、(2) 正法を示すこと、(3) 示された諸法を建立すること、(4) 建立された諸法を随転すること、(5) 他者からの衰惑、とである。

⁷ 声聞地研究会 1998: 10-13. 自円満は、(1) 人身を得ること、(2) 聖なるところに生まれること、(3) 諸根を欠くことがないこと、(4) 勝なるところにたいする浄信、(5) 業の転変がないこと、とである。

非難し、魔の業を集め、正法を捨て、十不善と、喜びがないなどの時と、未来の身体を害する障害とにより中断すれば、自身も何らかの理による勝れたものから不全なる適当でない住所に墮ち、最上の精進より不完全なる乗に墮ち、最上の精進より不全なる一切智性から遠くなる。それ故に、相續から他者のためからも不完全となるので、自他のためにすべてを取り除く。

4.2 章の配分

第七章「菩提を傷つけるなどの障碍のある法を取り除くことは得難い」を示す。

5 成就の精進を蔵とする經典

5.1 喩例と適用

マニ宝は柔らかい土台で保たれなければ不注意により損なわれてしまう害があるように、原因を成立させる精進を蔵としなければ、菩提心という宝を永く失う害がある。

5.2 章の配分

第八章「在家であっても諸法を成就する者は得難い」を示す。

6 慧を一乗において磨く經典

6.1 喩例と適用

分かれ道に到ったとき、どちらの道に行こうか、心が乱れ疑いを持つように、心が種々なる見により賞讃されるならば、一切法の真実を分別しないので、慧は種々なる乗におもむく害がある。

6.2 章の配分

第九章「涅槃を信解する有情は得難い」から第十章「一乗を信解する有情は得難い」を示す。

III 結果たる法性の理趣

7 大道たる功德によりおもむく經典

7.1 喩例と適用

後の収穫を成功させようと望むことにより、一組の農民が精進をなすように、仏の大の一切の功德を得ようと望むことによっても、それを得る原因たる道に行かなければ、行為は第一地の者より優れないものとなる。

7.2 章の配分

第十一章「仏と菩薩の廣大なる大性に入る衆生は得難い」を示す。

IV 発心の四理趣⁸

⁸ この前との結合関係については、「七つの聖教により詳しく説明する目的が慧を了解してから受けられ

- 8.1 欺きを願うこと⁹
- 8.2 入り説かれること¹⁰
- 8.3 往すること¹¹
- 8.4 到すること¹²

まとめ

以上が本論の全体構造を解釈したものである。短い著作であるが故に、ここにそのほとんどの記述を示している。このように、本書の著わすところは、『経集』が著わされた目的を七種に総括し、その十一章をこの中に分類したものである。『経集』のこの章立ては、*Ratnākaraśānti* による『経集釈』に基づいているものであり、それを独自に展開させて解説がなされている。ただし、*Ratnākaraśānti* は、引用される經典の語句に対しても詳細な解説をなしているのに対して、本論では引用經典への言及は見られない。アンソロジー文献では、著作意図は引用經典の文句以上に、全体の構成に示されていることから、*Dīpaṃkaraśrījñāna* はそのことを認識して、本論の注釈スタイルとして『経集』の構造解釈に焦点をあてたことになる。

『経集撰義』和訳

インドの言葉で、*Sūtrasamuccayasañcayārtha*

チベットの言葉で、『経集撰義』

仏と菩薩のすべてに敬礼します。

軌範師ナーガールジュナが著した『経集宝要義論』の意義は、七種の説示の經典により成立する特別な方便が考察されるべきで、修習し、領受することはこうである。所依

ば、発心の四つの理趣が生じる」と述べられている。ただし、この後に続く記述からだけでは、*Sūtrasamuccaya* との具体的関係は見られない。

⁹ Tib: *g-yo smon* とある。この説明としては、「種子と月を教え、功德を見聞し、神仏の加護による野火の如く生じる」とあり、「揺れる(*g-yo ba*)」と解釈すべきか。

¹⁰ Tib: *'jug cing bstan* とある。「上弦の月のように増えるときが、能力と家具などを入れて示す支となる。

¹¹ 「住することは、三力を完成することである」とし、二つの解釈をあげている。すなわち、『聖広大思惟経(*Mahāsamayavaipulyasūtra*)』(P. ed., No. 5437) に、「後悔で罪過を浄化し。供養と賞讃と、帰依と、根を固め、実体を懺悔し、誓願し、律儀を護り、洗われ、清浄を得、続けて広げ、高く賞讃する在り方で教授し、無所縁と一乗で心を浄化し、清浄な特徴を見て、名前を付け、道の相承に生起し、結果の獲得までをなす」と示されるものと、「如来の百字などを誦し、声の最後から解脱の三昧の間修行し、二十五戒を護ることにて結果を獲得する」というものである。

¹² 「三力を完成すれば、彼岸の心となり、慧は大悲の根となる」とし、(1) 一切の事物に執着せず、(2) 自慢せず、(3) 他のために昼夜努力し、(4) 共通の功德たる三十七菩提分法と、(5) 共通でない十力と、(6) 四無畏と、(7) 不離などを成就させる、と示されている。

の時分の經典と、基本の信の經典と、根本の菩提心の經典と、縁の断を取り除く經典と、成就の精進を心髓とする經典と、心を一乗で浄化する經典と、大きな道を功德により行く經典とである。

それは何故なのか、と言うのならば、有が下に執着することは、すべてのものが風輪に依ってから下に執着するように、すべての白法は所依の時分円満に依ってから生じるであろう。

例えば、植物や花や枝や葉草などはすべて、大地に依ってから生じるように、功德の一切法を護り、広げる根本を信に依ってから広がる。

例えば、無謬な根や種子から幹と枝と葉と花と実がすべて順次成長し熟していくように、一切智性を心に起こす根から一切智の実が生じるようになるが、声聞と独覚と世間の者たちによる発心から一切智になることはない。その如くなので、十波羅蜜と、不共なる三十七菩提分法と、四無量と、沙門の四果と、根と我と楽と常の波羅蜜の獲得しようとするので、一切智性の心を起こす根本を堅固に把握するべきである。

例えば、小豆や麦や米などの種子をうまく撒いて、根がよく育っても、冷害や雹や病害などにより間の時機に中断してから、穀の集まりは熟さず、欲界の食べ物で生活する者たちにも利益をなさない。そのように時分を得て、信にとどまることで菩提心の無謬な種子を蒔いて、無謬な根を育てても、衆生を心で捨て、菩薩を非難し、魔の業を集め、正法を捨て、十不善と、拡大がないことなどが、今生と来世の身体を損なうことで中断すれば、自分自身もあらゆる種類の最高の所依から退いてから不完全な場所に落ち、最高の乗から小乗に落ち、最高の精進から退いて一切智性から遠くなる。それ故に、相續してから利他からも退くことになり、自利と利他のすべてが無駄になってしまう。

例えば、如意宝を鏽の破壊からよく守らなければ、放逸により破壊される恐れがある。そのように利得を浪費せず、信は堅固で、根本は変わらず、害の障碍を取り除き、成就を熱心に心髓としなければ、菩提心の如意宝を永遠に失う恐れがある。

例えば、道の分岐に至った時に、どちらの方向に行こうか心が乱れ、疑いをもつようになる。そのように心を種々なる見解で持ち上げるようならば、一切法の真実を理解しないことで知力が種々なる乗に行く恐れがある。

後の円満な収穫を望む者は、一對の農業を熱心にする。そのように偉大な仏の功德をすべて得ようと望む者も、それを獲得する原因の道を行かなければ、初学の地より優れたものにならない。それ故に、大乘でまとめられた經典は、多くも少なくもなく、真実である。

次第も、このように知られる。最初の三つは、原因を作る所作の種であり、中間の三つは縁を作る所作の種であり、最後は、結果である法性の種である。七喩は、論証をな

す論理であるから。

そのうち、「仏が生じることは得難い」などと言うことで、縁である他の五円満が示されている。「人身は得難い」などと言うことで、原因である自分の五円満が示されている。「時分円満は得難い」と言うことで、因と縁の集まった十円満が示されている。「如来が説かれた法に対する信は得難い」と言うことで、基本の信が説かれている。「菩提心は得難い」などと言うことで、境である仏を認識する心が起こされることが説かれている。「一切衆生に対する大悲が生じることは得難い」などと言うことで、衆生を認識する心が起こされることが説かれている。「菩薩を傷つける」と言うものから「中断する法を捨てることは得難い」と言うまでで、縁の中断を取り除く経典が説かれている。「在家であっても諸法を勤勉に成就させる者は得難い」などと言うことで、成就を勤勉に心髄とする経典が説かれている。「涅槃を信解する衆生は得難い」と言うものから「一乗を信解する衆生は得難い」と言うまでで、心を一乗において浄化する経典が説かれている。「仏と菩薩の広大な偉大性に入る衆生は得難い」などと言うことで、大道の功德により行く経典が説かれている。

そのように、四趣でまとめられる。七つの聖教により詳しく解説したその意味を心で理解してから受領するので、発心の四つの理趣が生じる。すなわち、最初の揺らぐ誓願の在り方と、入って説かれたものと、場所と、究竟の次第である。

それも、最初の種子と月を数え、功德を見て聞くことと、加持の守護者たちが草の火のように生じる。

その根本の上に悲心をもつことを修習することで上弦の月のように広がる時に能力と資具などが入り説かれたものの支分となる。

それから三つの場所の力を円満にした者は、『聖広大思惟経』から、後悔で罪過を浄化して、供養と賞讃と、帰依と、根を固め、実体を告白し、誓願し、律儀を護り、洗われ、清浄を得て、続けて広げ、高く賞讃する在り方で教授し、無所縁と一乗で心を浄化し、清浄な特徴を見て、名前を付け、道の相承に生起し、結果の獲得までをなす。ある者は、如来の百字などを誦し、声の最後から解脱の三昧の間修行し、二十五戒を守ることで結果を獲得する。

ある衆生は、三つの力を円満にしたので、太陽が解脱するように究竟の心になった時に心は悲心の力で幻の七喩のように一切の事物に執着せず、驕りがなく利他を昼夜努力し、共通な功德である三十七菩提法と、不共の十力と、四無畏と、混ざらないことなどを成就させる。

軌範師ディーパンカラシュリージュニャーナにチベットの比丘が十四両の金の蜂の

花を供えてからチベットへの出発をお願いしてから清浄な修習を究竟にするために師は、十六月道に入らなかった。それからチベットに出発した時に心が清浄な弟子たちが遺言を残して下さるようお願いしたので、経典の意味を概説したこれを遺言として下さった。その時にギャ・ツォン・センゲが翻訳を請願したので、下さって、確定した。

比丘ツルティム・ゲルワが広げることが望んでから、チベットの師たちは我慢と羨望が大きいので我慢の風船に功德の水は着かない。それに似たケル寺の走廊の僧侶である私が誓願して、概説をともなって、与えてくれた。尊者の師であるアヴァドゥーティパによる無住所の見解と、最後の業の発心の儀軌と、『経集』の意味の概説をなしたこの三つを一度に与えて下さっている¹³。

¹³ この段落は、デルゲ版とチョネ版には欠けている。

第4章 『業障清浄儀軌解説』

はじめに

チベット大蔵経のテンギユルの「諸経疏都」に *Dīpaṃkaraśrījñāna* に帰される『業障清浄儀軌解説 (*Karmāvaraṇaviśodhanavidhibhāṣya*)』という著書が収められている¹。そのタイトルから、『浄業障経 (*Karmāvaraṇaviśuddhistūra*)²』や『断除業障経 (*Karmāvaraṇaprasrabdhistūra*)³』をその根本テキストとして想定する者もいるであろうが、それらの經典に本文を求めるのは徒勞に終わる。『業障清浄儀軌解説』は過犯を懺悔することによる業障の浄化の儀軌⁴を説くテキストに対する注釈書であり、それは「菩提過犯懺悔 (*bodhyāpattideśanā*)」と呼ばれている文献でもある⁵。それには *Dīpaṃkaraśrījñāna* に先行する二人の論師の *Nāgārjuna*⁶ と *Jitāri*⁷ による注釈書も存在する。しかしながら『業障清浄儀軌解説』には、先行する二人の注釈書⁸に対する言及は見られない⁹。

この「菩提過犯懺悔」に関しては、すでに白寄頭成により詳細な研究が発表されている¹⁰。それによると、「菩提過犯懺悔」は『優波離所問経 (*Vinayaviniścaya Uālipari-prcchāsūtra*)¹¹』の一部と対応し、*Śāntideva* の『集菩薩学論』にも引用されている。また、*Nāgārjuna* と *Jitāri* も、ここに引用されるテキストに対して注釈を著している。蔵

¹ Tib. *Las kyi sgrub pa rnam par sbyong ba'i cho gab shad pa*. C. Ji 185b4-190a5, D. No. 4007 (Taipei ed: 4012). Ji 194a3-198b6, N. No. 3499, Ji 229b6-236a2, P. No. 5508, Ji 236a3-242b7, G. Ji 290a1-297b6. また *Dīpaṃkaraśrījñāna* には、*Āpattideśanāvidhi* (Tib. P. No. 5369)、*Sarvakarmāvaraṇaviśuddhikaravidhi* (Tib. D. No., P. No. 5874) という小論が存在する。

² Tib. P. No. 884. なお、この經典は *Dīpaṃkaraśrījñāna* の *Mahāsūtrasamuccaya* (Tib. D. No. Gi 149b1-150a5) に引用されている。

³ Tib. P. No. 885.

⁴ 袴谷 2002 は、これを「悪業払拭の儀式」と命名する。この悪業の懺悔から始まり、作善主義まで続く一連の論考は、*Karmāvaraṇaviśodhanavidhibhāṣya* に説かれている「懺悔」から「作善による功德の廻向」と関連して参照されるべきである。

⁵ 同じ著者の *Bodhimārgadīpaṇjikā* (Tib. D. 3947, Khi 245b1-2)、*Ratnakaraṇḍodghāṭa* (Tib. D. 99a6) には、「過犯懺悔の供養は『金光明経』『過犯儀軌』『三品経』『浄業障経』などに説かれている」という句が見られる。後の三つはそれぞれ異なる經典であるよりも、全く同一の文献の異名という可能性も考えられる。

⁶ Tib. D. No. 4005, P. No. 5506. Cf. B.C. Beresford, *Mahāyāna Purification*, Dharamsala, 1980. 同書には、根本テキスト、*Nāgārjuna* による注釈、チベットでの口伝に基づく注釈とに対する英訳を合んでいる。白寄 1988: 129-130 によると、このテキストの著者は *Śāntarakṣita* 以降の人物である。

⁷ Tib. D. No. 4006, P. No. 5507.

⁸ チベット大蔵経の経疏部には、これらに並んで、*Kṛṣṇa* による *Triskandasādhana* (D. No. 4008, P. No. 5509) があり、その翻訳者は *Dīpaṃkaraśrījñāna* と *Tshul khriṃs rgyal ba* である。チベット大蔵経の編纂時には、これらの四つのテキストが同一テキストに対する注釈書であると認識されていたことは明らかである。

⁹ 従って *Dīpaṃkaraśrījñāna* が注釈をした根本テキストは *Nāgārjuna* らが用いた「菩提過犯懺悔」とは異なる伝承のものである可能性もある。

¹⁰ 白寄 1988, 1989, 1989b, 1990b, 1991.

¹¹ Python 1973: 31-37.

外文献にも同じ文献のチベット語訳のテキストが見られ、そのコロフォンには『三蘊経 (Triskandhakasūtra)』に対応するチベット語が付されている。このテキストはチベット大蔵経に収められている同名の経典とは異なるが、そのサンスクリットのテキストも存在する。これらのことから、同経から引用された部分が独立したテキストとして認識されるようになり、それに対して注釈書が書かれるようになったと考えられる¹²。

『業障清浄儀軌解説』の内容

本論は、短い儀軌の文句を引用してその語句を解説する形態で書かれている。その構成は、次のように大きく三つのセクションに分類できる。

0 著作目的

帰敬偈に続いて、

苦の大海に容易に沈んでしまう有情たちの心を取り去り、彼らを引き上げようと望む意をもつ勇者たちは菩提に対する知恵を理解すべきである。

という文章から始まる。この菩提の知恵を得る道に入ることを損なわず、増益することを努力することが述べられている。そのためには、

それらの残った業障と無始以来集まった業障が、それ程の妨害により大菩提の障碍にならないように、ムニが与えてくれたこの『菩薩の過犯を懺悔する儀軌』により朝晩六度懺悔することに励むべきである。

と述べられている。大菩提を得ることが菩薩の目的であるが、その障碍となる業障を取り除く方法を解説することがこのテキストを著した目的である。

1 罪惡の懺悔

1.1 帰依

最初に、自分の障碍を懺悔する人を依護として把握して、「私は、こういう名前の者は、仏に帰依をする」と述べることから始まる。帰依の対象は、

正しく悟った仏と法とそれに従って成立する僧とは、順序通りに輪廻を超越した

¹² *Triskandhakasūtra* に関しては、白寄 1988: 132-138 を参照。それによると、この経典は四種類存在し、さらに懺悔と随喜と勧請を示す普通名詞としての *triskandha* の用例もある。*Dīpaṃkaraśrījñāna* は *Bodhīmārgadīpapañjikā* において、*Jitāri* と同じように、普通名詞として用いていた可能性もある。

道を示す者と道とそれを成就する助伴であるから。

と三宝があげられている¹³。

1.2 懺悔の対象

「菩提過犯懺悔」では、三十五如来¹⁴に対して「敬礼する」という句が並んでいるのだが、ここではシャカムニ仏の異名に関する語義の説明に続いて、金剛藏消伏壊散仏の語義が説明されるだけである。

1.3 勸請

敬礼した世尊などに対して、「私のことを護念して下さい」と心をこめてお願いすることが勸請である。「菩提過犯懺悔」の「住し、生活し、おすわりになっている」という句に対しては、法身などの三身が対応しているとする。

1.4 懺悔すべき障碍

「自分がこの生や無始無終の輪廻においてなしたもの」が懺悔すべき障碍の存在である。罪の本質を説いたものが、「罪悪の業」である。さらに、「自分がなした業・他者にさせたもの、[それを] 随喜すること」に続いて、重い五無間罪、十不善業道、八難から、

深い教えを捨てること、微細な過犯を把握しないこと、貪欲により財物などに執着して僅かなものも捨てずに集めること、仏を敬わないこと、邪見に従う方向、浄化されていない誓願。

などの微細なものまでが列挙されている。

1.5 懺悔の方法

「了知者・眼になる者・保証人」などである仏世尊に懺悔することが解説される。「今後も律儀を護る」とは、罪悪の対治により理解することである。また、Nāgārjuna、Jitāri 注のように、四力による懺悔方法が述べられる¹⁵。

2 善根の廻向

罪悪の懺悔に続いて、

¹³ ここで帰依すべきではない者として、Hiranyagarbha, Hari, Siṃha, Nārāyaṇa, Kapila, Kāṇada があげられている。

¹⁴ 『業障清浄儀軌解説』では、「三十五仏」ではなく、「如来」とある。Nāgārjuna, Jitāri による注釈書では、三十五仏すべてに対して解説がなされている。

¹⁵ 白岩 1989: 91-94 を参照。それによると、「菩提過犯懺悔」に説かれているのは Nāgārjuna 流のものである。また、『業障清浄儀軌解説』はこの後に Maitreya を引用する。

今度は自分が行なった諸善根を本当の廻向により把握しなければ、結果は存在せず、あったとしても少しなので、存在の大海を越えるために諸善を廻向すべきである。

と述べられている。

2.1 三種の善根

廻向する善の本質として、次の三種に分類されている。

2.1.1 布施から生じるもの

「布施さえも与える」ということが、布施から生じる善根である。布施の内容として、法施から「畜生までの生処に生まれた者に食べ物を一口だけ与える」ということまでが述べられている。

2.1.2 戒から生じるもの

具足戒から受けた者から優婆塞までに共通な「戒を守ること」が、戒から生じる善根である。さらに、出家者に関しては「梵行に住すること」であり、菩薩のみに関しては「衆生を完全に熟させること」と「菩提心の善根」とである。また、利他が最高のものとして設定されており、自利を求めるのではないと補足されている。

2.1.3 修習から生じるもの

「無上なる知恵の善根」などが、修習から生じる善根である。これは一切相智であり、

世俗により集められた如量と勝義により集められた如実をすべて知る者は、声聞などのすべてよりも特別に勝れている。それは諸法の自性は空たるもので、幻のようなものである、と修習してから生じる。

などと説かれており、戲論の中断と無自性の成立などが説かれている。また、Śāntidevaの『入菩提行論』第九章第五十五偈を引用し、「一切智の原因としての空性を修習することが説かれている」とする。この部分は、『業障清浄儀軌疏』において中観思想の術語が見られる唯一の箇所である。

2.2 廻向の相

これらの善根を「一つにまとめて」などというものが廻向の相である。「例えば」から始まる三時の仏世尊が廻向するように、「そのように私も廻向をする」というものが、仏により完全に与えられた方法をもつ廻向である。

3 大菩提を得る方法

根本テキストの末尾の「一切の罪悪を懺悔します。一切の福德を随喜します。一切の仏を勧請します」という部分である。まず、菩提が得られない原因である罪悪を懺悔することにより、菩提を得ることが可能になる。また、これらは他の経典では「三つの束」と説かれているとして、

「罪悪を懺悔する」とは、懺悔の束である。すなわち、善根を廻向するとは、廻向の束である大菩提を得る方法により懺悔することによる。「随喜」は、廻向の支分であって、随喜の善を廻向することによる。「勧請」とは、勧請の束である。

と述べている。そして『入菩提行論』第五章第九十八偈を引用し、これらの三つの束を朝に三度晩に三度繰り返して述べることにより、業障が尽きるとする。

まとめ

『業障清浄儀軌解説』には『優波離所問経』に関する言及は見られない。従って、『業障清浄儀軌解説』の著者が注釈を行なったテキストは同経ではなく、そこから独立したテキストと考えられる。では、先行する二つの注釈書が「菩提過犯懺悔」を、Kṛṣṇa 注やその他の伝承が『三蘊経』を根本聖典のタイトルとするのに対して、何故に本論は『業障清浄儀軌』と呼んだのであろうか。業障を取り除くための過犯を説示する (āpattideśanā) などの三束 (triskandha) を説いているので、何れのタイトルも本旨に相違するものではない。『業障清浄儀軌解説』の最初の部分には、「菩薩の過犯を懺悔するこの儀軌により」という句が見られることから、本論の著者は根本聖典を「菩提過犯懺悔」と認識していた可能性は十分ある。「業障清浄儀軌」というタイトルが、著者でない者により後に付けられたという可能性も排除はできないが、それよりも本論は特定の経典を根本聖典とする注釈書ではなく、業障を浄化する儀軌文の解説書と理解すべきものである。

『業障清浄儀軌解説』和訳

インドの言葉で、*Karmāvaraṇaviśodhanavidhibhāṣya*

チベットの言葉で、『業障清浄儀軌解説』

仏と菩薩のすべてに敬礼する。

ムニには垢がついておらず、知恵の輪を明らかにし、教説の光によりすべての

有情の障碍を火により焼く太陽の王である。

苦の大海に容易に沈んでしまう有情たちの心を取り去り、彼等を引き上げようと望む意をもつ勇者たちは、菩提に対する知恵を理解すべきである。すなわち、それを得る正しい道に入ることを損なうべきではなく、そのされるままのものが増益する方法を努力すべきである。もしも何れかの縁により損なわれても、その直後に反対に広げる方法を努力すべきである。征服された場所のような法を修行した者は、律儀を再び受け、中位の漏りなるものは三[人]に懺悔し、小さなものよりなものは一[人]に懺悔し、それら以外の自らの心により縛られたものたちは修行した通りに法に従って元に戻すべきである。それらの業の障碍の残ったものと、さらにまた無始の時以来のすべてから集まった障碍がそれ程の妨害により大菩提に対する障碍とならないように、ムニが与えて下さったこの『菩薩の過犯を懺悔する儀軌』により昼夜六度懺悔することを努力すべきである。

そしてまた、誰であれ自分の障碍を懺悔すべきものを依護として把握する。すなわち尊敬により敬礼が求められるべきものなので、最初に帰依をすることが、「私、こういう名前の者は、仏に帰依をする (*aham evaṃ nāmā buddhaṃ śaraṇaṃ gacchāmi*)」などと述べるべきである¹⁶。正しく悟った仏と、法と、それに従って成立する僧は、順序通りに、輪廻を超越した道を示す者と、[その]道と、それを成就する助伴であるから。他[学派の]金蔵やインドラ神や獅子や那羅延などとカピラとカナダなどではない。何故ならば[彼らは]自分自身が存在の牢獄に耐えられずに、業と煩惱の固い鎖に縛られ、死などの羅刹を恐れることにより制圧されているからである。それ故にこれらも存在の牢獄から自由になった仏だけに頼るので、心をもつ何れのものも仏などを捨て、他のものに帰依をするであろうか。

「敬礼する (*namaḥ*)」とは、「如来、阿羅漢、正等覺、シャーキャムニに敬礼いたします (*namaḥ śākyamunaye tathāgatāy arhate samyaksaṃbuddhāya*)」などである。すなわち、これらの三十五如来が菩薩行を行じる時に、「我々が無上で完全なる菩提を明らかに完成させるならば、何れかの者が我々の特徴を把握し、彼らの敬礼も業の障碍を尽くしなさい」という誓願がされた。それ故に、誓願による力をもつものであるから、これらは帰依の場所として設定される。「他のものたちに対して敬礼すべきではない」とは述べられていない。

¹⁶ 同じ著者の *Cittotpādasamvaravidhikrama* (D. Nos.3969, 4490, P. Nos.5364, 5403) にも「このような名前の私は」と述べて三宝に帰依することが述べられている (D. Gi 245a4-b2)。また、*Āpattideśanāvidhi* (D. No. 3974, P. No. 5369) にも懺悔の最初に自分の名前を述べることが記されている (D. Gi 255a4)。

そのうち「如来 (tathāgata)」は、諸法の真如を理解し、そこに行ったものである。

「阿羅漢 (arhate)」に関して、ara は敵とか車輪の幅であり、それを征圧し、破ることが han である。煩惱である習気をとめない、また不生の法を伴うことをなすことで縁起の車輪の幅を破るので「阿羅漢」と言われ、すなわち arahan である。また応供でもある。何故ならば、三界のすべてにより供養されるに相応しいからである。

完全で、等しくすべてに残すことがないので、仏によりこれらの完全に悟った仏により捨てられ、功德の二大が述べられている。他の功德にも見られる。

「シャーキヤムニ (śākyamunaye)」は、シャーキヤ族の種における能力のある者が生じるので、そのように言われる。

「正等覚 (samyaksambuddhāya)」の知恵は壊れないので、「金剛 (vajra)」である。すなわち、その「蔵 (garbha)」により有身見などに従わないすべての方向を破壊するので、「金剛蔵消伏壊散 (Vajragarbhapramardin)」である。そのように他の [三十五仏] に対しても功德の相に従ってから理に応じて相の意味を懺悔すべきである。すなわち、無限の功德によりそれぞれにすべての特徴を述べてもその特徴が存在するので、自己の喜びの罪悪になることを恐れるべきではない。

勸請は、「彼らに対して (evampramukhā)」などと言われている。「世尊 (bhagavanto)」は、過失を征圧し、吉祥などの功德をそなえた者である。「あらん限りの (yāvantaḥ)」とは、残らずということである。「住し (tiṣṭhanti)」と「生活し (dhriyante)」と「おすわりになっている (yāpayanti)」とは、順序通りに法身などの三つによることである。「私のことを護念して下さい (māṃ samanvāharantu)」とは、心をこめてお願いすることである。自分でお願いをする在り方と同じであるが、無忘失の法性を得ている諸仏は夜でも一人の衆生のことも護念しないことはない。

そのような際に衆生たちは輪廻のこれらの軽い苦から何故に救出をなされないのか、と言うならば、衆生たちは各自の罪過であるから。例えば日輪は輝きをもつ光によりすべての方向に広がり、近くにあっても盲者たちにより見られないように。それから『宝光明経』にも、

盲者により太陽は見られなくても、それは存在しないのではなく、世間においてあまねく輝いている。眼をとまなうことで輝くことを知ることになってから、すべてにもそれぞれにおいて自らの業として作用する¹⁷。

¹⁷ Ratnolkadhāraṇīsūtra. Tib. P. No.472, Chin. T. No.299. ただし、同経にこの引用文は確認できていない。

などと言うこの意味が詳しく説かれている。

それらの対境の何れかに懺悔すべき障碍の存在が、自分がなしたものなどである。「私により (mayā)」とは作者である。「この生と無始無終の生 (asyām jātāv ... jātiṣv anavarāgre jāti)」とは、なした時である。「輪廻を転生する時に他の生じる場所 (anyāsu vā ... saṃsāre saṃsaratā)」とは、なした場所である。行った罪の自性をまとめて説いたものが、「過犯の行為 (pāpakam karma)」などと言われている。すなわち、いかなるものもあてはまる。苦の根本となる「業を自分でなしたものと、他者にさせたもの (kṛtam syāt kāritam vā kriyamānam vā)」とは、そのようではなくても、なしたことを喜ぶことにより「随喜すること (anumoditam)」とさまざまな重い異熟が「塔の宝や (stūpikam vā)」などと言われる。与えられないものを取るものの中の重いものは、与えるものたちは、信をもつものたちにより八大住処などの塔のために与えられた財具や、「四法の僧 (caturdiśam saṃghikam)」のすべての所有するものやそれぞれの人の自分のものとなされないものを「奪うこと (apahṛtam)」などである。彼らは三種の悪生、悪趣の間にも苦に耐えられずに領受して、浄化しがたいので、異熟が重いのである。

辛苦の罪過の相続が、「[五] 無間業 (pañcānantaryāṇi)」などと言われる。すなわちこれらの父親を殺すことなどを誰かがなしたことなどは、とても耐え難い苦に墮ちる無間地獄は、他の地獄より苦が特別なものになって生まれ、誰にも間断による境目がないのである。それ故に、これらが「辛苦の罪過の原因」とも言われる。

すべての根本によりまとめられた不善が、「十不善 (daśakuśalān)」などと言われる。すなわち三悪趣の何れかに異熟することを領受する身体などが一切の根本の業であり、身体に依存する殺生などの三つと、口に依存する妄語などの四つと、意に依存する悪意などの三つによるものが¹⁸、一切の根本に集められた「[十] 不善業道を集めたものである (daśakuśalān karmāpathān samādāya)」と言われる。

それらより異なるその障碍と共通なものが、「何らかの業の障碍 (yena karmāvaraṇena)」などと言われる。

それらも何れかをなしたならば、自他の利益を完成することに効力がなく、間断する生を受け入れるとは、

地獄と餓鬼と畜生と野蠻人と無想天¹⁹と邪見と仏を求めない者と聾啞者²⁰の八難

¹⁸ チベット語訳のテキストは、ここを「意に依存する悪意などである。それら三つによるものが」と読んでおり、この「三」を身口意の三業と解釈したようである。

¹⁹ 「菩提過犯懺悔」では、「無想天」はなく、「長寿天」が述べられており、著者か訳者による誤解がある。

処²¹である²²。

と説かれているそれらに生じるであろう業²³である。深い教えを捨てることと、微細な過犯を把握しないことと、貪欲により財物などに執着して僅かなものも捨てずに集めることと、仏などを敬わないことと、巧みでない方法により無想定を作意することと、他者の眼根などを離れることと、邪見に従う主張と、浄化されていない誓願とである。機に応じてさらにまた計算を超えたとても微細になるものが、「それらすべて (tat sa evam)」である。

それらの事物をそのように懺悔することが、「仏世尊 (buddhānām bhagavatām)」などと言われている。すなわち、諸仏は明らかにされて、告白などがされ、後に制御する者である。そして「了知者 (jñānabhūtam)」とは、如実の相である勝義と如量の自性としての世俗における一切智の本質をもつものである。「眼になった者 (cakṣubhūtānām)」とは、五眼を清浄にする知者である。「保証人 (sākṣibhūtānām)」とは、すべての意味を誤解しない知者である。「量者 (pramāṇabhūtānām)」とは、その根となったものであるから。「智者 (jānatām)」とは、知恵による[者である]。「観察者 (paśyatām)」とは、御眼による[者]であって、それら者の「御眼の前において (agrataḥ)」である。また「『六神通と合わされる』とある者が説明している」と知られている。「懺悔する (pratideśayati)」とは、自分の側により「これをなした」と内に述べることである。それらに罪過の多くの相を見て、心に従わないものを把握してから罪過をもつことを示すのが、「発露する (āviṣkaromi)」ことである。「隠すことがない (na praticchādayāmi)」とは、自分がなした罪を他者が感受することで、「来る」と思ってからその方法を作意するのではない。

「今後も制御する (āyatyām saṃvaram)」とは、対治によりあまねく把握することである。以前のものに従って入るのではなく、相続のすべてから中断することである。それらによりとは、自分がなし、懺悔する罪業である。

尽きることになる四力も説かれている。依止力と、悔過力と、対治力と、制止力である。そのうち何らかのものに障碍を懺悔する所依である三宝と如来に帰依することと敬礼することが依止力である。なされる異門を考察し、多くの過失の生じる場所を把握してから後悔することにより自分が過失をもつことを述べたものが、悔過力である。それ

²⁰ 「菩提過犯懺悔」では、「聾啞者」ではなく、「根が完全でない者 (indriya-vikalatām)」とある。

²¹ 「菩提過犯懺悔」には、この語 (mi khom gnas brgyad) は述べられない。Cf. MV, Nos. 2298-2306.

²² 七音節からなる偈頌の形態で書かれており、「菩提過犯懺悔」の文というよりは、いずれかのテキストの詩の引用であろう。

²³ デルゲ版は「場所 (gnas)」とする。

ぞれの対治を作意することで〔過失を〕生じなくすることが、対治力と制止力である。それら四力作意し、決心してから読誦したならば、諸業障は完全に薄くなるであろう。

例えば、マイトレーヤは、これらの四法は、なされた罪や集められたものを完全に薄くするであろう。四とは何かと言えば、依止力と、悔過力と、対治力と、制止力である。それにより罪業を尽くそうと望む菩薩たちがこの經典をたくさん思うだろう。〔それを〕読誦するだろう。

とお説きになられているように。

そのように業の障碍を告白してから、今度は自分がなした諸善根を真実の廻向により把握していないことにより、結果は存在しないか、あったとしても少しなので、存在の大海を越えるために諸善を廻向するべきである。それにより鋳床から作られた金の束を巧みな金属細工人が飾りを作るならば、自分と他者とに必要な支分となるように、望まれる通りの結果になるであろう。そのうち何れかの前で廻向をする者に請願することが、「仏 (buddha)」などと言われる。何れかの廻向される善が、「私により (mayā)」などと言われ、すなわち「私を (mām)」などと言うものは前の通りである。

善の本質は三種である。すなわち、布施から生じたものと、戒から生じたものと、修習から生じたものとである。

そのうち布施から生じたものは、「布施さえも〔与えよう〕 (dānaṃ dattaṃ bhaved antaśas)」などと言うものである。すなわち大きくなる布施の器となった者に対する法の布施と、恐怖を恐れぬ布施と、慈愛の布施と、物の布施という事物を眼などから完全に与えることと、特別に勝れている者に外界に成立する衆生により集められた子供などを与えることと、それ以外の者が四洲などを与えることと、王位とその半分と国・地方・村など〔を与えること〕と、食べ物と飲み物などを与えることと、「畜生までの生処に生まれた者に食べ物を一口だけ与える (tiryaḡyonigatāpy ālopaḥ)」ものまでである。すなわち対境と事物がとても少なくなっている。

戒より生じた善は、すべての乗において別解脱の律儀により集めたものと、具足戒を受けてから優婆塞までの共通の「戒律を護ること (śīlaṃ vā rakṣitaṃ bhaved)」である。出家に属するものだけは、「梵行だけに住ること (brahmacaryavāsa)」である。菩薩のみに関しては、「衆生を完全に熟させること (sattvapariḡka)」と、「菩提心

の善根 (bodhicittakuśalamūlam)」であって、ヨーガ²⁴により衆生を熟させることと想により菩提心を完全に捨てることがないものだけが菩薩の戒を浄化しているからである。そのようであれば、十善業道を一千万劫のみにおいて不善の機会をなさなくても「戒を浄化している」とは言われず、想とヨーガをそのように精進すれば、五欲楽と混ざった行も「戒を浄化している」と述べられる。そのようなものも、世尊母に、

何れかの菩薩が五欲楽を行じても、仏と法と聖者のサンガに帰依をする。仏となることを思って一切智を思うならば、賢者は戒波羅蜜の場所を知るであろう。

もし一千万劫にわたって十善業道を浄化しても、阿羅漢や独覚を望むことが生じるならば、そのときに戒に過失が生じ、戒を損なっている。その発心は根本悪によりもさらに重いものである。

と説かれている。これも他者の利益が最高なものになっているので、最高のものとして設定されているが、自らの利益を求めているのではない。

修習から生じたものは「無上なる知恵の善根 (anuttarajñānakuśalamūlam)」と言われている。すなわち無上なる知恵は、一切相智である。世俗により集められた存在する限りのものと、勝義に集められた存続する限りのものをすべて知る者は、声聞などのすべてよりも特に勝れている。それは諸法の自性は空たるもので、幻のようなものであると修習してから生じたものである。それらを修習することが特に勝れているならば、一切の戲論が中断させられる。無自性が明らかに正しく成立してから、いかなるものも見ることがない在り方により諸法は自性を欠くものというような対境とするものと、幻のような対象である虚空と同じである原因と結果により集められた一切の法は、掌の上のオリーブのように障碍の垢を捨ててから明らかになる。それ故に、軌範師シャーンティデーヴァも、

煩惱と所知の障碍の闇の対立項が空性である。すぐに一切智を求めるものは、何故に、それを修習しないのか²⁵。

と一切智の原因として空性を修習することが説かれている。

そのように布施と戒と修習から生じたものすべてを廻向するべきである。どのように廻向するのかと言えば、廻向の相は一つにまとめられ、廻向の相は「一つにまとめて

²⁴ Tib. D.: sbyor bas, P, G. sbyin pas.

²⁵ Bodhicaryāvatāra 9.55.

(**aikadhyam piṇḍayitvā**)」などと言われる。そのすべてを知恵により一つの方向にすることであって、他のものより特に勝れた相による。それを一つにまとめたものが自性の門からである。「一緒にされたもの (**tulyayitvā**)」は、行為の門からである。「集められた (**abhisamkṣipya**)」とは、効力の門からである。「無上 (**anuttarāyām**)」などの三つは²⁶、声聞や独覚や菩薩より特に優っているもので、そのように廻向する。何らかのものに廻向することが、「無上」などと言われ、その状態である。いかなる方法により廻向するのが、「例えば (**yathā**)」などと言われ、「過去 (**atītaiṛ**)」などの廻向がどのようになるのかである。さらにまた仏世尊が諸善根は真実としては存在しないという正知を面前になしてから、それらの善根と廻向する心と何れかのものに廻向される無上菩提も勝義の相は僅かばかりも取らずに、衆生の為に無上菩提において廻向なされたそのように、「私により廻向をする (**athāham api pariṇāmāyāmi**)」とか、「そのような方法を自分が明らかにすることができなくても、仏世尊が善根をそのように廻向するように、自分のこの善根も廻向する」というその在り方のように廻向されるものが、仏により完全に与えられた方法をもつ廻向である。

そのように罪の懺悔と善を廻向することを説いてから大菩提を得る方法をまとめて述べたものが「一切の罪をそれぞれ懺悔します (**sarvaṃ pāpaṃ pratideśayāmi**)²⁷」などと説かれている。すなわち存在の牢獄をさまよい、大菩提を得ない原因は、自分で罪業を集めることと、他の善に憤怒することと、仏の説法がなく、それが世間に存続しないことと、誓願を反対に設定されることと、仏を敬わないことと、その帰依を離れる行為である。それらの過犯を順序通りに懺悔することなどにより大菩提を得るであろう。それ故に、軌範師ヴァスバンドゥも、

大菩提を得る原因はすべての罪をそれぞれ懺悔することである。一切の福德の随喜である。仏に請願することである。「自分の無上なる知恵の最高を獲得なさい」と言われる²⁸。

と説かれている。前に解説したように、四力の門から自分がなして集めた罪を懺悔することと、有漏と無漏の諸善をなす想により特に勝れている喜びを得ることと、仏世尊の何れかの法輪を廻さずに心にとめて励むことと、涅槃を普く説くものたちに対して諸有

²⁶ 「菩薩過犯懺悔」のチベット語訳は、“bla na ma mchis pa dang / gong ma mchis pa dang / gpng ma'i yang gong ma”とあるが、サンスクリットのテキストには“anuttarāyām samyakṣambodhau uttarottarayā pariṇāmāyām”とあり、第二項を欠いている。

²⁷ 『集菩薩学論』では、この句を欠いている。

²⁸ 出典箇所は確認できていない。

情のために法輪を廻すことと、涅槃せずに無数劫にわたりおられることを請願することと、何れかの善をなしたことにより自身の知恵の最高である一切相知を誓願することである。諸仏に合掌することが敬礼することであり、救護として近くに現れることは、すべての怖れの依護として把握することで、それにより諸仏を尊敬し、帰依処として把握する。

それらにより他の經典に「三つの束」と説かれているものもまとめられている。罪を懺悔するとは、懺悔の束である。すなわち善根を廻向するとは、廻向の束である。大菩提を得る方法により罪を懺悔することによる。「随喜 (anumodanā)」は廻向の支分であって、随喜の善を廻向することによる。「勸請 (adhyeṣaṇā)」は勸請の束である。誓願をすることは廻向の本質である。敬礼と救護として把握されるものが、所依力であって、罪を懺悔する束に集められる。彼らが決心してから昼に三度、夜に三度中断せずになしたならば、その菩薩の業道の諸障碍が尽きてから望む結果が明らかになるので、これを精進すべきである。軌範師シャーンティデーヴァも、

朝夕に三度三つの束を繰り返すべきである。勝者と菩提心に頼ることにより罪の残りが寂滅する²⁹。

と説かれている。例えば、菩薩の業の障碍がこれにより浄化されるように、他のすべての者も過犯を法に従って元に戻してから業の障碍の残りをこれによりまさに浄化すべきである。他のものたちで業の障碍を尽くすことを望む者で適切なものは誰もがこれを精進すべきである。そのようならば、業の障碍は尽きるであろう。仏世尊は過失を残らず根絶して、誤りなく理解する知恵をもち、大慈をもち、他者の苦を取り除くことを望む大我であるので、これには僅かな疑惑も存在しない。何故ならば、虚妄をお説きになることはあり得ないから。

浄化する対象ではない大きな欲望を、自利と利他の面で、自分の側でなした過失から賢い人たちは耐えることをなす。

これをなしてから福德である金剛三昧を得た者は、すべての輪廻の厚い無明を後に取り除きなさい。

『業障清浄儀軌解説』という軌範師ディーパンカラシュリージュニャーナによる著作

²⁹ *Bodhicaryāvatāra* 5.98.

を完成する。

そのパンディタ自身と翻訳官である比丘ツルティム・ゲルワが翻訳した。

第5章 『入菩薩行論釈』

はじめに

Śāntideva により著わされた『入菩提（菩薩）行論 (*Bodhi(sattva)caryāvatāra*¹)』はインド、チベットにおいて広く読まれ、チベット大蔵經に収められた注釈書は十を越え、インド仏教史において最も多くの注釈書²が著わされたテキストの一つである。ここでは、そのうちDīpaṃkaraśrījñāna³ に帰され『入菩薩行釈 (*Bodhisattvacaryāvatārabhāṣya*⁴)』に関する考察を試みる。

本論に入る前に、彼の他の著作と『入菩提（菩薩）行論』との関係を見る。伝記資料からは、彼が実際に同論の注釈書を著わし、その講義を行ったとの情報は得られない。彼の多くの著作は偈頌よりなる短いテキストなので直接の引用はそれほど見られないが、その内容から同論から多くの影響を受けていることは明らかである。『菩提道灯論細疏⁵』や『中観説示開宝篋⁶』には『入菩提（菩薩）行論』のみならず、『集菩薩学論』からの引用も多く見える。また、自らの師とされる Dharmakīrti (gSer gling pa) による『入菩提（菩薩）行論』の二つの注釈書⁷の翻訳者でもあることから、彼にとって同論は重要な文献であることが確認される。

『入菩薩行釈』の構成

『入菩薩行釈』に引用される『入菩提（菩薩）行論』の本偈は、その最後に九章から

¹ 同論のテキスト伝承の問題点に関しては、斎藤 1994 等を参照。

² 江島 1966, Pezzali 1968: 59-61 を参照。後者は Dīpaṃkaraśrījñāna の *Bodhisattvacaryāsūtrikṛtāvavāda* をあげるが、Eimer 1981b: 73-74, Seyfort Ruegg 1981: 85 の指摘のように、*Bodhi(sattva)caryāvatāra* に対する注釈とは言えない。

³ Eimer 1997: 10-12.

⁴ テキストはチベット大蔵經でも、北京版 (No. 5873, Nyo 426b2-463a4)、ナルタン版 (No. 3864, Nyo 399b2-435b3)、金写版 (No. 5873, Nyo 521a1-567a5) に収められているが、デルゲ版とチョネ版には収録されていない。テキストは、本文とは別に小文字による補足が挿入されている。これが何時、誰により補われたのかは不明であるナルタン版と金写版とはほぼ同じ箇所。挿入されるが、北京版は点線により示される補足箇所は同じであるものの、その挿入位置が異なる事例がある。このことから、大蔵經に収められる時点では、この小文字の部分は本文と異質のものと考えられていたことが判る。訳語では、サンスクリットの *loka, duḥkha, śīla* はそれぞれ *lo ga, du kha, si la* と音訳されており、*radna (ratna)* という例もある。金写版の特徴として、*-gs* を *-ḍ* と、*nyams su* を *nyamsu* などとする例がある。冒頭の偈頌は、斎藤 1986 に和訳され、コロフォンは、Chattopadhyaya 1967: 470-471 に英訳されている。

⁵ Eimer 1987: 177-188.

⁶ 同論では、「先行する師」に関して「軌範師 Candragomin と Śūra と Sāgaramegha と Śāntideva と Luntaka (?) などは発心直後の初学者のために四無量と四摂事と波羅蜜などをその通りに行う最高の行の著作を詳しく著わされた」という記述が見られる。

⁷ Eimer 1981b に、両者のテキストに関する報告がなされている。その 78 頁に指摘される十一と三十六の主要義 (*gtso bo'i don*) に関して *Bodhisattvacaryāvatārabhāṣya* への言及を示唆するが、同論にはこの二つの数字は出てくるものの解答は得られない。ただし *gtso bo'i don* に関しては、*Bodhi(sattva)caryāvatāra* の各章に説かれる意味を一語にまとめた十の主要義が得られるが、これとの関係も不明である。

七偈が引用されるのみで、これらの偈に対する注釈は行われない。そこにおいて言及される『入菩提（菩薩）行論』はその章のタイトルのみであり、修行道や十地のそれぞれの段階に各章とその十の主要義が配列されるだけである。

『入菩薩行釈』の構成は、大きく二つに分けられる。その三分の一ほどの場所に「*Suvarṇadvīpa* の師の意図を転じない *Dīpaṃkaraśrījñāna* により述べられたものを完成する」という句が挿入され、続いて「聖マンジュシュリー菩薩に帰依をする」と敬礼文が再び述べられている。続く部分には、前半の内容との重複が見られる。このことから前部と後部が連続する一つのテキストを構成するとは考えられず、独立して伝わった二つのテキストがいずれかの時点で一つにまとめられたと考えることも可能である⁸。以下に概略を示す。

I 第一部

0 Akṣayamati に対する Mañjuśrī の偈とその注釈⁹

[*Abhisamayālaṃkārikā* 8.33, 34]

1 最初の輪が廻る

各章の主要十義：(1) 想、(2) 意樂、(3) 誓願、(4) 鎧、(5) 入、(6) 忍、(7) 証得、(8) 資糧、(9) 結果、(10) 利他

2 二度目の輪を廻す

2.1 世間の十地

(1) 種姓地（第一章）、(2) 律儀地（第二章）、(3) 聞地（第三章）、(4) 止觀地（第四章）、(5) 後方より転じる地（第五章）、(6) 麁相が生じる地（第六章）、(7) 極微の地（第七章）、(8) 無相を形成しない地（第八章）、(9) 衆生利益を形成しない地（第九章）、(10) 三昧における自在地（第十章）

2.2 出世間の十地（四道）

2.2.1 順解脱分

2.2.1.1 小の資糧道：四念処

2.2.1.2 中の資糧道：四正断

2.2.1.3 大の資糧道：四神足、四禪

2.2.2 順決択分 加行道

⁸ この仮説が正しいのならば、前半と後半に共通しないテキスト冒頭と末尾の Akṣayamati と Mañjuśrī との問答に関する部分は、二つのテキストを結び付けるものとして後に作られたものか、それとも、これを根拠に一つの連続するテキストと考えるべきか。

⁹ 偈に「中には十一、上には三、下には三十六」とあるが、輪廻から涅槃へ行く方法という以上は、何を指すか述べられない。十一と三十六は gSer gling pa の二つの著書のことであろう。

煖：五根の影像、頂：五根の完成、忍：五力の影像、世第一法：五力の完成
[不退転の有学道、到彼岸の無学道]

2.3 十地

(1) 歓喜地（「想」第一章）、(2) 離垢地（「意楽」第二章）、(3) 発光地（「誓願」第三章）、(4) 焰慧地（「鎧」第四章）、(5) 難勝地（「入」第五章）、(6) 現前地（「忍」第六章）、(7) 遠行地（「証得」第七章）、(8) 不動地（「資糧」第八章）、(9) 善慧地（「結果」第九章）、(10) 法雲地（「利他」第十章）

3 否定されるものの排除

3.1 小の資糧道

想：嫉妬や罵言、意楽：声聞や独覚などの誤った道、誓願：忘れること、鎧：随眠、入：劣乗の慧

3.2 中の資糧道

忍：能、証得：極微

3.3 大の資糧道

資糧：無相を犯す、結果：衆生利益を考慮しない、利他：断見

II 第二部

0 十九度廻す¹⁰

1 七つの世間道¹¹

1.1 小の資糧道：四念処

1.2 中の資糧道：四正断

1.3 大の資糧道：四神足

1.4 煖：五根の影像

1.5 頂：五根の完成

1.6 忍：五力の影像

1.7 世第一法：五力の完成

2 十の出世間道¹²

2.1 十地

¹⁰ 四道を、次のように、三智と五道と合わせられる。

順解脱分	聞・思	大中小の資糧道
順決択分	修	四決択分
有学の不退道	修	見道・修道
無学の不退道	修	究竟道

¹¹ 世間の四道出世間の十地の、それぞれにおいて *Bodhi(sattva)caryāvatāra* の各章における十義（想・意楽など）を、四道（加行道、無間道、解脱道、解脱智の見道）を伴って修習することを述べる句が繰り返して述べられている。

¹² 十義と四道、十地の語義解釈では、*Daśabhūmikasūtra* の各章からの引用が続く。

2.2 喩例（十山王・大海・マニ宝¹³）

3 法身と色身の二つ

3.1 色身：第一章から第七章¹⁴

色身を得るための四道の修習（菩薩：受用身、声聞と独覚：変化身）

3.2 法身：第八章から第九章

法身を得るための四道の修習 [*Bodhi(sattva)caryāvatāra* 4.33ab]

3.3 知識を中断すること [*Bodhi(sattva)caryāvatāra* 9.35-38]

4 まとめ

まとめ

以上の分析から、『入菩薩行積』は『大乘莊嚴經論』などの瑜伽行派において説かれる修道論¹⁵と『十地経』に説かれる十地の修行階梯に基づいて著わされたことは明白である。前者に関しては、その修行段階をそのまま用いてはならず、『入菩提（菩薩）行論』の各章とその主要義との関連を述べるために著者自身の解釈によりアレンジされたものである。後者に関しては、経典からの文章が直接に述べられており、その分量は『入菩提（菩薩）行論』への言及をはるかに越えている。従って『入菩薩行積』は『入菩提（菩薩）行論』の語句を注釈するものでなく、上記の文献に基づいた修行階梯、特に十地に編入することによる解説を試みたものと言える。

最後に『入菩薩行積』を『菩提道灯論』など同一の著者によるものと断定してよいのだろうか。テキスト伝承、内容の不統一、訳語などから疑惑が生じる。彼が翻訳したとされる師 Dharmakīrti (gSer gling pa) の注釈との関連性もあり、さらに慎重な調査を要する。

『入菩薩行論釈』和訳

『菩薩の行に入る解説』尊者の著作

I 聖者マンジュシュリーに帰依をする。

0 軌範師アクシャヤマティにマンジュシュリーが説明をした。

¹³ 十地の解脱の後に「詳しくは *Abhisamayālaṅkāra*, *Daśabhūmikāsūtra*, *Madhyamakāvātāra* などの論書から知るべきである」と、他の文献への言及が見られる。

¹⁴ *Bodhisattvacaryāvatārabhāṣya* では七章の列挙に続き、「と八つ (*dang brgyad*)」とあり、何らかの八項目を指すとも考えられるが、続いて「八章 (*le'u brgyad*)」とあることから、誤解と考えられる。

¹⁵ 篠田 1987, 1988.

縁の力により車軸が廻り、その力により輻が切り進む。戦車の車輪のように廻るので輪と説明される。

中[根の者]には十一、上には三、下には三十六ある¹⁶。十九とは道の実体である。

道と果は同一である。否定されるものを排除することは三種である。輪廻と涅槃の輪を、善男子よ、あなたは知りなさい。

この言葉に依ってから、軌範師は『入菩提行論』を、輪のような道を作るものとしてお説きになられた¹⁷。それから第一に、

輪廻と涅槃の輪

とは、そのなすべきことを解説するので、輪廻の輪と涅槃の輪である。そのうち輪廻の輪は、縁起の教義に入ることである。すなわち、無明と行から最後の老死と涅槃と悲嘆が生じることに至るまでである。涅槃の輪は、尊者マイトレーヤが、

何であれ有がある限り、有情に対して種々なる利益を等しくなされたその身体は、ムニの化身であり、不断なものである¹⁸。

とお説きになられているので、[シャーキャムニは]あるところでは変化身としてお生まれになり、あるところでは童子としてお遊ばされ、あるところでは明らかに仏となられ、あるところでは身体の涅槃などにより有情の利益をなす。では、涅槃の輪がそのように廻ることにより、いかなる行為をなすのかと言うならば、尊者マイトレーヤが、

輪廻する限り中断しないと認められる。有情たちは、寂靜なる行為と四摂事を設定すること¹⁹、

などとお説きになられている。では、輪廻の輪から涅槃の場所に行く際に、いかなる方法によりなされるのかと言うならば、

¹⁶ これらの要義については、斎藤 2003a, 2003b を参照。

¹⁷ 斎藤 1986: 100

¹⁸ *Abhisamayālaṅkāra* 8.33

¹⁹ *Abhisamayālaṅkāra* 8.34

中には十一、上には三、下には三十六ある。十九とは道の実体である。

と述べられている。では、道の実体であるその十九は何であり、輪のような道を作ったもの自身は何らかによりより設定されるならば、

道と果は同一である。否定されるものを排除することは三種である。

とお説きになっている。では、輪のような道を作ったもの自身はいかなる喩例により示されるのかと言えば、

縁の力により車軸が廻り、それによって輻が切り進む。戦車の車輪のように廻るので輪として解説される。

とお説きになられている。例えば、車輪の狂いを紐で車軸に固定してから家畜や人などが引くことにより車輪が廻り、車輪が廻ることによりいかなる場所に行くことになるすべてにより切り進むのである。その喩例のように、車輪の車軸と同じものが所依の人であり、車輪の軸を紐で固定してから引くのと同じことが縁となる善知識である。車輪の輻を廻してからあらゆる場所を切り進むことと同じものが、『入菩薩行論』の十章における想や意樂などを自ら廻すことにより道先へ先へと進むことである。また、戦車の車輪の軸に紐で固定してから引くことにより戦車の車輪が廻ることにより一切の事物を断じる。その喩例のように、車輪の車軸と同じものが所依の人であり、狂いを紐で引っ張ることと同じことが縁となる善知識であり、戦車の車輪を廻すことと同じものが、その『入菩薩行論』の十章における想や意樂などを廻すことであり、戦車の車輪を廻すことにより一切の事物を残りなく断じることと同じことが、煩惱という捨てられるべきものを残りなく捨てることである。そのように「縁の力により軸が廻る」とは、縁が狂いを紐により車軸に引っ張ることである。軸が廻されることにより車軸が廻るのである。その力により輻が切るので車軸が廻ることにより軸が廻る。それが車輪のような道を作った言葉に入ることを解説したものである[この四つの下部により多く説くことと少しの述べられるべきものより先に解説したその十九から退き、後にする]²⁰。

1 「道と果は同一である」と説かれたのは、誤った考えをもつ人の想において「この

²⁰ テキストにおいて小さな文字で書かれた挿入句 (mchan) については、小さなポイントで [] 内に示すことにする。

『入菩薩行論』により声聞や独覚の道や天と人だけから、結果である無上の菩提が生じることはありえない」と考える[あるいは三乗という種々なる道果が一つであると言うこと]、その誤った考えを否定するために、[道果が一つであると言うこと]輪が一度廻ることにより道果を伴う一つのを示している。

1.1 [最高の目的に関して] すなわち最初の種である所依の尊者マイトレーヤのような一人の人に師シャーキャムニのような方が法を解説することにより、所化の種が熟する。

1.2 それから「菩提心の功德」の章を解説することにより種が次から次へと広がるので想が完全になる。「懺悔」の章は、続いて領受するのでその想も浄化の力により次から次へと他者のために意樂が増える。

1.3 「菩提心の摂受」の章を解説することにより次に身体が加えられ、また[意樂を]損なうことなく彼岸に至るために誓願をなす。

1.4 「不放逸」の章を解説することにより誓願した通りに身口意の三つの鎧を着ける。

1.5 「正知」の章を解説することにより鎧を着けたまま身口意の三つを等しく伴うことにより行に入る。

1.6 「忍耐」の章を解説することにより入ったことを堅固にすることにより忍を得る。

1.7 「精進」の章を解説することにより忍をそなえた精進により次から次へと証得する。

1.8 「禅定」の章を解説することにより証得による波羅蜜の意味を知り、原因の資糧をそなえる。

1.9 「智慧」の章を解説することにより資糧を伴う智慧波羅蜜を直接知覚する。すなわち、何れかになればその結果は明らかなものとなる[勝義の智慧の行境ではないことによる法身と世俗の境となる色身である]。

[1.10] 「廻向」の章を解説することによりそのように明らかになったその法性により、他者の利益が自然に成立し、努力や精進がなくても如意宝や妙なる瓶の成就のように利他が生じる。[誓願の章を解説した] そのことにより輪が一度廻ることによる道果をそなえたものを示したものが完成する。

2 [否定され断じられる三相というもの]

2.1 また誤った理解を持つ人の想においてそのような結果を得ても、世間と出世間の地の順序と境界がないので、その地の現前に成立したものを知らないと思われるものについて、

2.1.1 その誤った考えを否定するために輪を二度回す時に、最初の輪により世間の十地を得る順序と境界が示され、二つ目の輪を回すことにより出世間の十地を得る順序と境界が示されるので、その誤った分別を否定し、排除している。

2.1.1.1 そのうち世間の十地を得る方法を解説したものが、[どこに生じるのかと言えば]

その所依の初学者に想が生じる。〔何に依ってから生じるのかと言えば〕「功德」の章を聞く者がそこにおける種姓であって、〔どのような地に生まれるのかと言えば〕「種姓地」と言われるその種姓により、三乗すべての種姓となる力を持つ者になされる。

2.1.1.2 〔どこに生じるのかと言えば〕それからその所依の人に意樂の想が生じる。〔誰が生じるのかと言えば〕「懺悔」の章を聞く者である。〔どのような地に生まれるのかと言えば〕意樂が生じることにより始まり、「律儀地」とは、その発心と律儀を受け入れる能力がある者になされる。

2.1.1.3 そして、その所依の人が誓願を申し出て、「菩提心の摂受」の章を聞くことによる。「聞地」とは三乗の教えを聞いたり、思ったりする能力を持つ者に生じる。

2.1.1.4 そしてその所依の人が鎧を着け、「不放逸」の章による。「止観地」が生じる。すなわち、分別の映像、物質、声、臭、味、業も生じ、無分別の映像や法性は戯論を離れている、という認識を何度も思うことである。その二として生じる認識を起こす者になされる。

2.1.1.5 それからその所依の人に入の想が生じ、「正智」の章を聞く門からである。「後方より転じる地」とは大乗の種姓に確定した人になることである。

2.1.1.6 それからその人に忍の想が生じ、「忍」の章を聞く門から、「僂相が生じる地」というものは、「最初の把握の認識」と言われる眼が物体を把握し、耳が声を把握するなどという分別を離れて、僅かな部分にしてからほとんどの対象に放つことより転じて、勝ち得た者になされる。

2.1.1.7 それからその所依の人に証得の想が生じ、「精進」の章を聞く門からである。「極微相の地」とは、把握する認識である眼が物体を把握し、耳が声を把握するなど全く捨て、尽きてしまったその人が禪定におられる時にである。

2.1.1.8 それからその所依の人に資糧の想が生じ、「定」の章を聞くことによる。「無相における明らかに無為なる地」とは把握される外的対象における分別と把握する内的心における分別の両者を三昧の時に全く捨ててしまった者になされる。

2.1.1.9 それからその所依の人が結果の機会に成立し、「智慧」の章を聞く門からである。「衆生のための明らかに無為なる地」とは、三昧の門より空性が大部分であるので、後得の衆生における対象は僅かな部分である。

2.1.1.10 それから所依の人が利他として成立し、「廻向」の章を聞くことによる。「三昧における自在地」とは、三昧を空性として修習してから、それより後に得た時に輪廻する衆生を認識してから、勝義において一切の衆生は空で無我というその通りであるが、世俗においては幻として輪廻する衆生たちは迷乱の力により現在地獄などにおいて苦しんでいるので、彼らをその苦しみから離れさせようと望む慈愛と、地獄の冷熱などを

知覚する慈悲が生じる。そのように慈愛と慈悲を等しく備えたものが生じてから、輪廻する者たちに対して慈悲が自然に生じ、その時に利他をなすことを精進する必要はなく、自然に生じるのである。そのようにその十の低い心が世間の十地に行く次第である。

2.2 今度は、出世間の十地に赴く次第を解説するならば、第一にその所依の人の種が言う通りの種ならば、結果に適するこの種姓は第二無垢地において、獅子威禅定により後得の有漏と禅定の無漏を区別無く完成させる種姓である。では、初地をなしたものをまとめれば四道であり、順解脱分の道と順決択分の道と退くことのない有学道と〔まとめれば七種の不退転の有学の後に不退転の無学が結果である三地であるが、ここでは有学は十地で無学を仏地とすると言う〕彼岸に至った無学道とである。

2.2.1 そのうち順解脱分の道とは、小中大の資糧道である。〔その四種の資糧道の自相と共相を智慧により考察して、見たものを記憶により明らかに保持し、記憶が大部分なので四念処である〕そして、小さい資糧道の時には四念処で、中の資糧道の時には四正断で、大きな資糧道の時には四神足である。

2.2.1.1 さらに詳しく説明すると、小さな資糧道において四念処が続けてどのように生じるのかと言うならば、

2.2.1.1.1 「身念処」とは、外道がこの身体を清浄と把握した後に、それから転じて不浄なる三十二の実体として理解することである。

2.2.1.1.2 「受念処」とは、外道が受を楽と知り、執着した後に、それより転じて受は楽と苦と中立との三つと考察し、その三つも無常であると知り、理解することである。

2.2.1.1.3 「法念処」とは、外道が一切の事物の存在を常と見て、それより転じて事物の一切の存在は幻の如くと知り、理解することである。

2.2.1.1.4 「心念処」とは、外道が心は常で、堅固にはならないと見ており、それより転じて心を三時において知ることである。すなわち三時において知るので、過去の心は滅し、滅び、未来の心は未だ生じず、現在の心は滅に向かうと知ることにより、無常で、不堅固と知り、理解することである。それが小さい資糧道の時に生じる在り方である〔これらも「念処は智慧である」と言うことで智慧としては一つであっても属する門から四種に区別されるように、捨を努力して神変に満足するので *miti* と言う〕。

2.2.1.2 今度は、中なる資糧道の慧が生じる在り方は、四正断が続けて生じるものである。四正断とは、まだ生じていない善法を起こすことと、すでに生じた善法を正しく見ることと、すでに生じた不善なる法を正しく断じることと、まだ生じていない不善法を起こさないように護ることである。同じことを詳しく説明すれば、まだ生じていない善法を起こすことは、資糧を集めることである。すでに生じた善法を正しく見るとは、学ぶべきことを熱心になすことである。すでに生じた不善法を正しく断じるとは、罪

を浄化する七支の方法などである。まだ生じていない不善法を起こさないことは律義を護ることである。以上が、中なる資糧道が続けて生じることである。

2.2.1.3 その次に大きな資糧道の時には、四神足が続けて生じるであろう。四神足は何かと言えば、欲神足と精進神足と心神足と思惟神足とである。

2.2.1.3.1 同じことを詳しく説明すれば、「欲神足」とは、[足に依ってから行き来をするように、mamati に依ってから神変が来るからと言う]、三昧を望む信がとても大きいことである。

2.2.1.3.2 「精進神足」とは、三昧が生じる助伴が他の加行により中断せずに生じることである。

2.2.1.3.3 「心神足」とは、精進により助伴を起こした後に完成するので、心業に適應する。

2.2.1.3.4 「思惟神足」とは、尋伺の門から四禪定が続けて生じることである。四禪定が続けてどのように生じるのかと言えば、

2.2.1.3.4.1 欲界のこの不定心によりにより初禪を修習する時に、[尋伺に依ってから欲の罪過を知ってから捨てることである] 智を一境におくことにより覚知が生じ、一境におかれたこの智を沈み込みから集め、昂りから集め、心に尋が生じる。それから伺が生じる。沈み込みの区別は、睡眠や昏睡などによる沈み込みで、昂りの区別は物質や声や臭いや味などを広げて思う伺が生じることである。それからそのように尋伺として生じるその智自身も否定した後で、六根の門を否定してから六境における原因を切り捨てた後、修習のその智の一境のなかに喜と樂が生じる。身体の樂とは、快く起きることと身体が輕快であることなどであり、心の喜とは、以前に領受したものを楽しむことである。その領受も、衆生界における低い部分の者が量れば無分別に似たものに適する分別を伴う智が麁を滅してから、無分別の樂なる意が生じる。そのように初禪において一境とで一つ、尋とで二つ、伺とで三つ、喜とで四つ、樂とで五つが生じる。その五つの法がそのように生じても、その初禪の樂は尋伺が先行してから生じるので[これ以後は火により滅する原因もそれである]、初禪は「火の如き禪定」と言われる。

2.2.1.3.4.2 それから、第二禪を修習する時、初禪の尋伺の二つにおいて智が一境の内部における喜樂や「内淨」と言われるその喜樂を明らかにし、無分別の自性として生じる。そのように第二禪において喜と樂と一境と内淨との四法の本質を完成する。そのように、その喜樂は、内淨の本質により水が汚れないように、明らかに分別せずに生じるので、第二禪は[これ以後は水により滅すると言う]「その喜が水のような禪定」と言われる。

2.2.1.3.4.3 それから第三禪を修習する時、第二禪を修習するその喜樂も病氣や膿や痛みのように見て、捨てるから、その識の一境の内部において、その内淨明の無分別により

有漏の定をなすことが生じる。有為なる事物の一切法を白などの色や四角などの形や、概して把握する対象の部分に属するものや、それを把握する知覚を把握する部分に属するものすべてを等しいと知る捨として生じるものが有漏の捨である。そのように有漏の捨が生じる時に、内浄であるその智慧の部分が有漏のすべての法を刹那の瞬間に動く風のようなその知恵により等しいものとして捨すので、第三禪は「動く風のような禪定」と言われる〔風により滅する〕。

2.2.1.3.4.4 それから第四禪を修習する時に一境にあり、その内浄の智慧により第三禪の有漏の一切の法たる一多の苦勞を伴って捨すので、この第四禪の時に無為の捨をなすことが生じる。すなわち、第三禪のように所縁の対境や努力なしに名称や言葉や文字などの分別はいかなるものも生じず、すべてのものが等しく、不動のすべての分別が沈む捨は堅固で、変化しない。〔煙などは何によっても食べられない〕禪定において損害の受は何によっても起こされず、揺らすこともできず、虚空の輪のように分別が生じるので、第四禪は「変化のない虚空のような禪定」と言われる〔これから生じるので滅しないと言われる〕。その四禪定が思惟の神足から生じる。それから大きな資糧道にあるものが続けて生じる。

2.2.2 そのようにその資糧道の究極の至る者により加行道である順決択分の四つが続いて起こされる。四順決択分とは何か、と云えば、煖と頂と忍と世第一法とである。それらは順序は続いてどのように生じるのかと言うのならば、例えば、火が発生する時に薪が摩れて最初に煖が生じる。それから煙が生じる。それから火花が生じる。それから火が大きくなる。その喩例のように上の世界の〔心の〕法界は戯論を離れていると認識しながら修習による暖かさと同じ煖〔顕現を得る三昧〕を得る。煖を得てからその法界に戯論を離れた識をある者は向けることができ、ある者は向けることができないと固定することにより、例えば、樹の先端が動くのと同じなので頂〔顕現する宝の三昧〕が生じる。その動く時に増大し修習することにより〔前のものにより忍が説かれるので〕火花と同じ忍を〔真実の一方を恐れずに〕得る。大きな火がついて燃えるなどの作用と同じく世第一法〔その直後のsamati〕が先に生じ、まだ得られてない法性が続いて生じることにより首楞嚴三昧や宝印や力莊嚴などの三昧を得る。そして順決択分の時にいかなる法といかなるものが続いて生じるのか、と云うのならば、煖の時の五根の影像と、頂の時の五根の完成と、忍の時における五力の影像と、世第一法の時における五力の完成とである。

2.2.2.1 そのことを詳しく解説する。まず煖の時に五根の影像はどのように完成するかと言うのならば、〔その業と宝への知が堅固な時にわずかでも意が動けば信解しない〕信根と〔熱心に鎧を着れば精進があり、着なければない〕精進根と念根〔慣れている事物を思

えば念であり、思わなければ不念である]と定根[入定すれば一頂に住し、しなければ住さない]と慧根[法を区別する時がないので]とであり、それが五つの影像として完成する。

2.2.2.2 頂の時に五根が完全になる。そのうち「信根」とは、業と三宝に対してすべての時と機会に信解することである。「精進根」とは、完成した直後に完成することを何らかの[それぞれの]縁により中断させないことである。「念根」とは、混合した事物である菩薩のすべての学処を忘れずに記憶していることである。「定根」とは、上になしたものが適当であるとか、なされないのが適当であるのか一心に学ぶことである。「慧根」とは、三昧から生じる不可言説で障碍の無い量ることのできない影像が続いて生じることである。

2.2.2.3 「忍の時に五力の影像が完全になる」の、「信力」とは、[これらの信などを長時にわたり修習することで不信などによる中断がなされず、信などの力を起こすので信力などと言われる]信解の原因たる見や疑惑の無量なる区別が存在し、それらのある者は克服でき、ある者は克服できないので、固定していない。「精進力」とは、懈怠と同じ行為で、ある者は克服でき、ある者は克服できないものである。「念力」とは、失念のある者は克服でき、ある者は克服できないことである。「定力」とは、心の散乱のある者は克服でき、ある者は克服できないことである。「慧力」とは、痴や無明の闇のある者は克服でき、ある者は克服できないことであり。

2.2.2.4 「世第一法の時に五力が完全になる」と言う、「信力」とは、無信で信解しない者たちを一切の相において調伏させ、捨すその能力のように、五つをある者は安立することなく捨てることができる。そのように四順決択分に住する所依の人にその法が生じる。そのように世第一法の時にその五法が続いて生じ完全になる際に、そのように順決択分の修道であっても、修道によりそのように修習するので、首楞嚴三昧などが生じ、見道が生じ、仏の無分別の心が続いて生じ、見える。

2.3

2.3.1 そのように歓喜地が生じるので、初地が「歓喜」と言われる。そのことを『入菩薩行論』と合わせれば、その類と同じ一つのを、今ある者は「所依の人」と言う。そして「功德」の章を続けて修習して得るので、主要義に関しては「想」が生じ、地に関しては「第一歓喜地」と言われる。何故に、初地は歓喜なのかは、世間の修道により修習することにより、見道において法性の喜びが増大するので初地は「歓喜」と言われる。

2.3.2 それからその所依の人が「懺悔」の章の意味を続けて修習するので、主要義に関しては[利他を自然になすことができ、破戒をさらに浄化できるので]「意樂」が生じ、地に関しては「第二離垢地」と言われる。何故に第二地は離垢地なのか、と言うのならば、

第二地において戒を破る垢がないので第二地は「離垢地」と言われる。

2.3.3 それからその所依の人が「菩提心の摂受」の章を続けて修習するので、主要義に関しては〔過去に誓願をなしたように現在でもできるので〕「誓願」が生じ、地に関しては「第三発光地」と言われる。何故に第三地は発光なのか、と言うのならば、第三地の時に百の身体に変化してから百の国土において法を聞き、聞思の意味をなすので第三地は「発光」と言われる。

2.3.4 それからその所依の人が「菩提心の摂受」の章を続けて修習するので、主要義に関しては〔不放逸により利他の位の上に行くので〕「鎧」と言われ、地に関しては「第四焰慧地」と言われる。何故に第四地は焰慧なのか、と言うのならば、修習を完成する知恵により焰を放つので、第四地は「焰慧」と言われる。

2.3.5 それからその所依の人が「正知」の章を続けて修習するので、主要義に関しては〔身口意の三つに等しく入る行をなすことができるので〕「入」と言われ、地に関しては「第五難勝地」と言われる。何故に第五地は難勝なのか、と言うのならば、第五地において顕現と空とに入ってから入定するのは難しいので、第五地は「難勝」と言われる。

2.3.6 それからその所依の人が「忍」の章を続けて修習するので、主要義に関しては〔一切苦に耐えるので〕「忍」と言われ、地に関しては「第六現前地」と言われる。何故に第六地は現前なのかは、第六地において知恵を増大することにより麤相がないことが生じる〔四諦と縁起の教義が生じる順観と逆観の二つが明らかになったので〕ので、第六地は「現前」と言われる。

2.3.7 それからその所依の人が「精進」の章を続けて修習するので、主要義に関しては〔精進は頭の上で燃えている火を消すのと同じことがあるので〕「証得」と言われ、地に関しては「第七遠行地」と言われる。何故に第七地は遠行なのか、と言うのならば、第七地において麤相が沈んでから極微からは生じず、相から遠くへ行くので、第七地は「遠行」と言われる。

2.3.8 それからその所依の人が「定」の章を続けて修習するので、主要義に関しては〔第八地を成就させる資糧なので〕「資糧」と言われ、地に関しては「第八不動地」と言われる。何故に第八地は「無漏から動かない」と言われるのか、と言うのならば、第八地においてすべての相が沈んでから法性が直接知覚に成立するので、第八地は「無漏から動かない」と言われる。

2.3.9 それからその所依の人が「智慧」の章を続けて修習するので、主要義に関しては「結果」と言われ、地に関しては「第九善慧地」と言われる〔と出ている〕。何故に第九地は「善慧」と言われるのか、と言うのならば、第九地において運命に従い衆生利益をなし、仏のすべての知恵を成立するので「善慧」と言われる。

2.3.10 それからその所依の人が「廻向」の章を続けて修習するので、主要義に関しては「我執を捨てた利他のものが最高になるので」「利他」と言われ、地に関しては「第十法雲地」と言われる。何故に第十地は「法雲」と言われるのか、と言うのならば、そのようにその「善慧」の到達の後に喩例である雲から雨が生じるように、法雲の働きの雨が降るので、第十地は「法雲」と言われる。以上により出世間の十地と合わせたものを解説した。

3 また誤った分別をもつ人の想において、では煩惱の対治をどのように成立させるか、と言うのならば、

3.1 その意味を解説した次の種が小さな資糧道の一人の種姓により完成するならば、

3.1.1 その所依の人は「功德」の章を理解することにより想が生じ、そのように想が生じることにより相互の異生は嫉妬や罵言の対治を完成する。その想は道に関しては小さな資糧道の場合に生じる。

3.1.2 それからその所依の人が「懺悔」の章を理解し、修習することにより意樂が生じる。そのように意樂が生じるので大乘の誤った道である声聞・独覚などの道を成立するものの対治となる。下の道は知った後に捨てるが、大乘の道は知ってから完成するであろう。その意樂は道に関しては、それも小さな資糧道の場合に生じる。

3.1.3 それからその所依の人が「菩提心の摂受」の章を理解し、考察することにより誓願を廣大にし、望む。そのようにその誓願の増大と望むことにより未来にも誓願が起こされるならば、現在の原因である聞思を完全に、すべての尊敬をよく覚えてからなし、そのように対治となる。そして道に関してはそれも小さな資糧道の場合に存在する。

3.1.4 それからその所依の人が「不放逸」の章を理解し、考察することにより大きな鎧の慧が生じる。それにより煩惱である随眠の対治となる。無始の生からの執着する自己と衆生が等しいと知ってから自他両方のために大きな鎧を着る。それも道に関しては小さな資糧道の場合に存在する。

3.1.5 それからその所依の人が「正知」の章を理解し、考察することにより入の慧が生じる。それは劣乗の慧が生じることの対治となる。小乗より慧を退けてから大乘の方向における最勝に心が入り、心が入った助伴たる念と正知も入ったことより劣乗に落ちないことが確定する。それも道に関してはそれと小さな資糧道の場合に生じる。

3.2

3.2.1 それからその所依の人が「忍」の章を考察し、修習することにより忍を得る。忍を得ることにより麤相を明らかに破る対治となる。麤相や物質や声や香や味や業などに依る怒りや恨みのどの対治として、苦を受ける忍と害をなすことを考えない忍と法を確かに思う忍との三つが生じる。それは道に関しては中の資糧道の場合に存在する。

3.2.2 それからその所依の人が「精進」の章を理解し、考察することにより証得の想が生じる。極微相までも無分別の対治となる。証得は精進であるので、忍をともなう精進により煩惱の現前に捨てるものとなる。それも道に関しては中の資糧道の場合に存在する。

3.3

3.3.1 それからその所依の人が「禪定」の章を理解し、考察することにより資糧の想が生じる。「資糧」とは忍と精進により集められたすべての善根が禪定の内に集められたものとする。事物ならば資糧を定においてなす。その資糧は無相だけを破ることの対治となり、空だけを破る所依の人が存在する。彼は未来になす仮設としての忍と国土たる精進の揺れる戒の向こう側などと、定における修習のすべての法が空や無我とされることと、そのようになすことにより方便と智慧の結び付きがなければならないと示すので、空性だけを修習することにより未来に説かれる。それは道に関しては大きな資糧道に存在する。

3.3.2 それからその所依の人が「智慧」の章を理解し、考察することにより結果の想が生じる。「結果」とは勝義諦である。衆生利益も考慮しないことの対治となる。どのように成立するのか、と言うのならば、菩薩のすべての行は利他であることから、勝義諦を解説することにより、「では、菩薩の行である利他也存在しないのか」と考える者に対して、その対治である「自他の両者」と言うものとしても成立しないので、すべての分別を越えているものを勝義諦により説いたのである。それは道に関しては大きな資糧道に存在する。

3.3.3 それからその所依の人が「廻向」の章を理解し、考察することにより利他の想が生じる。戲論を離れた法性には分別がないように、如意樹とマニ宝とガルーダの所依のように、利他が自然に生じる。それが断見の対治であり、菩薩の行が無意味にはならず、自他の両者のためになすことである。それは道に関しては大きな資糧道に存在する。

それによりこの『入菩薩行論』は煩惱の対治となる在り方の意味の何れかの方向を示した後に、否定する排除されるものに関してである。それらにより誤った考察の何れかの方向を否定するために否定する排除されるものとして解説した。師であるセルリンパの意図を退けないディーパンカラシュリージュニャーナが述べたものを完成する。

II 聖マンジュシュリー童子に帰依をする。

0 『菩提道灯論』は、輪のような道を十九度廻す門から道が続いてどのように起こされるのかについての順序が解説されるべきである。この所依の人の類は小さい資糧道である。では、自らの道にどのくらいあるのか、と言うのならば、まとめると正しい完全なる悟りの地に行くことに四つの道がある。すなわち順解脱分の道と順決択分の道と有

学の不退の道と無学の不退の道とである。そのうち順解脱分の道は十善業を修練してから不可得の意味を知らなくても不可得を賞讃するであろう。順決択分の道は、不可得の意味を知ってから不可得を賞讃するであろう。有学の不退の道は、不可得を修習することにより賞讃するであろう。無学の究竟の道は、不可得を修習することを悟るであろう。そして三智と合わせて解説すれば、聞より生じた智慧と思から生じた智慧の時に解脱分の道が生じる。修の智慧 [から世間の修習が生じた] の時に順決択分の道と有学の不退の道と無学の究竟の道とが生じる。五道と合わせれば、順解脱分は大中小の三つの資糧道である。順決択分は四決択分である。有学の不退転は見道と修道である。無学の究竟は究竟道である。それらにより道の数が解説されている。では十九の輪で何と何を廻すのかと言えば、七つの世間の道と、十の出世間の道とで十七で、法身と色身の二つで、十九である。それら十九を『入菩薩行論』の章の十一の主要義の在り方により廻す。それも四つの助伴を四つ伴ってから廻す。すなわち、加行道と、無間道と、解脱道と、解脱智の見道との四つを四つにより廻してから、転々と行く。

1 転々してどのように行くのかは、その所依の初学者の人がまず、原因である円満なる種の原因が存在することにより、縁である善知識が法である『入菩薩行論』の十の章の相を伴って解説することにより、

1.1 その種が小さな資糧道の種となった後に、そのようにその小さな資糧道のその種の者が座布団の上に座ってから『入菩薩行論』をどのように領受するのかは、

1.1.1 [自利の信がある] 最初に想の慧を起さなければならない。いかなる門からかと言えば、「功德」の章の教えを得る門からである。想はどのように生じるのかと言うのならば、四法をともなって生じ、加行道、無間道、解脱道、解脱智の見道とである。その四法により想の助伴をどのようになすのかと言えば、その「功德」の章の教誡により小さな資糧道の時に修習する四念処を堅固にし、究竟に至ることをなす。

1.1.1.1 どのようになすのか、と言うのならば、四念処のうち、まず最初に「身念処」は、外道や世間の普通の人々が身体を清浄と執着した後に、それから転じて不浄なる三十二の実体を理解してから無執着をなすことである。どのようになすのかは、方法は「功德」の章の教誡によるその四つの助伴により次のようになる。すなわち、加行道の捨てるべきこの身体を清浄と見た後に明らかに執着をなすその人が対治である不浄なる三十二の実体を修習する時に、頭や衣服に火をつけることと同じ精進により、煩惱が清浄であるというその見解を捨てることを準備することが加行道である。そのようにその根本の準備が何によっても中断されずに熱心に成立させることが無間道である。それにより煩惱である身体を清浄と見ることと対治の不浄なる三十二の実体とは、秤の矢の高低のように、対治の方が高く、煩惱の方が低い際に解脱道である。煩惱である身体を清浄

とするその見解を永久に捨ててから固執や執着がない場合に解脱智の見道と言われる。

1.1.1.2 同じように受念処も外道が受を楽と思い、執着し、それより転じて楽と苦と捨の三つと考察し、その三つも無分別に知り、理解することである。どのようになすのかは、方法は「功德」の章の教誡により前の助伴のように四法をともなうことである。

1.1.1.3 同じように法念処も外道が事物の存在すべてを常と見ることで、それから転じてから事物の存在すべてを幻のようであると知り、理解することである。どのようになすのかは、方法は「功德」の章の教誡による前の助伴のように、四法をともなうことである。

1.1.1.4 同じように心念処も、外道が我を常で堅固で変化しないと見ることで、それから転じてから心を三時において知ることで、過去の心は滅し、未来の心は未だ生じず、現在の心は滅する方向と知り、理解することである。何によりなすのかは、方法は「功德」の章の教誡により四つ助伴をともなうことは前のようになる。

1.1.2 それからその所依の人に意樂の慧が生じる。いかなる門からなのかと言え、**「懺悔」**の章の教誡を得る観点からである。意樂の慧はどのように生じるのかは、四法を伴って生じなければならない。すなわち、加行道、無間道、解脱道、解脱智の見道とである。その四法により意樂の助伴をどのようになすのかは、その**「懺悔」**の章の教誡は小さな資糧道の時に四念処を堅固にし、究竟に至ることをなす。どのようになすのかとは、四念処のうち、最初に外道が身念処などの四つを、方法である**「懺悔」**の章の教誡により四助伴をともなうことで、前の通りである。

1.1.3 それからその所依の人に誓願の想が生じる。いかなる門からなのか、と言え、**「菩提心の摂受」**の教誡を聞く門からである。誓願の想はどのように生じるのかは、四法を伴って生じ、すなわち加行道などである。その四法により誓願に助伴をどのようになすのかは、その**「菩提心の摂受」**の章の教誡は小さな資糧道において四念処を堅固にし、究竟に至ることをなす。どのようになすのかは、四念処のうちまず最初に身念処などであり、方法は**「菩提心の摂受」**の章の教誡により助伴である四法を伴うことで、前の通りである。

1.1.4 それからその所依の人に**「自他の苦を負うことで」** 鎧の想が生じなければならない。いかなる門からなのか、と言え、**「不放逸」**の章の教誡を得る門からである。どのようになすのかは、四法を伴って生じ、すなわち加行道などである。それにより鎧の助伴をどのようになすのかは、**「不放逸」**の章のその教誡は小さな資糧道の時に修習する四念処を堅固にし、究竟に至ることをなす。どのようになすのかは、四念処のうち最初に身念処などので、方法は**「不放逸」**の章の教誡により助伴である四法を伴うことで、前の通りである。

1.1.5 それからその所依の人に [最高の心の助伴を記憶することと結びついてから入るので] 入の想が生じなければならない。いかなる門からなのかと言え、 「正知」の章の教誡を得る門からである。入の想はどのように生じるのかは、四法を伴って生じ、すなわち加行道などの四つである。その四法により入の助伴をどのようになすのかは、「正知」の章のその教誡によりは小さな資糧道において四念処を堅固にし、究竟に至ることをなす。どのようになすのかは、四念処のうち最初に身念処などので、方法は「正知」の章の教誡により助伴である四法を伴うことで、前の通りである。

1.1.6 それからその所依の人により忍の [三忍を伴う智慧が生じる] 想が生じなければならない。何によるのか、と言え、 「忍」の章の教誡を得る門からである。忍の想はどのように生じるのか、と言え、四法を伴って生じなければならず、すなわち加行道などの四つである。その四法により忍の助伴をどのようになすのかは、「忍」の章のその教誡により小さな資糧道の時に四念処を堅固にし、究竟に至ることをなす。どのようになすのかは、四念処のうち最初に身念処などので、方法は「忍」の章の教誡により助伴である四法を伴うことで、前の通りである。

1.1.7 それからその所依の人に証得の [精進の頭の上にある火を消すのと同じものにより成立するので] 想が生じなければならない。いかなる門からなのか、と言え、 「精進」の章の教誡を得る門からである。証得の想はどのように生じるのか、と言え、四法を伴って生じなければならず、すなわち加行道などの四つである。その四法により証得の助伴をどのようになすのかと言え、 「精進」の章のその教誡により小さな資糧道において四念処を堅固にし、究竟に至ることをなす。どのようになすのかは、四念処のうち最初に身念処など、方法は「精進」の章の教誡により助伴である四法を伴うことで、前の通りである。

1.1.8 それからその所依の人により [精進の樂である善なる定の内に集まる資糧を広げる] 資糧の想が生じなければならない。いかなる門からなのか、と言え、 「禪定」の章の教誡を得る門からである。どのように生じるのかと言え、助伴である四法をともなって生じ、すなわち加行道などの四つである。その四法により資糧の助伴をどのようになすのかは、「禪定」の章のその教誡は小さな資糧道の時に四念処を堅固にし、究竟に至ることをなす。どのようになすのかは、四念処のうち最初に身念処など、方法は「禪定」の章の教誡により助伴である四法を伴うことで、前の通りである。

1.1.9 それからその所依の人により結果の [一切法を不生と考察する] 想が生じなければならない。何によるのか、と言え、 「智慧」の章の教誡を得る門からである。どのように生じるのかと言え、四法をともなって生じ、すなわち加行道などの四つである。その四つにより結果の助伴をどのようになすのかは、「智慧」の章のその教誡により小

さな資糧道において四念処を堅固にし、究竟に至ることをなす。どのようになすのかは、四念処のうち最初に身念処などで、方法は「智慧」の章の教誡により助伴である四法を伴うことで、前の通りである。

1.1.10 それからその所依の人により〔無分別のままに有情利益をなす〕利他の想が生じなければならない。いかなる門からなのか、たとえば、「廻向」の章の教誡を得る門からである。どのようにかと言えば、四法を伴うことで、すなわち加行道などの四つである。それにより鎧の助伴をどのようになすのかは、「廻向」の章のその教誡により小さな資糧道において四念処を堅固にし、究竟に至ることをなす。どのようになすのかは、四念処のうちまず最初に身念処などで、方法は「廻向」の章の教誡により助伴である四法を伴うことで、前の通りである。それらにより小さな資糧道において輪廻の輪のような道が解説された。

1.2 〔中の資糧道の時に〕次の種は中の資糧道の種である。その中の資糧道の種が座布団の上に座ってから『入菩薩行論』をどのように領受するのかは、まず最初に想の慧が生じなければならない。いかなる門からと言えば、「功德」の章の教誡を得る門からである。想の慧はどのように生じるのかは、四法を伴って生じなければならず、加行道などの四つである。その四法により想の助伴をどのようになすのかは、その「功德」の章の教誡により中の資糧道の時に修習する四正断を堅固にし、究竟に至ることをなす。

どのようになすのかは、四正断のうちまず最初に「まだ生じていない善法を生じさせる」とは資糧などである。どのようになすのかは、方法は「功德」の章の教誡により助伴である四法により次ぎのようになす。すなわち、加行道により未だ生じていない善を起こすことを準備し、頭に火をつけることを喜ぶことと同じ精進により、〔善を〕起こすことを準備することが加行道である。そのようにその始めの準備が何によっても中断されずに熱心に成立させることが無間道である。それにより集められたものが、秤の矢の高低のように、対治の不善の方向が低く、善の方向が増える場合に解脱道である。それから煩惱である不善の集まりを永久に捨ててから善の集まりだけになる場合に解脱智の見道である。

そのように生じた善法を保つ学処を永久になすことである。どのようになすのかは、方法は「功德」の章の教誡により、助伴は前のように四法を伴ってなすことである。

同じように、すでに生じた不善法を正しく捨てるとは、罪を浄化する七支分の方法などによりなすことである。どのようになすのかは、方法は「功德」の章の教誡により、助伴である四法を伴うことは前と同じである。

同じように、まだ生じていない不善法を起こさないこととは、律を護ることである。どのようになすのかは、方法は「功德」の章の教誡により、助伴を伴ってなすことは前

と同じである。それからその所依の人は意樂を生じなければならない。いかなる門からなのか、と言え、ば、「懺悔」の教義を得る門からである。同じようにどのようになすのか、と言え、ば、助伴の四法を伴って生じるなどは前と同じである。意樂の想はどのように生じるのか、と言え、ば、同じように他の主要義と他の章に関しても、助伴をともなって生じることを前のように知るべきである。それが中の資糧道を四正断にある教誡として解説したものである。

1.3 次の種は大きな資糧道の種である。すなわち、その大きな資糧道の種が座布団の上に座ってから『入菩薩行論』を領受するならば、まず最初に想の慧を起こさなければならない。いかなる門からなのか、と言え、ば、「功德」の章の教えを得る門からである。想はどのように生じるのか、と言え、ば、助伴である四法を伴って生じなければならない。すなわち、加行道と無間道と解脱道と解脱智の見道である。その四法により想の助伴をどのようになすのか、言え、ば、その「功德」の章の教誡により大きな資糧道の四神足を堅固にし、究竟に至ることをなす。

1.3.1 どのようになすのか、と言え、ば、四神足のうち最初に欲神足であり、三昧を信じ、望むことで、信をさらに大きくすることである。どのようになすのかは、方法は「功德」の章の教誡により助伴である四法を伴って次のようになす。〔上のすべてに対しても次のように結び付けられる〕すなわち加行道により欲神足を起こすことを準備し、頭に火をつけることを喜ぶことと同じ精進をして準備することが加行道である。そのようにその始めの準備が何によっても中断されずに永久に成立させることが無間道である。そのように信じ、望むことを永久に起こすことにより秤の矢の高低のように、信がない方向が低く、信じ望む方向だけに行くことが高い解脱智の見道である。

1.3.2 同じように「精進足」とは、三昧が生じる障害と結合するいかなるものにも中断されずに生じる。方法は「功德」の章の教誡により助伴の四法を伴ってなすことは前の通りである。

1.3.3 同じように「心神足」とは、精進により助伴となるので心作用に適應する。どのようになすのかとは、方法は「功德」の章の教義により助伴の四法を伴ってなすことは前の通りである。

1.3.4 同じように「思惟神足」とは、尋伺の門から四禅を続けて生じることである。どのようになすのかは、方法は「功德」の章の教誡により助伴である四法を伴ってなすことは前の通りである。それからその所依の人に意樂が生じなければならない。いかなる門からなのか、と言え、ば、「懺悔」の章の教誡を得る門からである。意樂はどのように生じるのか、と言うのならば、助伴である四法を伴って生じなければならない。すなわち加行道などの四つである。その四法により意樂の助伴をどのようになすのか、と言え

ば、「懺悔」の章のその教誡により大きな資糧道の四神足を堅固にし、究竟に至ることをなす。どのようになすのか、と云えば、四神足のうち最初に欲神足であり、方法は「懺悔の章」の教誡により助伴である四法を伴ってなすことは前の通りである。そのように十一の主要義と十の章と、助伴である四法と合わせたすべてを知るべきである。それにより大きな資糧道にある四神足の教誡において解説された。

14 [決択分の時に] 次の種は四決択分のうち煖に住する種である。この種が座布団の上に座ってから『入菩薩行論』を領受するならば、まず最初に想の慧が生じなければならない。いかなる門からなのか、と云うのならば、「功德」の章の教誡を得る門からである。想はどのように生じるのか、と云うのならば、助伴である四法を伴って生じなければならない。すなわち加行道などの四つである。その四法により想の助伴をどのようになすのか、と云えば、その「功德」の章の教誡により煖に住する所依の人の五根の影像を堅固にし、究竟に至ることをなす。どのようになすのかは、五根のうち最初に信根の「影像」とは、業と三宝に対する知が堅固な場合に信解し、堅固でない場合の信解しないことを捨てる時である。それからその揺れ動くことから転じた後に、知が堅固になってから揺れ動かない。[このすべてを合わせた資糧道における三智のように、聞思により堅固にすることを確定してから修行の間に世間の修習が生じることにより領受されるので] どのようにか、と云えば、方法は「功德」の章の教誡により助伴である四法を伴ってなす。すなわち、加行道によりその煩惱が揺れ動くことと対治である業と宝を堅固にする時に、頭に火をつけることと同じ精進により煩惱を捨てることと結合するので、加行道より三つのものにも合わされる。同じように他の四根の影像にも四つの助伴が合わされる。それからその所依の人に意樂が生じなければならない。いかなる門からなのか、と云えば、「懺悔」の教誡を得る門からである。意樂はどのように生じるのか、と云えば、助伴である四法を伴って生じなければならない。すなわち加行道などの四つである。その四法により意樂の助伴をどのようになすのか、と云えば、「懺悔」の章のその教誡により煖に住する所依の人が五根の影像を堅固にし、究竟に至ることをなす。どのようになすのか、と云えば、五根のうち最初に信根の影像などであり、方法は「懺悔」の章の教誡により助伴である四法を伴ってなすという四つは前の通りである。そのように十一の主要義と十の章と助伴である四法のすべてに合わすべきである。それにより所依の人で煖に住する輪のような道が解説された。

15 [頂の時に] 次の種は頂に住する種であり、これは頂の時に五根が完全になる。その種が座布団の上に座ってから『入菩薩行論』を領受するならば、まず最初に想の慧が生じなければならない。いかなる門からなのか、と云えば、「功德」の章の教誡を得る門からである。想の慧はどのように生じるのかと云えば、助伴である四法を伴って生じ

なければならない。すなわち加行道などの四つである。その四法により想の助伴をどのようになすのか、と言え、その「功德」の章の教誡により頂に住する所依の人の五根の完全になることを堅固にし、究竟に至ることをなす。どのようになすのかは、五根を完全にすることのうち最初に信根は業と宝を修習すればあり、修習しなければならないということから転じた後に、業と宝の最高のものを集めてすべての相において信解をなすことである。どのようになすのは、「功德」の章の教誡により助伴である四法を伴ってなす。同じように五根〔意樂が懺悔に対しても自然に放たれることを忘れずにその一点の対象を知る五根が生じるので〕に合わされる。そのように十一の主要義と十の章と助伴である四法がそのように合わされる。以上は所依の人が頂に住する輪のような道として解説された。

1.6 〔忍の時に〕次の種は忍の種である。その忍に住するものが座布団の上に座ってから『入菩薩行論』を領受するならば、五力の影像を完全なものにする。まず最初に想の慧が生じなければならない。いかなる門からなのか、と言え、その「功德」の章の教誡を得る門からである。想はどのように生じるのかと言え、助伴である四法を伴って生じなければならない。すなわち加行道などの四つである。その四法により想の助伴をどのようになすのかは、その「功德」の章の教誡により忍の時の五力の影像を堅固にし、究竟に至ることをなす。どのようになすのかと言え、五力のうち最初に「信力の影像」と言うものは、原因である見や疑惑との無量なる区別が存在し、それにより克服できるか克服できないか固定していないが、方法は「功德」の章の教誡により助伴である四法をともなす。同じように他の四力にも合わされる。そのように十一の主要義と十の章と〔世間の修習が生起することで修習をなしてから〕助伴である四法がそのように合わされる。それにより忍に住する五力の影像として解説された。

次の種は世第一法に住する種である。「世第一法の時に五力が完全になる」と言うことのうち、「信力」とは信がなく信解しない者たちを一切の相において克服し、存在しないことを捨てることができることである。「精進力」とは懈怠や怠惰などのすべてを克服し、残りなく尽くすことである。「念力」とは、記憶を損なうことや忘れることをすべて捨て、尽くすことである。「定力」とは、揺れ動くことなどのすべてを永久に克服し、なくすことである。「慧力」とは、すべての輪廻の根本である無明を克服し、永久に残らなくすることである。「世第一法の時に五力が完全になる」とは、その五つである。そのように世第一法に住するその種が座布団の上に座ってから『入菩薩行論』を領受すれば、まず最初に想の慧が生じなければならない。いかなる門からなのか、と言え、〔功德を信じることで不信を捨て、それを広げることで怠惰を捨て、それを忘れないことで忘れることを捨て、それを一頂にすることで動を捨て、その意味の区別を知ることで無知

を捨てるので、五力の自他におけるその人によるその注釈にも]「功德」の章の教誡を得る門からである。想はどのように生じるのかとは、四法を伴って生じなければならない。すなわち加行道などの四つである。その四法により想の助伴をどのようになすのかは、その「功德」の章の教誡により世第一法の時の五力を堅固にし、究竟に至ることをなす。どのようになすのかは、信などの五力から、「功德」の章の教誡により助伴である四法を伴ってなす。信力などが起こされることと合わされ、頭に火を着けることと同じ精進と結合することが加行道である。そのようにその始めの準備がいかなる縁によっても中断せずに永久に成立することが無間道である。そのように信力を永久に起こすことにより秤の矢の高低のように煩惱の方向は低く、対治の方向は高い時に解脱道である。煩惱の方向を永久に捨ててから力のみで行く時に解脱智の見道である。それからその所依の人により意樂の想が生じなければならない。いかなる門からなのかと言えば、「懺悔」の章を得る門からである。意樂はどのように生じるのか、と言うのならば、助伴たる四法を伴って生じる。すなわち加行道と無間道と解脱道と解脱智の見道とである。その四法により意樂の助伴をどのようになすのかと言うのならば、「懺悔」の章のその教誡により世第一法に住する五力を堅固にし、究竟に至ることをなす。どのようになすのかは、信力などの五つで、方法は「懺悔」の章の教誡により、助伴である四法を伴ってなすことは前と同じである。それと同じように十一の主要義と十の章と助伴である四法がすべてに合わされる。そのように四決択分は煖と頂と忍と世第一法である。煖と頂などの名称により設定されるのは何故か、と言えば、例えば、火が燃える際に薪が擦れた時にまず熱が生じる。それから煙が生じ、それから火花が生じ、そして大火が生じる。それと同じように勝れた世界の法界は戲論を離れていることを認識しながら修習することにより熱と同じ煖を得て、煖を得てからその法界において戲論を離れた識をある者は向けることができ、ある者は向けることができないと固定していないので、例えば、樹の頂きが揺れるのと同じなので、頂が生じる。その動く時に増大し、修習することにより、火花と同じ忍を得る。火が大きくなり燃えるのと同じく、世第一法が先に生じ、まだ得られていない法性が続いて生じるので、首楞嚴三昧や宝印三昧や力莊嚴三昧などを得る。以上により [大] 中小の三つの資糧道と煖と頂などの四決択分と『入菩薩行論』の世間の七道の在り方として解説した。

2

2.1

2.1.1 初地に住する菩薩が『入菩薩行論』をどのように領受するのかと言えば、まず最初に想は「功德」の章の教誡、意樂は「懺悔」の章の意味、誓願の想は「菩提心の摂受」の章の意味、鎧の想は「不放逸」の章の意味、入の想は「正知」の章の意味、忍の想は

「忍」の章の意味、証得は「精進」の章の意味、資糧の想は「禪定」の章の意味、結果の想は「智慧」の章の意味、利他の想は「廻向」の章の意味と、その十章を菩薩は見道の道が続いて起こす時に修習する。修習の際にも四法を伴って続いて生じなければならぬ。すなわち、加行道と無間道と解脱道と解脱智の見道とである。加行道によりその法性の喜びを増やすために頭に火を着けると同じ精進により『入菩薩行論』の十の章の意味を修行することを準備することが加行道である。そのように始めの加行道をいかなる縁によっても中断せずに、永久に成立していることが無間道である。法性のその喜びのかなりの部分を増やし、煩惱の方向が低い秤の矢の高低のように行くことが解脱道である。三昧の時に法性の喜びだけより一切の戲論の極端が離れていることが解脱智の見道である。従って得る時に第一歡喜地の語義解釈は、[まとめて説けば] 喜びが多く、[詳しい解説は] 意の[無漏の] 歡喜が多く、[自利に対する] 勝解が多く、[利他に対する] 嬉しさが多く、[両者のために] 仏法僧を念じ、喜ぶことであり、[法性の喜びがあるので] 仏の近くに成立し、喜ぶことであり、[未来に生じないので] 悪趣の畏れを中断しようと思ってから喜ぶことであり、資具に執着することがないことにより不活により畏れない。我所を離れているので、死の畏れはない。恭敬の分別を離れているので、賞讃されないことの畏れもない。仏に趣くことを知っているので、悪趣への畏れはない。[界を知恵で考察することにより] 世間において我と想を等しく知るので、輪廻を畏れる恐怖はない。多くの勝解と[空であるという] 信解を清浄にすることなどがある。初地の菩薩は大部分がインドの[鉄輪成] 王となる。

力の殊勝も出家してから初地に一刹那の一瞬に百十二を生じることができる。百の三昧を得て、入定した百の仏を見て、それらの百の加持を知り、百の世間界を動かし、百の国土を行き、百の世間界を見て、百の衆生を成熟し、百劫にわたって住し、百の前後の極端を知り、百の法門を区別し、百の身体を示現し、それぞれの身体における百の従者の菩薩を示すことができる²¹。

布施と賞讃を述べることと望まれる意味や意味のある行により有情利益をなすこと[の特別な布施により利益をなして、十の中の最大の布施]と、例えば、熟練した鍛冶師がかつてあったと同じ金を火で燃やせば清浄で[垢がないので] 純粹になり、[仕事に適するので] 願うままの働きに適するであろう。それ[喩例]と同じように菩薩が仏に供養し、衆生に布施をなすことにより[対治] 自らの心が清浄になり、[煩惱が] 純粹になり、[行為に適するので] 願うままの働きに適するであろう²²。

また例えば、道に長けていると認められる隊商が[近距離に行く場合は恐れがなく]、

²¹ *Daśabhūmikasūtra*. 荒牧 1974: 66.

²² *Daśabhūmikasūtra*. 荒牧 1974: 58-59.

始めから道と道の徳性と岐路の損害と道の〔遠近の〕特殊性と〔行く行かないの〕道においてなすこととなすべきでないことと食料〔何らかのもの〕を備えているところを探し、普く尋ねる。〔少しでも熱心になすならば〕始めに道に出かけてから家に戻らない限りは賢くなす。それ〔喩〕と同じように菩薩であるその隊商の主も〔このすべての地において言葉で〕始めから菩薩道と、〔近距離に行くのは容易であるなどの〕道の徳性と〔声聞の〕道〔における〕岐路の損害と、道の特殊性と〔領受したりしなかつたりする〕道においてなすこととなすべきでないことと、二資糧〔その通りなど〕の食料を備えている方法と、〔多少なりとも功德をなせばこの時から把握した後に〕一切智の都城に至らない限りは賢くすべきである²³。

2.1.2 第二地に住する菩薩が『入菩薩行論』をどのように領受するのか、と言えば、まず最初に想であり、「功德」の章の意味などを上記のように主要義とその十章を、第二地を得るために修習する。すなわち、助伴である四法を伴うことにより法性の喜びを広げ、〔第二地の〕戒律の垢を捨てる助伴の四法を修習することに従って得るので、第二離垢地の語義解釈は〔第二地において四摂事より耳によく説かれる最大のものとしての十のうち最高の戒である〕この垢がないことである。すなわち〔知恵の垢である〕殺生や杖や刀杖や怨恨を捨てることである。〔それより退くので〕楽しみによる有益になる慈悲の心をもつことである。自分の財物により満ち足りており他者の財物を望むことがないので偷盗を離れている。自分の妻で満ち足りており他者の妻を望むことがないので邪淫を離れている。〔意味のある〕真実を述べ、〔他の所作により〕時に適した言葉を言い、〔法に随順するので〕妄語を離れている。〔自他の〕不和合や〔他者を〕割く言葉を夢においても言わず、〔叱責が〕口汚く、〔言葉で〕傷つけ、〔消化しない言葉の〕宿怨をもち、過失を面前で言うことと、〔微細な話の〕土俗の言葉、〔他者の〕耳に安らかに聞こえなかつたり、〔苦と〕心に苦悩を与える〔飲食〕などの話し〔ない〕を述べない。資財に対する執着がなく、他者の財産や資財を欲すことがなく²⁴、第二離垢地に住する者はほとんど「転輪聖王になる」と説かれている。

第二地を得た時に十の心が生じる。すなわち〔動く原因がないことによる〕正直心と〔嘲笑がないことによる〕柔軟心と〔対立する心に随順する〕堪能心と〔内なる心を与えることによる身口を〕調伏する心と〔行道の〕寂靜心と〔利他をなそうとすることによる〕純善心と〔普通の罪過の〕不雑心と〔他を望むことがない〕無顧恋心と〔利他行を望むことによる〕広心と〔大鎧による〕大心とであり、それらにより第二離垢地が作られる²⁵。〔以上は戒

²³ *Daśabhūmikasūtra*. 荒牧 1974: 61-62.

²⁴ *Daśabhūmikasūtra*. 荒牧 1974: 70-74.

²⁵ *Daśabhūmikasūtra*. 荒牧 1974: 69.

の学処を完成する]

例えば、そのかつてあったと同じ金自身を緑礬に入れると、それにより垢を離れる。その[十心の] 喩例のように第二離垢地はこのときに無量劫の垢から智の部分に近づくであろう²⁶。

[生起の勝れた] 第二地の菩薩は四州において転輪聖王になるであろう[力の勝れた第二地の両者は刹那に一万二千を示すことができる]。

2.1.3 第三地に住する菩薩が『入菩薩行論』をどのように領受するのか、と言えば、まず最初に想を「功德」の章の意味などを上記のように主要義とその十章により第二地を得るために修習する。修習のときに四法を伴っていなければならない。その法性の喜びが第二地よりも増大されるからで、十万の身体に変化してから十万の国土において法を聞き、例えば、日輪がすべてに満ちているように、十万の身体に変化してから十万の国土に満ちることを望むので、助伴である四法による修習により後に得た時に第三発光地は四摂事のうち利行が大部分であり、六波羅蜜のうち忍が大部分であり、初禅のうち非有非無処などを修習する[それ故に心の学処を完成する]。多くの仏の顔を見て、ほとんどは[帝釈] 天王になる。発光の語義解釈は、三昧の光をあらゆるところに作るからである。

第三地を得るときに自身を堅固にし、[利他を] 広大に働く心を伴い、[他を見ることで] この有情たちは[内外のすべての] 無常と[地獄などの] 苦と[辺際の無常という] 畏れの法をもち、[芭蕉に似ること] 大悲がなく、[何れかの苦に座すことで] 病と膿のように見ることにより²⁷、彼等が[天人を] 喜び、結果[である悟り] を得るために[道である] 仏[の聞いた通りの] 法を求め、法を信解し、満足を知らず、[聞思を] 中断せずに、[外を見ずに知恵のために] 法を喜び広げ、[その目的のために] 法に入り、法[を聞くことを] を喜び、法を[とても信じて] 趣き、法を[知ることを対比して] 趣き、[法から生じるままになすことができる] 法に帰依することを求め、[悟りの間得ようとする] 法に力を求め、[それ故にその聞を] 努力し、そのように努力することにより食事や衣服から身体や生活に至るまで法[と死たち] に与えることができ、[与えたものも] 貧しくなく、[法を聞く仲間である] 聞思の光が自分を輝かせ、[自分の対象はいかなるものもなく] 自らの光が他者を照らす²⁸。

例えば、かつてあったと同じ金を熟練した鍛冶師の手にかかれば、[浪費することなく] 天秤の数があったのと同じ量だけ存在する。その喩例のように発光に住するものに

²⁶ *Daśabhūmikasūtra*. 荒牧 1974: 89.

²⁷ *Daśabhūmikasūtra*. 荒牧 1974: 95.

²⁸ *Daśabhūmikasūtra*. 荒牧 1974: 101.

よっても貪欲などの〔捨の原因がなく〕煩惱が残ることなく損なわれず、善根よる〔追隨する成就〕を得る原因もない。しかも〔得ることがないように衆生利益に〕自らの心が働きに適する。働きにどのように適するのかと言うならば、〔貪欲などの〕分別がない心と〔事物がないことによる〕高低のない心と〔他の善を最高とすることによる〕有益な心と〔利益をなしても〕返報を期待しない心であり²⁹、第三地の時に〔生住は何れも同じならば〕帝釈になるであろう。

2.1.4 〔第四地に七菩提分法を知る五智があり四諦を知る第六と縁起を知る智慧があるので智慧の学処を完成するうちの最初である〕第四地に住する菩薩が『入菩薩行論』をどのように領受するのか、と言え、まず最初に想を「功德」の章の教誡などを上記のように十一の主要義とその十章により第四地を得るために修習する。修習のときに四法を伴ってなさなければならない。それも例えば、太陽の光が広がることにより世間界を明らかにするように、法の喜びが第三地よりさらに増大するためであり、衆生たちの見の闇から心を転じるために助伴である四法によりなすことが前の通りである。従って得て、第四焰慧地は見の闇から心を転じることと智慧を得たときに善を努力し、百万の仏を見て、さらに無所思惟に等至し、ほとんどが須夜摩天王になるであろう。焰とは、三昧の〔千の〕光を放ってから他を囲むことができる。

第四焰慧地の時に、例えば熟練した名匠が飾りをつけたかつてあったと同じ金は熟練していない者が飾ったものよりも特別に勝れたもので、覆えせず、比較にならない。その喩例のように焰地に住する菩薩のそれらの善根も、下位に住する菩薩の善根により覆えされず、比較にならないものである³⁰。

例えば、マニ宝の輝きをもつ光は風や水や大雨によっても光が妨げられない。それではない色のついた宝石や緑石などは比較にならない。その喩例のように焰地に住する菩薩も、下位に住する菩薩の善根により覆えされず、比較にならないものである。魔や煩惱により妨げることとはできず、四摂事のうち同事に秀でており、十波羅蜜のうち精進に秀でている。

焰地に住する菩薩はほとんどが〔時分と言われる〕須夜摩天王になるであろう〔一億二千万の功德を刹那に示すことができる〕³¹。

2.1.5 第五地に住する菩薩が『入菩薩行論』をどのように領受するのか、と言え、まず最初に想を「功德」の章の教誡などを上記のように十一の主要義とその十章により第五地を得るために修習する。修習のときに四法を伴ってなさなければならない。その法

²⁹ *Daśabhūmikasūtra*. 荒牧 1974: 112-113.

³⁰ *Daśabhūmikasūtra*. 荒牧 1974: 135.

³¹ *Daśabhūmikasūtra*. 荒牧 1974: 136-137.

性の喜びが第四地よりさらに増大するためであり、[三時における分別を離れてから]三時を等しく修習する[四諦を一つに知る]ためであり、観と空を[区別なく]等しくするために助伴である四法により修習するので、従って得た時に第五難勝地の語義解釈は三時を等しいものと合わせて、観と空を不二と合わせて、戒律と道には疑惑がなく、福德と知恵の二つによる満足を知らず、ほとんどが観史多天王になるであろう。

第五難勝地の時に、例えば、かつてあったと同じ金を真珠母貝で磨けば、ますますよく輝き、[垢がなく]清浄になる。[垢がないので]その光はとても明るい。その喩例のように、この難勝地に住する菩薩の場合も[方便と智慧の双運における]すべての善根を方便と智慧の観察によりますます奇麗で、清浄になり、智慧の多くの功德を完全にする³²。

また例えば、太陽と月と星と星宿の宮殿の燦然と光り輝くものは、風輪により[守護を捨てられないので]取り去ることはなく、[木などに似ず]風と全くかかわりがない。その喩例のように、難勝地に住する菩薩もすべての善根を智慧と知による説示により声聞と独覚が[福德に似て]付随せず、世間[此岸を見るもの]と共に行われない³³。

難勝地に住する菩薩は、ほとんど観史多天王を喜ぶことを伴うであろう。外道のすべての場所を退けることに長けている[刹那に一千二百万億の功德を示すことができる]。

2.1.6 第六地に住する菩薩が『入菩薩行論』をどのように領受するのか、と言え、まず最初に想を「功德」の章の教誡などを上記のように十一の主要義とその十章により第六地を得るために修習する。修習のときに四法を伴って修習する。法性の喜びをますます増大するためであり、いかなる門から広げるのかと言え、第六地では智慧のほとんどにより龜相などの外的存在や内的本質などの[現在の]空性と[過去の]無相と[未来の]無願の三解脱門を考察するために四法により修習するので、従って得る時に第六現前地の語義解釈は、三昧の時における法の喜びを前よりも増大させ、内空と外空などの百万の空性の定と無相と無願の百万の定が明らかになることである。それ故に「第六現前地」と言う。後に得るものでは十波羅蜜のうち智慧が秀でていいる。天王は善化天となる。

「現前」とは、第六地を得た時に、例えば、かつてあったと同じ金が瑠璃で磨けば、前よりもよく輝き光、盛んになるであろう。その喩例のように現前地に住する菩薩もそれら善根をすべて智慧によりよく考察することにより前[第五地]よりも清浄で、光り輝くものとなり、[自性寂静と解脱を望むので]さらにさらに寂静なので覆えされないも

³² *Daśabhūmikāsūtra*. 荒牧 1974: 160.

³³ *Daśabhūmikāsūtra*. 荒牧 1974: 161.

のである³⁴。

また例えば、[満月による光線から]月は衆生の身体も爽やかにするが、風輪によっても[月光は]覆われない。その喩例のように現前地に住する菩薩も善根が前よりも多くの衆生の煩惱[の渴望]を滅し、爽やかにするが、四種の魔の領域によっても覆えられない³⁵。

第六現前地に住する菩薩はほとんど善化天王に生じる。衆生のさらなる我慢を滅することに熟練しており、声聞の質問に正しく答えることに覆えされない[刹那に百二十万の功徳を示すことができる]。

2.1.7 第七地に住する菩薩が『入菩薩行論』をどのように領受するのか、と言え、まず最初に想は「功徳」の章の教誡などを十一の主要義とその十章により第七地を得るために修習する。修習のときにも四法を伴って生じなければならない。第六地より法性の喜びが増大するためであり、第七地においては十波羅蜜と四摂事と三十七菩提分法を一瞬に自らの相續に完成しようと望み、[二十の相の顕現と]煩惱から[中の小]遠くに行こうと望むことにより助伴である四法を修習するので、定の時における法性の喜びが第六地より増大し、一切の戲論の極端を離れていることが解脱智の見道である。

[論難]ここに「十波羅蜜から三七菩提分法に至るまでのその完成は第七地のみにより菩提の支分を一瞬に完成するのか、それとも他の地においても同じように完成するのか」と質問をするならば、[答]「十地のすべてにおいても菩提の支分を一瞬に完成する」と答える。この第七地ではそれよりも[大波]さらに完成するであろう。[大波は]何故か、と言え、初地において誓願を完成した後の菩薩がなすべきことを完成することである[発心からその誓願を資糧道の間誓願し、世第一法において法性の喜びが生じるから]。第二地では心の垢を明らかにし[破戒の過失を捨てるから]、第三地では[百身に變化してから百法に依存するので]法の顕現を得て、第四地では[他者の論難から他者の見解の障害を退けることで]道に入り、第五地では[こちら側に見えるこの顕現を空行と結び付ける]世間の行に従って行き、第六地では[三解脱門により三時において空となす]奥深い法門に入り、この第七地では[それ以後の世間の大部分により]一切の仏法が正しく完成するので、第七地はそのように功徳が大きいので「第七遠行地」と言われ、煩惱を遠くにし、智慧を近くにするのである。煩惱を遠くにするとは、[二十] 庵相を捨てることである。極微[二小相]より生じないので、智慧が近い。智慧が近いので第八地も[資糧なしに]自然に得るであろう。第七地の後に得たものには、ほとんどが自在天王となるであろう。「遠行」という第七地に住する時にその菩薩には「煩惱をもつ」とも言われず、「煩惱

³⁴ *Daśabhūmikasūtra*. 荒牧 1974: 194.

³⁵ *Daśabhūmikasūtra*. 荒牧 1974: 195.

がない」とも言われぬ。それは何故か、と言え、一切の煩惱の原因〔我〕がないので、「煩惱をもつ」とも言われぬ、〔法性の光明を直接知覚しようと望むことで〕如来の知を望み、想を完全にしてはしないので、煩惱がないこともない³⁶。

第七地に住する菩薩は、身口意の三つの〔利他における〕意樂をそなえている。例えば、国王の家系に生まれた皇太子の資質をそなえたものは、お生まれになるとすぐにすべての大臣を制圧するが、自分の智慧により思慮した〔方便と諸力による〕のではない。成長して大人になれば、自分の智慧の力によりすべての大臣の行為の在り方を超えている。その喩例のように、菩薩は発心するやいなや意樂の大我性によりすべての声聞や独覺を制圧するが、自分の智慧により考察したのではない。菩薩が第七地に住する際に、自分の智慧の力や威力により声聞や独覺の行為の在り方を超えている³⁷。

例えば、かつてあったと同じ金より作られたその飾りがすべての宝により飾ったならば、前の金だけから作られたものよりも美しく、その他の飾りにより比べられない。その喩例のように、遠行地に住する菩薩が方法と智慧とを実現した善根は前の〔六地〕よりも清浄なので、声聞や独覺の善根によっても比べることができない³⁸。

また、こうである。例えば、太陽の光は星の集まりや月の光によっても〔太陽の光を覆うことはできないので〕覆えされない。〔太陽の力は〕四大州のあらゆる泥沼をも干上がらせる。その喩例のように、遠行地に住する菩薩の善根は以前のものよりも声聞や独覺により覆えされない。〔第五地の効力から〕転倒の泥沼を干上がらせる³⁹。

第七地に住するその菩薩は、〔一般に〕自在天王になるであろう。衆生が無過失をなすことに熟練しており、声聞と独覺が垢を尽くさず、垢を伴うことにより覆えされない〔刹那に百二十万千万千億の功德を示すことができる〕。

2.1.8 第八地に住する菩薩が『入菩薩行論』をどのように領受するのかと言え、まず、最初に想を「功德」の章の教誡などを十一の主要義とその十章により第八地を得るために修習する。修習のときにも四法を伴って生じなければならない。それも第七地の存在する極微相〔小の大〕が沈んでから、第八地の無漏の道から動かないそれを得るために助伴である四法を伴って修習する。第八地の語義解釈は、「第八不動地」と言われ、すべての自説を離れ、〔欲望がないので〕自然に法性を得て〔戲論を離れることを受け入れ〕、〔受け入れたままに〕身口意のすべての努力を離れ、〔根が対象に対して活発ではないので〕寂靜なるすべての法性に住することである。

³⁶ *Daśabhūmikāsūtra*. 荒牧 1974: 216.

³⁷ *Daśabhūmikāsūtra*. 荒牧 1974: 221-222.

³⁸ *Daśabhūmikāsūtra*. 荒牧 1974: 227.

³⁹ *Daśabhūmikāsūtra*. 荒牧 1974: 228.

また例えば一人の人が夢において水に流されているときに、水より脱しようと努力を〔種々〕する。その努力〔をなしたこと〕により夢からさめ、夢からさめたことにより努力を離れる。その喩例のように菩薩は煩惱の水の流れにより多くの衆生が流されているのを知ってから〔それらが完全に解放されるために〕努力を〔完全に〕始め、彼は勇猛精進を伴うことによりこの不動地を得るとすぐにすべての自説を離れ、勝義としてはいかなるものも存在しないと知る。顕現と作因の二つや一切の相は現れない⁴⁰。

従って得る際に、第八地に住する菩薩はほとんどが空の主である大梵天王となるであろう。十波羅蜜のうち誓願が秀でており、「不動地」という第八地に住する時に、例えば〔努力することに原因はない〕神通力を持ち、心を自在に得る究極により住する比丘が滅尽定に至るまでの定は、〔知恵の原因を中断する〕心因と〔姿などの〕戲論の分別と〔微を把握する〕一切の想を離れている。その喩例のように菩薩が第八地を得た時に自説を離れ、〔戲論を離れている間に成立する〕自然に法性を得て、身口意の三つの努力を離れ〔分別が寂靜となる〕、心は寂靜なる法性に住している⁴¹。

また例えばバラモンの世界に生まれ、住む者には欲界の煩惱が起こらない。その喩例のように不動地に住する菩薩は心と意と識のすべてが起こらない。しかも不動地に住する菩薩も以前の誓願の威力と力にあるその法性により仏がなされたものの近くに成立する⁴²。

また例えば、かつてあった同じ金を熟練した工芸師が細工を上手にしてからインドの王の首に結んだならば、インドのすべての衆生の飾りを制圧しており、飾りにより比べることはできない。その喩例のように不動地に住する菩薩も声聞・独覚の善根以上と第七地の善根以下を制圧している⁴³。他を制圧し、他により制圧されないという意味が見られ、〔無分別と国土を浄化する〕大梵天王となるであろう〔第八地では一瞬の刹那に十二の三億の微細の数と同じものを示すことができる〕。

2.1.9 第九地に住する菩薩が『入菩薩行論』をどのように領受するのか、と言え、まず最初に、想を「功德」の章の教誡などを十一の主要義とその十章により第九地を得るために修習する。修習のときにも四法を伴って生じなければならない。劫の通りに衆生利益をなし、一切の仏智を完成しようと望むので、〔小の中の〕助伴である四法をともなって修習することにより後に得た際の第九善慧地の語義解釈は、一切の衆生を善の道におく慧があるので善慧であり、〔根と四明知を自在に得て〕ほとんどは二千〔世界の〕

⁴⁰ *Daśabhūmikasūtra*. 荒牧 1974: 239.

⁴¹ *Daśabhūmikasūtra*. 荒牧 1974: 238.

⁴² *Daśabhūmikasūtra*. 荒牧 1974: 239-240.

⁴³ *Daśabhūmikasūtra*. 荒牧 1974: 264.

大梵天王となるであろう。威力と大力を得た二千世界の大梵天王なので、他により制圧されることがない同事を見れば声聞と独覚と菩薩たちに法を説くことに熟練しており、力があり、一切の衆生をよい道に導く。十地のうち力が秀でており、四摂事からは愛語と同事である。

「善慧」と言われる第九地に住する時に、例えば、かつてあった同じ金を熟練した工芸師が飾りをつけて、それを四大州の主の頭や首に着けたならば、[小] 国の王や四大州のすべての衆生の飾りを制圧し、他の飾りは比較にならない。その喩例のように、善慧に住する菩薩も声聞・独覚以上で第八地以下の菩薩の善根を制圧し、[それらは] 他の善根により [制圧されないので] 比べられない⁴⁴。

第九地に住する菩薩はほとんど大梵天王となり、威力と大力を得て二千 [世界] を自在にし、他により制圧されず、他を制圧する⁴⁵ [第九地では一瞬の刹那に十二の三千阿僧祇劫を示すことができる]。

2.1.10 第十地に住する菩薩が『入菩薩行論』をどのように領受するのかと言えば、まず最初に想を「功德」の章の教誡と、意樂は「懺悔」の章、誓願の想は「菩提心の摂受」の章とその十章を第十地を得るために修習する。修習のときにも四法を伴って生じなければならず、加行道と、無間道と、解脱道と、解脱智の見道である。加行道により法性の喜びを第九地より広げるためであり、心の三つの秘密を理解するためであり、十方の仏による説法を保つことできるように望むので、頭に火をつけることと同じ精進により『菩薩行論』の十の章の意味を修習することを準備することが加行道である。そのように始めたその準備をいかなる縁によっても中断せずに、永久に成立していることが無間道である。心の秘密に至り、仏法を保つことができることの対治の方向は高く、煩惱の方向 [小の小] は低い秤の矢の高低のように行くことが解脱道である。定の時に法性の喜びが第九地より広く、一切の戲論の極端を離れていることが解脱智の見道である。

「法雲」と言う第十地に住するときに、例えば、転輪王の第一王妃からお生まれになられた王の相をもつその人が転輪王の黄金の台座の上に座る。そして天蓋や傘や勝幢や旗や音楽や歌曲によっても囲まれてから、大海から得た水によりその少年の頭の上から灌頂をするやいなや、「頂上から灌頂された武人たる王」という名称を得る。その喩例のように、法雲に住するその菩薩に正しく悟った灌頂をなす。授記をなすやいなや、「正等覚」という名称を得る。どのように灌頂するのかと言えば、衆生のために何百千という難行を行うために灌頂する⁴⁶。

⁴⁴ *Daśabhūmikasūtra*. 荒牧 1974: 298-99.

⁴⁵ *Daśabhūmikasūtra*. 荒牧 1974: 300.

⁴⁶ *Daśabhūmikasūtra*. 荒牧 1974: 316-317.

〔根から業を自在に得る〕法雲の語義解釈は、例えば、大海龍王なる雲から大雨が降った際、大海に属さない他の大地がそれに耐え、覆い、保つことはできない。その喩例のように如来たちの秘密を説いたものと法の顕現の大雨は第十地に属さない声聞と独覚で信解行地から第九地までの者が耐えたり、保つことはできない⁴⁷。

また例えば、大海の一匹の龍が雨を降らせたとき、第二、第三、第四、第五の龍が降らした雨も大海に受け取り、保ち、自分のものにするができる。それは何故か、と言え、大海は大きく広大であるから。その喩例のように、法雲地に住する菩薩も一人の如来から、第二、第三、第四、第五のものにより心の秘密を説いたものと法の顕現する部分を正しく保持し、受け取り、自分のものにする。それ故に、この地も「法雲」と言われる⁴⁸。〔法をその通りに把握することは〕何故か、と言え、法界は大きく広大であると理解されているから。

また例えば、天の飾りの工芸師が金槌でまだ打たれていない最高の宝により飾ったものを自在天が灌頂により飾られたならば、そうではない飾りを制圧し、他の飾りにより〔制圧されないので〕得られない。その喩例のように、その菩薩たちは第十地の知恵の雲を得る。知恵の相続を得たそのものたちは、声聞や独覚の信解を行じる菩薩から第九地の菩薩の善根以下のものを制圧し、他の福德により争うことがない⁴⁹。

第十地に住する菩薩はほとんど大自在天王となるであろう〔第十地では一瞬の刹那に述べることのできないほどの仏国土の十二の述べることのできない微細を示すことができる〕。

2.2 〔結び付けてから解説する〕そしてそれらの菩薩たちが〔その初地から摂受してから〕その十地より仏地の知恵の根本を捨てるであろう。

2.2.1 次のようである。例えば大地より十の山の王が存在する。すなわち、(2)香山、(1)山の王である雪山、(3)象鼻山、(4)仙人山、(5)持双山、(6)馬耳山、(7)大地を保持する山、(8)輪圍山、(9)頂きをもつ山、(10)妙高山である。すなわち、(1)例えば雪山は一切の薬が生じる場所であり、種々なる薬が生じることに際限がないものである。その喩例のように第一歡喜地では世間の文学や、算術や、すべての学問の生じる場所である。そこには、尽きることも際限もない。(2)香山は香草を取っても尽きることも際限もない。その喩例のように第二離垢地もすべての戒律と禁戒が生じる場所である。(3)象鼻山は一切の宝が生じる場所である。そのように第三發光地も世間の禪定と神通力が生じる場所である。(4)仙人山は神通力をもった仙人が生じる場所である。そのように第四焰地は道と道ではないものを区別する知の生じる場所である。(5)持双山はた

⁴⁷ *Daśabhūmikasūtra*. 荒牧 1974: 323.

⁴⁸ *Daśabhūmikasūtra*. 荒牧 1974: 324.

⁴⁹ *Daśabhūmikasūtra*. 荒牧 1974: 338.

くさんの神変をもつヤクシャの生じる場所である。そのように第五難勝地も神通力と神変とすべての変現の生じる場所である。(6)馬耳山はすべての果実の生じる場所である。そのように第六現前地も縁起と入ることとに熟練している。(7)大地を保持する山は清らかでたくさんの神変をもつ者の生じる場所である。そのように第七遠行地に住する者も尽きることを知らない方便と智慧とに熟練している。(8)輪圍山は清らかで自在なる者の生じる場所である。そのように第八不動地の場所も菩薩を明らかに自在になす場所である。(9)頂きをもつ山は清らかで天ではない神変をもつ者の場所である。そのように第九善慧地の場所も有情の〔不生としての〕生と〔不滅としての〕滅のすべての原因の生じる場所である。(10)妙高山は原因である宝の本質を清浄にし、たくさんの神変をもつ衆生の生じる場所である。そのように第十法雲地における場所も、如来の力と無畏と混ざることのない仏法などの生じる場所である⁵⁰。

例えば、宝が大海から生じ、大海から説かれるように、これらの菩薩の十地も一切智性より生じ、一切智性から説かれる。またこうである。大海は十相により奪われることがないので、大海である。十とは何かと言えば、(1)どんどん深くなっていくことと、(2)死の味が存在しないことと、(3)他の水が名称を〔取ることを〕捨てることと、(4)〔塩で〕一味であることと、(5)宝がたくさんあることと、(6)甚深ではるかに深いことと、(7)広大で大きなことと、(8)多くの生物が住んでいることと、(9)一定の海岸線を超えないことと、(10)大きな雨雲の雨をすべて取っても満ち足りないことである。同じように、菩薩も十行により奪われないので、「菩薩」と言われる。何が十なのかと言えば、(1)菩薩の歡喜地において誓願〔をなし、一切の思惟にこの法をおろして入る〕どんどん深くなっていくことと、(2)第二地において悪い戒律の味が存在しないことと、(3)第三地において世間に縛られた名称を捨てることと〔粗い分別の効力である〕、(4)第四地において〔他の欲望がなく〕仏への信解を半分にせずに〔多くなく〕、一味であることと、(5)第五地において方法と神通が無量なので世間のなすことが明らかに成立した〔誰かのために何らかの利益の〕宝がたくさんあることと、(6)第六地において縁起〔順観と逆観〕が甚深ではるかに深いことと、(7)第七地においては慧と区別すること〔前のものより智慧と分別を廣大にすること〕に長けていることにより広大で大きなことと、(8)第八地において〔論難を離れることで〕大をよくを実現し、あらし出されて、多くの生物が〔相續を見る〕住んでいることと、(9)第九地において解脱が奥深く〔三時の三空を知ること〕、すべての有情の行いを如実に理解することにより〔煩惱により寂靜と知恵を満たそうとしないので〕一定の海岸線を超えないことと、(10)第十地において〔十法の仏法を解説する

⁵⁰ *Daśabhūmikāsūtra*. 荒牧 1974: 344-347.

ことで] 一切の如来により秘密の法の雲の雨を取っても、満ち足りないことである⁵¹。

2.2.3 またこうである。例えば、[(1)マニ宝は大海に産し]、(2)マニ宝の精練師が宝を精練し、(3)美しい形にし、(4)清浄にし、(5)さらにきれいにし、(6)上手に孔があけられ、(7)宝の紐が正しく通っており、(8)宝が瑠璃の幡幢の上に置かれ、(9)一切の光を生じ、(10)王が賞讃をする。宝の十種を超えて、とても勝れたものになる時に、一切の衆生に対して宝により有益なものが近くに存在するであろう。そのように、一切の菩薩は一切智性において、(1)心である宝を生じてから、(2)頭陀の功德と戒律と禁戒[樂行]と難行によりよく精練し、(3)[三地における四] 禅定と[三] 解脱と[八千万] 三昧と定によりよく集中し、(4)[資糧道などの第四地における] 道の[七] 支分の相により清浄になり、(5)[第五地における見と行による] 方便と神通によりさらにきれいになり、(6)[第六地における] 縁起により[順逆の] 孔があけられ、(7)[第七地では不二を考察することで] 方便と智慧の宝の紐が正しく通っており、(8)[第八地では三身の働きをもって] 自在なる瑠璃の幡幢の上に置かれ、(9)[第九地では] 衆生の[部分をもつ者たちの] 行いをよく見て、聞[思修]の智慧の光が生じ、(10)[第十地では] 法の[その大宝としての] 王が仏により賞讃されるであろう。その時に「一切智」と言われる⁵²。

2.3

2.3.1 [また合わせてから解説する] それから初地ではほとんどが[一洲において自在を得る] インドを支配する自在王になり、[男子と女子などの] 大施により衆生を集め、衆生の食欲の垢から転じることに熟練している。[他の調伏の支分のため家から家におらず] 出家してから一瞬の間に百の三昧を得て、定に入り、百の仏を見て、百のその神力を知り、百の世間界を動き、百の世間界に行き、百の世間界を躡わし、百の衆生を成熟させ、百劫に住し、三つの法門を躡わし、内外の百の極端を知り、百の身体に変化し、それぞれの身体を廻し、百の菩薩が百に変化する⁵³。

2.3.2 同じように、第二地では四大州の転輪聖王となり、法の地を自在に得て、七宝をもち、衆生たちの破戒を退け、十善業道を行うことに熟練している。出家すれば前の功德を千に増やして繰り返される⁵⁴。

2.3.3 第三地ではほとんどがインドラ天になる。[想を知ることで] 衆生が望む食欲から転じ、方便である欲望の泥沼から転じることに熟練している。それを望めば、三昧などの十万に増えたものを自在になす⁵⁵。

⁵¹ *Daśabhūmikāsūtra*. 荒牧 1974: 348-349.

⁵² *Daśabhūmikāsūtra*. 荒牧 1974: 349-350.

⁵³ *Daśabhūmikāsūtra*. 荒牧 1974: 64-66.

⁵⁴ *Daśabhūmikāsūtra*. 荒牧 1974: 90-91.

⁵⁵ *Daśabhūmikāsūtra*. 荒牧 1974: 114-115.

2.3.4 第四地ではほとんどが須夜摩天として生じる。〔菩提の方向の〕衆生〔女子などに執着するものたち〕の有身見を本当に征服することが〔目指すことに関して〕最高であり、清浄の見〔空性〕に留まることに熟練している。それを望めば、三昧などの前のものが一千万となる⁵⁶。

2.3.5 第五地では觀率天王として生じる。外道のすべての場所を退けることに熟練しており、衆生が〔勝義の〕一つの真理を設定することに熟練している。それを望めば、三昧などが百億となる⁵⁷。

2.3.6 第六地ではほとんどが善化天となる。衆生の〔邪見〕明らかな我慢を断じることにより熟練しており、〔内外の〕縁起に入ることに熟練している。望めば、三昧などが一兆となる⁵⁸。

2.3.7 第七地では、他化自在王となる。望めば、三昧などが百千億兆となる⁵⁹。

2.3.8 第八地ではほとんどが小千世界の主である梵天の威力と大力を得るであろう。望めば、三昧などが三千世界の原子の粒子となる⁶⁰。

2.3.9 第九地では、ほとんどが二千世界の主となる。望めば、三昧などが百千万億阿僧祇の仏国土の原子の粒子となる⁶¹。

2.3.10 第十地に住する菩薩は、ほとんどが大自在の地に住することを得る。そこでは〔それ以前の内では〕「無垢」と言われる三昧が現前し、それが現前するやいなや「十百千の三千大千世界と法界の区別に入る」〔過去仏の意図から〕と「菩提座の集まりをもつ」〔未来仏の意図から〕と「現在の仏〔の意図〕が現前する」と言うものが現前する〔異なるものになる〕。それらなどの〔仏を超えない意図〕百千万億阿僧祇の三昧が明らかになる。最後に〔諸仏と一つの意図のみである〕一切智と「殊勝のない灌頂を授けられる」と言うもの〔知恵〕が現前する。それが現前するやいなや、三千大千世界と同じ一切の宝により飾られるので、〔一切の悪い顛現が沈んでから〕世間のすべての境を超えており、出世間のすべての善根より生じ、〔顛現が何に似ているのかといえば〕瑠璃のマニ宝の花茎をもち、梅檀王は比べることのできない慈悲をもち、金剛の大悲のエメラルドをもち、三千の極微の数と等しい蓮華座に座る。菩薩の身体もそれと同じになる。その時に一切の大地が動く。すべての悪趣は流れを中断する。同じ行をなす菩薩がそこに集まる。その時に身体骨や左右の肩などからも十百千万もの光が生じる⁶²。

⁵⁶ *Daśabhūmikāsūtra*. 荒牧 1974: 137-138.

⁵⁷ *Daśabhūmikāsūtra*. 荒牧 1974: 162-163.

⁵⁸ *Daśabhūmikāsūtra*. 荒牧 1974: 196-197.

⁵⁹ *Daśabhūmikāsūtra*. 荒牧 1974: 228-230.

⁶⁰ *Daśabhūmikāsūtra*. 荒牧 1974: 265-267.

⁶¹ *Daśabhūmikāsūtra*. 荒牧 1974: 300-302.

⁶² *Daśabhūmikāsūtra*. 荒牧 1974: 309-312.

これらは彼等が成熟した略義だけを示したものである。詳しくは『現観莊嚴論』や『十地経』や『入中論』などの論書から知るべきである。

2.4 この十地 [それぞれ] においても [熟練者の見解で] まず最初に、識別に熟練し、第二に得ることに熟練し、第三に増大することに熟練し、第四に損なわないことに熟練し、第五に究竟に行くことに熟練している。識別の熟練とは、従わない主張を滅し、対治を起こすことに熟練していることである。 [対治の方向は何かと言えば] 地の方向 [浄化] に従わない十の対治とは十智である [下の地より知恵は大きい]。得ることに熟練しているとは、地に入ることに熟練することであり、 [どこかに入って修習して] 地に座り、 [前と下の] 地の殊勝に熟練することである。 [下から上に] 増大することに熟練しているとは、他処に広げ、地の殊勝を上 [入ってから] 広げるその地に住し、地をさらに広げる殊勝に熟練することである。地を完全に損なわないことに熟練しているとは [上から下へ行かないので]、大乘で、低い地に行かず、不退転に熟練することである [十章のこの結果の通り完成するだろう]。究竟に [行かず] 熟練しているとは、菩薩の [十] 地の究竟から如来の地に入ることに熟練することである。それらの法はすべての教誡において知るべきである。

そのように十地に住する菩薩は [下の地にある菩提心に対する力から]、一切法の自在になるので、如来たるものと言われ、 [仏を見てから] 完全に悟った仏ではない。

3 では、完全に悟った仏には何によりなるのかと言うならば、十地の法性が戲論を離れているように、「功德」の章と、「懺悔」の章と、「心の摂受」の章と、「不放逸」の章と、「正知」の章と、「忍」の章と、「精進」の章との八つによる功德が色身を完全にし、「禪定」と「智慧」の二章により法身を完全にする。

3.1 それもどのように完全になるかは、その十地の菩薩が、法界を明らかにする無分別の本質としての八章の意味を加行道と無間道と解脱道と解脱智の見道において修習することである。加行道とは、八章の目的である色身を得るために修習を準備することである [一切相]。無間道とは、そのようにその始めの準備を何によっても中断せずに修習することである [無間道の頂]。解脱道とは、世間の分別を離れた後に利他における無礙なる色身の能力をもつことである [一刹那における菩提]。解脱智の見道は、色身による宝や如意樹のように無分別のままに菩薩には受用身と声聞・独覚には変化身としてである [生じる仏地を完成する]。

3.2 また、その十地の菩薩は、法身を明らかにする無分別の自性としての [禪定と智慧の] 二章の意味をは加行道と無間道と解脱道と解脱智の見道において修習することである。加行道は、二章による目的である法身を得るために修習することを準備することである [一切相]。無間道とは、そのようにその始めの準備を何によっても中断せずに修

習することである〔無間道の頂〕。解脱道は「智慧」の章に、

空性の習気を修習することにより事物の習気は捨てられるであろう⁶³。

と説かれているので、此岸に見えるすべての相を捨て、法身の原因である無礙なる能力をもつことである〔一刹那〕。解脱智の見道は、その法身が知恵の流れを断じることである〔仏地〕。

知恵の流れを断じることの理解は、法身の場合は、その知恵は〔常に見えるままに〕存在するものでもなく、〔相として見えるままに〕非存在でもなく、両者としても認められず、総じると、〔現在の〕輪廻の有分別のこの知恵の相続により領受される一因を認めず、能取と所取の一切の分別をさらに捨てた後に、その対象がないものを「寂靜」と言い、「法身」と言う。それ故に、

いつであれ存在と非存在が慧の前にはないその時に、他はないので、対象がなく、寂靜である⁶⁴。

と説かている。

また、知恵の流れを断じることの理解は、軌範師アクシャヤマティが聖マンジュシュリーに質問をした際にも、「聖者たる方よ、現在のこの有分別の知の相続は、仏の知恵をよく行じるのか、智慧さえも知覚しないのか」と質問するので、

勝義として慧の行境はない。慧と声は世俗である。

と述べられてから、「現在のこの知の相続が領受するのではない」と言う。軌範師が質問をして、「その勝義が慧の対象にならないのならば、どのように領受するのか」と言うならば、此岸を見る側から求めるので、領受することがないのである。しかし異門の勝義諦を解説した、と言うのならば、内空性と外空性と内外空性と空空性と大空性などを解説するので、では此岸を見ることの異門は空であるが、勝義諦はそれぞれの行為をなす一方の側に存在すると考える者に対して、「勝義は空性」とお説きになられたことにより勝義としては分別〔の知恵〕も離れているとおっしゃったので、総じては此岸を見る一切の分別は沈んでいることにより、衆生とその利益をなす原因などを離れてもい

⁶³ *Bodhicaryāvatāra* 9.33ab.

⁶⁴ *Bodhicaryāvatāra* 9.35.

るので、「知恵の相続を断じる」と言う。

では、知恵の相続を断じてから利他の分別も存在しないのならば、色身の二つも成立しないことが論理である、と言うのならば、それぞれの行為と部分の通りに存在し、菩薩と声聞と独覚と異生などに対する分別の「知恵」は存在しないままに現れる。すなわち、

如意珠と如意樹が願を満たすように、所化の誓願により勝者の姿が現われる⁶⁵。

と説かれている。

では、マニ宝などと同じで、「一切の福德の顕現なのでマニ宝などは分別がなく」仏の神力が存在せず、衆生と声聞と独覚と菩薩がそれぞれの福德の部分にいる、と言うのならば、「福德の集まりではないものは顕現しないから」そうではない。例えば、水月の影像が現れるときに、水なしに月が現れることはなく、月なしに水の中に現れる原因はない。その喩例のように水と同じ菩薩などが存在しない場合も色身が現れる地は存在せず、月と同じ仏が存在しない場合も色身が生じる原因は存在しない。それ故に、そのように分別がなくとも、有学の道により集められる際に、一切の行は対象である衆生を認識してから成立するので、「過去の誓願の」分別がないままに色身が生じる。それも以前の誓願の力のみから成立する。例えば、バラモンが過去に魔術師の身体に依り、他者に対して有益な想が成立したことにより、そのようにバラモンが成立させた前の師が死去し、利益をなす分別がなくとも有益であるように、完全なる仏には現在の分別「知恵」がなくとも過去の誓願の力により色身による有情利益を菩薩などの想に従ってなすからである「それ故に、両者を制圧することがどうして大きいのか」。「宝などは無分別だけの喩例である」この正しい喩例が解説されるので、

例えば、魔術師の柱が完成してから死去し、彼が死んでも久しくその毒などを消すように、菩提行に従って成立した勝者の柱も菩薩が涅槃しても目的はすべてなす⁶⁶。

とお説きになられているから。

4 ここに質問をする。『入菩薩行論』の十章を修習して、「現在の煩惱とその対治を解説してからおられるので」小中の資糧道の際の修習は理である。加行道から仏地に至るま

⁶⁵ *Bodhicaryāvatāra* 9.36.

⁶⁶ *Bodhicaryāvatāra* 9.37-38.

でを十章の教誡によりなすことは理ではない。そのようならば、その十章は名称が一つで、意味も一つになるからである。その十章により仏地以下の教義をなしているのか、章の名称は一つではなく、意味も一つではなく、それぞれに適するものが理であるのかと言うのならば、その解答には矛盾はない。例えば、家の屋根は十九階に一つあると言うが、その中に上の順序通りに次に地獄、それから餓鬼、畜生、人、アスラ、天にも四大天王と三十三天と靚率天と樂化天などがあると言うならば、灯火は一つの有対により至ることので、その地獄などが取り去られるところに灯火が一つだけ成立するのではないことをそれにより明らかにする。その喩例のように『入菩薩行論』の十章の名称と意味は一つではなく、それ自身により資糧道から仏地に至るまでのいたるところで明らかになり、成熟する。それ故に、

これらのすべての支分をムニは智慧のためにお説きになられた⁶⁷。

と言うので、これらの支分は十の章であり、智慧とは智慧波羅蜜であり、正しく悟った仏である。ムニとは仏であって、原因である衆生から結果である仏を得る方法としておられる。

また例えば、一つの水を所依の者の力により、地獄が鉄水を、餓鬼が墨汁を、人が水を、天が甘露を見ることと同じく、菩薩が資糧道により『入菩薩行論』のその十章を資糧道の助伴と方法として見て、加行道と十地と仏地に至る助伴と方法として見て、理解により区別されるが、言葉を集めたものの名称と意味により区別されない。

例えば、「常啼菩薩にとって、法上菩薩の一切法は種々なものなので、智慧波羅蜜は種々なものである。大海は限りがないものであるから、智慧波羅蜜は限りがないものである」などとお説きになられているので、多くの三昧が生じてから座す。我々はその言葉の集まりを見て、三昧が生じ、それによりいたる場所に行く方法は同じでないことはない。『入菩薩行論』のこの章は、自分がなすことを説いている。

また例えば、デーヴァダッタやヤジュニヤダッタやプールナやア Niludda などの多くの人々が、一人に対し共通の馬が一頭あると言うならば、その馬のようにデーヴァダッタが乗った際のデーヴァダッタの馬とヤジュニヤダッタが乗った際のヤジュニヤダッタの馬と言うように、馬と同じ『入菩薩行論』のこの十の章は、デーヴァダッタなどと同じ多くの人と同じ資糧道の時に集まり、行く方法で、そのように加行道と十地と仏に至るまでの『入菩薩行論』のその十章を助伴と、行くことを方法として知るべきである。

⁶⁷ *Bodhicaryāvatāra* 9.1ab.

『入菩薩行論』は輪のような道が続いて生じる人の次第を十九度まわすことをディーパンカラシュリージュニャーナが著わす。完成する。

『入菩薩行論』をまとめたこの大きな馬に乗る人は多いが、完成する人は少ない。ある者は耳によく聞こえる話として解説し、ある者は教義を解説しても間違っているだけで、ある者は単にタイトルを解説し、シャーンティデーヴァの意図を妨げている。

目的を浪費した解説は多く、すべての有情の利益は少ない。マンジュシュリーとマイトレーヤの意思を意図して、シャーンティデーヴァが広く解説したものと同じように、

比丘エーラダーリと、同じくヴィールヤヴァジュラと、長老マハーラトナと、スヴァルナドヴィーパの師 [ダルマ] パーラと、偉大なディーパンカラシュリーと、グンタンの翻訳官ナクツォと、偉大な仙人マハープラジュニャーシャーンティまでの敬慕の見解と行を清浄にし、今でも私は喜んで行じる⁶⁸。

⁶⁸ 斎藤 2002, pp.544-545.

第6章 『十万頌般若撰義』

はじめに

チベットの藏外文献に、Atiśa に帰される般若経の概説書である『十万頌般若撰義 (Śatasāhasrikāprajñāpāramitā)』を見ることができる。同論は、『十万頌般若経』の内容を簡略にまとめた著書であり、その奥書には、その著者として「a ti sha」という名称があげられている。テンギェル所収の著書が Dīpaṃkaraśrījñāna に帰されているのに対して本論では、その著者は通称である Atiśa で呼ばれていることになる。しかしながら、このことは、彼を『菩提道灯論』の著者である Dīpaṃkaraśrījñāna と別人であるというのでもなく、かと言って、同一人物であると積極的に論証する根拠にもならない。現時点で言えることは、Atiśa に帰されるテキストが手元に存在するという事だけである。

Dīpaṃkaraśrījñāna の著書に見られる『十万頌般若経』

本論に入る前に、Dīpaṃkaraśrījñāna に帰される著書において言及される般若経のうち、『十万頌般若経』に対する言及を見てみる。彼の多くの著書は、偈頌で著された小部文献であり、直接に経証として同経からの引用が見られる著書は限られており、以下の論書のみである。

最初に、彼の主著である『菩提道灯論』に対して自らが著したとされている『菩提道灯論細疏』における引用を見てみる。同論では、根本偈 163-164 の「適切な一つの対象に対して意識をよく集中するべきである」という句に対する解説箇所において、『十万頌般若経』が引用される。

禪定に対する思いを僅かでも引き入れる比丘は、衣服に対する思いが少なく、食事に対する思いが少なく、皮膚の色は油を塗ったようである¹。

というものである。ここでは、ヨーガ行が止にとどまることで少欲知足が完成することの典拠として引用されている。同論における引用はこれだけであるが、他の『般若経』については、『金剛般若経』と『善勇猛般若経』が一度ずつ引用される、『般若経』のタイトルが言及されるだけである

前掲テキストの次に大著となる『中観説示開宝篋』には、般若経からの引用が六箇

¹ Tib. D. No. 3948, Khi 276a4-5, 望月 2015a: 122. ただし、引用箇所の確認はできていない。

所に見られ、最初のもが『十万頌般若経』からのものであり、その他のものは『八千頌般若経』からの引用である。『十万頌般若経』の引用は、菩提心の性質に関する文脈において見られる。

私は、何も得ることがなくても菩提の心髓を明らかに悟っている²。

というものである。これに、『八千頌般若経』からの引用が続き、発菩提心の典拠として『般若経』に依拠していたことがわかる。

Dīpaṅkaraśrījñāna にとって『般若経』は比較的重要な経典の一つであったことは確認できるが、その中でも『八千頌般若経』の引用が最も多い。それに次いで『十万頌般若経』の名称を特定して二度引用していることを考えると、彼にとって『十万頌般若経』は『八千頌般若経』と並んで、身近の『般若経』であったことがわかる。それ故に、彼が『十万頌般若経』から読誦用の文献を著述する動機付けは、十分なものがある。

『十万頌般若経』の解説書について

インドで著された『十万頌般若経³』に対する注釈書に関しては、チベット大蔵経のテンギェルに次の四書が収められている。

1. Smṛtijñānakīrti, *Prajñāpāramitāmātrkā-śatasāhasrikābr̥cchāsana pañcaviṃśatisāhasrikāmadhyasāsanāṣṭādaśasāhasrikālaghuśāsanaṣṭasamānārthaśāsana (Yum, shes rab kyi pha rol tu phyin pa rgyas par bstan pa 'burn dang 'bring du bstan pa nyi khri lnga stong dang bsdu te bstan pa khri brgyad stong pa rnam mthun par don brgyad kyis bstan pa), D. No. 3789, Kha 182b1-243a7, P. No. 5187, Da 207a4-275a8.
2. Dharmasīrī, *Śatasāhasrikāvaraṇa (sTong phrag brgya pa'i rnam par bshad pa⁴). D. No. 3802, Ta 204a3-270a7, P. No. 5203, Da 256a7-330b8.
3. Daṃṣṭrasena, *Śatasāhasrikāprajñāpāramitābṛhaṭṭikā (Shes rab kyi pha rol tu phyin pa 'bum pa'i rgya cher 'greI pa). D. No. 3807, Na 1-331a7, Pa 1-252a7, P. No. 5205, Na 1-392a8, Pa 1-308a8.

² Tib. D. No. 3930, Ki98a2-3. Yum chen mo 'bum pa. 引用箇所の確認はできていない。

³ Cf. Conze 1978: 31-34, 三枝 1971: 68-69, 渡辺 1997: 70-71. 同経の写本に関する情報に関しては、木村 1992: 147 を参照。また、同経と *Pañcaviṃśatisāhasrikā* との関係について、副島 1980: 82-86 を参照。

⁴ Obermiller 1933: 10, n. 1 は、このテキストがインドで作られたことを疑っている。

4. Damṣṭrasena, *Śatasāhasrikāpañcaviṃśatisāhasrikāmadhyaśāsanāṣṭādaśasahāsrkā-prajñāpāramitābrhaṭṭikā (Shes rab kyi pha rol tu phyin pa 'bum pa dang nyi khri lnga stong pa dang khri brgyad stong pa'i rgya cher bshad pa), D. No. 3808 Pha 1-292b3, P. No. 5206, Pha 1-333a6.

このうち、第一と第四は、『十万頌般若経』だけに対する注釈書ではなく、『二万五千頌般若経』と『八千頌般若経』に対する注釈も含んでいる。したがって純粋な注釈書は、第二と第三のみとなる。

チベットにおいては、次の二つのテキストが知られている:

5. Atiśa, Śatasāhasrikāprajñāpāramitā (Shes rab kyipha rol tuphyinpa stong phrag brgya pa'i don ma nor bar bsdus pa).
6. Klong rdol bla ma ngag dbang b1o bzang, 'Bun gyi 'grel rkang brgya rtsa brgyad ngos 'dzin. *The Collected Works of Klong dol Lama*, New Delhi, 1973, Da 1-16a⁵.

これらの注釈書の数を考えると、『十万頌般若経』は、その長さにもかかわらず、注釈書を著すべき経典の一つと認識されていたことがわかる。

『十万頌般若撰義』のテキストについて

『十万頌般若撰義』のサンスクリット原点は現事時点で確認できておらず⁶、チベット語訳が知られているだけである。今回利用することができたのは、以下の版である⁷:

- SB. 'Phags pa shes rab kyi pha rol tu phyin pa 'bum bsdus pa'i snying po zhes bya ba bzhugs so. *Jo bo rje dpal ldan a ti shas gsungs so*. n.p., 1972. Xylographic print from blocks preserved at Tragang tok (Brag sgang tog) in Solukhumbu, Nepal. N-Tib 72-903954⁸.

- SD 'Bum gyi bsdus don snying po dang bcas pa bzhugs so. Delhi, 1967. R 1972-881⁹.

⁵ 吉水 1989, No. 2382; 金倉、山田、多田、羽田野 1953, No. 6542.

⁶ 以下に述べるように、本テキストは『十万頌般若経』の最初の部分を抜粋したものである。このことから、同経のサンスクリット・テキストから本テキストのサンスクリットを推定することは容易に可能となる。

⁷ この他に、M. Lalou, *Catalogue du fonds tibétain de la Bibliothèque Nationale*, IV 1. Les Mdo-Man, Paris, 1931, No. 102, f. 322b-328a がある。Conze 1978: 34.

⁸ テキストは、横が長い版で、一枚に六行で組まれている(1-6b4)。

⁹ テキストは、比較的大きな文字で、一枚に四行(ただし 1b-2a は三行)で組まれている。本テキスト (1-18b4)

SK *sTong phrag brgya pa'i don ma nor bar bsdus pa or 'Bum bsdus*. The essential meaning of the *Śatasāhasrikāprajñāpāramitā*. An instruction of Atiśa rendered into verse by the Nepalese A-su printed from the blocks preserved in the bKra shi zhugs gling (Śa śul) Temple. Kelang, 1968. I-Tib 73-904094¹⁰.

ST *Shes rab kyi pha rol tu phyin pa 'bum bsdus pa dang / gdon chen bco lnga zhi byed / tskra bcu gsum gzungs bcas bzhugs so*. Tibetan Cultural Printing Press. Dharamsala, 1990¹¹.

このうち、SD と SK は比較的近い伝承の版に基づいており、SB はそれらより異なるテキストである。SB は本テキストのみしか収められていないのに対し、SD と SK はそれぞれ別なテキストも添えられている。

SD は筆記された写本であり、他の版には付されている編集者による後書きの部分を欠いている。そのため、読誦するために後年になって編集されたテキストのように思える。

洋装本として出版されている ST は、他の三つのテキストとは著しく異なっている。本書を作成するための元になった版は、他の三つの版とは全く異なる伝承をもっているように思える。したがって、この小さなテキストに三つ、あるいは少なくとも二つの異なる伝承があったことがわかる。

『十万頌般若撰義』のタイトルについて

チベット語訳テキストの冒頭部分では、そのサンスクリットのタイトルを *Śatasāhasrikāprajñāpāramitā* と経典のタイトルをそのまま引いてきている。それに対し、そのチベット語訳は、*Shes rab kyi pha tu phyin pa stong phrag brgya pa'i don ma nor bar bsdus pa* と固有のタイトルを付している。後半部分は、「意味を誤りなくまとめた」という意味になる。サンスクリットを想定するならば、“ma nor ba” に関しては、“abhrānta”, “saṃdarśana” を¹²、“don bsdus” に関しては “piṇḍārtha” を¹³ 想定すること

に続いて、*Śatasāhasrikāprajñāpāramitāgarbha* (*Shes rab kyi pha rol tu phyin pa stong phrag brgya pa'i snying po*) というテキストが収められている(19a1-b4)。

¹⁰ テキストは、横が短い版で、一枚に五行で組まれている。本テキスト(1-19b4)に続いて、*Sarvatathāgatahṛdaya* (*De bzhin gshegs pa thams cad kyi snying po*) というテキストが収められている(19b5-21a5)。

¹¹ ブック・スタイルで出版されたものであり、一ページ十六行からなり、本テキスト (pp. 3-16) に続いて、*Byis pa'i gdon chen bco lnga zhi bar byed pa dang gzungs le tshan brgyad* というテキストが収められている(pp. 17-31)。

¹² Chandra 1971: 1767.

¹³ Chandra 1971: 1155.

ができるであろう。他方、SB版の最後には¹⁴、「大十万頌般若経の心能を集めた小十万 (*'Bum chen mo shes rab hyi pha rol tu phyin pa'i snying po bsdus pa'i 'bum chung*)」という、「心髓撰集 (*Garbhasmṅgraha*)¹⁵」や、「小十万」という名称も見られる。

では、同論に固有のタイトルが存在していたのであろうか。以下に考察するように、本論は、この膨大な長さの経典を読むことが困難な者が、このコンパクトにまとめたテキストを読むことにより、その読誦の功德を得ることを目的として編纂されたテキストである。チベット語訳に付されたテキストの略称が一致していないことや、このテキストが「小十万」と呼ばれていたことから、本テキストの名称は経典と同じ *Śatasāhasrikāprajñāpāramitā* であり、同経の縮小版と認識されていたのであろう。チベット語訳に付されたタイトルの後半部分は、チベットに伝わった後に付されたものと思われる。

『十万頌般若撰義』の構成

本テキストでは、*Śatasāhasrikāprajñāpāramitā* の導入部をそのまま引いてきた後に、同経に説かれる仏教の教義が列挙されている。

最初に、五蘊、十二処、六識、触、六受、六界、十二縁起、十二作者、二十七天のそれぞれの項目が列挙されている。

続いて、その目的があげられる。すなわち、色から一切智¹⁶までの浄化と、色から一切智までの円満とであり、前項により浄化され、円満になると表現されている。

続いて、その具体的な方法が列挙されている。すなわち、六波羅蜜、十八空性、三十七菩提分¹⁷、四聖諦、四禪、四無量、四無色定、八解脱、九次第定、三解脱門、[六]神通、三昧、陀羅尼門、十八不共法¹⁸、四沙門果、三智、智の優先性、智の無障無礙性が説かれている。

最後に、「菩薩たちが世尊が説かれたものを賞讃した」というまめとの句が述べられ、テキストの本編は終了する。

これらの教義を、経典自身に求めると、同経の第二章「初分学観品」の最初の部分を

¹⁴ チベット語訳のそれぞれの版の最初のページには、SB: *'Bum bsdus pa'i snying po*, SD: *Bum gyi bsdus don snying po dang bcas pa* というものも見られる。

¹⁵ *Dīpaṅkaraśrījñāna* に帰される『心髓撰集』のチベット語タイトルの問題に関しては、望月 1998b: 205-206 を参照。

¹⁶ 色・受・想・行・識・眼・耳・鼻・舌・身・意・一切智である。

¹⁷ 四念住・四正断・四神足・五根・五力・七等覚支・八聖道。このうち、最初の五項目に関しては、彼の *Bodhisattvacāryāvataṛabhāṣya* において詳論されている。Cf. 望月 1998c: 178.

¹⁸ ここでは「如来の十力と四無畏と四無量と大慈と大悲と大喜と大捨と十八不共法と」と説かれており、「十力・四無畏・三念住・大悲」との十八項目とは別の項目と思われる。

はじめ¹⁹、多くの箇所に見られる。従って、特定の箇所説かれている教義を引いてきたというのではなく、経典に繰り返し説かれている教義を法数の下にまとめたものである。

コロフォンについて

本テキストは、以上のように経典の最初の部分からの法数などをまとめただけのテキストであり、著者（というよりは編者）自身の言葉は何も述べられていない。他方で、そのコロフォンから興味深い情報を得ることができる。ただし、これはいつ頃、誰により記されたものなのかは明らかではなく、その記述が、本テキストが本当に *Atiśa* のものであるということを保証するものでもない。

まず最初に、

尊者がネパールにおいてお与えになり、ネパール人が偈頌で述べたものを完成する。

とある。この情報から、本テキストは彼がパネルに滞在していた際に著されたものとなる。彼がネパールに滞在していた年は、1038年から1041年間のインドからチベットへ向かう旅の途中にあたる²⁰。次に、本テキストのオリジナルから現前にあるこのテキストまでの経緯としては、著者が口頭で伝えたものをネパール人が述べ、それが筆記され、チベット語に訳されたとされている。したがって、本テキストの原初の形が文字で書かれたものであったのかは疑問である。

またビンビサーラ王がその経典を一日に百度読むことにより息子の命が救われた話をとりあげ、

この小さな十万を一度述べれば、五無間などの一切の罪過が浄化され、清浄になってから、円満なる福德を得るであろう。

と述べられている。そして最後に、

Atiśa は十二年間経典を見られたので、この小さな十万だけでも大きな利益がある

¹⁹ P. Ghoṣa ed., *Śatasāhasrikāprajñāpāramitā*, Calcutta, 1902, pp. 56-67.

²⁰ Cf. A. Chattopadhyaya, *Tibetan Chronological Tables of 'Jam-dbyangs bzhed-pa and Sum-pa mkhan-po*, Sarnath, 1993, 羽田野 1987: 75-76, Alaka Chattopadhyaya 1967: 308-311.

ので、後世の人がこれを念誦することはとても重要である。

と述べている。したがって、この文章が記された時点では、本テキストは経典にどのような教義が説かれているのかを解説するという性格のものとしては捉えられておらず、膨大な経典を読むことができない者が読誦するためのテキストとして捉えられていたことがわかる。すなわち、テキストの内容を理解することよりも、それを繰り返し読むことが重要であるとされていたテキストである。

まとめ

本テキストは、Atiśa に帰されるテキストではあるが、前述のように、彼自身の言葉ではなく、その大部分は『十万頌般若経』からの引用文から再構成したものである。そうとは言え、ここに引用される経文の分量は、同経の全体から見れば、極僅かなものであり、またそのトピックのほとんどはその冒頭の部分から回収することができる。したがって、本論は経典全体の構成を把握した後に、重要なポイントを抜き出してテキストを再構成したものであるというよりも、読誦するためのテキストとして簡易に編纂されたものであろう。それ故に、そこから著者独自の思想や解釈を抽出することは難しい。

では、本書が Dīpaṃkaraśrījñāna に帰される一連のテキスト群と同一著者によるものと考えていいのであろうか。それを疑う根拠が存在するとするのならば、本論は、その他の著書とは異なりチベット大蔵経に収められておらず、異なる伝承系譜を有しているということをあげることができる。しかし、これは消極的な根拠にしかなりえない。また本論が彼の著書であるということを疑う説が存在する、ということは、筆者の知見するところではない。他方で、チベット語訳者に関する情報もなく、いつ頃チベットに伝わったのかが明らかではない。今後の検討余地として、本テキストがいつ頃からチベットで知られるようになったのかと、彼が特定の経典、すなわち多くの大乘経典の中でも『十万頌般若経』を読誦することを奨励していたのかということをあわせて、その著者を検討する必要がある。現時点では、彼が所持していたとされる読誦用経典がネパールに伝承され、それがチベット語に翻訳された、ということになる。

『十万頌般若波羅蜜撰集』和訳

インドの言葉で、*Śatasāhasrikāprajñāpāramitā*²¹

²¹ SB のみ「七千 (*sha pta sa ha sri kā*)」とあるが、『十万頌 (*Śatasāhasrikā*)』、『七百頌 (*Saptaśatikā*)』の混

チベット語で、『十万頌般若波羅蜜²²の意味を誤りなく集める』

一切智の母²³に帰依をする。

次のように私が聞いたある時に、世尊は王²⁴舎城²⁵の鷲峯山に五千人の比丘の大サンガと、とても多くの菩薩摩訶薩と一緒におられた。すべての者も阿羅漢で、漏尽で、無煩惱で、自在を得て、心解脱し、慧解脱し²⁶、すべてを知り²⁷、象 [に似ており]、なすべきことをなしており、なすことをなし、重荷を捨てて、自分の目的を得て、存在への結合が完全に尽き、正知により心はよく解脱している菩薩摩訶薩たち²⁸と、聖アヴァローキテーシュヴァラと、スプーティと、アーナンダと長老たちと、大サンガと²⁹、天と人と非天³⁰などの究極の衆生たちに、世尊・如来・阿羅漢・等正覚仏・釈迦牟尼が六十兆那由多の光を放つことが見られ、三十二相と八十随好により飾られたものが明らかに現われた。それから長老たちが世尊に³¹帰依し、供養の異門³²である不可思議なものを供養し、与えて、世尊は長老たちに次のようにお説きになられた。

スプーティと、アーナンダと、長老たちと、菩薩摩訶薩が般若波羅蜜を確実に生じるように、あなたたちも挑みなさい。

六境と³³五蘊である。色、受、想、行、識である³⁴。

十二処から³⁵、六根である。眼、耳、鼻、舌、身³⁶意、色、声、香、味、触、法である。

識の意味は、眼識、耳識、鼻識、舌識、身識、意識である。

乱から生じた誤りであろうか。

²² STのみ「聖 (phags pa)」が付される。チベット大蔵経では、一般的に経典タイトルにはこの語が付されている。本テキストが『十万頌般若経』を凝縮したものであるのか、Atiśa による論であるのかの判断の相違が影響したのであろう。

²³ SBのみがこのように説き、他の版は「一切を起こした母 (thams cad bskyed pa'i yum)」とする。

²⁴ STは「世尊は甚深なる頭現という三昧から起きてから (gambhīravabhāsa)」という句が挿入される。

²⁵ SBは「王舎城」を欠く。

²⁶ SD, STは「慧解脱」を欠く。

²⁷ SBは、「知ること」とする。

²⁸ Śatasāhasrikāprajñāpāramitāsūtra (= ŚP), Ghoṣa, *op.cit.*, pp. 2-4.

²⁹ STは、「長老たちと大サンガと」を欠く。

³⁰ SB, STは、「非天と」を欠く。

³¹ STは、「世尊に」を欠く。

³² SBは、「異門を説いた」とし、続く句を欠く。

³³ SKは、「から(1as)」とするが、この「六境と」という句は、次の「十二処から六境と六根である」とすべき句がこの位置に来てしまったように思える。これがいつの頃からか、誤ったまま読誦されるようになったのであろう。

³⁴ STは、以下の項目(ただし「六根」は「法である (chos so)」とする)において「識と (dang)」のように、次の項に続けている。

³⁵ STは、「と (dang)」とする。

³⁶ SDは、「身と口と」とする。

触の意味は³⁷、眼触、耳触、鼻触、舌触、身触、意触である。

触の縁による受の意味は、眼触の縁による³⁸受と、耳触の縁による受と、鼻触の縁による受と、舌触の縁による受と、身触の縁による受と、意触の縁による受とである。

六界の意味は、地界、水界、火界、風界、虚空界、識界である。

十二縁起の意味は、無明、行、識、名色、六入、触、受、愛、取、有、生、老死である。

作者の十二処の意味は、我者、衆生、命、有情、養育、人、プドガラ、マヌの子孫³⁹、作者、受者、識者、見者である。

欲界の〔六〕種天⁴⁰が存在する。〔すなわち、〕四大王衆天が存在する。三十三天が存在する。夜摩天が存在する。親史多天が存在する。樂變化天が存在する。他化自在天が存在する。色界の十七種天⁴¹が存在する。〔すなわち、〕梵衆天が存在する。梵輔天が存在する。発会天が存在する。大梵天が存在する⁴²。光天が存在する⁴³。少光天が存在する⁴⁴。無量光天が存在する。極光浄天が存在する。浄天が存在する。少浄天が存在する⁴⁵。無量浄天が存在する。遍浄天が存在する。広天が存在する。少広天が存在する。無量広天が存在する。広果天が存在する⁴⁶。無繁天が存在する。無熱天が存在する。善見天が存在する。善現天が存在する。色究竟天が存在する。無色界には四天⁴⁷が存在する。〔すなわち、〕空無辺処天が存在する⁴⁸。識無辺処天が存在する。無所有処天が存在する。非想非非想処天が存在する⁴⁹。

色から一切智性まで⁵⁰の浄化の意味は、色を浄化し、色の浄化により受を浄化し⁵¹、受の浄化により行を浄化し、行の浄化により想を浄化し、想の浄化により識を浄化し、識の浄化により眼を浄化し、眼の浄化により耳を浄化し、耳の浄化により鼻を浄化し、鼻の浄化により舌を浄化し、舌の浄化により身を浄化し、身の浄化により意を浄化し、

³⁷ SB, SK は、この句を欠く。

³⁸ SB は、以下の項も「縁の (gyi)」とする。

³⁹ SB 以外は、この前に「余人 (shed can)」を入れるが、それでは十三項目になる。

⁴⁰ ŚP, Ghoṣa, *op.cit.*, p. 24. 2-13; Tib. D. No. 8, Ka 13a3.

⁴¹ ŚP, Ghoṣa, *op.cit.*, p. 24. 13-26.7; D. No. 8, Ka 13a3-14a4.

⁴² ST は、この項を欠く。

⁴³ SB, SK, ST は、この項を欠く。

⁴⁴ SB は、この項を欠く。

⁴⁵ SB は、この項を欠く。

⁴⁶ ST は、ここまでの三項を欠く。

⁴⁷ SP は、上記の箇所では「無色界の四天」には言及しない。

⁴⁸ SB は、この項を欠く。

⁴⁹ ST は、この後に、「六波羅蜜」から「如来の十力」までの項目が挿入されている。

⁵⁰ SD, ST は、「色から一切智性まで」を欠く。

⁵¹ SB は、以下の項目を含め、「色の浄化により、色を浄化し、受の浄化により」というパターンが続き、ST は、「色の浄化と、受の浄化と」とその原因にあたるものを欠いたパターンが続く。

意の浄化により⁵²一切相智までを浄化する。そのようならば、意が浄化され、一切相智までが浄化される。ここに二はない。すなわち二様になすべきでなく、それぞれでなく、異なることである。

色を完全にし、色を完全にすることにより、受を完全にし⁵³、受⁵⁴を完全にすることにより、想を完全にし、想⁵⁵を完全にすることにより、行を完全にし、行⁵⁶を完全にすることにより、識を完全にし、識⁵⁷を完全にすることにより、眼を完全にし、眼⁵⁸を完全にすることにより、耳を完全にし⁵⁹、耳を完全にすることにより、鼻を完全にし、鼻を完全にすることにより、舌を完全にし、舌を完全にすることにより、身を完全にし、身を完全にすることにより、意を完全にし、意を完全にすることにより、一切相智までを完全にする。すなわち、そのようならば意が完全になり、一切相智までが完全になる。ここに二はない。すなわち二様になすべきでなく、それぞれでなく、異なることである。

すなわち、施波羅蜜と、戒波羅蜜と、忍波羅蜜と、精進波羅蜜と、禪波羅蜜と、般若波羅蜜⁶⁰、内空性と、外空性と、内外空性と、空空性と、大空性と、勝義空性と、有為空性と、無為空性と、畢竟空性と、無際空性と⁶¹、散空性と、本性空性と、一切法空性と、自相空性と、不可得空性と、無性空性と、自性空性と、無性自性空性と、四念住⁶²と、四正断⁶³と、四神足⁶⁴と、五根⁶⁵と、五力⁶⁶と、七等覺支⁶⁷と、八聖道支⁶⁸と、四聖諦⁶⁹と、四禪⁷⁰と、四無量⁷¹と、四無色定⁷²と、八解脱⁷³と、九次第定⁷⁴と、[三] 解脱門⁷⁵の空性

⁵² SB は、ここに「識の浄化により識を浄化し」という句が挿入される。

⁵³ SB は、以下の項目も含め、「色の完全にすることにより、色を完全にし、受を完全にすることにより」というパターンが続く。

⁵⁴ ST は、「受」の項目が「声」となる。

⁵⁵ ST は、「想」の項目が「香」となる。

⁵⁶ ST は、「行」の項目が「味」となる。

⁵⁷ ST は、「識」の項目が「触」となる。

⁵⁸ ST は、「眼」の項目が「法」となる。

⁵⁹ ST は、「耳」の代わりに「眼識を完全に浄化してから、意識を完全に浄化する」と述べ、以下の説明を欠いている。

⁶⁰ ŚP, *Ghoṣa, op.cit.*, p. 56. 3-9; Tib. D. No. 8, Ka 36b2-5.

⁶¹ SB は、ここに「自相空と」が入る。

⁶² ŚP, *Ghoṣa, op.cit.*, p. 56. 9-11; Tib. D. No. 8, Ka 36b5-6.

⁶³ ŚP, *Ghoṣa, op.cit.*, p. 56. 11-57. 1; Tib. D. No. 8, Ka 36b6-7.

⁶⁴ ŚP, *Ghoṣa, op.cit.*, p. 57. 1-3; Tib. D. No. 8, Ka 36b7-37a1.

⁶⁵ ŚP, *Ghoṣa, op.cit.*, p. 57.3-4; Tib. D.No. 8, Ka 37a1-2.

⁶⁶ ŚP, *Ghoṣa, op.cit.*, p. 57. 5-9; Tib. D. No. 8, Ka 37a2.

⁶⁷ ŚP, *Ghoṣa, op.cit.*, p. 57. 6-8; Tib. D. No. 8, Ka 37a2-3.

⁶⁸ ŚP, *Ghoṣa, op.cit.*, p. 57. 8-10; Tib. D. No. 8, Ka 37a3-4.

⁶⁹ SP では、この文脈において「四聖諦」は説かれていない。

⁷⁰ ŚP, *Ghoṣa, op.cit.*, p. 57. 16-58. 1; Tib. D. No. 8, Ka 37a7.

⁷¹ ŚP, *Ghoṣa, op.cit.*, p. 58. 1-3; Tib. D. No. 8, Ka 37a7-bl.

⁷² ŚP, *Ghoṣa, op.cit.*, p. 58. 3-5; Tib. D. No. 8, Ka 37b1-2.

⁷³ ŚP, *Ghoṣa, op.cit.*, p. 58. 5-7; Tib. D. No. 8, Ka 37b2-3.

⁷⁴ ŚP, *Ghoṣa, op.cit.*, p. 58. 7-9; Tib. D. No. 8, Ka 37b3-4.

と、無相と、無願と、五⁷⁶神通⁷⁷と、三昧と、陀羅尼の門と、如来の十力⁷⁸と、四無畏⁷⁹と、四無礙⁸⁰と、大慈⁸¹と、大悲⁸²と、大喜⁸³と、大捨⁸⁴と、十八不共法⁸⁵と、預流果と、一來果と、不還果と、阿羅漢果と、獨覺と、一切智性と道智性と一切相智性⁸⁶と、一切の身体の行為に智慧が先行し⁸⁷、智慧が隨行する。一切の言葉の行為に智慧が先行し、智慧が隨行する。一切の意の行為に智慧が先行し、智慧が隨行する。過去時において無障無礙の智慧の視力が入る⁸⁸。未來時において無障無礙の智慧の視力が入る。現在時において無障無礙の智慧の視力が入る。

世尊の「その如く」というお言葉と、それら菩薩摩訶薩と、スプーティと、アーナンダと、長老たちと、彼ら比丘の大サンガと、天と、人と、非天と、ガンダルバ⁸⁹をともなう世間を喜ぶものである、世尊がお説きになられたものを明らかに賞讃した。

一切の如来の母⁹⁰、『十万頌般若波羅蜜の意味を誤りなく集めたもの』を偈頌で述べたものを完成する⁹¹。

尊者がネパールにおいて与えになられ、ネパール人が偈頌で述べたものを完成する。これは、世尊が在世の時に、ビンビサーラ王とマガディ王妃の大善をなした息子が一人おり、彼が事故にあつて死に至る時に、世尊の前で王は嘆いた。次のように、質問をした⁹²。「世尊よ、私の一人の子供がおり、死に至るので、病気から救われる⁹³一つの方法をお教え下さい」と問うので、世尊のお口から「王も、三宝に供養し、六種を満たす水を注ぎ、大きな十万を一日に百度読んだならば、非時で、死より後退し、病気から救われるであろう」と説かれるので、王が質問して、「世尊よ、大きな十万が一日に百度生

⁷⁵ ŚP, *Ghoṣa, op.cit.*, p. 57. 10-16; Tib. D. No. 8, Ka 37a4-7.

⁷⁶ ST のみが、「五」を付す。

⁷⁷ ŚP, *Ghoṣa, op.cit.*, p. 58. 10-11; Tib. D. No. 8, Ka 37b4-5.

⁷⁸ ŚP, *Ghoṣa, op.cit.*, p. 66. 7-9; Tib. D. No. 8, Ka 41a6-7.

⁷⁹ ŚP, *Ghoṣa, op.cit.*, p. 65. 6-8; Tib. D. No. 8, Ka 40b7-41a1.

⁸⁰ ŚP, *Ghoṣa, op.cit.*, p. 65. 4-6; Tib. D. N. 8, Ka 40b7.

⁸¹ ŚP, *Ghoṣa, op.cit.*, p. 66. 11-13; Tib. D. No. 8, Ka 41b1.

⁸² ŚP, *Ghoṣa, op.cit.*, p. 66. 13-15; Tib. D. No. 8, Ka 41b1-2.

⁸³ ŚP, *Ghoṣa, op.cit.*, p. 66. 15-17; Tib. D. No. 8, Ka 41b2-3.

⁸⁴ ŚP, *Ghoṣa, op.cit.*, p. 66. 17-61. 1; Tib. D. No. 8, Ka 41b3-4.

⁸⁵ ŚP, *Ghoṣa, op.cit.*, p. 66. 9-11; Tib. D. No. 8, Ka 41a7-b1.

⁸⁶ ŚP, *Ghoṣa, op.cit.*, p. 67. 1-6; Tib. D. No. 8, Ka 41b4-6.

⁸⁷ ST は、この項目以下を欠く。

⁸⁸ ST は、「過去時」の項しか述べず、「未來時・現在時」の項を欠く。

⁸⁹ ST は、「食形鬼と、大腹行」が続く。

⁹⁰ ST は、ここに長文のコロフォンが添えられている。

⁹¹ SD は、ここでテキストが終わっている。

⁹² ST は、この句を欠く。

⁹³ ST は、「彼が死なない」とある。

じた一つの方法をお教え下さい」と問うので、世尊がこの小さな十万をお説きになられ、王がこの小さな十万をすぐに読誦をした。王子は病気から救われた後に長寿になり、財産が円満であり、国土は安穩で、豊作となり、六種のそれぞれの究極なる苦から脱し⁹⁴、寿命が長く、将来悟りを得ることになった。さらにまたこの小さな十万を一度述べれば、五無間などの一切の罪過を浄化し、清浄にしてから、円満なる⁹⁵福德を得るであろう。

吉祥をそなえた尊者アティシヤは十二年の間経典を見られたので、この小さな十万だけで大きな利益があるので、後世の人もこれを念誦することをとても重要なものとして説かれている。

『大十万頌般若波羅蜜の心髓をまとめた小十万』を完成する。吉祥なれ。校正を二度なした⁹⁶。

⁹⁴ ST では、この句以後が欠落し「さらにまた功德は究極である。尊者はネパールにおいてお与えになり、ネパールが偶頻で述べたものを完成する」という他の版では前に述べたな句が挿入される。

⁹⁵ ST は、「十万の」とする。

⁹⁶ これらの句は、SB のみで見られる。

第3編 アンソロジー文献

第1章 『大経集』

はじめに

チベット大蔵経のテンギュル「中観部」には、四つのアンソロジー文献が収録されている¹。すなわち、Nāgārjuna に帰される『経集』と、Śāntideva の『集菩薩学論』と、著者不明の『修習次第経集 (*Bhāvanākramasūtrasamuccaya*)』と、Dīpaṃkaraśrījñāna の『大経集』である²。Dīpaṃkaraśrījñāna は、最初の『経集』に対する解説書を著しており³、また『菩提道灯論細疏』では、『集菩薩学論』からの経典を多く引用している。それ故に、『大経集』を編纂するにあたり⁴、先行する注釈書の内容を認識していたことは明らかである。また、その編纂を行う際には、それらの先行するアンソロジーとの差別化も意識していたであろう。本章では、この『大経集』の内容とそこに引用される経論を提示することにより、他のアンソロジーとの相違を明らかにする。

『大経集』の内容

アンソロジー文献は、経典の引用文より成り立つ文献であるため、著者自身が自らの学説や解釈を述べる言葉はほとんど含まれていない。しかしながら、経典の選択や配置という編集意図を理解することで、その編者の考えを知ることができる。すなわち、自らの言葉ではなく、引用した経典に自らの考えを語らせているのである。『大経集』の編集も同様であり、Dīpaṃkaraśrījñāna は経典を引用するにあたり、短い項目を述べて、そのテーマで経典を引用する形式でテキストを構成している。彼の発言は、各セクションの最初に述べられているこの表題のみである。この僅かな言葉に彼の意図が表されており、著者の経典理解を知る上でも重要なものとなる。その見出しの言葉と引用経典を章ごとに示すと、次のようになる。

序

¹ 仏教史におけるアンソロジー文献の概要については、望月 2015d を参照。

² 三つのアンソロジー文献における引用経典については、望月 2006f を参照。

³ 彼の師である Ratnākaraśānti は、『経集』に対する注釈書を著している。望月 2005e, 2006e, 2007d, 2008e, 2009, 2010。

⁴ チベットの歴史書『テプテル・ゴンボ』には、Dīpaṃkaraśrījñāna と『大経集』に関する情報が記されている。それによると、「ダデン (*rwa sgreng*)において尊主のお手にあったその『経集』を領受して、翻訳の施主になられてからカシミールの Jayānanda と翻訳者 Pa tshab Nyi ma grags pa と Khu mDo sde 'bar が翻訳をした」(『青史 上』四川民族出版社, 1985: 332-333) とある。ただし、これらの翻訳者の組み合わせは、彼の著書には見られないことや、著者自身がその翻訳に携わっていないことから、その翻訳時期や経緯については考察の必要がある。なお、同テキストの現代語訳者 (Roerich 1949: 272; 羽田 1987: 109-110) は、これを Nāgārjuna による『大乘宝要義論』とするが、その翻訳者に関する情報からも、これは Dīpaṃkaraśrījñāna の『大経集』のことである。

0.1 *gZhi chen po'i mdo*

0.2 *Drag shul can gyis zhus pa'i mdo (Ugradattaparipṛcchasūtra)*

0.3 *Yongs su mya ngan las 'das pa chen po'i mdo (Mahāparinirvāṇasūtra)*

第1章 出家となった者の布施を説いたものに、声聞乗の者あるいは菩薩乗の者がどのように信により布施すべきものを浪費するのか、誰が浪費しないのか。どのように捨て、さらに誰が浪費しないのか。

1.1 *Byang chub sems dpa'i sa rNal 'byor spyod pa (Bodhisattvabhūmi)*

1.2 *Byams pa seng ge sgra'i mdo (Maitreyamahāsiṃhanādasūtra)*

1.3 *Tshangs pas byin gyis zhus pa'i mdo (Brahmadattaparipṛcchasūtra)*

1.4 *Zas kyi phung pc spyod pa'i tshul*

1.5 *rNal 'byor spyod pa byang chub sems dpa'i sa (Bodhisattvabhūmi)*

1.6 *dKon mchog sprin gyi mdo (Ratnameghasutra)*

1.7 *'Od srungs kyis zhus pa (Ratnarāśīsūtra)*

1.8 *bDen pa'i-rnam pa'i mdo (Bodhisattvaprātimokṣacatuṣkanirhārasūtra)*

1.9 *Nyi rna'i snying po'i mdo (Sūryagarbhavaipulyasūtra)*

1.10 *Drag shul can gyis zhus pa'i mdo (Ugradattaparipṛcchāsūtra)*

1.11 *Byarns pa seng ge sgra'i mdo (Maitreyamahāsiṃhanādasūtra)*

1.12 *Sangs rgyas kyi sde-snod kyi mdo (Buddhapīṭakaduḥśīlanigrahīsūtra)*

1.13 *Tshangs pas byin gyis zhus pa'i mdo (Brahmadattaparipṛccāsūtra)*

1.14 *Nye ba 'khor gyis zhus pa'i mdo (Upāliparipṛcchāsūtra)*

1.15 *Rin po che'i phung po'i mdo (Ratnarāśīsūtra)*

第2章 在家において食欲をなすことを意図したもの

2.1 *Byang chub sems dpa'i sde snod kyi mdo (Bodhisattvapiṭakasūtra)*

2.2 *Shes rab kyi pha rol tu phyin pa'i mdo (Prajñāpāramitāsūtra)*

2.3 *Chos thams cad kyi rang bzhin mnyam pa nyid rnam par spros pa'i ting nge 'dzin (Sarvadharmasvabhāvasamatāvipañcitasamādhirājasūtra)*

2.4 *lHag pa'i bsam pa bkul pa'i mdo (Adhyāśayasāñcodanasūtra)*

2.5 *Byams pa seng ge sgra'i mdo (Maitreyamahāsiṃhanādasūtra)*

2.6 *Blo gros rgya mtsho'i mdo (Sāgaramatiparipṛcchāsūtra)*

2.7 *Thsangs pas byin gyis zhus pa'i mdo (Brahmadattaparipṛcchāsūtra)*

第3章 偽善の過失を述べることを意図して説いたもの

3.1 *gZi brJid can gyi mdo*

3.2 *Blo gros rgya mtsho'i mdo (Sāgaramatiparipṛcchāsūtra)*

- 3.3 *Yul 'khor skyong gi mdo (Rāṣṭrapālapariṣcchāsūtra)*
- 3.4 *Byams pa seng ge sgra'i mdo (Maitreyamahāsiṃhanādasūtra)*
- 3.5 *Nyi ma'i snying po'i mdo (Sūryagarbhavaipulyasūtra)*
- 3.6 *'Od srungs kyis zhus pa (Ratnarāśisūtra)*
- 3.7 *Klu'i rgyal po rgya mtshos zhus pa'i mdo (Sāgaranāgarājapariṣcchāsūtra)*

第4章 説法者に対する誹謗の設定を説いたもの

- 4.1 *Yid gnyis yang dag par 'joms pa'i mdo*
- 4.2 *Chos thams cad 'byung ba med par bstan pa'i mdo (Sarvadharmapravṛttinirdeśasūtra)*
- 4.3 *Sangs rgyas [mi] spong ba'i mdo (Buddākṣepaṇasūtra)*
- 4.4 *rNam par 'thag pa thams cad bsdus pa'i mdo (Sarvavidalyasaṃgrahasūtra)*
- 4.5 *Chos thams cad 'byung ba med par bstan pa'i mdo (Sarvadharmapravṛttinirdeśasūtra)*

第5章 法を捨てることを意図して説いたもの

- 5.1 *sNying rje chen po la 'jug pa'i mdo (Sarvadharmasvabhāvasamatāvipañcitasamādhirājaūtra)*
- 5.2 *rNam par 'thag pa thams cad bsdus pa'i mdo (Sarvavidalyasaṃgrahasūtra)*
- 5.3 *Rab tu rnam par 'byed pa'i mdo*
- 5.4 *Shes rab kyi pha rol tu phyin pa'i mdo (Prajñāpāramitāsūtra)*
- 5.5 *rGya cher rol pa'i mdo (Lalitavistara)*
- 5.6 *Sangs rgyas kyi sde snod kyi mdo (Buddhapiṭakaduḥśīlanigrahāsūtra)*
- 5.7 *Byang chub sems dpa'i sde snod kyi mdo (Bodhisattvapiṭakasūtra)*

第6章 菩薩を傷つけることを捨てることとその対治を意図して説いたもの

- 6.1 *Tshaags pas zhus pa'i mdo (Brahmaviśeṣacintipariṣcchāsūtra)*
- 6.2 *Byams pa seng ge sgra'i mdo (Maitreyamahāsiṃhanādasūtra)*
- 6.3 *Shes rab kyi pha rol tu phyin pa'i mdo (Prajñāpāramitāsūtra)*
- 6.4 *Dad pa'i stobs bskyed pa'i mdo (Śraddhābalādhānāvātāramudrāsūtra)*
- 6.5 *Nam mkha' can gyi mdo*
- 6.6 *Rin po che'i phung po'i mdo (Ratnarāśisūtra)*
- 6.7 *sNying rje chen po la 'jug pa'i mdo (Sarvadharmasvabhāvasamatāvipañcitasamādhirājasūtra)*
- 6.8 *Nges pa dang ma nges pa la 'jug pa rtogs pa phyag rgya'i mdo (Niytānityatagatimudrāvātārasūtra)*

6.9 *Nges pa dang ma nges pa la 'jug pa rtogs pa phyag rgya'i mdo* (*Niytānityata-gatimudrāvātārasūtra*)

6.10 *Dad pa'i stobs bskyed pa'i mdo* (*Śraddhābalādhānāvātāramudrāsūtra*)

第7章 執事人を意図して説いたもの

7.1 *Nyi ma'i snying po'i mdo* (*Sūryagarbhavaipulyasūtra*)

7.2 *'Od srungs kyis zhus pa* (*Ratnarāśīsūtra*)

7.3 *lHag pa'i bsam pa bkul pa'i mdo* (*Adhyāśayasañcodanasūtra*)

7.4 *Den pa'i rnam pa'i mdo* (*Bodhisattvaprātimokṣacatuṣkanirhārasūtra*)

第8章 摂受を意図して説いたもの

8.1 *Ji lta bu zhid gi mdo*

8.2 *Nyi ma'i snying po'i mdo* (*Sūryagarbhavaipulyasūtra*)

8.3 *Nyi ma'i snying po'i mdo* (*Sūryagarbhavaipulyasūtra*)

8.4 *Nyi ma'i snying po'i mdo* (*Sūryagarbhavaipulyasūtra*)

8.5 *Nyi ma'i snying po'i mdo* (*Sūryagarbhavaipulyasūtra*)

8.6 *Nyi ma'i snying po'i mdo* (*Sūryagarbhavaipulyasūtra*)

8.7 *Nam mkha' spyang gi mdo*

8.8 *Nam mkha' spyang gi mdo*

8.9 *Yul 'khor skyong gi mdo* (*Rāṣṭrapālapariṣcchāsūtra*)

8.10 *dKon mchog sprin gi mdo* (*Ratnameghasūtra*)

8.11 *Mya ngan las 'das pa chen po'i mdo* (*Mahāparinirvāṇasūtra*)

8.12 *Mya ngan las 'das pa chen po'i mdo* (*Mahāparinirvāṇasūtra*)

8.13 *Mya ngan las 'das pa chen po'i mdo* (*Mahāparinirvāṇasūtra*)

8.14 *Mya ngan las 'das pa chen po'i mdo* (*Mahāparinirvāṇasūtra*)

8.15 *Mya ngan las 'das pa chen po'i mdo* (*Mahāparinirvāṇasūtra*)

8.16 *sNying rje chen po la 'jug pa'i mdo* (*Sarvadharmasvabhāvasamatāvipañcitasamādhirājasūtra*)

8.17 *sNying rje chen po la 'jug pa'i mdo* (*Sarvadharmasvabhāvasamatāvipañcitasamādhirājaūtra*)

8.18 *Las rab tu 'byed pa'i mdo* (*Karmavibhaṅga*)

8.19 *Sangs rgyas kyis gsung gi mdo*

第9章 軽い生活を意図して説いたもの

9.1 *'Dul ba* (*Vinaya*)

9.2 *'Od srungs kyis zhus pa* (*Ratnarāśīsūtra*)

9.3 *sNying rje chen po la 'jug pa'i mdo (Sarvadharmasvabhāvasamatāvipañcitasamādhirājasūtra)*

9.4 *'Od srungs kyis zhus pa (Ratnarāśīsūtra)*

第10章 清浄な生活を意図して説いたもの

10.1 *Byams pa seng ge sgra'i mdo (Maitreyamahāsiṃhanādasūtra)*

10.2 *dKon mchog sprin gyi mdo (Ratnameghasūtra)*

10.3 *Tshaags pas zhus pa'i mdo (Brahmaviśeṣacintipariṣchāsūtra)*

10.4 *Blo gros mi zad pa la bstan pa'i mdo (Akṣayamatīnirdeśasūtra)*

10.5 *rNal 'byor spyod pa Byang chub sems dpa'i sa (Bodhisattvabhūmi)*

第11章 説いたものが沈むことになる利得と尊敬を意図して説いたもの

11.1 *Sangs rgyas kyi sde snod kyi mdo (Buddhapiṭakaduḥśīlanigrahīsūtra)*

11.2 *gZi brjid can gyi mdo.*

11.3 *lHag pa'i bsam pa bkul pa'i mdo (Adhyāśayasañcodanasūtra)*

11.4 *Yul 'khor skyong gi mdo (Rāṣṭrapālapariṣchāsūtra)*

11.5 *Chos thams cad kyi rang bzhin mnyam pa nyid rnam par spros pa'i ting nge 'dzin (Sarvadharmasvabhāvasamatāvipañcitasamādhirājasūtra)*

11.6 *Chos thams cad kyi rang bzhin mnyam pa nyid rnam par spros pa'i ting nge 'dzin (Sarvadharmasvabhāvasamatāvipañcitasamādhirājasūtra)*

11.7 *Byams pa seng ge sgra'i mdo (Maitreyamahāsiṃhanādasūtra)*

11.8 *bDud kyi 'gying bag gi mdo*

11.9 *Shā ri'i pu'i gzungs pa'i mdo*

11.10 *dKon mchog brtseg pa'i mdo (Kāśapaparivartasūtra)*

11.11 *Zla ba'i snying po'i mdo*

11.12 *Byang chub sems dpa'i sde snod kyi mdo (Bodhisattvapiṭakasūtra)*

11.13 *Chos smra ba po'i le'u'i mdo*

11.14 *dKong mchog za ma tog gi mdo (Ratnakaraṇasūtra)*

第12章 魔が説いたものを意図して説いたもの

12.1 *gZi brjid can gyi mdo*

12.2 *Mya ngan las 'das pa chen po'i mdo (Mahāparinirvāṇasūtra)*

12.3 *Dam pa'i chos dran pa nye bar gzhangs pa'i mdo (Saddharmānusmṛtyupasthānasūtra)*

12.4 *bDud kyi 'gying bag gi mdo*

第13章 商業を意図して説いたもの

13.1 *dGag dbye'i mdo*

13.2 *Yul 'khor skyong gi mdo (Rāṣṭrapālapariṣcchāsūtra)*

13.3 *sNying rje chen po la 'jug pa'i mdo*

13.4 *Spyod yul yongs su dag pa'i mdo*

第14章 戒を破ることの特徴を意図して説いたもの

14.1 *dKon mchog brtseg pa'i mdo (Kāśapaparivartasūtra)*

14.2 *Tshul khriṃs 'chal ba tshar bcad pa'i mdo (Buddhapīṭakaduḥśīlanigrahīsūtra)*

14.3 *Tshul khriṃs 'chal ba tshar bcad pa'i mdo (Buddhapīṭakaduḥśīlanigrahīsūtra)*

14.4 *Tshul khriṃs 'chal ba tshar bcad pa'i mdo (Buddhapīṭakaduḥśīlanigrahīsūtra)*

14.5 *Tshul khriṃs 'chal ba tshar bcad pa'i mdo (Buddhapīṭakaduḥśīlanigrahīsūtra)*

14.6 *Tshul khriṃs 'chal ba tshar bcad pa'i mdo (Buddhapīṭakaduḥśīlanigrahīsūtra)*

14.7 *Tshul khriṃs 'chal ba tshar bcad pa'i mdo (Buddhapīṭakaduḥśīlanigrahīsūtra)*

14.8 *Chos kyi phung po'i mdo (Dharmaskandhasūtra)*

第15章 戒をもつ者を軽蔑することを意図して説いたもの

15.1 *Yul 'khor skyong gi mdo (Rāṣṭrapālapariṣcchāsūtra)*

15.2 *'Od srungs kyis zhus pa (Ratnarāśīsūtra)*

15.3 *Rab tu rnam par 'byed pa'i mdo*

15.4 *sNying rje chen po la 'jug pa'i mdo (Sarvadharmasvabhāvasamatāvipañcitasamādhirājasūtra)*

15.5 *Zla ba'i snying po'i mdo*

15.6 *Zla ba'i snying po'i mdo*

15.7 *gSer 'od dam pa'i mdo (Suvarṇaprabhāsottamasūtra)*

15.8 *Sa'i snying po'i mdo (Daśacakraṣṭigarbhasūtra)*

第16章 出家者の賞讃を意図して説いたもの

16.1 *Blo gros rgya mstho'i mdo (Sāgaramatipariṣcchāsūtra)*

16.2 *Rab tu byung ba la bar chad byed pa'i mdo (Pravrajyāntarāyasūtra)*

16.3 *Drag shul can gyis zhus pa'i mdo (Ugradattapariṣcchāsūtra)*

16.4 *Rin po che'i tog gi mdo (Mahāsannipātaratnaketudhāraṇī)*

16.5 *Dri ma med par grags pas zhus pa'i mdo (Vimalakīrtinirdeśasūtra)*

第17章 浄化の功德の資具を備え付けないことを意図して説いたもの

17.1 *Chos yang dag par sdud pa'i mdo (Dharmasaṃgītīsūtra)*

17.2 *bZhi pa brjod pa'i mdo (Catuskanirharasūtra)*

17.3 *Sa'i snying po'i mdo (Daśacakraṣṭigarbhasūtra)*

- 17.4 *Byang chub sems dpa'i lam gyi mdo*
 17.5 *rNal 'byor spyod pa nyan thos kyi sa (Śrāvākabhūmi)*
 17.6 *Rab tu rnam par 'byed pa'i mdo*
 17.7 *Rab tu zhi ba rnam par nges pa cho 'phrul gyi ting nge 'dzin (Prśānta-
 viniścayaprāharyasamādhisūtra)*
 17.8 *Drag shul can gyis zhus pa'i mdo (Ugradattaparipṛcchasūtra)*
 17.9 *sNying rje chen po la 'jug pa'i mdo (Sarvadharmasvabhāvasamatāvipañcita-
 samādhirājasūtra)*
 17.10 *sNying rje chen po la 'jug pa'i mdo (Sarvadharmasvabhāvasamatāvipañcita-
 samādhirājasūtra)*
 17.11 *gCig las 'phros pa'i mdo (Ekottarāgama)*
 17.12 *'Dul ba (Vinaya)*

第18章 比丘が入るべきでなく親しむべきでない非行境を意図して説いたもの

- 18.1 *rNal 'byor spyod pa nyan thos kyi sa (Śrāvākabhūmi)*
 18.2 *'Dul ba phran tshegs (Vinayakṣudravastu)*
 18.3 *'Dul ba phran tshegs (Vinayakṣudravastu)*
 18.4 *dKon mchog sprin gyi mdo (Ratnameghasūtra)*
 18.5 *Byang chub kun du rgyu'i mdo*
 18.6 *dKon mchog sprin gyi mdo (Ratnameghasūtra)*
 18.7 *Dam pa'i chos padma dkar po'i mdo (Saddharmapuṇḍarīkasūtra)*
 18.8 *Dam pa'i chos dran pa nye bar gzhags pa'i mdo (Saddharmānusmṛtyupa-
 sthānasūtra)*
 18.9 *Blo gros rgya mtsho'i mdo (Sāgaramatiparipṛcchasūtra)*
 18.10 *Dam pa'i chos dran pa nye bar gzhags pa'i mdo (Saddharmānusmṛtyupa-
 sthānasūtra)*

第19章 悪友を捨てることを意図して説いたもの

- 19.1 *Shes rab kyi pha rol tu phyin pa'i mdo (Prajñāpāramitāsūtra)*
 19.2 *dKon mchog sprin gyi mdo (Ratnameghasūtra)*
 19.3 *Tshul khriims 'chal ba tshar bcad pa'i mdo (Buddhapiṭakaduḥśīlanigrahīsūtra)*
 19.4 *gZi brjid can gyi mdo*
 19.5 *Chos thams cad kyi rang bzhin mnyam pa nyid rnam par spros pa'i ting nge
 'dzin (Sarvadharmasvabhāvasamatāvipañcitasamādhirājasūtra)*
 19.6 *gZi brjid can gyi mdo*

19.7 *Dam pa'i chos dran pa nye bar gzhags pa'i mdo* (*Saddharmānusmṛtyupa-
sthānasūtra*)

第20章 善知識を意図して説いたもの

20.1 *Bu mo yon tan gyis brgyan pa mngon par shes pa rgyas pa'i le'u mdo*

20.2 *rNal 'byor spyod pa Byang chub sems dpa'i sa* (*Bodhisattvabhūmi*)

20.3 *sDong po bkod pa'i mdo* (*Gaṇḍavyūhasūtra*)

20.4 *Byang chub kun du rgyu'i mdo*

20.5 *Shes rab kyi pha rol tu phyin pa sdud pa tshigs su bcad pa* (*Prajñāpāramitā
ratnaguṇasamcayagāthā*)

20.6 *Shes rab kyi pha rol tu phyin pa'i mdo* (*Prajñāpāramitāsūtra*)

第21章 如来に対する供養と恭敬を意図して説いたもの

21.1 *dKon mchog sprin gyi mdo* (*Ratnameghasūtra*)

21.2 *sNying rje chen po la 'jug pa'i mdo* (*Sarvadharmasvabhāvasamatāvipañcita-
samādhirājasūtra*)

21.3 *sNying rje chen po la 'jug pa'i mdo* (*Sarvadharmasvabhāvasamatāvipañcita-
samādhirājasūtra*)

21.4 *sNying rje chen po la 'jug pa'i mdo* (*Sarvadharmasvabhāvasamatāvipañcita-
samādhirājasūtra*)

21.5 *Byams pa seng ge sgra'i mdo* (*Maitreyamahāsiṃhanādasūtra*)

21.6 *Byams pa seng ge sgra'i mdo* (*Maitreyamahāsiṃhanādasūtra*)

21.7 *Byams pa seng ge sgra'i mdo* (*Maitreyamahāsiṃhanādasūtra*)

21.8 *Chos thams cad mngon par 'byung ba'i rgyal po'i mdo*

第22章 正法を受持することを意図して説いたもの

22.1 *dKon mchog sprin gyi mdo* (*Ratnameghasūtra*)

22.2 *Blo gros rgya mtsho'i mdo* (*Sāgaramatipariṣcchasūtra*)

22.3 *Blo gros rgya mtsho'i mdo* (*Sāgaramatipariṣcchasūtra*)

22.4 *Nges pa dang ma nges pa la 'jug pa rtogs pa phyag rgya'i mdo* (*Niyānityata-
gatimudrāvātārasūtra*)

22.5 *De bzhin gshegs pa'i ye shes kyi phyag rgya'i mdo* (*Tathāgatajñānamudrā-
samādhisūtra*)

22.6 *bDen pa'i rnam pa'i mdo* (*Bodhisattvaprātimokṣacatuṣkanirhārasūtra*)

22.7 *Dad pa'i stobs bskyed pa'i mdo* (*Śraddhābalādhānāvātāramudrāsūtra*)

22.8 *Chos thams cad kyi rang bzhin mnyam pa nyid rnam par spros pa'i ting nge*

'dzin (*Sarvadharmasvabhāvasamatāvipañcitasamādhirājasūtra*)

22.9 *Chos yang dag par sdud pa'i mdo* (*Dharmasaṃgītisūtra*)

22.10 *Tshangs pas zhus pa'i mdo* (*Brahmadattapariṣcchasūtra*)

第23章 何らかの原因により説かれたものが沈む正法の滅を意図して説いたもの

23.1 *Tshangs pas zhus pa'i mdo* (*Brahmadattapariṣcchasūtra*)

23.2 *Sangs rgyas kyi sde snod kyi mdo* (*Buddhapiṭakaduḥśīlanigrahīsūtra*)

23.3 *Yid gnyis yang dag par 'joms pa'i mdo*

23.4 *Yul 'khor skyong gi mdo* (*Rāṣṭrapālapariṣcchāsūtra*)

23.5 *Yid gnyis yang dag par 'joms pa'i mdo*

23.6 *Zla ba'i snying po'i mdo*

23.7 *Sangs rgyas kyi gsung gi mdo*

23.8 *Dam pa'i chos nub par 'gyur ba'i mdo*

第24章 聞の功德を説くことを意図して説いたもの

24.1 *gZi brjid can gyi mdo*

24.2 *Rab tu zhi ba rnam par nges pa cho 'phrul gyi ting nge 'dzin* (*Prśānta-viniścayaprāharyasamādhisūtra*)

24.3 *bDen pa'i rnam pa'i mdo* (*Bodhisattvaprātimokṣacatuṣkanirhārasūtra*)

24.4 *Chos thams cad kyi rang bzhin mnyam pa nyid rnam par spros pa'i ting nge 'dzin* (*Sarvadharmasvabhāvasamatāvipañcitasamādhirājasūtra*)

24.5 *Chos thams cad kyi rang bzhin mnyam pa nyid rnam par spros pa'i ting nge 'dzin* (*Sarvadharmasvabhāvasamatāvipañcitasamādhirājasūtra*)

24.6 *Blo gros rgya mtsho'i mdo* (*Sāgaramatipariṣcchāsūtra*)

24.7 *bSod nams thams cad bsdus pa'i mdo* (*Sarvapuṇyasamuccayasamādhisūtra*)

24.8 *bSod nams thams cad bsdus pa'i mdo* (*Sarvapuṇyasamuccayasamādhisūtra*)

24.9 *Blo gros mi zad pa la bstan pa'i mdo* (*Akṣaymatinirdeśasūtra*)

24.10 *Dam pa'i chos dran pa nye bar gzhags pa'i mdo* (*Saddharmānusmṛtyupasthānasūtra*)

第25章 聞が少ないことを捨てることを意図して説いたもの

25.1 *Byang chub kun du rgyu'i mdo*

25.2 *Yid gnyis yang dag par 'joms pa'i mdo*

25.3 *gZi brjid can gyi mdo*

25.4 *lHag pa'i bsam pa bkul pa'i mdo* (*Adhyāśayaśāñcodanasūtra*)

25.5 *sNying rje chen po la 'jug pa'i mdo* (*Sarvadharmasvabhāvasamatāvipañcita-*

samādhirājaūtra)

第26章 質問しないことの過失を意図して説いたもの

26.1 *Dam pa'i chos dran pa nye bar gzhags pa'i mdo* (*Saddharmānusmṛtyupa-
sthānasūtra*)

26.2 *Blo gros rgya mtsho'i mdo* (*Sāgaramatipariṣcchāsūtra*)

第27章 法を盗むことを意図して説いたもの

27.1 *gZi brjid can gyi mdo*

第28章 自分を賞讃し他者を責めることを意図して説いたもの

28.1 *brJod kyis mi lang pa'i mdo*

28.2 *De bzhin gshegs pa'i ye shes kyi phyag rgya'i mdo* (*Tathāgatajñānamudrā-
samādhisūtra*)

28.3 *sGrib pa thams cad rnam par sbyong ba'i mdo* (*Karmāvaraṇaviśuddhisūtra*)

28.4 *dKon mchog sprin gyi mdo* (*Ratnameghasutra*)

28.5 *Dad pa'i stobs bskyed pa'i mdo* (*Śraddhābalādhānāvātāramudrāsūtra*)

第29章 菩提心の功德を述べることを意図して説いたもの

29.1 *Ye shes sgron me'i mdo*

29.2 *Chos yang dag par sdud pa'i mdo* (*Dharmasaṃgītisūtra*)

29.3 *sDong po bkod pa'i mdo* (*Gaṇḍavyūhasūtra*)

29.4 *Byams pa 'jug pa'i mdo*

29.5 *Byang chub yang dag sprin gyi mdo*

29.6 *Byang chub yang dag sprin gyi mdo*

29.7 *Blo gros rgya mtsho'i mdo* (*Sāgaramatipariṣcchāsūtra*)

29.8 *Nges pa dang ma nges pa la 'jug pa rtogs pa phyag rgya'i mdo* (*Niytānityata-
gatimudrāvātārasūtra*)

29.9 *Rin po che'i phung po'i mdo* (*Ratnarāsīsūtra*)

29.10 *Shes rab kyi pha rol tu phyin pa'i mdo* (*Prajñāpāramitāsūtra*)

29.11 *dKon mchog brtseg pa'i mdo* (*Kāśapaparivartasūtra*)

29.12 *Chos thams cad mngon par byung ba'i rgyal po'i mdo*

29.13 *Byams pa seng ge sgra'i mdo* (*Maitreyamahāsiṃhanādasūtra*)

29.14 *dPas byin gyis zhus pa'i mdo*

29.15 *gZi brjid can gyi mdo*

29.16 *sDong po bkod pa'i mdo* (*Gaṇḍavyūhasūtra*)

第30章 菩提心を求めることを退けることを意図して説いたもの

- 30.1 *gZi brjid can gyi mdo*
- 30.2 *dPas byin gyis zhus pa'i mdo*
- 30.3 *dKon mchog sprin gyi mdo (Ratnameghasutra)*
- 30.4 *Rin po che'i phung po'i mdo (Ratnarāśisūtra)*
- 30.5 *Nges pa dang ma nges pa la 'jug pa rtogs pa phyag rgya'i mdo (Niytānityata-gatimudrāvātārasūtra)*
- 30.6 *Bu mo yon tan gyis brgyan pa mngon par shes pa rgyas pa'i le'u mdo*
- 30.7 *Shes rab kyi pha rol tu phyin pa'i mdo (Prajñāpāramitāsūtra)*
- 第31章 菩提心を忘れないことを意図して説いたもの
- 31.1 *bSod nams thams cad bsdus pa'i mdo (Sarvapūnyasamuccayasamādhisūtra)*
- 31.2 *Tshangs pas byin gyis zhus pa'i mdo (Brahmadattaparipṛcchasūtra)*
- 31.3 *Nyi rna'i snying po'i mdo (Sūryagarbhavaipulyasūtra)*
- 31.4 *dKon mchog brtseg pa'i mdo (Kāśapaparivartasūtra)*
- 31.5 *brJod kyis mi lang pa'i mdo*
- 第32章 比丘に対して医方を否定することを意図して説いたもの
- 32.1 *gZhi rtsom pa'i mdo*
- 32.2 *Yul 'khor skyong gi mdo (Rāṣṭrapālaparipṛcchāsūtra)*
- 32.3 *rGyas pa'i mdo (Rṣivyāsaparipṛcchasūtra)*
- 32.4 *Dam pa'i chos dran pa nye bar gzhags pa'i mdo (Saddharmānusmṛtyupa-sthānasūtra)*
- 第33章 沙門が星宿を考察することを捨てることを意図して説いたもの
- 33.1 *Dam pa'i chos dran pa nye bar gzhags pa'i mdo (Saddharmānusmṛtyupa-sthānasūtra)*
- 33.2 *Nam mkha'i spyan gyi mdo*
- 33.3 *Rin po che'i tog gi mdo (Mahāsannipātaratnaketudhāraṇī)*
- 33.4 *sTag rna'i mdo (Śārdūlakarṇāvadāna)*
- 第34章 王に頼ることを非難することを意図して説いたもの
- 34.1 *Dam pa'i chos dran pa nye bar gzhags pa'i mdo (Saddharmānusmṛtyupa-sthānasūtra)*
- 34.2 *'Dul (Vinaya)*
- 第35章 在家の布施を意図して説いたもの
- 35.1 *Nye ba 'khor gyis zhus pa'i mdo (Upāliparipṛcchāsūtra)*
- 35.2 *bDen pa'i rnam pa'i mdo (Bodhisattvapṛātimokṣacatuṣkanirhārasūtra)*

- 35.3 *Blo gros mi zad pa la bstan pa'i mdo (Akṣayamatīnirdeśasūtra)*
- 35.4 *dKon mchog sprin gyi mdo (Ratnameghasutra)*
- 35.5 *Byang chub sems dpa'i sa rNal 'byor spyod pa (Bodhisattvabhūmi)*
- 35.6 *Drang srong rgyas pa'i mdo (Rṣivṃyāsaparipṛcchasūtra)*
- 35.7 *Shes rab kyi pha rol tu phyin pa sdud pa tshigs su bcaḍ pa (Prajñāpāramitā-ratnaguṇasaṃcayagāthā)*
- 35.8 *sByin pa nges par bstan pa'i mdo*

第36章 布施に反する方向を意図して説いたもの

- 36.1 *bDen pa'i rnam pa'i mdo (Bodhisattvaprātimokṣacatuṣkanīrhārasūtra)*
- 36.2 *Blo gros mi zad pa la bstan pa'i mdo (Akṣayamatīnirdeśasūtra)*
- 36.3 *Drang srong rgyas pa'i mdo (Rṣivṃyāsaparipṛcchasūtra)*
- 36.4 *Byang chub sems dpa' spyod pa yongs su dag pa'i mdo*
- 36.5 *Blo gros mi zad pa la bstan pa'i mdo (Akṣayamatīnirdeśasūtra)*
- 36.6 *Nam mkha' mdzod kyis zhus pa'i mdo (Gaganagañjaparipṛcchasūtra)*
- 36.7 *mDo sde'i rgyan (Mahāyānasūtrālaṃārahāṣya)*
- 36.8 *dKon mchog sprin gyi mdo (Ratnameghasutra)*

第37章 布施の利益を意図して説いたもの

- 37.1 *sNying rje chen po la 'jug pa'i mdo (Sarvadharmasvabhāvasamatāvīpañcitasamādhirājaūtra)*
- 37.2 *Nam mkha' mdzod kyis zhus pa'i mdo (Gaganagañjaparipṛcchasūtra)*
- 37.3 *Shes rab kyi pha rol tu phyin pa sdud pa tshigs su bcaḍ pa (Prajñāpāramitā-ratnaguṇasaṃcayagāthā)*
- 37.4 *dKon mchog sprin gyi mdo (Ratnameghasutra)*
- 37.5 *Tshaags pas zhus pa'i mdo (Brahmaviśeṣacintiparipṛcchāsūtra)*
- 37.6 *Byang chub sems dpa'i sde snod kyi mdo (Bodhisattvapiṭakasūtra)*
- 37.7 *bDen pa po'i le'u (Bodhisattvagocaropāyaviṣayavikurvāṇanirdeśasūtra)*
- 38.8 *'Jam dpal gyi zhing gi bkod pa'i mdo (Mañjuśrībuddhakṣetraḡuṇavyūhasūtra)*
- 39.9 *Las rab tu 'byed pa'i mdo (Karmavibhaṅga)*

これらの各セクションのタイトルは、著書の末尾において次のようにまとめられている。

(1) 出家に属する布施と、(2) 在家における食欲と、(3) 偽善と⁵誤った生活と、(4) 説法者に対して誹謗することと、(5) 法を捨てることと、(6) [菩薩を] 傷つけること、(7) 管理人と、(8) 摂受と、(9) 軽い生活と、(10) 生活を浄化すること、(11) 利得と尊敬と、(12) 魔により説かれたものと、(13) 商業と、(14) 戒を破ることの特徴と、(15) 戒をもつ者を軽蔑することと、(16) 出家者を賞讃することと、(17) 浄化の功德と、(18) 行境でないものと、(19) 罪のある友と、(20) 善知識と、(21) 如来に供養し尊敬することと、(22) 正法を受持することと、(23) 正法が沈むことと、(24) 聞の功德を説いたものと、(25) 聞が少ないものを捨てることと、(26) 質問をしないことの過失と、(27) 正法を盗むことと、(28) 自分を賞讃し他者を責めることと、(29) 菩提心の功德を述べたものと、(30) 菩提心を求めることと退けることと、(31) 菩提心を忘れることと、(32) 医方を否定することと、(33) 星宿の考察を捨てることと、(34) 王に頼ることをを非難すること、(35) 在家の布施と、(36) 布施に反する方向と、(37) 布施の功德を意図するものが説かれている⁶。

彼が自らの言葉として述べている部分は、この膨大なテキストの中でも、この三十七の項目だけである。これらのテーマは、概して仏教徒としての軌範にポジティブな項目とネガティブな項目が混在してあげられている。その配列順序には何らかの意図があるようには見えず、そこに法則を見いだすことは困難である。

『大経集』では、これに続いてコロフォンが記されており⁷、その著作の経緯を知ることができる。そこには、

『種々なる経典より集めた話』を完成する。布施されるこの法は、優れた大乘の追随者であるシャーキャの長老である大賢者 Śrī Dīpaṃkarajñāna のものである。ここで福德となるものは、賢者と軌範師と父母とに先行しており、衆生の集まりの究極の者たちは無上なる知恵の結果を特別に得なさい⁸。

と説かれている。これに続いて、著書の翻訳経緯が偈頌により説かれている。

⁵ 北京版は、ここではこの項目を欠いているが、著書本体のセクションの表題箇所には述べられている。

⁶ Tib. D. Gi 197b7-198a4; P. Khi 229b3-230a2.

⁷ この部分は、Chattopadhyaya 1967: 471 において英訳されているが、そこでは省略もあり、完全なものではない。デルゲ版と北京版を比べると、前者には偈頌の後半部分の欠落がある。これは前半と後半は内容が重複するためにデルゲ版では削除されたのであろう。

⁸ Tib. D. Gi 198a4-5; P. Khi 230a2-4. 北京版 (P. Khi 230a7-b3) では、さらなる偈頌が続く。

ムニのお言葉という大海の甘露の液で、過犯と煩惱という病気を治すこの大薬を、五百の時に説いた命を保持する⁹シャーキヤの息子で功德が知られている者が、喩えようのない村に身体を生じた論争の時の賢者 **Jayānanda** をお願いをしてから、高貴な行者で、損なわれることのない信仰をもつ **Pa tshab** が盲者の巡礼地として設定される高地のケツン出身の聖者により加持された。

ペルデンゲーの大経堂において [インドとチベットの] 二つの言葉を聞くことに関しては獅子の吠える声のようであるシャーキヤの比丘 **Nyi ma grags** とクーの僧侶 **mDo sde 'bar** により翻訳された。

それにより生じた福德を月のような涼しさにより、ムニの四衆と有情の過犯と煩惱と苦悩を鎮めなさい¹⁰。

以上が、この著書において見られる経典引用文以外の記述である。コロフォンは、明らかに作者の手を離れたものであり、そこには著書が翻訳される経緯が記されているものの、直接に著者の編集意図につながる情報を提供してはいない。ただし、次の二つの重要な情報を提供している。まず、本テキストは、北京版によると **Dīpaṃkaraśrījñāna** 自身ではなく、**Kumāraprajñā** という者などにより書かれたようである¹¹。次に、その翻訳は著者の元を離れて、しばらく後になされたということである。

引用経論

本論に引用されている経論は八十三である（延べ数二百七十三）。この数は、七十二の経典（延べ数百七十四）が引用される『経集』、八十八の経典（延べ数三百五十九）が引用される『集菩薩学論』とほぼ同じ数であり、経典のヴァリエーションにはそれほど違いはない。ただし、本論では、経典だけでなく、『菩薩地』『声聞地』『大乘莊嚴経論』などの瑜伽行唯識派の論書や、律からの引用もある。

これらの引用のうち、『迦葉品』の引用は、『宝積経』のタイトルで引用される一方で、『宝聚経』が『迦葉品』のタイトルで引用され、『宝聚経』のタイトルでの引用は同経に確認できない。また、『月灯三昧王経』の引用は、『一切法自性平等性广大三昧王経』の名称で引用されるだけでなく、『入大悲経』の引用も同経に確認ができる。その他にも、典拠名は確認できるものの、引用文を確認できないものや、経典名の確認ができない経典も複数ある。

⁹ Chattopadhyaya (1967: 471) は、北京版に従い、「**Jīvadhārī** の手により書き下ろされた」と訳している。同じ北京版では、直前に「**Kumāraprajñā** の手により書き下ろされた」ともある。

¹⁰ Tib. D. Gi 198a5-7; P. Khi 230a7-b3.

¹¹ Tib. P. Khi 230a4-7. 北京版では、これにさらなる偈頌が続く (Tib. P. Khi 230b3-231a2)。

引用数が多いものは、複数の名称で引用される『月灯三昧経』の二十一回で、『宝雲経』が十三回、『弥勒獅子吼経』と『仏蔵経』が十一回、『海龍王経』と『*gZi brjid can gyi mdo*』が続く。『般若経』については七回であることから、これらの経典が必ずしも有名でよく読まれていた経典であるというわけではない。しかしながら、编者がある意図をもってこれらの経典を引用していることから、彼にとっては親しみのある経典であったことになる。

また、本アンソロジーは、重要な情報も多く与えている。すなわち、Dīpaṃkaraśrījñāna 滞在時のヴィクラマシーラ寺院の書誌情報をそこから知ることができる。もちろん、これらの経典は、読誦経典として用いられていたものを意味するのではなく、教義解説の根拠として引用されたものであるために、経典の人気度を示すものではない。しかしながら、これらの経典は、インドにおいて東アジア仏教とは異なる経典の受容状況があったことを示している。そのことは、インド仏教においてどのような大乘経典が利用されていたのかも示している。

第2章 執事を説く經典

はじめに

『大經集』の第七章「執事を意図して説いたもの」には、四つの經典が引用されているが、その第二の引用經典のタイトルには問題がある。ここでは『迦葉所問經 ('*Od srungs kyis zhus pa*)』というタイトルの經典が引用されている¹ものの、その内容は『宝聚經 (*Rin po che'i phung po'i mdo*)²』からのものである。同論には『迦葉所問經』からの引用も見られるのだが、それは『大宝積經 (*dKon mchog brtseg pa'i mdo*)』のタイトルで引用されている³。さらに複雑な問題として、同論には『宝聚經』のタイトルで引用されている經典も見られる⁴ものの、これらの引用文を同經に確認することはできない。『迦葉所問經』も『宝聚經』も、いずれも『大宝積經』の一部を構成する經典であり、『宝積經』の主要部分を形成する『迦葉品』を『大宝積經』として引用することは十分に考えられることである。しかしながら、『宝聚經』を『迦葉所問經』と呼ぶことに関しては、正当な根拠を推測することは難しい。さらには、現時点では未確認である經典を『宝聚經』と呼んでいることから、そこには編集者自身による何らかの混乱があったと推定することができる。まず、彼は『迦葉所問經』を大宝積部の主要經典としてとらえ、同經を『大宝積經』として引用したのであろう。次に、「宝 (*ratna*)」という語に引かれて、『宝聚經』を大宝積部の主要經典である『迦葉所問經』と認識してしまったのではないであろうか。いずれにせよ、未確認である『宝聚經』のタイトルで引用されている經典の同定が急務の課題である。

執事人について

ここでは、『大經集』に引用される經典において「執事人 (*vaiyāvṛtyakara*)⁵」がどのように説かれているのかを簡単にまとめてみる。このことから *Dīpaṃkaraśrījñāna* が執事人をどのようなものとして捉えていたのかを推測することができる。

執事人とは、僧院の管理を担当する者のことである⁶。その役職に就くためには、い

¹ D. 4b2-3, P. 5a3-4; D. 16b3-17b1, P.19a6-20a7 (Silk 1994b: 417-420), D. 45a2-48a2, P. 50b2-54a3 (Silk 1994b: 437-455), D. 65b5-66b1, P75a1-b7 (Silk 1994b: 421-423), D. 97a2-b4, P. 76b1-77a4 (Silk 1994b: 426-428), D. 84a3-85a5, P. 95b7-97a4 (Silk 1994b: 496-501).

² 同經については、Silk 1994b, 2008 において校訂テキストと英訳が、蜜波羅 2004 において和訳が発表されている。

³ D. 71b1-7, P. 82b2-83a2 (Stael-Holstein 1926: 162-166 [111]-[114]), D. 78b5-79b7, P. 89b2-90b7 (Stael-Holstein 1926: 172-179 [121]-[125]), D. 155b7-156a4, P. 178b5-179a2 (Stael-Holstein 1926: 123-130 [84]-[88]), D. 161b2-5, P. 185a8-b3 (Stael-Holstein 1926: 6-7 [3]).

⁴ D. 7b4-5, P. 8b5-7; D. 39b5-40a1, P. 44a7-b4; D. 155a1-b4, P. 177b3-178b1; D. 157b7-158a6, P. 181a3-b2.

⁵ その語源については、Silk 1994b: 215-218, 袴谷 2002: 320-321-70.

⁶ 「執事人」については、松田 1981, 袴谷 2002, Silk 1994b, 2008 を参照。

くつかの条件を要する。それは、『日藏経』と『宝聚経』にほぼ同じ内容で説かれており、(1) 阿羅漢と、(2) 清浄な比丘とされている⁷。

執事人がなすべきことについては、『宝聚経』に詳細に説かれている。まず、「すべての比丘のサンガを喜ばせるべきである」とか、「阿蘭若の比丘を護るべきで、害するべきではない」などと述べられている。具体的な仕事内容としては、次のものがあげられている。すなわち、(1) 乞食者への好ましい食事の分配、(2) 日用品・薬・資具の施与、(3) 寝具の用意、(4) 飲食の施与などである。これらはいずれもが、その他の出家修行者に対してなされる行為である。このような一般の比丘と執事人との立場の相違は、「比丘を尊敬すべきである」とか、「行為を命令すべきではない」という記述からも明らかである。また、サンガが得た利得の管理については、「集めたり、隠したりすべきではない」と私的利用を制限されているものの、それを如来の塔の修復に利用することが積極的に説かれている⁸。同経の最後には、以上のものに反する行為の抑止策として、業思想に基づく悪業の結果が列挙されている。

また、『発勝志楽経』には、「執事に励む菩薩は、聖教を受け、読誦する菩薩を中断すべきではなく、敬意と尊敬をなすべきである」と説かれている。執事人のなすべき行為は、あくまでも修行者の邪魔にならないようになすべきものであり、他の修行者たちと同等な存在としては説かれていない⁹。

『大経集』第七章和訳

執事をなすことを意図して説いた。

『日藏経¹⁰』にも、

それから世尊にビンビサーラ王が次のように申し上げた。「尊者世尊よ、『執事』とおっしゃられる場合に、世尊よ、何により執事人と名づけられたのでしょうか」

世尊がお答えになられた。「大王よ、二種の比丘を執事人と認めている。二種とは何かと言えば、八解脱を修習した阿羅漢である者と、学ぶことの相続に入った比丘である者などである。大王よ、この二種の比丘が執事する行為をなすことを私は許可している」

と説かれている。

⁷ 袴谷 2002: 320-322.

⁸ 袴谷 2002: 251-257.

⁹ 執事人が差別されていたことに関しては、袴谷 2002: 317-342 を参照。

¹⁰ Silk 1994: 228.

『宝聚経¹¹』にも、

それから世尊に対して、長老カーシャパが次のように申し上げた。

「世尊よ、どのような比丘が執事をなされるのですか」

世尊がお答えになられた。

「カーシャパよ、私が執事をするを許可した比丘は二種である。二種とは何か、たとえば、清浄で、他の世間界¹²を罪過のために恐れるのを見て、業の異熟を確信することで羞恥心を持ち、後悔を有する比丘と、漏を尽し、阿羅漢となった者とである。

カーシャパよ、損なわれていないこの二種の比丘に対して執事をするを私は許可している。

それは何故か、たとえば、カーシャパよ、よく説かれたこの法と律に関して、さまざまな種姓より出家し、さまざまな心の信解を持ち、捨てるためにさまざまなヨーガにとどまり、ある者は、阿蘭若の寢床を明らかに喜び、ある者は乞食をし、ある者は近郊に住し、ある者は生活を清浄にし、ある者は多くを聞くことを明らかに努力し、ある者は法を説き、ある者は律を保ち、ある者は論母を保ち、ある者は村や町や都市や地方や王宮の周辺に入ってから、法を説く。他の衆生の心の行いを護ることは難しいからである。

カーシャパよ、そこで執事人の比丘はすべての比丘のサンガの心を喜ばすべきである。

カーシャパよ、そこで阿蘭若を寢床とする比丘に執事をする比丘が行為を命令するべきではない。執事する人はそれらの阿蘭若の比丘を護るべきであって、非時に請願すべきでなく、非時に遣わすべきではない。

カーシャパよ、もし阿蘭若の比丘にサンガのなすべきことに属する学ぶ行為をそれぞれが得たならば、その執事する比丘は行為を自分自身でなすべきである。また、他のある比丘が指名されて、その行為をなすようにし、阿蘭若の比丘を害すべきではない。

カーシャパよ、そこでその乞食を行う比丘に対して、その執事をする比丘は好ましい食べ物を分配すべきである。

カーシャパよ、そしてヨーガを行う比丘たちに対して、執事をする比丘は適当な

¹¹ 前述のように、『大経集』では、『迦葉品』にも」と異なる經典のタイトルを記しているが、以下の引用は『宝聚経』第四章「當事比丘品」の全文であり、和訳については、蜜波羅鳳洲 2004: 78-97 がある。

¹² 『宝聚経』は、「界 (khams)」を欠く。

生活用具と病気の治療薬と資具を与えるべきである。どこであれそのヨーガを行う比丘が住する地では、その執事する比丘は大声と荒い言葉を出さず、出すこともさせるべきでない。執事する比丘は、そのヨーガを行う比丘を護り、寝具も用意すべきである。好ましい食べ物と、意にそうものと、ヨーガを行う地に適当な食べ物と飲み物を与えるべきである。その比丘に対して、「この比丘は如来の説かれたものを示す¹³ために住しており、彼に対して私は一切の適切な資具をたくさん用意すべきである」と考えて大きな尊敬の念を起こすべきである。

カーシャパよ、そこで多くを聞くことに明らかに努めているそれらの比丘たちに対して執事人の比丘は、「教えを受けなさい。回収しなさい。読誦しなさい。私たちは、あなたの尊敬するものですから、あなたがありのままをありのままに多く聞くように、比丘のサンガが好ましいものになるようにしなさい。律を述べることにより好ましくなるようにしなさい。自分自身の知恵も最高になるようにしなさい」と喜びを起こすべきである。

カーシャパよ、そこで執事人の比丘は彼らを非時に遣わすべきではなく、行為を命令すべきではない。執事する比丘は、それらの多くを聞く比丘を護るべきである。

カーシャパよ、そこで法を説くそれらの比丘に、執事する比丘は行為を命令すべきではない。村や町や都市や地方や王宮の周辺に入って行き、法を解説させる。法を聞くものたちに命令すべきである。衆会の輪を清浄にすべきである。十分な法の話のために輪を設けるべきである。法を説く比丘に対して損害を与えるそれらの比丘を執事する比丘は退けるべきである。執事する比丘は法を説く比丘を常に歓迎すべきで、「良い」と多く言うべきである。

カーシャパよ、そこで律を保持し、論母を保持する比丘のところにその執事する比丘が行き、「どのようにすれば自分が無傷で、損害がなく、どのようにすれば自分が罪に墮ちることがない法の執事をなすのか」と問うべきである。それから律を保持し、論母を保持するそれらの比丘は、執事する比丘の意志を知ってから、そのなすべきことと生じるもの、そのなすことを説くべきである。執事する比丘は、律を保持し、論母を保持するそれらの比丘を専敬すべきで、信と尊敬と敬愛を明らかに起こすべきである。

サンガの利得を執事する比丘は、時々比丘のサンガに与えるべきであるが、サンガの利得を集めたり、隠したりすべきではない。利得のままに与えるべきで、催促されずに与えるべきで、損なうことなく与えるべきである。彼は貪瞋痴と恐怖に

¹³ 『宝聚経』は、「説く (sten)」ではなく、「頼る (rton)」とある。

より行くべきではない。

比丘のサンガに依存すべきで、在家の方に依存すべきではない。サンガのなすべきことに依存すべきであるが、自分が喜んですべきことに依存すべきではない。いかなるものに対しても、支配する想を起こすべきではなく、なすべきことがどんなに小さくてもサンガの意向のままになすべきで、自分勝手になすべきではない。

サンガや、四方のサンガや、仏塔の資具はいかなるものも適当で、ありのままに設定すべきである。サンガのものと四方のサンガのものとを混同すべきではない。四方のサンガの利得もサンガのものと混同すべきではない。サンガのものと四方のサンガの利得を仏塔のものと混同すべきではない。仏塔の利得もサンガのものと四方のサンガの利得と混同すべきではない。もし四方のサンガにおいて貧窮し、サンガの利得が大きくなったならば、執事する比丘は比丘のサンガを集めて、一致して、サンガの利得から四方のサンガに譲渡すべきである。

もしも如来の塔が壊れて、サンガの利得と四方のサンガの利得が大きくなったならば、執事する比丘は比丘のサンガすべてを集めて、一致して、次のように「この如来の塔が壊れ、サンガの利得と四方のサンガの利得が大きくなったならば、もし長老たちが損なうことなく信仰をもって耐え、許可すれば 私はこのサンガの利得と四方のサンガの利得から僅かなものを運び出し、如来の塔を修復するべきである」と述べるべきである。もしもサンガが許可するならば、その執事する比丘はそのようにすべきである。もしもサンガが許可しないならば、その執事する比丘は施者と施主への請願を得て、如来の塔を修復するべきである。

カーシャパよ、もし塔の利得が多くなってしまったとしても、執事する比丘はサンガと四方のサンガに入れるべきではない。それは何故か、と言うのならば、多くの信仰と浄信により塔に与えられたものは、最後の綿の一本だけでも天を伴う世間の塔であり、宝や宝と言われるようなものは、言うまでもない。何であれ塔に与えられた衣は、その如来の塔自体においては風と日と雨により消滅しやすいが、塔に与えられた衣は財貨や財貨の価値に変えられるべきではない。それは何故か、と言えば、塔のものにはいかなる金銭価値もなく、「塔」というものも貧窮もないからである。

カーシャパよ、執事する比丘はどのように清浄にすべきであり、彼は三宝の清らかさを汚すべきではない。自分の利得により足りていることを知るべきである。三宝の加持されたものを自分のものと思ふべきではない。カーシャパよ、ある明らかな憤怒の心をもつ執事する比丘が、戒をもち、功德をもつ、施住である者たちに怒りの心をもち、支配し、命令をするならば、彼はその不善業により地獄に行くであ

ろう。もしも人の世間に来て、奴隷と他の行為をなすことになり、拳や平手や自慢の武器で打たれることになるであろう。

カーシャパよ、さらにまた、もしも執事する比丘が、サンガのなすべきことを越えて、自ら喜んで比丘たちを支配し、命令し、罰し、恐れさせ、脅かし、非時に打ち、非時に命令するならば、彼はその不善業により「多くの鉄釘」という孤独地獄に生まれるであろう。そこに生まれてから身体に十万の鉄釘が刺さり、それが燃え、明らかに燃え、普く燃え広がって燃えるであろう。彼が戒をもつ者と功德をもつ者と施住たちを脅し、その毒のある口業を述べた彼はそこに生まれてから、舌根の大きさは百由旬になり、彼の舌根に十万もの鉄釘が降り注ぎ、それらも燃え、明らかに燃え、普く燃え広がって燃えて、火事になるであろう。それは何故か、と言え、このように彼は脅かし、毒のある口業を述べたからである。

カーシャパよ、ある執事する比丘がサンガの利得を集めたり、集めさせ、時々与えず、損害をなしてから与え、ある者には与え、ある者には与えなければ、彼はその不善業により「糞泥に沈む」という餓鬼の住処に生まれるであろう。彼はそこに生まれてから、他の餓鬼の食べ物を受け取り、それを示されたならば、それを示された時に眼は微笑まずにその食べ物を見て、飢えと渇きにより苦しむ苦の感受作用を領受し、十万年もその食べ物を得ることがないであろう。もしも万が一その食べ物を得ても、嘔吐し、膿と血になるであろう。それは何故か、と言え、次のように彼は戒をもち、功德をもち施住たちを満足させず、自分の利得により足りていないことを知らないからである。カーシャパよ、ある執事する比丘がサンガのものや、四方のサンガのものや、塔のものを求めるならば、その異熟は、私が劫を数えても、述べられることはない。

カーシャパよ、ある執事する比丘がこれらの過失の場所を次のように聞いてから、怒り、罵り、損なおうと思ひ、激怒したならば、「彼は治すのに適さない」と私は説く。カーシャパよ、それ故に、正法を次のように聞いてから、執事する比丘は身口意を清浄にするべきである。自分と他者を護るべきである。カーシャパよ、執事する比丘は自分の肉を食べるのは容易だが、三宝の加持の鉢や法衣や病気の治療薬や資具を使用すべきではない。」

それから世尊に長老マハー・カーシャパは次のように述べた。

「世尊は、弛んだ者たちの弛んだ法と慎みある者たちの慎みの法をお説きになられた。」

と説かれている。

『発勝志樂經』にも、

それから世尊にマイトレーヤ菩薩摩訶薩がお願いをした。

「世尊よ、誰であれ法の最高のものを捨ててから、悪い行為を始める菩薩は知恵がとても少なくなり、知恵が貧しくなるでしょうか。」

そのようにお願いして、世尊はマイトレーヤ菩薩摩訶薩に次のようにお答えになられた。

「マイトレーヤよ、それはその通りである。それはその通りである。そのように述べた通りである。誰であれ法の最高のものを完全に捨ててから悪い行為を始めるそれらの菩薩は、知恵がとても少なくなり、知恵が貧しくなるであろう。マイトレーヤよ、さらにまた、あなたは信解すべきである。あなたは理解すべきである。誰であれヨーガがなく、禅定がないことを捨てず、読誦することがなく、多くを聞くことを求めないそれらの菩薩は、如来の説かれたところに出家する者ではない。マイトレーヤよ、如来の説かれたものは、禅定と捨により分けられ、知恵が集まったものと知恵による禅定に入るものと精進とにより区別されるが、在家の行為と執事により区別されない。次のように執事するその行為は正理ではなく、ヨーガと行を明らかに喜ぶものと、世間のなすべきことにより捨てられ、菩薩はそれを望むことを起こすべきではない。マイトレーヤよ、もし執事に励む菩薩が七宝の塔によりこの三千大千世界を満たしたならば、彼は私が望むものではなく、描かれるものではなく、尊敬するものではないが、マイトレーヤよ、もしも菩薩が最後に六波羅蜜をともなう四句の一偈のみを受け取り、保持し、読み、すべてに精通し、解説するその人を、私は尊敬し、師となし、描き、供養をするであろう。それは何故か、と言うのならば、マイトレーヤよ、如来の菩提は多くを聞いてから生じるものであるが、実際に保持してから生じるものではないからである。マイトレーヤよ、もしも執事に励む菩薩が、菩薩の聖教を受け、読誦に励む菩薩が執事の汚れにより汚されるならば、福德を欲する彼は、福德ではない大蘊を生起させられるであろう。すなわち業障も完全に把握されるであろう。それは何故か、というのならば、福德を作る三つの基本となるものは、知恵から生じるからである。マイトレーヤよ、その通りなので、執事することに励む菩薩は、聖教を受け、読誦に励む菩薩を中断すべきではない。このジャンブードウィーパで執事することにより完全になるそれらの執事人はすべて、聖教を受け、読誦することに励む一人の菩薩に対して、敬意と尊敬をなすべきである。」

と説かれている。

『菩薩別解脱四法成就經¹⁴』にも、

そこで菩薩の執事は何か、と言うのならば、如来の塔と法を聞くことと賢者と軌範師に対し怠惰がなく、頼ることのない者が、執事の行いをなす。シャーリプトラよ、「誰であれ菩薩であればいい」と望んで、その執事をなさず、そのような性質により執事をなさない。これが「執事と知られる」と言う。

と説かれている。

¹⁴ 『大経集』では、*bDen pa'i rnam pa'i mdo* のタイトルで引用される。チベット大蔵経には、同じ著者ら (*Dīpaṃkaraśrījñāna, Shākya blo gros, dGe ba'i blo gros*) により翻訳されたチベット語訳が収められている。この経典が『大経集』では、何故このように呼ばれているのかについては、確認できていない。

第3章 非行境を説く経典

はじめに

Dīpaṃkaraśrījñāna の『大経集』には、先行するアンソロジーである Nāgārjuna に帰される『経集』や Śāntideva の『集菩薩学論』と重複する引用を確認することができる。また、『菩提道灯論疏』における経典の引用は『集菩薩学論』と重なるものも多数あり、Dīpaṃkaraśrījñāna は、自らの論書において経典を引用する際に、先行するアンソロジーの経文を意識していたことがわかる。これらの引用が、直接に経典から引いてきたものなのか、あるいは先行するアンソロジーからの孫引きなのかについては、各引用ごとにさらなる調査を要する問題である。ここでは、『大経集』の第十八章において引用される『法華経』の経文を先行する『集菩薩学論』における引用と比較し、さらに同章の主題である「非行境」について説く経典について考察を行う。

『大経集』に引用される『法華経』

第十八章における『法華経』の引用は、同経の第十三章の「安楽行品¹」の第一偈から第十八偈前半までである。その内容は、後の悪世において法を説くための四法に安住すべきことを説いたものである。この四法とは、「身安楽行、口安楽行、意安楽行、誓願安楽行」である²。そのうちの「身安楽行」とは、菩薩の行処と親近処とである³。これらのことに関して具体的な事例を述べる長行の部分を偈頌により繰り返しているものが、ここに引かれているものである。

この「安楽行品」の前半の偈は、『集菩薩学論』においても引用されている⁴。ただし、そこで引用される偈頌は、第二偈から第五偈、第八偈、第九偈、第十一偈から第十三偈である。すなわち、『大経集』の引用は『集菩薩学論』の引用よりも長くなるために、『集菩薩学論』からの孫引きではないことが確認できる。ただし、Dīpaṃkaraśrījñāna が経典の引用について『集菩薩学論』に依拠していることから、この経文が同論にすでに引用されていたことを認識していたであろう。

『大経集』『大乘集菩薩学論』『法華経』のチベット語訳を比較してみると、デルゲ版と北京版などの諸版間にヴァリエントがみられるものの、ほぼ同じ翻訳である。ただし、『大経集』に引用される経文の第六偈と第九偈には、大きな違いが存在する。それが翻訳者に起因するものなのか、翻訳者が所持していたサンスクリット写本に起因する

¹ 紀野 1962: 73 は、「安楽行品」を後代の付加だとし、荻谷 1972 は、ここに引用される「行処」と「親近処」の部分のみが後代の付加であるとする。これを紹介した久保 1987: 116 は、これらに対して否定的である。荻谷 1982: 166 も参照。

² 藤井 1992: 683-684.

³ 藤井 1992: 680 頁参照。それによると、「菩薩のとるべき行動と、その行動、交際範囲」の意味である。なお、この箇所に関しては、すでに久保 1968 に詳細に論じられているので、参照していただきたい。

⁴ 清田 1970 に、ネパール写本との関係が考察されている。また、Nāgārjuna の『経集』における法華経の引用に関しては、一島 1993 を参照。

ものなのかは判断できない。少なくとも、この引用を翻訳する際に、先行する『法華経』のチベット語訳をそのまま引いてきたことはないようである。

非行境について

『大経集』の第十八章に引用された経典の記述から、出家修行者が近づくべきではないと対象をまとめてみる。

まず、行ってはならない場所のうち、屠殺者の家、娼家、酒を売る家、王の家、施茶羅の家に関しては、不浄なものや不善業に抵触するものと考えられる。村、街、都市などには、酒を売る家や歌舞のおこなわれる場所が存在し、芸人などの快樂のために生活するものたちもいる場所である。そのような場所は、出家者の在り方と異なるために、修行者が独りで入っていくことを避けるように述べられている。

親しむことが禁じられている者のうち、未亡人、年輩の女性、去勢されたもの、罪のある比丘尼とは明らかに不適切な性的対象を示している。破戒の者、増上慢の者などは、同様に不善業とも関係している。怠惰な者、偽善者、美食家などは、出家者の在り方と異なるものである。施陀羅、屠殺者、外道などは不浄なものとしてあげられている。

これらをまとめると、不善業道の要因となるもの、道徳的に適切ではないもの、不浄なものが示されている。これらのものは、その場所に存在し、彼らと交際することが直接の破戒や、不善業をなすことにはならないものの、そのようなことを引き起こす要因の一つになりうるものであり、可能な限り避けるべき対象となる。

まとめ

以上のことから、これらの経典の引用文により、出家修行者が赴くべきではない場所と親しむことを慎む対象が明確に述べられている。それは、それぞれの理由のために修行の妨げになると考えられたために、それらの限定がなされたのであろう。すなわち、悟りを得るためには、場所などの優劣は問題ではない、と言う視点はそこには見られない。確かに、酒場や娼婦のいる場所に行くことが悟りに対して有効とは言いがたい。大都会の喧騒の中よりも、森林などの静かな場所の方が効果的であろう。しかしながら、親近処ではないものとしてこれらの場所を排除することは、場所や人の差別化に展開していく危険性をもつことになる。施陀羅や屠殺者の家に行ってはならないのかは、その正当な理由を見いだすことは困難である。

『大経集』第15章和訳

比丘たちが何れかの場所に入るべきではないことと、知り合いになるべきではない者との行境ではないものを意図して説かれている。

『瑜伽師地論声聞地』にも、

比丘の非行境は、五つである。五つとは何かと何か、と言えば、屠殺者と、娼家と、酒を売る家と、王の家、第五に施陀羅の家である⁵。

と説かれている

『毘奈耶雜事』にも、

非行境は五つである。娼婦と、未亡人と、年輩の女性と、去勢された者と、罪のある比丘尼とである⁶。

と説かれている。その同じ律に、

とても年老いた者であっても、非法を説く者を敬うべきではない⁷。

と説かれている。

『宝雲經』にも、

さらにいかなる場所であれ犬を食する者や、乳牛や家畜の生じる場所に属する自性による悪い本性の有情や、女性や男性、男の子や女の子で冗談をなそうという思いをもつものが存在することや、低いすべての場所におけるすべてのものを完全に捨てることである⁸。

と説かれている

『菩薩梵志經』にも、

出家者は、在家の九支をもつ者のところに行くべきではない。いかなる九支をもつ者か、と言うのならば、見てから顔を背ける者と、座を辞すことに入る者と、その説かれたものを信じない⁹者と、彼を尊敬せずに接近する者と、どこであれ家から出る際に兇暴な犬が後ろから噛み付くことがあるところと、どこであれ門番で罪をもつ者がいるところと、家の家長たちもそれを信じることを離れているも

⁵ 声聞地研究会 1998: 66-67.

⁶ Tib. P. No. 1035. ただしそのテキストが大きいために、現時点で同テキストに本文を確認することはできていない。

⁷ 前項と同じ典拠と思われるが、同様に確認できていない。

⁸ Tib. P. No. 897, Dzo 88a8-b5; Chin. T. No. 489: 738b25-28, No. 658: 231b21-24, No. 659: 267c15-18, No. 660: 316c4-7. 同じ引用は『集菩薩学論』の第五章「集離難戒学品」(Bendall 1922: 116) にも引用されている。Cf. Bendall and Rouse 1922: 114; 浅野 1991.

⁹ Tib. P は、否定辞 (mi) を欠く。

のと、どこであれ女性と悪い在り方と罪の性質をもつものと執着と脅迫をなすことがある者と、いかなる家であれ覆うことを自在にともなうことがある者とである。

大王よ、そのように在家で九支をともなう者のところに出家者は行くべきではない¹⁰。

と説かれている。

『宝雲經』にも、

次のように、菩薩は村と街と都市と地域と小国と、王妃たちを思つてとても近くに行き、住するのか、と言うのならば、ここに菩薩は村と街と都市と地域と小国と、王妃たちのところにおいて菩薩行を行う際に、いかなる場所も正しい在り方と同じでなく、完全に捨てられるべきである出家の在り方と矛盾するそれらを完全に捨てている。それらは何か、と言え、こうである。酒を売る家や、娼家や、王妃や、王の住所や、酒酔の衆の集まりと、舞踏や歌舞の場所や、そうではない他の場所もあてはまる。出家の在り方と異なるそれらを完全に捨てても、それらを思い出してとても近くに行き、住することである。すなわちそのようなならば、菩薩が村と街と都市と地域と小国と、王妃たちを思つてとても近くに行き、住することである¹¹。

と説かれている『法華經』に、

後のとても恐ろしい時代に、不安なく、恐れずに、この經典を説くことを菩薩が望むならば、行為を行う場所を護り、騒音がなく清浄であるべきである王と王子と親しくすることを常に捨てるべきである。

何れかの王の使用人や、施陀羅や、欺瞞者や、異教徒たちと、あらゆる面で親しむべきではない。

比丘で、律とアーガマに依存し、阿羅漢と思う心をもつ増上慢のものたちに近づくべきではなく、破戒のものたちを捨てるべきである。

笑うことや話すことの行境をともなう比丘を常に捨て、不堅固に見える優婆塞も捨てるべきである。

ここにおいて真実なる安樂を求める優婆夷たちと親しむことを捨てるべきである。これが、儀軌である、と言われている。

ある者が、その方向に来てから、最高の菩提のために法を問うならば、とどま

¹⁰ Tib. *Byang chub kun tu rgyu'i mdo*. 現時点で典拠の確認はできていない。

¹¹ Tib. P. No. 897, Dzo 88a8-b5; Chin. T. No. 489: 737bl-8, No. 658: 230b16-22, No. 659: 266b26-c4, No. 660: 315b19-23.

ることなく、弱まらずに、勝者に常に言うべきである。

衆生で、女性や去勢されたものたちと親しむことを捨てるべきであり、家においても嫁や娘たちを捨てるべきである。

快樂を感じて親しむことにより彼女たちに近づいて楽しむべきではない。豚を売る者や、屠殺の者たちと親しむことを捨てるべきである。

殺生を多くの相においてなす者で財産のために殺生をする者や、屠殺場において肉を売る者と親しむことを捨てるべきである。

誰であれ女性を養い、芸人や、力士や、楽器を奏する者と、この他のそれと同様の者たちとも親しくすることを捨てるべきである。

娼婦や主に依存するべきでなく、そのような快樂のために生活する他の者や、大いに歓喜する者たちもあらゆる相において完全に捨てるべきである。

賢者は、女性たちに対しても法を説く際に、独りで行かず、笑ったり、座つたりすべきではない。

いつであれ、食のためにしばしば村に入る際に、二人目の比丘を得るべきか、または仏を念じるべきである。

誰であれ智慧をもつ者が、この経典を保持し、儀軌と行境とを最初に解説したものがこれである。

何によっても有為と無為、真実と不真実、優れたものと中程と下位の法をすべての相において扱うことがない。

堅固なものは、「女性である」と扱わず、「男性である」とも分別しない。一切の法は不生であり、求められても、見られない。

これが菩薩の律儀として、すべての相において説かれている¹²。

と説かれている。『正法念処経』に、

次のようである。すなわち、堅固さと、精進と、禪定と、師を尊敬することと、悪友を捨てることと、仏の教えを修習することと、正しい在り方のままの意をなすことを修習することと、自慢を捨てることと、行為の因果関係を信じることを起こすことと、以前の欲望を思い出さないことと、女性を見ることを捨てることと、善友として見られるために大いに歩かないことと、すべての境において走ることと、死と命終と生を恐れることにより、そのように村に入るべきである¹³。

と説かれている。『海慧所問経』に、

¹² Skt. Wogihara, Tsuchida 1934: 237-239; Kern, Nanjio 1977: 278-281; Tib. P. No. 781, Chu 120a5-121a1; Chin. T. No. 262: 37b19-c13, No. 263: 107c19-108a26, No. 264: 171c23-172a17.

¹³ 現時点で典拠の確認はできていない。

海慧よ、さらにまた大乘を中断させる法は四つである。四つとは何かと言えば、聞くことが少ない時に村や街や都市に入ることと、戒の束に住さずに利得や尊敬や名声を望むことと、諸根の門を守らずに女性を見ることと、不定心により衆生の根に入ることである¹⁴。

と説かれている。『正法念処経』に、

怠惰な者と一緒に住すべきではない。偽善者たちと親しくすべきではない。美食家と一緒に住すべきではない。商人と一緒に質問もすべきではない。詐欺師とおらず、本質的に有垢の者とおらず、邪見の者とおらず、曲折をもつ者とおらず、我慢をもつ者とおらず、傲慢な者とおらず、墮落から立ち上がった者とおらず、賭博者とおらず、酒場におらず、酒を売る者とおらず、論争をする者とおらず、女性を恋い求める者とおらず、貿易商の者とおらず、怒り目をもつ者とおらず、使者たる人とおらず、鳥を捕まえる者とおらず、戯論をもつ者とおらず、外道に入る者とおらず、すべての人を憎悪する者とおらず、すなわち一緒に交際し、会話も、同行も、比丘はなすべきではない¹⁵。

と説かれている。

¹⁴ Tib. P. No. 819, Po 75b5-7; Chin. T. No. 397 (5): 64a22-25.

¹⁵ 現時点で典拠の確認はできていない。

第4章 星宿を排除する経典

はじめに

『大経集』の第三十三章はでは、「星宿の排除」が主題となっている。その冒頭に、「比丘たちが星宿を考察することを排除することを意図して説いた」述べられている。これは、以下に見るように、『正法念処経』の文章をそのまま引いてきたものであり、本章は、仏教徒が星宿すなわち占星術に興味をもつことを禁止することを意図して説かれた経典の文章をまとめたものである。前の第三十二章が「医療行為を排除する」というものであり、続く第三十四章は「王に依存することの排除」であり、いずれの章も『正法念処経』の「観天品」に見られる十三の比丘の墮落の原因¹を述べた箇所からの引用がその主要部分となっている。従って、『大経集』のこの部分は『正法念処経』に基づいて編纂されたと言える。

インド仏教における星宿観

インドにおける天文学の歴史については、(1) ヴェーダ時代 (1000B.C-400B.C)、(2) バビロニア要素の時代 (400B.C.-200)、(3) ギリシャ・バビロニア両要素並立の時代 (200-400)、(4) ギリシャ要素の時代 (400-1600)、(5) イスラム要素の時代 (1600-1800) に時代区分される²。占いの始まりについては、(1) の時代区分にあたる『リグ・ヴェーダ』において動物の前兆や夢占いなどが説かれているものを見ることができる。星宿の名前が揃って列挙されている最初の文献は『タイッティリーヤ・サンヒター』とされており、『アタルヴァ・ヴェーダ』の「捨遣」には星宿による占いが体系的に説かれているという³。インドにヘレニズムの占星術を導入するのに重要な役割を果たしたのが、(3) の時代区分に編纂された『ヤナナ・ジャータカ⁴』である。さらに、六世紀になると、ヴァラーハミヒラが『ブリハット・サンヒター⁵』を著し、インドの占星術が大成された。

では、仏教文献では、星宿はどのように捉えられていたのであろうか⁶。初期仏教の経典には、すでに星宿に対する否定的な見解が述べられている。『サンユッタ・ニカー

¹ これらは、(1) 喜楽多語言説、(2) 治病、(3) 工画、(4) 聞邪悪事、(5) 歌詠讚類、(6) 数星思惟思惟占相、(7) 唯貧飲食、(8) 求諸宝性、(9) 親近王等、(10) 悵望請呼、(11) 不請他、(12) 樂多知識、(13) 惡同処である (T. No. 721: 284c7-10)。

² 矢野 1980: 22-29 では、第四の時代をさらに、(1)アールヤ学派、(2)アールダラートリガ学派、(3)ブラーフマ学派、(4)サウラ学派、(5)ガネーシャ学派に区分している。

³ 矢野 1992: 93-98.

⁴ Pingree 1978.

⁵ 矢野、杉田 1995.

⁶ 善波 1956, 1960.

ヤ』所収の「サーリプッタ・サンユッタ」には、

姉妹よ、沙門で、バラモンで、星宿明という畜生明により邪明によって生活しているものがある⁷。

と述べられ、星宿が否定的項目の一つとされている。この記述からも、占星術などは非仏教的行為であり、出家修行者が興味をもつべきものでないとされていたことがわかる。このような態度は、アビダルマ文献にも見られ⁸、仏教文献において一貫したものであったことがわかる。

しかしながら、その一方で星宿を説く経典も編纂されてきた。その最古の経典と考えられるものが『ディヴィヤ・アヴァダーナ』に収められている『摩登伽経 (*Sārdūlakarṇāvadāna*)』である⁹。

また、『大集経¹⁰』が編纂される過程において、そこに収録される諸経典には星宿が積極的に説かれるようになる。そのうち星宿が説かれているのは、「宝幢分¹¹」、「日密分¹²」、「日蔵分¹³」、「月蔵分¹⁴」である。そこに説かれている天文学記事は、バビロニアの影響を受けた後のインドの天文学を反映したものとされている¹⁵。現存する漢訳テキストには、中央アジアや中国文化の影響も見られ、星宿に関する記述が経典の伝播とともに書き加えられていったと推定できる。これらのことから、仏教の大衆化とともに、星宿信仰を自らの教義の中に取り入れていったことがうわかる。それは出家修行者が興味をもつべきではない対象から、仏教の教えを広めるための媒介として利用されるようになったのであろう。

さらに、中国において『宿曜経¹⁶』が成立した。不空がその成立に大きく関わったとされるこの経典は、星宿を密教思想と結びつけて積極的に仏教に導入した¹⁷。その内容は、インド占星術そのものであり、仏教の教理とはおよそ無関係なものである。しかしこの仏典を装おった経典を空海らが日本に紹介し、日本において宿曜道という占いの

⁷ *Sāriputtasamyutta, Samyuttanikāya*, PTS ed., L. Feer, London, 1975: 239.

⁸ 佐野 1998:108.

⁹ Mukhopadhyaya 1997: 1-108; 佐野 1998: 109; 善波 1952 を参照。

¹⁰ 同経については、松田 1997 を参照。

¹¹ 「三昧神足品第四」 T. No. 394: 137-140.

¹² 「救龍品第五」 T. No. 394: 231-233.

¹³ 「星宿品第八」 T. No. 394: 270-282.

¹⁴ 「星宿摂受品第十八」 T. No. 394: 371-373.

¹⁵ 佐野 1998: 109-112; 善波 1957 を参照。

¹⁶ Chin. T. No. 1299: 『文殊師利菩薩及諸仙所説吉凶時日善悪宿曜経』。なお、大正新修大蔵経には、続いて *Sārdūlakarṇāvadāna* の漢訳である『摩登伽経』(No. 1300) が収められている。

¹⁷ 善波 1968 1968, 矢野道雄 1986.

一派も形成された¹⁸。このように、Dīpaṃkaraśrījñāna が『大経集』を編纂した時点において、仏教には星宿を排除することを意図した経典と、それを取り入れた経典が存在していたことがわかる。

まとめ

『大経集』において、仏教徒が占星術に興味をもつことに対して否定的な項目が取り上げられていることから、次の二点を明言することができる。まず、Dīpaṃkaraśrījñāna の生存時代である十世紀から十一世紀のインドにおいては、仏教徒が占星術に興味をもつことが否定されていた。次に、この項目を否定対象として取り上げなければならなかったということからも、すでにインドにおいて占星術が仏教徒の中に侵食していたことがわかる。

これと同じことはここに引用されている経典の成立時においても言うことができる。『正法念処経』においてこの問題が取り上げられていることから、このことは彼が取り上げるよりもはるか以前の、同経の成立時点で問題とされていた事項であったのであろう。その一方で、占星術を積極的に説く者たちがより早い時代にすでに存在していたということも想定できる。

しかしながら、ここに引用されている経典などをまとめた『大集経』に収録されている経典には、占星術を否定する経典だけではなく、それを説いたとされる経典も見られる。後者をここに引用することは、本章の主題にマイナス効果しかもたらさないように思える。もしその内容を熟知していたのならば、むしろ本章においては避けて無視すべき文献となるものである。現時点では、その典拠が比定できていないものもあるために断定することはできないが、以下のことを想定することは可能である。Dīpaṃkaraśrījñāna は、これらの文献に星宿について説かれていることを知っていたが、そこにどのようなことが説かれているのか、という文脈までを十分に把握していなかったのではないか。それ故に、経典の趣旨との整合性を欠く引用がここになされたのではないであろうか。

最後に、Dīpaṃkaraśrījñāna 自身は本当に占星術を否定していたのであろうか。四衆の者たちがこのことに興味をもつことを否定していたのであろうが、そうではない者たちに対しての態度は不明である。密教に興味を持っていた著者が占星術に対して批判的であったことは、興味深い話題を提供していると言えるが、それは対象を出家者に限定していた可能性もある。ただし、因果論に基づく仏教の教義においては、星宿は受け入

¹⁸ 矢野 1986: 4-5.

れられないものである。

『大経集』第32章和訳

比丘たちが星宿を考察することを捨てることを意図して説いたもの。

『正法念処経』にも、

この第五は、優婆塞の禅定と読誦¹⁹を中断させるものである。それは何かと言えば、こうである。優婆塞を自称する[悪い]優婆塞が星宿を数えたり、思惟することである。あらゆる場合に、星宿を数えることと思惟することをなすべきではなく、それは[世間の者により²⁰]責められる。優婆塞の法である、禅定と読誦を中断することになるであろう。それらを思惟したならば、福德と生命を失うことになるであろう。安穩に行くこと²¹にならないであろう。寿命が尽きて、なすべきことをなしていない彼を、病気と老いと悲痛と悲号を引き起こすものと苦と愁苦と傷つけられることから解放しないであろう。彼はその長い時間にわたって輪廻を流転するであろう。そこでは星宿は僅かばかりの作用も生じず、星宿は自分と他者との救護者にはならない。それは何故にか、と言えば、業であるものは救護者であるが、星宿は救護者ではない。それは何故にか、と言えば、同一の星宿に、人を生じること²²と、苦と、種姓をもつものと悪い種姓の者²³と、法をもつものと、法をもたないものと、富む者と貧者と、王と盜賊と、賢者と愚者と、[女性と男性と²⁴]、戒をもつ者と破戒の者と、精進に励む者と怠惰な者と、世間を喜ぶ者と世間を喜ばない者と、それらなどがさらにまた生じるであろう。もしも星宿が原因になるならば、解説した通りのその人とすべてのものが等しくなってしまうであろう。彼らの生じる星宿は同一である。自分の功德と過失を明らかに知らずに最初に善と不善の結果をもつ星宿を数えずに、星に属する星宿を数えることになる。さらにまた、星宿を数え、思惟することは、美と善とはならない。すなわち、この如くである。同一の星宿に人と畜生と餓鬼が生じ、星宿の力により等しくなるのではない。この相により星宿を思惟することは不善であり、業を思惟すること

¹⁹ 『正法念処経』のチベット語訳には、「禅定を修習する (bsam gtan sgom pa)」とある。

²⁰ 『正法念処経』Tibによる。

²¹ 『大経集』のデルゲ版は「それらを得て (de dag thob par)」と読む。

²² 『正法念処経』のチベット語訳には、「安穩をとまなう者たち (bde ba can rnam)」とある。

²³ 『正法念処経』のチベット語訳には、「容姿が醜いことと容姿が美しいことと大種姓」とある。

²⁴ 『正法念処経』のチベット語訳による。

は善であり、それを思惟することは涅槃となるであろう。

さらにまた、星宿を思惟することが不善になるのは、こうである。すなわち、星宿は、力をもつものをお互いに把握した際に、増大したり、制圧されたりする。星宿により星宿が制圧され、他時には再びその星宿自身が制圧されるであろう。それ故に、星宿を思惟することは善や美にはならない。例えば、誰であれ楽と苦を星宿に依存して数え、思惟する者の思惟は楽と美とはならない。誰であれ自分自身の楽と苦に対して効能がない者たちにより、どのように他者における楽と苦をなすであろうか。それ故に、善と不善の結果は業だけのものであり、星宿によるものではない。星曜もまた、星曜により妨げられる時に、それらも抑圧されるであろう。例えば、[日と²⁵] 月がラーフ²⁶により蝕されることにより抑圧される如きである。それ故に、誰であれ自分に能力がない者たちが、どのように他者に対して能力があることになろうか。それ故に、優婆塞を自称する悪い優婆塞は星宿を思惟すべきではない。

星曜はこれらの三つである。すなわち、病と老と死である。何であれ常に〔世間の者に²⁷〕存在するこれらの三つは、大星曜であり、世間において様々に思惟している。優婆塞と自称する悪い優婆塞や、知恵がない者や、聞をもたない者や、童子で、他の星曜を思惟し、世間の二十八の星宿を誤って思惟する者たちは、何れかのものを思惟してしまい、正しくそれぞれを考察してから涅槃の城市に入る者は、出世間の二十八の星宿を思惟しない。それらは何かと言えば、すなわち、五蘊と五取蘊と十八界である。それらは執着を離れ、[それらを]取り除いており、束縛し、調伏する²⁸ことにより、正しいものを思惟した後には涅槃するであろうが、比丘は星宿を思惟した後には涅槃しないであろう。

さらにまた、優婆塞を自称する悪い優婆塞で、いずれかのものを数えることにより利益とならず、輪廻から涅槃しない者は、順序に従い十二月を数えるが、正しく制御し、正しい意味を知り、執着を離れた者たちは涅槃し、十二処を数えない。優婆塞と自称する悪い優婆塞は、それらを数えず、他のなすべき雑染をもつものを思惟する。

さらにまた優婆塞を自称する悪い優婆塞で悪いことを思惟する者は、何らかのことを思惟するので、病気と老死より解放されない。世間における雑染をもち、

²⁵ 『正法念処経』のチベット語訳による。

²⁶ 矢野 1995: I, 訳註 72 を参照。

²⁷ 『正法念処経』のチベット語訳による。

²⁸ 『大経集』は「柔和な (dul ba)」とするが、『正法念処経』のチベット語訳の 'dul ba' によった。

不幸を伴う六時を順序通り数えるが、何れかのものを思惟して、正しくそれぞれを考察した後にそれらを離れてから涅槃を得る者は、身体を三十六と思惟しない。

さらにまた、優婆塞を自称する悪い優婆塞が時間により作られた合時を「世間においてどのような合時が誰某にはいい。誰某にはよくない。この時に、この合時が生じる。この時には生じないだろう」と考えて、そのような性質の想をなした者は善をなすものでなく、安穩をなすものではなく、涅槃させるものでなく、涅槃の究極に至らせるものではないという思惟をなし、思惟の相である所縁を善と不善と無記の合時を考えて、例えば「善なる所縁と思われる合時は、その誰某の生はいいものであって、自分を安穩に導き、涅槃に導くであろう。自身を不善なる所縁と思うことは、不善な雑染を伴い、その誰某の生は自分を安穩になさず、善をなさず、安穩に導くことをなさないことになる。無記なる所縁と思うことは、その誰某の生の異熟は無記だけである」という思惟をなさない。

さらにまた、その優婆塞を自称する悪い優婆塞は、世間の道の所縁である時を刹那と瞬息 (lava)、須臾 (muhūrta) 昼夜、月、半月とをもつものとして思惟するが²⁹、例えば自分の寿命の行 (saṃskāra) の瞬間を、刹那、瞬息、須臾、昼夜、月、半月あるとして、「死の時に力が大きく、戻ることなく去ってしまう」と言い、善、不善の結果をもち、人・非人の寿命の行が尽きる時を思惟しない。

さらにまた、世間の雑染をもつ在り方の星宿を思惟し、禪定と誦誦を中断させることを思惟し、修習をなし、何度もなし、よく修習し、設定し、「そのような星宿は誰某である」とか「曜は誰某である」と言ことにより把握し、「[それは] 損害を与える」と言い、他者に助言をなす。そのように思惟をするその悪い人は、病氣と悲痛さと悲号を引き起こすものと苦と愁苦とから脱しないであろう。輪廻と涅槃に関して、例えば、星宿のような他の法を曜のような法が制圧することは、この如くである。すなわち、「生の星宿を死の曜が害している³⁰。天の世間の星宿を死の曜が害する。円満の星宿を衰退の曜が害する³¹。友と結婚する星宿を友と別れる曜が害する。人に生まれる星宿を完全を求める曜が害する。樂受の星宿を苦受の曜が害する。善心を起こす星宿を不善心を起こす曜が害する。醜さの星宿を貪の曜が害する。慈愛の星宿を瞋の曜が害する³²。智意の星宿を痴の曜が害する」とそのように思惟をなす。優婆塞を自称する悪い優婆塞は、自分の出世間の心を

²⁹ Cf. *Abhidharmakośa* 3.88b-89a (Pradhan 1967: 177), 山口、舟橋 1955: 446.

³⁰ 『正法念処経』Tib. は、この項目と次の項目を欠いている。

³¹ 『正法念処経』Tib. は、さらに「無病の星宿を病の曜が害する。若者の星宿を老の曜が害する。集まった者と完全に結びつく星宿を集まった者と離れる曜が害する」という項目が述べられている。

³² 『正法念処経』Tib は、この項目を欠いている。

思惟せずに、その他の心を思惟する。解説した通りの出世間と世間を思惟して、前のように正しいものとそれぞれを考察した後と、正しい在り方のままに意をなすことにより正しいままに説かれた曜について、前のように曜を思惟することを修習して、正しいままに寂静の八正道によりそれぞれ考察した後に、曜と星宿を思惟することは、涅槃のためと樂のためと寂静のために結果をとまなうことになるが、それらの世間の凡夫は、世間の曜と星宿を思惟してからではない。思惟することは、十万人の人を失うことになり、衆生は地獄と餓鬼と畜生になる。何故ならば、それらの世間の輪廻を完成させる者たちは、貪瞋痴を起こすであろうから。出世間の道³³を修習する十万人の瑜伽行者は、それらの曜と星宿を思惟して、真実の通りにそれぞれ考察した後に、老と死と悲痛さと悲号を引き起こすものと苦と愁苦を離れる地位を得る。常住なる不老と不死と無漏の地位であるこの涅槃を優婆塞を自称する悪い優婆塞は必然的に学ぶべきである。苦を望まない者は、輪廻の苦を尽くすために、星宿を思惟することと身体を思惟することを学ぶべきである。解説した通りの凡夫は雑染をもつ者ではない。いかなる知恵であっても、恒常な樂をなさず、善とならず、涅槃の究極に至ることにならず、比丘の禪定と読誦を妨げるものになるであろう。その如くならば、比丘が星宿を思惟し、数えることは責められるであろう³⁴。

とお説きになられている。

『虚空眼経³⁵』にも、

世尊がお説きになられている。大王よ、何も説くな。その十二の学科すべてが世間において広まることはない。その時に、梵天と帝釈天と天と仙人らが説いたものが出家者たちに一致して説いたものにどうしてならないのかというならば、いずれかに集まってから、殺生と支分と分支と、都市をなくすことと、財産をなくすことと、親友と別れさせることと、侍者を別れさせることと、村をなくすことと、家をなくすことと、殺生に励むことから邪見までに励むことがある話は、出家者に一致して述べられていない。

とお説きになられている。

³³ 『大経集』 D は、「道と時を」とある。

³⁴ Tib. D. No. 287, La 170b4-173b5; P. No. 953, Ru 174b6-177b8; Chin. T. No. 721: 290a6-291a17.

³⁵ 現時点で、引用箇所の確認はできていない。

『宝星陀羅尼經³⁶』にも、

所分別の行境をともなう凡夫に、何らかのものに執着することがある。それは凡夫の障害で、心に存続し、疫病をもつものである。犬と蛇と亀と他の有情とさらに多くの種類がある。星宿の王に生じる者は楽に依拠するものではない。例えば、禪定により神通や解脱をあなたが獲得するように、私もすべてを見るならば、何故に、私にあなたは問わないのか³⁷。

とお説きになっている。

『摩登伽經³⁸』にも、

バラモンよ、善趣に行くことが、もしマントラにより得られるのならば、この黒と白の業は結果が存在しないものになる。何故ならば、白と黒との結果を伴うものが五趣に熟するものとして顕われるので、それ故に、名声が大きいことは禁止されるものではない。

とお説きになっている。

³⁶ 同経の漢訳が有する問題点については、善波 1957: 103-107 を参照のこと。

³⁷ 久留宮 1979: 119; Chin. T. No. 402: 556b9-13.

³⁸ *Śārdūlakarṇāvadāna*. Tib. D. No. 358. ただし、典拠の確認はできていない。対応する漢訳テキスト (T. Nos. 1300, 1301) にも、このフレーズを見い出すことはできなかった。同経の天文暦に関しては、善波 1952 を参照のこと。

第5章 『大経集』における『般若経』の引用

はじめに

チベット大蔵経のテンギュルの中には、Dīpaṃkaraśrījñāna による『般若経』関連の著作が収録されている。すなわち、『般若心経』を注釈した『般若心経解説¹』と、Maitreya の『現観莊嚴論』を解説した『般若波羅蜜多撰義灯²』である。蔵外文献には、Atiśa に帰される『十万頌般若経』の読誦用文献がある³。また、彼は、『八千頌般若経⁴』とその Haribhdra の注釈書である『現観莊嚴論釈・光明論⁵』のチベット語訳の校訂も行っており⁶、『般若経』は重要な経典と認識されていたことがわかる。

Dīpaṃkaraśrījñāna の著作に見られる『般若経』の引用

『大経集』における『般若経』の引用を考察する前に、彼の著書における『般若経』の引用を見てみる。『菩提道灯論細疏』には、『般若経』からの引用を三箇所に見ることができる。最初のもは「般若経より」とするが、類似する文章を『金剛般若経』に見ることができる。それは根本偈に説かれる「供養」を説明する箇所において⁷、

私を物質として見たり、私を声で認識するそれらに人は誤って見ており、この人は私を見ていない。諸仏は法身であり、導く人たちは法性と見られる。法性は見られるべきものではないので、それを認識することはできない⁸。

と述べられている。第二のものは『十万頌般若経』からのものであり、禪定に関する文脈において⁹、

禪定を思うことが僅かな内向的比丘は、服のことを思うことが少なく、食のこと

¹ Tib. P. No. 5222, *Shes rab snying po'i rnam par bshad pa*,. Cf. 望月 1991a: 203-206.

² Tib. P. No. 5202, *Shes rab kyi pha rol tu phyin pa'i don bsdu sgron ma*, 望月 2000c: 63-106, 2001c.

³ 望月 2001g, 2002a.

⁴ Tib. P. No. 734, *Shes rab kyi pha rol tu phyin pa brgyad stong pa*, Śākyasena, Jñānasiddhi, Dharmatāśīla, etc. 訳; Subhāṣita, Rin chen bzang po 改訳; Dīpaṃkaraśrījñāna, Rin chen bzang po, rGyal ba'i 'byung gnas 改訳; rGyal ba'i 'byung gnas 改訳; Blo ldan shes rab 改訳.

⁵ Tib. P. No. 5189, *Shes rab kyi pha rol tu phyin pa brgyad stong pa'i bshad pa mngon pa rtogs pa'i rgyan gyi snang ba*. Subhāṣita, Rin chen bzang po 訳; Dīpaṃkaraśrījñāna, Rin chen bzang po, Dhirapāla, Blo ldan shes rab 改訳.

⁶ この経緯については、『テプテル・ゴンポ』にも説かれている。Cf. Roerich 1949: 249, 羽田野 1987: 78.

⁷ Tib. D. No. 3948, Khi 246a5-6.

⁸ Conze 1957: 56-57.

⁹ Tib. D. No. 3948, Khi 276a4-5.

を思うことが少なく、肌の色は滑らかである¹⁰。

と引用されている。最後のものは、『善勇猛般若経』からのもので、そこでは¹¹、「一切法不生」に対する経証の一つとして、

如来の知恵によりいかなるものも見られない。それは何故か、と言うのならば、次のように知恵には対象がないからである¹²。

と述べられている。これと同じ引用は、彼の『一念記示』にもみられる。その他に引用はないものの、『般若経¹³』や「常啼品¹⁴」というタイトルのみの指摘が複数箇所に見られる。

『菩提道灯論細疏』の次に大著となる『中観説示開宝篋』には、般若経からの引用が六箇所に見られる¹⁵。最初のものは、『十万頌般若経』からのものであり、その他のものは、いずれもが『八千頌般若経』からの引用である。まず、最初の『十万頌般若経』からのものは菩提心の性質に関する文脈において引用され、

私は、何も得ることがなくても菩提の心髄を明らかに悟っている。

というものである。これと同じ箇所に、

シャーリプトラよ、何であれ心でないものは、心が存在しないものである。何であれ心が存在しないものは、心の自性により輝いている。

と引用されている。次のものは、「菩提心の把握」のうち、自らを損なう衆生のもとを去らないことに関して、

菩薩は、他の者が過ちを犯しても、彼と争うことをせず、彼を傷つけたり、心を乱すべきではない。もしも殺生をしても、彼らを憎むべきではない。どんな衆生で

¹⁰ 現時点で典拠の確認はできていない。

¹¹ Tib. D. No. 3948, Khi 283b6-7.

¹² 戸崎 1973: 248.

¹³ Tib. D. No. 3948, Khi 274b7, 284b1. ただし、前者は第三者による引用文である。

¹⁴ Tib. D. No. 3948, 246a6, 254b5-6, 284a2-3.

¹⁵ *Ratnakaraṅḍoghāṭa*. Tib. D. No. 3930, Ki 98a2, 98a4-5, 101a2-3, 104a2, 104a4-5, 105b4-5.

あっても憎むべきではない。菩薩たちはしっかりとした想をなすべきである¹⁶。

と述べたものと、

菩薩は、一切衆生に対して、父母と男子と女子の想をなす。自らが楽を望むように、他の衆生にも楽を与えるべきである。すべての衆生を苦から解放すべきである。いかなる衆生も捨てない。彼らは自分の身体の何百という部分を切り裂いても、彼らを傷つける心を起こさず、慈愛と悲心を起こす¹⁷。

と述べたものが連続して引用されている。次のものは、「他者が起こした菩提心に働く功德とそれを喜ぶ功德」に関する文脈において、

一切世間の量を知ることはできるが、他者が起こしたものに働く功德に関しては、十方の仏と菩薩たちは知ろうとしない。他者が菩提心を起こしたことを喜ぶ功德が集まったものの量を知ることはできない¹⁸。

と引用されている。次のものは、「他者が起こした菩提心を中断させる過失」に関する文脈において、

三千 [大千世界] のガンジス河の砂ほどたくさんの阿羅漢を殺したり、五無間をなすことよりも罪悪である¹⁹。

と引用されている。次のものは「菩提心を願う功德」に関して、

所縁をもつ人は、ガンジス河の砂ほどの多くの劫において善根をなした人なので、他のある人が一日や、半日や、指をはじく瞬間でも菩提心を起こせば、福德は大きくなる。

と引用されている。これらの引用は、いずれもが「発菩提心」のセクションにおいてそ

¹⁶ *Aṣṭasāhasrikāprajñāpāramitāsūtra*, Vaidya 1960b: 209. Cf. 望月 1996a: 61.

¹⁷ *Aṣṭasāhasrikāprajñāpāramitāsūtra*, Vaidya 1960b: 14, Mochizuki, *op.cit.*, p. 61.

¹⁸ Mochizuki, 1996a: 69. ただし、テキストに混乱があり、この引用文の途中に「大乘經典と『入菩提行論』を見るべきである」という文章が挿入されている。

¹⁹ *Aṣṭasāhasrikāprajñāpāramitāsūtra*, Vaidya 1960b: 193. Mochizuki, 1996a: 70.

他の大乘経論と並記して引用されたものであり、菩提心の経証として特に『般若経』だけが引用されたわけではない。しかしながら、発菩提心を論じる際に『般若経』に依拠していたことは確認できる。また、同論には、『宝徳蔵偈』からの引用も見ることができる²⁰。

『大経集』に引用される般若経

大乘経典のアンソロジーである『大経集』には、『般若経』の引用を七箇所に見ることができる²¹。いずれの引用も「般若経」というタイトルで引用され、特定の経典名を指してはいない。確認できたものに関しては、『八千頌般若経』にその典拠を見ることができる。また、『宝徳蔵偈』からの引用も三箇所に見られる²²。『大経集』には八十四種の経論が引用されており、そのうち『般若経』は九番目に多くの引用が見られる。

『大経集』において般若経が言及されるのは、次の六つの章においてである：

第2章 在家において食欲をなすこと

PP1 = D. 9a2-4, P. 10a7-bl

第4章 法を説く者を誹謗すること

PP2 = D. 30a7-31b7, P. 34b5-36b2

PP3 = D. 35b3-37a1, P. 39b4-41a6

第19章 悪友を捨てること意図するもの

PP4 = D. 103a3-6, P. 117b3-6

第20章 善知識を意図するもの

PP5 = D. 112a1-3, P. 127a3-6

第29章 菩提心の功德を説いたものを意図するもの

PP6 = D. 155b5-7, P. 178b2-5

第30章 菩提心を求めることを退けることを意図したもの

PP7 = D. 159a6-b4, P. 182b6-183a4

これらの『般若経』の引用内容を簡単にまとめると、次のようになる。

1 食欲の心を起こさないこと

²⁰ Tib. D. No. 3930, Ki 98a1-2.

²¹ Tib. D. No. 3961, Gi 9a24, 29a7-31b7, 35b3-37a1, 103a3-6, 112a1-3, 155b5-7, 159a6-bl. Cf. 望月 1995, 2004a.

²² Tib. D. No. 3961, Gi 111b7-112a1, 188a2-b3, 195a5-6.

- 2 般若波羅蜜を捨てる者が地獄に生まれること
- 3 魔がつけいる行為
- 4 悪友が魔の行為を指摘しないこと
- 5 善友に依存する行為
- 6 衆生を無上なる完全な菩提に導くことによる福德の生起
- 7 魔により賞讃された者が菩薩の悟りの獲得を邪魔すること

これらの引用文は、『八千頌般若経』にその典拠を見ることができる。また、いずれの章においても、その他の経典と並んで引用されており、『般若経』独自の教義を引いてきたものではない²³。むしろ、教義内容が豊富であるために、『般若経』の引用が多用されるという印象を与えるものである。

まとめ

Dīpaṃkaraśrījñāna の著作に見られる般若経の引用は、以上の通りである。引用の多くが、『八千頌般若経』からのものであり、彼は般若経典の中でも特に『八千頌般若経』に依拠していたことがわかる。このことは、彼が、同経とそのハリバドラによる注釈書のチベット語訳を二度校訂していることからわかる。『十万頌般若経』の引用も二箇所にあるが、『八千頌般若経』ほど、読み込んでいた文献とは思えない。しかしながら、『十万頌般若経』については、縮刷版の著者性の問題もあるが、そのタイトルへの言及もあることから、般若経典の中でも意識していたものであろう。『般若心経』の注釈書は、Vimalamitra による注釈に依拠して著されたものである。

『大経集』所引の『般若経』和訳

PP1

そして菩薩摩訶薩は、例えば、家に対して食欲になることを捨てている。スプーティよ、ここで菩薩摩訶薩は、このように発心をなすであろう。何であれ、私は一切の衆生にすべての幸福の道具を与えるであろう。これらは、自分の福德のみによる幸福なので、それに対して私は食欲の心を起こさないであろう。

²³ 『正法念処経』の引用が『大経集』の章の構成に影響を与えているというようなものではない。Cf. 望月 2001e.

PP2²⁴

この甚深なる般若波羅蜜を説いた時、その衆会から一人で行くであろう。すなわち身体と心により仲良く修行しないであろう。彼らは、知恵を破るであろう行為を集めている。彼らは知恵を破るであろう行為をなし、その集積によりこの般若波羅蜜を説いた時を捨てるであろう。彼らは、この般若波羅蜜を捨てることにより、過去と未来と現在の仏世尊の一切智性を捨てることになるであろう。彼らは、一切智性を捨ててから生じる行為を明らかに作り、集め、法を失うであろう行為をなし、その集まったものにより、何年、何百年、何千年、何千万、何十兆年もの間地獄で焼かれるであろう。彼らは大地獄から大地獄に行くであろう。彼らが大地獄から大地獄を望む時、火により完全に消滅したり、水により完全に消滅したり、風により完全に消滅することが起きるであろう。すなわち、彼らはそのように火により完全に消滅したり、水により完全に消滅したり、風により完全に消滅することが起きる時にも、他の世間界の大地獄に投げられ、そこに生まれ、そこで焼かれるであろう。そこに投げられて、そこに生まれてからも大地獄から大地獄に行くであろう。すなわち、彼らがすべて大地獄から大地獄に行く時、火により完全に消滅したり、水により完全に消滅したり、風により完全に消滅し、或いは彼らがそのように火により完全に消滅したり、水により完全に消滅したり、風により完全に消滅する時にも、東方の大地獄に投げられるであろう。南と西と北と北東と東南と南西と西北と下と上の方向の大地獄に投げられるであろう。それらにおいても大地獄から大地獄に行くであろう。すなわち、そこでも、火により完全に消滅したり、水により完全に消滅したり、風により完全に消滅することが起きる。彼らが、そのように火により完全に消滅したり、水により完全に消滅したり、風により完全に消滅することが起きる時に、それから死んだ後に法を滅することが生じるその行為が尽きないので、またここに生まれる。すなわち、彼らも大地獄から大地獄に行くであろう。彼らはそこに生まれてからも、それらの大地獄において地獄の苦を領受するであろう。そこにおいても、火により完全に消滅したり、水により完全に消滅したり、風により完全に消滅することが起きない限りはそれらの地獄の苦を領受するであろう。彼らは火により完全に消滅したり、水により完全に消滅したり、風により完全に消滅することが生じても、彼らはそこから死後に東方の世間界における畜生の生まれと同じところに生じるであろう。南と西と北と北東と東南と南西と西北と下と上の方向の世間界における畜生の生まれと同じではないところに生じるであろう。それらにおいても、十方すべての世間界に至るまでヤマの世間に生じるであろう。彼らはそこに生じてから、多くの苦を領受する行為が尽きた後に、も

²⁴ 梶山、丹治 1974: 214-222, Vaidya 1960b: 89-92.

し百度、人に生まれることを得ても、法を滅する行為をなし、集め、成立させ、完成し、完全にその異熟により、彼らはどこに生まれてもそこで盲目の種姓に生まれ、清掃者の極姓に生まれ、チャンダーラの種姓に生まれ、竹籠職人の種姓に生まれるであろう。彼らはそこに生まれてからも、盲人として生まれるものであり、片目のものとなり、鼻がないものとなり、舌がないものとなり、手がないものとなり、足がないものとなり、ハンセン病となり、皮膚病となり、背骨が曲がり、仏の声がなく、法の声がなく、サンガの声がないそれらの者に生まれるであろう。

スプーティよ、それらの愚かな人たちは四種により般若波羅蜜を後ろに捨てている。質問をする。四とは何と何なのですか。

世尊がお答えになる。

この甚深なる般若波羅蜜を捨てている愚かな人たちは誰であれ、魔により征圧されている。スプーティよ、その最初の原因によりこの甚深なる般若波羅蜜を後ろに捨てている。甚深なる法を信心し、信じ、信解することがない。この第二の原因により、甚深なる般若波羅蜜を後ろに捨てている。スプーティよ、それらの愚かな人たちは精進がなく、五蘊に執着しているので、その第三の原因により、この甚深なる般若波羅蜜を後ろに捨てている。スプーティよ、それらの愚かな人たちは悪友の手のところに行くことにより憤怒の行を有している。すなわち自分を賞讃し、他者を非難するので、この第四の原因により、この甚深なる般若波羅蜜を後ろに捨てている。スプーティよ、それらの四種により、それらの愚かな人たちはこの甚深なる般若波羅蜜を後ろに捨てている。

PP3²⁵

アーナンダよ、さらにまた、もし菩薩乗の人が声聞乗の人と論争し、「自分は最高であるが、あなたはそうではない」と言うならば、それについて悪魔は次のように思う。「ああ、この善男子は一切相智性を離れている。これは一切相智性の近くにはいない。それは何故かというのならば、喧嘩し、口論し、論争し、怒らせており、これら是一切相智性の道ではない。それは地獄の道である。それは畜生の生まれる場所の道である。それは夜魔の世間の道である。それは一切相智性の道ではない」と考えるであろう。

アーナンダよ、さらにまた菩薩乗の人と菩薩乗をもつ者が他所において喧嘩し、口論し、論争し、怒らせるならば、それについて悪魔は次のように思う。「このどちらも一切相智性を離れている。このどちらも無上なる完全な菩提を悟ることはない。それは何故か、というのならば、善男子よ、この両者がなしたことは一切相智性の道ではない。

²⁵ 梶山、丹治 1974: 232-236. Vaidya 1960b: 207-209.

善男子よ、この両者は大地獄と畜生の生まれる場所と夜魔の世間の道を始めている」と言ってから、喜び、楽しみ、満足し、歡喜するであろう。

アーナンダよ、さらにまたもし授記をされていない菩薩が授記された菩薩に対し害心をいだき、喧嘩し、口論し、論争し、怒らせる際に、もし彼が一切相智性を完全に捨てていないというのならば、悪意を起こして生じ、喧嘩し、口論し、論争し、怒らせるのに応じただけの劫のあいだ、鎧を着るべきである。

アーナンダが尋ねた。

世尊よ、彼らがそれらの心を起こすことを転じることがあるのか。それとも、それほどの劫だけ鎧を着るべきでしょうか。

世尊がお答えになられた。

アーナンダよ、声聞乗と独覚乗と菩薩乗の人たちのために、私は生じることを伴う法を説いた。アーナンダよ、その際にその菩薩乗の人が菩薩乗の人と喧嘩し、その論争を乱用し、よくないことを述べ、喧嘩し、その論争を乱用し、よくないことを述べることをなした後に、反対に向かわずに、屈服しないことを保ち、悪意をもって住する、アーナンダよ、その人に出離することを説いていない。その人が、もし一切相智性を完全に捨てていないのならば、必ずそれほどの劫のあいだ鐘を着るべきである。

アーナンダよ、菩薩摩訶薩で、喧嘩し、その論争を乱用し、よくないことを述べるとしても、屈服しないことを保たず、今後律義を保ち、「私は得るべきものを誤って得ている。私は衆生の苦を取り除かなければならないのに、そのように私が述べたことと反対のことを述べ、私は一切の衆生の橋にならなければならないのに、そのように私は他者によくないことを述べ、反対になっていることは正しい在り方ではなく、私はそのようにすべきではない。私は愚者や唾のようにすべきである。私は思いを乱すべきではない。それらの衆生に関しては、私が無上なる完全な菩提を悟って、涅槃から退かなければならないのに、その彼らに対して悪心をなしたり、彼らを私が乱すことは正しい在り方ではないので、私は彼らに対して害心をすなすべきではない。私は彼らを乱すべきではない」と考えるならば、アーナンダよ、菩薩摩訶薩に出離があることを私は説明している。そして悪魔が機会を見て、機会を求めても、機会を得ない。

アーナンダよ、さらにまた菩薩摩訶薩は声聞乗の人と交際すべきではない。被らと一緒に住すべきではない。座すべきではない。もし座しても、彼は誰にも害心をなさず、争うべきではない。それは何故か、と言うのならば、自分で彼らに対して害心をなし、争う者は、自分に対して正しい在り方ではない。それは何故か、というのならば、次のように彼らに対して、「自分が無上なる完全な菩提を悟っている。すべての苦から完全に救うべき者たちである」と思うべきである。

アーナンダが尋ねる。

世尊よ、例えば菩薩摩訶薩は菩薩乗の人と住すべきでしょうか。

世尊はお答えになられた。「アーナンダよ、こうである。例えば、師と住するように、菩薩摩訶薩は菩薩乗の人と住すべきである。それは何故にか、と言うのならば、この人は私の友で、一つの船に乗っている。この人は、学ぶべきものの通りに自分も学ぶべきである。これにより布施波羅蜜というものから、一切相智性までが説かれている。

PP4

スプーティよ、さらにまた何であそこ魔の行為を指摘せず、魔の過失を指摘しない者が、菩薩摩訶薩の悪友である。悪魔は、仏の服を着て来てから、次のように「あなたは、般若波羅蜜を修習することで何をなすのか。禅波羅蜜と、精進波羅蜜と、忍波羅蜜と、戒波羅蜜と、施波羅蜜を修習することで何をなすのか」と言い、菩薩摩訶薩を六波羅蜜から分けている。スプーティよ、これが菩薩摩訶薩の悪友と知るべきである。

PP5²⁶

そして菩薩摩訶薩の善友に依存する行為は何か、と言うのならば、何れかの善友で、何れかの菩薩摩訶薩に対して一切智性のために正しく受けることに入り、整えることを確立するそれらのに、依存し、近づき、恭敬し、尊敬して聞くことである。これは菩薩摩訶薩たちの善友が依存する行為として述べられるべきである。

PP6²⁷

カウシカよ、ある善男子や善女人がジャンブードヴィーバの衆生たちを予流果に置くことから、独覚地までに置くことに関して、ある善男子や善女人が一人の衆生を無上なる完全な菩提に置くならば、彼にはそれによりとても多くの福德が起こされる。それは何故か、と言うのならば、彼には仏の在り方が中断しないので、存続するであろう。カウシカよ、ある善男子や善女人が無上なる完全な菩提に置くならば、多くの福德が起こされる。

PP7

スプーティよ、もしも悪魔や魔により賞讃された人が仏の装飾で来てから、菩薩摩訶薩に声聞地や独覚地を授記するならば、スプーティよ、菩薩摩訶薩は次のように「これ

²⁶ 梶山、丹治 1974: 202, Vaidya 1960b: 197.

²⁷ 梶山、丹治 1974: 153, Vaidya 1960b: 62.

は必ず悪魔や魔により賞讃された人が仏の装飾で来たので、如来で阿羅漢で完全な悟りを得た仏が菩薩摩訶薩に声聞地や独覺地を正しく把握して入ることをなされたものではない」と考えるであろう。スプーティよ、もしも菩薩摩訶薩がとても詳細な經典を読み、誦しているところに悪魔が仏の装飾で来てから、次のように「これらは仏がお説きになられたものではないし、声聞によるものでもなく、あなたが修行しているこれらの經典は魔が説いたものである」と言うならば、スプーティよ、菩薩摩訶薩が自身を無上なる完全な菩提から分けるその人は、必ず悪魔や魔により賞讃された人であると知るべきである。

第6章 『大経集』における『正法念处経』の引用

はじめに

『正法念处経 (Saddharmasmṛtyupasthānasūtra=SSU)』は、地獄や諸天などの界趣に関する詳細な記述があることで知られ、その十不善業道に関しては、後の論書により言及がなされている¹。Dīpaṃkaraśrījñāna も、自身の『業分別論』や『十不善業道説示』において、地獄の記述や十不善業道に関する文脈で同経に言及している。それ故に、輪廻思想を含む業論を論じる際に依拠していた經典であることが確認できる。また、彼は、自らが編纂したアンソロジー文献である『大経集』においても、『正法念处経』を九度にわたり引用している。本章では、これらの引用について考察をし、彼の『正法念处経』理解を明らかにする。

Dīpaṃkaraśrījñāna の著作に見られる『正法念处経』への言及

Dīpaṃkaraśrījñāna には、業に関する二つの著作が存在する。すなわち、『十不善業道説示』と『業分別論』である。この両者において、『正法念处経』への言及を見ることができる。『十不善業道説示』の末尾には、

世尊がお説きになられたものと、『聖正法念处大乘経』と、大乘經典に出ているこれらの十不善業道は大地獄の原因であり、十不善業道に依ることで地獄に堕ちるであろう²。

と述べられている。同論は、十不善業道の教義を『俱舍論』に基づいて解説した小論で、この教義に対する大乘經典の典拠として『聖正法念处経』が言及されている。この大地獄の原因となるという記述においても、同経の内容を理解した上で言及していることがわかる。

これと同じ記述は、『業分別論』においても見ることができる。同論では、冒頭に三悪趣の解説を行っており、その地獄の解説の最後に、

孤独地獄と近辺地獄には、場所の確定がない。川と山と荒野などの方向と、上にもある。詳しい説明は、『正法念处経』と『世間施設』と『世間設定』などを見るべきである³。

と述べている。このことから、彼が、同経に地獄に関する詳細な記述があることを認識

¹ 同経の内容については、水野 1996; 275-289.

² D. No. 3958, Khi 307b5-6, P. No. 5396, Gi 40b8-41a1.

³ D. No. 3959, Khi 308b3-4, P. No. 5397, Gi 41b8-42a1.

していたことがわかる。同論の最後には、十不善業道の解説が述べられており、そこにおいても、

さらにまた、これらの十不善業道の意味は、詳しくは『聖正法念処経』と軌範師でありバラモンの Dhārmikasbhūtiḡoṣa による著作と、聖 Asaṅga により著された「撰決択分」などの『大瑜伽師地論』を見るべきである⁴。

と述べられている。これは、前述の『十不善業道説示』での言及と同じ内容であるが、ここで言及される Dhārmikasbhūtiḡoṣa の著作としては、『十善業道説示 (Daśakuśalakarnapathanirdeśā⁵)』のことと思われる。彼には、『正法念処経』という著作もあり、Dīpaṅkaraśrījñāna は他書においてこの著書に言及していることから、彼を『正法念処経』と関係のある論師と認識していたことがわかる。

『大経集』に引用される『正法念処経』

『大経集』には、『正法念処経』の引用を九箇所に見ることができる。

第 12 章 魔が説いたものを意図して説いたもの

SSU1 = C. 80b4-81a2, D. 77a4-b1, G. 111a1-6, N. 86b1-6, P. 87b6-88a3.

第 18 章 比丘が入るべきでなく親しむべきでない非行境を意図して説いたもの

SSU2 = C. 108b3-5, D. 102b3-5, G. 151a3-5, N. 115b4-6, P. 117a2-4.

SSU3 = C. 108b7-109a4, D. 102b6-103a3, G. 151b1-6, N. 116a-1-5, P. 117b6-b2.

第 19 章 悪友を捨てることを意図して説いたもの

SSU4 = C. 113a4-6, D. 107a2-4, G. 157b6-158a3, N. 120b3-5, P. 121b8-122a2.

第 24 章 聞の功德を説くことを意図して説いたもの

SSU5 = C. 152a2-b3, D. 143a4-b5, G. 212b5-213b4, N.161a1-b3, P. 163b2-164a5.

第 26 章 質問しないことの過失を意図して説いたもの

SSU 6 = C. 153b4-155b2, D. 144b6-146b3, G. 215a5-218a2, N. 162b6-164b7, P. 165b2-167b4.

第 32 章 比丘に対して医方を否定することを意図して説いたもの

SSU7 = C. 172b4-175a2, D. 163a1-165a4, G. 243a4-246b6, N. 183b5-186a7, P. 187a1-189b3.

第 33 章 沙門が星宿を考察することを捨てることを意図して説いたもの

⁴ D. No. 3959, Khi 311a5-6, P. No. 5397, Gi 46b8-47a2.

⁵ D. No. 4176, 4504, P. No. 5417, 5676.

SSU8 = C. 175a1-178a1, D. 165a5-167b5, G. 246b6-251a1, N. 186b1-189b1, P. 189b3-192b2.

第 34 章 王に頼ることを非難することを意図して説いたもの

SSU9 = C. 178b1-180a1, D. 168a4-169a7, G. 251b2-253b1, N. 189b7-191a7, P. 193a2-194b1.

これらの引用のうち、第三のものは第九の引用中に含まれるものであり、実質的には八箇所からの引用ということになる。これらの引用の半分は、同経の「観天品」の比丘が墮落する十三の原因⁶が説かれる箇所からのものである。これらの項目のうち、(2)治病、(6) 星宿、(9) 親近王、(11) 不請他が、『大経集』の第二十三章、第二十九章、第三十章、第三十一章のタイトルに一致しており、それらの章では同経がその主要な引用経典となっている。このことから、Dīpaṃkaraśrījñāna は、これらの章のタイトルを考える上で、同経のこの文脈を参考にしていたことがわかる。

『大経集』所引の『正法念处経』和訳

SSU1

すなわち、「論争をなす」という魔⁷と第二の「動かす」という魔の姿は、法を修行する衆生たちの心を動かし、正法を聞く際に昏睡させる。「欲望を覆い隠す」というものが第三のものである。すなわち、布施をなすことを捨てることは、布施の施主の心に、もしも自分が沙門やバラモンや大臣となった者たちに布施をなしたならば、自分の子どもたちは何を食べ、何を着ているのだろうか、という執着を起こさせることである。世間を守るその三種の魔は、衆生たちを覆い隠し、世間を彷徨う。第四の「さまざまに思う⁸」という魔の種は、世間を浄化して、世間を守るのである。彼は出家者たちの出家をする心を転じさせ、最初に執着と結合し、町に入り、商品の交易と女性を見て、酒屋に入り、争い、騙し⁹、サンガを裂き、心に損害を与える夢を起こさせる。それらの世間を守る四つの魔の姿は、ジャンブードヴィーパにおいて非法を説くものがある時にありうるであろう。

SSU2

[本編第 3 章参照]

SSU3

⁶ 望月 2001.

⁷ 『正法念处経』漢訳：一諍魔使、二荒乱魔使、三貧癡魔使、四離正念魔使.

⁸ 『大経集』: rnam pa sna tshogs 'du shes; SSU: 'du shes log pa.

⁹ 『正法念处経』は、この句を欠く。

[本編第3章参照]

SSU4

悪友に一瞬たりとも依存しないであろう。言葉により喜ぶことをなさず、彼と一緒に道も歩かない。何故ならば、こうである。すなわち、悪友と交際し、彼を守り、彼と一緒に往来し、彼の影に触れるこのことは、一切の善法を中断させる最大のものであるから。それは何故か、と言うのならば 悪友は街路樹のように、貪瞋痴の住処となるからである。

SSU5

浄信により正法を説いたものを聞く者の功德が、さらにまたある。誰であれ法を聞き、信をもち、浄信を有し、主を尊敬し、智慧が清浄で、一緒に三宝を信じる智慧をもつ者は、在家でも出家でも適切である。正法を聞くことを望む者は、家から出た後に、寺にも喜んで行くならば、彼は歩みを止め、歩みを止める際に、梵天の福德が生じるであろう。また誰であれ法を述べる者に供養をするその人は、目的をもって実際に仏に供養するであろう。誰であれ法を説く者に供養する者は、例えば、そのように供養したものを完全に廻向するならば、そのようなものが、その通りに完全に熟するであろう。彼は無上正等覚にまでなるであろう。それは何故か、と言え、法を聞いてから心は業に適切になる。彼は業に適切なことをしたならば、無始の時からある闇が除かれるであろう。例えば、法を示す者がなすように、他のある者も心を業に適切にするのではない。四つのものにも利益に対する答をなすことは容易でない。四とは何か、と言え、こうである父と母と仏と法を説く者とである。彼らに対する布施が無量となる。菩提のためになるであろう。世間において賞讃されるであろう。それは何故か、といえ、何らかの心を自慢している者は、説法により温和を得るであろう。執着する者は、布施を信解するであろう。粗暴な者は、穏やかになるであろう。愚者は、賢くなるであろう¹⁰。因果関係を普く妨げられる者たちは、説法を聞いてから因果関係を信じることになるであろう。邪見が心全体にある者は、正しい見解をもつであろう。殺生と盗みと性的行為を喜ぶ者は、説法を聞いた後にそれらから退くであろう。彼は説法により、業に適切なことをなした後、に涅槃の畢竟に至るであろう。それ故に、この原因により法を説く者に答えることは容易でない。

SSU6

さらにまた、第十一の法は、比丘の禅定と読誦の障害となり、最も難しくするであろう¹¹。それは何か、といえ、こうである。我慢により質問をしないことである。ここ

¹⁰ 『正法念処経』のチベット語訳のみ、「菩提のためになるであろう」から、ここまでの句を欠いている。

¹¹ 『正法念処経』: shin tu sdug bsngal bar 'gyur ba yin no. 『大経集』では、苦を「非樂 (mi dga' ba)」と訳

では、内部では理解が劣り、智慧が広がらないであろう。例えば「自分はすべての論書の意味と言葉の門から把握し、[その] 意味と言葉の門から述べるものである」と外部に自分自身を示すであろう。「私は、智慧の集まりを残らずに把握している。私は数百万の意味と一緒にいる者や下僕にも確実に説く。私に等しい者はいない」と、そのように他者にも宣言することを設定する。心をととても整えて、それは智慧の明らかな我慢だけに尽きている。一切の衆生に自分の功德を知らせている。一切の人が理解することになる。例えば、ここに「すべての智慧の彼岸に行った彼に匹敵する者は誰も存在しない」と言うように、世間の者が述べるであろう。さらにまた、よく聞く者が少なくなり、内部が欠けており、空であり、空虚になり、空の器と同じで、秋の雲に似た、禪定と読誦の外に作られた、劣ったすべての人により供養されるであろう。彼は、何時であれ沙門の禪定と読誦と、戒と布施と、精進を努力するようになり、所縁と本質により聞くものが広大になっており、律とよく浄化された飾りにより荘厳され、仏の説法をととても価値があるものとして保ち、広めることに誤りはなく、大きな智慧の質問を続けることを命令した者の中にいるその時に、内部が欠け、空で、空虚となって、次のように「もしもそれらの比丘は私にありのままに説きなさい」と言ったならば、彼らは自分を制圧するであろう。何であれ布施をなす者とその施主が自分に供養をしてから、それらの前から彼らも生じないであろう。自身が布施をなす者と施主により制圧されるであろう。我慢と我執により捕らえられたその人は、自分の智慧では意味を理解しないであろう。制圧される恐怖により他者にも質問をしない。もしも誰であれ自身の智慧で理解せず、聞いても理解したり理解しない意味が少しでもある彼らは、内部が空であることにより制圧されているので、彼は自分では理解せず、恐怖により他者にも質問をしない。

そのようにその誤りを述べる者が、五つ学処の基本を越えるであろう。すなわち、妄語をなすであろう。智慧による理解がないままに、しかも述べるのが、学処の基本を越えた最初のものである。

学処の基本を超えた他のものは何か、と言え、すなわちこうである。彼が智慧をもって考えた後に、布施者と施主がなすべき供養が不適切であるように、聞くことは、その他者が取る際に、その弱った智慧の者が与えられていないものを取ることを中断するであろう。これが学処の基本を越えた他のものである。

また、学処の基本を超えた他のものは何かと言え、こうである。いつであれ比丘が出家した際に、例えば戒に普く依存し、戒に正しく住し、戒を把握してから、「私は家の住所を完全に捨てるべきである」と思うことにより、学処の基本を完全に把握する。誰にも聞くことがなく、他者にも聞くことを示さないことは、その戒を破ることである。これが学処の基本を超えた他のものである。

また学処の基本を超えた他のものはこうである。すなわち、他者が質問し、再び質問を示した際に、制圧の恐怖により恐れ、法を誹謗するであろう。「これは法ではないが、

し、否定辞が欠落し、それをデルゲ版では、「難 (dka' ba)」と読んだのであろう。

それは最も難しく¹²、最も罪である」と非法であると述べることである。

また、学処の基本を越えた他のものは何かと言えば、こうである。正法を知らないその時に、梵行をそなえる者に彼らは「あなたは、仏の完全で甚深なる教えをこのように聞かない」と言うであろう。例えば「私だけが知っているが、あなたは知らない」と彼は僧侶を叱責するであろう。制圧の恐怖により世間を損滅するであろう。ありのままに正法の功德を損なって法を述べるであろう。質問をしないことにより最高に妄語を説くものは、身体が減じた後に悪趣に墮ち、地獄に生まれるであろう。

その質問をしないことには、さらなる大きな過失もある。どうしてその我慢の者が森に入るであろうか。制圧されるので、善妙なる道を説く者に質問をしない。我慢の過失により「道はいかなるものになるであろうか。どのように対象を意識するのか。如何なる相により道を浪費する者が再び心を設定するのか」とそのように質問をしない。そのようにその〔道を¹³〕獲得していない者の心を弱めるであろう。

また、その跏趺から起きず¹⁴、今度は次のように「それらの年長者にはここで道と禪定がなく、等至がない。彼は『我慢の過失と制圧の恐怖により禪定の結果と等至の結果を損滅するであろう』と自分を弱めるであろう」と考えている。その邪見の者は、身体が減びてから、死の後に、悪趣に誤って墮ち、地獄に生まれるであろう。

それから、その時にその世尊カーシャパは偈頌をお説きになられた。

比丘は、自分を知り、我慢を損ない、そのように師に質問し、精進を励むことにより、涅槃を得るであろう。

少しのことを聞くようになる間は、よく説明し、自分を知り、道から損なわれずに、比丘はそれ自身を知る。

誰であれ自慢と侮辱を損ない、道と非道に熟知しており、自分と他者の在り方を知り、足りていることを知る者が、比丘と説かれている。

自慢と粗暴な心をもつ者はあまり勇敢でなく、屈曲をともなっており、利得と尊敬への執着を滅することが、どこに成立しようか。

そのように質問をせず、自慢と粗暴な心をもつ彼には、禪定と読誦をなすことはない。他者の食事を食べる彼は、衣服を得ただけのことにより比丘の名称を獲得し、我慢の過失と聞かないことにより身体が減してから、死の後に悪趣に誤って墮ち、地獄に生まれるであろう。それ故に、問うことの本質をもつ比丘は、生きている限り楽しみ、喜ぶであろう。身体が減してから、死の後に善趣の天の中に生まれるであろう。その後「浄化することと捨てることとの功德により彼は涅槃するであろう」とそのように学ぶべきである。

¹² 『正法念処経』：sdug bsngal.

¹³ 『正法念処経』：lam rnyed par ma gyur pas.

¹⁴ 『大経集』：ma lang. SSU は否定詞“ma”を欠く。

SSU7

罪過をもつ殺生に収められた第二のものを捨てるべきで、なすべきではない。それは何か、と言うのなら、こうである。治療行為¹⁵である。比丘が治療行為をするならば、禪定と読誦を行えないであろう。彼が治療行為をするならば、他の相をなし、他の相を説くことになる。彼は病人たちに対する心を捨て、その智慧に至るであろう。彼はそのようになすことを望む力が大きくなるであろう。欲望により制圧された彼は、「また何かからさまざまな大病が生じるであろうか。それにより衆生たちが苦しめば、また利得と尊敬という多くの相が生じるであろう。自分が村から村に、城市から城市に、岩山から岩山地区に出かけて行くことにより、それぞれに完全に行こう」と考えるであろう。そのように心は、その貪心の制圧を思う垢になるが、善を行うことにならないであろう。

さらにまた治療行為をするならば、比丘でない者と比丘を自称する者に大過が成立するであろう。いつであれ生命に執着する者たちが、風¹⁶などの病気により〔有情が〕制圧されたその時に、例えば「すぐに胡麻油を取りに来なさい。もしもないのなら、胡麻を潰しなさい」ということを命令している。胡麻を潰す行為は、殺生を大きくし、多くの昆虫を殺すであろう。

沙門を自称する悪い沙門に他の過失がさらにある。病人を見てから「新鮮な肉を武器で切られた者や、脂肪のあまりない者や、死んでいない者や、病気に苦しまない者や、猛獣によりまだ殺されていない者や、痩せた者に耳を傾けるな」と命令し、そのように命令をしているのである。何れかを命令された者と、何かを殺すことを命令する者も殺生をとまなうことになり、その同じ二つの行為は、地獄に行くことになるであろう。そのように貪心と害心の過失により医療行為をなすべきではない。

医療行為¹⁷は、沙門を自称する悪い沙門や、盗賊という悪人には大過がさらにある。いつであれ病状が悪くなる時、森の薬が集まる樹木と樹根と樹枝、すなわち利益のために衆生の集まりが保ち、頼ることがあり、寄生する虫たちで満ちているものを、物のために命令して、切断するであろう。彼が穴を掘るならば、大地に住むその大地に依存する有情を殺し、完全に滅している。切断するならば、その中の有情を殺し、それに依存している有情たちも殺している¹⁸。

治療行為をするならば、他の大過がここにもある。そのように生活する法をもち、執着の法をもつ彼に¹⁹、禪定と読誦を歓喜する心がどこに生じるであろうか。それに従って執着する考えをもつ者には、大過が大きな力をもつことになるであろう。そのように悪いことを考えることをともなう罪過の法をもつ者は、国土を制圧することを考えて、例えば、何時であれ国土の衆生たちを制圧するであろう時に、「自分に供養と物と飲食

¹⁵ 『大経集』：gso dpyad pa, SSU: sman pa.

¹⁶ Tib: rlung.

¹⁷ Tib: sman pa.

¹⁸ Schmithausen 1991: 12.

¹⁹ 『正法念处经』：she ba ngan par 'gyur ba chos ma yin pa dang / yang dag par ldan pa'i yid can rnam.

と座具と臥具の利得と尊敬の多くが生じるであろう」と考えるであろう。その欲望を制圧できない智慧をもつ者は、諸善法を考えないであろう。禅定と読誦の本質をともなわないであろう。師に頼らず、善友との交際をもたないであろう。仏に帰依をする本質をもつことにならないであろう。悪い行為を有する者は身体が滅した後に、悪趣に誤って墮ち、地獄に墮ちるであろう。彼はそれから死んで、他世で領受する業をなすことにより人の中に生じたならば、彼はその医療行為の悪業の本質により常に病気が続き、貧しく、短命になるであろう。

治療行為の大過は、さらにまた普通の過失である風と胆汁と冷の治療し易いものである²⁰。[それらは] 無始より入っているものではない。それらにより同類が悪趣に行くのでもない。身体が滅することによりそれらは滅するものである。それらは凡夫が聞くことをもたない。沙門を自称する悪い沙門は治療行為をするが、何の目的で髪と鬚を剃り、最高の目的で赤黄の衣を着てから出家するのか。貪瞋痴が無始より入っている身体を求める彼らは、治療行為をしない。誰であれそれを求めるであろう者は、身体を焼いた際に、[貪瞋痴は] 焼かれず、滅する際にも、[それらは] 滅せず、後のように随入して五趣に行くであろう。大過失であるそれら貪瞋痴の三つを拒絶した後に、他の者たちを損ない、人を悪く思い、自分自身で心を誘惑するその出家は無意味になるであろう。例えば、智慧が劣り、下劣で、助伴がなく、財産がない者が、力をもつ敵により制圧される際に、その敵を財産により退け、その非常に力のある敵を力により排除することができず、彼は尽きてしまうであろう。智慧の劣った凡夫の童子で、聞くことをしない人が、その敵の恐怖を軽視した後に、他の劣った人の敵の恐怖が恐怖の力を作る。例えば、智慧が劣る人で、混乱した智慧を放逸し、他者のなしたことを放逸する者は、そこに敵が来てから制圧するように、沙門を自称する悪い沙門というものは、自分の敵である貪瞋痴が大きな力であり、さまざまな精進をもち、他の世間に生まれ、続いて住し、痴とともに住することをもつことに慣れ、分別と同じところに入り、その他の大力に従って住してないことに耐えてから、何らかの目的で自分の人と友人と妻を完全に捨てて、出家に向かった後に、例えば「私があなたの風と胆汁と冷といったものを裂く」と言う。財産のために他者を空にするようになる際に、そのような智慧をもち、揺れる心をもつ者に閻魔王が明らかに来るであろう。誰であれ欲望の縄により縛られ、とても放逸であり、他者のなしたことにとても執着し、欲望の大きな力をもち、智慧が揺れる者は、向こうの世間に導くことの敵である貪瞋痴の三つの大力を随行するであろう。それ故に、これらの大過を知った後に、医療行為をなすべきではない。もしなしても、何よりも優れた楽しみになる安穩なる治療行為をなすべきである。それからその時に、その世尊は偈頌をお説きになられた。

風などは、大過とならず、貪欲などは過失と認められる。風などにより人は悪趣に墮ちないであろう。

²⁰ Cf. Vogel 1965: 51, 矢野 1988: 13, 二本柳 1994: 35.

心の過失は大過であって、常に悪趣と説かれている。それ故に、それらを寂滅することは善であり、風などを寂滅することによりこうなるのではない。

自分がなしたことを完全に捨ててから、何らかの他者がなしたことに入るその人は速やかに死に、賢者により非難されるであろう。

身体を失った後に、身体を持つ者の風などは滅するが、何千もの世代にわたっても貪欲は滅しないだろう。それ故に、貪欲を寂滅することは善である。風などを寂滅することによりこうなるのではない²¹。貪欲を正しく滅してから、畢竟の善を得る。

何であれ衆生を治すものが治療であるが、身体を治すのは治療ではない。心を治療することは知り難い。世間の幸運はその通りではない。

その如くならば、世尊カーシャパは「このために出家したので、治療行為をなすべきではない」とお説きになられている。治療行為は、衆生を地獄と同じ過失に入れることである。

治療行為の大過は、さらにまたこうである。すなわち、欲望に制圧され、ライバルなるものの医療行為によってから我慢を起こすであろう。そのライバルの医療行為を非難し、生活を妨害するであろう。彼は、餓鬼の原因に入るであろう。そのような垢に制圧された者は、その力をもつ心の痴が大きな力になるであろう。その痴により制圧された者は、女性を明らかに見た後に、正しい在り方ではない考えにより駆り立てられるであろう。その智慧を妨げられた者は、女性を明らかに見た後に、貪欲により制圧されるであろう。風などの他の過失を治療するならば、自分が地獄と餓鬼と畜生に行くことになる貪欲などの大きな力の過失をもつことになる。それらに制圧され、悪見により制圧されたその悪い医師は、その大過に縛られてから衆生を地獄に引き込むであろう。それ故に出家者は、あらゆる面により常に煩惱などを寂滅することを努力すべきであるが、風など [の治療行為を努力すべき] ではない。さらにまた、禪定と読誦を妨げるこの第二の法を、涅槃に明らかに向いている沙門はなすべきではない。

SSU8

[本編第4章を参照]

SSU9

さらにまた、禪定と読誦を中断する第九の法を完全に捨てるべきである。それは何か、と言えば、すなわち王に頼ることである。沙門は、王に頼ることをあらゆる機会においてなすべきではない。それは何故か、と言うのならば、王に頼る者は、あらゆる国により供養されない。その王に頼ることをもつ沙門は、富の集まりや城市や村や岩山や、そのような他のところに何らかのものを求める。もしもその比丘が求めるならば、欲望が

²¹ 『正法念処経』Tib. は、第二の偈に述べられるこの同じ句からここまでの句が欠けている。

大きくなるであろう。また、求めないのならば、彼は目的なしに煩惱を行じることになり、禪定と読誦を妨げるであろう。彼が解脱の道に住するのならば、縛る道に行くことになるであろう。その如くならば、比丘は王に頼るべきではない。

それに頼るということは、交際することである。頼らないとは、完全に捨てることである。誰に対してなすのか。すなわち、例えば、悪友と、色声香味触の五欲樂の煩惱をもつ者と、正しい在り方ではない考えをなす者と、怠惰な者と、眠る者と、辺境の村に住する者に頼るべきではない。懈怠な者と一緒に住むべきではない。偽善者と交際するべきではない。美食家²²と一緒に住むべきではない。商人と一緒に問答もすべきではない。詐欺により生活する者²³たちと一緒におらず、本質的に垢をもつ者と一緒におらず、邪見の者と一緒におらず、曲折をもつ者と一緒におらず、我慢をもつ者と一緒におらず、傲慢な者と一緒におらず、墮落してから起き上がった者と一緒におらず、賭博により生活する者と一緒におらず、酒場におらず²⁴、酒を売る者と一緒におらず、論争をする者と一緒におらず、女性を恋い求める者と一緒におらず、貿易により生活している者と一緒におらず、怒り目をもつ者と一緒におらず、使者たる者と一緒におらず、鳥を捕まえる者と一緒におらず、戯論をもつ者と一緒におらず、外道に入る者と一緒におらず、すべての人を憎悪する者ととともにいるべきではない。一緒に交際し、会話をし、同行することも、比丘はなすべきではない。それは何故か、というのならば、他の過失を浄化した人や、出家者に対して多くの人たちが、「どうして誰かにそのように頼ったり、交際するかが、確実にそのような本性をもつことになるであろうか」という考えをなす。そのような過失がそれにより染着けられている。それ故に、彼らに頼るべきではない。あなたにとって、王に頼ることが何になるだろうか。それはあらゆる面で非難される。それから、その時に、世尊カーシャパが偈頌をお説きになられている。

森林に住む比丘が王に頼ることは非難されるものとなる。黄色い袈裟の者が何かに頼ることは、この使用人のように手により生活する者の場合である。

誰も天も頼られず、比丘が頼ることは適切ではない。清浄なものに頼る²⁵驚鳥が死体と性交することは適當ではない。

悪身と我執がなく、望むことがなく、戯論がなく、輪廻の恐怖により恐れることがない者が、王に頼ることは美しくない。

森林や寂靜処や塚間や草原の水辺や山地に住する比丘は美しい王宮に頼らない。そのように、王に頼ることは多くの在り方により非難され、すべての梵行を行う者により非難されるものである。もしも比丘がなすのならば、智慧の王に頼るべきである。それは、畢竟なる寂靜なものに頼ることになる。必然的によく〔安穩を〕得るであろう。

²² 『大經集』: zhim lto can. 『正法念處經』: stan bzang po can.

²³ 『大經集』: zol gyis 'tsho ba. 『正法念處經』: gzhan sdug bsngal bar byas pas 'tsho ba. 『正法念處經』 Chin: 居獵師等惡命活者。

²⁴ 『正法念處經』 Tib. om.

²⁵ 『大經集』: gtsang sprā. 『正法念處經』: mi gtsang.

それに頼る方法となるものはこうである。すなわち、精進が堅固なことと、他の業がないことと、師に頼ることと、足りていることを知ることと、非常に頼られることをもつことと、常に考えることと、貪愛しないことと、修習することと、師に質問をすることと、非常に頼られることを保持することと、サンガに従うことと、怠惰がないことと、梵行者に頼ることである。これらが、比丘が智慧の王に頼る方法である。それから、その時に世尊カーシャパが偈頌をお説きになられている。

修習と、師を尊敬することと、そのように質問することと、布施と、そのような戒に依存することが、智慧の王に頼ることである。

これは、天をともなう世間の王が歓喜するものに頼ることであり、存在の緊縛により苦しむ者は王を自称する者ではない。

誰であれ苦が存在しない者は、王となるものである。誰であれ苦が巻きつく者は、どうして王として適当であろうか。

その如くならば、比丘は智慧の王に頼るべきであるが、普通は[そうでは]なく、それに依存するならば、禪定と読誦を損なうであろう。それを損なうならば、またその王は地獄と餓鬼と畜生のいずれかの行境に生まれるであろう。それ故に、比丘はそれらの過失を知ってから、王に依存するべきではない。これは森林に住する者により非難される。それ故に、この禪定と読誦を中断する第九法は、非難されるべきものである。

第4編 真言乘文献

第1章 秘密集会文献

はじめに

Dīpaṃkaraśrījñāna は『菩提道灯論』の末尾において真言乗の解説を行っているだけでなく、多くの密教関係の著作も著している。同論の自注ではタントラ文献が七種に分類され、『秘密集会タントラ』は大瑜伽タントラに区分されている。彼に帰される密教文献としては、チベット大蔵経のテンギユルの秘密部に七十二の著作と、六十九の翻訳文献が収録されている。このうち『秘密集会タントラ』に関連する文献は、『秘密集会世自在成就法¹』、『観世自在成就²』、『秘密集会讚³』である。その分量は、最初のもは十一葉ほどであるが、残りは二葉と一葉の小片テキストである。その翻訳者はいずれもが著者自身であり、最初と最後のものは Rin chen bzang po と共訳である。

これらの三種の『秘密集会』関連文献への言及が、『テプテル・ゴンポ』のカダム派のセクションに見られる。

Lha btsun pa が、「私はタントラとしては『秘密集会』を信じ、天としては観世自在を信じます」と述べたので、ジュニャーナパーダ流の『秘密集会』の主尊を世自在にした現観と、真言としては三字に添加した *maṇipadme* をともなうものと、マンドラの讃歌を著した⁴。

すなわち、弟子である Byang chub 'od が『秘密集会』と観自在を信じると述べたのに対して、Dīpaṃkaraśrījñāna がジュニャーナパーダ流の『秘密集会』マンドラ的主尊を観世自在とした現観と、観世自在のマントラを加えたものと、そのマンドラの礼讃を述べたこれらの三種のテキストが、それぞれ『秘密集会世自在成就法』と『観世自在成就』と『秘密集会讚』に相当する。このことからこれらのテキストは著者がチベットに入った後に著され、その翻訳は Rin chen bzang po と出会った後になされたことになる。また、チベット語訳の北京版、ナルタン版では、第一のテキストの冒頭に、「二つの秘密集会世自在成就法と秘密集会讚が Dīpaṃkaraśrījñāna により著された」とあり、テンギ

¹ *Śrīguhyasamājalokeśvarasādhana* (*dPal gsang ba 'dus pa 'jig rten dbang phyug gi sgrub pa'i thabs*). C. Pi 221b5-232b4; D. No. 1892, Pi 220b6; G. Thi 329a-344b3; N. Thi 249a1-262b6; P. No. 2756, Thi 263a7-277b4.

² *Āryāvalokitalokeśvarasādhana* (*'Phags pa spyen ras gzigs 'jig rten dbang phyug gi sgrub pa'i thabs*). C. Pi 232b4-234a2; D. No. 1893, Pi 231b6-233a4; G. Thi 344b3-346b1; N. Thi 262b6-264a7; P. No. 2757, Thi 277b4-279a8.

³ *Śrīguhyasamājastotra* (*dPal gsang ba 'dus pa'i bstod pa*). C. Pi 234a2-b5; D. No. 1894, Pi 233a4-b7; G. Thi 346b2-347b4; N. Thi 264a7-265a7; P. No. 2758, Thi 279a-280a8.

⁴ 羽田野 1986, pp. 78-79.

ユル編纂の段階では、これらの三つの論書が一つのセットとして認識されていたことになる。

『秘密集会世自在成就法』

『秘密集会世自在成就法』の内容としては、全体の概要を示す十二偈と禅定のための障害の除去のマントラを述べた後に、前行にあたる敬礼と供養と懺悔などのマントラと偈頌が最初に述べられる。本行としては空性の修習としての日輪と方便と般若の二種の月輪の観想から始まり、観世自在の観想、三金剛と身語意の加持が『秘密集会』の偈とマントラの引用とともに述べられ、また五仏、四仏母、六金剛女、四忿怒の十九尊のマンダラの観想方法がそれらの面相と持物などの特徴とマントラとともに述べられる。さらに智慧薩埵の観想などが述べられた後に、後行としての福德廻向の誓願とまとめの十四偈で結ばれている。その最後には、Byang chub 'od の前で説いたという著作理由も示され、またそのコロフォンには、本テキストが『秘密集会』の次第による成就法をまとめたものであることが記されている。

『観世自在成就法』

『観世自在成就法』も、そのコロフォンに『秘密集会』の随行と述べられており、その概説をまとめたものがここに解説される、と記されている。その内容は、著作意図を示した三偈に続き、成就法の次第を簡略にまとめたものである。その次第は、阿字の観想の後に礼拝などの七支、三帰依、発菩提心、大悲、空性の修習がまず述べられる。続いて観自在のマンダラの観想、身語意の加持、五仏の供養・請願・灌頂の観想が述べられるが、そこには前著と同様に観自在のマントラが加えられている。観想から起きてからは、智慧薩埵の修習が述べられた後に、再び不二大楽の観想ならびに食行の前の観想がマントラとともに三偈にまとめられる。全体としては観世自在の成就法を、前著よりもさらに簡略にまとめたものである。

『秘密集会讚』

『秘密集会讚』は、七音節の十九偈からなる著書であり、各偈がそれぞれ五仏、四仏母、六金剛女、四忿怒の十九尊に対する偈頌となっている。それぞれの内容は、それぞれの特徴とともに彼らに礼拝することを述べたものであり、ジュニャーナパーダ流の十九尊の分類に従うものである。

『秘密集会世自在成就法』和訳

インド言葉で、*Śrīsamājalokeśvarasādhananāma*
チベットの言葉で、『吉祥秘密集会世自在成就法』
偉大な菩薩である聖観自在に敬礼する。

変化の無量の光明を放つことで有情の苦を取り除き、その無分別の主体をもつ吉祥なる金剛法に敬礼する。[1]

吉祥なる集会の偉大な顕現である最高のタントラの次第に依って、世間主の成就法の次第をまとめたものが明らかに書かれる。[2]

最初に悲の力から生じた円満なる菩提心を堅固にして、存在の享受の楽しみに執着せず⁵、完全に把握して、背を向ける。[3]

浄化などの宝が円満なる者たちは、師を仏と同じく尊敬し、彼が説いた誓願の行を完全に護ることを努力する。[4]

瓶と秘密などの灌頂を師の恩恵により正しく得て、身口意が清浄なる成就者は成就の器である。[5]

三昧の支分から生じた資糧が完成してから、速やかに成就を得るであろう。そのようにマントラの在り方がある。[6]

三昧の支分を損ない、それに対立する方向に住するならば、百億の生によっても三昧を正しく完成しないであろう。[7]

それ故に、三昧を正しく完成させるために、マントラの行にとどまる瑜伽行者はそれ以外の心を捨てて、散乱のない精進により努力すべきである。[8]

三昧の支分と反対の方向を確定すべきなので、三昧の支分の反対方向のものをまとめてから解説される。[9]

戒が円満で、諸受容への依存はなく、忍をもち、誓願が堅固で、人の喧騒を捨てる。[10]

身口意の業に対する正智をもち、仏身を考察する念により身随念を正しくもつ。[11]

如何なる時に何をなすべきかのその随念を堅固にし、五障を捨て、食事の量を知り、行道の時期となる。[12]

世間の一切法を常に思うことは中立で、資具を減らすこれが支分であり、誤解は相反する方向である。[13]

⁵ C, D には、*bde ba chags* とあり、「楽への執着」とある。

意に沿う禪定の場所で楽な座に座ってから障害を明らかにすべきである。

oṃ gha gha ghātaya ghātaya / sarvaduṣṭāṃ phaṭ // kīlaya kīlaya sarvapāpaṃ phaṭ / hūṃ
hūṃ hūṃ vajra kīlaya vajradhara ājñāpayati / sarvaduṣṭānāṃ kāyavākcitta kīlaya hūṃ
phaṭ /⁶

このマントラにより十方の一切の障害を取り除くべきである。

それから自分の心臓に響く最初の文字が変わった月輪に赤い **hrīḥ** の文字を思い、その光明を広げることで自分の身体を顕す前行と、十方の一切世間界を顕らかにしてから、マンダラの輪のような仏と菩薩のすべてを正しく礼拝し、尊者である師も虚空において把握して、

oṃ sarvatathāgata kāyavākcittapraṇamena vajra vandhanaṃ karomi⁷

と行うことで敬礼すべきである。

それからその **hrīḥ** の文字自身から光明の集まりである種々の色を放つ前行と、色金剛などの供養の天女の集まりを正しく広げて、

oṃ sarva tathāgata pūja vajra svabhāva ātmako ahaṃ /⁸

と唱え、仏と菩薩と師によく供養をなすべきである。

それらの御前で膝を地に着けてから合掌して、このように懺悔などをなすべきである。

無始の存在の川においてすべての分別により集めた泥水を大悲をともなう御前でそれらの者は儀軌の通りに一切を懺悔すべきである。[14]

完全なる仏と菩薩と他の聖者によりなされた善をすべて正しく随喜して、菩提

⁶ 「オーン、殺せ、殺せ、強打せよ、強打せよ、一切の兇悪者を、パット。金縛りにせよ、金縛りにせよ、一切の罪を、パット、フーン、フーン、フーン、金剛よ、金縛りにせよ、持金剛よ、教令を下さい。一切の障碍を、身口意を、金縛りにせよ、フーン、パット」。松長 1978: 69, 1998: 126-127. Cf. *Pṇḍikṛtsādhana* 13. 酒井 1956: 51.

⁷ 「オーン、私は一切如来の身語意と金剛のすべてを礼拝します」。八田 1985: 200, n. 1829.

⁸ 「オーン、私は一切如来の供養金剛の自性そのものである」。松長 1978: 17, 1998: 28. Cf. *Pṇḍikṛtsādhana* 89, 酒井: 63, 北村、ツルティム 1995: 37-38.

に廻向すべきである。[15]

意の提示が無垢なる月を越えて成立し、正しい究極の悲の方法が自分の意に存在するようになった諸善逝に常に帰依すべきである。[16]

すべての分別から確実に解放され、正しい薩埵らの円満なる基盤で、一切の事物と一味の本質である正法に常に帰依すべきである。[17]

束縛から正しく解放され、最高の悲によりよく作られた吉祥をそなえ、歓喜などの地に正しくおられる禁戒せる自在天らに帰依すべきである。[18]

想と異熟が清浄になり、すべての障害の習気を引き出し、さらなる信解により飾られた心を正しい菩提に起こすべきである。[19]

善逝の子をとまなう一つの道で布施などの白い十種の功德の在り方で、完全なる悟りの主すべての本質の慧により正しいものに今住します⁹。[20]

そのように道に住する間になすべきである。

それから、

本質を離れているので空である。自性である原因を離れているので無相である。分別を離れているので事物を残らず願うことから解放されている。[21]

と言うことで、所取と能取などの一切の戲論を離れているので三界を残らずに空と修習し、これにより空性における加持が説かれている。

om śūnyatā jñāna vajra svabhava ātmako 'ham /¹⁰

その後、仏国土を完全に清浄にする目的の空の自体をもつその心自身の文字である a が赤に変わってから日輪の相を思う。その上で hūṃ が黒に変わってから黒い五股金剛杵を分ける臍の hūṃ の文字により飾りが太陽にあるように思う。

そして、それから生じた金剛の自性の光明を十方のすべてに放つことで一切の障害が取り除かれ、金剛の自性のその光明自身から金剛に牛と同じ大きさのものが数百千由旬存在し、一切の魔は歩き回ることができず、一切の方向に遍満する外で最後の時の火の

⁹ この箇所は、Tsong kha pa の『秘密集會成就法清淨瑜伽次第』においても引用されている。北村、ツルティム 1995: 5-6.

¹⁰ 「オーン、私は空性の智金剛の自性そのものである」。松長 1978: 11, 1998: 15. Cf. *Pñḍikṛtsādhana* 44, 酒井 1956: 56.

蘊が燃えるようなもので廻し、金剛の自性の地輪を地下の辺際に思い、その中央で法が生じる印がある場所を上を動かし、下を閉じ、虚空の広大な界を真中に入れる。秋の月のように白と思い、その中央で黄色い **paṃ** の文字から生じた種々なる広大な蓮華と、その中央で黒い **hūṃ** の文字から生じた種々なる金剛を思い、その中央で月にある白い **brūṃ** の文字が変化してからその十二の車軸の臍に月にある **brūṃ** の文字を思い、それが変化してから世尊毘盧遮那の身体の白と青と赤の三色により美しく、第六手と最初の二手により自分と同じ明妃を抱きしめ、右の二番目に白輪を、三番目に剣を、左手の二番目に宝を、三番目に白蓮華を思い、髭と鬘があり、種々なる蓮華と月を金剛の結跏趺坐で座り、白い光明の集まりを放つことを思い、それが変化してから二階からなる楼閣は種々なる宝石の光明の自性をもち、外の次第は四角と四門と四アーチで飾り、種々なる色の旗と幢に鈴を付けたものが風で揺れ、花の鬘と払子と網とペンダントで美しくし、外にある色の場所である棚金剛を宝石で飾り、美しくする。内部の球状の次第を金剛鬘により廻し、八柱で美しくし、茎をもつ種類の蓮華の花びらにある十二の月と七つの日の座をとまうことを観想してから、そこで中央の月の座に音の十六文字が二つになったものを完成してから、偉大な人の三十二相の原因となる月輪を思い、その上に **ka** などの明らかにされる三十四文字と **da dha ḍa ḍha ya la** という六文字が加えられたものを二倍にした白が八十になってから、八十種好を起こす第二の月輪を思うべきである。

そのように智慧と方便の自性の二種の月輪を修習した後、アーラヤ識がとどまるようになってから、一切法を映像に似ていると考察することで大円鏡智が生じるのである。それからその二月が一つになることで自性による区別がないから、煩悩をもつ意の場所となる平等性智である。その月輪自身に赤い **hūṃ** の文字を思い、それが変化してからその赤金剛の臍に赤い **hūṃ** の文字をもつことを思い、話すものと話されるものの分別が存在するようになってからが妙観察智である。それからその金剛と **hūṃ** の文字から生じた光明の集まりにより諸有情は浄化され、金剛薩埵の相が起こされる。臍に **hūṃ** の文字をもつ金剛に入り、

oṃ vajra ātmako 'haṃ¹¹

とすることで自慢する。それは入る識がとどまるようになる成所作智である。

それから月と金剛と **hūṃ** の文字の変化が先行してから自分自身が金剛薩埵の水晶の身体に似た三面で、最初の面は白、右の青、左の赤、六手で、先端の二手で自分に似た

¹¹ 「オーン、私は金剛そのものである」。北村、ツルティム 1995: 30-31.

明妃を抱いて、右の第二の手で赤い金剛を、三番目で剣を、左の第二の手で宝を、三番目で蓮華をつかみ、宝石の冠をもち、把握すべきものなどの不浄なる分別を離れることで法界清浄の本質を起こした金剛薩埵を自分と思い、大貪欲により律の世間を見て、それを本当に浄化すべきである。そして大貪欲により律の衆生界を浄化する次第はこうである。歡喜の声により虚空界におられる一切の如来を自分の身体に入れ、眼などから触金剛の辺際の尊母の姿で現れ、自分の智慧の身体に入るべきである。

それから再び如来の集まりを自分の身体に入れて、菩提心を願うことになる自分に似た蓮華の中心に **hūṃ** の加持の菩提心を願うマンダラを觀想し、それが変化してから所依と能依のマンダラが十九天の自体をもつ金剛持が最高になることを觀想し、その衆生たちを知恵により入れてから、また同じように諸如来が自分の身体に入り、そのように菩提心を願うことになる金剛の道から生じて、秘密のマンダラに入る諸衆生は、菩提心の甘露により灌頂してから **kṣeṃ jriṃ khaṃ gaṃ ṣkaṃ** の種子から眼と耳と鼻と舌と身と意の根の本質をもち、後で解説する身体の色と手の相をもつ地藏と手金剛と虚空蔵と世間自在と除障害と普賢の生起を出現させるべきである。**jaḥ hūṃ baṃ hoḥ khaṃ raṃ** の種子から色金剛と声金剛と香金剛と味金剛と触金剛と法界金剛になる色と声と香と味と触と法界の本質をもち、後で解説する身体の色と顔と手をもつものを出現させるべきである。**lāṃ māṃ pāṃ tāṃ** の種子から地と水と火と風の本質をもち、ローチャナーとマーマキーとパーンダラーとターラーを後で解説する身体の色と顔と手をもって出現させるべきである。**bhaṃ āṃ jriṃ khaṃ hūṃ** の種子と、色と受と想と行と識の蘊の自性である毘盧遮那と宝生と無量光と不空と阿闍を出現させるべきである。

それから所依と能依のその一切のマンダラを空で、虚空のように思い、その後には **om āḥ hūṃ** という文字の三色の白と赤と黒と、身口意金剛の自性をともない、悲と智慧の自性の赤い **hoḥ** の二つの中に入ることを前の虚空に觀想し、口の門から自分の身体に入る。自分と同じ明妃の貪欲の火により請願することで自分の金剛の道から引き出される。自分と同じ水の中で生まれたものの臍の中に入ることを觀想し、その力により自分自身の明妃をもつ大貪欲の在り方の三昧により請願するようになってから、水銀の集まりのように光明を見るべきである。

それから世尊であるその法界の自性たるものが所化の人の種々なる相の律に随順する色身を正しく保持する目的で、自分の相続とは異ならない慈と悲と喜と捨の本質と、尊母であるローチャナーとマーマキーとパーンダラーとターラーが請願する歌で覚るように修習すべきである。

衆生界にいる自在主たるあなたに、金剛の心で、歡喜の喜びの大義を求める者が

自分を護ることを請願する。尊主よ、もし今日、私が生きていることをお認めになるのならば、衆生の偉大な父の最高の対治である私を喜ばせることをお願いする。
[22]

金剛身であるあなたはお言葉の輪で衆生を普く利益し、仏のために菩薩が勝義において明らかに利益することを見ている。尊主よ、もし今日、私が生きていることをお認めになるのならば、貪欲の誓願に執着することで私を喜ばせるようお願いする。
[23]

あなたは金剛の語で、すべてを利益し、哀れむ。世間の者たちは意義と目的を精進する。尊主よ、もし今日、私が生きていることをお認めになるのならば、喜ばしい普賢の行で私を喜ばせるようお願いする。
[24]

あなたは、金剛を望む最高の誓願の利益が大きく、正等覚者の最高の系統が等しいものを哀れむ。尊主よ、もし今日、私が生きていることをお認めになるのならば、功德の多宝の蔵となって私を喜ばせるようお願いする。
[25]

そのように歌により正しくお願いした後に一切の事物を幻のように思い、大貪欲により調伏する人に相応する大士の相と種好により飾られた聖観自在の身体を自分自身に起こさせるために、その願いが完全になってから赤い *hrīḥ* の文字である。それが変化してから白蓮華の中に月にある *hrīḥ* の文字の光明を放つことを観想し、それから生じる光明の語により世間界を残らずに顕現させるべきであり、所化の衆生の界の種々なる相を浄化してから、聖観自在のような如来の身体の色と顔と手と相をもつことをなし、赤蓮華の *hrīḥ* の文字がその境界自身に入ってから蓮華と月とその *hrīḥ* の文字に変わってから世尊である聖観自在の三面と六手で、身体全体と最初の顔は赤く、右の顔は青く、左は白く、根本の二手で自分に似た明妃を抱き、右の二番目の手で蓮華を、三番目で剣をつかみ、左の二番目で宝を、三番目で輪をつかみ、長髪と冠をもつことを自分自身に思い、輪廻と涅槃にとどまらないためにこのマントラを述べるべきである。

*oṃ dharmadhātusvabhāvātmako 'haṃ*¹²

これらは原因に従った結果と親近の小さな支分である。

その後、両目に白い *a* から月にある *kṣiṃ* の文字と輪が変わってから、地蔵は宝石の冠をもち、顔と手と相などは世尊毘蘆遮那に似て、その下のものについて、その如くで

¹² 「オーン、私は本性として法界の自性そのものである」。松長 1978: 12, 1998: 17. Cf. *Pṇḍīkṛtsādhana* 51, 酒井 1956: 57.

ある。そのように二つの耳に月にある **jiṃ** の青い文字と金剛が成立してから手にある金剛は後で解説する不動の如くである。鼻に月にある黄色い **khaṃ** の文字と緑の宝石の九対が成立してから虚空の心髄である宝生の如くである。舌に月にある赤い **gaṃ** と赤蓮華が成立してから世間自在の無量光の如くである。額の中に月にある緑の **kṣaṃ** と剣が成立してから一切の障害を取り除くことが有意義になるように。舌に月にある白い **saṃ** の文字と赤い金剛が成立してから前に解説した金剛薩埵のように修習すべきであり、これらは異熟の小さい結果と小さな成就とである。

それから法と受用と変化の三身が起こされるために意の秘密などの加持を次のようになすべきである。自分の心臓を月にある **hūṃ** の文字に変えてから五つに分かれた金剛で、臍に月にある **hūṃ** の文字を思い、その光明の門から生じた心金剛の変化の集まりにより有情らに心金剛の相を起こす。また心臓にあるその **hūṃ** の文字自身に入ってから、**hūṃ** の文字と月と金剛にかわってから心金剛が瞋金剛のような宝石の冠をもつことを観想し、その胸元に月にある黄色い **hūṃ** の文字から生じた光明の諸門から心金剛の集まりを広げ、その光明により無始より成立している如来の心金剛の集まりを招いて、虚空界のすべてを満たす。

それからその **hūṃ** 自身から生じた色金剛などの尊母により正しく供養し、心金剛を加持するために請願すべきである。

吉祥なる金剛意を持つものよ、不壊なる三金剛を修習したことで、今日私を加持してから心金剛になして下さい¹³。[26]

十方におられる諸仏よ、不壊なる三金剛を修習したことで、今日私を加持してから心金剛になして下さい¹⁴。[27]

それから自分の心に一切如来の心金剛を加持することをさらに信解し、

oṃ sarvatathāgata cittavajra svabhāva ātmako 'haṃ /¹⁵

と加持すべきである。

その後喉の下に月にある赤蓮華の臍にある月の **hrīḥ** 赤い文字を観想し、それから

¹³ 松長 1978: 44, XII 74, 1998: 81. Cf. *Piṇḍīkṛtsādhana* 86. 酒井 1956: 62-63.

¹⁴ 松長 1978: 44, XII, 75, 1998: 81. Cf. *Piṇḍīkṛtsādhana* 87. 酒井 1956: 63.

¹⁵ 「オーン、私は一切如来の心金剛の自性そのものである」。松長 1978: 17, 1998: 27. Cf. *Piṇḍīkṛtsādhana* 89, 酒井 1956: 63.

生じた諸光明により一切の如来を呼び集めてから hrīḥ の文字から色金剛などを広げて、それらにより彼を正しく供養してからその hrīḥ の文字自身に入り、そのすべてが変化してから智慧薩埵を觀想し、その胸元で月にある自らの種子を修習すべきである。その上にある喉に月の輪の上の赤い āḥ が成立しから、その赤い蓮華の中央で月にある āḥ の文字を觀想し、その光明を放つ門から生じた如来である語金剛 [の変化の集まりにより諸有情が語金剛の相を起こし、また喉にあるその āḥ 自身に入ってから āḥ の文字と月と蓮華が成立してから、語金剛に貪欲金剛のような宝石の冠を觀想し、その喉に月にある赤い āḥ から生じた光明の諸門から語金剛の集まりを広げ、その光明により¹⁶⁾ 前に成就した諸仏が虚空の範囲を満たし、そのように色金剛妃などによりそれらを正しく供養する。自分自身が語金剛を加持するために請願すべきである。

吉祥なる法の語道を持つものよ、不壊なる三金剛を修習したことで、今日私を加持してから語金剛語にして下さい。[28]

十方におられる諸仏よ、不壊なる三金剛を修習したことで、今日私を加持してから語金剛語にして下さい¹⁷⁾。[29]

それからそれらを自分の金剛に入れ、このように自慢すべきである。

om sarvatathāgata vākvajrasvabhāva ātmako 'ham¹⁸⁾

それから広がる光明の門から生じた如来の身金剛と、一切の如来の身金剛により前のように虚空の範囲を満たすことを觀想し、それから前のように色金剛などによりそれらを正しく供養する。頭の om の文字に入り、身金剛を加持するために請願するべきである。

吉祥なる金剛身を持つものよ、不壊なる三金剛を修習したことで、今日私を加持してから金剛身にして下さい。[30]

十方におられる諸仏よ、不壊なる三金剛を修習したことで、今日私を加持してから金剛身にして下さい¹⁹⁾。[31]

¹⁶⁾ P はこの部分を欠く。

¹⁷⁾ 松長 1978: 43, XII, 72-73, 1998: 80. Cf. *Pṇḍīkṛtsādhana* 80-81, 酒井 1956: 62.

¹⁸⁾ 「オーン、私は一切如来の語金剛の自性そのものである」。松長 1978: 17, 1998: 27.

¹⁹⁾ 松長 1978: 43, XII, 70-71, 1998: 80. Cf. *Pṇḍīkṛtsādhana* 74-75, 酒井 1956: 61.

それから一切の如来の身金剛による加持により自分自身の身金剛を加持すべきである。

oṃ sarvatathāgatakāyavajrasvabhāva ātmako 'haṃ²⁰

これらは人がなす小さな結果と小さな成就である。

それから智慧薩埵の胸元の種子から生じた光明により如来の集まりを呼び、前の虚空の方に入ることを思ってから、

菩薩が金剛仏に大供養をする通りに、自分も考察されるべきなので、虚空の金剛を、今、私に与えて下さい。[32]

と言うことで灌頂を請願する偈頌により灌頂を請願した直後に、如来の身から生じたローチャナー等の天女で智慧の甘露により満たされた宝の瓶をつかむ者たちによる色金剛女などの供養と、楽器と吉祥の歌の種々の騒がしい音を出すことで自分自身に灌頂することを観想し、その菩提心が転じてから、世尊たる世間自在の頭の上の冠に世尊である無量光を観想するべきである。これが根の小さな結果と、大成就の小さな支分である。

それから自分に似た明妃も自分自身の前の小さな親近などの次第により眼などの加持と、意と語と身金剛に対する加持と、一切の如来により灌頂をなすべきで、四支の間に完成してから五種と融合すべきである。その次第はこうである。乳房の上頭の間には白い oṃ の文字が成立してから、毘蘆遮那の極微の自性が乳房の下から臍までに青い hūṃ の文字が成立してから不動の極微の自性で、臍の下から腰の間に黄色い svā の文字が成立してから宝生の極微の自性で、蓮華から両股に赤い āḥ の文字が成立してから無量光の極微の自性で、両膝から始めて両土踏まずの端に緑の hā の文字が成立してから不空成就の自性である。そのように自分の明妃に五種が融合することを把握し、それから hūṃ の文字が成立してから自分の金剛と、oṃ が成立してから宝石と、穴を phaṭ で加持し、自分の明妃を hūṃ の文字に変えてから蓮華を、āḥ の文字が成立することを臍に観想する。

それから一切如来の無上の楽を正しく受容する供養のために自分に似たものと一緒に喜ぶことだけを加持すべきである。

²⁰ 「オーン、私は一切如来の身金剛の自性そのものである」。松長 1978: 17, 1998: 27. Cf. *Pñḍikṛtsādhana* 77, 酒井 1956: 61.

oṃ sarvatathāgatānurāgaṇavajra svabhāvātmako 'haṃ²¹

のこれらが「最初の行」と言われる三昧である。

その後に歓喜の声により五如来を口に入れ、大食欲の火で請願してから金剛の道から出し、自分に似た明妃が水から生まれた中に菩提心を願うマンダラの赤い *hrīḥ* の文字により加持することを観想し、それが完全に成立してから世尊である無量光の主となったマンダラの輪を明らかに変化させ、自分と他者の利益を完成させるために外に広げるべきであり、*ārolaṃka* と言うことで無量光の身体の赤い色と顔の赤と青と白の三面をもち、六手の根本の二手で自分に似たものを抱き、右の二番目の手で赤蓮華を、三番目で剣をつかみ、左の二番目で宝を、三番目で輪を増やして与え、戯論により有情たちが語の金剛の相をなしてから、その身体に入り、それも自分の身体を一切の事物により設定すべきである。そのように一切処に広げ集めるべきである。

それから *jinajik* と言うことで毘盧遮那を前のように抱き、東方の月を配置すべきである。

その後に *ratnadhṛka* と言うことで宝生の身体は黄色で、黄色と青と白の三面をもち、六手の根本の二手で自分に似たものを抱き、右の第二手に緑の宝を、第三で剣をつかみ、左の第二手で輪を、第三で蓮華をつかみ、南方の日輪を設定すべきである。

それから *vajradhṛka* と言うことで阿閼の身体は青色で、三面は青と白と赤で、六手の根本の二手で自分に似たものを抱き、右の第二手に寂静の黒金剛を、第三で剣をつかみ、左の第二手で宝石を、第三で蓮華をつかみ、西方の日輪を設定すべきである。

その後に *prajñādhṛk* と言うことで不空の身体は緑で、三〔面〕は緑と青と白とで、六手の根本の二手で般若母を抱き、右手の第二で剣を、第三で輪をつかみ、左手の第二で宝を、第三で蓮華をつかみ、北方の日輪を設定すべきである。四如来は日の座と日の光をもち、長髪と冠をもっており、毘盧遮那は月の座と月の光をもつ。

それから *moharāti* と言うことで明妃ローチャナーの顔と手などは、毘盧遮那と同じ火（東南）の方向で月のマンダラを設定すべきである。

それから *dveśarāti* と言うことでマーマキーの顔と手などは、不動と同じ南西の方向に月のマンダラを設定すべきである。

それから *rāgarati* と言うことでパンダラヴァシーニーの顔と手などは、無量光と同じ風の方向の月のマンダラを設定すべきである。

²¹ 「オーン、私は一切如来の随染金剛の自性そのものである」。松長 1978: 17, 1998: 27.

それから vajrarāti と言うことでターラーの顔と手などは、宝生に似て、根本の二手で方便を抱き、二手に黄色い蓮華が開花し、第三で剣をつかみ、左の二手で宝を、第三で輪をつかみ、北東の方向に月の輪を設定すべきである。

その後におm āḥ rūpavajra hūṃ とする三文字の間に名前を入れて、それぞれのマントラを述べてから色金剛などから法界金剛までの供養の天女は順序通りで、色金剛と声金剛と香金剛と味金剛と触金剛と法界金剛は順序通りで、身体は白と青と黄色と赤と緑と白で、六[手の]根本の二手で方便を抱き、右の二手で鏡と琵琶と香りの巻貝と味の器と衣と法が生じる相をつかみ、残りの手で順序通りに剣と宝石と蓮華をつかみ、飾りの中を食べ物などで飾り、月の座と月の光があり、金剛結跏趺坐でうまく座り、順に第二の火などの結界と東方の二つの正門に月輪を前のように設置すべきである。

その後におyamāntakṛta とするということでヤマーンタクリタの身体の色は黒で、三面は黒と白と赤で、根本の二手で自分に似たものを抱き、残りの手で金剛槌と剣と宝と蓮華をつかみ、前のように溢れ出し、広げるなどの行為が先行することで東門に日輪を設定すべきである。

そのようにおprajñāntakṛta とするということでプラジュニャーンタの身体の色は白で、三面は白と青と赤で、六手の根本の二手で自分に似たものを抱き、残りの手で白い金剛棒と剣と宝石と蓮華をつかみ、前のように広げるなどをなして、南方の門に日のマンダラを設定すべきである。

そのようにおpadmāntakṛta とするということでパドマーンタの身体の色は赤で、三面は赤と青と白であり、六手の根本の二手で自分に似たものを抱き、残りの手で赤い蓮華と剣と輪と宝石をつかみ、前のように溢れ出し、広げるなどをなしてから、西の門に日輪を設定すべきである。

そのようにおvighāntakṛta とするということでヴィガンタクリタの身体の色は黒で、三面は黒と白と赤で、六手の根本の二手で自分に似たものを抱き、残り手で黒金剛の新しい葉と剣と宝石と蓮華をつかみ、前のように溢れ広げるなどをなしてから、北方の日輪を設定すべきである。

一切の忿怒も、オレンジ色の髪を上になびかせ、腹部が垂れ下がっており、猛毒で、赤くて丸い目で、小人の肉体をもち、虎の皮の衣服をもち、大龍により飾られ、口の犬歯は重要で、舌が揺れており、恐ろしく、日の光が圧倒的に輝いている。そのようにすべてのマンダラを起し、堅固に修習すべきである。

それから智慧薩埵の心髓の種子の光により智慧のマンダラを招くことを前の虚空に観想し、自分の門の守護者によりその障害を取り除き、正しく守り、自分の真言により供養の水を捧げ、色金剛などを上手に広げて、正しく供養してから、 jaṃ hūṃ baṃ hoḥ

と言う文字により順序通りに曲げたり、入れたり、自在になし、喜ばせることが、大きな等流果と親近の大支分である。それも前のように眼などを加持することが大きな異熟果と大執行である。

それから前に解説した次第により身体と言葉と心の加持をなすことが大成就と人の所作の大きな結果である。

それから一切の輪の胸元の智慧薩埵の核心の光により諸如来に請願をなして、面前の虚空を観想してから、色金剛などによる正しい供養を灌頂のために請願する。

それから如来の身体から生じた明妃のローチャナーなどが智慧の甘露により満ちた宝石の瓶を持つことによる灌頂と、マンダラの中央に自分と主となったものを観想すべきである。そして一切の如来の与えるものが不動である。不動の与えるものが金剛薩埵である。顔と身体 of 金剛とヤマンタカの与えるものが毘盧遮那である。マーマキーと声金剛と法界金剛とプラジュニャーンタカとヴィグナーンタカの与えるものが不動である。パンダラヴァシーニーと味金剛と馬頭の与えるものが無量光である。ターラーと触金剛の与えるものが不空である。香金剛の与えるものが宝生である。地藏と手金剛と虚空の心髄と、世間自在の手と、除一切障害と普賢の与えるものが順序通りに毘盧遮那と不動と宝生と無量光と不空と不動を観想すべきである。マンダラの輪の最高などのこれらの一切のマンダラの種類の主たるものをもとない、智慧と方便の無垢なる自性の最高の樂を聖者の本質と観想すべきである。その如くならばこれらは大きな大成就と優勢な大果である。

それから知恵薩埵の胸元の種子の光明の集まりにより虚空界にある色などの一切の境である自分自身の自分に似た明妃の胸に儀軌の通りに入り、自分に似た蓮華の中に溶け込むことを観想してから、その光明から生じた色金剛などの天女の集まりと分けられた供養の集まりによりマンダラの輪を正しく供養し、供養と供養の行為者を区別なく我慢をなしてから、

om sarvatathāgata pūjavajra svabhāvātmako 'ham²²

[と唱える]。それから自分自身が輪をとまって、次のように賞讃すべきである。

金剛の不死なる偉大な勝者で、分別することなく虚空で金剛を掴み、貪欲の彼岸を獲得した金剛語に礼拝する。[33]

²² 「オーン、私は一切如来の供養金剛の自性そのものである」。松長 1978: 17, 1998: 28. Cf. *Prādikṛtsādhana* 106, 酒井 1956: 66.

偉大な毘盧遮那で、金剛寂靜大歡喜と、最高の自性光明の最勝である金剛師に礼拝する。[34]

甚深なる宝石の王である金剛の虚空無垢で、自性清浄で汚れのない金剛身に礼拝する。[35]

不動の大智金剛と金剛界は偉大な賢者であり、マンダラの三宝と三字の金剛界に礼拝する。[36]

不空の勝者である完全なる仏で、一切の観想を円満にし、清浄なる自性から生じた金剛薩埵に礼拝する²³[37]

それから甘露を味わう儀軌をこのようになす。面前に **yam** の文字が成立してから風のマンダラである弓の形をした座による莊嚴を觀想し、その上に **ram** が成立してから母のマンダラである三角を燃焼する色をもつものを把握し、その上に **a** が成立してからその額の中に五甘露の **bhrūṃ āṃ jrīṃ baṃ hūṃ** と言うことで五如来の種子による加持を觀想してから、その後に焼くことと燃やすことなどにより正しく浄化して、**om** により加持することを觀想してから、その上に **hūṃ** から生じた金剛を觀想する。

それから **om** の文字の光明により一切の如来の知恵の甘露を引きつけて、その五甘露自身の中に入るべきである。

それから燃焼により **om** の文字と金剛を自分自身に溶け込ませ、そのように起こされたその甘露を舌の上で **hūṃ** の文字から金剛を飾るよい舌と味金剛により献上することで自分自身とマンダラを満足させるべきである。

そのようにマンダラを与えてから甘露を味わう間は、「マンダラ最勝」と言われる三昧である。心の自在を得たならば、寂滅などの行為により有情利益が成立させられるからである。滴のヨーガは修習すべきものなので、心を堅固にするために行為の最勝を修習すべきである。それ故に、智慧薩埵の胸元の種子の光明により三界のものを顕現してから自分の天の相をなし、マンダラの輪を設定すべきである。マンダラの輪を自分自身に設定する。自分が智慧薩埵に入る。智慧薩埵は特徴としてである。特徴はツァナカの量の滴に入り、滴の中で生起次第によりマンダラの輪を刹那だけ修習すべきである。ここで親近などを大きな声で述べる。ツァナカの実の量だけをそのように修習し、また滴の中に入る光明の集まりを顕現してから種子を觀想する。種子の光明から特徴を、特徴の光明から智慧薩埵を觀想する。智慧薩埵の光明を広げてから、マンダラの主たる本質を觀想する。

²³ 北村 1995: 51.

それから マンダラの主たる光明の顕現からマンダラの輪が前のように存在することを観想し、マンダラのその輪を普く広げる光明により三界すべてを如来の集まりで満たすことを修習してから、また同じように、滴の間に収め、再び広げ、再び滴の間に収め、そのようにマンダラの輪の修習を求める限りなすことが滴のヨーガである。その下で虚空に入る五種の如来を自分自身の口に入れ、菩提心に溶け込むようになってから、金剛道から出て、前のように自分と同じ蓮華の臍に菩提心に溶け込む滴を観想し、そこに hrīḥ の文字が成立してから蓮華をツアナカの実の量だけ修習し、蓮華の臍の中央でマンダラの輪を生起次第により刹那により修習すべきである。ここで親近などを大きな声で述べる。ここで心が堅固にならない限り広げるべきではない。心が堅固になってからも諸如来と拡大と収集の所作が極微のヨーガである。

それから修習による過失と九文字である智慧薩埵の胸元の種子を完全に廻して、場所を唱えるべきである。

oṃ āḥ oṃ maṇi padme hūṃ hūṃ

と言うマントラを唱え、身と語と意のそれぞれの金剛や意金剛の本質をもつものと智慧薩埵とその身・語・意金剛と智慧薩埵と一緒の五つの本質をもつことを観想し、そのそれぞれを引き出したり入れたりする風により次第に或は瞬時に拡大と収集をなすべきで、早すぎることで大きな疲労の罪過を離れて真言の真実をさらに信解することで秘密の九文字を唱えるべきで、これが唱える儀軌である。

それから修習と唱えることにより疲労を取り除くために天女の歌で請願し、頭の上に一尺だけ計って月の輪に白い oṃ があることを観想し、それから甘露を注ぐことで自分自身が満たされるように修習すべきである。これが堅固にすべき儀軌である。

それからまた休息し、マントラの真実をさらに信解することでどのくらいの間か誦すべきものを唱えるべきである。

それから請願を望むならば、自分の智慧薩埵の光明を放つことでマンダラの輪をともしなう外にある言論を前の虚空に観想して、供養の雲を広げ、それにより自分自身とマンダラの輪を正しく供養してから、智慧のマンダラを、

oṃ kṛtava sarvasatvārtha / siddhimadattāyanuga / gacchatvāṃ buddhaviśayaṃ / punar
gamanayacchaḥ

と言うこれにより請願をする。その変化を自分自身に集めるべきである。

それから福德を廻向するために、次のように誓願をなすべきである。

金剛の大守護の吉祥である一切仏の歡喜をこの善により得るようになってから、有情もそれを得なさい。[38]

大印契の意味の成就のために、何れかの行で仏により賞讃され、有情利益がなされるので、その行自身と我をもちなさい。[39]

諸如来は何れかの方便により一切智性の位を獲得し、浄化し、支分をすべて円満にし、その方便と我をもちなさい。[40]

一切の障害を完全に尽くすために、仏による秘密智である一切相智をあまねくなすために、自分でその智慧を獲得しなさい。[41]

自分の天の行により正しく三昧に入って、とどまるべきである。自分のマンダラの在り方で三界を見るべきである。[42]

飲食の時は、刹那の行により自分のさらなる天を觀想して、食事を整えるなどの浄化をなし、[43]

甘露を味わう儀軌も、金剛の舌の行により自分のさらなる天の最高のものにし、マンダラを胸に觀想してから、[44]

自分の秘密の加持の味により身の金剛などを満たし、この供養自身は聖なるもので、すべての仏により賞讃される。[45]

これ自身が内部の護摩であると『秘密集会』から解説される。沐浴の時に眼などにより灌頂のように行じるべきである。[46]

記憶を失うなどの罪過によりもし誓願を損なうようになるのならば、その時に「誓願金剛」と言うものを自分の胸で修習すべきである。[47]

その胸元にある **kham** の文字が相の中央に入ることを觀想し、身口意の金剛などを儀軌の通りに配置すべきである。[48]

身口意の中央に入るその種子を口から唱えるべきである。誓願を損なう罪過を浄化することを望み、語金剛により、[49]

マントラを唱えてから、修習の辺際は請願である。寝る時に自分の胸にマンダラを觀想し、また空性を修習してから、ヨーガにより何れかの楽なところで寝るべきである。[50]

覺醒の時には、天女による依頼を記憶して、臥所から起きて、ヨーガにより前のように禪定を修行すべきである。[51]

『吉祥 [秘密] 集会』の随行で、聖觀自在の成就法をチャンチュップウーの前で著し、**Dīpaṃkara** によりこれが著された。[52]

この成就法はよく書かれており、自分で善なるものを獲得することにより一切の有情が金剛法の場所を得ますように。[53]

聖観自在の成就法で、吉祥秘密集会タントラの次第による成就法である。

偉大な軌範師ディーパンカラシュリージュニャーナの御口から著されたものを完成する。インドの賢者であるディーパンカラシュリージュニャーナとシュチェンの翻訳官で比丘のリンチェンサンポが翻訳、校訂し、決定した²⁴。

『聖世間自在成就法』和訳

インドの言葉で、*Āryāvalokiteśvarasādhanam*
チベットの言葉で、『聖世間自在成就法』
世間主に敬礼する。

何れかの心が悲心の自在主となり、常に利他をなす世間主に礼拝し、その成就方法が書かれるべきである。[1]

菩提に心を起こし、信と悲をとめない、師を敬い、捨心をとめない、真実を説き、精進をもつ者は、[2]

意に従って住し、楽な座に座ってからも、先になすべきことをなして、世間主を成就すべきである。[3]

最初に自分自身の心臓に a から兔をとまなうことを観想し、その上に種子の文字を観想して、それから光を放つことで世間主を招いて、礼拝などの七支をなすべきである。それから三帰依と発心をなし、大悲を修習すべきである。

om sūnyatā jñānavajrasvabhāvātmake 'ham

と述べる。それにより一切の事物は所取と能取の二として存在しない空性を修習すべきである。

それから自分の心そのものである bam から蓮華の八葉を観想して、その上に a から

²⁴ 北京版では、この後に、to long nyis brgya phul / bo long nyis shu la / to long gcig / bo long bu gnyis sho gcig /// という句が述べられている。

月のマンダラである。その中央にも種子の文字はそれ自体である。それから光を放ち、有情たちを浄化してから、それ自身に集めるべきである。それが成立してから自分自身の世間主の身体の色は赤で、三面が赤と白と青として顕現し、六手は最初の右と左の二手は禅定の印契をもち、右の第二と第三で蓮華と剣をつかみ、左の第二と第三で宝石と輪をつかむ。その胸元に智慧薩埵の自分に似たものの部分は微細である。その胸元に兔をともない、種子の文字である。

それから光を放って、知恵の自性の場所から招来し、供養すべきであり、**jaḥ hūṃ bam hoḥ** と述べて、自らに引きつけ、設定し、縛り、歡喜すべきである。

それから三種の場所に三種の文字を想い、身口意を加持すべきである。また種子から光を放って、五仏を招来し、供養をなし、

尊主であるすべての如来が自分に灌頂をなすことをお願いする。

と請願し、それによる灌頂を觀想し、種の主により封印される。それ自身を明らかに修習すべきである。また、大種の風から成立した蓮華はチャナカの量だけで、上の鼻の頭に触の特徴と色の特徴が生じる間は修習すべきである。また、種子のその文字からその身体を広げたりまとめたりすべきである。

それから広がるようになれば、智慧薩埵の胸元の種子を、

om āḥ om maṇi padme hūṃ hūṃ hrīḥ svāhā

と言い、左廻りに飾り、教説の通りに修習すべきである。

それから起きようとするならば、智慧薩埵を引き出し、供養をなすべきである。

誰であっても自分の智慧が愚かなものはここでなすべきでないものをなす。誰であっても有身を守るものとなる主であるあなたは忍をなすように。[4]

と請願すべきである。

常に利他をなし、世間自在を成就した者は善をそれにより得なさい。有情もそれを得なさい。[5]

と言う誓願をなすべきである。

それから、**oṃ āḥ hūṃ muḥ** と述べることで請願をする。

一切の大種に対してもなし、前で法を生じる蓮華と月をともなうことを観想し、種子の光明により一切大種を集めてから、自分の望む天の相をなすべきである。[6]

トルマの浄化次第は、**yaṃ** を起こした風から **raṃ** を起こした火と **a** から生じた地の蓮華の器に、**mu bi ra śu ma** から生じた金剛水などの物体を取り除く。[7]

浄化などをなしてからそこに **hrīḥ** の文字を飾り、知恵の甘露を集め、**hūṃ** から生じた金剛により混ぜ、このマントラにより加持して、お願いする。[8]

ākāro mukhaṃ sarvadharmāṇāmādhyanutpannatrāta oṃ āḥ hūṃ phaṭ

と三度か七度唱えて、お願いすべきである。

それからそれらを満たすことで不二の大樂の三昧を得ることを観想し、**oṃ āḥ hūṃ muḥ** と請願すべきである。食行の時に前のその同じ三昧により、

食べ物を前の通りに浄化し、心臓に自分の天を観想し、内の護摩の観想をもつことで、食行をなすべきである。[9]

それから塔などの善業を努力すべきである。睡眠の時に自分自身の胸のその種子自身に、固定と流動のすべてを集めて、[10]

自分自身もそこに集めて、空性三昧に住するべきである。内で起きてから前のように成就に入るべきである。沐浴は、自分に対する灌頂の観想である。[11]

『吉祥秘密集会』の随行である『世間自在成就法』[と言う] ディーパンカラシュリージュニャーナによる概説をまとめたものがここに解説されている。[12]

『世間主成就法』[と言う] 偉大な軌範師ディーパンカラシュリージュニャーナによる著作を完成する。

『吉祥秘密集会讃頌』和訳

インドの言葉で、*Śrīguhyasamājastotra*

チベットの言葉で、『吉祥秘密集会讃頌』

文殊金剛に敬礼する。

分別を残らず捨てて、垢を離れた主体をもち、普賢の法界を本質とする阿闍に敬礼する。[1²⁵]

秋の月のように白く、百の光明を放ち、[大円]鏡智を本質とする主毘盧遮那に敬礼する。[2]

悪見を考察することを離れ、過失のない空のように清浄であり、平等性智を本質とする宝幢に敬礼する。[3]

無量の光が空を満たし、無量の功德の鬘により妙観察智を知る無量光に敬礼する。[4]

有情利益をなし、如実に大種から生じることで成所作智を本質とするその不空に礼拝する。[5]

大地のように一切衆生の尊敬をもって修行し、悲の修行を準備する天女ローチャナーに敬礼する。[6]

何れかの力により諸衆生の煩惱を寂滅し、水のように広大な利益のマーマキーに敬礼する。[7]

火のように一切衆生の煩惱を焼き尽くす努力をなし、所作への愛着を完成させる白衣に敬礼する。[8]

風のように雑染を根こそぎにし、楽を与え、ウトパラの眼があるターラーに敬礼する。[9]

何らかの色が広大で、あらゆる相を放たず、分別を離れた色金剛女のその無比なる方に敬礼する。[10]

何らかの力により声の真実の聖なるものを語られたものを広げ、耳の楽しみを求めさせる声金剛に敬礼する。[11]

何らかの享受が自然に成立し、衆生の身体を思うが、蜜蜂の声を作る香金剛女に敬礼する。[12]

何らかの自証は堅固なものとして存在せず、不二の味を領受する力により衆生を楽に住させる味金剛に敬礼する。[13]

如実に生じるようになる何れかの望みに対する愛着が辺際に行く言葉で常に喜ばせる触金剛に敬礼する。[14]

何らかのために雑染を断じる原因となった諸法によりすべてを常に考察される無上金剛に礼拝する。[15]

何らかのために大乘において人に楽を生じさせ、清浄なる信を本質とするヤマー

²⁵ 本論については、パーダではなく偈の番号を付している。

ンタクリトに敬礼する。[16]

何れかの賢者による力により菩提の資糧を完成させ、清浄なる精進を本質とする
プラジュニャータクリトに敬礼する。[17]

何らかの力により諸衆生に善を忘れることなく生じさせ、清浄なる念を本質とする
パドマータクリトに敬礼する。[18]

何らかの力により諸衆生を障害から離し、楽に住させる清浄なる禅定を本質とする
ヴィグナータクリトに敬礼する。[19]

『吉祥秘密集会讃頌』[と言う]偉大な軌範師ディーパンカラシュリージュニャーナ
による著作を完成する。

そのパンディタ自身と翻訳官の比丘リンチェンサンポにより翻訳された。

第2章 ターラー成就法文献

はじめに

女尊ターラーは、密教成立以前より仏教徒が崇拝していた女神であり、タントラ仏教の発展とともにその位置が高まり、チベット仏教においては最も重要な神格の一つとなった¹。「救度仏母」とも呼ばれ、大悲による衆生救済をその特徴としており、一般的崇拝を受けていたとされる。そのために多くの尊像²や礼讃文が、八難救済ターラー像や二十一尊ターラー礼讃などとして残されている。八難救済³とは、ターラー尊が、獅子・象・蛇の三種の野獣の害と火・盗賊・足かせ・水海・羅刹との八つの災難を沈めるといふものであり、二十一尊とは衆生救済の実践を二十一の様相⁴に例えたものである。このインド密教において広く受け入れられていた女尊のチベット伝承に対して重要な役割を果たした者の一人が *Dīpaṃkaraśrījñāna* とされている⁵。本章では、彼に帰されるターラー成就法関連の文献を取り上げ、その和訳を提示することにする。

ターラー文献

チベット大蔵経の北京版の目録を見ると、テンギユルの中に⁶ターラー成就法に関する文献として次のような文献を見ることができる。

¹ 立川 1986: 68-69.

² ターラーの変化身については、森 2001: 196-201 を参照。

³ 頼富 1990: 642-655 を参照。それによると、八難救済ターラーの尊像では、その分身が八真言 (*om tā re tu ttā re re tu re*) と八方に配されている。

⁴ クンチョック、ソナム、斎藤 1995: 119-134 を参照。

⁵ Beyer 1988: 11-12.

⁶ カンギユルにも次の文献を見ることができる。

1. *Āryatārākurukullekalpa* (D. No. 437, P. No. 76).

2. **Ekaviṃśatistotra (bCom ldan 'das ma sgrol ma la yang dag par rdzogs pa'i sangs rgyas bstod pa gsungs pa)* (D. No. 738, P. No. 77).

3. *Sarvatathāgatamātanitāraviśvakarmabhavatantra* (D. No. 726, P. No. 390).

4. *Āryatārābhaṭṭārikānāmāṣṭasāta* (D. Nos. 727, 745, 1000, P. No. 391).

5. *Tāradevināmāṣṭasāta* (D. No. 728, P. No. 392).

6. **Āryatārādhāraṇī* (D. Nos. 729, 1001, P. No. 393).

7. *Āryatārāsvapratijñādhāraṇī* (D. Nos. 730, 1002, P. No. 394).

8. *Āryatārāṣṭhaghoratāraṇīsūtra* (D. No. 731, P. No. 395).

9. *Āryāṣṭamahābhayatāraṇīdhāraṇī* (D. Nos. 541, 931, P. No. 396).

また漢訳文献としては、次のものを見ることができる。

1. 『仏説聖多羅菩薩経』(T. No. 1104).

2. 『聖多羅菩薩一百八名陀羅尼経』(T. No. 1105).

3. 『讃揚聖徳多羅菩薩一百八名経』(T. No. 1106).

4. 『聖多羅菩薩梵讃』(T. No. 1107).

5. 『聖救度仏母二十一種礼讃経』(T. No. 1108A).

6. 『救度仏母二十一種礼讃経』(T. No. 1108B).

7. 『白救度仏母讃』(T. No. 1109).

これらのテキスト情報については、頼富 1990: 650-653 を参照。

1. Nāgārjuna: *Tārāsādhana* (D. No. 1683, P. No. 2555)
2. Nāgārjuna: **Mahākāruṇīkāryatārāsādhanasāmānyābhisamaya* (D. No. 1684, P. No. 2556)
3. Nāgārjuna: *Vajratārāsādhana* (D. No. 3488, P. No. 4310)
4. Nāgārjuna: *Khadiravaṇītārāsādhana* (D. No. 3482, P. No. 4487)
5. Candragomin: **Tārābhaṭṭārikāntarabulividdhi* (D. No. 1738, P. No. 2609)
6. Candragomin: *Śrīmahātārastotra* (D. 3667, P. No. 4489)
7. Candragomin: *Āryatārastotradvādaśagāthā* (D. No. 3668, P. No. 4490)
8. Candragomin: *Āryatārastotraviśvakarmasādhana* (D. No. 3669, P. No. 4491)
9. Candragomin: *Āryatārādevīstotrapuṣpamālā* (D. No. 3670, P. No. 4492)
10. Candragomin: *Āryatārādevīstava* (D. No. 3671, P. No. 4493)
11. Candragomin: *Āryatārāṣṭabhayatrātasādhana*⁷ (D. No. 3672, P. No. 4494)
12. Mātṛceta: *Tārāstotra* (D. 3693, P. No. 4516)
13. Ratnākaraśānti: *Vajratārāsādhana* (D. No. 3490, P. No. 4312)
14. Śākhyāśrībhadrā: *Tārāsādhana* (D. No. 3696, P. No. 4519)
15. Ḍombiheruka: *Tārākurukullestotra* (D. No. 1317, P. No. 2448)
16. Sūryagupta: *Tārādevīstotraikaviṃśatikasādhana* (D. No. 1685, P. No. 2557)
17. Sūryagupta: **Tārābhaṭṭārikāsādhanasakalpaikaviṃśatikakarmasaṃkṣepa* (D. No. 1686, P. No. 2558)
18. Sūryagupta: *Tārāsādhanopadeśakrama* (D. No. 1687, P. No. 2559)
19. Sūryagupta: *Bhagavatūtārādevyekaviṃśatistotrasādhana* (D. No. 1688, P. No. 2560)
20. Sūryagupta: *Tārādevīstotraikaviṃśatikasādhana* (D. No. 1685, P. No. 2557)
21. Sūryagupta a: *Devītārāvīṃśatistotraviśuddhacūdāmaṇi* (D. No. 1689, P. No. 2561)
22. Sūryagupta: *Tārāstotra* (P. No. 2562)
23. Bhagu Paṇḍita: *Agratāraikajaṭyupadeśasādhana* (D. No. 1735, P. No. 2605)
24. *Śāśvatavajra: *Tārādevīpañcasādhana* (D. No. 1736, P. No. 2606)
25. *Śāśvatavajra: *Kāruṇīkatārāsādhana* (D. No. 1737, P. No. 2608)
26. *Śāśvatavajra: *Tārāguhyasādhana* (D. No. 1740, P. No. 2611)
27. *Śāśvatavajra: *Kāruṇīkaviśvakarmasādhana* (D. No. 1741, P. No. 2612)

⁷ 翻訳者は、Dīpaṃkaraśrījñāna と Tshul khriṃs rgyal ba である。関連文献として、同じ著者と訳者による *Aṣṭaśatasādhana* (P. No. 4488) もある。

28. *Vajrāṅkura: *Tārāsādhana* (D. No. 3336, P. No. 4157)
29. *Vajrāṅkura: *Vaśyatārāsādhana* (D. No. 3485, P. No. 4307)
30. *Anupamarakṣita: *Tārāsādhana* (D. No. 3491, P. No. 4313)
31. *Dharmākārācāryapāda: *Vajratārāsādhana* (D. No. 3489, P. No. 4311)
32. *Cintāmañirāja: *Sitatārāsādhana* (D. No. 3497, P. No. 4319)
33. *Trilakṣa: *Tārāstotra* (D. No. 3694, P. No. 4517)
34. *Vajrāṅkura: *Tārāsādhana* (D. No. 3336, P. No. 4157)
35. Vāgīśvarakīrti の一番弟子⁸: *Sitatārāsādhana* (D. No. 3673, P. No. 4495)
36. Bapabhadra: **Maṅḍalāvātārasaṃkṣiptakalpa* (D. No. 3674, P. No. 4496)
37. Bapabhadra: *Āryatārāmaṅḍalāvātārakṛityā* (D. No. 3675, P. No. 4497)
38. Bhavabhaṭṭa: *Cintāmañitārāsādhana* (D. No. 3676, P. No. 4498)
39. Bhavabhaṭṭa: *Tārādhāvanavidhi* (D. No. 3677, P. No. 4499)
40. *Mahākaruṇa: *Tārāmaṅḍalavidhi* (D. No. 3679, P. No. 4501)
41. *Paiṇḍapātika: *Tārāgraprāpti* (D. No. 3680, P. No. 4502)
42. *Sarvajñāmitra: *Aṣṭabhayatrāṇasādhana* (D. No. 3681, P. No. 4503)
43. Vāgīśvarakīrti: *Śrīsitatārāsādhana*⁹ (D. No. 3682, P. No. 4504)
44. Bhavabhaṭṭa: *Cintāmañitārāsādhana* (No. 4505)
45. Dānaśrījñāna: *Tārāsādhana* (D. 3684, No. P. 4507)
46. *Dīpaṃkarabhadra: *Āryatārādevībhāvanāvistaravidhi* (D. No. 3686, P. No. 4509)

その著者性についてはここでは論じないが、Nāgārjuna に帰されるテキストが存在することからも、この成就法の存在意義を高めようとする意図が感じられる。また仏教詩人として知られる Candragomin に帰される文献が七種収録されていることにも、その讃歌の重要性を読み取ることができる。これに、本稿で取り上げる Dīpaṃkaraśrījñāna に帰されるターラー関連文献が加えられる。

47. **Tārābhaṭṭārikāsādhana* (D. No. 3685, P. No. 4508)
48. **Aṣṭabhayatrāṇa* (D. No. 3687, P. No. 4510)
49. *Āryatārāstotra* (D. No. 3688, P. No. 4511)
50. *Āryatārāsādhana* (D. No. 3689, P. No. 4512)

⁸ Tib.: Nag gi dbang phyug grags pa'i slob ma thu bo.

⁹ 8 とは、著者と訳者が異なる。

もちろんこれら以外にも、サンスクリット文献としてのターラー成就法は知られており、『サーダナ・マラー (Sādhnamālā)』にも二十八種のターラー関連の文献が収録されている¹⁰。このような文献の多さからも、後記インド仏教においてターラー成就法が広く説かれていたことがうかがえる。

Dīpaṃkaraśrījñāna の著書におけるターラーへの言及

Dīpaṃkaraśrījñāna に帰されるターラー文献を取り上げる前に、彼の他の著作におけるターラーへの言及について見てみる。彼の主著とされる『菩提道灯論』に対する自注の『菩提道灯論細疏』は、ターラーに対する敬礼文から始まり¹¹、最初の帰敬偈にもターラーに対する敬礼が述べられている。本文では、真言乗のセクションにおけるタントラ文献の分類において「分別タントラ」の項目に *Sarvatathāgatamātanitāraviśvakarmabhavatantra* が入れられている。続いて根本偈の「軌範師の灌頂」の解説部分において、

マンダラに入ることと、灌頂と、師自身の許可を得ずに大乘經典の目的である波羅蜜道の儀軌に依ってから陀羅尼の儀軌を行うことと、尊者ターラーなどの成就法を聞かずに修習と、読誦と、護摩と、食施と、マンダラを作ることなどが、マントラを自分で領受することである¹²。

と述べられている。ここでは必要とされるべき師の許可の不在の例えとして、ターラーの成就法を欠く修習が言及されている。同じ文脈でさらに、

波羅蜜の道に入り行をなすことを望むのならば、前に述べた通りに三学処を学ぶべきであり、もしマントラを行じ、女尊ターラーなどの成就法を望むのならば、「阿闍梨の灌頂」と言う瓶の灌頂をお願いすべきである、と言うのが、偈頌の意味である¹³。

と述べられている。いずれもが「ターラー成就法」としての言及であり、敬礼や観想の対象としての女尊ターラーではなく、成就法であるターラー文献としての言及である。

¹⁰ Bhattacharyya 1925: 176-245, Nos. 89-116. このうち九十七番の *Vajratārāsādhana* については、立川 1986 に、九十九番の *Āryāṣṭamahābhayātārāsādhana* については頼富 1990: 649-650 に研究が発表されている。

¹¹ 同じ敬礼文は、*Sarvakarmāvaraṇaviśuddhikaravidhi* にも見える。

¹² 望月 2015: 151.

¹³ 望月 2015: 150.

具体的なテキスト名の言及ではないものの、その成就法が一般的なものであったことがうかがえる。

また、『中観説示開宝篋』には、

ヴァジュラーサナで右繞している時、尊者ターラーと尊者ブリクティ御前が「すぐに完成したいと望む者は菩提心に努力するべきである」と言った¹⁴。

と述べられている。これは彼がソーマプリーの森で観想していた際に、ターラーが現れたことを述べたものである。すなわち特定の成就法などを示すものではなく、観想において出現した女尊としてのターラーに対する言及である。

これらの顕教文献に対して、同じ著者の密教文献のうち、『秘密集会タントラ』の関連文献である『秘密集会世自在成就法 (*Śrīsamājalokeśvarasādhana*)』、『秘密集会讚 (*Śrīguhyasamājastotra*)』にはターラーへの言及が見られる。いずれもが同タントラに説かれる四仏母（ローチャナーとマーマキーとパーンダラーとターラー）としての言及であり¹⁵、独立した女尊としての言及ではない。

Dīpaṃkaraśrījñāna に帰されるターラー関連文献

Dīpaṃkaraśrījñāna には、『ターラー成就法 (**Tārābhaṭṭātikāsādhana*¹⁶)』、『八難救済 (**Aṣṭabhayatrāṇa*¹⁷)』、『聖ターラー讚 (*Āryatārāstotra*¹⁸)』、『聖ターラー成就法 (*Āryatārāsādhana*¹⁹)』の四つのターラー文献が存在する。いずれもが小片のテキストであり、最初のもは著者自身と dGe ba'i blo gros、第二は著者自身、第三は著者自身と Tshul khriṃs rgyal ba、第四は Buddhākaravarman と Chos kyi dpal shes rab によりチベット語に翻訳されている。最後のものだけは著者による翻訳ではなく、インドの賢者が加わっていることから、他のものと異なる伝承を経ていた可能性がある。いずれもが小片のテキストであり、最も長い第一の成就法で僅か二葉ほどである。それぞれの内容を簡単にまとめると、次のようになる。

『ターラー成就法』は、ここに取り上げるテキストの中で最も長いものである。鬼神への供物の加持、花、香、灯、塗香、食事²⁰、七宝などの供養のマントラ、懺悔、随喜、

¹⁴ 宮崎 2007: 40, 97.

¹⁵ これらのテキストの和訳については、望月 2011c を参照。

¹⁶ *sGrol ma'i sgrubs bzhugs*. D. No. 3685, Mu 315a2-317a4, P. No. 4508, Du 414b5-417b7.

¹⁷ *'Jigs pa brgyad las skyob pa bzhugs*. D. No. 3687, Mu 322b1-323a1, P. No. 4510, Du 424b2-425a5.

¹⁸ *'Phags ma sgrol ma la bstod pa*. D. No. 3688, Mu 323a1-323b2, P. No. 4511, Du 425a5-b8.

¹⁹ *'Phags ma sgrol ma'i sgrub thabs*. D. No. 3689, Mu 323b2-324b7, P. No. 4512, Du 426a1-427b5.

²⁰ 五奉献物について、立川 1986: 72.

請法輪、請仏住、廻向、帰依、四無量心の修習と菩提心を堅固にする前行がまず述べられる。続いて自性清浄のマントラを述べた後に、ターラーの観想である本行が述べられる。すなわち、aの文字、月輪、ターン字、白光線、ターラーに至る観想をなした後に、五如来の観想、四明妃の灌頂の観想が続き、百字マントラで結ばれる。

『八難救済』は、八難に関する記述は全くなく、ターラー成就法を簡潔にまとめただけのものである。すなわち、ターラーの観想による成就法として、七支の前行が述べられ、空性智のマントラが述べられる。続いてターラーの観想とそのマントラを唱えることが述べられ、観想から起きることで結ばれている。

『聖ターラー讃』は、七音節の十一偈からなるターラーを賞讃するための讃歌である。各偈においてターラーの特徴が説明され、「[ターラーに] 礼拝する」の句で結ばれる。そこで述べられるターラーの特徴は、(1) 貧困から救い出す、(2) 甘露の雨を降らす、(3) 樂を与える、(4) 存在の束縛から解放させる、(5) 収穫に雨を降らせる、(6) 闇の苦を取り除く、(7) 青緑色の威厳をもつ、(8) 悲心をもつ、(9) 幸福を輝かせる、(10) 有情のために精進する、(11) 成就者に結果をもたらすというものである。すなわち、衆生の過失を取り除き、功德をもたらすという性質のものとして讃歌が捧げられており、それ故に、信仰の対象たるものとして把握されていたと言える。

『聖ターラー成就法』の観想法は、第一の成就法を縮小したような内容ではなく、異なる成就法を述べたものである。著作意図を示す四偈、自性清浄と空性智のマントラによる空性の観想に始まり、ターラー尊の観想が述べられる。その後に、守護のための観想法が観自在のマントラとともに述べられ、偈で結ばれている。この後半部分が、最初の成就法には見られない部分である。

まとめ

これらの四種のターラー文献の性格をまとめると次のようになるであろう。最初の最も長い『ターラー成就法』は *Dīpaṃkaraśrījñāna* により著されたターラー尊の観想による成就法である。もちろん、他のターラー成就法との比較も必要であるが、彼がインドの僧院に滞在していた際に一般に行われていた内容をまとめたものと思われる。続く『八難救済』は、ターラーによる救度のための読誦用のテキストとして記憶し易いように簡略化した成就法であるように思える。第三の『聖ターラー讃』は、ターラーを歌により賞讃することで、その女尊の信仰を広めるためのものであろう。最後の『聖ターラー成就法』は、最初のものと同様のタイトルであるが、それを簡略化したような内容ではない。またその翻訳者の問題からも、著者がチベットにおいて説いたものが後代に

翻訳された可能性がある²¹。

チベットにおけるターラー尊信仰については、Dīpaṃkaraśrījñāna が大きな影響を与えたとするならば、これらのテキストが重要な役割を果たしたのであろう。信仰形態に影響を与えるものは筆記された文献だけではないことは言うまでもないが、彼のターラー尊に対する理解²²はこれらの資料からも知ることができる。もちろんチベットに与えた影響については、チベットにおけるターラー文献において彼のテキストがどのように受容されていたのかを調査する必要がある。

『ターラー成就法』和訳

尊母ターラーに敬礼する。

そこで最初にマントラによる洗顔などをなし、意に沿って禪定の場所を浄化し、好い香りを広めて清浄な座で快く足を組んで座り、一切の鬼神の供物のマントラにより供物を加持し、

oṃ āvighnānta kṛta phat

と言うマントラを十回述べ、十方にある一切の障害を追い払うべきである。

それから自分の心臓の中心に一切法の法界の自性である不生と示される秋の月のように白い光を放つことで自分の身体を明らかにするとともに輝いているものを想い、それが完成したその水晶の塊のような白光の滴を次第に広げる月の輪の形を想い、その上に tām の文字を光の集まりを放つ宝石の灯火のように白く想う。

それからその tām の文字にとともに白い光の集まりにより一切世間界を明らかにすることが先行するので、明妃であるターラーなどの仏と菩薩と師たちに請願して、導かれる前方の虚空の方向に観想すべきである。その上で意の自性の供養をなすべきであり、そして供養の次第はこうである。

oṃ vajrapuṣpe hūm²³

²¹ もちろん、インドで著されたものが後にチベットに伝わったのか、あるいはチベットで説かれたものが後に翻訳されたという可能性がある。まずは、この翻訳者の情報を調査することが必要となる。

²² 彼がターラー尊を本尊とする伝承については、彼の伝記にも記されている。Cf. Eimer, 1979, 1. Teil: 152-153.

²³ 「オーン、金剛華よ、フーム」。Beyer 1988: 159, 163, 180.

と言うマントラを述べて、**tām** の文字から生じた花の供養の集まりにより供養すべきである。

それから、

oṃ vajradhūpe hūṃ²⁴

と言うマントラを述べて、その文字 **tām** の文字自身から正しく広がる香の供養の集まりのより供養すべきである。

その後、

oṃ vajradīpe hūṃ²⁵

と言うマントラを述べて、その **tām** の文字自身から宝石の灯火が輝いたものを供養すべきである。

それから、

oṃ vajragandhe hūṃ²⁶

と言うマントラを述べて、その **tām** の文字自身から生じた香りの供養の雲を正しく広げることによって供養すべきである²⁷。

それから、

oṃ vajra naivedye hūṃ

と言うマントラを述べて、その **tām** の文字自身から種々なる宝 [に入っている²⁸] 最高の味の天の食事をともなう供養の雲の種々相を正しく広げることによって供養すべきである。

それから、

²⁴ 「オーン、金剛焼香よ、フーム」。Beyer 1988: 159, 163, 180.

²⁵ 「オーン、金剛灯よ、フーム」。Beyer 1988: 159, 163, 180.

²⁶ 「オーン、金剛塗香よ、フーム」。Beyer 1988: 159, 163, 180.

²⁷ 立川 1986: 83.

²⁸ D 欠。

om sarvaviśiṣṭapūjameghaprasarasamudra āḥ hūṃ

と言うマントラを述べて、その **tām** の文字自身から七種の宝石の傘と幢と鈴と旗と天蓋などと、転輪王の七種の宝石により供養すべきである²⁹。

そのように供養をなしてから、それらの御前で懺悔と、福德に対する随喜と、請〔法輪〕と、請願と、福德の廻向と、三帰依をなし、慈と悲と喜と捨の四梵住を修習してから菩提心を堅固にすべきである。

それから、

om svabhāvaśuddhāḥ sarvadharmāḥ svabhāvaśuddho 'ham³⁰

と言うマントラを三度述べて、一切有情を夢と幻と陽炎のように空性の自性と把握すべきである。

それから **a** の文字に完全に変わってから月の輪を想い、その上に白い **tām** の文字から密集した白い光線を想い、それによってから青い蓮華と、その中央で月輪の上に白い **tām** の文字を想い、それから白光を十方に広げるそのことにより一切衆生を浄化してから明妃ターラーの身体になったその光線自身により引きつけられ、青蓮華と **tām** の文字に浸透することで、

白蓮華の中にある月の姿の座の上で金剛跏趺坐をともなってから、薬と青蓮華を持つ。

秋の月の顔のような月に寄りかかり、一切の装飾を完全にし、十六歳の身体をもつ。

正等覚とそれに似た子とすべてのものの母になる九欲をつかみ、その聖ターラーの上を月の上の白い **tā** の文字に変わってから³¹、白光の輪を修習する。

八つの車軸を八つの文字により廻して、臍にある **om tā** の文字の中央の場所に成就される名称をもつ。

六月を堅固に確定することで、一端の心により修習し、この十文字のマントラを厭にならない心で誦すべきである。

最初に **om** を設定してから、その後に **tāre** と結合し、その後に **tāre tut tāre svāhā**

²⁹ 北村、ツルティム 1995: 6.

³⁰ 「オーン、一切法は自性清浄なれ、我も自性清浄となれ」。八田 1985: 225, no. 1807, Beyer 1988: 33.

³¹ このパーダのみ十九音節からなる。

の辺際をともなつてからすべてをなす。

胸のその輪から白光を放つことで誓願薩埵に似た知恵薩埵の自性による成就を普く招くことを前の虚空に観想してから、前のように心を浄化して供養し、それから誓願の印を結ぶべきである。掌をくぼみで合わせてから両人差し指を両中指の後ろで結び、両親指を中に入れたのが青蓮華の印契である。その中央で白い *tām* の文字を想う。それからその白光を放つことで知恵薩埵を廻し、それから *jaḥ hūṃ baṃ hoḥ* という四文字により招いてから誓願薩埵そのものを設定し、縛り、歓喜して、

*oṃ dharmadhātujñānavajrasvabhāva ātmako 'ham*³²

と慢心する。その次に輪に文字をともなつてから光を放つことをなし、五如来を前の虚空に観想し、灌頂のこの偈頌により求めるべきである。

菩提金剛による仏に最高の請願をなし、自分を守るために虚空の金剛を今自分に求める。

それからそれらの如来の身体から生じたローチャナーとマーマキーとパーンダラーとターラー³³の宝石の瓶を知恵の甘露で満ちた手で掴んで、

大金剛の灌頂をし、三界の者により礼拝され、三密の場所から生じ、すべての仏により布施される。

と唱え、灌頂を観想する。灌頂を完成した直後に宝石の冠の上に白色で一つの顔で二つの手の無量光如来が三昧の印をもつことを想う。身体と言葉と意の三つを加持するために、頭上に白い *oṃ* の文字の月輪をおき、喉にある赤い *aḥ* の文字を月輪に置き、心臓にある黒い *hūṃ* の文字を月輪に置いて飾る。十文字から白光を放つことですべての有情を浄化してから悟りを成就した後に再び引きつけられ、輪と文字を掴んで、明らかに修習し、読誦するべきである。嫌にならない限り修習し、誦してから、それからよくなることを望むならば、儀軌を損なうことを改めるべきなので、金剛薩埵の心髄である。「百文字」と言うものを唱えてから知恵薩埵を正しく供養し、福德の廻向に行くことを

³² 「オーン、私の自性は法界智という金剛そのものである」。Cf. 八田 1985: 61 no. 371, Beyer 1988: 111.

³³ 立川 1986: 86.

求める。そして知恵薩埵に行くことを求める偈は、

oṃ 汝は衆生のあらゆる利益をなす。追随する成就を求め、悟りの領域に行つてから、再び出現なされることを求め、muḥ と言うのがこれである。

それを繰り返すマントラは、

oṃ tāre tuttāre ture svāhā³⁴

で、そして金剛薩埵の心髄である百文字のマントラは、

oṃ vajrasatva samayam anupālaya vajra-satvatvenopatiṣṭha dṛḍho me bhava sutoṣyo me bhava supoṣyo me bhavānurakto me bhava sarvasiddhiṃ me prayaccha sarvakarmasu ca me cittamaśreyaḥ kuru hūṃ ha ha ha ha ho bhagavan sarvatathāgata vajra mā me muñca vajrībhava mahāsamaya-satva āḥ³⁵

と言うこれである。

この福德により一切有情が尊者ターラーに似ますように。私もこの三昧を成就してから有情利益を悟りますように。

『ターラー成就法』[と言う]偉大な軌範師ディーパンカラシュリージュニャーナによる著作を完成する。

インドの賢者であるディーパンカラシュリージュニャーナとチベットの翻訳官である比丘のゲウェ・ロドゥが翻訳、校訂し、決定した。

『八難救済』和訳

³⁴ 八田 1985: 53, no. 315.

³⁵ 「オーン、金剛薩埵の三昧耶に、保護者となれ、金剛薩埵の強い力を出現せよ、堅固性は我がためにあれ、我がために喜ばしいものであれ、我がために栄えるものであれ、而して一切の成就を我に授与せよ、一切業において、而して我がために心の吉祥をなし給え、フーム、ハ、ハ、ハ、ハ、ホー、世尊、一切如来、金剛よ、我がために捨て去ることなかれ、金剛を有するものであれ、大三昧の薩埵よ、アーハ」。八田 1985: 168, no. 1338.

世尊母ターラーに礼拝する。

瑜伽行者の自在天の禪定の僧房に入り、楽座に座り、大悲により「一切有情を起こすべきである」と誓願してから、天女ターラーを修習すべきである。それもこの次第の通りになる。

瑜伽師は、自分の心臓にある **a** から月輪の上に **tām** の文字を想い、それから鉤に似た光を放つことで天女と自分の師と正等覚者たちを眼前の空間に明らかに見て、それに礼拝し、懺悔し、三帰依し、善根を廻向し、身体を捧げ、誓願をなすことを行い、それから勝義において自分と天などは自性がなく、始めより生じることがないと観想し、それを堅固にするために、

oṃ sūnyatā jñānavajrasvabhāva ātmako 'haṃ³⁶

とすることで空性を修習する。

それから **baṃ** から蓮華の八葉の中央に自分の心そのものの前の誓願により **tām** の文字から天女ターラーを生じさせるべきである。さらにまた、緑色で一つの顔で二本の手で、右手は最高の布施の印であり、左は青蓮華をつかみ、不空成就の冠をもち、結跏趺坐であり、嫌にならない限り修習し、過失を唱えることに入るべきである。

oṃ tāre tuttāre tu re svāhā

と言うマントラの鬘を自分の心臓から出し、また自分のお口に入っても自分の口から生じる次第でマントラの白色をゆっくり廻すことを観想し、誦すべきである。誦することでも過失を供養し、供物を撒き、誓願して、天女の慢心により一切の行道にとどまるべきである。寝る時は空性に入って寝るべきである。また起きる時は、刹那に天女の意識を失うことで³⁷起きるべきである。

『八難救済』[と言う]軌範師である賢者ディーパンカラシュリージュニャーナによる著作を完成する。

³⁶ 「オーン、私の自性は空性智という金剛そのものである」。Cf. 立川 1986: 73, Beyer 1988: 33.

³⁷ Tib. *lha mo'i brgyal gyis*. ただし P は欠く。

『聖ターラー讚』和訳

インドの言葉で、*Āryatārāstotra*、
チベットの言葉で、『聖ターラー讚』
尊者聖母ターラーに礼拝する。

天と阿修羅の冠により御足の蓮華に礼拝し、すべての貧困から救い出し、ターラーに礼拝する³⁸。

燃え上がる網で満たされた無間地獄の火により焼かれる者に対して悲心による甘露の雨を降らせるターラーにも礼拝する。

六趣の場所に長い間何度も転生することで疲れた者たちに大楽の最高の楽の休息をさせる。

利他をなす天女、あなたは、念のみにより貧しさを取り除く方であり、悲心をもつあなたは存在の束縛から解放させる。

常時、衆生に対して空間の通りに等しい天女、有情の一切の収穫に雨を続けて降らせるあなたに礼拝する。

日月のように行く一切衆生の闇の苦しみを取り除く最高の天女に礼拝する。

蓮華と月と青蓮華に対して、そのように無垢なる座の上で青緑色で威厳をもち、青蓮華をつかむ方に礼拝する。

三阿僧祇劫における資糧をあつめ、中断させるすべての障害を捨ててから、四摂事により有情をまとめる悲心をもつ方に礼拝する。

身体の過失は捨てられ、相と種好をもち、言葉の過失を捨てられ、カラビンカの響きで、心の過失は捨てられ、所知の辺際を知り、吉祥なる幸福を輝かせる方に礼拝する。

例えば、宝石と宝のように、天女よ、あなたは常に有情の心の汚れを取り除き、有情のために努力する方に礼拝する。

あなたの特徴を把握し、賞讃し、成就した者たちに常に結果が存在するようにさせ、忘れないあなたに礼拝する。

『聖ターラー讚』[と言う] ディーパンカラシュリージュニャーナにより著されたものを完成する。

インドのその賢者自身とチベットの翻訳官のツルティム・ゲルワが翻訳した。

³⁸ Cf. Beyer 1988: 201-202, 田中 2001: 179-180.

『聖ターラー成就法』和訳

インドの言葉で、*Āryatārāsādhana*

チベットの言葉で、『聖ターラー成就法』

聖母ターラーに敬礼する。

三世の尊母となった大きな眼のターラーの御足の蓮華に敬意をなしてから、長い間師に頼ってから来るいずれかの成就法の儀軌をあつめたものが解説される。

いずれかの適切な好ましい場所である花とよい香りと草の絨毯で、香により楽しんでからその中央のよい座で楽しみ、

存在の楽しみを完全に捨て、瑜伽行を持つ者が近くに座してから、心臓の種子から生じた光の集まりにより師と、

仏と菩薩を招いて自分の前で供養により正しく供養をしてから三宝などを随念すべきである。

oṃ svabhāvaśuddhaḥ sarvadharmāḥ svabhāvaśuddho 'haṃ /

oṃ śūnyatā jñānavajrasvabhāva ātmako 'haṃ /

それから堅固なものど動くものとのすべてを空性と観想する。

それから paṃ から生じた大量の蓮華の中央で完成した月輪に緑の tāṃ の文字を観想して、それに変化してから自身の本尊である一面で二本の手の緑ターラーが右で供施し、左で青蓮華をつかみ、一切の装飾により飾り、十六年経ったように耐え難い威光をもち、微笑した顔をもち、髪を集まりを縛り、月の光をもち、金剛の結跏趺坐により月輪を支配し、若い蓮華の花びらのような眼で、微笑した面前で見られる硬い乳房の輪をもつ聖母ターラーを観想する。

それから自分の心臓の tā から光が生じることにより尊母に正しくお願いし、種子から生じた供養により正しく供養してから青蓮華の印により自分の身体を貫通させるべきである。

それから場所の通りに毘盧遮那などを観想し、如来が灌頂することを求めて、自分の冠を語金剛により封印すべきである。その後自分の心臓に月輪の tāṃ の文字などを整えるべきであり、広げることとまとめることとの次第により修習すべきである。

いつであれ厭になった際には、

oṃ tāre tut tare ture svāhā

と言うマントラを誦す。

それからいつであれ起きようとする際に、自分の心臓にある種子から光を放ち、それが一切衆生に当たって、再び光を放つことでそれらの心臓に入るのを見て、そのものにより彼ら一切が天母の身体になることをさらに信解すべきである。

それから再び種子から生じた光が甘露の自性の供物の器を完全に満たし、

oṃ akāro mukhaṃ sarvadharmāṇāṃ ādhyanutpannatvāt oṃ āḥ hūṃ phaṭ svāhā³⁹

と言うことで加持をお願いし、それから知恵薩埵が前にいることを把握することで百文字を誦してから、上手く供養する。すなわち明らかに望む成就を請願し、

oṃ tāre tut tāre ture muḥ

と言うことで行くことをお願いする。この順序で四座を修習すれば速やかに成就を得るであろう。

今度は、守護の修行を僅かに解説するべきで、前に解説した在り方による根本の百万のマントラを誦し、ターラーの三昧にいる瑜伽行者は前の誦する儀軌の通りのものより特殊な成就させる名称がマントラの中央にあることを観想し、誦することを望む限りはなすべきである。

それから種子の文字から光が生じるので成就すべき一切の身体に差異を見て、それにより身体を明らかに満足するようになり、一切の損害を離れることを信解すべきである。これが寂滅の守護である⁴⁰。

それから反対に退ける守護を解説する。前の儀軌をもつ瑜伽行者により自分の心臓に緑の *tām* の光線の列が混ざり合うことを観想し、それから生じた光線の集まりが輝くことで危険な裸の身体で髪が抜けて悪寒がし、救護を離れた心臓に入ることで、それが無力にされ、抑圧され、邪魔され、束縛されることを観想する。いつであれそのような三昧により厭になる場合は、種子の文字を把握することでマントラを誦すべきであり、

³⁹ 「オーム、ア字門よ、一切法の本来無生なるものよ、オーン、アーハ、フォーム、スヴァーハー」。八田 1985: 4, no. 7, Beyer 1988: 146, 220.

⁴⁰ Beyer 1988: 280 に英訳あり。

namaḥ āryāvalokiteśvarāya bodhisatvāya mahāsatvāya mahākāruṇikāya tadyathā oṃ
tāre tuttāre ture sarvaduṣṭāna / praduṣṭāna / mamakṛte jaṃbhaya / staṃbhaya / mohaya
/ bandhaya / hūṃ hūṃ hūṃ / phaṭ phaṭ phaṭ / sarvaduṣṭān staṃbhanitāre svāhā⁴¹

これらの守護も四座で修習すべきである。

そのように道を行けば三昧をもつので、束縛を捨ててからマントラの記憶をともなつて行けば、盗賊と虎と熊とハイエナと蛇と森の鹿と水の中で行じるもの⁴²により打ち砕かれることはありえず、いかなる時であれ恐怖を離れるならば、束縛を再び解放すべきである。そのように、

長い間師を頼ってから獲得した成就のこの儀軌をよく述べることで、「ターラー」と知られる子をともなっている場所である吉祥なる港に行く者たちは速やかに行きなさい。

『聖ターラー成就法』[と言う] ディーパンカラシュリージュニャーナによる著作を完成する。

インドの賢者ブツダカーラヴァルマンとチベットの翻訳官の比丘チューキ・シェーラプが翻訳し、校訂し、決定した。

⁴¹ 「聖観自在菩薩摩訶薩である大悲者に敬礼する。オン、ターレー、トゥッターレー、トゥレー、一切の悪い者たちを私のために打ち負かし、押しとどめ、混乱させ、繋げ。フーン、フーン、フーン、パット、パット、パット、すべての悪人を押しとどめる者よ、ターレ、スヴァーハー」。Cf. Beyer 1988: 332, 立川 1986: 91.

⁴² Tib.: chu la spyod pa.

第3章 『金剛座金剛歌』

はじめに

Dīpaṃkaraśrījñāna のテンギュルの中観部に『輪廻出離歌』と『行歌』と『法界見歌』が収録されており、そのうち『行歌』とその注釈書が秘密疏部にも収録されていることについてはすでに論じているが、ここでは秘密疏部に収録されているもう一つの歌文献である『金剛座金剛歌 (*Vajrasānavajragīti*¹)』とについて考察する。同論は『行歌』と密接な関係にあり、いずれもが注釈書をとまなっており、この二つの論書の間を明らかにする。

テキストについて

本テキストは、翻者不明のチベット語訳のみが伝わっている。そのスタイルは、全百四パーダからなる偈頌の形態で翻訳されている。韻律に関しては、一パーダ九音節からなるものの、9, 48, 51, 55-57, 60, 62-64, 72-74, 76-77, 83-87 の二十パーダは十一音節からなる²。それは全体の二割弱にあたるものの、それらは不特定な場所に現れていることから、これらの偈は四パーダで一偈を構成するような形では翻訳されていない。したがって、韻律を統一して翻訳しようという意図が見られないだけでなく、翻訳者は *gīti* の韻律スタイルを全く認識していなかった可能性がある。そのサンスクリットがどのような韻律であったのかは、それが筆記されたテキストとして存在していたのかも含め明らかではないが、翻訳者は韻律に厳しくなかった可能性がある。

また、本テキストには同じ著者による注釈書『金剛座金剛歌釈 (*Vajrasānavajragīti-vṛtti*³)』がある。この注釈書とともに収録されているテンギュルの「秘密疏部」では、前述の『行歌』とその注釈が並んで収録されている。これらのテキストの関係については、『行歌釈』の冒頭に、

ここでも真実の見解の二種に関して、『金剛歌』により光明と滅諦と勝義諦を主に説いてから、『行歌』により我の加持と道諦と世俗諦が説かれるので、「影像に似ているもの」などと言うものに対して、ここに智慧の眼により見られるべき対

¹ Tib.: *rDo rje gdan gyi rdo rje'i glu*, Tib. C. Zha 209a3-210b1, D. No.1494, Zha 208a3-2091, G. Pa 2801-281b4, N. No.209, Pa 222a7-224a3, P. No.2209, Pa 210b3-212a5.

² ただし最後の第百四パーダは、八音節である。サンスクリットの長音があるので、それを数えるべきだろう。

³ Tib.: *rDo rje gdan gyi rdo rje'i glu'i 'grel pa*. Dīpaṃkaraśrījñāna, Tshul khriims rgyal ba 訳. Tib. C. Zha 210b1-216a4, D. No.1495, Zha 209b1-215a5, G. Pa 282a1-290a4, N. No.210, Pa 224a3-231a4, P. No.2210, Pa 212b3-218b7.

境は、二つである。無と有の自性である。無は、そうではないのにそこに顕現することで、例えば眼翳者の認識のようなものである⁴。

と述べられている。この注釈書がどの時点で著されたのかは明らかではないが、少なくとも『金剛座金剛歌』のテキストの存在を念頭において著されており、その注釈者は『行歌』と『金剛歌』がお互いで一セットとなる文献であるとする。すなわち、前者は「道諦と世俗諦」を説くものであり、後者は「光明と滅諦と勝義諦」を説くものである。その説かれる内容は、前者は世俗的な世界において悟りに向かうための行を簡単にまとめたものであるのに対して、後者は勝義諦を得るために光明により滅すべきものを説いたものである。前者は顕教の教えに基づいているのに対し、後者は密教の教えに基づいている。

本歌に関する情報としては、そのコロフォンには著者ならびに翻訳者の情報はないが、次のように記されている：

偉大な賢者 *Dīpaṃkaraśrījñāna* が事物の意味により見られる通りに他者に説くために、持金剛の場所に座られた時に隠処の麓であるニェタンのタシペルの大草原で『金剛歌』を受けたものを完成する⁵。

また注釈書のコロフォンには、

金剛歌の意味を明らかにする偉大な賢者 *Dīpaṃkaraśrījñāna* による著作を完成する。そのパンディタ自身と比丘 *Tshul khriṃs rgyal ba* が翻訳して、確定した⁶。

とある。これらの情報から、『金剛座金剛歌』はディーパンカラシュリージュニャーナに帰される著書と考えられる。また前者の情報から、このテキストは、彼がチベットに入った後、ニェタンに滞在している際に草原で歌ったものとなる。

『金剛座金剛歌』の概要

本歌は、前述のような翻訳の問題点もあり、その全体を構成する偈頌を分類する際に、困難をとまなう。そこで、同じ著者による注釈書に基づいて、『金剛座金剛歌』の構成

⁴ P. No. 2212, Pa 220b2-5.

⁵ P. No. 2209, Pa 212a4-5. 望月 2008a: 167, 183.

⁶ P. No. 2210, Pa 218b6-7. 望月 2008a: 178.

を見てみると次のようになる：

- 1-4 敬礼
- 5-6 概略
- 9-12 四種の喩例：美しい女性、川、菩提樹、金剛
- 13-17 無上三昧の道：無自性、無我
- 18-22 瑜伽の特徴と利益
- 27-32 無上菩提への道：願心と自性の修習
- 33-36 智慧の眼による対象
- 37-40 考察された瑜伽の排除
- 41-51 瑜伽の心髄：大楽
- 52-56 欲楽への執着による束縛
- 57-64 解脱の原因：自性の認識、迷乱の断絶
- 65-71 空性を堅固にすること：無分別三昧
- 72-80 確実な浄化：光明の修習
- 81-86 菩提の願心と悲心
- 87-90 不二（悲心と智慧、界と明）の修習
- 91-92 悲心により利他
- 93-104 二諦の在り方：shrī 不二智、he 空、ru 勝義、ka 有無の非存在

全体の内容については、

この身体を考えることは煩悩であり、それと同じ所作をすべて捨ててから、それにより有情はすべて自性により清浄になり、吉祥をそなえた金剛座において仏になるであろう。[5-8]

と簡単にまとめられている。すなわち、煩悩を捨てることなどにより身体を浄化して、金剛座において菩提を得ることになる。その具体的方法として、瑜伽による観想を行い、双入次第から光明による楽現観次第に至る過程が喩例とともに述べられている。風や中央脈管などの術語もでてくるものの、より詳細な瑜伽のシステムに関する言及はない。あくまでも、本歌は瑜伽の解説書というよりも、その観想の在り方をそれらの喩例とともに示した著書である。

また、本歌の末尾には、

shri の文字は不二智であり、有情を区別せずに示すものであり、心を惑わす論書を完全に捨てて、勝義の吉祥なるへールカになるものである。[93-96]

無因などからの生という愚痴を滅し、空であることをこの he の文字で示した。思考を離れた勝義たるものにより死を捨てることをこの ru の文字で示した。[97-100]

有と無はどこにも存在せず、存在と涅槃もないことをこの ka の文字で示した。このように四つにより説かれた意味は如何なるものも勝義の吉祥なるへールカである。[101-104]

と説かれている。このことから、本論がへールカ神およびそれに関連するタントラと関係があることがわかる。

まとめ

今回は、Dīpaṃkaraśrījñāna に帰される gīti 文献のうち、「秘密疏部」のみに収録されている『金剛座金剛歌』の内容を紹介した。そこで明らかになったことをまとめると、次のようになる。

- 1 テキストは偈頌で書かれているが、その韻律は一定していない。
- 2 執筆時期は、著者がチベットに入り、ニェタンに滞在していた時である。
- 3 内容は真言乗のタントラに基づく観想を簡単にまとめたものである。
- 4 同じ著者の『行歌』と対になるテキストである。

本論は、真言乗の立場で著された著書であるが、その思想背景の根拠になった文献については十分に明らかではない。諸タントラ文献を確認することで、それらを明らかにすることにより、Dīpaṃkaraśrījñāna のタントラ理解を解明することが今後の課題となる。

『金剛座金剛歌』和訳

インドの言葉で、*Vajrāsanavajragīti*

チベットの言葉で、『金剛座金剛歌』

マンジュシュリー童子に敬礼する。

吉祥をそなえる金剛座にのぼられた仏と師である金剛持そのものの我性をもち、甚深なる意味をもつこの歌を説かれ、功德をすべて完全にしたその人に敬礼する。[1-4]

この身体を考えることは煩悩であり、それに似た所作をすべて捨ててから、それにより有情はすべて自性が清浄になり、吉祥をそなえた金剛座において仏になるであろう。

[5-8]

美しい女性がサフランを持って来た後にすぐに成就したので、ナイランジャンナー川岸で楽に入の者が集まり、菩提樹の根本にある金剛座に座ってから、金剛の喩例をなす三昧に住し、無上なる三昧によるこの道により、おお、四魔の大きな恐怖となるものに打ち勝った。[9-14]

色を捨てずに同時に明らかにすることで、自性と無我たる母にまとめてから、事物は存在しないことを好むことが自分の王妃である。執着がなく寂静により煩悩がない者は、生と死と存在の迷乱を捨てて、迷乱がなく大楽と取って捨てなさい。[15-20]

そこには色彩と形と量もなく、所作がなく、欲がなく、生がなく、慢心がない。無我たるものを考えることに入れば、自他の区別をすべて見ない。[21-24]

行くことも、来ることも、とどまることもなく、虚空の本質は真実の通りである。瑜伽に耐えて最高のものをすべて楽しむ。それを「無我の王妃」と私は言う。[25-28]

無執着と慈愛と悲心から生じた菩提の願心をよく堅固にする。自性により修習の意はどこに存在しようか。この真実が無上菩提の道である。[29-32]

眼翳者は虚空に声を見ると言う。眼翳者と一切の有情には殊勝はなく、ああ、生じることなく、存在することのないすべての有情は真実として魔術の通りに確かに正しく顕現する。[33-36]

考察された戯論により起こされたものに執着せず、無上菩提の道にそれは成立しない。種々なる考察とは別の束縛は存在せず、それより生死の輪廻は異ならない。[37-40]

瑜伽を行く者に対して私は心髄を説く。分別が動くので何も見ず、分別は異ならず、愚痴は異ならず、執着と恐怖と忿怒とそれは異ならない。[41-44]

何と何が考察されるということは、虚妄で顛倒したものである。確実に考察されるのならば、大楽と認められる。このような三昧を大楽と言う。[45-47]

生と死の恐怖によりどこにも害は存在しない。家畜が陽炎を水と見て走っても、疲労により死んでしまい、何も楽を得ることはない。ああ、そうである。意の家畜は楽なる水を求めている。[48-51]

対境の陽炎に対しては走らず、対境の陽炎はどこにも楽なる水はない。真実の存在を知らず、何かを求めて走るのである。村で享受を楽しむことを求める畜生で、その畜生は髪の毛でしっかりと縛られている。[52-56]

何らかのものの本質を知ること、どこにも有情は存在しないが、三昧を楽しむことで不可思議を広げる。[57-58]

どこであれ意の驚が依存する木には、楽の華と葉が生じることはない。確実に意により驚を縛り、なくしたならば、揺らぎと変化によりうまくないことをして何らかのものが成立する。[59-62]

何時であれ意の驚を縛ってから解脱するので、多くの肉と血を飲食することで空腹はない。[63-64]

二と見る方向を制圧することにより、汝は、何らかのものによりどこにも努力をすることはなく、空性を堅固にすることにより迷乱を捨てて、存在しない。[65-67]

迷乱により束縛を捨てようとするな。何らかの生じたものを確実に見て、無分別の三昧によりそれを明らかにし、分別という大きな垢をすべて洗いなさい。[68-71]

虚空の華に似た事物を等しく考察する。確実に浄化して習気を離れることで瑜伽は見えず、虚空の華を蜜蜂が吸うのを見るのと同じである。[72-74]

それにより浄化を誓願して行を清浄にすることは、世間の戯論にあるものと矛盾する。虚空の華を蜜蜂が吸うのに似て、自分を他所に見る迷乱を屈服させ、世間の戯論を金剛が倒してから恐怖の認識と羞恥心は、アヴァドゥーティパが捨てている。[75-80]

菩提を願うことと悲心をもつ二つにより、この確かな浄化においてすべてが集まるであろう。師の勅言たるものは宝として顕現するが、他者のその宝からは楽は何も生じない。その師の概説書がないものからは結果は生じない。汚れた布に紅を塗るようなものである。[81-86]

瑜伽を損なわずに領受すれば、瑜伽になるので、少女は他に集めたものにより喜びを起こす。何らかのものにより存在の大海から救い出す師の聖教より優れたものは他に何もない。悲心により利他に弟子が入るが、サフランを取る乞食者より得難くはない。[87-92]

shri の文字は不二智であり、有情を区別せずに示すものである。心を惑わす論書を完全に捨てて、勝義の吉祥なるへールカになるものである。[93-96]

無因などからの生という愚痴を滅し、空であることをこの he の文字で示した。思考を離れた勝義たるものにより死を捨てることをこの ru の文字で示した。[97-100]

有と無はどこにも存在せず、存在と涅槃もないことをこの ka の文字で示した。このように四つにより説かれた意味は如何なるものも勝義の吉祥なるへールカである。[101-104]

偉大な賢者ディーパンカラシュリージュニャーナが事物の意味により見られる通りに他者に説くために、持金剛の場所に座られた時に隠処の麓であるニュエタンのタシペルの大草原で『金剛歌』を受けたものを完成する。

『金剛座金剛歌釈』和訳

インドの言葉で、*Vajrasānavajragūivṛtti*
チベットの言葉で、『金剛座金剛歌釈』
マンジュシュリー法王子に敬礼する。

生などの波が纏わりつくことと存在の苦を取り除き、慈悲により如意宝のように希望を満たす尊者ターラーに敬礼する。

水の中の月のように、九つの舞踏の害をもって、師の最高である吉祥なるヘールカを勇者の王は常に守護しなさい。

迷乱を廻ることに耐えられずに常に輪廻し、眼を離れた誤った道を有益にするために、甚深なる了義を継承した次第を師の聖教のように書くべきである。

吉祥をそなえる金剛座にのぼられた仏と [1]

などにより供養を述べている。その対境に二つ。三宝とその原因たる師である。それから仏説による道という最高の法宝と所依たる最高の僧宝という力により知るべきである。それは因果と所依の自性であるから、その頼りになるものが師であるから、それ故に、

師である金剛持そのものの我性もち [2]

と言う。自性には相違がなく、その原因であるから。

甚深なる意味をもつこの歌を説かれ、功德をすべて完全にした [3-4]

と言う。俱生の意味を明らかにするそれが大海のように深く、その意味を容易に示すので「歌」である。「功德をすべて完全にした」とは、師の功德の解説を残らず完成し、それを本質により仏の功德を完成するのでそのように言われる。それ故に、正しいものであり、それに対する供養を述べている。

今度は、本論を解説するために、

この身体を考えること [5]

などと説かれている。それには退と入に関する二あり。身体を渴かし、心の煩悩の原因である異教徒の禁行で、五火の所依などである。この法よりもこのなすべきことでそれに似た所作が浄化する十二の功德などである。さらにまた三昧に対立する一切のものである。そのような過度の所作を捨てた後の入は、俱生の光明のその本質をよく示し、領受したならば、

それにより有情はすべて自性により清浄になり、吉祥をそなえた金剛座において仏になるであろう。[7-8]

と言う。そのうち清浄に二あり。自性による浄化は一切有情に共通であり、智慧と悲心によりよく浄化することが垢を浄化する位である。真中の語によるものは無垢の浄化である。

入と退の語義をまとめて説いてから、今度は喩例の門から詳しく説くために、

美しい女性 [9]

などと説かれている。それに四つの喩がある。すなわち、美しい女性と川と菩提樹と金剛である。そのうち最初の喩例は、示されるものと示すものの記号の喩例である。第二のものは、川のように相続が中断せず、二辺に住さない喩例である。第三のものは、浄化による光明の喩例である。第四のものは、功德の喩例である。

美しい女性がサフランを持って来てからすぐに成就するので [9]

と言い、表示する記号の無我たる母に関して、女性は身体である。美しいとは、清浄で、心である。その三つの功德を持っている。持ってくるとは、隠処などにである。そこで成就することが「すぐに成就する」と言われる。「ので」とは、そのように成就したので、「俱生の光明を領受する」と言われる。どのように領受されるのかは後で解説される。表示されるその無我たる母が美しい女性であり、光明で俱生である。持つとは、無漏の功德を持つのである。そのようにその両者の双入を正しく成就させるので、結果である「大印契を得る」と言われる。第二の喩例は、

ナイランジャナー川岸で楽に入るので集まった。[10]

と言われ、ナイランジャナーに二法あり。相続が中断しないことと、兩岸から流れ落ちないことである。そのように瑜伽行者は、喩例により示す意味を不断の相続と常と断の二辺に落ちないことと把握すべきである。その難しい道により入らないので、「楽に入る」と言われる。集まったものに二つある。金剛と蓮華と界と論理をまとめた在り方により成立するものである。第三の喩例に関しては、

菩提樹の根本にある金剛座に座ってから、[11]

と言い、菩提樹に五法あり。根と幹と葉と花と実である。そのように瑜伽行者も根に似た智慧と、幹に似た信と、葉に似た精進と、花に似た憶念と、実に似た三昧により成就する。そのようなその瑜伽行者はどこにいても、「金剛座に座る」と言われる。第四の喩例の意味を示すために、

金剛の喩例をなす三昧に住する。[12]

などと言い、金剛に二法あり。壊れないことと分けることである。そのように瑜伽行者も、五根をもつ門から煩惱と智慧と定が三障により壊されず、間を分ける在り方により成立する。

無上なる三昧によるこの道により、[13]

とは、俱生の光明の五根に関するこの道による。「おお」と叫んで、説かれている。

四魔の大きな恐怖たるものに打ち勝った。[14]

とは、俱生の光明が生じる力により業と煩惱による生などのその魔とその入を虚空を浄化する側のように見ることによる。

今度は、最初の喩例の示される対象の無我たる母を詳しく解説するために、

色を捨てずに、[15]

などと言い、rūpa とは色と自性の二つに入ってから svā の縁を引いた際に、svā が rūpa であり、心の光明は無我である。

捨てずに同時に明らかにすることで [15]

とは、そのような無我たる母と明は二として存在しないことを明らかにする。

自性と無我 [16]

などの二語は理解しやすい。特徴と利益を示すために、

執着がなく寂静により煩悩がない者は、 [18]

と言い、執着がないとは世間の百六の心である。寂静によるとは、それらが生じ働くことを断じることである。煩悩がないとは特徴だけであり、三障を離れる知恵が光明たるものにより生と死の存在の迷乱を断じる。断じるだけなのかと言えば、迷乱のない無漏の功德を残らず受けるので、

迷乱を大楽と取って捨てなさい。 [20]

と言う。その特徴を詳しく説くために、

それには色彩と形態と量もない。 [21]

などと言い、ここでの意味はこうである。示すことをなす無我たる母の業の印契に関して、色彩と形態はよい眼の長などと粗細の同量と、所作である三昧耶の六輪と、楽を明らかに求め、それに依ってから楽なる心の生起が生じ、そのマントラと法などの慢心がある者に依ってから心と風に中央脈管の十箇所を楽心を与えることで堅固にしてから、示される無我母の光明を修習することによるその特徴が、色彩がない特徴などの九つである。色彩がなく、形態がなく、量がなく、所作がなく、欲がなく、生がなく、我慢がなく、去来がなく、自他がない特徴をもっている。そのような特徴をもつそれと種々なる心がなくなる喩例が、

虚空の本質は真実の通りである。[26]

と説かれており、虚空を浄化する輪のように顕現する。それは何の対境なのかと言えば、

瑜伽に耐えて最高のものをすべて楽しむ。[27]

などと言い、瑜伽に耐えることで仏の子である正しい師に師事して資糧を集めた幸運な者たちは智慧の眼により対象を見て、四根による確実な在り方により楽しむ。それ故に、

それは王妃の無我 [28]

と言われる。そのような自性である無我を喜び楽しむことで、業と煩惱の生などを根本から断じており、自性による滅を明らかにする原因であっても、しかも慈愛と悲心による聖者の菩提心により自らの相続における無漏の功德をすべて完成することなく、衆生を成熟させず、仏国土を浄化しない間は、真実の辺際を明らかにすれば声聞と独覺に落ちるので、それ故に、その忍をそなえたままで善法の辺際を完成させる目的を示すために、

無執着と慈愛と悲心から菩提の願心をよく堅固にする。[29-30]

と述べ、無執着とは、幻術師のように自性を知ることにより執着しないことである。慈愛と悲心による聖者の菩提心は理解しやすい。そして、ここでは次第は、こうである。瑜伽行者が最初に臥座から起きてから、無始より意の自性の身体に我と我所は成立しないようにそこに考察されるものにより考察を見ることで考察の相続に苦の火を燃やすものを見て、生の相続に数はないので衆生がこの一人であっても母のようになす数を断じないことで輪廻の辺際に住する有情たち引き出そうと思うことにより最初に慈愛と悲心を心に思うべきである。それからそれらのために吉祥なるへールカを求める願の菩提心を堅固にすべきである。それから一切法は心と風の変化であるから、心とは異なる目的はないと思い、風と心のみを天の身体とすることが自身を加持する世俗諦である。それから前の楽と念の方便により心と風を中央脈管に入れ、大空の楽なる三昧をもつことを修習すべきである。それから心の自性に入ることを考えて、その際にその特徴である光明が顕現することはない。虚空の輪のように智慧の眼により見て、念により散乱せ

ずに見て、信により信解をなすことを見て、精進により世間の心を無にすることを見て、三昧により一点の在り方により見ることで心の自性であるその無顕現の光明で、その清浄で清らかな明りに依ってから確実な識が生じる。念により散乱せずに見る喩例は、白芥子を積重ねて手に渡した人の如くである。信による信解の喩例は、少女が望むものを領受する如くである。精進の喩例は、王の門を守るようである。三昧の喩例は、風の無い灯火のように見られる。智慧の確定の喩例は、以前に慣れた人を見る如くである。これらの喩例の寓話は、テキストが大きくなる恐れから記さない。そのように心が存在しうる限り存在し、それからその信において刹那による幻のような身体として起き、一切の事物を水月のように増減を離れた顕現のみの特徴として考え、慈愛と悲心と菩提心により聖者の一切の善法を水月のように増減を離れた在り方により完全にすべきである。そのようならば、方便と智慧、悲心と智慧を区別しない在り方により一切の善法を完成させるべきである。そのようでなければ、声聞などに落ちる。それ故に、

方便と智慧を離れることで声聞性に落ちる。

と述べられているから。そのうち方便とは何か、と言え、菩提心を投げてから一切の善法を完成し、衆生を成熟させ、仏国土を浄化することである。智慧は何か、と言え、その執着と戯論を断じることである。それ故に、その方便がなければその智慧は生じないから。そのように他の大乘経典にも、

方便により一切の善法を集めており、智慧により区別する。

と詳しく説かれている。そのような瑜伽行者は二辺に住することなく行くので、それ故に、

自性により修習の意はどこに存在しようか。この真実が無上菩提の道である。 [31-32]

と言う。

今度は、智慧の眼により見解の他の対象を説くために、

眼翳者は虚空に声を見ると言う。 [33]

などと言ひ、それにより見られる対境に二つ。無と有である。無を見ることは、こちら側で見る能知と所知のすべてであり、無を見ることは、例えば、眼翳者の髪などと同じと知られる。有の自性を見ることに二つ。所依たる光明と能依たる無漏の功德を見ることである。光明をどのように見るのか、と言へば、不生と無相と見るので、それ故に、

生じることなく、存在することのないすべての有情は真実として、[35]

と言われる。無漏の功德をどのように見るのかと言へば、幻と夢と魔術と水月のように増損を離れた顕現のみを領受するだけで自性として見るのである。それ故に、

魔術の通りに確かに正しく顕現する。[36]

と言われる。

今度は、続いて起る考察された瑜伽を否定するために、

考察された戯論により起こされたものに執着せず、[37]

と言ひ、考察された戯論は精液と極微などである。執着しないとは、それに依ってから心にある極微は存在していても、道の特徴が不完全なことによつても菩提の道ではないので否定される。それ自身は輪廻の迷乱を輪廻することを断じる道ではないので、輪廻の原因を示すために、

種々なる考察とは別の束縛は存在せず、それより生死の輪廻は異ならない。

[39-40]

と言ってから、存在の迷乱である輪廻を断じる特徴をもたない方便を修習していても、迷乱を輪廻すること自身を断じていないので捨てるべきである。了義を修習する瑜伽を教授することを説くために、

瑜伽を行く者に対して私は心髓を説く。[41]

などと言われ、誰に教授し、何を教授し、どのような在り方で教授するかである。瑜伽行者と心髓の意味と念を教授するのである。誰に対して教授するのかと言へば、瑜伽行

者たちである。何を教授するのか、と言え、心髄であり、光明である。どのように教授するのか、と言え、念などである。分別が動くとは世間の心である。見ないとは、随行せずに教授することである。それは何故か、と言え、何が輪廻するか、と言え、心であり、何により輪廻するか、と言え、風により、どのような在り方で輪廻するのか、と言え、世間の心により昼夜にわたり種々なる習気を置くことにより輪廻する。それ故に、輪廻する分別は異ならず、迷乱をなす無明と異ならない。では何か、と言え、心と風である。世間の心の解説は、「貪瞋」などと言うもので、理解しやすい。智慧を教授することは、

何と何が考察される [45]

などと言い、心と風の迷乱に依ってから、世間の心は何と何が生じるかを智慧により考察すれば、虚空と顛倒と考察され、心髄の意味を確実に考察すれば、大樂である。それ故に、

このような三昧を大樂と言う。[47]

と言い、光明における五根に関してである。存在の迷乱をすべて断じることによって生と死の恐怖と病気と損害の苦は何もない。

今度は、自性を知らずに諸欲樂に執着することによる束縛を示すために、

家畜が陽炎を [49]

などと言い、理解しやすい。

村で享受を楽しむことを求める [55]

などと言うことで、束縛の喩例を説いている。

今度は、自性を知れば解脱する原因を示すために、

何らかのものの本質を知ること、どこにも有情は存在しないが、三昧を楽しむことで不可思議を広げる。[57-58]

と言われ、一切の事物は心と風の変化と知り、それが生じないことを知る場合である。
今度は、示す樂に執着すれば、眞実を見ないことを示すために、

どこであれ意の驚が [59]

などと言い、それに喩例が二つ。驚が依存する木の喩例と虚空の華を蜜蜂が吸うことを見る喩例である。最初に二つ。束縛と捨の喩例である。驚が住するその木が鳥の糞により根を腐らせ、嘴で外皮を剥ぐことで葉と華は生じないように、瑜伽行者が心と風を混ぜてから 樂なる心の生起にそこで執着するならば、華に似た光明は見られず、葉に似た双入の身体は見られない。それ故に、

どこであれ意の驚が依存し住する木には、樂の華と葉が生じることはない。
[59-60]

と言う。ではその二つを何により見るのか、と言え、心と風を縛り、世間の心をなくすことで光明を見て、捨てることで双入を見る。

確実に意の驚を縛り、なくしたならば、 [61]

と言うことは、光明の中で心と風を縛り、なくすことである。それにより何が成立するのか、と言え、迷乱の輪廻を断絶することである。

揺らぎと変化によりうまくないことをして何らかのものが成立する。 [62]

と言い、風により揺らぎ、心が百六十に変化することを断じることであまくないことをなす。善と不善の習気を置いてどのように成立しようか。成立しない。驚が縛られてから捨てられたならば血肉を飲むことで空腹がないことに似て、意の身体は水月のように存在するそれを智慧により二として見る主張を制圧することで眞実をともなっている。顕現の事物はいかなるものも水月のようにその識の瑜伽においていかなる場所においても所取と能取により損なわれる努力をなすことはない。それ故に、光明は空性を堅固にした後に迷乱を捨てたところには存在しないので、

空性を堅固にすることにより迷乱を捨てて、存在しない。 [67]

と言われる。

迷乱により束縛を捨てようと考えることをなすな。[68]

と言うのは、光明により俱生の瑜伽を考察せずに、何らかの迷乱の瑜伽によっても世間の心を縛るものは存在しないから。

何れかの生じたものを確実に見て、無分別の三昧によりそれを明らかにしなさい。[69-70]

と言うことに関して、世間の何らかの生じた心を智慧の眼により見て明らかにしなさい、と述べられている。何により知るのか、たとえば、無分別の三昧によるのであって、無分別智と三昧を事物と言うことを三力により知るべきであり、五根をとまなうことにより明らかになる。結びの在り方により教えるのが、

分別という大きな垢をすべて洗い、虚空の華に似た事物を等しく考察する。[71-72]

と言い、分別の垢という迷乱において乱された事物を虚空の華のように智慧により考察し、認識し、修習すべきその道の双入において等しく考察すべきである。第二の喩例を退けることに関して、

確実に浄化して習気を離れることで瑜伽は見え、虚空の華を蜜蜂が吸うのを見るのと同じである。[73-74]

と言うことは、示すその樂を思うことを確実に浄化することで世間の心を動かす習気を離れることも瑜伽である。界と明の不二を見ることは、風と心の自性に入らずに感受作用を楽しむことですべてをまとめたものをもつことに執着することは、虚空の華を蜜蜂が吸うのを見るのと同じであるから。では、示される対象として解説されるものは何か、たとえば、それはその罪のない者が人差し指で月を示すのに似て、風と心を樂なる相として受けてから堅固になり、風と心の自性に入らなければならないから。真実に執着すれば、勝義を欺いて迷乱させる、と言われる。何故ならば、見ることにより設定さ

れるから。では、何か、と言えば、追隨する門から示したのが、「**確実に浄化して**」などと言われる。そのように風と心が樂の相において確実に浄化されるので世間の百六十の心によりその空の大空を正しい師と仏の言葉のように一切空を光明に入って修習し、行を浄化して、それから幻のような天の身体をさらにまた水月のように認識する在り方により一切の善法を完全にすべきである。では、一切空の何れかの光明を修習してから戯論により何をなすのか、と言えば、戯論のように顕現も、

世間の戯論の場所と矛盾する。[76]

と言われる。それは虚空の華を蜜蜂が吸うことに似た印契と、自分を他所に見る迷乱を光明により浄化する。光明においてどのように修習するのかと言えば、

世間の戯論を金剛が倒してから [79]

と言うことは、一切の器世間を光明の中に溶かす在り方にまとめられる。

恐怖の認識と羞恥心はアヴァドゥーティパが捨てている。[80]

と言うことは、風と心をともなうものを中央脈管に入れて光明が修習される。

第四の喩例の結びをまとめるために、

菩提を願う。[81]

と言うことはすでに解説した。悲心と智慧の不二を確実に浄化するここに大乘のすべての道が集められているから。そのようなその道は、ダーキニーの悪呪に似たものであり、何から得られるのか、と言えば、師からである。何故ならば、それがなければ、それは生じないから。それ故に、

瑜伽を損なわずに領受すれば、瑜伽になるので、[87]

と言うことは、悲心と智慧と、界と明を不二と修習することをなし、彼は師を頼る。例えば少女の楽しみは男性によるのと同じである。それ故に、師は何らかの正しい方便によりその存在の迷乱をこの時に断じるので、その聖教より価値のあるものは何もない。

それ故に、自分を正しく求める賢者たちにより正しく頼られるべきである。

悲心により他者を利益する。[91]

と言うのは理解しやすい。

今度は、著書をまとめるために、

shrī の文字は不二の知恵である。[93]

などと言うことは、その道の結びである。二諦の相とその不二の双運を示す。その名称の異門は、勝義の吉祥なるへールカと金剛薩埵と二諦の在り方に存在するものなどと言われる。

この大海のような甚深なる法のあり方は他者を利益する想いにより書かれたものである。ここに罪をなした彼らすべてに聖者とダーキニーたちは耐えられている。

最後の時になったならば、寿命は短く、病気が多く、富は少ない。悪縁と、多くの断絶により長い間存在する力がない者は言葉を断じることができないので、正しい善知識に頼るべきである。厳しい精進を努力する心をもつことにより、深海を正しく記憶すべきである。

他者を解脱させるために、この心髄の意味を勧告している。慈愛によりこれを勧める福德により劣った道に入った有情たちは正しい道に入りなさい。

『金剛歌』の意味を明らかにする偉大な賢者ディーパンカラシュリージュニャーナによる著作を完成する。

そのパンディタ自身と比丘のツルティム・ゲルワが翻訳して、確定した。

第4章 『根本過犯注』

はじめに

Dīpaṃkaraśrījñāna の小部文献は、テンギユルの「秘密部」「般若部」「中観部」「経疏部」「雑部」などのさまざまなセクションに収められている。デルゲ版の目録では、それらの一部を取り出したものが彼の「小部集」として別にまとめられており、北京版とナルタン版では「中観部」に第二のテキストとして再録されている。この「小部集」に収録されているテキストの中には「秘密部」に収録されているものも含まれているために、北京版とナルタン版ではそれらの密教文献が「中観部」に再録されていることとなる。もちろん著者は自らの著作の執筆時にテンギユルのどの部に収められるのかを意図していないために、そのような混乱はテンギユル編纂の際に生じた問題である。それ故に、彼の顕教文献が「中観部」に収録されている理由も、編纂者の意図によるものであり、その中には中観の教義を説いていない著作も複数ある。例えば、『業分別論』の内容は、中観よりもアビダルマ的であるだけでなく、『大日経』が、金剛乗としてではなく、大乘経典として引用されている¹。

その一方で、「金剛乗」や「中観」などを明言する著作も存在する。本稿で取り上げる根本過犯に関するテキストは、金剛乗の立場で現された著書であり、その他の根本過犯文献とともに「秘密部」に収録されている。しかしながら、彼には大乘経典に説かれる菩薩過犯の解説書も存在する。すなわち、金剛乗の立場で根本過犯を解説した著書と波羅蜜乗の立場で過犯の懺悔を説いた著書が存在する。「過犯 (āpatti)」の語が共通するだけであり、前者は過犯となる行為を解説した著書であるのに対して、後者は過犯となる行為を違反した後の懺悔方法を解説したものである。その内容は異なることから、異なる文献と理解してしまえばいいのだろうが、少なくとも彼は金剛乗と波羅蜜乗の二つの過犯を認識していたことがわかる。

波羅蜜乗の過犯文献について

まず波羅蜜乗の菩薩過犯に関する著書は、『業障清浄儀軌疏²』であり、テンギユルの「経疏部」に収録されている。そのタイトルは「業障を浄化する儀軌の解説」となるが、その内容は『三蘊経』あるいは『優婆離所問経』に説かれる過犯懺悔の儀軌に対する注釈書である。同じ「経疏部」には、本論と並んで次の論書が収録されている。

¹ 望月 1996c: 15-17.

² Tib. *Las kyi sgrub pa rnam par shyong ba'i cho ga'i bshad pa*. D. 4007, P. No. 5508. Dīpaṃkaraśrījñāna, Tshul khrims rgyal ba 訳. Cf. Lobsang 2001: 95-113 望月 1999c, 2005a: 115-121.

Nāgārjuna 『菩提過犯懺悔注 (*Bodhyāpattideśanāvṛtti*³)』

Jitāri 『菩提過犯懺悔注菩薩学次第 (*Bodhyāpattideśanāvṛttibodhisattvasīkṣākrama*⁴)』

それらの内容は、前述の解説書と同じく、同経に説かれる菩薩過犯懺悔の儀軌の解説書である。Dīpaṃkaraśrījñāna の解説書にはこれらの二書に対する直接の言及は見られないが、彼の『発心律儀儀軌次第』には Nāgārjuna と Jitāri による発心儀軌の解説書が引用されている⁵ことから、本論においても先行する二人の論師の著書を認識していた可能性がある。

彼には、もう一つ過犯説示に関する『罪過懺悔儀軌』がある⁶。その内容は過犯懺悔の儀軌を具体的に示した小部文献である。そこでは、過犯として次の事項があげられている。

- 1 十不善業道
- 2 五無間罪
- 3 近無間罪
- 4 波羅提木叉を破すこと
- 5 菩薩の学処に反すること
- 6 マントラの教義に反すること

簡略に述べると、過犯は善趣と解脱の障碍となり、輪廻と悪趣の原因となるものである。ここでは、小乗の波羅提木叉、大乘の菩薩学処、真言乗のマントラの教義が言及されている。また、懺悔をする対象としては、持金剛などのすべての仏、菩薩、尊者の面前とされている。これらのことから、本論では、波羅蜜乗と金剛乗を共通の過犯の懺悔方法が説示されていることがわかる。

金剛乗の過犯文献

³ Tib. *Byang chub kyi ltung ba bshags pai 'grel pa*. D. 4005, P. No. 5506. Śāntarakṣita, Devaghoṣa 訳. Cf. Lobsang 2001, pp. 21-54.

⁴ Tib. *Byang chub kyi ltung ba bshags pai 'grel pa byang chub sems dpa'i bslab pa'i rim pa*. D. 4006, P. No. 5507. Bal po paṇḍita, Chag lo tsā ba 訳. Cf. Lobsang 2001, pp. 55-93.

⁵ Cf. 望月 2014b.

⁶ Tib. *Ltung ba bshags pa'i cho ga*. D. 3974, P. No. 5369. Dīpaṃkaraśrījñāna, Tshul khriṃs rgyal ba 訳. 望月 2005a: 121-122.

テンギユルの秘密部にも、過犯を説く複数の文献を見ることができる⁷。それらは、根本過犯と大過犯とその他の過犯を論じた文献であり、そのうち金剛乗の根本過犯 (mūlāpatti) に関するテキストは次のとおりである。

Aśvaghōṣa 『金剛乗根本過犯集 (*Vajrānamūlāpattisaṃgraha*⁸)』

著者不明 『金剛乗根過犯 (*Vajrayānamūlāpatti*⁹)』

Abhayākara Gupta 『金剛乗過犯苞 (*Vajrayānāpattimañjarī*¹⁰)』

Śrī Lakṣmīkara 『金剛乗十四根本過犯注 (*Vajrayānacaturdaśamūlāpattivṛtti*¹¹)』

Bhavyapāda (Bhavi pa), Garbhapāda (sNying po zhabs): 『金剛乗根本過犯注 (*Vajrayānamūlāpattiṭīkā*¹²)』

Dīpaṃkaraśrījñāna 『根本過犯注 (*Mūlāpattiṭīkā*¹³)』

Mañjuśrīkīrti 『金剛乗根本過犯注 (*Vajrayānamūlāpattiṭīkā*¹⁴)』

Vajrāsana 『金剛乗根本過犯羯磨論 (*Vajrayānamūlāpattikarmaśāstra*¹⁵)』

Indrabhūti 『金剛乗根本支分過犯説示 (**Vajrayānamūlāṅgāpattideśanā*¹⁶)』

Bhaviḷa (Bhabiva) 『金剛乗根本過犯 (*Vajrayānamūlāpatti*¹⁷)』

これらの文献と並んで、次の大罪過 (sthūlāpatti) に関する論書が見られる。

Aśvaghōṣa 『大罪過 (*Sthūlāpatti*¹⁸)』

Nāgārjuna 『金剛乗大罪過 (*Vajrayānasthūlāpatti*¹⁹)』

さらに、これらの文献に加えて、次の論書も見られる。

⁷ Cf. 頼富 1972: 57-68.

⁸ *rDo rje theg pa rtsa ba'i ltung ba bsdu pa*. D. No. 2478, P. No. 3303. Cf. Lévi 1929: 266-267.

⁹ *rDo rje theg pa'i rtsa ba'i ltung ba*. P. No. 3308.

¹⁰ *rDo rje theg pa'i ltung ba'i snye ma*. D. 2484, P. No. 3310. Abhayākara Gupta, Sangs rgyas grags pa 訳.

¹¹ *rDo rje theg pa'i rtsa ba'i ltung ba bcu bzhi pa'i 'gral pa*. D. 2485, P. No. 3311.

¹² *rDo rje theg pa'i ltung ba'i rgya cher 'grel pa*. D. 2486, P. No. 3312.

¹³ *Rtsa ba'i ltung ba'i rgya cher 'grel pa*. D. 2487, P. No. 3313. Dīpaṃkaraśrījñāna, Tshul khriṃs rgyal ba 訳.

¹⁴ *rDo rje theg pa'i rtsa ba'i ltung ba'i rgya cher bshad pa*. D. 2488, P. No. 3314. Upadhaśrīvajraśīla, brTson 'grus seng ge 訳.

¹⁵ *rDo rje theg pa rtsa ba'i ltung ba'i las kyi cho ga*. D. 3728, P. No. 4550. Abhayākara Gupta, Sangs rgyas grags pa 訳.

¹⁶ *rDo rje theg pa'i rtsa ba'i dang yan lag gi ltung ba'i bshad pa*. P. No. 4626.

¹⁷ *rDo rje theg pa'i rtsa ba'i ltung ba*. P. No. 5083.

¹⁸ *lTung ba sbom po*. D. 2479, P. No. 3304.

¹⁹ *rDo rje theg pa'i sbom po'i ltung ba*. D. 2482, P. No. 3307. Rin chen bzang po, Rev. Mañikaśrījñāna, Chos rje dpal 訳.

著者不明『十五過犯 (**Pañcadaśāpatti*²⁰)』

著者不明『七支分失 (**Aṅgāparādhāsaptaka*²¹)』

著者不明『支分三摩耶 (**Aṅgasamaya*²²)』

またサンスクリット文献として、*Dīpaṃkaraśrījñāna* の師の一人とされる *Advayavajra* (*Maitrīpa*) の著作集の中にも次のテキストを見ることができる。

Advayavajra 『根本過犯 (*Mūlāpatti*²³)』

Advayavajra 『大罪過 (*Sthūlāpatti*²⁴)』

これらのテキストにおいて言及される過犯のうち、本稿で言及する根本過犯は、次の十四項目である。

- 1 阿闍梨を侮ること
- 2 善逝のお言葉を越えること
- 3 忿怒により金剛の親族の罪過を述べること
- 4 有情に対する慈愛を捨てること
- 5 法の根本である菩提心を捨てること
- 6 自派と他派の宗義である法を誹謗すること
- 7 未熟な衆生に秘密を説くこと
- 8 五仏の自性である五蘊を誹謗すること
- 9 自性清浄なる法に疑惑をもつこと
- 10 凶暴な者に対し常に慈愛をもつこと
- 11 断などではない諸法を考察すること
- 12 信をもつ衆生の心を批判すること
- 13 三昧耶を得たとおりに頼らないこと
- 14 智慧の自性である女性を誹謗すること

『根本過犯』の著者

²⁰ *Itung ba bco lnga pa*. D. 2480, P. No. 3305.

²¹ *Yan lag gi nyes pa bdun pa*. D. 2481, P. No. 3306.

²² *Yan lag gi dam tshig*. D. 2483, P. No. 3309.

²³ 密教聖典研究会 1988: 42-43.

²⁴ 密教聖典研究会 1988: 44-45.

ここに和訳を提示する *Dīpaṃkaraśrījñāna* の『根本過犯広疏 (*Mūlāpattiṭīkā*²⁵)』は、そのタイトルが示すように、上記の十四の根本過犯を解説する注釈書である。しかしながら、何れのテキストに対する注釈書なのかは明らかではない。そのコロフォンには、

「秘密金剛乗の瑜伽行者たちの学処を明らかにする解説」と言われる阿闍梨 *Bhavideva* が著された『根本過犯』の注釈である偉大な賢者 *Dīpaṃkaraśrījñāna* が説かれたものを完成する²⁶。

と記されている。ここに言及される *Bhavideva* (*rGyal ba'i lha*) と、彼が著した『根本過犯 (*Mūlāpatti*)』の確認はできていない²⁷。この *Bhavideva* の名称は、チベット仏教のサキヤ派の *'Phags pa Blo gros rgyal mtshan* の『事師五十撰義 (*Bla ma lnga bcu pa'i bsdus don*)』に見ることができ、その根本テキストである『事師五十頌 (*Gurupañcaśikā*)』の著者を *Bha wi lha* としている²⁸。このテキストは、テンギュルでは *Aśvaghōṣa* (*rTa dbyangs*) の著書とされており、同じ著者の『根本過犯』とともにサンスクリット写本が存在する²⁹。すなわち、*Dīpaṃkaraśrījñāna* が『根本過犯』の著者とする *Bhavideva* には『事師五十頌』という著書もあり、この二つのテキストは異なる伝承では *Aśvaghōṣa* の著書とされている³⁰。この二つの密教文献が *Aśvaghōṣa* の著書とされた経緯についてはさらなる調査を要するが、*Dīpaṃkaraśrījñāna* はこれらのテキストの著者を *Aśvaghōṣa* ではなく、*Bhavideva* と認識していたことがわかる。さらには、彼の師とされる *Advayavajra* の著作にも『根本過犯』があり、これらを含めて *Bhavideva* について再検討する必要がある。

『根本過犯広疏』の構成

本論の内容は、『根本過犯』に述べられる十四の根本過犯を解説したものである。その伝記によると、ネパール滞在中に翻訳されていることから、その著述はその時期から

²⁵ C. Zi 192b5-197b6; D. 2487 Zi 192b6-197b6; G 282a-290a1; N. No. 1311, Tshi 204b5-210b4; P. No. 3313, Tshi 238b2-245a1; 中華大藏經, vol. 27: 739-754.

²⁶ D. 2487 Zi 197b5-6: P. No. 3313, Tshi 244b7-245a1

²⁷ この著者を、前出の *Vajrayānamūlāpattiṭīkā* の著者である *Bhavyapāda* (*Bhavi pa*) と推定することも可能であるが、同論は *Mūlāpatti* の語句に補足の語を添えた小論であり、同論から本論と直接に結びつけるものは何も得られない。

²⁸ 酒井 1972: 3.

²⁹ Skt. Lévi 1929: 255-285. Tib. *Bla ma lnga bcu pa*. D. No. 3721, P. No. 4544. Tr. Padmākaravarman, Rin chen bzang po. Cf. 塚本 1989: 487-488.

³⁰ これに加え、*Aśvaghōṣa* に帰される *Daśākuśalakarmapathanirdeśa* には、*Dīpaṃkaraśrījñāna* に帰される同じ内容で内容も存在する。Cf. 望月 1996: 8-12.

以前となる³¹。その構成については、冒頭に次のように述べられている。

十四過犯は、縦に一緒にすると七つである。それらの七つに七つの過犯の本質と七つの原因があり、十四の自体を分ければ、十四のそれぞれに三つある。

すなわち、十四の根本過犯を始めから二つずつに七つのグループに分け、「二つの本質と原因は同一である」とし、それぞれの本質と原因が解説される。続いて、十四過犯のそれぞれが、罪過と、縁と、導かない方法の三項目から解説される。また、十四過犯の項目ごとの解説の後に、三種の菩提心を損なわないことと、見と行と修の自性による三種とにより根本過犯が分類される。これをまとめると、次のとおりである。

0 序

1 根本過犯の本質と原因

- 1.1 阿闍梨を侮ることと善逝のお言葉を超えること
- 1.2 金剛の親族の罪過を述べることと有情に対する慈愛を捨てること
- 1.3 菩提心を捨てることと法を誹謗すること
- 1.4 未熟な衆生に秘密を説くことと五蘊を誹謗すること
- 1.5 自性清浄なる法に疑惑をもつことと凶暴な者に対し慈愛をもつこと
- 1.6 諸法を考察することと信をもつ衆生の心を批判すること
- 1.7 三昧耶に頼らないことと女性を誹謗すること

2. 根本過犯の罪過と縁と導かない方法

- 2.1 阿闍梨を侮ること
- 2.2 善逝のお言葉を超えること
- 2.3 金剛の親族の罪過を述べること
- 2.4 有情に対する慈愛を捨てること
- 2.5 菩提心を捨てること
- 2.6 法を誹謗すること
- 2.7 未熟な衆生に秘密を説くこと
- 2.8 五蘊を誹謗すること
- 2.9 法に疑惑をもつこと
- 2.10 凶暴な者に対し慈愛をもつこと

³¹ Eimer 1979: 245. ただし、そこでは rgya brTson seng と翻訳したとあるが、本論のコロフォンでは、Tshul khriims rgyal ba なので、別の文献の可能性もある。

- 2.11 諸法を考察すること
- 2.12 信をもつ衆生の心を批判すること
- 2.13³² 三昧耶に頼らないこと
- 3. 根本過犯の分類
 - 3.1 菩提心を損なわないことによる分類
 - 3.2 見と行と修の自性による分類
- 4 結

まとめ

本テキストは、十四根本過犯について、その本質と原因を説明し、それぞれの罪過と縁と導かない方法を解説したものである。そこでは、Indrabhūti の『知恵成就 (Jñānasiddhi)』などの密教文献も引用されるが、前述のように『事師五十頌』が頻繁に引用されている。すなわち、Dīpaṃkaraśrījñāna は『根本過犯』の著者と『事師五十頌』の著者を同一人物と認識しており、後者の偈に基づいて前者を解説している。その著者である Bhavideva が誰なのかについては断定できないが、そこでは Aśvaghōṣa とは呼ばれていない。このことは、サンスクリット写本や中国伝承において Aśvaghōṣa に帰される一連の密教文献が、後期インド・チベットでは他の者に著作とされていたことが確認できる。本論には、その他の根本過犯文献に対する言及は確認できなかったが、これらの関連文献を調査することにより、この著者問題に関するさらなる情報が得られる可能性がある。

『根本過犯広疏』和訳

インドの言葉で、*Mūlāpattiṭṭikā*

チベットの言葉で、『根本過犯広疏』

聖母ターラーに敬礼する。

0 序

十四過犯は、縦に一緒にすると七つである。それらの七つには、七つの過犯の本質と七つの原因と、十四の自体を分けたものと、十四のそれぞれをまとめたものとの三つ。

³² 第十四項の「女性を誹謗すること」に対する解説は見られない。

1 根本過犯の本質と原因

1.1 阿闍梨を侮ることと善逝のお言葉を越えること

そこで、第一と第二の過犯である本質と原因は一つで、師を侮ることは善逝のお言葉を背いており、それも、

師とは持金剛で、異なるものと考察されない³³。

と説かれているから。それ故に、持金剛と師は異ならないので、二つの過犯の本質と原因は一つである。侮る対象であるその師も、共通の道は、この輪廻を作意することから思考を退けることを知ることで、所作の報いに依ってから慈愛と悲心を堅固にするその二つの力から生じた菩提心を堅固にする入の律儀をとまなうので異なる方向である。

悲心がなく、忿怒して毒があり、自尊心と欲望で制御されず、誹謗をもつべきではない³⁴。

と説かれているので共通な道であるが、それらの共通ではないものから退いてから、共通ではない特徴の四根の門から見と行と修習の三つの解説をとまなうそれを何度も修習することによる功德となり、

堅固で、律して、慧をもち、忍をとまない、念に対する欺瞞はなく、マントラとタントラの行を知り、悲心をもち、論書を知る。

十の真実³⁵を完全に知り、マンダラを描く作法を知り、マントラの解説の行を知り、寂静で、根を制御する³⁶。

と述べられているので、そのように、十四の功德をもち、二種の見の成就にとどまる意味と、確実に成就する五方便と、二種の行と、四種の根の概説をもつ成就の言葉の体験をもつものが「師」と言われる。そのような正しい師の近くに仕える門から、その弟子は、円満な菩提心を堅固にすべきで、入心の律儀をもつべきである。後に、

³³ *Gurupañcāsikā* 22cd. Cf. 酒井 1972: 36.

³⁴ *Gurupañcāsikā* 7bcd. 酒井 197: 18.

³⁵ 十の項目は、マンダラ、三摩地、印、真言、姿態、坐態、念誦、護摩、供養、再撰とされる。Cf. 酒井 1972: 20-21.

³⁶ *Gurupañcāsikā* 8-9. Cf. 酒井 1972: 19-20.

三昧をなすことで、師に対してできる限りの供養をなし、三帰依から始めて、菩提心などの律儀は、もし自分に利益を望むならば、マントラによるその努力を把握するべきである³⁷。

と説かれているので、その師は最初に輪廻の罪過を作意し、帰依と慈愛と悲心の門から菩提心を堅固にしてから、入心の律儀をともない、四根を器としてから見と行と修の三つの概説をともなうことを成立させるのはそのためである。

それからマントラなどの布施により正法の器となって³⁸、

と説かれているから。その師に依るので、

「成就是阿闍梨に随順する」と持金剛自身が説かれたことを知ってから、すべての事物により師を完全に喜ばせるべきである³⁹。

と言うそのようなその師を常時にすべての円満の生じる場所である輪廻の海から引き出すことがすべての成就の依存するものなので、それ故に、与えられた坐をもち、意味の所作などでお仕えして、

師から成就と善趣と解脱を得る⁴⁰。

と言う句から、

眼前で律して座るべきで⁴¹、

と言う句までのすべての所作である念と正知による散乱しない在り方で師に師事すべきである。そのような師を侮るならば、一切の仏を侮ることになる。

それに似た守護者を想い、弟子になった者が侮るならば、一切の仏を侮り、それ

³⁷ *Mūlāpatti* 11cd-12. Cf. 頼富 1972: 73.

³⁸ *Gurupañcāsikā* 49ab. Cf. 酒井 1972: 52.

³⁹ *Gurupañcāsikā* 47. Cf. 酒井 1972: 51.

⁴⁰ *Gurupañcāsikā* 25ab. Cf. 酒井 1972: 38.

⁴¹ *Gurupañcāsikā* 37a. Cf. 酒井 1972: 45.

により常に苦を得るであろう⁴²。

と言う句から、

そこ（地獄）にとどまることが正しく解説されている⁴³。

と言う句までと、

それ故に、一切の努力により金剛阿闍梨である大慧に善を完全に自慢せず、決して軽蔑すべきではない⁴⁴。

と言うその句は、すべての根本過犯の本質である。浄化などは、主として、師セルリンパなどの解説より知るべきである。その二つの過犯の原因は、師の成就を得る言葉の領受を離れたものたちと結びつことで道の器として成立せずに根などをなしても、根本が堅固ではないことで確実に導くことができず、確実性がないので、師を最高としない。それ故に、「阿闍梨を侮ることなどのすべてが生じて、それが誤って説かれ、成立している」と言われる。前行のいかなる浄化もなく、円満な根と生起の解説を説いたとしても、根本がないことですぐに滅して、確実に小さいものである。それ故に、その両者はお言葉を超えて、両者の原因なので、『知恵成就』により、

自分自身で道を見ない者が、どのように他者を導くであろう。二人の盲人が助伴となるならば、どちらも落ちることに疑いはない⁴⁵。

と言われ、また、

罪過をもつ者のその道により行く者は、害を得るであろう⁴⁶。

と言われるので、正しい師に依存すべきである。

⁴² *Gurupañcāśikā* 10. Cf. 酒井 1972: 22.

⁴³ *Gurupañcāśikā* 14d. Cf. 酒井 1972: 26.

⁴⁴ *Gurupañcāśikā* と 15. Cf. 酒井 1972: 27.

⁴⁵ *Indrabhūti, Jñānasiddhisādhanoṣṭāyikā*. D. No. 2219, Wi 50a7-b1, P. No. 3063, Mi 54b1-2.

⁴⁶ *Indrabhūti, Jñānasiddhisādhanoṣṭāyikā*. D. No. 2219, Wi 50a7, P. No. 3063, Mi 54b1.

1.2 金剛の親族の罪過を述べることと有情に対する慈愛を捨てること

親族に罪過を述べることと、慈愛を捨てることの二つの過犯の本質は一つで、それが生じる原因も一つである。その原因は、前に共通な道である慈愛と悲心が不浄なので、衆生に利益を求め、愛する慧がなく、それにより損なわれ、誹謗などの縁を僅かにも捉えられない。それ故に、親族に罪過を述べることと、衆生に対する慈愛を捨てるそのことにより、その二つの本質は一つで、他者を損なうことに似ているからである。

1.3 菩提心を捨てることと法を誹謗すること

菩提心を捨てることと、宗義を誹謗することの二つは、原因と本質が一つである。原因は、慈愛と悲心の力により菩提心が堅固にされず、領受しても堅固でなく、それも、

一切にさらなる場所があり、どこにおいても一切が滅して、数千万劫においても、正しく生じた善は大きい。

菩提心が起こした福德の集まりが集められるから。数百万劫により生じるものは、刹那に滅してしまふ。

それ故に、その意義を守ることは、如来が明らかに説かれている⁴⁷。

と出ているので、その菩提心を捨てることと、捨てる量と、その罪過である。捨てることは三つで、師に依ってからと、親族に依ってからと、衆生に依ってから捨てることである。量は、その三依に依ってから煩惱の想による狡猾などにより昼夜のどの部分かを正しく過ごすことである。善根を根本から引き抜くことが、罪過である。他者の菩提心を中断する場合も、罪過は大きいと知るべきである。そこで自らの乗は、大乘の二つである。他は、声聞のものである。誹謗することは、上のように、不浄で、誹謗することで、自らにはなく、他者を導かないことである。

1.4 未熟な衆生に秘密を説くことと五蘊を誹謗すること

秘密を説くことと、蘊を誹謗することの二つは、原因と本質が一つである。次第により浄化されないことで器にならない者に秘密の意味と成就に存在する意味の二種の見などを説くことで、蘊が天の我性などを起こす次第を捨てるので、原因と本質は一つである。それも、

⁴⁷ *Indrabhūti, Jñānasiddhisādhānopāyikā*. D. No. 2219, Wi 48a2-4, P. No. 3063, Mi 52a6-8. ただし、最後の偈については、前半が欠けている。

天の色は修習で、心の精進は浄化で、経典のみを説くことは布施をなさないことと知るべきである。

金剛智を捨てるので、愚かな者は地獄に行くことになるであろう。その地獄の原因となるので、その人も地獄に行くであろう。

それと自他の蘊が生じるので、確実に守るべきである⁴⁸。

と言われる。

1.5 自性清浄なる法に疑惑をもつことと凶暴な者に対し慈愛をもつこと

法に対して二つの意をもつことと、凶暴な者に対する慈愛の心との二つは、原因と本質が一つである。それも、一切衆生の自性清浄なる光明と双入の自性として一つで、その二つに疑惑をもって、輪廻と寂静の大印契をしっかりと分別しないことにより、その凶暴な者を損ない、罵詈雑言などが菩提の縁に生じ、殴打などの残虐な行いにより利益でないものを成立させるので、原因と本質が一つである。

1.6 諸法を考察することと信をもつ衆生の心を批判すること

名称などを離れた法について、それを考察することと、信をともなう心を批判することは、原因と本質が一つである。名称などを離れることは、成立する場所の意味である虚空のような自性光明に対して自体と特徴を考察する原因により、それを信じる衆生で根を明らかにもつものを疑って、入れておらず、入れることなく、入れることから退き、堅固になさないから。

1.7 三昧耶に頼らないことと女性を誹謗すること

三昧耶に依らないことと智慧を誹謗することの二つも、五甘露などの三昧耶に依らないことが智慧を誹謗する原因であり、それに対する誹謗そのものがそれを捨てる原因である。それ故に、最初に師が成就を得る言葉の領受をもつものが考察をよく受けるが、他のものにはない。それ故に、

師と弟子は、等しく三昧耶を領受するので、勇者は最初に阿闍梨と弟子の関係を考察すべきである⁴⁹。

⁴⁸ Indrabhūti, *Jñānasiddhisādhanaopāyikā*. D. No. 2219, Wi 60b3-4, P. No. 3063, Mi 64a3-5.

⁴⁹ *Gurupañcāsikā* 6. Cf. 酒井 1972: 16.

と述べられるから。

2. 根本過犯の罪過と縁と導かない方法

2.1 阿闍梨を侮ること

そのようにそれらの過犯を超えた場合に、罪過を説いたものは、「阿闍梨を誹謗して⁵⁰」と言うものが述べられる意味で、他の過犯に類似する罪過と知られる重罪もある。その罪過は「伝染病と」と言う一偈である⁵¹。「王と火と」と言う一偈である⁵²。それ故に、いつも三偈である。もし想の門から領受するならば、師の面前のマンドラなどに供養し、罪過の名称により懺悔して、後で制御し、師のところで仏の慧が二倍になるように学び、その利益が説かれるので、「師を」という一偈がある⁵³。そのように残りの過犯も、想の区別により満たすべきである。それ故に、最初に師をよく調べ、よく頼って、それから器になることを請願する。それによっても、続く慈愛の門から器となって、最初に輪廻の罪過を把握し、天と師に依ることに入る。それから共通な帰依に依り、波羅提木叉の律儀に依るものに入る。それから特別な帰依に依ってから、堅固な菩提心に入る。それから入る律儀をうまく導いて、四根の門から見と行と修の三つの分別を成就する。それから分別に随順する道を修行して、さらにまた、生起次第の時に師と天を区別せずに資糧を集めて、最初の過犯の原因を捨て、それらの順序は、最高の根の者は一切法を一緒に理解する成就方法を知るべきである。真ん中と最後の者は凡夫の考察を退ける方法を知るべきなので、不顛倒により第二と第七と第八と第六と第十二の過犯の原因が捨てられ、共通な道である慈愛と悲心の菩提心をともない、共通ではない道のヨーガと我と住を守ることににより第三と第四と第五と第九と第十の原因が捨てられ、それから究竟次第に依ってから一切法の光明を理解することを成立させてから、五甘露などの三昧耶に依ることにより第十三と第十四と第十一の原因が捨てられ、さらにまた天に関する秘密と智慧と第四を取ることで第十四と第十三の原因が捨てられ、その如くならば、十四を設定する業の順序からまとめられるので、続いてその自体における所作の目的の確實性を起こし、堅固にすべきである。

2.2.2 善逝のお言葉を超えること

⁵⁰ *Gurupañcāsikā* 11a. Cf. 酒井 1972: 22.

⁵¹ *Gurupañcāsikā* 11: 阿闍梨を誹謗する彼は、伝染病や害病と、危害や疫病や毒によるその大きな蒙昧により死ぬであろう。Cf. 酒井 1972: 22.

⁵² *Gurupañcāsikā* 12: 王と火と毒蛇と水と空行と盜賊と夜叉とビナヤカによっても殺された後に地獄に行くであろう。Cf. 酒井 1972: 24.

⁵³ *Gurupañcāsikā* 16: 師を敬うことがともない、功德を随順して布施するべきである。それにより疫病などの害を外に出すであろう。Cf. 酒井 1972: 29.

自体そのものに関しては、それぞれの過犯に過犯の理解と、いかなる縁により生じるのかと、罪過と、正しい在り方の通りに導かない方法がある。善逝のお言葉は、「輪廻の罪過から作られる」と言うものと、所作を記憶し、慈愛と悲心と入の律儀までを堅固にすべきで、特別な四根により器となってから見などの解説が善逝のお言葉である。超えることは、尊敬せず、放逸で、無知で、多くの煩惱による。それ故に、師の御前で三昧耶を堅固にせずに、昼夜の部分を過ごすことが過犯である。縁は、不信などの四つである。罪過は、前に「伝染病と」と言う四偈である⁵⁴。生じない方便は、師が説かれた道である念と正智による灯火と水の流れのように作意することである。

2.2.3 金剛の親族の罪過を述べること

親族とは、一つの結合と、それ以外のものと、すべての衆生である。罪過が述べられる境を理解し、昼夜の第三分を過ごせば過犯である。縁は、三境のどれでも心に相応することをなさずに、なさないことで瞋と嫉妬や煩惱の何れかと同じく怒ることである。導かない方法は、憤怒の縁が近くにある時に所作を知るなどの慈愛を作意することで、また一切法を不生と作意することである。

2.4 有情に対する慈愛を捨てること

慈愛は、所作を知る門から、一切衆生に対する利益を望むことである。捨てることは、利益でないものを成就させることで昼夜の部分を過ごせば、過犯である。縁は、上のように、三境に依ってから我の想に相応することをなさず、なさないことで利益ではないことを成立させ、捨てることである。生じさせない方便は、縁が近くにある時にそれを目的として堅固にする在り方により慈愛を作意し、双運を知るべきである。

2.5 菩提心を捨てること

菩提心は、衆生利益のために持金剛を求めることである。それを捨てることが、境に関する三つで、師と金剛が、親族と衆生を欺く行により功德を得ようと思うことと、利益を捨てて昼夜の部分を過ごすことである。縁は、前の如し。導かない方法は、反対の縁が近くにある時に利益と罪過を知ることで菩提心を修習すべきである。また生がないことを作意すべきである。

2.6 法を誹謗すること

⁵⁴ *Gurupañcāsīkā* 11-14. Cf. 酒井 1972: 22-26.

自らの成就の終わりは、大乘の二種である。他のものは、声聞と独覚である。ヘーヴァジュラをまとめた頃のように、次第により不浄を誹謗することで昼夜を過ごすことである。縁は、三昧耶を損なうことを離れた師と結合することで、道次第により清浄になった者たちを誹謗し、怒ることである。導かない方法は、知恵を次第により学ぶことで一乗を知るべきである。円満に成熟しないことは、道次第により浄化されないことである。

2.7 未熟な衆生に秘密を説くこと

秘密は、成就が存在する意味が虚空と同じであるように、二見である。助伴は、身口の行により昼夜を過ごすことである。縁は、不浄と結合することによる。導かない方法は、その境のように、子と結合するならば、慧の区別を尋ねてからそれらと相応すべきである。

2.8 五蘊を誹謗すること

蘊を誹謗することは、生起次第をすべて把握することである。誹謗することは、それを修習せずに昼夜を過ごす場合である。縁は、甚深なるものを説かない聖教と完全に把握する悪人である。導かない方法は、天の修習である。

2.9 法に疑惑をもつこと

自性清浄とは、二見である。疑惑をもつことは、その二つの分別を生じないことである。それ自体における分別なしに昼夜を過ごす場合である。縁は、正しい師を離れることで事物を見ることによる。導かない方法は、正しい師の言葉に依ってから見を修習すべきである。

2.10 凶暴な者に対し常に慈愛をもつこと

凶暴な者は、人と非人である。自分を害することで瞋を得てから、利益ではない毒をなして昼夜を過ごす場合である。縁は、罪過をなすことによる。導かない方法は、忍を修習して、魔を退ける聖教から知るべきである。

2.11 諸法を考察すること

名称などを離れた法は、光明と双運である。それを理解することは、その二つの自性に相応せずに他のものを理解することで昼夜を過ごすことである。縁は、善知識と結びつかないことである。導かない方法は、その教説から [導かないこと] である。

2.12 信をもつ衆生の心を批判すること

信をもつことは、道次第により浄化されなくても成就にとどまる意味を求めることである。批判は、説かないことと誤って説くことによる。縁は、信服する人と結びつくことによる。導かない方法は、分別と結合して、法を説くことである。

2.13 三昧耶に頼らないこと

三昧耶は、飲食の三昧耶である五甘露などである。説かないことは、不浄な慧により捨てられ、時を過ごすことである。縁は、実体が近くにあることである。導かない法は、無分別の心による。これらの罪過は小さなものであっても、害は同じである。何故か、と言うのならば、根本の過犯であるから。

マントラによりこれらを捨ててから、成就を確実に得るであろう⁵⁵。

とは、捨てるべきものを捨てることの功德である。

さらに三昧耶から転落するならば、転落により魔により捕らわれるであろう。それから苦を領受し、下方を見て、地獄に行く⁵⁶。

と言うものは、損害の罪過がまとめられている。

それにより我慢を制圧してから、自分自身を迷わずに知るべきである⁵⁷。

と言うものは、細心になすことを学ぶことである。灌頂してから十四過犯と五十の師事の何れかを求める成就方法は、意味を詳しく示すことなので、確実に熱心に学ぶべきで、他の場合は師の罪過である。

3. 根本過犯の分類

3.1 菩提心を損なわないことによる分類

そのように十四をまとめれば、三つである。共通な菩提心を損なわないことと、特別

⁵⁵ Maitrīpa, *Krodharājōjjvalavajrāsanimaṇḍalavidhi*. Tib. D. No. 3051, Pu 103a5, P. No. 3875, Tu 117b6.

⁵⁶ *Mūlāpatti* 10. Cf. 頼富 1972: 72-73.

⁵⁷ *Mūlāpatti* 11ab. Cf. 頼富 1972: 73.

な菩提心を損なわないことと、その両者を損なわないことである。最初の過犯と第二のものは、両者を損なわないことである。親族に対することと、慈愛を捨てることと、菩提心を捨てることと、宗義を誹謗することと、凶暴な者に対する慈愛を捨てることのそれら五つは、共通な心を損なわないことで、それ故に、精進により護られる。秘密を説くことと、蘊を誹謗することと、清浄な法を疑うことと、名称などと結びついてそれを考察することと、心を非難することと、三昧耶に依らないことと、智慧を誹謗することのそれらが捨てられることで、特別な菩提心を損なわないことをなす。

3.2 見と行と修の自性による分類

また、それは見と行と修の三つの自性でもある。法を疑うことと、名称などと結びついてそれを考察することを捨てることで見の二種が考察される。第一と第二と第三と第四と第五と第六と第七と第八と第十の九つを捨てることで、修の概説が、心の非難と、三昧耶に依らないことと、智慧の誹謗の三つにより九つが捨てられ、捨による行である。その三つを捨てずに修習する者は、お言葉を超えており、師を侮ることを捨てていない。それ故に、十と五十⁵⁸を熱心に何度もなすべきである。何故ならば、すべての成就の根本であるから。損なえば、一切の罪過も生じる。その如くではなく、秘密の言葉のみにより解説を説いてから、師と認められるものが過犯の器として成就すれば、不善の原因を作るので、「不善の主体の縁」と言われる。「罪惡の助伴と、悪をもつ魔と、欺くことと」と言われ、過失は多く述べられない。そのような師とその弟子が完全に円満な仏の法蘊を獲得し、恭敬する原因により成就するので、惡趣を成立させる方便とその縁により毒と甘露を混ぜることと同じである。それ故に、正しい師に依ることが大切であることを金剛大持が説かれている。

4 結

正しい助伴と師と会わずに、存在を彷徨ってから利益のために師の聖教のように書くことで、それらに利益をなしなさい。

ここに見えるものだけで人々が法を熱心にする原因となってから、師を主となし、成就を熱心にする原因となる。

悪い運命の者たちと結びつくならば、自分の過失により誹謗するけれども、大覺仙の聖教は誰が捨てようか。それ故に、そこに害は成立しない。

⁵⁸ 50 は *Gurupañcāsikā* に説かれる五十項目のことであろうが、前者については不明である。同じ著者のテキストを想定するならば、*Aśvaghōṣa* に帰される *Daśākuśalakarmaphānirdeśa* に基づく十善業道を推定できる。

秘密の無上の金剛乗に入る瑜伽師たちが学ぶので、明らかな解説が荘嚴される。

「秘密金剛乗の瑜伽行者たちの学処を明らかにする解説」と言われる阿闍梨バヴィデーヴァが著された『根本過犯』の注釈である偉大な賢者ディーパンカラシュリージュニャーナが説かれたものを完成する。

そのパンディタ自身と翻訳官である比丘のツルティム・ゲルワが翻訳した。

第5章 Dīpaṃkaraśrījñāna の顕教文献における密教文献への言及

はじめに

Dīpaṃkaraśrījñāna には、顕教文献の著作だけでなく、密教文献の著作も多数有り、チベット語への翻訳についても顕密両方の文献に対して行われている。それ故に、顕密の両方に長けていたことがわかる。『菩提道灯論』では、波羅蜜乘に続いて真言乗の教義を解説している。秘密の教義であっても、その概説部分については一般に伝えるべきものと認識されていたからであろう。もちろん、密教文献にも一般に伝えるべき教えは含まれているはずである。本章では、彼の顕教文献における密教文献の引用を考察し、密教文献を一般に対してどのように伝えられていたのかを明らかにする。

密教文献への言及例

Dīpaṃkaraśrījñāna の顕教文献は、テンギユルの「中観部」に多くが収録されているために、小部集に収録された著作も「中観部」に再録されている。これは彼の思想的立場を中観派とした見方によるのだが、それらのすべてが中観の立場で著されたというわけではない。これと同じように、顕密の分類もテンギユルの編纂者の見方によるものである。この相違は明確であるべきものであるが、彼が顕教文献においても密教文献に言及する事例を多数見ることができる。それらの事例を示すと次のようになる。

I 『菩提道灯論』

1 『従本初仏出現タントラ』

真言乗を説く 257-268 において、次のように言及される。

『従本初仏出現タントラ¹』に、努力により禁じられているので、秘密と智慧の灌頂を梵行者は受けるべきではない。もし灌頂を受けるならば、梵行の勤苦にとどまる者が禁じられていることを行うことになるので、その勤苦と律儀を損なっている。その禁戒をもつ者は波羅夷罪を生じているであろうし、彼は悪趣に落ちるので、成就もあり得ない。

と述べられる。ここでは、秘密と智慧の灌頂を受ける者の制限が『従本初仏出現タント

¹ *Paramādibuddhoddhritaśrīkālacakratantrarāja*. Tib. D. No. 362, P. No. 4.

ラ』を根拠にして説明されている。この言及に関しては、次の『菩提道灯論細疏』において再出する。

II 『菩提道灯論細疏』

1 『続鬘タントラ』

七種供養の解説において、二種の意により作られた供養のうち、「世間に主人がおらず、他者が受領しない卓越したすべてのもの」の典拠として、『宝雲経』『禅定輪供養手印経』『方広総持宝光明経』『菩提行論』と並んで、『続鬘タントラ²』が言及される³。ここでは、真言乗に限定せずに、供養に関する典拠として言及されている。

2 『真実撰集大タントラ』

七部の波羅提木叉の解説において、大中観の教説を完成すれば、大乘の器にならないものはないとして、その聖典根拠の一つとして如来蔵を説く論書と並んで、

ああ、世尊のこの大マンダラに入る者を、器であるとか器でないと、考察を行わない。それは何故かといえ⁴、

と『真実撰集大タントラ』が引用されている⁵。真言乗は、大乘の延長線上にあるものであり、大乘の器も含むものになる。

3 『文殊師利根本タントラ』

同じセクションにおいて、Asaṅga の『瑜伽師地論』に七部の波羅提木叉が述べられているとして、彼に対して、

Asaṅga は聖なる人であり、彼による論書は真実であると知るべきである⁶。

と『文殊師利根本タントラ』が引用されている⁷。Asaṅga の正統性を示す根拠として引用されたものであるが、彼は『開宝篋』において Nāgārjuna の授記に対しても同タントラを引用する。

4 『大日経』

² Sandhimālāmahātāntra. Tib. D. No. 819, P. No. 432.

³ 望月 2015a: 47.

⁴ Sarvathāgatātattvasaṃgraha. 堀内 1968: 86.

⁵ 望月 2015a: 81.

⁶ Mañjuśrīmūlakalpa. Śāstrī 1925: 617.

⁷ 望月 2015a: 83.

般若波羅蜜のセクションで、方便と智慧の双運を説く典拠として、Jñānakīrti の『波羅蜜多乘修習次第概説』が引用され、その引用の中に、

一切智のこの知恵は、大悲の根本をもち、菩提心の原因をもち、方便の究極である⁸。

という『大日経』が引用される⁹。ここでの引用は孫引きであるが、この句はカマラシーラの『修習次第』においても引用されており、一般的に知られていた句である¹⁰。

5 『四座タントラ』

同じく般若波羅蜜のセクションにおいて、方便である布施波羅蜜の三種を解説する際に、

六万のシュードラの衆生は一人の清浄なバラモンに仕える¹¹。

と引用される¹²。ここでは、シュードラの者がバラモンに仕えることで、菩薩行である六波羅蜜の布施行を解説するために真言乗の文献が用いられている。

6 『降三世大儀軌王瑜伽タントラ』

上記の引用に続いて布施を解説するために、

灌頂の布施と、法の布施と、富の布施と、食物の布施と、怖れのない布施と、慈愛の布施とである。それらは、弟子と、まだ現れていない心と、比丘と、バラモンと、貧者と、畜生と、微かな心の者と、有情の最後のものたちに順序通りに与えられる¹³。

と、『降三世大儀軌王瑜伽タントラ』が引用される¹⁴。この引用も、前のものと同じく、布施行の解説のための引用である。

7 タントラへの言及

「分別を捨てることが最高の涅槃である」という根本偈の解説において、

⁸ *Mahāvairocanaḥśambodhivikrati-adhiṣṭhānavaiṣṭyasūtra*. Tib. D. No. 497, P. No. 126. 越智 1992: 36-37.

⁹ 望月 2015a: 124.

¹⁰ *Bhāvanākrama* I, Tucci 1958: 506.

¹¹ *Śrīvajracatuḥpūṭhasādhana*. Tib. No. 1611, P. No. 2482.

¹² 望月 2015a: 126.

¹³ *Trailokavijayamahākālpārāja*. Tib. D. No. 482, Ta 34b5-6. 北村、タントラ仏教研究会 2014: 57.

¹⁴ 望月 2015a: 127.

聖 Nāgārjuna の教えにより成就を得た後に、聖 Mañjuḥṣa のお許しを得て、神通を得て、すべてのタントラとすべての経典とすべての律典の意図を一時に心に明らかにして、真実を見る¹⁵。

と述べ、それらを相続した者が Bodhibhadra とする。これは、Dīpaṃkaraśrījñāna 自身の言葉であり、特定のタントラの名称は言及されないが、中観と真言乗の連続性が示されている¹⁶。

8 『吉祥最勝本初仏王経』

波羅蜜乗の最後の「空性修習後に、次第に歓喜地などを得て、菩提は遠くない」という偈の解説において、

輪廻の場所に最高の賢者がいる限り、比類なき衆生のために涅槃することはできない¹⁷。

という『吉祥最勝本初仏王経』が、その他の経論と並んで引用される¹⁸。ここでは、衆生が救済されなければ涅槃を望まない、ということ述べることで、大乘の優れた点が強調されているが、真言乗も大乘を包含するものと認識されている。

9 Tripiṭakamāla の『三理趣灯』

上記の記述の直後に、衆生に対する大悲を備えたものは、望まなくても、完全な悟りを得ることの根拠として、

願 [心] と入 [心] とそのような甚深で広大なもので、退くことのない結果を得ることによっても、大乘は特別に優れたものである¹⁹。

と Tripiṭakamāla の『三理趣灯』が引用され²⁰、「声聞乗よりも波羅蜜乗が特別に優れていると理解すべきである」と波羅蜜乗が結ばれている。

10 Tripiṭakamāla の『三理趣灯』

¹⁵ 望月 2015a: 136.

¹⁶ これと同じ内容は、Śāntideva に対してもなされている。望月 2015a: 142.

¹⁷ Śrīparamādīpāparāja. Tib. No. 487, P. No. 120, Ta 178b5-6, Chin. T. No. 244, 梅尾 1985: 380-381.

¹⁸ 望月 2015a: 145.

¹⁹ Nayatrayapradīpa. Tib. No. 3707, Tsu 13b3-4, P. No. 4530, Nu 13b3-4.

²⁰ 望月 2015a: 146.

前の引用に続いて、真言乗のセクションの冒頭においても、『三理趣灯』が

目的は一つでも、愚昧でなく、方法が多く、困難がなく、利根の者に資格があるので、マントラの論書は特別に優れている²¹。

と引用される²²。「波羅蜜乗より真言乗の方が特別に優れている」と言うことが教理とされている。

11 『智金剛普集大タントラ』

根本偈の「所作と行などのタントラ」の解説において『智金剛集大タントラ』が、

世尊は、次のように、それぞれのタントラの数をお説きになられた。すなわち、所作タントラは四千である。行タントラは八千である。分別タントラは四千である。両タントラは六千である。大瑜伽タントラは一万二千である。それらを広げれば無量である²³。

と同論が引用される²⁴。この引用に基づいて、よく知られている七種のタントラの分類が行われる。そこで分類されるタントラは次の通りである²⁵。

所作タントラ 『宝篋印陀羅尼²⁶』『最勝明タントラ²⁷』『最勝舞者タントラ²⁸』『蘇悉地經²⁹』『蘇婆呼童子經³⁰』『文殊師利根本タントラ³¹』『文殊師利秘密タントラ³²』『金剛頂髻タントラ³³』『不空羼索神變真言經³⁴』『尊勝タントラ³⁵』

²¹ *Nayatrayapradīpa*. Tib. D. No. 3707, P. No. 4530, Nu 17b5-6.

²² 望月 2015a: 147.

²³ *Vajrajñānasamuccayatantra*. Tib. D. No. 447, Cha 11b-5, P. No. 84, p. 253.3.

²⁴ 望月 2015a: 148.

²⁵ 望月 2015a: 148-149.

²⁶ *Guhyadhātukaraṅḍkadhāraṇīsūtra*. Tib. D. Nos. 507, 883, P. No. 141, Chin. T. Nos. 1022, 1023.

²⁷ *Vidyottaramahātantra*. Tib. D. No. 746, P. No. 402.

²⁸ *Mahāyakṣasenapratinartakaparakaḷpa*. Tib. D. No. 766, P. No. 424.

²⁹ *Susiddhikarramahātantrasādhanoḷpāyikapāḷala*. Tib. D. No. 807, P. No. 431, Chin. T. No. 893.

³⁰ *Subāhupariḷcchāsūtra*. Tib. D. No. 805, P. No. 428, Chin. T. Nos. 895, 896.

³¹ *Mañjuśrīmūlakalpa*. Skt. Śāstrī 1920-1925. Tib. D. No. 544, P. No. 162, Chin. T. No. 1191.

³² *Mañjuśrīguhyacakra*. 塚本 1989: 81.

³³ *Sarvatahāgatoṣṇīṣasītāpatrānāmāparājītāmahāpratyaṅgirāvidyārājñī*. Skt. 田久保 1975, Tib. D. Nos. 590-593, 985-986, P. Nos. 202-205, 610-611, Chin. T. No. 944-945, 976-977.

³⁴ *Amoghapāśakalparāja*. Tib. D. No. 686, P. No. 365, Chin. T. No. 1092, 密教聖典研究会 1997.

³⁵ *Krodhaviḷjayamahātantra*. Tib. D. No. 604, P. No. 291.

行タントラ 『大日経³⁶』『金剛手灌頂タントラ³⁷』
 分別タントラ 『ターラー種種出現タントラ³⁸』『三昧耶莊嚴王タントラ³⁹』『一切儀軌⁴⁰』
 両タントラ 『幻化網タントラ⁴¹』『蓮華舞自在タントラ⁴²』
 瑜伽タントラ 『真実撰経⁴³』『吉祥最勝本初仏タントラ⁴⁴』『降三世大儀軌王タントラ⁴⁵』『瑜伽最勝タントラ⁴⁶』『金剛頂タントラ⁴⁷』
 大瑜伽タントラ 『吉祥秘密集会タントラ⁴⁸』『月密明點タントラ⁴⁹』『黒ヤマール・タントラ⁵⁰』『吉祥最勝本初仏タントラ』『撰一切尊タント⁵¹ラ』『一切秘密タントラ⁵²』『調伏有儀タントラ⁵³』『智金剛集タントラ⁵⁴』『毘盧遮那幻化タントラ⁵⁵』『等虚空小品タントラ⁵⁶』『無二最勝タントラ⁵⁷』『金剛頂鬘タントラ⁵⁸』
 無上瑜伽タントラ 『吉祥等虚空広大チャクラサンヴァラ・タントラ⁵⁹』『金剛空行タントラ⁶⁰』『金剛四座タントラ⁶¹』『マハーマーヤー・タントラ⁶²』『仏平等瑜伽タントラ⁶³』『ブッダカパーラ・タントラ⁶⁴』『ヘーヴァジュラ五十万頌⁶⁵』

³⁶ *Mahāvairocanābhisambodhivikurvatyadhīṣṭhānavaipulyasūtra*. Tib. D. No. 494, P. No. 126, Chin. T. No. 848.

³⁷ *Vajrapāṇyabhiṣekamahātantra*. Tib. D. No. 496, P. No. 130.

³⁸ *Sarvathāgatamānitāraviṣvakarmabhavatantra*. Tib. D. No. 726, P. No. 390.

³⁹ *Trisamayūharājatantra*. Tib. D. No. 503, P. No. 134.

⁴⁰ *Sarvakalpasamuccaya*. Tib. D. No. 367, P. No. 9.

⁴¹ *Māyājālamahātantrāja*. Tib. D. No. 466, P. No. 102, Chin. T. No. 890.

⁴² *Padmanarteśvaraguhyārthadharavyūha*. Tib. D. No. 1667, P. No. 2539.

⁴³ *Sarvathāgatattvasaṃgraha*. Skt. Yamada 1981, Tib. D. No. 479, P. No. 112, Chin. T. No. 882.

⁴⁴ *Śrīparamādhyakalparājā*. Tib. D. No. 487, P. No. 119, Chin. T. No. 244.

⁴⁵ *Trailokyavijayamahākālpārājā*. Tib. D. No. 482, P. No. 115, 北村、タントラ仏教研究会 2014.

⁴⁶ *Yo ga nam par rgyal ba*.

⁴⁷ *Vajrasikharamahāguhyayogatantra*. Tib. D. No. 480, P. No. 113, 北村、タントラ仏教研究会 2012.

⁴⁸ *Guhyasamājahākālpārājā*. Skt. Matsunaga 1978, Tib. D. No. 442-443, P. No. 81, Chin. No. 885.

⁴⁹ *Candraguhyaṭilakamahātantrarājā*. Tib. D. No. 477, P. No. 111.

⁵⁰ *Kṛṣṇayamāritantra*. Tib. D. No. 467, P. No. 103.

⁵¹ *lHa thams cad 'dus pa*.

⁵² *Sarvarahasyatantrarājā*. Tib. D. No. 114, P. No. 481, Chin. T. No. 888.

⁵³ *'Dul ba don yod pa*.

⁵⁴ *Vajrajñānasamuccayatantra*. Tib. D. No. 447, P. No. 84.

⁵⁵ *rNam par snang mdzad sgyu 'phrul*.

⁵⁶ *Khasamatantrarājā*. Tib. D. No. 386, P. No. 31.

⁵⁷ *Advayasamatāvijayākhyāvikalpamahārājā*. Tib. D. No. 452, P. No. 87, Chin. T. No. 887.

⁵⁸ *rDo rje btsug tor rgyud*.

⁵⁹ *Tantrarājāśrīlaḥṣaṃvara*. Skt. Gray 2013, Tib. D. No. 368, P. No. 16.

⁶⁰ *Vajradākamahātantrarājā*. Tib. D. No. 370, P. No. 18.

⁶¹ *Catuṣpāṭhamahāyoginītantrarājā*. Tib. D. No. 428, P. No. 67.

⁶² *Mahāmāyātantra*. Tib. D. No. 425, P. No. 64.

⁶³ *Sarvabuddhasamayogaḍākinījālasaṃbharottatantra*. Tib. D. No. 366, P. No. 8.

⁶⁴ *Buddhakaṭātantra*. Tib. D. No. 424, P. No. 63.

⁶⁵ *Hevajatantra*. Skt. Snellgrove 1959, Tib. D. Nos. 417-418, P. No. 10, Chin. T. No. 892.

このような区分に対する他者の見解として、

『救護餓鬼焰口陀羅尼』と『大孔雀明王陀羅尼』などの残りのすべての陀羅尼も所作タントラである⁶⁶。

と補足されている。これらのタントラの区分は、後の **Bu ston** のものとは異なっており、その文献的典拠の確認も必要であるが、彼の密教観を示すものとなっている。

12 未確認タントラの引用

タントラの分類に続き、根本偈の軌範師の灌頂の説明において、未確認のタントラが複数引用される。

阿闍梨が喜ばず、灌頂を得ずに、聞くことなどを始めても、結果がないものになるであろう⁶⁷。

と言うものと、

灌頂の許可がなしに、マントラは自分自身で領受するものである⁶⁸。

さらに、

マントラを自分で領受する者は地獄の者であり、マントラも完成させずに、身体を汚しているだけである⁶⁹。

いずれも、灌頂の必要性を述べるものである。それに続く成就の儀軌については、

この儀軌も、次のように『聖三昧莊嚴王タントラ』の儀軌と『世尊宝楼閣陀羅尼⁷⁰』の儀軌と『世尊薬師瑠璃光王経⁷¹』の儀軌により罪を浄化し、資糧を集め、

⁶⁶ 望月 2015a: 149.

⁶⁷ 望月 2015a: 150.

⁶⁸ 望月 2015a: 150.

⁶⁹ 望月 2015a: 150.

⁷⁰ *Mahāmañivipulavimānaviśvasupraṭiṣṭhitaguhyaparāmarahasyakalparājādhāraṇī*. Tib. D. Nos. 506, 885, P. Nos. 138, 510.

⁷¹ *Bhagavānbhaiṣajyaguruvaidūryaprabhasyapūrvapraṇidhānaviśeṣavistarasūtra*. Tib. D. No. 504, P. No. 449.

吉兆が生じたならば、その人は真言乗に入ることが許されるが、次のように過去世においてマントラを行じておらず、また三帰依と願の菩提心と入の菩提心を起こしただけでは、マントラを説くことと、それによる成就と、見ることと、聞くこととは許可されない⁷²。

と述べられる。ここでは、真言乗に入る儀軌を説く文献として上記のテキストが言及されている。

13 『従本初仏出現タントラ』

根本偈の 257-268 は、同タントラからの引用である。ここに同タントラが説かれる理由を、真言乗に対する誤った考察を排除するためである、とする。誤った考察とは、増益と損減で、前者は終わらせるべきもの、後者は防ぐものとされる⁷³。

14 Avadhūtipa

上記の解説において、自らの師である比丘で乞食者である Avadhūtipa の言葉が、

もしもその二つの灌頂を受けていないのならば、阿闍梨と弟子は一緒に悪趣に行くであろう⁷⁴。

と引用されている。

15 『深密授記大タントラ』

上記の引用に続いて、『深密授記大タントラ』が、

ヨーガの教誡がない者たちは、鉄の釣り針がないままに行い、「私はヨーガ行者である」と言い、法を欺くことになるであろう。

マントラと大印契の行によって、生活し、僅かばかりの過失にも呪詛をするであろう。

次のように成就方法だけを知った後に偉大なタントラを説明し、どこにおいても利得となるものを得て、正法が説かれるであろう⁷⁵。

と引用される⁷⁶。

⁷² 望月 2015a: 151.

⁷³ 望月 2015a: 152.

⁷⁴ 望月 2015a: 152-153.

⁷⁵ *Sandhivvyākaraṇatantra*. Tib. D. No. 444, Cha 162a2-4.

⁷⁶ 望月 2015a: 153.

16 Padmavajra

さらに、Padmavajra の言葉として、

そのようなものもそれら自身も、すべての罪なる行為をもっており、正しくない道に入ってから、地獄に行くであろう。

と引用される⁷⁷。これらの典拠によりマントラを誤って考察する罪過が説かれている。

17 Avadhūtipa

タントラの意図を知らずに損滅する者は地獄に行くことを述べ、『総方広総持経』を引用した後に、師である比丘で乞食者の言葉として、

それ故に、真言乗を「魔により説かれた」と軽蔑するべきではない。すべての乗を捨てても、ここにいれば大印契を得る。

と述べられている。ここでは、真言乗を悪法であるとする者に対して真言乗も仏説であることを示す根拠として引用されている。

18 『灌頂説示』

さらに前述の『従本初仏出現タントラ』の意味について、自分の師である比丘である乞食者と gSer gling pa の教誡に依存しているとして『灌頂説示⁷⁸』が引用される。

そのうち灌頂は二種である。すなわち在家の方向によるものと、梵行の方向によるものである。在家の方向によるものとは何か、と言えば、タントラに説かれた限りのすべてである。梵行の方向によるものとは何か、と言えば、その同じものから、秘密と般若智のものを除いたものである。何故にその二つが除かれるのか、と言えば、次のように、仏法によってから生じたあらゆる善はすべて、説法が存在してから生じたものであり、説法が存在することも梵行だけにより、二種の灌頂は梵行を滅するものであり、梵行を滅したら仏の教えが減びるであろうし、それが減びることで福德を作ることも中断し、その根拠から無量の不善が生じるので、その二つは梵行のために捨てられるものである⁷⁹。

⁷⁷ 望月 2015a: 154.

⁷⁸ *Sekanirdeśa*, Tib. D. No. 2252, P. No. 3097.

⁷⁹ 望月 2015a: 155.

典拠の確認はできていないが、根本偈の二種の灌頂の特殊性を示す根拠として引用されている。

19 Avadhūtipa

続く根本偈の「阿闍梨灌頂」の説明において、師である比丘の乞食者 Avadhūtipa の言葉として、

「そのようならば、梵行者が大乘の者であっても、大乘の部分をもたないことになってしまう」と言うのならば、彼はこれを確かに誤解して行っている。誰であれ瓶と阿闍梨〔灌頂〕と、許可を得たタントラの解説と聞くことと考察には灌頂のための福分がそなえられている。そのようならば、「在家の者にも秘密と知恵の灌頂は必要がないことになってしまう」と言うのならば、それらは不必要なものでもあり、その反対でもある⁸⁰。

と引用されている。さらに、師である聖者の言葉として、

悲心により衆生利益を知り、心を悲心により制御されている菩薩が何をなしても、その相続に過失はなく、それに続いて福德が広がるであろう⁸¹。

と述べ、さらに他の聖者の言葉を引用した後に、Dīpaṃkaraśrījñāna 自身が、

師である比丘の乞食者の過失が成立しないことは、師が著した著作自身を見るべきである⁸²。

と結ばれている。このように、二種の灌頂に関する記述の詳細は師である Avadhūtipa に依存していることが確認できる。さらに他者の説として、『従本初仏出現タントラ』と『律有義タントラ』が言及されている。

20 『チャクラサンヴァラ』

真言乗の最後に、著者自身によるまとめの偈頌が述べられており、その中の一偈において、

⁸⁰ 望月 2015a: 156.

⁸¹ 望月 2015a: 157.

⁸² 望月 2015a: 157.

その教えのために心を修習すれば、この時に菩提が得られるので、『チャクラサンヴァラ』などのタントラの教誡を師の相続をもつお方をお願いするべきである⁸³。

と同タントラが言及される。本論では、タントラの具体的な教義には言及せず、それらは師より教授を受けるべきとされる。

21 『チャクラサンヴァラヨーガタントラ』

さらにテキストの奥書の偈において、

信仰と尊敬による奉仕を正しい在り方のままになすことによる誓願の心髄が『チャクラサンヴァラヨーガタントラ』である。八万四千の法の集まりから心髄の心髄となったものがこれであり、昼夜あらゆる場所で心でこれを修習しなさい⁸⁴。

と述べられている。本論の末尾において、すべての教えの心髄として同タントラが言及されている。本文では、このタントラへの言及はないのだが、著者はこのタントラ的重要性を認識していたことがわかる

III 『中観優婆提舎開宝篋論』

1 『大日経』

菩提心の解説において、Nāgārjuna の論書や大乘経典と並んで『大日経』が、

悟りは虚空の特相をもち、一切の分別を離れている⁸⁵。

と引用される。ここでは多くの宝のような経典と真言乗のタントラにこの意味が説かれているとされ、菩提心が大乘経典と真言乗のタントラに共通に説かれていることが述べられている。『大日経』の引用に関しては、Kamalaśīla の『修習次第』においても大乘経典と並んで引用されていることから、大乘との真言乗との隔たりが少ない典籍と認識されていたことがわかる

2 『秘密集会タントラ』

同じ箇所にも、『秘密集会タントラ』が、

⁸³ 望月 2015a: 159.

⁸⁴ 望月 2015a: 161.

⁸⁵ 宮崎 2007: 75.

[自心は] 全ての実体を離れていて、蘊や界や処や認識対象や認識主体を捨てていて、法は無我であるという点で平等であるので、自心は始めから不生であり、空性を本質とする⁸⁶。

と引用され、その心が無自性であることの根拠として、ここでも他の大乘経典と並んで引用されている。

3 『甚妙慧タントラ』

菩提心の摂受の項のうち、一般的な有情を捨てるべきではない、と言うことの解説において『大乘莊嚴經論』を引用した後に、

菩薩は自らの幸福に執着しない。自らの苦しみにによって悩むことはなくても、他人の苦しみにによって苦しむであろう。他人の幸福を菩薩は喜ぶであろう⁸⁷。

と、『甚妙慧タントラ』が引用される。

4 『吉祥最勝本初仏王経』

上記の引用に続いて、『吉祥金剛荼迦タントラ』と『吉祥最勝本初仏王経』にも説かれているとして、

すぐれた賢者は、輪廻の場にいる限り、比類なき有情利益を涅槃せずになすことができる⁸⁸。

と引用する。この句は『菩提道論細疏』の第八の引用と同じものであり、ここでも大乘と真言乗の共通性が説かれている。

5 『甚妙慧タントラ』

菩提心の摂受の項のうち、内的方便の熟達において、『甚妙慧タントラ』が、

菩薩は自らの幸福に執着しない。自らの苦しみにによって悩むことはなくても、他人の苦しみにによって心が苦しめられる。[そして] 他人の幸福を菩薩は喜ぶ⁸⁹。

⁸⁶ 宮崎 2007: 75.

⁸⁷ 宮崎 2007: 85.

⁸⁸ 宮崎 2007: 85.

⁸⁹ 宮崎 2007: 86.

と、先ほどと同じ句が引用される。

6 『秘密集会タントラ』

仏の説明において、

輪廻に始まりと終わりはないので、聖マンジュシュリー（文殊）にも始まりはなく本初仏である。三時のすべての仏の心は智慧である。すべての仏は六族にまとめられる。六族の胸に入ったヴァジュラティークシュナなどの智慧薩埵や、『吉祥秘密集会タントラ』の尊格の中心をなすマンジュヴァジュラサマンタバドラや、マンジュヤマーリの尊格グループの中心をなす者や、吉祥なるヴァジュラバイラバがヘルカとして現れた者や、吉祥なるサンバラの釈タントラ『アビダーナ』の尊格グループの中心をなす者や、シンハナーダや、睡蓮や、賢い若者や、ジャンペルツィクチンシヨヌなど〔として〕教化対象の信解に応じて現れる⁹⁰。

と述べられる。ここでは同タントラに出てくる尊格が言及され、その他の真言乗の尊格と同様に、仏が所化に応じて、さまざまな姿で現れることが示される。

7 『大日経』

上記の説明と同じ項目に、尊者ターラーなどに言及した後に、『大日経』が、

一切知者〔となる〕因は菩提心である。〔一切知者となる〕根は大悲である⁹¹。

と引用され、慈と悲をともなった菩提心を起こすことが説かれ、さらに、

犯したなら修復できない法は四つである。菩提心を捨てること、有情を傷つけること、その法を捨てること、物惜しみすることである⁹²。

と同じタントラが引用される。前述と同じように、再び同タントラに基づいて、菩提心の重要性が述べられている。

8 Avadhūtipa

さらに、慈しみを説明するために、Avadhūtipa の説として、

⁹⁰ 宮崎 2007: 95-96.

⁹¹ 宮崎 2007: 97.

⁹² 宮崎 2007: 97.

「自らの誤りを考える場合は、鋭い目を持つ者のように、他人の誤りを考える場合は盲人のように、真っ直ぐ、おごることなく、常に空性を修習すべきである。直接、間接の慈悲によって、自と他を入れ替えるべきである。何故ならば、自分より有情を慈しむためである」と師匠の Nāropa 御前は説かれた⁹³。

と引用されている。Dīpaṃkaraśrījñāna の師である Avadhūtipa が自らの師である Nāropa に聞いた話を伝えた形になっている。

9 『金剛鬘タントラ』

仏の法身の説明において、『金剛鬘タントラ』が、

すべてのものは識蘊に帰入し、その識もまた光明に [帰入する]。[その光明は]涅槃であり、一切空であり、法身であるともいわれる⁹⁴。

と引用される。ここにおいても『法集経』などの大乘経典や Nāgārjuna らの論書と並んで同タントラが引用されている。

10 『吉祥智金剛集タントラ』

さらに法身を得た仏の解説において『吉祥智金剛集タントラ』が、

諸仏もまた、利他を行わない時には、真実の究極に住し、一切の戲論を寂滅している⁹⁵。

と引用されている。

11 『金剛鬘タントラ』

さらに、同じ箇所において『金剛鬘タントラ』が、

これが勝義諦であり、それ [は] 無顕現であり、無相である。また勝義諦と言われるものがすべての仏の住処である⁹⁶。

と引用されている。以上の第六から第十一の引用は、仏の特性を述べたものであり、大

⁹³ 宮崎 2007: 99-100.

⁹⁴ 宮崎 2007: 102.

⁹⁵ 宮崎 2007: 103.

⁹⁶ 宮崎 2007: 104.

乗経典だけでなく、同項目については、諸タントラにもその典拠が求められていたことがわかる。

12 『文殊師利根本儀軌』

上記の仏と菩薩の特性に対する反論の答えとして、

君は、智慧が清浄でなく、愚かである。『大雲経』や『入楞伽经』や『大法鼓经』や『文殊根本儀軌』に何度も何度も授記されている Nāgārjuna の教義を損滅する者は自滅する⁹⁷。

と同タントラが言及される。この引用に続いて、ここで言及される授記を説く経典が実際に引用され、Nāgārjuna の授記が解説される。

13 Nāgārjuna 『五次第』

Nāgārjuna の『菩提心釈』と並んで、彼に帰される密教文献の『五次第⁹⁸』が、

そこに、これらの精神集中や精神集中でないものが一切存在せず、実体や実体ではないものを離れたものが双運であると、説法者は説いた⁹⁹。

と引用される。この偈は、法界において無分別智は認められないことを述べたものとされている。

14 Avadhūtipa

さらに「仏に身体や智慧がなくなってしまう」と言う反論に対して、師である Avadhūtipa と師である Tāmradvīpa の説として、

「智慧は法界と異ならない。法界に対して自ら生じる智慧と名付けるのである。[それは] 不可思議であり、言葉による戯論を離れている。教化対象の特質は五種である、と説かれている」と軌範師ナーガールジュナが説いた¹⁰⁰。

と述べられている。これも Nāgārjuna のテキストの引用ではなく、二人の師から聞いた話として言及されている。

15 タントラの引用

⁹⁷ 宮崎 2007: 104.

⁹⁸ *Pañcakrama* 5.15-16.

⁹⁹ 宮崎 2007: 104.

¹⁰⁰ 宮崎 2007: 105.

さらに、仏は衆生が涅槃するまで生じることを説明するために、

考えも様々で信解も多様な有情によって、多くの区別が生まれる。一つであるのに、多くの水の [入った] 器に [多くの] 月の映像が現れることと等しい¹⁰¹。

とタイトル不明のタントラが引用される。以上の第十二から第十四までは、対論者に対する中観派の反論の典拠として引用されているのだが、Nāgārjuna や Āryadeva と並んでタントラが引用されており、さらには『大乘莊嚴經論』も引用されている。

16 密教行者の区分

諸学派の分類において、中観と唯識などの諸学派に続いて、密教行者の区分が述べられる。それらを区分すると次の通り¹⁰²：

瑜伽・所作タントラ Buddhaghya, Śākyamitra, Ānandagarbha
『秘密集会タントラ』 Indrabhūti, Buddhajñāna
『サンヴァラ・タントラ』 Caryāpāda, Vajraghaṇṭā, Lūyīpāda
『ヘーヴァジュラ・タントラ』 Ḍobīheruka, Saroruhavajra
『マハー・マーヤ』 Kukuripāda, Dharmapāda

ここでは、論師の名称があげられ、それぞれが注釈書を著したタントラに分類されている。

17 Nāgārjuna による密教文献

上記の論師の分類に続き、Nāgārjuna の著作が分類されている。その最後に、タントラに関する著作が次のように列挙される：

鋭い能力を持つ者の中でも鋭く、その中でも鋭い大乘の真言 [乗] の器となった者達に、秘密集会タントラの意図である『秘密集会入曼荼羅灌頂儀軌』と『儀軌二十頌』と『成就法略集』と『経合集』と『五次第』をお作りになった。[また] 『吉祥なる四金剛座マハータントラ複註』をお作りになった。『ナーマサンギーティ注』と尊者 Khasarpana の成就法と『六字論』と Arapacana や Vāgīśvara や語施童子などの成就法をお作りになった。Trisamayavyūha の儀軌と Siddhaikavīra の成就法やその説示である『善如意牛』と『供物三十頌』と『一切仏集合タントラ竟究経

¹⁰¹ 宮崎 2007: 106.

¹⁰² 宮崎 2007: 108-109.

次第大説示』の多くをお作りになった¹⁰³。

典拠の確認ができないものもあるが、Dīpaṃkaraśrījñāna が認識していた Nāgārjuna による密教文献は以上である。

18 『文殊師利根本儀軌』

前述の Nāgārjuna の授記を説く経典が引用されており、その中に『文殊師利根本儀軌¹⁰⁴』が、

Nāgārjuna という比丘が現れ、無自性の意味の真実を知る。マーユリーという陀羅尼を成就して、六百年生きるであろう¹⁰⁵。

と引用される。

19 Candrakīrti の『灯作明』

Nāgārjuna の授記について、『入楞伽経』と『法鼓経』の引用に続いて、Candrakīrti の『灯作明¹⁰⁶』が、

そのように大軌範師 Nāgārjuna 御前は、自身の目的を獲得し、自ら理解すべき大持金剛三昧を世間の人々に説き、神と人の安楽を越え、外教徒や声聞や独覚達の禅定は等至の安楽をも越え、生滅を離れあらゆる優れた形を備えた如来の身体、[その] 身体を見て魅せられることない、十力と四無畏などの仏のすべての功德によって莊嚴された如来身を得て、極楽に行き、八つの功德自在を持って住しているのである¹⁰⁷。

と引用される。

20 アーリヤデーヴァ 『行合集灯』

Candrakīrti の密教文献に続いて、Āryadeva の密教文献である『行合集灯¹⁰⁸』が、

世尊シャーキャムニが、夜半に悟りの三昧を現前させて以来、仏陀の教説がある

¹⁰³ 宮崎 2007: 112-113.

¹⁰⁴ *Mañjuśrīmūlakalpa* 53.449-450.

¹⁰⁵ 宮崎 2007: 115.

¹⁰⁶ *Pradīpodyotanāṭikā*. Chakravarti 1984: 226.

¹⁰⁷ 宮崎 2007: 115-116.

¹⁰⁸ *Caryāmelāpakapradīpa*. Tib. D. No. 1803, Ngi 90a2-4, P. No. 2668, Gi 101b8-102a2.

限り、軌範師聖 Nāgārjuna 以降、師匠から師匠に伝わったのであり、軌範師のこの教説は、一切の仏と菩薩と金剛ダーキニーに加持されているのである¹⁰⁹。

引用される。この引用に続いて、同様の内容を説く Candrakīrti のテキストが引用されている。

21 Avadhūtipa

授記に続いて、Nāgārjuna の誓願身が極楽にいることについて、

私の師匠である大尊師瑜伽自在の Avadhūtipa は、神通力によって、以前いらした通りにお顔を見て法を聞いている。時々シュリーパルヴァタを見て住している。聖者の弟子尊師 Nāgabodhi に、現在吉祥なる Śabarīpa と称される者も常に法を聞いている¹¹⁰。

と述べられている。この引用文は、「Avadhūtipa によれば」に始まり、引用文の中に「私の師匠である Avadhūtipa」とあり、引用後に「Avadhūtipa が説かれた」とあり、引用文に問題がある。

22 タントラの引用

『菩提道灯論』と同じように、本論の最後に真言乗について説明されており、秘密灌頂と般若智灌頂を梵行者に与えてはならないことが述べられ、そこにおいてタイトル不明のタントラが、

真言 [乗] という大海は、成就の波が覆っている。喩例、無記の言葉、推量の知によって理解することはできない¹¹¹。

と引用される。

23 Avadhūtipa

上記の引用に続いて、「私の師匠 Yavadvīpa の乞食者 Avadhūtipa は」として、

[たとえ] 二乗に捨てられても、これ (真言乗) を実践する者は、大印契を得る。

¹⁰⁹ 宮崎 2007: 116.

¹¹⁰ 宮崎 2007: 117.

¹¹¹ 宮崎 2007: 117-118.

それ故に、この真言乗を、どんな賢者が行じないであろうか¹¹²。

と引用される。

24 Tripiṭakamāla の『三理趣灯』

上記の引用に続いて、Tripiṭakamāla の『三理趣灯¹¹³』が、

同一の目的であっていても、迷妄がないから、方便が多いから、難行がないから、能力の鋭い者を対象としているから、真言乗は非常に優れている¹¹⁴。

と引用される。この引用は『菩提道灯論細疏』の第十五の『三理趣灯』と同じである。最後に真言乗が優れていること、灌頂を得ずに入れないこと、波羅蜜乗の解脱と混同すべきでないこと、器ではないものに説いてはならないことなどが説かれて著書は結ばれる。

Nāgārjuna、Āryadeva、Candrakīrti については、彼らに帰される密教文献も引用されており、中観の延長線上に密教をとらえていたことがわかる。自らの師である Avadhūtipa の引用については、典拠の明示がなく、直接に聞いたことが述べられているようである。

IV 『業分別論』

1 『密修習大金剛尖タントラ』

業には重いものと軽いものがあるとして、それをさらに境と想に区別したものが、声聞乗と大乘とでさらに区別されており、大乘の境による重いものについて『密修習大金剛尖タントラ¹¹⁵』が次のように引用される。

密教行者の主よ、それらの過失は重くなったものと、普通のものとはである。そのうち、父母となった人などを殺したり、殴ったりすることは、身体の思い過失である。殺生などの他の三つが、身体の普通の過失である。正法を捨てること、諸天に対して暴言をはくこと、父母や師になった人に対して悪口を述べることは、口の重い過失である。ある人が信仰により善を領受して始めた話の際に、「世間には彼岸がない」という言葉を出世間の虚妄として述べることは、口の悪行である。善を中

¹¹² 宮崎 2007: 118.

¹¹³ *Nayatrāyapradīpa*. Tib. D. No. 3707, P. No. 4530, Nu 17b5-6.

¹¹⁴ 宮崎 2007: 118.

¹¹⁵ *Vajrasīkhamahāguhyayogatantra*. D. No. 480, P. No. 113.

断する冗談の言葉を言うことと、密かに罵ることと、不善業の話とは、口の普通の過失である。意の過失は三つである。すなわち、真実から心を損なうことと、心所の過失と、無明の過失とである。それらも同じ十不善業道に執着しないことが、心の過失である。傲慢、我慢、怒り、衆生に暴力を振るうことと、貪心により他者の女性を愛することと、他者の生命を奪うことと、師として現れた人に対して正直でなく、嫌悪することが心の過失である。十善業と六波羅蜜を投げ捨て、忘れてしまうことと、疑惑が生じることと、意を妨げてしまうことが、無明の過失である¹¹⁶。

と引用される。ここでは、不善なる行為について列挙されているが、密教独自の教義を示すものではなく、大乘の業の特徴としてタントラが引用されている。

2 『大日経』

続いて、大乘の十不善業道について、『大日経¹¹⁷』が引用される¹¹⁸。長文になるために、引用文をここに示さないが、この密教経典が大乘の文脈で引用されることについては、前述の通りである。

V. その他の小部集

1 『一念説示』

テキストの冒頭に、師に言及して、

Nāgārjuna に敬礼してから、Avadhūtipa が自分で速やかに入る解説を書いている¹¹⁹。

と述べられる。敬礼文に Avadhūtipa が言及されているだけだが、本論ではこの両者の著書に関する混乱が見られる。すなわち、後半で Nāgārjuna の見解として『悪見除滅論』が引用されるのだが、同論は Advayavajra としても知られる Avadhūtipa の著作集にも収録されている論書である。このことは、真言乗文献を Nāgārjuna の著書として引用されているとともに、その後のテキスト伝承に疑問を生じさせるものでもある。

2 『行集灯論』

第二、三偈において、

¹¹⁶ 望月 1996c: 12.

¹¹⁷ Tib. P. Tha 183b5-185a4; Chin. T. No. 848, p. 39b4-c25.

¹¹⁸ 望月 1996c: 15-17.

¹¹⁹ Tib. D. No. 3928, Ki 94b4-5.

「真言と波羅蜜に依ってから菩提を成就した者である」と師と仏が説かれているので、その意味を私により書かれる。

真言はここでは述べられず、波羅蜜の理趣の行の菩薩行の經典のみが私により解説される¹²⁰。

と述べられる。ここでは、真言乗と波羅蜜乗の相違が認識されており、前者を説くことの制限も示している。

3 『行歌¹²¹』

第三偈において、

マンダラの輪の修習を堅固にすべきであり、真実を知るヨーガ行者はここには住しない。述べられるべきものは「最高の大楽」と言われ、そのマンダラをまとめて、堅固にすべきである。

と述べられる¹²²。本論は、小部集に収録されものが中観部に再録されているのだが、秘密部所収の『金剛座金剛歌』と対になる文献であるために、本来は真言乗の立場で著されたものと考えることができる。

4 『波羅蜜乗仏造作儀軌』

大日如来が二度言及され、真言を読むことが二度述べられている。そのタイトルには、波羅蜜乗と述べていることから、その立場で小像を作ることを述べたものであり、真言乗の立場のものではないことを示している。

5 『超世間七支儀軌』

第一偈において、「マントラの帰依であり、金剛の帰依である」と述べられ、第二偈において「金剛の供養」、第六偈では「金剛のヨーガ」などが言及される。本論も、小部集に収録のものが中観部に再録されており、秘密部所収の伝承もあるために、真言乗の立場で著されたものと考えることができる。

6 『一切業障摧破儀軌』

北京版、ナルタン版の雑部に収録の本論では、マントラが二度引用される。これは、本論が業障浄化のための薬師如来の儀軌を述べたものであるために、関連するマントラを唱えることを述べたものである。

¹²⁰ Tib. D. No. 3960, Khi 312b4-5.

¹²¹ 本論はテンギユルの北京版の中観部に収録されているだけでなく、秘密部にも収録されており、後者には同論の注釈書も収録されている。

¹²² 望月 2011d: 5.

まとめ

『菩提道灯論』では、真言乗のセクションにおいて、『従本初仏出現タントラ』が言及され、修行者に対する波羅蜜乗と真言の明確な区別が述べられる。

同論の自注では、七種供養の解説において『統鬘タントラ』が言及され、七部の波羅提木叉の解説において『真実撰集大タントラ』が引用され、Asaṅga の『瑜伽師地論』に七部の波羅提木叉の補足として、『文殊師利根本儀軌』が引用される。般若波羅蜜のセクションでは Jñānakīrti の『波羅蜜多乗修習次第概説』の引用から『大日経』が孫引きされ、布施波羅蜜の解説で『四座タントラ』と『三界中勝甚意大王瑜伽タントラ』が、波羅蜜乗の最後に『吉祥最勝本初仏王経』と Tripiṭakamāla の『三理趣灯』が引用され、中観と真言乗の連続性が示されている。真言乗のセクションでは、『三理趣灯』と『智金剛普集大タントラ』が引用され、七種のタントラの分類が行われる。さらに師の Avadhūtipa の言葉、『深密授記大タントラ』、Padmavajra の言葉が引用される。また根本偈の『従本初仏出現タントラ』への言及では、師の『灌頂説示』を引用して説明し、真言乗の最後と奥書では、『チャクラサンヴァラ』が言及される。

『中観優婆提舍開宝篋』では、菩提心の解説において、『大日経』と『秘密集会タントラ』が、菩提心の特殊性の解説において、『甚妙慧タントラ』と『吉祥最勝本初仏王経』が引用される。仏と菩薩の解説では、慈悲の説明で『大日経』と Avadhūtipa の言葉が引用され、法身の説明で『金剛鬘タントラ』と『智金剛集タントラ』と Nāgārjuna の『五次第』と、再び Avadhūtipa の言葉が引用される。諸学派とその論師の解説では、タントラの注釈書による論師の区分がまとめられ、Nāgārjuna の著作についても密教関係の著作がまとめられている。Nāgārjuna の授記の解説では、大乘経典と並んで『文殊師利根本儀軌』と Candrakīrti の『灯作明』と Āryadeva の『行合集灯』が引用される。テキストの最後は、真言乗の解説があり、Avadhūtipa の言葉と『三理趣灯』の引用で結ばれる。

『業分別論』では、『密修習大金剛尖タントラ』と『大日経』が引用されるものの、大乘の典拠として引用されている。『大日経』に関しては、これは先行する論師の論書における引用の影響も考えられるが、初期密教経典であるために大乘と共通の教義を見ることができからであろう。その引用の在り方については、彼は真言乗の解説のためだけに密教文献を引用するのではなく、声聞乗や波羅蜜乗の解説においても大乘の経論と並んで引用している。それは、前者を後者で補うだけでなく、基礎的部分における両者の共通性を認めているからであろう。ただし、両者の差異を明確にする際にも、密教文献が引用されている。

小部文献における言及に関しては、顕教文献には密教文献への言及はほとんど見られない。ただし、小部文献については、その収蔵先が顕密の両方にわたっているものもある。それらの文献には密教の教義への言及も見られるが、それらは真言乗の文献をテングルの編者が顕教文献として取り扱ったことに起因している。

また、Nāgārjuna、Āryadeva、Candrakīrti については、彼らに帰される密教文献も引用されている。このことは、彼らが顕密の両方の教義を説く論師と認識されていたことを示しており、Dīpaṃkaraśrījñāna が中観の延長線上に密教をとらえていたことがわかる。また、自らの師である Avadhūtipa の引用については、典拠の明示がなく、直接に受けた教えの内容も含まれている可能性がある。

第5編 チベット仏教に与えた影響

第1章 『ラムリム・タルゲン』に引用される『菩提道灯論』

はじめに

Dīpaṃkaraśrījñāna が『菩提道灯論』において形成したラムリム思想は、チベット仏教に大きな影響を与え、さらに展開した。それが、sGam po pa bSod nam rin chen (= Dwags po lha rje, 1079-1153) の『ラムリム・タルゲン (*Dam chos kyi yid bzhin gyi nor bu thar pa rin po che'i rgyan zhes bya ba theg pa chen po'i lam rim gyi bshad pa*) であり、それをさらに大成したのが Tsong kha pa の『ラムリム・チェンモ』である。本章では、『菩提道灯論』と『ラムリム・タルゲン』との関係について考察する。

sGam po pa について

タクポ・カギユ派の開祖でもある sGam po pa は¹、医術を学んでいたが、二十六歳の時にカダム派の Sha ba gling pa から具足戒を受けた後、カダム派の教義を学んでいた。その後 1110 年に、詩人としても知られる Mi la ras pa (1057-1135) に師事し、秘密の口伝を受けた。これにより、ラムリムと大印契の統合を試みたとされている。1121 年にガムポに僧院を設け、多くの弟子を持つことでタクポ・カギユ派が発展していった。

彼の仏教観については、『ラムリム・タルゲン』に見られるように、基本的には多くの引用をする『菩提道灯論』に説かれているものとそれほど違いはない。それは中観思想に基づいているように見えるものの、瑜伽行思想、あるいは如来蔵思想にも依拠するものである²。これは彼が中観思想を如来蔵思想に変換したというよりも、Dīpaṃkaraśrījñāna の「大中観³」を忠実に再現したものである。

『ラムリム・タルゲン』に引用される『菩提道灯論』

『ラムリム・タルゲン』と『菩提道灯論』の関係を考察するにあたり、この二つの文献の内容を比較してみる。後者は偈頌で書かれている比較的短い著書であるのに対し、前者は『菩提道灯論』ばかりでなく多くの引用を含む大きな著書であるために⁴、その構成を全く同等に比較することはできない。そこで、ここに『ラムリム・タルゲン』の各章のタイトルをあげ⁵、そこに引用される『菩提道灯論 (=BPP)』の偈を指摘する。

¹ 以下の記述は、立川 1987: 6-7, 1989: 180-182, 山口 1989: 21-115 による。

² 山口 1989: 66-70.

³ 袴谷 1989a: 131-135.

⁴ 本書がもつアンソロジー的性格については、望月 2015d: 297-298.

⁵ テキストについては、Xylographic print from blocks preserved at rum btegs (rumtek) karma chos sgar in Sikkim. Set 1-10. LMPj-011445. R-1625. LCCN-72-905370 を用いた。また、和訳はツルティム、藤仲 2007 に、英訳は、Guenther 1959, Khenpo Konchog Gyaltsen 1998, Ricard 2003 がある。 Cf. 小玉 1967.

- 第1章 原因 (3a2)
- 第2章 所依 (8a5)
BPP 5-6, 9-20 (11a5-b4)
- 第3章 縁：善友 (14b4)
- 第4章 諸行無常 (21a3)
- 第5章 輪廻の苦 (29b1)
- 第6章 業果 (43b1)
BPP 13-16 (52a4-5)
- 第7章 慈愛と悲心 (52b2)
BPP 17-20 (58b2-3)
- 第8章 帰依と律儀(58b4)
タイトルのみ [Cf. BPP 25-36] (59a3)
BPP 79-82 (66a4-5)
- 第9章 菩提心の摂受 (67b1)
BPP 89-94 (72b2-4)
- 第10章 願の菩提心を起こす学処 (89b5)
BPP 47-50 (90b6-91a1)
BPP 137-138 (91b3-4)
BPP 71-72 (92a2-3)
BPP 73-74 (92b4-5)
- 第11章 入の菩提心を起こす学処 (94a6)
BPP 130-132 (94b1-2)
- 第12章 布施波羅蜜 (96b6)
- 第13章 戒波羅蜜 (104b5)
- 第14章 忍波羅蜜 (111a6)
- 第15章 精進波羅蜜 (116b2)
- 第16章 禅波羅蜜 (120b3)
BPP 153-4, 143-144 (120b6-121a1)
- 第17章 般若波羅蜜 (131a4)
BPP 173-176 (131b6-132a2)
BPP 189-192 (134a1-2)
BPP 193-194 (134a5)

Atisha (141b1-2)

Atisha (144a2-4)

Atisha (149a6)

第 18 章 五道の設定(150a1)

BPP 238-239 (150a3)

第 19 章 十地の設定(153b1)

BPP 239 (153b3)

第 20 章 結果である正等覚(167a2)

BPP 240 (167a3)

第 21 章 仏の働き(177a2)

以上のように、全二十一箇所と言及のうち、『菩提道灯論』からの偈の引用が十六度、タイトルのみと言及が二箇所、他のテキストからの引用が三箇所となる。最後のものについては、「尊主が (jo bos)」と言うのみで、テキスト名は述べられていない。引用される五十三パーダは全体の二割であり、このことから本論が『菩提道灯論』を解説するために書かれたテキストであるとは言えない。

次に、個々の引用について見てみる。第二章の「所依」の章における最初の引用は次の通りである。

さらにまた、能力は上中 [下] の三つが存在するので、人も上中 [下] の三つが存在するのである。そのようにまた『菩提道灯論』に、

劣った者、中位の者、優れた者となっているので、人を三種として知るべきである。[BPP 5-6]

と説かれている。それも、劣った人については、自分は悪趣に落ちることなく天人を得る能力がある者である。同じようにまた、

何らかの方法で輪廻の楽しみのみを自分自身のために求めている人は劣った人と知るべきである。[BPP 9-12]

と説かれている。中位の人については、自分が輪廻から解脱した後に寂静と楽の地位を得る能力がある者である。同じようにまた、

存在の楽に背を向けて、罪となる行いから退くことを本質として、自分の寂静だけを求める人は「中位」と言われる。[BPP 13-16]

と説かれている。上の人については、衆生利益のために仏を得る能力がある者である。同じようにまた、

自らが相續している苦しみにより、他者の苦をすべて完全に尽くすことを何よりも望んでいる人は最高である。[BPP 17-20]
と説かれている。

と言うものである。同じ偈頌は第六章の「業果を正しく説いた」章において、

そのように輪廻の苦を恐れ、業果を信解するならば、
存在の楽に背を向けて、罪となる行いから退くことを本質として、自分の寂
静だけを求める人は「中位」と言われる。[BPP 13-16]
と説かれているように、中位の人々の知恵が生じているのである。例えば、クリカ王
の七人の娘のようなものである。

と、また第七章の「慈愛と悲心」の章において、

そのようなならば、慈愛と悲心が相續に生じた者は、自ら他者を親愛するならば、
例えば、
自らが相續している苦しみにより、他者の苦をすべて完全に尽くすことを何
よりも望んでいる人は最高である。[BPP 17-20]
と説かれているように、最高の人の知恵が生じているのである。例えば、偉大なゲ
ーヴァダッタのように。

というように再び引用されている。人を能力に応じて三種に分類する在り方を最初に引
用することについては、後の Tsong kha pa の『ラムリム・チェンモ』にも見られるも
のであり、『菩提道灯論』を特徴づける句とみなされていたことがわかる。本書では、
この同じ句が再び引用される点については、本書の第五章から第七章の「輪廻」、「業果」、
「慈愛・悲心」という項目が、それぞれ小中大という人の能力に対応している。

続いて、第八章の「帰依と律儀」の章では、まず冒頭に、

まず最高の菩提に発心する所依の人で、大乘の種姓をもち、三宝に帰依し、波羅
提木叉の七種の律儀のいずれか一つをもち、願心を起こす者たちには、入心を起こ
すことが所依であり、三宝帰依後の者には、願心を起こすことが所依の人である。
それは何故かと言えば、入ることに対して誓願は先行しなければならないことを
『菩薩地』から解説し、誓願に先行して帰依をなさなければならないことを『菩提

道灯論』から解説し、入の所依に波羅提木叉が先行しなければならないことを『菩提道灯論』から解説し、波羅提木叉の律儀を受けることに対しても帰依を「先に」なさなければならないことを『阿毘達磨俱舍論』から解説し、大乘の種姓なしに最高の菩提への発心も生じないことを『菩薩地』から解説される。

と説かれている。ここでは直接の引用はないものの、ここでの指摘は、明らかに『菩提道灯論』の「最初に帰依を三度なすべきである」[BPP 36]の菩提への願心が説かれ、また波羅提木叉の後に菩薩の律儀を受けることが説かれていることに基づいている。また本章の末尾では、

さらにまた近住戒の律儀は、一昼夜律儀でもあるので少数であり、その波羅提木叉はその通りではないので、律儀は少数であるから、それ故に、七種は発心の所依として説かれている。『菩提道灯論』にも、

七部の波羅提木叉の他の律儀を常に保持する者たちには菩薩の律儀の福分があるが、他の者にはない。[BPP 79-82]

と説かれており、七部の波羅提木叉のうち何れか一つが所依として解説されている。

と引用されており、波羅提木叉に関する記述も『菩提道灯論』に依拠していたことがわかる。

続く、第九章の「菩提心の摂受」の章では、

軌範師の特徴も、律儀を与える儀軌を知り、自分が得た律儀を損なっておらず、身口の經典を理解でき、財物を分けずに用いることで弟子を守ることである。そのようにまた、『菩提道灯論』に、

正しい特徴を所持するよい師から律儀を受けるべきである。律儀の儀軌をよく知り、自分自身も何れかの律儀に住しており、律儀を与えることに耐え、悲をそなえたよい師を知るべきである。[BPP 89-94]

と説かれている。

という引用が見られる。ここでは律儀を受けるべき師の特徴を述べているが、その記述はそのまま『菩提道灯論』を根拠としたものである。

続く第十章の「入の菩提心の学処」の章では、

第二に「発心の利益を憶えているべきことを学ぶこと」と言われるもの。菩提心を損なわないその方法を解説するならば、『菩提道灯論』にも、

そのように願心により起こされた功德となるものは、『入法界品』にマイトレーヤが明らかに解説している。[BPP 47-50]

などと説かれており、それもその経典に発心の利益は二百三十の喩例の門から説かれており、それらのすべては利益の四大門にまとめられたものが説かれている。

と言うものと、

第三に、「二資糧を集めるべきことを学ぶこと」と言われるもの。その菩提への発心の方法を解説するならば、『菩提道灯論』にも、

福德と知恵を本質とする資糧が完全である原因を、[BPP 137-138]

などと説かれている。それも福德の資糧は十法行と四摂事などの方法のこれらの部分であり、知恵の資糧はそれらの三輪を清浄にする知恵などの智慧の部分であって、そのように二資糧を集めれば自分の相続に菩提心の力が生じる。

と言うものと、

第四に、「何度も菩提心を浄化することを学ぶこと」と言われるもの。その菩提心を広げるその方法を解説するならば、『菩提道灯論』にも、

菩提を願う心を起こしてから、多くの努力によりあまねく広げ、[BPP 71-72]と説かれている。それも菩提の原因の心を浄化することと、菩提自身の心を浄化することと、菩提行の心を浄化することの三つを知るべきである。その三つを浄化することで、その菩提心が広がるのである。

と言うものと、

第五に、「四黒法を捨て、四白法に依存することを学ぶこと」と言われるもの。その菩提心を忘れないその方法を解説するならば、『菩提道灯論』にも、

これを他の生においても思い出すために、解説された通りの学処を正しく護るべきである。[BPP 73-74]

と説かれている。

と言うものが引用されている。本章では、菩提心の学処として五項目が設定されており、そのうちの四項目においてタイトル直後に『菩提道灯論』が引用されていることから、本書における菩提心の学処については、同論を根拠としていることがわかる。ただし、第三の項目における引用については、本論における偈頌の順番を逸脱している点に注意しておく。

続く第十一章の「六波羅蜜」の章では、

入の菩提心の学処は三種である。増上戒学と増上心学と増上慧学とである。そのようにまた『菩提道灯論』に、

入る心の主体は律儀にとどまっている。戒の三学をよく学ぶことで、戒の三学に対する尊敬が大きくなる。[BPP 130-132]

と説かれている。そのうち増上戒学は施と戒と忍の三つである。増上心学は禅である。増上慧学は智慧である。精進は三つの部分の助伴である。

と引用されている。本書では、入の菩提心を「六波羅蜜の設定」としており、それに基づいて『菩提道灯論』の偈を引用している。ただし、Dīpaṃkaraśrījñāna の自注ではこの「三学」を律儀戒・摂善法戒・衆生利益戒と説明している。

また、次章からは「六波羅蜜」の各項目を論じており、第十六章の「禪波羅蜜」の章の冒頭では、

また、禪定をともしなければ神通は生じず、神通が生じなければ、衆生利益はあり得ない。そのようにまた『菩提道灯論』に、

止を成立させずに神通は生じないであろう。そのように神通を得ることを離れた者は、衆生利益をなすことはできない。[BPP 153-154, 143-144]

と説かれている。

と引用されている。この引用は、『菩提道灯論』の偈頌の順序を入れ替えて、止の完成により、神通が起こり、衆生利益が可能となるという四パーダよりなる新たな一偈を構成したものである。後半と前半との間にある省略された部分は、「神通をもつものの福德は神通を離れたものには生じないので、神通の完成を努力をするべきである」ということを説いたものである。

続く第十七章の「般若波羅蜜」の章では『菩提道灯論』の引用が最も多い章である。最初に、

では智慧だけで十分であり、施などの方法は何が必要なのかと言うならば、十分ではない。『菩提道灯論』に、

方便を離れた智慧と、智慧を離れた方便も、何故ならば「縛られている」と説かれているので、それ故に、どちらも捨てるべきではない。[BPP 173-176]と説かれている。では方便と智慧を分離したものとして領受した場合に、どこに縛られるのかと言うのならば、菩薩が方便を離れた智慧に依拠した場合は、声聞の主張する寂靜というその一方向の涅槃に落ちてから縛られているようになり、無住処涅槃を得ることにはならない。さらにまた三乗を主張する教えでは常にそこに縛られていると認められ、一乗を主張するものでも八千大劫にわたりそこに縛られると認められる。智慧を離れた方法に依拠した場合も、童子は異生の地を越えることなく、輪廻自身に縛られるものにしかならない。

と引用されている。ここでは、六波羅蜜の最期の項目である智慧について解説するにあたり、まずその方法としての五波羅蜜との関係について『菩提道灯論』に基づいて述べられている。続いて、「出世間智」の項目において、

第二に、出世間の偉大な智慧は、大乘教徒の聞思修の三つから生じる智慧であり、一切法は自性を欠くもので、生じることはなく、基盤はなく、根本を離れたものである。…『菩提道灯論』にも、

「蘊界処は生じることがないものと理解し、自性を欠くものであると知ることが智慧である」と正しく解説されている。[BPP 189-192]

と説かれている。智慧を知ることについては、智慧には三つが存在するうち、その偉大な出世間智が智慧でなければならない。それを説明するものを六種により示す。すなわち、事物を把握することの排除と、事物がないことを把握することの排除と、存在しないことを把握する過失と、両方の把握の過失と、解脱に導く道と、解脱の本質である涅槃とである。そのうち最初の事物を把握することの排除は、尊主の『菩提道灯論』に、

「存在しているものが生じる」というのは正しくない。存在していないものも、虚空の花のようなものである。[BPP 193-194]

などと大証因により考察した後に説かれている。道次第として説かれているのか、と言うのならば、事物や事物を把握することの一切は二つの本質にまとめられており、その二つの本質も自性を欠くものであると説かれている。

と引用されている。本章では智慧を構成するものとしての空性とその主題となっており、そこで最初に引用されているテキストが *Dīpaṃkaraśrījñāna* の『菩提道灯論』である。続いて前述の第五番目の解脱への道の項において、

それ故に、二極を考察せず、中道をなしても、中自身も考察されるものではない。対象としてそれを把握する認識を離れて、慧を越えて存在するものである。尊主も、それやこれのように、過去の心は滅し、なくなっており、未来の心はまだ生じず、生まれておらず、現在の心はとても考察し難い。色彩はなく、形態を離れたものは、虚空と同じく成立しない。と説かれている。

と「尊主 (Jo bo)」のテキストが引用されている。また、続く「修習すべきもの」の項では *Tilopa*、*Nāgārjuna*、*Saraha* らの引用に続いて、

尊主も [『法界見歌』に]、
甚深で寂静で戲論を離れた真如で、光り輝き、無為なるものは、不生不滅で本来より清浄であり、自性は涅槃である。[7-10]
法界は辺際と中心がないことを、微細で、分別を離れ、沈みこみと昂ぶり翳のない知恵の目で見ると。[11-13]
と説かれ、[『行集灯論』に]
法界は戲論を離れ、智慧は戲論を離れていると設定されている。[69-70]
と説かれている。

と *Dīpaṃkaraśrījñāna* の『法界見歌』と『行集灯論』が引用されており、多くの引用の最期に再び、

尊主も [『行集灯論』に]、
一点に集中した心に依存するならば、身口の善は最高とならない。[75-76]
と説かれている。

と再び『行集灯論』が引用されている。本書において『菩提道灯論』以外の彼のテキストが引用されているのは、これらの箇所だけである。何れも偈頌で書かれた著書であり、

引用しやすかったのかもしれない。

続く第十八章の「五道」の章の冒頭では、

そのようにその五道は『菩提道灯論』のテキストのようであるならば、最初に小と中の二種の人の法を修習してから根本を説いたものと、それから願と入の発心と、それから二資糧を集めることを努力することを説いたそれらにより資糧道がよく説かれている。

次第に煖などを得てから、[BPP 238]
とすることにより加行道が説かれている。

歡喜地などを得るようになり、[BPP 239]
とすることにより見道と修道と究竟道が説かれている。

と引用されている。智慧の章に続いて菩提への階梯が説かれており、その構成は『菩提道灯論』に基づいている。

続く第十九章の「十地の設定」の章の冒頭でも、

それらの地は『菩提道灯論』でも、
歡喜地などを得るようになり、[BPP 239]
と説かれている。

として再び前述の句が引用されている。

これらの五道と十地の結果を示した続く第二十章の「結果である正等覚」の章の冒頭において、

そのように地と道を正しく完成してから三身の性質を明らかに正等覚される。
『菩提道灯論』にも、
仏の菩提は遠くない。[BPP 240]
と説かれている。

と引用し、本書がまとめられている。

以上、『ラムリム・タルゲン』に引用される『菩提道灯論』の句を見てきたが、ここに引用されている句は若干の入れ替えはあるものの『菩提道灯論』の順序通りに引用されており、本書の全体の構成を見てみると、同論がその下敷きになっていることがわか

る。また、『ラムリム・タルゲン』に引用されていない『菩提道灯論』の句を見てみると、波羅提木叉、神通、タントラなどに関する項目が本論では詳論されていないことに気が付く。特に *Dīpaṃkaraśrījñāna* 自身が「マントラの教義の意味は説かず、二資糧を集める方法のみを少しだけ説く」と述べて始まる同論末尾のタントラに関する項目については、全く触れられず、むしろ意図的に削除された感じがある。少なくとも、*sGam po pa* は本論においてタントラの教義を一般に説くべきものではないという認識があったのであろう。

まとめ

今回、二つのラムリム文献を比較考察したことから、両者の関係を簡単にまとめてみる。『ラムリム・タルゲン』において『菩提道灯論』あるいは *Dīpaṃkaraśrījñāna* の名が言及される二十一という数は、他の文献と比べてみると多いほうではあるが、このテキストだけが突出しているという訳でもない。その他にも『大乘莊嚴經論』、『入菩提行論』、『菩薩地』、『大乘集菩薩学論』などの文献が多く引用されている。これらのテキストは *Dīpaṃkaraśrījñāna* 自身による『菩提道灯論細疏』においても多用されており、「カダム六宗典⁶」を構成するものでもある。このことは、*sGam po pa* が最初にカダム派において学んでいたという事実と矛盾するものではない。

では、『ラムリム・タルゲン』における『菩提道灯論』の立場は、カダム派の他の聖典と同等であったのであろうか。ここに引用された句のうち、第八章、第十一章、第十六章、第十八章、第十九章、第二十章における引用は、いずれも章の冒頭で引用されているものである。それぞれの章を始める上で、まず最初に、同論を引用してきていることは、その章に説かれている主題が同論に基づいていると判断することもできる。このことは、さらに前述のように本書の全体の構成が同論を下敷きに著された可能性があることをも推測させる。したがって、章の末尾に聖典根拠として引用されているその他の文献とは異なり、『ラムリム・タルゲン』において『菩提道灯論』が重要な位置を占めていたと言える。また、『菩提道灯論』を補足するような形で『行集灯論』が引用されていることも確認できた。

では、*sGam po pa* は *Dīpaṃkaraśrījñāna* の自著とされる『菩提道灯論細疏』については、どのように見ていたのであろうか。残念ながら今回のテキストでは自注に対する言及はない。両書に聖典根拠として引用されている文献の比較から、彼の自注に対する評価を推測できるかもしれない。

⁶ 他の三つは、『菩薩本生鬘経』と『法集要頌論』である。

第2章 『ラムリム・チェンモ』に言及される Dīpaṃkaraśrījñāna

はじめに

Dīpaṃkaraśrījñāna の『菩提道灯論』がラムリム思想の基盤となったことは既に述べ、前章では、チベット仏教において Dīpaṃkaraśrījñāna により作られたラムリム思想の萌芽がどのように展開していったのかを考察した¹。本章では、ラムリム思想を大成した Tsong kha pa の『ラムリム・チェンモ (*sKyes bu gsum gyi nyams su blang ba'i Byang chub lam gyi rim chung ba*²)』において、Dīpaṃkaraśrījñāna がどのように受容されていたのかについて考察する。

『菩提道灯論』と『ラムリム・チェンモ』の構成

『ラムリム・チェンモ』は、Dīpaṃkaraśrījñāna の『菩提道灯論』の影響の下に著されたと言われるが、そのことは同論の冒頭に、彼の偉大さが述べられており、さらに、この後に Dīpaṃkaraśrījñāna のインドとチベットにおける事歴が述べられることから、彼を先行する偉大な仏教者の一人であると認識していただけでなく、その教えを継承することが明確に意識されていることは明らかである³。

では、この二つのテキストの構成はどのようになっているのか。『ラムリム・チェンモ』のおよその内容⁴を簡単にまとめると、まず「下品、中品、上品」の三種の人を設定し⁵、その最後の上品の人が修習すべき項目として発菩提心とその後の学処として六波羅蜜の行が説かれ、その最後の禅と般若波羅蜜に関しては止と観が述べられている。この構成は『菩提道灯論』の構成ともほぼ一致しており、ある意味では本書は同論の解説書の一つであるとも言える。では、両者の関係をさらに考察するために、本書のいかなる場所において Dīpaṃkaraśrījñāna とその著書が言及されるのかを次に見てみる。

Dīpaṃkaraśrījñāna の著書の引用

¹ 望月 2005b, 2005c.

² 同論に対する研究は数多くあり、ここではテキスト関係のみを提示しておく。チベット語テキストとしては、*Byang chub lam rim che ba bzhugs so*, Dharamsala: Tibetan Cultural Printing Press, 1991 (=B) とツルティム 2001a, 2004 T1-2 が出版されている。英訳にとりては、Cutler 2000, 2002, 2004, Lhundub Sopa 2004, 2005, 2008, Wayman 1978, 1991、フランス語訳としては、Driessens 1992, 1996、漢訳としては法尊による漢訳 (『菩提道次第広論』3rd ed., Taipei, 1987, 『菩提道次第略論』2nd ed., Taipei, 1987)、和訳としては、ツルティム、藤仲 2005b, 2014、ツルティム、小谷 1991、長尾 1954 などがある。また同論の中篇については、Thurman 1982: 108-185, ツルティム 1996, 法尊 1987b に翻訳がなされている。

³ 長尾 1954: 71-79.

⁴ 長尾 1954: 80-81.

⁵ ツォンカパは、この三種の区別が Dīpaṃkaraśrījñāna のオリジナルではなく、Vasubandhu の『俱舍論註』に基づいていることを認識している (B 88.12)。

『ラムリム・チェンモ』において *Dīpaṃkaraśrījñāna* に言及するスタイルについては、(1) 彼の著書の引用、(2) 著書のタイトルへの言及、(3) 彼の名前への言及の三種に分けられる。このうち最後の項は、そのほとんどが「尊主 (jo bo)」という敬称で呼ばれており、それ故に、彼自身に特定できないものもある⁶。これらを同論における言及をセクションごとに列挙すると次のようになる⁷：

1 著者の偉大性 (B 4)

第一に著者の偉大性は、この教えは概して尊首 *Maitreya* が著された『現観莊嚴論』の教えであり、特にこの著書は『菩提道灯論』であるのでこの著者自身も著者である。彼はまた、軌範師 *Dīpaṃkaraśrījñāna*、別名吉祥なる *Atiśa* としても知られている。その偉大性に三つ⁸。

2 チベットでなされた在り方 (B 9)

大きな努力により繰り返し招請したので、*Byang chub 'od* の時に招待され、上ガリに來られたとき、仏の教えを正すようお願いされたので、経とマントラの要点をすべてまとめて取るべき次第をまとめた『菩提道灯論』の著書などの門から教えを広めた⁹。

3 法の偉大性 (B 13)

法の偉大さについて、法はこの教誡の典籍である『菩提道灯論』である。尊主が作られた典籍は多くあるが、根本のような完全なものが『道灯論』である¹⁰。

4 一切の經典を教誡として現わす偉大性 (B 17)

偉大な尊主の弟子 *sGom pa rin chen* 先生も「*Atiśa* の教誡で一座に身口意の三つを粉砕したことで、今ではすべての典籍を教誡と理解することが生じた」と述べており¹¹、

5 確実に起こすために少し広げて解説すること (B 33)

『心髓撰集』88-89 に、

[大乘の] 種姓に住しているその人は最高の善知識に頼るべきである。

⁶ 特定できないものとしては、B 41, 105, 223 がある。

⁷ *Gengindani* 1996: 3-20 の同論のシノプシスである。また、テキストのアドレスを B のページ数に従って括弧内に記しておく。

⁸ ツルティム 2004: 3, ツルティム、藤仲 2005b: 85.

⁹ ツルティム 2004: 8, ツルティム、藤仲 2005b: 89. この文脈は、全文が *Dīpaṃkaraśrījñāna* の略歴を述べたものであり、B 115 (ツルティム 2004: 10, ツルティム、藤仲 2005b: 91)に「尊主 (Jo bo)」として言及される。

¹⁰ ツルティム 2004: 11, ツルティム、藤仲 2005b: 92.

¹¹ ツルティム 2004: 16, ツルティム、藤仲 2005b: 96.

と述べられ¹²、

6 依存すべき善友の特徴 (B 38)

偉大な尊主のお言葉を **Po to ba** が話されたものを **Dol pa** が編集したものに解説されているので¹³、

7 依存する一般的想を説いたもの (B 42)

尊主の前にはマンダラが成立していたので、尊主が「ああ、あなたのような者はインドにもいる」と述べられた¹⁴。

8 特に根本への信を修行すること (B 43-44)

尊主に対して、**sTon pa** が「チベットに修行者は多いが、特別な功德をもつ者はいない」と述べたので、尊主は「大乘の大きな功德が生じ、小さなものが生じるすべては、師によってから生じ、あなたたちチベット人は師に凡夫の想しかないので、どうして生じようか」と述べ、師に「**Atiśa** よ、教誡をお願いしよう」と述べた¹⁵。

さらにまた、偉大な尊主は中観の見解を持ち、**gSer gling pa** は唯識の形象真実の見解をもつので¹⁶、

9 三種の道にすべての教えをまとめた在り方 (B 87-88)

『道灯論』9-12に、

何らかの方法で輪廻の楽しみだけを自分自身のために求めている人は劣った人と知るべきである。

と説かれているから。…『道灯論』13-16に、

存在の楽しみに背を向けて、罪となる行いから退くことを本質として、自分の寂静だけを求めている人は「中位」と言われている。

と説かれているから。尊主は、『行集灯論』5-8に、

真乗〔乗〕と波羅蜜〔乗〕に依存してから菩提を完成した、と師である仏がお説きになられているので、その意味を私が著すべきである。

と説かれているように、一切相智を成就させる方法は二つで、真言の大乘と波羅蜜の大乘である。…『道灯論』17-20に、

自らが相續している苦しみにより、他者の苦しみをすべて完全に尽くすことを何よりも望んでいる人は最高である。

と説かれているので、その人が菩提を成就する方法に波羅蜜と真言の両者を後で説

¹² ツルティム 2004: 33, ツルティム、藤仲 2005b: 108.

¹³ ツルティム 2004: 40, ツルティム、藤仲 2005b: 112.

¹⁴ ツルティム 2004: 44, ツルティム、藤仲 2005b: 115.

¹⁵ ツルティム 2004: 46, ツルティム、藤仲 2005b: 116.

¹⁶ ツルティム 2004: 47, ツルティム、藤仲 2005b: 117.

かれています。…『道灯論』のように『俱舍論釈』に、軌範師 Vasubandhu が三種の人の特徴を説かれている¹⁷。

10 理由そのもの (B 93-95)

『道灯論』に神通を生じさせるために止を起すことを説いたのは特徴だけで、他のところで尊主は観を生じさせるためにも説かれているので、それ故に止を成就させる。…その如くならば、止と観を成就させること以外の入の律儀の学処を学ぶこと以下は戒学で、止は定学か心学で、観は慧学と『道灯論細疏』に説かれている¹⁸。

そのような道の設定の本体は、『道灯論』に説かれており、道次第によっても同じように導いている。他の典籍にも、偉大な尊主は説かれており、『大乘道成就語句撰集』1-8に、

大いなる不可思議がある無上菩提を得ようとするのならば、菩提を成就させた者に依存することで成就を領受することを心髄とするべきである。完全な円満なる身体はとても得難く、後にもとても得難いものであるので、成就を努めることにより意味があることとなる。

と説かれており、[『大乘道成就語句撰集』72-79に、]

例えば、囚人は牢獄から逃げる可能性が生じたときに、それ以外の重要なことと比べることなくその場所から逃げ出すように。この輪廻の大海から出る可能性が生じたのならば、それ以外の重要なことと比べることなく存在という家から出るべきである。

と説かれており、[『大乘道成就語句撰集』147-152に、]

帰依と残りの戒と誓願の根本に住することにより、菩薩の律義をよく受け、六波羅蜜などの一切の菩薩行を能力に応じ正しく行うべきである。

と説かれており、[『大乘道成就語句撰集』310-311に、]

方便と智慧の心髄である止と観のヨーガが修習され、と説かれている¹⁹。

11 寿命の増加はないが減少は間断なくあることの思惟 (B 105)

偉大な尊主も、川岸に来てから無常の修習に水が流れていくこのことは楽である、と述べて修習したと言われている²⁰。

¹⁷ ツルティム 2004: 97-98, ツルティム、藤仲 2005b: 152-153.

¹⁸ ツルティム 2004: 102-103, ツルティム、藤仲 2005b: 156-157.

¹⁹ ツルティム 2004: 104, ツルティム、藤仲 2005b: 158.

²⁰ ツルティム 2004: 115, ツルティム、藤仲 2005b: 167.

12 成就の学処 (B 146)

偉大なヨーガ行者が尊主に Mañjuḥṣa の像を見せ、…尊主がガリに来たとき、ある真言者が彼に法を聞かず、ある筆写者が齒の汚れを法に塗るのを見て、尊主は耐えられずに「ああ、よくない、よくない」と述べた²¹。

13 内なる仏教徒に入ること (B 154)

内なる仏教に入ることについては、総じて外と内を設定する在り方は多く見られ、尊主と Śānti pa は帰依により区別することが知られているので、帰依を得てから捨てていないこととなすのである²²。

14. 三宝を笑みや命のためでも捨てずに守るべきこと (B 156)

そのような [帰依を学ぶ] 共通な学処は『道灯論細疏』に説かれている通りである²³。

15 黒業道そのもの (B 167)

偉大な尊主も [Aśvaghōṣa の『十不善業道説示』と] 同じように説かれている。…偉大な尊主が、

非支分と言われるものは、口と肛門と少年と少女の前後の穴と自分の手である。

と述べたものと同じである。…偉大な尊主はも [非時について Aśvaghōṣa と] 同じだが、違いは昼も非時としたことである²⁴。

16 三学処の本質 (B 275-279)

尊主も、

私たちはインドで重大なことや至急になすべきことが生じたならば、蔵を保持する者たちが集まって、三蔵から否定されていないのか、三蔵に矛盾しないのか、と決定してからその上で確立する…

と説かれている²⁵。

偉大な尊主についても、

一日に何度会っても、その間に善心が生じたのか。

と述べられた、と言われている²⁶。

偉大な尊主の弟子の dPal ldan dgon pa も…²⁷

²¹ ツルティム 2004: 163, ツルティム、藤仲 2005b: 201.

²² ツルティム 2004: 171-172, ツルティム、藤仲 2005b: 206.

²³ ツルティム 2004: 174, ツルティム、藤仲 2005b: 208.

²⁴ ツルティム 2004: 187-188, ツルティム、藤仲 2005b: 217. Silk 2008b: 374-375.

²⁵ ツルティム 2004: 312, ツルティム、藤仲 2005b: 301.

²⁶ ツルティム 2004: 314, ツルティム、藤仲 2005b: 302.

²⁷ ツルティム 2004: 316, ツルティム、藤仲 2005b: 304.

17 菩提心を修練する次第 (B 292)

偉大な尊主から相承したものに、七つの因果の概説と、仏子 Śāntideva の著書に出ているものに依ってから浄化するものとの二つがある²⁸。

18 最後に重要なもの (B 295)

それ故に、Zhang sna chung ston pa が尊主に教誡を請願したけれども、世間をあきらめて菩提心を修習すべきであるということしか述べられず、善知識 sTon pa は微笑んで「それが尊主の教誡の核心である」と言い、法の核心を知っていた²⁹。

19 自他を交換する在り方の修習次第 (B 318-319)

尊主は [、『大乘道成就語句撰集』 107-110 に]、

慈愛と悲心により浄化を知らないチベットの菩薩は、知っている、と言う。では、どのようになすべきか、というと、最初から順に学んでからなすことが必要である。

と述べている。…偉大な尊主が、

大乘の法門に入ることを望む者は、闇を取り除き、欲望を寂滅する。日月のような菩提心は、劫にわたる努力により生じることできる。

と説かれているように³⁰。

20 儀軌により把握する在り方 (B 320.2)

第四の儀軌により受けることは、偉大な尊主が、[『大乘道成就語句撰集』 113-117 に、]

それを起こし修養しようとする望むことで慈愛などの四梵住を励む者は、長いこと修習したので、執着や嫉妬は捨てられ、正しい儀軌をなすことにより [菩提心は] 生じる。

と説かれているように慧を浄化してから発心への確定が堅固であるならば、それを受ける儀軌をなすべきである³¹。

21 取られる場所 (B 320)

『上師所作次第』に、

特徴をそなえた軌範師

としか尊主は明らかにしていない³²。

22 取る所依 (B320)

²⁸ ツルティム 2001: 11, ツルティム、藤仲 2014: 22.

²⁹ ツルティム 2001: 15, ツルティム、藤仲 2014: 25.

³⁰ ツルティム 2001: 35, ツルティム、藤仲 2014: 44-45.

³¹ ツルティム 2001: 36, ツルティム、藤仲 2014: 46.

³² ツルティム 2001: 36, ツルティム、藤仲 2014: 46.

ここでは、『道灯論細疏』に、

輪廻を出離し、死を記憶し、智慧と悲が大きい³³。

と出ているように、前に説明したような道次第で慧を浄化することで菩提心に意を起こす経験を少し得た者となすのである³⁴。

23 場所を飾り所依を広げ供物を用意すること (B 321-322)

尊主に対してチベットの師たちがマンユルとサムイエで発心を請願した時に、「供養が悪いので生じない」と述べた。…それから『上師所作次第』に説明されているように聖者の衆会を招き、供養の雲の陀羅尼を三度となえて賞讃すべきである。…偉大な尊主は『発心律儀儀軌次第』に、

礼拝と供養の儀軌など

などと言うものによりまとめており、『上師所作次第』には七支を発心の前になすべきことが明らかに説かれているので、その理由のとおりであるならば、Nāgārjuna と Śāntideva の流儀でも生じないと認める必要がある³⁵。

24 請願と帰依と帰依の学処を述べたもの (B 323)

『道灯論』32 に、

退くことの無い心で

と説かれているので、そのような意から一切時において退かない、という強い意欲で前に解説した行道と同じものにより帰依をなすべきである。… [三] 宝それぞれの帰依を思って下さい、と言ひ、法帰依の言葉は他と同じでないが、尊主の作られた儀軌のとおりである³⁶。

25 資糧を積むこと (B 323-324)

資糧を積むことは、『発心律儀儀軌次第』に、この場合も、礼拝と供養などをなすことが説明されており、『[道灯論] 細疏』に七支と仏と菩薩と過去と現在の善知識たちを意に記憶してからなすことが説明されている³⁷。

25 慧による浄化 (B 324)

慧による浄化は、『道灯論』に、慈愛を先行させて衆生の苦を見て発心することが説かれているので、前に解説したように慈愛と悲心の対象を明らかに設定すべきである³⁸。

³³ D. No. 3948, Khi 247a5-6.

³⁴ ツルティム 2001: 36-37, ツルティム、藤仲 2014: 47.

³⁵ ツルティム 2001: 38-39, ツルティム、藤仲 2014: 47-48.

³⁶ ツルティム 2001: 40, ツルティム、藤仲 2014: 49. この前後で『発心律儀儀軌次第』が引用される。

³⁷ ツルティム 2001: 40, ツルティム、藤仲 2014: 49.

³⁸ ツルティム 2001: 41, ツルティム、藤仲 2014: 49.

26 基本的儀軌 (B 324-326)

さらにまた、『道灯論』45-46 に、

退くことなく誓願する菩提心を起こすべきである。

と説かれ、『[発心律儀] 儀軌次第』にも、

菩提座まで

と説かれているので、「利他のために仏を得よう」とただ発心するだけでなく、その発心により「悟りを得ていない間は捨てない」と誓願する³⁹。

それらは軌範師がいる流儀であり、軌範師を得ていないならば、どのようになすべきなのかは、尊主が著された『発心律儀儀軌次第』に、

そのように軌範師がいなくても、自分が菩提に発心する儀軌は、シャカムニと十方の一切の如来を心に思って、礼拝と供養の儀軌などをなしてから請願することと、「軌範師よ」と言う語句を捨てた帰依などの次第を前のようになすべきである⁴⁰。

と説かれているようになすべきである⁴¹。

27 利益を記憶することを学ぶこと (B 328)

偉大な尊者が、金剛座を右繞して、どのようにしたら速やかに正等覚を得るのか思ったとき⁴²、

28 衆生を慧により捨てないことを学ぶ意味 (B 331)

衆生を慧により捨てないことを学ぶことは、『道灯論』と『発心律儀儀軌次第』の学処の場所には出ていないが、『道灯論細疏』に、

そのように衆生を把握するべきであり、捨てずに、菩提心の対象とその利得とそれををを起こす儀軌と共通な増長と忘れないために、守るべきである⁴³。

と出ており、根本の意味とも矛盾せずに見れているので、それも学ぶべきである⁴⁴。

29 損なわれた際に修正する方法 (B 337-339)

四黒法は、今生に発心を捨てる原因ではないが、他生に発心が現れなくなる原因なので、今生で捨てるべきである。『道灯論』(73-74)に「これを他の生においても思い出すために、解説したとおりの学処をよく護るべきである」と説かれている。説明したとおりとは、『迦葉品』に説かれるとおりである。…そのように発心の学

³⁹ ツルティム 2001: 41, ツルティム、藤仲 2014: 50.

⁴⁰ D. No. 3969, Gi 246a1-2.

⁴¹ ツルティム 2001: 43, ツルティム、藤仲 2014: 51.

⁴² ツルティム 2001: 45, ツルティム、藤仲 2014: 54.

⁴³ D. No. 3948, Khi 252a1-2.

⁴⁴ ツルティム 2001: 47-48, ツルティム、藤仲 2014: 55-56.

処を『道灯論細疏』に Indrabhūti 王と Nāgārjuna と Asaṅga と Śāntideva と Candragomin と Śāntarakṣita などの流儀が別になっている⁴⁵。

一般に、この『[道灯論] 細疏』を善知識 sTon pa から相承した偉大な善知識たちは尊主の注釈としないが、Nag tsho から相承した人たちは尊主の著書と主張し、Nag tsho の隠密法と主張する。…前に説明した二学処以外は、『道灯論』と『発心律儀儀軌次第』の通りであるが、『[観自在] 七法経』に学処が説かれていることは、神通を速やかに望む者がなすべきである。

と説かれているので、発心の特別な学処として現れないので、ここに書かない⁴⁶。

30 いくつかの詳細な解説 (B 466)

それらについて等至と後得をどのように成就するのかの在り方は、偉大な尊主が『[心髄撰集] 64-67 に]、

菩薩行の大きな波により六波羅蜜などの禪定から立ち上がる行によりこの資糧道を堅固にすることが成立するであろう。

と説かれているように、勝者の子の律儀を受けた菩薩の初学者の資糧道に住する者は、等至と後得の二つのどちらをなしても六波羅蜜を越えないので、六波羅蜜をある者は等至で護り、ある者は後得において護る⁴⁷。

偉大な尊主は、『[大乘道成就語句撰集] 329-336 に、]

等至から立ち上がったときに、幻の八喩のように一切の法を見ることが修習されるので、続く理解を浄化し、方便を第一に学ぶべきである。等至の時に止と観は同分で、それを連続して常に修習するべきである。

と説かれている⁴⁸。

31 欲などの分別を完全に捨てること (B 485)

『道灯論』 157-160 にも、

止の支分を損なっている者は、努力し修習したとしても、千年にわたっても三昧は完成しないであろう。

と説かれているので、止観の三昧を至心に成就することを望む者は、止の支分や資糧を『声聞地』に説かれた十三などを努力することがとても重要である⁴⁹。

32 対象そのものを説いたもの (B 495)

『修習次第』に止の所縁に確定はないことを解説したものと、『道灯論』 163 に、

⁴⁵ ツルティム 2001: 54-55, ツルティム、藤仲 2014: 61-62.

⁴⁶ ツルティム 2001: 55-56, ツルティム、藤仲 2014: 62.

⁴⁷ ツルティム 2001: 168, ツルティム、藤仲 2014: 180.

⁴⁸ ツルティム 2001: 168-169, ツルティム、藤仲 2014: 181.

⁴⁹ ツルティム 2001: 186-187, ツルティム、藤仲 2014: 194.

適切な一つの対象に対して、
と説かれたのは、「さまざまな所縁を一つに確定する必要はない」という意味であり、存在するすべてのものを量となすべきと説いているのではない⁵⁰。

33 時期にあたる対象の認識 (B 500-502)

『道灯論細疏』でもそれ（『三昧資糧論』）を引用している⁵¹。『道灯論』163-164にも、

適切な一つの対象に対して意識をよく集中させるべきである。

といい、「一つに対して」と説かれた限定句により説かれている⁵²。

34 沈込みと昂りを離れた時になすべき在り方 (B 528)

これらは三昧を成就する最上の教誡なので、偉大な軌範師 **Kamalaśīla** の三つの『修習次第』と、さらにまたインドの偉大な賢者たちが三昧の成就の箇所でも多く解説しており、『道次第細疏』にも止を成就する箇所でも解説している⁵³、

35 Nāgārjuna の意図の解説方法の生じ方 (B 573)

では、それらの軌範師の誰に従ってから聖者父子の密意が求められるのか、といえば、偉大な尊者が **Candrakīrti** の流儀を最高となして現れたものに従ってからの教誡の昔の偉大な師たちもその流儀を最高となしている⁵⁴。

36 守る在り方の要点を解説したもの (B 797)

これも、尊者が [『入二諦論』57-62に]、

空性は誰が理解したのか、と言うのならば、如来により授記され、法性の真実を見た **Nāgārjuna** と弟子の **Candrakīrti** である。それから相続した教説により法性の真実が理解されるであろう。

と説かれており、その導入の在り方も、尊者が『中観説示』に説いているように、伺察の修習とその伺察された対象に入る修習の発展を説いたのがそれである⁵⁵。

37 特別に金剛乗を学ぶ在り方 (B 808)

それに入るならば、『道灯論』に説かれているように、最初に師に仕え、言葉を成成させるなどにより喜びをなすことが前に解説したものよりもさらなりものをなす必要がある⁵⁶。

⁵⁰ ツルティム 2001: 1979, ツルティム、藤仲 2014: 202.

⁵¹ ツルティム 2001: 200, ツルティム、藤仲 2014: 204.

⁵² ツルティム 2001: 203, ツルティム、藤仲 2014: 206.

⁵³ ツルティム 2001: 224, ツルティム、藤仲 2014: 224.

⁵⁴ ツルティム 2001: 264, 長尾 1954: 111.

⁵⁵ ツルティム 2001: 443, 長尾 1954: 385.

⁵⁶ ツルティム 2001: 452, 長尾 1954: 397.

この他に、最初の帰敬偈に *Mar me mdzad* (B 1⁵⁷)が、コロフォンに *Mar me mdzad* (B 810⁵⁸) と *Lam sgron* (B 812⁵⁹) が見られる。

このうち、引用される著書について、まず最も多いものは『菩提道灯論』の引用が九度 (B 87, 87, 88, 323, 324, 337, 485, 195, 502) である。そこに引用され偈の総数二十三パーダは、『菩提道灯論』の全体二百七十六パーダの八パーセントであり、*sGam po pa* の『ラムリム・タルゲン』における六十二パーダの二十パーセントに比べると多いとは言えない⁶⁰。またその引用については、三種のブドガラに関するものがその半分を占め、また三昧の対象に関する偈など特定のもののみが引用されている。したがって、本論の全体の構成が『菩提道灯論』に基づいているものの、その詳細な解説については同論に依拠する割合はそれほど高いものではない。

続いて引用回数が多いのは、『大乘道成就語句撰集』の四度 (B 94, 319, 320, 466) である。引用される四十パーダの数は三百五十四パーダの十一パーセントであり、『菩提道灯論』の引用よりも多い。その引用される理由としては、最初の引用に見られるように、『菩提道灯論』を補足する意図があったと思われるが、*Dīpaṃkaraśrījñāna* の他の著書への言及に比して、『大乘道成就語句撰集』への依拠が突出している印象である。

その他の引用は、『菩提道灯論細疏』(B 320, 331)、『心髓撰集』(B 33, 466)、『発心律儀儀軌次第』(B 322, 326) の引用が二度 (B 320, 331)、『行集灯論』(B 87)、『上師所作次第』(B 320)、『入二諦論』(B 797) の各一度と、未確認文献 (B 275, 318, 466, 466) が四度である。

この他にタイトル名のみが言及される事例としては、『菩提道灯論』(B 4, 9, 11, 88, 93, 94, 324, 331, 339, 808) が十一度⁶¹、『菩提道灯論細疏』(B 93, 156, 338, 500, 528) が五度、『上師所作次第』(B 322)が二度、『中観説示⁶²』(B 197) が一度である。また直接のタイトルへの言及はないものの、『十不善業道説示⁶³』(B 167, 167, 168, 168) への言及が四度見られる。

またテキスト引用をとみなわない名前のみ言及については、「尊主 (*Jo bo*)」をはじめ

⁵⁷ ツルティム 2004: 1, ツルティム、藤仲 2005b: 83.

⁵⁸ ツルティム 2001: 454, 長尾 1954: 399.

⁵⁹ ツルティム 2001: 455, 長尾 1954: 403.

⁶⁰ Cf. 望月 2004, pp.331-333.

⁶¹ B 11 では二度言及される。

⁶² ただし *dBu ma'i mang ngag* ではなく、*dBu ma'i gdams ngag* となっている。

⁶³ ここでは、*Dīpaṃkaraśrījñāna* も *Aśvaghōṣa* の『十不善業道説示』と同じことを説いている、という記述で言及されている。この二つのテキストの同一性については、*Mochizuki 1996b* において考察をしたが、*Aśvaghōṣa* に帰されるもののチベット語訳は意図的に偈頌のスタイルで翻訳された形跡がある。ここに両論が並記されることについては、おそらく *Tsong kha pa* は *Aśvaghōṣa* に帰されるテキストの梵本と漢訳の存在を知らなかったため、両者の類似性を認識できるものの、その記述スタイルの相違のためにその著者性に対する疑惑は生まれなかったのであろう。

めとして全部で三十四例ある。この数は、同一テキスト内における人名の言及数としては決して少ない数ではない。

まとめ

以上に『ラムリム・チェンモ』における言及される *Dīpaṃkaraśrījñāna* とその著作について列挙してみた。それぞれが引用される文脈については、さらに詳細な考察を要すが、これらが同論のいかなるセクションにおいて言及されるのかを簡単にまとめてみる。

- 1 著者の偉大性 言及数五度
- 2 法の偉大性 言及数五度
- 3 善知識に依存する在り方 言及数八度（引用：一度）
- 4 一般的道の設定 言及数十一度（引用：六度）
- 5 下品の人 言及数十一度
- 6 中品の人 言及数三度（引用：一度）
- 7 発心の在り方 言及数二十四度（引用：九度）
- 8 一般的行 言及数二度（引用：一度）
- 9 止 言及数五度（引用：三度）
- 10 観 言及数三度（引用：一度）
- 11 金剛乗の学処 言及数一度

「著者の偉大性」は、*Dīpaṃkaraśrījñāna* の経歴を述べたものである。「一般的道の設定」とは、業に関するセクションである。最も多いのは「発菩提心」のセクションであり、これは *Dīpaṃkaraśrījñāna* も『中観説示開宝篋論』において積極的に論じられる項目である。それに比べ、『ラムリム・チェンモ』の後半に進んで行くと彼に対する言及が減っていくことがわかる。特に *Tsong kha pa* の思想を形成する中観思想に基づく「観」のセクションではその他の文献に比べて、*Dīpaṃkaraśrījñāna* に対する言及がそれほど多くはないことがわかる。

このことに基づき、*Tsong kha pa* の『ラムリム・チェンモ』と *Dīpaṃkaraśrījñāna* の関係を考えると、次のことが言える。*Tsong kha pa* は本論を著す上で『菩提道灯論』に基づきその骨子を構成した。しかしながら、詳細な思想的論点についてはその他の論書に依拠している。

第3章 Bu ston rin chen grub の『法行楽道』について

はじめに

チベット蔵外文献の目録である *Descriptive Catalogue of the Naritasan Institute Collection of Tibetan Works Volume I* (Narita 1989) の Index of Personal Names で Atīśa を引くと、Bu ston rin chen grub¹ の No. 1198 *Chos spyod rnam mkhyen du bgrod pa'i bde lam* の内容の簡単な説明の項目に「Atīśa の *Bodhisattvādhikarmikamārgāvatāradeśanā* (D. Nos. 3952, 4477, P. Nos. 5349, 5390) で発せられた (enunciated) ような菩薩行の儀軌の手引き」という記述が見られる²。筆者は、かつて *Dīpaṃkaraśrījñāna* の『入菩薩初学道説示』を考察した際に³、その Bu ston rin chen grub の本論に言及することはできなかつた。しかしながら、同論を読んで判明したことは、この著書は『入菩薩初学道説示』と直接関係するテキストではなく、むしろ関係があるとするならば同じ著者の『菩提道灯論細疏⁴』や、『業障清浄儀軌解説⁵』に見られる Nāgārjuna と Jitāri から続く七種供養を説く儀軌文献であるということであった。さらには、本論はこれらの儀軌にマントラを加えたものであり、調査の方向は当初考えていたもの⁶とは異なる方に向かうことになった。本章では、あくまでも *Dīpaṃkaraśrījñāna* との関係で、『法行楽道 (*Chos spyod rnam mkhyen du bgrod pa'i bde lam*)』の内容を概観してみる⁷。

『入菩薩初学道説示』と『法行楽道』の関係

この二つの論書はあまりない関係がないと述べたが、まずどの程度の類似点があるのかを示しておく。両方の著書は初学者のなすべき一日の簡単な流れを説いたものであるが、*Dīpaṃkaraśrījñāna* のものは短いテキストであるために各項目について詳論はなされておらず、それに対して Bu ston のものは詳細に論じたものである。

まず、『入菩薩初学道説示』の内容⁸を簡単に示すと、初学者が日々に行う修行の日課として、帰依、七支供養、発菩提心、誓願、止観、読誦、食事が順次説かれている。『法

¹ 彼の伝記については、Seyfort Ruegg 1966 を参照。同書には Atīśa の名前が二度 (pp. 90, 97) 言及されるが、いずれも地名の説明としてである。

² 吉水 1989: 82. おそらくこの記述は金倉、山田、多田、羽田野 1953: 69 の No.5197 における「cf. 3952, 4477」という記述に基づいている。

³ 望月 2000b: 222-223.

⁴ 望月 2015.

⁵ 望月 1999c.

⁶ *Dīpaṃkaraśrījñāna* と Bu ston rin chen grub の関係を見る上で、*Dīpaṃkaraśrījñāna* への直接の言及が見られる Bu ston の『仏教史』の記述が参考になる。これについては、Eimer 1977: 42-43; Obermiller 1931: 213-214 を参照。

⁷ Lokesh Chandra, *The Collected Works of Bu-ston*, Part 19 (Dza), New Delhi, 1971.

⁸ 望月 2000b に示したように、同論に同じ著者の *Cāryasamgrahapradīpa* との平行句が多く見られる。

行楽道』の前半部分で重要な意味をもつ七支供養については、項目としてあげられているものの、

それから七支供養に従って極端に行くことを認識する。すなわち三帰依の言葉を三度の間述べるべきである。

と述べるだけである。またここで説かれている発菩提心、止観という項目は、『法行楽道』では論じられず、逆に **Bu ston** により説かれている数々のマントラや儀軌は『入菩薩初学道説示』では全く説かれていない。食事の項に関しても、説かれている内容は全く異なっている。これらの相違をまとめるならば、**Dīpaṃkaraśrījñāna** のものは顕教の文献であるのに対し、**Bu ston** のものは真言乗の要素を全面に出したものである。

また、『法行楽道』には **Dīpaṃkaraśrījñāna** の名前が一度のみ言及されるが、それはカダム派の論師とともに並記されているだけである。**Śāntideva** の『入菩提行論』からの引用が多く見られることから、**Dīpaṃkaraśrījñāna** の影響が大きなものであったということは困難である。従って、ここにあげた「七支供養に従って極端に行くことを認識する」という語句のみで、『法行楽道』に影響を与えたと判断することはできない。

七種供養について

『法行楽道』の前半部分の主要テーマである「七種供養⁹」については、**Dīpaṃkaraśrījñāna** のその他の文献に類似点が多く見られる。初学者のなすべき儀軌としてのこの七種供養がチベットにおいてどのように受容されていったのかは、さらなる調査が必要であろうが、**Dīpaṃkaraśrījñāna** のテキストに繰り返し説かれていることから、彼の役割は大きかったように思える。七種供養が説かれた初期の文献として **Dīpaṃkaraśrījñāna** が依拠したものが『普賢行願讃』第十一偈の

礼拝、供養、懺悔により、随喜、勧請、懇願により、積み重ねてきたいかなる
浄業も、私はすべての菩提のために廻向します¹⁰。

というものである。この七種供養が、後に **Nāgārjuna** の『菩提過犯懺悔注¹¹』におい

⁹ 密教文献を中心にした七種供養については、高橋 2001; 白寄 1990 に詳論されている。

¹⁰ 梶山 1994: 430.

¹¹ 白寄 1989, 1991, Beresford 1980.

て「三蘊経¹²」に説かれる過犯懺悔と結び付けて論じられており、さらに Jitāri¹³, Dīpaṃkaraśrījñāna¹⁴ により同論に対する注釈書が著され、懺悔儀軌としての七種供養が確立するようになった¹⁵。その一方で、Jitāri は『発菩提心取受儀軌¹⁶』において菩薩律儀として、この七種供養を清浄行として取り入れている。このことは Dīpaṃkaraśrījñāna によっても継承されるようになった。すなわち、この時点において懺悔儀軌としての七種供養が清浄行の儀軌、或いは初学者の最初になすべき儀軌として確立するようになった。ただし、Bu ston が直接に Jitāri や Dīpaṃkaraśrījñāna の論書に基づいて『法行楽道』において七種供養を導入したのかは全く確認できない。

『法行楽道』の内容

続いて、『法行楽道』の内容を概観することにする。残念ながら、著者自身によるシノプシスはなく、明確に節に分けることも困難であるが、便宜上分類すると次のようになる：

- 1 序
- 2 法行
 - 2.1 前行＝七支 (2a5)
 - 2.1.1 礼拝 (2b3) *Bhadracarīpraṇidhānarāja* 1-4
 - 2.1.2 供養 (5a4) *Bhadracarīpraṇidhānarāja* 5-7
 - 2.1.3 懺悔 (6a1) *Bhadracarīpraṇidhānarāja* 8: 四力懺悔¹⁷
 - 2.1.3.1 悔過力 (6a3)
 - 2.1.3.2 对治力 (6a3)
 - 2.1.3.3 制止行 (6a5)
 - 2.1.3.4 依止力 (6a5)
 - 2.1.4 随喜 (7a1) *Bhadracarīpraṇidhānarāja* 9
 - 2.1.5 勧請 (7a3) *Bhadracarīpraṇidhānarāja* 10
 - 2.1.6 請願 (7a5) *Bhadracarīpraṇidhānarāja* 11
 - 2.1.7 廻向 (7a6) *Bhadracarīpraṇidhānarāja* 12

¹² Python 1973: 31-37.

¹³ 白崙 1988, 1989, 1990b.

¹⁴ 望月 1999c.

¹⁵ Lobsang 2001.

¹⁶ 白崙 1990, 1990c.

¹⁷ 白崙 1991: 61-80.

- 2.2 正行 (8a1) 想の浄化の儀軌 *Bodhicaryāvatāra* 3.20-23
- 2.3 結行 (8b5) *Bodhicaryāvatāra* 3.25-26, 33
- 3 儀礼 (9a2)
 - 3.1 漱口 (9a3)
 - 3.2 沐浴 (9a5)
 - 3.3 ジャンバラ神水供養 (9a6)
 - 3.4 水施餓鬼 (9b6)
 - 3.5 施食 (10a3)
 - 3.6 食事作法 (10b2)
 - 3.7 乞食の浄化 (11a1)
 - 3.8 十法行 (11a5) *Madhyāntavibhāga* 5.9-10ab.
 - 3.9 四無量心¹⁸ (11a6)
 - 3.10 観想 (11b4) マントラと印
 - 3.10.1 金剛集のマントラと印
 - 3.10.2 法性浄化のマントラと印 (12b1)
 - 3.10.3 甘露の合掌のマントラと印 (12b4)
 - 3.10.4 広大力のマントラと印 (12b5)
 - 3.10.5 知恵流星のマントラと印 (13a1)
 - 3.10.6 天主共通のマントラと印 (13a3)
 - 3.11 供施 (13a6)
 - 3.12 加持の請願 (14a6)
 - 3.13 華供養 (16b6)
 - 3.14 マンダラの作成¹⁹ (17a1)
 - 3.15 マンダラの供養 (17b1)
 - 3.16 本尊供養 (18a2) 七種供養²⁰ ・五供養
 - 3.17 誓願 (21a5) *Ratnāvalī* 5.66-85.
 - 3.18 就寝 (21b1)
- 4 まとめ (21b6)
- 5 奥書き (21b6)

¹⁸ 頼富、下泉 1994: 44-46.

¹⁹ ここに、洗足の項 (17b1) が挿入されている。

²⁰ ただし前半部分で説かれたように、明確な区分はなされていない。

このうち前半部分において、前行、正行、結行として一つの区切りがつけられている。それぞれにおいて、上述のように『普賢行願讃』と Śāntideva の『入菩提行論』とを所依の文献として引用しながら、七種供養、発心、菩薩律儀、菩薩行に関する言葉を述べることが説かれている。基本的には大乘仏教の修習方法であり、その骨格が七種供養による清浄行となっている。

後半の具体的儀礼に関する部分は、漱口と沐浴という物理的な身体の浄化から始まり、ジャンバラ神への水供養、施餓鬼供養、マンダラ供養などののさまざまな儀礼が続き、最後に就寝の儀軌で終わっている。いずれもが、それぞれの所作と共に唱えるべきマントラが付されている。これらは日課に従っているわけではないが、初学者がなす一日の儀軌の流れを示したものであるように思える。

Ādikarmika 文献について

蔵外文献の目録において、本テキストを Dīpaṃkaraśrījñāna の『入菩薩初学道説示』と結び付けた根拠は、両者が初学者の菩薩のための儀軌を説くテキストであるからであろう。この初学者のための儀軌を説くテキスト群が Bu ston の時代にはすでにまとまって存在していた。彼は、テンギユルの目録²¹である『如意宝珠自在王鬘 (Yi bzhin gyi nor bu dbang gi rgyal po'i phreng ba²²)』のマントラの章において「ādikarmika の所作次第」という項目を設定している²³。そこに列挙されているテキストと著者と訳者をあげると次のようになる：

I 重要な場所に行く在り方とラマへの請願の部門²⁴

- 1 *Po ṭa la kar 'gro ba'i lam yig. rje btsun sPyan ras gzigs dbang phyug gis mdzad pa*
著, paṅḍi ta A bhi yu ka ta de ba shrī , lo tsā ba Dhar ma yon tan 訳²⁵.
- 2 *Grub thob brgyad cu rtsa bzhi'i gsol 'debs. bla ma rDo rje gdan pa* 著²⁶.
- 3 *Man lung gu ru'i bstod pa chos 'byung rab gzigs zhes bya ba. paṅḍi ta Bi ma la shrī*

²¹ Bu ston によるカンギユルのタントラ目録については、Helmut Eimer, *Der Tantra-Katalog des Bu ston im Vergleich mit der Abteilung Tantra des tibetischen Kanjur*, Bonn 1989 を参照。

²² 金倉、山田、多田、羽田野 1953 の No. 5205, *bsTan bcos 'gyur ro 'tshal gyi dkar chag Yid bzhin gyi nor bu dbang gi rgyal po'i phreng ba zhes bya ba*. Lokesh Chandra ed., *The Collected Works of Bu-ston*, Part 26 (La), New Delhi 1971.

²³ 塚本 1989: 488-489 には、ādikarmika のサンスクリット文献として Ānupamavajra の Ādikarmapradīpa, Tāṭakaragupta(?) の Ādikarmavidhi, Mañjukīrti の Ādikarmāvatāra と Ādikarmāvatārapratibaddha とがあげられている。

²⁴ Tib.: gnas chen du bgrod tshul dang bla ma la gsol 'debs pa'i skor.

²⁵ P. No. 4577, **Potalakagamanamārgapatrikā. Śrīmat Potalakabhāṭṭāraka* 著.

²⁶ P. No. 4578, **Caturaśītisiddhābhyarthanā. Vajrāsanaguru* 著.

- 著; Paṇḍi ta Go ta ma badzra, lo tsā ba Grags pa byang chub 訳²⁷.
- II マンダラと仏像などの一昼夜の法行の部門²⁸
- 4 *Maṇḍala gyi cho ga. slob dpon Kampa la* 著²⁹.
- 5 *Maṇḍala gyi cho ga. slob dpon Sangs rgyas gsang ba* 著³⁰.
- 6 *Maṇḍala gyi cho ga. Dze ta ri dgra las rgyal ba* 著; paṇḍi ta A tu lo pa, lo tsā ba chos kyi shes rab 訳³¹.
- 7 *Maṇḍala gyi cho ga. rDo rje gdan par grags pa Rin chen 'byung gnas sbas pa* 著; Dhar ma grags 訳³².
- 8 *Las dang po pa'i tshogs gsog bya ba'i rim pa mdor bsdus pa. slon dpon Srid gsum rnam par dag pa'i rdo rje* 著³³.
- 9 *Byang chub gzhung lam shu lo ga sum brgya nyi shu rtsa lnga pa. slob dpon A bhya ka ra* 著; Kha che paṇ chen, Chog dgra bcom 訳³⁴.
- 10 *Maṇḍala gyi cho ga. Kha che paṇ chen* 著; 著者自身, Byams pa'i dpal 訳³⁵.
- 11 *Gang zag gcig gi nyi gcig gi bya ba de kho na nyid bsdus pa'i man ngag ces bya ba. slob dpon Śī la sa bha ba* 著³⁶.
- III 種々なる供物の儀規の部門³⁷
- 12 *rGyud sna tshogs las btus pa'i gtor ma'i cho ga. 'phags pa Klu sgrub* 著; paṇḍi ta Karma badzra, lo tsā ba gZhon nu tshul khirms 訳³⁸.
- 13 *Chos skyong thams cad pa'i gtor ma'i cho ga. slob dpon Ba liṃ ā tsarya* 著; rMa ban chos 'bar 訳³⁹.
- 14 *rGyal po chen po bzhi'i gtor ma'i cho ga. Jo bo rje, dGe bshes ston pa* 訳⁴⁰.

²⁷ P. No. 4579, *Paramagurupuṅyaśrīnamastotra*. Vimalaśrī 著. ただし北京版の目録にはそのチベット語訳タイトルは異なっており、*Bla ma dam pa bsod nams dpal zhes bya ba la bstod pa* とあるが、著者と訳者の情報から同一テキストと判断する。

²⁸ Tib.: *maṇḍala dang tsha tsha la sogs nyin zhang phrags gcig gi chos spyod kyi skor*.

²⁹ P. No. 4580, *Maṇḍalavidhi*. Kambala 著.

³⁰ P. No. 4581, *Maṇḍalakriyāvidhi*. Buddhaguhya 著.

³¹ P. No. 4582, *Maṇḍalavidhi*. Guhyajetāri 著.

³² P. No. 4583, *Maṇḍalavidhi*. Ratnākara Gupta 著.

³³ P. No. 4584, **Ādikarmikasambhārakriyākramasaṃgraha*. Tribhuvanaviśuddhavajra 著.

³⁴ P. No. 4585, *Bodhipaddhatināma*. Abhayākara Gupta 著. ただし北京版の目録のタイトルには「325 偈」という語句が欠けている。

³⁵ P. No. 4586, *Maṇḍalavidhi*. ただし北京版の目録のタイトルには著者と訳者の情報の Kha che paṇ chen を欠けている。

³⁶ P. No. 4587, **Tattvasaṃgrahopadeśa*. Śīlasambhava 著.

³⁷ Tib.: *gtor ma'i cho ga sna tshogs kyi skor*.

³⁸ P. No. 4588, *Nānāntroddhṛtabalividhi*. Nāgārjuna 著.

³⁹ P. No. 4589, *Sarvadharmapālabalividhi*. Balyācārya 著.

⁴⁰ P. No. 4590, *Caturmahārājābalināma*.

15 *gTor ma chen po'i las kyi rim pa'i 'grel. slob dpon Mi bskyod pa* 著; paṇḍi ta Badzra ki rti, lo tsā ba dGe ba'i blo gros 訳⁴¹.

16 *gTor ma cha gsum 'bring po. Śraddhā ka ra warma* 著; 著者自身, lo tsā ba Rin chen bzang po 訳⁴².

17 *bDud rtsi 'byung ba zhes bya ba'i gtor cho ga. Jo bo rje* 著; Jo bo rje bsgyur te khu dNgos grub kyis gtan la phab pa 訳⁴³.

18 *Chu gtor 'jam dpal ma'i 'grel pa phyag rgya chen po'i rnal 'byor la 'jug pa'i man ngag ces bya ba. slob dpon Śākya bshes gnyen* 著; lo tsā ba Rin chen bzang po 訳⁴⁴.

19 *Chab gtor 'jam dpal ma'i 'grel pa. Buddha dznyā na* 著; paṇḍi ta Śāntigarbha, lo tsā ba Rin chen mchog 訳⁴⁵.

20 *Chab gtor dri med. Jo bo rje* 著; 著者自身, Tshul khriims rgyal ba 訳⁴⁶.

21 *Klu gtor gyi cho ga. 著者自身, lo tsā ba Rin chen bzang po* 訳⁴⁷.

IV 吉祥と円満をなす部門⁴⁸

22 *dKon mchog gsum gyi bkra shis kyi tshogs bcad. slob dpon Zla 'od* 著⁴⁹.

23 *Rigs lnga'i bkra shis kyi tshogs su bcad pa*⁵⁰.

24 *rNal 'byor rgyud kyi lha sum cu rtsa bdun gyi bkra shis kyi tshigs su bcad pa*⁵¹.

25 *bKra shis brgyad pa. 'phags ma sGrol ma* 著; paṇḍi ta Pi na ya shrī badzra, lo tsā ba Tshul khriims sengge 訳⁵².

これらの二十五のテキストが、四つの部門に分けられて並記されている。このうち、*ādikarmika* の言葉が付されているテキストは第八のものだけである。編者の言葉は見出し語のみであり、章のタイトルと四項目の関係は明らかではないが、**Bu ston** 自身はこれらのテキストは初学者がなすべき儀軌を説いたものであると認識していたと思われる。

⁴¹ P. No. 4591, *Mahābalikarmakramavṛtti. Vajrākṣobhya* 著.

⁴² P. No. 4592, **Madhyamabhāgatrayavidhi. Śraddhākaravarman* 著.

⁴³ P. No. 4596, *Amṛtodayanāmabalividhi*. 北京版の目録では著者名を欠くが、ここでは訳者だけではなく、著者として *Dīpaṃkaraśrījñāna* の名前があげられている。

⁴⁴ P. No. 4594, *Mahāmudrāyogāvātārapīṇḍārtha. Śākyamitra* 著.

⁴⁵ P. No. 4595, *Balivṛtti. Viddajñāna* 著.

⁴⁶ P. No. 4597, **Jalabalivinalagrantha. Śrī Dīpaṃkarajñāna* 著.

⁴⁷ P. No. 4598, *Nāgalavidhi. Śrī Dīpaṃkaraśrījñāna*. 北京版の目録では、訳者は *Rin chen bzang po* のみである。

⁴⁸ Tib.: *bkras shis dang bde legs su byed pa'i skor*.

⁴⁹ P. No. 4599, **Ratnatrayamaṅgalagāthā. Bhānucandta* 著.

⁵⁰ P. No. 4600, *Pañcatathāgatamaṅgalagāthā*.

⁵¹ P. No. 4601, **Śrīyogatantramaṅḍaladevasānucaratahāgatapañcagotrasaptatrimśaddevamaṅgalagāthā*.

⁵² P. No. 4602, *Maṅgalāṣṭaka. Tārā* 著.

続いて、彼の『仏教史』の「目録部」から *las dang po pa* の項目で *ādikarmika* 文献を拾ってみると、次のようになる：

- 1 *Las dang po pa'i sgrom pa mdor bsdus pa. Shes rab grags* 訳⁵³.
- 2 *Las dang po pa'i dam tshig mdor bsdus pa. slob dpon Dznyā na bo dhi* 著; *bSod nams rgyal ba* 訳⁵⁴.
- 3 *Las dang po pa'i bya ba mdor bsdus pa. slob dpon Byang chub bzang po* 著; *Chos kyi shes rab* 訳⁵⁵.
- 4 *Las dang po pa'i tshogs gsog pa'i bya ba'i rim pa mdor bsdus pa. slob dpon Srid gsum rdo rje* 著⁵⁶.

このうち、最後のものはテンギュル目録と重複するものであるが、その一方で前三者はテンギュル目録の *ādikarmika* 文献の項には入れられていない⁵⁷。しかしながら、これらの情報から *Bu ston* は初学者がなすべき儀軌を説く文献がさらに複数存在していたことを認識していたことが確認できる。

また両者のテキストが著された年代を比較すると、テンギュル目録が 1335 年⁵⁸であり、仏教史は 1322 年⁵⁹である。このことから、1330 年に著された『法行楽道』の著述の段階においてテンギュル目録における *ādikarmika* 文献を意識していたのかどうかは不明であるが、逆に言えば本テキストを著すことにより *ādikarmika* 文献群を意識した可能性が生じる。

先行する *ādikarmika* 文献との比較

『法行楽道』に先行するインドで著された *ādikarmika* 文献のうち、ここに先行研究がなされている二つのものを取り上げる。一つは *Jitāri* の『発菩提心取受儀軌』であり、もう一つは *Anupamavajra*⁶⁰ の『所行のしるべ (*Ādikarmapradīpa*⁶¹)』である。これらのテキストは、いずれもが初学者が行う儀軌を説くテキストであり、『法行楽道』と

⁵³ 西岡 1983. *Bu ston* の目録番号 (=B) では、B. 2473, 2827. 前者は「ヘールカ部門」であり、後者は「種々なる道次第の部門」(あるいは「ドーハの部門」)である。

⁵⁴ B. 2846 = P. 4548 (*Prathamakarmasamayāsūtrasaṃgraha*. *Jñānabodhi* 著). このように、サンスクリットのタイトルは、*ādikarmika* とはなっていない。

⁵⁵ B. 2791.

⁵⁶ B. 2878 = P. 4584.

⁵⁷ テンギュル目録のいずれの箇所にも挿入されていたのかは、調査を要する。

⁵⁸ Tib. 122a7: *na tshod ldan*.

⁵⁹ 西岡 19080: 62, n.1.

⁶⁰ 彼については、高橋 1992: 555 によると、十～十一世紀頃の人物である。

⁶¹ Poussin 1898: 177-204; 高橋 1992, 1993.

の類似点が多く見られるからである。

まず **Jitāri** のテキストについては、テンギユルの中観部に収録されている小部のテキストであり、これに対する白崙顕成による項目⁶²の大枠のみをあげてみると、

- 1 善知識から受戒する方法
 - 1) マンダラ作成
 - 2) 供養
 - 3) 七支清浄行
 - 4) 誓願
 - 5) 発菩提心
 - 6) 受戒
 - 7) 後の心の増長
- 2 善知識のいない場合の儀軌
 - 1) 三聚浄戒
 - 2) 初学者の誓願行
 - 3) 信解行者の三昧行と往地者の歓喜行

となる。このうち、「初学者の誓願行」については、さらに、(1) 洗面、(2) 着衣、(3) マンダラの作成、(4) マンダラの供養、(5) 七支清浄行、(6) 念仏、(7) 経典読誦、(8) 誓願、(9) マンダラの解放、(10) 施餓鬼、(11) 食事の作法、(12) 日中と夜間の儀軌、となる。テキストが前半と後半に分かれ、それぞれに七種供養が説かれており、全体の内容も『法行楽道』とほぼ同じ構成になっている。また『普賢行願讃』や『入菩提行論』などの引用される大乘の経論もほぼ同じである。それに対して、相違点としては、**Bu ston** のものには受戒や菩薩律儀に関する記述がなく、水供養などの多くの儀軌とマンダラが添えられている。印象としては、**Bu ston** は **Jitāri** のこのテキストに基づいて『法行楽道』を著した、或いは少なくともこのテキストを認識して本論を著したように思える。

次に **Anupamavajra** のテキストに対する高橋尚夫による項目⁶³のうち本論にあたる部分のみをあげてみると、(9) 起床、(10) 漱口、(11) 洗顔、(12) 朝勤行、(13) ジャンバラ神に対する水供養、(14) 水施、(15) 造塔供養の儀則、(16) 鋳型から塔を造る儀則、(17) 供養法、(18) 師の曼荼羅建立の事由、(19) 師の曼荼羅建立の儀則、(20) 器界観、

⁶² 白崙 1990: 36-37.

⁶³ 高橋 1992: 552-555.

(21) 道場観、(22) 本尊観、(23) 本尊供養、(24) 己身奉獻、(25) 懺悔、(26) 随喜、(27) 廻向、(28) 合掌恭敬、(29) 施食、(30) 奉送、(31) 供養の功德、(32) 施食の真言、(33) 乞食の浄化、(34) 菩薩行、(35) 夕勤行、となる。ここに説かれている供養などの儀軌は、『法行楽道』と重なりあうものが多く、マントラに関しても、Anupamavajra のものに説かれる七十五のマントラのうち、六割ほどが Bu ston のテキストにおいても説かれている。ただし、それらの儀軌が行われる順序に相違が見られる。印象としては、多くの類似点が見られるものも Bu ston が直接にこの文献に基づいて『法行楽道』を著したようには思えない⁶⁴。おそらく、ここに説かれているような儀軌とそれにとまなうマントラについては、Bu ston 以前にすでに一般的なものであったのであろう⁶⁵。彼はそのような一般的に行われている初学者のなすべき儀軌を自らの著書に取り入れて、本論を著したように思える。

まとめ

本章で確認できたことをまとめてみる。当該文献は、初学者の一日になすべき儀軌を説いた ādikarmika 文献の一つである。内容は、Jitāri の『発菩提心取受儀軌』に説かれている七種供養を基本とする大乘仏教の儀軌と密教的儀軌とマントラを融合したものである。初学者の儀軌の大乘から密教への転換は、すでに Jitāri のテキストに見ることができるが、時代が下がるに従ってより密教色を強めていったのであろう。

また、本論と Bu ston が前述のテンギュルにおいて列挙したそれぞれの ādikarmika 文献との関係や、『サーダナ・マラー』などのタントラのテキストに説かれている儀軌がどのように ādikarmika 文献として編集されていったのかという展開について不明な点もこのことについては、āpattideśanā から ādikarmika への思想的流れを含めたインドにおいて確立され、チベットに伝承された初学者の儀軌の展開を解明することで、インドからチベットへどのような仏教儀軌が伝承されたのかが明らかになるであろう。

Bu ston 著『法行楽道』和訳

『初学者の菩薩が法行を修得する儀軌・一切智に行く楽道』と言われる。

1 本当のラマたちと、仏と菩薩のすべてに礼拝する。

⁶⁴ 彼が Anupamavajra なる人物を知っていたのかも不明である。

⁶⁵ Sādhnamālā や Advayavajra の Kudṛṣṭinirghātana などのテキストにも同じようなものを見ることができる。Cf. Bhattacharyya 1925-28 Baroda; 密教聖典研究会 1988.

十方の世間界に顕現する限り存在するすべてが一つに集まれば、何れかの知者の光が現れた部分だけでも競うことができず、譬喩に適さず、方向のみを表明することもできない、一切の所知を明らかにするラマたちに礼拝する。

誰であれ悲心により三有に囚われた有情が苦しんでいるのを見た後は、一切智の楽しみをよく設定するために善集を難行により成立させなさい。

法王の位を得てから、すべての有身の者に対して無上なる福利の大宴を施して下さったシャーキャー・シンハに礼拝する⁶⁶。

その子も菩薩の無垢なる行を行っており、一切の菩薩とすべての崇拝に値する者にも礼拝してから信により説かれた門に入り、

特に菩提心を起こしてから、確実に仏となることを求めている初学者の仏子が行じ、受ける儀軌の順序をまとめたものを信仰を求める者が勧める側で聖教と概説書のように書く⁶⁷。

2.1 ここに完全なる円満を具えた人身を得て、四輪 [「増上戒の輪と、所作の行為の輪と、読誦の聞思の輪と、成就を切望する輪とである」と知られている。また軌範師ナーガールジュナが著した『勸誡王頌』に「相応しい国土に住し、正しい人に依存し、前世でもよい誓願をなし、自分で福德をなす四つの大輪があなたにおありになるように⁶⁸」と言われている⁶⁹]をともなう者が説いた門に入り、出家し、そうでない場合は優婆塞の学処を正しく授かってから最高の菩提に発心し、菩薩律儀を授かった初学者の菩薩は、罪過を清浄にし、福德を増やすために昼夜法行を精進するべきである。そして、その初学者の菩薩は、夜の後半の三時か四時にいるならば、寢床から起き上がり、帰依と発心の前行をなすことで、概説があるならば禅定をなし、ないならば読誦すべきである。

それから夜に起きて一切の事物を幻のように思うことを設定し、口を洗って沐浴をして七支をなすべきである。そのうち七支は、障害に対して行うことであり、それに三つある。なすべきことを適切になさないことと、なすべきではないことを適切になすことと、なしたことを浪費する罪過との三つである。最初のもは、正しい対象への礼拝と供養を適切にしないこととであり、その対治として礼拝と供養をなすことの二支である。第二に、自らの三門により不善をなしたことと、他者が善をなすことを喜ばないことと、

⁶⁶ ここまでは、十五音節八パーダからなる偈頌である。

⁶⁷ ここまでは、八音節十二パーダからなる偈頌である。

⁶⁸ *Suḥr̥lekha* 61. 瓜生津 1974: 332.

⁶⁹ この括弧内の文章は、小さな文字で記された挿入句である。本和訳においても、ポイントを下げておく。

他者が法を説くことを中絶させることと、善知識の寿命がないことを喜ぶことの四つである。その対治として懺悔と、善への随喜と、転法輪と、涅槃しないことを請願することである。第三に、善をなした者に邪見が生じることと、後悔と大声を出すことと正しい対象への怒りが生じる原因により衰退することと、誤って廻向することであり、その対治として廻向の支分がある。

2.1.1 そのうち最初の礼拝の支分は、身口意の所依に対して心を浄化する門から宝そのものの想をなし、十方の三時の如来子をともなう者たちが自分の集めた徳の対象と、一切衆生のためにこの場所に現われるようお願いすることを思う者が言葉で、

方向と時のすべてに遍満する三帰依処の教えに座す者が、煩惱が行く道を智慧と悲心により正しく意図してから、無量の国土から障害のない神変により、ここに来られて宝雲の大海の中央にお入りになるよう請願する。

と述べて、金剛を集める印と、**om vajrasamājah**⁷⁰と行うことで、善逝子をともなう者たちが各極微の上の極微により仏が囲まれている虚空の究竟だけに到達してからお入りになるよう観想し、それから自分の寿命の無始の輪廻から現在までのすべての身体を智慧で把握してから、そのそれぞれにも御頭と御手を限り無く変化し、それぞれの頭にも百千の舌で変化し、それぞれの舌にも仏の不可思議なる賞讃が述べられるよう観想し、一切の身体の下部の五支分を地に着ける在り方で礼拝するよう観想し、一切衆生も自分の周りでそのようになすよう観想し、身口意の三つを敬う門⁷¹から、

何らかの恩恵の大きな楽が存在することが刹那にも現われる師で宝のような身体で金剛をもつ御足下に礼拝する。

吉祥をともなう四身の自在天と金剛持と空行とロドゥ・リンポチェとタリカパーダとルルペー・ドルジェとミトラジョーキとチュジェ・チャンペー・ペルの福德が自在で宝である偉大な賢者で吉祥を具える師で獅子の相をもつ持明律儀の相続者に礼拝する。

十力がおありになるムニ自身とマイトレヤとアサンガとヴァスバンドゥとヴィムクティセーナとバダント・ヴィムクティセーナという最高の律師の部門⁷²とハリバドラとクスルパの二人とセルリンパとアティシャとドムトゥンとチェンガ

⁷⁰ 八田 1985, No. 1376.

⁷¹ テキストは、sge とするが、sgo と読む。

⁷² Tib.: mchog tu dul ba'i sde.

ワとシュンヌー・ウーと吉祥なる大雨をともなう小麦⁷³と獅子の修習をするチム⁷⁴の福德と智慧と名声の相をもつ菩薩の律儀を相続した方に礼拝する。

大賢で智慧をもつ最高のラーフラとバラモンのラーフラとナーガールジュナガルバとグナマティと宝である善知識で法を守り功德主で法鬘たるシウエ・チュンネー・ウェーパ⁷⁵とカチェン・パンチェンとシュリー・ボーディバドラとデーワ・ペルと偉大な賢者として知られている御足の比丘の律儀の相続者に礼拝する。

不二を説かれた大賢とマイトレーヤとアサンガとヴァスバンドゥとヴィムクティセーナとバダಂತ・ヴィムクティセーナの最高の部門と律の部門と、ヴァイローチャナラクシタとハリバドラとブッダジュニャーナと功德のある善知識のリンチェン・サンポと妙月と北極星を守る⁷⁶ロデン・シェーラプとシェーラプワルとチャンチュプ・イエーシェとシュンヌー・ツルティムと、十万の智慧と十万の菩提と妙金剛と旗の在り方に励むドルジェ・リンポチェと獅子の成就の量となる人で波羅蜜多の相続者に礼拝する。

大きな悲心をもつ尊者で、一切智の説法者であり、福德と功德の大海の国土である如来に礼拝する。

清浄を望み、煩惱を離れて、善により悪趣から脱し、唯一の最高なる勝義となり、寂静となる法に礼拝する。

解脱してから解脱の道も示し、有学の者たちをととても尊敬し、国の聖者で功德のある僧侶にも礼拝する。

身体における変化は一切処において三十二の最高の特徴がおありになる正等覚として知られている勝者にあまねく礼拝する。

正等覚が生まれ、菩提に触れ、寂静なる輪を回し、無漏の涅槃をなし、善逝が入り歩き、起き上がり、獅子のようにお眠りになるその場所にも礼拝する。

上と下と中と四方八方でも有身と無身の塔に礼拝する。

法身は虚空のように無差別でも、色身は虹のようにそれぞれ明らかであり、方便と智慧の最高なるものにあるものを得た五種の善逝に礼拝する。

随順する誓願は無量なる善集から行うべきことを行ってもさらに広がり、一賢劫になされた到彼岸の千の正等覚に礼拝する。

ヴィパシン仏とシッキンとヴィシュヴァブーとクラクツチャンダとカナカムニとカーシャパと天の天であるシャーキャムニ・ガウタマの七仏に礼拝する。

⁷³ Tib.: char chen dpal ldan gro.

⁷⁴ Tib.: sgom seng mchims.

⁷⁵ Abhayākaragupta?

⁷⁶ Tib.: zla bzang 'rtan sgyong.

最初に最高の菩提に発心してから三阿僧祇劫にわたって資糧を集めたものを中断させる四魔を制圧なされる世尊たるその獅子に礼拝する。

虚空に似て、極微を離れ、無垢で、智慧の子で、身体と相がなく、大海の功德があり、甚深なる悲心をもち、無比なる御手が自分の頭に置かれるように。

さらにまたムニの何れかの知っている賞讃により賞讃すべきで、世尊・如来・阿羅漢・等正覚・妙相と賞讃される吉祥なる王に礼拝する。宝と月と蓮華で飾られた賢者で盛栄たる妙音王に礼拝する。純金に値するものが顕現する禁戒⁷⁷を成就した方に礼拝する。無憂吉祥仏に礼拝する。法称海音⁷⁸に礼拝する。法海最勝慧遊戯明智⁷⁹に礼拝する。薬師瑠璃光王に礼拝する。シャーキャムニに礼拝する。

言葉や思いで述べることができず、完全なる智慧で、不生不滅で、虚空の本質をもち、無礙解で知恵の行境である三時の勝者の母に礼拝する。

法性と同類の十二部経と、法には生滅がなく、戯論を寂靜にするそれを認識して、すべての功德を成就させるよく相続した聖なる法に礼拝する。

無明の闇を取り除く最高の灯火で、病苦を取り除く薬のソーダである一切の宝の正法に礼拝し、供養し、帰依をする。

知恵のある師が光の先端にそのように誓願する智者と、根が寂靜なる マンジュゴーシャに私は尊敬をもって礼拝する。

童子の装束をしている方で、知恵の灯で飾られ、三界の闇を取り除くマンジュゴーシャに礼拝する。

千の手で輪を廻す千の王や、千の眼で賢劫の千の仏や、どこであれ調伏する者にそれを示す大徳觀世音に礼拝する。

十地の自在をもち、すべての王子の最高の方で、三十二 [相] と [五] 仏音と慈愛のお心をもち、一度の生において法王の地に行かれたマイトレーヤ 尊者に礼拝する。

チャンローチェンの最高の場所の聖者の中で密乗のすべての明呪の主であり、誤って導いて行く者たちを調伏なされる世尊金剛持に礼拝する。

天と非天が冠で御足の蓮華に触れ、すべての貧困から救い出すターラー母に礼拝する。

⁷⁷Chandra 1971: 2498a: suvarṇabhadravimalaratna- prabhāsavratā.

⁷⁸ Chandra: 733: dharmakīrtisāgara.

⁷⁹ Chandra: 731: dharmasāgarāpramativikrīḍitābhijñārāja.

吉祥をそなえた天母で、秋の月の色をし、三つの御口と八つの御手でとても美しい寂静なお身体で、無量なる知恵をもち、長寿を与えられた尊勝母の御足に礼拝する。

何らかの相を憶え、把握するだけでも、すべての恐怖から守り、無垢なる楽を与えて下さる天母プラバーヴァティーに礼拝する。

すべての勝者の幻の知恵の変幻なる法を神通から起こす天母で、成立した病気と魔鬼をすべて寂静になさるあなたに礼拝する。

菩薩の所依とすべての塔に礼拝する。賢者と、同じく軌範師と、長老に礼拝する⁸⁰。

その恩恵により智慧が清浄になるように、本尊の天に礼拝する。その恩恵により自分が解脱すように、善知識に礼拝する⁸¹。

過去世に世尊の御前で法の通りに成就させる人を子供のように守り、支えることをお認めになられ、法を守る守護神たちに礼拝する。

十方の世間において三世に属するあらゆる人の獅子たちに、私は残りなくそれらすべてに対して身口意を浄化して礼拝する⁸²。

普賢行の誓願の力により、すべての勝者が心により現前し、国土の微塵の数と同じ数の身体でおじぎをして、すべての勝者に正しく礼拝する⁸³。

一塵の先端に極微の諸仏が仏子の中におられ、そのように法界が残りなくすべての勝者に満ちると信解します⁸⁴。

それらを賞讃が尽きることのない大海と、母音の支分の大海のすべての音ですべての勝者の功德を正しく述べ、一切の善逝を私は賞讃します⁸⁵。

と述べて、礼拝をなす。広げることが喜びならば、三宝への随念を繰り返すべきである。

2.1.2 第二の供養を供える支分は、事物として価値のある供養となるものも天界の宝物から成り立つ器物を思って献上することで、さらにまた、花と果実と、薫樹や、香樹や、宝樹や、如意樹や、花の樹や、果実の木や、水と平地から生じた宝の山や、十方の主が把握できないすべてのものと、薬と延命薬と、一切の水と、地下水と、金輪と、世間界を愛する者たちに完全なる味覚の地味と、甘露の芽と、述べられない収穫と、清浄な声が聞こえない島と、清浄なる世間界でとても愉快的ことを享受する者たちを知恵で把握

⁸⁰ *Bodhicaryāvatāra* 2.25.

⁸¹ *Bodhicaryāvatāra* 10.58.

⁸² *Bhadracariprañidhānarāja* 1.

⁸³ *Bhadracariprañidhānarāja* 2.

⁸⁴ *Bhadracariprañidhānarāja* 3.

⁸⁵ *Bhadracariprañidhānarāja* 4.

して献上し、普賢菩薩の無漏のすべての供養の雲とマントラの力から生じた物の供養を知恵で把握して献上し、自分の身体全体を奴隷に与えようと思い、言葉で「彼ら聖者の集まりのすべてに功德水と塗香と花と薫香と灯と食べ物と楽と鏡と傘と旗などの事物として完全なものすべてと十方の世間界における天と人の聖なるよい物でできた完全なるすべての器物と、さらにまた陀羅尼と明呪の力と、信解の力により生じた普賢の供養の雲である『普賢行願讃』より生じた一切の大海により虚空界の無辺際のもので広く満たして献上する。供養する。

namo ratnatrayāya [三宝に礼拝する] / namo bhagavate [世尊に礼拝する] / vajrasārapramardane [金剛石能滅] / tathāgatāya [如来] / arhate [阿羅漢] / samyaksambuddhāya / [正等覺] tadyathā [同じく] / oṃ vajre vajre [二金剛] / mahāvajre [大金剛] / mahātejāvajre [大威徳金剛] / mahāvidyāvajre [大明呪金剛] / mahābodhicittāvajre [大菩提心金剛] / mahābodhimantopasaṃkramaṇāvajre [大菩提眞言親近金剛] / sarvakarmāḥāvaraṇaviśodhanāvajre [一切業障清浄金剛] svāhā //

と述べ、

聖なる花と聖なる花蔓と、楽器と塗香と最高の傘蓋と、最高の灯火と聖なる練香により、それらの勝者に供養をします。

聖なる衣服と妙香と、須弥山に等しい抹香袋と、莊嚴された特に優れた最高のものによりそれらの勝者に供養をします。

無上で広大なるそれらの供養ですべての勝者に対しても信解します。普賢行を信じる力により、勝者にあまねく礼拝し、供養します⁸⁶。

と述べられている。

2.1.3 第三に、罪過を懺悔する支分は、『説四法経⁸⁷』に、

四法を具えていれば、罪過をなしても、懺悔が制圧するであろう。四とは何かと言えば、こうである。批判をあまねく行うことと、対治をあまねく行うことと、過失を退ける力と、依止力とである。

⁸⁶ Bhadracariprañidhānarāja 5-7.

⁸⁷ Caturdharmanirdeśasūtra. Tib. D. No. 251, Chin. T. No. 772, 773.

と説かれているので、

2.1.3.1 批判の力は、罪過をなしたことを毒を飲んだことよりも悔いるので、『金光明經』に出ているものや『菩提過犯懺悔⁸⁸』に出ているように懺悔をなす。

2.1.3.2 対治をあまねく行うとは、甚深なる教典に敬意をなし、一切法空性を信解し、陀羅尼とマントラを唱え、仏の形象と塔を作り、それに供養し、薬師と知恵のラマなどの名を威力をもって保持し、まとめれば不善の対治となる善業に精進するべきである。

2.1.3.3 過失を退ける力とは、今後、何かに至っても罪過の行為をなさない律儀を守ることで不作の律儀を得る。

2.1.3.4 依止力は、三宝帰依と、菩提心を捨てないこととである。それ故に、以前になしたすべての罪過を後悔する高貴な心をもつことで、仏と菩薩のすべてを直接知覚してすべての過失を懺悔し、今後命を得てもなさないと思い、言葉で大金剛持ラマなどの十方におられる仏と菩薩のすべてと尊者である僧たちに「私を心にとめておいてください。私の名前はこうです」と述べて、無始の輪廻より現在に至るまでの間に煩惱と貪欲と瞋恚と愚癡による身口意の門から罪過である十不善をなすことと、五無間罪をなすことと、それに近い五つをなすことと、別解脱の律儀に反するものをなし、菩薩の学ぶべきものに反するものをなし、密咒の誓願と矛盾することをなすことと、三宝を損なう行為をなすことと、正法を捨てることと、聖なる僧を誹謗することと、父母を尊敬しないことと、賢者と軌範師を尊敬しないことと、バラモンと一緒に修行をする助伴たちを尊敬しないことなどと、まとめれば善趣と解脱の障害となり、輪廻と悪趣の原因となる過失と過犯の何れかの集まりのすべてを師大金剛主などの十方におられる仏と菩薩のすべてと尊者たる僧たちの御前で「告白する。懺悔する。隠さない。隠匿しない。今後も制御して下さい」とそのように告白し、「懺悔すれば自分が楽しみに触れる場所になるが、告白せず、懺悔しなければ、そのようにはならないであろう」と言い、

貪欲と瞋恚と愚癡により身口と同じく意によっても自分がなした過失はいかなるものもそれらをすべて自分で懺悔する⁸⁹。

と述べ、

⁸⁸ *Āpattideśanā*. 実際には、*Triskandhakasūtra* であり、*Upāliparipṛcchāsūtra* から抜き出したものである。Cf. 白寄 1989: 56.

⁸⁹ *Bhadracariprañidhānarāja* 8.

namas traiyadhīkanām⁹⁰ / tathāgatānaṃ sarvatra apratihātā vasti dharmāta balinām /
oṃ asama sama samantato anantatāvāpitiśasanaṃ / hara hara / smara smara /
bigatarāga / buddhadharmārte / sara sara samavalā hasa hapa / trāya trāya / gagana /
mahā vara rakṣaṇe / jvala jvala sāgare svāhā⁹¹ //

と七度など正しいものを述べて、一切法の空性を修習すべきである。

2.1.4 第四に、随喜の支分は、三時のそれぞれの人と聖者の一切の善根を明らかに喜ぶ心により随喜をなして、言葉で、

十方のすべての勝者と仏子と独覚と有学と無学とすべての有情のいかなる福德に対しても、それらのすべてに私は随喜する⁹²。

と述べられている。

2.1.5 第五の転法輪の勧請の支分は、十方の世間において仏が菩提を得てからしばらく受けることなくお心から少しだけ得て、法を示されないそれらに対して、一切衆生の無明を取り除くために法を説くことをお願いするよう観想し、言葉で、

十法の世間の灯火で菩提を順序通り悟り、無執着を得たそれらの主すべてに私は、無上なる輪を回すよう勧請する⁹³。

と述べられている。

2.1.6 第六の涅槃しないことの請願の支分は、仏が涅槃する在り方を示す方の前に進んでから、衆生の利益の為に果てしない劫にわたり涅槃せずにとどまっていることを懇願することを観想し、言葉で、

涅槃を示す者たちに対して、すべての有情の幸福と安楽のために国土の微塵の数の劫にわたりとどまることも私は掌を合わせて懇願する⁹⁴。

と述べられている。

⁹⁰ Lin 2001, vol 18 (=M), No. 5320.

⁹¹ M. No. 7881: oṃ asmasama / sananta anantatāvāpitiśasani / hara hara / smarana smarana / bigatamantrapati / sara sara samavara / hara hara dharaya dharaya / khana khana mahāmara rakṣani / jvala jvala nasakari svāhā //

⁹² *Bhadracariprañidhānarāja* 9.

⁹³ *Bhadracariprañidhānarāja* 10.

⁹⁴ *Bhadracariprañidhānarāja* 11.

2.1.7 第七の廻向の支分は、そのようになした善と、さらにまた三時に集めたすべての善を一つにまとめてから、仏と菩薩と声聞と独覚のすべてに無上の供養をお供えする。それから生じた善は一切衆生の利益を成就させるので、「布施をなし、そのようになすべき善を一切衆生が無上菩提を得る原因とするように」と観想し、さらにまた「仏と菩薩たちが三輪清浄の在り方により賞讃するように自分も賞讃する」と観想し、言葉で、

礼拝と供養と懺悔と随喜と勧請と懇願のいくらかの善を自分で集めたものすべてを私は菩提のために廻向する⁹⁵。

マンジュシュリー勇者が知るように、その普賢も同じように、彼らのすべてに従って自分が学び、これらの善をすべて廻向する。

三時におられる一切の勝者により廻向されたものを最高に賞讃することで、その自分の善根をすべてよく行じ、廻向する。

と述べられている。

そのように七支分を完成させてから、帰依と発心と請願をなすならば、加行と正行と結行の三つのうち、加行の七支分は、先行して帰依をなすことで、この時から把握して菩提座にいる間に虚空の辺境と同じ位の一切衆生を正等覚の地に移すために法身を本質とする他の仏に説くことをお願いし、自分自身でもそれを得るべきで、無漏の滅・道〔諦〕の道をお願いし、不退転の僧に道を成就した助伴をお願いするために、それらの三帰依処に帰依をしようとして観想して言葉で「十方におられる仏世尊と菩薩の大悲のある方々よ、私を心にとめておいてください。私の名前はこうです」と述べるこの時から把握して、

菩提座にいる間は、仏に帰依し、法と菩薩の集まりに帰依をする⁹⁶。

と三度述べられる。

2.2 第二に、正行について、父母となった一切衆生たちが輪廻の苦しみに迫害されていることを記憶し、大悲を起こして、自分の身体と享受と三時の一切の善を一切衆生のために無貪着に捨て、衆生たちに適切な場所と下方に至る完全な対象がすべて自然に成立することが生じるように、と思い、決心してから修習し、言葉で、

⁹⁵ *Bhadracaripranīdhānarāja* 12.

⁹⁶ Cf. *Bodhipathapradīpa* 31-36.

身体と、同じく享受と、三時の一切の善もすべての衆生の利益を成就するために、無貪着に捨離する。

地などの大種と虚空のように常に無量の衆生の多くの相が依存する原因にもなりたい。

そのように虚空の際に至る衆生界のあらゆる相ですべてが涅槃する限り私は依存する原因にもなりたい⁹⁷。

と述べるのが、想の浄化である。儀軌を述べたものは、自分の一切衆生のために悟りを得るべきである。そのために、この時から把握して、大菩提を得ていない間は、菩提に発心し、菩薩の律儀を正しく守り、菩薩が捨てるべきものをすべて捨て、すべての学ぶべきことを学ぼうと思い、決心してから修習し、言葉で、

憶えてもらうことは前と同じように「私、この名前の者は」と言うことで無始の輪廻の前世の最後のものがある限り、衆生の利益のために無量の行を行うように。

世間の守護者のこの御前で最高の菩提に発心し、一切の有情を楽しませてから貧しさと貧困から救うべきである。

それからしばらく後にももしも自分で貪欲の心を起こしたならば、十方におられる一切の仏が集まるであろう。

菩提を得ている間は悪心と害心と嫉妬と貪欲も、今後ずっとなすべきではない。

梵行を自分で行じ、罪過と認められるものを完全に捨ててその戒律により仏に従って学ぶべきである。

自分がここで菩提を長い在り方で成仏することを信解し、喜ぶことなく、辺際に至るまでも一人の衆生のために行じるべきである。

無量で不可思議な仏国土において行じるべきである。十方すべてにおいて自分の名前が知られるように。

身口の業もあらゆる相で自分で行ったならば、意業も浄化すべきである。不善業をなすべきではない。

昔の善逝が菩提心を起こし、菩薩の学処に順序通りに住したように、そのように有情利益のために菩提心を起こそう。そのように学処も、順序通りに学ぶであ

⁹⁷ *Bodhicaryāvatāra* 3.10, 20-21. 白寄 1990c: 68-69.

ろう⁹⁸。

と三度述べられている。正行の儀軌である。

2.3 結行の儀軌は、「自分が人身を得て、菩提心に続いて生じる菩薩になることで、今度は菩薩の学処を退くことなく学ぶべきである」と喜んで修習し、言葉で、

今日、私には生命の果実があり、人間の存在をよく得ている。その時、仏の種姓に生まれ、仏の子に、今日、私はなっている。

そこで、何からであっても自分の種姓にふさわしい行為をなして、過失がないこの高貴な種姓に汚れが成立しないようになすべきである⁹⁹。

と述べて、仏と菩薩たちと一切衆生も楽しい心を起こすように請願することを思って、

私は、今日、一切の救護者の面前で、有情を善逝の状態に、安楽に招待する間に誘い、天と非天などは歓喜しなさい¹⁰⁰。

と述べて、そのように七支分を百度できないならば、師と三宝の歌頌のみに続いてあらん限りの人たちのことを今後思う意味を考え、述べる。結びに、帰依と発心をまとめるべきである。

3 そのように七支を適当な長さにまとめて三更¹⁰¹なし、続いて罪を懺悔の時に繰り返すことで、罪から立ち上がるであろう。

3.1 それから、

すべての中でよい普賢行のために、マンジュシュリーの誓願をなすように。未来のすべての劫において弱ることなく、そのなすべきことを残らず完全にするよ
うに。

という意味を考えて述べ、きれいな器に供養の水を注ぎ、

oṃ arghaṃ pratīchaye svāhā //

⁹⁸ *Bodhicaryāvatāra* 3.22-23. 白崙 1990c: 70.

⁹⁹ *Bodhicaryāvatāra* 3.25-26. 白崙 1990c: 71.

¹⁰⁰ *Bodhicaryāvatāra* 3.33. 白崙 1990c: 69.

¹⁰¹ Tib.: thun.

om pādyam pratīchaye svāhā //

と、漱口水を注ぎ、

om ācamanam¹⁰² pratīchaye svāhā //

と、神水を注ぎ、

om prokṣaṇam pratīchaye svāhā //

[と言う¹⁰³。]

3.2 それから身体を沐浴して修習し、勝者の身体に煩惱はなく、衆生の業障を浄化した後に、身口意をこの沐浴をすることで、三界に存在する習気を浄化しなさい。

om sarvatathāgata [/] ahārapūjameghasamudraspharaṇasamaye hūṃ //

と述べる。

3.3 それからジャンバラに水を供えるために¹⁰⁴、供施のきれいな器の中で空のものから黄色の *jam* が成立した後に *pījapūrajam* で飾り、それから光が出され、集まったものから黄色の *jambhala* を一つの口に、両手では右手に *pījapūra* を、左手に種々なる宝石のうち吐き出した宝石をもち、宝生で頭を飾り、青蓮華の花環を首に下げ、宝石の種々なる飾りにより飾り、螺貝と蓮華のついた宝の上に変化した姿で座すことを観想し、*jaḥ hūṃ baṃ hoḥ*¹⁰⁵ ということ九智に入り、喜ぶべきである。その頂上に *om* と白を、首に *āḥ* と赤を、胸に *hūṃ* と青を思い、身口意を加持し、

om sarvatathāgata [/] abhiṣekatasamayaśriye hūṃ¹⁰⁶ //

と述べて灌頂する。右手に月輪の上に *bhruṃ* から大日如来を、*hūṃ* から不動如来を、*ām* から宝生仏を、*jriṃ* から無量光仏を、*kaṃ* から不空成就如来を観想し、それらが

¹⁰² Tib.: a ṅcama ṇam.

¹⁰³ 森 1991.

¹⁰⁴ 高橋 1992: 564-565.

¹⁰⁵ M.2859, 5630, 6739.

¹⁰⁶ 高橋 1993: 141, no.25.

要求から生じた甘露水の流れと混ざった水をジャンバラ神の頭に手を伸ばした在り方で与え、

oṃ jambhalajalendraye svāhā¹⁰⁷ //

と百八度繰り返して布施をする。五つの供養¹⁰⁸により供養し、

ジャンバラには珍宝があり、多くの夜叉に財産を運ぶすべての主で、北方を守る尊首ジャンバラに最高の成就をお与えになる方に敬礼する。

食欲の業の火により望まれる私は、何度生まれてもあなたに帰依し、宝蔵の甘露の水の流れにより衆生の貧困の苦を排除する。

と言う請願により喜んでから宝の雨を降らすことで自他のすべての貧困を取り除くことを観想し、智尊が行き、誓願を自分に集め、不可得による印をなす。

3.4 それから自分自身で大悲を起こし、その右手から甘露の流れが生じてから、すべての餓鬼の飢渴を満足させることを修習し、

oṃ āḥ hūṃ hrī //

と述べて、特に餓鬼に自らと水に食べ物の汚れを着けることなく、水滴を取り除いて、弾指の音と一緒に、

oṃ jvalam idaṃ sarvapretebhyāṃ svāhā¹⁰⁹ //

と述べ、

聖観自在の手から滴れる乳の流れにより、餓鬼は満足してから、水浴し、常に涼しくなれ¹¹⁰。

¹⁰⁷ M.1708. 密教聖典研究会 1988: 18.

¹⁰⁸ 白寄 1990c: 75. oṃ vajrapuṣpe hūṃ. oṃ vajradhūpe hūṃ. oṃ vajradīpe hūṃ. oṃ vajragandhe hūṃ. oṃ vajranaivedye hūṃ.

¹⁰⁹ 高橋 1993: 139, no. 10.

¹¹⁰ *Bodhicaryāvatāra* 10.18.

と言って廻向し、

誰が布施し、何を布施し、布施がどのようなものであるかを考察せず、布施と同じものにより布施自体が完全になるように。

龍王の歡喜と喜びにより最高となるすべての施主の正しい布施である心の飾り、心の器物、ヨーガの集まり、対象の最高のもの、正等覚の位を得なさい。

と述べられている。

3.5 それから *surūpa* に供えるべきである。如来の美しい像を前に修習し、それに敬礼することを觀想し、水と混ぜた食べ物にこの陀羅尼を七度唱え、

*namaḥ surūpāya tathāgataya arhate samya saṃbuddhaya / tadyathā / oṃ surusuru
prasuru prasuru tara tara bhara bhara sambhara sambhara smara smara saṃtarapaya
saṃtarapaya sarvapretanāṃ svāhā*¹¹¹ //

と述べ、左手で弾指を三度なしてから、すべての餓鬼に中央の方向で布施することを觀想し、

*apasarantv avatārasarvaprekṣiṇo dadāmyāhaṃ sarvalokadhātunivāsināṃ pretanāṃ
ahāraṃ*¹¹² //

と述べることですべての餓鬼に大升の食べ物を勝ち負けなく得ることを觀想し、「虚空の辺境と同じくらいのすべての餓鬼の集まりが食べたり飲んだりすることで満足するように」と述べて法施をなすべきである。これは、午前中に食事をとらずに先に供えるべきである。

それから

*namaḥ samantabuddhānāṃ sarvatathāgatāvalokite / oṃ bhara bhara sambhara
sambhara hūṃ phaṭ svāhā*¹¹³ //

¹¹¹ M. 3093. 高橋 1993: 149, no. 66.

¹¹² 高橋 1993: 149.

¹¹³ 密教聖典研究会 1988: 18.

というこのマントラを七度述べて、広げた右手の五本の指先から生じる甘露の流れにより門の基部に置かれた水と混ざった供物を明らかに満たし、一粒の穀物をそれぞれマガダ国の大升の五升だけの食べ物を見て、すべての餓鬼を満足させてから弾指を三度して、菩薩による供物を施すべきである。

3.6 それから食事の時に至り、食べ物の一部を梵行者たちに、一部を苦しんでいる者たちに、一部を誤って墮ちた者たちにまとめておく。一部を自分で食べ、供物の一部を並べて、**oṃ āḥ hūṃ**¹¹⁴ と三度述べることで甘露になるように観想し、

oṃ akāro mukhaṃ sarvadharmāṇaṃ ādyānutpannatvāt / oṃ āḥ hūṃ phaṭ svāhā¹¹⁵ //

「この広大な供施の供物によりすべての聖者のあつまりに供養することで喜び、すべての魔鬼が供物により満足するように」と述べる。

それから、

oṃ āḥ sarvabuddhabodhisattvabhyo vajranaivedye hūṃ¹¹⁶ //

と言い、三つの天の食べ物を与える。

oṃ hārītya mahāvajrayakṣiṇī hara hara sarvapāpani kṣriṃ svāhā¹¹⁷ //

と言うことで羅刹と羅刹の子に食べ物と飲み物の二つを与える。

oṃ agrapiṇḍāsibhyaḥ svāhā¹¹⁸ //

と言い最初に属する魔鬼に酒を一つを供える。

namaḥ sarvabuddhabodhisatvanāṃ / oṃ balaṃ dade tejomālini svāhā¹¹⁹ //

¹¹⁴ 高橋 1993: 151, no. 72.

¹¹⁵ M.7800. 高橋 1993: 151, no. 68; 北村 2001b: 30.

¹¹⁶ 高橋 1993: 151, no. 69.

¹¹⁷ 高橋 1993: 151, no. 70.

¹¹⁸ *Sādhanaṃālā* 1925-8: 103.11-12; **oṃ agrapiṇḍāsa-nebhyaḥ svāhā agrapiṇḍamantraḥ**. 白寄 1990c: 79.

¹¹⁹ 高橋 1993: 151, no. 71.

と言い食べ物を八度明らかに賞讃し、最初に親指と無名により触ってから食べ、さらにまた食べ物を愛し、身体の健康のために食事を捨て、法を成就する所依となった身体が存続するためと、聖道の集まりを集めるためと、この食べ物を食べることにより八種の身体が虫であるものの首座の者たちをこれにより喜ばせるためと、現在の財物により集めるべきである。菩提を得てから法により集まるものを想像する観想により、食事の儀軌を適切に行い、正しく食事をして、

oṃ ucchiṣṭapiṇḍāsīdhyāḥ svāhā¹²⁰ //

と言うことで残りに属する魔鬼たちに酒を一つ供える。さらにまた残りのもののためになさないでおいていたものを、残りのものに食べ物を供える。

3.7 それから 口をよく洗って、

namaḥ samantaprabharājāya tathāgataya arhate samyaksambuddhaya namo mañjuśriye kumārabhūtāya bodhisattvāya mahāsattvāya mahākaruṇikāya / tadyathā / oṃ nirālambe nirābhāse jaye jaye labdhe mahāmade dakṣe dakṣeṇāṃ pariśodhaya svāhā¹²¹ //

と言うことで供物を完全に浄化する陀羅尼を唱え、それから経典を読んで、施主たる王と、さらにその他の衆生の集まりに病がない時に、円満を集め、常に楽しい友を得るように。

施により魔鬼を自在にし、施により敵をなくし、完全な友も布施であるので、そのために布施が最高であると述べる。

施は世間を飾るものであり、施により悪趣を退け、施は天井への階段であり、施が寂静をなす善である。

菩薩の富みは尽きることのない虚空のようなものであり、その富みを得るためにその布施を正しく広げるべきである。

などと布施の偈頌を述べてから、廻向と誓願により封印する。

3.8 食事の所作の時の後の午前中の中に、

¹²⁰ 高橋 1993: 151, no. 73.

¹²¹ 高橋 1993: 152, no. 74.

文字を書く¹²²ことと、供養と、布施と、聞くことと、読誦することと、受持することと、解説することと、諷誦することと、それを考えることと、修習することと、この十の行の本質が福德の無量なる集まりを得る。

と『中辺分別論¹²³』にある文字を書くことと供養などの十の法行を励むべきである。

3.9 それから午前の人に水供養をしようとする際に、宝の美しい器の中に水を注ぎ、小麦粉と花などの好ましいものと、金などの五種の磨かれた宝石と、新鮮な種々なる食べ物と、薬と香と種々の穀物を用意して、自分で心地よい座に座り、大悲により有情利益を憶えており、前の虚空に勝者の子がいることを把握し、帰依し発心すべきであり、

三宝に帰依をなして、罪過と不善とをそれぞれ懺悔して、有情の善を随喜し、仏と菩薩を心により把握する。

仏と法と最高の集まりに菩提の間は帰依し、自他の利益を完成するために菩提心を起こしなさい。

最高の菩提心を起こしてから、一切衆生が自分で楽しみ、最高の菩提行を喜んでなし、有情利益のために仏を成就するように¹²⁴。

と述べ、一切衆生は楽を具えているべきで、苦を離れるべきである。楽を具え苦を離れたならば、喜ばしい。愛憎のない性質で平等心をなそうと思い、四無量を修習する。

3.10.1 それから

oṃ svabhāvaśuddhaḥ sarvadharmā svabhāvaśuddho 'ham¹²⁵ //

と言うことで一切法空を観想する。空の性質のうち paṃ から蓮華が、a から月輪 [が、その] 上に自分の心で黄色の文字の maṃ から maṃ の剣により飾られ、それから光を放ち、二義をなすべきである [聖なる供養と衆生利益をなす]¹²⁶。ここに集めたものを変じた後に、自分自身で聖者マンジュシュリーの黄色の身体で一つの口と二本の手で、右手は智慧の剣を虚空にかかげ、左で青蓮華の根を胸に保ち、青蓮華を耳の方に向かって

¹²² テキストは 'dri とあるが 'bri の誤りである。

¹²³ *Madhyāntavibhāga* 5.9-10ab. 長尾 1976: 328.

¹²⁴ 高橋 1993: 147, 1992: 578, n. 55. 本偈は、後半で再び引用される。

¹²⁵ M. 5599. *Sādhanaṃāla*, p. 218.6-7. 白寄 1990c: 72.

¹²⁶ 北村 2001: 4.

裂いた上に『般若経』の経函で飾る。さまざまな宝飾により飾られ、下は天の物の衣服を着け、蓮華と月の上に金剛跏趺で座することを観想し、知恵の資糧が入る身口意を加持し、灌頂し、主尊が頭を飾ることを観想する。頭に **kaṃ** を観想し、**vajrakava ce baṃ** と述べることで金剛の鎧を求められた幅で着ることを観想する。両足の裏に **haṃ** を観想し、**haṃ vajrarakṣa haṃ** と述べることで **haṃ** から金剛の鎖から中指に [白絹の結び] 五処 [胸と二本の腕と両脇] が結ばれることを観想し、心に月輪の上で種子をマントラにより廻すことを観想し、**oṃ vāgīśvarimūṃ**¹²⁷ という以前の一切の者に知られているものや、マンジュシュリーの大注に **oṃ vāgīśvara maṃ** と出ており、言葉の法則に従うならば、**oṃ vāgīśvāra** [言葉の自在天] **maṃ** と行くのが正しくて、女性生殖器を得ていないので山を浄化せず、**mañjuśrī** という名前の最初の文字を精液で飾られた種子に正理により **maṃ** という種子に生じる必要が顕われる。そのように何れかの正しいマントラを唱えて五つの供養により供養をなす。

吉祥の生じる場所で、マンジュシュリーはすべての吉祥であり、辺際を慈愛で満たす穏やかな性質で、穏やかで吉祥として知られている世尊たる正しい吉祥たるマンジュシュリーに敬礼する¹²⁸。

と言うことにより賞讃がなされ、

善逝は心髄によりすべての有情に満ち、心は広大で最高なものに発心しており、これらの有情を残らず仏にする。ここに器ではない衆生は誰もいない。

起き上がるように、起き上がるように、十力がある天が、時を超えずに悲心により衆生利益を思い、無上なる三宝に物を並べて、意により変化したこの場所に残らず衆会を伴って、来られるように請う。

と述べ、金剛集のマントラと印で奉侍し、功德の招きを歓迎し、円満なる座に在ることを観想し、功德水などの四水 [洗脚水と漱口水と神水と沐浴水] と、五種の供養を供える。悲心と不幸の扱いもそれらの中程度の底を集めて座すことを観想する。

3.10.2 それから法性浄化のマントラと印で供物を浄化することは、掌を中を空にして合わせ、

¹²⁷ M. 6788.

¹²⁸ 北村 2001: 5.

oṃ svabhāvāsuddhāḥ [自性により清浄なるもの] sarvadharmāḥ svabhāvāsuddho 'haṃ¹²⁹
// [一切法は自性により清浄な性質]

と述べることで供物を浄化し、過失がないことを観想することである。虚空蔵の印を広げることは、掌の中を空にして合わせ、指先を交差してそれぞれの端¹³⁰を宝灯のようにし、

oṃ namaḥ sarvatathāgatabhyo viśvamukhebhya [種々なる口をもつものたちに]
sarvathākhaṃ udgate [一切の虚空に行く] spharaṇahimaṃ gaganakhaṃ [この虚空に広がるもの] svāhā //

と言い供物の不可思議な殊勝と一切衆生の信解のままに虚空の辺際に五欲で満ちるように加持がなされる。

3.10.3 第三に、甘露の合掌のマントラと印で信解することは、掌をあわせることが生じて、二本の親指を交差し、

oṃ amṛtakuṇḍali [甘露を巻く] hana hana [たたく、たたく] hūṃ phaṭ¹³¹ //

と言うことで甘露の海と食べ物などの享受と、それぞれに信解するままに享受の縁と、五毒の排除と、五智に加持がなされることである。

3.10.4 第四に、広大な力をもつマントラと印で行を制御することは、右手の拳のままて人さし指をかかげて、

namaḥ sarvatathāgata [一切の如来に敬礼する] avalokite [確実に見る] / oṃ saṃbhara saṃbhara hūṃ¹³² [真実を広める二人] //

と言い聖者たちの目の前の道に無数の宮殿などと、供養の雲の集まりの多くが変化した最高の法と、一切衆生の五根の行境に望むままに五欲樂が雨のように生じることを観想し、特別にまた餓鬼の多くの相と、衆生の想を意のままに満たすことを観想することで

¹²⁹ M. 3528, 3667, 8358. 八田 1985: 225, no. 1808.

¹³⁰ Tib.: chigs rnam zur can.

¹³¹ M. 6639.

¹³² M. 4016.

ある。

3.10.5 第五に、知恵の流星のマントラと印でそれぞれを得られるものとは、右手を拳にして胸にあてて、左は最高の施の印で供物の器をもちあげる在り方をなし、

oṃ jñāna avalokite [知恵を確かに見る] namaḥ samantaspharaṇa [namaḥ と言い賢くあまねく広げる] rasmi [光線] bhava [本質] samaya [三昧耶] mahā [大] maṇi [マニ宝] duru duru hṛdaya [心髄] jālani [網] hūṃ //

と言うことで自分の身体を微塵のように変化してから聖者たちに供養を供えることを喜び、一切衆生に与えることで王と勝負がなく、争いがなく、それぞれの信解のままに得ることを観想することである。

3.10.6 第六に、天主に共通なマントラと印で征服することは、掌の内を空にして合わせ指を中で交差し二本の親指を並べて広げてから、

namaḥ samantabuddhanāṃ [あまねく仏に敬礼する] graheśvaraprabhajatinamasamaya [三昧耶] svāhā¹³³ //

と言うことで奉侍の招宴と、功德の招宴と、悲心の招宴と、不幸の招宴になることについてもマントラの力により行き、助伴となることを観想する。衆生利益をなすことを成就して、印も十方における説法を征服することである。すべてのマントラを七七度述べる。

3.11 それから、

自分の福德の力と、如来の加持の力と法界の力とにより、衆生たちに利益を望むことにより、

対象と思われるすべてのものが、このすべての衆生界にいる彼らのすべてが正理に従って障害なく生じるように。

と述べることで加持し、廻向については、供施のこの広大な供物を供え、廻向の場所については、奉侍の招宴である仏と菩薩のすべてと声聞と独覚などと、功德の招宴である梵天と帝釈天と世間の守護者と十方神などのマントラをもつ守護神と、悲心の招宴であ

¹³³ M. 2551.

る六種の有情の一切衆生と特に自分の一切の天主と、不幸の招宴である来世についてくる魔鬼と瞬間の魔鬼と対象となる場所の地主たる天龍たちと利益と損害をなすすべての神鬼に等しく平等に供える。

この無遮の供施の王は [「この無垢の供施の王」とヴァリエントに説かれている] 法性を浄化する加持と、無量なる偉大な功德の宝と、心髄である印と確かなマントラと、

因縁と縁起を集めた威力と、仙人の持明の成就と、自分の誓願と知恵と三昧により五智の光を放つ。

五根の享受という必要なものを持ち、虚空の辺境でこの大宝蔵となる供養処であるラマがあなたの宮殿で供養の雲のように増え、広がることを誓願する¹³⁴。

一切衆生を楽にするように。すべての者も損害を離れ、また如来がお説きになられた主張が円満になるように。

また、すべての一切衆生の想を意のままに成立させるように。一人の畜生に一つの食事という彼らの損害が生じることなく、餓鬼たちに飲食などが障害なく生じるように。

地獄の苦である尽きることのない種々なる相がそれらの福德を与える加持によりすぐに寂静となるように。

大地や虚空に住する天と龍と夜叉とガンダルバと多くの魔鬼が住する善の想を完全にするように。

と述べられており、それから法施は、

一切諸法は原因から生じる。その原因は如来により説かれている。それを滅するものは、偉大な沙門により次のように説かれている。

いかなる罪過もなすべきではない。善を円満に行い、自分の心を調伏するこれが、仏が説かれたものである。

などと述べて、供施を広大になすべきである。

それから善根を完成した菩提に向けられる。vajra muḥ と行くことを報告し、水供物で土を浄化して地面におき、行為に従う不明なことなす¹³⁵。これは、『文殊師利根本儀

¹³⁴ ここまでは、九音節の十二パーダであるが、これ以後は七音節のパーダとなる。

¹³⁵ Tib.: las kyi rjes mi mngon par bya.

軌』の水供物をまとめたものである。詳細を望むならば、他所で知るべきである。

それから来世の時に供物を供えることを望むならば、百の供物を供える方法は、まとめると焰口母の二種の陀羅尼に依ってからなし、陀羅尼は、三宝に天の供物を供える二十一の陀羅尼と、仙人に供物を供えるものと餓鬼に対する七つの陀羅尼と、四如来の名を述べて供物を供える陀羅尼は属さず、百千の数の確定と招宴の次第の光度は説かれておらず、チベット人による数の確定と招宴の次第の類似しない多くの設置に所作が顕現する場合にも、自分のラマたちの所作の道理は、最初に供物の原因をよく準備をなすべきである。

それから帰依と発心をすべきである。四無量を修習し、それから空性を修習し、それから三種の本尊の天であるものや、あるいは仏シャカムニのところに発心し、僅かな心髓を読誦する。

3.12 それから前に解説したように供物の一切の招宴を迎えて、設置したものに供養を集めて供え、十度、最初に、**om āḥ hūṃ** と三度言うことで甘露の性質に加持する。広大な力をもつ光のマントラを一度述べてから、ラマたちの前で天の供物などの不可思議なる供養を供えることを観想し、供施の広大な供物でこの五欲楽をもつものを供え、廻向の場所となるものは、十方において三時におられる本続をそなえたラマたちに供える。タントラを加持することを請願する。最高の共通な成就を与えて下さるよう請願する。

[最初に]「内外の縁の一切の中断を寂滅するように請願する」という請願をなす。

第二に、「本尊の輪の天衆と所作タントラと行タントラと瑜伽タントラと無上大瑜伽タントラとの四大部タントラ¹³⁶を一切の天衆に供える」と言い、

第三に「仏宝と法宝と僧宝という無上なる宝に三種の宝を供える。一切衆生も三宝を離れず、三宝の帰依の次に入ることを加持するよう請願する」などと言い、

第四に、「仏が説かれたすべての法を守る守護者と梵天と帝釈天と世間の四守護者と方神たちと一切の三昧耶をもつ守護者に供える。仏の説法を流布し広め、一切衆生を喜ばせ楽しませ、一切の法成の内外の一切の断絶を滅し、一切の意行を法の通りに成就させる加持を請願する」と述べられている。それ以後加持とマントラの数と要求される他の語は同じである。

第五に、「威力を前と同じようになすことで、マントラを七度述べて、同時に生じる天と天人である持明を成就する力をもつ一切の仙人に供える。自分と一切衆生の病気と損害と魔鬼と一切の障碍を鎮め、寿命と福德と吉祥と結合し、法に従う一切の想を意のままに成就させる誓願を浄化することをなすよう請願する」と述べられている。四如来

¹³⁶ Bu ston によるタントラの四分類については、塚本 1989: 54-56.

の名前から述べても儀軌を説く。この後に om āḥ hūṃ と三度述べて甘露の本質に加持し、特にどこかに何か適当なものや必要な財物を観想し、マントラを七度述べることで必需品の享受を円満に加持し、「世尊如来の大宝に敬礼する」と述べて招宴の五根の行境に宝などの欲楽が雨のように生じるように観想する。「柔軟な無辺の身体」ということでその欲楽も虚空の無辺に拡大し、招いたそれぞれの身体も小さな過失を捨てて大きくなることを観想する。「正しい姿に」ということで盲目と聾啞と瘤があることと喉が球状などの身体は一切の過失を浄化してから身体に過失がないことを観想する。「一切世間を離れて」ということで享受の守護者が守ってから不得と争いと論争などが存在しないことを一同得ることを観想する。

第六に、土地神である土着の天龍と夜叉などの一切と荒野に住する者と羅殺女をとともなうものとチベットの世界を守る十二地母などと特にこの地方にいる天龍の自身等の土着の土地神に供える。「適切なものと、嫉妬と、座っている場合は催促と、行く場合は延期してもらい、迫害の心を起こさずに法を成就する助伴となるよう請願する」と述べられる。

第七に、「有情を六種と五道と四生処に集めた一切衆生を調伏する。すべての者も法と財物の享受により相続を満たし、六種のそれぞれの苦を離れてからすぐに無上菩提を得なさい」と述べられている。

第八に、「無始の輪廻から前世から現在に至るまでの身体と命と享受における不幸の招宴になる一切に供える。すべての不幸を取り去るように。一切の怨恨を浄化するように」と述べる。

第九に、「自分と布施をなす衆会をとともなう者に害をなす魔鬼と、千八十の魔鬼の種と、十五の凡夫の大魔と、八部の非人の魔などと、まとめれば害をなす種となるすべてのものを調伏する。迫害という悪い想をすべて中断させてから寂靜なる菩提心をとともなうように」と述べる。

第十に、「後の餓鬼の障害をもつ者と、病の障害をもつ者と、有障の障害をもつ者と、口から火を燃やすなどの餓鬼の三十六種にまとめられるすべての餓鬼に廻向する。飢渴の苦などの餓鬼は一切の苦を中断させてから天人の完全なる豊饒などを受容し、究極に無上の菩提の宝を得るように」と述べる。

第十一に、「貧弱で小さな能力の魔鬼と突然に来る種の魔鬼のすべて廻向する。彼らすべてに必需品の円満な享受をとともなうようになってから法と財物の享受により相続を満たしてからすぐに無上菩提を得るように」と述べる。

それから法施をなし、「諸法はすべて因から生じている¹³⁷」などの次に、

身の律儀がよく、口の律儀がよく、意の律儀がよく、すべてにおいて律儀がいい。すべてを守る比丘は、すべての苦から解放されている。

言葉を守り、意も縛られ、身体により不善なるものを行わず、身体とのこれら三つを清浄になせば、仙人が説かれた道を得るだろう¹³⁸。

などと言う法施をなして招く者たちが来て、行為に従って明らかにされず、経典を念誦する。六十四刻の時に障碍が生じないようにすべきなので六十四刻の供物をなそうとする場合、前行を前の通りになして、四つの供物を十六の部分に陳列し、それぞれの供物を om̐ により浄化する。āḥ により広大に広げる。hūṃ により甘露に加持し、akāro のマントラを一度一弾指ともなうことで「一切の聖者の衆が供養により喜び、一切の魔鬼の衆が供物により満足するように」と述べ、一切の生死涅槃に無所縁により廻向し、結びに、

すべてのものに、すべてのものにより、すべての相で、自分で布施をなすように。三時の十方の仏とその子たちに供養しなさい。

と述べて、法の布施をなして、結びに食べ物の汚れが着かないようにし、餓鬼の水施と細喉餓鬼の水施を前のようになし、法施をなして、招宴に来るよう請願する。行為に従って明らかにしないようにする。自分の欲天の供物を供える方法は、自分たちの教義から知るべきである。海と沼と池と泉と川に至った場合、前に解説した知恵の流星のマントラにより水施をなし、特別に水をすくう時に新しくして、最後に水施をなして、ナンダとウパナンダの名前から説かれたものを廻向すべきである。住宅で休息し、水をすくい、身体などの影を踏み、塔に登り、経堂と住処の土着の天の対象と世間の天の所依がある地で、仏の御口から説かれた頌を唱えるべきである。間にマンダラを供えようする場合、

om̐ baṃ vajra udake hūṃ phaṭ //

ということで水を知恵の甘露に加持して、

¹³⁷ 前(14a1)に引用された偈に最初である。

¹³⁸ 前半の偈頌は七音節四パーダであり、後半は九音節四パーダである。

例えば、生誕のみにより如来の沐浴を請願するように、天の水が浄化されることにより、そのように自分で沐浴しなさい。

oṃ sarvatathāgata abhiṣektasamayaśriye hūṃ¹³⁹ //

と述べることで頭からまいて、顔と手足を洗い、

oṃ hrīḥ svāhā¹⁴⁰//

と言い、口を洗い、

oṃ āḥ hūṃ¹⁴¹ //

と述べ、一輪の花を住居にまいて場所を守るよう観想する。頭におくことで自分自身を守るように観想し、また一つの花を頭と首と心臓に触れてから自分自身が大乘のヨーガを損なわずに守るよう観想する。

oṃ āḥ vajraṣṭhāsana hūṃ

か、

oṃ hūṃ¹⁴² //

と述べることで右手を自分の座に触れ、自分の座を金剛の座に加持する。

3.13 それから花に手で触れて、

oṃ namo bhagavate [世尊に敬礼する] puṣāketurājāya [花の王] tathāgataya [如来] arhate
[阿羅漢] samyaksaṃbuddhāya [正等覺] / tadyathā [そのように] / oṃ puṣpe puṣpe
[花花] mahāpuṣpe [大花] supuṣpe [美しい花] puṣa [花] udbhava [出現する]

¹³⁹ M. 7391.

¹⁴⁰ 高橋 1993: 143, no. 34.

¹⁴¹ 高橋 1993: 143, no. 33.

¹⁴² 高橋 1993: 143, no. 35: oṃ hūṃ // ity adhiṣṭhāsanāḥ.

puṣpasambhūve [花から本当に生じる] puṣpāvakirṇai svāhā¹⁴³ //

と七度唱える。花を加持して供える際に、あらん限りの花のその花を分けて供えて行くように説くことで、天と塔に花を供える場合もそのようになる。

3.14 それからマンダラの地や宝石から作られたものに右手で触れ、

oṃ āḥ vajrabhūmi [金剛の大地] hūṃ¹⁴⁴ //

と言うことでマンダラの大地を金剛の大地に加持して地を守る。

oṃ sarvaviḡhana anutapārāya bhūṃ¹⁴⁵ //

と明らかに唱えられた芳香をもつ水と生物がない牛糞などでマンダラに供え、中央から斑にならずに右廻りに湿して、意により偈の意味を思う通りに、言葉で、

水をまぜた牛糞が布施である。清浄にすることが戒である。小さな蟻を取り除くことが忍辱である。所作をなすことが精進である。

禪はそれを刹那に思うことである。絵の美しい輝きが智慧である。これらの六波羅蜜自身はムニのマンダラを作ってからである。

善逝は正しい家において、身業をなすことで、金色をともない、すべての病から救われてから、

月のように明らかに輝き、天と人にもに勝れ、宝石と金が豊富な王の種姓に生まれるであろう¹⁴⁶。

と述べて、マンダラを湿し、それから

oṃ āḥ vajrarekhe hūṃ¹⁴⁷ //

と言い、マンダラの中央に中指をおき、親指を東北方から右に廻す。また親指を中央に

¹⁴³ 高橋 1993: 140, no. 12.

¹⁴⁴ 高橋 1993: 143, no. 36.

¹⁴⁵ 高橋 1993: 144, no. 37: oṃ vajrasattva sarvaviḡhnān utsādaya hūṃ phaṭ.

¹⁴⁶ 高橋 1993: 143, 1992: 571, n. 43.

¹⁴⁷ 高橋 1993: 144, no. 38.

において中指を広げてから右に廻し、それから右手でマンダラを離さずに左手で一輪の花を取り、右手の背の上におき、マンダラの上に投げて、

oṃ surekhe sarvatathāgata adhiṣṭhantu svāhā¹⁴⁸ //

と述べる。

3.15 それから足を洗う。

oṃ maṇidhari vajriṇi mahāpratisare rakṣa rakṣa maṃ hūṃ hūṃ phaṭ phaṭ svāhā¹⁴⁹ //

というマントラにより自分の頭に花をおいてから自分自身を守るべきである。それから一輪の花をマンダラの廻りに供え、

oṃ candra ārkavimale svāhā //

と述べて、そのマンダラが太陽と月の輪のように明瞭で明らかであるように観想し、左手でマンダラの上の古い花の炭と、右手で花を積むようにして、

oṃ haṃ mahāmerave namaḥ //

と言うことで、中央の最高の山が四種の宝石から成立するように観想する。また同じく、

oṃ haṃ ardhamerave namaḥ¹⁵⁰ //

と言うことで、妙高山の水をすぐ後に観想する。

oṃ haṃ pūkṣamerave namaḥ¹⁵¹ //

と言うことで妙高山の四小塔を成立するように観想する。そのようにそれぞれの花をお

¹⁴⁸ 高橋 1993: 146, no. 61.

¹⁴⁹ 高橋 1993: 146, no. 63.

¹⁵⁰ 高橋 1993: 144, no. 40: oṃ 'haṃ madhyamerave namaḥ. 以下のマンダラ供養のマントラに関しては、白寄 1990c: 85-86 も参照。

¹⁵¹ 高橋 1993: 144, no. 41: oṃ vajragurave namaḥ.

くのと一緒に、東は、

oṃ yaṃ sarvavidehāya namaḥ¹⁵² //

と言い、東身州の方向に、南は、

oṃ raṃ jambūdvīpāya namaḥ¹⁵³ //

と言い、南瞻部州に、西は、

oṃ laṃ aparagodānīyeya namaḥ¹⁵⁴ //

と言い、西牛貸州に、

oṃ vaṃ uttarakurave [北俱盧州] namaḥ¹⁵⁵ //

と言い、北俱盧州に、それから東の左右に、

oṃ yāḥ upadvīpāya namaḥ¹⁵⁶ //

と二度言い、身体と聖なる身体を、同じように、

oṃ rāḥ upadvīpaya namaḥ¹⁵⁷ //

と言い、南の二つの小州に、

oṃ lāḥ upadvīpaya namaḥ¹⁵⁸ //

¹⁵² 高橋 1993: 144, no. 42: oṃ yaṃ pūrvavidehāya namaḥ.

¹⁵³ 高橋 1993: 144, no. 43.

¹⁵⁴ 高橋 1993: 144, no. 44.

¹⁵⁵ 高橋 1993: 144, no. 45.

¹⁵⁶ 高橋 1993: 144, no. 46.

¹⁵⁷ 高橋 1993: 145, no. 47.

¹⁵⁸ 高橋 1993: 145, no. 48.

と言い、西の二つの小州に、

oṃ vā upadvīpāya namaḥ¹⁵⁹ //

と言うことで、北の二つの小州に、それからその中間の東に、

oṃ yaṃ gajaratnāya namaḥ¹⁶⁰ //

と言い、象を、南に、

oṃ raṃ puruṣaratnāya namaḥ¹⁶¹ //

と言い、大臣を、西に、

oṃ laṃ aśvaratnāya namaḥ¹⁶² //

と言い、馬を、北に、

oṃ vaṃ vastīratnāya namaḥ¹⁶³ //

と言い、婦女を、東南に、

oṃ yāḥ khaṅga [剣] ratnaya namaḥ¹⁶⁴ //

と言い、剣を、南 [東] 西に、

oṃ rāḥ cakraratnāya [輪宝により供養する] namaḥ¹⁶⁵ //

¹⁵⁹ 高橋 1993: 145, no. 49.

¹⁶⁰ 高橋 1993: 145, no. 50.

¹⁶¹ 高橋 1993: 145, no. 51.

¹⁶² 高橋 1993: 145, no. 51.

¹⁶³ 高橋 1993: 145, no. 53.

¹⁶⁴ 高橋 1993: 145, no. 54.

¹⁶⁵ 高橋 1993: 145, no. 53.

と言い、輪を、北西に、

oṃ lā maṇiratnaya namaḥ¹⁶⁶ //

と言い、宝石と七種の政宝を、北東に、

oṃ vā mahānidhanāya namaḥ¹⁶⁷ //

と言い、大珍宝を、その中の東に、

oṃ maṃḥ candrāya [月の] namaḥ¹⁶⁸ //

と言い月を、西に、

oṃ raṃ arkāla [日] namaḥ¹⁶⁹ //

と言い、日の設置をそのように成立させるように観想する。

3.16 それから現前の大宝蔵と、虚空を種々の宝石で飾った獅子座の上の蓮華と月輪の上で自分の根本のラマである金剛薩埵を変化させて座り、白い身体の色で右の方向に金剛持を、左は鈴を脇に下げ、種々なる宝石の飾りにより飾り、種々なる旗の衣服を着ることを観想し、自分自身仏と菩薩のすべてを分けて区別せず、自分の欲天を空性と悲心に分けて区別せず、菩提心を思い、一味の一切の如来の本質を信解し、金剛集のマントラと印を相続した師たちと仏と菩薩のすべてと聖なる声聞と独覚のすべてを迎えて入るように観想し、マンダラと近くに五供物などの供養の財物で適切なものも並べ、

oṃ sarvatathāgatapūjameghaprasara[saj]muhe spharaṇahi saṃgaganakaṃ hūṃ¹⁷⁰ //

と述べて、諸供養を加持して、マンダラも並べた通りに四洲と妙高山と七宝をともなうものと、それぞれの洲も七種の宝と必需品により満たされているように観想し、さらに

¹⁶⁶ 高橋 1993: 145, no. 55.

¹⁶⁷ 高橋 1993: 145, no. 57: oṃ vāḥ sarva-nidhānebhya namaḥ.

¹⁶⁸ 高橋 1993: 145, no. 58.

¹⁶⁹ 高橋 1993: 145, no. 59: oṃ sūryāya namaḥ.

¹⁷⁰ 高橋 1993: 147, no. 64.

また七支と解説される供養の一切の財物を知恵により把握し、ラマと三時の勝者と子供をもつ者たちに供えようと観想し、

何であれ法界の無漏を性質とする無上なる宝の三宝の諦力と、王子の普賢行の変化と明力と因縁と意楽の力から生じた無上なる究極の供物により仏国土の一切の世界に撒いて満たし、普賢の供養の雲の無漏の集まりに富む吉祥から成立したもので、

天山と四州とすべての小さなものと金銀と瑠璃などの宝石のすべてが満ち、輪を廻す吉祥から成立した七種の宝と衣服と飾りと花と薫香と灯火と香と百味をもつ食べ物と傘と幢と幡などの一切の大きな供物と必要な物と、

身体を縛る鉢と錫杖などと兵器の集まりと宝と蓮華と日月などと、一切の座の相と宝の山と如意樹と花園と、無量宮と沐浴の池と薬草などの一切の供物と、自分の身体と一切の享受と三時のものを仏子をともなうものに供える¹⁷¹。

idaṃ gururatnamaṇḍalakaṃ niryātayāmi //

oṃ vajrapuṣpe hūṃ svāhā //

oṃ vajradhūpe hūṃ svāhā //

oṃ dīpaṃ hūṃ svāhā //

oṃ vajragandhe hūṃ svāhā //

oṃ vajranaivete hūṃ svāhā¹⁷² //

と言い五供養を供え、

nama sarvabuddhabodhisattvanāṃ sarvatathāgata-udgate spharaṇahimaṃ gaganakhaṃ samanta svāhā //

私の名前は誰某です」と言い、「法界に属する仏と菩薩と衆会をともなう方々に自分自身で供養するように。すべての相と時において大悲を有するあなたが私に加持するよう請願する。よく守って下さいますよう請願する。成就の最高のものも私に与えて下さいますよう請願する」と言うことで自分で供え、

oṃ aḥ śrīmāna vajragurucaraṇāya kamalāya samyakjñānavābhasanakarāyanam hūṃ //

¹⁷¹ 十九音節一パーダからなる。

¹⁷² 高橋 1993: 141, nos. 29-32.

何らかの光を放つことで恩により自分自身の闇を制圧するその人自身は宝を明らかにし、無比なる楽を享受し、困難を離れて見る。それ故に、明らかにする師であるあなたに敬礼する。

と言うのと、

ラマたる仏に敬礼する。護るべき法に敬礼する。偉大な僧に敬礼する。三つにも常に敬礼する。

三宝に帰依をする。不善なる罪過を懺悔し、有情の善を随喜する。仏の菩提を意により把握する。

仏と法と僧の最高なものに菩提にいる限り帰依する。自他の利益をよく完成させるために、菩提心を自分で起こす。

菩提心を自分で起こしてから、一切衆生に私は呼びかける。最高の菩提行を起こし、行じなさい。有情を利益するために悟りを完成しなさい¹⁷³。

と述べて三帰依の偈を述べるべきである。それから賞讃をなして、

誰であれ初めと真中と終わりがなく、寂靜なる仏性を自ら悟る仏から無分別を理解するために恐れずに常道を説く智慧の劍は最高の金剛を保ち、苦を速やかに断じ、種々なる暗い見解により廻される疑惑の壁を破壊する方に敬礼する。

などと述べることによる。

それから仏と菩薩のすべてと真実を賞讃する近くに生じさせるこの明王を八度述べて、

namaḥ sarvabuddhabodhisttvāni sarvatrapaṅkusumitvabhījñārāśini namo stute
svāhā¹⁷⁴ //

と言う。「自ら生じるものから生じる仏を尊敬し、自性により動くこと無く、一切衆生に対する慈愛と捨などと、結果を退ける方向ではない菩提心を得るように。鋭い智慧と、よい種姓に生まれ、美しい姿で、善逝の修辞学に巧みになるように。長寿し天界に生ま

¹⁷³ 高橋 1993: 147, 1992: 578, n. 55.

¹⁷⁴ M. 7876.

れ、智慧のある人に集中し巧みで、根が損なわれておらず、楽と悲心を具えており、とても清浄で、修辞学に巧みで、調伏をなす部分と尊敬することと、常に生を憶えており、戒をそなえており、法自体と財産をそなえており、施を喜び、善知識をそなえており、喜び力をもっており、快くて楽しみが多く、一切の病を捨てて、衆生を愛し、聞を保ち、想を浄化し、宗教的に清浄であり、世間に利益を起こすために世尊の菩提の位を得ない限り、自分がこれらの功德のすべてで常に飾られるように」という誓願をなして、如来の百文字でできるものを読誦し、それから、

十方すべてに身と意の苦に苦しんでいる者がいる限り、彼らが私の福德により楽しみと喜びの大海を得るように¹⁷⁵。

天も時に雨を降らせ、穀物を完全にするように。王は法の通りに行うように。世間の者も豊かになるように¹⁷⁶。

悪趣の苦を受けず、難行がなくても、天が天の身を得てから、彼らは仏をすぐに成就するように¹⁷⁷。

などと読誦してから、「例えば如来・阿羅漢・正等覚のそれらの仏が仏智と仏の加持により眼で知られ見られる善根の部分と、何れかの部分に似ているものと、自性たるものと、性相と、法性たるものにより存在するように、善根を楽しんで随喜する。例えば、またそれら如来、阿羅漢、正等覚が仏の神通を使い果たすように、それらの善根を無上正等覚に廻向するように」と述べられている。それに続いて、

namaḥ sarvabuddhabodhisattvebhyaḥ oṃ sarvavid pūra pūra sūra sūra avartabhāya svāhā //

と述べ、如来たちに供養し、近くに住し、御足に頭をつけて敬礼するであろう。

それから、

あなたがたにより一切衆生利益がなされた。随順する成就を授与し、再び円満をなすために、仏が場所に行きますよう請願する¹⁷⁸。

oṃ muḥ svāhā //

¹⁷⁵ *Bodhicaryāvatāra* 10.2.

¹⁷⁶ *Bodhicaryāvatāra* 10.39.

¹⁷⁷ *Bodhicaryāvatāra* 10.47.

¹⁷⁸ 氏家 1974: 72, n. 36.

と述べ、来るように請願すべきである。

3.17 それからマンダラの集まりを集め、背後の絵に対して行為に従い、人を明らかにすべきである。最高の師への供養のマンダラの儀軌である。さらに五種姓のマンダラと、欲天のそれぞれのマンダラと、法の読誦のマンダラと、僧のマンダラを別に知るべきである。間の時間に塔と経堂に礼拝し、廻り、衆生利益をなすことなどもなし、正法を聞いて、法への疑惑を食べるために質問し、大乘の經典を見て、読誦し、無常なる死を思い、業の因果を思い、輪廻の苦を思い、菩提心の利益を思い、四念住の門などを聞思修の三つの所作により昼を超えてなし、晩に七支分を詳細になして、その次に行為をなしたものを有意義にするために廻向と広大な誓願し、『金剛幢廻向』や『普賢行願讃』をなし、それだけではできないならば『宝鬘論』に説かれているこの誓願をなして、

仏と法と僧と、菩薩たちにも恭敬し、帰依してから、供養に値する者たちに礼拝する。

罪過から退き、一切の福德をよく護り、すべての有身の福德を遍く随喜します。

私は頂礼して合掌して、法輪を転じ、有情の場所に入られた後に、正等覺仏に誓願する。

そのようになされた福德と、自分が行ったことと行っていないこととにより一切衆生が無上菩提をもちますように。

一切衆生が無垢な根を完全にし、[八] 難を超えるように。行が自分で自在になり、よい生活をもちますように。

有身の者たちはすべて、手に宝をもち、すべての資具は限りなく、輪廻する限りは尽きないように。

一切の女性が、あらゆる時に最高の男性に転じますように。一切の有身の者が学問と足をもつ者となりますように。

有身の者¹⁷⁹がきれいな色と美しい姿と偉大な威光をもって見え、苦や病がなく、力もち、寿命をそなえているように。

一切の方法に長けて、すべての苦から解放され、三宝に帰依して、仏法の宝をもつように。

慈愛と悲心と喜びと、煩惱の捨があり、布施と戒と忍と精進と、禪定と智慧により飾り、

¹⁷⁹ テキストは「瓶をもつ者 (bum can)」とあるが、*Ratnāvalī* に従った。

諸法をすべて完全にし、相好が輝いており、不可思議な十地に中斷せずに進むように。

私も、それらの功德とその他のすべてのものにより飾られることがあり、すべての罪過から解放され、衆生に最高の¹⁸⁰慈愛をもち、

すべての衆生が望むすべての想を完全にし、常に一切の有身の苦を取り除くことをしなさい。

すべての世間において、誰であれ恐怖をもつ人が、私の名前だけを聞いて、恐怖がなくなるように。

私を見て、記憶し、名前だけを聞いて、人々が浄心を起こし、乱れることなく瞑想し、正等覚を確実にし、

すべての生において随順する五神通を得るように。すべての衆生に対してすべての相において常に利益と安樂を与えるように。

すべての世間において罪過をなそうとする者すべてに、害がなく、常に速やかに離脱するように。

地水火風と薬と樹木のように、常に一切衆生が望むままに妨げられずに行じるように。

衆生を生命のように愛し、彼らを自分よりもさらに愛すように。自分に彼らが罪過を熟させても、自分の善を残らず彼らに熟させるように。

一切の者がわずかでも解脱していない限り、そのように無上の菩提を得ても留まるように¹⁸¹。

と誓願をなし、さらにまた知っている大誓願をなすべきである。

3.18 そのように夜の最初の時間に眠らずに法を読誦し、本尊の念誦の灯などをなして眠り、寢室のすべての支分で尊敬して、「仏と菩薩のすべてが自分を加持するように請願する。無上の成就の最高のものを自分に送るように。一切の災害もなくすよう請願する」と言い、自分の欲天のヨーガをそなえた者が、

oṃ namo bhagavate āryaprajñāpāramitāyai sarvatathāgatasarvapāramitāparipūritaye
tadyathā siddhi siddhi / oṃ siddhya siddhya buddha buddha bodhāya bodhāya cala
cala tiṣṣa tiṣṣa hrīḥ kampa kampa dhāra dhāra gaccha gaccha āgaccha āgaccha

¹⁸⁰ テキストは「宝 (dkon mchog)」とあるが、*Ratnāvalī* (kun mchog) に従った。

¹⁸¹ *Ratnāvalī* 5.66-85.

bhagavati mā vilamba alaṃ svāhā¹⁸² //

この陀羅尼を手に二十一度唱え、その上に頭をおき、枕を東にして説く。身体の右側を下にし、右手の上に右頬をおき、右足の足首の上に左の足首をおき、左手を右の臀部の上におき、獅子の寢床で眠る。身体に法衣をまき、起き上がり、顕現する想により入睡すべきである。病気の場合には後分に寢床から起き上がり、前のように行じるべきである。そのようになしたならば、すぐに無上菩提を得るであろう。

4 初学者の王子が法行をどのように学ぶべきかの在り方をまとめて、解説した福德によりすべての者が一切知を得るよう。

5 初学者による一昼夜の法行の儀軌である『一切智に進む楽道』というこれは、勝者の説法を禁行の負債の善知識のタクパー・イエーシェーが熱心に勧めたゴルで、シャーキヤの比丘であるリンチェン・ドゥップが庚午の年（1330年¹⁸³）に、翼宿月（2月¹⁸⁴）の上弦時の十五日に合わせた筆記者はラトナドヴァジャである。善と幸福になるように。

¹⁸² 高橋 1993: 153, no.75.

¹⁸³ Tib.: rab myos. *Dag yig gsar bsgrigs*, p.880.

¹⁸⁴ Tib.: dbo'i zla. *Dag yig gsar bsgrigs*, p. 885.

第4章 Co ne Grags pa bshad sgrub による『菩提道灯論釈』

はじめに

Bodhipathpradīpa がチベット仏教に与えた影響については、今さら言うまでもないであろう。チベットでは多くの注釈書が著されており、現時点で確認できたものには、次のものがある。

1. Dīpaṃkaraśrījñāna (982-1054), *Bodhipmārgadīpapañjikā*¹
2. Chos kyi rgyal mtshan (1121-1189), *Byang chub lam sgron 'grel pa*. W. 15434².
3. Shes rab grags pa (1127-1185), *Byang chub lam sgron 'grel pa*. W. 15664.
4. gZhon nu rgyal mchog (14C), *Byang chub lam sgron 'grel pa*. W. 14036.
5. gZhon nu dpal (1392-1481), *Byang chub lam sgron gyi rnam bshad*. W. 7495.
6. Kun dga' rgyal mtshan (15C), *Byang chub lam sgron gyi 'grel pa*. W. 15966.
7. Blo bzang chos kyi rgyal mtshan (1567-1662), *Byang chub lam gyi sgron ma'i rnam bshad phul byung bzhad pa'i dga' ston*. W. 9807³.
8. Grags pa bshad sgrub (1675-1748), *Byang chub lam gyi sgron ma'i 'grel pa*. W. 13054⁴.
9. Rol pa'i rdo rje (1717-1786), *Byang chub lam sgron ma'i rnam bshad mdor bsdu*. W. 2630.
10. dBal mang dKon mchog rgyal mtshan (1764-1853), *Byang chub lam gyi sgron ma'i 'grel pa phul byung dgyes pa'i mchod sprin*. W. 2419.
11. 'Jam mgon Kon sprul blo gros mtha' yas (1813-1899), *Byang chub lam gyi sgron me'i 'grel pa snying por bsdu pa byang lam gyi snang ba rab tu gsal ba*. W.24554⁵.
12. Blo bzang 'phrin las bstan pa rgya mtsho (1849-1904), *Byang chub lam gyi sgron bsdu don sa bcad*. W. 4408⁶.
13. Brag dkar sprul sku Blo bzang dpal ldan bstan 'dzin snyan grags (1866-1928), *Byang chub lam gyi sgron ma'i 'grel pa gzhung don gsal ba'i nyi ma*. W. 5667⁷.
14. Thub bstan chos kyi nyi ma (1883-1937), *Byang chub lam gyi sgron ma'i rnam*

¹ 望月 2015: 33-193.

² この番号は、The Tibetan Buddhist Resource Center のカタログ番号である。

³ 望月 2015: 196-292. gSung 'bum / Blo bzang chos kyi rgyal mtshan. W. 9848 が PDF 化されている。

⁴ Grags pa bshad sgrub による *Bodhipathpradīpa* の注釈書については、Potala コレクションと Mi rigs dPe mdzod Khang の全集に収められているものが知られている。今回用いたものは、この情報に基づくテキストではなく、ACIP (Asian Classics Input Project, <http://www.asianclassics.org/>) により公開されている二種のデジタル・テキスト (SB0218I, SR0218A) である。テキスト自体を確認できていないが、フォリオの数から、SB0218I が Mi rigs dPe mdzod Khang のものであり、SR0218A が Potala コレクションのものと推測できる。

⁵ Kargyud Relief and Protection Committee 1989.

⁶ gSung 'bum / Blo bzang dpal ldan 'dzin snyan grags, W. 23608 が PDF 化されている。

⁷ 望月 2002f: 49-66; Eimer 1978: 228-253. gSung 'bum / blo bzang dpal ldan bstan 'dzin snyan grags, W.23608 が PDF 化されている。

- bshad thar lam bgrod pa'i them skas*. W. 3386⁸.
15. Ngag dbang phun tshogs (1922-1977?), *Lam sgron gyi 'grel pa yid kyi stegs bu*. W. 19620.
16. Tshul khriims sengge (?), *Byang chub lam sgron 'grel pa*. W. 17225.
17. Grags pa don grub (?), *Byang chub lam sgron nam bshad tshig don rab gsal*. W. 17226.
18. 著者不明, *Byang chub lam gyi sgron 'grel pa*. W. 17224.

もちろん、現代においても多くの解説書が著されており、それらを含めるとさらなる数になる。これらの注釈書のうち、第七のパンチェン・ラマ一世の注釈書は、比較的詳細なものであり、以後の注釈書に大きな影響を与えている⁹。本章では、この注釈書の影響を受けたと言える上記の第八の注釈書について考察するものである。

Grags pa bshad sgrub の生涯について

Grags pa bshad sgrub (1675-1748) は、sKyabs 'bum を父に sKal bzang sman を母にして 1675 年に Co ne Thū ju g-yo sa で生まれた。その師としては、bKra shis dpal bzang (17C.) とパンチェン・ラマ二世の Blo bzang ye shes (1663-1737) と dGe ' 'dun grags pa (17C.) がおり、その弟子としては Blo bzang bsam gtan (1687-1748/9) がいる。その主な経歴¹⁰を簡単にまとめると、次の通りである：

- 1675 年 最初に受戒を受ける Khri chen dGe 'dun grags pa から最初の手紙
sMan pa sTag ris dge slong と薬学を学ぶ
- 1695 年 dBus へ旅行
- 1696 年 Se ra sMad に入る
- 1705 年 lHa rams pa を受けようと計画するが、sDe srid Sangs rgyas rgya mtsho (1653-1705) の崩御のため、実現できず。slob dpon Tshul khriims rin chen の僧院で別に試験
パンチェン・ラマ二世より最後の受戒
dGa' ldan と 'Bras spungs で優れた論争
- 1706 年 Co ne に戻る
- 1714 年 再建された Co ne 学問寺の bla ma となる
- 1715 年 母の死去
- 1720 年 僧院長を退き、著述を開始
- 1730 年 僧院長に復帰

⁸ 望月 2004f: 9-42. gSung 'bum / Blo bzang 'phrin las bstan pa rgya mtsho, W. 4615 が PDF 化されている。

⁹ Eimer 1978: 193-212. ここでは、第十の注釈書との比較を行っている。

¹⁰ 彼の伝記としては、Grags pa bshad sgrub kyi nam thar, Grags pa bshad sgrub kyi nam thar tshigs bcad ma の二書が知られている。

1732年 Co ne に rGyud pa Grwa tshang が建立される。Grags pa rgya mtsho が一
緒に bla ma と slob dpon として仕える。

1748年 死亡

このことから、三十九歳で Co ne 学問寺の師となり、四十五歳でテキストの著述を始め、55歳で僧院長になり、七十三歳で亡くなっている。

Grags pa bshad sgrub の著作について

彼の著書は、チベット仏教資源センター (Tibetan Buddhist Resource Center) のリストによると二百二十二を数えられ、ここから gSung 'bum を除くと二百二十一となる。gSung 'bum を実際に手に入れていない現時点では、それぞれの著書の大小について述べることはできないが、この数字からのみ判断すると、彼は比較的多くの著書を著していると言える。これらには顕教のテキストが比較的多く見られるが、そのうち『菩提道灯論』に関連する著書を以下に挙げてみる。まずこの同論に述べられる教義に関連するものとして、三帰依、三学処、普賢行願讃、発心がタイトルに付されているものとしては、

sKyes bu gsum dang bslab pa gsum la sogs pa.
sKyabs 'gro'i dmigs rim thar pa'i sgo 'byed.
sKyabs 'gro'i khrid yig dang gtor ma'i rim pa.
bZang spyod smon lam gyi 'grel pa.
Byang chub bskyed tshul gyi brgal lan.
bSlab bya mdor bsdus.

がある。戒律に関するものは、

'Dul ba rgya mtsho'i snying po'i 'grel pa.
'Dul ba'i yig cha yi snying po.
bsNyen gnas kyi sdom pa'i cho ga.
sDom gsum rnam gzhas.
So thar gyi sdom pa'i dogs gcod.

がある。アビダルマに関するものは、

mNgong pa mdzod kyi tika dgongs pa rab gsal.
Phung po lnga'i rnam gzhas chos mngon snying po.

がある。アビサマヤと般若経に関するものは、

mNgong rtogs rgyan gyi tika.
mNgon rtogs rgyan dang yum gyi mdo gnyis sbyor tshul.
Phar phyin gyi spyi don yongs rdzogs.
Phar phyin gyi zur bkol bzhi'i rnam gzhag mdor bsdus.
Phar phyin yum gyi mdo'i 'gres rkang bshad pa.
Phar dbu 'dul mdzod rnam 'grel gyi don nyams len.
Shes rab snying po'i rnam bshad.

がある。中観に関するものは、

dBu ma rtsa ba shes rab kyi tika.
dBu ma rtsa shes kyi bsdus don dka' 'grel.
dBu ma 'jug pa'i tshig 'grel.
dBu ma'i lta ba dang dus gsum gyi rnam gzhag zab mo.
sTong nyid bstan tshul tshul rgyud lugs.

がある。また *Dīpaṃkaraśrījñāna* の他の著書に説かれる教義のうち、業障浄化と過犯懺悔などに関するものは、

Las kyi sgrib pa rnam par dag pa'i mdo'i don bsdus pa.
Las rnam 'byed dang tshe mtha'i mdo'i don bsdus.
lTung bshags kyi cho ga 'grel pa dang bcas.
Theg pa chen po'i lam bgrod tshul tshul smon lam.

がある。Tsong kha pa およびラムリムに関するものとしては、

Lam rim chen mo'i don rnams bsdus pa.
Lam rim bsdus don gyi 'grel pa. S0184.
Lam rim gyi snying po tshig bcad ma.
Lam rim dmar khrid cung zad rgyas pa.
Lam rim gyi dmigs khrid bsdus pa.
Tsong kha pa'i rnam gsum gtam gyi sbyor 'grel.
Tsong kha pa'i rnam thar rang gis mdzad pa'i 'grel pa.

がある。以上のものの他に、宗義書としては、

Grub mtha' bzhi'i lugs kyi bden gnyis rnam gzhag.

Grub mtha' bzhi'i lugs kyi lta ba'i rnam gzhag.

Grub mtha' rnam gzhag snying po bsdus pa.

がある。これらの著作は、『菩提道灯論』や、*Dīpaṃkaraśrījñāna* に関連する著書をあげているからであるが、顕教に関する文献の中でもこれらの文献が目立っており、*Dīpaṃkaraśrījñāna* および *Tsong kha pa* の影響をうかがうことができる。

***Byang chub lam gyi sgron ma'i 'grel pa* について**

本書は、根本偈を引用して、それに対する解説文を添えるスタイルで著わされている。解説部分は、以下に検討するように、先行する注釈書と一致する部分が多く、そこからは本書独自の解釈を抽出することはできない。それ故に、本書独自の内容を取り出すならば、著者自身による言説がまとまって見られるのテキストの最初と最後の部分からである。まず導入部では帰敬偈に続いて、

さらにまた、偉大な尊者の生涯の詳細な伝記は『カダム派法史』などに明らかにされ、簡略な伝記は『ラムリム・チェンモ』などに出ている通りであり、ここに述べることは適切であっても、多くなる心配から著さないでおく。

と説かれている。本書をできるだけコンパクトな注釈書にするために、根本偈の解説に含まれない説明を省こうという意図が見られる。著者の伝記に関する説明については、他書にすでに記されているので、それらに依るべきである、とされている。このような態度は、続く以下の文章において明確に述べられている：

ここに尊者が自注をまとめて著しになられ、他に *dge bshes sTon pa* や *Po to ba* や *Sha ra ba* や *Nag tsho* などが注釈と概説の撰義を各種著され、後に先のパンチェン [・ラマー世] が広大な注釈書を著されている。

すなわち『菩提道灯論』の注釈書としては、*Dīpaṃkaraśrījñāna* 自身のものがあり、カダム派の諸師による注釈や概説があり、パンチェン・ラマー世による詳細な注釈書（以下、「パンチェン注」）が存在することが述べられている。これらの先行する解説書を指摘することで、本書においては詳論を避ける意図が述べられている。

また本書の末尾では、

この『菩提道灯論』は、チベットのカダム派の一切の教義の原典のようなものであり、この仕事から広げた者の最初が 'Brom rin po che で、彼から Po to ba と Sha ra ba などのカダム派の古師たちと、後のジェ・リンポチェ (Tsong kha pa) による『チャンチュップ・ラムリム・チェンモ』も、これを基盤にしてから著したもので、カダム新派の説法の規則を開いており、次のように、

偉大な二つの乗り物からよく相続した甚深で広大な見解を行じる道を誤らずに完全な要点をまとめた教えの著書を保持するディーパンカラがおられる。と説かれているものもこのテキストを最高のものと意図している。

と説き、偈で結ばれている。ここでは、『菩提道灯論』に説かれた教義がカダム派の 'Brom ston pa、Po to ba、Sha ra ba を経て、新カダム派としての Tsong kha pa に伝承されたことが述べられている。先行する「パンチェン注」では、カダム派の論師への言及が多く見られ、その中でも Po to ba が十五回、Sha ra ba が十九回なのに対し、Tsong kha pa は二回である¹¹。それに比べ、本書では、前二者に直接に言及することはない¹²が、後者についてはその主要著書の一つである『ラムリム・チェンモ』に詳細に説かれるスタイルでの言及が六箇所において述べられている¹³。このことは、著者はカダム派の論師よりも、Tsong kha pa を意識して注釈を行っていた印象を受ける。

パンチェン・ラマー世の注釈書との比較

すでに述べたように、Co ne による解説文のうち、そのおよそ七割¹⁴は、「パンチェン注」の文章に一致する。この一致する部分については、以下の和訳の提示において、下線を付している。パンチェン注は本書よりも広大な注釈書であるので、その解説部分のみを取り出して短くまとめたものが本書である、という印象がもたれる。以下、両者の類似点と相違点を比較してみる。

まず最初に、両者には根本偈の伝承に関する一致が見られる。まず最初に、BPP 91-95 に対する Co ne の解説では、

テキストのこの言葉は、『菩薩地』の [BPP 87] という次に出ているが、喜ばしい解説のために先に受ける。

¹¹ 望月 2003c: 39-40.

¹² ここでは、パンチェン注において言及されるものの、本注釈書では名前を指摘せずに引用しているものについては、数えてはいない。例えば、3.2.2.2 における BPP 13-16 を四諦説で解説するものは、パンチェン注では全く同じ文章が Sha ra ba の言説として引用されているが、Co ne 注では、Sha ra ba を引いてきたというよりも、パンチェン注を引いてきた、と言う印象である。

¹³ 同じ著者の「戒品」に対する注釈も言及されている。

¹⁴ 引用される根本偈の部分も同一であり、類似する表現は除外したので、実際にはもう少し高い割合になる。

と述べられている。これは、**BPP 87-90** に対する解説よりも **BPP 91-95** に対する解説を先に述べている理由である。これは「パンチェン注」にも見られ、根本偈の順番を入れ替えていることとそれに対する説明は全く同じである。

次に、**BPP 181-184** には、

智慧波羅蜜を除く布施波羅蜜などの善の資糧のすべてを勝者は方便と解説している。

と述べられるが、「パンチェン注」はこの偈のうち **BPP 183** の「善の資糧のすべて」を欠いており、同様に **Co ne** による注釈書でも欠けている。このことは根本偈の異なる伝承が存在していたとすることができる。

次に、二つの解説書の全体の構成を比較するために、両者の科文¹⁵を比較してみる。まずパンチェン注の方が広大であるために、シノプシスも詳細となる。**Co ne** による注釈書の上部構造に、(1) 法を著わした人の偉大さ、(2) 法の偉大さ、(3) 法を聞き解説すべき方法、(4) 教誡の主要な意味、という項目があり、この最後のものから **Co ne** の解説が始まっている形態になる。このことは、本書が、前述のように根本偈の解説のみから成り立っているために、序論にあたる解説を排除したためである。

続いて、3.2.2.3.1 の「[大なる人の] 略義」の項目で、「パンチェン注」はさらに「発心として説いたもの」、「発心の在り方」、「発心から行を学ぶ在り方」、「学んだ結果の認識」という項目を設けて、それぞれに対して、**BPP 17, 21, BPP 25, 75, BPP 129, 137, 167, BPP 237** が引用されている。このことは、次の 3.2.2.3.2 の「詳論」とは別に、以下の根本偈を別枠で解釈したものである。すなわち、**BPP 17-272** に対する解釈が、略義と詳論の二重構造になっているのである。**Co ne** は、そのようなことを避けるために、この項目を欠いた、と考えられる。

さらに、3.2.2.3.2.1.1.2.1.1.2 の「特別な帰依」の項目では、「パンチェン注」はさらに下位項目として「場としての菩提座」と「分別としての菩提座」の二項目を設定している。**Co ne** は、これらを項目立ててはいないものの、「パンチェン注」の解説に従った説明がなされている。

その一方で、「パンチェン注」にはなく **Co ne** の注釈書に設定されている項目がある。それは、3.2.3.3.2.1.1.2.2.3.2 の「師のいない儀軌」において **BPP 105-128** を引用した直後に、

発心と律儀を受ける在り方に二つ。

3.2.2.3.2.1.1.2.2.3.2.1 最初に、守護者たる諸仏の御前で無上で正しく完全なる菩

¹⁵ パンチェン注の科文については、望月 2015: 197-201 を参照。

提に発心する。目的は、有情である一切衆生を待遇するその為である。どこで待遇するのかは、それらの有情を輪廻から救って、涅槃に入れて、待遇するのである。

3.2.2.3.2.1.1.2.2.3.2.2 第二に三つ。

と述べられるものである。この説明では、「発心の律儀を受ける在り方」に関する二種の下位項目が何を指すのかは明らかではないが、この箇所は、「パンチェン注」では、

さらにまた発心と律儀を守ることの二つのうち、発心は、

と続いており、最初の項目の後半は **Sha ra ba** の説の引用として説かれ、最後に

菩薩の律儀も、入る誓願に三つ。

として、次の項目に移っている。従って、「パンチェン注」では項目立ててはいないが、実際には同じ内容が説かれていることになる。

最後に、**Co ne** が引用する経論のうち、

3.2.2.3.2.1.1.2.2.3.2.2.3 『文殊仏国土莊嚴經』

3.2.2.3.2.1.1.2.2.3.3.2.1.1.1.2 『根本中論』

3.2.2.3.2.1.1.2.2.3.3.2.1.1.1.3 『中観莊嚴論』

3.2.2.3.2.1.1.2.2.3.3.2.1.1.2 『無熱所問經』『根本中論』

3.2.2.3.2.1.1.2.2.3.3.2.1.2 『月灯三昧王經』

は、「パンチェン注」においても同じ箇所で見ることができる。一方、「パンチェン注」に見られない引用は、

3.2.2.3.2.1.1.1 『撰義論 (*bsDus don*)』

3.2.2.3.2.1.1.2.2.3.3.2.1.2 『四百論疏』

のみである。引用サンプル数が少ないために、断言はできないが、解説文の一致からしても、これらの引用が重なるものに関しては、「パンチェン注」からそのまま引かれたものである、と言える。

以上、数点ではあるが、両者のテキストの類似点を指摘した。シノプシスがほとんど同じであり、語句説明も七割が一致し、また根本偈に対する順序の入れ替えや欠落が一致することから、後代に書かれた **Co ne** の注釈書は、先行する広大な注釈書である「パ

ンチェン注」から大きな影響を受けていることがわかる。

まとめ

本注釈書は、根本偈に対する注釈者独自の解釈を展開するために著されたものとは言えない。むしろ伝統的な注釈に従って語句解説を試みたというものである。それ故に、先行する注釈書のうち、最も権威があると思われる注釈書と同じ解説がなされているのは、ごく当然なことである。おそらく著者は、あえて根本偈に注釈を著さなければならないという意志をもって本注釈書を著述したのではなく、一般的に知られている文献を解説することを求められ、先行する解説書に基づいて注釈を行ったのだと思える。

もちろん、本注釈書だけではなく、「パンチェン注」以後のその他の注釈書における影響関係について調査する必要がある。すなわち、今回の **Co ne** の注釈書や **dBal mang dKon mchog rgyal mtshan** の注釈書は「パンチェン注」からの影響が確認できるが、その他の注釈書ではどうであったのか。また、「パンチェン注」も、先行するいずれかの注釈書に依存しながら注釈を行った可能性もある。これらを含めて、『菩提道灯論』に対する注釈の系譜を明らかにする必要がある。

『菩提道灯論注・尊者を喜ばず供養の雲』科文

- 1 名称の意味
- 2 翻訳者の敬礼
- 3 著書の意味
 - 3.1 福田を述べた解説の請願 [BPP 1-4]
 - 3.2 著書の主要部分の解説
 - 3.2.1 三種の人の設定をまとめて説いたもの [BPP 5-8]
 - 3.2.2 三種の人の道の特徴をそれぞれ解説したもの
 - 3.2.2.1 劣った人 [BPP 9-12]
 - 3.2.2.2 中位の人 [BPP 13-16]
 - 3.2.2.3 優れた人
 - 3.2.2.3.1 まとめて説いたもの [BPP 17-20]
 - 3.2.2.3.2 詳細に解説したもの
 - 3.2.2.3.2.1 波羅蜜乗の道を詳細に解説したもの
 - 3.2.2.3.2.1.1 道の設定
 - 3.2.2.3.2.1.1.1 誓願 [BPP 21-24]
 - 3.2.2.3.2.1.1.2 解説の主体
 - 3.2.2.3.2.1.1.2.1 願の学処
 - 3.2.2.3.2.1.1.2.1.1 前行
 - 3.2.2.3.2.1.1.2.1.1.1 資糧を集めること [BPP 25-30]

- 3.2.2.3.2.1.1.2.1.1.2 特別な帰依 [BPP 31-36]
- 3.2.2.3.2.1.1.2.1.1.3 三心の智慧による浄化 [BPP 37-44]
- 3.2.2.3.2.1.1.2.1.2 本行 [BPP 45-46]
- 3.2.2.3.2.1.1.2.1.3 結行の学処
 - 3.2.2.3.2.1.1.2.1.3.1 利益 [47-50]
 - 3.2.2.3.2.1.1.2.1.3.2 菩提心の浄化の学処 [BPP 51-70]
 - 3.2.2.3.2.1.1.2.1.3.3 二資糧を集める学処 [BPP 71-72]
 - 3.2.2.3.2.1.1.2.1.3.4 衆生を智慧により捨てないこと [BPP 73]
 - 3.2.2.3.2.1.1.2.1.3.5 四黒法の捨と四白法を学ぶ在り方 [BPP 73-74]
- 3.2.2.3.2.1.1.2.2 入の学処をとまなうことの解説
 - 3.2.2.3.2.1.1.2.2.1 入の律儀を受ける必要性を説いたもの [BPP 75-78]
 - 3.2.2.3.2.1.1.2.2.2 入の律儀を受ける方法
 - 3.2.2.3.2.1.1.2.2.2.1 受ける所依 [BPP 79-86]
 - 3.2.2.3.2.1.1.2.2.2.2 受けられる対象 [BPP 91-94]
 - 3.2.2.3.2.1.1.2.2.2.3 受ける儀軌
 - 3.2.2.3.2.1.1.2.2.2.3.1 師のいる儀軌 [BPP 87-90]
 - 3.2.2.3.2.1.1.2.2.2.3.2 師のいない儀軌 [BPP 95-128]
 - 3.2.2.3.2.1.1.2.2.2.3.2.1 発心
 - 3.2.2.3.2.1.1.2.2.2.3.2.2 律儀を受ける在り方
 - 3.2.2.3.2.1.1.2.2.2.3.2.2.1 律儀戒
 - 3.2.2.3.2.1.1.2.2.2.3.2.2.2 衆生利益戒
 - 3.2.2.3.2.1.1.2.2.2.3.2.2.3 撰善法戒
 - 3.2.2.3.2.1.1.2.2.2.3.2.3 律儀を受けてから学処を学ぶことを説いたもの
 - 3.2.2.3.2.1.1.2.2.2.3.1 戒の学処を学ぶ在り方
 - 3.2.2.3.2.1.1.2.2.2.3.1.1 主体 [BPP 129-132]
 - 3.2.2.3.2.1.1.2.2.2.3.1.2 その偉大さ [BPP 133-136]
 - 3.2.2.3.2.1.1.2.2.2.3.2 心の学処
 - 3.2.2.3.2.1.1.2.2.2.3.2.1 神通の原因である止を学ぶ必要性 [BPP 137-156]
 - 3.2.2.3.2.1.1.2.2.2.3.2.2 止を学ぶ在り方の本質
 - 3.2.2.3.2.1.1.2.2.2.3.2.2.1 止の資糧への依存 [BPP 157-162]
 - 3.2.2.3.2.1.1.2.2.2.3.2.2.2 止の修習の在り方 [BPP 163-164]
 - 3.2.2.3.2.1.1.2.2.2.3.2.2.3 修習の利益 [BPP 165-166]
 - 3.2.2.3.2.1.1.2.2.2.3.3 智慧の学処
 - 3.2.2.3.2.1.1.2.2.2.3.3.1 観を学ぶこと
 - 3.2.2.3.2.1.1.2.2.2.3.3.1.1 観を学ぶ理由 [BPP 167-172]
 - 3.2.2.3.2.1.1.2.2.2.3.3.1.2 方便の双運を学ぶ在り方 [BPP 173-176]

- 3.2.2.3.2.1.1.2.2.3.3.1.3 双運の道
 - 3.2.2.3.2.1.1.2.2.3.3.1.3.1 まとめて説いたもの [177-180]
 - 3.2.2.3.2.1.1.2.2.3.3.1.3.2 詳しく解説したもの
 - 3.2.2.3.2.1.1.2.2.3.3.1.3.2.1 方便の認識 [BPP 181-182, 184]
 - 3.2.2.3.2.1.1.2.2.3.3.1.3.2.2 修習の目的 [BPP 185-188]
 - 3.2.2.3.2.1.1.2.2.3.3.1.3.2.3 智慧の認識 [BPP 189-192]
 - 3.2.2.3.2.1.1.2.2.3.3.2 観を学ぶ在り方
 - 3.2.2.3.2.1.1.2.2.3.3.2.1 詳細な解説
 - 3.2.2.3.2.1.1.2.2.3.3.2.1.1 観の資糧に依存すること
 - 3.2.2.3.2.1.1.2.2.3.3.2.1.1.1 論理による考察から生じた智慧
 - 3.2.2.3.2.1.1.2.2.3.3.2.1.1.1.1 結果を考察する有無生滅 [BPP 193-196]
 - 3.2.2.3.2.1.1.2.2.3.3.2.1.1.1.2 原因を考察する金剛片 [BPP 197-200]
 - 3.2.2.3.2.1.1.2.2.3.3.2.1.1.1.3 性質を考察する離一多の証因 [BPP 201-203]
 - 3.2.2.3.2.1.1.2.2.3.3.2.1.1.2 聖教に依存する聞から生じた智慧 [BPP 205-212]
 - 3.2.2.3.2.1.1.2.2.3.3.2.1.2 観を修習する在り方 [BPP 213-220]
 - 3.2.2.3.2.1.1.2.2.3.3.2.1.3 修習の結果
 - 3.2.2.3.2.1.1.2.2.3.3.2.1.3.1 主体の目的 [BPP 221-224]
 - 3.2.2.3.2.1.1.2.2.3.3.2.1.3.2 聖教による論証 [BPP 225-232]
 - 3.2.2.3.2.1.1.2.2.3.3.2.2 結びのまとめ [BPP 233-236]
 - 3.2.2.3.2.1.2 結果の法の解説 [BPP 237-240]
 - 3.2.2.3.2.2 真言乗に入る在り方のみを解説したもの
 - 3.2.2.3.2.2.1 真言乗に入る必要性を説いたもの
 - 3.2.2.3.2.2.1.1 依拠の人を求める必要性 [BPP 241-248]
 - 3.2.2.3.2.2.1.2 彼を熟する灌頂 [BPP 249-254]
 - 3.2.2.3.2.2.1.3 灌頂の偉大さや利益 [BPP 255-256]
 - 3.2.2.3.2.2.2 上の二つの灌頂の在り方の是非 [BPP 257-268]
 - 3.2.2.3.2.2.3 上の二つの灌頂を得ない場合にどのようになすべきか [BPP 269-272]
- 3.3 いかなる原因により著述したのか [BPP 273-276]
- 4 結びの意味
 - 4.1 誰が著したのか
 - 4.2 誰が翻訳したのか

『菩提道灯論注・尊者を喜ばず供養の雲』和訳¹⁶

『菩提道灯論注・少して明らかにする偉大な尊者を喜ばず供養の雲』と言われるもの

¹⁶ 以下の和訳において、「バンチェン注」との類似を明確にするために、同じ表現の文章に下線を付す。

がある。

シャーカムニに敬礼する。

極楽の最高の国土の尊主である無量光と、濁世の有情の側で聖なる地の大学者として受け入れられた特に勝れたディーパンカラシュリーとして完全に知られている御足に敬礼する。

その尊主がチベットの中央の地に来られてから仏教一般とカダム派の教義の規則を開いたものをよく解説した最高なものが『菩提道灯論』として知られている。

ドムトゥンとポトワとランリタンパとシャラワと二人の勝者の父子などのすべてがこの『道灯論』自身を根本に把握してからカダム派の教えが広げられた。

それ故に、ここでも『道灯論』の言葉の解説をまとめたものを明らかにするだけで、偉大な尊者を供養が喜ばすように、信仰のある者が書くべきである。

さらにまた、偉大な尊者の生涯の詳細な伝記は『カダム派法史』などに明らかにされ、簡略な伝記は『ラムリム・チェンモ』などに出ている通りであり、ここに述べることは適切であっても、多くなる心配から著さないでおく。この『道灯論』はすべての經典の意味を領受する次第をまとめてから示しているので、述べられるものの側から特別に勝れているので、ここに解説するものに四つ。名称の意味と、翻訳者の敬礼と、著書の意味と、結びの意味である。

1 最初に、インドの言葉で *Bodhipathapradīpa*、チベットの言葉で『菩提道の灯(*Byang chub lam gyi sgron ma*)』と言うものについて、さらに *bodhi* は「菩提」、*patha* は「道」、*pradīpa* は「灯」と言われる。タイトルを解説するならば、この論書が『菩提道灯論』と言う。仏の菩提の御心に行く道の次第を述べ、明らかに示し、見えるようにする灯火のようなので、そのように述べられているからである。

2 第二に、翻訳者の敬礼は、「菩薩マンジュシュリー童子に敬礼する」というものが翻訳官により述べられており、理解しやすい。

3 第三に、本書の意味に三つ。福田を述べ解説を請願するものと、著書の主要部分と、いかなる原因により著述したかである。

3.1 最初に、

三時におけるすべての勝者たちと、その法と、僧たちに対して大いなる尊敬により敬礼をする。善妙なる弟子のチャンチュップ・ウーが請願するので、菩提への道の灯をよく明らかにするべきである。 [BPP 1-4]

と言う。この論書を始める最初に何を敬礼対象とするのかがある。すなわち過去と未来と現在の三時の諸仏と、その仏の聖教を考察した正法と、それを成就する僧たちに対し

て大いなる尊敬の心で敬礼するからである。そのように敬礼してから、何らかのなすべきことをなすことがある。何故ならば、善妙なる弟子で天のラマであるチャンチュップ・ウーが請願したことに依ってから、彼自身にこの『菩提道灯論』が明らかにされ、解説されるようになるから。それはまた、灯火により形が顕現されるように明らかにするという意味である。天のラマであるチャンチュップ・ウーは、チベットの王族の国王であり、彼がギャツォン・センとナクツォの翻訳官などをインドに派遣してから「チベットに有益なパンディタを誰か招聘するように」と説かれているように、彼らがインドに着いてから神通がおありになるある得道者に聖教を説くように請願したところ、尊者がとても有益に聖教を説いたように、尊者が六十歳の年令に近づいた時にチベットに招聘して、ガリ・トゥンに入られた時に天のラマが尊者に対して七つの質問を尋ねた答えとしてこの論書が著された、と知られている。ここに尊者が自注をまとめて著しになられ、他にゲシエ・トンパやポトワやシャラワやナクツォなどが注釈と概説の撰義を各種著され、後に先のパンチェン〔・ラマ一世〕が広大な注釈書を著されている。

3.2 第二に、著書の主要部分を解説したものに二つ。三種の人の設定をまとめて説いたものと、その三種の人の道の特徴をそれぞれ解説したものである。

3.2.1 最初に、

劣った者、中位の者、優れた者となっているので、人を三種と知るべきである。それらの特徴を明らかにして、それぞれの区別が著されるべきである。

[BPP 5-8]

と言う。道と能力の次第に小と中と大となる三つがある区別により三種の人とその道の特徴も三種と知るべきであり、それらの特殊性やそれぞれの特徴の区別がどのようなかを明らかにする言葉により書かれるべきである。ここに「人」という言説をなしたのは、人のインド語は「ブルシャ」である。効果的作用に入ることで、この三種の人も後生までの道を成就する能力をもつ者なので、そのように言われている。

3.2.2 第二に、三つ。劣った人と、中位の人と、優れた人の特徴や特殊性である。

3.2.2.1 最初に、

何らかの方法で輪廻の楽しみを自分自身のために求めている人は劣った人と知るべきである。 [BPP 9-12]

と言う。ここに説かれた人には劣った人の特殊性がある。悪趣を恐れてから今生に執着せず、後の増上生を求める人で、業果を信解する信をもち、帰依と、十不善を捨てる戒と、禪定と無色の禪の修習などの方法の何れかにより、天人の有漏の楽のみを得て、自分自身で得ようとするが、ここに説かれた劣った最後の人と知られているから。まとめ

ると、今生のみの楽を求めている者たちも劣った最後の人であっても、ここに説かれた劣った人は悪趣による恐怖から今生だけを求めるのではなく、後の増上生を第一に求める者である。それを「劣った人」と述べるのは、利他に背を向けて、輪廻からの解脱を求めずに尽くさず、輪廻の円満を求めているので、そのように言われている。さらにまた増上生だけを求め、その方便や道を誤らずに設定することは確かに必要であるが、後の増上生の楽を求めても、その誤った方法に入る他宗の者はここに説いた劣った人ではない。何故ならば、方法を捨てたものに入っており、三宝に帰依をしていないから。この劣った人には今生の楽を求めることだけが確かに存在しても、それだけのために智慧を捨てるのではなく、後の増上生を求め、悪趣から脱することを望んでいる。

3.2.2.2 第二に、

存在の楽しみに背を向けて、罪となる行為から退くことを本質として、自分の寂靜だけを求めている人は「中位」と言われる。[BPP 13-16]

と言う。ここに説いた人には中の特殊性がある。存在という輪廻の完成による楽にも智慧を向けないで求めることなく、三門の輪廻を成立させる一般的業と罪過である十不善業から退く主体をもち、自分だけの道のために苦を滅除する寂靜なる涅槃の解脱を求める人が、ここに説かれた「中位の人」と述べられているから。これは、悪趣から脱しようとするのがあっても、後の増上生だけを求めるのではなく、解脱を望んでいるので、前のものより特に勝れており、利他をなそうとする行為が低いので、中位の人である。悪趣から解脱しようとし、解脱を望む優れた人の道があっても、それは小中の人と共通の道となるものであるが、小中の人^が主体ではない。何故ならば、小中の道の主体は増上生のみを求めると解脱のみを求めることなので、類似していないから。本書には四諦も説かれている。すなわち「存在の楽しみを」と言うことにより苦諦が、「罪となる行為から」と言うことで集諦が、「自分の寂靜だけ」と言うことで滅諦が、「退けることを本質として」と言うことで道諦が説かれており、出離も解説されている。輪廻を成立させる最初の原因の最大のものが無明であり、その力による白黒の業を集めて輪廻に生まれ、老死を生み、それから退く原因の最高のものが、無我を特徴とする智慧で、それにより無明を捨てれば輪廻から脱し、表示のみである。

3.2.2.3 第三に、二つ。まとめて説いたものと、詳細に解説したものとである。

3.2.2.3.1 最初に、

自らが相續している苦しみにより、誰であれ他者の苦しみをすべて完全に尽くすことを望んでいるその人は、最高である。[BPP 17-20]

と言う。ここに説いた人には優れた人の特殊性がある。劣った人と中位の人の道を智慧

で完成した人が自分の相続に属して、自分自身が輪廻の苦により苦しんでいるように、他の衆生も苦により苦しんでいるのを見てから悲心によりその衆生たちの苦をすべて正しく尽くしてから、悟りを確立しようとするその人が、ここに説かれた最高で優れた人であるから。まとめると、三種の人の特徴を示す際のこれらの教義は、三種の人の特徴とその道を第一に説いた後に、三種の人に共通な道の特殊性を対象により説き、ここに説いた劣った人を三乗の種姓ではない者、中位の人を劣乗の種姓の者、優れた人を大乘の種性がある者と確定させるべきである。さらにまた、第一に大乘の道を成就させる方法に間違いなく入っており、そこには顕教と真言乗の二つに区別がある。

3.2.2.3.2 第二に、詳細に解説したものに二つ。波羅蜜乗の道を詳細に解説したものと、真言乗に入る在り方の方向のみを解説したものである。

3.2.2.3.2.1 最初に二つ。道の設定と、結果の設定である。

3.2.2.3.2.1.1 最初に二つ。誓願と、解説の主体とである。

3.2.2.3.2.1.1.1 最初に、

正しい衆生で、最高の菩提を望んでいる者たちに対して、師たちが説いた正しい方法が解説されるべきである。 [BPP 21-24]

と言う。ここに「解説されるべきである」と引かれるのは、何が、と言え、無上菩提を成立させる正しい方法である。誰に対してか、と言え、正しい衆生で最高の菩提の位を望んだ者たちに対してである。それも自己流で解説するのではなく、セルリンパなどの正しい師たちにより説かれた教えに随順してから解説するのである。まとめれば、この偉大な尊者には二種の偉大な乗り物から相続した道次第の一切の概説が完成している。すなわち、『撰義論』に、

二つの偉大な乗り物から相続した

などと説かれている通りである。

3.2.2.3.2.1.1.2 第二の解説の主体に二つ。願の学処と、入の学処をもつものである。

3.2.2.3.2.1.1.2.1 最初に三つ。前行と、本行と、結行の次第である。

3.2.2.3.2.1.1.2.1.1 最初に三つ。資糧を集めることと、特別な帰依をなすことと、三心を智慧で浄化することとである。

3.2.2.3.2.1.1.2.1.1.1 最初に、

完全なる仏の像などと聖なる仏塔に向かってから、花や香や物といった価値のあるものを供養するべきである。『普賢行願讃』に説かれた七種の供養も [なすべきである] [BPP 25-30]

と言う。ここに説いたのは、供養をどのようになのかと、何の前でなすべき特殊性があるのかである。正等覺のシャーキャムニを絵で描いた身体と、鑄造で作った身体の所依と、遺骨の心髄をともなう塔という心の所依と、教説の正法という経函などの言葉の所依を成就させるものに明らかに向かってから、物をおいた前で供養をなすべきであるから。何れかの物による供養もある。花と薫香と灯と香と食べ物と音楽などの物の何れかによる供養をなすべきであるから。それに尽きず、『普賢行願讚』に説かれている七種の供養もなすべきである。さらにまた、帰依と供養と懺悔と随喜と勸請と請願と回向をともなう七支もなすべきであるから。

3.2.2.3.2.1.1.2.1.1.2 第二に、特別な帰依は、

菩提座に至るまで不退転の心により三宝を明確に信じ、膝を地面につけてから掌を合わせた後に、最初に帰依を三度なすべきである。 [BPP 31-36]

と言う。時に応じて帰依すべき在り方がある。菩提座の辺際に至るまでの帰依であるから。菩提座には内外の二種がある。外の場所の菩提座は、菩提樹の前や金剛座のようなもので、内に考察される菩提座は智慧の法身で、先にそこで悟っていない限り、後にそれを得ていない限り帰依をする必要があるという意味であるから。等起と行道に似たものによる帰依がある。一切衆生を対象とする悲心により三宝を帰依処と把握した後に、決して退くことのない堅固な心により三宝を信じ、大いに尊敬して身体の膝頭を地につけてから両手を合掌した後に帰依をするから。帰依の儀軌をどのようになすべきかの在り方がある。願心を起こす儀軌の最初に、共通ではない帰依の儀軌を三度述べる門からなすべきであるから。特殊な帰依を設定する在り方がある。一切衆生を輪廻の苦から守ろうと思う心により三宝に帰依をしているから。この節の帰依の原因と対象と性質と学処と利益の特殊性は『ラムリム・チェンモ』などから知るべきである。

3.2.2.3.2.1.1.2.1.1.3 第三の三心を智慧により浄化することが、

それから一切の衆生に対して慈愛の心が先行することにより、三悪趣に生まれることや死などにより苦しんでいる全ての衆生を見て、苦による苦しみや、苦を苦しむ原因から有情を救おうと望むことにより、 [BPP 37-44]

などと言われる。この最初の二 [パーダ] により慈愛が、その後の三つにより悲心の対象が、その後の三 [パーダ] により悲心の相が説かれており、菩提の心を浄化する在り方も目的により説かれている。特別な帰依をなしたその後になすべきことがある。一切衆生を対象としてから楽をとまなおうと望むことに合意する慈愛の心が修習されるべきものであるから。一切衆生を母と知る恩恵や報恩の門から心に喜ばしい慈愛を修習し

てからなすべきものがある。その後その慈愛の心が先行する門から、大悲が修習すべきものであるから。どのように修習すべきか、と言え、一切衆生の一般的苦と、三悪趣の苦と、人の生老死などの苦と、欲天の死後に下に落ちる苦などの上界の行苦の在り方を知ってから、三界の一切有情を見るべきである。それらも、三悪趣の苦による苦と、欲天と人の移り行く苦と、上の界の行の苦と、理由で原因である苦諦から煩惱をもつ想が伸びる有情が、それから解脱することを望む大悲を修習した後に、その悲心により導かれる菩提心を起こすべきであるから。それらの教義は、本心を起こすために慈愛と悲心の二つは確実に必要であることを示している。

3.2.2.3.2.1.1.2.1.2 第二の本行は、

退くことのなく誓願する菩提心を起こすべきである。 [BPP 45-46]

と言ひ、何を起こすべきか、と言え、前のように慈愛と悲心の対象をよく浄化してから一切衆生のために「仏を得るべきである」と願う菩提心を起こすべきである。どのようにか、と言え、発心から常時退くことなく誓願する在り方による。総じて願心の儀軌に依存せずに生じて、儀軌により受けたならば、堅固などの特別な目的があるので受けるのであり、受ける儀軌の目的は、『ラムリム・チェンモ』などに出ているように、自分で脇に述べているので、ここに置かれている。

3.2.2.3.2.1.1.2.1.3 第三の結行の学処をとまなうものに五つ。

3.2.2.3.2.1.1.2.1.3.1 最初に利益は、

そのように願心により起こされた功德となるものは、『入法界品』にマイトレヤが明らかに解説している。 [BPP 47-50]

と言う。前に解説したように、願心の儀軌により起こされる広大な功德や利益となるものは、『入法界品』で尊者マイトレヤが善財王子に詳しく解説している。解説方法は、その經典自身に「善男子よ、菩提心は一切法の種子の如くである」などと説かれており、発心の利益を説いた多くの經典もこれより詳しいものは見られない。

3.2.2.3.2.1.1.2.1.3.2 第二に、菩提心の浄化を学ぶことが、

それにより經典を読誦し、師 [の説くことを] 聞き、完全なる菩提心の限り無い功德をよく理解すべきであり、その[菩提心]があること理由から、そのように繰り返し心を起こすべきである。 [BPP 51-54]

と言う。願心を儀軌により受けたその人は願心が起こった利益を知るべきなので、『入法界品』や特別な論書を自分で読み、また師からよく聞いて、完全なる菩提心が起こし

た無限の功德と利益の在り方を知ってから、目的を思う度に自らの相続にとどまり、損なわれずに広げる原因である因縁を現在も繰り返し、昼に三度、夜に三度その願心を出し、起こすべきである。願心を起こす詳細な儀軌が『ラムリム・チェンモ』に出ているように成立しないのならば、仏法を愛する四つの根本をなすこととして尊者自身の著書に出ている。では、完全な菩提心を起こすその無限の功德や利益は何か、と言うのならば、それは『入法界品』だけに限らず、他にも、

『施勇所問経』にこの福德がよく説かれており、それを三偈だけにまとめて、ここに著わすべきである。

菩提心の福德であるものに形態があるのならば、虚空界に遍満し、それはさらに広がるであろう。

ガンジス河の砂の数ほどの仏国土を人が宝石で満たし、世間の守護者に施しをすることよりも、誰であれ掌を合わせて、菩提に心向ければ、この供養はさらに勝れたものになり、それには極限はない。 [BPP 55-70]

と説かれている。意味をまとめると、『施勇所問経』にこの発心の福德は何が説かれ、何時かを「三偈のみにまとめてから著す」と解説を誓願してからで、それ以後に利益を示している。菩提への発心の福德であるものに形態はないが、もしそれに形態があるのならば、虚空界があまねく遍満され、溢れることなくその利益はその虚空をも越えている。例えば、ガンジス河の砂と同じ数の仏国土を人が如意珠と銀などの宝で満たし、世間主である諸仏に布施をなすことで、掌を合わせてから身体を傾けた者が菩提に発心をしたこの供養は、特別に勝れている。では、ここに菩提への発心を供養と解説するのはどのようなのか、と云えば、供養を外的財物と内的成就の二種の供養と説く中から、菩提への発心と慈愛と悲心と空性の修習などが内的成就の供養であると意図されている。

3.2.2.3.2.1.1.2.1.3.3 第三の二資糧を集めることを学ぶことは、

菩提を願う心を起こしてから、多くの努力によりあまねく広げるべきであり [BPP 71-72]

と言う。上のように利益を憶念するなどの門から、菩提を願う心を起こしてから、七支を集める門から多くの努力によりその心をあまねく広める必要がある。菩提心を上に広げれば、二資糧がさらに広がり、すぐに成仏するであろうから。

3.2.2.3.2.1.1.2.1.3.4 第四の衆生を智慧により捨てないことは、

これを他の生においても思い出すために [BPP 73]

と言う「も」という語で説かれており、智慧により捨てることは、ある者が「自分に好ましくないのならば、この意味を決してなすべきではない」と考えて、衆生を智慧により捨てるようなことはなさない。

3.2.2.3.2.1.1.2.1.3.5 第五の〔四〕黒法を捨てて四白法を学ぶ在り方も、

これを他の生においても思い出すために、解説された通りの学ぶべきことをよく護るべきである。[BPP 73-74]

と言う。願心を儀軌により受けるこのことについて、今生で損なわない原因を学ぶだけでは十分ではないが、後の別の生においてもその心を記憶しており、忘れないために、原因を『迦葉品』に解説されているような四学処という二つの項目を完全に護り、依存すべきである。四法だけの二つが何かは、『ラムリム・チェンモ』に出ている通りである。

3.2.2.3.2.1.1.2.2 第二に、入の学処をもつことを解説したものに三つ。入の律儀を受ける必要性を説いたものと、それをどのように受けるのかと、その学処を解説したものである。

3.2.2.3.2.1.1.2.2.1 最初に、

〔菩提に〕入る心の本質とする律儀なしに、正しい誓願を広げることはない。完全な菩提を律儀により広げようと望む者は、そのために努力によりこれを確かに護るべきである。[BPP 75-78]

と言う。願心を儀軌により護ることにより、入の律儀を確実に受けるべきである。完全な菩提の律儀の名称をもつその願心をさらに広げようと思う者が入心の主体を律儀を受ける門から広げるべきであり、その律儀に属さずに願心を正しくさらに広げる方法は他にないからである。

3.2.2.3.2.1.1.2.2.2 第二に、入の律儀をどのように受けるのかに三つ。受ける所依と、受けられる対象と、受ける儀軌とである。

3.2.2.3.2.1.1.2.2.2.1 最初に、

七部の波羅提木叉を常に保持する者たちには菩薩の律儀の福分があるが、他の者にはない。[BPP 79-82]

と言う。男女の居士と、男女の沙門と、男女の比丘の六種と、その上に正学女の律儀をたしてから七種の波羅提木叉と解説されているように、七種のうちの適切なものや、それと共通な性質の罪過を捨てることを常に、生存している限り守ってから相続をとるな

う人には菩薩の入の律儀が生じる福分があるが、他の遮罪の重罪となるものを捨てていない者には菩薩の律儀が生じることはないのである。この自体を説くために入の律儀が生じる所依として七種の波羅提木叉のうち適切なものを自体として解説したものが、特別で最大の所依の能力となされているが、確実に必要なものでもない。何故ならば、波羅提木叉の律儀を受けていなくても、入の律儀が生じることがあるから。ここで七種に近住戒の律儀を導かないのは、それは一昼夜限りのものなので、短縮された相続を意図している。所依の殊勝を示すものが、

波羅提木叉を七部として如来がお説きになられた中、吉祥なる梵行が最高であり、比丘の律儀とお認めになられている。 [BPP 83-86]

と言う。菩薩の律儀の所依から波羅提木叉を七部と如来がお説きになられており、在家の律儀より吉祥なる梵行の出家に向かう律儀が最高であり、出家の律儀の中からも比丘の律儀を最高と述べられている。

3.2.2.3.2.1.1.2.2.2.2 第二に、誰から受けるのかという対象は、

律儀の儀軌をよく知り、自分自身も何れかの律儀に住しており、律儀を与えることに耐え、悲心をそなえているよい師を知るべきである。 [BPP 91-94]

と言う。著書のこの言葉は、『菩薩地』の [BPP 87] という次に出ているが、喜ばしい解説のために先に受けている。では律儀を受ける対象はどのようなのかと言えば、存在する。そこで律儀を受ける儀軌の周辺を知る智慧をもち、自分自身が菩薩の律儀に住し、他者にその律儀を与えることに耐える能力や気概と、悲心との四功德をもつ者が必要であり、そのような人がその菩薩律儀を受ける対象のよい師と知るべきであるから。

3.2.2.3.2.1.1.2.2.2.3 第三のどのように受けるのか、という儀軌に二つ。師がいるものと、師がない儀軌とである。

3.2.2.3.2.1.1.2.2.2.3.1 最初に、

『菩薩地』の「戒品」に説かれている儀軌により正しい特徴をそなえたよい師から律儀を受けるべきである。 [BPP 87-90]

と言う。「それを受ける」と導かれる。「どこで入る律儀なのか」と、「何からか」と言えば、前に解説した通り、正しい円満な相をもつよい師からである。「何の儀軌に依って受けるのか」と言えば、聖者アサンガが著わした『菩薩地』の条目の「戒品」に説かれた儀軌の門からである。入の律儀のこの詳細な儀軌は、尊者の『律儀儀軌』と尊主が著わした『菩薩地戒品』に出ている通りである。ここでは多くなる恐れから設定しない。

3.2.2.3.2.1.1.2.2.2.3.2 第二の師がいない儀軌は、

それを努力しても、これと同じ師を獲得できていないのならば、その他の律儀を受ける儀軌が正しく解説されるべきである。[BPP 95-98]

と言うことは、師のいない律儀の儀軌の解説の誓願である。その律儀を受ける大きな努力で前に解説したのと同じ師をどうしても得られないのならば、その師がいる場合とは別の対象が取り除かれ師がいなくても、自分自身でその律儀を受ける儀軌が、聖教に説かれているように、ここに正しく解説されるべきである。では「師のいない律儀の儀軌はいかなる聖教から解説されるのか」と言えば、

そこで過去時にマンジュシュリーがアンバララージャになって菩提心を起こしたことが『文殊仏国土莊嚴經』に説かれているように、そのようにここに明らかに記すべきである。[BPP 99-104]

と言う。そこで、師がいない律儀の儀軌が解説されるべきである。昔の無量劫の過去時に、マンジュシュリーが転輪王アンバララージャであり、「虚空王」というものに変化して、「雷鳴音王」という如来の前で菩提に発心した在り方が『文殊仏国土莊嚴經』に解説されているように、真実であるように、本書では明らかに書かれているからである。その經典に出ている発心と律儀を受ける在り方自体を示して、

守護者の目の前で完全なる菩提に心を起こして、一切の有情を招き、彼らを輪廻から救う。

害心や、怒りの心や、貪欲や、嫉みを今から菩提を得るまでの間、起こすべきではない。

梵行を行うべきであり、罪惡と欲望は捨てられるべきである。戒律を喜ぶことで、仏に従って学ぶべきである。

自分自身は速やかな方法で菩提を得ることを望まず、一人の衆生のために最後の最後までとどまるべきである。

無量で不可思議な国土を清浄にすべきであり、名称によって把握すべきであり、十方に知られている。

自分の身と口の行為をすべて清浄にし、意の行為も清浄にすべきであり、不善なる行為をなすべきではない。[BPP 105-128]

と言う。次に、発心と律儀を受ける在り方に二つ。

3.2.2.3.2.1.1.2.2.2.3.2.1 最初に、守護者である諸仏の前で無上正等覺に発心する。目的

は、有情である一切衆生を楽しませることが、その目的である。どのように楽しませるのかは、それらの有情を輪廻から救って、涅槃に入れて、楽しませるのである。

3.2.2.3.2.1.1.2.2.2.3.2.2 第二に三つ。

3.2.2.3.2.1.1.2.2.2.3.2.2.1 最初に、律儀戒を受けることは、衆生を殺そうとすることなどの害心と、怒りの心と、器物を本当に保持する貪欲と、他者の円満に耐えられない嫉妬を律儀を受けたその日から把握して、大菩提を得ていない限りはなすべきではない。二根を結合する性行為は捨てられ、梵行を行うべきで、罪過の業とその原因と認められる対象に執着することを捨てるべきである。それらを捨てる戒律を喜ぶ者は、諸仏の行に従って学ぶべきである。

3.2.2.3.2.1.1.2.2.2.3.2.2.2 第二に、衆生利益戒を受けることが、自分が速やかに早い方法で菩提を得ることを望まず、一人の衆生を利益する理由により、後の返際の限り無く、輪廻にとどまるのである。

3.2.2.3.2.1.1.2.2.2.3.2.2.3 第三に、摂善法戒は、無量で不可思議なる功德をともなう自らの国土の過失を浄化すべきであり、他の誰かが自分の名前を聞いて、把握し、見て聞いて、憶えて、触れる衆生たちに利益を設定しようとすることで、十方に自分の名前が知られ、把握してとどまる衆生世間も浄化すべきである。まとめれば、自分の身と口の業の二つを一切相において過犯より浄化すべきであり、それに尽きず、意の業も過犯より浄化すべきで、三門の不善業を菩提に至るまで決してなすべきではない。ここに解説する律儀を受ける儀軌について詳論と略義の二つのうち略義は、『集菩薩学論』に説かれている通りである。軌範師がいてもいなくてもよく、いる場合には軌範師に請願して、いない場合は子供がいる王が請願して「私の名前はこうである」と言うことで、例えば、『聖文殊仏国土功德莊嚴經』に、

世尊よ、聖マンジュシュリーの前世の理解を述べてから、行をそなえた者が菩提に発心したように、発心すべきである。

と三度続け唱えるか、自分で述べてから受けるべきである。詳論は、その前に続いて

守護者の目の前で [BPP 105]

から、

不善なる行為をなすべきではない [BPP 128]

と言うまでを結びつけて、三度述べて、受けるべきである。

3.2.2.3.2.1.1.2.2.3 第三に、律儀を受けてから学処を学ぶことを説いたものに三つ。戒の

学処を学ぶ在り方と、心の学処を学ぶ在り方と、智慧の学処を学ぶ在り方とである。

3.2.2.3.2.1.1.2.2.3.1 最初に二つ。主体とその偉大さとである。

3.2.2.3.2.1.1.2.2.3.1.1 最初に、

自分の身・口・意は清浄であるので〔菩提に〕入る心の主体は律儀にとどまっているから。戒の三学処をよく学ぶことで、戒の三学処に対する尊敬が大きくなるだろう。〔BPP 129-132〕

と言う。それも「学処」と導かれる。「何を」とは、戒の三学処である。「誰が」とは、入心の主体の律儀に住するその菩薩である。「何の目的」とは、自分の身口意の三つを過犯より浄化し、他者への利益の原因のためである。「どのように学ぶのか」とは、その三つをよく学ぶのである。「そのように学んだことで何になるのか」と言えば、後に修習の力により戒の三学を学べば、尊敬は大きくなるであろう。

3.2.2.3.2.1.1.2.2.3.1.2 第二の偉大さは、

それ故に、清浄である完全な菩薩の律儀を制御される者たちは、努力することで完全な菩提の資糧を完成するであろう。〔BPP 133-136〕

と言う。戒の三学処を学ぶことで三門を清浄にしているので、捨てられるべきものを浄化し、功徳を完全にすることが結果の菩提であり、それ自身を得ることを求める菩薩たちが、律儀戒が最高となる三戒の律儀を護ることを努力することで、無上正等覚の二資糧が完全になるであろう。

3.2.2.3.2.1.1.2.2.3.2 第二に、心の学処に二つ。神通の原因である止を学ぶ必要性と、止をどのように学ぶかの在り方自体とである。

3.2.2.3.2.1.1.2.2.3.2.1 最初に、

福徳と知恵を本質とする資糧が完全である原因を、一切の仏が神通を起こしたものとしてお認めになられている。

例えば、翼が破れて広げることができない鳥は空を飛ぶことができないように、そのように神通を得ることを離れた者は、衆生利益をなすことはできない。

神通をもつ者の昼夜の福徳は、神通を離れた者には百の生においても存在しない。

速やかに完全なる菩提の資糧を完成させようとする者は、努力して神通を完成させるであろうが、怠惰によりなされるものではない。〔BPP 137-152〕

と言う。福德と知恵の自性の二資糧を完全にする特別な原因は何か、たとえば、その原因は一切仏が六神通を起こしたものとお認めになられている。神通がなければ、特別な衆生利益を成就することを知らないから。例えば、翼が破れて広げられなかったり、それが無い鳥は空を飛べないように、神通の力を離れたら福分に従って衆生の広大な利益をなすことができない。神通をもつ菩薩が一昼夜にわたり行った福德の資糧を集めたものは、神通を離れた者には、百の生においても存在しないから。これにより速やかに完全な菩提の資糧を完成しようとする者は神通を起こす必要があり、さらにまた、その原因を大きく努力することで神通が成立するであろうが、怠惰をもつことではそれを成就できないから。原因の最高は何か、たとえば、

止を完成させずに神通が生じないであろうから、それ故に止を完成させるために、繰り返し努力すべきである。[BPP 153-156]

と言う。何らかの微細な神通が生じる力と、業の力と、薬とマントラに依ってから生じるものがあったり、修習の力により生じた特別な神通が生じる原因の最高のものがある。止が成就していない者には生じないものであり、その理由のために止を成就するために九住心などを何度も努力する必要があるから。

3.2.2.3.2.1.1.2.2.3.2.2 第二に、止を学ぶ在り方の本質に三つ。止の資糧に依存することと、止をどのように学ぶかの方法と、修習した利益とである。

3.2.2.3.2.1.1.2.2.3.2.2.1 最初に、

止の支分を損なっている者は、努力して修習したとしても、千年にわたっても三昧は完成しないであろう。それ故に、『三昧資糧品』に説かれた支分によくとどまり、[BPP 157-162]

と言う。止が生じるためにその原因の集まりに依存する必要がある。止の支分が原因の資糧を損なっていれば努力して止を修習しても、千年にわたっても止の三昧は過失なく成立しないから。その理由のために『三昧資糧品』に説かれている止の原因の集まりとなる支分によく住してから止を成就すべきである。原因の集まりは『声聞地』に戒と少欲と知足と寂靜に住するなどの十三が説かれている通りである。

3.2.2.3.2.1.1.2.2.3.2.2.2 第二に、止をどのように学ぶかの在り方は、

適切な一つの対象に対して意識をよく集中するべきである。[BPP 163-164]

と言う。前のように止の資糧にとどまるその人が止を修習する在り方がある。勝者が説いた遍満の対象と、伺察を浄化する対象と、善巧の対象と、煩惱を浄化する対象のうち

何れかの適当なもの一つにして意のよいところで、動くことなく一つだけに設定するべきであるから。『ラムリム』などに仏身を対象の所依としてから修習することが解説されている。

3.2.2.3.2.1.1.2.2.3.2.2.3 第三の修習した利益は、

ヨーガ行者が止を完成させれば、神通も完成するであろう。 [BPP 165-166]

と言う。止を修習した利益がある。前のように始めたそのヨーガ行者が止を完成したならば、それを浄化してから他の功德と神通も成立するであろうから。

3.2.2.3.2.1.1.2.2.3.3 第三に、知恵の学処に二つ。方便と智慧の双運の門から観を学ぶことを説いたものと、観をどのように学ぶかの方法とである。

3.2.2.3.2.1.1.2.2.3.3.1 最初に三つ。観を学ばなければならない理由と、方便と智慧の双運を学ばなければならない在り方と、双運の道自身を解説したものとである。

3.2.2.3.2.1.1.2.2.3.3.1.1 最初に、

智慧波羅蜜の行を離れていれば、障害は尽きないであろう。それ故に、煩惱と所知の障害を残らずに捨てるために、智慧波羅蜜をヨーガ行者は常に方便をともなって修習すべきである。 [BPP 167-172]

と言う。止に依存してから観を修習すべきである。眞実を理解する智慧波羅蜜の行であるヨーガを離れた止のみでは障害が尽きない、と説かれているので、それ故に、煩惱障と所知障を残らずに捨てるために、空性を理解する智慧波羅蜜が常に布施と戒などの方便をともなって、修習されるべきである。

3.2.2.3.2.1.1.2.2.3.3.1.2 第二に、双運を学ばなければならない理由を、

方便を離れた智慧と智慧を離れた方便も、何故ならば「縛られている」と説かれているので、それ故にどちらも捨てるべきではない。 [BPP 173-176]

と言う。仏を目的としているので、方便と智慧の両方を捨てるべきではない。如何なる理由なのか、と言えば、世尊が『維摩経』に、

方便を離れた智慧は束縛である。智慧を離れた方便は束縛である

と説かれているそのためである。

3.2.2.3.2.1.1.2.2.3.3.1.3 第三に、双運の道に二つ。まとめて説いたものと、詳細に解説したものとである。

3.2.2.3.2.1.1.2.2.3.3.1.3.1 最初は、

「智慧とは何か」、「方便とは何か」という疑念は捨てられるべきなので、方便と智慧の正しい区別を明らかにするべきである。[177-180]

と言う。「明らかにするべきである」と導かれる。「何を」とは、方便と智慧の特徴が混ざったままに現われたものは、真実において、それぞれを区別すれば、混ざっていないものである。「目的は何か」とは、「智慧とは何か、方便とは何か」ということを理解せずに、誤って理解したり、疑念になるものは捨てるべきであるから。

3.2.2.3.2.1.1.2.2.3.3.1.3.2 第二に、詳細に解説したものに三つ。方便を認識することと、その修習する目的と、智慧を認識することとである。

3.2.2.3.2.1.1.2.2.3.3.1.3.2.1 最初に、

智慧波羅蜜を除いた布施波羅蜜などを勝者は方便と解説している。[BPP 181-182, 184]

と言う。その「方便」とはどのようなのか、と云えば、存在する。智慧波羅蜜を除外して、脇に分けた、それとは異なる発心をとまうに布施波羅蜜と戒と忍などの残りの五つと他の自法も勝者である諸仏が方便と解説しているから。

3.2.2.3.2.1.1.2.2.3.3.1.3.2.2 第二に、

方便を修習することにより、自分自身で智慧を正しく修習する人は、菩提を速やかに得るが、無我だけの修習では得られない。[BPP 185-188]

と言う。方便と智慧の双運を学ぶ必要がある。何故ならば、無常と業果から始まって、布施などの方便の修習を堅固になすことにより、菩薩で自ら基本となる相を把握する対象に向かったり断じたりする智慧を修習した人は、完全な菩提を速やかに得るだろうが、無我だけを修習するようでは、方便と智慧の双運により初地さえも得られないから。

3.2.2.3.2.1.1.2.2.3.3.1.3.2.3 第三に、智慧を認識することは、

「蘊界処は生じることがないと理解し、自性を欠くものであると知ることが智慧である」と正しく説明されている。[BPP 189-192]

と言う。そのうち智慧の対象は、色などの五蘊と眼などの十八界と、眼処などの十二処によりまとめられた一切法である。それらの上のそれによる原因は、自性により生じることはない。それを理解する原因となる自性による空性を知る智慧が、ここで方便と智

慧の二つの中から「智慧」と完全に解説されており、それが智慧の一切の学処の最高である。

3.2.2.3.2.1.1.2.2.3.3.2 第二に、観をどのように学ぶかの在り方に二つ。詳細に解説したものと、結びをまとめたものとである。

3.2.2.3.2.1.1.2.2.3.3.2.1 最初に三つ。観の資糧に依存することと、観を修習する在り方と、修習した結果とである。

3.2.2.3.2.1.1.2.2.3.3.2.1.1 最初に二つ。論理に依存してから想を生じる智慧を起こすことと、聖教に依存してから聞を生じる智慧を起こすこととである。

3.2.2.3.2.1.1.2.2.3.3.2.1.1.1 最初に三つ。結果を考察した有無生滅と、原因を考察した金剛片と、本質を考察した離一多の証因とである。

3.2.2.3.2.1.1.2.2.3.3.2.1.1.1.1 最初に、

「存在しているものが生じる」ということは正しくない。存在していないものも虚空の花のようなものである。二つの過失になってしまうので、どちらのものも生じることはない。 [BPP 193-196]

と言う。事物を説く者たちが「諸事物は自性により生じることは成立しない。何故ならば自性により生じることを直接知覚しているから」と言うならば、では、芽のようなものは原因の時に存在するのか、存在しないのか、存在するものと存在しないものの両者なのか、どちらでもないのか、の何れかが自性により生じると考察する場合に、最初の通りならば、主題である芽が原因の時に存在しているものが生じることは論理ではない。存在しているならば、すでに成立しているので、成立しているものが再び生じる必要はないからであり、必要があるならばさらに無限に生じることになってしまうから。第二の如くならば、原因の時に存在しなくても、自性による生は論理ではない。何故ならば、存在しないものに原因が何をなしても効力がないからである。例えば、虚空の蓮華は、誰も生じさせられないように。それを述べたものも、

百千万の原因によっても存在しない事物は変化することはない。

と説かれているように。しかも虚空の蓮華と虚空に存在する蓮華とについて特に存在の在り方を区別する必要がある。一般に自らの原因の時に存在しなくても生起の効力があるものが一切の生の在り方であっても、自性により成立するように、原因の時に存在しなければ一切相において存在しないことになるので、原因により生起させられることはあり得ず、微細が多くなる。第三の如くならば、原因の時に有と無の両者からも生じない。何故ならば、それには前に解説した論理により損なわれる両方の過失になってしまうから。第四の如くならば、また成立しない。原因の時に有でもなく無でもないその事

物に似たものは存在しないから。その如くならば、主題である芽は自性により生じること
はない。何故ならば、前の通りに有と無などの四つから自性により生じないから。『空
性七十論』に、

存在するものはすでに存在しているので、生じるものではない。存在しないも
のはまだ存在していないので、生じるものではない。性質が相違するので、両者
の性質はない。生じることがないので、滅することもない。[SS 4]

と説かれている論理である。

3.2.2.3.2.1.1.2.2.3.3.2.1.1.1.2 第二に、

事物は自らより生じないし、他のものからも両者からでもなく、無因から
でもない。それ故に、本質として自性は存在しない。[BPP 197-200]

と言う。『根本中論』に、

自からではなく、他からでもない。

などの論理である。主題である内外の諸事物は、自分すなわち自らより生じない。生じ
るならば、原因の時に存在する生の在り方で行くので、生が無意味で限り無くなってし
まうから。どのようにかと云えば、「主題であるそれがさらに生じること無意味とな
ってしまう。自らの自体としてすでに成立しているから。満たしていないならば、さら
に無限に生じることになってしまう。すでに成立しているものもさらに生じる必要があ
るから」と述べられているので、『根本 [中論]』と『入 [中論]』の論理が多くある。
主題であるそれは、原因とは性質が異なるものから生じない。何故ならば、石と木など
の関係のない一切の原因から一切の結果が生じることになってしまうから。これは一多
の論理の核心でもある。自らの生滅における自性による同一性と、他の生滅における自
性による異性の論理の過失を示しているから。両者からも生じない。何故ならば、自他
それぞれからの生を満たしているから。無因からも生じることはない。生じるならば、
鶯鳥にも孔雀の斑点が生じるだろうし、結果である収穫物を生じるために原因が成就す
る必要はなくなってしまう、などのことになるから。そのようならば、主題である諸事
物は、本来、生の自性はない。理由の論理は、前に説いたそれ故に。

3.2.2.3.2.1.1.2.2.3.3.2.1.1.1.3 第三に、

また一切の諸法を、一と多により考察するならば、自性は認識されない。
[BPP 201-203]

と説かれており、『中観莊嚴論』に、

自派と他派が説くこれらの存在は、真実においては一と多の本質を離れているので、無自性である。影像のように。[1]

と説かれている論理である。論理の異門も、主題である内外の法の一切事物は、自性により把握されるものとして存在しない。自性により一と多の何れかと論理により考察するならば、獲得されないから。例えば、影像は顕現の通りには存在しないように。主張命題は、自性により成立する一として存在しない。何故ならば、部分をもつから。主題であるそれは、そのように成立する多として存在しない。それを成立させる一がないから。遍充を論証するものが、自性により成立しているならば、そのように一と多の何れかとして成立する必要があるから。存在するならば、一と多との何れかとして存在する必要があるから。『中観莊嚴論』に、

一と多とに属さずに他の相をもつものは適切ではない。何故ならば、この二つは相互に排除して存在しているから。[62]

と説かれているからである。

3.2.2.3.2.1.1.2.2.3.3.2.1.1.2 第二に、聖教に依存する聞から生じた智慧は、

『空性七十論』や『根本中論』などからも、諸事物は自性を欠くものとして成立する、と説明されている。何故ならば、著書が大きくなるので、それ故に、ここでは広げずに、完成した宗義だけで修習するために明らかに解説した。[BPP 205-212]

と言う。さらにまた空性が聖教により論証した『経集』と、それを論理により論証した『空性七十論』と、空性を論理の究極の異門から設定した『根本中論』と、その他の論書と、アーリヤデーヴァとブッダパーリタとチャンドラキールティなどの著書からも、諸事物の自性は真実により空である空性として成立することを解説していることを見るべきであり、この著書にはそれらを詳しく述べない理由がある。何故ならば、著書が大きくなる恐れから広げられないから。ここに僅かに説いたのも、聖教と論理が論証する宗義のみが説かれているのである。事物が無我であると修習すべき意味として正しく解説されているから。この節の自注に『空性七十論』と言うことにより縁起の証因が説かれている、と解説されている。これは、「主題である蘊などの事物は、自性により生じない。何故ならば、因縁に依ってから生じるから。これは『無熱所問経』に、

何であれ縁から生じたものは生じない。それに生の自性は存在しないから。縁に依存するものは空と解説されている。空性を知る者は不放逸である。

と説かれ、守護者が『根本中論』に、

縁起であるものは自性において寂靜である。

とお説きになられている」という意味である。

3.2.2.3.2.1.1.2.2.3.3.2.1.2 第二に、観の修習の在り方は、

それ故に、すべての法の自性は認識されないので、無我を修習するそのこと自身が智慧を修習することである。 [BPP 213-216]

と言う。観を修習する在り方がある。上のように蘊などの一切法は真実ではないものとして論理により設定されているので、蘊などの諸法はすべて勝義を考察する論理で正しく考察する限り、自性により成立するということは、極微さえも把握されないので空を徐々に行き、考察の修習によりそのような空の無我を修習すること自体が、智慧波羅蜜を修習することであるから。そのうち一般に考察の修習と排除の修習との二つである。ここで「我」とは排除されるべき我である。それは他に依存せずに自身で成立するものとされている。『四百論注』に、

そこで「我」とは、諸事物の他に依存しない性質の自性であり、それが存在しないことが無我である。

と説かれているように。では、そのように考察した者のその智慧自身に執着することをどのように捨てるのか、と言え、

智慧によりすべての法のいかなる自性も見られず、その智慧の論理を解説し、分別することなく、それを修習するべきである。 [BPP 217-220]

と言う。勝義を考察する智慧により、諸法はすべての真実の自性を求めても見えないように、その智慧自身も論理により考察するならば、自性により存在しないと見られ、見る対象のないその否定されるものを他所で無分別と考察し、一点においても修習すべきである。それが解脱と涅槃を得る原因の最高であるから。『三昧王経』に、

もし法を我と観察し、それぞれ考察してから修習するならば、それは涅槃という結果を得る原因となる。

と説かれている。

3.2.2.3.2.1.1.2.2.3.3.2.1.3 第三に、修習する結果に二つ。主体の目的と、それを聖教により論証したものとである。

3.2.2.3.2.1.1.2.2.3.3.2.1.3.1 最初は、

分別から生じたこの存在は、その分別の主体である。それ故に、すべての分別を捨てることが最高の涅槃である。 [BPP 221-224]

と言う。事物を真実と把握する分別が無明などの集諦から生じたこの輪廻の世界は、分別の主体を有する苦諦である。それから煩惱が分別から生じ、それらにより縛られ、それらにより設定されたものを超えていないから。その理由のためにすべての分別の因果の二つを完全に捨てるその滅諦が、最高の涅槃になっている。この著書は四諦も説いている。「分別」と言うことで集諦が、「存在は、その分別の主体である」と言うことで苦諦が、第三パーダにより道諦が、第四により滅諦が説かれているから。

3.2.2.3.2.1.1.2.2.3.3.2.1.3.2 第二に、その聖教により論証したものが、

そのようにまた世尊も、

分別は大無明であり、輪廻の海に落とすものである。無分別の三昧にとどまる者は、虚空のように無分別が明らかにする。 [BPP 225-228]

と説かれており、『入無分別陀羅尼』にも、

この正法を勝者の子が分別することなく思えば、越え難い分別を越え、次第に無分別を得るであろう。 [BPP 229-232]

と説かれている。

そのようにまた、世尊が『サンプッタ・タントラ』に、異生の相続の事物を真実と執着するこの真実の執着の分別が、大無明である輪廻の大海に落とす原因の一番のものと説かれているので、それ自身を捨てる必要があり、捨てる在り方も、無我の意味を正しい論理により確定してから、その了義自身を修習する無分別の三昧にとどまり修習する者は修習が究極に至るならば、雲が除かれた秋の空が明らかに顕われるように、無分別の知恵により法性を明らかに直接知覚して見るであろう。それは注釈に、

それ故に、正しいものと正しくないものが大いに修習されるものである。

などと説かれており、論理は一つの要点である。さらに『入無分別陀羅尼』にもお説きになられている。この甚深なる正法を、菩薩である勝者の子が、分別という無明の執着の作意の対治として対立する無分別の知恵を觀想し、修習したならば、相を行じる分別の断じ難く行き難い網を断じてからそれを越えて、次第に法性を直接知覚して理解する特別な無分別を得るであろう。

3.2.2.3.2.1.1.2.2.3.3.2.2 第二に、結びをまとめたものは、

聖教と論理により、一切諸法は生じることがなく、自性の存在しないものであると確定してから、分別することなく修習すべきである。 [BPP 233-236]

と言う。了義の聖教と論理の集まりにより、人と蘊などにより集められた一切諸法は眞実の生や生の自性はないと確定し、虚構を断じてから、相に執着する分別を彷徨うことなく深い意味を一点に修習すべきである。

3.2.2.3.2.1.2 第二に、結果の法を解説したものが、

そのように眞実性を修習してから、次第により煖などを得てから、歡喜地などを得るようになり、仏の菩提は遠くはない。 [BPP 237-240]

と言う。そのように帰依してから把握される小中の人の道を知恵で浄化してから、その願と入の発心を広大な方便により尽くす門から止觀により眞実を修習したならば、小中大の資糧道を行き、加行道の煖と頂などを得てから、第一歡喜地と第二離垢地などを得て、それから仏の菩提を遠からず速やかに得るであろう。

3.2.2.3.2.2 第二に、マントラに入る在り方の方向だけを説いたものに三つ。マントラに入る必要性を説いたものと、上の二灌頂をなすのに適切な特殊性と、その二灌頂を得ていない場合にタントラを聞いたり解説されたりすることの是非の特殊性とである。

3.2.2.3.2.2.1 最初に三つ。所依の人を求めることの必要性と、それを熟する灌頂と、灌頂の偉大さが説かれている。

3.2.2.3.2.2.1.1 最初は、

マントラ力から成立した息災と増益などにより、賢瓶の成就などの八大成就などの力によっても安樂に菩提の資糧を完成しようとすることを望み、所作と行などのタントラに説かれているマントラの行を望むのならば、 [BPP 241-248]

と言う。尊者がツァンに来られた時に、クとゴクなどの六人が五つの問いをなしたもの

のマントラの三つの問いの答えで、もし秘密のマントラの道に入ろうとするならば、そこでマントラを読誦する力から成立するであろう息災と増益と敬愛と降伏の事業と、九欲が生じる賢瓶の成就などの八大成就などの力によっても安楽で速やかな道により大菩提の資糧を完成して、利他を成就させようと望む者は、所作タントラと行タントラなどの四部タントラに説かれている秘密のマントラを行じ、成就させようと望む所依をともなう者が必要である。

3.2.2.3.2.2.1.2 第二に、

その時に阿闍梨が灌頂のために、尊敬と宝などの布施とお言葉の成就などのすべてにより、正しい師を喜ばせるべきである。

師を喜ばせるようになったことで完全なる阿闍梨の灌頂により [BPP 249-254]

と言う。マントラに入ることを望む時に、師の相をもつ金剛阿闍梨の灌頂などを得るために、身と口による供養と、宝と着衣と飲食などの布施とすべての器物により供養し、説かれたお言葉の成就などの一切の所作により本当の師を喜ばせ、師が喜んだことにより弟子が師に灌頂を求めてから、軌範師が究極の所依をもつことを完成する瓶灌頂と金剛阿闍梨の灌頂により秘密の適切な器を成立させるべきである。これにより他の三つの灌頂も述べられている。

3.2.2.3.2.2.1.3 第三に、灌頂の偉大さや利益は、

すべての罪を浄化した主体そのものは、成就を完成する福分をもつようになる。 [BPP 255-256]

と言う。灌頂には目的がある。三門の罪過という一切の障害を浄化し、自身が小中大の三つの成就のいずれかを成立させる福分をもつことになるからである。

3.2.2.3.2.2.2 第二に、上の二つの灌頂の主体である灌頂をどのような人がなすことが適切で、誰が適切ではないかが、

『従本初出現タントラ』に、努力により禁じられているので、秘密と智慧の灌頂を梵行者は受けるべきではない。

もし灌頂を受けるならば、梵行の勤苦にとどまる者が禁じられたことを行うことになるので、その勤苦と律儀を損なっている。

その禁戒をもつ者を制圧する波羅夷が生じるであろうし、彼は悪趣に確実に落ちるので、成就もありえない。 [BPP 257-268]

と言う。何れかの人の上の二つの灌頂の主体である灌頂を受けるべきではない。梵行に住する者たちが秘密と智慧の二つの灌頂を明妃に依存してから領受することは適切ではないから。その在り方は、『初仏時輪根本大タントラ』と注釈から努めて禁じているからである。否定の目的は、もし梵行に住する者が印契に依ってからその二つの灌頂を受け、保持するならば、梵行という苦に耐えているその人は、梵行というその苦に耐えるその律儀を損なっている。その戒の禁行をもつ彼には、波羅夷の根本罪が生じるであろうし、その人は悪趣に確実に落ちるので、成就を得ることは決してない。理由は、彼は仏が厳しく否定したことを行うことになるから。それでも相続を熟する特別な人は、例外である。

3.2.2.3.2.2.3 第三に、上の二つの灌頂を得ていない場合に、どのようになすべきかが、

すべてのタントラを聞き、読み、解説し、護摩と供施などをなした者は阿闍梨の灌頂を得るようになり、真実を理解した者に過失はない。[BPP 269-272]

と言われる。もし梵行者がその二つの灌頂を実際に受けることに適していないのならば、マントラの行の福分がないことになる、と考えるのならば、過失はない。阿闍梨の灌頂を完全に証得した人は得るであろうし、十の真実を知る人には、所作タントラなどの一切のタントラを弟子が聞くことと、阿闍梨による説明と、両者による護摩と供施などの善住と、灌頂などをなすことに罪過はないから。

[3.3 第三に、いかなる原因によってから著したのかは、

長老ディーパンカラシュリージュニャーナが経典などの法から解説したのを見ることで、チャンチュップ・ウーが請願して、菩提への道の解説がまとめられた。[BPP 273-276]

と言う。清浄なる比丘律儀をもつ長老ディーパンカラが経典などとマントラと論書と教誡の諸法から解説したのを見たので考察によりチベットの大徳で比丘のチャンチュップ・ウーが「説法のためにはこのようなものが需要である」と請願するものに依ってから、聖教と論理の広大な戯論を投げ捨ててから菩提に行く道の広大な解説も言葉にまとめられている。

4 第四に、結びの意味に二つ。誰が著したのかと、誰が翻訳したのかである。

4.1 最初に、『菩提道灯論』は五百人の頭上の宝珠である偉大な賢者である軌範師シュリーディーパンカラシュリージュニャーナが無数の有縁の所化のために大悲により著したものを完成する。

4.2 第二に、インドの賢者ディーパンカラシュリージュニャーナと、チベットの世間

の眼である翻訳官の比丘ゲウエ・ロドゥがインドの言葉からチベットの言葉に翻訳し、語義の校閲をなしてから説明を聞いたものを完成した。

この『菩提道灯論』は、チベットのカダム派の一切の教義の原典のようなものであり、この仕事から広げた者の最初がドム・リンポチェで、彼からポトワとシャラワなどのカダム派の古師たちと、後のジェ・リンポチェによる『チャンチュップ・ラムリム・チェンモ』も、これを基盤にしてから著されたもので、カダム新派の説法の規則を開いており、次のように、

偉大な二つの乗り物からよく相続した甚深で広大な見解を行じる道を誤らずに完全な要点をまとめた教えの著書を保持するディーパンカラがおられる。

と説かれているものもこのテキストを最高のものと意図している。
言う。

雪山のチベットに多くの学者が来ても、カダム派の教えの最初の最高の開祖であるディーパンカラシュリージュニャーナとその弟子のドムトゥンには比較できず、他に突出したものが誰がしようか。

尊者が著した経とタントラの多くのテキストも述べられるべき道次第の要点を完全にしており、すべてのものより特に勝れている『菩提道灯論』はムニの教えを明らかにする第二の太陽である。

この最高の著書の意図する意味を注釈するために三門の努力から得られる白いものを喜び、すべての衆生を偉大な尊者による善友となしてから菩提を速やかに得るように。

と『菩提道灯論』の注釈をまとめた本書も、シャーキヤの大徳であるタクパ・シェードウツプと言う者が尊者父子への供養のために信仰のみからチョネの寺院において行った。印刷の文字は、昔の文字と天文暦と修辞学などについて智慧を浄化する十難 [論]の学者が自在になしたものである。

吉祥なれ。

結論

Dīpaṃkaraśrījñāna の著作について、小部文献、注釈文献、アンソロジー、密教文献に分類し、考察してきた。これらのことから、明確になったことをまとめてみる。

まず、Dīpaṃkaraśrījñāna の思想背景については、自らは Nāgārjuna の中観思想を受け継ぐ中観論者であるという認識がある。その中観思想の理解については、彼の中観の師である Bodhibhadra に大きな影響を受けていることが明らかになった。また、その Bodhibhadra の中観思想も含めた彼らの中観理解は、後のチベットの宗義書で論じられるような自立論証派や帰謬派という教義で分類できるものではなく、瑜伽行の実践の上に空性を体得するというものであり、密教の教義も受容した上で成り立つものである。

次に、小部文献に収録された文献についてまとめる。彼の主著でもある『菩提道灯論』は、自注とされる『菩提道灯論細疏』との間に、差異を見ることができる。その翻訳者が異なることは、著述時期も異なることを示している。また、根本偈には、偈ではない句が含まれていることや、自注の注釈内容と異なる句が見られること、後のチベットで著された注釈書と偈の順番が異なることなどを考えると、テンギェル所収の『菩提道灯論』は訂正が加えられた後のものである可能性もある。

『入二諦論』は、彼の中観思想理解の典拠とされる文献である。チベットにおける後代の学者は、ここで言及される Candrakīrti 観に基づいて彼の中観理解を解釈している。しかしながら、それは二義的勝義を説いていない、ということだけに基づいた議論である。同論では、Candrakīrti と並んで Bhavya にも言及するが、彼の二諦解釈を批判することはない。それ故に、二義的勝義を説かないからといって、それが Bhavya の解釈を選択せずに Candrakīrti の説を選択した、というのは議論を発展させすぎている。その理由は明らかではないが、本論においては勝義諦の解釈に関する議論は行われなかった、というだけである。また、たとえ Candrakīrti の勝義諦理解を選択していたとしても、それは本論に限定的されたものであり、彼の中観思想理解には、彼が翻訳した Bavya の『中観宝灯論』なども考察した上で、総合的に解釈するべきである。

『中観説示』には、『開宝篋』という大部の著作もあるが、両者の関係は明確ではない。前者で示される中観とは、一切法無自性の認識であり、それを禅定により把握することであるのに対し、後者では菩提心と Nāgārjuna についての説示に重点が置かれ、相互に異なる視点から中観思想が論じられている。

二つの『心髄撰集』については、長い方の『心髄撰集』に「『心髄集』を解説する」という記述があることから、短いものが先に著された可能性がある。また、そのチベット語訳テキストに付されたサンスクリットのタイトルの相違は、両者が異なる時期に著

されただけでなく、そのタイトルが著述後の異なる時期に付されたことを示している。

『無垢宝書翰』は、Neyapāla 王に宛てた書翰とされており、伝記資料もそのことを伝えている。しかしながら、明確に両者の直接の関係を示すものは他にはない。『菩薩摩尼鬘論』は、『無垢宝書翰』との多くの平行句を見ることができることから、同論の句を再編集して著された可能性がある。さらに、『菩薩行略教訓』にも他の文献との平行句を見ることができることから、『菩薩行略教訓』は既存の著書の句を断片的に再編集して著された可能性がある。

三種の歌文献については、『輪廻出離意歌』は、インドのヴィクラマシーラ僧院に滞在している時期に著された著作である。『行歌』は、秘密部所収の『金剛座金剛歌』と対になる文献であり、真言乗の文献が顕教文献として小部集に再録されたものである。『法界見歌』は、前半では Nāgārjuna の『法界讚』に基づいた法界の解説を、後半では外道と仏教の諸派の見解を偈頌にまとめたものである。

『一念説示』は、方便と智慧の所作をまとめた小論であり、引用文献などから『中観説示開宝篋論』と同時期に著された可能性がある。また、Advayavajra に帰される『悪見除滅論』が Nāgārjuna の著書として引用されている。

『入菩薩初学道説示』は、Dīpaṃkaraśrījñāna による初学者文献である。本論では、彼の『行集灯論』が言及され、その内容も重複する点が多いことから、後者に基づいて本論は著作されたものと言える。

『帰依説示』は、帰依を十五義にまとめた小論である。その解説では、小乗の典拠として『俱舍論』に、大乘の典拠として Candrakīrti の『帰依七十論』に依拠している。また、Dīpaṃkaraśrījñāna は『菩提道灯論細疏』において、この十五義に言及することから、『帰依説示』は『菩提道灯論細疏』より先行して著されたものと考えられる。

『大乘道成就語句撰集』と『大乘道成就撰集』は、二つの『心髓撰集』と同じように、同じ内容を説く大小の著書であるが、その訳語の相違から同一訳者により異なる時期に著述・翻訳された可能性がある。また、Tsong kha pa の『ラムリム・チェンモ』に多くの引用が見られる。

『自作次第勸誡語句撰集』と『上師所作次第』の二つの所作文献について、前者は菩薩行を志す者に対してなすべきことを促すために著されたものであり、後者は師となるべき者に対してあるべき態度を示したものである。このことは、彼の著作には、特定の対象者に向けて著されたものがあることを示している。

『経義撰集』は、さまざまな経典に説かれている内容を五十義の譬喩で説明した小論である。ただし、特定の経典への言及はごく僅かであり、経典の内容の紹介ではなく、さまざまな経典に説かれている教義から五十義を選び出したものである。

『十不善業道説示』は、**Aśvaghōṣa** の同名タイトルのももの異訳である。その原因は明らかではないが、後述の『根本過犯』と『誓願七十論』を含め、**Dīpaṃkaraśrījñāna** の周辺には **Aśvaghōṣa** に帰される小部文献の伝承に問題があることを示している。

『業分別論』は、基本的に『俱舎論』に基づいて五趣や十不善業道の解説が行われている。ただし、**Dīpaṃkaraśrījñāna** にとって同論は小乗の文献であるために、大乘の文献も引用するが、そこには真言乗の文献も含まれている。また、十不善業道については、『十不善業道説示』と同じく、『正法念処経』に典拠を示している。

『三昧資糧論』は、三昧の資糧となるものを極めて簡略にまとめた小論である。**Dīpaṃkaraśrījñāna** は、師である **Bodhibhadra** の『三昧資糧論』を多くの著書で引用しており、彼自身が同名タイトルの著書を著す意図は明らかではない。師が著した内容を短い偈頌の形で再現したものと考えられる。

Dīpaṃkaraśrījñāna には、『超世間七支儀軌』、『読誦読経前行儀軌』、『波羅蜜乘甄仏造作儀軌』、『一切業障摧破儀軌』という儀軌文献がある。これらの文献から、彼は、チベットに仏教の教義だけではなく、インドの僧院において行われていたさまざまな儀軌も伝えていたことがわかる。

『発心律儀儀軌次第』も、発心と律儀の二つの儀軌文がまとめたものである。これらの儀軌は、師である **Bodhibhadra** の『菩提律儀儀軌』に基づいて著されている。また、本論のチベット語訳は改訂がなされているので、段階的に成立したものである。

『種姓誓願』は、来世も仏教徒に生まれることを誓願する文書である。今生での菩提を目指すことを説いていないために、出家修行者を対象として著されたものではない。それ故に、**Dīpaṃkaraśrījñāna** が在家信者の誓願文として著したものが伝承され、テンギェルに収録されたのであろう。

Dīpaṃkaraśrījñāna が注釈書を著した文献は、**Maitreya** の『現観莊嚴論』と『般若心経』、**Nāgārjuna** に帰される『経集』、『三蘊経』の懺悔儀軌、**Śāntideva** の『入菩提行論』となる。

『現観莊嚴論』の概説書は、同論の撰義を偈頌でまとめたものであり、その著述スタイルは『現観莊嚴論』をまねたものであろう。そのために、先行する『現観莊嚴論』に対する注釈書の著者たちの解釈の相違についても言及しているが、詳細までを論じることはない。これらの先行する論師でも、自らの師である **Ratnākaraśānti** よりも、**Haribhadra** の注釈書への言及が最も多い。このことは、彼が **Haribhadra** による『八千頌般若経』の注釈書のチベット語訳の改訂を行っていることから裏付けられる。

『般若心経』の注釈書は、先行する注釈書を参考した上で著されたものである。全体の構成は、**Vimalamitra** の注釈書に基づいて、全体を八義に分け、**Dignāga** の八義を非

難した上で、経文を解説したものである。そこには、五道の修道論による解説を行っており、名前の言及こそないものの、Kamalaśīla による同経の注釈書も参照していた可能性がある。

『経集撰義』は、『経集』の十一章を七義により解説したものである。アンソロジー文献であるために、著者の意図はアンソロジーの構成に示されている。それ故に、Dīpaṃkaraśrījñāna は、引用される経典の語句説明を行うのではなく、テキストの構造解釈を行うことで、『経集』の解説を行っている。

『三蘊経』の解説書は、『優波離所問経』にも見られる懺悔儀軌に対するであるが、Nāgārjuna と Jitāri の解説書と同じように、経典の注釈というよりも、菩提過犯懺悔の文句に対する解説書として著されたものである。Dīpaṃkaraśrījñāna は、『発心律儀儀軌次第』においても、この二人による発心と律儀の儀軌書に依拠しており、本論も、それらの先行文献に依拠して著されたものと思われる。

『入菩提行論』に対する解説書は、瑜伽行派において説かれる修道論と『十地経』に説かれる十地の修行階梯に基づいて著わされた概説書である。その骨格は、十地に基づいて『入菩提行論』の各章を配置するものであり、同論に対する語句解説はほとんどない。また、彼の師である gSer gling pa による同論の概説書に説かれる三十六義にも言及しており、同論に基づいて著述されたものでもある。ただし、テンギユルの中観部に『入菩提行論』の他の注釈書と並んで収録されてはならず、雑部に収録されており、しかもデルゲ版とチョネ版では欠けている。そのテキスト自体も前半と後半に重複があり、訳語にも彼の他のテキストには見られない音写語もあり、その著者性を含めた伝承の問題を含む注釈書である。

『十万頌般若撰義』は、Dīpaṃkaraśrījñāna ではなく、Atiśa に帰される小部文献であり、その内容は、『十万頌般若経』の解説書ではなく、同経を読誦用に再編集した文献である。本論は、テンギユルには収録されていない蔵外文献であり、テキストも、諸版による相違が見られ、その著者性には検討の余地がある。ただし、Dīpaṃkaraśrījñāna の他のテキストには般若経典の中でも『十万頌般若経』への言及を見ることができ、両者を結びつける根拠はないことはない。ただし、チベットに伝承された読誦用の文献が後代になって彼が所持していたものとされた可能性も排除できない。

チベットにおいて本論を彼の著書とする伝承があったことは事実なので、そこには何らかの根拠、あるいは意図があったことがわかる。

Dīpaṃkaraśrījñāna のアンソロジーである『大経集』は、先行する Nāgārjuna の『経集』と Śāntideva の『集菩薩学論』を意識して編纂されている。彼は、前者に対する解説書を著しており、『菩提道灯論細疏』では引用経典など後者に依拠して著されている。

それ故に、彼が意図したことはこれらのアンソロジーとの差別化であり、ヴァリエティに富む項目で全体が構成されているものの、全体の構成に統一感が見られない。

本研究では、彼の真言乗文献から、秘密集会文献、ターラー成就法、『金剛座金剛歌』、『根本過犯』の注釈書を取り上げた。最初の秘密集会関連の文献は、後代の伝承に伝えられているように、『秘密集会タントラ』の主尊を観世自在とした現観と、マントラを観世自在のものに変えたものと、そのマンダラの礼讃を説いたものであり、後代の伝記資料と一致する。

『金剛座金剛歌』は、Dīpaṃkaraśrījñāna 自身による注釈書もあり、『行歌』とその注釈書と対になる著書である。『行歌』は小部集に収録されているが、本論からも、両論が真言乗の立場で著された文献である。

『根本過犯注』では、テンギェルにおいて Aśvagoṣa とされる『根本過犯』の著者を Bhavideva としている。Dīpaṃkaraśrījñāna の師である Advayavajra の著作集にも同タイトルの論書があり、後期インド仏教において『根本過犯』の著者に混乱があったことがわかる。Aśvagoṣa については、前述の『十不善業道説示』における問題もあり、彼に帰される密教文献の研究においても重要なる。

チベット仏教に与えた影響については、sGam po pa、Tsong kha pa、Bu ston を中心に考察を行った。sGam po pa の『ラムリム・タルゲン』については、『菩提道灯論』の引用を多く見ることができるものの、その他のカダム派宗典からの引用も多く見ることができる。また、全体の構成も Nāgārjuna の『経集』や Śāntideva の『集菩薩学論』と重なる点も見られ、『菩提道灯論』に基づいて本論が著された、というまでは言えない。

Tsong kha pa の『ラムリム・チェンモ』は、冒頭に Dīpaṃkaraśrījñāna の偉大性を論じていることから、『菩提道灯論』に大きな影響を受けて著されたことは明らかである。彼のその他の著書として『大乘道成就語句撰集』からの引用も多く見られる。全体の構成が『菩提道灯論』に類似しているが、多くの言及は前半の菩提心に関する文脈においてであり、後半の観のセクションでは Dīpaṃkaraśrījñāna への言及は減っている。それ故に、『菩提道灯論』に基づいてラムリム思想が展開されているが、観の文脈においては、Dīpaṃkaraśrījñāna の著書よりも他の中観論者の文献に依拠して中観思想の本質である無自性が論じられている。

Bu ston の『法行楽道』は、後期インド仏教において多く著された ādhikarmika 文献と同様の著書である。Dīpaṃkaraśrījñāna にも、同種の文献として『入菩薩初学道説示』があり、内容の重なりはあるものの、直接的影響はあまり見られなかった。

『菩提道灯論』に対する注釈書については、十八の注釈書を確認することができた。この数からも、同論はチベット仏教における重要な文献の一つであったことがわかる。

Co ne による注釈書から、Blo bzang chos kyi rgyal mtshan が後代の注釈書与えたに影響が明らかになった。特に、これらの注釈書では『菩提道灯論』の根本偈の順序を入れ替えて読んでいるところもあり、テンギユル所収の『菩提道灯論』の読み方が一定ではないことが明らかになった。

これらのテキスト分析から明らかになった彼の著作の思想的特徴としては、彼の著作は中観思想を論じるものばかりではない、ということである。これらの著作の背景には、チベットに正しい仏教を伝える、というものがあつたからであろうが、数々の儀軌に関する著述や菩薩としての修行の心得を説くものが大半である。その菩薩行についても、出家修行者のみではなく、さまざまな対象に説かれていることが明らかになった。これらの著作は、中観思想の立場から菩薩行を説くために著されたものが多く、それが彼の思想的特徴となる。これは、先行する Śāntideva のものに近く、このことは彼の著者における Śāntideva への依拠からも論証される。

最後に、彼の小部文献はどのように著されたのであろうか。自らが著述と翻訳を行っていることから、それが同時になされた、と推測することができる。その場合、インドの言葉で筆記されたものに基づいて翻訳されたと考えるよりも、口述されたものがチベット人翻訳官とともにチベット語に翻訳されていったのではないだろうか。確たる証拠は何もないので、憶測でしかないのだが、小部文献をまとめて読むと、そのような印象が得られるのである。

附編 チベット語訳校訂テキスト

1 *Bodhipathapradīpa*

#¹ // rgya gar skad du / *Bo dhi pa² tha³ pra dī paṃ* /

bod skad du / *Byang chub lam gyi sgron ma* /⁴

byang chub sems dpa' (G2. 2a) 'jam dpal gzhon nur gyur pa la phyag 'tshal lo //

dus gsum rgyal ba thams cad dag dang de'i chos dang //⁵ 1

dge 'dun rnams la gus pa chen pos phyag byas te //

(P2. 2a) slob ma bzang po Byang chub 'od kyis bskul gyur pas //

Byang chub lam gyi sgron ma rab tu gsal bar bya //

chung ngu (D1. 238b) 'brin dang mchog gyur pas // 5

skyes bu gsum du⁶ shes par bya //

de dag mtshan nyid (G2. 2b, N2. 2a) rab gsal ba //

so so'i (C. 242b) dbye ba⁷ bri bar bya //

gang zhig⁸ thabs ni gang dag gis //

'khor ba'i bde ba tsam dag la // 10

rang nyid don du gnyer byed pa //⁹

de ni skyes bu tha mar shes //

srid pa'i bde la rgyab phyogs shing //

sdig pa'i las las ldog bdag nyid //

gang zhig rang zhi¹⁰ tsam don gnyer // 15

skyes bu de ni 'bring zhes bya //

rang rgyud gtogs pa'i sdug bsngal gyis //¹¹

(P2. 2b) gang zhig gzhan gyi sdug bsngal kun //

yang dag zad par kun nas 'dod //

skyes bu de ni mchog yin no // 20

sems can dam pa byang chub mchog //

'dod par (N2. 2b) gyur pa de dag la¹² //

bla ma (D2. 2a) rnams kyis bstan pa yi //

yang dag thabs ni bshad par bya //

1 G1N2P1 *byang chub lam sgron jo bo rjes mdzad pa* (P1 ad. *bzhugs so*) // #.

2 CD1G2N2P2 *pā*. 3 G1P1 *thā*, D2 *thaṃ*. 4 N1 // . 5 G2 / . 6 G1 *tu*. 7 D2 *bas*.

8 G2N2P2 *gi*. 9 N1 / . 10 G2N2P2 *don*. 11 N1 / . 12 G1 *kyang*.

rdzogs sangs bris¹ sku la sogs dang // 25
 mchod rten dam pa mngon phyogs (G2. 3a) nas² //
 me tog bdug spos dngos po dag //
 ci 'byor pa yi³ mchod pa⁴ bya //
Kun bzang⁵ spyod las gsungs pa yi //
 mchod pa rnam pa bdun dag kyang // 30
 byang chub snying (G1. 378a) po'i mthar thug par //
 mi ldog pa yi sems dag gi //
 dkon mchog gsum la rab dang cing //
 pus mo'i lha nga sar btsugs nas //
 thal mo (P1. 275a) sbyar ba byas (N1. 271a) nas ni // 35
 dang por skyabs 'gro lan gsum bya //
 de nas sems can thams cad la //⁶
 byams⁷ pa'i sems⁸ ni sngon 'gro bas //
 nyon song gsum du⁹ skye sogs dang //
 'chi 'pho sogs kyis sdug bsngal ba'i // 40
 'gro ba ma lus la bltas te //
 sdug bsngal (N2. 3a) gyis ni sdug bsngal ba //
 sdug bsngal sdug bsngal rgyu mtshan las //
 'gro ba thar par 'dod pa yis //
 ldog pa med par dam 'cha' ba'i¹⁰ // 45
 byang chub sems ni bskyed par bya¹¹ //
 de ltar smon pa'i sems dag ni //
 bskyed pa'i yon tan dang yin pa //
 de ni *sDong po bko pa yi //*
 mdo las Byams pas rab tu bshad //50
 de yi¹² mdo klog pa 'am bla ma la mnyan te //
 rdzogs pa'i byang (D2. 2b) chub sems kyi¹³ yon tan mtha' med pa //
 rnam par shes par byas la de gnas¹⁴ rgyu mtshan du //
 de ltar yang dang yang du sems ni bskyed par bya //

1 G2 *bris na*. 2 G2 *phyogs nas*. 3 D2G2N2 *vis*. 4 D2G2N2 *par*. 5 G1N1P1 *bzangs*.
 6 N1 /. 7 G2 *byams*. 8 G2 *sems*. 9 D2G2N2P2 *dang*. 10 D2 *bcas pa'i*. 11 P1 *bya'o*.
 12 D2G2N2P2 *vis*. 13 G1N1P1 *kyis*. 14 CG1N1P1 *nas*.

*dPa*¹ *sbyin gyis zhus mdo dag las // 55*
'di yi bsod nams rab bstan pa //
 (D1. 239a) *gang de tshigs*² *bcad gsum (C. 243a) tsam du //*
mdor bsodus 'dir ni bri bar bya //
byang chub sems kyi bsod nams gang //
 de la gal (N1. 3b) (P2. 3a) *te gzugs mchis na*³ // 60
*nam mkha'i*⁴ *kham ni (G2. 3b) kun gang ste //*
de ni de bas lhag par 'gyur //
*ganggā'i*⁵ *bye ma*⁶ *grangs snyed kyi //*
sangs rgyas zhing rnams mi gang gis //
 (G1. 378b) *rin chen dag gis kun bkang ste // 65*
'jig rten mgon la phul ba bas //
*gang gis thal mo sbyar bgyis te*⁷ //
byang chub tu ni sems btud na //
*mchod pa 'di*⁸ *ni khyad par 'phags //*
*de la mtha' ni ma mchis so*⁹ // 70
byang chub smon pa'i sems dag bskyed nas ni /
*'bad pa mang pos kun tu*¹⁰ *spel bya zhing //*
*'di ni skye ba gzhan du 'ang dran*¹¹ *don du //*
*ji skad bshad pa'i bslab pa 'ang yongs su*¹² *bsrung //*
'jug sems bdag nyid sdom pa ma gtogs par // 75
yang dag smon pa 'phel bar (P1. 375b) 'gyur ma yin //
rdzogs pa'i byang chub smon pa 'phel 'dod pas //
 (N1. 371b) *de phyir 'bad pas 'di ni nges par blang //*
*so sor thar pa ris*¹³ *bdun gyi //*
*rtag tu sdom gzhan ldan pa dag*¹⁴ // 80
byang chub sems dpa'i sdom pa yi //
skal pa yod pa kyi gzhan du min //

1 D2G2N2P2 *dpas*. 2 G2N2 *tshig*. 3 G1N1P1 *nas*. 4 G2N *namkha'i*. 5 G1N1P1 *gang gā'i*.
 6 D1 *ba*, N2 *ma'i*. 7 G1P2 *bgyi ste*. 8 G2 *de*. 9 N *mchiso*. 10 CD *du*. 11 G1 *'dra*.
 12 N1 *yongsu*. 13 D1G1N1P1 *rigs*. 14 CD1G1N1P1 *dang*.

so sor thar pa ris¹ bdun du² //
 de bzhin gshegs pas bshad pa la //
 tshangs spyod dpal ni mchog yin te // 85
 dge slong sdom pa dag tu bzhed //
 byang chub sems dpa'i sa dag gi³ //⁴
*Tshul khrims le 'ur*⁵ gsungs cho ga yis⁶ //
 yang dag msthan nyid ldan pa yi //
 bla ma bzang las sdom pa (N2. 4a) blang⁷ // 90
 sdom pa'i cho ga la mkhas dang //
 bdag nyid gang zhig sdom la gnas //
 sdom pa 'bogs bzod snying rjer ldan //
 bla ma bzang por shes par bya //
 de la 'bad pas⁸ 'di 'dra ba'i // 95
 gal te bla ma ma rnyed na //
 de las gzhan⁹ sdom nod pa yi //
 cho ga yang dag bshad par bya //
 de¹⁰ la sngon tshe 'jam pa'i dpal //
 am (G1. 379a) ba¹¹ rā¹² dzar (G2. 4a) gyur pa yis // 100
 ji (P2. 3b) ltar byang chub thugs bskyed pa //
'Jam dpal gyi ni (D2. 3a) *sangs rgyas zhig* //
rgyan gyi mdo las bshad pa ltar //
 de bzhin 'dir ni rab gsal bri //
 mgon (C. 243b) po rnams kyi spyang snga ru // 105
 rdzogs pa'i byang chub sems bskyed cing //
 'gro ba thams cad mgon¹³ du gnyer //
 de (D1. 239b) dag 'khor ba las bsgral lo //
 gnod sems khro ba'i sems nyid dang //
 ser sna dang ni phrag dog nyid //110
 deng nas bzung nas byang chub mchog //
 thob kyi bar du mi bya 'o //

1 G1N1P1 rigs. 2 CD1G1P1 dang. 3 G2N2P2 gis. 4 P1 /. 5 CD1 legs. 6 D2 ga'i.
 7 G2N2P2 blangs. 8 D2 la. 9 P2 la gnas. 10 P2 di. 11 CD a ba, G1 P1 am ba.
 12 G1N1P1 ra. 13 N2P2 'gron.

tshangs par spyod pa spyad bya zhing //
 sdig dang 'dod pa spang bar bya //
 tshul khirms sdom pa la dga' bas // 115
 sangs rgyas rjes su¹ bslab par bya //
 bdag nyid myur ba'i tshul gyis ni //
 byang chub thob par mi spro zhing //
 sems can gcig gi rgyu yis ni //
 phyi (N2. 4b) ma'i mu mthar gnas par bgyi // 120
 tshad med bsam gyis mi khyab pa'i //
 zhing dag (P1. 276a) rnam par sbyang² bar bya //
 ming nas gzung³ ba bya ba dang //
 phyogs bcu dag tu rnam par gnas //
 bdag gis⁴ lus dang ngag gi las // 125
 thams cad du ni dag par byas⁵ //
 yid (N1. 272a) kyi las kyang dag bya ste //
 mi dge'i las rnams mi bya 'o //
 rang gi lus ngag sems ni rnam dag rgyu //
 'jug pa'i sems kyi bdag nyid sdom gnas pa⁶ // 130
 tshul khirms bslab pa gsum la legs bslabs pas //
 tshul khirms bslab pa gsum la gus cher 'gyur //
 de bas rnam dag rdzogs byang chub //
 sems dpa'i sdom pa'i⁷ sdom dag ni //
 (G1. 379b) 'bad par⁸ byas pas rdzogs byang chub // 135
 tshogs ni yongs su⁹ rdzogs par 'gyur //
 bsod nams ye shes rang bzhin gyi¹⁰ //
 tshogs ni yongs su¹¹ (G2. 4b) rdzogs pa yi¹² //
 rgyu ni sangs rgyas thams cad dag //
 mngon shes skyes¹³ pa nyid du bzhed¹⁴ // 140
 ji ltar 'dab gshog ma skyes pa'i //
 bya¹⁵ ni mkha¹⁶ la 'phur¹⁷ (P2. 4a) mi nus //

1 G1N1 rjesu. 2 N1 spyad. 3 G2N2P2 bzung. 4 G2P1 gi. 5 D2G2N2P2 bya.
 6 D2G2N2P2 pas. 7 D2 byang chub sems dpa'i. 8 G2N2 pas. 9 N yongsu. 10 G2N2P2 gyis.
 11 N yongsu. 12 P2 yis. 13 G2N2P2D2 bskyed, C skyed. 14 P2 bzhin. 15 G1N1P1 byas.
 16 G1 nam mkha'. 17 P1 bur.

de bzhin mngon shes stobs bral bas //
 sems can don byed nus pa min¹ //
 mngon shes ldan pa'i nyin mtshan gyi² // 145
 bsod nams dag ni gang yin te³ //
 mngon shes dag dang bral gyur la //
 skye ba brgyar yang yod ma yin //
 myur du rdzogs pa'i byang chub tshogs //
 yongs su⁴ rdzogs par 'dod gyur pa // 150
 des ni⁵ 'bad byas⁶ mngon shes dag //
 'grub par 'gyur gyi le los min //
 zhi gnas grub pa ma yin (D2. 3b) pas //
 mngon shes 'byung (C. 244a) bar mi 'gyur bas //
 de phyir zhi gnas bsgrub pa'i phyir // 155
 yang dang yang du 'bad par bya //
 zhi gnas yan lag rnam nyams pas //
 rab tu 'bad de bsgoms⁷ byas kyang //
 lo ni (D1. 240a) stong phrag dag gis kyang //
 ting 'dzin 'grub par mi 'gyur ro // 160
 de phyir *Ting 'dzin tshogs le'u* las //
 gsungs pa'i yan lag la legs gnas //
 dmigs pa gang rung gcig la yang⁸ //
 yid ni dge la gzhag⁹ par bya //
 rnal 'byor zhi gnas grub gyur na // 165
 (P1. 276b) mngon shes dag kyang 'grub par 'gyur //
 shes rab pha rol phyin sbyor dang //
 bral (G1. 380a) (N1. 272b) bas sgrib pa zad mi 'gyur //
 de phyir (N2. 5a) nyon mongs shes bya yi //
 sgrib pa ma lus spang ba'i phyir // 170
 shes rab pha rol phyin rnal 'byor //
 rtag tu thabs bcas bsgom par bya //

1 D2G2N2P2 *ma yin*. 2 G2P2N2 *gyis*. 3 CD *de*. 4 N *yongsu*. 5 G2 *ni byang*.
 6 G2N2P2 *bya*. 7 D2GNP2 *bsgom*. 8 D2 *cig dag la 'ang*, G1 *cig la ang*, G2N2P2 *cig dag la*.
 9 G2N2P2 *bzhag*.

thabs dang bral ba'i shes rab dang //
 shes rab bral ba'i thabs dag kyang //
 gang phyir 'ching ba zhes gsungs pa¹ // 175
 de phyir gnyis ka spang mi bya //
 shes rab gang dang² thabs gang shes //
 the tshom dag ni spang bya'i phyir //
 (G2. 5a) thabs rnam dang ni shes rab kyi //
 yang dag dbye ba gsal bar bya // 180
 shes rab pha rol³ phyin spangs pa'i //
 sbyin pa'i pha rol phyin la sogs //
 dge ba'i tshogs rnam (P2. 4a) thams cad dag //
 rgyal ba rnam kyis⁴ thabs su⁵ bshad //
 thabs bsgoms⁶ dbang gis bdag nyid kyis⁷ // 185
 gang zhig shes rab rnam bsgom⁸ pa //
 de⁹ ni byang chub myur du thob¹⁰ //
 bdag med gcig pu bsgom¹¹ pas min //
 phung po kham dang skye mched rnam //
 skye ba med par rtogs gyur pa'i // 190
 rang bzhin stong nyid shes pa ni //¹²
 shes rab ces ni yongs su¹³ bshad //
 yod pa skye ba rigs min te //
 med pa 'ang nam mkha'i¹⁴ me tog bzhin //
 nyes pa gnyis kar thal 'gyur phyir // 195
 gnyis ka dag kyang 'byung ba min //
 dngos po rang las mi skye zhing //
 gzhan dang gnyis ka las kyang min //
 rgyu med las min de yi phyir //
 ngo bo nyid kyis¹⁵ rang bzhin med // 200

1 D2 la. 2 G om. 3 N2 rol tu. 4 CD1P1 kyi. 5 N1 thabsu. 6 N1P1 bsgom.
 7 G2N2P2 kyi. 8 D2 bsgoms. 9 G2N2P2 des. 10 P2 'thob. 11 CG2N2P2 bsgoms.
 12 G2 /. 13 N yongsu. 14 GN namkha'. 15 N2P2 kyi.

yang na chos rnam thams cad dag //
 (G1. 380b) gcig dang (C. 244b) du mas rnam dpyad na //
 ngo bo nyid ni mi dmigs¹ pas //
 rang bzhin med pa nyid du nges //
sTong nyid bdun cu'i² rigs (D2. 4a) pa dang // 205
dBu ma rtsa ba sogs las kyang //
 dngos po rnam kyi rang bzhin gyi³ //
 stong pa nyid ni grub bshad pa //
 gang phyir gzhung ni mangs 'gyur bas //
 de phyir 'dir ni ma spangs la // 210
 grub⁴ pa'i grub mtha' (D1. 240b) tsam zhig tu //
 bsgom pa'i phyir ni rab tu bshad //
 de bas (P1. 277a) chos rnam ma lus pa'i //
 rang bzhin dag ni mi dmigs pas //
 bdag (N1. 273a) med pa⁵ ni bsgom⁶ gang yin // 215
 de nyid shes rab bsgom⁷ pa yin //
 shes rab kyis ni chos rnam kun //
 gang zhig⁸ rang bzhin ma mthong zhing //
 shes rab de nyid rigs⁹ (G2. 5b) bshad pa //
 rnam rtog med par de bsgom bya // 220
 rnam rtog las byung srid pa 'di //
 rnam par rtog¹⁰ pa'i bdag nyid de //
 de (N2. 5a) phyir ma lus rtog spangs pa //
 mya (P2. 5a) ngan 'das pa mchog yin no //
 de ltar yang¹¹ bcom ldan 'das¹² kyis¹³ //
 rnam rtog ma rig chen po ste // 225
 'khor ba'i rgya mtshor ltung bar byed //
 rtog¹⁴ med ting¹⁵ 'dzin la gnas pa¹⁶ //
 nam mkha'¹⁷ bzhin du rtog med gsal //¹⁸
 zhes gsungs so // *rNam par mi rtog pa la 'jug pa'i gzungs las kyang* //

1 G1 rigs. 2 G1N1P1 *bcu'i*. 3 D2G2N2P2 *gyis*. 4 D2 *bsgrubs*. 5 N1P1 *par*. 6 D2N2 *sgom*.
 7 D2 *sgom*. 8 DG1N1P1 *gi*. 9 D1GNP *rig*. 10 G1N1 *rtogs*. 11 D2G2N2P2 *yang ni*.
 12 D2G2N2P2 *om*. 13 D2G2N2P2 *gyis*. 14 N1P1 *rtogs*. 15 G1N1P1 *tinge nge*.
 16 G1N1P1 *om*, D2G2P2 *pas*. 17 G2N *namkha'*. 18 G1 *om*, N/.

dam chos 'di la¹ rgyal ba'i sras //
rnam par mi rtog bsams² gyur na // 230
rnam rtog bgrod³ dka' rnams 'das te //
rim gyis mi rtog thob par 'gyur //⁴

zhes gsungs so⁵ //

(G1. 381a) lung⁶ dang rigs pa dag gis ni //
chos rnams thams cad skye med pa'i //
rang bzhin med pa nges byas nas // 235
rnam par rtog med bsgom par bya //
de ltar de nyid bsgom byas nas //
rim gyis drod sogs thob byas nas⁷ //
rab dga' la sogs thob 'gyur te //
sang rgyas byang chub yun mi ring // 240
sngags⁸ mthu nyid las grub pa yi //
zhi dang rgyas sogs las rnams kyis //
bum pa bzang⁹ grub la sogs pa //
grub chen brgyad sogs stobs kyis kyang //
bde ba yis¹⁰ ni byang chub tshogs // 245
yongs su¹¹ rdzogs par 'dod pa dang //
bya ba spyod sogs rgyud gsungs pa'i //
gal te gsang sngags spyod 'dod na //
de tshe (C. 245a) slob dpon dbang bskur phyir //
bsnyen bkur rin chen sogs¹² sbyin dang // 250
dka' sgrub¹³ la sogs thams cad kyis //
bla ma dam pa mnyes par bya //
bla ma mnyes par gyur pa yis //
yongs rdzogs slob dpon dbang bskur bas //
(D2. 4b) sdig (P1. 273b) kun rnam dag bdag nyid ni // 255
dngos (N1. 273b) grub sgrub pa'i skal ldan (G2. 6a) 'gyur //

1 G1 las. 2 G1N1P1 bsam. 3 P1 bgrad. 4 N /, P2 om. 5 N gsungso. 6 G1 lus.
7 D2 na. 8 N2 sngag. 9 G2 bzang pa. 10 D2G2N2P2 yi. 11 G2N yongsu. 12 N1 sod.
13 G1N1 bka' bsgrub.

Dang po sangs rgyas rgyud chen las //
 rab tu 'bad pas bkag pa'i phyir //
 gsang ba (D1. 241a) shes rab dbang bskur ni //
 tshangs par spyod pas blang¹ mi bya // 260
 gal te dbang (P2. 5b) bskur de 'dzin na //
 tshangs spyod dka' thub la gnas pas //
 bkag pa spyad par 'gyur ba'i² phyir //
 dka' thub sdom pa de nyams te //
 brtul zhugs³ can de pham pa yi // 265
 ltung ba dag (G1. 381b) ni 'byung 'gyur zhing //
 de ni ngan song nges lhung bas //
 grub pa⁴ yang ni⁵ yod ma yin //
 rgyud kun nyan dang 'chad pa dang //
 sbyin sreg⁶ mchod sbyin sogs byed pa // 270
 slob dpon dbang bskur rnyed 'gyur zhing⁷ //
 de nyid rig la⁸ nyes pa med //
 gnas brtan mar me (N2. 6a) mdzad dpal gyis⁹ //
 mdo sogs chos las bshad mthong ba //
 Byang chub 'od kyis gsol btab nas // 275
 byang chub lam bshad mdor bsdu byas //

*Byang chub lam gyi sgron ma¹⁰ slob dpon chen po dpal Mar me mdzad ye shes kyis
 mdzad pa rdzogs so¹¹ // //*

*rgya gar gyi mkhan po chen po¹² de nyid dang /¹³ zhu chen gyi¹⁴ lo tsā ba dGe¹⁵ ba'i blo
 gros kyis bsgyur cing¹⁶ gtan la phab pa //¹⁷*

chos 'di ni Zhang zhung gi tho ling gtsug lag khang du mdzad pa'o¹⁸ //¹⁹

1 G1N1P1 blangs. 2 D2N2P2 gyur pa'i. 3 G1N1P1 bzugs. 4 G2N2P2 pa nam. 5 G2N2P2 om.
 6 G1N1P1 bsreg. 7 G2N2P2 gyur cing. 8 G2N2P2 las. 9 G1N1P1 gyi.
 10 G1 ma //, N1 ma /. 11 N rdzogso. 12 D2G2NP2 om. chen po. 13 G1P2 //.
 14 G1 chengyi. 15 G1 dge slong. 16 D1 zhing, G2N2P2 cing zhus te. 17 D2G2N2 /.
 18 D2G2N2P2 do. 19 C // //

2 *Bodhimārgadīpapañjikā*

(G. 382b)¹ # // rgya gar skad du / *Bo dhi mārga*² *dī paṃ pa nydzi*³ *ka nā ma /*

bod skad du / *Byang chub lam gyi sgron ma'i dka' 'grel zhes bya ba /*⁴

'phags ma rje btsun sgrol ma la phyag 'tshal lo //

'jam dpal gzhon nur gyur pa la phyag 'tshal lo //

bde mchog 'khor lo dam tshig gsum rgyal po //

'jig rten dbang phyug sgrol ma phyag 'tshal 'dud //

Byams pa Thogs med bla ma gSer gling pa //

'Jam (C. 245b) dbyangs Zhi ba'i lha dang Byang chub bzang //

bla ma rnams la dang bas⁵ phyag byas (N. 274a) nas //

nyi zer lta bu'i dka' 'grel bri bar bya //

byang chub snying por bgrod pa'i lam bzang po //

(P. 278a) zla zer lta bu'i lam sgron 'di yin te //

'di na cung zad mi gsal gang yin pa //

nyi zer lta bu'i 'grel pas lam gsal bya //

bstan bcos rtsom pa'i tshad dang mi ldan yang //

'dun cing gus pa'i slob mas bskul ba dang //

sangs rgyas bstan pa rab tu 'phel bya dang //

gzhung rnams mi mthun⁶ rtsod pa zhi bya'i phyir //

nyi zer lta bu'i 'grel pa bri bar bya //

mkhas rnams ngo mtshar (D. 241b) bskyed pa dang //

mnyam rnams go bar sla ba dang //

dman rnams bag chags gzhag⁷ pa'i phyir //

dka' 'grel⁸ 'di ni bri bar bya //

gzhung nyung ba la don mang ba'i //

bstan bcos 'di ni rtogs par dka' //

dam pa rnams dang bral bas na //

thams cad du ni rnam par 'khor //

1 GN *byang chub lam sgron rang 'grel jo bo rjes mdzad pa bzhugs* // (G. 382b)

2 GNP *marga*. 3 CD *panytsi*. 4 G //.

5 N *dad pas*.

6 G *mithun*.

7 GNP *bzhag*.

8 GN *'brel*.

de bas skyes bu blo ldan pas //
bla ma yongs su¹ mnyes byas la //
(G. 383a) bla ma brgyud rim las 'ongs pa'i //
yang dag man ngag zhu bar bya //

'dir bla ma dam pa gSer gling pa dang bla ma dam pa rje btsun dpal Byang chub bzang po'i zhal rin po che bum pa lta bu nas / bdud rtsi lta bu dang /² sbrang rtsi lta bu'i man ngag gi thig³ pa rgyal rigs kyi slob ma Byang chub 'od dang / dus yun ring por nye bar bsten⁴ pa'i slob ma dge slong Tshul khirms rgyal ba gnyis kyis yang dang yang du gsol ba btab pa'i ngor man ngag gi thigs pa 'thor ba rnam 'dir bla ma'i zhal snga nas dang /⁵ mdo sde la sogs pa'i rjes su⁶ 'brangs nas bsdu bar bya'o //

Byang chub 'od kyis dus rtag tu //
bdag la tshig ni bdun dris pas //
rtsa bar don de ma gsal zhes //
bskul ba'i don du bri bar bya //

sngon gyi slob dpon mkhas pa chen po Nor gyi rtsa lag gi zhal nas /⁷

mdo don smra ba rnam la ni //
man ngag cung zad sbyin par bya //
dgos pa (N. 274b) bcas dang bsdu don bcas //
tshig don bcas dang mtshams sbyor bcas //
brgal lan (C. 246a) bcas pas⁸ bsnyad par bya //⁽¹⁾

zhes bshad pas 'dir yang shes rab dang ldan (P. 278b) pa dang / bla ma mkhas pa la brten pa dag gis tshul ji lta ba bzhin du sbyar ba byas na theg pa chen po'i lam bzang po skye bo chen po'i chos lugs shing rta chen po'i lam chen po 'di myur du rtogs par 'gyur ro //

mdo sogs lung dang bstan bcas dang //
bla ma rnam kyis⁹ gsung (G. 383b) bzhin du //
byang chub sems dpa' rnam kyis lam //
bdag gis nges par bshad par bya //

(1) *Vyākhyāyukī*. Jong Choel Lee, ed., p. 6.13-16. Cf. *Abhisamayālaṅkāraloka of Haribhadra*. Wogihara ed., p. 15.24-25.

1 N yongsu. 2 P // . 3 CD thigs. 4 CD bstan. 5 N // . 6 N rjesu. 7 N // .
8 GNP pa. 9 P kyis.

de gang yin zhe na /

dus gsum rgyal ba thams cad dag dang de'i chos dang //

dge 'dun rnams la gus pa chen pos phyag bya ste //

slob ma bzang po Byang chub 'od kyis bskul gyur pas //

byang chub lam gyi sgron ma rab tu gsal bar bya //¹ [BPP 1-4]

zhes bya ba (D. 242a) la sogs pa'i gzhung 'di yin no // gzhung de dag gang yin zhe na /² dus gsum zhes bya ba la sogs pa smos te / dus gsum zhes bya ba la sogs pa'i tshig rkang pa gcig ni rtogs par sla'o // slob ma bzang po zhes bya ba ni theg pa chen po'i chos kyi snod yin pas so // de gang yin zhe na / Byang chub 'od ces bya ba 'di yin no // bskul gyur pas zhes bya ba ni des bdag la 'di skad du /

bod kyi yul 'di na sangs rgyas kyi bstan pa theg pa chen po'i lam 'di la log par rtog pa'i gang zag bla ma dge ba'i bshes gnyen gyis yongs su³ ma zin pa dag phan tshun rtsod cing rang rang gi rtog ges zab pa dang rgya chen po'i don la rang gi rtog pa dpyad⁴ cing so so nas mi mthun pa dag mang du mchis pas de dag the tshom bsal du gsol

zhes bdag la yang dang yang du bskur bar gyur pas / de'i don du bdag gis⁵ mdo la sogs pa'i rjes su 'brangs nas byang (N. 275a) chub lam gyi sgron ma rab tu gsal bar bya'o // *Byang chub lam gyi sgron ma* (G. 384a) de gang yin zhe na /

sems can dam pa byang chub mchog /⁶ [BPP 21]

ces bya ba nas /

de nyid rig⁷ la nyes pa med //⁸ [BPP 272]

ces pa'i bar gyi⁹ gzhung 'di¹⁰ yin no // de la chung dang zhes pa (C. 246b) nas mchog yin no¹¹ zhes pa'i gzhung gis theg pa (P. 279a) chen po'i snod dang snod ma yin pa bstan te / skyes bu tha ma dang / skyes bu 'bring ni zhar la bshad pa yin no¹² //¹³ tshig don rnams ni rtogs par sla'o //

rang rgyud gtogs pa'i sdug bsngal gyis //

gang zhig gzhan gyi sdug bsngal kun //

yang dag zad par kun nas 'dod //

skyes bu de ni mchog yin no¹⁴ // [BPP 17-20]

1 GNP om. 2 N //. 3 N *yongsu*. 4 GNP *spyod*. 5 GN *gi*. 6 GNP om. 7 GNP *rigs*.
8 GNP om. 9 P *gyis*. 10 GNP om. 11 N *yino*. 12 N *yino*. 13 P /. 14 N *yino*.

zhes pas ni theg pa chen po'i snod bstan pa yin no¹ // don 'di la dgongs nas ji skad du /
 byang chub sems dpa' sems can la //
 bu gcig pa la bya ba bzhin //
 rkang gi gting nas byams pa ste //
 de ltar rtag tu byed par 'dod⁽²⁾ //

yang

ji ltar phug² ron rang gi bu mchog byams //
 rang gi bu de phang na 'khyud nas 'dug //
 de 'dra ba la khong khro 'gal ba ltar //
 brtser bcas lus can bu la³ 'ang de⁴ dang 'dra⁽³⁾ //

zhes gsungs pa dang / slob dpon mkhas pa chen po Nor gyi rtsa lag gis kyang ji skad du /

dman (D. 242b) pa de dang de 'i thabs kyis⁵ rang gi
 rgyud du gtogs pa'i bde ba don du gnyer //
 'bring po sdug bsngal ldog pa kho na'o⁶ bde min
 gang phyir de ni sdug bsngal gnas yin phyir //
 dam pa rang gi rgyud la yod pa'i sdug bsngal
 rnam kyis gzhan (G. 384b) dag la⁷ ni bde ba dang //
 sdug bsngal gtan ldog kho na don gnyer gang phyir
 de yi⁸ sdug bsngal⁹ gyis de sdug bsngal⁹ phyir //^{10, (4)}

zhes gsungs pa dang / yang

gang gzhan gyi sdug bsngal gyis¹¹ sdug bsngal bar 'gyur zhing /¹² gzhan gyi bde
 bas yid bde zhing dga' bar 'gyur gyi /¹³ bdag gi ni ma yin pa de lta bu'i rigs can la yin
 te / de dag ni rang gi bde ba la mi lta ba dang / de dag ni gzhan dag sdug bsngal gyi
 chu bo chen po las yongs su¹⁴ bskyab par nus so¹⁵ snyam

(2) *Mahāyānasūtrālamkāra* 13.20.

(3) *Mahāyānasūtrālamkāra* 13.22.

(4) *Abhidharmakośabhāṣya*. Pradhan ed., p. 182.16-19.

1 N *yino*. 2 D *pug*. 3 N om. 4 N om. 5 GNP *kyi*. 6 N *na'o* //. 7 G om.
 8 GNP *de'i*. 9 G om. 10 NP om. 11 GNP *gyi*. 12 P //. 13 P //. 14 N *yongsu*.
 15 N *nuso*.

du 'bad pa byed do¹ // rang bzhin gyis snying rje che ba dang ni snying rje la goms
 pa'i stobs kyis rang sdug bsngal yang gzhan bde ba la mngon par dga' ba yin no^{2, (5)}
 zhes gsungs so³ // de bas na skyes bu gang zhig rang bzhin gyis pha rol po nyam thag pa (P.
 279b) dag mthong na mi bzod cing (C. 247a) bdag dang gzhan brje⁴ bar⁵ sems shing bu gcig
 pa g-yang sar lung ba dang / chu bo chen pos khyer (N. 275b) ba dang /⁶ me 'bar ba'i nang
 du 'dug pa mthong ba na de mi bzod pa bzhin du /⁷ 'gro ba mtha' dag la bu⁸ gcig pa lta lta ba
 de ni 'dir theg pa chen po'i snod du bsngags so // de lta bu'i sems can chen po de la ji lta
 bya snyam pa la /

bla ma rnams kyis bstan pa yis //

yang dag thabs ni bstan par bya //⁹ [BPP 23-4]

zhes bya ba ni 'di yin no // de la bla ma rnams ni rje btsun dpal Byang chub bzang po dang /
 rje btsun Su wa rṇṇa dvi¹⁰ pa la sog pa'o // yang dag thabs (G. 385a) zhes bya ba ni / gsum
 la skyabs su 'gro ba dang / byang chub kyi sems nam pa gnyis dang / mngon par shes pa
 bskyed nas gzhan don khyad par can bya ba'i thabs dang / thabs dang shes rab zung du¹¹
 'brel pa'i tshogs gnyis bsags¹² pa'i thabs dang /¹³ bdag dang gzhan don myur du rdzogs par
 'gyur ba'i theg pa chen po'i¹⁴ chen po gsang sngags kyi lugs kyis¹⁵ thun mong ma yin pa'i
 tshogs (D. 243a) gnyis bsags pa'i thabs rnams so //

de lta bu'i thabs de dag rgyas par bshad par 'dod nas /¹⁶

rdzogs sangs bris sku la sog dang //¹⁷ [BPP 25]

zhes pa nas / de nyid rig la nyes pa med pa'i bar ro // gsum la skyabs su 'gro ba ni thar pa'i
 grong khyer chen por 'jug pa'i sgo lta bur gyur pa dang / byang chub kyi sems kyi gzhi lta
 bur gyur pas de bstan par 'dod nas /

rdzogs sangs bris sku la sog dang //

mchod rten dam chos mngon phyogs nas //¹⁸ [BPP 25-26]

zhes bya ba la sog pa tshig rkang bcu gnyis kyis bstan te / mngon phyogs nas zhes pa ni

de bzhin gshogs pa'i sku mngon du phyogs par byas shing mthong ba las
 byang chub kyi sems skye'o⁽⁶⁾

(5) *Abhidharmakośabhāṣya*. Pradhan ed., p. 182.6-14.

(6) *Rājāvavādakasūtra*. Tib. P. No. 887. Cf. Śik, p. 10.12.

1 N byedo. 2 N yino. 3 N gsungso. 4 GNP rje. 5 G phar. 6 P //. 7 N //.
 8 D phu. 9 P /. 10 P di. 11 GNP tu. 12 CD bsag. 13 P //. 14 G om. chen po'i.
 15 CD kyi. 16 GNP om. 17 GNP om. 18 GNP /.

zhes theg pa chen po'i mdo *rGyal po la gdams pa'i sngon gyi rtogs pa brjod pa* las kyang mthong ba dang / dge ba'i bshes gnyen dag (P. 280a) kyang gsung ngo // cho ga rgyas pa ni 'og nas ston par 'gyur ro // (C. 247b) (N. 276a) 'di ltar byug ris kyi dkyil 'khor nyi shu rtsa bdun (G. 385b) du dkon mchog gsum gyi gzugs brnyan so sor bzhugs su¹ gsol la² / phyogs bcu'i 'jig rten gyi khams na bzhugs pa'i rnam par dag pa'i dkon mchog gsum yang gnas so so de dag tu³ spyang drang ba'am / yang na zhing khams de dag nyid du bdag nyid⁴ 'dug par mos te lus kyi rnam par 'phrul ba'i bkod pas sangs rgyas dang byang chub sems dpa' re re'i mdun du bdag nyid 'dug par bsams⁵ la pug pug por ram sor mo bsnol la spyi por thal mo sbyar nas mchod pa'i bya ba rdzogs pa dang / phung po gsum pa byas⁶ la bla ma la yon phul te skyabs su 'gro ba bya'o //

de yang dkon mchog gsum ni 'di lta bu yin te /⁷ de kho na nyid kyi dkon mchog gsum dang /⁸ mdun du bzhugs pa'i dkon mchog gsum ste / de lta bu shes pa sngon du 'gro bar bya'o //

me tog bdug spos dngos po dag /⁹ [BPP 27]

ces pa ni zang zing gi mchod pa mtshon pa'o //

mchod pa rnam pa bdun dag kyang //¹⁰ [BPP 30]

zhes pa ni sgrub pa'i mchod pa mtshon pa'o //

'dir byang chub sems dpa' tshogs kyi lam pa slob dpon du gyur pa des bsod nams kyi tshogs bsags pa'i phyir /¹¹ mchod pa la mkhas par bya ba yin te / de smra bas¹² 'dod nas /

Kun bzang spyod las gsungs (D. 243b) pa yi¹³ /

mchod pa rnam pa bdun dag kyang //¹⁴ [BPP 29-30]

zhes bya ba 'di yin te / *Kun bzang spyod*¹⁵ ces bya ba ni 'Phags pa sDong po bkod pa las 'byung (G. 386a) ba'i 'Phags pa bZang po spyod pa'i smon lam gyi rgyal po yin te / 'di ni phyogs bcu 'jig rten gyi khams kyi byang chub sems dpa' chen pos chen po la bzhugs pa Kun tu¹⁶ bzang po'i spyod pa dang / smon lam gyi rgya mtsho mi zad pa'i mdzod¹⁷ brnyes pa rnams kyis¹⁸ Kun tu¹⁹ bzang (N. 276b) po'i spyod pa dang / Kun tu²⁰ bzang po'i smon lam yin (P. 280b) pas 'di ni pha rol tu phyin pa'i theg pa'i byang chub sems dpa' rnams kyi sde snod²¹ kyi mar me lta bu yin no²² zhes bla ma dam pa mkhas pa chen po dag gsungs pa²³ yin no //

1 N *bzhugsu*. 2 N *lo*. 3 GP *tu*. 4 G om. *bdag nyid*. 5 CD *bsam*. 6 G om. *pa byas*.
7 G //. 8 P om. 9 GNP om. 10 GNP om. 11 GNP om. 12 CD *ba*. 13 GNP *yiis*.
14 GNP om //. 15 P *song*. 16 CD *du*. 17 CD om. *mdzod*. 18 CD *kyi*. 19 CD *du*.
20 CD *du*. 21 N *gnod*. 22 G *no* //. 23 GP *gsung ba*.

(C. 248a) gsungs pa'i mchod pa rnam pa bdun¹ zhes bya ba ni bla ma kha cig zhal nas

'Phags pa bZang po² spyod pa'i smon lam⁽⁷⁾ las mchod pa bdun gsungs te / ji snyed su dag phyogs bcu'i zhes pa slo kas ni lus dang ngag dang yid kyis³ phyag 'tshal ba'i mchod pa bstan to // bzang por spyod la dad pa'i zhes pa la sogs pa'i slo kas ni lus dbul ba'i mchod pa bstan to // rdul gcig steng na zhes pa'i slo kas ni de dag yul du byas te dang ba'i⁴ mchod pa bstan to // de dag sngags pa mi zad rgya mtsho rnams⁵ zhes pa la sogs pas ni bstod pa'i mchod pa bstan to // me tog dam pa zhes pa la sogs pas ni bla na yod pa'i mchod pa bstan to // mchod pa gang rnams⁶ bla med rgya che ba⁷ zhes pas ni bla na med pa'i mchod pa bstan to // 'dod chags⁸ zhe sdang gti (G. 386b) mug ces pas ni phung po gsum pa'i mchod pa bstan to // gzhung gzhan gyis ni⁹ mchod pa de dag gis¹⁰ bsngo ba bstan pa yin no //¹¹

zhes gsungs so¹² // yang bla ma dam pa kha cig gi zhal nas /

'Phags pa bZang po¹³ spyod pa'i smon lam las mchod pa bdun gsungs te /¹⁴ 'di ltar me tog dam pa dang / phreng ba dam pa dang / sil snyan dam pa dang / byug pa dam pa dang / mar me dam pa dang / bdug spos dam pa dang / na bza' dam pa rnams so // dri mchog dam pa dang / phye ma'i phur ma gnyis ni byug pa dam pa dang¹⁵ bdug pa gnyis¹⁶ kyi nang du 'dus pa nyid yin la bkod pa'i khyad par zhes pa ni snga ma de dag re re zhing yang brjod du med pa'i bkod pa bya'o </>

(D. 244a) zhes gsung ngo¹⁷ // bla ma mkhas pa gzhan dag ni

'Phags pa bZang po¹⁸ spyod pa'i smon lam (N. 277a) las mchod pa bdun du (P. 281a) gsungs pa ni 'di ltar yan lag bdun par 'dus te / sgrub pa'i mchod pa yin no zhes gsungs te / de nyid las bdun po de dag rdzogs pa'i rjes la 'di skad du /

(7) *Bhadracarīprañidhānarājā* 1-10.

1 CD *bdun* // 2 GNP *por.* 3 GNP *kyi.* 4 GP *pa'i*, N *dad pa'i.* 5 CD *rnams* // 6 N *rnams.*
7 CD *che ba* // 8 N *chaḍ.* 9 CD *mi.* 10 CD *gi.* 11 CDG *om.* 12 N *gsungo.*
13 GP *por.* 14 N // 15 CD *dang /.* 16 G *gnyis ni byug pa dam pa dang 'dug pa gnyis.*
17 N *gsungso.* 18 GNP *por.*

'das pa'i sangs rgyas rnam dang da ltar gyi¹ //²

phyogs bcu dag na gang bzhugs mchod par (C. 248b) gyur //^{3, (8)}

zhes mchod pa nyid yin par gsal bar gsungs so </>

zhes gsung ngo //

de dag ni gar yang 'gal ba med pa de rang nyid gang la mos pa de gzung bar bya'o // 'di ltar mchod pa ni rnam pa gnyis te / zang zing gi mchod pa dang / sgrub pa'i mchod pa'o //

zang zing (G. 387a) gi⁴ mchod pa ni gnyis te / mngon sum pa nyid dang / yid kyis byas pa'o //

mngon sum pa ni gnyis te / me tog la sogs pa dang / bdug pa la sogs pa dang / rol mo la sogs pa dang / rgyal srid dang / nor bu rin po che la sogs pa bdag nyid la yod pa'o // gnyis pa ni sems rten dang bcas pa dang /⁵ bu dang bu mo dang / chung ma dang bran la sogs pa'o //

yid kyis byas pa la gnyis te / dang po ni phyogs bcu'i 'jig rten kham kyis⁶ bdag po med cing / gzhan gyis⁷ yongs su⁸ ma bzung ba'i rdzas phul du byung ba ma lus pa ste / ji ltar 'Phags pa dKon mchog sprin dang / 'Phags pa dGongs pa rgyud kyis phreng ba dang / Ting nge 'dzin gyi 'khor lo'i mchod pa'i phyag rgya'i mdo dang / dKon mchog ta la la'i mdo dang / sPyod pa la 'jug pa las gsungs pa lta bu'o // gnyis pa ni yid kyis⁹ rnam par 'phrul pa las byung ba'i bkod pa nam mkha'i¹⁰ mdzod las byung ba ste /¹¹ 'di ltar 'khor los¹² sgyur ba'i rgyal srid rin po che bdun dang / nor bu rin po che gser dang / dngul dang / dung dang / man shel dang / chu shel dang / spug dang / rdo'i snying po dang / mu tig dang / mu tig dmar po dang / man shel dang / (N. 277b) padma rā ga dang / (P. 281b) a sma garbha¹³ dang / mu sa la gal pa dang / dun las dang / indra nī¹⁴ la dang / mar ka ta dang / bai ḍūrya dang / shang ka¹⁵ shi la dang / byu¹⁶ ru dang / ke ke ru dang / ke ke ru chen po la sogs (G. 387b) pa'i nor bu de dag gi char pa 'bab pa (D. 244b) dang / de dag gi gdugs dang / rgyal mtshan dang / ba dan dang / gzhal yas khang dang / dra ba'i tshogs brjod du med pa dang¹⁷ /¹⁸ gzhan yang dKon mchog ta la la'i gzungs las 'byung ba lta bu ste /

(8) Bhadracarāprañidhānarājā 13.

1 P gyis. 2 P om //. 3 GNP om. 4 G om. 5 N //. 6 P kyis. 7 GNP gyi.
8 N yongsu. 9 CD kyis. 10 N namkha'i. 11 GN //. 12 GNP lo. 13 GNP as ma gar pa.
14 D ni. 15 CD shaṅka. 16 CD byi. 17 CD dag. 18 CD om.

me tog phal cher¹ me tog bla re dang //

(C. 249a) me tog bkod pa'i 'od zer rab 'gyed cing //

me tog sna tshogs kun tu² bkram byas te //³

bdag nyid chen po de dag rgyal bas⁴ mchod⁵ //^{6, (9)}

ces gsungs te / de bzhin du bdug pa dang / spos dang / phreng ba dang / phye ma dang / na bza' dang / rin po che dang / padma dang / rgyan 'phreng⁷ dang / rgyal mtshan te / de dag kyang kha dog sna tshogs pa'o // sngar gyi tshigs su⁸ bcad pas kun la sbyar bar bya'o //

de bzhin du gdugs bzo legs pa yu ba rin po che las grub pa kha dog sna tshogs pa sangs rgyas kyi zhing ma lus pa khebs pa brjod du med pa dang /⁹ de bzhin du rgyal mtshan yang de bzhin te / thams cad gdugs bzhin no // ba dan dang rnam par rgyal ba'i ba dan yang tshad dang rgyu dang grangs snga ma bzhin no //

gzhan yang me tog kha dog dang dbyibs dang dri phun sum tshogs pa'i char dang / de'i phreng ba dang / de'i gdugs dang / de'i rgyal mtshan dang / de'i ba dan dang / rnam par rgyal ba'i ba dan dang / gzhal med khang bkod pa sna tshogs pa du ma brjod du med pa dang / mar me yang tshul de bzhin pa dang / spos kyi char la (G. 388a) sogs pa yang snga ma'i tshul dang ldan pa dang / zhal zas bza' ba dang / btung ba kha dog dang dri dang ro phun sum tshogs pa dang / na bza' dri zhim pos bsgos pa dang / rol mo'i sgra dbyangs snyan cing (N. 278a) yid 'phrog par byed (P. 282a) pa'i pi wang dang / gling bu dang / rnga dang / rnga pa ṭa ha dang / rnga bo che dang / rnga zlum dang / rdza rnga dang / dung dang / zangs dung dang / cha lang dang / ting ting shag dang / ḍa¹⁰ ma ru dang / lha dang /¹¹ mi'i glu snyan pa yid 'phrog par byed pa dang /¹² dkon mchog gsum gyi bstod pa'i sgra dbyangs snyan cing don dang ldan pa dang /¹³ phye ma'i phur ma ri rab bye ba phrag brgya gcig tu bsdoms¹⁴ pa tsam¹⁵ la sogs pa'o // de yang 'Phags¹⁶ pa dKon mchog sprin las 'byung ba bzhin no //

sgrub pa'i mchod pa ni gnyis te / sgrub pa'i mchod pa nyid (D. 245a) dang / bla na med pa'i¹⁷ mchod pa'o //

(9) *Ratnolkādhāraṅīsūtra*. Tib. P. No. 472, 'A 39b1-2. Chin. T. No.299, p. 898b.

1 GNP *chen*. 2 CD *du*. 3 GNP /. 4 GNP *ba*. 5 G *mchog*. 6 GNP *om*. 7 CD *phreng*.
8 GN *tshigsu*. 9 N //. 10 GNP *ḍā*. 11 N *om*. 12 N //. 13 CD *om*. 14 P *bsgoms*.
15 P *can*. 16 N '*phaḍ*. 17 GNP *pa*.

(C. 249b) dang po la bdun te / phyag 'tshal ba'i mchod pa dang / zang zing gi mchod pa'i mchod pa dang / sdig pa bshags pa'i mchod pa dang / rjes¹ su² yi rang ba'i mchod pa dang / de bzhin du bskul ba dang / gsol ba gdab pa dang / yongs su³ bsngo ba'i mchod pa⁴ zhes bya ba dag go //⁵

de la phyag 'tshal ba'i mchod pa la yang gnyis te / lus kyi mchod pa dang / ngag gi mchod pa'o //

lus kyi mchod pa ni 'Phags (G. 388b) pa bZang po⁶ spyod pa las / ji snyed su dag ces pa la sogs pa dang /

bzang po'i spyod la dad pa'i stobs dag gis //

zhes pa la sogs pa dang / rdul gcig steng na rdul snyed ces pa la sogs pa'o // de dag gis⁸ ni dmigs pa'i yul du bya ba dang / lus dbul ba dang / phyag bya ba de gsungs so // don de nyid 'Phags pa Phung po gsum pa'i mdo las gsungs te /

de pus mo g-yas pa sa la 'dzugs pa na zhes pa dang /

de pus mo g-yon pa sa la 'dzugs pa na zhes pa dang /

de lag pa g-yas pa sa la 'dzugs pa na sems can thams cad g-yas phyogs kyi lam la gnas par gyur cig snyam du sems bskyed do

zhes pa dang / de bzhin du lag pa g-yon pa dang mgo sa la gtugs (N. 278b) pa na zhes pa'i tshul de bzhin du (P. 282b) shes par bya /⁹ de'i bsngo ba de nyid las 'di skad du

bdag gi yan lag lngas phyag btsal ba 'dis sems can thams cad kyi sgrib pa lnga sel bar gyur cig / mig lnga yongs su¹⁰ dag par gyur cig / dbang po lnga yongs su rdzogs par gyur cig / lam lnga la gnas par gyur cig / mngon par shes pa nyams pa med pa lnga thob par gyur cig / sems can 'gro ba lngar skyes pa dag 'gro ba lnga las khyad par du 'phags pa dang / tshul khirms (G. 389a) khyad par du 'phags pa dang / ting nge 'dzin khyad par du 'phags pa dang / shes rab khyad par du 'phags pa dang / rnam par grol ba khyad par du 'phags pa dang / rnam par grol ba'i ye shes mthong ba khyad par du 'phags pa thob par gyur cig /¹¹ sangs rgyas la lta ba dang / chos nyan pa dang¹² /¹³

1 G de bzhin rjes. 2 N rjesu. 3 N yongsu. 4 G pa ni gnyis te /. 5 CGNP /. 6 GNP por.
7 GNP om. 8 GNP gi. 9 G //. 10 N yongsu. 11 P om. 12 D dag. 13 D om.

dge (C. 250a) 'dun dang 'grogs pa thob par gyur cig /^{1, (10)}
ces gsungs pa lta bu'o //
ngag gis² mchod pa yang lus kyis³ phyag byed pa'i (D. 245b) dus de nyid kyis tshe⁴ rtogs
pa ci yod pas dkon mchog gsum gyi bstod pa glu⁵ dbyangs kyis tshig tu 'don cing phyag
byed pa'o //
zang zing gi mchod pa ni sngar brjod zin to //⁶
sdig pa bshags pa'i mchod pa ni gSer 'od dam pa 'am / lTung ba bshags pa
'am / Phung po gsum pa'i mdo 'am / Las kyis sgrub pa rgyun gcod pa la sogs pa'o // sdig pa
bshags pa de yang mchod pa nyid yin te / ji skad du 'Phags pa Blo gros mi zad pas bstan
pa'i mdo las /
bdag dang gzhan gyi sdig pa bshags pa yang bsod nams su 'gyur ro⁽¹¹⁾
zhes gsungs so⁷ //
rjes su yi rang ba'i mchod pa yang 'Phags pa Zla ba sgron ma'i mdo las 'byung ba bzhin
te /⁸ mchod pa nyid yin no //
bskul ba dang / gsol ba gdab pa'i mchod pa dang / (G. 389b) yongs su bsngo ba'i mchod
par 'gyur ba'i tshul yang mdo nyid du blta bar bya'o //
bla na med pa'i mchod pa la gnyis te / (P. 283a) dmigs (N. 279a) pa dang bcas pa dang⁹
dmigs pa med pa'o //
de la dmigs pa dang bcas pa ni 'Phags pa Blo gros rgya mtsho'i mdo las /
blo gros rgya mtsho gsum po 'di dag ni de bzhin gshegs pa la mchod pa dang
rim gro byed pa bla na med pa ste / gsum gang zhe na / byang chub tu sems bskyed
pa dang / dam pa'i chos yongs su¹⁰ 'dzin pa dang / sems can rnam la snying rje chen
po bskyed pa'o⁽¹²⁾
zhes gsungs so¹¹ // de bzhin du 'Phags pa mThar gyis¹² yang dag 'phags pa'i mdo
las /
bzang po phan yon bzhi po 'di dag mthong ba'i byang chub sems dpa' ni de bzhin
gshegs pa la mchod pa yin te / bzhi gang zhe na / sbyin gnas mchog la dad par 'gyur

(10) *Triskandhakasūtra*. Tib. P. No. 950, 'U 76b6-77a8.

(11) *Akṣayamatīrdeśasūtra*. Braarvig ed., p.119. Cf. *Śikṣāsamuccaya*, Bendall ed., p. 291.8.

(12) *Sāgaramatīparipṛcchāsūtra*. Cf. *Śikṣāsamuccaya*, Bendall ed., p. 313.6-8.

1 CD om. 2 GNP gi. 3 PGN kyis. 4 CD cho ga. 5 N gru. 6 D ///. 7 N gsungso. 8 P om.
9 CGN dang /, P dang //. 10 N yongsu. 11 N gsungso. 12 GNP gyi.

ba dang / bdag la zlas¹ bltas² te sems can gzhan yang mchod pa byed par 'gyur ba dang / de bzhin gshegs pa la mchod nas byang chub kyi sems (C. 250b) brtan par 'gyur ba dang / skyes bu chen po'i mtshan sum cu rtsa gnyis mthong nas dge ba'i rtsa ba bsodus par 'gyur ba ste bzhi po 'di dag go⁽¹³⁾

zhes gsungs so³ // sems can mgu bar byed pa yang de bzhin gshegs pa la mchod pa bla na med pa yin te / bcom ldan 'das kyis⁴ Ba (G. 390a) tshwa'i⁵ chu klung gi mdo las ji skad du⁶ gsungs pa dang /⁷ (D. 246a) slob dpon Zhi ba⁸ lhas kyang /⁹

gang dag bde na thub dbang rnam dgyes shing //¹⁰

gang la gnod na thub dbang mi dgyes pa¹¹ //¹²

de dag mgu bas thub dbang thams cad dgyes //¹³

de la gnod byas thub la gnod byas 'gyur //^{14, (14)}

zhes pa dang / yang de nyid las /

de bzhin gshegs rnam mnyes par bgyi slad du //

'jig rten bran du deng nas mchi bar bgyi //

skye bo'i tshogs kyis¹⁵ bdag mgo rkang bcaad dam //

gsod kyang rung ste 'jig rten mgon dgyes mdzod //

thugs rje ldan pa dag gis¹⁶ 'gro 'di kun //

bdag gir mdzad pa 'di la dogs ma (N. 279b) mchis //

sams can gzugs (P. 283b) su¹⁷ snang ba 'di dag kun //

mgon po min nam ci na 'dir mi gus //

de bzhin gshegs pa mnyes bya 'ang de nyid yin //^{18, (15)}

zhes pa dang / yang de nyid las /¹⁹

byams pa'i bsam ldan mchod pa gang //²⁰

de ni sems can che ba nyid //

sangs rgyas dad pa'i bsod nams gang //

de ni sangs rgyas che ba nyid //^{21, (16)}

(13) *Anupūrvāsamudgatasūtra*. Cf. Śik, p. 313.1-5.

(14) *Śikṣāsamuccaya*, Bendall ed., p. 156.1-2.

(15) *Śikṣāsamuccaya*, Bendall ed., p. 156.7-11.

(16) *Śikṣāsamuccaya*, Bendall ed., p. 157.7-8.

1 CD bzlas. 2 P ba ltas. 3 N gsungso. 4 GNP kyi. 5 D tsha'i. 6 GNP om.

7 N //. 8 GNP ba'i. 9 P om. 10 GP /. 11 P shing. 12 GN /. 13 GNP /.

14 GN /, P om //. 15 GNP kyi. 16 GNP gi. 17 N gzugsu. 18 GNP /. 19 GNP om.

20 CDP /. 21 GNP om.

ces bSlab pa kun las btus pa las gsungs so // sPyod 'jug las kyang /

sems can mgu bya ba gtogs pa //

rgyal ba mnyes pa'i thabs gzhan med //(17)

ces gsungs pa dang / yang de nyid las don 'di rgyas par bshad (G. 390b) de de nyid du blta
bar bya'o // gzhan yang mdo nyid¹ na rgyas pas mdo de² nyid du blta bar bya'o //

de la dmigs pa med pa'i mchod pa ni shes rab kyi pha rol tu phyin pa bsgom³ pa yin te /
de la ni mchod par bya ba dang / mchod par byed pa dang / mchod pa'i rdzas med de /
de yang *Shes rab kyi pha rol tu phyin pa'i mdo las* /

gang gis⁴ nga la gzugs su⁵ mthong //

gang gis nga la sgrar shes pa //

de dag log (C. 251a) par mthong ba ste //

skye bo de⁶ yis nga mi mthong //

sangs rgyas rnams ni chos kyi sku //

'dren pa rnams ni chos nyid blta //

chos nyid mthong bar bya min pas //

de ni rnam par shes mi nus //⁷,(18)

zhes gsungs so // don 'di ni 'Phags pa rTag tu ngu'i le'u las gsal bar gsungs pas der blta bar
bya'o // de bas na 'Phags pa Seng ge⁸ sgra'i mdo las /

sangs rgyas su 'du shes pa la sangs rgyas mthong ba med na / sangs rgyas la
mchod par 'gyur ba lta ci smos de ni gnas med do // de la sangs rgyas la mchod pa
gang zhe na / gang 'du shes kyi (D. 246b) mtshan ma mi skyed pa'o // gang la sems
med pa dang / sems las byung ba med pa dang / sangs rgyas su 'du shes pa med pa
dang / chos su 'du shes pa med pa dang / dge 'dun du 'du shes pa med pa dang / gang
zag (P. 284a) dang / bdag dang / pha rol por 'du shes pa (G. 391a) med pa ni de bzhin
(N. 280a) gshegs pa la mchod pa yin no⁽¹⁹⁾

zhes gsungs te / 'di'i don rgyas par mdo nyid du blta bar bya'o //

de bas na 'phags pa Thogs med kyi zhal snga nas /

(17) *Bodhi(sattva)caryāvatāra* 6.119cd.

(18) *Vajracchedikāprajñāpāramitāsūtra*. Conze ed., pp. 56-57.

(19) *Siṃhanādasūtra*. Tib. D. No. 67, 103b1-104a6, P. No. 760 (23), Zi 98b7-99b7.

1 P 'di nyid. 2 CD om. 3 P bstom. 4 GNP gi. 5 N gzugsu. 6 CD 'de. 7 GNP /.
8 GNP sengge.

sangs rgyas bcom ldan 'das de ni sgrub¹ pa'i mchod pas mnyes par 'gyur gyi /²
 zang zing gi mchod pas ni de mnyes par mi 'gyur ro⁽²⁰⁾
 zhes gsungs pa yang legs par drangs par 'gyur ro //

de bas na sangs rgyas ni chos kyi skus gnas pa yin te / *Sangs rgyas phal po che'i le'u*
las /³

sangs rgyas rnams ni chos kyi sku //
 de bzhin gshegs pa skye ba med //
 rnam dag nam mkha'⁴ lta bu ste //^{5, (21)}

zhes gsungs pa dang / 'Phags pa Nam mkha'⁶ mdzod kyi mdo las kyang /
 sangs rgyas bcom ldan 'das ni chos nyid du⁸ yang mi dmigs na / gzugs dang
 mtshan nyid du lta dmigs par ga la 'gyur⁽²²⁾

zhes gsungs so // slob dpon 'phags pa Klu sgrub kyi zhal nas kyang /
 chos rnams thams cad stong pa la //⁹
 gang la bstod cing gang gis bstod //
 skye dang 'jig pa rnam spangs shing //
 (C. 251b) gang la mtha' dang dbus med pa //
 gzung dang 'dzin pa mi mnga' ba'i //
 'dir ni khyed bstod nus pa gang //^{10, (23)}

zhes gsungs so // de lta bu'i mchod pa'i bye¹¹ brag ni byang chub sems dpa' dbang po rtul po
 (G. 391b) dang rnon po'i bye brag gis de dang de shes par bya'o //
 rtsa ba nyid la 'jug par bya ste /
 byang chub snying po'i mthar thug par //
 mi ldog pa yi¹² sems kyis su¹³ //¹⁴ [BPP 31-32]

zhes bya ba la sogs pa la / byang chub snying po ni drang ba'i don du dpal rdo rje'i gdan
 byang chub chen po'i gnas dang / 'og min gyi gnas dpal stug po bkod pa'i zhing ngo // de
 dag tu rdo rje lta bu'i ting nge 'dzin brnyes pas na snying po'o // nges pa'i don du ting nge
 'dzin de brnyes pa'i gnas 'di yin bya ba (P. 284b) med de /¹ don dam

(20) *Viniścayasamgraha*, Tib. D. 4038, Zhi 185a5.

(21) *Buddhāvataṃsakasūtra*, Chin. No. 278, p. 408c13.

(22) *Gaganagañjasūtra*.

(23) *Paramārthastava* 9-11.

1 P *bsgrub*. 2 G //. 3 GNP om. 4 N *namkha'*. 5 GNP om. 6 N *namkha'*. 7 P //.
 8 C *la*. 9 N /. 10 GNP om. 11 P *byed*. 12 P *gis*. 13 GNP *kyi su*. 14 GNP om.
 15 GNP om.

par chos thams cad kyi dbyings nyid yin pas so // 'Phags pa Nam mkha'¹ mdzod kyi²
(D. 247a) mdo (N. 280b) las /³

byang chub snying po nam mkha'⁴ ste //⁵

byang chub nam mkha'i⁶ mtshan nyid yin //^{7, (24)}

zhes gsungs so //

mi ldog pa yi⁸ sems kyi su⁹ //¹⁰ [BPP 32]

zhes bya ba ni 'dir phyir mi ldog pa'i byang chub sems dpa' ni rnam pa gsum ste / sbyor ba'i
lam nas mi ldog pa dang / bden pa mthong ba nas mi ldog pa dang / sa brgyad pa nas mi
ldog pa'o // 'di'i don ni 'Phags pa Shes rab kyi pha rol tu phyin pa'i man ngag gi bstan bcos
mngon par rtogs pa'i rgyan las rgyas par blta bar bya'o //

gzhan yang so so'i¹¹ skye bo nyid nas phyir mi ldog pa dang /¹² bden pa mthong ba nas
phyir mi ldog pa dang / sa bdun pa nas phyir mi ldog pa'o // 'di'i¹³ don slob dpon dpal Ye
shes grags pas mdzad pa'i (G. 392a) *De kho na nyid la 'jug pa'i bstan bcos chen por gsal
bar mdzad pa* der blta bar bya'o //

yang na phyir mi ldog pa ni bzhi ste / sems bskyed pa nas phyir mi ldog pa dang¹⁴
gsang ste phyir mi ldog pa dang / bzod pa thob nas¹⁵ phyir mi ldog pa'o //

dang por skyabs 'gro lan gsum bya //¹⁶ [BPP 36]

zhes bya ba ni dkon mchog gsum re re la lan gsum gsum bya'o¹⁷ //

skyabs su¹⁸ 'gro ba'i don bsdu (C. 252a) nas smras pa /

gnas dang rten dang bsam pa dus //

bslab par rang bzhin tshad dang tshul¹⁹ //

bya ba dbye ba nges tshig dbye //

nyes dmigs dgos pa phan yon yin //⁽²⁵⁾

'dir skyabs su 'gro ba'i tshul brjod par bya ste / skyes bu 'ga' zhig 'khor ba'i sdugs bsngal las
yid²⁰ nges par byung ba / rtag tu 'chi ba rjes su dran pa / rang bzhin gyis²¹ snying rje dang
shes rab che ba / so sor thar pa'i ris bdun pa las gang yang rung ba'i tshul khriims la skyon
med par gnas pa de²² gal te khyim pa zhig yin na ni dge bsnyen gyi

(24) *Gaganagañjasūtra*.

(25) *Śaraṇagamanadeśanā*, Tib. Khi 297b7-298a1.

1 N namkha'. 2 D kyi. 3 P //. 4 N namkha'. 5 GP /. 6 N namkha'i. 7 GNP om.
8 GNP pa'i. 9 GNP kyi su. 10 GNP om. 11 GNP so. 12 C om. 13 GNP 'di.
14 C dang /. 15 GNP pas ni. 16 DGNP om. 17 CD bya ba'o. 18 N skyabsu. 19 G du.
20 G yid ches. 21 GNP gyi. 22 G te for pa de.

bslab par gyur pa (P. 285a) bslab pa'i gzhi lnga dang / de'i phyogs su¹ gtogs pa bslab pa bzhi bcu rtsa lnga dang ldan pa dang / de rab tu byung ba zhig yin na ni rang gi bslab pa'i tshul dang / ji ltar *Nyan thos kyi sar* bshad pa'i dge (N. 281a) sbyong gi rgyan dang / sbyangs pa'i yon tan dang / gzhan yang rten bzhi dang / tshul bzhi la sogs pa dang / gzhan yang cho ga dang / (G. 392b) spyod lam dang / 'tsho ba dang / (D. 247b) tshul khirms dang / lta ba phun sum tshogs pa dang ldan pa dang / gzhan yang nam gyi cha stod dang cha smad la mi nyal bar rnal 'byor la brtson pa dang / zas kyi tshod rig pa dang / dbang po rnams kyi sgo² bsdam³ pa dang / kha na ma tho ba phra rab tsam la yang 'jigs par lta ba'i skyes bu de 'di snyam du ma la so sor thar pa'i tshul khirms 'di tsam gyis⁴ ni bdag dang gzhan gyi don mthar phyin par mi 'gyur na / ji ltar na bdag dang gzhan gyi don mthar phyin par 'gyur zhig gu / 'di ltar theg pa chen po zhes bya ba bdag dang gzhan gyi don mthar phyin par byed pa zhig yod ces grag⁵ gi⁶ / dge ba'i bshes gnyen dam pa cig las btsal bar bya'o zhes bsams nas bla mar 'os pa'i dam pa de yun ring du yongs su⁷ mnyes par byas te / de mnyes par gyur nas de'i zhabs gnyis la mgo bos gtugs te 'di skad du

skyes bu dam pa khyod bdag la thugs⁸ brtse bar mdzad du gsol /⁹ bdag la bdag dang gzhan gyi don mthar (C. 252b) phyin par byed pa'i thabs theg pa chen po'i lam de stsal du gsol

zhes g-yo sgyu¹⁰ dang bral ba'i sems kyis¹¹ zhu bar bya'o //

de nas dge ba'i bshes gnyen des slob ma de brtag pa gsum gyis brtags te¹² / 'di ltar spyod lam dang / rmi lam dang / 'jig rten pa dang¹³ 'jig rten las (G. 393a) 'das pa'i lha'i pra dbab pas brtags la de snod du 'dug par shes nas bla ma de yid dga' ba dang / bzhin 'dzum¹⁴ pa (P. 285b) dang / zang zing dang / rnyed pa dang / bkur sti dang bral ba'i sems dang slob ma de la snying brtse ba'i sems kyis sdig pa can gyi skye bos (N. 281b) dben pa'i sa phyogs su sa gzhi legs par 'thas par byas la gtsang ba der ba'i rnam lnga¹⁵ rgyang¹⁶ nul dang byug pa byas la /¹⁷ tsanda¹⁸ na la sogs pa'i dri phul du byung bas kyang byug cing¹⁹ der²⁰ dri zhim po'i me tog sil ma²¹ gtor bar bya'o // der dkon mchog gsum gyi gzugs brnyan lugs ma la sogs pa dang / po ti la sogs pa dang / byang chub sems dpa' rnams khri 'am stegs bu la bzhugs par bya'o // der bla brag dang / zhal zas dang / rgyan cha la (D. 248a) sogs pa sta gon byed du

1 N *phyogsu*. 2 G om. 3 CD *bsdams*. 4 N *gyis*. 5 P *grags*. 6 GNP *gyis*. 7 N *yongsu*.
8 GNP *thug*. 9 P // . 10 GNP *rgyu*. 10 GNP *kyi*. 12 GNP *brtag ste*. 13 N *dang /*.
14 D *'jum*. 15 CD *lngas*. 16 CD *skyang*. 17 P om. 18 GNP *tsan dan*. 19 CD *byugs shing*.
20 G om. 21 CD *mas*.

bcug re la sogs pa dang / me tog la sogs pa'i mchod pa'i yo byad ji ltar 'byor ba dang / rol mo'i bye la /¹ de nas slob ma des gdan khri me tog gis brgyan pa'i steng du dge ba'i bshes gnyen bzhugs su² gsol la³ 'di snyam du 'di ni 'gro ba ma lus pa'i skyabs dang dpung gnyen yin no snyam du bla ma la ston pa'i 'du shes bskyed la / khros byas te gos gtsang ma bgos la bsam pa bzang po dang ldan pas 'di skad du

rigs kyi bu khyod mkhyen par mdzad du gsol /⁴ bdag (G. 393a) 'khor ba'i gnas 'dir thog ma med pa'i dus nas sdug bsngal du mas gtses shing shin tu nyam thag par gyur te / mgon ma mchis pa / skyabs ma mchis pa / dpung gnyen ma mchis pa / bdag gi⁵ mgon dang skyabs dang dpung gnyen mdzad du gsol

zhes lan gsum du bya'o // de nas bla ma des 'di skad du

skyes bu khyod 'khor ba las skyo zhing yid byung bas shing rta chen po'i (C.253a) lam la 'jug par 'dod pa shin tu legs so // 'di ltar shes par gyis shig /⁶ dkon mchog gsum zhes bya ba mgon med pa dang / skyabs med pa dang / dpung gnyen med pa dag gi⁷ mgon dang⁸ skyabs dang dpung (P. 286a) gnyen du gyur pa yod gyi⁹ / khyod dang ba'i yid dang / shin tu spro ba'i yid kyis 'gro ba mtha' dag yul du byas te / de las skyabs su 'gro ba gyis shig / (N. 282a) de la sri zhu dang / bsnyen bkur tshul bzhin du bya ba'i phyir mchod pa'i yo byad 'byor pa ci yod pas tshogs par gyis shig

ces brjod par bya'o // de nas slob ma des pus mo gnyis sa la btsugs shing thal mo sbyar nas me tog phul te / 'di skad du /

skyes bu gtso bo dgongs su gsol //

thog ma med nas 'di bar du //

bdag ni 'khor bar 'khor gyur te //¹⁰

sdug bsngal rnams kyis¹¹ shin tu dub //

gang gis sdug bsngal mthar (G. 394a) 'byin pa'i //

lam de khyod kyis bstan du gsol //¹²

zhes lan gsum du brjod par bya'o // de nas bla ma des phyogs bcu'i 'jig rten gyi khams kyi dkon mchog thams cad yul du byas la / lus kyi bkod pa brjod du med par mos la / lus re re la mgo brjod du med pa dang¹³ /¹⁴ mgo re re la lce brjod du med par mos te / sngar brjod pa'i

1 NP //, 2 N *bzhugsu*, 3 PN //, 4 GNP //, 5 GNP *gis*, 6 D om., 7 GNP *gis*,
8 CD *dang* /, 9 GNP *kyis*, 10 P /, 11 P *kyi*, 12 GNP om., 13 GNP om., 14 N om.

lus dang ngag gi mchod pa dang / zang zing gi mchod pa rgya (D. 248b) che ba dang / sdig pa bshags pa dang / rjes su¹ yi rang ba dang / bskul ba dang / gsol la² gdab pa dang / yongs su³ bsngo ba dag ni mchod pa rnam pa⁴ bdun zhes bya ba yin la / mchod pa rnam pa bdun po de'i rjes la skyabs su⁵ 'gro ba bya'o //

de ltar skyabs su⁶ song ba des skyabs su⁷ 'gro ba'i bslab pa bsrung bar bya ste / lha gzhan la phyag mi btsal ba dang / gzhan la gnod pa dang 'tshe ba spang ba dang / mu stegs can dang mi 'grogs⁸ shing de dag la bsnyen bkur mi bya ba dang / dkon mchog gsum gyi khyad par dang / yon tan rjes su⁹ dran pas yang dang yang du skyabs su¹⁰ 'gro ba dang / bka' drin chen (C. 253b) po rjes su dran pas dus rtag tu mchod pa la brtson zhing bza' ba dang btung ba'i phud kyang dbul ba dang / snying rje rjes su¹¹ dran pas 'gro ba gzhan yang tshul 'di lta (P. 286b) bu la nye bar dgod pa dang / bya ba gang byed pa dang / dgos pa ci yod pa na dkon mchog (N. 282b) gsum la mchod nas gsol (G. 394b) ba 'debs shing 'jig rten pa'i thabs gzhan spangs pa'o¹² //

phan yon ni gsum 'thob ste / 'di ltar rgyu'i dus dang / lam gyi dus dang / 'bras bu'i dus so // dang po ni tshe rabs 'di dang gzhan gyi phan yon te bla ma las shes par bya'o //

de ltar skyabs su¹³ song ba'i phan yon shes pa des nyin lan gsum dang mtshan lan gsum du skyabs su 'gro bar bya zhing /¹⁴ dkon mchog gsum tha na bzhad gad kyi phyir ram / srog gi phyir gtang¹⁵ bar mi bya zhing bsrung bar bya'o //

de ltar skyabs su¹⁶ 'gro ba khyad par can bstan nas / da ni byang chub tu sems bskyed pa bstan pa'i phyir /

de nas sems can thams cad la </> [BPP 37]

zhes pa la sogs pa tshig rkang sum cu rtsa bzhis bstan te / de nas zhes pa ni skyabs su¹⁷ 'gro ba byas nas zhes bya'o // sems can thams cad ces pas ni sems bskyed pa'i dmigs pa bstan te / de yang sems can ni 'di tsam du zad do zhes tshad gzung¹⁸ bar mi nus te / mdo las

gal te phyogs bcu'i 'jig rten gyi¹⁹ khams thams cad chu'i dkyil 'khor du gyur la / skyes bu zhig gis²⁰ lo brgya phrag stong stong na spu'i rtse mo zhig gis²¹ chu

1 N rjesu. 2 GNP ba. 3 N yongsu. 4 G om. rnam pa. 5 N skyabsu. 6 N skyabsu.
7 N skyabsu. 8 D 'grogs, P 'gyogs. 9 N rjesu. 10 N skyabsu. 11 N rjesu. 12 CD spang ba'o.
13 N skyabsu. 14 GNP add dkon mchog gsum skyabs su 'gro bar bya zhing /. 15 GP btang.
16 N skyabsu. 17 N skyabsu. 18 GNP bzung. 19 GNP gyis. 20 GNP gi. 21 GNP gi.

de las 'thor bar byed na chu'i dkyil 'khor¹ ni zad par (D. 249a) 'gyur gyi² / sems can gyi
khams ni zad par 'gyur ba med do
zhes gsungs pa dang / 'Phags pa Kun³ bzang po'i spyod pa'i smon lam gyi rgyal po las
kyang /

(G. 385a) nam mkha'⁴ mthar thug gyur pa ji tsam par //

sems can ma lus mtha' yang de tsam mo //^{5, (26)}

zhes gsungs so // de lta bu'i sems can yul du byas nas sems bskyed par bya'o //

byams pa'i sems ni sngon 'gro bas //⁶ [BPP 38]

zhes pa ni mar 'du shes pa las drin du gzo⁷ ba'i sems 'byung ba ni (P. 287a) byams
pa'o // byams pa'i sems las snying (C. 254a) rje'i sems 'byung la /⁸ snying rje'i sems las
byang chub (N. 283a) kyi sems 'byung bas na bdag⁹ gis 'dir /¹⁰

byams pa'i sems ni sngon 'gro bas //¹¹ [BPP 37]

zhes smras¹² so // tshig rkang pa bdun ni dkyus ji lta ba nyid do //

byang chub sems ni bskyed par bya //¹³ [BPP 46]

zhes bya ba ni gsum la skyabs su¹⁴ 'gro ba byas pa'i rjes¹⁵ la yang bdag la 'byor pa ci yod pas
dkon mchog gsum dang bla ma dge ba'i bshes gnyen la mchod pa dbul ba tshul bzhin du
byas la / bla ma'i spyang sngar maṇḍala byas te / bsam pa bzang po g-yo sgyu¹⁶ dang bral bas
bla ma 'di ni sangs rgyas mngon sum na bzhugs pa nyid yin no snyam du bsams la / dus
gsum gyi¹⁷ sangs rgyas thams cad kyis mdzad pa de dag ma lus par bdag gis rdzogs par
bya'o zhes bsams la¹⁸ pus mo gnyis la btsugs pas me tog phul la / thal mo legs par sbyar la
'di skad du /

srid pa'i 'khor lo rnam sbyong ba //

khyod zhabs pad ma spangs nas ni //

kun mkhyen ye shes phung po can //

gtso bo gzhan la skyabs ma mchis //

'gro ba'i (G. 395b) dpa' po¹⁹ thub chen gyis //

bdag la bka' drin stsal du gsol //

byang chub sems mchog bla med pa //

dam pa de ni bdag la stsol //²⁰

(26) *Bhadracarīpranīdhānarājā* 46ab.

1 GNP om. 2 GNP *gyur gyis*. 3 G *kun tu*. 4 GN *namkha'*. 5 GNP om. 6 GNP om.
7 N *gzod*. 8 N //, CD om. 9 P *dag*. 10 GNP om. 11 GNP om. 12 CD *smos*. 13 GNP om.
14 N *skyabsu*. 16 N *rjesu*. 16 GNP *rgyu*. 17 GNP *gyis*. 18 C *la /*. 19 G bo. 20 GNP om.

zhes lan gsum du brjod par bya'o //

de nas bla ma dge ba'i bshes gnyen des phyogs bcu'i 'jig rten gyi khams kyi sangs rgyas
bcom ldan 'das dang / byang chub sems dpa' sems dpa' chen po sa chen¹ po la bzhugs pa
thams cad dang / sngon dang da ltar gyi² bla ma dge ba'i bshes gnyen dag spyen drangs te /
de dag gi spyen sngar (D. 249b) 'Phags pa bZang po spyod pa dang / byang chub sems dpa'i
sPyod pa la 'jug pa'i cho gas rgyud legs par dag par bya'o // de ltar snod shin tu sbyangs nas
bla ma la slob ma des yang (P. 287b) lag pa me tog dang bcas pas gsol ba³ gdab par bya'o //
bla ma des rnyed pa dang / bkur sti dang / grags pa dang / sgra dang / (N. 283b) tshigs su
bcad pa dang / zang zing dang bcas pa'i sems (C. 254b) med pas 'di snyam du /⁴ e⁵ ma ngo
mtshar ro // 'jigs pa chen po'i dus 'dir 'di lta bu'i sems can dam pa 'byung ba ni ngo mtshar ro
zhes bsam pa dang / lhag pa'i bsam pa bzang pos cho ga bya'o //

de yang 'dzam bu'i gling na⁶ sngon gyi slob dpon rnam kyi dgongs pa tha dad par gyur
te / slob dpon rgyal po Indra⁷ bhū⁸ ti dang / slob dpon 'phags pa Klu sgrub dang /⁹ slob dpon
'phags pa Shānta¹⁰ de ba dang / ¹¹-slob dpon 'phags pa Thogs med dang / ¹¹ slob dpon 'phags
pa Tsandra go mi (G. 396a) dang / slob dpon Daṃṣṭra¹² se na dang / slob dpon dPa' bo
dang / slob dpon Shān¹³ ta ra te la sogs pa mkhas pa chen po de dag gi¹⁴ dgongs pa ni 'di ltar
tha dad par 'gyur te / dang por ni byang chub kyi sems de nyid la tha dad par gyur¹⁵ to //
gnyis par ni byang chub kyi sems de'i cho ga la tha dad par gyur to // gsum par ni byang
chub kyi sems de skye ba'i tshul la'o // bzhi par ni sems de'i bslab bya'i tshul la dad par gyur
te /

don dang po de la slob dpon kha cig gi zhal nas

mos pas spyod pa la¹⁶ 'jig rten pa'i lam gyis bsdu pa'i sems de ni smon pa'i sems
yin no

zhes gsungs so // la la'i zhal nas ni

ji srid dmigs pa dang bcas pa'i sems de ni kun rdzob kyi rnam pa ste / smon pa'i
sems so

zhes bzhed do // gzhan ni

tshogs kyi lam pa thar pa'i cha dang mthun pa'i dge ba'i rtsa ba bskyed pa'i sems
de ni smon pa'i sems yin no¹⁷

1 G om. *sa chen.* 2 PN *gyis.* 3 P *pa.* 4 NP om. 5 P *i.* 6 CD *ni.* 7 NP *in dra.*
8 GNP *bhu.* 9 P // . 10 GNP *shān ta.* 11 CD om. 12 GNP *daṃṣṭa.* 13 GNP *shan.*
14 GNP *gis.* 15 C 'gyur. 16 CD om. 17 GN, *no /, P no //.*

zhes bzhed do // kha cig ni

bsod nams mngon par 'du bya ba dang mi ldan pa'i sems ni smon pa'i sems yin
no

zhes bzhed do // la la ni /¹

'gro bar 'dod dang 'gro ba yi //²

zhes pas (P. 288a) rdzogs pa'i byang chub yul du byed pa tsam de ni smon pa'i
sems yin no

zhes bzhed do // de ma yin pa gzhan yang yod de gzhung (N. 284a) mangs par (D. 250a)
'gyur ro //

gnyis pa'i don la yang (G. 396b) tha dad par gyur³ te / de dag nyid kyis⁴ mdzad pa'i
gzhung de dang der blta bar bya'o //

gsum pa'i don la yang kha cig ni

gang zag gi drung du byang chub kyi sems bskyed pas kyang de skye bar

bzhed do // la la ni

sangs rgyas kyi spyen sngar ma yin par sems bskyed par mi bya'o

zhes bshad do // (C. 255a) gzhan dag ni 'di skad du /

byang chub kyi sems skye ba ni rnam pa bzhi'i tshul gyis skye bar 'gyur ro

zhes bzhed do //

don 'di⁵ bzhi pa la yang tha dad par gyur te / kha cig gi zhal nas

byang chub sems dpa' ni lnga ste / sems dang po bskyed pa dang / spyod pa la 'jug
pa dang / phyir mi ldog pa dang / mi skye ba'i chos la bzod pa thob pa dang /⁶ skye ba
gcig gis thogs pa'o // de la snga ma gnyis kyi bslab pa ji snyed pa'i

zhes bzhed do // la la⁷ ni

mdo las gsungs pa thams cad bsrung bar bya ba yin no

zhes bzhed do // la la ni

tshogs kyi lam pa'i bslab pa ji snyed pa bsrung bar bya'o

zhes bzhed do // gzhan dag ni

bslab pa 'di dang 'di lta bu

zhes mi bzhed do // kha cig ni

1 GNP om /. 2 N /. 3 D 'gyur. 4 GNP kyi. 5 GNP om. 'di. 6 P //. 7 CD las.

skyabs su 'gro ba'i bslab pa'i thog tu *sDong po bkod pa dang / dGe ba'i rtsa ba yongs su*¹ 'dzin pa'i mdo dang /² *Dad pa'i stobs bskyed pa'i mdo* la sogs par yang bshad mod kyī / re zhig 'Phags pa 'Od srungs kyis zhus pa'i mdo las byang chub kyī sems brjed par 'gyur ba dang / brjed par mi 'gyur ba'i (G. 397a) chos brgyad bsrung bar bya'o

zhes bzhed do // de dag ni mtshon pa tsam dang / 'di ltar sngon gyī mkhas pa chen po de dag gi lugs thams cad 'dir bkod par gyur na ni gzhung shin tu mangs par (P. 288b) 'gyur ro //

slob dpon chen po de rnams ni theg pa chen po'i lam la tshad ma'i skyes bur gyur pa / byams pa chen po dang snying rje chen po la goms (N. 284b) pa / byang chub kyī sems rnam pa gnyis³ la thugs brtan pa'o // de la slob dpon kha cig gis phyag rgya chen po'i dngos grub brnyes pa'o // la las ni bden pa gzigs pa'o // la las ni 'jig rten chos mchog chen po brnyes nas sprul pa'i sku las gdams ngag thob pa dag yin pa dang / mdo nyid na yang de dag ji ltar bzhed pa bzhin du bcom (D. 250b) ldan 'das kyis gsungs pas / de dag ni lam chen po nyid yin no zhes khong du chud par bya'o // 'on kyang rang rang gi bla ma dag gis ji ltar gnang ba'i lugs de (C. 255b) gzung bar bya'o zhes bdag gi bla ma dag gsung ngo //

de la 'dir re zhig slob dpon 'phags pa Klu sgrub dang /⁴ slob dpon 'phags pa Thogs med dang /⁴ slob dpon 'phags pa Shān ta de ba dag smon pa byang chub kyī sems bskyed pa'i cho ga'i tshul 'di la tha dad pa med cing mthun pa dang / da ltar bdag gi bla ma rje btsun dpal Byang chub bzang po dang /⁵ bla ma rje btsun Su warnṇa dwī pa dag kyang 'phags pa de dag gi rjes su⁶ 'brang ba dang / bdag kyang bla ma rjes⁷ btsun de dag gi rjes su⁸ (G. 397b) 'brang ba yin pas bdag la slob ma'i tshogs kyis gsol ba btab nas byas pa'i cho ga'i thabs cung zhig bdag gis⁹ bkod pa ni 'phags pa Klu sgrub dang / 'phags pa Thogs med dang / 'phags pa Shān ta de ba dag gi lugs yin no zhes khong du chud par bya'o // de dag ni zhar la bshad pa'o //

de la byang chub kyī sems kyī ljon shing skye ba la chu'i rlan lta bu'i chos gnyis sngon du 'gro ba yin te / 'di ltar sems sbyangs pa¹⁰ dang / bla ma la yon dbul ba'o // bla ma la yon dbul ba yang 'Phags pa bsKal pa bzang po'i (P. 289a) mdo dang / sNying rje chen po las ji ltar 'byung ba lta bu'o //

1 N *yongsu*. 2 N // . 3 P *gnyas*. 4 G written in small letters in the margin. 5 D om / .
6 N *rjesu*. 7 N *rje*. 8 N *rjesu*. 9 GNP *gi*. 10 CD *sbyang ba*.

sems sbyang ba ni 'Phags pa Kun tu bzang po'i smon lam sngar ji skad du¹ brjod pa dang² / yang Byang chub sems dpa'i spyad pa la 'jug pa'i tshul gyis bya ba yin no //

de nas skye bo chen po'i chos³ lugs shing rta chen po'i (N. 285a) lam bla ma gcig⁴ nas gcig tu brgyud pa slob dpon chen po Shān ta de ba'i cho ga'am / slob dpon chen po Thogs med kyi cho gas tshad med pa bzhi po bsgom pa sngon du song bas bla na med pa'i byang chub tu sems bskyed par bya'o //

de ltar byang chub tu sems bskyed pa'i slob ma'i rgyud de las / sems kyi khyad par ji lta bu zhig skye zhe na / don 'di la dgongs nas bcom ldan 'das kyis 'Phags pa blo gros mi zad pas bstan pa'i mdo las gsungs te / ji skad du /

Blo gros mi zad pas (G. 398a) smras pa / btsun pa Shā⁵ ra dwa⁶ ti'i bu byang chub sems (D. 251a) dpa' rnam kyi sems dang po bskyed pa de ni mi zad pa'o // de ci'i phyir ce na / ma 'dres pa'i phyir ro // sems de ni nyon mongs pa thams cad dang ma 'dres par skyes so // theg pa gzhan la 'dod pa med pas sems de ni ma 'brel bar skyes so // phas kyi rgol ba thams cad kyis mi 'phrogs pas sems de ni sra bar skyes so // sems de ni bdud thams cad kyis mi phyed par skyes so // dge ba'i rtsa ba thams cad yang dag par sgrub pas sems de brtan par skyes so // 'dus byas thams cad mi rtag par shin tu rig pas sems de ni rtag par skyes so // sangs rgyas kyi chos thams cad yang dag par sdud pas sems de ni mi g-yo bar skyes so // log par sgrub pa thams cad dang bral bas sems de ni mi rdzi⁷ bar skyes so // mi bskyod⁸ pas sems de ni rtag par skyes so // gnyen po med pas (P. 289b) sems de ni dpe med par skyes so // chos thams cad 'big pas sems de ni rdo rje lta bur skyes so // bsod nams kyi tshogs tshad med pa bsags pas sems de ni mu med par skyes so // sems can thams cad la sems de ni mnyam par skyes so // rang bzhin gyis⁹ kun nas nyon mongs pa (N. 285b) med pas sems de ni rnam par dag par skyes so // shes rab kyi 'od gsal ba'i¹⁰ phyir sems de ni dri ma (G. 398b) med par skyes so // lhag pa'i bsam pa ma bor bar sems de ni shin tu nges par skyes so // byams pa nam mkha'¹¹ dang mnyam zhing mtshungs pas na sems de ni yangs par skyes so // sems can thams cad go 'byed pas sems de ni rgya che bar¹² skyes so // sems¹³ chags pa med pa'i ye shes la btang bas sems de ni sgrub pa med par

1 CD. om. 2 N *par* for *pa dang*. 3 G om. 4 N *cig*. 5 GN *sha*. 6 NP *dwā*.
7 CD *brdzi*. 8 CD *bskyed*. 9 N *gyi*, G om. 10 P *pa'i*. 11 GN *namkha'*.
12 G *cher* for *che bar*. 13 GNP om.

skyes so //snying rje chen po rgyun ma chad pas¹ sems de ni thams cad kyi rjes su²
 song bar skyes so³ // yongs su⁴ bsngo ba'i cho ga shes pas na sems de ni rgyun ma
 chad par skyes so // thams cad mkhyen pas rab tu ston pas na sems de ni sngon du
 'gro bar skyes so // theg pa gzhan la ma zhugs⁵ pas na sems de ni blta bar 'os pa'o // de
 ni sems⁶ (C. 256b) thams cad kyis⁷ bltar mi mthong bar skyes so // de ni bsod nams
 kyi (D. 251b) tshogs kyis brgyan par skyes so⁸ // de ni ye shes kyi tshogs kyis rab tu
 rtogs te skyes so // de ni sangs rgyas kyi chos thams cad kyi sa bon du skyes so // de
 ni chos thams cad kyis⁹ mi shigs¹⁰ par skyes so // de ni bde ba'i dngos po thams cad
 kyi gnas¹¹ su skyes so // de ni sbyin pa'i tshogs kyis¹² bsags te skyes so // de ni tshul
 khirms kyi tshogs kyis smon lam gyi¹³ 'phags par skyes so // de ni bzod pa'i tshogs
 kyis bsnyen bkur bar skyes so¹⁴ // de ni brtson 'grus kyi tshogs kyis rgyal bar dka' bar
 skyes so // de ni bsam gtan gyi tshogs kyis zhi ba'i (G. 399a) mtshan nyid du
 (P. 290a) skyes so // de ni shes rab kyi tshogs kyis thogs pa med par skyes
 so¹⁵ // byams pa chen po bsags pas de ni gnod pa med par skyes so // snying rje chen
 po bsags pas de ni rtsa ba brtan par skyes so // de ni dga' ba chen po bsags te mgu ba
 dang mos pa dang mchog tu dga' ba la gnas par skyes so // de ni btang snyoms chen
 po gnas pa ste bde dang sdug bsngal gyis¹ mi bsgul bar (N. 286a) skyes so // de ni
 sangs rgyas kyi byin gyi rlabs² kyis brlab³ par skyes so // dkon mchog gsum gyi rigs
 rgyun mi bca'd pa'i phyir tshul rgyun mi 'chad par skyes so // de ni phyogs bcu'i sangs
 rgyas kyi zhing thams cad kyi 'khor du rab tu grags par skyes so // btsun pa Sha⁴ ra
 dwa⁵ ti'i bu thams cad mkhyen pa'i sems 'di 'dra ba la / zad pa gang yang yod dam /
 smras pa⁶ / rigs kyi bu de ni ma yin te / gang thams cad mkhyen pa'i sems 'di lta
 bu zad par 'dod pa ni nam mkha'⁷ zad par 'dod do //
 Blo gros mi zad pas smras pa / btsun pa Sha⁸ ra dwa⁹ ti'i bu¹⁰ de bzhin du thams
 cad mkhyen pa'i sems de ni mi zad pa ste / byang chub kyi sems de ni de'i rtsa bar
 skyes pas na de'i phyir de ni mi zad pa'o⁽²⁷⁾

(27) *Akṣayamatīnirdeśasūtra*. Braarvig ed., pp. 20-21.

1 GNP *pas na*. 2 N *rjesu*. 3 N *skyeso*. 4 N *yongsu*. 5 P *zhug*. 6 CD *sems can*.
 7 GNP *kyi*. 8 N *skyeso*. 9 GNP *kyi*. 10 GNP *shig*. 11 G *gsags*. 12 GNP *kyi*.
 13 GNP *gyis*. 14 N *skyeso*. 15 N *skyeso*. 16 GNP *gyi*. 17 GNP *brlabs*. 18 GNP *brlabs*.
 19 C *shā*. 20 NP *dwā*. 21 P *la*. 22 N *namkha'*. 23 C *shā*. 24 NP *dwā*, G *radwa*.
 25 GNP *bu /*.

zhes bya ba la sogs pa gsungs so // yang mdo de nyid las

bsam¹ pa de ni ma byas pas na bcos ma ma yin pa'o // g-yo ba med pas na ma byas
pa'o // (C. 257a) (G. 399b) rab tu rtogs pas g-yo ba med pa'o // sgyu med pas rab tu
rtogs pa'o // sgyu med pas rab tu² drangs pa'o³ // dag pa'i⁴ sgyu med pa'o // gsal bas
gya gyu med pa'o⁽²⁸⁾

zhes bya ba la sogs pa (D. 252a) rgyas par gsungs te / mdo de nyid du blta bar
bya'o //

de lta bu'i thun mong ma yin pa'i sems / 'jig rten thams cad las mngon par 'phags pa'i
sems / sems can thams cad ma btang ba'i sems de ni sa chen po la rab tu (P. 290b) zhugs pa'i
byang chub sems dpa' chen po rnams kyis de nyid sbyangs shing dag par byas / de ma
nyams par byas shing bsrungs / de sa nas⁵ sar spel te / de ni sangs rgyas thams cad kyi thugs
yin pas de bskyed phan chad byang chub sems dpa' de la bstan pa la dga' ba'i lhas bsrung ba
dang / 'chi ba'i dus su⁶ yid dga' bar 'chi ba dang / bar ma do dang (N. 286b) ma'i mngal dang
bu chung gi dus su yang lha dag gis⁷ bsrung ba dang / dge ba'i rtsa ba thams cad chud mi za
ba dang / sems bsod nams kyi rgyun dang ldan pa yin te / slob dpon Zhi ba'i lhas spyod 'jug
las /

dge ba gzhan kun chu shing bzhin du ni //

'bras bu smin nas zad par 'gyur ba nyid //⁸

byang chub sems kyi ljon shing rtag par yang //

'bras bu mi zad rab tu 'phel bar 'gyur //^{9, (29)}

zhes gsungs so // de bas na byang chub kyi sems de mi zad pas 'jig rten dang 'jig rten
(G. 400a) las 'das pa'i lam gyi chos thams cad dang / 'bras bu sangs rgyas kyi sa'i chos thams
cad mi¹⁰ zad pa yin no //

de bas na dus der sems de lta bu skyes¹¹ pas na /

de ltar smon pa'i sems dag ni //

bskyed pa'i yon tan gang yin pa //¹² [BPP 47-48]

zhes bya ba smras te / de lta bu'i sems de'i phan yon smra bar 'dod nas /

de ni sDong po¹³ bkod pa yi¹⁴ //¹⁵ [BPP 49]

(28) *Akṣayamatīnirdeśasūtra*. Braarvig ed., p. 23.

(29) *Bodhi(sattva)caryāvatāra* 1.12.

1 P *bsams*. 2 GNP om. *rab tu*. 3 CD *drang ba'o*. 4 CD *pas*. 5 GNP *gnas*. 6 N *dusu*.
7 GNP *gi*. 8 N /. 9 GNP om. 10 GNP *ma*. 11 GNP *skyed*. 12 GNP /. 13 GNP *bu*.
14 CD *pa'i*. 15 N /, CD om.

mdo las 'phags pa Byams pas Nor bzangs¹ la 'di skad du bshad de /

rigs kyi bu byang chub kyi sems ni sangs rgyas kyi chos thams cad kyi sa bon lta bu'o // 'gro ba thams cad kyi chos dkar po rnam par 'phel bar byed pas (C. 257b) zhing lta bu'o // 'jig rten pa thams cad rten pas sa lta bu'o // dbul ba thams cad yang dag par 'joms pas rnam thos kyi bu lta bu'o // byang chub sems dpa' thams cad yongs su² bsrung bas³ pha lta bu'o // don thams cad yang dag par sgrub pas yid bzhin gyi nor (P. 291a) bu'i rgyal po lta bu'o // bsam pa thams cad yongs su⁴ (D. 252b) rdzogs par byed pas bum pa bzang po lta bu'o // nyon mongs pa'i dgra thams cad pham par byed pas mdung thung lta bu'o // tshul bzhin ma yin pa'i yid la byed pa rab tu 'gebs⁵ pas go cha⁶ lta bu'o // nyon mongs pa'i mgo ltung bar byed pas ral gri lta bu'o // nyon mongs pa'i shing gcod par (C. 400b) byed pas sta re lta bu'o // 'tshe ba thams (N. 287a) cad las skyob pas mtshon cha lta bu'o // 'khor ba'i chu bo'i nang nas steng du 'byin pas mchil pa lta bu'o // sgrub pas khebs pa thams cad 'thor bar byed pa'i⁷ rlung gi dkyil 'khor lta bu'o // byang chub sems dpa'i spyod pa dang smon lam thams cad mdor bsdus pas mdor bstan pa lta bu'o // lha dang mi dang lha ma yin dang bcas pa'i 'jig rten thams cad la mchod rten lta bu ste /⁸ rigs kyi bu de lta byang chub kyi sems ni yon tan de dang yon tan gyi bye brag tshad med pa gzhan dang yang ldan no⁽³⁰⁾ zhes gsungs te / de bzhin du rab tu bshad do⁹ // de bzhin du *Khyim bdag dpa' sbyin gyis*¹⁰ *zhus pa'i mdo'i* tshig 'og na bkod pa yang 'dir drang bar bya'o // gzhan mdo du ma dang / 'phags pa Klu sgrub dang / slob dpon Zhi ba'i¹¹ lha la sogs pas kyang phan yon mang du gsungs pa yod kyang 'dir yi ge mangs pa'i 'jigs pas ma bkod do // yang de nyid bstan pa'i phyir /

de yis mdo bklag pa 'am bla ma las nyan¹² te //¹³

rdzogs pa'i byang chub sems kyi yon tan tshad med pa //

rnam par shes par byas la de gnas rgyu mtshan du //

yang dang yang du sems ni bskyed par bya //¹⁴ [BPP51-54]

zhes bya ba smras te / mdo bklag pa 'am zhes bya ba ni *bSlab pa kun las btus pa* las /

(30) *Gaṇḍavyūhasūtra*. Suzuki ed., pp. 494-496.

1 GNP *bzang*. 2 N *yongsu*. 3 P *bsrungs pas*. 4 N *yongsu*. 5 P *'gegs*. 6 G *chog*. 7 CD *pas*. 8 N // . 9 G *bshado*. 10 GNP *gyi*. 11 P *pa'i*. 12 CD *mnyan*. 13 GNP /. 14 GN /.

(G. 401a) byang chub sems dpa'i bslab pa'i gzhi rnams ni phal cher mdo sde dag las (C. 258a) snang ste / (P. 291b) mdo sde de dang de dag las byang chub sems dpa'i kun du spyod pa dang / byang chub sems dpa'i bslab pa'i gzhi rnams bcas pa'o // de lta bas na de ma bltas na ltung ba byung na yang mi shes na spong bar 'gyur du 'ong bas rtag tu mdo sde lta¹ ba la gus par bya'o //^{2, (31)}

zhes gsungs pa dang / yang de nyid kyi rtsa ba las /

dge ba'i bshes gnyen mi btang³ zhing //

mdo sde dag la rtag blta bas //^{4, (32)}

zhes pa dang / slob dpon Zhi ba'i (D. 253a) (N. 287b) lhas 'di skad du /

mdo sde dag ni blta bar bya //

Nam mkha'i⁵ snying po'i mdo sde ni //

thog ma nyid du blta bar bya //

'phags pa Klu sgrub⁶ kyis mdzad pa'i //

mDo rnams kun las btus pa yang //⁷

de yi 'og tu blta⁸ bar bya //^{9, (33)}

zhes gsungs pas¹⁰ thog mar mdo sde blta ba la goms par bya'o // bla ma las mnyan te zhes bya ba ni bla ma ni sems skyed¹¹ par byed pa de nyid de / de yang 'di ltar 'phags pa Thogs med nas brgyud pa dang / slob dpon Zhi ba'i lha nas brgyud pa'i bla ma'o // de yang bla ma bsten pa la dgos pa ci yod snyam pa la¹² yod par mthong ste / ji skad du¹³ 'Phags pa sDong po (G. 401b) *bkod pa las / dPal 'byung ba 'di skad du*

rigs kyi bu dge ba'i bshes gnyen gyis¹⁴ yang dag par zin pa'i byang chub sems dpa' ni ngan 'gror mi 'gro'o // dge ba'i bshes gnyen gyis bskyangs pa'i byang chub sems dpa' ni bslab pa 'gal bar mi byed do¹⁵ // dge ba'i bshes gnyen gyis¹⁶ bsams pa'i byang chub sems dpa' ni 'jig rten pa las mngon par 'phags so // dge ba'i bshes gnyen la bsnyen bkur byas pa'i byang chub sems dpa' ni spyod pa thams cad la ma brjed par

(31) *Śikṣāsamuccaya*. Bendall ed., pp. 41.10-12.

(32) *Śikṣāsamuccaya* 6cd.

(33) *Bodhi(sattva)caryāvatāra*. 5.104, 106.

1 G *de dang de dag las byang chub sems dpa'i kun tu spyod pa dang / byang chub sems dpa'i bslab blta*.

2 CGNP om. 3 CD *gtang*. 4 GNP om. 5 N *namkha'i*. 6 GNP *sgrubs*. 7 P/. 8 GNP *lta*.

9 GNP om. 10 P om. 11 GNP *bskyed*. 12 GNP *la /*. 13 CD *du /*. 14 GNP *gyi*.

15 N *byedo*. 16 GNP *gyi*.

gnas so // dge ba'i bshes gnyen gyis yongs su¹ bzung ba'i byang chub sems dpa' ni las dang nyon mongs pa thams cad kyis thub par dka'o //

dge ba'i bshes gnyen ni bya ba ma yin pa² rnam khong (P. 292a) du chud par byed do // bag med pa'i gnas las bzlog pa'o // 'khor ba'i grong khyer nas 'don pa'o //

rigs kyi bu de (C. 258b) bas na de ltar yin la rgyun ma chad par dge ba'i bshes gnyen rnam kyi drung du 'gro bar bya'o // khur thams cad khur bas yongs su³ mi skyo ba'i phyir sa lta bu'i sems dang / mi phyed pa'i phyir rdo rje lta bu'i sems dang / mi khro bas khyi lta bu'i sems dang / sdug bsngal thams cad kyis mi bsgul ba'i phyir khor yug (N. 288a) lta bu'i sems dang / las thams cad la mi smod pas bran⁴ lta bu'i sems dang / nga rgyal dang che (G. 402a) ba'i nga rgyal nam par spong bas⁵ phyag dar ba lta bu'i sems dang / khur lci ba khur bas theg pa lta bu'i sems dang / 'gro zhing 'ong (D. 253b) bas mi skyo bas gru⁶ lta bu'i sems dang / dge ba'i bshes⁷ gnyen gyi ngor⁸ blta bas bu mdzangs⁹ pa lta bu'i sems kyis¹⁰ dge ba'i bshes gnyen la bsnyen bkur¹¹ bya'o //

rigs kyi bu khyod kyis¹² bdag la ni nad¹³ pa'i 'du shes bskyed par bya'o¹⁴ // dge ba'i bshes gnyen la sman pa'i 'du shes dang / rjes su¹⁵ bstan pa la ni sman gyi 'du shes dang / nan tan nyams su len pa la ni nad 'tsho ba'i 'du shes dag bskyed par bya'o⁽³⁴⁾

zhes gsungs pa dang / gzhan yang 'phags¹⁶ pa Nor bzangs kyis¹⁷ dge slong rgya mtsho'i sprin gyi skabs nas 'byung ba dang / 'Phags pa Drag shul can gyis¹⁸ zhus pa las kyang

khyim bdag gal te byang chub sems dpa' lung gnod¹⁹ pa 'am / kha ton bya ba 'am / sbyin pa dang ldan pa'am / tshul khirms dang ldan pa 'am / bzod pa dang ldan pa 'am / brtson 'grus dang ldan pa 'am / bsam gtan dang ldan pa 'am / shes rab dang ldan pa 'am / byang chub sems dpa'i lam gyi tshogs bsags²⁰ pa dang ldan pa'i tshig bzhi pa'i tshigs su bcad pa su las mnyan tam / lung nos sam blangs pa'i slob dpon de la de²¹ chos kyis²² gus par bya'o // (P. 292b) ming dang tshig dang yi ge ji snyed pa de¹ snyed

(34) *Gaṇḍavyūhasūtra*. Suzuki ed., pp. 462-464.

1 N yongsu. 2 GP om. 3 N yongsu. 4 P dran. 5 GNP ba. 6 G mgru. 7 D bshas.
8 G ngo bor. 9 G 'jings, P 'dzangs. 10 GNP kyi. 11 D bskur. 12 NP kyi. 13 G nang.
14 P bskyed pa'o. 15 N rjesu. 16 N 'phad. 17 GNP bzang gyi. 18 GNP gyi. 19 CD nod.
20 CD sog. 21 GNP des. 22 GNP kyi.

kyis bskal (G. 402b) par gal te slob dpon la g-yo med par rnyed pa dang / bkur stis rim gro dang / bkur sti byas kyang khyim bdag da dung du slob dpon de la gus par bya ba yongs su² rdzogs pa ma yin na / chos ma yin pa gus par³ bya ba⁴ (C. 259a) lta ci smos⁽³⁵⁾

zhes gsungs pa dang / de bzhin du *Lag na rdo rje dbang bskur pa'i rgyud dang / Shes rab kyi pha rol tu phyin pa'i*⁵ 'Phags pa rTag tu ngu'i le'u dang / 'phags pa legs par sbyin pas ji ltar bla ma bsten (N. 288b) pa rnams ni de dang der blta bar bya'o // 'phags pa Thogs med kyis kyang bla ma bsten pa gsungs te / ji skad du *Byang chub sems dpa'i sa las* /

de la rnam pa du dang ldan na byang chub sems dpa' dge ba'i bshes gnyen du rig⁶ par bya /⁷ rnam pa du zhig gis ni dge ba'i bshes gnyen don yod pa yin / rnam pa du zhig dang ldan na dge ba'i bshes gnyen dad pa'i gzhi la gnas pa yin / byang chub sems dpa' dge ba'i bshes gnyen du gyur pa'i 'dul ba rnams dge ba'i bshes (D. 254a) gnyen gyi bya ba ni du zhig yod /⁸ byang chub sems dpa' dge ba'i bshes gnyen la bsten pa ni rnam pa du zhig yod /⁹ 'du shes dus ni byang chub sems dpa' dge ba'i bshes gnyen la chos mnyan par bya / byang chub sems dpa' dge ba'i bshes¹⁰ gnyen la chos nyan pa na gang zag chos smra ba de la gnas du zhig ni yid la mi byed par bya zhe na / (G. 403a) de la rnam pa brgyad dang ldan na byang chub sems dpa'i dge ba'i bshes gnyen rnams rnam pa thams cad rdzogs pa yin par rig par bya ste / byang chub sems dpa'i sdom pa'i tshul khriims rnams la gnas shing ma nyams pa dang skyon med par byed pas tshul khriims la gnas pa yin / blo ma byang ba ma yin pas mang du thos pa yin / bsgoms pa las byung ba'i dge ba gang yang rung ba thob cing rtogs¹¹ pa dang ldan pa yin / snying rje dang¹² ldan pas snying brtse¹³ ba can yin / (P. 293a) de tshe 'di la rang gi bde ba bor nas gzhan gyi don la sbyor ba yin / de gzhan la chos ston pa na bag tsha ba'i 'jigs pas dran pa dang spobs pa nyams pa med pas 'jigs pa med pa yin / gzhan dag gis brnyas pa dang 'phya ba dang bsting ba dang ngan du brjod pa mi 'dod pa'i tshig rnams dang sems (C. 259b) can log par zhugs pa rnam pa sna tshogs pa rnams bzod

(35) *Ugrapariṛcchāsūtra*. Tib. P. No. 760 (19), Zhi 328b4-8.

1 G om. *snyed pa de*. 2 N *yongsu*. 3 GNP *pa*. 4 GNP om. *bya ba*. 5 CD *pa*. 6 GNP *rigs*. 7 GP // . 8 P // . 9 NP // . 10 P om. *bshes*. 11 D *rtegs*. 12 D om. 13 G *rtse*.

pa yin / 'khor bzhi po dag chos bstan¹ pa (N. 289a) la stobs dang ldan zhing ngal ba med pas² yid³ yongs su⁴ mi skyo ba yin / tshig chos nyid las ma nyams shing gsal la tshig bya ba dang ldan pa yin no⁵ //

de la byang chub sems dpa' dge ba'i bshes gnyen de lta bu'i yon tan gyi⁶ rnam pa thams cad dang⁷ ldan pa ni rnam pa lngas⁸ dge ba'i bshes gnyes gyi bya ba don yod pa yin te /⁹ de ni snga nas (G. 403b) kyang gzhan dag la¹⁰ phan pa dang bde bar 'dod pa yin te / phan pa dang bde ba de ji lta bar shes pa yin / de blo phyin ci ma log pa yin / thabs gang dang chos bstan pa'i tshul gang gis sems can gang 'dul nus pa de la¹¹ nus shing mthu yod pa dang / yid yongs su¹² mi skyo ba yin / sems can tha ma dang 'bring po dang / khyad par du 'phags pa la phyogs 'dzin pa med par (D. 254b) snying rje snyoms pa yin no //

de la dge ba'i bshes gnyen de ni rnam pa lngas dad pa'i gzhi la gnas pa¹³ yin te / gang gi phyir gtam thos pas kyang shin tu dang bar byed na mngon sum du¹⁴ mthong na lta ci smos te / spyod lam rab tu zhi ba dang / spyod lam dang ldan pa dang / yan lag dang /¹⁵ nying lag mi 'gyur bas spyod lam phun sum tshogs dang / lus dang ngag dang yid kyi las kyi mtha' la god pa med cing 'gyur ba med pas brtan pa yin / gzhan dag la tshul 'chos pa'i phyir spyod lam brtan pa ltar mi 'chos pas tshul 'chos pa med pa yin / gzhan gyi chos kyi gtam mam / rnyed pa dang bkur sti la bdag dga' ba dang / rang gi rnyed pa dang bkur sti yang (P. 293b) gzhan la stobs par byed pas phrag dog med pa yin / yo byad bsnyungs shing yo byad bsnyungs pas 'tshogs¹⁶ chas rnyed do cog thams cad la gtong bas¹⁷ yo byad bsnyungs pa (G. 404a) yin no //

de la byang chub sems dpa' dge ba'i bshes gnyen du gyur pa de ni rnam pa lngas gdul¹⁸ ba gzhan dag la dge ba'i bshes gnyen gyi bya ba (N. 289b) byed de / gleng bar byed pa yin / dran par byed pa yin / 'doms par byed pa yin / rjes su¹⁹ ston par byed (C. 260a) pa²⁰ yin / chos ston par byed pa yin / tshig 'di dag gi dbye ba ni *Nyan thos kyi sar rig* par bya'o // gdams ngag dang rjes su²¹ bstan pa ni *sTobs kyi le'u* las rig par bya'o //

1 C bsten. 2 GNP pa. 3 GNP om. 4 GN yongsu. 5 G yino. 6 P gyis. 7 CD om.
8 CD lnga lngas. 9 GNP om. 10 GNP om. 11 G om. nus pa de la. 12 N yongsu. 13 G om.
14 N sudu for sum du. 15 CGNP om. 16 CD 'tshog. 17 D gtod pas. 18 GNP 'dul.
19 N rjesu. 20 C byed pa. 21 N rjesu.

de la byang chub sems dpa' dge ba'i bshes gnyen la brten pa ni rnam pa bzhis¹
yongs su rdzogs te / dus dus su nad g-yog dang / tha mal ba'i g-yog² byas pa dang /
gus pa dang / dga' ba dang / dus dus su gus par smra ba dang / phyag bya ba³ dang /
mngon du ldang ba dang / thal mo sbyar ba dang / 'dud par bya ba dang / mchod par⁴
bya ba dang / chos dang mthun pa'i gos dang / zas dang / mal cha dang / stan dang /
nad pa'i gsos sman dang /⁵ yo byad sbyin pas mchod pa dang / gnas bcas nas gzud pa⁶
dang / nyes pa dag 'chags pa dang / drung du 'gro ba dang /⁷ dri ba dang /⁸ nyan pa'o //

de la byang chub sems dpa' dge ba'i bshes gnyen las chos nyan par 'dod pas 'du
shes rnam pa lngas chos mnyan par bya (D. 255a) ste / dkon pa'i don gyis⁹ rin po
che'i 'du shes dang / shes rab rgya chen po 'thob pa'i rgyu'i don (G. 404b) gyis mig gi
'du shes dang / chos thams cad yang dag par ston pas snang ba'i 'du shes dang / bla na
med pa'i byang chub 'thob pa'i rgyu'i don gyis phan yon che ba'i¹⁰ 'du shes dang /
tshe¹¹ 'di la mya ngan las 'da' ba dang / rdzogs pa'i byang chub thob par byed pa zhi
gnas dang lhag mthong gi dga' ba kha na ma tho ba med pa'i rgyu'i don gyis kha na
ma tho ba med (P. 294a) pa'i 'du shes so //

de la byang chub sems dpa' dge ba'i bshes gnyen la chos nyan pa na / de la gnas
lngar yid la mi byed de / de tshul khrims nyams pa la¹² nyams so snyam du yid la mi
byed de / 'di ni tshul khrims nyams shing sdom pa la mi gnas pas bdag gis 'di las chos
mnyan par mi bya'o¹³ (N. 290a) snyam du yid¹⁴ la mi bya'o // rigs dma' ba la yang 'di
la bdag gis chos mnyan par mi bya'o snyam du yid la mi bya'o // chos la rton pas¹⁵
bya'i gang zag¹⁶ la rton pa mi bya'o // (C. 260b) don la rton par bya'i tshig 'bru la rton
par mi bya'o // byad dang gzugs ngan pa dang / tshig 'bru ngan pa la yang yid la mi
bya ste / gus pa dang bcas pas chos mnyan par bya'o // chos ni nams kyang gang zag
gi skyon gyis mi gos shing skyon can du mi 'gyur ba'i phyir ro¹⁷ // de la byang chub
sems dpa' dbang po rtul po gang / gang zag gi skyon rnams la sems mngon par
ldang¹⁸ zhing / chos nyan par mi 'dod pa de ni bdag nyid kho na la gnod cing shes rab
yongs su¹⁹ nyams par gyur par²⁰ rig par bya'o⁽³⁶⁾

(36) *Bodhisattvabūmi*. Wogihara ed., pp. 237-241.

1 P zhes. 2 P g-yogs. 3 GNP om. 4 NP pa. 5 GNP om. 6 GNP gzung ba. 7 GNP om.
8 CD om. 9 GNP gyi. 10 G ba med pa'i. 11 G de la byang chub sems tshe. 12 CD om.
13 GNP bya'o //. 14 P yin. 15 GNP par. 16 GN zags. 17 N phyiro. 18 GNP sdang.
19 N yongsu. 20 P bar.

zhes gsungs so // ¹-de bas na bla ma la brten² nas byang chub kyī sems kyī phan yon la mkhas par bya'o //

rtsa ba nyid la 'jug par bya ba ste

nyin mtshan du /

de yang dang yang du sems ni bskyed par bya [BPP 53-54]

zhes pa de ltar phan yon shes par byas nas / nyin lan gsum mtshan lan gsum du rtag tu yang dang yang du sems de spel ba'i phyir byang chub tu sems bskyed par bya'o // cho ga rgyas pa ma grub na yang / 'di skad du

sangs rgyas chos dang tshogs kyī mchog rnams la /

byang chub bar du bdag ni skyabs³ su mchi //

bdag gis sbyin sogs byas pa 'di dag gis /

'gro la phan phyir sangs rgyas 'grub par shog //(37)

ces byang chub kyī sems de spel bar bya'o // 'dir bshad par bya ste⁻¹ de bas na sangs rgyas kyī chos⁴ thams cad bla (P. 294b) ma la rag las pas na byang chub sems dpa' las dang po pas bla ma dge ba'i bshes gnyen mkhas pa rtag tu bsten par bya'o //

phan yon gzhan yang bshad de / byang chub sems dpa' khyim gyi nang na gnas pa dbang po rtul po kha cig la ni smon pa'i sems 'di nyid la brten nas rdzogs pa'i byang chub thob par (N. 290b) 'gyur bar⁵ gsungs te / (G. 405b) ji skad du bcom ldan 'das kyis *rGyal po la gdams pa'i mdo las /*

rgyal po chen po khyod ni 'di (D. 255b) ltar bya ba mang po⁶ byed pa mang ba ste /⁷ thams cad kyī thams cad rnam pa thams cad kyī thams cad du sbyin pa la bslab nas⁸ / shes rab kyī pha rol tu phyin pa'i bar la bslab par mi⁹ nus kyī¹⁰ / de bas na rgyal po chen po khyod yang dag par rdzogs pa'i byang chub la 'dun pa dang / dad pa dang / don du gnyer ba dang / smon pas 'gro yang rung / ¹¹'greng yang rung / ¹¹'dug kyang rung / nyal yang rung / sad kyang rung / za yang rung / 'thung yang rung / rtag par rgyun du dran par gyis la yid la zung ste sgoms shig / sangs rgyas dang¹² so'i sbye bo thams cad dang / bdag gi 'das pa dang / ma 'ongs pa dang / da ltar byung ba'i dge ba'i rtsa ba thams cad bsdu shing gzhol te rjes su yi rang bar gyis shig / rjes su¹³ yi rang ba mchog dang / nam mkha'¹⁴ dang 'dra ba dang / mya ngan las 'das pa dang

(37) *Cittotpādaividhi of Mañjuśrimitra ('Jam dpal bshes gnyen), Tib. D. No. 2561, Ngu 24b2-3.

1 CD om. 2 N rten. 3 N skyabsu. 4 G chos kyī chos. 5 GNP ba. 6 CD ba. 7 CD om / .
8 CD pa nas. 9 P ma. 10 GNP kyis. 11 G om. 12 CD dang po. 13 N rjesu. 14 N namkha'.

mtshungs pas rjes su yi rang bar gyis shig / rjes su¹ rangs² nas sangs rgyas dang
 (C. 261a) byang chub sems dpa' dang / 'phags pa nyan thos dang rang sangs rgyas
 thams cad la mchod par³ bya ba⁴ phul cig / phul nas sems can thams cad dang thun⁵
 mong du gyis shig / de nas sems can thams cad⁶ thams cad mkhyen pa'i bar du thob
 par (G. 406a) 'gyur ba dang / sangs rgyas kyi chos thams cad yongs su⁷ rdzogs par
 'gyur bar nyin gcig⁸ bzhin du dus gsum du bla na med pa yang dag par rdzogs pa'i
 byang chub tu sngos shig / rgyal po chen po khyod de (P. 295a) ltar zhugs nas⁹ rgyal
 po yang byed la rgyal po'i bya ba yang nyams par mi 'gyur zhing / byang chub kyi
 tshogs kyang yongs su¹⁰ rdzogs par 'gyur ro⁽³⁸⁾

zhes gsungs so¹¹ // slob dpon Zhi ba'i¹² lha'i zhal nas *bSlab pa kun las btus pa* las don 'di
 gsungs te / 'di skad du

spyod pa dang (N. 291a) mi ldan pa yang byang chub kyi sems ni 'khor ba'i bde
 ba mtha' yas pa bskyed pa'i phyir de la brnyas par mi bya'o⁽³⁹⁾

zhes gsungs so // de'i nus pa yang mdo las gsungs te / Byams pa'i rnam par thar pa'i *sDong*
po bkod pa las /¹³

rigs kyi bu 'di lta ste dper na¹⁴ rdo rje rin po che ni chag¹⁵ kyang gser gyi rgyan
 khyad par du 'phags pa thams cad zil (D. 256a) gyis gnon¹⁶ cing rdo rje rin po che'i
 ming yang mi 'dor la dbul ba thams cad kyang rnam par bzlog go //¹⁷ rigs kyi bu de
 bzhin du thams cad mkhyen par sems bskyed pa'i rdo¹⁸ rje rin po che nan tan dang
 bral yang /¹⁹ nyan thos dang rang sangs rgyas kyi yon tan gyi gser gyi rgyan thams
 cad zil gyis gnon cing / byang chub sems dpa'i ming yang mi 'dor la / 'khor ba'i dbul
 (G. 406b) ba thams cad kyang rnam par bzlog go⁽⁴⁰⁾

zhes 'byung ngo // *rGyal po la gdams pa'i mdo* las kyang don de nyid gsungs te /

rgyal po chen po khyod yang dag par rdzogs pa'i byang chub kyi sems kyi dge
 ba'i rtsa ba'i las kyi rnam par smin pa des / lan du mar lha'i nang du skyes pa nas gang
 de ltar mang du bya²⁰ ba byed pa lta ci smos⁽⁴¹⁾

(38) *Rājāvavādakasūtra*. Cf. *Śikṣāsamuccaya*, Bendall ed., pp. 9.13-10.4.

(39) *Śikṣāsamuccaya*, Bendall ed., p. 9.7-8.

(40) *Gaṇḍavyūhasūtra*. Suzuki ed., p. 508.15-20. Cf. *Śikṣāsamuccaya*, p. 9.8-12.

(41) *Rājāvavādakasūtra*. Cf. *Śikṣāsamuccaya*, p. 10.5-6.

1 N *rjesu*. 2 GP *rang*, N *yaṃ rang*. 3 GNP *pa*. 4 GNP *bar*. 5 G *mhun*. 6 G om. *thams cad*.
 7 N *yongsu*. 8 GNP *cig*. 9 GNP *na*. 10 N *yongsu*. 11 N *gsungso*. 12 GNP *ba*. 13 GNP om.
 14 C *na*/. 15 G *chags*. 16 P *gnod*. 17 CGNP /. 18 P *rto*. 19 P //. 20 C *bye*.

(C. 261b) zhes 'byung ste mdo de¹ nyid du blta bar bya'o //

rtsa ba nyid la 'jug par bya ste /

byang chub smon pa'i sems ni bskyed nas ni //²

'bad pa mang pos kun tu spel bya zhing //

'di ni skye ba gzhan du 'ang dran don du //

ji skad bshad pa'i bslab pa yongs su³ bsrung // [BPP 71-74]

zhes smras te / de ltar sems bskyed cing de'i phan yon shes pa des de spel bar bya ba'i
phyir /

'bad pa mang pos kun tu⁴ spel bya zhing //⁵

zhes smras te / 'di'i don ni bdag gis byas pa'i *Sems bskyed pa'i cho gar* (P. 295b) gsal bar
byas te / 'di skad du

de ltar sems bskyed pa'i gang zag gis byang chub kyi sems spel bar bya ba'i phyir /
tha na nyin lan gsum mtshan lan gsum du //⁶

sangs rgyas chos dang tshogs kyi mchog rnam la //⁷

byang chub bar du (N. 291b) bdag ni skyabs su⁸ mchi //⁹

bdag gis sbyin sogs byas¹⁰ pa 'di dag gis //

'gro la phan phyir sangs rgyas¹¹ 'grub par shog //⁽⁴²⁾

ces byang chub tu sems bskyed par bya'o⁽⁴³⁾

zhes pa'o //

'di ni skye ba gzhan du 'ang dran don du //¹²

ji (G. 407a) skad bshad pa'i bslab pa yongs su¹³ bsrung //¹⁴ [BPP 73-74]

zhes pa 'di'i¹⁵ don yang bdag gis 'Od srung kyis zhus pa'i mdo las blangs nas cho ga de nyid
du bkod de 'di ltar

byang chub kyi sems nyams par byed pa'i chos bzhi las ldog par bya ste / bzhi
gang zhe na / mkhan po dang / slob dpon dang / bla ma dang / sbyin gnas la bslu ba
dang / gzhan 'gyod pa (D. 256b) med pa la 'gyod pa nye bar bsgrub pa dang / theg pa
chen po la yang dag par zhugs pa'i gang zag la bsngags¹⁶ pa ma yin pa dang / mi snyan
pa dang //¹⁷ brjod pa ma yin pa'i sgra tshigs su¹⁸ bcad pa

(42) **Cittotpādaavidhi* of Mañjuśrīmitra ('Jam dpal bshes gnyen), Tib. D. No. 2561, Ngu 24b2-3.

(43) *Cittotpādasamvaravidhikrama*. Tib. D. No. 3969, Gi. 246a2-3.

1 GNP om. 2 GNP /. 3 N *yongsu*. 4 N *du*. 5 GNP om. 6 C /. 7 GN /. 8 N *skyabsu*.
9 GNP /. 10 G om. 11 G om. 12 NP /. 13 N *yongsu*. 14 GNP *bsrungs* /. 15 G 'di ni.
16 P *sngags*. 17 C Dom. 18 N *tshigsu*.

'byin pa dang / g-yo dang sgyu gzhan la nye bar spyod kyi¹ lhag pa'i bsam pas ma yin pa'o //

byang chub kyi sems nyams par mi byed pa'i chos bzhi la bslab² par bya ste / bzhi gang zhe na / srog gi phyir ram tha na bzhad gad kyi phyir yang brdzun³ gyi tshig mi smra ba dang / g-yo dang sgyu⁴ med par sems can thams cad kyi drung na⁵ lhag pa'i bsam pas gnas pa dang / byang chub sems dpa' thams cad la ston par 'du⁶ shes bskyed cing (C. 262a) de dag gi⁷ yang dag pa'i bsngags pa phyogs bzhir brjod pa dang / nyi tshe ba'i theg pa mi 'dod pa'i phyir sems can gang yongs su⁸ smin par byed pa de dag thams cad bla na med pa yang dag par rdzogs pa'i byang chub yang dag par 'dzin du 'jug pa'o //(44)

khyad par du mngon par (G. 407b) shes pa myur du thob par 'dod pa'i byang chub sems dpa' (P. 296a) *sPyan ras gzigs dbang phyug gis zhus pa'i chos bdun pa zhes bya ba'i theg pa chen po'i mdo* la⁹ bslab par bya'o // sngar bstan pa'i /¹⁰

'bad pa mang pos kun tu¹¹ spel bya zhing //¹² [BPP 72]

zhes bya ba'i tshig gi don 'di yin te / rje btsun (N. 292a) dag gi zhal nas spel ba rnam pa gsum las rgyas par spel ba ni /¹³

'jug sems bdag nyid sdom pa ma gtogs pa //¹⁴

yang dag smon pa 'phel bar 'gyur ma yin //

rdzogs pa'i byang chub sdom pas spel 'dod pas //

de phyir 'bad pas 'di ni nges par blang¹⁵ //¹⁶ [BPP 75-78]

zhes smras te / 'jug sems bdag nyid ces bya ba ni lhag pa'i bsam pa rnam par dag pa yin te / de yang 'Phags pa Nam mkha'¹⁷ mdzod kyi mdo las ji skad du /

rigs kyi bu byang chub kyi sems¹⁸ zhes bya ba'i byang chub kyi sems de chos gang gis bsdus / ji ltar phyir mi ldog par kun du gnas //¹⁹

nam mkha'²⁰ mdzod kyis smras pa / rigs kyi bu byang chub kyi sems ni chos rnam pa gnyis kyis²¹ bsdus pas phyir mi ldog par gnas so // gnyis gang zhe na / bsam pa dang lhag pa'i bsam pa'o // bsam (D. 257a) pa dang lhag pa'i bsam

(44) *Kāśapaparivarta*. von Stael-Holstein ed., [6]-[10]. Cf. *Śikṣāsamuccaya*, Bendall ed., pp. 52.12-53.3.

1 G kyi /. 2 N bslabs. 3 GNP rdzun. 4 GNP rgyu. 5 GNP du. 6 N 'dus. 7 GNP gyis.
8 N yongsu. 9 GNP las. 10 GNP om. 11 N du. 12 C /, GNP om. 13 GNP om. 14 G /.
15 GNP blangs. 16 GNP om. 17 N namkha'. 18 CD sems byang chub kyi sems. 19 GNP /.
20 N namkha'. 21 GNP om.

pa gang gis¹ bsdus /² bsam³ pa ni g-yo med pa dang sgyu⁴ med pas bsdus pa'o /⁵ lhag pa'i bsam pa ni de la ma chags pa dang khyad par du 'gro bas bsdus so // (G. 408a) bzhi po de dag gang gis bsdus she na⁶ / chos brgyad kyis bsdus te / g-yo med pa ni drang po dang gsal bas bsdus pa'o // sgyu med pa ni bcos ma ma yin pa dang bsam pa dag pas bsdus so // de la ma chags pa ni sems ma gong ba dang brtson 'grus ma gong bas (C. 262b) bsdus so // khyad par du 'gro ba ni bsod nams kyis tshogs dang ye shes kyis tshogs kyis bsdus so⁽⁴⁵⁾

zhes bya ba la sogs pa chos brgya nyi shu rtsa brgyad kyis bsdus te rgyas par mdo nyid du blta bar bya'o // gzhan yang 'Phags pa Chos yang dag par sdud pa'i mdo las kyang 'di skad du /

yon tan khyad par can 'dod (P. 296b) pa ni lhag pa'i bsam pa'o // lhag pa'i bsam pa ni srog chags 'byung po rnam la des pa'o // sems can thams cad la byams pa'o // 'phags pa (N. 292b) thams cad la gus pa'o // 'jig rten pa rnam la snying brtse ba'o // bla ma la rim gro byed pa'o // skyabs dang dpung gnyen dang gling med pa dang ⁷-mgon med pa'i⁷ mgon dang skyabs dang dpung gnyen dang gling ngo⁽⁴⁶⁾

zhes bya ba la sogs pa gsungs te / rgya cher de nyid du blta bar bya'o // gzhan yang mdo de las

byang chub sems dpa' bsam pa dag pa la ni nam mkha⁸ dang rtsig pa dang shing dang chu bo dang nags tshal la sogs pa dag las kyang chos 'byung la / rang nyid kyis spyod pa nyid las kyang gdams ngag dang rjes su⁹ bstan pa 'byung ngo⁽⁴⁷⁾

zhes (G. 408b) gsungs so // gzhan yang 'Phags pa Blo gros mi zad pa'i mdo las kyang /¹⁰

btsun pa Sha¹¹ ra dva¹² ti'i bu gzhan yang byang chub sems dpa' rnam kyis lhag pa'i bsam pa mi zad pa yin te / de ci'i phyir zhe na / dge ba'i rtsa ba thams cad lhag par dmigs pa'i phyir ro // tha na gang byang chub sems dpa' gang ci sems pa de thams cad dge ba'i bsam pa las lhag pa'i bsam pas dmigs par 'gyur te / sa nas sar bzhag pa'i phyir 'pho ba ni lhag pa'i bsam pa'o //^{13, (48)}

(45) *Gaganagañjaparipṛcchāsūtra*. Tib. P. No. 815, Nu 273a4-8.

(46) *Dharmasaṃgītisūtra*? See *Akṣayamatīnirdeśasūtra*. Braarvig ed., p. 28. Cf. *Śikṣāsamuccaya*, Bendall ed., p. 285.13-16.

(47) *Dharmasaṃgītisūtra*? Cf. *Śikṣāsamuccaya*, Bendall ed., p. 284.8-10.

(48) *Akṣayamatīnirdeśasūtra*. Braarvig ed., p. 27.

1 GNP gi. 2 GNP om. 3 G bsam pa gang gi bsdus bsam. 4 G rgyu. 5 N /.

6 CD om. she na. 7 G om. 8 N namkha'. 9 N rjesu. 10 NP om. 11 C shā, G shwa.

12 GNP dwā. 13 D om.

zhes bya ba la sogs pa dang /¹

yang brtsun (D. 257b) pa sha² ra dwa³ ti'i bu⁴ 'di ni byang chub sems dpa' rnam kyi
lhag pa'i bsam pa mi zad pa'o⁽⁴⁹⁾

zhes gsungs so⁵ // 'di skad du bstan par 'gyur te /

'di ltar sa gzhi bzang po las nags tshal dang lo tog phun sum tshogs pa skye ba
bzhin du / tshul khirms bzang po'i sa gzhi las sangs rgyas kyi chos thams cad skye
zhing 'phel bar 'gyur ro

zhes shes par (C. 263a) 'gyur ro // 'dir 'di dpyad do // smon pa byang chub kyi sems dang
'jug pa byang chub kyi sems de gnyis kyi don la /⁶ sngon gyi mkhas pa chen po rnam dang /
da ltar gyi mkhas pa chen po dag rnam pa du mar 'chad de /⁷ de dag gi 'dod pa de dag la
bdag gi blo (P. 297a) 'phro bar nus mod kyi yi ge mangs par 'gyur bas gzhas⁸ go //⁹ 'di gnyis
(N. 293a) kyi don mdo nyid na gsal bar gsungs (G. 409a) te / *sDong po bkod pa'i mdo* las /

rigs kyi bu¹⁰ sems can gang bla na med pa yang dag par rdzogs pa'i byang chub tu
soms smon¹¹ pa de dag kyang dkon no // de bas kyang¹² gang bla na med pa yang dag
par rdzogs pa'i byang chub tu chas pa'i sems can de dag ni shin tu dkon no⁽⁵⁰⁾

zhes gsungs so¹³ // slob dpon Zhi ba lha'i zhal nas kyang /

byang chub kyi sems de ni rnam pa gnyis te / byang chub tu smon pa'i sems dang /
byang chub tu 'jug pa'i sems so⁽⁵¹⁾

zhes *bSlab pa kun las btus pa* las gsungs pa dang / *sPyod 'jug* las kyang /

'gro bar 'dod dang 'gro ba yi //¹⁴

bye brag ji ltar shes pa ltar //

de bzhin mkhas pas 'di gnyis¹⁵ kyi //

bye brag rim bzhin shes par bya //⁽⁵²⁾

zhes gsungs so // yang slob dpon gyi zhal nas /

(49) *Akṣayamatīnirdeśasūtra*. Braarvig ed., p. 29.

(50) *Gaṇḍavyūhasūtra*. Suzuki ed., p. 494.24.

(51) *Śikṣāsamuccaya*, Bendall ed., p. 8.15-16.

(52) *Bodhi(sarva)caryāvatāra*. 1. 16.

1 GNP om. *dang* /. 2 C *shā*. 3 GNP *dwā*. 4 GNP *bu* /. 5 G *gsungso*. 6 P om. 7 N om.
8 GNP *bzhag*. 9 CGNP /. 10 GNP *bu* /. 11 CD *bskyed*. 12 P *byang*. 13 N *gsungso*.
14 P /. 15 CD *nyid*.

de la smon pa'i sems ni ngas sangs rgyas su 'gyur bar bya'o zhes smon pa las skyes
pa'o⁽⁵³⁾

zhes *bSlab pa kun las btus pa* las gsungs so¹ // de bas na 'bras bu rdzogs pa'i byang chub yul
du byed cing dmigs pa ni smon pa'i sems yin te / ji skad du mgon po Byams pas kyang²

sams bskyed pa ni gzhan don phyir //³

yang dag rdzogs pa'i byang chub 'dod //^{4, (54)}

ces *mNgon par rtogs pa'i rgyan* las gsungs so // lam gyi chos yul du byed cing dmigs⁵ pa ni
'jug pa'i sems yin te / mgon po Byams pa'i (G. 409b) zhal nas /

rang (D. 258a) gzhan don dang de nyid don⁶ //

mthu dang rang gi⁷ sangs rgyas kyi //⁸

zhing dang sems can yongs smin dang //⁹

bdun pa byang chub mchog yin no //^{10, (54)}

zhes *mDo sde rgyan* las (C. 263b) gsungs so // de bas na byang chub kyi sems de nyid rgyu'i
dus dang / 'bras bu'i dus thams cad du de nyid yin te / gnas skabs kyi bye brag gis de ltar
'gyur ro // de yang mgon (P. 297b) po Byams pa'i zhal nas rgyas par bshad de / ji skad du /

de yang sa (N. 293b) gser zla ba me //¹¹

gter dang rin chen 'byung gnas mtsho //

rdo rje ri¹² sman bshes gnyen dang //¹³

yid bzhin nor bu nyi ma klu¹⁴ //¹⁵

rgyal po mdzod dang lam po che //¹⁶

bzhon pa bkod ma'i chu dang ni //¹⁷

sgra snyan chu bo sprin rnams kyis //¹⁸

rnam pa nyi shu rtsa gnyis so //^{19, (56)}

(53) *Śikṣāsamuccaya*, Bendall ed., p. 8.18-19.

(54) *Abhisamayālaṅkārikā* 1.18ab.

(55) *Bodhisattvabhūmi*. Wogihara ed., p. 22.10-13. Cf. *Mahāyānasūtrālaṅkāra* 10.1cd.

(56) *Abhisamayālaṅkārikā* 1.19-20.

1 N *gsungs*so. 2 GNP // . 3 GNP / . 4 G / . 5 N *dmid* . 6 GNP *do* . 7 GNP *gis* .

8 GNP / . 9 NP / . 10 GNP om. 11 GNP *med* / . 12 P *rin* . 13 NP / . 14 G *glu* .

15 NP / . 16 GNP / . 17 NP / . 18 NP / . 19 GNP om.

zhes gsungs so // de la gnyis ni rgyu'i byang chub kyi sems so // bcu bdun ni lam gyi byang
chub kyi sems so // gsum ni 'bras bu'i byang chub kyi sems so // gnyis ni smon pa'i sems
so // nyi shu ni 'jug pa'i sems so // rnam grangs gzhan yang¹ gsum ni rgyu'i dus kyi sems
so // bcu drug ni lam gyi dus kyi sems so // tha ma gsum ni 'bras bu'i dus kyi sems so // de
dag gi don rgyas pa ni *mNgon par rtogs pa'i rgyan* de nyid du blta bar bya'o //

de ltar byang chub kyi sems rin po che de khyad par du spel bar bya ba'i phyir / tshul
khrims kyi sdom pa nges par blang bar (G. 410a) bya'o zhes bstan nas / da ni tshul khrims
kyi sdom pa'i rten khyad par can bsten² par 'dod nas /

so sor³ thar pa ris bdun gyi //

rtag tu sdom gzhan ldan pa dag //

byang chub sems dpa'i sdom pa yi //⁴

skal pa yod kyi gzhan du min //⁵ [BPP 79-82]

zhes smras te / 'dir smras pa / khyod kyis dang por /

de ni skyes bu mchog yin no //

sems can dam pa byang chub mchog //

'dod par gyur pa de dag la //⁶ [BPP 20-22]

zhes ma smras sam / yang 'dir 'di skad du brjod pa de ji lta bu smras pa bden te / snga ma ni
ma dag pa'i rten du bzhang la 'di ni dag pa'i rten du 'dod pa yin no // 'di'i don bla ma rje btsun
dpal Byang chub bzang pos *sDom pa nyi shu pa'i 'grel par gsungs te /*

'di skad du so sor⁷ thar pa'i sdom pa ni⁸ byang chub sems dpa'i⁹ sdom pa'i yan lag tu
gyur pa yin (D. 258b) te / phyogs gcig nyid du¹⁰ shes par bya'o // de'i phyir so sor¹¹
thar pa'i sdom pa gzhan (P. 298a) dang ldan pa 'dis byang chub sems (N. 294a) dpa'i
sdom pa yang dag par len pa'i snod du gyur pa la / bslab pa'i tshig 'di yang sbyin par
bya zhes pa'i don to // 'di la srog gcod pa la sogs pa las ldog pa'i cho ga gzhan pa nyid
ma yin zhing de rnam las kyang ldog pa yin pa la ni byang chub sems dpa'i sdom pa
len pa'i snod du gyur pa yang yod pa ma yin no⁽⁵⁷⁾

zhes gsungs so¹² //

(57) *Samvaraviṃśakapañjikā*. Tib. D. No. 4083, Hi 186b4-6.

1 GNP yang /. 2 CD bstan. 3 GNP so. 4 NP /. 5 GNP /. 6 GNP om. 7 GP so.
8 N ni /. 9 CD dpa'. 10 N nyidu. 11 GNP so. 12 N gsungso.

re zhig theg pa chen po'i bag chags med pa de'i rigs (G. 410b) med pa so sor¹ thar pa'i gtan gyi bar chad can nam /² byang chub sems dpa'i sdom pa med pa'i gong du de la pham pa byung ba 'am bslab pa phul ba 'am dge ba'i rtsa ba chad pa 'am / sdom pa³ de ma blangs pa ni so sor⁴ thar pa'i sdom pa yang med na / cig shos lta ga la yod du rung / 'dir smras pa /⁵ srog gcod pa la sogs pa las ma log pa'i byang chub sems dpa' yod par 'gyur ram / smras pa de ni med de de dag ni byang chub sems dpa' la rtsa ba'i ltung ba yin par mdo las gsungs pa'i phyir ro // de lta bas na so sor⁶ thar pa'i sdom pa de dang por dgos shing sngon du 'gro ba nyid do //

yang na rigs la gnas pa dang skye ba gzhan du theg pa chen po la goms par byas pa ni de rang bzhin gyis sdig pa mi spyod pas byang chub sems dpa'i sdom pa de nyid dang po nyid du blangs kyang nyes pa med do //

yang na theg pa chen po dbu ma chen po'i grub mtha' brtsan par byas na ni / 'di ltar

theg pa chen po'i snod du ma gyur pa 'ga' yang med do // sems can thams cad rigs

gcig nyid yin te / de bzhin gshegs pa'i snying po can no⁷

zhes bya ba dang /

sa stengs⁸ skal med yod min te //⁹

thams cad sangs rgyas 'gyur ba yin //

de'i phyir rdzogs sangs sgrub pa la //

sgyid lug par ni mi bya 'o //^{10, (58)}

zhes gzungs pa'o // *De kho na nyid bsod pa'i rgyud chen po* las (C. 264b) kyang /

(P. 298b) kye bcom ldan 'das kyi dkyil (G. 411a) 'khor chen po (N. 294b) 'dir 'jug

pa la snod dang snod ma yin pa brtag mi 'tshal lo // de ci'i phyir zhe na

zhes bya ba la sogs pa gsungs so // slob dpon 'Phags pa lha'i zhal nas /

dang por (D. 259a) gang dang gang 'dod pa //¹¹

de la de dang de nyid sbyin //

dam pa'i chos la snod¹² min pa //

'ga' yang yod pa ma yin no //¹³

zhes gsungs so // de bas sems can thams cad rigs gcig nyid yin pas / mgon po Mi pham pa'i

zhal nas /

(58) *Sarvatathāgatatattvasaṃgraha*. Horiuchi ed., p. 86.

1 GNP *so*. 2 NP //. 3 G om. 4 GP *so*. 5 GNP om. 6 GNP *so*. 7 GNP om.
8 GNP *steng*. 9 GNP /. 10 GNP om. 11 GN P /. 12 GNP *snod*. 13 GNP om.

chos kyi dbyings la dbyer med phyir //¹

rigs ni tha dad rung ma yin //^{2, (59)}

zhes gsungs pa dang / 'phags pa Klu sgrub kyi zhal nas kyang /

chos kyi dbyings la dbyer med phyir //

gtso bo theg dbyer ma mchis na //

khyod kyis³ theg pa gsum bstan pa //

sems can 'jug par bya phyir yin //^{4, (60)}

zhes gsungs so // 'o na mdo las kyang⁵ sems can gyi tshogs gsum du gsungs shing / rdo'i rigs

la dper mdzad pa de ji⁶ lta bu / sems can gyi rigs kyang rnam pa lngar bshad pa de ji⁷ lta bu /

smras pa de ni re zhig pa la dgongs pa yin te /⁸ rje btsun gSer gling pa'i zhal snga nas /

rigs ni rnam pa gnyis te / chos nyid kyi rigs can dang / sgrub pa'i rigs can no

zhes gsungs pas⁹ sgrub pa'i rigs can la ni re zhig de ltar gnas so // chos nyid kyi rigs can gyi

dbang du byas na ni dbye ba gang yang med do // 'di ltar mkhas pa dag gis ni so so thar

(G. 411b) pa'i sdom pa de nges par gtso bor¹⁰ bya dgos pa yin te / de yang 'di ltar chos kyi

sku ni dus thams cad dang / dngos po thams cad la khyab pa yin pa dang / yang longs spyod

rdzogs pa'i sku de yang 'khor lor¹¹ bzhugs¹² la / de yang sa bcu'i dbang phyug chen po

rnams¹³ kho na'i spyod yul yin zhing de yang theg pa chen po'i chos zab pa dang / rgya che

ba 'ba' zhig gsungs¹⁴ pa yin no // sprul pa'i sku ni 'di ltar u dum wa¹⁵ ra'i me tog dang 'dra bas

(P. 299a) dus res¹⁶ 'ga' ba yin te / mdo las

bskal pa de'i rjes (N. 295a) la sangs rgyas mi 'byung ba'i (C. 265a) bskal pa drug cu

'byung bar 'gyur ro

zhes gsungs so // de bas na des gsungs pa'i so sor¹⁷ thar pa'i sdom pa 'di yang dus res 'ga' ba

yin pas dkon pa'i phyir dang / bde 'gror bgrod¹⁸ pa'i rgyu'i gtso bo yin pa dang / sangs rgyas

kyi bstan pa ni srog gcod pa la sogs pa sdig pa las log pa yin pa dang / sangs rgyas kyi bstan

pa ni ji srid so sor thar pa'i sdom pa gnas pa de srid du gnas (D. 259b) shing de la rag lus pa

yin pas so sor thar pa'i sdom pa de dang po kho nar bstan to //

(59) *Abhisamayālamkārikā* 1.39ab.

(60) *Nirupamastava* 21.

1 GNP /. 2 GNP om. 3 GNP kyi. 4 GNP om. 5 GNP om. 6 G om. 7 G om. 8 GNP om.
9 C pas /. 10 GNP bo. 11 GNP khor mor. 12 G bzhad. 13 G om. 14 GP gsung.
15 CD bā. 16 P ri. 17 GNP so. 18 N 'grod.

'di ltar 'jug pa'i go rims su¹ byas na yang / sngon chad theg pa chen po'i bag chags med pa dag la ni so sor² thar pa ris bdun gang yang rung ba'i sdom pa de sngon du 'gro ba yin no // sngan chad theg pa chen po'i bag chags med pa'i gang zag dag³ la ni (G. 412a) sdom pa de mi skye ba nyid kyang yin no // de bas rtsa ba las

skal pa yod kyi gzhan du min [BPP 82]

zhes pa yang legs par smras par 'gyur ro // dkyus nyid la 'jug par bya ste /

so sor thar pa'i ris bdun du //⁴

de bzhin gshegs pas gsungs pa la //⁵

tshangs spyod dpal ni mchog yin te //⁶

dge slong sdom pa dag tu bzhed //⁷ [BPP 83-86]

ces smras te ris bdun las dge slong gi sdom pa ni thun⁸ mong ma yin no zhes bdag gis bsams so // smras pa /⁹ 'dul ba'i gzhung thams cad dang 'phags pa dgra bcom pa rnams kyis mdzad pa *Ye shes la 'jug pa* la sogs pa dang / gzhan de dag gis mdzad pa'i *Bye brag tu bshad mdzod chen po* dang / de'i don gces¹⁰ spras su bya ba mdor bsdus pa *mNgon pa mdzod* dag tu ris brgyad du bkod la 'dir bdun du bshad pa de ji lta bu smras pa bden te / gzhung der¹¹ de ltar bshad mod kyi 'on kyang (N. 295b) 'phags pa Thogs med kyi *rNal 'byor spyod* (P. 299b) *pa'i sa'i* gzhung thams cad dang / *Tshul khrims kyi le'u* las ris bdun du bkod de //¹² 'phags pa Thogs med ni chos kyi rgyun gyi ting nge 'dzin thob cing sa gsum pa'i (C. 265b) byang chub sems dpa' yin pa dang / *'Phags pa 'Jam dpal gyi rtsa ba'i rgyud chen po* las lung bstan pas ji skad du //¹³

thogs med skyes bu dam pa des //¹⁴

bstan bcos kyi ni de nyid rig //^{15, (61)}

ces pa dang / yang (G. 412b) mgon po Mi pham pa la mngon sum du sde snod ma lus pa gsan pa yin pa 'di la su zhig the tshom za / de lta bu'i sems can chen po de la yid sdang zhing the tshom za na rang nyid phung bar zad do // rje btsun bla ma dpal Byang chub bzang pos kyang *sDom pa nyi shu pa'i 'grel pa* las / ji skad du /

(61) *Mañjuśrīmūlakalpa*. Śāstri ed., p. 617.5.

1 GNP *rim du*. 2 GP *so*. 3 G *om*. 4 GN /. 5 GNP /. 6 GNP /. 7 GNP /. 8 G *methun*.
9 CD *om*. 10 GNP *ces*. 11 C *de lta*. 12 N //. 13 GNP *om*. 14 GNP /. 15 GNP *om*.

de la sdom pa'i tshul khirms ni so sor thar pa'i ris bdun gyi sdom pa blangs pa'o //
 de la dge slong dang dge tshul dang / dge (D. 260a) slong ma'i rab tu dbye bas rab tu
 byung ba'i phyogs ni rnam pa lnga'o // khyim pa'i phyogs gnyis te / dge bsnyen dang /
 dge bsnyen ma'i dbye bas so // nyin zhag gi¹ bslab pa ni dka' ba spyod pa ma yin pa
 dang / 'dod pa las g-yem pa ma yin pa'i phyir dang / yun ring por rjes su mi² 'brel pa'i
 phyir 'di ni so sor³ thar pa'i ris su mi 'os pas ma bstan to⁽⁶²⁾

zhes gsungs te / bla ma de ni byang chub sems dpa'i sde snod kyi 'dul ba 'dzin pa chen po
 yin pa dang / 'phags pa Klu sgrub dang slob dpon Shānta de ba'i gcig nas gcig tu brgyud pa'i
 bka'i gdams ba yod pa'i phyir mkhas pa chen po de'i rjes su⁴ 'brang bar bya'o //

so sor⁵ thar pa'i⁶ ris bdun po de dag 'dir cung zhig brjod par bya ste / dge bsnyen ni rnam
 pa gnyis te 'dod pas log par g-yem pa spangs pa dang / rang gi chung ma yang spangs
 (G. 413a) pa'o // de gnyis ka'i thun mong gi bslab pa ni 'di lta ste / rtsa ba'i ltung bar gyur pa
 (N. 296a) bzhi dang chang spangs (P. 300a) pa'o // kha cig na re⁷ log par lta ba spangs pa'o
 zhes zer ro // de la chang ni 'dul ba 'dzin pa dag rang bzhin gyi⁸ kha na ma tho ba yin no
 zhes 'dod la / mngon pa bdag⁹ ni bcas pa'i kha na ma tho ba zhes zer ro // de dag gi gzhung
 rgyas pa ni 'dir bzhag¹⁰ go //¹¹

de lta bu'i bslab pa'i gzhi lnga dang / de dag (C. 266a) gi phyogs su gtogs pa'i bslab pa'i
 gzhi bzhi bcu rtsa lnga ste / bslab pa lnga bcu dang ldan pa'i dge bsnyen skyon med pa
 dang / de bzhin du dge tshul sdom par gyur pa 'di lta ste / bshags par¹² bya ba dang bsdam
 par bya ba dang nyes pa med pa'o // dge slong gi bslab pa ni nyis brgya lnga bcu rtsa gsum
 las / nyi shu rtsa bdun¹³ ni bshags¹⁴ par bya bar 'gyur ro // nyis brgya bcu gsum ni bsdam par
 bya bar 'gyur ro // bcu gsum ni nyes pa med par 'gyur ro // bcu gsum ma gtogs pa lhag ma¹⁵
 nyis brgya bzhi bcu bsrung ba'i kha na ma tho ba med pa'i dge tshul tshul¹⁶ dang ldan zhing
 rnam par dag pa dang / dge slong ma ni chos drug dang rjes su¹⁷ mthun pa'i chos drug legs
 par bsrung ba ste dge slong¹⁸ ma rnam par dag pa dang / de bzhin du dge slong yang ji ltar
 dam pa'i chos 'dul pa'i gzhung las ji skad bshad (D. 260b) pa'i bslab pa shin tu rdzogs par
 bya ba dang dge slong (G. 413b) rnam par dag pa dang / de bzhin du dge slong ma yang
 bslab pa'i gzhi lnga brgya dang ldan zhing rnam par dag pa'o //

(62) *Samvaraviṃśakapañjikā*. Tib. D. No. 4083, Hi 186b2-4.

1 GNP pa'i. 2 CD om. 3 GNP so. 4 N rjesu. 5 GNP so. 6 D pa. 7 GNP ni for na re.
 8 GNP om. 9 GNP dag. 10 CD gzhag. 11 GNP/. 12 GNP pa. 13 GNP gsum.
 14 C gzhags. 15 D pa. 16 GNP om. 17 N rjesu. 18 G slob.

de dag kyang sde pa tha dad de / 'di ltar phal chen pa'i sde pa dang / thams cad yod par smra ba'i sde pa dang / gnas brtan pa'i sde pa dang / mang pos bkur pa'i sde pa'o // de dag kyang bco brgyad du gnas te / 'di ltar /¹

shar dang² nub dang³ gangs ri dang //⁴
'jig rten 'das par smra ba'i sde //⁵
btags⁶ par yod par smra ba'i sde //
Inga tshan dge 'dun phal chen pa //
gzhi⁷ pa dag (N. 296b) ni 'od srungs pa //
chos srung sde dang sa ston sde //
rnam par phye ste (P. 300b) smra ba'i sde //
mang thos dge 'dun gos dmar po //
gtsug lag khang chen la gnas dang //
rgyal byed tshal na gnas pa dang //
'jigs⁸ med ri⁹ la gnas pa yi //
gnas brtan pa yi sde pa gsum //
sar sgrogs ris¹⁰ pa'i sde pa dang //
srung ba pa yi sde pa dang //
gnas ma'i bu yi sde pa ste //
mang pos bkur ba'i sde pa gsum //

yang gzhung kha cig las ni

tshul de nyid las btags¹¹ pa yod (C. 266b) par smra ba'i sde pa de thams cad yod par sbyar la /¹² mang pos bkur ba'i sde pa la ni gnas ma'i bu'i¹³ sde pa dang / ku ru ku¹⁴ la'i sde pa dang / sa sgrogs pa'i sde pa yin no zhes zer ro // yang gzhung kha cig las /

'od srungs zhes bya chos srung ba¹⁵ //
sa srung ba dang (G. 414a) gzhi kun yod //
shar nub gangs ri btags¹⁶ par smra //
rnam par phye smra 'jig rten 'das //

1 GNP om. 2 GNP dang /. 3 GNP dang /. 4 GNP /. 5 P /. 6 G brtag, NP brtags.
7 CD bzhi. 8 N 'jig. 9 G rig. 10 N res. 11 N bstags, P bstabs. 12 P om. 13 GNP bu.
14 G gu. 15 GNP dang. 16 P brtags.

gos dmar thos mang srung ba pa //
 ku ru ku¹ la gnas ma'i bu //
 rgyal byed pa dang 'jigs med pa //
 gtsug lag khang pa chen po pa'o //
 bzhi dang drug dang lga dang gsum //
 tha dad rnam pa bco brgyad 'dod //
 de ltar sde pa bco brgyad 'dod //
 shākya seng ge'i² bstan pa ni //
 gnas so 'gro ba'i bla ma de'i //
 sngon gyi phrin las dbang gis yin //
 yul don slob dpon bye brag dang //
 lta ba'i bye brag tha dad kyi //
 rgyu yis de dag tha dad byas //
 ston pa tha dad yod pa min //^{3, (63)}

'di dag gi lta ba dang / tshul khirms kyi rnam par gzha⁴ pa ni gzhung chen po de dang der blta bar bya'o //

rtsa ba nyid bshad par bya ste / tshangs spyod ces bya ba ni chang dang bud (D. 261a) med kyi yul spangs pa'o // 'di ltar chang gi nyes dmigs kyang lung de dang de dag dang / mdo sde de dang der blta bar bya'o // bud med kyi nyes dmigs kyang theg pa chen po dang theg pa chung ba'i mdo dang lung rnams su blta bar bya ste / ji skad du bcom ldan 'das kyi⁵ 'Khrig pa bdun bstan pa zhes bya (P. 301a) ba theg pa chung ba'i⁶ mdo las /⁷

bram ze 'di na kha cig (N. 297a) bdag tshangs par spyod par khas 'che zhing / bud med dang gnyis kyi⁸ gnyis sprod pa⁹ med kyang bud med kyi lus la mig gis bltas te de'i cha byad (G. 414b) la zhen pa dang / bud med dang lhan cig rtse ba dang / ca co 'don pa nyams su len pa dang / bud med kyi bsnyen bkur byed pa nyams su¹⁰ len pa dang / rtsig pas chod pa dang / yol bas chod pa'i bud med kyi rgyan dang / glu dang gar dang rol mo'i sgra nyams su¹¹ len pa dang / pha rol po 'dod pa'i yon tan lnga dang ldan pa la bltas nas nyams su¹² len pa

(63) Cf. *Śrāṇeravarāṅgāpṛcchāsūtra*. Tib. P. No. 5634, U 79a4-b2.

1 G gu. 2 CGNP *sengge'i*. 3 N/. 4 GNP *bzhag*. 5 GNP *kyi*. 6 P *pa'i*. 7 P //.
 8 P *kyis*, G om. *gnyis kyi*. 9 GN *sprong ba*. 10 N *nyamsu*. 11 N *nyamsu*. 12 N *nyamsu*.

dang / lha la sogs pa'i gnas su (C. 267a) ¹tshangs par spyod pa yongs su² bsngo ba
yang de bzhin te /¹ tshangs par spyod pa yongs su³ ma dag pa'o⁽⁶⁴⁾
zhes gsungs pa dang / *Theg pa chen po'i mdo chos bdun pa* las kyang /
rnam par rtog pas kyang 'dod pa la brten par mi bya na / gang dbang po gnyis
kyis⁴ sbyor ba lta ci smos⁽⁶⁵⁾
zhes gsungs so // spyir 'dod pa'i nyes dmigs ni *rGyal po shar pa'i bus zhus pa*
dang / 'Dod pa la gdams pa'i mdo las shes par bya'o //
de bas na tshangs par spyod pa ma yin par tshangs par spyod pa lta bur ston pa / dge
sbyong gi rtags dang mtshan mas nga rgyal du byed pas byang chub sems dpa' khyim na
gnas pa chos dang mthun pa'i sgrub pa dag la⁵ rab tu byung ba'i snyam du brnyas par byed
pa / tshul 'chos pa chom rkun lta bu ste / mdo las
chom rkun za'o // chom rkun 'thung ngo
zhes bya ba la sogs pa gsungs pa yin no //
de lta bu'i (G. 415a) sdig pa can⁶ dge slong dang / dge tshul gyis lha dang mi'i mchod
rten du gyur pa'i ngur smrig gi gos de gzung⁷ bar mi bya ste / chos gos 'bar ba dang lung
bzed 'bar ba zhes bshad do // ji skad du *Tshul khrims 'chal pa tshar gcod pa'i mdo* (D. 261b)
las /
tshul khrims 'chal (P. 301b) pa'i dge slong gis⁸ ston pa'i ngur smrig gi rgyal mtshan
se gol gtogs pa (N. 297b) tsam du yang bcang bar mi bya'o⁽⁶⁶⁾
zhes gsungs pa dang / 'di'i⁹ nyes dmigs ni 'Phags pa 'Od srungs¹⁰ kyis zhus pa'i mdo la sogs
pa de dang der blta bar bya'o // de 'dra ba'i sdig pa can gyi dge sbyong la theg pa chen po'i
bstan pa dang / lam chen po de la gzbug par mi bya'o snyam mo // de lta bu'i nyes pas ma
phog cing rnam par dag pa ni tshangs spyod ces bya'o //
dge bsnyen dang dge tshul dang dge slob ma las kyang phul du byung bas na
dge slong sdom pa dag tu bzhed¹¹ [BPP 86]
ces smras te / dge slong gi sdom pa rnam par dag pa ni theg pa chen po'i gzhi phul du byung
zhing khyad par 'phags pa yin no zhes bcom ldan 'das de lta bzhed do //

(64) *Saptamaithunasamyuktasūtra*. Cf. *Śikṣāsamuccaya*, Bendall ed., p. 76.9-15.

(65) *Avalokiteśvarapariṣchāsūtra*. Tib. P. No.817, Nu 294a4.

(66) *Buddhapaṭakaduḥśīlanigrahīsūtra*. Tib. P. No.886.

1 G repeats. 2 N yongsu. 3 N yongsu. 4 GNP kyi. 5 GNP la ni. 6 GNP can gyi.
7 NP bzung. 8 GNP gi. 9 GNP 'di. 10 CGNP srung. 11 GNP bzhid.

dge slong (C. 267b) zhes bya ba ni gsol ba dang¹ bzhi'i las kyis² bsnyen par rdzogs pa'o //
 de yang 'di ltar las ni bzhi ste / gsol ba'i las dang / gsol ba dang / gnyis kyis³ las dang / gsol
 ba dang / bzhi'i las dang / las gsum brjod pa'i las so // las (G. 415b) bzhi po de dag kyang
 gzhi gnyis la brten te sems can du bgrang ba dang / sems can ma yin par bgrang ba'o //

de la sems can du bgrang ba'i las ni rab tu dbyung ba dang / bsnyen⁴ par rdzogs pa
 dang / gang zag yid mthun par bya ba dang / ltung ba las bslang ba dang / dgar ba dang /
 bskrad pa dang / dbyar gnas par khas blangs pa dang / zhag bdun dang⁵ nyi shu dang⁶
 bzhi bcur byin gyis brlab pa dang / sems can la phan gdags pa dang / chad pas gcad pa'i las
 gang yin pa de ni sems can du bgrang ba gzhi'i las zhes bya'o //

sems can du bgrang ba ma yin pa'i las ni chos gos dang lhung bzed byin gyis brlab pa
 dang / sra brkyang byin gyis brlab pa dang / chos gos rnam kyang mi dbul bar⁷ gzung ba
 dang / mtshams gcad pa dang / (P. 302a) khyim rung bar yid mthun par bya ba dang / de lta
 bu dang gzhi'i las gang yin pa de ni sems can bgrang (N. 298a) ba ma yin pa'i las so //

las de dag kyang tshogs gnyis kyis bya ba dang / bzhis bya ba dang / lngas bya ba
 dang / bcus bya ba dang / nyi (D. 262a) shus bya ba dang / tshogs bzhi bcus bya ba dang /
 dge 'dun mthun pas bya ba'o //

de la tshogs gnyis kyis bya ba'i las ni dge slong gi⁸ dge 'dun gyi mdun du lan gsum brjod
 pa'i bshags pa'i las kyis ltung byed dam⁹ nyes byas kyis¹⁰ nyes pa 'chags¹¹ par byed do //
 bzhis bya ba ni nyes pa (G. 416a) sbom po bzhi'i mdun du bshags pa'o // bcus bya ba ni yul
 dbus su bsnyen par rdzogs pa'i las so // tshogs lngas bya ba ni mtha' 'khob tu bsnyen par
 rdzogs pa'i las so // tshogs nyi shus byas pa'i las ni dge 'dun lhag ma las dbyung ba'i las so //
 bzhi bcus bya ba'i las ni dge slong ma bsnyen par rdzogs par bya ba'i las so // (C. 268a) dge
 'dun mthun¹² pas byas pa'i las ni mtshams kyis las dang / gso sbyong gi las dang / dgag dbye
 dang gzhan de lta bu dang¹³ mthun pa'i¹⁴ las so //

thams cad yod par smra ba'i¹⁵ sde ba'i¹⁶ 'dul ba¹⁷ 'dzin pa btsun pa Chos skyob
 dang / btsun pa dByangs sgrogs dang / btsun pa dByig bshes¹⁸ dang / btsun pa Sangs rgyas
 lha dang / btsun pa bSam rdzogs dang / mkhas pa chen po Nor gyi rtsa lag dang / gnas brtan

1 GNP dang /. 2 GNP kyis. 3 GNP kyis. 4 D bsnyan. 5 GNP om. 6 GNP om. 7 P par.
 8 GNP gis. 9 N om. 10 GNP kyis. 11 C pa'i chags. 12 C 'thun. 13 GNP dang /.
 14 GNP om. 15 G bī, P ba. 16 G pī. 17 P ba'i sde pa'i 'dul ba. 18 GP shes.

Yon tan 'od dang / btsun pa Shākya 'od la sogs pa dag na re / rnam pa bcus bsnyen par
rdzogs te /

rab¹ byung bas ni sangs rgyas dang rang sangs rgyas so // nges par 'jug pa ni rten
lnga ba'o² // dge slong tshul shog ces pas ni Graggs pa la sogs pa'o // ston par khas
blangs pas ni 'Od srungs chen po la sogs pa'o // dri bas mnyes pas³ ni Legs sbyin la
(P. 302b) sogs pa'o // bla ma'i chos khas blangs pa ni sKye dgu'i bdag mo chen mo'o //
pho nyas ni Chos sbyin (G. 416b) no // 'dul ba (N. 298b) 'dzin pa ma gtogs pa lngas ni
mtha' 'khob pa'o // bcu'i tshogs kyis ni dbus kyi mi rnams te /⁴ skyabs su 'gro ba lan
gsum bzlas⁵ pas ni sde bzang drug cu'i tshogs bsnyen par⁶ rdzogs par byas so⁽⁶⁷⁾

zhes zer ro //

dge slong ni bzhi ste / ming gi dge slong dang / khas 'che ba'i dge slong dang / slong bas
na dge slong dang / nyon mongs pa 'joms pa'i dge slong ngo // ding⁷ sang gi dus na tshul
khrims rnam par dag pa'i dge slong ni shin tu dkon te / slob (D. 262b) dpon Zhi ba lha'i zhal
nas /

bstan rtsa dge slong nyid yin te //

dge slong nyid kyang dka' bar gnas //^{8, (68)}

zhes gsungs pas / dge slong bslab pa la rma byung ba / nyams pa ral ba nag nog can du gyur
pa dang / zhig pa dang ma tshang bar gyur pa'i dge slong bas ni dge bsnyen rnam par dag pa
theg pa chen po'i snod du bsngags so zhes bla ma dag ched cher gsung ngo //

yang bshad par bya ste / sdom pa zhes bya ba ni 'chal pa'i tshul khrims kyi rgyun 'gog
cing sdom pa'o // de yang 'di (C. 268b) ltar gang las 'thob pa dang / ji ltar 'thob pa dang
/sdom pa blang ba'i dus dang / ji ltar blang ba dang / ji ltar gtong ba dang / de'i rang bzhin
dang / ltung ba 'byung ba'i rgyu dang / ltung ba mi 'byung ba'i rgyu dang / ltung ba las ldang
ba'o //

gang las 'thob ces pa la sogs (G. 417a) pa'i don ni 'dul ba 'dzin pa la dri ba dang / gzhung
dag blta bar bya'o //

(67) *Abhidharmakśabhāṣya*. Pradhan ed., p. 212.4-9.

(68) *Bodhi(sattva)caryāvatāra* 9.45ab

1 D rang. 2 GP pa'o. 3 CD pa. 4 CD om. 5 P zlas. 6 GNP pa. 7 GNP deng.
8 GNP om.

ji ltar gtong zhe na / so sor¹ thar pa'i sdom pa gtong ba'i rgyu ni mang ste / mi brda phrad
pa'i drung du bslab pa'i gzhi rnambs bsam pa thag pa nas phul ba dang / ris mthun pa btang
ba dang / pham pa'i nyes pa byung ba dang / mtshan gnyis dus gcig tu byung ba dang / dge
ba'i rtsa ba chad pa'o //

ci'i (P. 303a) phyir sdom pa de gtong ba'i rgyu yin zhe na / yang dag par gtang² ba'i
sems³ skyes pa dang / rten bor ba dang /⁴ ltung ba'i rgyu gang yang rung ba skyes pa
dang / rten nyams pa dang / (N. 299a) gzhi chad pa'o //

yang 'dul ba 'dzin pa la la na re /

ltung ba gcig byung bas thams cad gtong bar⁵ 'gyur ro
zhes zer ro // kha cig

dam pa'i chos nub pa'i dus su gtong ngo
zhes so // thams cad yod par smra ba'i 'dul ba 'dzin pa dag ni 'di skad du

ltung ba gcig byung bas lhag ma mi gtong ste / de la sdom pa dang sdom pa ma yin
pa gnyis ka yod de / mi zhig la nor yang yod la bu lon yang chags pa bzhin no // ltung
ba de bshags na de tshul khirms dang ldan pa yin gyi / sdom pa med pa ni ma yin no
zhes zer ro //

mtshan gyur pa ni sngon med pa'i sdom pa yang mi gtong la / thob zin pa yang gtong bar
mi 'gyur ro⁶ // dam pa'i chos nub pa (G. 417b) na yang de bzhin no // tshe 'phos pas gtong ba
yang 'di ltar lus mi (D. 263a) 'dra ba dang der sbyor ba ma byas pa dang /⁷ sdom pa mi dran
pa'i phyir ro // de dag ni slob dpon Nor gyi rtsa lag gi rjes su⁸ 'brangs⁹ nas bshad pa'o //
gzhung de ma yin pa'i lugs mang du yod mod kyi 'dir bzhag¹⁰ go //¹¹

rang bzhin yang 'dul ba'i gzhung dag dang / rang rang sde pa'i 'dul ba 'dzin pa la dri bar
bya'o //

ltung ba 'byung ba'i rgyu ni gnyis te / bya ba mi (C. 269a) byed pa dang / mi bya ba
byed pa'o // yang bzhi ste / mi shes pa dang / ma gus pa dang / bag med pa dang / nyon
mongs pa che ba'o //

ltung ba mi 'byung ba'i rgyu ni lnga ste / dbang po rnambs kyi sgo bsdams te /¹² 'dug pa
dang / zas kyi tshod rig pa dang / nam gyi cha stod dang¹³ cha smad la mi nyal ba rnal 'byor

1 GNP so. 2 GNP btang. 3 GNP sems pa. 4 GNP om. 5 GNP stong par for gtong bar.

6 G 'gyuro. 7 N //. 8 N rjesu. 9 GNP 'brang. 10 CD gzhag. 11 CPN /. 12 CGNP om.

13 GNP om.

la brtson pa dang / shes bzhin du spyod pa dang / dran pa dang ldan pa dang / bag yod pa dang / kha na ma tho ba chung ngu la 'ang 'jigs par (P. 303b) blta ba dang / tshul bzhin du sems pa ni rgyu dang po'o // dge sbyong gi tshul shas cher lta ba dang / ston pa dang / tshangs pa mtshungs par spyod pa dang / bstan (N. 299b) pa la dga' ba'i lha dag dang / skye bo mkhas pa dang / 'jig rten pa dag gis smad¹ par 'gyur ro snyam pa dang / bdag nyid la dpyad² nas ngo tsha ba dang / khrel yod pa ni rgyu gnyis pa'o // don nyung ba bya ba nyung ba³ / las (G. 418a) kyi mtha' nyung ba ni rgyu gsum pa'o // khyim pa dang rab tu byung ba dang mi 'dre bar gnas pa dang ltung ba dang ltung ba ma yin pa la mkhas pa dang dge ba'i phyogs la brtson pa ni rgyu bzhi pa'o // las dang po pa dang smyos⁴ pa dang gnyid log pa dang / sems 'khrugs⁵ pa dang / tshor bas nyen pa ni rgyu lnga pa'o //

ltung ba las ldang ba ni gsum ste / 'gyod pa lnga bskyed pa dang / yan lag lngas bsdu pa'i bag yod pa dang / rnam pa lngas 'gyod pa bsal ba'o⁶ //

yan lag lngas bsdu pa ni *Nyan thos kyi sar* blta bar bya'o //

'gyod pa lnga⁷ skyed⁸ pa ni 'di na la la dag la ltung ba byung ba na /⁹ 'di snyam du bdag nyid la gzhi 'dis tshul khirms nyams par 'gyur ro snyam pa dang /¹⁰ ston pa dang tshangs pa mtshungs par spyod pa mkhas pa dag gis smad par 'gyur ro¹¹ snyam pa dang / lha dag gis smad par 'gyur ro¹² snyam pa dang / phyogs dang phyogs mtshams (D. 263b) dag tu sdig pa can gyi skye bos grags pa dang¹³ sgra dang tshigs su¹⁴ bcad pa ma yin pa brjod par 'gyur ro snyam pa dang / mi dge ba'i gzhi 'dis bdag lus zhis nas ngan song (C. 269b) dag tu skyes na mi rung ngo snyam 'gyod pa skyed¹⁵ pa'o //

rnam pa lngas 'gyod pa bsal ba ni bcom ldan 'das kyis gzhi dang bcas /¹⁶ nges par 'byung ba dang bcas pa'i chos bstan¹⁷ pas ltung ba las ldang ba'i thabs yod do snyam pa dang / mi shes pa dang bag¹⁸ med pa dang ma gus pa dang nyon mongs pa che ba dag gis ltung ba byung (P. 304a) ba¹⁹ mi shes (G. 418b) pa nas bzhi po de dag skyes so snyam pa dang / ltung ba la ltung ba mi 'byung bar bya ba'i phyir lha pa'i bsam pa thag pa nas sems bskyed do snyam pa dang / tshangs pa (N. 300a) mtshungs par spyod pa mkhas pa dag gi mdun du legs par bshags pa²⁰ zin to snyam pa dang / bdag legs par gsungs pa'i chos 'dul ba las rab tu byung nas bslab pa dang 'gal na 'gyod pa byed pa de ni yang dag pa dang legs pa ma yin gyi²¹ / bdag bcom²² ldan 'das kyis 'gyod pa'i rgyun sgrib pa'i gnas rnam grangs du mar smad

1 GNP rmad. 2 C la dpyas, D lad pyas. 3 NP pa. 4 GNP smyon. 5 GP 'khrug. 6 GNP ba'o.
7 CD lngas. 8 CD bskyed. 9 CD om. 10 GNP om. 11 G 'gyuro. 12 G 'gyuro.
13 P dang /. 14 N tshigsu. 15 CD skyes. 16 P //. 17 GNP stan. 18 GNP bdag.
19 G om. 20 GNP par. 21 GNP gyis. 22 N bcom.

pa /bar du gcod pa'i chos gang yin pa des mang du gnas shing dang du len par byed la / sel
bar mi byed la mi sel ba gang yin pa de ni bdag dge ba dang legs pa ma yin no snyam nas
'gyod pa sel ba'o //

yang na sde pa so so'i rang rang gi 'dul ba las 'byung ba'i thabs kyis¹ bshags par bya'o //
yang na bdag gis byas pa'i *ltung ba bshags pa'i cho ga* rgyas pa'i thabs des bshags par
bya'o // zla ba phyed phyed² cing so sor³ thar pa'i mdo gdon zhing gso sbyong la rab tu
brtson par bya'o // dge slong 'dul ba'i bslab pa la de ltar brtson pa ni ltung ba la mkhas pa
yin / ltung ba las nges par 'byung ba la mkhas pa yin /⁴ bdag nyid dag pa dang /⁵ gtsang ba
dang /⁶ dri ma⁷ med pa dang / kha na ma tho ba med pas⁸ 'gyod (G. 419a) pa med de </> de⁹
khyim nas khyim med par rab tu byung nas legs par gsungs pa'i chos 'dul ba'i tshul khriims
nyams pa dang zhid pa dang ral ba dang / nag nog can dang mi gstang ba med cing legs par
bsrung ba dang / sbyangs pa'i yon tan bcu gnyis dang / dge sbyong gi rgyan bcu bdun gyis
brgyan¹⁰ nas gnas (D. 264a) pa ni dge slong yang dag pa yin no snyam du (C. 270a) bsams
nas /

tshangs spyod dpal dang ldan pa yi //

dge slong sdom pa dag tu bzhed //¹¹ [BPP 85-86]

(P. 304b) ces smras so // des¹² na mgon po mi pham pa'i zhal nas /

ltung ba¹³ 'byung dang ldan pa dang //

nges par 'byung dang gang zag dang //

bcas pa dang ni rab dbye bas //

rnam par nges phyir (N. 300b) 'dul ba'i chos //^{14, (69)}

zhes mdo sde rgyan las gsungs so¹⁵ // nyan thos kyi theg pa'i skabs rdzogs so ///

'di ltar so sor¹⁶ thar pa'i¹⁷ sdom pa tsam /¹⁸ smon pa'i sems bskyed pa tsam gyis chog cing
de tsam la ltos par mi bya ste / 'Phags pa dKon mchog sprin las /¹⁹

rigs kyi bu ji ltar na byang chub sems dpa' bslab pa'i sdom pas bsams pa yin zhe
na / 'di la byang chub sems dpa' 'di ltar spyod de / so sor²⁰ thar pa'i sdom rdzogs par '

(69) *Mahāyānasūtrālamkāra* 11.4.

1 PGN *kyi*. 2 G om. 3 GNP *so*. 4 GN P // . 5 GNP om. 6 GNP om. 7 GNP om.
8 GNP om. 9 GNP om. 10 GNP *gyi rgyan*. 11 GNP om. 12 GNP *de bas*. 13 GNP *dang*.
14 GNP om. 15 G *gsungso*. 16 GNP *so*. 17 GNP *par*. 18 G // . 19 D om. 20 GNP *so*.

tshang pa tsam gyis bdag bla na med pa yang dag par rdzogs pa'i byang chub tu mngon
par rgya bar mi nus kyi¹ / de bzhin gshegs pas gang 'di mdo sde de dang de (G. 419b)
dag las byang chub sems dpa'i spyod pa dang / byang chub sems dpa'i bslab pa'i gnas
bcas pa de dag la bdag gis bslab par bya'o⁽⁷⁰⁾

zhes gsungs pas na² / 'dir yang byang chub sems dpa'i bslab³ par gya chen po la bslab par
bya ba'i phyir bdag gis bla ma'i rjes su⁴ bstan pa dang / theg pa chen po'i mdo sde'i rjes su⁵
'brangs nas bshad par bya'o //

de ltar theg pa chen po'i thun⁶ mong ma yin⁷ pa'i rten bstan nas / da ni shing rta chen po'i
lam bstan pa'i phyir /

byang chub sems dpa'i sa dag gi //⁸

*Tshul khrims le'ur*⁹ gsungs cho ga yis //¹⁰ [BPP 87-88]

zhes bya ba la *Byang chub sems dpa'i sa* ni 'phags pa Thogs med kyi¹¹ mdzad pa'i pha rol
tu phyin pa drug bkod pa'i bstan bcas so // de las kyang *Tshul khrims kyi pha rol tu phyin*
pa'i le'u las so // de yang dgu yin te /

ngo bo nyid dang thams cad dang //¹²

dka' ba dang ni sgo kun dang //

skyes bu dam pa nyid dang ni //

rnam kun dang ni phongs shing (P. 305a) 'dod //

'di dang (C. 270b) gzhan du bde 'gyur dang //

rnam par dag pa'i tshul khrims so //

de dag gi nang nas kyang¹³ ngo bo nyid¹³ thams cad kyi tshul khrims las (D. 264b)
gsungs so⁽⁷¹⁾

zhes bya'o //

ji ltar gsungs she na / *Tshul khrims kyi le'u* las (N. 301a) gsungs pa'i cho gas¹⁴
bya'o // cho ga de yang ji ltar zhe na /

yang dag msthan nyid ldan pa yi¹⁵ //

bla ma bzang las sdom pa blang¹⁶ //¹⁷ [BPP 89-90]

(70) *Ratnameghasūtra*. Tib. P. No.897, Dzu 14b3-5. Cf. *Śikṣāsamuccaya*, p. 17.6-9.

(71) *Bodhisattvabhūmi*. Wogihara ed., p. 137.2-8.

1 GNP *kyis*. 2 GNP *pa nas*. 3 N *slab*. 4 N *rjesu*. 5 N *rjesu*. 6 G *mthun*. 7 GP *om*.
8 CGP /. 9 CD *le'u*. 10 P /. 11 GNP *kyi*. 12 P /. 13 GNP *om*. 14 GNP *ga yis*.
15 GNP *yis*. 16 GNP *blangs*. 17 P *om*.

zhes smras so // (G. 420a) yang dag pa'i mtshan nyid bzang po de dang ldan pa'i bla ma
bzang po de yang gang zhe na /

sdom pa'i cho ga la mkhas dang //

bdag nyid gang zhig sdom la gnas //

sdom pa 'bogs bzod snying rje ldan //

bla ma bzang por shes par bya //¹ [BPP 91-94]

zhes bya ba de yin no // de la sdom pa'i cho ga la mkhas zhes pa ni de la mkhas shing byang
ba'o // sdom la gnas zhes pa ni bla ma'i tshul khriṃs nyams pa dang zhig pa med cing gtsang
ba'o // bzod ces pa ni nus pa dang ldan pa ste /² sdom pa 'bogs pa la rag ma las par chas
pa'o // snying rje ldan zhes pa ni slob ma la bu'i 'du shes dang / gzhan gyi sdug bsngal la
sems mi bzod pa'o // bla ma zhes bya ba ni bla mar bya ba'i gnas su gyur pa nyid la nod par
bya'i gzhan las ni ma yin te / gus pas bla mar 'dzin pa dang / de'i rjes su³ slob ma'i ngang
tshul can dang / des bstan pa'i don la gus pa chen po byed pa'i phyir ro // yang na⁴ bla ma de
phun sum tshogs⁵ pa bzhi dang ldan pa yin te / tshul khriṃs phun sum tshogs pa dang / yon
tan⁶ phun sum⁷ tshogs pa dang / bsam pa phun sum⁸ tshogs⁹ pa dang / sbyor ba phun sum¹⁰
tshogs pa'o // de la

bdag nyid gang zhig sdom¹¹ la gnas

zhes pas ni tshul khriṃs phun sum tshogs pa bstan to // sdom pa'i cho ga la mkhas dang //
sdom pa 'bogs bzod ces pas ni¹² yon (G. 420b) tan phun sum tshogs¹³ pa¹⁴ bstan to //

yang (P. 305b) bshad pa / sdom la gnas zhes pa ni bla ma des sdom pa btang¹⁵ ba dang /
tshul khriṃs 'chal pa dang / chos mthun pa ma yin pa las¹⁶ sdom pa mi 'thob bo¹⁷ // cho ga la
mkhas zhes pa ni cho ga la mkhas pa las (C. 271a) gnod par bya'i cho ga mi (N. 301b) shes
pa las ni de nyid cho ga nyams pas sdom pa mi 'thob bo¹⁸ // 'bogs bzod ces pa ni rab tu dga'
ba'i yid kyis tshul 'di lta bu la 'jug pa ni legs so // bdag gis the tshom med par
sdom pa sbyin par bya'o snyam du sdom pa ster bar nus (D. 265a) so¹⁹ // snying rjer ldan
zhes pas ni bsam pa phun sum tshogs²⁰ pa dang / sbyor ba phun sum tshogs pa bstan te / de

1 P/. 2 CD om. 3 N rjesu. 4 CD om. 5 N sum tshod. 6 N yotan.
7 N sun, P om. 8 P om. 9 N tshod. 10 NP om. 11 D sdom pa gang. 12 GNP ni //.
13 N tshod. 14 P om. 15 GP gtang. 16 GNP las ni. 17 N 'thobo. 18 D po.
19 CD pa'o. 20 N tshod.

la bsam pa phun sum tshogs pa ni dad pa nyid /¹ bsam pa thag pa nas byed pa nyid dang /
 ma chags pa dang snying rje dang ldan pa nyid de / bla ma la gus pa dang / 'dod pa chung ba
 dang / cho ga shes pa dang / zang zing lhur mi len pa dang / skyo ba med pa dang / pha rol
 gyi nyes pa bzod pa dang / khro ba dang khon du 'dzin pa med pa'o // sbyor ba phun sum
 tshogs pa ni dge ba'i chos phyr zhing spel ba dang / gus shing 'jug pa dang / bslab pa'i² gzhi
 rnam la ma rmongs par byed pa dang / spro ba dang le lo mi byed pa dang / 'dod
 pa'i bde ba dang / 'du 'dzi dag la mi dga' ba dang / sems rnam par ma g-yengs pa'o³ //

(G. 421a) de lta bu'i bla ma las sdom pa blangs na tshul khrims kyi bslab pa 'phel bar
 'gyur ro // de lta bu ni /

yang dag msthan nyid ldan pa yi //

bla ma bzang las sdom pa blang //⁴ [BPP 89-90]

zhes bdag gis⁵ bsams so⁶ // de yang /⁷

sdom pa len pa'i cho ga dang //

grangs dang sdom pa gtong ba'i rgyu //

mi gtong rgyu dang ldan pa dang //

tshul khrims kyi ni phan yon yin //⁸

zhes pa ni bsdus pa'o // 'dir sngon gyi mkhas pa chen po du ma'i lugs yod mod kyi 'on kyang
 skye bo chen po'i chos lugs shing rta chen po'i lam chen po yin (P. 306a) pas / slob dpon
 Thogs med kyi lugs dang / rje btsun Zhi ba lha'i lugs gnyis bshad par bya'o //

sdom pa len pa'i cho ga ni slob dpon Thogs⁹ med kyis¹⁰ *Tshul khrims kyi le'ur*¹¹ rgyas
 par mdzad pa dang / yang na bdag gis¹² byas pa'i cho gar blta bar bya'o // slob dpon
 med pa'i (C. 271b) cho (N. 302a) ga yang *Tshul khrims kyi le'u* de nyid na rgyas so // bdag
 gis byas pa'i cho ga de ni 'phags pa Thogs¹³ med kyi rjes su¹⁴ 'brangs pa'i yin no // slob dpon
 Zhi ba'i lhas ni cho ga 'di *sPyod pa la 'jug par* yang mdzad mod kyi / *bSlab pa kun las btus*
par rgyas par mdzad do // slob dpon med pa'i cho ga yang de nyid du gsal bar mdzad do //
 'dir bdag gis /

de la 'bad pa 'di 'dra ba'i //

bla ma gal te ma rnyed¹⁵ na //

1 P // . 2 P pa. 3 GNP g-yeng ba'o. 4 P/. 5 GNP gi. 6 G bsamo. 7 GNP om.
 8 P/. 9 N thod. 10 G kyi. 11 P la'ur. 12 GN gi. 13 N thog. 14 N rjesu.
 15 P rnyes.

gzhan (D. 265b) la sdom pa nod pa yi //

cho ga yang dag bshad par bya //

de la sngon tshe 'Jam pa'i¹ (G. 421b) dbyangs //² [BPP 95-99]

zhes bya ba nas /³

mi dge ba'i las rnam mi bya'o //⁴ [BPP 128]

zhes pa'i bar 'dir bla ma med pa'i cho gar bkod de / Aṃ ba rā dza'i cho ga 'di⁵ ni bla ma yod pa dang / bla ma med pa gnyis ka'i cho ga'i⁶ tshig⁷ yin no zhes bla ma dag gsung bas 'dir bla ma med pa'i cho gar bkod do // bslab pa kun las btus par ni 'dis⁸ bla ma las blangs pa'i cho gar gsungs mod kyi / 'on kyang bdag ni lugs de gnyis ka'i rjes su⁹ 'brangs pas¹⁰ na bla ma las blangs¹¹ pa'i cho ga¹² *Tshul khrims kyi le'u* la brten zhing¹³ bkod la / bla ma¹⁴ med pa'i cho ga ni *bSlab pa kun las btus pa* la bretn zhing¹⁵ bkod pa yin no //

tshul khrims kyi rnam grangs ni 'phags pa Thogs med kyi¹⁶ mdo sde ma lus pa ngo bo nyid la sogs pa'i tshul khrims dgur bsdu te / *Tshul khrims kyi le'u* de nyid las

byang chub sems dpa' rnam kyi tshul khrims ni de tsam du zad do // tshul khrims

kyi bya ba yang de tsam du zad do // tshul khrims kyi phan yon (P. 306b) yang de tsam

du zad do // de las gong na yang med do // de las lhag pa yang med do⁽⁷²⁾

zhes gsungs so¹⁷ // slob dpon Zhi ba'i lhas ni mdo sde ma lus pa gang zag gsum gyi¹⁸ bslab pa¹⁹ mdzad de / 'di ltar theg pa chen po la goms pa che ba dang / goms pa 'bring dang / goms pa chung ba'o //

goms pa che ba'i (N. 302b) dbang du mdzad nas *bSlab pa kun las* (G. 422a) *btus pa nas* /

byang chub sems dpa'i sdom pa ni //²⁰

rgyas par theg pa che las 'byung //^{21, (73)}

zhes 'byung ba dang / *sPyod 'jug* las kyang /

(72) *Bodhisattvabhūmi*. Wogihara ed., p.188.11-13.

(73) *Śikṣāsamuccaya* 3ab

1 N *dpa'i*. 2 G /. 3 GNP om. 4 P om. 5 GNP 'dis. 6 GNP *ga*. 7 GNP om.
8 GNP 'di. 9 N *rjesu*. 10 CD 'brang bas. 11 NP *blang*. 12 GNP *ga'i*. 13 G *cing*.
14 D *na*. 15 GNP *cing*. 16 GNP *kyi*. 17 G *gsungso*. 18 P *gyis*. 19 P *par*. 20 GNP /.
21 NP /, G om.

rgyal sras rnam kyis¹ mi bslab pa //

'ga' yang yod pa ma yin no //(74)

zhes gsungs so // bla ma dpal Byang chub bzang po'i zhal nas kyang /

'di ltar byang chub sems dpa' rnam kyis bslab pa'i gzhi rnam dngos su² byung ba
'di dag ni mdor bsdus pa ste / gzhan yang byang chub sems dpa' dag gi bslab pa ni
dpag tu med cing mthar thug pa med pa'i phyir / de dang de dag tu bstan pa'i rjes su³
'brangs nas nyes par 'gyur ba dang / nyes par mi 'gyur ba dag rig par bya'o⁽⁷⁵⁾

zhes gsungs (D. 266a) so⁴ //

de la goms⁵ pa 'bring po'i dbang du mdzad nas yang *bSlab pa kun las btus pa nas*

gang gis ltung bar mi 'gyur ba'i⁶ //

gnad kyis gnas rnam 'dis rig bya //

bdag gi⁸ lus dang longs spyod dang //

dus gsum skyes pa'i dge ba rnam //

sams can kun la btang ba dang //

de bsrung dag pa spel ba 'o⁹ //(10, (76)

zhes gsungs so¹¹ //

goms pa chung ba'i dbang du mdzad na¹² yang de nyid las /¹³

de bas na byang chub sems dpa' sangs rgyas kyis spyang sngar bslab pa¹⁴ rnam kyis
nang nas bslab pa¹⁴ gang yang rung ba¹⁵ srung¹⁶ bar 'dod nas yi dam bca' bar byed do //
dge ba'i bshes gnyen med na sangs rgyas dang byang chub sems dpa'i spyang sngar rang
gi nus pa dang sbyar nas sdom pa 'dzin no // de bas (G. 422b) na (P. 307a) rang gi nus
pa dang sbyar nas bslab pa gcig tsam yang yang dag par blangs la bsrung bar bya'o⁽⁷⁷⁾

zhes gsungs so¹⁷ //

(74) *Bodhi(sattva)caryāvatāra* 5.100ab.

(75) *Bodhisattvasaṃvaraviṃśakapañjikā*. Tib. D, Hi 217a3-b4.

(76) *Śikṣāsamuccaya* 3cd-4.

(77) *Śikṣāsamuccaya*. Bendall ed., p.12.2-5.

1 GNP kyis. 2 N dngosu. 3 N rjesu. 4 G gsungso. 5 C gems. 6 P pa'i. 7 D /.

8 GNP gis. 9 P pa'o. 10 P om. 11 G gsungso. 12 GNP nas. 13 CD om, P //.

14 GNP om. 15 NP om. 16 NP bsrung. 17 G gsungso.

de la sdom pa gtong ba'i rgyu ni 'phags pa Thogs med kyi lugs kyi¹ ni 'di ltar byang chub chen por smon lam btab pa btang ba dang / kun nas dkris² pa chen pos pham pa byung ba'o // de la snga ma ni sems can gyi don la skyo ba dang / byang chub thag ring bar sems pa dang / nyan thos (N. 303a) dang rang sangs rgyas dang phyi³ rol par smon pa skyes pa'o // de la phyi ma yang ngo tsha ba dang khrel med⁴ par gyur cing de la 'gyod pa med par sems kyi⁵ btang ba dang / mi brda phrad pa'i drung du bslab pa'i gzhi phul ba'o // slob dpon Zhi ba lha'i lugs ni *bSlab pa kun las btus pa'i* bdud kyi las gnod pa dang / (C. 272b) dam pa'i chos mi 'dzin pa'i gnod pa la sogs pa bcu bzhi po rnam mi spong ba dang / yang na dran pa nyams pa dang le lo dang bag med pa dang ltung ba la mi mkhas pa dang⁶ ngo tsha med pa dang khrel med pa'o // bla ma'i zhal nas ni

bslab pa'i gzhi rnam la mi mkhas pa dang / dran pa med pa dang 'khrul ba dang⁷ ma gus pa'o⁽⁷⁸⁾

zhes sdom pa nyi shu pa'i 'grel pa las gsungs so⁸ //

de la ltung ba mi 'byung ba'i rgyu ni / 'phags pa Thogs med kyi lugs ni 'di ltar shes bzhin dang dran pa dang / brtson 'grus dang / bag yod pa dang / nyes pa dang nyes pa med pa shes pa (D. 266b) dang / ngo tsha ba dang khrel yod pa'o // slob dpon zhi ba'i lha'i yang de dag thun⁹ mong ba nyid las¹⁰ gnod pa bcu (G. 423a) bzhi¹¹ sel zhing spong ba'o // slar </>

gso ba dang / thog ma nyid nas 'gal bar mi byed pa ni 'gyod pa med pa yin no¹² // nyes pa la nyes par mthong na srab par byed la / de nyid mthol zhing bshags na byang bar 'gyur ro

zhes kyang bla ma dag gsung ngo // 'phags (P. 307b) pa Thogs med kyi¹³ lugs kyi ni 'di ltar / ltung ba las ldang ba ni *Tshul khrims kyi le'u* las

gal te slob dpon du rung ba'i gang zag med na⁽⁷⁹⁾

zhes bya ba la sogs pa dang / yang kun nas dkris¹⁴ pa chen po'i pham pa byung na / des dge 'dun gyi mdun du bshags la sdom pa slar mnod¹⁵ par bya'o // nyes byas

(78) *Bodhisattvasaṃvaravimśakapañjikā*.

(79) *Bodhisattvabhūmi*. Wogihara ed., p.181, Tib. D. No. 4037, 202a4-5.

1 GN *kyi*. 2 GNP *bkris*. 3 CD *phyir*. 4 CD *yod*. 5 GNP *kyi*. 6 GNP *dang /*.
7 GNP *dang /*. 8 G *gsungso*. 9 G *mthun*. 10 NP *pas*. 11 CD *bzhis*. 12 N *yino*.
13 P *kyis*. 14 G *bkris*. 15 GNP *nod*.

ni nyan thos sam / theg pa chen po¹ gang yang rung ba la bshags so² // slob dpon Zhi
ba'i lhas ni *bSlab pa kun las* (N. 303b) *btus par* f³

rdzogs sangs rgyas kyis gsungs tshul du //

'bad pa med na ngan song 'gro //^{4, (80)}

zhes pa'i skabs su / 'Phags pa Chos bzhi pa'i mdo'i don bshad pa'i skabs na⁵ gsal bar bkod
do⁶ //

tshul khirms kyis phan yon ni ji skad du *Tshul khirms kyis le'u las* </>

de ltar byang chub sems dpa'i tshul khirms kyis phung po chen po 'di ni byang chub
chen po'i 'bras bu bskyed pa ste / 'di la brten nas tshul khirms kyis pha rol tu phyin pa
yongs su⁷ rdzogs par byas nas mngon par 'tshang rgya'o⁸ // ji srid sangs ma rgyas kyis
bar du yang phan yon lnga thob par 'gyur te f⁹ (C. 273a) sangs rgyas kyis¹⁰ dgongs par
'gyur ba dang / mchog tu dga' ba chen po la gnas bzhin du 'chi ba'i dus byed pa dang /
(G. 423b) tshe phyi ma la yang chos mthun pa'i dge ba'i bshes gnyen gnas pa der skye
ba dang / tshe 'di la tshul khirms kyis pha rol tu phyin pa rdzogs par byed pa'i bsod
nams kyis phung po tshad med pa dang ldan par 'gyur ba dang / tshe phyi ma yang rang
'khrungs kyis tshul khirms de dang de nyid 'thob par 'gyur ro^{11, (81)}

zhes gsungs so¹² // *bSlab pa kun las btus pa* nas kyang 'di skad du /

deng sang gi dus na bslab pa bsrung ba ni shin tu phan yon che bas de la brtson par
rigs so^{13, (82)}

zhes gsungs te / de yang 'Phags pa (D. 267a) *lHag pa'i bsam pa bskul ba dang* / (P. 308a)
Rab tu zhi ba cho 'phrul dang / *Zla ba sgron ma dang* / *dKon mchog sprin gyi mdo* rnam
der bkod pa yin no¹⁴ // bla ma'i zhal nas kyang

de ltar na 'di ni de'i mod la ngan song du 'gro ba rnam¹⁵ bca'd cing skye bar 'gyur

ba ma yin no^{16, (83)}

zhes pa dang / yang

(80) *Śikṣāsamuccaya* 19cd.

(81) *Bodhisattvabhūmi*. Wogihara ed., p. 187.16-27.

(82) *Śikṣāsamuccaya*. Not identified.

(83) *Samvaraviṃśakapañjikā*. D. No. 4083, Hi 194b6.

1 GNP om. *chen po*. 2 G *bshags*o. 3 GNP om. 4 G /. 5 GNP *nas*. 6 G *bkodo*.

7 GN *yongsu*. 8 C *bya'o*. 9 DGN om. 10 GNP *kyi*. 11 G 'gyuro. 12 GN *gsungs*o.

13 GN *rigs*o. 14 G *yino*. 15 C *rnam pa*, D *rnam*. 16 G *yino*.

de ni ngan song du skye ba ma yin la / brgya la skyes na yang sdug bsngal drag po
mi myong ba dang / myur du thar pa¹ dang / der gnas pa na yang gzhan yongs su²
smin par byed do⁽⁸⁴⁾

zhes sDom pa nyi shu pa'i 'grel pa las gsungs so³ //

sdom pa yang dag par blangs pa de la phan (N. 304a) yon gzhan yod de / 'phags pa
Candra⁴ go mi'i zhal nas /

de tshe de la dge ba'i phyir⁵ //
sangs rgyas sras dang bcas rnams kyis //
dge ba'i thugs kyis⁶ rtag par yang //
bu sdug 'dra bar dgongs par 'gyur //^{7, (85)}

zhes gsungs pa dang / yang slob dpon Zhi ba lha'i zhal nas kyang /

de ring sangs rgyas rigs su⁸ skyes //
sangs rgyas sras⁹ su¹⁰ bdag¹¹ gyur to //
rigs¹² (G. 424a) dang mthun pa'i las brtsams te¹³ //
skyon med btsun pa'i rigs 'di la //
rnyog par mi 'gyur de ltar bya //^{14, (86)}

zhes gsungs pas / sdom pa blangs pa'i byang chub sems dpa' des tshul khrims bsrung zhing
spel dgos pas /

rang gi¹⁵ lus ngag sems ni rnam dag rgyu //
'jug pa'i (C. 273b) sems kyis bdag nyid sdom gnas pa¹⁶ //¹⁷ [BPP 129-130]

zhes smras te /

rang gi lus ngag sems¹⁸ ni rnam dag rgyu¹⁹ //²⁰

zhes bya ba ni ji skad du *De bzhin gshegs pa'i snying rje'i mdo* las /

lus gtsang byed dang / ngag gtsang byed dang / yid gtsang byed do⁽⁸⁷⁾

(84) *Bodhisattvasaṃvaraviṃśakapañjikā*. Tib. D. No. 4083, Hi 195a3.

(85) *Bodhisattvasaṃvaraviṃśaka* 3.

(86) *Bodhi(sattva)carāvatāra* 3.26c-27.

(87) *Tathāgatamahākaraṇīrdsāsūtra*. Tib. P. No. 814, Nu 120a8.

1 D ba. 2 GN yongsu. 3 G gsungso. 4 D tsan dra, GP tsantra. 5 P phyiro. 6 GNP kyi.
7 GP om. 8 N rigs. 9 N gras. 10 G srasu. 11 GNP da. 12 G riḍ. 13 GNP brtsam ste.
14 P om. 15 P gis. 16 CD pas. 17 P /. 18 N ngagems. 19 CD rgye med de.
20 P /.

zhes gsungs pas sdom pa'i tshul khirms kyis lus dang¹ ngag gnyis dag par byed la / dge ba'i chos sdud pa'i tshul khirms dang sems can don byed pa'i tshul khirms kyis sems dag par byed do² // yang na tshul khirms re res kyang lus la sogs pa gsum ga³ dag par byed do // (P. 308b) yang na srog gcod pa la sogs⁴ pa bdun spangs pas ni lus dang ngag dag par byed la / brnab sems la sogs pa gsum spangs pas ni sems dag par byed do⁵ // gzhan yang don 'di la dgongs nas *Mi 'am ci'i rgyal po ljon pas zhus pa'i mdo las /*

chags (D. 267b) pa dang zhe sdang dang⁶ gti mug dang bral bas lus yongs su⁷ dag pa'i tshul khirms dang / bdag gi lha dkon mchog gsum la mi slu ba'i mtshan nyid kyis⁸ ngag yongs su⁹ dag pa'i tshul khirms dang / brnab sems dang gnod sems dang log par lta ba med pas sems yongs (N. 304b) su¹⁰ dag pa'i tshul khirms dang⁽⁸⁸⁾

zhes gsungs so¹¹ //

(G. 424b) de lta bu yin pas na tshul khirms kyi¹² bslab pa la legs par slob par yang 'gyur zhing /¹³ de la goms pa'i stobs kyis tshul khirms de la dga' ba dang spro ba dang 'dod pa dang de la brtson pa dang gus pa cher 'gyur ro zhes bsams¹⁴ nas smra ba ni /

tshul khirms bslab pa gsum la legs bslabs nas //¹⁵

tshul khirms bslab pa gsum la gus cher 'gyur //¹⁶ [BPP 131-132]

zhes bya ba yin no¹⁷ // tshul khirms kyi bslab pa gsum ni sdom pa'i tshul khirms dang / dge ba'i chos sdud pa'i tshul khirms dang / sems can gyi don byed pa'i tshul khirms so¹⁸ //

de la sdom pa'i tshul khirms ni bcas pa'i kha na ma tho ba bsrung¹⁹ ba'i so sor thar pa'i ris bdun gyi sdom pa dang / rang bzhin gyi kha na ma tho ba srung ba'i mi dge ba bcu bsrung ba'o //

de la dge ba'i chos sdud pa'i tshul khirms ni sdom pa yang dag par (C. 274a) blangs pa'i 'og tu gang cung zad lus dang ngag dang yid kyis²⁰ byang chub kyi phyir dge ba bsags pa ste / de yang khyad par du thos pa dang bsams²¹ pa dang bsgom²² pa rnams la gcig tu dga'

(88) *Durmakinnarājaripṛchāsūtra*. Harrison ed., p. 125.6-10.

1 GNP om. 2 G byedo. 3 D ka. 4 P srogs. 5 G byedo. 6 GNP dang /. 7 GN yongsu.
8 GNP kyi. 9 G yongsu. 10 G yongsu. 11 GN gsungso. 12 P kyis. 13 GNP //.
14 GNP bsam. 15 P /. 16 GP om. 17 G yino. 18 G khrimso. 19 CD srung.
20 GNP kyi. 21 CD bsam. 22 G bsgom.

bas mngon par sbyor¹ ba'o // de bzhin du²-dus dus⁻²³ su bla ma rnams la gsong por smra ba dang / phyag bya ba dang /⁴ ldang ba dang / thal mo (P. 309a) sbyor ba dang /⁵ zhe⁶ sa dang bcas pas kun du spyod pa dang / bsnyen bkur byed pa dang / yon tan dang ldan pa'i bsngags pa brjod pa dang / bsod nams thams cad⁷ la rjes su⁸ yi rang ba dang / gzhan gyis brnyas pa la bzod pa dang / dge ba thams cad⁹ byang chub tu bsngo ba dang / dus dus su¹⁰ yang dag pa'i smon lam dag sna tshogs pa 'debs pa dang / mchod pa'i rnam pa rgya chen pos dkon mchog gsum la mchod par byed pa dang / dge ba (G. 425a) la brtson 'grus byed pa dang / bag med spangs pa dang / dran pa dang shes bzhin dang ldan (N. 305a) pas bslab pa'i gzhi rnams bsrung ba dang / dbang po'i (D. 268a) sgo bsdams pa dang / zas kyi tshod rig pa dang / nam gyi cha stod dang cha smad la mi nyal bar rjes su¹¹ brtson pa dang / skyes bu dam pa la brten pa dang / nyes pa dag shes shing mthong nas spang¹² ba dang / nyes pa chos bzhin du 'chags¹³ pa dang / de lta bu'i phyogs dang mthun pa'i dge ba'i chos rnams srung ba dang spel ba ste / de lta na dge ba'i chos sdud pa'i tshul khrims la gnas na dge ba'i chos kyi tshul sdud pa'i tshul khrims la gnas na dge ba'i chos kyi tshul shin tu bsdus par 'gyur¹⁴ te / 'di 'dod pa'i longs spyod la lta ba cung zad tsam yang dang du len par mi byed na mang po lta ci smos /¹⁵ pha rol tu phyin pa bcu dang / bsdu ba'i dngos po bzhi dang / tshad med pa bzhi ste / byang chub kyi sems bcu'i bdag nyid yin no //

sems can don byed pa'i tshul khrims ni 'di la sems can gyi don bya ba yin te / nad pa¹⁶ la sogs pa'i sdug bsngal can rnams la nad g-yog la sogs pa'i grogs¹⁷ byed pa yin no // long ba dag gi long khrid dang / 'on pa dag la lag brdas¹⁸ ston pa dang / rkang lag (C. 274b) med pa dag khur ba dang / 'dod pa'i 'dun pa can dag gi de sel ba dang / gzhan gyis¹⁹ sma²⁰ phab cing pham pa rnams de dag gi sdug (P. 309b) bsngal sel ba dang / lam gyis ngal ba dag la bza' ba dang / btung ba dang / gos dang / khang pa dag gis phan 'dogs so²¹ // gso ba'i (G. 425b) rig pas nad pa dag la zang zing med pa'i sems kyi²² mi skyo bar phan 'dogs so²³ // mdor na sems can gyi sdug bsngal thams

1 GNP sbyar. 2 G dusu dusu. 3 CD om. 4 GNP om. 5 CD om. 6 GNP zhes.
7 G thamd. 8 GN rjesu. 9 G thamd. 10 G dusu. 11 N rjesu. 12 GNP spong.
13 G 'chag. 14 N gyur. 15 GNP om. 16 CD om. 17 N 'grogs. 18 G brda', N brdos.
19 GNP gyi. 20 N sna. 21 G 'dogso. 22 GNP kyi. 23 G 'dogso.

cad sel ba dang / de bsal bar sems bskyed pa dang / dge ba thams cad gzhan gyi don du
bsngo ba'o // 'di dag gi don rgyas par *Tshul khrim*s ky*i le'u* ru blta bar bya'o //

de lta bu tshul khrim*s* ky*i* sdom pa rnam pa gsum ni bsod nams ky*i*¹ tshogs yin pas
tshogs de rdzogs par (N. 305b) bya'o² snyam du bsams nas /

de bas rnam dag rdzogs byang chub //

sems dpa'i³ sdom pa'i sdom dag ni //

'bad pa byas pas rdzogs byang chub //

tshogs ni yongs su⁴ rdzogs par 'gyur⁵ // [BPP 133-136]

zhes bya ba 'di yin no // de bas na rdzogs pa'i byang chub thob par 'dod cing de'i rgyu bsod
nams rdzogs par 'dod na⁶ byang chub sems (D. 268b) dpa'i sdom pa la⁷ 'bad pa dang rtsol ba
byas pas bsod nams ky*i* tshogs rdzogs par 'gyur ro zhes shes par bya'o // sdom pa'i sdom dag
ni zhes⁸ pa ni 'phags pa Thogs med ky*i* lugs la gnas pa'i byang chub sems dpa'i sdom pa
dang / slob dpon Zhi ba'i lha'i lugs la gnas pa'i byang chub sems dpa'i sdom pa'o // de lta bu'i
shing rta chen po'i lam gnyis la gnas nas 'bad pa dang / brtson par byas na⁹ bsod nams dang
ye shes ky*i* tshogs gnyis rdzogs par byas te / mngon par rdzogs par byang chub par 'gyur ro
zhes bla ma dag gsungs pa¹⁰ yin no // bla ma'i zhal nas

de lta bu'i tshul khrim*s* ky*i* bslab pa gsum ni yang dag par blangs pa dang /
(G. 426a) rjes su bsrungs pas bdag dang gzhan gyi don dang / phan pa dang bde bar
'gyur ba'i phyir dge ba'o // (P. 310a) byang chub sems dpa'i bslab pa dpag tu med pa
bsdus pa'i phyir dpag tu med pa'o // sems can¹¹ thams cad¹² la phan pa dang bde ba
mngon par sgrub¹³ (C. 275a) pa'i phyir phan 'dogs pa'o // bla ma med pa yang dag par
rdzogs pa'i byang chub ky*i* 'bras bu len par byed pa'i phyir 'bras bu che bar rig par
bya'o⁽⁸⁹⁾

zhes *sDom pa nyi shu pa'i 'grel pa* las gsungs so //

de lta bla ma dam pa las bslab pa de lta bu legs par blangs¹⁴ shing / chos dang mthun
par bsrung¹⁵ ba'i byang chub sems dpa'i tshogs ky*i* lam thar pa'i cha dang mthun pa'i dge ba'i
rtsa ba¹⁶ bskyed¹⁷ par 'dod pa de ni / tshe rabs snga ma'i bag chags bzang po yod pa yin te /
mgon po Byams pas *dBus dang mtha' rnam*¹⁸ *par*¹⁹ 'byed pa las /

(89) *Bodhisattvasaṃvaraviṃśakapañjikā*. Tib. D. Hi 186a6-b1.

1 P om. 2 P *bya'o* //. 3 GNP *pa'i*. 4 GNP om. 5 G *yino*. 6 G om. 7 D om.
8 GNP *ces*. 9 P *nas*. 10 N *gsung ba*. 11 G *semn*. 12 G om. 13 CD *bsgrub*.
14 CD *bslang*s. 15 N *srung*. 16 P *ba'i*. 17 P *skyed*. 18 GNP *rnams*. 19 GNP om.

snod (N. 306a) gyur rnam¹ par smin brjod dang //²
de yi dbang gis³ stobs dang ni //
'dod dang 'phel dang rnam dag ste //
'bras bu rnams ni go rim⁴ bzhin //⁽⁹⁰⁾

zhes gsungs te /

byang chub sems dpa⁵ rnams sngon gyi skye ba dag tu dge ba la goms par bslab⁶
pas tshe 'dir de'i snod du gyur pa ni rnam par smin pa'i 'bras bu'o // de rnams 'dir byas
pa'i stobs can du gyur pa ni bdag po'i 'bras bu'o // de nyid la phyir zhing 'dun pa ni rgyu
mthun⁷ pa'i 'bras bu'o // 'dir bslab pa dag mngon⁸ par 'phel (D. 269a) ba⁹ ni skyes bu
byed pa'i 'bras bu'o // de'i sgrib pa'i dri ma (G. 426b) rnams dang bral ba ni bral ba'i
'bras bu'o // 'dir bdag po'i 'bras bu ma gtogs pa bzhi ni ris mthun pa'i 'bras bur bgrang
gi 'di nyid la rdzogs pa ni ma yin no^{10, (91)}

zhes bla ma mkhas pa chen po Shān ti pas gsungs so¹¹ // slob dpon mkhas pa chen po Nor
gyi rtsa lag gi zhal nas kyang

byang chub sems dpas¹² byang chub tu sems bskyed (P. 310b) phan chad tshe rabs
tshe rabs su /

bde 'gro rigs mtho skye dbang tshang¹³ //
phor gyur tshe rabs dran mi ldog //

byang chub sems dpa' sems can la phan pa'i don du sdug bsngal la mi skyo ba'o // 'jig
rten na zong¹⁴ gis ma nyos¹⁵ pa'i bran¹⁶ ni byang chub sems dpa' de yin pas / bdag nyid
chen po de la 'byor pa'i mchog khyad par can yod kyang des¹⁷ nga rgyal dang khengs
par mi 'gyur bar¹⁸ snying rjes gzhan gyi dbang du gyur pas bdag (C. 275b) nyid sems
can thams cad kyi drung na khyi lta bu dang / bran lta bu dang / gdol pa lta bur nga
rgyal bcag nas gnas pa ste / gzhan gyis brnyas pa dang gnod par byas kyang bzod
cing / ngal ba dang mnags¹⁹ pa thams cad nyams su²⁰ len pa yin no⁽⁹²⁾

zhes gsungs so // de lta bu'i gang zag ni theg pa chen po pa yin par shes so²¹ //

(90) *Madyāntavibhāgākārikā* 4.16c-17d.

(91) Cf. of *Ratnākaraśānti*. Tib. D. No. 1871, Ni 67a2-5.

(92) *Abhidharmakośabhāṣya*. Pradan ed., p. 265.14-24.

1 G rnams. 2 GP/. 3 GNP gi. 4 CD rims. 5 GNP om. 6 CD bslabs. 7 GNP 'thun.

8 N mgan. 9 C par byed pa. 10 G yino. 11 GN gsungso. 12 GNP dpa'. 13 D thsar.

14 G bzong for na zong. 15 N nyes. 16 N prad. 17 GNP de yis. 18 G par. 19 CD brnags.

20 G nyamsu. 21 G sheso.

gzhan yang tshe (N. 306b) rabs¹ tshe rabs su byang chub kyi sems ma nyams pa'i rtags
ni mdo las ji skad du

de ngan song gsum spangs pa yin / yul mtha' 'khob spangs pa yin /² skyes bu dam
pa yod pa'i sa phyogs su³ skye ba dang / rigs mthon por skye ba yin / gzugs bzang ba
yin / shes⁴ (G. 427a) rab che ba yin / nad med pa yin / snying rje dang ldan pa yin no⁵
zhes gsungs so //

gzhan yang de mi khom pa brgyad spangs shing / khom pa'i yon tan bcu dang ldan pa
yin no //

gzhan yang rtags ni de rang bzhin gyis pha rol tu phyin pa drug dang ldan pa yin te /
mdo las de ma bstan pa'i sbyin pa can yin zhes pa nas / de ma bstan pa'i shes rab can yin
zhes pa'i bar dang ldan pa yin no zhes gsungs so //

gzhan yang slob dpon Zla grags kyi zhal nas /

so so skye bo'i dus na stong nyid (D. 269b) thos //⁶

nang gi dga' ba yang dang yang du 'byung //

dga' ba las byung mig ni mchi mas gang //

lus kyi spu ldang ba yang skye bar (P. 311a) 'gyur //

gang yin de la byang chub sa bon yod //

don dam bden pa de la bstan par bya //

der rtogs pa yi yon tan de las 'byung //^{7, (93)}

zhes bya ba la sogs⁸ pa gsungs so // slob dpon Nor gyi rtsa lag gi zhal nas kyang bshad de /

thar pa'i cha dang mthun pa ni / gang la bdag med pa'i gdam dang 'khor ba'i nyes
dmigs dang / mya ngan las 'das pa'i yon tan gyi gdam brjod pa thos na mchi ma 'khrug
pa dang / spu zing byed pa de la⁹ thar¹⁰ pa'i¹¹ cha dang¹² mthun¹³ pa'i dge ba'i rtsa ba
yod par shes par bya ste / dbyar myu gu skye ba las nas gzhi'i gseb na de'i sa bon yod
par shes pa bzhin no⁽⁹⁴⁾

(93) *Madyamakāvātārakārikā* 6.4-5.

(94) *Abhidharmakośabhāṣya*. Pradan ed., p.274.19-21.

1 P *ribs*. 2 GNP om /. 3 GN *phyogsu*. 4 P *shis*. 5 G *yino*. 6 G /. 7 P /.
8 N *soḍ*. 9 GNP *la ni*. 10 P *ni bar*. 11 P *pha'i*. 12 G *'thun*. 13 N *gsungso*.

zhes gsungs so¹ // de ltar² na 'Phags pa Lang kar gshegs pa (C. 276a) las /
 du ba las ni mer shes shing //
 (G. 427b) chu skyar las ni chu bzhin du //
 blo ldan byang chub sems dpa' yi //
 rigs (N. 307a) ni mtshan ma rnams las shes //^{3, (95)}

zhes gsungs so //

de ltar sdom pa srung ba'i byang chub sems dpa' las dang po pa⁴ des dus thams cad du
 lus dang gnas dang longs spyod thams cad dang 'khor ba dang mya ngan las 'das pa'i chos
 thams cad rmi lam lta bur shes par bya ste / rmi lam lta bu'i dkon mchog gsum la rmi lam lta
 bu'i sri zhu bya ba dang / rmi lam lta bu'i 'khor ba la skyo bar bya ba dang / rmi lam lta bu'i
 sems can la rmi lam lta bu'i sems kyis⁵ snying rje bya ba dang / rmi lam lta bu'i sems can
 mgu bar bya ba'o // sems can thams cad jo bor yid la bya ba dang / skye ba med pa yid la
 bya ba dang / byang chub kyi sems yid la bya ba dang / 'chi ba yid la bya ba dang / tshul
 khirms yid la bya ba dang / dngos po thams cad la ma chags pa'i yid la bya ba dang / dran pa
 dang / shes bzhin dang / bag yod pa dang /⁶ tshul bzhin du sems pa yid la (P. 311b) bya'o //

gzhan yang las dang po pa des dus thams cad du thabs la mkhas par bya'o // 'di ltar bdag
 gi sdig pa gzhan gyi sdig par byas te 'chags pa (D. 270a) dang / gzhan gyi sdig pa bdag gi
 sdig par byas te 'chags pa dang / bdag gi dge ba'i rtsa ba gzhan gyi dge ba'i rtsa bar byed pa
 dang gzhan gyi dge ba'i rtsa ba bdag gir byed pa dang / bdag gi⁷ bde ba gzhan gyi bde bar
 byed pa dang / gzhan gyi sdug bsngal (G. 428a) ⁸bdag gir byed pa dang / bdag gi sdug
 bsngal⁸ gyis gzhan gyi⁹ sdug bsngal bsal ba dang / gzhan dag bde ba mthong ba dang thos
 pa na de la yid dga' ba dang / gzhan dag sdug bsngal la¹⁰ thos sam mthong na / ma la bdag
 gis¹¹ nam zhig na 'di dag sdug bsngal las thar bar¹² bya snyam du yid gdung ba dang / 'jig
 rten gyi chos la sems btang ba dang / gzhan gyi rnyed pa dang bkur¹³ sti dang / (N. 307b)
 grags pa snyan¹⁴ pa la phrag dog mi bya ba dang / bdag ni 'di ltar (C. 276b) rigs dang /

(95) *Lañkāvatārasūtra*. Cf. *Subhāṣitasamgraha*, Bendall ed., p.387.

1 P *dang* /. 2 GNP *bas*. 3 GP *om*. 4 N *om*. 5 GNP *can gyis*. 6 G *om. dang* /.
 7 P *gis*. 8 G *om*. 9 GNP *gyis*. 10 GNP *ba*. 11 GN *gi*. 12 NP *par*. 13 P *bgur*.
 14 G *rnyan*.

gzugs dang / 'khor dang yo byad dang / rig¹ pa'i gnas lnga dang /² rnyed pa dang /³ bkur sti dang / grags pa snyan pa dang ldan pa yin no zhes nga rgyal dang khengs pa med cing gzhan dman pa dag la brnyas par mi bya ba dang / bdag gi⁴ dge ba'i rtsa ba de gzhan dang thun mong du byas nas byang chub chen por yongs su⁵ bsngo ba dang / gzhan gyi⁶ dge ba'i rtsa ba de yang bdag dang thun mong du byas nas⁷ byang chub chen por yongs su⁸ bsngo ba dang / bdag gi⁹ sdig pa yang gzhan gyi sdig pa dang thun mong du byas nas so sor bshags pa dang / gzhan gyi sdig pa yang bdag dang thun mong du byas nas so sor bshags pa'o //

gzhan yang de kun tu spyod pa phyin ci ma log pa yin te / 'Phags pa dKon mchog sprin las /

de za na / de 'thung na / de 'gro na / de nyal na / de glo g-yas pas (P. 312a) nyal na⁽⁹⁶⁾

zhes bya ba la sog pa ste mdo de¹⁰ nyid du blta bar bya'o //

gzhan yang de (G. 428b) dam bca' ba phyin ci ma log pa yin te / sngon gyi rgyal po Nam mkhas¹¹ 'di skad du /¹²

de¹³ ring phan chad nam du yang //
 bdag la 'dod chags sems byung na //
 phyogs bcu dag na bzhugs pa yi //
 sangs rgyas thams cad bslus par 'gyur //
 tha ba'i sems dang gnod sems dang //
 phrag dog dang ni ser sna dag //¹⁴
 de ring phan chad mi (D. 270b) bya'o //
 tshangs par spyod la gnas bbggyi zhing //¹⁵
 sdig pa 'dod pa yongs su¹⁶ spang //
 tshul khirms sdom dang des¹⁷ pa la //
 sangs rgyas rjes su bslab par bya //^{18, (97)}

zhes gsungs pa dang / 'Phags pa lHag pa'i bsam pa bskul ba'i mdo las /

(96) *Ratnameghasūtra*. Tib. P. No. 897, Dzu 92a3-4.

(97) *Mañjuśrībuddhakṣetraragūṇavyūhasūtra*. Tib. P. No. 760 (15), Wi 317b3-5.

1 GNP rigs. 2 GNP om. 3 GP om. 4 P gis. 5 N yongsu. 6 P gyis. 7 G na.
 8 N yongsu. 9 P gis. 10 GNP om. 11 N namkha'. 12 P //. 13 C di. 14 D dang //.
 15 P /. 16 GN yongsu. 17 G nges. 18 GP om.

bcom lda 'das bdag cag deng slan chad de bzhin gshegs pa'i spyang sngar yi dam 'di lta bu bca' bar bya'o // bcom ldan 'das gal te bdag cag¹ gis² deng slan chad byang chub sems dpa'i theg pa'i (N. 308a) gang zag gi ltung ba med pa yang rung ste / glengs na bdag cag gis³ de bzhin gshegs pa dgra bcom pa yang dag par rdzogs pa'i sangs rgyas la bslus par 'gyur ro⁽⁹⁸⁾

zhes bya ba la sogs pa gsungs te mdo nyid⁴ du blta bar bya'o //

gzhan yang de bsngo ba phyin ci ma log pa yin te / gSer 'od dam pa'i bsngo ba dang /⁵ byang chub sems dpa' rDo rje rgyal mtshan gyi yongs su⁶ bsngo ba chen po⁷ bcu dang / gzhan yang 'phags pa Klu sgrub kyi bSod nams kyi tshogs nyi shu pa dang / sPyod pa la 'jug pa'i bsngo ba'i le'u la sogs pa'o //

gzhan yang de smon lam phyin ci ma log (G. 429a) pa yin te / 'Phags pa bZang po spyod pa dang / 'Phags pa Sa bcu pa'i smon lam chen po bcu dang / bCom ldan 'das sman gyi bla bai dūrya 'od kyi rgyal po'i smon lam chen po bcu gnyis dang / slob (P. 312b) dpon rTa dbyangs kyis mdzad pa'i sMon lam bdun cu pa⁸ la sogs pa'o //

gzhan yang bla ma'i zhal nas byung ba'i mdo sde ma lus pa'i don bsdu⁹ pa pha dang ma lta bu dang / bu dang bu mo lta bu'i chos lnga bcu po rnam kyang skad cig skad¹⁰ cig¹¹ la dran par bya'o //

gzhan yang byang chub sems dpa' des dus gcig la rtag tu mdo sde ma lus pa bklag par yang bya'o // de ci'i phyir zhe na / las dang po pa gnyen po shas chung zhing rkyen la ltos¹² pa yin pas mdo sde blta ba la brtson¹³ par bya'o // gzhan yang mdo sde'i don ma lus par bsdu pa yin pas mDo kun las btus pa dang /¹⁴ bSlab kun las btus pa dang /¹⁴ Byang chub sems dpa'i spyod pa la 'jug pa dang / Tshul khrims kyi le'u dang / sDom pa nyi shu pa rnam kyang dus¹⁵ dus su (D. 271a) blta ba dang / mnyan pa dang /¹⁶ bri¹⁷ bar bya'o // gzhan yang theg pa chen po'i mdo sde'i don dang / sngon gyi slob dpon chen po rnam dang / da ltar gyi bla ma mkhas pa chen po rnam kyi dgongs pa yin pas (N. 308b) bstan bcos 'di nyid kyang blta ba dang / mnyan pa dang / bri bar bya'o //

gzhan yang nyin lan gsum mtshan lan gsum phung po gsum pa gdon par bya ste / 'Phags pa Drag shul can gyis zhus pa las /

(98) *Adyāśayasāncodanasūtra*. Chin. T. No. 310 (25), p. 520a27-b4. Cf. *Śikṣāsamuccaya*, Bendall ed., p. 98.1-3.

1 CD om. 2 GNP gi. 3 GNP gi. 4 C de nyid. 5 GP om. 6 GN yongsu. 7 G om.
8 GNP om. 9 P bstus. 10 GNP om. 11 GNP gcig. 12 GNP bltos. 13 N brtsan.
14 GNP om. 15 N om. 16 GNP om. 17 GP 'dri, N 'bri.

des nyin lan gsum mtshan (G. 429b) lan¹ gsum du khru byas te / gos (C. 277b)
 gtsang ma bgos nas phung po gsum pa gdon par bya'o⁽⁹⁹⁾
 zhes gsungs pa dang / 'Phags pa Chos thams cad 'byung ba med par bstan pa'i mdo las
 kyang /
 nyin dang de bzhin mtshan mo lan gsum du //²
 byang chub sems dpa' rnams la mgos phyag 'tshal //^{3,(100)}
 zhes gsungs pa dang / 'Phags pa dKon mchog sprin las kyang /
 de ltar sangs rgyas dang byang chub sems dpa' thams cad la nyin lan gsum mtshan
 lan gsum du mchod par byed do⁽¹⁰¹⁾
 zhes gsungs pa dang / (P. 313a) 'Phags pa Nye bar⁴ 'khor gyis zhus pa las kyang /
 des⁵ nyin mtshan du bshags pa byed do⁽¹⁰²⁾
 zhes gsungs pa dang / 'phags pa Thogs med kyi zhal nas kyang /
 byang chub sems dpa' myur du mngon par rdzogs par 'tshang rgya bar 'dod pas⁶
 nyin lan gsum⁷ mtshan lan gsum⁷ du phyag 'tshal ba dang / mchod pa dang sdig pa so
 sor bshags pa dang / rjes su⁸ yi rang ba dang / bskul ba dang / gsol ba gdab pa dang /
 yongs su bsngo ba rnams kyang⁹ bya'o
 zhes gsungs so¹⁰ //
 de dag gi phan yon yang 'Phags pa sPyan ras gzigs kyi mdo dang //¹¹ Chos bshad pa
 brgya pa / slob dpon dPa' bo'i¹² Rin po che 'phreng ba lta bu'i gtam dag tu blta bar bya'o //
 de yang 'Phags pa bZang po¹³ spyod pa'i gzhung gis kyang¹⁴ bya'o // (G. 430a) yang na
 Phung po gsum pa'i mdo nyid gdon par bya'o //
 yang na byang chub sems dpa' mkhas pa blo dang ldan pa thos pas brgyan pa des ni
 'Phags pa bzang po¹⁵ spyod pa 'di nyid la gnas nas bla ma'i zhal las 'byung ba'i gdams¹⁶
 ngag¹⁷ gi cho ga rgyas par bya'o // de bas na (D. 271b) slob dpon Zhi ba'i lha'i zhal
 nas /

(99) *Ugradattapariṣcchāsūtra*. Cf. *Śikṣāsamuccaya*, Bendall ed., p. 290.1-3.

(100) *Sarvadharmapravṛttinirdeśasūtra*. Cf. *Śikṣāsamuccaya*, Bendall ed., p. 99.4-5.

(101) *Ratnameghasūtra*. Tib. P. No.897, Dzu 29a5-6. Cf. *Śikṣāsamuccaya*, Bendall ed., p. 290.1-3.

(102) *Upālipariṣcchāsūtra*. Python ed., p. 32.8. Cf. *Śikṣāsamuccaya*, Bendall ed., p. 169.4-5.

1 G lan gsum phung po gsum pa gdon par bya ste / 'Phags pa drag shul can gyis zhus pa las / des nyin lan gsum mtshan lan.

2 GP om. 3 GP om. 4 CD ba. 5 P res. 6 GNP pa. 7 G om. 8 N rjesu.

9 GNP om. 10 N gsungso. 11 CD om /. 12 GNP bo. 13 GNP por. 14 P om. 15 GN por.

16 GNP gdam. 17 C dag.

nyin (N. 309a) dang mtshan mo lan gsum du //

phung po gsum pa gdon par bya //

rgyal dang byang chub sems brten pas¹ //

ltung ba'i lhag ma des zhi bya //^{2, (103)}

zhes *sPyod pa la 'jug pa* las gsungs so³ // de lta bu'i cho ga de'i rjes la gsum la skyabs su⁴
'gro ba dang / ltung ba'i nyes pa so sor bshags la / byang chub kyi sems rnam pa
gnyis bskyed nas / bdag gis⁵ theg pa chen⁶ po'i mdo sde nas (C. 278a) gsungs⁷ pa'i byang
chub sems dpa'i bslab pa ma lus pa thams cad la bslab par bya'o zhes mos par bya'o // ⁸-cho
ga rgyas pa ni bla ma las zhu bar bya'o // ⁸-de bas na de lta bu'i nyin dang mtshan du don
med par mi gnas pa'i (P.313b) rnal 'byor pa de ni phun sum tshogs pa gsum dang ldan te /
bla ma'i zhal nas 'di skad du /⁹

phun sum tshogs pa gsum gyis bde ba la reg par 'gyur te / 'di ltar sbyor ba dang /
bsam pa dang / sngon gyi rgyu phun sum tshogs pa'o // de la sbyor ba phun sum tshogs
pa ni lus dang ngag dang yid kyi nyes pa rgyun du¹⁰ mi byed la sdig pa 'chags pa'o //
bsam pa phun sum tshogs pa ni 'di ltar bdag (G. 430b) chos kyi bsam pas yin gyi log
par 'tsho ba la sogs pa chos ma yin pas ni ma yin no // bdag kyang byang chub chen po
don du gnyer ba yin gyi / 'jig rten pa'i bde ba don du gnyer ba ma yin / de la sngon gyi
rgyu phun sum tshogs pa ni des sngon gyi dus su bsod nams byas shing / dge ba byas
pas da¹¹ ltar gos dang zas dang yo byad rnam kyis phongs¹² par ma gyur pa yin zhing
/¹³ gzhan la yang bgo bsha' byed pa'i ngang tshul can yin no^{14, (104)}

zhes gsungs so // 'di ltar

las dang po pa'i slob ma blo chung ba de dang po nyid nas lam la 'jug pa mi bya
ste / de la thog mar byang chub sems dpa'i bslab pa rgya chen po bkod (N. 309b) pa'i
mdo sde dang / bstan bcos thams cad bshad par bya zhing tshul de mkhas par byas
nas / gzod gang zag lam la 'jug pa'i cho ga bya'o
zhes bla ma dag gsungs pa¹⁵ yin no // 'dir smras pa /

(103) *Bodhi(sattva)caryāvatāra* 5.98.

(104) *Bodhisattvasaṃvaraviṃśakapañjikā*. Tib. D. Hi 217a4-b2.

1 D bas. 2 GNP om. 3 N *gsungso*. 4 GN *skyabsu*. 5 GNP *gi*. 6 G om.
7 G *gsungs gsungs*. 8 CD om. 9 CD om /. 10 N *tu*. 11 C *de*. 12 GN '*phongs*.
13 CD om /. 14 G *yino*. 15 CD *gsung ba*.

dkon mchog gsum gus yul la zhen¹ pa spangs //
 'chi ba rjes dran tshul khirms gtso bor byed //
 bla ma la (D. 272a) gus dang ldan g-yo sgyu² med //
 sdig pa'i grogs spangs thun tshigs sbyor bar ldan //
 thun tshigs drug pa dum bu bco brgyad 'gyur //
 snga dro'i thun la dum bu gsum yod pa'i //
 dum bu dang po dum bu bar pa la //
 nyes pa byung ba dum bu tha ma der //
 byang chub sems (P. 314a) brjed sems dpa' nyams par 'gyur //
 phyi ma lnga yang de yis bsgre bar bya //
 dum bu (G. 431a) dum bur³ legs⁴ par gso byed (C. 278b) pa //
 skyes bu rab yin 'bring ni gnyis lags so⁵ //
 dum bu tha mar gso ba tha ma ste //⁶
 rab kyi rab ni skad cig dang por gso //
 rab kyi 'bring ni skad cig gnyis par gso //
 rab kyi tha ma skad cig tha mar gso //
 de ltar gyur pas skyes bu rab 'bring rgyu⁷ //
 phyi ma kun yang de yis bsgre bar bya //
 bla ma mkhas pa chen po kha cig ni 'di skad du gsung ste /
 nyes pa byung ba nyid kyi rjes la gso byed pa //
 skyes bu rab yin skad cig gnyis pa sogs //
 de yi rjes la gso ba 'bring po ste //
 skyes bu tha mas dus tshigs drug por gso //⁸
 zhes gsungs so //
 lhag pa'i tshul khirms kyi bslab pa bstan zin to // //⁹
 'di ltar tshul khirms 'ba' zhig tsam gyis ni chog par ni mi¹⁰ bzung ste / ting nge 'dzin
 dang / shes rab dag kyang bskyed dgos pa yin no // 'on kyang tshul khirms la brten nas ting
 nge¹¹ 'dzin skye bar 'gyur te / 'Phags pa Zla ba sgron ma'i mdo las //¹²

1 P zhes. 2 GNP rgyu. 3 G dur for dum bur. 4 N logs. 5 P la gso. 6 P/.
 7 GNP dgu. 8 GP om. 9 GP //. 10 GP ma. 11 N tinge. 12 NP //.

nyon mongs med pa'i ting¹ 'dzin myur thob ste //²
'di ni tshul khirms rnam dag phan yon yin //^{3, (105)}
(N. 310a) zhes gsungs so // slob dpon Zhi ba'i lha'i zhal nas
tshul khirms ni ting nge⁴ 'dzin 'grub pa yin te⁽¹⁰⁶⁾
zhes pa dang / yang </>
de bas na ting nge 'dzin gyi rgyu'i sbyor ba gang ci yang rung ba de dag ni tshul
khirms kyis⁵ nang du 'dus par shes par bya'o // de bas na ting nge⁶ 'dzin don du gnyer
bas dran pa dang shes bzhin gyi ngang tshul can du bya'o⁽¹⁰⁷⁾
zhes gsungs so // (G. 432b) yang
tshul khirms don du gnyer bas kyang ting nge⁷ 'dzin la 'bad par bya ste⁽¹⁰⁸⁾
zhes pa dang / yang </>
tshul khirms don du gnyer ba gnyis gcig gis (P. 314b) gcig 'phel bar byed pa 'di
gnyis kyis sems yongs su sbyang ba (D. 272b) yongs su grub po⁽¹⁰⁹⁾
zhes gsungs pas tshul khirms med pa'i ting nge 'dzin skye bar mi 'gyur bas na / de'i phyir
tshul khirms la 'bad par bya dgos so // de bas tshul khirms phun sum tshogs pa'i ting nge
'dzin gyis⁸ mngon par shes pa bskyed nas gzhan gyi don bya ba dang / tshogs rnam pa gnyis
bsags⁹ pa'i thabs ni mngon par shes pa yin pas de bstan pa'i phyir /
bsod nams ye shes rang (C. 279a) bzhin gyi //
tshogs ni yongs su¹⁰ rdzogs pa yi //
rgyu ni sangs rgyas thams cad dag //
mngon shes bskyed pa nyid du bzhed //¹¹ [BPP 137-140]
ces bya ba de yin no //
tshogs gnyis bsag par 'dod pa dang //
rtag tu gzhan don byed 'dod pas //
mngon par shes pa ma bskyed na //
dmus long gi ni spyod pa dang //

(105) *Candrapradīpasamādhīrājastūra*. Vaidya ed., p. 160.23-24. Cf. *Śikṣāsamuccaya*, Bendall ed., p. 121.2-3.

(106) *Śikṣāsamuccaya*, Bendall ed., p. 121.1.

(107) *Śikṣāsamuccaya*, Bendall ed., p. 121.3-4.

(108) *Śikṣāsamuccaya*, Bendall ed., p. 121.4-5.

(109) *Śikṣāsamuccaya*, Bendall ed., p. 121.10.

1 G *ting nge*. 2 P/. 3 P/. 4 N *tinge*. 5 P *kyis*. 6 N *tinge*. 7 N *tinge*.
8 GNP *gyi*. 9 G *bsag*. 10 N *yongsu*. 11 GNP/.

smyon pa'i spyod pa nyid dang ni //
 ji ltar byol song spyod pa bzhin //
 rang gi don yang mi grub¹ na //
 gzhan don 'grub par ji ltar rung //²
 zhes pa ni bsdus³ nas bstan pa'o //
 ji ltar 'dab gshog ma skyes pa'i //
 bya ni mkha' la 'phur⁴ mi nus //
 de bzhin mngon shes thob⁵ bral bas //
 sems can don byed nus ma yin // [BPP 141-144]
 mngon par shes pa yang ma thob cing (N. 310b) bsgoms pa'i shes rab kyang ma skyes par
 thos (G. 433a) pa'i shes rab tsam la brten nas chos bshad cing slob ma sdud⁶ pa de ni smyon
 pa yin te / ji skad du /
 rang gi tshod⁷ kyang mi shes par //
 smra ba ji ltar smyon pa min⁸ //^{9, (110)}
 zhes so¹⁰ // 'Phags pa lHag pa'i bsam pa bskul pa'i mdo las /
 smra ba la dga' ba dang / smra ba la dga' ba'i nyes pa mthong bar bya'o⁽¹¹¹⁾
 zhes pa dang / yang de nyid las smra ba la dga' ba'i nyes pa gsungs pa /
 thos pas rgyags (P. 315a) nas gus par mi 'gyur te //
 rnam par¹¹ 'gyed pa'i smra ba rnams la chags //
 brjed par 'gyur zhing shes bzhin¹² med par 'gyur //
 smra la dga' ba'i nyes pa 'di dag go //¹³
 nang gi sems las shin tu¹⁴ ring bar 'gyur //
 lus dang sems kyang rab sbyangs ma yin 'gyur //
 khengs pa dang ni dud pa mang por 'gyur //
 smra la dga' ba'i nyes pa 'di dag go //¹⁵
 byis pa dam pa'i chos bsam rab tu nyams //
 sems ni mi gnyen¹⁶ (D. 273a) shin tu rtsub par 'gyur //

(110) *Bodhi(sattva)caryāvatāra* 4.42ab.

(111) *Adyāśayasāñcodanasūtra*. Tib. P. No. 760 (25), Zi 140b2-3. Cf. *Śikṣāsamuccaya*, Bendall ed., p. 105.1-2.

1 GNP 'grub. 2 NP /. 3 GNP sdus. 4 GNP phur. 5 GNP thabs. 6 GNP bsdud.
 7 G tshong. 8 C yin. 9 NP om. 10 G zheso. 11 G om. 12 D bzhan.
 13 GNP /. 14 N du. 15 GNP /. 16 D mnyen.

zhi gnas lhag mthong dag dang rab tu ring //
 smra la dga' ba'i nyes pa 'di dag go //¹
 rtag tu bla ma dag la gus pa med //
 spags pa'i gtam dag la ni dga' ba skyed //
 snying po med la gnas shing shes rab nyams //
 smra la dga' ba'i nyes pa 'di dag go //^{2, (112)}

de bzhin du yang gsungs pa /

bdag ni sgrub (C. 279b) nyams da ni ci bya zhes //
 'chi ba'i dus tshe byis pa mya ngan byed //
 gting rnyed ma gyur shin tu sdug bsngal 'gyur³ //
 smra la dga' ba'i nyes pa 'di dag go //⁴
 rtswa⁵ bskyod bzhin du (G. 433b) 'gyur zhing g-yo ba ste //⁶
 de ni de ltar the tshom 'gyur du nges //
 de ni nam yang blo brtan mi 'gyur te //
 smra⁷ la dga' ba'i nyes pa 'di dag go //⁸
 gar la lta ba'i khrod na 'dug pa⁹ zhig //
 dpa' bo gzhan gyi yon tan brjod pa bzhin //
 bdag nyid nan tan nyams par (N. 311a) 'gyur bas te //
 smra la dga' ba'i nyes pa 'di dag go //¹⁰
 de ni g-yo ldan yang zhing re chad 'gyur //
 phyir zhing phyir zhing rnam par 'gyod¹¹ par 'gyur //
 'phags pa'i dam pa'i chos las rab tu ring //
 smra la dga' ba'i nyes pa 'di dag go //¹²
 mthu chung bsti stang dag gis dgar 'gyur te //¹³
 mi shes ldan pa¹⁴ g-yo zhing 'gyur ba yin //
 spre'u ltar de yi sems ni g-yo bar 'gyur //
 smra la dga' ba'i nyes pa 'di dag (P. 315b) go //^{15, (113)}

(112) *Adyāśayasañcodanasūtra*. Tib. P. No. 760 (25), Zi 144b2-5. Cf. *Śikṣāsamuccaya*, Bendall ed., pp. 108.6-109.3.

(113) *Adyāśayasañcodanasūtra*. Tib. P. No. 760 (25), Zi 144b6-145a3. Cf. *Śikṣāsamuccaya*, Bendall ed., pp. 109.12- 110.12.

1 CGNP /. 2 GNP /. 3 P 'gyur. 4 CGNP /. 5 GNP rtsa. 6 P /.
 7 G smra ba. 8 CGNP /. 9 P ba. 10 CGP /. 11 C 'gyed, D 'gyid. 12 GNP /.
 13 P /. 14 G ba. 15 CGNP /.

zhes 'byung ste / de bzhin du yang /

yun rings¹ dus nas smra la dga' bas na //
des ni bdag nyid dga' ba mi 'thob po //
tshig gang dga' ba mtha' yas 'thob 'gyur ba //
tshig gcig tsam zhig bsam² kyang mchog yin no //
bu ram shing shun snying po ci yang med //
dga' bar bya ba'i ro ni ngan na 'dug //
shun pa zos pas mis ni bu ram ro //
zhim po rnyed par nus pa ma yin no //
shing gi shun pa de bzhin smra ba ste //
ro lta bu ni 'di ni don sems yin //
de lta bas na smra la dga' spongs³ te //
rtag tu bag yod byos la don sems⁴ shig //(114)

ces gsungs te / de bzhin du yang gsungs⁵ pa /

de nas bcom ldan 'das la byang chub sems dpa' (G. 434a) sems dpa' (D. 273b) chen po Byams pas 'di skad ces gsol to // gang dag mchog gi chos yongs su⁶ spangs nas las ngan pa rnams rtsom pa'i byang chub sems dpa' de ni shes rab shin tu chung zhing shes rab nam par nyams par 'gyur ba lags so // de skad ces gsol pa dang / bcom ldan 'das kyis byang chub sems dpa' sems dpa' chen po Byams pa la 'di skad ces bka' stsal to // Byams pa de de bzhin no // ji skad smras (C. 280a) pa de bzhin te / gang dag mchog gi chos yongs su⁷ spangs nas las ngan pa rtsom pa'i byang chub (N. 311b) sems dpa' de dag ni shes rab shin tu chung bar 'gyur ro // Byams pa khyod⁸ la bstan to // khyod kyis khong du chud par bya'o // gang dag la brtson pa med pa dang /⁹ bsam gtan med pa dang / spong ba med pa dang / kha ton bya ba med pa dang / mang du thos pa yongs su¹⁰ tshol ba med pa'i byang chub sems dpa' de dag ni de bzhin gshegs pa'i bstan pa la rab tu byung ba ma yin no // Byams pa de bzhin gshegs pa'i bstan (P. 316a) pa ni bsam gtan dang / spong bas rab tu phye ba / ye shes kyis¹¹ 'dus byas pa / ye shes kyis mnyam par bzhag pa / mngon par brtson pas rab tu phye ba yin gyi / khyim pa'i las kyis¹² mtha' dang / zhal ta byed pas rab tu phye ba ni ma yin no // mi rigs pa brtson pa

(114) *Adyāśayasāñcodanasūtra*. Tib. P. No. 760 (25), Zi 144b6-145a3. Cf. *Śikṣāsamuccaya*, Bendall ed., pp. 109.12-110.12.

1 CD ring. 2 CD bsams. 3 CD spangs. 4 CD soms. 5 G gsungs te / de bzhin yang gsungs.
6 N yongsu. 7 N yongsu. 8 C khyed. 9 GNP om. 10 N yongsu. 11 GNP kyī.
12 CD kyī.

dang / 'khor ba la mngon par dga' (G. 434b) ba rnams kyi las ni 'di yin te 'di ltar zhal ta
byed pa dang / 'jig rten pa'i bya bas gzings pa ste / de la byang chub sems dpa' rnams
kyis 'dod pa bskyed par mi bya'o⁽¹¹⁵⁾

zhes gsungs so // bla ma'i zhal nas kyang /

de ltar thos pa dang ldan pa'i byang chub sems dpas chos smra ba las ldog par bya
ste / mngon par shes pa ma thob par du thos pa tsam gyis gzhan la phan gdags par ma
gsungs te⁽¹¹⁶⁾

zhes pa dang / yang gsungs pa /

de bas na mang du thos pa tsam gyis¹ chos smra bar² ni mi bya ste / mngon par shes
pa thob nas gzod gzhan gyi don bya ste /^{3, (117)}

zhes pa dang / yang de nyid las /

mngon par shes pa ma thob par slob ma yongs su⁴ smin par mi nus kyi rang nyid
(D. 274a) 'chi bar zad de⁵ / slob dpon Zhi ba'i lha'i zhal nas /

sems can mos pa sna tshogs pa //

rgyal bas kyang ni mi mgu na⁶ //

bdag 'dra ngan pas smos ci dgos //

de bas 'jig rten bsam pa btang //^{7, (118)}

zhes khungs dang bcas nas *Ting nge*⁸ 'dzin gyi tshogs kyi le'u las (N. 312a) gsungs
so // de bas na⁹ don 'di la dgongs nas / slob dpon 'phags pa Klu sgrub kyi zhal
nas /

(C. 280b) skye ba kun du¹⁰ rjes 'brang ba'i //

mngon par shes pa lnga thob nas //

rtag tu sems can thams cad la //

kun du phan dang bde ba bya //^{11, (119)}

zhes gsungs so // bla ma'i gdams¹² ngag med par gzhung thos pa tsam la brten nas sgom¹³
par byed pa de yang (P. 316b) 'dir (G. 435a) zhar la bkag ste / de lta bu'i rnal 'byor la brtson

(115) *Adyāśayasāñcodanasūtra*. Tib. P. No. 760 (25), Zi 149a5-b5. Cf. *Śikṣāsamuccaya*, Bendall ed., pp. 113.15-114.5.

(116) *Samādhisambhāraparivarta*. Tib. D. No. 3924, Ki 82a1-2.

(117) *Samādhisambhāraparivarta*. Tib. D. No. 3924, Ki 82a7-b1.

(118) *Bodhi(sattva)caryāvatāra* 8.22. Cf. *Samādhisambhāraparivarta*. Tib. D. No.3924, Ki 84a2-3.

(119) *Ratnāvalī* 5.81.

1 GP gyi. 2 P ba. 3 CDGN om. 4 GN yongsu. 5 G zang. 6 P nas. 7 GNP /.
8 GN ting. 9 CDGN om. 10 P tu. 11 GNP om. 12 NP gdam. 13 GNP sgoms.

par byas kyang mngon par shes pa yang skye bar mi 'gyur zhing / rdzogs pa'i byang chub
chen po yang mi 'thob pa'i phyir ro //¹ don 'di la dgongs nas / bram² ze Sa ra³ ha pa chen pos
Don dam pa'i rigs pa las /

bla ma'i man ngag ces bya bdud rtsi'i ro //
gang gis ngoms par 'thung bar⁴ ma gyur pa //
de ni bstan bcos mang po'i mya ngam thang dkyil du //
skom bzhin du ni nges par 'chi bar 'gyur //^{5, (120)}

zhes gsungs pa dang / 'phags pa Klu sgrub kyi zhal nas kyang /
rgyud mang rab tu thos shing lung la legs sbyangs⁶ kyang //
bla ma'i bsnyen bkur dman phyir de nyid lung thob ma gyur pa //
de ni bdag phan⁷ tsam la'ang dbang med bstan bcos mchu //
de ni bstan bcos skyo ba'i rgyu tsam 'ba' zhig yin //^{8, (121)}

zhes gsungs so⁹ //

mngon shes¹⁰ ldan pa'i nyin mtshan gyi¹¹ //¹² [BPP 145]

zhes pa la sogs pa'i shlo ka gnyis ni dkyus¹³ ji lta ba nyid do // 'di ltar rdzogs pa'i byang chub
chen po ni tshogs rnam pa gnyis la rag¹⁴ las / ¹⁵-tshogs rnam pa gnyis kyang gzhan gyi don la
rag las /¹⁵ de yang mngon par shes pa ¹⁶-la rag las / mngon par shes pa¹⁶ yang zhi gnas la
rag las / zhi gnas kyang tshul khirms la rag las pas / dang po tshul khirms bstan pa yin no //
de bas na tshul khirms las zhi gnas (N. 312b) 'byung la / zhi gnas las mngon par shes
(D. 274b) pa 'byung bas /¹⁷

¹⁸-zhi gnas grub pa ma yin pas //¹⁸

mngon shes 'byung (G. 445b) bar¹⁹ mi 'gyur la //²⁰

de phyir zhi gnas bsgrub²¹ pa'i phyir //

yang dang yang du 'bad par bya //²² [BPP 153-156]

zhes smras so // mngon par shes pa ni 'di ltar²³ lha'i mig gi mngon par shes pa dang / lha'i
rna ba'i mngon par shes pa dang / gzhan gyi sems shes pa'i mngon par shes pa (P. 317a)
dang / sngon gyi gnas rjes su²⁴ dran pa dang / rdzu 'phrul gyi mngon par shes pa dang / zag
pa zad pa'i mngon par shes pa'o //²⁵ de lta bu'i mngon (C. 281a) par shes pa de dag zhi gnas

(120) *Dohākośa* 57. Tib. D. No. 2224, Wi 73b7.

(121) *Pañcakrama* 2.84.

1 P/. 2 G *bram*. 3 P *sar*. 4 CD *'thungs par*. 5 GNP om. 6 GNP *sbyang*. 7 G *pham*.
8 GNP om. 9 N *gsungso*. 10 CD *shes med pa*. 11 P *gyis*. 12 GNP om. 13 P *dgyus*.
14 G *rags*. 15 G om. 16 CD om. 17 GNP om. 18 CD om. 19 G om. 20 P/.
21 GNP *sgrub*. 22 GNP /. 23 C *ltar* /. 24 G *rjesu*. 25 GNP *pa dang* /.

las 'byung ba yin pas zhi gnas bsgrub par bya ste /

zhi gnas yan lag rnams¹ nyams pas //

rab tu 'bad de bsgom² byas shing //

lo ni stong phrag dag gis kyang //

ting 'dzin 'grub par mi 'gyur ro³ //⁴ [BPP 157-160]

zhi gnas yan lag ces pa ni bla mas mdzad pa'i *Ting nge 'dzin tshogs kyi le'u yi*⁵ spang bar
bya ba la sogs pa dgu'o // gzhan ni⁶ go sla'o⁷ // de bas na yan lag nyams na⁸ zhi gnas mi 'grub
pa de'i phyir bdag gi bla ma rje bstun dpal Byang chub bzang⁹ pos *Ting nge*¹⁰ 'dzin gyi
tshogs kyi le'u las yan lag dgu gsungs pa ni /

'di ltar spang¹¹ bar bya ba dang / sngon du 'gro ba dang / ldog par bya ba dang /
gdung ba gcad pa dang / yid 'byung bar bya ba dang / yon tan rjes su dran par bya ba
dang / brtson par bya ba dang / 'brel par bya ba dang / gnas pa'i thabs zhes bya'o // de
lta bu'i yan lag rnams shes par byas la de la legs par (G. 436a) gnas par bya'o⁽¹²²⁾

zhes bla ma gsung ba yin no // de rnams kyi don ni *Ting nge*¹² 'dzin gyi *tshogs kyi le'u* de
nyid du blta¹³ bar bya'o //

'dir yang lag tha ma'i don cung zhig bri¹⁴ bar bya'o ste / bla ma'i zhal nas *Ting nge*¹⁵ 'dzin
(N. 313a) *gyi tshogs kyi*¹⁶ *le'u* las 'di skad du /

de ltar yan lag bryad dang ldan pa des / gnas rjes su¹⁷ mthun par kha zas¹⁸ dang
spyod lam rjes su¹⁹ mthun pa dang gos dang grogs rjes su²⁰ mthun pa dang ldan par
byas la / sems mnyam par gzhag²¹ par bya'o⁽¹²³⁾

zhes pa dang / yang gsungs pa

des mnyam par ma bzhag pa na yang *Shes rab kyi pha rol tu phyin pa* (P. 317b)
bklag pa dang / tsha tsha dang / bskor²² ba la sogs pa bsod (D. 275a) nams kyi tshogs la
'bad par bya'o⁽¹²⁴⁾

zhes pa dang / yang gsungs pa /²³

(122) *Samādhisambhāraparivarta*. Tib. D. No.3924, Ki 80a3-4.

(123) *Samādhisambhāraparivarta*. Tib. D. No.3924, Ki 87a7-b1.

(124) *Samādhisambhāraparivarta*. Tib. D. No.3924, Ki 89b3.

1 GNP *nam*. 2 GNP *bsgoms*. 3 G 'gyuro. 4 P/. 5 CD *le'u'i*. 6 G om. 7 GNP *bla'o*.
8 P *ni*. 9 P *bzangs*. 10 N *tinge*. 11 G *spangs*. 12 G *tinge*. 13 P *blda*. 14 P *gri*.
15 G *tinge*. 16 GNP om. 17 G *rjesu*. 18 G *khas*. 19 N *rjesu*. 20 G *rjesu*.
21 GNP *bzhag*. 22 GNP skor. 23 D om.

sems mnyam par 'jog 'dod pa des spong ba'i 'du byed brgyad bsgom par bya ste /
 de'i mi mthun pa'i chos ni 'di dag go //¹
 nyes pa lnga ni le lo dang //²
 gdams ngag brjed dang bying dang rgod //
 'du mi byed dang 'du byed dang //³
 'di dag nyes pa lngar 'dod do //⁽¹²⁵⁾
 de dag gi⁴ gnyen po spong ba'i 'du byed brgyad dag kyang /
 gnas dang de la (C. 281b) gnas pa dang //
 rgyu dang 'bras bu nyid du'o //
 dmigs pa brjed⁵ par ma gyur dang //
 bying dang rgod pa rtogs pa dang //
 de spong mngon par 'du byed dang //
 zhi tshe rnal du 'jug pa'o //^{6, (126), (127)}
 zhes gsungs so // *mDo sde rgyan las kyang* //⁷
 gcig ni 'bad par byed⁸ pa ste /
 gnyis (G. 436b) pa phan 'dogs bdag nyid yin //
 gsum pa gtong bar⁹ byed pa ste //
 bzhi pa gnyen po nyid yin no //^{10, (128)}
 zhes gsungs so //
 yang bshad pa //¹¹ 'dod pa la 'dun pa dang //¹² gnod sems dang / rmugs pa dang //¹³ gnyid
 dang / rgod pa dang //¹⁴ 'gyod pa dang / the tshom mo //
 de la rmugs pa dang gnyid¹⁵ kyi 'khor ni //¹⁶ rmya ba dang / mi dga' ba dang / bya
 rmyangs dang / kha zas kyi tshod ma zin pa dang / sems zhum pa la sogs pa'o // las ni sems
 zhum par byed pa'o // gnyen po ni snang ba'i 'du shes so //
 (N. 313b) rgod pa dang / 'gyod pa'i 'khor ni nye du'i rtogs¹⁷ pa dang / sngon dgod¹⁸ pa
 dang / dga' ba dang / rtses pa dag rjes su¹⁹ dran pa'o // las ni sems ma zhi bar byed pa'o //
 gnyen po ni zhi gnas so //

(125) *Madhyāntavibhāgākārikā* 4.4.

(126) *Madhyāntavibhāgākārikā* 4.5.

(127) *Samādhisambhāraparivarta*. Tib. D. No.3924, Ki 90a1-3.

(128) *Mahāyānasūtrāṃkārakārikā* 18.53

1 GNP /. 2 GNP /. 3 P /. 4 C om. 5 N *brjed*. 6 GNP om. 7 G //.

8 G om. *bar byed*. 9 GNP *bstod par for gtong bar*. 10 GNP om. 11 GNP om. 12 P //.

13 GNP om. 14 GNP om. 15 P *gnyis*. 16 P // . 17 CD *rtog*. 18 GNP *rgod*. 19 GN *rjesu*.

dmigs pa gang rung cig dag la //
yid ni dge la gzhag¹ par bya // [163-164]
dmigs pa ni sems kyi² yul yin te / ji skad du /³ dBu ma rtog ge 'bar ba las //
yid kyi glang po log g-yo ba //
dmigs pa'i ka ba brtan po la //
(P. 318a) dran pa'i thag pas nges bcings te //⁴
sems ni zhi la gzhag⁵ par bya //^{6, (129)}
zhes⁷ 'byung ngo // gang rung cig dag la zhes pa ni /⁸ mtshan ma dang bcas pa'i zhi gnas
dang / mtshan ma med pa'i zhi gnas so // de yang bla ma'i zhal snga nas Ting nge⁹ 'dzin gyi
tshogs¹⁰ kyi le'u las 'di skad (D. 275b) du /¹¹
'dir zhi gnas ni gnyis te / mtshan ma dang bcas pa dang mtshan ma med pa'o //
mtshan ma dang bcas pa la gnyis te / (G. 437a) kha nang du bltas pa dang / kha phyir
bltas pa'o // nang du bltas pa la gnyis te / lus la dmigs pa dang / lus la brten¹² pa la
dmigs pa'o // lus la dmigs pa la gsum ste / lus nyid lha'i rnam par dmigs pa dang / keng
rus la sogs pa la mi sdug¹³ pa'i rnam par dmigs pa dang /¹⁴ kha ṭwām ga la sogs¹⁵ pa¹⁶
mtshan ma (C. 282a) khyad par can la dmigs pa'o // lus la brten pa la lnga ste / dbugs la
dmigs pa dang / mtshan ma phra mo la dmigs pa dang /¹⁷ thig le la dmigs pa dang / 'od
zer gyi yan lag la dmigs pa dang / dga' ba dang bde ba la dmigs pa'o // kha phyir bltas
pa la gnyis te / khyad par can dang / phal pa'o¹⁸ // khyad par can la gnyis te / sku la
dmigs pa dang / gsung la dmigs pa'o // 'di dag ni zhi gnas la 'jug pa'i yan lag go⁽¹³⁰⁾
zhes pa dang / (N. 314a) mtshan ma med pa'i zhi gnas ni / yang de nyid las
mtshan ma med pa'i zhi gnas so sor rtog pa'i shes rab nyid las / mtshan ma med pa'i
lhag mthong rnam par mi rtog pa'i ye shes 'byung zhes te⁽¹³¹⁾
zhes¹⁹ pa dang / yang de nyid las
mtshan ma dang bcas pa'i zhi gnas la brten pa pas²⁰ ni mtshan ma med pa'i zhi gnas
la dmigs nas lhag mthong²¹ skyed pa'i phyogs 'di bsngags te / de la gnas (P. 318b) pa

(129) *Madhyamakahrdayakārikā* 3.16.

(130) *Samādhisambhāraparivarta*. Tib. D. No.3924, Ki 90a3-7.

(131) *Samādhisambhāraparivarta*. Tib. D. No.3924, Ki 90ab5.

1 GNP *bzhag*. 2 P *gyi*. 3 GNP *om*. 4 P /. 5 GNP *bzhag*. 6 GP /. 7 P *zhas*.
8 G //. 9 G *tinge*. 10 P *tshegs*. 11 D *om*. 12 N *brtan*. 13 P *sdig*. 14 N //.
15 N *soḍ*. 16 N *om*. 17 C //. 18 GP *ba'o*. 19 GNP *ces*. 20 G *bas*. 21 GNP *mthong ba*.

brtan pa dang / zhi gnas 'ba' zhig gis¹ nyon mongs pa sel ba dang / rab tu gnong
(G. 437b) par 'gyur bas² de ni 'bras bu dang rjes su mthun pa'i rgyu yin pa'i phyir ro⁽¹³²⁾
zhes gsungs so³ // yang de nyid las

ji ltar bsgom pa ni 'dir mi⁴ brjod de gzhung mangs pa'i 'jigs pa dang / bla ma dam
pas nyams su myong ba'i man ngag la brten par⁵ rigs kyi / bsgom⁶ pa'i man ngag ni yi
ger gnas pas shes par dka⁷ ba'i phyir dang / zhib tu⁸ ni zhi gnas dang lhag mthong
bstan pa las bshad pa'i phyir ro⁽¹³³⁾

zhes gsungs so //

de lta bu'i rnal 'byor pas zhi gnas grub par gyur nas (D. 276a) sngar bshad pa'i mngon
par shes pa lnga po dag 'grub par 'gyur ba la the tshom med do zhes bla ma gsung ngo //
gzhan yang mngon par shes pa bskyed pa'i thabs su gyur pa 'Phags pa sPyan ras gzigs kyis
zhus pa'i chos bdun pa'i mdo las 'byung ba'i bslab pa'i⁹ gzhi de dag kyang nyams su¹⁰ blang
bar bya ba dang / mdo de nyid kyang dus dus su kha ton du gdon par yang bya'o // 'phags pa
Thogs med kyis (C. 282b) kyang

byang chub sems dpa' mngon par shes pa myur du thob par 'dod pas nyin lan gsum
mtshan lan gsum du phyag 'tshal ba dang / mchod pa dang sdig pa bshags pa dang /
rjes su yi rang ba dang / bskul pa dang /¹¹ gsol ba gdab pa dang / (N. 314b) yongs su
bsngo ba la brtson par bya'o

zhes gsungs so //

gzhan yang 'dod pa chung ba dang chog shes pa dang / gso sla ba dang¹² rab tu dben pa
la sogs pa zhi (G. 438a) gnas kyi tshogs thams cad dang ldan pa'o // de lta bu'i rnal 'byor pa
zhi gnas la legs par gnas pa ni 'dod pa chung zhing chog shes par 'gyur te / 'Phags pa Shes
rab kyi pha rol tu phyin pa stong phrag brgya pa las /

(P. 319a) dge slong bsam gtan la sems cung zhig blan pa rnams ni gos kyi 'du shes
chung ba yin / zas kyi 'du shes chung ba dang / pags pa'i mdog snum pa yin
zhes gsungs te / de lta bu'i byang chub sems dpa'i rnal 'byor pa¹³ de ni 'jig rten pa'i nor la
zhen pa spangs nas 'phags pa'i nor bdun la 'bad par byed do¹⁴ // de rjes su¹⁵

(132) *Samādhisambhāraparivarta*. Tib. D. No.3924, Ki 91a3-4.

(133) *Samādhisambhāraparivarta*. Tib. D. No.3924, Ki 90a7-b1.

1 GNP gi. 2 P pas. 3 GN gsungso. 4 GNP ma. 5 GNP pa. 6 P sgom. 7 G dga'.
8 P zhi btu ne. 9 G om. bslab pa'i. 10 GN nyamsu. 11 GNP om. 12 C /. 13 GNP om.
14 G byedo. 15 GN rjesu.

dran pa drug yid la byed do // drug las kyang re zhid sangs rgyas dang chos dang dge 'dun rjes su dran par byed de /¹ dbang po rnon po dang / dbang po rtul² po'i dbye bas so //

dbang po rnon pos rjes su dran par bya ba ni 'Phags pa³ Shes rab kyi pha rol tu phyin pa'i mdo dang / 'Phags pa Sangs rgyas rjes su⁴ dran pa'i mdo dang / 'Phags pa Nam mkha' mdzod kyi mdo dang / 'Phags pa Blo gros mi zad pa'i mdo la sogs par blta bar bya'o //

de la dbang po rtul pos rjes su⁵ dran par bya ba ni 'Phags pa Dad pa'i (D. 276b) stobs bskyed pa'i mdo dang / 'Phags pa Sangs rgyas bgro ba dang / Chos bgro ba dang / dGe 'dun bgro ba'i mdo dang / 'Phags pa Sangs rgyas rjes su⁶ dran pa'i mdo de nyid dang / Sangs rgyas rjes su⁷ (G. 438b) dran pa'i mdo chung ba dang / theg pa chen po'i mdo sde gzhan du yang blta bar bya'o //

gzhan yang mdo'i dgongs pa 'chad pa yin pas /⁸ bSlab pa kun las btus pa'i dkon mchog gsum rjes su⁹ dran pa'i skabs (C. 283a) su¹⁰ yang blta bar bya'o // de lta (N. 315a) bu'i rnal 'byor pa de la lhag mthong yang skye bar 'gyur te 'di'i don 'og nas 'chad par 'gyur ro //

de bas zhi gnas dang lhag mthong la rnal 'byor du byed pa ni lam la gnas pa zhes bya ba yin pas / dran pa nye bar gzhas¹¹ pa bzhi dang / yang dag par spong ba bzhi dang / rdzu 'phrul (P. 319b) gyi rkang ba bzhi dang / dbang po dang / stobs dang / byang chub kyi yan lag dang / 'phags pa'i lam yan lag brgyad pa rnam la rim gyis gnas par 'gyur ro // lhag pa'i sems kyi bslab pa bstan zin to //

da ni thabs dang shes rab zung du 'brel par shes pa'i shes rab kyi¹² bsod nams kyi tshogs¹³ dang ye shes kyi tshogs¹⁴ gnyis zung du 'brel bar rdzogs¹⁵ par bya'o snyam du bsams¹⁶ nas /

shes rab pha rol phyin sbyor dang //

bral bas sgrub pa zad mi 'gyur //¹⁷ [BPP 167-168]

zhes pa la sogs pa smras te / zhi gnas kyi ni las dang nyon mongs pa dang / rnam par smin pa dang / chos kyi sgrub pa la sogs pa spong bar mi nus te / lhag mthong gi¹⁸ de dag spangs nas zad par 'gyur bas lhag mthong brten par bya'o zhes bya ba (G. 439a) ni tshig gi lhag ma'o //

1 CD do //. 2 GNP brtul. 3 G pa dang. 4 N rjesu. 5 N rjesu. 6 GN rjesu. 7 N rjesu.
8 GNP om. 9 GN rjesu. 10 GN skabsu. 11 P bzhas. 12 GNP kyi. 13 N tshod. 14 N tshod.
15 N rdzod. 16 GNP bsam. 17 GNP /. 18 GNP gi.

da ni thabs dang shes rab rgyas par bshad par bya ste /
 gang phyir bcings pa zhes gsungs pas [BPP 175]
 zhes pa ni 'Phags pa Ga ya mgo'i¹ ri'i mdo dang / 'Phags pa Dri ma med par grags pa'i
 mdo las
 thabs dang bral ba'i shes rab ni 'ching ba'o² // ³-shes rab dang bral ba'i thabs kyang
 'ching ba'o⁽¹³⁴⁾
 zhes gsungs so // ³
 de bas gnyis ka spang mi bya // ⁴ [BPP 176]
 zhes pa ni / dpal Ye shes grags pa'i zhal nas 'di skad du /
 shes rab kyi (D. 277a) pha rol tu phyin pa'i ngo bo nyid dang / sbyin pa la sogs pa'i
 thabs la rab tu 'jug go / ⁵ de yang 'Phags pa Ga ya mgo'i⁶ ri las
 gnyis po 'di dag ni byang chub sems dpa'i lam (N. 315b) mdor bsdu pa ste /
 'di lta ste / thabs dang shes rab po⁽¹³⁵⁾
 zhes gsungs pa ste / thabs ni sbyin pa la sogs pa'i pha rol tu phyin pa dang / (C. 283b)
 tshad med pa dang / ⁷ bsdu⁸ ba'i dngos po dang de la sogs pa'i dbye bas⁹ phye ba ste / de
 nyid kyang 'Phags¹⁰ pa Blo gros mi zad pa dang / dKon mchog sprin la (P. 320a) sogs
 pa'i mdo las gsungs pa'o // shes rab ni thabs de phyin ci ma log par yongs su¹¹ gcod pa'i
 rgyu'o // des kyang thabs yang dag par brtags nas / phyin ci ma log pas / ¹² bdag dang
 gzhan gyi don ji lta ba bzhin du nyams su len pas sngags kyis¹³ zin pa'i dug dang 'dra
 bas kun nas nyon mongs par mi 'gyur ro // de yang mdo sde de nyid las
 thabs ni bsdu ba shes pa'o // shes rab ni¹⁴ yongs su¹⁵ gcod pa shes (G. 439b)
 pa'o⁽¹³⁶⁾
 zhes gsungs pa dang / 'Phags pa Dad pa'i stobs bskyed pa'i mdo las kyang /
 thabs la mkhas pa gang zhe na / gang chos thams cad kyi bsdu ba shes pa'o //
 shes rab gang zhe na / gang chos thams cad dbyer med par shes pa la mkhas
 pa'o^{16, (137)}

(134) *Vimalakīrtinirdeśasūtra*. Taisho Uni. Ed., pp. 204-204. Cf. *Bhāvanākrama* I, Tucci ed., p. 504.

(135) *Gayāśīrṣasūtra*. Tib. P. No.777, Ngu 317a7-8. Cf. *Bhāvanākrama* I, Tucci ed., p. 504.

(136) *Gayāśīrṣasūtra*. Tib. P. No.777, Ngu 317a8. Cf. *Bhāvanākrama* I, Tucci ed., p. 505.

(137) *Śraddhābalādhānāvātāramudrāsūtra*. Cf. *Bhāvanākrama* I, Tucci ed., p. 505.

1 GNP go. 2N ba'i. 3 GNP om. 4 GNP om. 5 D //. 6 GNP go. 7 GNP om.
 8 GNP sdu. 9 N bar. 10 N 'phaḍ. 11 N yongsu. 12 C om. 13 GNP kyi. 14 G gi.
 15 N yongsu. 16 N //.

zhes gsungs pa yin no // 'di dag ni sa la gnas pas kyang brten par bya ba yin pas / shes
par bya ba tsam 'ba' zhig ni ma yin no // gang gi phyir *Sa bcu* la sogs pa'i mdo las /

pha rol tu phyin pa lhag ma rnams la yang mi spyod pa ma yin no⁽¹³⁸⁾

zhes gsungs pas / byang chub sems dpa' sa bcu thams cad du yang pha rol tu phyin pa
thams cad la kun du¹ spyad par bya'o zhes gsungs so² // de yang shes rab kyi pha rol tu
phyin pa la gcig tu dga' ba'i³ byang chub sems dpa'i dbang du byas nas / 'Phags pa
*Yongs su*⁴ rgyas pa'i mdo chos thams cad bsdus pa las⁵

byams pa gang yang byang chub sems dpa' rnams kyi⁶ byang chub kyi phyir
pha rol tu phyin pa drug yang dag (N. 316a) par gzung bar bya ba de la / skyes bu
blun po rnams 'di ltar byang chub sems dpa' shes rab kyi pha rol tu (D. 277b)
phyin pa 'ba' zhig la bslab par bya ste / pha rol tu phyin pa lhag ma rnams kyi⁷ ci
zhig dgos zhes zer zhing / des pha rol tu phyin pa lhag ma gzhan smod par
(P. 320b) sems par 'gyur ro⁽¹³⁹⁾

zhes bya ba rgya cher gsungs pa dang / (G. 440a) 'Phags pa rNam par snang mdzad
mngon par byang chub pa las kyang /

thams cad mkhyen pa'i ye shes 'di ni (C. 284a) snying rje chen po'i rtsa ba
can / byang chub kyi sems kyi rgyu can / thabs kyi mthar phyin pa'o⁽¹⁴⁰⁾

zhes gsungs pa yin no // de bas na gnyis ka yang dus thams cad du brten par
bya'o //

de ltar na bcom ldan 'das mi gnas pa'i mya ngan las 'das pa grub pa yin
no // de yang sbyin pa la sogs pa'i thabs kyi⁸ ni gzugs kyi sku dang⁹ zhing dang /
'khor la sogs pa'i longs spyod chen po'i 'bras bu phun sum tshogs pa yongs su¹⁰ 'dzin
par mdzad pas / bcom ldan 'das mya ngan las¹¹ 'das pa la gnas par mi mdzad do // shes
rab kyi pha rol tu phyin pa ni phyin ci log spangs pas 'khor bar¹² gnas par mi mdzad
do // 'khor ba ni phyin ci log gi bdag nyid yin pa'i phyir ro //

(138) *Daśabhūmikasūtra*. Kondo ed., p. 146-14. Cf. *Bhāvanākrama* I, Tucci ed., p. 505.

(139) *Sarvadharmasaṃgrahavaipulyasūtra*. Cf. *Bhāvanākrama* I, Tucci ed., p. 505, *Śikṣāsamuccaya*, Bendall ed., p. 97.6-8.

(140) *Mahāvairocanaḥhisambodhivikurvatyadhiṣṭhānavaipulyasūtra*. Tib. P. No. 126, Tha 117a8. Cf. *Bhāvanākrama* I, Tucci ed., p. 506.

1 GNP tu. 2 G gsungso. 3 P pa'i. 4 G yongsung, N yongsu. 5 P //. 6 GNP kyi.
7 GNP kyi. 8 G kyi. 9 GNP om. 10 G yongsu. 11 GNP om. 12 GNP ba.

gang yang chos kyi rnam grangs gzings lta bur shes pas chos rnam kyang
 spang bar bya bas na / chos ma yin pa lta ci smos so¹,⁽¹⁴¹⁾
 zhes gsungs pa ni / de la phyin ci log tu mngon par zhen pa spang bar² bya'o zhes
 gsungs kyi / dgos pa'i don rdzogs pa'i don du yang gnas par mi³ bya'o zhes gsungs pa
 ni ma³ yin no⁴ // de yang chos yongs su⁵ gzung bar⁶ bya ste / log pa ni gzung⁷ bar mi
 bya'o zhes bya ba'i don⁸ to // de bas na /⁹
 dus kun du¹⁰ ni thabs dang ni //
 shes rab pha rol bdag can ni //
 brten (G.440b) bya gang (N. 316b) phyir de las ni //
 mi gnas mya ngan 'das par 'gyur //¹¹,⁽¹⁴²⁾
 zhes khungs dang bcas par¹² gsungs so // bla ma'i zhal nas kyang
 de lta bas na dus thams cad du thabs dang shes rab gnyis ka dang ldan par bya
 zhing / bsod nams dang ye shes kyi tshogs zung du 'brel par bsag¹³ par bya'o
 zhes gsungs so¹⁴ // de lta thabs dang shes rab gnyis zung du 'brel par¹⁵ 'jug pa de gnyis ka
 dang ldan par bya'o zhes bya ba de bstan nas / da ni thabs (D. 278a) zhes bya ba dang shes
 rab ces bya ba de gnyis nyid ji lta bu yin pa bshad pa'i phyir /¹⁶
 shes rab gang dang thabs gang zhes //¹⁷
 the tshom dag ni spang ba'i phyir //
 thabs de¹⁸ dang ni shes rab kyi //
 yang dag dbye ba gsal bar bya //¹⁹ [BPP 177-180]
 zhes bya ba de smras te /
 the tshom (C. 284b) dag ni spang ba'i phyir //²⁰ [BPP 178]
 zhes pa ni²¹ sngon²² gyi slob dpon chen po dag 'di gnyis²³ la tha dad par gsungs so // de bas
 na thabs dang shes rab kyi dbye ba 'di lta bu yin te / gzhung kha cig las /²⁴
 thabs ni byang chub sems dpa' yi²⁵ //
 'gro la snying rje chen po ste //

(141) *Vajracchedikāprajñāpāramitāsūtra*. E. Conze ed., p. 32.

(142) *Pāramitāyānabhāvanākramopadeśa*. Tib. D. No. 3922, Ki 76b4-77b2.

1 CG om. 2 G *spangs par*. 3 G om. 4 G *yino*. 5 N *yongsu*. 6 G om. 7 GNP *bzung*.
 8 G *don don*. 9 GP om. 10 GNP *tu*. 11 GNP om. 12 P *bar*. 13 G *bsags*. 14 G *gsungsso*.
 15 CD *pa*. 16 GP om. 17 GNP /. 18 GP *rnam*s. 19 GNP /. 20 GN P om.
 21 NP *ni /*, G *ni //*. 22 G *smon*. 23 GNP *gnyis ka*. 24 GNP om. 25 CD *yid*.

de yang dmigs pa'i¹ dbye ba yis //

nam pa gsum du 'gyur ba yin //^{2, (143)}

zhes bya ba 'byung ba dang / yang gzhan dag ni

kun rdzob kyi³ nam pa'i byang chub kyi sems de ni thabs yin

zhes 'byung ngo // bla ma dpal Byang chub bzang po'i zhal nas⁴ 'di skad du /

shes rab pha rol phyin (G. 441a) spangs pa'i //

sbyin pa'i pha rol phyin la sogs //

dge ba'i tshogs rnams thams cad dag /

rgyal ba rnams kyis thabs su bshad //⁵ [BPP 181-184]

ces gsungs pa de bdag⁶ gi rtsa bar bkod pa yin no //

sbyin pa'i pha rol⁷ phyin la sogs //⁸ [BPP 182]

zhes bya ba ni / 'dir sbyin pa ni nam pa gsum ste / sbyin bdag dang /⁹ rdzas dang /¹⁰ zhing gi

dbye bas so // sbyin bdag ni rnyed pa dang bkur¹¹ sti'am / grags pa dang snyan pa'i phyir

ram / gzhan gyis¹² bskul ba'i phyir ram / snying rje'i phyir ram sri zhu'i¹³ (N. 317a) phyir¹⁴ la

sogs pa'o // rdzas¹⁵ ni 'di ltar chos dang /¹⁶ zang zing dang mi 'jigs pa dang / byams pa la

sogs pa'o // zhing ni¹⁷ 'di ltar dkon mchog gsum dang bla ma'i gnas dang / 'gro ba lnga'i sems

(P. 321b) can thams cad do // de yang *rDo rje gdan bzhi pa'i rgyud las /*

dmangs rigs stong phrag drug cu¹⁸ ni //

bram ze gtsang ma gcig la sbyar //^{19, (144)}

zhes bya ba la sogs pa rgyas par gsungs pa dang / yang mdo las /²⁰

dge bsnyen ston pa gzhan la mi brten pa //^{21, (145)}

zhes bya ba la sogs pa rgyas par gsungs pa dang / chos bshad pa brgya pa las kyang rgyas

par gsungs so²² // gzhan yang bcom ldan 'das kyis 'jig rten gsum las nam par rgyal ba zhes

bya ba nal 'byor gyi rgyud las / (D. 278b) 'di skad du /

dbang bskur ba'i sbyin pa dang / chos kyi sbyin pa dang / nor gyi sbyin pa

(143) *Tattvātārākyasakalāsugatavacastātparyavyākhyāprakaraṇa* of Jñānakīrti. Tib. D. No. 3709 Tsu 45b3-4.

(144) Cf. *Ctuḥpīthatantrārājamaṇḍalopāyikāvidhisārasamuccaya* of Āryadeva. Tib. D. No. 1613, Ya 137b1.

(145) *Śraddhābalādhānasūtra*. Cf. *Sūtrasamuccaya*, D. No. 3934, Ki 158b4, *Śikṣāsamuccaya*, D. No. 3940, Khi 53b4-5, *Mahāsūtrasamuccaya* of Dīpaṃkaraśrījñāna, No. 3961, Gi 41b1-3.

1 P *pa*. 2 GNPP om. 3 NP *gyi*. 4 NP *nas ni*. 5 GN P om. 6 GNP *dag*.
 7 NP *rol tu*. 8 GNP om. 9 GNP om. 10 GNP om. 11 P *bkar*. 12 GNP *gyi*.
 13 GP *zhu pa'i*. 14 N *zhu pa'i phyir*. 15 P *rjas*. 16 CGNP om. 17 GNP om.
 18 N *bcu*. 19 GNP om. 20 GNP om. 21 GNP om. 22 G *gsungso*.

dang / zas kyi sbyin pa dang / mi 'jigs pa'i sbyin pa dang / byams pa'i sbyin pa'o // de
dag slob ma dang mi snang ba'i (G. 441b) sems dang / dge sbyong dang bram ze dang
phongs pa dang dud 'gro dang gyod krin¹ can dang /² (C. 285a) 'gro ba mtha' dag go
rims³ bzhin no //⁽¹⁴⁶⁾

sogs zhes bya ba ni pha rol tu phyin pa gzhan yang bshad pa yin te / tshul khirms ni 'di ltar
sems dang po bskyed pa'i byang chub sems dpa' dang / spyod pa la zhugs pa dang / phyr mi
ldog pa dang / mi skye⁴ ba'i⁵ chos la⁶ bzod pa thob pa dang / skye ba gcig gis thogs pa dang /
srid pa tha ma'i byang chub sems dpa'i tshul khirms dag go /⁷ pha rol tu phyin pa gzhan ni
mdo las 'byung ba bzhin /

dge ba'i chos rnams thams cad dag /⁸ [BPP 183]

ces pa ni 'og nas 'chad par 'gyur ro // gzhan yang 'di dag gi don rgyas pa ni mdo sde⁹ dang
gzhan yang (N. 317b) mdo sde'i don gsal bar byed pa *mDo kun las btus pa dang / Byang
chub sems dpa'i sa dang / sPyod 'jug dang / bSlab pa kun las btus pa dang / slob dpon dPa'
bo'i Pha rol tu phyin pa'i gtam dag tu blta bar bya'o //*

thabs goms dbang gis [BPP 185]

zhes pa'i slo ka ni dkyus ji lta ba bzhin no¹⁰ //

(P. 322a) shes rab gang yin zhe na / 'di ltar lhan cig skyes pa 'am / thos pa las byung ba
'am / bsams¹¹ pa las byung ba 'am / bsgoms¹² pa las byung ba 'am / yang gzhung dag las /

gang zhig spros pa thams cad kyi //

gnas dang tshig tu ma gyur pa //¹³

'jug de thugs kyi rdo rje yis //¹⁴

shes rab ces ni bya bar bsgrags //^{15, (147)}

zhes gsungs te de nyid do // de bzhin du rtsa ba las kyang /

phung (G. 442a) po khams dang skye mched rnams¹⁶ //

skye ba med¹⁷ par rtogs gyur pa'i //

rang bzhin stong pa nyid shes pa //¹⁸

shes rab ces ni yongs su¹⁹ bshad //²⁰ [BPP 189-192]

(146) *Trailokavijayamahākālpārājā*. Tib. D. No.482, Ta 34b5-6.

(147) *Tattvātārākyasakalasugatavacastātparyavyākhyāprakaraṇa*. Tib. D. No. 3709, Tsu 43b2.

1 P *grin*. 2 GNP om. 3 GNP *rim*. 4 C *skyid*. 5 P *pa'i*. 6 P om. 7 D //

8 GNP om. 9 G *ste*. 10 GNP *nyid do* for *bzhin no*. 11 GNP *bsam*. 12 GNP *bsgom*.

13 P /. 14 P /. 15 GNP om. 16 G *rnams dang*. 17 G *mched*. 18 GNP /. 19 N *yongsu*.

20 GNP /.

ces smras te / phung po dang khams dang skye¹ mched du phyi nang gi chos thams cad 'dus
pa yin te / bcom ldan 'das kyi zhal nas /

bram ze thams cad thams cad ces bya ba ni phung po dang khams dang skye mched
rnams so⁽¹⁴⁸⁾

zhes gsungs so² // (D. 279a) skye ba med³ pa ni 'og nas 'chad par 'gyur ro⁴ // bshad ces pa ni
sangs rgyas dang bla mas gsungs zhes pa'o // 'dir smras pa /⁵

pha rol phyin dang bsdu ba'i dngos po dang //

tshad med bzhi dang yan lag bdun pa dang //

chos spyod bcu dang dge ba'i las rnams (C. 285b) gzhan //

'phags pa'i nor bdun rjes dran drug la sogs⁶ //

maṅḍala tsha tsha skor ba la sogs⁷ pa⁸ //

thabs yin longs spyod rdzogs dang sprul ba'i sku //

shes rab pha rol phyin pa gcig pu nyid //

shes rab yin te chos kyi sku yi rgyu //

smras pa rigs kyi bu de lta bu'i shes rab ces bya ba de tshul ji lta bu zhis gis mngon sum
(N. 318a) du byed par 'gyur zhe na / smras pa gtan tshigs chen po bzhis shes par 'gyur ro //
bzhi gang zhe na / mu bzhi skye ba 'gog pa'i gtan tshigs dang /⁹ rdo rje gzegs ma'i gtan
tshigs dang / gcig dang du ma bral ba'i gtan tshigs dang / rten cing (P. 322b) 'brel bar¹⁰
'byung ba'i gtan tshigs so // de dag kyang gang yin zhe na /

yod pa skye ba rigs min te //¹¹ [BPP 193]

zhes bya ba¹² la sogs pa shlo ka bzhis bstan to // de la

yod pa skye (G. 442b) ba rigs min te //

med pa nam mkha'i¹³ me tog bzhin //

nyes pa gnyis kar thal 'gyur phyir //

gnyis ka dag kyang 'byung ba min //¹⁴ [BPP 193-196]

zhes pas¹⁵ mu bzhi skye ba 'gog pa'i gtan tshigs bstan te / 'di na¹⁶ chos gang dag yod pa dag
ni skye bar mi 'gyur te / skyes zin pa'i phyir ro // med pa'i chos kyang skye bar mi 'gyur te /
de dag rang nyid kyis ma grub cing skye ba'i rgyu med pa'i phyir ro // gnyis ka zhes pa'i
phung po gsum pa ni 'ga' yang 'di na med do¹⁷ // 'di'i don slob dpon Zhi ba'i lhas kyang

(148) Cf. *Tarkajvāla*, Tib. D. No. 3856, Dza 60a2, *Prajñāpāramitopadeśa*, Tib. D. No. 4079, Hi 134b2, etc.

1 G om. 2 N *gsungso*. 3 G *mched* for *ba med*. 4 G 'gyuro. 5 GN om. 6 G *soḍ*. 7 G *soḍ*.
8 G om. 9 N //. 10 CGNP *par*. 11 GNP om. 12 CD *zhes pa*. 13 GN *namkha'i*.
14 GNP /. 15 GNP *pa'i*. 16 G *ni*. 17 G *medo*.

gsungs te /¹ 'di skad du /

dngos po yod par gyur pa la //
rgyu rnams kyis ni ci zhig bya //
'on te de ni med na yang //
rgyu rnams kyis ni² ci zhig dgos //
bye ba brgya phrag rgyu yis kyang //
dngos po med las bsgyur du med //
gnas skabs de dngos ji lta bu //
dngos las gzhan pa 'ang gang zhig yin //
med pa'i tshe na dngos med na //
nam zhig dngos po 'byung bar 'gyur //
dngos po skye ba med pa yis //
dngos po med ni (D. 279b) bral mi 'gyur //
dngos po med dang ma bral na //
dngos po yod pa'i skabs mi 'byung //
rang bzhin gnyis su³ thal 'gyur phyir //
dngos po dngos med yod⁴ mi 'gyur //
de bzhin chad pa⁵ yod min zhing //
rtag par yang ni mi dmigs so //
de bas skye bo 'di dag ni //
skye ba med cing 'gag pa med //^{6, (149)}

ces (N. 318b) rgyas par gsungs so //

(C. 286a) dngos po rang las mi skye zhing //
gzhan dang gnyis ka las kyang min //
rgyu med las min de yi phyir //
ngo bo nyid (G. 443a) kyis rang bzhin med //⁷ [BPP 197-200]

ces bya ba 'dis ni rdo rje gzegs ma bstan te / 'di ltar bdag dang / (P. 323a) phyag⁸ dang /
dbang phyug dang / skyes bu dang / las dang / rang bzhin dang / yon tan dang / tshangs pa
dang / khyab 'jug dang / lha chen po la sogs pa phyi nang gi byed pa'i skyes bu dang / gzhan

(149) *Bodhi(sattva)caryāvatāra* 9.146-150.

1 GNP om. 2 G *kyisi* for *kyis ni*. 3 N *gnyisu*. 4 NP *nyid*. 5 GNP *par*. 6 GNP om.
7 GNP om. 8 GNP *phyā*.

yang rang gi sde pa dag kyang rgyu drug dang / rkyen bzhis dngos po skye bar khas len pa
de dag ni log par rtogs pa yin te / de dag dgag pa'i phyir 'phags pa Klu sgrub kyi zhal nas /

bdag las ma yin gzhan las min //
gnyis las ma yin rgyu med min //
dngos po gang dag gang na yang //
skye ba nam yang yod ma yin //^{1, (150)}

zhes dBu ma'i rtsa ba shes rab las gsungs so // don 'di rgyas par de nyid dang de'i 'grel pa
chen po drug dang / t̄ka chen po gnyis dang / dBu ma rnam par 'thag pa dang² / Tshig don
gsal ba dang / rTog ge 'bar ba dang / dBu ma la 'jug pa dag tu blta bar bya'o //

yang na chos rnam thams cad dag //
gcig dang du mas rnam dpyad na //
ngo bo nyid kyis mi dmigs pas //
rang bzhin med pa nyid du nges //³ [BPP 201-204]

zhes bya ba 'dis ni gcig dang du ma dang bral ba'i gtan tshigs bstan te / yang na zhes bya ba
'di'i don ni bstan pa'o //

gcig dang du mas rnam dpyad na //⁴ [BPP 202]

zhes pa'i don ni slob dpon Zhi ba 'tshos bshad de //⁵

bdag dang gzhan smras dngos 'di dag //
yang dag don du rang bzhin med //⁶
gcig dang du mar (G. 443b) bral ba'i phyir //
rang bzhin med de gzugs brnyan bzhin //^{7, (151)}

zhes gsungs pa dang / slob dpon dPal spas kyis kyang //⁸

phyi dang (D. 280a) nang na gnas 'di kun //⁹
yang dag don du rang bzhin med //
gcig pa (N. 319a) nyid dang du ma dang //
bral ba'i phyir na gzugs brnyan bzhin //^{10, (152)}

zhes gsungs so // de dag gi don rgyas par gzhung de dag nyid (P. 323b) du blta bar bya'o //

(150) *Mūlamadhyamakārikā* 1.1.

(151) *Madhyamakālamkārikā* 1.

(152) *Tattvāvatārikā* 1.

1 GNP om. 2 G yang. 3 GNP /. 4 GNP om. 5 GNP //. 6 P /. 7 GNP om.
8 GNP //. 9 G /. 10 GNP om.

*stong nyid bdun cu'i rigs pa dang //*¹

dbu ma rtsa ba sogs² las kyang //

dngos po rnam kyis rang bzhin ni //

*stong pa nyid du grub (C. 286b) bshad pa //*³ [BPP 205-208]

zhes bya ba 'dis ni rten cing 'brel bar⁴ 'byung ba'i gtan tshigs bstan te / 'di'i don yang gzhung de dag nyid du blta bar bya'o // grub bshad pa ni sngon gyi slob dpon chen po rnam kyis⁵ dngos po thams cad skye ba med par bsgrubs⁶ pa bstan //

de lta bu'i gtan tshigs chen po bzhis dngos po ma lus pa skye ba med pa / rab tu mi gnas pa / rang bzhin gyis⁸ mya ngan las 'das pa / gdod nas rnam par dag pa / rtsa ba med pa / gzhi med pa / chos gang yang grub pa med par sngon gyi mkhas pa chen po de⁹ dag gis legs par bsgrubs zin to //

'dzam bu'i¹¹ gling na mkhas pa dag ni 'di skad du / 'phags pa Thogs med kyis¹² bstan pa'i rnam grangs bshad pa / des shes rab kyis pha rol tu phyin pa'i don rnam par rig pa tsam du gsungs shing / da ltar bla ma Su wa rṇṇa dwī pa dang / bla ma Shān ti pa yang de ltar dgongs so // slob dpon Klu sgrub kyis ni bstan pa'i snying po bshad de / des shes rab kyis pha rol tu phyin pa'i don yod pa dang med pa las 'das pa'i dbu ma chen po'i don thugs su¹³ chud cing / mkhas pa gzhan gyi rgyud la yang de ltar gsungs so // de ltar bla ma Byang chub bzang po dang / rje btsun Ku su lu pa yang de ltar dgongs so //

*'phags pa Klu sgrub zhal gyi bdud rtsi des //*¹⁴

*Ārya de ba Zla grags bha bya dang //*¹⁵

*Zhi ba'i lha dang Byang chub bzang po'i bar //*¹⁶

tshim par gyur pa bdag la 'ang cung zhig 'thor //

de ltar gtan (N. 319b) tshigs¹⁷ chen po bzhi dag gis //

*chos rnam thams cad skye¹⁸ med bsgrub byas te //*¹⁹

sngon gyi slob dpon rnam kyis²⁰ rjes²¹ 'grangs²² nas //

(P. 324a) dbu ma chen po'i grub mthar gnas par bya //

yang na 'di lta bu yin te / (D. 280b)

1 P/. 2 CD *la sogs*. 3 GP/. 4 GN *par*. 5 P *kyi*. 6 GNP *bsgrub*. 7 CDGN /.
8 GNP *gyi*. 9 CD *om*. 10 CD ///. 11 GNP *dzambu'i*. 12 GNP *kyi*. 13 GN *thugsu*.
14 GP /. 15 GP /. 16 P /. 17 P *chags*. 18 P *skyes*. 19 GP /. 20 GNP *kyis*. 21 P *res*.
22 GNP *'brangs*.

deng¹ sang sems can dus dang nyon mongs dang //
 Ita ba tshe yi² snyigs mar gyur pa ste //
 gzhung rnam mnyan par dgos pa med pas na //
 snying po don gyi rnal 'byor bsgom³ par bya //
 deng⁴ sang dus su gzings dang 'dra ba yi //
 gzhung rnam rgya chen mnyan pa'i dus med pas //
 yid 'khrugs⁵ byed pa thams cad spangs byas la //
 dam pa'i nyer bstan 'ba' zhig bsgom par bya //
 tshe ni yun thung shes bya'i rnam pa mang //
 tshe yi tshad kyang 'di (C. 287a) tsam mi shes pas //
 ngang pas chu las⁶ 'o ma len pa ltar //
 'dod pa'i dngos po dang las⁷ blang bar bya //

rtsa ba nyid bshad par bya ste / *dBu ma'i rtsa ba zhes bya ba ni dBu ma'i rtsa ba shes rab po*⁸ // (G. 444b) sogs zhes pas ni *Ga las*⁹ 'jigs med dang / *Rigs pa drug cu pa dang / rTsod pa bzlog*¹⁰ pa dang / *sTong pa nyid bdun cu pa dang / Rin po che'i phreng ba dang / Theg pa chen po nyi shu pa dang / Tshig brgya pa dang / Sā*¹¹ *lu ljang pa'i 'grel pa la sogs pa'o* //

yang na sogs zhes pa ni slob dpon 'pahgs pa'i dngos kyi slob ma rje btsun Ārya de ba dang / slob dpon Zla grags dang / slob dpon Bha bya snang bral dang / slob dpon Zhi ba'i lha la sogs pas mdzad pa'i bstan bcos te / de yang rje btsun Ārya de bas ni *dBu ma rnam par 'thag pa chen po dang / Lag pa'i tshad dang / Sor mo lta bur bshad pa dang / Ye shes snying po kun las btus pa la sogs pa mdzad do* // slob dpon Zla grags kyis / *dBu ma la 'jug pa dang / Rigs pa drug cu pa'i 'grel pa dang / dBu ma phung po lnga pa dang / Tshig don gsal ba la sogs pa mdzad do* // slob (N. 320a) dpon Bha (P. 324b) bya snang bral gyis¹² *dBu ma rtog ge 'bar ba dang / Shes rab sgron ma la sogs pa mdzad do* // de la *dBu ma'i rtsa ba shes rab la 'grel pa brgyad yod de / slob dpon nyid kyis mdzad pa'i* ¹³*Ga las*¹⁴ 'jigs med dang / slob dpon Zla grags kyis mdzad pa'i¹³ *Tshig don gsal ba dang / slob dpon Bha bya snang bral gyis mdzad pa'i Shes rab sgron ma dang / gnas brtan Buddha*¹⁵ *pā li tas mdzad pa'i Buddha*¹⁶ *pā li ta*¹⁷ dang / slob dpon Blo brtan gyis mdzad (D. 281a) pa dang / slob dpon Gu

1 CGNP *ding*. 2 GNP *tshe'i*. 3 P *bsgoms*. 4 CGNP *ding*. 5 GNP *'khrug*. 6 GNP *la*.
 7 GNP *la*. 8 P *bo*. 9 GNP *la*. 10 GNP *zlog*. 11 GP *sa*. 12 G *gyi*, P om. *bral gyis*.
 13 G om. 14 N *la*. 15 GNP *bud dha*. 16 N *bud dha*. 17 G *ti*.

ṅa ma ti dang / slob dpon (G. 445a) Gu ṅa shrī¹ dang / ā tsā rya² Gu ṅa da tas mdzad pa rnamso³ // de la *Shes rab sgron ma* la ṅi ka chen po gnyis yod de / ā tsā rya⁴ sSyan ras gzigs rtul⁵ zhugs kyis mdzad pa dang / ā tsa rya⁶ De ba sha rams⁷ mdzad pa'i *dBu ma dkar po 'char ba'o* //

gzhan yang⁸ 'dzam bu'i⁹ gling na slob dpon 'phags pa Klu sgrub kyis dgongs pa 'chad pa mkhas pa chen po bdag dang gzhan gyi¹⁰ (C. 287b) grub pa'i mtha' rgya mtsho lta bu thugs su¹¹ chud pa rnamso¹² mdzad pa'i gzhung gi gtan tshigs dag gis /¹³

dgongso po rnamso kyis rang bzhin gyi //¹⁴

stong pa nyid ni grub bshad pa //¹⁵ [BPP 207-208]

zhes te de dang der chos thams cad stong pa nyid du rgyas par bsgrubs zin la / gal te bdag gis¹⁶ gtan tshigs chen po bzhis gzhan dag gi log par rtogs pa bsal bar¹⁷ gyur na ni gzhung shin tu mangs par¹⁸ 'gyur bas na / de phyir bdag gis 'dir nyung ngung du byas shing ma spros pa yin no //

'dir bdag cag dbu ma chen po'i grub pa'i mtha' ni 'di ltar yin no zhes smos pa¹⁹ tsam du zad kyis / grub pa'i mtha' rgyas par ni ma bris te / rnal 'byor pa nyams su²⁰ (N. 320b) len 'dod pa dag la nyung du bsdu nas bstan pa yin pas /

bsgom pa'i (P. 325a) don du rab tu bshad //²¹ [BPP 212]

ces bya ba de yin no // 'dir don dam pa'i byang chub kyis sems bsgom pas / nyams su²² blang ba'i thabs ni bdag gis ma bris / bla ma yongs su²³ mnyes par byas nas bla ma la²⁴ zhu (G. 445b) bar bya'o //

de bas chos rnamso ma lus pa //²⁵ [BPP 213]

zhes bya ba la sogso pa la / de dag ni dkyus ji lta ba bzhin no //

gang gi rang bzhin ma mthong zhing²⁶ [BPP 218]

zhes pa ni

chos gang yang mthong ba med pa de²⁷ nyid de kho na nyid mchog mthong ba'o⁽¹⁵³⁾

(153) *Śālistambakaṅkā*. Tib. D. No. 4001, Ji 153a2, Shoening 1995, p. 479.

1 GP *shri*. 2 GNP *a tsarya*. 3 N *rnamso*. 4 GNP *a tsarya*. 5 GNP *rtul*. 6 GNP *a tsarya*.
7 GNP *shar mas*. 8 G *yang /*. 9 GNP *dzambu'i*. 10 GNP *gyis*. 11 G *thugsu*. 12 NP *kyi*.
13 GP // . 14 P / . 15 GP / . 16 GNP *gyi*. 17 P *bsgrub par*. 18 GNP *mang bar*.
19 GNP om. 20 GN *nyamsu*. 21 GNP om. 22 N *nyamsu*. 23 N *yongsu*. 24 GNP *las*.
25 GNP om. 26 CD om. 27 CD om.

zhes mdo sde du mar gsungs pa yin no // 'di'i don la slob dpon Ārya de bas mdzad pa'i *dBu ma 'khrul pa 'joms par* blta bar bya'o // *rTog ge 'bar ba dang / dBu ma la 'jug pa dang / sPyan ras gzigs brtul zhugs dag tu yang blta bar bya'o //*

chos gzhan thams cad lta yongs su¹ grub pa med na rang gi sems 'di (D. 281b) yod dam zhe na /

shes rab de nyid rigs bshad pa //² [BPP 219]

zhes smras te / so sor rtog³ pa'i shes rab de nyid ga la yod de med do // ji ltar med pa yin zhe na / rigs bshad pa zhes te / de nyid kyang gtan tshigs⁴ chen po bzhis bshad cing gzhigs⁵ na grub par mi 'gyur te / don 'di ni bcom ldan 'das kyis⁶ '*Phags pa bDen pa gnyis bstan pa'i mdo* las gsal bar gsungs te / ji skad du

don dam par ni chos thams cad kyi shes rab rnam par dpyad nas btsal yang shin tu⁷ med cing mi dmigs pa'o // (C. 288a) shes rab de yang don dam par⁸ ni shin tu med cing mi dmigs pas na kun rdzob tu shes rab can⁽¹⁵⁴⁾

zhes bya ba ste / shes rab de yang don dam par na shin tu ma skyes shing med pa yin no // 'phags pa Klu sgrub kyi zhal⁹ nas kyang don 'di la dgongs nas /

sems ni sangs rgyas (N. 321a) thams cad kyis //

(P. 325b) ma gzigs (G. 446a) gzigs pa ma yin te //¹⁰

rang bzhin med pa'i ngo bo la //

ji lta bu zhig gzigs par 'gyur //^{11, (155)}

zhes gsungs so¹² // slob dpon 'Phags pa lha'i zhal nas kyang //¹³

rnam shes de yang don dam par //¹⁴

de ni mkhas rnam mi bzhed de¹⁵ //¹⁶

gcig dang du ma bral ba'i phyir //

nam mkha'i¹⁷ pad ma nyid dang mtshungs //^{18, (156)}

zhes ye shes snying po kun las btus pa las gsungs so¹⁹ // 'phags pa Klu sgrub kyi zhal nas /

(154) *Samvṛttiparamāthasatyanirdeśasūtra*. Tib. D. No. 179, Ma 260a2.

(155) *Bodhicittavivarāṇa* 43.

(156) *Jñānasārasamuccaya*. K. Mimaki ed., p.188.

1 N *yongsu*. 2 GNP /. 3 GP *rtogs*. 4 P om. 5 GNP *gzhig*. 6 G *kyi*. 7 GN *du*.
8 GNP *pa*. 9 GNP *zhal snga*. 10 GP /. 11 GP om. 12 G *gsungso*. 13 P //.
14 GNP om. 15 G *bzhede*. 16 NP /. 17 GN *namkha'i*. 18 NP om. 19 G *gsungso*.

bdag tu 'dzin pa bzlog don du //
 phung po khams la sogs pa bstan //
 sems tsam nyid du rnam gnas nas //
 skal chen rnam kyis¹ de dag gzhom //
 'di dag thams cad sems tsam zhes //
 thub pa yis ni gang gsungs pa //
 byis rnam skrag pa spang phyir te //
 yang dag tu ni de nyid min //^{2, (157)}

zhes pa dang / yang de nyid las /³

chos bdag med pa 'di lta bu //
 theg chen dag la dga' rnam kyi //
 rang sems gdod nas ma skyes pa //
 mdor bsdus nas ni de yin no //⁽¹⁵⁸⁾

zhes gsungs so // de bas na⁴ phyi rol pas brtags pa'i bdag la sogs pa dang / rang gi sde pas⁵
 brtags pa'i phung po la sogs pa dang / sems⁶ dang sgyu ma la sogs pa'i rtog pa bsal bar byas
 nas de lta bu'i don la dus rtag tu (D. 282a) gnas nas rnam par rtog pa spang bar bya'o // de
 bas na 'phags pa Klu sgrub kyi zhal nas /

bdag dang phung po la sogs dang //⁷
 rnam shes rtog pas ma bsgribs pa //
 sangs rgyas rnam kyi byang chub (G. 446b) sems //
 stong pa'i mtshan nyid dag tu bzhed //^{8, (159)}

ces gsungs pa yin no // de lta bu'i rnam par rtog pa spangs pa⁹ ni

mya ngan las 'das pa'i mchog yin no¹⁰ [BPP 224]

zhes smras so¹¹ // 'phags pa Klu sgrub kyi (N. 321b) man ngag gis dngos grub brnyes nas
 'phags pa 'Jam¹² (P. 326a) pa'i dbyangs kyi gnang ba (C. 288b) 'thob pa /¹³ mngon par shes
 pa brnyes pa / rgyud thams cad dang / mdo sde thams cad dang / 'dul ba'i lung ma lus pa'i
 dgongs pa dus gcig tu thugs la gsal ba bden pa gzigs pa des na¹⁴ gcig nas

(157) *Bodhicittavivarana* 25-27.

(158) *Bodhicittavivarana* 29.

(159) *Bodhicittavivarana* 2.

1 GNP kyi. 2 P om. 3 D om. 4 GNP om. 5 GP bas.
 6 G rang gi sde bas brtags pa'i phung sems. 7 P /. 8 GNP om. 9 GNP spang ba.
 10 P no //. 11 G smraso. 12 G 'jams. 13 P //. 14 P pa.

gcig tu brgyud pa'i bla ma ni dpal Byang chub bzang po 'di yin pas 'di'i rjes su¹ 'brang par
bya'o // sngar bkod pa'i gzhung de dag gi don ni 'di yin te f²

yang dag nyid du rnam dpyad na //
snang ba'i chos can thams cad dang //³
grub mtha' sogs kyis brtags pa kun //
'khrul te brdzun⁴ pa yin par 'dod //
dper na mig⁵ nad nad skyon gyis //
khab 'dzag⁶ pa dang skra shad dang //
zla gnyis sbrang⁷ ma'i phung po mthong //
der 'dzin pa yi⁸ shes pa 'ang yod //
dper na gnyid log gnyid⁹ dbang gis //
bag chags kyis ni bde sdug dang //
gzugs la sogs pa nyams su¹⁰ myong //
der 'dzin pa yi shes pa 'ang yod //
de bzhin thog¹¹ ma med pa nas //
ma rig mig nad nad skyon gyis //
phyi dang nang gi dngos po myong //
der 'dzin pa yi shes pa 'ang yod //
yang na thog ma med pa nas //
ma rig gnyid mthug¹² chen po log /
bag chags bzhi yi rmi lam (G. 447a) de //
der 'dzin nyams su¹³ myong ba yod //
don dam nyid la rnam dpyad na //
chos rnam kyis ni chos nyid pas //
log par rtog¹⁴ pa de dag gis //
yod dang med par sgrub mi nus //
dper na mig nad ma rung bar¹⁵ //
skra shad med par bya mi nus //
gang tshe mig nad rung ba na //
skra shad yod par bya mi nus //

1 N rjesu. 2 NP //. 3 NP /. 4 GNP rdzun. 5 C mi. 6 N 'jig, P 'dzags. 7 D snang.
8 GNP pa'i. 9 GP gnyis. 10 GN nyamsu. 11 P thogs. 12 GNP 'thug. 13 GN nyamsu.
14 P rtogs. 15 GNP rungs par.

dper na ma rig gnyid sangs na //
 rmi lam mthong bar bya mi nus //
 (D. 282b) ji srid gnyid ni ma sangs par //
 rmi lam med par bya mi nus //
 gang tshe rab rib nad sangs (P. 326b) dang //
 gnyid log pa las sad tsa na //
 skra shad sogs dang rmi lam dang //
 (N. 322a) der 'dzin pa yi¹ shes pa 'ang med //
 de bhzin ma rig mig nad dang //
 ma rig gnyid mthug² sad pa na //
 snang dang brtags pa'i thams cad dang //³
 nyams su⁴ myong ba'i shes pa'ang med //
 rgyun chad ma chad ces brjod pa //
 gang zhig yod pa de rgyun chad //
 chos nyid la ni de med de⁵ //
 glo bur byis pas brtags par zad //
 de bas slob (C. 289a) dpon Zhi ba'i lha //
 rgyun chad par ni 'dir mi bzhed //
 de yi gdams ngag med pa dang //
 rgyun chad pa yi gzhung yin zer //
 'di la bsal bya ci yang med //
 gzhang par bya ba cung zad med //
 yang dag nyid la yang dag blta //
 yang dag mthong bas rnam grol 'gyur //
 bdag dang gzhan gyi grub pa'i mtha' //
 kha cig chos rnam yod par bsgrub //
 gzhan dag chos rnam med ces zer //
 yang dag nyid la rnam dpyad na //
 yod⁶ ces pa dang med ces pa //
 yang dag mtha' la de dag med //

1 GNP pa'i. 2 GNP 'thug. 3 GNP /. 4 N nyamsu. 5 G mede. 6 N yang.

de bas (G. 447b) gar yang bsgrub mi nus //¹
 bla ma'i brgyud pa bral² ba dag //
 rjes su³ dpag pa'i shes rab kyis //
 yod med rtag chad sogs bsgrubs⁴ kyang //
 ngal 'gyur don la reg mi 'gyur //
 Chos grags Chos mchog la sogs pas //
 gzhung mang byas pa ji lta bu //
 mu stegs rgol ba bzlog pa'i phyir //
 mkhas pa rnams kyis byas pa yin //
 de bas don dam bsgom pa la //
 tshad mas dgos pa med do⁵ zhes //⁶
 bdag gis gzhan du bkod pas⁷ na //
 re zhig 'dir ni brjod mi dgos //
 de bas rjes dpag gtsor byed pa'i //
 rtog ge'i gzhung rnams dor byas la //
 'phags pa Klu sgrub gzhung lugs kyis⁸ //
 brgyud pa'i man ngag bsgom par bya //
 yod min med min⁹ yod med min //
 gnyi ga min pa 'ang ma yin pa'i //
 mtha' bzhi (P. 327a) las ni rnam grol ba'i //
 de nyid (N. 322b) dbu ma pa yis rig //
 rtag min chad min rtag chad min //
 gnyi ga min pa'ang ma yin pa'i //
 mu bzhi las ni rnam grol ba'i //
 de nyid dbu ma pa yis rtogs //
 (D. 283a) yod med lta bu las 'das shing //
 rtag dang chad pa rnam par spangs //
 shes dang shes bya las rab grol //
 'di ni dbu ma chen po'i gzhung //

1 P /. 2 P 'bral. 3 G rjesu. 4 G bsgrub. 5 GNP om. 6 G medo. 7 GNP pa.
 8 GNP kyis. 9 P om.

rjes su¹ dpag pa gtsor byas nas //
 yod med² rtag chad sogs smras kyang //
 chos nyid de³ yi rjes mi 'brang⁴ //
 sgro 'dogs pa dang skur bar zad //
 dper na gser dang nam mkha'⁵ dang //
 chu sogs rang bzhin dag mod kyi //
 skyon dang 'grog pa ltar snang yang //
 de dag (C. 289b) skyon gyi rjes mi⁶ 'brang //
 sgro 'dogs skur 'debs (G. 448a) rnam spangs shing //
 sgro btags kun las nges grol ba'i //
 de nyid kho na bsgom byas la //
 grub pa'i mtha' la gnas mi bya //
 'phags pa Klu sgrub 'Phags pa'i lha //
 Zla grags Bha bya Zhi ba'i lha //
 brgyud pa'i man ngag 'ba' zhig bsgom //
 gal te brgyud pa med gyur na //
 de dag rnam kyis bkod pa yi //
 gzhung rnam yang dang yang du blta //
 chos kun a yi sgo can te //⁷
 gdod nas skye med 'gag pa 'ang med //
 ngo bo nyid kyis mya ngan 'das //
 rang bzhin gyis ni rnam par dag //
 mthong na 'ang mthong ba ma yin te //
 mthong bar bya dang mthong byed dang //
 mthong ba shes⁸ bya gang yang med //
 thub pa rtag tu mnyam par gzhag⁹ //
 rnam par rtog pa kun spangs shing //
 chos kyi dbyings la gnas pa na //
 rnal 'byor chen po'i ye shes la //
 'byung dang 'jug pa de mi 'dod //

1 G rjesu. 2 GNP min. 3 G om. 4 GNP 'brangs. 5 G namkha'. 6 N ma.
 7 P/. 8 GP zhes. 9 GP bzhag.

de bas mnyam gzhag rjes thob dag //
 sangs rgyas pa la nged mi 'dod //
 sa la gnas pa yin par ni //
 rnam par mi rtog gzungs las bshad //
 'di don 'dir ni rgyas (P. 327b) ma byas //
 bdag gi gzhung 'dzin bla ma la //
 bsnyen bkur sogs kyis mchod byas te //¹
 yang dang yang du zhu bar bya //
 (N. 323a) thams cad mkhyen pas lung bstan pa'i //
 'phags pa Klu sgrub nas brgyud pa'i //
 Byang chub bzang po'i rjes 'brangs² nas //
 grub mtha' gang yang gzung³ mi bya //

de ltar rigs pa'i sgo nas chos thams cad skye ba med par bsgrubs nas /⁴ (G. 448b) da⁵ ni
 lung gi sgo nas chos thams cad skye ba med par bstan pa ni /⁶

de ltar yang bcom ldan 'das (D. 283b) kyis [BPP 224+]
 shes⁷ pa la sogs pa ste / rtsa ba nyid du brtag⁸ par bya'o // der ma zad kyis don 'di ni bcom
 ldan 'das kyis mdo sde gzhan du yang gsungs te / ji skad du⁹ 'Phags pa Chos thams cad
 kyis rang bzhin dbyer med par bstan pa'i mdo las /

de la chos kyis dbyings tshad mar byas na¹⁰ don dam pa yang med kun rdzob kyang
 med do⁽¹⁶⁰⁾

zhes bya ba la sogs pa gsal por gsungs pa dang / 'Phags pa Byang chub sems dpa'i sde snod
 las kyang

bden pa ni gcig ste / 'di ltar (C. 290a) 'gog pa'o⁽¹⁶¹⁾
 zhes bya ba la sogs pas don 'di rgyas par gsungs so // 'Phags pa Sangs rgyas kyis yul la 'jug
 pa ye shes snang ba'i rgyan gyi mdo las kyang 'di skad du /

de bzhin gshegs pa rtag tu skye med chos //
 chos rnam thams cad de bzhin gshegs dang 'dra //
 byis pa'i blo can log par 'khrul pa rnam //
 'jig rten dag na med pa'i chos la spyod //^{11, (162)}

(160) *Dharmadhātuprakṛtyasambhedanirdeśasūtra*. Tib. D. No.52, Kha 142a5.

(161) *Bodhisattvapiṭakasūtra*. Tib. P. No. 760 (12), Wi 190a1-2.

(162) *Sarvabuddhaviṣayāvatārajñānālokāṃkārasūtra*. Taisho Uni. ed., pp. 54-55.

1 P/. 2 P 'bangs. 3 G gzungs. 4 GP //. 5 N de. 6 P //. 7 GNP zhes.
 8 P brtags. 9 GNP om. 10 GNP nas. 11 GN P om.

ces gsungs pa dang / 'Phags pa Zla ba sgron ma las kyang /

thams cad stong pa'i rang bzhin don dam ni //

chos can mi dmigs chos nyid yod pa min //

zhen pa bzlog phyir rkyen bshad ma rtogs pa //

chos kyi ngang la tshig med brjod du med //^{1, (163)}

ces gsungs so // 'Phags pa 'Dul ba rgya mtsho las kyang /

sngon gyi mtha' stong phyi ma'i mtha'² yang³ stong //

(P. 328a) srid (G. 449a) pa thams cad yong⁴ ye stong pa ste //

phyogs gcig⁵ stong pa (N. 323b) mu stegs can rnam kyi //⁶

zhes gsungs so // 'Phags pa Lang kar gshegs pa las kyang /⁷

kun rdzob tu ni thams cad yod //

dam pa'i don du rang bzhin med //

rang bzhin med la 'khrul⁸ ba⁹ gang //

de ni yang dag kun rdzob bshad //^{10, (164)}

ces gsungs so¹¹ // 'Phags pa Shes rab kyi pha rol tu phyin pa rab kyi rtsal gyis¹² rnam par
gnon pa las kyang /

de bzhin gshegs pa'i ye shes kyi¹³ ni ci yang mi gzigs te / de ci'i phyir zhe na / 'di

ltar ye shes la yul mi mnga' ba'i phyir ro^{14, (165)}

zhes gsungs pa dang / 'Phags pa rGyal ba¹⁵ skyed mar mdzad pa chen po las
kyang /

de bzhin gshegs pa mi 'khrugs¹⁶ pa'i zhing gi khyad par brjod par mdzad pas 'khor

(D. 284a) rnam kyi¹⁷ bcom ldan 'das la bcom ldan 'das de bzhin gshegs pa mi

'khrugs¹⁸ pa'i zhing¹⁹ de bdag cag la bstan du gsol zhes zhus pa dang / bcom ldan 'das

kyis²⁰ 'jig rten gyi khams de bstan par mdzad nas phyir yang mi snang²¹ bar mdzad

do // bcom ldan 'das kyi bka' stsal pa /²² ji ltar de bzhin gshegs pa mi 'khrugs²³ pa'i

zhing de mig lam du mi snang ba bzhin du gzugs mig lam du²⁴ mi snang ba'o //

(C. 290b) tshor ba mig lam du mi snang ba'o

(163) *Sarvadharmasvabhāvasamatāvipañcītasamādhirājasūtra*.

(164) *Lankāvatārasūtra*. Nanjio ed., p. 280.8-10.

(165) *Suvikrāntavikramiparipṛcchāprajñāpāramitāsūtra*. Hikata ed., pp. 7-8.

1 GNP om. 2 NP *mthas*. 3 GNP *kyang*. 4 G *yongs*. 5 NP *cig*. 6 GNP om. 7 P //

8 N 'khrug. 9 GNP *pa*. 10 GNP om. 11 G *gsungso*. 12 GNP *gyi*. 13 GNP *kyi*.

14 N *ro* // . 15 NP *pa*. 16 GNP 'khrug. 17 GNP *gyi*. 18 GNP 'krug. 19 P *zhid*.

20 NP *kyi*. 21 D *snad*. 22 GNP om. 23 GNP 'khrug. 24 G *du gzugs*.

zhes bya ba la sogs pa rgyas par gsungs so // don 'di 'Phags¹ (G. 449b) pa rtag² tu ngu'i le'u
 las kyang gsal bar gsungs so // de bzhin du rGyal po ma skyes dgra'i³ 'gyod pa bsal ba'i
 mdo las kyang don⁴ 'di gsal⁵ bar gsungs so //

gzhan yang 'Phags pa Yab dang sras mjal⁶ ba'i mdo dang / 'Phags pa Sor mo'i⁷ phreng
 can gyi mdo dang / 'Phags pa Ye shes kyi phrag⁸ rgya'i mdo dang / De bzhin gshegs pa'i⁹
 gsang ba'i mdo dang / De bzhin gshegs (P. 328b) pa 'Phags pa dri ma med par grags pa'i
 mdo dang / ¹⁰'Phags pa Sangs rgyas rjes su dran pa'i mdo dang / ¹⁰(N. 324a) 'Phags pa
 Nam mkha'¹¹ mdog¹² gis¹³ 'dul ba'i mdo dang / 'Phags pa De bzhin gshegs pa'i mdzod kyi
 mdo dang / 'Phags pa Sum cu rtsa gsum gyi mdo dang / 'Phags pa 'Od srungs kyis zhus pa'i
 mdo dang / 'Phags pa Chos thams cad 'byung ba med par¹⁴ bstan pa'i mdo dang / 'Phags pa
 De bzhin gshegs pa'i snying po bstan pa'i mdo dang / 'Phags pa Ting nge¹⁵ 'dzin gyi rgyal
 po'i mdo dang / 'Phags pa Da ltar gyi¹⁶ sangs rgyas mngon du bzhugs¹⁷ pa'i mdo dang
 / 'Phags pa sKu gsum bstan pa'i mdo dang / 'Phags pa Dri ma med pas byin pas zhus pa'i
 mdo dang / 'Phags pa Bu mo blo gros bzang mos zhus pa'i mdo dang / 'Phags pa Bu mo
 rnam¹⁸ dag dang bas zhus pa'i mdo dang / 'Phags pa Chos nyid rang gi ngo bo nyid las mi
 g-yo bas tha dad par bstan pa'i mdo dang / 'Phags pa Lang kar gshegs pa de nyid dang
 / 'Phags pa bDen pa gnyis bstan pa'i (G. 450a) mdo dang / 'Phags pa Nam (D. 284b)
 mkha'i¹⁹ snying po'i mdo dang / 'Phags pa Klu'i rgyal po ma dros pas zhus pa'i mdo dang /
 'Phags pa Klu'i rgyal po rgya mtsho zhus pa'i mdo dang / 'Phags pa Shes rab kyi pha rol tu
 phyin pa'i mdo ma lus pa thams cad dang / 'Phags pa gSang ba bsam gyis mi khyab pa'i
 mdo la sogs pa mdo sde thams cad nas don 'di shin tu gsal bar gsungs pas mdo de dang de
 nyid du blta bar bya'o // 'dir de dag gi slo (C. 291a) ka bkod na ni gzhung shin tu mangs par
 'gyur ro // de bas na theg pa chen po'i mdo sde ma lus pa thams cad blta ba la shin tu brtson
 par bya'o //

gzhan yang shes rab kyi (P. 329a) pha rol tu phyin pa'i snyin po'i don phyin ci ma log
 par ji lta ba bzhin du thugs su chud pa²⁰ slob dpon 'phags (N. 324b) pa Klu sgrub dang / slob
 dpon 'phags pa Ārya de ba dang / slob dpon 'phags pa Zla grags dang / slob dpon 'phags pa
 Shān ta de ba dang / slob dpon 'phags pa Bha bya snang bral dang / slob dpon rTa dbyangs
 dang / slob dpon 'phags pa dge bsnyen Zla ba la sogs pas mdzad pa'i gzhung de dag ni mdo'i

1 GN 'phad. 2 P rtags. 3 P dga'i. 4 D ron. 5 GP bsal. 6 G dang mjal.
 7 G mor, NP mo. 8 G phyag. 9 GNP pa. 10 10 G om. 11 GN namkha'. 12 P mdo.
 13 GNP gi. 14 CD pa. 15 G tinge. 16 GNP gyis. 17 GP zhugs. 18 P nam
 19 GN namkha'i. 20 GNP pa dang.

don gsal bar bkrol ba yin pas de dag kyang legs par blta ba la brtson par bya'o // 'dir de dag gi gzhung bkod pa¹ na ni ye² ge shin tu mangs par 'gyur ro //

'di ltar 'phags pa Klu sgrub ni mdo (G. 450b) sde phal che ba dang / 'dzam bu'i³ gling na mkhas pa dag kyang 'di skad du sa dang po la gnas pa'i byang chub sems dpa' yin⁴ no zhes brjod cing grags mod kyang /⁵ bdag gis⁶ mdo'i nang nas sa brgyad pa'i byang chub sems dpa' yin⁴ par legs par mthong ba yin no // slob dpon Ārya de ba yang⁷ 'phags pa⁸ Klu sgrub kyi man ngag gis sa brgyad pa thob pa'i byang chub sems dpa' yin par legs par mthong ngo // slob dpon Zla grags kyang⁹ 'phags pa Klu sgrub kyi man ngag gis bden pa'i byin gyis brlabs¹⁰ mnga' ba chos thams cad sgyu ma lta bur thugs su chud pa 'dzam bu'i¹¹ gling du lo bzhi brgyar bzhugs¹² nas gzhan gyi don 'ba' zhig mdzad pa yin no // slob dpon Shān ta de ba yang 'phags pa Klu sgrub kyi¹³ man ngag gis¹⁴ 'phags pa 'Jam pa'i dbyangs kyi (D. 285a) gnang ba thob par byas te bden pa gzigs pa yin no // slob dpon Bha bya yang 'phags pa Klu sgrub kyi¹⁵ man ngag gis sku tshe de nyid la rig¹⁶ 'dzin gnas su¹⁷ gshegs pa yin no // slob dpon rTa dbyangs (P. 329b) ni slob dpon Ārya de ba'i man ngag gis¹⁸ bden pa gzigs pa yin no // 'phags pa dge bsnyen Zla ba yang de lta bu'o //

de bas na de lta (C. 291b) bu'i lung dang rigs pa rgya chen po bstan pa de dag shes par byas shing de'i don la nges par byas (N. 325a) te / the tshom med par byas nas lhag mthong zhes bya ba rnam par mi rtog (G. 451a) pa de bsgom par bya'o // ji ltar bsgom¹⁹ zhe na / re zhig dngos po ni gnyis te / gzugs can dang gzugs can ma²⁰ yin pa'o // de²¹ gnyis ka yang gtan tshigs chen po rnams kyis bsal te bsgom par bya'o //

de yang ji skad du

chos thams cad sems la bsdus shing / sems kyang lus la bsdus la / lus kyang chos kyi dbyings su gtang²² ba 'di ni man ngag go⁽¹⁶⁶⁾ zhes bla ma'i zhal nas *Ting nge*²³ 'dzin gyi tshogs kyi le'u las gsungs so²⁴ // de lta bu la²⁵ shes pa cir yang mi rtog / cir yang mi 'dzin /²⁶ dran pa dang²⁷ yid la byed pa thams cad spangs

(166) *Samādhisambhāraparivarta*. Tib. D. No.3924, Ki 91a2.

1 GNP om. 2 G yi. 3 GNP dzambu'i. 4G om. 5 P // 6 NP gi. 7 GNP dang.
8 G pa'i byang chub sems dpa' yin par legs par mthong ba yin no // slob dpon ārya de ba dang 'phags pa.
9 GNP kyang /. 10 D gyi rlabs. 11 GNP dzambu'i. 12 GP zhugs. 13 P gi. 14 G gi.
15 G gyi. 16 GNP rigs. 17 N gnasu. 18 GN P gi. 19 GNP sgom. 20 GNP om.
21 G de bas na de lta bui ling dang rigs pa rgya chen po bstan pa de dag shes de.
22 GNP btang. 23 G tinge. 24 G gsungso. 25 GNP om. 26 P om. 27 GNP dang /.

te /¹ ji srid mtshan ma'i dgra ma langs pa'i bar de srid² du de lta bu la gnas par bya'o // 'phags
pa Klu sgrub kyi zhal nas /

kun du³ rtogs⁴ pas ma brtags shing //

yid ni rab tu mi gnas la //

dran med yid la byed pa med //

dmigs med de la phyag 'tshal lo //^{5, (167)}

zhes gsungs so // yang⁶ 'phags pa Klu sgrub kyi zhal nas /

mkhas pa stong pa nyid la yang //

stong pa nyid du blta mi 'gyur //^{7, (168)}

zhes gsungs so⁸ // yang /⁹

dmigs¹⁰ pa dang ni bral ba'i sems //

nam mkha'i¹¹ mtshan nyid la gnas te //¹²

nam mkha'¹³ sgom par byed pa ni //

stong pa nyid ni sgom pa'o //^{14, (169)}

zhes gsungs so // slob dpon Zhi ba lha'i zhal nas /

gang tshe yod dang med pa gnyis //

blo yi mdun mi gnas (G. 451b) pa //

de tshe rnam pa gzhan med pas //

dmigs pa med pas¹⁵ rab tu zhi //^{16, (170)}

zhes (P. 330a) gsungs so¹⁶ // goms na ni de'i stobs su¹⁷ 'gyur te / slob dpon Zhi ba lha'i zhal
nas /

stong pa nyid la goms pa yis¹⁸ //

dngos po'i bag chags spong bar 'gyur //^{19, (171)}

zhes²⁰ (D. 285b) gsungs pa dang /²¹ slob dpon dPal sbas²² kyis kyang /²³

'ga' zhig (N. 325b) bsgom pa goms pa yi //

mthu yis²⁴ chos kun ngo bo nyid //

(167) *Caturmudrānīścaya*. Tib. D. No. 2225, Wi 78b7.

(168) *Bodhicittavivarāna* 50cd.

(169) *Bodhicittavivarāna* 51.

(170) *Bodhicaryāvatāra* 9.35.

(171) *Bodhicaryāvatāra* 9.33ab.

1 GNP om. 2 G om. *de srid*. 3 GNP *tu*. 4 GN *rtog*. 5 GNP om. 6 CD om. 7 GNP om.

8 G *gsungso*. 9 GNP om. 10 N *dmid*. 11 GN *namkha'i*. 12 P / . 13 GN *namkha'*.

14 GP om. 15 GNP *pa*. 16 GNP om. 17 N *gsungso*. 18 GN *stobsu*. 19 P *yas*.

20 GNP om. 21 P *zhas*. 22 GNP // . 23 P *spos*. 24 GP // . 25 GNP *yi*.

med pa de yi bdag nyid du //

'gyur te dngos po mthong ba bzhin //^{1, (172)}

zhes gsungs so² // des ni lhag pa'i shes rab kyi bslab pa bstan to //

de ltar stong nyid bsgom byas nas //

rim gyis³ drod sogs thob byas nas //

rab dga' la (C. 292a) sogs thob 'gyur te //

sangs rgyas byang chub yun mi ring // [BPP 237-240]

'dir mnyam par gzhag⁴ pa'i rnal 'byor dang / spyod lam gyi rnal 'byor la gnas nas gong du ji
ltar bshad pa'i theg pa chen po'i mdo sde'i don pha rol tu phyin pa'i lam la legs par gnas pa
des /⁵ mgon po Byams pa'i zhal nas gsungs shing / 'phags pa Thogs med kyis⁶ 'dzam bu'i⁷
gling du rgyas par spel ba'i shes rab kyi pha rol tu phyin pa'i lam *mNgon par rtogs pa'i*
rgyan gyi skabs brgyad kyi rim pa 'Phags pa rnam par grol ba'i sde dang / slob dpon dpal
Seng ge⁸ bzang pos bkrol⁹ zhing bshad pa de shes par byas la gnas par bya'o // de lta ma yin
na lam 'bras bu dang bcas pa la (G. 452a) rmongs par 'gyur ro¹⁰ // de bas na rnal 'byor pa de
kho na nyid la gnas pas tshogs kyi lam la gnas nas / thar pa'i cha dang mthun pa'i dge ba'i
rtsa ba bskyed nas sbyor ba'i lam la reg par 'gyur te / rim gyis drod sogs zhes pa drod rnam
pa gsum dang / rtse mo rnam pa gsum dang / bzod pa rnam pa gsum dang / chos mchog
rnam pa gsum la gnas nas nges par 'byed pa'i cha dang mthun pa'i dge ba'i rsta ba bskyed
cing ting nge (P. 330b) 'dzin bzhis mthong ba'i lam la sogs pa skye ba ni /¹¹

rab dga' la sogs thob 'gyur te /¹² [BPP 239]

zhes bya'o // sangs rgyas byang chub ces pa ni 'di ltar sa bcu rdzogs par byas nas skad cig
ma gcig la mngon par rdzogs par byang chub par gyur nas / sku gsum dang ye shes lnga la
sogs pa yun mi ring (N. 326a) bar myur du 'thob¹³ pa yin no //

drod nas bzung ste sbyor ba'i lam //

mthong ba'i lam sogs sa¹⁴ bcu dang //

sku gsum la sogs rnam gzhag ni //

gzhung mangs¹⁵ 'jigs pas 'dir ma bris //

(172) *Tattvātārakārikā* 12.

1 GNP om. 2 N *gsungso*. 3 P *gyi*. 4 GNP *bzhag*. 5 GNP // . 6 CGNP *kyi*.
7 GN *dzambu'i*, P *dzasbu'i*. 8 NP *sengnge*. 9 GNP *dkrol*. 10 N 'gyuro. 11 GP om.
12 GP om. 13 GNP *thob*. 14 G *sa sa*. 15 GNP *mang*.

mdo dang bstan (D. 286a) bcos rnams na gsal //
rab tu bsgrims te blta bar bya //

yang na /¹

sangs rgyas byang chub yun mi ring //² [BPP 240]

zhes bya ba la / 'di ni byang chub sems dpa' le lo can dag spro ba bskyed³ pa'i don yin no⁴ //⁵
gang bskal pa grangs med pa⁶ gsum zhes gsungs pa de yang yun mi ring ste / byang chub
sems dpa' rnams ni 'gro ba mtha' dag gi don du gnas pa ste / (G. 452b) ji⁷ skad du A mba⁸ rā
dzas /⁹

bdag ni byang chub ring tshul du //
'tshang rgyar mos shing spro ba med //
phyi mthar thug gi bar du ni //
sems can gcig phyir spyad par bya //^{10, (173)}

zhes gsungs so // *dPal mchog dang po* las kyang /¹¹

ji srid 'khor ba'i gnas su ni //
mkhas mchog gnas par gyur pa ni //
de srid mtshungs med sems can don //
mya ngan mi 'da' byed par nus //^{12, (174)}

zhes gsungs so¹³ // 'phags pa Klu sgrub kyis kyang *sMon lam* las /¹⁴

ji srid sems can 'dir 'ga' zhig //
sems can gcig grol ma gyur pa //
bla med byang chub thob gyur kyang //
de srid de¹⁵ don spyad¹⁶ par bgyi //

zhes gsungs so // de ci'i phyir zhe na / mdo las /

'jig rten gyi khams 'di thams cad chu'i dkyil 'khor du gyur la / de la skyes bu zhig
gis¹⁷ lo stong phrag brgya brgya (P. 331a) na spu'i¹⁸ rtse mo zhig gis chu de las 'thor¹⁹
bar byas na²⁰ / chu'i dkyil 'khor de ni zad par 'gyur la /²¹ sems can gyi khams la zad pa
med do

(173) *Mañjuśrībuddhakṣetrālamkārasūtra*. Tib. P. No. 760 (15), Wi 317b5-6. Cf. *Śikṣāsamuccaya*, Bendall ed., p. 14.7-8.

(174) *Śrīparamādiyamahāyānakalparāja*. Tib. P. No. 120, Ta 178b5-6.

1 GNP om. 2 GNP om. 3 GP *skyed*. 4 GNP *te*. 5 GNP /. 6 GNP om.

7 G *byang chub sems dpa' rnams ni 'gro ba mtha' dag gi don du gnas pa ste / ji*.

8 GNP *am ba*. 9 GNP //. 10 GNP om. 11 GP //. 12 GNP om. 13 N *gsungso*. 14 P //.

15 G *de de*. 16 CD *dpyad*. 17 GNP *gi*. 18 D *sdu'i*. 19 P 'ther. 20 P *nas*. 21 P //.

zhes gsungs so // 'phags pa bzang po spyod pa las kyang /

nam mkha'i¹ mthar thug (N. 326b) gyur pa ci tsam par //

sems can ma lus mtha' yang de tsam mo //^{2, (175)}

zhes gsungs so // dper na ri'i rgyal po ri rab rdul phra rab tu bshigs³ pa'i rjes la byang chub
thob par bya'o snyam na yang de ni le lo can yin par (G. 453a) bshad do // de bas na⁴ Amba
rā⁵ dzas kyang /

'khor ba'i thog ma med pa yi //⁶

skye ba tha ma ji srid du //⁷

de srid sems can phan don du //⁸

spyod pa dpag yas spyad par bgyi //^{9, (176)}

zhes gsungs so // de bas na sems can gyi khams la zad pa yang med 'phel¹⁰ ba yang med pa'i
sdug bsngal can de dag yal bar bor nas / bdag nyid myur du 'tshang rgya bar ni 'dod par mi
bya ste / byang chub sems (D. 286b) dpa' dpa' bo dbang po rnon po brtson 'grus rab dang
ldan pa / sems snying rje'i dbang du gyur ba / sems can ma lus pa la snying rje ba can de lta
bu ni mi 'dod du zin kyang myur du mngon par rdzogs par 'tshang rgya bar 'gyur ro zhes
bya ba ni zhar la byung¹¹ ba'o //

smon lam dang ni 'jug pa dang //

de bzhin zab dang rgya che (C. 293a) dang //

mi ldog 'bras bu thob pas kyang //

theg pa chen po khyad par 'phags //^{12, (177)}

zhes¹³ slob dpon Tri pi¹⁴ ṭa ka mā¹⁵ la'i zhal snga nas *Tshul gsum pa'i sgron mar* gsungs te /
nyan thos kyi theg pa bas pha rol tu phyin pa'i theg pa khyad par¹⁶ du 'phags so zhes khong
du chud par bya'o //

pha rol tu phyin pa'i theg pa rdzogs so // //

da ni bla na med pa'i¹⁷ theg pa chen po'i yang¹⁷ theg pa chen po gsang sngags kyi theg
pa brjod par bya'o // de yang slob dpon (P. 331b) chen po rje btsun Tri pi ṭa ka mā¹⁸ la'i zhal
snga nas /¹⁹

(175) *Badracarīpranidhānarāja* 46ab.

(176) *Mañjuśrībuddhakṣetrālamkārasūtra*. Tib. P. No.760(15), Wi 317b5-6. Cf. *Śikṣāsamuccaya*, Bendall ed., p.13.18-19.

(177) *Nayatrapradīpa*. Tib. P. No. 4530, Nu 13b3-4.

1 GN *namkha'*. 2 GNP om. 3 D *bshig*. 4 GNP om. 5 G *ām bā rā*, NP *am bā rā*. 6 GNP /.
7 GNP /. 8 P /. 9 GNP om. 10 D *'pel*. 11 GNP *'byung*. 12 GP om. 13 GP *shes*.
14 D *bi*. 15 D *ma*. 16 NP om. 17 G repeats. 18 CD *ma*. 19 GNP om.

don gcig yin na 'ang ma rmongs dang //

(G. 453b) thabs mang dka' ba med phyir dang //

dbang po rnon po'i dbang byas pas //

sngags kyi¹ bstan bcos khyad par 'phags //^{2, (178)}

zhes³ shes rab kyi⁴ pha rol tu phyin pa'i theg pa bas⁵ gsang sngags kyi theg (N. 327a) pa khyad par⁶ du 'phags so zhes bya ba ni gzhung lugs so // 'di ltar don dam pa'i byang chub kyi sems dngos phyin ci ma log pa de ni gsang sngags kyi⁷ sgo'i spyad pa⁸ spyod pa'i⁸ byang chub sems dngos bskyed par bya'o // 'on kyang 'dir ni de lta bu'i gzhung gi don⁹ ni bdag gis¹⁰ ma brjod do //

'dir ni bskyed pa'i rim pa la gnas pa'i byang chub sems dpa'i tshogs gnyis bsags pa'i thabs cung zhid rtsa bar yang bkod cing 'dir yang rtsa ba la brten pa tsam zhid bri bar¹¹ bya'o // de lta bu'i gsang sngags kyi lugs kyis thun mong¹² ma yin pa'i tshogs gnyis myur du rdzogs par bya'o snyam du bsams nas /

sngags mthu nyid las byung ba yi //¹³ [BPP 241]

zhes bya ba la sogs pa smras te / sngags mthu zhes pa ni spyir gzungs kyi cho ga thams cad kyang bya ba'i rgyud yin pas gzungs la sogs pa'i sngags rgyud thams cad nas 'byung ba'i sngags kyi bzlas brjod kyi nus pas dngos grub 'byung ste / de gang zhe na /

zhi dang rgyas la sogs pa yi //¹⁴ [BPP 242]

zhes pa dbang dang mngon spyod kyi cho ga rnam pa brgyad do //

(D. 287a) bum pa bzang grub la sogs pa //¹⁵

grub chen brgyad [BPP 243-244]

ces pa ni 'di ltar bum pa bzang po dang / rkang mgyogs dang / (G. 454a) ral gri dang / mngag gzhug pa dang / (C. 293b) sa 'og dang //¹⁶ mi snang ba¹⁷ dang / dpag bsam gyi shing dang¹⁸ / rgyal srid rnamso¹⁹ // sogs pa²⁰ zhes pa ni mig sman dang / ri lu dang / nam mkha'²¹ la 'phur ba dang / 'bru'i char 'bebs²² pa dang / (P. 332a) yungs kar bsgrubs²³ nas gzugs sna tshogs byed pa dang / pra phab nas mngon par shes pa bskyed pa dang / rdzu 'phrul la sogs²⁴ pa brgyud²⁵ nas rjes su²⁶ gzung ba dang tshar gcad²⁷ pa'i las kyi dngos grub

(178) *Nayatrāpradīpa*. Tib. P. No. 4530, Nu 17b5-6.

1 G *kyis*. 2 NP /. 3 GNP om. 4 GNP om. 5 G om. 6 GNP om. 7 P *gyi*.
8 G repeats. 9 NP *ron*. 10 G *gi*. 11 GNP *bris par*. 12 NP *mongs*. 13 GNP /. 14 GNP om.
15 GNP om. 16 GNP om. 17 N *snod pa*. 18 P om. 19 G *rnamso*. 20 GNP om.
21 GN *namkha'*. 22 GP *'babs*. 23 GNP *bsgrub*. 24 N *soḍ*. 25 GNP *rgyud*. 26 GN *rjesu*.
27 C *bcad*.

ji snyed¹ cig 'byung ba de dag ni bzlas² brjod dang ting nge³ 'dzin gyis zhi ba dang rgyas pa dang / (N. 327b) dbang dang mngon spyod dan / 'jig rten gyi dngos grub chen po brgyad la sogs pa dag bsgrubs nas 'bad pa med par myur du bsod nams⁴ dang ye shes kyī tshogs gnyis rdzogs par byed do //

de lta bu'i dngos grub 'bad pa med par myur du 'byung ba'i gsang sngags kyī theg pa zhes pa de gang yin zhe na / bya ba spyod sogs rgyud ces bya ba dang / bya ba'i rgyud⁵ dang / spyod pa'i rgyud dang /⁶ rtog pa'i rgyud dang / gnyi ga'i rgyud dang / rnal 'byor gyi rgyud dang / rnal 'byor chen po'i rgyud dang / rnal 'byor bla na med pa'i rgyud rnams so // de yang rgyud de dag ni re re zhing yang dpag tu med de /⁷ de yang *dpal Ye shes rdo rje kun las btus pa'i rgyud chen po las*

bcom ldan 'das kyis 'di skad du rgyud so so'i grangs gsungs te / bya ba'i rgyud stong phrag bzhi'o // spyod pa'i rgyud stong phrag brgyad do⁸ // (G. 454b) rtog pa'i⁹ rgyud stong phrag bzhi'o // gnyis ka'i¹⁰ rgyud stong phrag drug go //¹¹ rnal 'byor chen po'i rgyud stong phrag bcu gnyis te / de¹² dag rgyas par byas na grangs med do⁽¹⁷⁹⁾ zhes gsungs so //

de la bya ba'i rgyud ni *gZungs thams cad dang / Rig pa mchog dang / Gar mkhan mchog dang / Rab tu grub par byed pa dang / dPung¹³ bzangs dang /¹⁴ 'Jam dpal gyi rtsa ba'i rgyud chen po dang / 'Jam dpal gsang ba'i rgyud dang / rDo rje gtsug tor¹⁵ dang / A mo gha pā sha dang / rNam par rgyal ba'i rgyud chen po* (P. 332b) la sogs pa stong phrag bzhi bzhugs so //

spyod pa'i rgyud ni *rNam par snang* (D. 287b) *mdzad mngon par byang chub pa'i rgyud dang / Lag na rdo rje dbang bkur¹⁶ ba'i rgyud* la sogs (C. 294a) pa rgyud sde stong phrag brgyad bzhugs so //

rtog¹⁷ pa'i rgyud ni *sGrol ma 'byung ba'i rgyud dang / Dam tshig gsum bkod pa'i rgyal po dang / rTog pa kun las btus pa* la (N. 328a) sogs pa rgyud sde stong phrag bzhi bzhugs so //

gnyis ka'i rgyud ni sgyu 'phrul dra ba dang / padma gar gyi¹⁸ dbang phyug la sogs pa rgyud sde stong phrag drug bzhugs so //

(179) *Vajrajñānasamuccayantra*. Tib. D. No.447, Cha 11b5-6.

1 P snyen. 2 GNP zlas. 3 G tinge. 4 G om. 5 G rgyu. 6 P om. 7 GNP do //.
8 G brgyado. 9 P pa'a. 10 P ga'i. 11 CGNP /. 12 NP da. 13 P dpar. 14 GNP om.
15 GNP gtor. 16 GNP bskur. 17 P rtogs. 18 C kyī.

de la rnal 'byor gyi rgyud ni *Tat*¹ *twā*² *saṃ*³ *gra ha dang*⁴ *dPal mchog dang po dang / 'Jig rten gsum las rnam par rgyal ba dang / 'yang Yo ga rnam par rgyal ba dang /*⁵ *rDo rje rtse mo la sogs pa grangs med do //*

de la rnal 'byor chen po'i rgyud ni *dpal gSang ba 'dus par bshad rgyud dang bcas pa dang / Zla gsang thig le dang / gShin rje'i gshed*⁶ *nag (G. 455a) po dang / dPal mchog dang po dang / lHa thams cad 'dus pa dang / Thams cad gsang ba dang / 'Dul ba don yod pa dang / Ye*⁷ *shes rdo rje kun las btus pa dang / rNam par snang mdzad sgyu 'phrul dang / Nam mkha'*⁸ *dang mnyam pa chung ngu*⁹ *dang / gNyi su med pa rnam par rgyal ba'i rgyud dang / rDo rje gtsug tor rgyud la sogs pa rgyud sde stong phrag bcu gnyis te rgyas par bya na grangs med do //*

rnal 'byor bla na med pa'i rgyud ni *dpal Nam mkha'*¹⁰ *dang mnyam pa 'bum pa chen po 'khor lo sdom pa dang / rDo rje mkha' 'gro*¹¹ *dang / rDo rje gdan bzhi pa dang / Ma hā mā*¹² *yā dang / Sangs rgyas mnyam sbyor dang / Sangs rgyas thod pa dang / dGyes pa'i rdo rje 'bum phrag lnga pa la sogs pa rgyud sde stong phrag bcu gnyis*¹³ *bzhugs te rgyas par byas na grangs med do //*

de ltar rgyud sde (P. 333a) re re zhing yang grangs med pas na gsang sngags kyi theg pa ni shin tu rgyas shing mthar thug pa med pa yin no //

'di ltar *Yi dags kha nas me 'bar ba'i gzungs dang / rMa bya chen mo'i gzungs la sogs pa gzungs ma lus pa thams cad kyang bya ba'i rgyud (N. 328b) yin no zhes bla ma dag gsung ngo*¹⁴ //

gsungs pa'i zhes pa ni ji ltar gsungs she na / 'di skad du /

gal te gsang sngags spyod 'dod pas //

de tshe slob dpon dbang (C. 294b) (D. 288a) bskur phyir //¹⁵ [BPP 248-249]

zhes gsungs te / 'di ltar gal te bya ba'i rgyud la sogs pa'i (G. 455b) gsang sngags kyi theg pa la spyod par 'dod pa yin na ni slob dpon gyi dbang bskur ba zhes bya ba bum pa'i dbang thob par ma byas par smon pa dang 'jug pa'i sems bskyed pa tsam la ltos¹⁶ par mi bya ste / gsang sngags rang nyid len¹⁷ par 'gyur ba'i phyir ro // de yang rgyud las /¹⁸

slob dpon mnyes par ma byas shing //

dbang rnams thob¹⁹ par ma byas par //

1 P *ta ta*. 2 CG *twā*, D *tā*. 3 GNP *sang*. 4 CGN *dang /*. 5 G *om*. 6 CN *gshad*. 7 P *ya*. 8 GN *namkha'*. 9 G *chungu*. 10 GN *namkha'*. 11 G *mkha'gro*. 12 GNP *ma*. 13 CD *bzhi*. 14 GNP *gsungs so*. 15 GNP *om*. 16 GNP *bltos*. 17 GP *lon*, N *lan*. 18 GNP *om*. 19 N *thos*.

nyan pa la sogs rtsom pa yang //
 'bras bu med pa nyid du 'gyur //^{1, (180)}
 zhes gsungs pa dang / yang rgyud las /
 dbang bskur rjes gnang med par yang //
 gsang sngags rang nyid len par byed //^{2, (181)}
 ces gsungs te / dkyil 'khor du 'jug pa dang / dbang bskur pa dang / bla ma de nyid kyi rjes su
 gnang ba ma byas par theg pa chen po³ mdo sde'i don pha rol tu phyin pa'i lam gyi cho ga
 la brten nas gzungs⁴ kyi cho ga byed pa dang / gzhan yang rje btsun sgrol ma la sogs pa'i
 sgrub thabs dag ma nyan nas bsgom⁵ pa dang / bzlas pa dang / sbyin sreg⁶ dang /⁷ gtor ma
 dang / dkyil 'khor la sogs pa byed pa ni gsang sngags rang nyid len⁸ pa yin te / dkyil 'khor
 du 'jug pa dang / dbang bskur ba byas te / slob dpon gyis 'di skad du khyod (P. 333b) kyi lha
 ni 'di yin no // bzlas pa 'di bya dgos so zhes rjes su gnang ba ma thob pa'i phyir ro // de bas
 na rgyud las /

gsang sngags rang nyid len pa ni //
 'gro ba dmyal ba (G. 456a) 'ba' zhig ste //⁹
 sngags kyang 'grub par mi 'gyur zhing //
 lus nyon mongs pa kho nar zad //^{10, (182)}

ces gsungs so // de dag ni gsungs (N. 329a) pa'i tshig gi don yin te /¹¹ rgyud thams cad
 dang / sngon gyi slob dpon thams cad dang / da lta¹² nyid kyi bla ma ma lus pas 'di skad du
 gsungs zhes pa'o //

yang na 'jig rten pa dang 'jig rten las 'das pa'i lha'i pra phab pa dang / rmi lam dag tu
 gang zag 'di ni skye ba snga ma la gsang sngags spyod spyod pa dag yin no zher zer na / des
 bla ma yongs su¹³ mnyes par byas la byin gyis brlab pa byas te / 'di ltar sgrubs¹⁴ shig ces
 gnang ba byin la / (C. 295a) sgrub pa'i cho ga'i (D. 288b) thabs sbyin par bya'o // cho ga de
 yang 'di yin te / 'Phags pa Dam tshig gsum bkod pa'i cho ga dang / bCom ldan 'das nor bu
 rgyas pa'i gzhal med khang gi cho ga dang / bCom ldan 'das sman gyi bla bai dūrya'i¹⁵ 'od
 kyi rgyal po'i cho gas sdig pa sbyong ba dang / tshogs bsags¹⁶ pa byas la lta bzang po

(180) *Vajrakulatantrakarmasaptamaṅḍalakramavibhaktisādhana*. Tib. D. No. 3755, Tshu 91a2-3.

(181) *Sakalatantrasambhavasāñcodanīśrīguhyasiddhi*. Tib. D. No. 2217, Wi 4b2.

(182) *Sthiracakrabhāvanā*. Tib. D. No. 3307, Mu 3b6.

1 PGN om. 2 GNP om. 3 GNP po. 4 P gsungs. 5 GNP sgom. 6 GNP bsreg. 7 GNP om.
 8 CD lon. 9 GP/. 10 GNP om. 11 GNP om. 12 GNP ltar. 13 N yongsu. 14 GNP bsgrub.
 15 G dū'i. 16 G bsag.

byung ba na gang zag des gsang sngags kyi theg pa la 'jug par gnang gi 'di ltar skye ba snga ma la gsang sngags spyad pa ma yin pa dang /¹ yang na gsum la skyabs su² 'gro ba dang / smon pa byang chub kyi sems bskyed pa dang / 'jug pa byang chub kyi sems bskyed pa byas pa tsam la ni gsang sngags bstan pa dang / des bsgrub pa dang blta ba dang mnyan (G. 456b) pa³ bya bar ma gnang ste / 'jug pa'i lam so so ba yin pa dang / theg pa dag ni rnam par thar pa bsre bar mi bya ba yin te / bcom ldan 'das kyi⁴ gang zag gi⁵ dbang po dang khams dang bag (P. 334a) la nyal mkhyen⁶ pas⁷ theg pa'i lam so⁸ sor gsungs pa yin no // de bas na rtsa ba nas smras pa de lta bas na /⁹

gal te gsang sngags spyod 'dod pas //

de tshe slob dpon dbang bskur¹⁰ phyir //¹¹ [BPP 248-249]

zhes smras te / pha rol tu phyin pa'i lam du¹² 'jug cing spyod 'dod¹³ na ni sngar ji ltar brjod pa bzhin du bslab pa rnam pa (N. 329b) gsum la bslab par bya ba yin la / gal te gsang sngags spyod cing rje¹⁴ btsun sgrol ma la sogs pa sgrub par 'dod na¹⁵ ni slob dpon gyi dbang zhes pa bum pa'i dbang bskur ba¹⁶ zhu bar bya'o zhes pa ni shlo ka'i don yin no //

'o na dbang bskur ba'i bla ma de la bla chas dang yo byad med par bya ba 'am zhe na¹⁷ ma yin te /¹⁸ bsnyen bkur rin chen la sogs zhes so // 'o na yo byad kyi¹⁹ phongs shing dbul po dag gis ji ltar bya zhe na / bka' sgrub la sogs²⁰ zhes pa'o // 'dir skye bo 'byor pa can dag gis ni rgyal srid rin po che bdun la sogs pa tha na bdag nyid kyi lus kyang dbul bar bya ste / ji ltar slob dpon Sangs rgyas ye shes zhabs la rgyal po De ba pā las rgyal srid thams cad phul ba'i rjes su (C. 295b) btsun mo dang rang nyid kyang (G. 457a) phul nas phyis rgyal po dang btsun mo gnyis gser de gnyis dang mnyam pas bslus (D. 289a) pa lta bu'o // dbul po dag gis bka' bsgrub pa dang / lus kyi bsnyen bkur dang / dkyil 'khor dang / me tog yang dang yang du dbul ba la sogs bya'o // de lta bu'i tshul gyis bla ma dam pa mnyes par bya'o //

de ltar bla ma mnyes shing dges par gyur pa dang / dbang bskur ba thob par byas nas lus la sogs pa'i sdig pa thams cad las grol nas / des sdig pa dag pa'i rgyus 'jig rten dang 'jig rten las 'das pa'i dngos grub thams cad sgrub pa'i skal ba²¹ can du 'gyur ro²² //

1 GNP om. 2 N skyabsu. 3 GNP par. 4 GNP kyi. 5 NP gis. 6 P mkhyin.
7 GNP pa'i. 8 G om. 9 P //. 10 GNP skur. 11 GNP om. 12 NP tu.
13 NP 'dong. 14 D chos. 15 G pa na. 16 GNP om. 17 P na /. 18 GNP om.
19 GNP kyi. 20 NP sogs pa. 21 NP pa. 22 P 'gyuro.

(P. 334b) de ltar gsang sngags kyi theg pa la gnas nas 'bad pa med par myur du mngon par rdzogs par sangs rgyas par byas te / gzhan gyi don mthar phyin par bya ba'i thabs bstan nas / da ni gsang sngags kyi theg pa la log par rtog pa dag dgag pa'i phyir /¹

Dang po sangs rgyas rgyud chen las //² [BPP 257]

zhes pa la sogs pa smras te / (N. 330a) 'dir gsang sngags la log par rtog pa ni gnyis te³ sgro 'dogs par byed pa dang⁴ skur pa 'debs par byed pa'o //⁵ snga ma ni tshar gcad⁶ par bya'o // phyi ma ni rjes su⁷ gzung bar bya'o //

'di ltar 'di na kha cig gsang sngags kyi rgyud chen po mtha' dag gi⁸ dgongs pa yang mi shes /⁹ bla ma dam pas kyang (G. 457b) ma zin cing /¹⁰ sdig pa'i¹¹ bshes gnyen la¹² brten¹³ pas gsang sngags kyi tshul ji lta bar ma shes pa¹⁴ dgongs pa can gyi bka' la brten nas 'di skad du bdag cag ni gsang sngags pa'o // bdag cag ni spyod pa thams cad bag yangs su byed cing phyag rgya chen po'i dngos grub kyang myur du thob par 'gyur ro¹⁵ zhes sgrogs¹⁶ shing gnas pa de dag ni ngan 'gror 'gro bar 'gyur te / de bzhin gshegs pa'i bka' la skur ba btab pa¹⁷ dang / tshangs par spyod pa dag spags pas¹⁸ sangs rgyas kyi bstan pa nub par byas pa dang / mngon spyod drag po byas pa dang / bud med dag bsten pas pham pa byung ba'i phyir ro // dpal Ye shes grags pa'i zhal nas 'di skad du

bdag cag rnal 'byor pa la bcom ldan 'das (C. 296a) kyis¹⁹ gnang ba yin no zhes zer zhing sgra gsang cher sgrogs pa dang / gzhan yang spyod pa thams cad kyang bag yangs su²⁰ byed pa de (D. 289b) dag ni ngan 'gror 'gro bar 'gyur ro zhes gsungs so // bdag gi bla ma dge slong bsod snyoms pa Ya ba dvi²¹ pa'i zhal nas kyang / gal te dbang bskur²² ba de (P. 335a) gnyis 'dzin par byed na /²³ slob dpon dang slob ma dang bcas pa ngan 'gro bar 'gyur ro zhes gsungs so // bcom ldan 'das kyis²⁴ *dGongs pa lung bstan pa'i rgyud chen po las /*

rnal 'byor man ngag med pa dag //

lcags kyu med pa bzhin du spyod //

bdag ni rnal 'byor pa zhes zer //

chos ni g-yo yis byed par 'gyur //

1 GP // . 2 C /, GNP om. 3 C te /. 4 CGNP dang /. 5 GNP pa dang /. 6 GNP bcad.
7 N rjesu. 8 P gis. 9 D om. 10 GN om. 11 G dge ba'i for sdig pa'i. 12 G om.
13 C bsnyen. 14 GNP par. 15 N 'gyuro. 16 G sgrog. 17 P ba. 18 G pas ya. 19 GNP kyi.
20 N yangsu. 21 G da'i, N dī, P 'di. 22 G skur. 23 GNP om. 24 NP kyi.

(G. 458a) sngags (N. 330b) dang phyag rgya'i sbyor ba yis //¹
 'tsho ba dag kyang sgrub par byed //²
 nyes pa cung zad tsam la yang //
 mngon spyod drag po byed par 'gyur //
 'di ltar sgrub pa'i thabs tsam³ zhig //
 shes nas rgyud chen 'chad par byed //⁴
 gang du rnyed pa thob 'gyur bar //
 dam pa'i chos ni ston par byed //^{5, (183)}

ces bya ba la sogs pa mang du gsungs so⁶ // de bzhin du dpal Padma rdo rjes kyang de lta
 bu'i nyes dmigs mang du gsungs nas /

de lta bu dang de dag nyid //
 kun kyang sdig pa'i las can te //
 dam pa min pa'i⁷ lam zhugs nas //
 dmyal ba dag tu 'gro bar 'gyur //^{8, (184)}

ces gsungs so⁹ // khungs mang du yod mod kyi yi ge mangs par 'gyur ro // de lta bu dag ni
 snying rje'i sems kyis¹⁰ tshar gcad par bya'o //

yang 'di na la la dag 'di skad du

gsang sngags kyi tshul chen po ji lta bar mi shes par¹¹ gsang sngags kyi theg pas¹²
 ci zhig bya / pha rol tu phyin pa dang / nyan thos dang rang sangs rgyas kyi theg pa
 gtsang ba de nyid la 'jug par bya'o // 'di ltar bud med bsten pas ni mi tshangs par spyod
 pa'i pham pa 'ong la / mngon spyod drag po byas pas ni srog bcad pa'i pham pa 'ong
 bas de la 'jug par mi bya'o

zhes rgyud kyi dgongs pa mi shes par skur pa 'debs pa de dag ni zab cing rgya che ba dbang
 po rnon po'i spyod yul sangs rgyas kyi bstan pa'i snying (C. 296b) (G. 458b) por gyur pa
 skal ba dang / (P. 335b) bag chags dang / las 'phror ldan pa 'ga'i spyod yul du gyur pa yin
 pas de lta bu la skur pa 'debs pa de ni nges par sems can dmyal bar 'gro bar 'gyur ba¹³ 'di la

(183) *Sandhiviyākaraṇatantra*. Tib. D. No. 444, Cha 162a2-4.

(184) *Sakalatantrasambhavasāṅcodanīśrīguhyasiddhi*. Tib. D. No. 2217, Wi 4b3-4.

1 GP/. 2 G/. 3 G *tsam gyis*. 4 P/. 5 GNP om. 6 G *gsungso*.
 7 G *pa'i las can te // dam pa min pa'i*. 8 GNP om. 9 N *gsungso*. 10 GNP *kyi*.
 11 GNP *pa*. 12 GNP *pa*. 13 P *pa*.

the tshom mi bya ste / de bzhin gshegs pa'i bka' (D. 290a) la skur pa¹ btab pa dang /² chos zab mo spangs pa'i phyir ro // chos spangs pa'i las kyi rnam par smin pa ni 'Phags pa rNam par 'thag pa'i mdo (N. 331a) las 'di skad du

chos la la ni bzang zhes pa dang / chos la la ngan no zhes zer na chos spangs pa'o⁽¹⁸⁵⁾

zhes pa la sogs pa chos du ma mthong ba'i phyir ro // bla ma dge slong bsod snyoms pa'i zhal nas kyang /

de'i phyir gsang sngags theg pa la //³

bdud kyi smras zhes brnyas mi bya //

theg pa kun la spangs⁴ pa yang //⁵

'di gnas phyag rgya chen po thob //^{6, (186)}

ces gsungs so // de lta bu'i gang zag ni snying rje'i sems kyi⁷ rjes su⁸ gzung bar bya'o //

skur pa 'debs pa de yang gnyis te / chos la skur pa 'debs pa dang / gang zag la skur pa 'debs pa'o //⁹

de la chos la skur pa 'debs par mi bya ste / 'Phags pa 'Od srungs kyi zhus pa las 'di skad du /

chos zab mo gang dag blos mi rtogs¹⁰ pa de la sangs rgyas kyi byang chub ni mtha' yas shing sems can mos pa tha dad pa rnams la de bzhin gshegs pa rnams kyi chos¹¹ bstan pa la 'jug ste / de bzhin gshegs pa nyid kyi mkhyen kyi¹² bdag (G. 459a) gis ni mi shes te / de bzhin gshegs pas mngon sum mo⁽¹⁸⁷⁾

zhes bya ba la sogs pa¹³ gsungs te / mdo nyid du blta bar bya'o // gzhan yang mdo dang rgyud thams cad du don 'di bdag gis mthong ngo //

gang zag la yang skur pa gdab par mi bya ste / 'Phags pa lHag pa'i bsam pa bskur¹⁴ ba dang / 'Phags pa Chos thams cad 'byung ba med par bstan pa dag las

nga 'ang¹⁵ nga dang 'dra ba ma (P. 336a) gtogs par gang zag gis gang zag gi¹⁶ tshod gzung bar mi¹⁷ bya ste nyams par 'gyur ro⁽¹⁸⁸⁾

(185) *Sarvavaidalyasaṃgrahasūtra*. Tib. P. No.893, Tsha 189a6.

(186) Cf. *Ratnakaraṇḍoghāṅāmamadhyamakopadeśa*. Tib. D. No.3930, Ki 116a6-7.

(187) *Kāśyapaparivartasūtra* [6]. Vorobyova-Desyatovskaya ed., p.7.

(188) Cf. *Śikṣāsamuccaya*. Bendall ed., p. 100.1-2.

1 P ba. 2 P om. 3 P /. 4 GNP yangs. 5 P /. 6 GNP om. 7 GNP kyi.
8 N rjesu. 9 G pa dang /. 10 C rtog. 11 GNP om. 12 G gyis, NP kyi.
13 GP pas. 14 GNP skur. 15 G nga las 'am. 16 N gis. 17 P om.

zhes gsungs so // de'i nyes pa ni mdo las gzhan yang mang du mthong ngo //

*Dang po'i sangs rgyas rgyud chen las //*¹ [BPP 257]

zhes bya ba la sogs pa'i tshig rkang pa bcu gnyis kyid don bdag gis (C. 297a) bdag gi bla mar (N. 331b) gyur pa dge slong bsod snyoms pa dang² gSer gling pa'i gdams ngag la brten pa yin te / bla ma'i zhal nas dBang bskur ba nges par³ bstan pa zhes⁴ bya ba las 'di skad du /

de la dbang (D. 290b) ni rnam pa gnyis te / khyim pa'i phyogs la brten pa dang / tshangs par spyod pa'i phyogs la brten pa'o // khyim pa'i phyogs la brten pa gang zhe na / ji snyed rgyud las gsungs pa thams cad do // tshangs par spyod pa'i phyogs la brten⁵ pa gang zhe na / de dag nyid las gsang ba dang⁶ shes rab ye shes spangs pa'o // ci'i⁷ phyir de gnyis spangs she na / 'di (G. 459b) ltar sangs rgyas kyid chos la brten nas dge ba ji snyed cig 'byung ba de dag thams cad ni bstan pa gnas pa las byung⁸ ba yin la / bstan pa gnas pa⁹ yang tshangs par spyod pa kho na¹⁰ la ltos shing / dbang bskur ba gnyis ni tshangs par spyod pa'i mi mthun pa'i gnas su¹¹ mthong ba'i phyir ro // de bas na dbang bskur ba gnyis ni tshangs par spyod pa zad¹² par byed¹³ pa yin la / tshangs par spyod pa zad na sangs rgyas kyid bstan pa nub par 'gyur zhing / de nub pas bsod nams mngon par 'du bya ba rnams rgyun chad par 'gyur la / gzhi de las dge ba ma yin pa dpag tu med pa 'byung ba'i phyir de gnyis tshangs par spyod pa rnams la spangs so¹⁴ zhes gsungs so¹⁵ // de ltar yin na tshangs par spyod pa dag gis¹⁶ gsang sngags la 'jug tu mi rung ngo¹⁷ zhe na /

rgyud kun nyan dang 'chad pa dang //

sbyin (P. 336b) sreg¹⁸ mchod sbyin sogs byed pa //

slob dpon dbang bskur rnyed gyur pa¹⁹ //²⁰ [BPP269-271]

zhes bya ba 'di smos so // gal te tshangs par spyod pa'i sngags pas rgyud la sogs pa nyan pa dang / gzhan la 'chad pa dang / blta ba dang / sbyin sreg²¹ dang / gtor ma dang / bzlas brjod dag byed par 'dod na ni slob dpon dbang bskur zhes pa bum pa'i dbang gis rung (N. 332a) ba²² rgyud thams cad dang / dkyil 'khor gyi cho ga thams cad

1 GNP om. 2 GNP om. 3 G par par. 4 G om. 5 N rten. 6 C dang /, GNP dang //.

7 CD de ci'i. 8 G 'byung. 9 G om. 10 CD om. 11 N gnasu.

12 G pa'i mi mthun pa'i gnas su bzad for pa zad. 13 P byid. 14 N spangso. 15 N gsungso.

16 G rungo. 17 GNP gi. 18 GN P bsreg. 19 P ba. 20 GNP om. 21 GNP bsreg. 22 GNP bar.

nas gsal bar gsungs so // (G. 460a) 'di'i don bla ma dge slong bsod snyoms pa Ya ba¹ dwī²
pas gsungs te / 'di skad du

de lta yin na tshangs par spyod pa rnams ni theg pa chen po'i yang theg³ pa chen
po'i skal ba⁴ can ma yin par 'gyur ro zhe na / de ni 'dir nges par 'khrul par spyad⁵ par
bya ste / gang gis bum pa dang / slob dpon dang rjes su⁶ gnang ba thob pa nyid kyi
rgyud la sogs pa bsgrub pa dang / bshad (D. 291a) pa dang mnyan pa dang blta ba la
dbang bskur⁷ ba'i phyir skal ba can yin no // de lta na khyim pa dag la yang gsang ba
dang / shes rab kyi dbang dgos pa med par 'gyur ro zhe na / de mi dgos pa yang yin la /
de las bzlog pa yang yin no⁸

zhes bya ba la sogs pa rgyas par gsungs so //

de nyid rig la nyes pa med //⁹ [BPP 272]

ces pa 'di'i don ni bdag la bla ma dag gis¹⁰ nye bar bstan pa gnang ba mang du yod de / bla
ma dam pa kha cig gi zhal nas

snying rjes sems can gyi don rig cing sems snying rje'i dbang du song ba'i byang
chub sems dpas ci byas kyang de'i rgyud la nyes pa med cing de'i rjes la yang bsod
nams mang du 'phel bar 'gyur ro

zhes gsungs so // de ni bzod pa chung du thob pa yin no //

dam pa la la'i zhal nas

chos thams cad sgyu mar shes shing de'i¹¹ de kho na nyid rig pa'i rnal 'byor pa las
nyes par 'gyur ba gang yang med de / (P. 337a) 'di skad du /¹²

(G. 460b) chu yi zla ba lta bur ni //

rnal 'byor pa ni gang gis¹³ shes //

de ni sdig dang bsod nams sogs //

nam yang dgos par mi 'gyur ro //

nang dang phyi rol gnas 'di kun //

sems yin sgyu ma lta bu ste //

de yang rtag min chad pa min //

gnyi ga¹⁴ dag tu 'ang mi rtog (N. 332b) cing //

dngos 'dzin dug gis ma gos¹⁵ pas //

1 GNP pa. 2 GN dī, P 'di. 3 G thegs. 4 GNP pa. 5 P sbyar. 6 N rjesu. 7 GNP sgyur.
8 N no //. 9 PGN om. 10 GNP gi. 11 G de'i de'i. 12 GNP om. 13 GNP gi.
14 GNP gnyis ka. 15 G gom.

de lta bu ni sus mthong ba //

sgyu mar rig la nyes pa med //¹

ces gsungs te / chos kyi mchog chung ngu thob pa la nyes pa med pa'o // bla ma dge slong
bsod snyoms pa'i nyes par mi 'gyur ba ni bla ma'i zhal snga nas mdzad pa'i gzhung de nyid
du blta bar bya'o // 'di ni las dang po pa da lta nyid² yang nyes pa med pa'o //

dam pa gzhan ni 'di skad du

'Phags pa 'Od srungs kyis zhus pa'i mdo dang³ / Bud med 'gyur ba lung bstan pa'i
mdo dang /⁴ dPal mchog dang po'i rgyud dang / 'Du⁵ ba don yod pa'i rgyud dang /
rgyud gzhan de ma (C. 298a) yin pa dag dang / 'phags⁶ pa Klu sgrub dang / slob dpon
Ārya⁷ de ba la sogs pa'i gzhung de dag gi tshul gyis⁸ nyes par mi 'gyur zhing / don de
ni de kho na nyid rig pa la nyes pa med de rtse mo chung ngu thob pa na'o //⁹

(D. 291b) zhes gsung¹⁰ ngo //

dam pa gzhan ni 'di skad du

chos thams cad kyi skye ba med pa don dam pa byang chub kyi sems bskyed
cing /¹¹ de rgyud la skyes pa la yang nyes pa med de / chos rnam kyi de kho na nyid
rig pa la nyes pa med do

zhes (G. 461a) gsung¹² ste¹³ / 'di ni bden pa mthong ba dag la nyes par¹⁴ mi 'gyur
ro //

de bas na lam la gnas pa'i rnal 'byor pa des nyes pa med pa dang / nyes par 'gyur ba dag
shes par bya'o //

yid bzhin nor bu lta¹⁵ bu'i sprul pa'i sku //

'das shing 'phags pa Klu sgrub la sogs pa'i //

mkhas pa chen po rnam kyang med pa na //

thub pa'i dam chos (P. 337b) nub tu nye ba yi //

ding sang dus na smyon pa lta bu yi //

log par rtogs pa'i gang zag mang po byung //

bla ma brgyud pa'i gdams ngag bral ba yi //

mdo dang bstan bcos glegs bam mthong ba yis //

1 GNP om. 2 G nyid na. 3 GNP las. 4 C //. 5 GNP 'du. 6 G 'phag. 7 G arya.

8 GNP gyi. 9 CD om. 10 G gsungs. 11 GNP //. 12 GNP gsungs. 13 GN te. 14 CD pa par.

15 G om bu lta.

gsung rab rgya mtsho zab mo'i don la spyod //
 (N. 333a) de dag long ba lta bur gyur pa ste //
 theg chen lam mchog de yis shes pa min //
 de bas log rtogs rjes¹ su² 'brang mi bya //
 legs pa'i 'byung gnas theg pa chen po'i lam //
 bla ma³ mig dang 'dra ba med pa yis //
 ma mthong mi mthong mthong bar mi 'gyur ro //
 theg pa chen po rgya mtsho ltar zab cing //
 nam mkha⁴ lta bur shin tu rgya che ba //
 bla ma dang bral rang dga⁵ smra ba yis⁶ //
 mdo dang bstan bcos dag gi⁷ glegs bam de⁸ //
 mthong bas tshim ste bla ma sten mi byed //
 de dag gis ni theg pa chen po yi //
 gtam⁹ gyi rim pa tsam yang mi shes na //
 zab dang rgya che'i don lta ga la yod //
 theg chen bag chags bzang po yod pa yi¹⁰ //
 bla ma dam pas zin (G. 461b) pa'i skye bo ni //
 mkhas pa su zhig de yi rjes su 'brang //
 ding sang bstan pa nub kar gyur pa yi //
 'jigs pa chen po'i dus 'di byung bas na //
 rtogs ldan mkhas pa dag gis bag yod gyis //
 bla ma bzang po (C. 298b) brgyud pa'i gang zag ni //
 yul dang sa phyogs gang na yod pa dri //
 rnyed nas zla ba 'am¹¹ lor yang bsten byas la //
 bsnyen bkur tshul bzhin byas la mnyes par bya //¹²
 skyes bu de yi lus dang ngag dag gi //
 spyod tshul shin tu ngan par spyod na yang //
 de la (D. 292a) mi blta dam chos blang bar bya //
 dper na bung bas me tog 'dzin pa'i tshe //
 sbrang rtsi khyer nas me tog lus pa dang //

1 D rngas. 2 N rjesu. 3 GNP ma'i. 4 GN namkha'. 5 GNP dgar. 6 GNP yi. 7 GNP gis.
 8 N ba me de. 9 P gtan. 10 P yis. 11 G bar 'am. 12 G om.

mkhas pa des kyang de dang 'dra bar¹ spyad //
 spyod tshul mi blta de yi gdams ngag mnyan //
 nyer bstan de la (P. 338a) sems ni goms pas na //
 tshe 'di nyid la byang chub thob bya'i phyir //
 'Khor lo sdom pa la sogs gsang sngags kyi² //
 gdams ngag bla ma brgyud³ pa can la zhu //
 dbang bskur gnyis pa spangs pa yi //
 (N. 333b) gsang sngags gzhung lugs mi shes na //
 rnam rtog du mas bcings gyur pas //
 myur du sangs rgyas 'grub mi 'gyur //

yang smras pa /⁴

thub pa'i bstan pa mdangs nyams gyur pa yi //
 ston pa'i dam chos rnam par 'jig pa ni⁵ //
 ding sang⁶ dus na bstan pa 'jig pa na⁷ //
 sangs rgyas nyid kyi slob ma ma gtogs par //
 pha rol pa dang tha mal skye bo yis //
 thub pa'i bstan pa sus kyang 'jig mi nus //
 khyad par du (G. 462a) ni rab tu byung bas 'jig //
 kha cig gsang sngags rgyud kyi rjes 'brangs nas //
 log par spyod cing gzhan la 'ang log par ston //
 kha cig shes rab pha rol phyin pa yi //
 ji bzhin yang dag don ni mi shes par //
 rgyu dang 'bras bu la sogs kun rdzob pa⁸ //
 'gog cing rang bzhin rnam par dag ces smra⁹ //
 kha cig so sor thar pa 'dul pa yi¹⁰ //
 bslob¹¹ pa ji snyed gsungs pa btang byas nas //
 zhing dang khe sogs khyim pa dang 'dre zhing //
 gtsug lag khang na 'ang sna tshogs gtam¹² gyis spyod //

'Phags pa Lang kar gshegs pa las /

nga yi bstan pa sun 'byin pa //
 ngur smrig gi ni gos bgos shing //

1 G ba. 2 P kyis. 3 GNP rgyud. 4 G //. 5 GNP na. 6 G dang. 7 GNP ni.
 8 N po. 9 GNP smras. 10 GNP yis. 11 P slab. 12 P gtan.

'bras bu yod dang med smra ba //
 ma 'ongs pa na 'byung bar 'gyur //^{1, (189)}
 zhes gsungs so // yang de nyid las /²
 rtsod pa'i dus kyi tha ma la //
 'jig rten dam chos mi bsgom mo //^{3, (190)}
 zhes gsungs so⁴ // mkhas pa chen po nor gyi rtsa lag gi zhal nas kyang /
 ston (C. 299a) pa 'jig rten mig ni zum gyur cing //
 dbang gyur skye bo phal cher zad pa na //
 de nyid ma mthong rang dgar (P. 338b) spyod pa yi //
 ngan rtog⁵ rnams kyi⁶ bstan pa 'di dkrugs so //
 rang byung rang 'byung bstan pa gces 'dzin rnams //
 mchog tu (D. 292b) zhir⁷ gshegs 'gro mgon med pa na //
 'doms med yon tan 'joms⁸ (N. 334a) par byed pa yi //
 dri mas dga' mgur ding sang 'di na spyod //
 de ltar (G. 462b) thub pa'i bstan pa nyams dga' 'di //
 lkog mar srog 'byin 'dra dang dri ma rnams //
 stobs dang ldan pa'i dus su rig⁹ nas ni //
 thar pa 'dod pa dag gis¹⁰ bag yod gyis //^{11, (191)}
 zhes gsungs so //
 dam pa'i gdams¹² ngag rgyas par bkod pa 'di //
 sangs rgyas bstan pa ji srid gnas kyi¹³ bar //
 snying rje byang chub sems dang ldan pa de //
 brtson 'grus kyi¹⁴ ni nyin mtshan spyod gyur cig /
*Byang chub lam gyi*¹⁵ *sgron ma'i dka'*¹⁶ 'grel zhes bya ba bhṃ ga la'i rgyal po'i rigs
 rgyud shākya'i dge slong mkhas pa chen po byang chub sems dpa'i spyod pa mdzad pa Dī
 paṃ ka ra shrī dznyā nas mdzad pa rdzogs so // //
 dad pa'i sa gzhi tshul khrims sa bon bsten¹⁷ //
 byams pa'i myu gu ting¹⁸ 'dzin chus brlan pa'i //

(189) *Lañkāvatārasūtra*. Nanjio ed., p.333.5-6.

(190) *Lañkāvatārasūtra*. Nanjio ed., p.363.1.

(191) *Abhidharmakośakārikā* 8.41-43.

1 P /. 2 GNP om. 3 GNP om. 4 G *gsungso*. 5 GNP *rtogs*. 6 GNP *kyi*. 7 G *bzhir*.
 8 N 'joms. 9 GNP *rigs*. 10 GNP *gi*. 11 GNP om. 12 G *gdams*. 13 P *kyis*. 14 P *gyis*.
 15 GNP *gyis*. 16 G *bka'*. 17 G *ba ste*. 18 G *ting nge*.

rtsa ba snying rje chu ba byang chub sems //
 yal ga phar phyin¹ lo ma bsdu ba'i dngos //
 me tog nor bdun 'bras bu rjes dran drug //
 dge bcu'i dris khyab slob ma'i bya tshogs 'du //
 shing mchog de 'dra'i byang chub sems dpa' ni //
 bham ga lar 'khrungs Mar me mdzad dpal zhabs //
 ding sang dus na sangs rgyas gdung 'tshob pa //
 skye² bo³ dbus na nyi ma bzhin du ltams⁴ //
 snyan par rab grags chos lugs⁵ bzang po shes //
 sdom pas rab bsdams mkhas dang nus par ldan //
 rigs can rnams kyi (G. 463a) bla mar 'os pa ste //
 de ni sangs rgyas rnams kyi sras gcig pu //
 bsam dang lhag bsam gser dang zla⁶ tshes 'dra //
 pha rol 'gro ba dag gi⁷ (P. 339a) bsam pa dang //
 spyod lam mthun⁸ zhing chos kyi bshad pa'ang ston //
 nam yang gang zag pha rol mi dad pa //
 dug dang 'dra bar spong byed bsam rjes 'jug //
 (N. 334b) bya ba (C. 299b) ngan spangs spyod lam nyams pa med //⁹
 skad cig skad cig gnyen po'i stobs dang ldan //
 phrin las bzang pos yul phyogs¹⁰ dbus su 'khrungs //
 skye ba bzang po rgyal po'i rigs su¹¹ 'khrungs //
 rigs brgyud¹² bzang po theg chen rigs su¹³ 'khrungs¹⁴ //
 smon lam bzang pos¹⁵ sangs rgyas sras su 'khrungs //
 de (D. 293a) 'dra'i bla ma¹⁶ byang chub sems dpa' ni //
 Mar me mdzad dpal ye shes snying rje can //
 skyes mchog de la 'dun pa'i slob ma ni //
 shākya'i dge slong Tshul khirms rgyal ba des¹⁷ //
 dad cing gus pas bsnyen bkur tshul bzhin du //
 byas pa nyid kyis thugs dam snying po ni //

1 GNP *ya gyal pha rol phyin pa.* 2 D *skya.* 3 G *bo'i.* 4 CD *lham.* 5 G *lugs chos.*
 6 P *bla.* 7 G *gis.* 8 GNP *btsun.* 9 N // 10 GNP *mchog.* 11 N *rigsu.* 12 GNP *rgyud.*
 13 N *rigsu.* 14 G *khrungs.* 15 P *po'i.* 16 G *om.* 17 GNP *de.*

'Khor lo sdom pa rnal 'byor rgyud rgyal po //
 chos kyi phung po brgyad khri bzhi stong las //
 snying po'i snying por gyur pa 'di yin te //
 nyin mtshan kun du yid la 'di bsgom zhes //
 de yis nyer bstan nyams pa med¹ par gnang //
 nags tsho bdag nyid gcig pu ma gtogs pa //
 bod kyi slob ma gzhan la yod re skan //
 bla ma de la dad cing gus pa yis //
 lus ngag yid kyis (G. 463b) rtag tu phyag 'tshal lo² // //³

rgya gar gyi mkhas pa chen po⁴ bla ma byang chub sems dpa' bham ga la pa / dpal Mar
 me mdzad ye shes zhabs dang / lo tsā⁵ ba dge slong Tshul khrims rgyal bas bsgyur cing
 zhus //⁶

⁷snyan par rab grags chos lugs bzang po mkhyen //
 nyi ma lta bur gzhan don 'ba' zhig mdzad //
 de 'dra ba yi rje btsun dam pa des //
 mnga' ris bskor gsum dam pa'i chos la bkod //
 Byang chub 'od dang Tshul khrims rgyal ba yis //
 thugs dgongs bzang pos lam sgron (P.339b) 'grel pa zhes //
 mkhyen dang rtse bas rgya byas 'di mdzad nas //
 kun la ma bstan gsang bar rigs so gsungs⁸ //
 'di bris dge bas bdag gzhan ma lus pa //
 gzhung 'di'i don kun ji bzhin rab rtogs nas //
 kun (N. 335a) mkhyen rgyal po'i go 'phang myur 'thob cing //
 'gro don dpyas yas lhun gyis grub par shog / //^{7,9}

1 P mang. 2 G 'tshalo. 3 GNP //. 4 GNP po /. 5 C tstsha. 6 GNP /, C //.
 7 CD om. 8 GN gsung. 9 G ad. bkra shis dge'o // // sarbha mangga la // su bham //.

3 *Satyadvayāvātāra*

#¹ // rgya gar skad du /² Sa tya³ dwa yā ba tā ra /⁴
bod skad du /⁵ bDen pa gnyis la 'jug pa /⁶
thugs rje chen po la phyag 'tshal lo //

sangs rgyas rnams kyis⁷ chos bstan pa //
bden pa gnyis la yang dag brten //
'jig rten kun rdzob bden pa dang //
de bzhin don (P2. 7a) dam bden pa'o //
kun rdzob rnam pa gnyis su⁸ 'dod // 5
log pa dang ni yang dag go //⁹
dang po gnyis te chu zla dang //
grub mtha' ngan pa'i rtog pa'o //
ma brtags gcig pu nyams dga' ba'i //
skye ba dang ni 'jig pa'i chos // 10
don byed nus dang ldan pa ni //
yang dag kun rdzob yin par 'dod //
dam pa'i don ni gcig nyid de //
gzhan dag rnam pa gnyis su¹⁰ 'dod //
cir yang ma grub chos (G1. 90b) nyid de // 15
gnyis dang gsum sogs ga la 'gyur //
bstan pa'i tshig gis¹¹ sbyor ba yis //
skye med 'gag med sogs pas mtshon //
don dam tha dad med (P1. 70b) tshul gyis //
chos can med cing chos nyid med // 20
stong pa nyid la tha dad ni //
cung zad yod pa ma yin te //

(1) Cf. *Mūlamadhyamakakārikā* 24.8

1 D2G2N2P2 om., G1N1P1 # // bden pa gnyis la 'jug pa slob dpon dpal mar me mdzad ye shes kyis mdzad pa bzhugs so //.

2 P2 // 3 G1 tya. 4 P2 // 5 P2 // 6 P2 // 7 G1P1 kyī.

8 N2 gnyisu. 9 G2 /. 10 N2 gnyisu. 11 D2 de, G1P1 gi.

rtog¹ med tshul gyis rtogs pas na //
 stong nyid mthong zhes tha snyad gdags //
 ma mthong ba nyid de mthong bar // 25
 shin tu zab pa'i mdo las gsungs //
 de la mthong dang mthong byed med //
 thog ma tha ma med zhi ba //
 dngos dang dngos med rnam par spangs //
 rnam par rtog² med dmigs pa bral // 30
 gnas pa med pa gnas med pa //
 'gro (D1. 72b) 'ong med cing dpe dang bral //
 brjod du med pa bltar med pa //
 'gyur ba med pa (D2. 6a) 'dus ma byas //
 rnal 'byor pa yis de rtogs na // 35
 nyon mongs shes (G2. 8a) bya'i sgrib pa spangs³ //
 mngon sum dang ni rjes su⁴ dpag /
 sangs rgyas pa yis de gnyis gzung⁵ //
 gnyis pas⁶ stong nyid rtogs so⁷ shes⁸ //
 tshu rol mthong ba'i rmongs pa smra // 40
 mu stegs nyan thos rnams kyis kyang //
 chos nyid rtogs par thal bar 'gyur //
 rnam rig⁹ pas lta smos ci dgos //
 dbu ma pa la mi mthun med //
 des na grub mtha' thams cad kyang // 45
 tshad mas 'jal phyir mthun par 'gyur //
 rtog ge thams cad mi mthun pas //
 tshad mas 'jal¹⁰ (P2. 7b) ba'i chos nyid kyang //
 mang po nyid du mi 'gyur ram //
 mngon sum rjes dpag dgos pa med // 50
 (N2. 7b) mu stegs rgol ba bzlog pa'i phyir //
 (G1. 91a) mkhas pa rnams kyis byas pa yin //

1 D2G2N2P2 *rtogs*. 2 P1 *rtogs*. 3 D2GN2P *spong*. 4 N2 *rjesu*. 5 D2G2N2P2 *bzung*.
 6 G1N2 *pos*. 7 G2N2 *rtogso*. 8 G *zhes*. 9 G2N2P2 *rigs*. 10 D2G2P2 *gzhal*.

lung las kyang ni gsal po ru //
 rtog bcas rtog pa med pa yi¹ //
 shes pa gnyis kyis mi rtogs shes // 55
 slob dpon mkhas pa Bha bya² gsung //
 stong nyid gang gis rtogs she³ na⁴ //
 de bzhin gshegs pas lung bstan zhing⁵ //
 chos nyid bden pa gzigs pa yi //
 Klu sgrub slob ma Zla grags yin // 60
 de las brgyud pa'i man ngag gis //
 chos nyid bden pa rtogs par 'gyur //
 chos kyi phung po brgyad khri dang //
 bzhi stong gsungs pa thams cad ni //
 chos nyid 'di la gzhol zhing 'bab // 65
 stong nyid rtogs pas grol 'gyur gyi⁶ //
 sgom pa lhag ma de don yin //
 (P1. 71a) yang dag kun rdzob khyad bsad nas //
 stong pa nyid la goms byed na //
 kun rdzob rgyu 'bras dge sdig sogs // 70
 'jig rten pha rol bslus par 'gyur //
 cung zad thos pa la brten te //
 rnam par dben don mi shes shing //
 mi gang bsod nams mi byed pa //
 skyes⁷ bu tha shal de dag brlag / 75
 stong pa nyid la blta⁸ nyes na //
 shes rab chung (G2. 8b) rnam⁹ phung¹⁰ bar 'gyur //
 slob dpon Zla grags 'di skad du //
 thabs su gyur pa kun rdzob bden pa dang //
 thabs las byung ba don dam bden (D1. 73a) pa dag / 80
 gnyis po'i dbye ba gang yin¹¹ mi shes pa //

1 D1 yis. 2 D2 byas. 3 G2N2P2 shes. 4 P2 nas. 5 D2G2N2P2 cing. 6 P1 gyis.
 7 N2 skye. 8 D2 lta. 9 D2N2P2 ldan, G2 ldan pa. 10 G1P1 'phung. 11 D2G2N2P2 gis.

de dag log par rtogs¹ pas² ngon 'gror 'gro //³
 tha snyad la ni ma brten par //
 dam pa'i don ni rtogs mi (G1. 91b) 'gyur //
 yang dag kun rdzob rnams kyi skas // 85
 med par yang dag khang chen gyi //
 steng du 'gro bar byed pa ni //
 mkhas la rung ba ma yin no⁴ //
 kun rdzob ji ltar snang ba 'di //
 (D2. 6b) rigs pas brtags na 'ga' mi (P2. 8a) rnyed // 90
 ma rnyed pa nyid don dam yin //
 ye⁵ nas gnas pa'i chos nyid do //
 rgyu rkyen dag gis bskyed pas na //
 kun rdzob ji ltar snang ba grub //
 gal te grub par mi rung na // 95
 chu zla la sogs su yis bskyed //
 des na rgyu rkyen sna tshogs kyi //
 bskyed pas snang ba thams cad grub //
 rkyen rnams rgyun ni chad gyur na //
 kun rdzob tu yang mi 'byung ngo⁶ // 100
 de ltar lta bas ma rmongs shing //
 spyod pa shin tu dag gyur na //
 gol ba'i lam du mi 'gro zhing //
 'og min gnas su⁷ 'gro bar 'gyur //
 tshe ni yun thung shes bya'i rnam pa mang // 105
 tshe yi tshad kyang ji tsam mi shes pas //
 ngang pa chu la⁸ 'o ma len pa ltar //
 rang gi 'dod (N2. 8a) pa dang la blang bar gyis //

(2) *Madhyamakāvatāra* 6.80.

(3) *Mūlamadhyamakakārikā* 24.10ab.

(4) *Mūlamadhyamakakārikā* 3.20.

1 D2 rtog. 2 D2G2N2P2 nas. 3 P1 /. 4 G1 yino. 5 N2 yi. 6 G 'byungo. 7 N2 gnasu.
8 D2G2N2P2 las.

tshu rol mthong ba'i rmongs pa bdag¹ gis ni //
 bden gnyis gtan la dbab par mi nus² kyang // 110
 bla ma rnams kyi gsung³ la brten nas ni //
 klu sgrub lugs kyi bden gnyis bkod pa 'di //
 gser gling rgyal po'i⁴ ngor byas 'di la ni //
 gal te ding⁵ sang skye bo dad gyur kyang //
 legs par brtags la ⁶blang bar bya ba yi^{6,7} // 115
 dad pa tsam dang gus pa (P1. 71b) tsam gyis min //
 gser gling rgyal po gu⁸ ru pha la yis //
 (G2. 9a) dge slong de ba ma ti btang gyur nas //
 de (G1. 92a) yi ngor byas bden gnyis la 'jug 'di //
 ding⁹ sang mkhas pa rnams kyis brtags¹⁰ par rigs // 120

bDen pa gnyis la 'jug pa slob dpon mkhas pa chen po dpal Mar me mdzad ye shes kyis mdzad pa rdzogs so¹¹ // //

pañḍi ta de nyid dang /¹² lo tsā¹³ ba rgya brTson 'grus¹⁴ seng ges¹⁵ bsgyur cing zhus te gtan la phab pa'o //¹⁶

1 G2N2P2 dag. 2 D2G2N2P2 'os. 3 P1 gsungs. 4 G2 por. 5 D2G2N2P2 deng.
 6 G2N2P2 blangs pa nyid du bya'i. 7 D2 yin. 8 D2P1 ku. 9 D2G2N2P2 deng.
 10 D2G1P1 brtag. 11 N2 rdzogso. 12 P2 //, D1 om. 13 P1 tstsha. 14 D1P1 om.
 15 G1 gis, N2 sengnges. 16 GN2 // //

4 *Ekasmṛtyupadeśa*

#¹ // rgya gar skad du / *E ka smṛ tyu² pa de sha* /

bod skad du / *Dran pa gcig pa'i man ngag* /³

bcom ldan 'das 'jig rten dbang phyug la phyag 'tshal lo⁴ //

thams cad mkhyen la gus btud de //

'phags pa (G2. 26b) Klu sgrub phyag 'tshal nas //

a ba dhū tī⁵ bdag gis ni //

cig car⁶ 'jug (G1. 145a) pa'i man ngag bri //

'dir byang chub (P1. 104b) sems dpa' sems dang po bskyed pa nas nye bar (P2. 25b) bzung⁷ ste /⁸ dbang bskur chen po ma thob kyi bar⁹ de srid du de'i bya ba ni gnyis te / shes rab kyi bya ba dang /¹⁰ thabs kyi bya ba'o //

de la shes rab ni chos thams cad gdod ma nas ma skyes pa dang po nyid nas chos kyi dbyings nyid du shes pa'o // de'i bya ba ni las dang po pa de nyid nas ji srid dbang bskur ba ma thob kyi bar de srid du nyin mtshan dus rtag tu de nyid bsgom¹¹ pa'o //¹²

thabs ni sems can mi gtong ba'i byang (N2. 22a) chub kyi sems so // de'i bya ba ni lus dang ngag dang yid kyi bya ba thams cad¹³ sems can thams cad¹³ kyi ched ma yin pa ci yang med¹⁴ de /¹⁵ dngos sam brgyud pas so //

'di¹⁶ yang sems can la dmigs pa dang /¹⁷ dmigs pa med pa'i rim pa'o // de'i rim pa ni 'di yin te / mi mkhas pa rab rib can dang /¹⁸ (C. 97a) mkhas pa rab rib dangs¹⁹ pa'o // gang gi tshe chos kyi sku mngon sum (D1. 95a) du mdzad phan chad shes rab mnga' ste /²⁰ ye shes²¹ nyid du²² gyur²³ nas gnas so²⁴ // shes rab kyi bya ba ni mi mnga' ste goms nas mthar phyin pa'i phyir ro // thabs de'i bya ba ni dmigs pa med pa /²⁵ rang gi ngang gis lhun gyis grub pa dang / 'bad pa dang rtsol ba med par 'byung ngo // byang chub sems dpa' las dang po pas ni gang zag gi bdag yod pas sems can zhes brtags shing /²⁶ des sdug bsngal ba la²⁷ snying rje bskyed (D2. 20b) do²⁸ // des na²⁹ goms³⁰ nas ni sems can³¹ (G1. 145b) zhes bya ba ni³² dang

1 P2 *dran pa gcig pa'i man ngag bzhugs so* // // #. 2 CD1G1N1P1 *ti u.* 3 G1 om.
4 G2 'tshalo. 5 D2GNP *ti.* 6 G1N1P1 *gcig char.* 7 G2N2P2 *gzung.* 8 D2G2P2 om.
9 G1 *bar du.* 10 N2 // 11 G2 *bsgom.* 12 G2 /. 13 N2 om. 14 D2 *mi byed.*
15 P2 // 16 D2N2P2 'dir. 17 P1 om., P2 // 18 G1N1P1 om. 19 D2 *dwangs.*
20 CD1 om., G2 // 21 G1 yes. 22 G1 nyidu. 23 D1 gyar. 24 G1 *gnaso.*
25 D2G2N2P2 om. 26 CD1G1N1P1 om. 27 G1N1P1 *las.* 28 G1 *bskyedo.*
29 D2GN2P1 *de nas.* 30 D1 *gams.* 31 G2 *can /.* 32 G1N1P1 *ni /.*

po nyid nas med kyi /¹ glo bur du ming du² btags par zad do // gzhan du na rten 'brel gyi phung po dang³ khams dang (G2. 27a) skye mched tsam zhig las⁴ gzhan 'di na ci yang med (N1. 104a) do snyam du rtogs⁵ pa dang / yang 'di dag ni rang gi sems 'ba' zhig tu zad kyi /⁶ (P1. 105a) gzhan 'di na ci (P2. 26a) yang med do snyam du rtogs⁷ na⁸ des⁹ sdug bsngal ba rnams la snying rje skye'o // gang gi tshe sangs rgyas kyi sa la mi¹⁰ dmigs pa'i yul med de / 'phags pa rab kyi rtsal gyis rnam par gnong pas zhus¹¹ pa las ji skad du /

sangs rgyas bcom ldan 'das kyi¹² ye shes kyi¹³ ci yang mi gzigs te / de ci'i phyir zhe na / ye shes kyi yul mi mnga' ba'i phyir ro^{14, (1)}

zhes gsungs so // 'o na dus de na¹⁵ ye shes yod dam med ce na / 'phags pa Klu sgrub mi bzhed de /¹⁶ ji skad du /

sems ni sangs rgyas thams cad kyis //
ma gzigs mi gzigs gzigs mi 'gyur //
rang bzhin med pa'i rang bzhin la //
ci lta bu zhig gzigs par 'gyur //^{17, (2)}

zhes gsungs pa dang / brgyud pa'i man ngag 'di yin no // des na¹⁸ gzhan gyi don las ma gtogs pa¹⁹ bya ba gzhan ci yang mi mnga' la / 'di lta' gzhan gyi don ni 'dod par bya ba'i don gyi 'bras bu'igtso bo yin te /²⁰ ji skad du / 'phags pa Klu sgrub kyi zhal snga nas /

gzhan (N2. 22b) don phung sum tshogs pa ni //
'bras bu'i gtso bo²¹ yin par 'dod //
sangs rgyas nyid (G1. 146a) sogs de las gzhan //
de²² dag don gyi 'bras bur 'dod //^{23 (3)}

ces gsungs so // de kho na nyid la 'jug pa'i man ngag kyang blo (C. 97b) la gnas par bya'o //

(1) *Suvikrāntivikrāmaparipṛcchāprajñāpāramitāsūtra.*

(2) *Bodhicittavivaraṇa* 43.

(3) *Kudṛṣṭinirghātana* 3.

1 G1N1P1 om. 2 D2G2N2P2 om. *ming du.* 3 CG1N1P1 *dang /.* 4 G1N1P1 *las /.*

6 D2G1N1P1 *rtog.* 7 G2N2P2 om. 8 D2 *rtog.* 8 D2N2P2 *nas /, G2 nas //.*

9 G1N1P1 *de.* 10 D2N2P2 *ni.* 11 D2G1NP om. *pas zhus.* 12 G1N1P1 *kyis.* 13 G2 *kyi.*

14 G1N1P1 *ro //.* 15 G1N1P1 *nas.* 16 G1N1P1 om. 17 G2P1 /. 18 G1N1P1 *de nas.*

19 G1N1P1 *pa /.* 20 G2 // . 21 G2N2P2 *bu spyi'i tso bo.* 22 G2 *da de.* 23 G1N1P om.

Tshul khrims rgyal bas bskul ba yis //
'dir ni bsduṣ nas bstan pa yin //
rgyas par Klu sgrub gdams¹ (D1. 95b) ngag dang //
theg chen mdo sde lta² bar gyis //

Cig³ car⁴ 'jug pa'i (G2. 27b) *man ngag* /⁵ paṇḍi⁶ ta Dī paṃ ka ra shrī dznyā nas mdzad
pa rdzogs so⁷ // //

paṇḍi⁸ ta de nyid dang lo⁹ tsā ba Tshul khrims rgyal bas bsgyur ba'o //¹⁰

1 G1N1 *gdam*. 2 D2N2P2 *blta*. 3 D2 *gcig*. 4 G1N1P1 *char*. 5 CD1G1N1P1 *om*.
6 P1 *pa ṇ ḍi*. 7 P1 *sHo*, G1 *rdzogsHo*, N2 *rdzogsso*. 8 P1 *paṇ ḍi*. 9 P1 *po*.
10 D2GP1 // //.

5 Madhyamakopāśa

#¹ // rgyar skad du² / Ma dhya ma u³ pa de sha⁴ nā ma /

bod (N1. 104a7) skad du / dBu ma'i man ngag ces bya ba f⁵

'jig rten mgon po la phyag 'tshal lo⁶ //

gang gi (P3. 8b) gsung gi 'od zer gyis //

bdag sogs rmongs pa ma lus pa'i //

snying gi padma⁷ kha 'byed pa'i //

dam pa'i⁸ skyes mchog de la 'dud //⁹

theg pa chen po dbu ma'i man ngag ni 'di yin te / kun rdzob tu¹⁰ chos thams¹¹ cad tshu rol
mthong ba'i ngor byas nas /¹² rgyu 'bras la sogs pa rnam par gzhag¹³ pa thams cad ji ltar
snang ba bzhin du bden pa yin la / don dam par¹⁴ ram¹⁵ yang dag par¹⁶ na¹⁷ kun rdzob ji ltar
snang ba de kho na gtan tshigs chen po rnams kyis gzhigs shing bsal¹⁸ na / skra'i rtse mo
brgyar gshags¹⁹ (D2. 7a) pa'i tshad tsam²⁰ kyang²¹ bzung²² du med do²³ zhes nges par khong
du chud par bya'o //

stan bde ba la skyil²⁴ mo²⁵ krung²⁶ bcas te²⁷ 'dug la / 'di ltar re zhig dngos po²⁸ gnyis te²⁹ /
gzugs can dang³⁰ gzugs can ma yin pa'o // de la gzugs can rnams ni rdul phra rab 'dus pa³¹
yin la / (P2. 133a) de yang phyogs cha'i³² dbye³³ bas phye³⁴ zhing³⁵ gzhigs na /³⁶ shin tu phra
ba yang lus pa³⁷ med cing³⁸ shing tu snang (N2. 129a) ba yang³⁹ med do // gzugs (N3.
8b) can ma yin pa⁴⁰ ni sems (G3. 9b) yin la / de yang⁴¹ 'di ltar 'das pa'i sems ni 'gags shing
zhig /⁴² ma 'ongs pa'i sems ni ma skyes shing ma byung / da ltar gyi sems ni 'di ltar yang
shin tu brtag⁴³ dka' ste /⁴⁴ kha dog med (P1. 106a) cing dbyibs dang⁴⁵ bral ba / nam mkha⁴⁶

1 G1N1P1 # // dbu ma'i man ngag ces bya bz bzhugs so // . 2 N2 om.

3 D2G3N3P3 mo for ma u. 4 P2 shā. 5 G2N2P2 om. 6 G1G3N3 'tshalo.

7 D2 padmo, P3 padma ma. 8 N2P2 pa. 9 N2 /. 10 G1N1P1 du. 11 G3 thams.

12 P2 om, P3 // . 13 D2GN1P bzhag. 14 D2G3N2P3 pa. 15 G2P2 ram /, D2G3P3 'am.

16 N2 om. ram yang dap par. 17 G1N1P1 na /. 18 D2G2G3N2N3P2P3 btsal, C gsal.

19 G2N1N2P bshags. 20 CD1 om. 21 D2G3 yang. 22 D2G1G3N1P3 gzung. 23 G1P1 do //.

24 N1 bskyil, P1 dkyil. 25 N1 mor. 26 G1G2N2P1P2 dkrung. 27 N1 to.

28 G2G3N2N3P2P3 po ni. 29 G1 he. 30 CD1G3N3P3 dang /. 31 D2P2G3 pa'i. 32 G3P3 bcu'i.

33 D1 dpya. 34 P2 phyi. 35 N2 cing. 36 D2G1G3NP om. 37 G2N2P2 om.

38 G1N1P1 cing dbyibs dang bral ba / nam mkha' (G1N1 namkha') dang 'dra bas ma grub pa 'am /
yang na gcig dang du ma dang bral bas sam / de yang 'di ltar 'das pa'i sems ni 'gags shing zhig / ma 'ongs
pa'i sems ni ma skyes shing ma byung / da ltar gyi sems ni 'di ltar yang shin tu brtag dka' ste / kha dog med
cing.

39 G1N1P1 'ang. 40 G1N1P1 par. 41 N1P1 'ang. 42 P1 om. 43 D2 brtags.

44 G1N1P1 om. 45G2N2P2 om. 46 G1N1N3 namkh'.

dang 'dra bas ma¹ grub pa 'am /² yang na (G2. 182a) gcig dang³ du ma dang bral bas sam⁴ /⁵ yang na ma skyes pas sam /⁶ yang na⁷ de rang bzhin gyis 'od gsal ba la sogs pa⁸ /⁹ rigs pa'i (N1. 105a) mtshon gyis dpyad¹⁰ cing gzhigs¹¹ na¹² ma grub par rtogs so¹³ //

de ltar gnyis po ci'i ngo bor yang¹⁴ ma grub cing med tsam na /¹⁵ so sor¹⁶ rtogs¹⁷ (C. 98a) pa'i she rab de nyid kyang ma grub ste / dper na shing gnyis phan tshun drud pas me byung ba'i rkyen gyis (P3. 8b) shing gnyis po¹⁸ tshig cing med pa'i rjes la /¹⁹ gang gis (D1. 96a) sreg par byed pa'i me de nyid kyang²⁰ rang zhi ba de bzhin du²¹ rang dang spyi'i mtshan nyid kyis²² chos thams cad med par grub tsam na²³ shes rab nyid²⁴ snang ba med cing²⁵ 'od gsal ba ci'i ngo bo²⁶ yang ma grub pas /²⁷ bying ba dang²⁸ rgod pa la sogs pa'i skyon du gyur pa²⁹ thams cad bsal³⁰ te / bar skabs der³¹ shes pa³² cir yang³³ mi rtog³⁴ /³⁵ cir yang mi 'dzing / dran pa dang³⁶ yid la byed pa thams cad spangs te / ji srid du mtshan ma³⁷ 'am /³⁸ rnam par rtog pa'i dgra 'am /³⁹ chom⁴⁰ rkun ma langs kyi bar du⁴¹ de lta bu la shes pa gnas par bya'o //

gang gi tshe⁴² ldang bar (G1. 148b) 'dod na dal bus skyil⁴³ mo krung⁴⁴ bshig⁴⁵ la langs te / sgyu ma lta bu'i yid kyis⁴⁶ lus dang⁴⁷ ngag dang yid kyis⁴⁸ dge ba ci nus kyis bya'o // de ltar gus pa dang /⁴⁹ (P2. 133b) yun ring ba dang /⁵⁰ rgyun ma⁵¹ chad par⁵² bsgrubs⁵³ na skal ba dang ldan pa rnams kyis⁵⁴ tshe 'di (G2. 182b) nyid la bden pa⁵⁵ mthong bar 'gyur te / chos thams (G3. 10a) cad nam mkha'i⁵⁶ dkyil⁵⁷ lta bur⁵⁸ 'bad pa dang⁵⁹ rtsol ba med cing rang gi ngang gis lhun gyis⁶⁰ grub par mngon sum du byed do // de'i rjes las⁶¹ thob pas (D2. 8b) ni⁶²

1 G1P1 sam. 2 G2N1N2P1P2 om. 3 N1P1 om.

4 G2N2P2 ba 'am. 5 P1 om. 6 N2P2 om. 7 P2 om. 8 G1N1P1 pas. 9 G2N2N3P2P3 om.

10 G1N1P1 spyad. 11 G1N1P1 bzhigs. 12 G2N2P2 nas. 13 G3N3 rtogs. 14 G1N1P1 om.

15 D2G2G3N2N3P3 om. 16 C so. 17 G2G3N3P2P3 rtog. 18 D2G1G2NP po nyid.

19 D2N3P3 om. 20 G2 kyang /. 21 D2G1G3N1N3P1P3 du /. 22 D2G3N3P3 kyi.

23 G1G2N1N2P1P2 na /. 24 D2G1N1P1 de nyid, G2G3N2N3P2P3 nyid kyang. 25 G1N1P1 pa.

26 D2G2N2P2P3 bor. 27 G1G2N1N2P1P2 om. 28 G1G2N1P1 dang /. 29 G3 pa /.

30 G2N2P2 gsal. 31 CD1 de. 32 G1N1P1 pas. 33 P3 om. 34 G1G2N1P1 om. cir yang mi rtog.

35 CD1G1G2N1N2N3P1P2P3 om. 36 G1G2 dang /. 37 N2P2 pa. 38 N2P2 om.

39 G1N1P1 om. 40 G2 choms. 41 G1G2N1P1 du /. 42 G2N2P2 om. 43 G1P1 skyil.

44 G2 dkrung. 45 N3 bshigs. 46 N1P1 kyis /. 47 G1G2 dang /. 48 D2 kyi.

49 D2G2G3N2N3P2P3 om. 50 D2G3N2N3P2P3 om. 51 G3N3P3 mi. 52 G2 pa.

53 G2N2P2 sgrub. 54 G1N1P1 kyis /. 55 D1 bde ba. 56 G1P1 mkha', G3N1N3 namkha'.

57 G1N1P1 om. 58 D2G3P3 bu. 59 G1G2N1P1 dang /. 60 G2G3N2N3P2P3 om. lhun gyis.

61 D2G3N2N3P2P3 la. 62 G1 ni /.

chos thams cad (N2. 129b) sgyu ma la sogs par shes par so¹ // gang gi tshe rdo rje lta
(P1. 106b) bu'i² ting nge 'dzin mngon du byas phan chad ni³ rjes las thob pa yang⁴ mi mnga'
ste / dus thams cad du mnyam par gzhag⁵ pa'o // de lta⁶ ma yin na byang chub sems dpa'
dang⁷ khyad par ci yod ces⁸ bya ba la sogs pa'i rigs pa dang⁹ (N3. 9a) lung 'dir mi brjod do //
gzhan gyi don bskal pa grangs med par tshogs bsags pa dang /¹⁰ smon lam btab pa'i mthus
(N1. 105b) gdul bya rnams ji ltar 'dod pa bzhin du 'gyur ro // lung dang rigs pa shin tu mang
mod kyi /¹¹ 'dir ma spros¹² (P3. 9b) so //

*dBu ma'i man ngag ces bya ba /¹³ ¹⁴slob dpon chen po¹⁵ dpal Mar me mdzad ye shes
kyis¹⁴ mdzad pa rdzogs so¹⁶ //¹⁷*

¹⁸-rgya gar (G1. 149a) gyi mkhan po de nyid dang / zhu chen gyi¹⁸ lo tsā ba dge slong
Tshul khirms rgyal bas¹⁹ lha sa 'phrul snang du bsgyur cing zhus te²⁰ gtan la phab
pa'o²¹ // //²²

²³-ra sa 'phrul snang gtsug lag khang chan du //
mar me mdzad dpal zhes bya'i mkhas pa la //
bod kyi rngog btsun legs pa'i shes rab kyis //
gsol ba btab nas bdag gis bsgyur ba yin //
gnas brtan Mar me mdzad dpal gyis //
gzhung lugs skyes bu gsum 'dzin pa //
gol ba'i lam du mi 'gro zhes //
nag²⁴ tsho Tshul khirms rgyal bas smras²⁵ //²³

1 G2N2P2 shes par bya'o. 2 G1N1 bu. 3 G1N1P1 ni /. 4 G1N1P1 spang.
5 D2G2G3N2N3P2P3 bzhag. 6 G1N1P1 ltar. 7 G1G2 dang /. 8 G2N2P2 om.
9 G1N2 dang /. 10 G3N2N3P2P3 om. 11 G1G2N1N2P1P2 om. 12 D2 smos.
13 CDG2G3N2N3P2 om. 14 CD1 paṇḍi ta dī pa ka ras. 15 D2G2G3N2N3P2P3 om. chen po.
16 G1G2N2P1P2 s-ho, G3 rdzogso. 17 P2 //. 18 CD1 om. 19 G2 bas /. 20 G1N1 te /.
21 P2 pa. 22 P // . 23 D2G2G3N2N3P2P3 om. 24 G1G2P1 nags. 25 G1N1P1 ba smra.

6 *Ratnakaraṇḍoghāta*

#¹ // rgya gar skad du / *Ratna ka raṇḍa u dgha² ṭa³ ma dhya ma nā ma u⁴ pa de sha /*
bod skad du / *dBu ma'i man ngag rin po che'i za ma tog kha phye ba zhes bya ba /⁵*
rje⁶ btsun 'jam pa'i rdo rje la phyag 'tshal lo //
dkon mchog gsum la phyag 'tshal lo //

slob dpon Klu sgrub kyi brgyud pa'i gdams⁷ ngag bri bar bya'o // 'di ni skyes bu gang
zhig bdag dang 'gro ba ma lus pa'i 'khor ba thog ma med pa can gyi sdug bsngal rjes su dran
pas til (P. 107a) 'bru tsam gyi dngos po yang mi 'dzin pa / 'jig rten gyi dngos po dang / bya
ba ma lus pa mchil ma'i thal ba ltar bor ba /⁸ dang po khas blangs⁹ pa'i tshul khirms kyi
sdom pa gsum ma nyams shing gtsang ba / thos pa dang bsam pa'i shes rab dang ldan pa /¹⁰
rang bzhin gyis snying rje yod pa / dam pa'i chos kyi phyir lus dang srog la yang mi lta ba
des / slob dpon 'phags pa Klu sgrub kyi brgyud pa'i gdams ngag yod pa'i skyes bu dam
(N. 106a) pa btsal la / de dus yun ring por mnyes par byas nas las dang po pa yin pas sa tra
chen po 'am / grong khyer chen po 'am / dgon pa 'am / bas mtha' la sogs pa 'tsho ba bsgrub¹¹
sla bar gnas la / dkon mchog gsum¹² gyi gzugs brnyan¹³ gyi spyen sngar stan 'jam zhing 'bol
ba la 'dug la / 'di ltar sems can gyi rigs ni sgo nga las skyes pa dang / drod¹⁴ g-sher las skyes
pa dang / brdzus¹⁵ te skyes pa dang / gzugs can dang /¹⁶ gzugs can ma yin pa dang / 'du shes
can dang /¹⁷ 'du shes can (G. 151a) ma yin pa'i 'gro ba lnga'i sems can la legs par bltas la /
thams cad ni bdag gi ma yin te / ma 'di dag gis bdag gi ched du sdig pa byas shing bsags pas
de'i rnam smin gyis da lta sdug bsngal mang po nyams su myong ngo // 'phags pa Klu sgrub
kyi zhal snga¹⁸ nas /

rnam rtog bag (C. 99a) chags nyes pa yis //

'gro ba gsum po rnam rmongs la //

1 GNP # *dbu ma'i man ngag rin po che'i za ma tog ces bya ba jo bos mdzad pa bzhugs so* (N. *bzhugs so*).
2 GNP *karaṇḍodgha*. 3 DGNP *te*. 4 GNP *nāmo*. 5 GNP *om*. 6 P *rjes*.
7 GNP *man*. 8 GNP *om /*. 9 G *blang*. 10 CD *om*. 11 GNP *sgrub*. 12 N *om*.
13 GNP *rnyan*. 14 N *drong*. 15 CD *rdzus*. 16 GNP *om*. 17 GNP *om*. 18 CD *om*.

blo¹ dang ldan pas legs bltas nas //
 'khor ba'i gnas nas gdon² par bya //^{3. (1)}
 zhes gsungs pa dang / yang 'phags pa kKu sgrub kyi zhal snga nas /
 srid pa'i btson ra'i nang gnas pa //
 nyon mongs me yis gdungs pa yi //
 sems can gang yin thams cad sngon //
 pha ma mdza' (D. 97a) bshes (P. 107a) rtsa lag tu //
 gyur cing phan cher btags pas na //
 'di dag bdag gis sdug bsngal byas //
 da ni bde bar bya bar rigs //⁽²⁾

zhes gsungs pas⁴ drin shes pas⁵ bdag gis 'di dag bsgral ba dang / dgrol ba dang / dbugs
 dbyung ba dang / mya ngan las bzla'o zhes tshad med pa bzhis byang chub tu sems bskyed
 la / de'i ched du tshogs gnyis bsags⁶ par bya'o // rmi lam gyi sems dang ma bral bas⁷ nam
 mkha'i⁸ dbyings 'di dkon mchog gsum gyis til gyi ga'u bzhin du khyab pa la / dam pa bdun
 dang / 'du shes bdun dran par byas pa dang / rjes su dran pa'i (N. 106b) tshigs su bcaid pa
 yang brjod de / gnyen po drug gi sgo nas lus kyi bkod pa yang byas nas phyag bya ba dang /
 mchod pa dang /⁹ (G. 151b) sdig pa bshags pa dang / rjes su yi rang ba dang / bskul ba
 dang / gsol ba gdab pa dang / skyabs su 'gro ba dang / byang chub tu sems bskyed pa dang /
 lus dbul ba dang / sdom pa blang ba dang / theg pa chen po'i lam la gnas par dam bcas la /
 de dag byang chub chen por yongs su¹⁰ bsngo bar bya'o // de dag thams cad chos kyi
 dbyings su gyur te / mchod pa'i gnas dang / mchod pa'i tshogs de dag thams cad dang po
 gang nas byon / da lta gang du bzhud snyam du brtags na¹¹ gang nas kyang ma byon /¹² gang
 du yang ma bzhud /¹³ phyi nang gi chos 'di dag kyang de kho na bzhin yin pas / thams cad
 rang sems sgyu ma'i rnam par 'phrul pa brdzun bzhin du snang / snang bzhin du brdzun pas
 de dag lus la bsdu /¹⁴ de yang sems la bsdu / sems ni kha dog med pa / dbyibs med pa /¹⁵
 rang bzhin gyis 'od gsal ba (C. 99b) /¹⁶ gdod nas ma skyes pa'o // so sor rtogs¹⁷ pa'i shes rab
 de nyid kyang 'od gsal bar gyur to // bar der shes pa ci (P. 108a) yang ma yin la / cir yang mi
 gnas pa / cir yang¹⁸ ma grub pa / ci'i rnam par yang ma skyes pa / spros pa ma lus pa nye bar

(1) *Piṇḍīkṛtasādhana* 3.

(2) *Bodhivittavivaraṇa* 74-75.

1 P *phu blo.* 2 GNP 'don. 3 GNP om. 4 G *pas /.* 5 N om. 6 D *bsag.*
 7 GNP *bas /.* 8 GN *namkha'.* 9 CD om. 10 N *yongsu.* 11 GNP *nas.* 12 PN om.
 13 NP om. 14 GNP om. 15 NP om. 16 GNP om. 17 CD *rtog.* 18 N om.

zhi ba / ston ka'i nyi ma phyed kyi nam mkha'i¹ gung lta bu'i mtshan ma'i rdul thams cad
dengs pa'i nam mkha'² rdo rje'i ting nge 'dzin snang ba med pa la ji³ tsam nus par gnas so //
ma goms pa'i dbang gis sems yengs par gyur na (D. 97b) yang de nyid du bkug la gnas so //
thun gzhan (G. 152a) yang de bzhin du bya'o // thun grangs mang la yun thung bar bya'o //
gang gi tshe goms par gyur cing cung⁴ zad brtan⁵ pa na je ring je ring⁶ bya'o // sgrib pa lnga
po so so'i gnyen pos zhi bar bya'o // de nas mig phye la e ma'o ngo mtshar ro // chos kyi
dbyings ci yang med pa la cir yang snang ba 'di ngo mtshar che'o // 'di dag (N. 107a) ni rang
gi sems nyid brdzun pa'i rnam 'phrul brdzun bzhin du snang / snang bzhin du brdzun⁷ pa
ste / sgyu ma'i dpe brgyad kyis mtshon pa snang la rang bzhin med pa'o zhes bltas la smon
lam btab nas skyil mo krung dal gyis bshig la langs te tsha tsha⁸ la sogs pa dge ba'i las ci nus
pa bya'o // de dag thun drug tu tshogs gnyis bsags⁹ pa la 'bad do // nyal ba'i dus su stong pa
nyid du bsgoms la de'i ngang du gnyid log par bya'o // de nas thun tha ma la byams pa
dang¹⁰ snying rje las byung ba'i byang chub kyi sems kyis bslang bar bsam mo // des ni don
dam pa byang chub kyi sems bskyed pa yin no // zas la cha bzhir bgo bar bya'o // slob dpon
Klu sgrub kyi zhal snga nas kyang /

don dam pa byang chub kyi sems ni¹¹ gsang sngags kyi sgo'i spyad pa spyod pa'i
byang chub sems dpa' bsgom pa'i stobs kyis bskyed par bya ba yin no⁽³⁾
zhes gsungs so // de ltar gus pa dang /¹² (P. 108b) yun ring ba dang / rgyun mi 'chad par 'bad
par byas na¹³ sems can la snying rje yang shugs kyis skye ste / slob¹⁴ dpon Klu sgrub kyi
zhal snga nas /

(G. 152b) de ltar rnal 'byor pa rnams kyis //

(C. 100a) stong pa nyid 'di bsgoms byas na //

blo ni gzhan don la dga' bar //

'gyur ba 'di la the tshom med //⁽⁴⁾

yang /¹⁵

gdod nas skye med don de ni //

blo yis gting nas rtogs gyur nas //

(3) *Bodhicittavivaraṇa*. Lindtner ed., p. 184.

(4) *Bodhicittavivaraṇa* 73.

1 GN *namkha'*. 2 GN *namkha'*. 3 NP *ci*. 4 N *om*. 5 N *bstan*. 6 GNP *ji ring ji ring*.
7 GNP *rdzun*. 8 GNP. *sā tstsha* for *tsha tsha*. 9 G *bsag*. 10 G *dang /*. 11 GN *kyi*, P *gyi*.
12 P *om*. 13 GNP *na /*. 14 G *slon*. 15 GNP *om*.

'khor ba'i 'dam du bying ba la //
 snying rje ngang gis skye bar 'gyur //¹

zhes gsungs so // de ltar rnal 'byor pa des nang du mnyam par bzhag² pa na / don dam byang
 chub kyi sems bsgoms la / de las langs pa na kun rdzob byang chub kyi sems bsgoms³ pas
 stong pa snying rje chen po'i snying po can gyi byang chub kyi sems gnyis po brtan par
 bya'o // rNam par snang mdzad mngon par byang chub pa las /

byang (D. 98a) chub nam mkha'i⁴ mtshan nyid de //
 rtog pa thams cad spangs pa'o //⁽⁵⁾

zhes dang / *Shes rab sdud*⁵ pa las /

thob par bya ba'i (N. 107b) chos ni rdul tsam yod ma yin //
 byang chub dngos por bzung nas mchog 'dzin ma byed cig //
 dang po 'i las can de la de skad bstan⁶ par bya //^{7, (6)}

zhes pa dang / *Yum chen mo 'bum* pa las /

ngas ni ci yang thob pa med pa kho nar byang chub kyi snying por mngon par
 rdzogs par sangs rgyas so //

zhes gsungs so⁸ // 'Phags pa Chos yang dag par sdud pa las kyang /

de la byang chub sems dpa' 'dod pa chung ba gang zhe na / gang byang chub kyang
 mi 'dod pa'o // chog shes pa gang zhe na / gang byang chub kyi sems la lhag par ma
 zhen pa'o //^{9, (7)}

zhes gsungs so¹⁰ // gzhan mdo sde rin po che du (G. 153a) ma dang / gsang sngags kyi
 rgyud du ma nas don 'di nyid gsungs so // *dpal gSang ba 'dus* pa las /

dngos po thams cad dang (P. 109a) bral zhing //
 phung po khams dang skye mched dang //
 gzung dang 'dzin pa rnam par spangs //
 chos bdag med par mnyam nyid pas //
 rang sems gdod nas ma skyes pa //
 stong pa nyid kyi ngo bo nyid //^{11, (8)}

(5) *Mahāvairocanaḥbhisambodhivikurvatyaḥiṣṭhānavaipulyasūtra*. Tib. P. No. 126, Tha 191b6.

(6) *Prajñāpāramitāratanagūṇasamcayagāthā* 15.3cd.

(7) *Dharmasaṃgītisūtra*. Not identified.

(8) *Guhyaśamājantra*. Tib. P. No.81, Ca 100b4-5.

1 NP om. 2 CD *gzhang*. 3 GP *bsgom*. 4 GN *namkha'i*. 5 GNP *bsdud*. 6 D *dstan*.
 7 NP /. 8 G *gsungso*. 9 CD om. 10 G *gsungso*. 11 GNP om.

ces dang / 'Phags pa brGyad stong pa las kyang /

Shā ri'i bu gang sems ma yin pa de ni sems med pa'o // gang sems med pa de ni
sems rang bzhin gyis 'od gsal ba'o //^{1, (9)}

zhes gsungs so² // 'phags pa Klu sgrub kyi zhal snga nas kyang /

sems ni sangs rgyas (C. 100b) thams cad kyis //³

ma gzigs gzigs pa⁴ ma yin te //⁵

rang bzhin med pa'i rang bzhin la //

ji lta bu zhig gzigs par 'gyur //^{6, (10)}

zhes gsungs so // rje btsun 'Phags pa lha'i zhal snga⁷ nas kyang /

sems kyis⁸ sems med rtogs bya'i phyir //

gang tshe goms par bya ba yin //

de tshe sems ni mthong mi 'gyur //^{9, (11)}

zhes gsungs so // 'Phags pa Chos yang dag par sdud¹⁰ pa las kyang //¹¹

lha'i bu dag gzhan yang byang chub¹² kyi sems la mngon par zhen pa de yang bdud
kyi las so // sems sgyu mar ma 'tshal nas sems la dngos por bzung ste / bla na med pa'i
byang chub tu sems bskyed pa gang lags pa de mthol lo bshags so //^{13, (12)}

zhes gsungs so¹⁴ // (D. 98b) skye ba snga ma (N. 108a) grangs med par theg pa chen (G.
153b) po la goms pa / rgyud legs par sbyangs pa / dbang po rnon pos ni kun rdzob byang
chub kyi sems de nyid don dam byang chub kyi sems¹⁵ du¹⁶ shes te / stong pa nyid dang
snying rje chen po can yin pas¹⁷ rnam pa thams cad kyi mchog dang ldan pa'i stong pa nyid
du gnas so // don 'di la dgongs nas slob dpon klu sgrub kyi zhal snga nas /

bdag dang phung po la sogs (P. 109b) dang //

rnam shes rtog pas ma bsgribs pa //¹⁸

sangs rgyas rnam kyis¹⁹ byang chub sems //

stong pa'i mtshan nyid dag tu bzhed //⁽¹³⁾

(9) *Aṣṭasāhasrikāprajñāpāramitāsūtra*. Vaidya ed., p.3.18.

(10) *Bodhicittavivaraṇa* 43.

(11) *Jñānasārasamuccaya* 33abc.

(12) *Dharmasaṃgītisūtra*. Not identified.

(13) *Bodhicittavivaraṇa* 2.

1 CD om. 2 G *gsungso*. 3 N om. 4 GNP *par*. 5 N /. 6 NP om. 7 GNP om.
8 NP *kyi*. 9 NP om. 10 GNP *bsdud*. 11 D //. 12 G *byub* for *byang chub*. 13 CD om.
14 G *gsungso*. 15 CD *sems bskyed*. 16 GNP *su 'du*. 17 GP *pas /*. 18 N /. 19 GNP *kyi*.

ces gsungs so // 'o na ji ltar zhe na / kun rdzob tu sgyu ma'i skyes bu dang / sprul pa'i skyes
bus byang chub tu sems bskyed pa de lta bur bskyed par bya'o // ji skad du / 'Phags pa Klu'i
rgyal po rgya mtshos zhus pa las /

klu'i rgyal po chos gcig gis byang chub sems dpa' rnam myur du bla na med pa
yang dag par rdzogs pa'i byang chub tu mngon par rdzogs par 'tshang rgya ste / chos
gcig po gang zhe na / sems can thams cad mi gtong ba'i byang chub kyi sems so⁽¹⁴⁾
zhes gsungs pas de bskyed dgos so¹ //

sems de skye ba'i rgyu dang / rkyen dang / ngo bo dang / rnam pa dang / sbyang ba
dang / gzung ba dang / bsrung ba dang / spel ba dang / de'i phan yon dang / gtong ba'i rgyu
dang / btang ba'i nyes dmigs dang / gzhan² bskyed (C. 101a) du bcug pa'i phan yon dang /
gzhan bskyed pa la rjes su³ yi rang ba'i phan yon dang / gzhan bskyed pa'i bar (G. 154a)
chad byas pa'i nyes dmigs la mkhas par bya'o //

de la rgyu ni rigs phun sum tshogs pa'i rtags dang ldan pa ste / ji skad du⁴ 'Phags pa
bDen par smra ba lung bstan pa'i mdo las /

de rgya che ba la mos pas dman pa la mos pa med pa yin / de rang bzhin gyis⁵
snying rje chen po dang ldan pas dkar po'i yon tan dang ldan pa yin / de sdig pa'i grogs
po spangs pas dge ba'i bshes gnyen (N. 108b) gyis yongs su⁶ bzung⁷ ba yin / ji skad
smras pa bzhin byed pas mi slu⁸ ba yin / sangs rgyas 'jig rten du rgyu ba mnyes par
byas pas⁹ dga' ba dang ldan pa yin / lus dang (D. 99a) ngag dang yid kyi las kha na ma
tho ba med (P. 110a) pas sdig pa spangs pa yin / lhag pa'i bsam pa skyon med pas yi
dam la brtan pa yin / ro bro ba la ma chags pas thams cad 'gyed¹⁰ pa'i ngang tshul can
yin / bdud kyi byin gyis brlabs pa dang bral ba yin / dge ba'i rtsa ba bsags pas spyod pa
legs par spyod pa yin / snying rje chen po'i spyod yul yin pas sems can la snying
brtse¹¹ ba yin / yo byad lhug par gtong¹² bas thams cad la chags zhen¹³ chung ba yin⁽¹⁵⁾
zhes gsungs so // slob dpon 'phags pa Thogs med kyi zhal snga nas kyang /

(14) *Sāgaranāgarājaparipṛcchāsūtra*. Tib. P. No. 820, Pu 174b3-4.

(15) *Bodhisattvagocaropāyaviṣayavikrivaṇasūtra*. Tib. P. No. 813, Nu 42b-43a5.

1 G *dgoso*. 2 GNP *gzhan du*. 3 G *rjesu*. 4 GNP *du /*. 5 GNP *gyi*. 6 N *yongsu*.
7 C *gzung*. 8 GNP *bslu*. 9 GP *par*. 10 GP *dgyed*, N *dgyes*. 11 P *brtsi*. 12 N *gtang*. 13 C *zhan*.

rgyu bzhi ste /¹ rigs dang /² dge ba'i bshes gnyen dang / snying rje dang /³ 'khor ba'i
sdug bsngal bzod pa'o //^{4, (16)}
zhes gsungs so //

rkyen ni gnyis te /⁵ sbyor ba'i rkyen dang /⁶ bsam pa'i rkyen no //

de la sbyor ba'i rkyen ni⁷ tshogs bsags (G. 154b) pa dang / rgyud sbyang ba dang /
skyabs su 'gro ba khyad par can bya ba'o //

tshogs bsags pa yang nyin lan gsum mtshan lan gsum du yan lag bdun pa bya ba dang /
shes rab kyi pha rol tu phyin pa'i mdo zab mo gdon pa dang / klag⁸ pa dang / gzungs gdon
pa dang / dkon mchog la mchod pa rgyas par bya ba dang / dge 'dun gyi mchod ston yon
dang (C. 101b) bcas pa bya ba dang / byis pa'i ston mo dang / mgon med pa rnams la sbyin
pa rgya chen po btang ba dang / mtshan mo rgyu ba rnams la gtor ma rgya chen po btang ba
la sogs pa⁹ bya'o //

rgyud sbyang ba yang snga ma bzhin du mdo sde zab mo gdon pa dang / klag¹⁰ pa dang /
gzungs bzlas pa dang / yan lag bdun pa bya ba dang / *Phung po gsum pa gdon pa dang / Las
kyi sgrub pa rgyun gcod pa dang / gSer 'od dam pa mnga sgra'i tshigs su bcad pa* la sogs pa'i
gzhung (N. 109a) gis sdig (P. 110b) pa bshags par bya'o //

skyabs su 'gro ba khyad par can ni / khyad par rnam pa bdun gyis khyad par du 'phags
te /¹¹ rten gyi gang zag gi khyad par dang / skyabs gnas dkon mchog gsum gyi khyad par
dang /¹² dus kyi khyad par dang / bsam pa'i khyad par dang / sbyor ba'i khyad par dang /
bslab bya'i khyad par dang / phan yon gyi khyad par ro // de la (D. 99b) skyabs gnas dkon
mchog gsum gyi khyad par ni / theg pa chung ba'i skyabs gnas¹³ ni /¹⁴ ji skad du *mDzod
las*¹⁵ /

gang zhig gsum la skyabs 'gro (G. 155a) ba //

sangs rgyas dge 'dun byed pa yi //

chos la'ang de bzhin skyabs 'gro zhing //

mya ngan¹⁶ 'das la'ang skyabs su 'gro //^{17, (17)}

(16) *Bodhisattvabhūmi*. N. Dutt ed., p. 11.11-14.

(17) *Abhidharmakośakārikā* 4.32.

1 GNP om. 2 GNP om. 3 GNP om. 4 10 CD om. 5 GNP om. 6 P om.
7 RK gyi. 8 CD *bklags*, P *klag*. 9 G *pa rgya chen po btang ba la sogs pa*.
10 P *klag*. 11 P // . 12 P *dab for dang /*. 13 CD om. 14 N // . 15 GNP *las ni*.
16 NP *ngan las*. 17 GNP om.

zhes bshad do // 'dir khyad par ni /¹ dkon mchog gsum ni rnam pa gsum ste / de kho na nyid
kyi dkon mchog gsum dang / mdun du gzha² pa'i dkon mchog gsum dang / mngon par
rtogs pa'i dkon mchog gsum ste / 'di'i don rgyas par³ bla ma la zhu bar bya'o // yang bslab
bya'i khyad par 'ba' zhi⁴ brjod de / dkon mchog gsum gyi khyad par dang / yon tan rjes su
dran pa'i sgo nas dkon mchog gsum lus dang srog⁴ gi phyir yang⁵ mi gtong⁶ zhing yang
dang yang du skyabs su 'gro ba dang / bka' drin chen po rjes su dran pa'i sgo nas dus rtag tu
'am /⁷ yang na dus res 'ga' mchod par bya ba dang / tha na chu gtsang phor pa gang tsam
yang dbul bar bya ba dang / zas la sogs pa'i phud dbul bar bya'o // bya ba ci byed pa dang /⁸
dgos⁹ pa ci yod pa ni dkon mchog gsum la gsol ba btab nas byed kyi /¹⁰ 'jig rten pa'i
(C. 102a) thabs gzhan spang ba dang / 'gro¹¹ ba gzhan la yang tshul 'di bzhin du sbyar bar
bya'o¹² //¹³ theg pa thun mong gi bslab¹⁴ bya ni /¹⁵ sangs rgyas la skyabs su song (P. 111a)
bas 'jig rten pa'i lha la phyag mi bya ba la sogs pa ste / dkon mchog (N. 109b) gsum po so
so'i bslab bya'o //

bsam pa'i rkyen ni ji skad du 'Phags pa Ye shes phyag rgya'i mdo dang /¹⁶ sNying rje
padma dkar po'i mdo las /

sangs rgyas kyi byang chub (G. 155b) tu sems bskyed pa dang /¹⁷ dam pa'i chos 'jig
pa'i dus su sems bskyed pa dang /¹⁷ sems can sdug bsngal ba mthong nas sems bskyed
pa dang / byang chub sems dpa' sems bskyed pa dang / mchod pa dang dbul ba bzang
po byas nas sems bskyed pa dang / gzhan gyi lha bltas nas sems bskyed pa dang / de
bzhin gshegs pa'i sku mthong nas sems bskyed pa ste / dang po gsum ni byang chub
kyi sems dngos¹⁸ yin no //^{19, (18)}

zhes gsungs pa dang / 'Phags (D. 100a) pa Chos bcu pa'i mdo las kyang gsungs te /

sangs rgyas dang byang chub sems dpa' la sogs pas bskul nas sems bskyed pa
dang / byang chub kyi sems kyi phan yon mthong nas sems bskyed pa dang / sems can
sdug bsngal ba mthong nas sems bskyed pa dang / sangs rgyas dang byang chub sems
dpa'²⁰ phun sum tshogs pa mthong nas sems bskyed pa'o //^{21, (19)}

(18) *Jñānamudrāvaipulyasūtra*. Tib. P. No. 799, Thu 261a8-b7.

(19) *Daśadharmakāsūtra*. Tib. P. No. 760 (9), Dzi 187a6-187b4. *Śikṣāsamuccaya*, Bendall ed., p. 8.

1GN P om. 2 N *gzhags*. 3 D *pas*. 4 D *sog*. 5 CD om. 6 GNP *btang*.
7 GP om. 8 GP om. 9 D *de gos*. 10 GNP om. 11 P 'gre. 12 GNP *bya'i*.
13 NP om. 14 NP *slob*. 15 GNP om. 16 GNP om. 17 G repeats. 18 PG *dngos po*.
19 CD om. 20 GNP *dpa'i*. 21 CD om.

zhes gsungs so // *mDo sde*¹ *rgyan* las ni rkyen lnga gsungs te /

grogs² stobs rgyu stobs rtsa ba'i³ stobs //

thos stobs dge ba goms pa'i stobs //

mi brtan pa dang brtan 'byung ba //^{4, (20)}

zhes gsungs so // 'phags pa Thogs med kyi zhal snga nas rkyen bzhi dang / stobs bzhi
gsungs so // rkyen bzhi ni de bzhin gshegs pa'i phung sum tshogs pa mthong nas sems
bskyed pa dang / phan yon mthong nas sems bskyed pa dang / dam pa'i chos 'jig pa'i dus su
sems bskyed pa dang / sems (G. 156a) can (P. 111b) sdug pa mthong nas sems bskyed
pa'o // stobs bzhi ni⁵ rgyu'i stobs dang / sbyor ba'i stobs dang / rang gi stobs dang / (C. 102b)
gzhan gyi stobs so // de⁶ ltar rgyu dang rkyen nye bar tshogs pa na byang chub kyi sems nye
bar skye bar 'gyur ro //

skyes pa'i ngo bo ni / 'dun pa dang / 'dod pa dang / smon pa ni rnam (N. 110a) grangs
so // ji skad du 'phags pa Byams pa'i zhal snga nas /

sems bskyed pa ni gzhan don phyir //

yang dag rdzogs pa'i byang chub 'dod //^{7, (21)}

ces gsungs so // 'dun pa dang snying rje dang mtshungs par ldan pa'i yid kyi rnam par shes
pa yul khyad par can la dmigs pa ni ngo bo ste / dkar po'i chos kyi lo tog ma lus pa bskyed
pa'i sa gzhi bzang po lta bu ste / 'dun pa sa lta bu'i byang chub kyi sems so //

rnam pa de nyid kyi khyad par ram⁸ bye brag ste / g-yo sgyu la sogs pa'i skyon gang gis
kyang ma gos shing dri ma med pa ste / dper na gser bzang po g-ya' dang rdo dang sa la
sogs pa'i skyon med pa lta bu ste / sems de nyid bsam⁹ pa bzang po gser lta bu'o // de'i don
rgyas par 'Phags pa Blo gros mi zad pas bstan pa'i mdo las //¹⁰

btsun pa Sha¹¹ ra (D. 100b) dwa¹² ti'i bu byang chub kyi sems de ni ji lta bu'i rnam
par sems skyes pa yin //¹³ smras pa rigs kyi bu sems de ni theg pa dman pa dang ma
'dres pas gtsang ba'i rnam par skyes so //⁽²²⁾

zhes bya ba la sogs pa rgyas par gsungs so //

(20) *Mahāyānasūtrālaṅkārikā* 4.7.

(21) *Abhisamayālaṅkārikā* 1.18ab.

(22) *Akṣayamatīrdeśasūtra*. Braarvig ed., p. 20.24-28.

1 G *sde*'i. 2 N *grags*. 3 P *pa*'i. 4 GNP om. 5 CD *na*. 6 C *da*. 7 GNP om.
8 GNP *ram* /. 9 D 'sam. 10 GNP om. 11 GNP *shā*. 12 GNP *dwā*. 13 G om.

de sbyang ba ni sems de dang po gang nas kyang ma 'ongs shing / tha ma gar (G. 156b) yang mi 'gro ba / gang na yang mi gnas pa ste / kha dog med pa / dbyibs med pa / gzod ma nas ma skyes pa / tha mar mi 'gag pa / rang bzhin gyis¹ stong pa / 'od gsal ba'i ngo bo yang nas yang du dran par bya'o // yang na byams pa dang / snying rje byang chub kyi sems de (P. 112a) goms pas brtan² par bya ba dang / shin tu byang bar bya ste / sems kyi skad cig re re la dran pa rgyun³ chags su bya ba dang /⁴ dran pa dang /⁵ shes bzhin dang / tshul bzhin du sems pa dang⁶ / bag yod pas gnas par bya'o //

byang chub kyi sems gzung ba ni sems can mi gtong⁷ ba bzhi dang / skyes bu dam pa'i rnam par (N. 110b) rtog⁸ pa brgyad dang / nang gi thabs la mkhas pa bcu dang / phyi'i thabs la mkhas pa drug dang / bdag dang gzhan brje ba dang / bdag (C. 103a) dang gzhan mnyam par bya ba dang / 'Phags pa bZang spyod dang /⁹ rDo rje rgyal mtshan gyi bsngo ba chen po bcu la sogs pa gdab bo¹⁰ //

de la sems can mi gtong¹¹ ba ni bdag la phan 'dogs pa'i sems¹² mi gtong¹³ ba dang / bdag la gnod pa byed pa mi gtong¹⁴ ba dang / dngos su sdug bsngal ba dang /¹⁵ sdug bsngal gyi rgyu sogs pa¹⁶ mi gtong¹⁷ ba dang / spyir¹⁸ sems can mi gtong¹⁹ ba'o //

de la bdag la phan 'dogs pa mi gtong²⁰ ba ni / drin shes shing drin gzo ba'i sems kyi mi gtong²¹ ba ste / slob dpon Klu sgrub kyi zhal snga nas /

'khor ba thog ma med pa nas //

nyon mongs me yis gdungs pa (G. 157a) yis //

srid pa'i btson ra'i nang gnas pa //

sams can gang yin de dag sngon //

pha ma mdza' bshes rtsa lag tu //

gyur cing phan chen btags pas na //

byas pa gzo ba nyid du bya //

'di dag bdag gis sdug bsngal byas //

da ni bde bar bya ba'i rigs //^{22, (23)}

(23) *Bodhicittavivaraṇa* 74-75.

1 GNP gyi. 2 GNP bstan. 3 N rgyu. 4 GNP om. 5 GN om. 6 C ste.
7 GP gtang, N btang. 8 P rtogs. 9 NP om. 10 N ba. 11 GNP gtang. 12 CD sems can.
13 GNP gtang. 14 GNP gtang. 15 NP om. 16 NP om. 17 GNP gtang. 18 N sbyor.
19 GNP gtang. 20 GNP gtang. 21 GNP gtang. 22 GNP om.

zhes gsungs so // 'di'i don rgyas par mdo sder blta bar bya'o //

skye ba (D. 101a) 'di'i pha ma dang¹ gnyen 'dun dang / grogs la sogs pa bdag la phan
'dogs pa la drin shes shing drin gzo ba bya dgos te / de ltar ma gyur na /

byas la lan du phan mi 'dogs //^{2, (24)}

zhes pa'i nyes byas kyang 'byung (P. 112b) bar 'gyur ro //

bdag la gnod pa byed pa'i sems can mi gtong³ ba ni / las bdag gir byas⁴ pa'i sems kyis⁵
mi gtong⁶ ste / ji skad du /

'dzam bu'i gling gi skyes mchog ni //

legs kyi lan ni legs kyis ldon //

nyes kyi lan yang legs kyis ldon //

zhes dang / Yum⁸ brgyad stong pa las kyang /

byang chub sems dpa' pha rol pos nyes pa chen po⁹ byas kyang / de dang rtsod pa
mi byed par de la gnod pa dang¹⁰ sems 'khrug par mi bya'o // gal te gsod na yang de la
zhe sdang bar mi bya'o // sems can su la yang zhe sdang bar mi bya'o // (N. 111a)
byang chub sems dpa' rnam la ni brtan par 'du shes bskyed par bya'o //^{11, (25)}

zhes gsungs pa dang / yang ji skad du //¹²

byang chub sems dpa' sems can thams cad la pha dang ma dang bu dang bu mo'i
'du shes (G. 157b) bya'o¹³ // rang nyid bde bar 'dod pa ltar sems can gzhan yang bde ba
la sbyar bar bya'o // sems can (C. 103b) ma lus pa sdug bsngal ba las thar bar bya'o //
sems can gang yang mi gtong¹⁴ ngo // de dag gis¹⁵ bdag gi¹⁶ lus dum bu brgyar btubs¹⁷
kyang de dag la gnod pa'i¹⁸ sems mi bya bar byams pa dang snying rje bskyed do //^{19,}

(26)

zhes gsungs pa dang / rje btsun Ārya de ba'i zhal snga nas kyang /

gnod pa drag po byung ba na //

sngon gyi las su shes par bya //²⁰

zhes gsungs so // gal te de ltar ma gyur na //²¹

(24) *Bodhisattvasaṃvaraviṃśaka* 18c.

(25) *Aṣṭasahāsrīkāprajñāpāramitāsūtra*. Vaidya ed., pp. 209.6-210.3.

(26) *Aṣṭasahāsrīkāprajñāpāramitāsūtra*. Vaidya ed., p. 14.16-22.

1 G dang /. 2 GNP om. 3 GP gtang, N btang. 4 GNP byed. 5 GNP kyi. 6 GNP gtang.

7 N /. 8 C lums. 9 GNP om. chen po. 10 G dang /. 11 CD om. 12 CDNP om.

13 CD shes so. 14 GNP gtang. 15 CD gi. 16 CD gis. 17 NP gtugs.

18 GNP om. 19 CD om. 20 GNP om. 21 NP //.

gzhan gyis¹ bshags kyang mi nyan par //
khros nas gzhan la 'tshog pa dang //
pha rol shad² kyis 'chags pa spong //
khros pa rnams ni yal bar 'jog //
gshe la lan du gshe la sogs //⁽²⁷⁾

zhes pa'i pham pa dang nyes byas 'byung bar 'gyur ro //

dnegos su sdug bsngal ba'i sems can mi gtong³ ba ni / tsha ba dang (P. 113a) grang ba
dang⁴ bkres pa dang skom pa la sogs pa dang / mtshams med pa la sogs pa dang / bslab pa
nyams pa dang / sdug bsngal sna tshogs kyis⁵ gdungs pa mthong na⁶ snying rje'i sems
(D. 101b) kyis mi gtong⁷ ste / rje btsun Ārya de ba'i zhal nas /

'khor lo dpag tshad bcu gnyis pa //
lcags byas mgo la 'khor ba dang //
byang chub sems ni bskyed ma thag //
med par 'gyur zhes⁸ thos pa yin //^{9, (28)}

zhes gsungs pa dang / slob dpon dPa' bo'i zhal nas kyang /¹⁰

na ba'i bu la khyad par du //
ma ni gdung ba skye ba (G. 158a) ltar //
de bzhin byang chub sems dpa' rnams //
dam pa min la khyad par brtse //^{11, (29)}

zhes gsungs pa dang / slob dpon Bha¹² bya'i zhal nas kyang /

sdug bsngal drag pos gdungs pa¹³ yi //
sdug bsngal can dag mthong ba'i tshe //
snying rje rus pa'i gting nas (N. 111b) ni //
skye zhing de la phan par byed //^{14, (30)}

ces gsungs te / rgyas par mdo sder blta bar bya'o //

sdug bsngal gyi rgyu la sogs pa'i sems can ni / snying brtse ba'i sems kyis mi gtong¹⁵
ste / bslab pa¹⁶ nyams pa dang / mtshams med pa¹⁷ byed pa dang / srog gcod pa

(27) *Bodhisattvaviṃśaka* 7ab, 13c, 13ab.

(28) *Cittaviśuddhiprakaraṇa* 32.

(29) Cf. *Catuhśataka* 5.11.

(30) Cf. *Madhyamakahr̥daya* 3.296cd, 297ab, 301ab.

1 GNP gyi. 2 GNP bshad. 3 GNP gtang. 4 N dang /. 5 GNP kyis. 6 G na /. 7 GNP gtang.

8 GNP ces. 9 NP om. 10 N // . 11 GNP om. 12 GNP ba. 13 G gdung ba. 14 GNP om.

15 GNP gtang. 16 G pa pa. 17 GNP om.

dang / sdig pa'i las sna tshogs byed pa de dag las bzlog par bya ste / ji skad du¹ 'Phags pa
Dran pa nyer² gzhag las /³

gang zhig brtul zhugs bzang mnos nas //
legs par bsrung bar mi byed pa //
de ni nges par sha dang rus //
'jig (C. 104a) pa'i me ma mur du sreg /^{4, (31)}

ces gsungs pa dang /

'phags pa rnyed dang 'dod gnas pa //
tshul khrims 'chal pa mthong nas ni //
'di yi 'gro ba cir 'gyur zhes⁵ //
mchi ma 'ang⁶ rab tu 'byung bar bya //^{7, (32)}

zhes gsungs pa dang / slob dpon Klu sgrub kyi zhal snga nas (P. 113b) kyang /

'jig rten na ni sems can gang⁸ //
rtag tu sdig pa byed 'dod pa //
rtag tu de dag thams cad ni //
gnod pa med par bzlog gyur cig⁹ //^{10, (33)}

ces gsungs so¹¹ //

spyir sems can mi gtong¹² ba ni byams pa'i sems kyi¹³ mi gtong¹⁴ ba dang / 'Phags pa
sPobs pa'i blo gros kyi mdo las /¹⁵

byang chub sems dpa' sems can thams cad la bu bzhin du (G. 158b) blta bar bya ba
dang / rang gi¹⁶ lus bzhin du blta bar bya'o //^{17, (34)}

zhes gsungs pa dang / mDo sde rgyan las kyang /

ji ltar phug¹⁸ ron rang gi bu mchog byams //
rang gi bu de nye bar 'khyud nas 'dug //
de bzhin sdug bsngal ba yi sems can la //
brtse bcas byang chub sems dpa' de dang (D. 102a) 'dra //⁽³⁵⁾

zhes gsungs pa dang / 'Phags pa Rig pa mchog gi rgyud chen po las kyang /¹⁹

(31) Cf. *Saddharmasmṛtyupasthānakārikā*. Tib. D. No. 4179, Nge 36b3.

(32) *Gaganagañjaparipṛcchāsūtra*. P. No. 815, Nu 286a1-2. Cf. *Śikṣāsamuccaya*, Bendall ed., p. 45.

(33) *Ratnāvalī* 5.82.

(34) *Pratibhānamatiparipṛcchāsūtra*. Tib. P. No. 818, Nu 302a1-2.

(35) *Mahāyānasūtrālamkārikā* 13.22.

1 CDG du /. 2 G nye. 3 G //. 4 GNP om. 5 GNP ces. 6 GNP om. 7 PN /.
8 D gar. 9 C cing. 10 GN om. 11 G gsungso. 12 GP gtang, N btang. 13 GNP kyi.
14 GNP gtang. 15 GNP om. 16 NP gis. 17 CD om, N /. 18 GNP phu. 19 GNP om.

byang chub sems dpa' rang gi bde ma chags //
rang gi sdug bsngal dag gis mi mjed kyang //
gzhan gyi sdug bsngal dag gis sdug bsngal 'gyur //
gzhan bde na ni byang chub sems dpa' dga' //

zhes gsungs pa dang / *dpal rDo rje mkha' 'gro'i rgyud dang / dpal mChog dang po las*
kyang /¹

ji srid 'khor ba'i gnas su ni //
mkhas mchog gnas par gyur pa na //
de srid mtshungs (N. 112a) med sems can don //
mya ngan mi 'da² byed par nus //⁽³⁶⁾

zhes gsungs te / rgyas par mdo sder blta bar bya'o //

skyes bu dam pa'i rnam par rtog pa brgyad³ ni /⁴ kyi hud nam zhig na bdag gis⁵ sems can
gyi skye ba'i sdug bsngal med par byed nus par 'gyur⁶ zhig gu /⁷ de bzhin du rgas pa'i sdug
bsngal dang / na ba'i sdug bsngal dang / 'chi ba'i sdug bsngal med par byed⁸ par⁸ 'gyur zhig
gu / sems can ma bsgral ba rnam sgrol bar byed nus par 'gyur / ma grol⁹ ba rnam dang /
dbugs (C. 104b) ma phyin pa rnam dang / (P. 114a) yongs su mya ngan las ma 'das pa
rnam nam zhig mya (G. 159a) ngan las zlo nus par 'gyur zhig gu snyam pa'i sems¹⁰ skad
cig re re la dran pa rgyun chags su bya'o //

nang gi thabs la mkhas pa ni gzhan gyi¹¹ sdug bsngal bdag gir byed pa dang / bdag gi
sdug bsngal gyis gzhan gyi sdug bsngal bsal ba dang / bdag gi bde ba dang gzhan gyi sdug
bsngal brje ba dang / gzhan gyi sdug bsngal gyis bdag dus rtag tu sdug bsngal gyis gdungs
pa ste / ji skad du *Rig pa mchog gi rgyud chen po las* /¹²

byang chub sems dpa' rang gi bde¹³ ma chags //
rang gi sdug bsngal dag gis mi mjed kyang //
gzhan gyi sdug bsngal dag gis sems sdug bsngal //
gzhan bde na ni byang chub sems dpa' dga' //

zhes gsungs so¹⁴ // gzhan gyi sdig pa bdag gi sdig par byas nas bshags pa dang / gzhan gyi
dge ba bdag gi dge bar byas nas yi rang ba dang / bdag gi dge ba gzhan gyi dge

(36) *Śrīpramādhyā*. Tib. P. No.120, Ta 178b5-6.

1 N // 2 G mda'. 3 N po. 4 CD om. 5 CD di. 6 GNP gyur.
7 D tu. 8 C byed nus, GNP om. 9 GNP sgrol. 10 GNP om pa'i sems. 11 GNP om.
12 CD // 13 GNP bde ba de. 14 G gsungso.

bar byas¹ nas yi rang ba dang / gzhan gyi dge ba bdag gi (D. 102b) dge bar byas nas yongs
su bsngo ba'o //

phyi'i thabs la mkhas pa ni bsdu ba'i dngos po bzhi dang / rig pa'i gnas lnga dang /
mkhas pa bcu dang / pha rol tu phyin pa² drug dang / tshad med pa bzhi la sogs pas sems
can ma lus pa smin par byed de /³ rjes su⁴ gzung⁵ ba dang / (N. 112b) tshar⁶ bcad pa dang /
brid pa dang / bsdigs pa dang / rtsigs la dbab pa dang / rngan pas brngan⁷ pa'o //

'Phags pa rDo rje rgyal mtshan gyi bsngo ba bcu pa dang / bZang po spyod pa dang /
slob dpon Klu sgrub kyis (G. 159b) mdzad pa'i sMon lam nyi shu pa dang / Ba tshba⁸ chu
klung nas 'byung⁹ ba'i tshigs su¹⁰ bcad pa bcu gcig pa la sogs pas sems can mi gtong¹¹
(P. 114b) bar bya'o // 'Phags pa 'Od srungs kyis zhus pa las /

srog gi phyr yang brdzun mi smra ba dang / sems can la g-yo sgyu med pa'i lhag
pa'i bsam pas gnas par¹² bya ba dang / sems bskyed pa'i gang zag la ston pa'i 'du shes
bskyed pa dang / sems can gang dag smin par byed pa de dag thams cad bla na med
pa'i byang chub chen por smin par byed kyi nyan thos dang rang sangs rgyas kyis sa ma
yin pa'o //(37)

de bzhin du 'Phags pa sPyan ras (C. 105a) gzigs dbang phyug gis zhus pa las kyang /

rigs kyis bu sems bskyed ma thag pa'i byang chub sems dpa' chos bdun la bslob par
bya¹³ ste / rnam par rtog pas kyang 'dod pa la spyad par mi bya na dbang po gnyis kyis
gnyis sbyor ba lta smos kyang ci dgos / tha na rmi lam du yang mi dge ba'i bshes
gnyen bsten¹⁴ par mi bya ba dang / bya dang 'dra bar sems kyis yongs su 'dzin pa med
par bya ba dang / thabs dang shes rab la mkhas pas nga rgyal dang nga yir 'dzin pa
med par bya ba dang /¹⁵ dngos po dang dngos po med pa¹⁶ spangs nas stong pa nyid kyis
ting nge 'dzin brtan por bsgom pa dang / yang dag pa ma yin pa'i kun tu rtog pa zhi bas
'khor ba la dga' bar mi byed pa ste /⁽³⁸⁾

mdor na dran pa dang shes bzhin dang tshul bzhin du sems pa¹⁷ dang / bag yod pa dang mi
'bral ba ste /

(37) *Kāśyapaparivartasūtra* [4]. von Stael-Holstein ed., pp.8-10.

(38) *Avalokiteśvaraparipṛchāsūtra*. Tib. P. No.817, Nu. 294a3-6.

1 CD bsdes. 2 D om. 3 P //. 4 N rjesu. 5 GNP bzung. 6 G chir. 7 GNP rngan.
8 G tshwa. 9 CD byung. 10 G tshigsu. 11 GNP gtang. 12 C pa. 13 NP bya ba. 14 GNP brten.
15 GNP om. 16 CD par. 17 G dpa'.

shes bzhin med pa'i skyon chags (G. 160a) pas //

ltung ba'i rnyog dang bcas par 'gyur //

glo rdol bum pa'i chu bzhin du //

dran pa la ni de mi gnas //(39)

yang /¹

dran pa dang ni shes bzhin dang //

tshul bzhin du (D. 103a) ni sems pa² dang //

bag yod pa dang ma bral zhing //(40)

(N. 113a) zhes slob dpon Shānta de bas gsungs so³ // sems kyi skad cig re re la (P. 115a) mi
brjed par bya zhing / dran pa rgyun chags su byas pas byang chub kyi sems yongs su⁴
gzung⁵ bar bya'o // gal te de ltar ma byas na /⁶

sdug bsngal mgon med gyur pa la //

ser snas chos nor mi ster dang //

chos 'dod pa la sbyin mi byed //

nad pa'i rim gro bya ba spong⁷ //

dgos pa'i don du 'gro mi byed //

sams can don la bya⁸ ba chung //(41)

zhes pa'i pham pa dang⁹ nyes byas 'byung ngo¹⁰ //

byang chub kyi sems yongs su¹¹ bsrung ba ni¹² sems brjed¹³ par byed pa dang / nyams
par byed pa dang / gtong bar byed pa las bsrung¹⁴ ste / 'Phags pa 'Od srungs kyi zhus pa
las /¹⁵

gzhan 'gyod pa med pa la 'gyod pa bskyed pa dang / mkhan po dang slob dpon
dang sbyin gnas slu¹⁶ ba dang / sems can g-yo dang sgyu dang longs spyod kyi lhag
pa'i bsam (C. 105b) pas ma yin pa dang / sems bskyed pa'i gang zag la tshigs su¹⁷ bcad
pa ma yin pa¹⁸ brjed pa'o //^{19, (42)}

zhes gsungs so²⁰ // 'Phags pa bSod nams thams²¹ cad sdud pa'i ting nge 'dzin las 'di skad
du /

(39) *Bodhicaryāvatāra* 5.26cd and 25cd.

(40) *Śikṣāsamuccaya* 27.

(41) *Bodhisattvasaṃvaravimśaka* 6cd, 10c, 17dc, 11b.

(42) *Kāśyapaparivartasūtra* [3]. von Stael-Holstein ed., pp. 6-7.

1 NP om. 2 G *dpa'*. 3 G *gsungso*. 4 GN *yongsu*. 5 GNP *bzung*. 6 GNP // . 7 P *sbong*.

8 GNP *byang*. 9 GNP *dang /*. 10 G *'byungo*. 11 N *yongsu*. 12 GNP *ni /*.

13 CN *brjad*, G *rjed*. 14 GNP *bsrung bar bya*. 15 GNP om. 16 GNP *bslu*. 17 G *tshigsu*.

18 CD *pas*. 19 CD om. 20 G *gsungso*. 21 P *thabs*.

sred med kyi bu chos bzhis byang chub kyi sems brjed par 'gyur te / lhag (G. 160b) pa'i nga rgyal dang / chos la ma gus pa dang / dge ba'i bshes gnyen la khyad du gsod¹ pa dang / log pa'i tshig smra ba'o // yang bzhi ste / nyan thos dang² rang sangs rgyas dang 'dris par³ byed pa dang / theg pa dman pa la mos pa dang / byang chub sems dpa' la sdang⁴ zhing skur⁵ ba 'debs pa dang / chos la dpe⁶ mkhyud byed pa'o⁷ //⁸ yang bzhi ste / sgyu byed pa dang / g-yo byed pa dang / bla ma la lce gnyis byed pa dang / rnyed pa dang bkur sti la lhag (P. 115b) par zhen pa'o // yang bzhi ste / bdud kyi las ma rtogs pa dang / las kyi sgrib pas bsgribs pa dang / lhag pa'i bsam pa stobs chung ba dang / thabs dang shes rab (N. 113b) med pa ste / de dag gis byang chub kyi sems brjed par 'gyur ro //⁹,⁽⁴³⁾

zhes gsungs so // *Klu'i rgyal po rgya mtshos zhus pa las /*

klu'i rgyal po thams cad mkhyen pa'i ye shes de ni lam log pa dang¹⁰ (D. 103b) lam ngan pa nyi shu rtsa gnyis dang bral ba yin te / nyan thos kyi sems dang ma bral ba dang / rang sangs rgyas¹¹ kyi sems dang ma bral ba dang / nga rgyal dang lhag pa'i nga rgyal dang / g-yo sgyu dang / rgyang pan pa'i gsang tshig dang / log par zhugs pa dang / skye bas skrag¹² pa dang / khengs pa dang / rtsod pa dang / 'dod chags dang / zhe¹³ sdang dang / gti mug dang / las kyi sgrib pa dang / chos kyi sgrib pa dang / bdag la bstod cing gzhan la smod pa dang / chos la dpe mkhyud byed pa dang / brjed ngas pa dang / sdig pa'i (G. 161a) grogs po dang / bla ma la 'khu ba dang / pha rol tu phyin pa drug dang mi mthun pa dang / chad pa dang¹⁴ rtag pa dang / thabs mi mkhas pas bsdu ba bzhi dang /¹⁵ sdig pa thams cad dang ma bral ba ste / de dag gis byang chub kyi sems brjed par 'gyur ro //¹⁶,⁽⁴⁴⁾

zhes gsungs so // *sDong po bkod las kyang /*

kye rgyal ba'i sras dag byang chub sems dpa' nang phan tshun ngan sems bskyed pa'i kha na ma tho ba'i las las che ba ni ma mthong ngo⁽⁴⁵⁾

zhes gsungs so // (C. 106a) de bzhin du *Dad pa'i stobs bskyed pa* la sogs pa'i mdo las rgyas par gsungs pas mdo sder bltar bar bya'o¹⁷ //

(43) *Sarvapuṇyasamuccayasamādhisūtra*. Tib. P. No. 802, Du 105a5-b3.

(44) *Sāgaranāgarājaparipṛcchāsūtra*. Tib. P. No. 820. Not identified.

(45) *Gaṇḍavyūhasūtra*. Not identified.

1 GNP *sod*. 2 G *dang /*. 3 P *bar*. 4 NP *dang*, C *lnga sngang*. 5 C *bskur*. 6 CD *bpe*.
7 GP *pa dang*. 8 GP */*. 9 CDP *om*. 10 GNP *dang /*. 11 G *sangyas*. 12 P *sgrag*.
13 P *zhes*. 14 CD *dang /*. 15 GNP *om*. 16 CDP *om*. N */*. 17 GNP *blta'o*.

ltung ba 'byung ba'i rgyu ni rigs med pa dang / snying rje chung ba dang / 'khor ba'i sdug
bsngal gyis mi 'jigs pa dang / sdig pa'i (P. 116a) grogs pos zin pa dang / byang chub chen po
thag ring bar sems pa dang / bdud kyis byin gyis brlabs pa dang / theg pa dman pa'i gang
zag bsten pa dang / theg pa chung ngu'i gzhung la brtson pa dang / sems can blos btang ba
dang / byang chub sems dpa' la tshig ngan brjod cing ngan sems bskyed pa dang / byang
chub kyi sems dang mi mthun pa'i phyogs mi spong ba dang / gzhan yang mi shes pa dang /
bag (N. 114a) med pa dang / ma gus pa dang / nyon mongs pa mang ba'o //

btang ba'i nyes dmigs ni stong gsum gyi stong chen po'i sems can dgra bcom par gyur
la /¹ de dag thams cad² bsad³ pa dang / mtshams med pa lnga byas pas 'di'⁴ sdig pa⁵ shin
(G. 161b) tu che ba yin no // gzhan yang nam mkha'⁶ mtha' khyab kyi rdul phra rab kyi
grangs ni (D. 104a) sangs rgyas kyis mkhyen gyi / 'di' sdig pa'i tshad ni 'di tsam zhes sangs
rgyas kyis mkhyen par mi spyod do // 'di' don rgyas par mdo sde dang / *sPyod pa la 'jug pa*
la sogs par blta bar bya'o //

gzhan sems bskyed pa la rjes su yi rang ba'i phan yon ni *Yum brgyad stong pa las* / 'jig
rten gyi khams thams cad srang⁷ la gzhal ba'i grangs ni shes par rung gi⁸ /⁹ gzhan bskyed¹⁰
du bcug pa'i phan yon ni theg pa chen po'i mdo sde dang / *sPyod pa la 'jug pa* la sogs¹¹ par
blta bar bya'o //

phyogs bcu'i sangs rgyas dang byang chub sems dpa' rnam kyis mkhyen par mi
spyod do // gzhan byang chub kyi sems bskyed pa la rjes su¹² yi rang ba byas pa'i bsod
nams kyi phung po¹³ tshad ni shes par mi nus so⁽⁴⁶⁾
zhes gsungs te /¹⁴ rgyas par mdo sder blta bar bya'o //

gzhan sems bskyed pa'i bar chad byas pa'i nyes dmigs ni¹⁵ (P. 116b) '*Phags pa dGe ba'i*
(C. 106b) *rtsa ba yongs su*¹⁶ 'dzin pa'i mdo las /

Sha¹⁷ ra dwa¹⁸ ti'i bu gang sems bskyed pa la bar chad bya bar¹⁹ 'dod dam / bar chad
byed pa de ni Sha²⁰ ra dwa²¹ ti'i²² bu mya ngan las 'das par 'gyur ba'i skal ba med do //²³.

(47)

zhes gsungs pa dang / yang

(46) *Aṣṭasāhasrikāprajñāpāramitāsūtra*. Vaidya ed., p. 216. Cf. *Śikṣāsamuccaya*, Bendall ed., p. 314.

(47) *Kuśalamūlaparidharasūtra*. Not identified.

1 GNP om. 2 C *cad* //, D *cad la*. 3 CD *gsad*. 4 CD 'di'. 5 P om. 6 GN *namkha'*.
7 P *srad*. 8 GNP *gis*. 9 GNP om. 10 GNP *skyed*. 11 GNP om. *pa la sogs*. 12 G *rjesu*.
13 GNP om. *phung po*. 14 CD om. 15 G *ni /*. 16 N *yongsu*. 17 GNP *shā*. 18 GNP *dwā*.
19 N om. *bya bar*. 20 GNP *shā*. 21 GNP *dwā*. 22 C *ta'i*. 23 CDNP om.

stong gsum gang gā'i¹ klung gi bye ma snyed kyi dgra bcom pa bsad pa dang /
 mtshams med pa lnga byed pa bas sdig pa che⁽⁴⁸⁾

zhes 'Phags pa brGyad stong pa las gsungs so // sPyod pa la² 'jug pa las kyang /
 gang zhid byang (G. 162a) chub sems bskyed pa'i //
 bsod nams bar chad gegs byed pa //
 sems can don la dman gyur pas //
 de yi ngan 'gro mu mtha' med //^{3, (49)}

ces gsungs te / rgyas par mdo sder (N. 114b) blta'o //

byang chub kyi sems spel ba de ni sems de nyid byang chub kyi sems rnam pa gsum du
 spel te / byang chub kyi sems sdom pa'i tshul khrims dang / byang chub kyi sems dge ba
 chos sdud ba'i tshul khrims dang / byang chub kyi sems sems can gyi don byed pa'i tshul
 khrims te / dper na yar ngo'i zla ba rim gyis 'phel ba bzhin du sems 'di yang 'phel bar 'gyur
 te / de yang /⁴

yangs shing rgya che dag pa dang //
 phan pa rgya chen byed pa dang //
 dge ba nyid kyis lhag pas na //
 bsam pa dag pa lhag bsam yin //^{5, (50)}

zhes mDo (D. 104b) sde'i⁶ rgyan du gsungs so⁷ // lhag pa'i bsam pa zla ba tshes pa lta bu
 ste / 'jug pa byang chub kyi sems zhes kyang bya'o // Byang chub sems dpa'i tshul khrims
 kyi le'u las / tshul khrims rnam pa gsum ste / rang bzhin gyi tshul khrims dang / goms pa'i
 tshul khrims dang / yang dag par blang ba'i tshul khrims so //

de la rang bzhin gyi tshul khrims ni /⁸ sems can thams cad rigs gcig yin pa dang / de
 bzhin gshegs pa'i (P. 117a) snying po can yin pa dang / theg pa chen po'i rigs can yin pa ste /
 bsgrubs⁹ na 'grub pa'i skal ba can yin yang nyes pa rnam pa bzhis bkab¹⁰ nas (G. 162b) 'dug
 pa yin te / mDo sde'i rgyan las /

nyon mongs goms dang grogs ngan dang //
 phongs dang gzhan gyis¹¹ dbang byas dang //

(48) *Aṣṭasāhasrikāprajñāpāramitāsūtra*. Vaidya ed., p. 193.32.

(49) *Bodhi(sattva)caryāvatāra* 4.9.

(50) *Mahāyānasūtrālamkārikā*. Not identified.

1 GNP *ganggā'i*. 2 RK *las*. 3 GNP *om*. 4 GNP *om*. 5 P/. 6 GNP *sde*.

7 N *gsungso*. 8 GNP *om*. 9 GNP *sgrubs*. 10 GP *bkag*. 11 GNP *gyi*.

mdor na rigs kyi nyes pa ni //

rnam pa bzahir ni yang dag brjod //(51)

ces gsungs pas rigs can (C. 107a) gyi gang zag de ni rang bzhin gyis¹ snying rje che ba dang / rang bzhin gyis pha rol tu phyin pa'i yon tan rgyud la tshang bar ldan pas rang bzhin gyi tshul khirms can zhes bya'o //

goms pa'i tshul khirms ni rnam pa gsum ste / skye ba snga ma phan chad la theg pa chen po la goms pa cher byas pa dang / goms pa 'bring du byas pa dang / skye ba dpag tu med pa nas goms par byas pa ste / de bas na Byams pa'i zhal nas /

sangs rgyas rnam la bkur sti byas //

de la (N. 115a) dge ba'i rtsa ba bskyed //

dge ba'i bshes kyis mgon byas pa //

'di mnyan pa yi² snod yin no³ //

sangs rgyas bsnyen bkur yang dag zhugs //

sbyin dang tshul khirms sogs spyad pas //

snod du dam pa rnam kyis shes //^{4, (52)}

zhes gsungs so //

de la yang dag par blangs pa'i tshul khirms ni / slob dpon gyis brtag pa gsum gyis legs par brtags⁵ nas snod kyi rim pa bzhin du tshul khirms sbyin par bya ste / sngar brjod pa'i gang zag dang / de'i so sor thar pa'i pham pa bzhi 'khor dang bcas pa dang / theg pa chen po'i pham pa dang 'dra ba bzhi dang / nyes bcas⁶ bzhi bcu rtsa drug sbyin par bya'o // gang zag 'bring po de la ni gang zag 'bring po de'i sdom pa sbyin (G. 163a) par bya ste / de'i steng du 'Phags pa Nam mkha'i⁷ snying po (D. 105a) la sogs pa'i rtsa ba'i (P. 117b) ltung ba bco brgyad dang / slob dpon Shānta de bas gsungs pa'i gnod pa bcu bzhi po sbyin par bya'o // gang zag gsum pa de la ni de dag gi steng⁸ du 'Phags pa mDo sde bdun brgya pa las gsungs pa'i tshul khirms bzhi brgya pa dang /⁹ theg pa chen po'i mdo sde las gsungs pa'i tshogs kyi lam pa'i byang chub sems dpa'i¹⁰ bslab pa mtha' dag bsrung bar bya ste / tshogs kyi lam pa la ni sdom pa'i tshul khirms gtso bo yin no // sbyor ba'i lam pa la ni dge ba chos sdud¹¹ pa'i tshul khirms gtso bo yin no // 'jig rten las 'das pa'i lam pa la ni sems can don byed pa'i tshul

(51) *Mahāyānasūtrālamkārikā* 3.7.

(52) *Abhisamayālamkārikā* 4.6-7.

1 P gyi. 2 GNP pa'i. 3 G yino. 4 N om. 5 N om. par brtags. 6 CD byas.
7 GN namkha'. 8 D stong. 9 CD om. 10 GNP dpa'. 11 GN bsdud.

khirms gtso bo yin no // gang zag gcig gi rgyud la rtsis (C. 107b) na tshogs lam chung ngu'i
 dus su gang zag dang po'i bslab pa la brtson par bya'o // tshogs lam 'bring gi dus su gang zag
 'bring po'i bslab pa la brtson par bya'o // gang zag gsum pas ni gsum pa'i bslab pa la brtson
 par bya'o //

sngar bshad pa'i goms¹ pa'i tshul khirms la dgongs nas 'Phags pa Dang bsgom pa'i mdo
 las /

theg pa chen po la dad pa'i bag (N. 115b) chags byang chub sems dpa'i rjes su²
 'brang ba de ni 'di ltar rjes su 'brang ste / de 'gro 'am / 'dug gam /³ nyal lam /⁴ gnyid log
 gam / ra ro 'am / myos kyang rung ste / rtag tu⁵ theg pa chen po la dad par 'gyur ro //
 byang chub sems dpa' de tshe brjes su zin kyang tshe rabs gzhan du theg pa chen po
 (G. 163b) la⁶ dad⁷ pas byang chub kyi sems brjed du zin yang skye ba de dang⁸ de dag
 tu dman pa dang / skal ba dman pa'i sems su mi 'gyur zhing / sdig pa'i grogs po
 dang⁹ / nyan thos dang¹⁰ rang sangs rgyas dang 'dre bas kyang 'phrogs par mi 'gyur na /
 gzhan mu stegs can gyis 'phrogs par ga la 'gyur / (P. 118a) theg pa chen po'i phyir theg
 pa chen po la dad pa'i rkyen chung ngu zhig rnyed pas kyang myur bar shas che¹¹ ba
 dang / rgyun gyis theg pa chen po'i phyir theg pa chen¹² po la dad par byed do¹³ // de'i
 phyir theg pa chen po la dad pa'i bag chags rjes su 'dren pa de yang tshe rabs su rnam
 par 'phel te / bla na med pa yang dag par rdzogs (D. 105b) pa'i byang chub kyi bar du
 'gyur ro⁽⁵³⁾

zhes gsungs so //

de la byang chub kyi sems kyi phan yon ni rnam pa gnyis te / smon pa'i phan yon
 dang /¹⁴ 'jug pa'i phan yon no //

smon pa'i phan yon ni dpag tu med de / mdor bsdus na 'jig rten du dkon mchog gsum
 gyi¹⁵ gdung rgyun mi 'chad par byed pa dang / dkar po'i chos thams cad kyi rgyu'am sa bon
 yin pa dang / sdig pa 'joms pa dang / ltung ba las ldang¹⁶ ba dang / mi ma yin pa dang /¹⁷
 rims dang / bar du gcod pa thams cad med par byed pa la sogs pa'o // 'Phags pa dge ba'i
 rtsa ba yongs su¹⁸ 'dzin pa'i mdo las /

sha¹⁹ ra dva²⁰ ti'i bu dang po sems bskyed pa'i bsod nams kyi phung po ni ngan

(53) *Mahāyānaprasādaprabhāvanāsūtra*. Tib. P. No. 812, 116b2-7.

1 G gom. 2 G rjesu. 3 NP om. 4 P om. 5 P du. 6 C pa. 7 P dang.
 8 D om. de dang. 9 C dab pa. 10 G dang /. 11 C cha. 12 C chan. 13 C de.
 14 GNP om. 15 GNP om. 16 P ltang. 17 GNP om. 18 N yongsu. 19 GNP shā.
 20 GNP dwā.

ngon tsam dang cung zad tsam ma yin te / 'di ltar bskal pa brgya 'am / bskal pa stong
ngam / bskal pa 'bum gyis kyang brjod (G. 164a) par mi nus na / byang chub sems dpa'
rnams kyis sems bskyed pa'i bsod nams kyi (N. 116a) tshad shes par lta ga la 'gyur⁽⁵⁴⁾
zhes gsungs so // *Yum brgyad stong pa las kyang /*

dmigs pa can gang zhig gis bskal pa gang gā'i klung gi bye ma snyed du dge ba'i
rtsa ba byas pa bas gzhan 'ga' zhig gis nyi ma gcig gam /¹ nyi ma phyed dam / se gol
gtogs² pa gcig tu byang chub tu sems bskyed na bsod nams (P. 118b) che'o⁽⁵⁵⁾
zhes gsungs so // *sPyod 'jug las kyang /*

byang chub sems bskyed gyur na skad cig gis //
'khor ba'i btson rar bsdams pa'i nyam³ thag rnams //
bde gshegs rnams kyi sras zhes brjod bya zhing //
'jig rten lha mir bcas pa'i phyag byar⁴ 'gyur //
gser 'gyur rtsi yi rnam pa mchog lta bur //
mi gtsang lus 'di blangs nas rgyal ba'i sku //
rin chen rin thang med par bsgyur bas na //
rin chen byang chub sems legs brtan par⁵ zung⁶ //^{7, (56)}

zhes bya ba la sogs pa gsungs⁸ so //

'jug pa'i phan yon yang *sPyod 'jug las /*
byang chub smon pa'i sems las ni //
'khor tshe 'bras bu che 'byung yang //
ji ltar 'jug pa'i sems bzhin du⁹ //
bsod nams rgyun chags 'byung ba min //⁽⁵⁷⁾

zhes pa dang / yang /¹⁰

deng nas bzung ste gnyid log gam //
bag med gyur kyang (D. 106a) bsod nams shugs //

(54) *Kuśalamūlaparidharaśūtra*. Tib. P. No.769, Gu 45b2-3.

(55) Cf. *Aṣṭasāhasrikāprajñāpāramitāsūtra*. Vaidya ed., pp.54-67.

(56) *Bodhi(sattva)caryāvatāra* 1.9-10.

(57) *Bodhi(sattva)caryāvatāra* 1.17.

1 NP om. 2 GNP *gtog*. 3 N *nyams*. 4 C *byang*. 5 C *pa*. 6 GNP *bzung*.

7 NP om. 8 GNP om. *pa gsungs*. 9 N *ru*. 10 GNP om. *yang /*.

rgyun mi 'chad¹ par du ma zhig //
nam mkha² mnyam pa rab tu 'byung //(58)

zhes gsungs te / (G. 164b) *Byang chub sems dpa'i sa la sogs pa dang / rgyas par mdo sder*
blta bar bya'o //

sangs rgyas dang byang chub sems dpa' rnam la ni sems can 'khor ba las gdon pa ma
yin pa phrin³ las gzhan ci yang⁴ mi mnga' ste / 'phags pa Klu sgrub kyi zhal nas /

gzhan don phun sum tshogs pa ni //
'bras bu'i gtso bo yin par 'dod //
sangs rgyas⁵ mnyes sogs de las gzhan //
de dag don gyi 'bras bur bzhed⁶ //⁷. (59)

ces gsungs pa yin no // de bas na (C. 108b) sangs rgyas kyi sku dang / ye shes
dang / (N. 116b) yon tan dang / phrin las rnam ni gzhan don 'ba' zhig mdzad pa nyid las
grub pa yin no // 'di ltar

bcom ldan 'das Shākya'i mgon pos kyang (P. 119a) sngon bskal pa brjod du med
pa'i pha rol tu⁸ de bzhin gshegs pa dgra bcom pa yang dag par rdzogs pa'i sangs rgyas
dBang po'i tog ces bya bar sangs rgyas nas / da ltar yang⁹ sangs rgyas pa dang / 'phags
pa sPyan ras gzigs dbang phyug kyang bskal pa grangs med pa'i pha rol tu de bzhin
gshegs pa dgra bcom pa yang dag par rdzogs pa'i sangs rgyas Chos kyi rgyal mtshan
zhes bya bar mngon par rdzogs par sangs rgyas nas da yang bde ba can du bcom ldan
'das sNang ba mtha' yas srod la mya ngan las 'das pa'i tho rangs sPyan ras¹⁰-gzigs
'tshang rgya bar 'gyur⁽⁶⁰⁾

zhes dang /

rje btsun Phyang na rdo rje yang sngon bskal pa gang gā'i¹¹ klung gi bye ma snyed
dgu bcu rtsa gnyis kyi pha rol tu de (G. 165a) bzhin gshegs pa Ye shes sgron ma zhes
bya bar sangs rgyas nas / da¹² yang bskal pa bzang po 'di nyid kyi rjes la de bzhin
gshegs pa rDo rje rtsal gyis 'gro bar 'tshang rgya bar 'gyur ro⁽⁶¹⁾

(58) *Bodhi(sattva)caryāvatāra* 1.19.

(59) *Kudrṣṭinirghātana* 3.

(60) Cf. *Māyopamasamādhisūtra*. Tib P. No. 798, Thu 246b4-7.

(61) Cf. *Tathāgatācintyaguhyanirdeśasūtra*. Tib. P. No. 760 (3), Tshi 191a7-b4.

1 N *chad*. 2 N *namkha'*. 3 GNP *'phrin*. 4 GNP om. *ci yang*. 5 C *rgyal*.
6 C *bzhad*, G *bzhes*, N *gzhed*. 7 GNP om. 8 GNP *tu /*. 9 NP om.
10 P skips to 127a1 (-128a2). 11 PN *ganggā'i*. 12 GNP *de*.

zhes gsungs so¹ // 'di ltar 'khor ba la thog ma dang tha ma med pas 'phags pa 'Jam dpal la yang thog ma med de / dang po'i sangs rgyas yin no // dus gsum gyi sangs rgyas ma lus pa'i thugs ye shes yin no² // sangs rgyas thams cad³ rigs drug tu 'dus la / (D. 106b) rigs drug gi thugs ka na rDo rje rnon po la sogs pa ye shes sems dpa' bzhugs pa dang / dPal gSang ba 'dus pa'i rgyud kyi lha rnam kyi gtso bo 'Jam pa'i rdo rje kun du⁴ bzang po dang / 'Jam dpal gshin rje gshed kyi 'khor lo'i gtso bo mdzad pa dang / dPal rDo rje 'jigs⁵ byed he ru kar snang ba dang / dPal bDe mchog gi bshad rgyud A bhi dha na'i lha'i 'khor lo'i gtso bo mdzad pa dang / Seng ge⁶ sgra dang / Ku mu ta dang / (N. 117a) Khye'u bzang dang / 'Jam dpal tshig sbyin⁷ gzhon nu la sogs pa gdul bya ji ltar mos par snang ba yin no // da yang shar phyogs su 'tshang rgya bar 'gyur bar 'Jam dpal gyi zhing gi bkod (C. 109a) pa'i mdo las gsungs so //

sangs rgyas dang byang chub sems dpa' rnam kyi sems can ma btang⁸ bas 'khor ba ma stongs⁹ kyi bar du sku¹⁰ dang gsung dang thugs kyi phrin¹¹ las dang / phrin¹² las nyi shu rtsa bdun dang / phrin¹³ las sum (G.1 65b) cu rtsa lnga dang / cho 'phrul chen po gsum la sogs pa rgyun mi (P. 127b) 'chad pa 'khor ba¹⁴ nas 'dren par mdzad kyang 'khor ba'i sems can zad par mi 'gyur te / 'khor ba la thog mtha' med pa'i phyir ro // don 'di gsal bar mdzad pa'i phyir 'phags pa sPyan ras gzigs dbang phyug gis sems can rnam 'khor ba nas 'dren par¹⁵ thugs dam bcas pa las / sems can gyi kham la gzigs pas dbugs pa'i dus su bcom ldan 'das snang ba mtha' yas dbu la bzhugs pa yin no // sangs rgyas dang byang chub sems dpa' thams cad kyi¹⁶ sems can thams cad kyi ched du dka' ba dpag tu med pa sku nyams su bzhes pa yin te / 'di ltar bcom ldan 'das Shākya thub pas kyang bskal pa grangs med pa gsum du skyes pa'i rabs de dang de dag tu gtong ba dang / gtong ba chen po dang / shin tu gtong ba'i sbyin pa dang / tshul khriims dang / bzod pa dang / brtson 'grus dang / bsam gtan rnam sems can gyi ched du bya dka' ba dpag tu med pa sku nyams su bzhes pa'i phyir ro // Ba tshwa¹⁷ chu klung gi mdo las ji skad du /

chung ma rnam dang bu tsha rgyal srid dbang phyug chen po dang¹⁸ //

sha rnam dang ni khrag (D. 107a) dang tshil dang lus dang mig //

pha rol dga' ba'i dbang du byas nas ngas ni gtang ba yin //

1 G gsungso. 2 G yino. 3 G om. 4 GNP tu. 5 N 'jig. 6 GNP sengge. 7 GNP bzhin.
8 GNP gtang. 9 G gtongs. 10 P sgu. 11 GNP 'phrin. 12 GNP 'phrin. 13 P 'phrin.
14 GNP om. 15 GNP pa. 16 G kyi. 17 P tsha. 18 GNP pa.

gang (N. 117b) gi sems can rnams la phan na nga la mchod mchog yin //
 sems can rnams la gnod pa byas na nga la gnod ba byas //^{1, (62)}

zhes (G. 166a) bya ba la sogs pa shlo² ka bcu gcig gsungs so // dus deng sang yang 'dzam
 bu'i³ gling 'dir slob dpon Klu sgrub kyis⁴ dbu btang ba dang /slob dpon Ārya de bas sbyan
 btang ba dang / slob dpon Mā ti ci⁵ ta⁶ rta dbyangs kyis⁷ stag mo la sku btang ba dang / bdag
 gi bla ma (P. 128a) bram ze chen po Dze tā ri dgra las rgyal bas stag mo la rkang⁸ pa
 (C. 109b) bcag nas byin pas dus de nyid du 'das so // skyes bu de dag ni byams pa dang
 snying rjes rgyud brlan pa'i byang chub kyis sems sbyong bar mdzad pa yin no //

byang chub sems dpa' rab ni sbyor ba'i lam la byang chub kyis sems gsha' ma skye ste / ji
 skad du /⁹ *Byang chub sems dpa'i sa las*
 mos pa spyod pa'i sa la¹⁰ dge¹¹ ba'i rtsa ba brtan¹² pa gcig la byang chub kyis sems
 skye'o⁽⁶³⁾

zhes gsungs so // de bas na byang chub sems dpa' gzhan gces par bya dgos¹³ pa yin pas na
 bdag dang gzhan brje bas byang chub kyis sems sbyang bar bya'o //

bdag sngon so ma pu ri'i nags gseb na 'dug pa na / 'jig rten dbang phyug gis zhal
 mngon sum du bstan nas rigs kyis bu myur du 'tshang rgya bar 'gyur ba dang / gzhan
 gyi don 'dod na byang chub kyis sems sbyang ba dang / spel ba la brtson 'grus gyis
 shig /¹⁴

ces gsungs nas mi snang bar gyur to // yang rdo rje'i gdan la bskor pa byed tsa na / rje btsun
 ma sGrol ma dang / rje btsun ma Khro gnyer can gyis zhal nas

myur du 'tshang rgya bar 'dod pas byang chub kyis sems (G. 166b) la 'bad par bya'o
 zhes gsungs so // yang rdo rje gdan na 'dug pa'i dus su¹⁵ skar khung nas

bha dan ta¹⁶ khyod byang chub kyis sems sbyang bar 'dod na byams pa dang snying
 rje goms par gyis shig

ces gsung / yang rje btsun gSer gling pa'i zhal nas /

(62) *Sattvārādhanaḡāthā* 5-6a. Cf. *Sattvārādhanaḡastava* 5.

(63) *Bodhisattvabhūmi*. Wogihara ed., p. 326.

1 GNP /. 2 NP *sho lo*. 3 N 'dzambu'i, P *dzambu'i*. 4 GNP *kyi*. 5 G *tshi*.
 6 CD *ma tsi ci ta*. 7 N *kyi*. 8 C *rgad*, P *rkad*. 9 N om. 10 P inserts Ha 127a1-128a2.
 11 N *chung ba rnams kyis dge*. 12 D *bstan*. 13 D *dgongs*. 14 CD om. 15 CD om.
 16 GNP *dha*.

tshe dang ldan pa (P. 119b) byams pa dang snying rje las byung ba'i byang chub
 kyi sems sbyongs shig / de ma sbyangs na bham ga la'i rnal 'byor (N. 118a) pa ltar mi
 'grub po // byang chub kyi sems (D. 107b) ni theg pa chen po'i chos ma lus pa'i rtsa bar
 gyur pa / rgyur gyur pa /¹ sa bon du gyur pa yin te /
dpal rNam par snang mdzad mngon par byang chub pa las /

thams cad mkhyen pa'i rgyu ni byang chub kyi sems so // rtsa ba ni snying rje chen
 po'o⁽⁶⁴⁾
 zhes gsungs pas sems kyi skad cig re re la dran pa dang /² shes bzhin gyis byams pa dang
 snying rje byang chub kyi sems rgyun mi 'chad par bskyed par bya'o //

rgyud de las 'di skad du gsungs te³ /

nyams na gsor mi rung ba'i chos bzhi ste / byang chub kyi sems gtong ba
 dang / sems can la gnod pa byed pa dang / de'i chos spong ba dang / ser sna byed
 pa'o //⁽⁶⁵⁾

(C. 110a) de la byang chub kyi sems ma nyams na gsum po gsor rung la / de nyams na gsum
 po ma nyams kyang sor mi chud do // de bas na skye⁴ ba'i rgyu la mkhas par bya / gzung ba
 dang /⁵ bsgrub pa dang /⁶ sbyang ba dang / spel⁷ ba la shin tu brtan par bya'o // 'di'i don
 rgyas par 'Phags pa Byams pa 'jug pa'i mdo dang /⁸ Klu'i rgyal po rgya mtshos zhus pa
 dang / (G. 167a) bSod nams thams cad sdud⁹ pa'i mdo dang / Nam mkha'¹⁰ mdzod kyis zhus
 pa la sogs pa'i mdo las blta bar bya'o //

dang po khas blangs pa'i tshul khirms gsum po mig gi¹¹ 'bras bu bzhin du srungs shig /
 tshul khirms g-yag gi rnga ma bzhin srungs¹² shig / rgyu dang 'bras bu shes nas de chud
 gsan par mi bya /¹³ nges par myur du 'chi bar 'gyur te / 'dzam bu'i¹⁴ gling pa'i tshe la nges pa
 med pa dang / da ltar¹⁵ tshe'i snyigs ma yin pas yun ring du (P. 120a) gnas pa'i mthu med de
 /¹⁶ 'chi ba rjes su dran par bya / phyi nang thams cad mi rtag pa gsum gyis zin pas nges par
 myur du med par 'gyur ro snyam pa dang / sdig pa dang ltung ba thams cad stobs bzhis
 sbyang bar¹⁷ bya¹⁸ / gzhan (N. 118b) yang byang chub kyi sems bskyed na 'dag ste /

nyan thos rnam kyang gnod¹⁹ las log //

theg pa che la zhugs pa yis //

(64) *Mahāvairocanābhisambodhivikurvatyadhiṣṭhānavaipulyastūra*. Tib. P. No. 126, Tha 117a8.

(65) *Mahāvairocanābhisambodhivikurvatyadhiṣṭhānavaipulyastūra*. Tib. P. No. 126, Tha 185b4-6.

1 GNP om. 2 GNP om. 3 G *gsung ste*. 4 C *skya*. 5 NP om. 6 N //. 7 C *spal*.
 8 N om. 9 GNP *bsdud*. 10 GN *namkha'*. 11 N *gis*. 12 GNP *bsrungs*. 13 GNP om.
 14 G *bu*. 15 GNP *la*. 16 CD om. 17 P *par*. 18 GNP *bya ba dang*. 19 GNP *snod*.

sems can rnam la¹ bu bzhin byams //
byams dang snying rje bskyed pa yis //
sngar byas nyes pa de yis 'dag //².⁽⁶⁶⁾

ces slob dpon Klu sgrub kyis gsungs so // gzungs khyad par can bzlas pa dang / *lTung bshags dang / Las kyis sgrub pa rgyun gcod pa* (D. 108a) dang / *Phung po gsum pa'i mdo la* sogs pas 'dag go //³

yang⁴ ltung ba dang sdig⁵ pa nyid ma skyes par shes na⁶ 'dag par mdo las gsungs / chos thams cad mnyam pa nyid du shes na⁷ 'dag pas mnyam par lta dgos te / sems can la brten nas sangs rgyas 'byung bas sems can gtso bor bya'o // *dBu* (G. 167b) *ma rtog ge*⁸ 'bar ba las 'di skad du /

'bras bu la re ba'i zhags pas bcings pa rnam ni sbyin pa'i zhing 'dam par byed cing tshol te / gzhan dag bkres pa dang skom pa la sogs sdug bsngal zhi bar bya ba'i (C. 110b) phyir snod ma brtsis par byin na chos mnyam pa nyid rtogs⁹ par 'gyur te / ji skad du / mdo las

gzhan du chos gcig gis byang chub sems dpa' myur du mngon par rdzogs par 'tshang rgya ste / sems can thams cad la sems mnyam zhing snyoms la bye brag mi phyed pa'o // dkon mchog gsum ni bdag gi yon tan¹⁰ gyi zhing yin gyi //¹¹ dud (P. 120b) 'gro la sogs pa ni ma yin no¹² snyam na byang chub sems dpa' des chos nyid mnyam pa nyid du rtogs par mi 'gyur ro¹³ // de bas na dkon mchog gsum dang¹⁴ bla ma ni sbyin gnas kyis zhing bzang po yin la //¹⁵ dud 'gro la sogs¹⁶ pa ni ma yin te / zhing tshwa sgo can la sa bon btab pa dang 'dra'o¹⁷ zhes sems na byang chub sems dpa'i¹⁸ chos su¹⁹ mi 'gyur ro²⁰

zhes gsungs pas byang chub sems dpa' lhag pa'i bsam pa brtan pa / snying rjes rgyun brlan pa rnam kyis sbyin pa'i zhing bdam²¹ par mi bya⁽⁶⁷⁾

zhes *rTog ge 'bar bar* gsungs so // slob dpon 'phags pa Klu (N. 119a) sgrub kyis *Ba tshwa chu*²² klung nas phyung ba'i sems can mgu bar²³ bya ba'i tshigs su bcad par yang gsungs so // theg pa chen po'i mdo sde gzhan las kyang gsungs so // rgyal po Indra bhūti'i²⁴ zhal nas /

(66) Cf. *Vajrayānamūlapattiṭkā* of Mañjuśrīkīrti. Tib. D. No. 2488, Zi 211a1.

(67) *Madhyamakahrdayatarkajvāla*. Tib. D. No. 3856, Dza 51a7-b3.

1 NP om. 2 GNP om. 3 GNP /. 4 GNP om. 5 D *sngag*. 6 GN P *nas*. 7 N *nas*.
8 GP *ge la*. 9 G *rtog*. 10 GNP om. 11 G *yotan*. 12 CD *dang* /. 13 G *yino* // 14 G 'gyuro.
15 GNP om. 16 G *soḍ*. 17 N 'dra'o // 18 G *seda*'i for *sems dpa*'i. 19 G *chosu*. 20 G 'gyuro.
21 G *bdan*, N *dam*. 22 C *chung*. 23 D *par*. 24 G *bhuti*'i.

lus can kun la mnyam nyid kyi¹ //
 yang dag sems ni bskyed par bya //
 gang yang mi mnyam nyid gnas na² //
 thog ma dbus mtha' las 'grol³ ba'i //
 ye shes de ni skye mi 'gyur //(68)

zhes gsungs so //

dbang po rtul po las dang po pa gsar bu blo ma sbyangs pa snying rje ma (G. 168a)
 goms pa snying rje chung ba rnams kyis ni zhing bdam⁴ par bya ste / mdo (D. 108b) sde
 dang / rgyud sde dang / chos bshad pa rgyas⁵ pa la sogs pa⁶ las 'gyur gsungs so⁷ // las dang
 po pa des mnyam par ma bzhag⁸ pa na spyod lam thams cad dran pa dang shes bzhin gyis
 zin par bya / tha mal pa'i skye bo dang se gol gtogs pa tsam yang lhan cig du⁹ gnas par mi
 bya / bre mo'i gtam yang spang / yi dwags¹⁰ la rgyun du¹¹ gtor ma gtang¹² / shes rab kyi pha
 rol tu phyin pa bklags¹³ pa dang¹⁴ kha ton bya / mngon par shes pa ma thob (P. 121a) kyi bar
 du chos bshad pa mi bya / stong par gnas dang sems can yongs su¹⁵ mi gtong dang /¹⁶ ji skad
 smras bzhin byed dang bde gshegs byin rlabs¹⁷ can¹⁸

zhes pa'i yon tan de lta bu dang ldan par bya / rmi lam gyi sems kyi gnas skabs na yang
 snying rjes¹⁹ ma bral bar bya / 'phral gyi spyod lam thams cad 'Phags pa dKon mchog sprin
 las gsungs pa bzhin bya / ci nas kyang pha rol mgu bar bya / 'dod pa chung ba dang /²⁰ chog
 shes pa dang / zhi ba dang /²¹ dul bar bya / 'jig rten gyi chos brgyad mgo mnan par bya / dge
 ba bcu stobs dang ldan par bya / dngos po thams cad la ma²² chags pa dang / zhen pa chung
 bar bya / chos thams cad mnyam pa nyid dang / nyon mongs pa dang nye ba'i (N. 119b)
 nyon mongs pa'i gnyen por 'gyur bar bya / pha rol sdug bsngal ba mthong na de rab tu
 byung ba yin na 'tsho ba'i yo byad ma yin pa gtang bar bya / khyim pa yin na yo byad la
 chags pa med par gtang bar (G. 168b) bya /

bdag gi lus dang longs spyod dang //²³

dus gsum dge ba skyed²⁴ pa rnams //

(68) *Jñānasiddhi* 8.24cd, 25d, 26ab.

1 GNP *kyis*. 2 G *nas*. 3 N *grol*. 4 N *dam*. 5 GNP *brgya*. 6 GNP om. *la sogs pa*.
 7 GN *gsungso*. 8 NP *gzhas*. 9 GNP *tu*. 10 DGP *dags*. 11 GNP *tu*. 12 GNP *btang*.
 13 GNP *ktag*. 14 N *dang /*. 15 N *yongsu*. 16 CD // . 17 GNP *brlabs*. 18 CD *can //*.
 19 GNP *rje*. 20 GNP om. 21 GNP om. 22 GNP om. 23 NP / . 24 GNP *skyes*.

sems can kun gyi longspyod phyir //
 phongs¹ pa med par gtang² bar bya //(69)
 bla ma rje btsun A va dh ū tī pa'i³ zhal nas /
 rang skyon rtog la mig rnon bzhin //
 gzhan skyon rtog la long⁴ ba bzhin //
 drang dang nga rgyal med pa dang //
 rtag tu stong nyid bsgom par bya //
 snying rje dngos dang brgyud pa yis⁵ //
 bdag dang gzhan rnam brje bar bya //
 gang phyir rang bas sems can gces //⁶
 zhes bla ma Na ro pa'i zhal nas gsungs skad / byang chub sems dpa' rang bas gzhan gces par
 bya dgos pas bdag dang gzhan brje bar bya'o //
 byams pa dang snying (D. 109a) rje byang chub (P. 121b) kyi sems ni gsang sngags kyi
 yang gnad yin te /⁷ rTsa ba'i ltung ba bcu bzhi pa las /⁸
 sems can rnam la byams pa spong⁹ //
 bzhi pa yin par rgyal bas gsungs //
 chos kyi rtsa ba byang chub sems //
 de spong ba ni lnga ba¹⁰ yin //^{11, (70)}
 zhes gsungs so //
 gzhan mi smod pa dang / gzhan gyi sdig rkyen mi bya bar dpag tshad brgyar 'gro bar
 bya'o //
 rab tu byung ba'i byang chub sems dpa' yis //
 gang na rtsod pa yod pa'i¹² sa phyogs nas //
 dpag tshad brgya yi pha rol 'gro bar bya //
 gal te ma byon byang chub (C. 111b) sems dpa' nyams //¹³
 zhes gsungs so //
 pha rol tu phyin pa drug ci nus kyis spyad / tshogs lam gyi chos bcu gsum dang / 'phags
 pa'i nor bdun dang /¹⁴ rjes su¹⁵ dran pa drug dang / bsdu ba'i dngos po (G. 169a) bzhi dang /
 skyes bu dam pa'i rnam par rtog pa bcu drug dran par bya'o //

(69) *Śikṣāsamuccaya* 4ab, 5a.

(70) *Mūlapattisaṃgraha* 3.

1 GNP 'phangs. 2 GNP btang. 3 GNP a ba dhū ti pa'i. 4 G long. 5 CD yi. 6 GNP om.
 7 NP om. 8 D //. 9 G spongs. 10 G pa. 11 G /. 12 GNP pa yi. 13 NP om.
 14 GNP om. 15 N rjesu.

khyad par du byang chub sems dpa'i rnam par rtog pa brgyad dran par bya'o //

'phags pa Klu sgrub kyi zhal nas 'khor (N. 120a) ba'i nyes dmigs bdun gsungs pa dang / 'phags pa Thog med kyis 'khor ba'i nyes dmigs mi rtag pa bdun gsungs pa yang dran par bya'o // 'dod yon lnga'i nyes¹ dmigs shes par bya zhing gnyen po bsten / chos ma yin pa ci yang mi bya / byams pa dang snying rje rjes su² dran pa dngos dang brgyud pas³ sems can gyi don bya / e ma ho⁴ nam zhig na 'di rnams 'khor ba nas thon par bya / kyi hud 'di rnams ji ltar byas na snyam pa yang dang yang du dran par bya'o //

sangs rgyas theg pa 'di la nges par 'byung 'dod gang //

sems can kun la sems snyoms pha ma'i 'du shes dang⁵ //

phan pa'i sems dang byams pa'i yid kyis⁷ gnas (P. 122a) par bya //

tha ba med cing drang la tshig 'jam smra bar bya //^{8, (71)}

zhes gsungs pa ltar bya / dge ba pra mo yang myur du ma bsngos na sog⁹ ma med dang 'brog¹⁰ gnas kyi gtam rgyud¹¹ dang 'dra'o //

de ltar gus pa dang yun ring ba dang rgyun mi 'chad par byang chub sems dpa' des mnyam par ma bzhag¹² pa'i dus su yang ji skad bshad pa'i chos de rnams nyams¹³ su blangs nas / mnyam¹⁴ par gzahag pa'i (D. 109b) dus su sngar bshad pa'i nam mkha'¹⁵ rdo rje'i ting nge 'dzin bsgom¹⁶ zhing /¹⁷ don dam pa byang chub kyi sems cung zhig gsal ba (G. 169b) na¹⁸ rang gi lus yod par mi tshor ba dang / nyon mongs pa¹⁹ rnams kyang cung zad zhi ba dang / 'jig rten pa'i bya ba dang /²⁰ tha snyad rnams 'ol phyir brjod pa dang / phyi nang gi dngos po kun yang ban bun dang /²¹ lang long du mthong ba dang / gzugs phra ba dang / rig pa yang ba dang / khyab pa dang / 'jam pa dang / yang ba dang / dga' ba dang / nyams bde ba 'byung ngo //

gzhan yang 'Phags pa bsDud pa las gsungs (C. 112a) pa'i rtags kyang skye ste /

tha dad 'du shes bral zhing rigs²² pa ldan tshig smra //^{23, (72)}

zhes pa la (N. 120b) sogs pa'i tshig rkang pa nyi shu rtsa bzhi gsungs so //

dran pa nye bar gzahag pa bzhi dang / yang dag par spong ba bzhi dang / rdzu 'phrul gyi rkang pa bzhi dang / dad pa dang / brtson 'grus dang / dran pa dang / ting nge 'dzin dang /

(71) *Ratnagunasañcayagāthā* 16.6.

(72) *Ratnagunasañcayagāthā* 17.2a.

1 C *nyas*. 2 GN *rjesu*. 3 GNP *pa'i*. 4 GNP *'o*. 5 N *rang*. 6 G /. 7 G *kyi*.
8 G /. 9 NP *sogs*. 10 N *'phrog*. 11 GNP *brgyud*. 12 GNP *gzahag*. 13 C om. 14 N *snyams*.
15 GN *namkha'*, P *mkha'i*. 16 NP *bsgoms*. 17 GNP om. 18 GNP *dang*. 19 GNP om.
20 GNP om. 21 GNP om. 22 GNP *rig*. 23 GNP om.

shes rab rnam bsgoms¹ pas tshogs kyi lam la gnas pa dang / las dang po pa'i sa dang / dad pa'i sa la gnas pa dang / thar pa'i cha dang mthun pa'i dge ba'i rtsa ba rnam bskyed pa yin no //

de nas nges par 'byed² pa'i cha dang mthun pa'i dge ba rnam bskyed par bya ba'i phyir³ ji skad bshad pa bzhin du gus pa dang / (P. 122b) yun ring ba dang / rgyun mi 'chad par 'bad pa dang / rim gyis dbang po lnga dang / stobs lnga dang / snang ba thob pa dang / snang ba mched pa dang / de kho na'i don la phyogs gcig tu zhugs pa dang / bar chad med pa'i ting nge 'dzin thob pa dang / don dam pa'i bden pa rtogs (G. 170a) par gyur pa nas sa dang po rab tu dga' ba thob pa yin no // dus der bzod pa bzhi dang / mnyam pa nyid bzhi yang skye'o //

de nas pha rol tu phyin pa bcu rdzogs pa dang / dbang bcu dang / snang ba brgyad dang / rgyan bzhi dang / snying rje bcu drug la sogs pa thob pa yin te / sa'i rnam par gzhag pa ni *mdo sde Sa bcu par gsungs so*⁴ // ji srid⁵ sa bcu'i bar du nang du⁶ mnyam par gzhag pa dang / de'i rjes la thob pa yin te ji skad du / *'Phags pa rNam par mi rtog pa la 'jug pa'i gzungs las*

byang chub sems dpa' de (D. 110a) nang du mnyam par gzhag pa na chos thams cad nam mkha'i⁷ dkyil ltar mthong la / de'i rjes las thob pa na sgyu ma'i⁸ dpe brgyad kyi⁹ tshul bzhin du mthong ngo

zhes gsal por gsungs so // gang gi tshe rnam par rtog pa mthar thug pa rdo rje lta bu'i ting nge 'dzin brnyes pa na rjes las thob pa yang mi mnga' ste / chos kyi dbyings su gyur nas chos kyi¹⁰ sku mngon sum du brnyes so // dus de nas bzung nas ji srid de¹¹ nam mkha'¹² gnas kyi bar du chos kyi sku bzhugs pas rjes las thob pa yang mi mnga'o //

(N. 121a) gang gis (C. 112b) nga la gzugs su mthong //

gang gis nga la sgrar shes pa //

log pa'i lam du zhugs pas na //

skye bo de yis nga mi mthong //

sangs rgyas rnam ni chos kyi sku¹³ //

'dren pa rnam ni chos kyis gzigs //^{14, (73)}

(73) *Vajrachhedikāprajñāpāramitāsūtra* 26. Conze ed., p. 56.

1 GNP *sgom*. 2 GNP *byed*. 3 G *phyir* /. 4 G *gsungso*. 5 PGN *ltar*. 6 GNP *om. nang du*.

7 GN *namkha'i*. 8 CD *mi'i*. 9 GNP *kyis*. 10 GNP *om*. 11 N *om*. 12 GN *namkha'*.

13 G *sku gzags*. 14 P *om*.

zhes gsungs pa dang / *dpal rDo rje phreng ba'i rgyud las* /
(P. 123a) thams cad rnam shes (G. 170b) phung por zhugs //
rnam shes de yang 'od gsal ba'o //
mya ngan 'das dang kun stong dang //
chos kyi sku yang gsungs pa yin //(74)

zhes gsungs pa dang /¹ 'Phags pa Chos yang dag par sdud pa las kyang /
sangs rgyas dngos ni skye ba med pa'o⁽⁷⁵⁾

zhes dang /² 'Phags pa 'Jig rten las 'das pa'i le'u las kyang /
sangs rgyas rnam³ ni chos kyi sku //
rnam dag nam mkha⁴ lta bu yin //⁵

zhes dang / Phyogs kyi glang po'i zhal snga nas kyang /
shes rab pha rol phyin gnyis med //
ye shes de ni de bzhin gshegs //^{6, (76)}

zhes dang / slob dpon nyid kyi zhal snga nas kyang /
nam mkha⁷ bzhin du gos pa med //
spros pa med cing mi 'gyur ba'i //
ngo bo gang yin mthong ba ni //
de yis de bzhin gshegs pa mthong //
'phags pa yon tan rdzogs khyod dang //
'gro ba'i bla ma sangs rgyas la //
zla ba dang ni 'od zer bzhin //
mkhas pa rnams kyis dbye ma mthong //^{8, (77)}

zhes pa dang / yang slob dpon nyid kyi zhal snga nas /
dge chos kun la mi gnas par //
chos kyi dbyings kyi dngos gyur cing //
mchog tu zab pa'i brnyes pa yi //
zab mo khyod la phyag 'tshal lo⁹ //(78)

(74) *Pinḍīkṛtasādhana* 43cd-44ab.

(75) *Dharmasaṃgītisūtra*. Not identified.

(76) *Prajñāpāramitāsaṃgrahakārikā* 1ab.

(77) *Prajñāpāramitāstotra* 2-3.

(78) *Paramārthastava* 8.

1 NP om. 2 GNP om. 3 G *rnams*. 4 GN *namkha'*. 5 NP om. 6 GNP om. 7 GN *namkha'*.
8 GNP om. 9 G 'tshalo.

zhes pa dang / yang /¹

chos kyi dbyings dang sangs rgyas rnams //

des na don du tha mi dad //^{2, (79)}

(D. 110b) ces dang / yang /³

skye ba med pa'i ngo bo yis //

khyod la skye ba yod mi mnga' //

mgon po gshegs dang bzhugs mi mnga' //

dnegos mi mnga' la phyag 'tshal lo⁴ //^{5, (80)}

zhes pa dang / yang /⁶

sangs rgyas rnams (G. 171a) ni dus rtag tu //

chos nyid 'di lta bu la bzhugs //

zhes pa la sogs pa mang du gsungs te / re zhig bzhag go / rje btsun Ārya (P. 123b) de ba'i
zhal snga nas /

re zhig dngos (N. 121b) 'di nam mkha'i⁷ nags tshal nas⁸ //

skyes pa'i padma bzhin du dngos med de //

gnyis ka dag (C. 113a) las gzhan pa 'ang ri bong rwa bzhin no //

thar pa'i rnam pa ci 'dra ba zhig yod //⁹

ces pa dang / *dpal Ye shes rdo rje kun las btus pa'i rgyud* las kyang /

sangs rgyas rnams kyang gang gi tshe gzhan gyi don mi mdzad pa de'i tshe yang

dag pa'i mtha' la gnas nas spros pa thams cad nye bar zhi nas bzhugs so⁽⁸¹⁾

zhes gsungs pa dang / slob dpon 'phags pa Thogs med kyi zhal snga nas kyang /

'di ltar sems can thams cad mngon par rdzogs par sangs rgyas nas¹⁰ chos kyi skur

gyur pa de'i tshe sangs rgyas ma lus pa thams cad chos kyi dbyings rnam par dag pa

nyid du gyur nas de'i ngang du bzhugs so¹ //¹²

zhes *bsDu ba gtan la dbab par* gsungs pas¹³ slob dpon 'di yang dag par na gnyis su med pa'i

ye shes kyang mi bzhed la /¹⁴ rnam par mi rtog pa'i ye shes kyi rjes la thob pa yang mi

bzhed de / sa gsum pa'i dbang phyug brnyes pas chos thams cad skye ba med par thugs su¹⁵

chud pa'i phyir ro¹⁶ // don 'di las dgongs nas *rDo rje phreng ba'i*

(79) *Acintyastava* 42ab.

(80) *Paramārthastava* 3.

(81) *Vajrajñānasamuccaya*. Tib. D. No. 447, Ca 286a2.

1 GNP om. 2 GNP om. 3 GNP om. 4 G 'tshalo. 5 GNP om. 6 GNP om. 7 GN *namkha'i*.
8 G *las*. 9 GNP om. 10 G *nas* /. 11 GN *bzhugso*. 12 CD om. 13 CDGN *pas* /. 14 GP om.
15 G *thigsu*. 16 G *phyiro*.

rgyud las /

'di ni don dam¹ bden pa ste //

snang ba med cing mtshan ma med //

don dam bden pa zhes kyang bya //

sangs rgyas kun gyi bzhugs gnas yin //(82)

zhes gsungs so² // slob dpon Zla grags kyi zhal (G. 171b) snga nas kyang /

chos nyid skye ba med pa ni //

thub gnas sangs rgyas yin par gsungs //^{3, (83)}

zhes gsungs so⁴ //

thog ma med pa nas dngos po la mngon par zhen pas bden pa gnyis kyi tshul mi shes⁵ pa dag na re khyed dbu ma pa ltar gyur na sangs rgyas rnams kyis (P. 124a) bskal pa grangs med pa mang por byang chub (D. 111a) sems dpar gyur pa na bya dka' ba dpag tu med pa mdzad pa dang / bsod nams kyi tshogs grangs med pa bsags pa la don med cing chos dang dge 'dun yang med par 'gyur ro // sems can (N. 122a) rnams 'khor ba nas 'don par byed pa med pas sdig pa can gyi lta ba de thag bsrings la bzhag go //⁶ 'di ni dkar po'i chos kyi lo tog gi (C. 113b) ser ba //⁷ phyi rol pa chad par smra ba pas 'di lhags⁸ pas 'di lta bu 'di sba zhing gsang bar rigs so //

dbu ma pas smras pa / khyod ni blo gros ma sbyangs shing blun pa ste / *mDo sde sprin chen po dang / Lang kar⁹ gshegs pa dang / rNga bo¹⁰ che'i le'u dang / 'Jam dpal rtsa ba'i rgyud chen po* rnams su yang dang yang du lung bstan pa'i 'phags pa Klu sgrub kyi gzhung la skur pa 'debs pa de dag ni rang phung bar byed do // de'i bzhed pa'i gzhung gis sangs rgyas rnams chos skur gyur cing / de'i ye shes kyang rtog pa thams cad spangs nas chos kyi dbyings su gyur pas des na dbyings dang ye shes dang / yul dang yul can med pas rnam par mi rtog pa'i ye shes bya ba de ji lta bu zhig yod / slob dpon gyi zhal nas kyang /

gang phyir 'das pa med pas na //

de phyir ma 'ongs pa yang med //

(82) Cf. *Piṇḍīkṛtasādhana* 45.

(83) *Triśaraṇasaptati* 22ab.

1 G *dam*. 2 G *gsungso*. 3 P *om*. 4 G *gsungso*. 5 D *shas*. 6 N /. 7 GNP *om*.
8 GNP *lhag*. 9 N *langkar*. 10 P *bi*.

gnas ni yongs su gyur pa'i (G. 172a) phyir //
da ltar byung ba gang na gnas //^{1, (84)}

zhes dang /

mnyam par gzhag dang ma bzhag² pa //
gang la 'di dag thams cad med //
dngos dang dngos med rnam spangs pa //
zung 'jug yin par ston pas³ gsungs //⁽⁸⁵⁾

zhes gsungs pas rnam par mi rtog pa'i ye shes mi bzhed do // dus de'i tshe rnam par mi rtog
pa'i ye shes med pas spros pa ma lus pa zhi ba yin pas rjes las thob pa'i (P. 124b) ye shes
bya ba ji lta bu zhig yod par 'gyur te med do // 'Phags pa Lang kar⁴ gshags pa las /

'khrul ba thams cad spangs nas kyang //
gal te 'khrul pa snang gyur na //
de ni 'khrul pa yang dag ste //
rab rib yongs su⁵ ma dag bzhin //⁽⁸⁶⁾

zhes gsungs te / de la rab rib ni gsum ste / mi mkhas pa rab rib can dang / mkhas pa rab rib
can (N. 122b) dang / mkhas pa rab rib dangs pa'o // sangs rgyas rnams ni rab rib dngas pa
yin pas⁶ slar⁷ yang (D. 111b) rab rib snang bar mi 'gyur ro // 'o na sangs rgyas la sku dang ye
shes dang yon tan dang phrin las kyang mi mnga' 'am⁸ zhe na /⁹ smras pa / rgyu gsum dang
rkyen gcig (C. 114a) gis gdul bya'i ngo gang la snang ba ste / gdul bya'i dbye bas sku yang
sna tshogs su¹⁰ snang ngo //

ye shes kyang rang 'byung gi ye shes chen po yin te / bla ma A va dhū tī pa¹¹
dang / bla ma Tā¹² mra dvī¹³ pa'i zhal nas /

ye shes chos kyi dbyings dang tha mi dad //
chos kyi dbyings la rang 'byung ye shes btags //
bsam du med cing tshig gi spros dang bral //
gdul bya'i ngo gang de nyid rnam lngar gsungs //

(G. 172b) zhes slob dpon Klu sgrub kyis gsungs

(84) *Bodhicittavivaraṇa* 31.

(85) *Pañcakrama* 16abd, 15c.

(86) *Lañkāvatārasūtra* 2.169.

1 GNP om. 2 GNP gzhag. 3 D ngas. 4 N langkar. 5 N yongsu. 6 G pas /, P pas //
7 DN slang. 8 NP 'am /. 9 GNP om. 10 G tshogsu. 11 GNP a ba dhū tī. 12 GNP tam.
13 GNP dvi.

zhes gsungs so¹ //

de² bzhin du stobs bcu la sogs pa dang / cho 'phrul gsum dang /³ phrin las nyi shu rtsa
Inga dang / phrin las sum cu rtsa gnyis rnam gdul bya'i ngo gang la snang ngo // de bas na
slob dpon gyi zhal snga nas /

mgon po sems pa mi mnga' zhing //
rnam rtog g-yo ba mi mnga' yang //
khyod nyid ngang⁴ gis sems can la //
sangs rgyas phrin las mdzad par 'gyur //(87)

yang /

rnam rtog rlung dmar thams cad kyis //
dpag bsam shing ltar mi bskyod⁵ kyang //
de yang sems can thams cad kyī⁶ //
bsam pa yongs (P. 125a) su⁷ rdzogs par mdzad //(88)

yang /

mgon khyod sems can 'du shes kyī //
'jug pa kun du⁸ mi mnga' yang //
sdug bsngal can gyi sems can la //
snying rje phan gtong⁹ mdzad pa khyod //(89)

yang /

gzhan don phung sum tshogs pa ni //
'bras bu'i gtso bo yin par bzhed //
sangs rgyas nyid sogs de las gzhan //
de dag zhar la 'byung bar bzhed //(90)

ces gsungs so // yang slob dpon Ārya de ba'i zhal nas /¹⁰

bskal pa grangs med mang po ru //
rtag tu gzhan don 'ba' zhig mdzad //
mthar thug (N. 123a) chos sku brnyes pa na //
ji srid 'gro ba gnas don du //

(87) *Niraupamyastava* 24.

(88) *Kudrṣṭinirghātana* 4.

(89) *Niraupamyastava* 9.

(90) *Kudrṣṭinirghātana* 3.

1 G *gsungso*. 2 D *da*. 3 GNP *om*. 4 D *dang*. 5 GNP *skyod*. 6 N *kyis*. 7 N *yongsu*.
8 GNP *tu*. 9 GNP *phan stongs*. 10 N *om*.

mya ngan mi 'da' gzhan don mdzad //
 de phyr byang chub sems dpa' yis //
 gzhan don ma yin spyod mi bya //
 rang don tsam la 'bad pa ni //
 'gro ba lnga po thams cad spyod //
 rtag tu snying rje gzhan gyi don //
 nyams su len pa'i skyes mchog (C. 224a) (G. 173a) ni //
 'gro ba'i pha ma dga' dga' na //

zhes gsungs so¹ //

sku gsum² (D. 112a) nmam par gzhang pa ni /³ slob dpon gyi zhal snga nas⁴ gzhan du
 gsungs pas 'dir bzhag go // de ltar chos kyi sku'i byin rlabs las⁵ rgyu gsum dang rkyen gcig
 gis gzugs kyi sku dang zab pa dang rgya che ba'i chos ston te / sku'i phrin las 'khor ba ma
 stongs kyi bar du 'byung ngo // don 'di la dgongs nas rgyud las /

bsam pa tha dad mos pa du ma yi //
 sems can dbang gis khyad par mang po 'khrungs //
 gcig na chu yi snod ni du ma ru //
 zla ba'i gzugs brnyan shar ba dag dang mtshungs //⁶

zhes gsungs pa dang / rje btsun Ārya de wa'i zhal snga nas kyang /

nor bu shang⁷ ka shi la byu ru dang //
 bai dūrya dang zangs kyi snod rnams bkod pa las //
 de la zla ba gcig ni nam (P. 125b) mkha'i⁸ dkyil nas ni //
 yongs su⁹ gyur nas gzugs ni so sor tha dad snang ba ltar //
 de bzhin mgon po de nyid thugs rdo rje //
 'gro ba'i tshogs su¹⁰ sna tshogs nyid du khyab¹¹ nas bzhugs //

zhes gsungs so¹² //

bsod nams chung ba¹³ dbang po dman pa rnams la sku yi mi snang ngo // *mDo sde'i*
rgyan las ji skad du /¹⁴

ji ltar snod chag gyur pa las //
 zla ba'i gzugs brnyan mi snang zhing //

1 G *gsungso*. 2 G *gsung*. 3 GN //. 4 GP *nas /, N nas //*. 5 GNP *las /*. 6 P /.
 7 GNP *sham*. 8 GN *namkha'i*. 9 GN *yongsu*. 10 G *tshogsu*. 11 NP *khyad*. 12 G *gsungso*.
 13 P *pa*. 14 GN //.

de bzhin sems can ngan pa la //
 sangs rgyas gzugs kyang mi snang ngo //^{1, (91)}
 zhes gsungs so // de bzhin du gsung de yang gdul bya'i snod dang² sbyar nas 'byung ste /
 sangs rgyas rnams kyi (G. 173b) gdul bya la /³ ji ltar mos pa'i chos gsungs te /
 kha cig la ni sdig pa (N. 123b) las //
 rnam par bzlog⁴ pa'i chos gsungs so⁵ //
 kha cig na ni rgyu 'bras⁶ gnyis //
 chud mi gsan zhes chos gsungs te⁷ //
 kha cig la ni bden pa gnyis //
 rnam par dbye ba'i chos gsungs so //
 zab mo khu 'phrig⁸ can rnams la //
 stong nyid snying rje'i snying po can //
 ji ltar mos pa'i chos gsungs so⁹ //⁽⁹²⁾
 zhes slob dpon Klu sgrub kyis gsungs pa dang / yang /¹⁰
 snod¹¹ ma dag la mi snang ste //
 tshangs pas gsol ba btab pa na //
 zab mo chags bral bdud (C. 115a) rtsi 'dus ma byas //
 bdud rtsi lta bu'i chos gcig bdag gis rnyed //
 su la bstan kyang go bar mi 'gyur¹² te //
 bdag nyid gcig pu (D. 112b) nags su¹³ bsgom par bya //¹⁴
 zhes gsungs so¹⁵ // slob dpon gyi zhal snga nas kyang /
 gang phyir de ltar zab mo'i chos //
 snod min 'gro la mi snang bas //
 de yi phyir na mkhas rnams kyis //⁽⁹³⁾
 sangs rgyas thams cad mkhyen par shes //¹⁶
 zhes gsungs so // de'i phyir don 'di 'Phags pa gSang ba bsam gyis¹⁷ mi khyab par gsung
 so¹⁸ //

(91) *Mahāyānasūtrālamkārikā* 9.16.

(92) *Ratnāvalī* 4.94-96.

(93) *Ratnāvalī* 1.74.

1 CD /, P om. 2 CD ngang. 3 N //. 4 GNP zlog. 5 G gsungso. 6 D 'dras.
 7 GNP gsung ste. 8 NP 'khrig. 9 G gsungso. 10 GNP om. 11 CD sdod. 12 GNP ma gyur.
 13 G nagsu. 14 GNP om. 15 G gsungso. 16 GNP om. 17 GNP gyi. 18 GN gsungso.

de'i phyir 'phags (P. 126a) pa Klu sgrub kyi rje su¹ 'brang ba'i dbu ma la skyon ci yang med do // gang dag gzhung² 'di³ la skur pa 'debs pa de dag ni zab cing rgya che ba'i chos spangs pa'i sems can dmyal ba'i sdug bsngal yun ring por myong bar 'gyur ro //

sngon gyi slob dpon rnams kyi⁴ phyogs re re mdzad de / slob dpon Phyogs kyi glang po dang / Dharma kīrti la sogs pas tshad ma'i (G. 174a) gzhung rgyas bar mdzad do //

slob dpon Chos skyob dang / slob dpon Sangs rgyas lha dang / dByig bshes dang / dByangs sgrogs dang / Yid 'ong la sogs pas⁵ nyan thos bye brag tu smra ba'i lung rgyas par mdzad do //

slob dpon dGe⁶ srungs dang / Chos mchog dang / dByig gnyen snga ma la sogs pas nyan thos mdo sde pa'i gzhung rgyas par mdzad do //

slob dpon Thogs med dang / dByig gnyen dang / Blo rtan dang / Shes rab 'byung gnas sbas pa dang / Ka ling ka⁷ dang / lHa dbang blo dang / dge bsnyen btsun pa Ngo bo nyid med pa la (N. 124a) sogs pas ni rnam bcas rnam⁸ med kyi gzhung rgyas par mdzad do //

slob dpon Bha bya dang / Buddha⁹ pā li ta dang / De ba sha rma¹⁰ dang / sPyan ras gzigs brtul zhugs dang / Shānta rakṣi ta dang / Ka ma la shī la la sogs pas ni dbu ma'i gzhung rgyas par mdzad do //

slob dpon Tsa ndra go mi dang / slob dpon dPa' bo dang / slob dpon rGya mtsho sprin dang / slob dpon Shānta de ba dang / slob dpon Lun ta (C. 115b) ka¹¹ la sogs pas sems bskyed ma thag pa las dang po pa'i phyir tshad med pa bzhi dang / bsdu ba'i dngos po bzhi dang / pha rol tu phyin pa la sogs pa¹² ji ltar nyams su blang ba'i spyod pa rgya chen po'i gzhung rgyas par mdzad do //

slob dpon 'phags (P. 126b) pa Klu sgrub dang / slob dpon Ārya de ba dang / (D. 113a) slob dpon Mā tri tsi tra¹³ dang / slob dpon Ka mba la¹⁴ dang / slob dpon Zla ba grags (G. 174b) pa dang / slob dpon lnga pos¹⁵ mdzad pa'i dbu ma'i gzhung de dag ni dbu ma'i gzhung thams cad kyi phyi mo yin no // dbu ma'i gzhung thams cad kyi rtsa ba yin pas 'gran zla med pa yin no //

1 G rjes, N rjesu. 2 D gzhud. 3 P 'da. 4 GNP kyi. 5 GNP om. 6 NP dga ba.
7 GNP ka lingka. 8 NP rnams. 9 G bu dha, NP buddhā. 10 GNP shar ma.
11 GNP lunta ka. 12 G pa'i. 13 CD ma ti tsi tra. 14 CD kaṃ pa la. 15 CD po.

'di ltar bka' gsang sngags kyi gzhung yang slob dpon Sangs gyas gsang ba dang / slob dpon Shākya bshes gnyen dang / slob dpon Shes rab grub pa dang / slob dpon Kun dga' snying po la sogs pas ni rnal 'byor gyi rgyud dang / bya ba'i rgyud kyi don gsal bar mdzad do //

slob dpon Indra bhū ti dang / slob dpon Sangs rgyas ye shes zhabs la sogs pas *dpal gSang ba 'dus pa'i rgyud* kyi don 'ba' zhig gsal bar byas so //

slob dpon Tsā¹ rya pa dang / slob dpon rDo rje dril bu dang / slob dpon Lū yi² pa la sogs pas *dpal bDe mchog gi rgyud* kyi don gsal bar mdzad do //

slob dpon Îom³ bi⁴ he ru ka dang / Sa ra rū pa la sogs pas *dpal He badzra'i rgyud* kyi don tsam gsal bar mdzad do // slob dpon Ku ku ri pa dang / Chos kyi (N. 124b) zhabs la sogs pas ni *dpal Ma hā mā yā'i* don gsal bar mdzad do //

slob dpon gyi zhal snga nas⁵ sbye bo ma lus⁶ pa la 'di bka' drin che ba yin te / tha mal pa la shin tu phan gdags pa'i phyir *rTen 'brel gyi rtsis dang mo'i rnam pa* mdzad do //

blon po rnams la phan gdags pa'i phyir *Shes rab brgya pa dang / brTag pa bcu gnyis pa* la sogs pa mdzad do //

rgyal po rnams kyi phyir *bShes pa'i spring⁷ yig dang / Rin po che'i phreng ba* mdzad do //

'khor rnam bzhir gtogs (P. 127a) pa bsod nams⁸ chung ba rnams⁹ kyi phyir (C. 116a) *sPos sbyor che chung* la sogs pa mdzad do //

sman pa rnams kyi phyir *sByor ba brgya ba dang /¹⁰ sByor ba sum cu rtsa gnyis pa dang / Nyi shu pa dang / bDud rtsi'i snying thigs¹¹ dang / 'Tsho ba'i mdo* la sogs pa mdzad do //

theg pa chen po la zhugs pa rnams kyi ched¹² du *Sems bskyed¹³ pa'i cho ga dang / Byang chub sems dpa'i spyod pa gsal ba dang / mDo kun las btus pa* la sogs pa mdzad do //

yang de dag gi thog tu *dBu ma rtsa ba'i shes rab* (D. 113b) dang / de las 'Phros pa *rtsod pa bzlog¹⁴ pa dang / sTong ba nyid bdun cu pa* mdzad do //

de'i yan lag tu *Rigs¹⁵ pa drug cu pa dang / Theg pa chen po nyi shu pa dang / Srid¹⁶ pa 'phro ba dang / bsGom pa'i rim pa dang / rNam par 'thag pa dang / Tshig brgya pa dang /*

1 GNP tsa. 2 GNP i. 3 NP tom. 4 GNP bhi. 5 GNP nas /. 6 D las. 7 GNP springs.
8 P inserts here the above mentioned passages. 9 N om. chung ba rnams.
10 GNP mdzad do // for dang /. 11 G thig. 12 GNP phyed. 13 G skyed. 14 GNP zlog.
15 GNP rig. 16 G srid.

Byang chub kyi sems kyi rnam par bshad pa dang / Chos kyi dbyings su bstod pa dang / Don dam par bstod pa dang / rNam par mi rtog par bstod pa dang / bSam gyis¹ mi khyab par bstod pa dang / 'Jig rten las 'das par bstod pa dang / Sems kyi rdo rje'i bstod pa dang / Sā lu ljang² pa'i 'grel³ pa dang / rTen cing 'brel par 'byung ba rtsa 'grel dang bcas pa dang /

de bzhin du dbang po rnon po'i yang rnon po theg pa chen po gsang sngags kyi snod du gyur pa rnams la *dpal gSang ba 'dus* (P. 128b) *pa'i rgyud* kyi don *dpal gSang ba 'dus pa'i* (G. 175b) *dkyil 'khor du dbang bskur ba'i* (N. 125a) *cho ga dang / Cho ga nyi shu pa dang / Piṇḍi⁴ kṛ ta dang / mDo dang bsres pa dang / dpal Rim pa lnga pa mdzad do // dpal rDo rje gdan bzhi'i rgyud chen po'i tī⁵ ka mdzad do // mTshan yang dag par brjod pa'i 'grel pa dang / rJe btsun kharsa pā ṇi'i⁶ sgrub thabs dang / Yi ge drug pa dang / A ra pa tsa na dang / Ngag gi dbang phyug dang / Tshig sbyin⁷ gzhon nu la sogs pa'i sgrub thabs mang du mdzad do // Dam tshig gsum bkod pa'i cho ga dang / dPa' bo gcig sgrub dang / de'i man ngag 'Dod 'jo'i ba mo dang / gTor ma sum cu pa dang / (C. 116b) Sangs rgyas mnyam sbyor⁸ gyi rdzogs pa'i rim pa'i man ngag chen po la sogs pa mang du mdzad do //*

skyes bu dam pa de sangs rgyas dngos yin pas des mdzad pa'i gzhung dag la yid rton⁹ bar bya'o // de ci'i phyir zhe na / *mDo sde sprin chen po las /*

lha'i bu dag li tsa byi¹⁰ gzhon nu sems can thams cad kyis mthong na dga' ba 'di sngon bskal pa dpag tu med pa'i pha rol tu de bzhin gshegs pa klu rigs sgron ma 'jig rten du byung ba'i tshe 'khor los sgyur¹¹ ba'i rgyal po brtson 'grus chen po'i klu bstan pa 'dzin pa / blon po dam pa'i chos kyi mdzod 'dzin pa rgyal po dang blon po gnyis ring bsrel yod pa dang¹² med (D. 114a) pa'i rtsod pa byas pa dang / rgyal po'i legs par bshad¹³ pas dus de'i 'khor ngo mtshar skyes nas / bcom ldan 'das de la zhus pas rgyal po de zab mo (G. 176a) la¹⁴ mkhas pa lags so¹⁵ zhes zhus pas / bcom ldan 'das des rgyal po'i yon tan rgyas par bshad de mdo sder blta'o // de nas rgyal po 'khor dang bcas pas sangs (P. 129a) rgyas la rin po che spar¹⁶ gang gtor nas smon lam btab pa ma 'ongs pa'i dus na sangs rgyas shākya thub pa'i bstan pa nub tu¹⁷ cha ba'i tshe / der bdag rab tu byung nas chos kyi mjug la (N. 125b) bab pa na sgra chen po lan gsum bsgrags la /¹⁸

1 GNP gyi. 2 C 'jad. 3 GNP 'brel. 4 D paṇḍi. 5 GNP ḍī. 6 GNP khasarba nā'i. 7 GNP bzhin.
8 P spyar. 9 GNP brtan. 10 D li tscha bī. 11 GNP bsgyur. 12 G dang /. 13 C du bshad.
14 G om. 15 G lagso. 16 P sbar. 17 GNP du. 18 GNP om.

chos gos gyon pa tsam dang¹ skra bregs pa tsam yul nas bskrad² la / dam pa'i chos
phyung ste /³ dam pa'i chos kyi phyir bdag gi srog gtong⁴ bar gyur cig ces smon lam
btab bo // de'i rjes la blon po dang btsun mos kyang smon lam ttab bo⁵ //⁽⁹⁴⁾

lha'i bu dag nga 'das nas lo brgya phrag mang po 'das nas lho phyogs kyi rgyud du
mkhar⁶ gyi rgyal po bde spyod bzang po zhes bya ba 'byung ste / de'i tshe lo brgya na
dam pa'i chos nub⁷ par 'gyur ba'i lhag ma tsam lus pa na nga'i nyan thos 'byung bar
'gyur / dam pa'i chos 'byin par 'gyur / dam pa'i chos kyi 'khor lo bskor bar 'gyur / theg
pa chen po gzhan la rgyas par ston par 'gyur ro⁽⁹⁵⁾

zhes gsungs pa dang / yang

dge slong de lung ston pa nyon cig / de ni nga la dben pa dang / nga'i bstan⁸ pa
rgyas par byed pa (C. 117a) dang / khur chen po khyer ba dang / nga'i shākya'i gzhon
nu yin te / nga 'das pa'i 'og tu lho phyogs kyi rgyud du drang srong byi'o zhes bya ba'i
yul 'khor du bsod nams ldan gyi grong khyer chen po'i (G. 176b) byang phyogs su
skye bar 'gyur ro // rigs chen po rnam par dag pa bhra go can de ni shākya'i rigs yin
no // li tsa byi⁹ gzhon nu sems can thams cad kysis mthong na dga' ba 'di nga'i chos
rgyas par bya ba'i phyir byang chub sems dpa' mi'i mchog 'di¹⁰ rigs chen po rgyal rigs
su skye bar 'gyur te / de'i nye du 'brel¹¹ pa thams cad de'i ming las 'dogs so // de rab tu
byung nas¹² de'i 'khor (P. 129b) rnam kyang dam pa'i chos kyi phyir srog btang¹³ nas
chos bsrung¹⁴ ngo¹⁵ //⁽⁹⁶⁾

yang de'i rjes la 'di skad du

de'i gzhung¹⁶ la (D. 114b) mos pa ni nyung ste¹⁷ phal cher mi mos so // chos bzhi
dang ldan na de la mos shing yid ches par 'gyur ro // sangs rgyas snga ma dag la de'i
gzhung thos shing mos pa dang / dge ba'i bshes gnyen gyis zin pa dang / lhag (N.
126a) pa'i bsam pa la zhugs shing dge ba'i rtsa ba brtan pa dang / rgya chen po la mos
pa'o // de la mi mos shing yid mi ches pa thams cad ni bdud kyi¹⁸ byin gyis brlabs pa'i
gti mug can yin no¹⁹ // de la mos shing yid ches pa dag ni sangs rgyas kyi thugs la
dgongs so¹³ // de la bsnyen bkur byas na

(94) *Mahāmeghasūtra*. Tib. P. No. 898, Dzu 197a3-198a4.

(95) *Mahāmeghasūtra*. Tib. P. No. 898, Dzu 204b1-3.

(96) *Mahāmeghasūtra*. Tib. P. No. 898, Dzu 205a1-206a4.

1 GNP om. 2 GNP skrad. 3 CD om. 4 C gtang. 5 G po. 6 GNP li khar. 7 D ntub.

8 GNP stan. 9 D li tscha bī. 10 GP 'di de. 11 D 'bral. 12 GNP na. 13 P gtang. 14 D gsung.

15 N bsrungo. 16 NP gzhungs. 17 N ste /. 18 GNP kysis. 19 G yino. 20 G dgongso.

dus gsum gyi sangs rgyas thams cad la bsnyen bkur byas pa yin no¹ // de'i bka' mnyan
na dus gsum gyi sangs rgyas thams cad kyi bka' mnyan pa yin no // yang de'i rjes la de
'chi ba'i dus byas pa na nga'i dam pa'i chos nub pa yin no // de dang 'dra ba'i gang zag
med de ye mi srid do // yang gdam mang po'i rjes² la de'i phyogs (G. 177a) byed pa
dang / de'i gzhung rgyas par byed pa dang / de'i 'khor dang / de'i gzhung 'dzin pa dag³
ni⁴ sangs rgyas pa na de'i 'khor gyi gtso bor 'gyur ro // bskal pa bzang po 'di'i rjes la
bskal pa drug cu rsta gnyis (C. 117b) su sangs rgyas mi 'byung ngo // de'i rjes la sangs
rgyas bdun 'byung ngo // de'i rjes la 'jig rten gyi khams mngon par dang ba'i 'od ces
bya bar⁵ de bzhin gshegs pa dgra bcom pa yang dag par rdzogs pa'i sangs rgyas ye shes
'byung gnas 'od ces bya bar⁶ mngon par rdzogs par 'tshang bar rgya bar 'gyur ro //^{7, (97)}
zhes bya ba (P. 130a) la sogs pa gzhung mang du gsungs so // 'dir che long tsam bris so //
gzhan yang 'Phags pa 'Jam dpal rtsa ba'i rgyud las /

dge slong Klu sgrub ces pa 'byung //
rang bzhin med don de nyid rigs⁸ //
rma bya zhes bya'i gzungs bsgrubs nas //
lo ni drug brgya dag tu 'tsho //^{9, (98)}

zhes pa la sogs pa mang du¹⁰ gsungs so // 'Phags pa Lang kar gshegs pa las kyang /
blo gros chen po khyod shes byos //
lho phyogs be¹¹ ta'i yul du ni //
dge slong dpal ldan cher grags pa //
de ming klu zhes bod pa ste //^{12, (99)}

zhes pa nas /
rab tu dga' (D. 115a) ba'i sa bsgrubs nas //
bde ba can du de 'gro 'o //^{13, (100)}

zhes gsungs pa dang / 'Phags pa rNga bo che'i le'ur yang lung bstan pa yin no // 'Phags pa
gSer 'od dam pa'i mdor yang¹⁴ lung bstan pa'i (G. 177b) tshig ni med kyi / sangs rgyas kyi

(97) *Mahāmeghasūtra*. Tib. P. No. 898, Dzu 207b7-208a5.

(98) *Mañjuśrīmūlakalpa* 53.449-450.

(99) *Lañkāvatārasūtra* 10.164c, 165abc.

(100) *Lañkāvatārasūtra* 10.166cd.

1 G yino. 2 P rjas. 3 CD de dag. 4 GNP ni /. 5 GNP bar /. 6 NP bar /. 7 CD om.
8 GNP rig. 9 GNP om. 10 CD om. mang du. 11 C bi, D bai. 12 N om., P /. 13 N om.
14 N om.

ring bsrel la bram ze kau ṅdi rya ya¹ dang / li tsa byi² 'jig rten thams cad kyis mthong na dga' ba 'di brtsad³ pa mdzad pa yin no // gzhan yang slob dpon Zla ba grags pa'i zhal snga nas kyang /

de⁴ ltar slob dpon chen po 'phags pa Klu sgrub kyi zhal snga nas kyis⁵ nyid kyi⁶ don rjes su⁷ brnyes nas /⁸ so sor rang⁹ rig pa rdo rje 'dzin chen po'i ting nge 'dzin 'jig rten pa rnams la bstan¹⁰ nas / lha dang mi'i bde ba las 'das shing mu stegs pa dang / nyan thos dang /¹¹ rang sangs rgyas rnams kyi bsam gtan dang¹² snyoms par 'jug pa'i bde ba las kyang 'das nas / skye ba dang 'gag pa dang bral ba'i de bzhin gshegs pa'i sku rnam pa thams cad kyi mchog dang ldan pa / sku blta¹³ bas chog mi shes pa / stobs bcu dang¹⁴ mi 'jigs pa bzhi la sogs pa sangs (P. 130b) rgyas kyi yon tan thams cad (C. 118a) kyis brgyan ba / brnyes nas bde ba can du gshegs te / yon tan gyi dbang phyug brgyad dang ldan par bzhugs so //^{15, (101)}

zhes sGron ma gsal bar byed pa las gsungs so // de'i phyir de lta bu'i slob dpon Klu sgrub kyi gzhang shes shin 'dzin pa dang / de'i brgyud¹⁶ pa'i mang ngag zab mo yod pa dang / nyams su¹⁷ len pa'i gang zag des ni skye ba dpag tu med par theg pa chen po la spyad par byas pa yin no¹⁸ // ji srid sangs rgyas kyi bstan pa yod pa de srid du de'i man (G. 178a) ngag mi 'chad de / rje btsun Ārya de ba'i zhal snga nas /¹⁹

bcom ldan 'das Shākya thub pas mtshan phyed kyi dus na mngon par byang chub pa'i ting nge 'dzin mngon sum du mdzad pa nas gzung²⁰ ste / ji srid sangs rgyas kyi bstan pa gnas pa de srid du²¹ slob dpon 'phags pa Klu sgrub nas bzung ste /²² bla ma'i zhal nas bla ma'i²³ zhal (N. 127a) du 'phos pa yin te / slob dpon gyi zhal snga'i man ngag 'di ni sangs rgyas dang byang chub sems dpa' thams cad dang / rdo rje mkha' 'gro ma thams cad kyi byin gyis rlob (D. 115b) pa yin no²⁴ //²⁵

zhes gsungs so // slob dpon Zla grags kyi zhal snga nas /

rnal 'byor pa tshe 'di nyid la 'tshang rgya bar 'dod ba dag gis kyang²⁶ slob dpon gyi zhal snga nas²⁷ nye bar gnang ba'i²⁸ de kho na nyid shin tu zab mo'i mang ngag rnyed par dka' ba 'di gter dang 'dra ba'i slob dpon rnams ni rin po che'i bum par bdud rtsi'i

(101) *Pradīpoddyotanaṭīkā*. Chakravarti ed., p.226.15-19.

1 C kau ṅdi mya, GP ko'u di nya ya. 2 CD li tscha bī. 3 N brtsod. 4 P di. 5 GNP kyi. 6 GNP kyis. 7 G rjesu. 8 CD om. 9 GP om. 10 CD brten. 11 N om. 12 G dang /. 13 GNP lta. 14 GP dang /. 15 CD om. 16 GNP rgyud. 17 N nyamsu. 18 D na. 19 CD om. 20 GNP bzung. 21 GNP du /. 22 NP om. 23 GNP om. bla ma'i. 24 G yino. 25 CD om. 26 GNP kyang /. 27 GNP nas /. 28 GN gnad pa'i.

chu byo ba ltar zhal nas zhal¹ snyan nas snyan du 'pho zhing bzhes pa 'di ji srid sangs
rgyas shākya thub pa'i chos gnas pa² de srid du 'di yang nub par mi 'gyur ro⁽¹⁰²⁾
zhes gsungs so //

slob dpon 'phags pa Klu sgrub kyi (P. 131a) rnam par smin pa'i sku lus de nyid da lta
dpal gyi ril bzhugs te / dus gcig³ na rgyal po bde spyod bzang po'i bu dpal gyi ri la song nas
slob dpon gyi dbu bslangs⁴ pas / slob dpon gyi zhal snga nas⁵ (G. 178b) rgyal bu chod⁶ la
khyer cig gsungs nas ral gri lan lngar btab pas⁷ mchod (C. 118b) nas / slob dpon gyi zhal
nas⁸ rtswa⁹ ku sha cig long gsungs nas rgyal bus de¹⁰ blangs te phul bas / slob dpon nyid
kyis ske la rtswas¹¹ bskor bas¹² dbus¹³ la lhung nas rgyal bu'i lag tu byin no // rgyal bus ma
theg nas de nyid du bzhag¹⁴ nas song ngo // da ltang yar dbu dang lus kyi khog pa rin po
che'i 'od 'phro ba'i khang pa brtsegs pa na¹⁵ rin po che'i khri la bzhag ste / lha dang gnod
sbyin dang¹⁶ dri za la sogs pas nyin dang mtshan du rtag tu mchod pa byed do // 'di la gtam
rgyud ring po yod de 'dir gzhag¹⁷ go //¹⁸

smon lam gyi sku ni bde ba can na bzhugs te / bcom ldan 'das 'od dpag med kyis byang
chub sems dpa' blo gros rin po che zhes mtshan btags¹⁹ nas²⁰ sku mdog dkar po phyag (N.
127b) gnyis pa²¹ g-yas mchog sbyin pa / g-yon padma dkar po bsams pa'o // bla ma rje
btsun A ba dhū tī²² pa'i zhal nas /

nga'i bla ma rje btsun chen po rnal 'byor gyi dbang phyug A ba dhū tī²³ pa mngon
par shes pas sngon ji ltar mnga' ba bzhin du /²⁴ zhal gzigs shing chos gsan / res dpal gyi
ri la gzigs shing bzhugs te / 'phags pa'i slob ma rje btsun Klu'i byang chub²⁵ dus da lta
dpal Sha ba ri par²⁶ grags pa yang dus rtag tu chos gsan pa yin no //²⁷
zhes bla (D. 116a) ma A ba dhū tīs²⁸ gsungs so²⁹ //

(102) *Caryāmelāpakapradīpa*. Tib. D. No. 1803, Ngī 90a2-4.

1 GNP *zhal* /. 2 GNP *pa* /. 3 NP *cig*. 4 GNP *blangs*. 5 GNP *nas* /. 6 G *chos*. 7 GNP *pa*.
8 GNP *nas* /. 9 CGNP *rtsa*. 10 P *nge*. 11 GNP *rtsa*. 12 N *pas*. 13 N *dbu*. 14 GNP *gzhag*.
15 GNP *na* /. 16 GNP *dang* /. 17 GNP *bzhag*. 18 GNP /. 19 GNP *brtags*. 20 GNP *nas* /.
21 GNP *pa* /. 22 GNP *tī*. 23 GNP *tī*. 24 CD om. *du* /. 25 GNP *chub tu*. 26 NP *bar*.
27 CD om. 28 GNP *tī*. 29 GNP *gsung ngo*.

rang gi sdug bsngal yal bar bor (G. 179a) nas¹ (P. 131b) gzhan gyi sdug bsngal gyi mes gdungs pa dbang po rnon po'i yang rnon po chos zab mo la mi skrag par mos pa dang / bdag bsgrub pa dang mi 'bral bar tshe 'di nyid la 'tshang rgya bar 'dod pa dang / gzhan gyi don dka' ba med par myur du bya ba dang / mngon par shes pa myur du skye bar 'dod pas² thabs khyad par can gyi theg pa la 'jug par bya'o // bla ma bzang po la rdo rje slob dpon gyi dbang zhus nas sgrub pa gtso bor bya'o // gsang ba dang³ shes rab ye shes kyi dbang ni tshangs par spyod pa grol ba'i lam pas mi bskur zhing / slob mas kyang mi blang ngo // de ni tshangs par spyod pa zad par byed pa dang / sangs rgyas kyi bstan pa nub par byed pas⁴ sems can dmyal bar slob dpon dang⁵ slob ma gnyis the tshom med par 'gro (C. 119a) bar 'gyur ro // gal te gsang sngags spyod na dbang mnos la bum pa'i dbang thob pa des rgyud gang yang rung ba'i sgor zhugs la /⁶ rang 'dod pa'i lha'i ting nge 'dzin dang / bzlas pa'i sngags bla ma la zhus la sgrub pa gtsor byed⁷ cing⁸ dam tshig dang sdom pa nyi shu⁹ shin tu gtsang bar bsrung ste¹⁰ /¹¹ bsgrub par bya'o // gang gi tshe nus pa skyes pa na¹² phrin¹³ las bzhi dang / 'jig rten gyi dngos grub brgyad kyis¹⁴ gzhan gyi don bya dka' ba med par 'gyur ro // de bas na (N. 128a) rgyud las /

gsang sngags rgya mtsho chen¹⁵ po ni //
 dngos grub rlabs ni 'khrigs pa can //
 dpe 'am¹⁶ (G. 179b) lung ma bstan tshig gam¹⁸ //
 rjes su¹⁸ dpag pa'i shes rab kyis //
 rtogs¹⁹ par nus pa ma yin no //

zhes gsungs so // bdag gi bla ma Ya ba dwī pa bsod snyoms A wa dhū tī²⁰ zhal nas /

theg pa gnyis pos (P. 132a) spangs pa yang //
 'dir zhugs phyag rgya chen po 'thob //
 de'i phyir gsang sngags theg pa 'dir //
 mkhas pa su zhig spyod mi byed //

ces gsungs so //

1 GNP nas /. 2 GNP pas /. 3 GNP dang /. 4 GNP pas /. 5 G dang /. 6 CD om.
 7 D byid. 8 GNP cing /. 9 GNP om. nyi shu. 10 GNP bsrungs te. 11 CD om. 12 GNP na /.
 13 GNP 'phrin. 14 GNP kyis /. 15 P chen chen. 16 G 'am. 17 GNP tshigs sam. 18 GN rjesu.
 19 P rtags. 20 GNP a ba dhū tī'i.

don gcig nyid na'ang ma rmongs dang //

thabs mang dka' ba med pa dang //

dbang po rnon po'i dbang byas nas //

gsang sngags theg pa khyad par 'phags //

zhes gsungs so // 'dir (D. 116b) ni dbang bskur thob par ma byas par 'dir 'jug par mi bya bas¹
lha bsgom pa dang² sngags bzlas pa mi bya ste / rjes su³ gnang ba ma thob pas⁴ gsang
sngags dang⁵ pha rol tu phyin pa gnyis rnam par thar pa 'dres par 'gyur ba'i phyir ro // rdo
rje byang chub kyi sems kun nas spros pa dang bral ba'i rdzogs pa'i rim pa'i man ngag ni⁶
snod ma yin pa la bstan par mi bya'o // yongs su⁷ rdzogs pa'i dge bsnyen chags lam pas⁸
dbang gnyis po blangs pa la nyes pa med do //

rang gi chung mas chog shes shing //

gzhan gyi bud med la mi 'gro //

log par g-yem pa rnam par spangs //

dge bsnyen de ni mtho ris 'gro //

zhes mdo las gsungs so //

sgrib gnyis myur du sbyangs pa dang //

tshogs (G. 180a) gnyis myur du bsags pa'i phyir //

gsang sngags theg pa spyad¹¹ bya zhes //

Mar me mdzad dpal ye shes smra //

Shākya'i (C. 119b) dge slong blo rnon po //

shes rab snying rje¹² khrims dang ldan //

Tshul khrims rgyal ba zhes bya ba'i //

slob ma bzang pos bskul nas bris //

De ba pā la'i thugs dam Bi kra ma //

shī la zhes bya'i gtsug lag khang chen du //

bla ma dam pa rnams¹³ kyis gsungs pa bzhin //

Mar me mdzad dpal ye (P. 132b) shes de yis bris //

(103) *Nayatrayapradīpa*. Tib. D. No. 3707, Tsu 16b3-4.

1 GNP *bas* /. 2 GNP *dang* /. 3 N *rjesu*. 4 GNP *pas* /. 5 GNP *dang* /. 6 GNP *ni* /.
7 N *yongsu*. 8 GNP *pas* /. 9 GNP /. 10 GNP om. 11 CD *sbyang*. 12 GNP *rjes*.
13 N *rnam*.

zas nor phran tshegs tsam la mi lta zhing //
legs par ma brtags pa la 'di mi sbyin //
'phags pa Klu sgrub gzhung la ma mos na //
zab mo spangs pas sems can dmyal bar 'gro //¹

theg pa chen po *dBu ma'i man ngag rin po che'i*² za ma tog kha phye ba zhes bya ba / ma
hā paṇḍi ta dpal Mar me mdzad ye shes kyi zhal snga nas mdzad pa rdzogs so³ // //

rgya gar gyi mkhan po Dī paṃ ka ra shrī dznyā na de nyid dang / lo tsā ba dge bsnyen
chen po rgya brTson 'grus seng ge dang / dge slong Tshul khriṃs rgyal bas bsgyur cing
zhus te⁴ gtan la phab pa'o⁵ //⁶

¹ GNP /. ² GNP *che'i* /. ³ GN *sho, P sto.* ⁴ N *te* /. ⁵ CD *pa.* ⁶ G ///.

7 *Sūtrasamuccayasamcayārtha*

#¹ // rgya gar skad du / *Sū tra sa mu tstsha ya sa nytsa ya artha*² /

bod skad du / *mDo kun las btus pa'i don bsdus pa /*

(N. 395b) sangs rgyas dang³ byang chub sems dpa' thams cadla phyag 'tshal
lo⁴ //

slob dpon *Nā gā rdzu nas mdzad pa'i Rin po che'i gtam brjod pa mdo* (D. 339a) *kun las
btus pa'i don ni / man ngag gi mdo rnam pa bdun gyis sgrub pa'i thabs*⁵ khyad par can rtogs
par bya ste / bsgom zhing nyams su blang ba ni / 'di lta te / rten dal 'byor gyi⁶ mdo dang /
gzhi dad pa'i mdo dang / rtsa ba byang chub kyi sems kyi mdo dang / rkyen bar chad sel⁷
ba'i mdo dang / sgrub pa nan tan snying por bya ba'i mdo dang / blo theg pa gcig tu sbyang⁸
ba'i mdo dang / lam che ba yon tan gyis bgrod pa'i mdo'o //

de ci'i phyir zhe na / srid pa mas chags pa thams cad ni rlung gi dkyil 'khor la brten nas⁹
mas chags pa bzhin du dkar po'i chos thams cad ni¹⁰ rten dal 'byor phun (P. 395b) sum
tshogs pa la brten nas 'byung bar (C. 342a) 'gyur ro¹¹ //

dper na rtsi shing dang / me tog dang shing gel pa dang / sman la sogs pa thams cad ni sa
gzhi la brten nas skyed par¹² 'gyur ba de bzhin du / yon tan gyi chos thams cad bsrung zhing
'phel bar byed pa'i gzhi dad pa la brten nas rgyas par 'gyur ro¹³ //

dper na rtsa ba 'am / sa bon ma nor ba las sdong bu dang / yal ga dang /¹⁴ lo ma dang /
me tog dang / 'bras bu thams cad rim gyis rgyas shing smin par 'gyur ba de bzhin du¹⁵ thams
cad mkhyen pa nyid du¹⁶ sems bskyed pa'i rtsa ba las thams cad mkhyen pa'i 'bras bu 'byung
(G. 511a) bar 'gyur gyi / nyan thos pa dang / rang sangs rgyas pa dang / 'jig rten pa rnam
kyis¹⁷ sems bskyed pa las ni rnam pa thams cad mkhyen par 'gyur ba ma yin no¹⁸ // de lta
bas na pha rol tu phyin pa bcu dang / thun (N. 396a) mong ma yin pa'i byang chub kyi
phyogs kyi chos sum cu rtsa bdun dang / tshad med pa bzhi dang / dge sbyong gi 'bras bu
bzhi dang¹⁹ /²⁰ rtsa ba dang / bdag dang / bde ba dang / rtag pa'i pha rol tu phyin pa thob par
'dod pas thams cad mkhyen pa nyid sems bskyed pa'i rtsa ba brtan por gzung bar bya'o //

1 GNP # (N om.) // *mdo kun las btus pa'i don bsdus jo bos bdzad pa bzhugs so* // #.

2 GNP *yārtha*. 3 GNP *dang* /. 4 G 'tshalo. 5 GNP *thabs* /. 6 GNP *gyis*. 7 GNP *bsal*.

8 GNP *byang*. 9 N *nas* /. 10 P *ni* /. 11 G 'gyuro. 12 D *skye bar*. 13 G 'gyuro. 14 D om.

15 GNP *du* /. 16 NP *du* /, G *nyidu* /. 17 D *kyi*. 18 G *yino*. 19 GP om. 20 G //

dper na nas dang / gro dang sā lu la sogs pa'i sa bon legs par btab cing rtsa ba legs par¹ btsugs kyang /² sad dang ser ba dang³ bca⁴ la sogs pas / bar ma skabs su⁵ bar chad byas nas / 'bru'i tshogs smin par mi 'gyur zhing / kham gyi zas kyis⁶ 'tsho bar byed pa'i (D. 339b) nams la yang⁷ phan 'dogs par mi byed do⁸ // de bzhin du dal 'byor thob cing dad pa la gnas pas byang chub sems kyi sa bon ma nor bar btab ste rtsa ba ma nor bar btsugs kyang / bar ma skabs su⁹ sems can blos spang ba dang / byang chub (P. 396a) sems dpa' la rma 'bying pa dang / bdud kyi las sna tshogs pa dang / dam pa'i chos spong ba dang / mi dge ba bcu dang / spro ba med pa la sogs pa tshe 'di dang / ma 'ongs pa'i lus la gnod pa rnam kyis bar du gcad¹⁰ na / bdag nyid kyang ci rigs par rten mchog las nyams nas mi khom pa'i gnas su¹¹ ltung ba dang / theg pa mchog las nyams nas nyi tshe ba'i theg par ltung ba (G. 511b) dang / brtson 'grus mchog la¹² (D. 342b) nyems nas¹³ rnam pa thams cad mkhyen pa nyid las ring du 'gyur ba'o¹⁴ // de'i phyir brgyud¹⁵ nas gzhan gyi don las kyang nyams par 'gyur te / rang dang gzhan gyi don thams cad chud zos par 'gyur ro¹⁶ //

dper na yid bzhin gyi nor bu rin po che btsa¹⁷ rdzis legs par ma bskyangs na bag med pas brlag par 'gyur (N. 396b) ba'i nyen mchis so // de bzhin du thob pa chud mi gsan pa dang / dad pa brtan po dang / rtsa ba mi 'gyur ba dang / gnod pa'i bar chad bsal ba la sgrub pa nan tan snying por ma byas na / byang chub kyi sems kyi nor bu rin po che gtan rlag¹⁸ pa'i nyen mchis so //

dper na lam kha brag¹⁹ phyin pa gang du 'gro ba'i phyogs la yid 'khrugs shing nem nur can du 'gyur ro // de bzhin du sems lta ba sna tshogs kyis gzengs²⁰ par gyur na chos thams cad kyi de kho na nyid rtogs par mi 'gyur bas blo gros theg pa sna tshogs su 'gro ba'i nyen mchis so //

phyi'i lo tog phun sum tshogs par 'dod pas / do gcig²¹ so nam²² la nan tan byed pa de bzhin du²³ sangs rgyas kyi che ba'i yon tan thams cad thob par 'dod pas kyang de thob par byed pa'i rgyu lam ma bgrod na las dang po pa'i sa las mi 'phags par mchi'o // de'i phyir na shing rta chen pos bsdus pa'i mdo ni mi mang zhing mi nyung bar (P. 396b) de kho na'o //

1 GP pa. 2 G //. 3 GNP dang /. 4 G btsa'. 5 G skabsu. 6 GNP kyi. 7 GNP yang /.
8 G byedo. 9 G skabsu. 10 GNP bcad. 11 G gnasu, D om. 12 D las. 13 GNP nas /.
14 GNP ro. 15 GNP rgyud. 16 G 'gyuro. 17 GNP rtsa. 18 GNP brlag. 19 GN dbrag, P brlag.
20 GNP gzings. 21 GNP cig. 22 P nams. 23 GNP du /.

go rim¹ kyang 'di ltar shes te² / dang po gsum ni rgyu bya ba byed pa'i rigs pa yin la bar ma gsum ni rkyen ltos pa'i rigs pa yin zhing tha ma ni 'bras bu chos nyid (D. 340a) kyi³ rigs pa yin te / dpe (G. 512a) bdun ni 'thad pa sgrub⁴ pa'i rigs pa yin pa'i phyir ro //

de la⁵ sangs rgyas 'byung ba rnyed par dka' zhes bya ba la ogs pas rkyen gzhan gyi 'byor pa lnga mtshon la / mir gyur pa rnyed par dka' zhes bya ba la sogs pas rgyu bdag nyid kyi 'byor ba lnga mtshon no // dal 'byor rnyed par dka' zhes bya bas rgyu rkyen tshogs pa'i dal 'byor bcu mtshon pa yin no //

de bzhin gshegs pa'i bstan pa la dad pa rnyed par dka' zhes pas gzhi dad⁶ pa bstan /

byang chub kyi sems rnyed par dka' zhes bya ba la sogs pas yul sangs rgyas la dmigs pa'i (N. 397a) sems bskyed pa bstan / (C. 343a) sems can thams cad la snying rje chen po skye bar dka' zhes bya ba la sogs pas sems can la dmigs pa'i sems bskyed pa bstan /

byang chub sems dpa' la rma 'byin pa zhes bya ba nas bar du gcod pa'i chos spong ba rnyed par dka' zhes bya ba'i bar gyis⁷ rkyen bar chad bsal ba'i mdo bstan /

khyim par gyur kyang chos rnams la nan tan gyis gces par bsgrub pa rnyed par dka' zhes bya ba la sogs pas ni sgrub⁸ pa nan tan snying por byed pa'i mdo bstan /

mya ngan las 'das pa la mos pa'i sems can rnyed par dka' zhes pa nas theg pa gcig la mos pa'i sems can rnyed dka' zhes bya ba'i bar gyis blo theg pa gcig la sbyang ba'i mdo bstan /

sangs rgyas dang byang chub sems dpa'i che ba nyid rgya chen po la 'jug pa'i sems can⁹ ni¹⁰ rnyed par dka'o zhes bya ba la sogs pa'i lam che ba'i yon tan gyis bgrod pa'i (P. 397a) mdo bstan /

de ltar rigs pa bzhis mdor bstan / lung gi mdo bdun gyis rgyas par bshad (G. 512b) pa'i don de blo la go bar byas nas nyams su¹¹ blangs pas na sems bskyed pa'i rigs bzhi skye ste / dang po g-yo smon gyi tshul dang / 'jug cing bstan pa dang¹² gnas pa dang¹³ mthar phyin pa'i rim pa'o //

de yang dang po sa bon dang¹⁴ zla grangs¹⁵ dang / yon tan mthong thos dang / byin rlabs kyi srung¹⁶ ma rnams kyi rtswa me¹⁷ bzhin du skye'o¹⁸ //¹⁹

de'i gzhi'i²⁰ steng du snying rje dang ldan pa la goms pas zla ba yar ngo bzhin du 'phel ba'i tshe dbang dang²¹ (D. 340b) yo byad la sogs pa 'jug cing bstan pa'i yan lag tu 'gyur ro²² //

1 CD rims. 2 GP ste. 3 GNP kyis. 4 GNP bsgrub. 5 D la /. 6 N dang. 7 GNP gyi.
8 N bsgrub. 9 GNP can /. 10 GNP om. 11 GN nyamsu. 12 GNP dang /. 13 GNP dang /.
14 GNP dang /. 15 GNP grangs pa. 16 N gsung. 17 GNP med. 18 D skye bo. 19 D om.
20 NP gzhi. 22 GNP dang /. 23 G 'yuro.

de nas gnas pa gsum gyi mthu rdzogs par byed pa kha cig 'phags pa rtogs pa chen po yongs su¹ rgyas pa'i mdo las 'gyod tshangs kyis sdig pa sbyang ste² / mchod bstod dang / skyabs su gsol ba dang / dbang gzugs pa dang / dngos po bshags pa dang / (N. 397b) dam bca' zhing sdom pa gzung ba dang / khru bya ba dang / tshangs pa thob pa dang / rjes su³ spro ba dang / gzengs bstod pa'i tshul gyis gdams pa dang / dmigs pa med cing theg pa gcig tu blo sbyang ba⁴ dang / dag pa'i mtshan ma mthong ba dang / ming gdags pa dang / lam rgyud la bskyed pa dang / 'bras bu thob (C. 343b) pa'i bar du byed do //

kha cig ni de bzhin gshegs pa'i yi ge brgya pa la sogs pa zlos shing sgra'i mtha' las grol ba'i ting nge⁵ 'dzin gyi bar du sbyor zhing khirms nyi shu rtsa lnga bsrungs pas 'bras bu thob par byed do⁶ //

gang zhig sems dpa' gsum gyi mthu rdzogs pas na nyi ma grol ba ltar du mthar phyin pa'i sems su⁷ gyur pa'i tshe blo snying rje'i dbang du gyur pas sgyu ma'i dpe bdun po ltar dngos po thams cad la ma chags shing rlom⁸ pa med par gzhan gyi don la nyin mtshan du 'bad pa dang / thun mong (G. 513a) (P. 397b) gi yon tan byang chub kyis chos sum cu rtsa bdun dang / thun mong ma yin pa'i stobs bcu dang / mi 'jigs pa bzhi dang ma 'dres pa la sogs pa 'grub par byed do //

slob dpon Dī paṃ ka ra shrī⁹ dznyā na la bod kyis dge slong Tshul khirms rgyal bas gser srang bcu bzhi'i sbrang¹⁰ bu me tog du phul nas bod du byon¹¹ pa'i zhu ba phul ba las sgom sbyong ba rnams mthar phyin par bya ba'i don du bla ma zla ba bcu drug tu lam du ma chud do // de nas bod du byon¹² khar slob ma sems sbyong ba rnams kyis zhal chems gzha¹³ par zhus pas mdo'i don man ngag tu byas pa 'di zhal chems su¹⁴ gnang ngo // de'i dus su rgya brTson seng ges bsgyur bar zhus pas gnang ste gtan la phab po //

¹⁵dge slong Tshul khirms rgyal bas spel bar 'dod pa las bod kyis ston pa rnams ni nga rgyal dang phrag dog che bas nga rgyal gyi sgang bu la yon tan gyi chu ma¹⁶ chags so¹⁷ // de 'dra lha kang ke ru'i khyams (N. 398a) smad kyis ban de bdag gis zhus te gdams ngag dang bcas te gnang ngo // jo bo'i bla ma A wa dhū ti pas rab tu mi gnas pa'i lta ba dang / las mtha' sems bskyed pa'i cho ga dang / mdo kun las btus pa'i don man ngag tu byas pa 'di gsum stabs gcig tu gnang ba lags so // //¹⁵

1 G yongsu. 2 GNP sbyangs te. 3 G rjesu. 4 GNP sbyangs pa. 5 G tinge. 6 G byedo.
7 G semsu. 8 G rlog. 9 G shri. 10 GN sbram. 11 GNP 'byon. 12 GN 'byon.
13 GNP bzhag. 14 G chemsu. 15 D om. 16 G mi. 17 G chagsso.

8 *Garbhasamgraha*

#¹ // rgyar skad du / *Sam gra ha² garbha nā ma* /³

bod skad du / *sNying po bsdus pa⁴ zhes bya ba* /⁵

thugs rje chen po dang ldan pa la phyag 'tshal lo⁶ //

khams gsum sdug bsngal rgya mtsho⁷ che'i //

dba⁸ rlabs shin tu 'khrugs pa ni //

dge dang mi dge la sogs pa'i //⁹

zag¹⁰ bcas las las nges par 'byung //¹¹

de dag chags sdang la sogs pa'i // 5

nyon mongs rgyu yis bskyed pa ste //

de dag 'byung ba'i rgyu nyid kyang //

yid du 'ong dang mi 'ong¹² sogs //

gnyis su¹³ 'dzin pa nyid¹⁴ las byung //

thams cad 'byung ba'i rgyu nyid ni // 10

rtag dang khyab dang gcig pu sogs //

dngos por 'dzin pa'i gdon yin te //¹⁵

(G2. 10b) de bas bskal ldan skyes bu ni //

bdag gzhan grol ba don gnyer bas //

rten cing 'brel 'byung la sogs pa'i // 15

rigs pa gang la goms pa yis //

(C. 300a) dngos por 'dzin pa bzlog¹⁶ par bya //

phyi nang chos rnam thams cad kun //

mtshan ma thams cad dang bral ba'i //

nam mkha¹⁷ lta bur shes byas la // 20

dngos 'dzin gdon gyis brlams¹⁸ pa yi¹⁹ //

'gro kun yul du byas nas ni //

sdug bsngal rgya mtsho skems²⁰ byed pa //

1 G1N1P *snying po bsdus pa jo bos mdzad pa bzhugs* (P2: so) // #, D2G2N2 om.

2 D2 he. 3 P1 //. 4 G2N2P2 *bsdu ba*. 5 N1 //. 6 G1N2 'tshlo. 7 G1 tsho. 8 P1 dpa'.

9 G1 om. 10 G1 *gang zag*. 11 P2 om. 12 G2 'ongs. 13 G *gnyisu*. 14 D2G2N2P2 'di.

15 G1 /. 16 G1 *zlog*. 17 G1N *namkha'*. 18 CD1 *brlabs*. 19 G1N1P1 *yis*. 20 D2 *skem*.

snying rje chen po sngon 'gro bas //
 bdag gzhan don kun (D1. 294b) 'byung ba yi¹ // 25
 rin chen byang chub sems bskyed bya //
 byang chub spyod pa rlabs chen pos² //
 pha rol phyin drug la sogs la //
 mnyam gzhang langs (P2. 10a) pa'i sbyor ba yis //
 lam lnga³ rim (D2. 8a) gyis bgrod byas (P1. 340a) te // 30
 sgrib pa rnam pa gnyis (G1. 465b) bsal⁴ na⁵ //
 tshogs gnyis yongs su⁶ rdzogs pa las //
 'bras bu sku⁷ gsum bsgrub par bya //
 sku (N2. 9b) gsum 'byung ba'i (N1. 355b) mtshan nyid kyang //
 stong nyid nam mkha⁸ lta bu las // 35
 brtsal med thugs rje'i sprin 'byung zhing //
 sku gnyis bdud rtsi'i chu rgyun gyis //
 khams gsum tha ma'i⁹ rgyud brlan¹⁰ te //
 byang chub snying po'i sa bon las //
 dge ba'i lo tog¹¹ smin par 'gyur // 40
 sangs rgyas kun gyi snying po ste¹² //
 'di ni snying po bsdu pa yin //
¹³-tha ma'i¹⁴ dus su¹⁵ gyur pas na //¹³
 tshe thung nad¹⁶ mang longs spyod dman //
 rkyen ngan bar chad mang ba yis // 45
 yun ring¹⁷ gnas pa'i mthu med pas //
 tshig rjes gcad¹⁸ par mi nus kyi¹⁹ //
 bshes gnyen dam pa bsten bya ste²⁰ //
 shin tu brtson pa'i sems ldan pas //
 g-yang sa rab tu dran byas te²¹ // 50
 bdag gzhan grol bar bya ba'i phyir //
 snying po myur du bsdu ba²² yin //

1 N2 yin. 2 D2G2N2P2 po. 3 D1 snga. 4 D2G2N2P2 gnyis bsal byas for pa gnyis bsal.
 5 GNP nas. 6 GN yongsu. 7 N2 rku. 8 GN namkha'. 9 G2N2P2 ba'i. 10 G2 brnyan.
 11 D1P2 thog. 12 G2N2P2 de. 13 G1 om. 14 P1 mi'i. 15 N2 dusu. 16 N nang. 17 D1 rings.
 18 D2G2N2P2 bcad. 19 G2N2P2 kyis. 20 D2G2N2P2 byas te. 21 D2G2N2P2 bya ste.
 22 D2 bsdu pa.

brtse bas 'di byas¹ bsod nams kyis //
skal ngan sems can thams cad kyang //
byang chub (G2. 11a) sems dang ldan gyur nas // 55
snying po² myur du sdud par shog /

*sNying po bsdu ba³ zhes bya ba /⁴ slob dpon chen po⁵ dpal Mar me mdzad ye shes kyis
mdzad pa rdzogs so // //*

paṇḍi ta de nyid dang / lo tsā ba dge slong Tshul khrims 'byung gnas deb rtses⁶ bsgyur
cing zhus te gtan la phab pa'o⁷ //⁸

1 G1 byas bas. 2 P1 por. 3 G1N1 //, D2G2N2P2 om. 4 CD2 *bsdus pa*. 5 G2 om.
6 D2G2N2P2 *zhi bas* for *deb rstes*. 7 CD1G1N1P1 *pa*. 8 G1 // // *shu bham* //.

9 *Hṛdayanikṣepa*

#¹ // rgya gar skad du / *Hṛ*² da ya ni kri pta³ nā ma⁴ /

bod skad du / *sNying po nges par bsdu ba zhes bya ba* /⁵

(C. 300b) dkon mchog gsum la phyag 'tshal lo //

mngon mtho nges par 'byung ster ba //

dkon mchog gsum la gus btud nas //

(P2. 10b) 'khor ba'i 'jigs pa sel ba yi //

snying po bsdu ba bshad par bya //

'khor ba'i mtshan nyid sdug bsngal (P1. 340b) dang // 5

las dang nyon mongs rnam rtog ste⁶ //

de dang rgyu 'bras go rim⁷ can //

'khor ba bsdus nas bstan pa yin //

thar pa'i mtshan nyid byang chub ste //

shes rab thabs (N1. 336a) dang spyod pa dang // 10

(D1. 294a) lam lnga dang ni tshogs gnyis las //

mya ngan 'das pa'i sku gsum 'byung //

de yang rgyu 'bras go rim⁸ can //

thar pa bsdus nas⁹ bstan pa'o //

kham gsum sdug bsngal rgya mtsho che // 15

dba' rlabs shin tu 'khrugs pa ni //

dge dang mi dge la sogs pa'i //

zag bcas las las nges par 'byung //

(D2. 8b) de dag gti mug chags sdang sogs pa //

nyon mongs rgyu yis bskyed pa ste // 20

yid 'ong (N2. 10a) mi 'ong¹⁰ la sogs pa¹¹ //

gnyis su¹² 'dzin pa nyid las byung //

1 G1N1P *snying po nges par bsdu ba zhes bya ba bzhugs* (G1P2 so) // # //, D2G2 om.

2 G1NP *hri.* 3 D2NP1 *pa ta.* 4 N1P1 *na ma.* 5 N2P2 om.

6 G2N2P2 *rtogs te*, N1 *rtogs ste.* 7 CD1 *rims.* 8 CD1 *rims.* 9 CD1 *te.*

10 G1 'ang. 11 G2N2P2 *pa'i.* 12 G2N1N2 *gnyisu.*

thams cad 'byung ba'i rgyu nyid ni //
 nga dang bdag tu 'dzin las byung //
 gzhan yang 'byung ba'i rgyu nyid ni // 25
 rtag dang gcig pu khyab¹ la sogs //
 dngos por 'dzin pa'i gdon yin te //²
 shes rab ldan pas spang bar bya //
 (G1. 467a) de bas (G2. 11b) bskal ldan skyes bu ni //
 bdag gzhan ma lus grol bya'i phyir // 30
 mi slu ba yi lung dag³ dang //
 rten cing 'brel 'byung la sogs pa'i //
 rigs pa gang la goms pa yis //
 dngos por 'dzin pa'i gdon chen po //
 ma lus par ni bzlog par bya // 35
 'di ltar phyi nang chos rnam ni //
 mtshan ma kun bral rang bzhin ni //
 nam mkha'⁴ lta bur shes bya^s la //
 rtag tu goms⁵ par bsgrub par bya //
 'khor ba thog⁶ ma med pa nas // 40
 dngos 'dzin gnod gyis brlams⁷ gyur pa'i⁸ //
 'gro kun yul du byas nas ni //
 thams (P2. 11a) cad rjes su⁹ 'dzin pa yis¹⁰ //
 byams chen tshad med sngon 'gro bas //
 sdug bsngal rgya mtsho skems¹¹ byed pa'i // 45
 snying rje chen po tshad med pas //
 bdag la¹² gzhan don 'grub pa yi //
 byang chub sems ni rin po che //
 yang dag brtan¹³ (P1. 341a) pa bskyed¹⁴ par bya //
 bdag gzhan 'byor pa¹⁵ bcu¹⁶ ldan pas // 50
 'khor ba'i chos la¹⁷ yid 'byung (C. 301a) bya //

1 P2 khyad. 2 N1 /. 3 G2N2P2 lus ngag for lung dag. 4 GN namkha'.
 5 G1N1P1 gom. 6 N1 thogs. 7 CD1 brlabs. 8 D2G2N2P2 pa yi for gyur pa'i.
 9 G2N2 rjesu. 10 D2G2N2P2 yi, G1 'is. 11 D2 skem. 12 D2G2N2P2 dang.
 13 G2N2P2 bstan. 14 G1 skyed. 15 D1 ba. 16 CG1P1 bcud. 17 D2G2N2P2 las.

'jigs pa kun las skyob¹ pa yi //
 skyabs gsum po dang ldan pa des //
 so sor (N1. 336b) thar la legs gnas bya //
 tshul khrims bzang po dang ldan zhing² // 55
 theg³ chen rigs yod skyes bu des //
 'gro ba skyabs med bskyab⁴ pa'i phyir //
 skyabs su⁵ 'gro ba sngon 'gro ba⁶ //
 smon pa'i sems ni bskyed⁷ par bya //
 lhag pa'i bsam pa⁸ dang ldan pas // 60
 'jug pa'i sems ni bskyed byas pas //
 sngar gyi smon pa'i sems de nyid //
 rgya (D1. 294b) cher rab tu 'phel bar 'gyur //
 byang chub (G1. 467b) sems dpa'i spyod pa ni //
 rlabs chen pha rol phyin⁹ drug sogs // 65
 mnyam gzhag langs¹⁰ pa'i rnal 'byor gyis //
 tshogs kyi lam 'di bstan¹¹ par bsgrub¹² //
 lam lnga rim gyis¹³ bgrod byas te //
 sgrub pa gnyis ni bsal byas nas //
 'di ltar tshogs gnyis rdzogs byas te¹⁴ // 70
 'bras bu sku¹⁵ gsum 'grub par bya //
 sku¹⁶ gsum sgrub¹⁷ (G2. 12a) pa'i mtshan nyid kyang //
 chos sku nam mkha'¹⁸ (D2. 9a) lta bu las //
 brtsal¹⁹ med thugs (N2. 10b) rje'i sprin byung bas //
 sku gnyis bdud rtsi'i chu rgyun gyis // 75
 khams gsum tha ba'i rgyud brlan te //
 byang chub snying po'i²⁰ sa bon las //
 dge ba'i lo tog smin par 'gyur //
 dus gsum sangs rgyas kyis²¹ gsungs pa'i //
 snying po 'dir ni bsdu pa yin // 80

1 G1 skyod. 2 D2G2N2P2 cing. 3 P1 thegs, G1 theg pa. 4 G1N1P1 skyabs.
 5 G2N2 skyabsu. 6 D2G2N2P2 bas. 7 P1 skyed. 8 C pa'i. 9 G1 gyi na for phyin.
 10 N1 yangs. 11 D2G1P1 brtan. 12 G2N2P2 grub. 13 N1P1 gyi. 14 D2 bya ste.
 15 G2 sku bsgrubs. 16 G2 chas sku. 17 D2 bsgrub, G2N2P2 bsgrubs.
 18 GN namkha'. 19 D2G2N2P2 rtsol. 20 P2 pa'i. 21 G1N1 kyi.

'khor ba'i sdug bsngal spang¹ 'dod na //
 de la brtson (P2. 11b) 'grus 'bad par bya //
 rtsod pa'i dus kyi tha ma la //
 tshe thung nad mang longs spyod dman //
 rkyen ngan bar chad mang ba² yis // 85
 yun ring³ gnas pa'i mthu med pas //
 tshig⁴ rjes gcad⁵ par mi nus kyis⁶ //
 rigs⁷ la gnas pa'i gang zag des //⁸
 bshes gnyen dam pa bsten (P1. 341b) byas la //
 shin tu brtson pa'i sems kyis ni // 90
 'khor ba'i sdug bsngal dran byas la //
 bdag gzhan⁹ grol bar bya ba'i phyir //
 snying po myur du bsdu bar bya //
 brtse bas 'di byas dge ba yis //
 skal ldan sems can¹⁰ ma lus kun // 95
 byang chub¹¹ sems kyis¹² rgyud brlan te //
 snying po myur du sdud¹³ par (N1. 337a) shog //

*sNying po*¹⁴ *ngeṣ par bsdu ba zhes bya ba* /¹⁵ *slob dpon*¹⁶ *mkhas pa* (C. 301b) *chen po*¹⁷
*dpal Mar me mdzad*¹⁸ *ye shes*¹⁹ *kyi*²⁰ *zhal snga nas dbus kyi snye*²¹ *thang gtsung*²² *lag khang*
*du*²³ *mdzad pa rdzogso*²⁴ // //²⁵

rgya gar gyi mkhan po (G1. 468a*) *chen po de nyid dang / zhu*²⁶ *chen gyi lo tsā ba dge*
slong Tshul khirms rgyal bas bsgyur cing zhus te gtan la phab pa'o // //²⁷

1 D2G1NP *spong*. 2 G1N1P1 *po*. 3 CD1 *rings*. 4 G1 *tshid*. 5 G2N2P2 *bcad*.
 6 D2 *kyi*. 7 G1 *riḡ*. 8 G1 /. 9 G1 *bdagzhan*. 10 G1 *seṃn* for *sems can*.
 11 G1 *byub* for *byang chub*. 12 G1N1P1 *kyi*. 13 P2 *bsdud*. 14 G1 *om*.
 15 D2G2N2P2 *om*. 16 G1 *slon* for *slob dpon*. 17 G1 *cheno*, P2 *po /*. 18 G1 *dzad*.
 19 G1 *yes* for *ye shes*. 20 G1 *kyi //*, N1 *kyis //*, P1 *kyis /*. 21 CD1 *gnye*.
 22 G1 *gtsuḡ*. 23 G1N1P1 *tu*. 24 N2 *rdzogso*. 25 N1 // for // // .
 26 G2N2P2 *zhus*. 27 G1 // // *shu bham //*.

10 *Bodhisattvamaṅyāvalī*

#¹ // rgya gar skad du / *Bo dhi sa twa ma nya² ba li /*

bod skad du /³ *Byang chub sems dpa'i nor bu'i phreng ba /⁴*

thugs rje chen po la phyag 'tshal lo⁵ //

dad pa'i lha la phyag 'tshal lo⁶ //

⁷bla ma rnams la phyag 'tshal lo //⁷

the tshom thams cad (G2. 12b) rnam⁸ spangs shing //

sgrub la nan tan gces⁹ (D1. 295a) su¹⁰ bya //

gnyid rmugs le lo spang¹¹ bya zhing //

rtag tu brtson 'grus 'bad par¹² bya //

dran dang shes bzhin bag yod pas // 5

dbang po'i sgo rnams rtag tu bsrung //

nyin mtshan dus gsum yang dang yang //

sems kyis rgyud la brtag¹³ par bya //

bdag gi¹⁴ nyes pa¹⁵ bsrag¹⁶ bya zhing //

gzhan gyi 'khrul pa btsal mi bya // 10

gzhan¹⁷ gyi yon tan bsrag bya zhing //

bdag gi yon (P2. 12a) tan sba¹⁸ bar bya //

rnyed dang bkur sti spang bya zhing //

khengs¹⁹ grags rtag tu spang bar bya //

byams dang snying rje bsgom bya zhing // 15

byang chub sems ni brtan²⁰ par bya //

mi dge bcu po spang bya zhing //

rtag tu dad pa (D2. 9b) brtan par bya //

(N2. 11a) 'dod pa chung zhing chog shes (P1. 342a) dang //

byas pa drin du gzo ba dang²¹ // 20

khro dang nga rgyal gzhom bya zhing //

1 G1N1P *byang chub sems dpa'i nor bu'i phreng ba bzhugs* (P2: so) // #, D2G2 om.

2 G1N1P1 *ni a.* 3 G1 // 4 G1N2 // 5 G2 'tshalo. 6 G1N2 'tshalo. 7 G2N2P2 om.

8 G1 *rnams.* 9 G1P *ces.* 10 G2 *gcesu.* 11 G1P1 *spangs.* 12 G2N2P2 *pa.* 13 N2 *rtag.*

14 P1 *gis.* 15 G2 *par.* 16 G1N1P1 *bsgrags.* 17 G1 'dod pa chung *gzhan.* 18 P *spa.*

19 CG2N2P2 *kheng.* 20 G1N1P1 *brtag,* G2N2P2 *bsten.* 21 D2 *bar bya for ba dang.*

dman pa'i sems dang ldan par bya //
 log pa'i 'tsho ba rnam spang zhing¹ //
 chos kyi² 'tsho bas 'tsho bar bya //
 zang zing thams cad rnam spang zhing³ // 25
 'phags pa'i nor gyis⁴ (N1. 337b) brgyan par bya //
 dad pa'i nor dang tshul khirms nor //
 khrel yod ngo tsha shes pa'i nor //
 thos pa'i nor dang gtong ba'i nor //
 shes (G1. 469a) rab nyid kyi nor bdun po // 30
 nor gyi rnam⁵ pa 'di dag ni //
 mi zad pa yi gter bdun te⁶ //
 mi⁷ ma yin la brjod mi bya //
 rtag tu 'du 'dzi spang bya zhing //
 dgon pa la ni gnas par bya // 35
 'khyal pa'i tshig rnam spang bya zhing //
 ngag rnam rtag tu bsdam par bya //
 bla ma mkhan po mthong ba'i tshe //
 gus pas rim gro bskyed par bya //
 gang (C. 302a) zag chos kyi mig can dang // 40
 las dang po pa'i⁸ sems can la //
 ston pa'i 'du shes bskyed par bya //
 sems can thams cad mthong ba'i tshe //
 pha ma bu tsha'i 'du shes bskyed //
 sdig pa'i grogs po spang bya zhing // 45
 dge ba'i bshes gnyen⁹ bsten par bya //
 sdang dang mi bde'i sa spang (G2. 13a) zhing //
 gang du bde bar 'gro bar bya //
 gang la chags pa spang bya zhing //
 chags pa med par gnas par bya // 50
 chags pas bde 'gro mi thob cing //
 thar pa'i srog kyang gcod par byed //

1 G1N1P1 *spangs shing*. 2 G1 *kyis*. 3 G1 *shing*. 4 G1N1P1 *gyi*. 5 G2 *brnam*. 6 D1 *de*.
 7 G1 *mi ma yin te // mi*. 8 D2G2N2P2 *yi*. 9 G1 *om*.

gang du dge ba'i chos mthong ba //
 der ni rtag tu 'bad par bya //
 thog mar¹ brtsams pa gang yin pa² // 55
 dang po de nyid bsgrub bya ste //
 (P2. 12b) de lta (D1. 295b) na ni kun legs byas //
 gzhan du gnyis ka 'grub mi 'gyur //
 rtag tu sdig la dga' bral bya //
 gang du mtho ba'i sems 'byung tshe // 60
 de tshe nga rgyal bcag bya zhing //
 bla ma'i gdams ngag dran par bya //
 zhum ba'i sems ni byung ba'i tshe //
 sems kyi (P1. 342b) gzengs ni bstod par bya //
 rtag tu stong nyid bsgom par bya // 65
 gang du chags (G1. 469b) sdang yul byung tshe³ //
 sgyu ma sprul pa bzhin du blta //
 mi snyan tshig rnam s thos pa'i tshe //
 brag ca⁴ bzhin du blta bar bya //
 lus la gnod pa byung ba'i tshe // 70
 sngon gyi las su blta bar bya //
 bas (N1. 338a) mtha' dgon par rab gnas shing //
 ri dags shi ba'i ro bzhin du //
 (N2. 11b) bdag gis⁵ bdag nyid sba bya zhing //
 chags pa med par gnas par bya // 75
 rtag tu yi dam brtan bya zhing //
 le lo rnyog (D2. 10a) ba'i⁶ sems byung tshe //
 de tshe bdag la brngan⁷ bgrang zhing //
 brtul zhugs snying po dran par bya //
 gal te gzhan dag mthong ba'i tshe // 80
 zhi des gsong por smra ba dang //
 khro gnyer⁸ ngo 'dzum⁹ spang bya zhing //
 rtag tu 'dzum zhing¹⁰ gnas par bya //

1 CD1G1N1P1 *ma*. 2 G1 *om*. 3 D2N2 *na*. 4 D2G2N2P2 *cha*. 5 G1N1P1 *gi*.
 6 G2 *pa'i*. 7 D2 *rngan*. 8 G1P1 *nyer*. 9 G1P1 *'dzin*, D2 *zum*. 10 G2N2P2 *bzhin*.

rtag tu gzhan dag mthong ba'i tshe //
 ser sna med cing sbyin la dga' // 85
 rtag tu phrag dog spang bar bya //
 gzhan gyi sems ni bsrung ba'i phyir //
 rtsod pa thams cad spang bya zhing //
 rtag tu bzod dang ldan par bya //
 ngo dga' med cing gsar¹ 'grogs med // 90
 rtag tu zungs (G2. 13b) ni (C. 302b) thub par bya //
 gzhan la brnyas pa spang bya² zhing //
 gus pa'i tshul gyis gnas par bya //
 gzhan la gdams ngag byed pa'i tshe //
 snying rje phan sems ldan par bya // 95
 chos la skur pa gdab mi bya //
 gang mos 'di la 'dun par bya //
 chos spyod³ rnam bcu'i⁴ sgo nas ni //
 nyin mtshan med par 'bad par bya //
 mang po'i nang du (P2. 13a) ngag la brtag // 100
 gcig pu⁵ 'dug na sems la brtag //
 dus gsum (G1. 470a) dge rtsa ci bsags pa //
 bla med byang chub chen por bsngo //
 bsod nams sems can rnams la bdar //
 rtag tu yan lag bdun pa yi // 105
 smon lam chen po gdab par bya //
 de ltar byas na bsod nams dang //
 tshogs chen gnyis kyang rdzogs 'gyur te //
 sgrib pa gnyis (P1. 343a) kyang zad par 'gyur //
 mi lus thob pa'i⁶ don yod pas // 110
 bla med byang chub thob par 'gyur //⁷

rgya gar gyi mkhan po dpal Mar (D1. 296a) me mdzad ye shes kyis mdzad pa⁸ *Byang chub sems dpa'i nor bu'i phreng ba rdzogs so*⁹ // //¹⁰

¹ G1N1P1 *gsang*. ² G1 *bya*/. ³ G2N2P2 *spong*. ⁴ G1N1P1 *bcu*. ⁵ G2N2P2 *pur*.
⁶ D2G2N2P2 *pa*. ⁷ D1 // // . ⁸ G1 P2 // , D2G2N2P1 *om*. ⁹ N2 *rdzogsso*. ¹⁰ DP1 // .

11 *Bodhisattvacaryāsūtrīkṛtāvavāda*

// ¹rgya gar skad du / *Bo dhi sa twa tsarya sū² tri kṛ³ ta pa bā ra /*

bod skad du / ¹ *Byang chub sems dpa'i spyod pa mdo tsam gdams ngag tu byas pa /*⁴

sangs rgyas dang byang chub sems dpa' thams cad la phyag 'tshal lo⁵ //

nges par legs pa'i byang chub dang //

mngon par mtho⁶ ba thob 'dod pas //

dkon mchog gsum la lhar bzung⁷ nas //

dang po snying rje⁸ kun la lta⁹ //

de nas byang chub sems bskyed de // 5

thabs dang ldan pa'i spyod pa yis //

rang gi¹⁰ sems nyid dang por gdul //

dang po¹¹ rang nyid ma 'dul¹² bar //

gzhan dag gdul¹³ bar ji ltar nus //

ji ltar 'dab gshog¹⁴ (N3. 12a) ma tshang ba'i // 10

bya yis¹⁵ mkha' la 'phur¹⁶ mi nus //

de bzhin lta spyod med pa yi //

gang zag dag ni ji ltar (D2. 10b) grol //

de phyir de¹⁷ gnyis¹⁸ 'grub (G3. 14a) pa'i phyir //

dka' (G1. 375b) ba'i 'bad pa (G2. 470b) chen pos¹⁹ bya²⁰ // 15

dka' bas sbyang ba²¹ ma byas par //

sla bas goms par ji ltar 'gyur //

go²² bgos²³ khur khyer rgyal sras des²⁴ //

dge ba'i bshes gnyen bsten byas²⁵ te //

shes rab gsum la gzhi²⁶ bcas nas // 20

go 'phang mchog tu 'gro ba yi //

lta ba nyid la gtsor sbyangs te //

1 D2G23N23P23 om. 2 D1 su. 3 G1N1P1 kri. 4 G3N3 // 5 G3 'tshalo.

6 N3 mthong. 7 N2P2 gzung. 8 D2G3N3P3 rjes. 9 D2G3N3P3 blta.

10 G3N3P3 gis. 11 D2G3N3P3 por. 12 D2GN3P3 dul. 13 G3N3P3 dul.

14 G2N2P2 bshog. 15 G3 yi. 16 N1 phur. 17 N2 de'i. 18 P1 nyid.

19 D2 po. 20 D2 po, N2 byang. 21 G2N2P2 sbyangs pa. 22 N2 gong.

23 G2N2P2 dgos. 24 P1 de. 25 D1 ryas. 26 G12 bzhi.

(P3. 13b) tshul khrims gtsang ma'i gos gyon nas //
 sgrub la nan tan gces¹ su² bya //
 chos kyi rjes su³ bsgrub (P1. 273b) pa'i phyir // 25
 dus dang gnas (N1. 269b) skabs kun du⁴ yang //
 sbyor ba dngos gzhi rjes gsum gyi⁵ //
 las rnams dran pas zin par bya //
 skyon spangs⁶ legs sgrub⁷ don yod bya //
 spyod lam don med du⁸ mi bya⁹ // 30
 rtag tu rang gi yon tan sbyangs¹⁰ //
 dge ba'i phyogs kyi¹¹ sbyor ba la //
 spro bya zhum dang sems mi gsad¹² //
 nyes spong yon tan dge 'phel (P2. 343b) ba'i //
 grogs btsal¹³ mthun pas¹⁴ de sems bzung¹⁵ // 35
 yon tan can la gus phyag bya //
 nyon mongs skye¹⁶ 'gro¹⁷ thabs kyis spang¹⁸ //
 mtho¹⁹ dman grogs (C. 341b) kun dag la yang //²⁰
 chu²¹ las 'o ma len pa bzhin //
 nyes pa dor la legs pa blang // 40
 byas la²² (N2. 339a) drin gzo slar phan gdags //
 gzhan gyi sdig rkyen mi bya zhing //
 dge ba'i bar chad mi bya'o²³ //
 mtho la phun tshogs phrag dog med //
 grogs dang dman (G2. 471a) la brnyas thabs dang // 45
 khyad du gsad²⁴ pa nyid mi bya //
 rang skyon gzhan gyi yon tan bsgrag //
 gzhan skyon mi gleng rang mi bstod //
 'di bas phyi ma gtsor gzung ste //
 byed dgu chos dang bstun (G1. 376a) te bya // 50

1 G1P1 ces, N3 bces. 2 N1 cesu, N2 gcesu.. 3 G2N13 rjesu. 4 GNP tu.
 5 G23N23P23 gyis. 6 D2N3P1 spang. 7 D2G23N23P23 bsgrub. 8 N3 medu.
 9 D2GNP gnas. 10 D2GNP sbyang. 11 P2 kyi. 12 G2P1 gsang. 13 N2 tsal.
 14 G3N3P3 pa. 15 D2G12N12P12 gzung, G3N3P3 zung. 16 N3 skyes. 17 D2GNP grogs.
 18 G2N2P2 yang. 19 G3N3 mthon. 20 G2 // khyad du gsad pa nyid mi bya'o //.
 21 G2 rang du for chu. 22 CD1 pa. 23 G2N2P2 bya zhing. 24 D2G3N3P13 bsad.

'di yi zang zing rnam spangs te //
 'phags pa'i nor gyis lus brgyan bya //
 sdug bsngal dag la bder mi bzung¹ //
 gnyid rmugs le lo g-yeng spangs te //
 nges par 'chi ba'i dus² shes bskyed // 55
 dge ba chung yang (G3. 34b) 'bad pas bsgrub //
 sdig pa chung yang rnam par spang³ //
 chos kyi ched du ma gtogs par //
 kha zas gos sogs don mi gnyer⁴ //
 'dod pa chung dang chog⁵ shes bya // 60
 'jig rten chos (N3. 12b) brgyad rnam par spang⁶ //
 ngo dga' gzhogs⁷ slong⁸ sogs mi bya //
 rang la skyon yod mi tshor⁹ bar //
 gzhan gyi skyon la dpyad mi bya //
 smra dga' khas len dga'¹⁰ byas nas // 65
 de bzhin (P3. 14a) mi sgrub¹¹ spang bar bya¹² //
 g-yo dang sgyu¹³ dag mi bya zhing //
 log pa'i (D2. 11a) 'tsho ba rnam¹⁴ par spang //
 chos dang mthun pas sgrub¹⁵ par bya //
 nye du 'brel pa la sogs la // 70
 zhen par¹⁶ chags par¹⁷ mi bya zhing //
 phyogs ris zhen phyogs med par bya //
 gzhan la re ba chung bar bya //
 (P1. 274a) mi dge'i (N1. 270a) las la mi bstod smad //
 dgos pa med pa'i 'du 'dzi spang // 75
 bre (G2. 471b) mo'i gtam la dga' mi bya //

1 D2GNP *gzung*. 2 D2GNP *'du*. 3 G3N3P3 *spangs*. 4 G3 *gter*. 5 P1 *mchog*.
 6 G3 *spangs*. 7 D2GNPP *gzhog*. 8 G23N23P23 *slongs*. 9 G3 *mtshor*.
 10 G1N1P1 *pa*, G2P2 *dpa'*. 11 G2N2P2 *bsgrub*. 12 G2 *byas nas for bya*.
 13 G2N2P2 *rgyu*. 14 G2 *rnams*. 15 D2GNP *bsgrub*. 16 D2G13N13P13 *pas*. 17 G2 *pa*.

zhen¹ pas 'dod pa'i yid smon dgag //
 yon tan thob dang tshogs 'phel ba'i //
 (P2. 344a) las la zhum dang ngo tsha spang² //
 nga rgyal khengs pa gnyen pos gzhom // 80
 zhe gdug³ kheng⁴ grags rnam par spang⁵ //
 dngos dang brgyud pas sems can kun //
 nye du 'brel par (N2. 339b) gyur pas⁶ na //
 lus ngag yid gsum dri med pas //
 de dag kun la bu bzhin blta // 85
 snying rjes⁷ bzhin 'dzum gsong por smra //
 dga' ba'i mig (G1. 376b) gis kun⁸ la blta //
 'gror⁹ grogs mtho¹⁰ dman nye ring snyoms //
 bstod dang (C. 342a) bkur stis¹¹ mi dregs¹² shing //
 smod dang brnyas la zhe mi sdang // 90
 phongs pa rnams la snying rje yis //
 phan ni gdags pa nyid du bya //
 gang la chags¹³ pa spang bya ste //
 dman pa rnams la snying rje dang //
 phan pa'i bsam pas gdams ngag¹⁴ bya // 95
 sems can bsam¹⁵ pa tha dad pas //
 bya ba don chen¹⁶ brtags te bya //
 thams cad mgu bar su yis¹⁷ nus //
 (G3. 15a) 'on kyang 'gyod pa med pa yis //
 sdug bsngal khyad bsad¹⁸ bde¹⁹ ma chags // 100
 rang gi sems sbyang²⁰ gzhan sems gzung²¹ //
 brnyas dang nyes pa byung la sogs //
 gnyen po las dang brdzun pas sbyang //

1 CD1G1N1P1 zhes. 2 P2 dga' spang ba for ngo tsha spang. 3 D2 gdung. 4 D2 khe.
 5 G1N1P1 spangs. 6 D1 pa. 7 G2N2P2 rje. 8 D1 gun. 9 D2G23N23P23 'khor.
 10 D2G3N3P3 mthon. 11 G1N1P1 sti. 12 G2 dregs mi dreg. 13 N1 chaḍ.
 14 G2 ngag /. 15 G2 bsam. 16 G2 med. 17 P1 yi. 18 C gsad. 19 D2 bder.
 20 D2G12N12P12 sbyang. 21 G1N1P1 bzung.

de ltar blta zhing byang chub kyi //
 spyod pa yi dam brtan par bya // 105
 mi lus rin chen chud mi¹ gsan //
 nges (G2. 472a) par 'chi bas long med² srid //
 brtson 'grus me bzhin drag tu spyod //
 mngon zhen bdag lta'i rtsa ba chod //
 dug³ gsum 'khor ba gnyen pos (P3. 14b) chom⁴ // 110
 phyin ci log gi g-yang sa dor //
 'khor ba'i rgyun (N3. 13a) chod las chu skoms⁵ //
 ngan song gsum po sgo chod la //
 sdug bsngal gsum gyi nad gzhi⁶ ste⁷ //
 mtho ris thar pa'i skal la 'dzegs // 115
 sgrib pa gnyis sbyongs tshogs gnyis rdzogs //
 sku dang ye shes sa⁸ 'thob⁹ ste //
 'bad pa med par gzhan don sgrubs¹⁰ //

(P1. 274b) *Byang chub sems dpa'i spyod pa mdo* (N1. 270b) *tsam gdams ngag tu byas pa* /¹¹ slob dpon (P2. 344b) *chen po dpal Mar me mdzad*¹² ye (D2. 11b) *shes kyi*¹³ *mdzad pa rdzogs so*¹⁴ // //¹⁵

1 N2P2 *ma*. 2 D2G3N3P3 *mi*. 3 G3N3P3 *dus*. 4 D2G2N2P2 *choms*.
 5 D2 *bcu spongs for chu skoms*. 6 D2G23N23P23 *zhi*. 7 G1N1P1 *te*.
 8 G2 *sa ba*. 9 GNP *thob*. 10 G13N13 P13 *bsgrubs*. 11 P1 //, D2G3N3P3 *om*.
 12 G1 *mdzad for me mdzad*. 13 N1P1 *kyi*. 14 G1N3 *rdzogso*.
 15 G1 // *bkris* //, G2 // *suba manggalam* // //

12 *Bodhisattvādhikarmikamārgāvatāradeśanā*

#¹ // rgar skad du / *Bo dhi satwa* (N1. 340a) *karmā² di margā³ ba tā ra de sha na⁴* /
bod skad du / *Byang chun sems dpa' las dang po pa'i⁵ lam la 'jug pa bstan pa* /
bla ma dam pa rnams⁶ la phyag 'tshal (D2. 21a) lo⁷ //

ngan 'gro 'khor ba 'joms pa dang //
mngon mtho nges 'byung rtsol⁸ mdzad pa //
phyogs bcu'i dkon mchog thams cad dang //⁹
bla ma'i zhabs la¹⁰ phyag 'tshal lo¹¹ //¹²

'di na gang dag rang bzhin gyis¹³ snying rje dang shes rab che ba theg pa chen po'i rigs
can dang /¹⁴ yang gang dag skye ba snga ma dag tu theg pa chen po la goms¹⁵ par byas pa'i
skyes bu /¹⁶ 'khor ba la yid legs par byung ba¹⁷ 'chi ba rjes su¹⁸ dran pa / phyi nang gi dngos
po thams cad la zhen pa chung ba dang¹⁹ / dge ba'i bshes gnyen dam pa cig²⁰ la²¹ theg pa²²
chen po'i lam phyin ci ma log pa cig²³ thos par gyur na ci ma rung /²⁴ bdag gis²⁵ dam pa cig²⁶
btsal bar bya'o snyam du sems pa des / dge ba'i bshes gnyen du rung ba'i bla ma btsal te /²⁷
gzhan du bstan pa bzhin du gsum la skyabs su²⁸ 'gro ba khyad par can dang /²⁹ 'gro ba mtha'
yas pa³⁰ yul du byas te (C. 303a) /³¹ bsam pa³² bzang po dang ldan pas bla na med pa'i byang
chub chen por sems thun mong ma yin pa bskyed pa dang / lhag pa'i bsam pa bzang po dang
ldan pas g-yo sgyu³³ dang bral ba'i 'jug pa byang chub kyi sems chen (G1. 474a) pos³⁴ /³⁵
byang chub sems dpa'i tshul khirms kyi (G2. 28a) bslab pa gsum legs par blang bar bya'o //

1 G1N1P *byang chun sems dpa' las dang po'i lam la 'jug pa bstan pa bzhugs* (P2: so) // #.
2 G1P1 *karma a.* 3 P1 *marga a.* 4 D2 *nā ma for na.* 5 G1N1P1 *po'i for po pa'i.*
6 CD1G1N1P2 om. 7 N2 *'tshalo.* 8 D2G2N2P2 *stsol.* 9 N1 /.
10 D2G2N2P2 *dpal ldan bla ma'i zhabs.* 11 D2G2N2P2 om. 12 G2N2 /.
13 D1G1P1 *gyi.* 14 G2 // . 15 D2 *blo goms.* 16 D2G2N2P2 om.
17 D2G2N2P2 *ba /.* 18 G1N2 *rjeu.* 19 D2G2N2P2 om. 20 D2G2P2 *zhig.*
21 G1N1P1 *pu.* 22 N1 om. 23 D2G2N2P2 *zhig.* 24 G2 // . 25 G1N1P1 *gi.*
26 G1N1P1 *gcig,* D2G2P2 *zhig.* 27 G2 // . 28 G2N2 *skyabsu.* 29 G2 // .
30 G2N2P2 om. 31 D1G1N1P1 om. 32 G1 *pa pa.* 33 G1N1P1 *rgyu.* 34 N1 *po'i.*
35 P1 // , D2G2N2P2 om.

de nas khyi dang gdol pa dang /¹ bran gyi 'du shes² dang ldan pa / g-yo sgyu³ dang bral ba'i byang (N2. 23a) chub sems dpa' de tshogs kyi⁴ lam pa⁵ yin pas nyin dang mtshan du lus dang ngag dang yid kyi (P1. 345a) bya ba thams cad don med par mi 'gyur ro⁶ // 'di ltar (P2. 27a) sems des zas⁷ tshod rig par bya ba dang / dbang po'i sgo rnam bsdam⁸ pa dang / kha na ma tho ba phra rab tsam la yang⁹ (N1. 340b) 'jigs¹⁰ par lta ba dang / nyin dang mtshan du rnal 'byor la brtson par bya'o //

de nas dbugs phyi nang du rgyu ba yang gzhan gyi don du 'gyur bar¹¹ 'dod pa des tho¹² rangs kyi thun (D1. 296b) la¹³ lang te / bshang ba dang¹⁴ gci ba dor¹⁵ ba la sogs pa'i spyod lam legs par byas nas /¹⁶ yul dbus dang yul mtha' 'khob¹⁷ kyi bye brag gis¹⁸ khru byas la / 'gro ba mtha' dag la dmigs te /¹⁹ tshad med pa bzhis byang chub tu sems bskyed la /²⁰ dkon mchog gsum gyi gzugs²¹ brnyan gyi²² spyang sngar byug ris legs par byas te me tog dri zhim po sil ma legs par gtor nas /²³ de dag (D2. 21b) gi spyang sngar pus mo gnyis sa la btsugs²⁴ nas thal mo sbyar te /²⁵ phyogs bcu'i 'jig rten gyi khams gyi sangs rgyas thams cad dang²⁶ chos thams cad dang / (G1. 474b) theg pa chen po'i dge 'dun gyi²⁷ spyang sngar²⁸ lus kyi bkod pa grangs med cing²⁹ brjod du med par sprul te / de dag re re'i zhabs la legs par phyag bya'o // de dag la zang zing gi mchod pa tshad med pa rgya che ba dpag tu med pas mnyes par bya'o //³⁰

de nas lus re re (G2. 28b) la mgo³¹ brjod du med pa /³² mgo³³ re re la lce brjod du med par³⁴ sprul te /³⁵ bdag dang gzhan gyi sdig pa ma lus par bshags par bya'o // bdag dang gzhan gyi dge ba la rjes su³⁶ yi rang bar bya'o // sangs rgyas bcom ldan 'das mngon (C. 303b) par rdzogs par sangs rgyas nas³⁷ ring po ma lon pa rnam la chos kyi 'khor lo bskor³⁸ bar bskul ma gdab par bya'o // gang dag chos kyi 'khor lo bskor nas tshe'i (P2. 27b) 'du byed gtong ba dag³⁹ la 'khor ba ji srid pa'i bar du yongs su⁴⁰ mya ngan las mi 'da' bar gsol ba gdab par bya'o // (P1. 345b) dge ba'i rtsa ba de dag thams cad bla na med pa yang dag par rdzogs pa'i byang chub tu bsngo bar bya'o // ji ltar mdo las 'byung ba bzhin du yan lag de dag¹ re re la tshig² shin (N1. 341a) tu rgyas (N2. 23b) par brjod par bya'o //

1 D2G2N2P2 CD1G1N1P1 dang /. 2 G1P1 shes pa. 3 G1P1 rgyu. 4 P1 kyi. 5 G2P2 ma.
6 N1 om. 7 G2 zas kyi. 8 N1P1 bsdams, P2 sdam. 9 D2 'ang. 10 G1P1 'jig. 11 P2 par.
12 G1 thob. 13 D2G2N2P2 las. 14 D2 om. ba dang. 15 D2 'dor for ba dor. 16 D2 om.
17 G2N2P2 khob. 18 N1P1 gi. 19 CD1G1N1P om. 20 G2 //. 21 G1 gzugs pa. 22 D1 gyis.
23 G1P1 //. 24 G2P2 gtsugs. 25 N1 //. 26 N1 om. 27 G1 gyis. 28 G1 om. 29 N2 om.
30 G1N1P1 om. med cing. 31 D2G2N2P2 mgo bo. 32 CD1G1N1P1 om. 33 D2G2N2P2 mgo bo.
34 D2 pa. 35 CG1N1P1 om. 36 N rjesu. 37 G1 nas /. 38 N1P1 skor. 39 D2G2P2 de dag.
40 N yongsu. 41 G1 om. de dag. 42 N2 tshigs.

de nas mchod pa bdun po'i rjes la 'gro ba mtha' dag la dmigs te / gsum la skyabs su 'gro
ba'i tshig lan gsum gyi bar du brjod par bya'o //

de nas byang chub tu sems bskyed par bya ste /¹ ji ltar cho ga las 'byung ba bzhin du
bya'o // (G1. 475a) tha na yang 'di skad du /²

sangs rgyas chos dang tshogs kyi mchog rnam la //

byang chub bar du bdag ni skyabs su³ mchi'o⁴ //

bdag⁵ gis sbyin sogs bgyis pa 'di (D. 297a) dag gis //

'gro la phan phyir sangs rgyas⁶ 'grub par shog //

ces lan gsum brjod par bya'o //

de nas bdag gi lus dbul ba dang / de nas skyes bu chen po'i chos lugs shing rta chen po'i
lam de⁷ la gnas par dam bca' bar bya'o //

de nas rang gi mal du skyil mo krung gis 'dug la / bla ma rje btsun dpal Byang chub
bzang pos bkod pa'i *Ting nge 'dzin gyi* (G2. 29a) *tshogs kyi*⁸ le'u las gsungs pa'i yan lag dgu
po shes par byas la /⁹ zhi gnas dang lhag (D2. 22a) mthong gi rnal 'byor bsgom par bya ste /
de yang bying ba dang rgod pa la sogs pa'i skyon du gyur pa thams cad bsal te bsgom¹⁰ par
bya'o //

de nas mig phye la¹¹ dbugs phyung ste /¹² phyi dang nang gi dngos po mthong ba na / e
ma'o re mtshar / e ma'o¹³ re mtshar / nam mkha'¹⁴ lta bu'i skye ba med pa las rten cing 'brel
par 'byung ba'i stobs kyis¹⁵ sna tshogs (P2. 28a) su¹⁶ snang zhing gnas pa 'di¹⁷ e ma'o¹⁸ ngo
mtshar ro snyam du sgyu ma'i dpe brgyad kyi tshul du shes par bya'o //

de nas snying rje chen po'i yid kyis¹⁹ mi snang ba'i sems can thams cad la chos bshad
pa'i phyir rtog²⁰ pa ci yod pas theg pa chen po'i mdo (C. 304a) sde kha ton du gdon par
bya'o //

de nas zas kyi²¹ bya ba'i (G1. 475b) dus (P. 346a) su mi gtsang ba'i rdzas sum cu rtse
drug gis gang ba'i lus snying po med pa mthar 'jig pa 'dis²² sangs rgyas kyi chos

(1) **Cittotpāda*vidhi of Mañjuśrīmitra ('Jam dpal bshes gnyen), Tib. D. No. 2561, Ngu 24b2-3.

1 G2 //, N1P1 om. 2 G1N1P1 om. 3 G2N2 *skyabsu*. 4 CD1 *mchi*. 5 G1N1P1 *gi*. 6 N2 *sangyas*.
7 CD1 om. 6 CD1G1N1P1 om. *tshogs kyi*. 9 N2 // . 10 G2 *bsgom*. 11 D2 *phyel las*.
12 D2 om. 13 G2N2P2 *e ma ho*. 14 G *namkha'*. 15 G1N1P1 *kyi*. 16 G1N *tshogsu*.
17 CG1N1P1 'di / . 18 G1N1P1 *e ma*, D2G2N2P2 *e ma ho*. 19 G1N1P1 *kyi*.
20 CD1 *rtogs*. 21 P1 *kyis*. 22 G1 'di.

kyi¹ sku'i snying po de btsal bar bya'o² zhes bsams³ la⁴ rgyags pa'i phyir⁵ ma yin la / ro la
 chags pas kyang ma yin te / gru⁶ lta bu'i blos bza' bar bya'o // zas kyi tshod rig par yang bya
 ste /⁷ *gSo ba rig pa'i rgyud⁸ yan lag brgyad pa las* /⁹

lto yi¹⁰ sum cha¹¹ zas kyis te //

cha gnyis¹² pa ni skom gyis so //

¹³-rlung la sogs pa'i gnas su¹⁴ ni //¹³

cha gcig stong par gzhag¹⁵ par bya //^{16, (2)}

zhes bshad do¹⁷ //¹⁸ zas de la (N2. 34a) cha bzhir bgo¹⁹ bar bya²⁰ ste²¹ /²² cha dang po dkon
 mchog gsum dang²³ bla ma la dbul bar bya'o // cha gcig rang nyid longs spyod²⁴ par bya'o //
 cha gcig byis pa dang mgon med pa dag la sbyin par bya'o // gcig²⁵ ni khyi dang (G2. 29b)
 bya rog²⁶ la²⁷ sogs pa'i byol song la sbyin par bya'o // gang dag²⁸ gis spyod pa bsdu par ni
 gzhan du yang brjod (D1. 297b) do // tshul gzhan²⁹ ni *sPyod pa bsdu pa'i sgron ma las*
 bshad pa bzhin no //

de nas snga dro'i thun la yang tho rangs kyi thun la ji skad brjod pa ltar thams cad
 bya'o // gung gi thun dang /³⁰ dgongs³¹ mo'i thun dang / srod kyi thun dang /³² mtshan mo'i
 gung gi thun thams cad du ji ltar brjod pa'i cho ga thams cad rdzogs par bya'o // de ltar³³ rnal
 'byor pa de la ni gnyid log pa dang nyal ba'i dus la (G1. 476a) nges pa med do zhes bla ma
 dag gsung ngo // (P2. 28b) de lta bu'i rnal 'byor pa tshogs kyi lam pa³⁴ /³⁵ thar pa'i cha dang
 mthun pa'i (D2. 22b) dge ba'i rtsa ba bskyed³⁶ 'dod pa'i las dang po pa nyin dang mtshan du
 don med par mi gnas pa de lta bu la ltung ba'i nyes pa ga³⁷ la 'byung //³⁸ gal te bag chags
 ngan pa'i stobs kyis ltung ba byung bar gyur na /

(2) *Aṣṭāṅgahrdayasamhitā* 1.9.46cd-47ab.

1 G2N2P2 om. *chos kyi*, G1 *chos kyi chos kyi*. 2 G1 *bya'o* //. 3 G1P1 *bsam*.
 4 D2G2P2 *la* /. 5 D2G2P2 *phyir yang*. 6 G1 *gru ba*. 7 G2 // . 8 G2N2P2 om.
 9 N2 //, G1N1P1 om. 10 CD1 *yi*. 11 G2N2P2 *cha gnyis*. 12 G2N2P2 *gcig*.
 13 G1N1P1 om. 14 N2 *gnasu*. 15 CD1 *bzhag*. 16 N1P1P2 om. 17 D2 *pa'o*.
 18 P1 /. 19 N1P1 *bsgo*. 20 G1 *bsgom par*. 21 CD1G1N1P1 om. 22 N1 // .
 23 C *dang* /. 24 D2G2P2 *spyad*. 25 CD1 *chag gcig*. 26 G1N1P1 *rogs*. 27 G1 *pa'i*.
 28 G1 om., D2G2P2 *bdag* for *gang dag*. 29 P1 *bzhan*. 30 N1 // . 31 G2P2 *rgongs*.
 32 D2G2N2P2 om. *srod kyi thun dang* /. 33 D2GNP *lta bu'i*. 34 D2 *la*.
 35 P1 //, P2 om. 36 G1N1P1 *skyed*. 37 G1 *gang*. 38 CDG1 / .

'di ltar myur du gso bar¹ byed de / de yang 'di ltar thun drug po de² dag dum bu bco brgyad
du bgos nas skad cig ma lnga bcu rtsa bzahir 'gyur ro³ // byang chub (P1. 346a) sems dpa'
yang rab 'bring dgur 'gyur ro⁴ // bla ma'i man ngag gis (N1. 342a) gso ba'i thabs rnams shes
par bya'o //

dam pa rnams kyis⁵ bshad pa'i lam bzang po //
Byang chub 'od sogs slob mas bskul byas pa⁶ //
theg chen rigs can rnams kyis bgrod byas nas //
rkang gnyis dbang po'i gnas su 'gro bar shog //
rje brtsun bla ma byang chub sems dpa' la //
dge slong Byang chub 'od kyis gsol ba btab //
dge slong Tshul khriims rgyal bas⁷ zhus nas bsgyur //
theg pa chen po pa⁸ rnams spyod gyur cig //

*Byang chub sems (G2. 30a) dpa' las dang po pa'i lam la 'jug pa bstan pa*⁹ slob dpon
dpal Mar me mdzad ye shes kyis mdzad pa rdzogs so // //

paṅḍi ta de nyid dang / lo tsā ba Tshul khriims rgyal bas bsgyur ba'o¹⁰ // //¹¹

1 G2 P2 om. 2 CD1 om. 3 N2 'gyuro. 4 G2N2P2 'byung ngo for 'gyur ro.
5 G1N1P1 kyī. 6 G2P2 pas, D2 ngor byas for byas pa. 7 D2 pas. 8 D2N2 om.
9 D2GN2P2 om. 10 CD1G1N1P1 om. ba'o. 11 D1 //.

13 *Śaraṇagamanadeśanā*

#¹ // rgya gar skad du / *Sa ra ṇa² gatstshā mi³ de sha /*

bod skad du / *sKyabs su⁴ 'gro ba bstan pa /*

dkon mchog gsum⁵ la phyag 'tshal lo⁶ //

ngan song gsum dang 'gro ba lnga'i //

sdug bsngal ma lus sel mdzad cing //

mtho ris mya ngan 'das pa yi //

bde ba stsol⁷ mdzad de la 'dud //

'dir skyabs su⁸ 'gro ba bshad par bya ste / sdom la /⁹

rten¹⁰ dang (D1. 298a) (P2. 29a) gnas dang bsam pa dang //

dus dang rang bzhin tshad dang ni //

tshul dang bslab pa nges pa'i tshig //

las dang dpe dang dbye ba dang //

nyes dmigs dgos pa phan yon te //

rnam pa bco lnga dag tu brjod //

de la rten gyi gang zag ni gnyis te /¹¹ theg pa chen po'i rigs can dang / theg pa chung
ngu'i rigs can no¹² //

gnas ni rnam pa gnyis te / theg pa che chung gi bye brag gis so //

de la theg pa chen po'i¹³ gzhung gis ni dkon mchog gsum 'di lta bu yin te /¹⁴ de kho na
nyid kyi¹⁵ dkon (N1. 342b) mchog gsum dang / mngon par rtogs pa'i dkon (D2. 23a) mchog
gsum dang /¹⁶ mdun du bzhugs pa'i dkon mchog gsum mo¹⁷ //

(P1. 347a) de yang 'di lta shes bya phyin ci ma log par mkhyen pa / rnam par mi rtog¹⁸
pa gnyis su¹⁹ med pa'i ye shes /²⁰ chos kyi dbyings la gnas pa dang /²¹ chos kyi dbyings rnam
par dag pa shes (G1. 478a) rab kyi pha rol tu phyin pa de nyid dang / mnyam par gzhag²²
pa'i dus su²³ chos thams cad nam mkha'i²⁴ dkyil lta bur shes pa'i byang chub sems dpa' sa
chen (C. 305a) po (G2. 30b) la gnas pa dang /

1 G1N1P *skyabs su* (G1: *skyabsu*) *gro ba bstan* (G1: *bsnyan*) *pa bzhugs* (P2: *so*), G2N2 om.

2 D1G2P2 *nam*. 3 D2G2N2P2 om. 4 G *skyabsu*. 5 G1 *dkaugsum* for *dkon mchog gsum*.

6 G1 'tshalo. 7 G1N1P1 *rtsol*. 8 G2 *skyabsu*. 9 G2N2 om. 10 G2 *brten*. 11 G2 //.

12 N2 *cano*. 13 D2GNP *po pa'i*. 14 CD1G1N1P1 om. 15 G1N1P1 *kyis*. 16 G2 //.

17 N2 *gsumo*. 18 P1 *rtogs*. 19 N *gnyisu*. 20 G2 //.

21 G2 //.

22 D2GN1P *bzhag*. 23 N2 *dusu*.

24 GN *namkha'i*.

yang¹ 'di ltar² gzugs kyi sku rnam³ pa gnyis dang /⁴ bden pa bzhi dang /⁵ byang chub kyi
phyogs kyi chos⁶ sum cu rtsa bdun dang / sa dang /⁷ pha rol tu phyin pa la sogs pa'i chos
rgyud la gnas pa dang /⁸ sbyor ba'i lam gyi⁹ byang chub sems dpa' dang /

yang 'di ltar¹⁰ ri mor¹¹ bris pa dang / 'bur du btod¹² pa dang / lugs ma dang / lder so la
sogs pa dang / gsung rab yan lag dgu'i bdag nyid¹³ po ti dang / glegs bam la sogs pa dang /
tshogs kyi¹⁴ lam pa'i byang chub sems dpa'o //

theg pa¹⁵ chung ngu'i gzhung ni /

gang zhig gsum la skyabs 'gro ba //

sangs rgyas dge 'dun byed (P2. 29b) pa'i chos //

mi slob pa dang gnyis ka dang //¹⁶

mya ngan (N2. 25a) 'das la skyabs su¹⁷ 'gro //^{18, (1)}

zhes bya ba yin no //

de la bsam pa ni theg pa chen po pa'i ni¹⁹ sems can ma lus pa'i don du sems pa'o // gcig
ni bdag 'ba' zhig gi don du sems pa'o //

de la dus ni theg pa chen po pa'i ni byang chub kyi snying po'i bar du'o // gcig ni ji srid
(D1. 298b) 'tsho'i bar du dam 'cha' ba'o //

de la (G1. 478b) rang bzhin ni²⁰ ngo²¹ tsha shes pa dang /²² khrel yod pa dang ldan pa
dang / rnam par rig byed ma yin pa skyes pa'o //

de la tshad²³ ni khas²⁴ blangs pa dang / skyabs byed pa dang / rnam par rig²⁵ byed
skyed²⁶ pa'o²⁷ //

de (N1. 343a) la tshul ni skyabs su²⁸ 'gro ba'i cho ga yin te /²⁹ de ni bla ma la zhu bar
bya'o //

de la bslab pa ni ^{30-30, 31} thun mong dang^{-30, 31} thun mong ma yin pa ste / bla ma'i zhal snga
nas³² shes par (P1. 347b) 'gyur ro³³ //

(1) *Abhidharmakośakārikā* 4.32.

1 D2 yang ni. 2 D2 ltar /. 3 N2 rnam. 4 C D1G1N1P1 om. 5 N1 //.
6 G2N2P2 om. kyi chos. 7 CD1G1N1P1 om. 8 G1 om. 9 D2GNP pa'i. 10 G1N1P1 ltar /.
11 GNP mo. 12 D2GNP gtod. 13 G2N2P2 om. bdag nyid. 14 G1 kyis. 15 G2 om.
16 P1 /. 17 G2 N1 skyabsu. 18 P2 om. 19 D2G2P2 ni /, G2 ni //. 20 G1N1P1 om.
21 P2 ro. 22 CD1N1P1 om. 23 N1 rgyud. 24 D2GNP las. 25 G1N1P1 rigs.
26 D2GNP skyes. 27 N2 pa'i. 28 G2N1 skyabsu. 29 CD1G1N1P1 om. 30 G1 om.
31 D2G2N2P2 dang /. 32 G1P1 nas /. 33 G2N2 'gyuro.

de la nges pa'i tshig¹ ni 'bangs yin pa'am / de las gzhan pa'i jo bo mi tshol bas skyabs su²
song ba'o //

de la las ni byang chub kyi sems kyi ljon shing skye ba'i rtsa bar gyur pa dang /
(G2. 31a) thar pa'i grong khyer (D2. 23b) chen po'i sgor 'jug³ pa dang / bsnyen gnas la sogs
pa'i sdom pa thams cad kyi rten byed pa'o //

de la dpe ni rgyal po 'am⁴ blon po'i⁵ 'bangs dag de'i⁶ bka' las mi 'da' zhing ci nas kyang de
mgu bar byed pa bzhin no //

de la dbye ba ni thun mong ba dang / thun mong ma yin pa'i bye brag go /⁷

de la nyes dmigs ni (C. 305b) gnyis te /⁸ skyabs nyams pa 'am⁹ mi shes pa'o // spangs pa
'am¹⁰ nyams pa ni¹¹ 'di skad du / Zla grags kyi zhal snga nas /

rten gyi dam pa blangs nas ni //¹²

slar yang dman¹³ la brten¹⁴ gyur na //

nyams bcas phyogs la gnas pas na¹⁵ //¹⁶

(P2. 30a) de ni dam pa'i bzhad gad 'gyur //^{17, (2)}

zhes (G1. 479a) gsungs te mtshon¹⁸ pa tsam mo //

de la dgos pa ni bcom ldan 'das kyis ji skad du /

'jigs pas skrag pa'i mi rnams ni //

phal cher ri dang nags tshal dang //

kun dga' dang ni mchod gnas kyi //

ljon shing rnams la skyabs su¹⁹ 'gro //²⁰

skyabs de gtso bo ma yin zhing //

skyabs de mchog gyur ma yin la //

skyabs de la ni rten²¹ nas su //

sdug bsngal kun las mi grol zhing //

gang tshe gang zhig sangs rgyas dang //²²

chos dang dge 'dun skyabs song na²³ //²⁴

sdug bsngal (N2. 25b) sdug bsngal kun 'byung dang //

sdug bsngal yang dag 'das pa dang //

(2) *Triśaraṇasaptati* 36.

1 P1 tshigs. 2 N1 skyabsu. 3 D2G2N2P2 gyur. 4 D2GP2 'am/. 5 P2 pa'i. 6 D2G2P2 de yi.
7 D//. 8 N1P1 //. 9 D2G2P2 'am/. 10 G2P2 'am/. 11 D2G1N1P1 ni/. 12 G2/.
13 P2 sman. 14 G1 rten, G2P2 bsten. 15 G1 nas. 16 G2/. 17 G2N1P1 /, P2 om.
18 G1P1 mchon. 19 N skyabsu. 20 CG1N1/. 21 CDG2 brten. 22 P1 /.
23 D2G2N2P2 nas. 24 G1N1 /.

'phags lam yan lag brgyad bde ba¹ //
 mya ngan 'das par 'gro 'gyur dang //
 (N1. 343b) 'phags pa'i bden pa bzhi po dag //
 shes rab kyis² ni lta byed pa //
 skyabs de gtso (D1. 299a) bo yin pa ste //
 skyabs de mchog tu gyur pa yin //
 skyabs de la ni brten³ nas kyang //⁴
 sdug bsngal kun las grol bar 'gyur //^{5, (3)}
 zhes gsungs so⁶ // skyabs su⁷ 'gro ba'i (G2. 31b) (P1. 348a) dgos pa ni⁸ de lta bu'o //
 de la phan yon ni gsum ste /⁹ rgyu'i¹⁰ dus kyi phan yon dang /¹¹ lam gyi dus kyi phan
 yon dang /¹² 'bras bu'i dus kyi phan yon no¹³ //
 rgyu'i dus kyi la tshe 'di'i dang / tshe rabs gzhan gyi'o //
 tshe 'di'i (G1. 479b) phan yon ni 'jigs pa chen¹⁴ po brgyad las thar bar byed pa dang /
 bar chad med pa dang / bstan pa la dga' ba'i lha dag¹⁵ bstang¹⁶ grogs byed pa dang /¹⁷ 'chi
 ba'i dus su yid dga' ba la sogs pa'o //
 tshe rabs gzhan gyi ni 'khor ba'i sdug (D2. 24a) bsngal dang / ngan song gi sdug
 bsngal¹⁸ las 'dren par (P2. 30b) mdzad pa dang / mya ngan las 'das pa dang / mtho ris kyi¹⁹
 bde ba stsol pa'o //
 lam gyi²⁰ phan yon bden pa bzhi dang / 'phags pa'i lam yan lag brgyad pa dang / byang
 chub kyi yan lag bdun la (C. 306a) sogs pa la sbyor bar²¹ mdzad pa'o //
 'bras bu'i phan yon ni²² mya ngan las 'das pa gnyis dang / sku gsum thob par byed pa'o //
 'di dag ni mdor bsdus pa yin la²³ rgyas par gzhung dang bla ma las shes par bya'o //
 sKyabs su²⁴ 'gro ba bstan pa zhes bya ba / bla ma byang chub sems dpa' Dī paṃ ka ra
 shrī dznyā nas mdzad pa rdzogs so²⁵ // //²⁶

(3) *Udānavarga* 27.31-35 (*Dhammapada* 188-192). Cf. *Abhidharmakośabhāṣya*, Pradhan ed., p. 217.9-11.

1 D2 *bas*. 2 G1N1P1 *kyi*. 3 G1N1 P1 *rten*. 4 P1 /. 5 G2N1 /, P2 om. 6 G2N *gsungso*.
 7 N *skyabsu*. 8 G1N1P1 *ni /*. 9 D2 om. 10 N2 *gzhi*. 11 G1N1P1 // . 12 N1P1 // .
 13 N2 *ni*. 14 P2 *chen chen*. 15 D2 *dag gis*. 16 GNP *stong*. 17 N2 om. 18 G1 *dang /*.
 19 G1N1P1 *kyis*. 20 G1N1P1 *gyis*. 21 G1N1P1 *ba*. 22 CD1G1N1P1 om.
 23 D2G2N2 *la /, P2 la //*. 24 G2N2 *skyabsu*. 25 G2 *rdzogs*. 26 D2 // .

14 *Mahāyānapathasādhanavarṇasamgraha*

#¹ // rgya gar skad du / *Ma hā yā² na pa tha³ sā dha na warṇ⁴ saṃ gra ha /*
bod skad du / *Theg pa chen po'i⁵ lam gyi sgrub thabs yi ger bsdus pa l'⁶*
sangs rgyas dang byang chub sems dpa' thams cad la phyag 'tshal lo //

bsam gyis (N1. 344a) mi khyab che ba mnga' // 1
bla med byang chub thob 'dod na //
byang chub bsgrubs⁷ pa la rag las pas //
sgrub pa lhur blang⁸ snying por bya //
dal 'byor phun sum tshogs⁹ pa'i¹⁰ lus // 5
shin tu rnyed (G2. 32a) dka' rnyed gyur cing //
phyis kyang shin tu¹¹ rnyed dka' bas //
sgrub la 'bad pas don yod bya //
sangs rgyas 'byung (N2. 26a) dang dge slong dang //
mi lus rnyed dka' rnyed gyur cing // 10
dge bshes (P1. 348b) phrad dka' phrad gyur nas //
don med par (D1. 299b) ni ma byed gsungs¹² //
rlung gi nang gi mar me bzhin //
tshe 'di gnas pa'i gdeng¹³ med phyir //
mgo 'am lus la me 'bar bzhin // 15
sgrub la myur¹⁴ du¹⁵ brtson 'grus brtsam¹⁶ //
'jig rten 'das dang 'jig rten gyi¹⁷ //
phun sum tshogs pa thams cad kyang //
sgrub pa'i mthu las byung rig mdzad¹⁸ //
sgrub pa gtsor mdzad blo ldan rnams // 20
(P2. 31a) 'di dang gzhan du bde ba la //
mkhas pa su zhig the tshom za //

1 G1N1P1 *theg pa chen po'i lam gyi sgrub thabs yi ger bsdus pa bzhugs* (P2: so) // #.
2 P1 ya. 3 CDG2N2P2 *thā*. 4 D1G1P2 *warṇa*. 5 D2N2P2 *po*. 6 P1 //.
7 CD1GN *bsgrub*, P1 *sgrub*. 8 G2N2P2 *blangs*. 9 N1 *tshod*. 10 N1 *pa*. 11 G1N1 *du*.
12 D2G2N2P2 *gsung*. 13 D2 *gdang*, G1N1P1 *gdengs*. 14 D2G2N2P2 *bsnyar*.
15 G1N1P1 *de*, DG2N2P2 *te*. 16 G1N1P1 *brtsams*. 17 G1N1P1 *gyis*. 18 D2G2 *mdzod*.

de nyid phyir na blo ldan rnam //
 sgrub pa snying por¹ bya bar rig² //
 'dod pa'i gzhi³ la chags pa'i rgyus // 25
 sgrub pa'i spyod lam nyams pa'i mi //
 'jig rten 'das dang 'jig rten gyi //
 (G1. 481a) phun sum tshogs pa thams cad las //
 shin tu⁴ ring ba kho nar (D2. 24b) 'gyur //
 'khor ba'i btson ra nyam nga ru // 30
 nyon mongs 'ching ba sna tshogs kyis //
 rab tu bsngams pas nyam thag cing //
 'khor ba'i sdug bsngal dpag med kyis //
 de nyid⁵ rgyud (C. 306b) gdung⁶ mi bder 'gyur //
 de nyid phyir yang blo ldan dag⁷ // 35
 'dod pa'i gzhi la chags spangs te //
 chos sgrub gtso bor bya ba'i rigs //
 'dod la⁸ chags bral bya ba'i phyir //
 'dod pa'i nyes pa dpag med pa //
 gzhung las 'byung ba rtogs⁹ byas la // 40
 rtag tu tshul bzhin yid la bya //
 mnog chung nyes pa che ba ni //
 btung ba dug can lta bur blta¹⁰ //
 chos min sdug bsngal rgyur gyur pas¹¹ //
 rtsa¹² yi¹³ me bzhin shes par bya // 45
 (N1. 344b) (G2. 32b) 'dod pa¹⁴ ngoms par mi byed cing //
 skom pa'i sred pa 'phel byed pa //
 lan tswa'i chu 'thungs lta bu zhes //
 thub pa'i dbang po'i lung las 'byung //
 'dod pa gnod pa mang ba ni // 50
 shing gi rtse mo'i shing tag dang //
 lam ka'i shing gi shing tog 'dra //

1 G1N1P1 *po*. 2 D2GNP *rigs*. 3 N1 *bzhi*. 4 G1P1 *du*. 5 D2 *yi*. 6 D2G2N2P2 *gdungs*.
 7 CD1 *dang*. 8 G2N2P2 *pa*. 9 G2N2P2 *rtog*. 10 G2N2P2 *lta*. 11 D2GNP *pa*.
 12 D1G2N2 *rtsa*. 13 D1 *ba'i*. 14 D2 *pas*.

byis pa rnam ni lan mang du //
 'dod pa'i¹ gzhi² la chags pas phung³ //
 'dod pa'i skyon du ma gyur pa // 55
 de ni 'ga' yang med rig bya //
 de yi⁴ las ni (P1. 349a) sdug bsngal bskyed //
 thog ma med pa'i dus nas kyang //
 'dod la chags pas rtag tu 'khor //
 'dod pa'i chu bo'i shugs kyis ni // 60
 'khor ba'i 'khor lor 'khor byed (N2. 26b) cing //
 (G1. 481b) de yis⁵ (P2. 31b) nyes pa grangs med skyed⁶ //
 'khor ba'i skyon ni mtha' yas kyis //
 sngon mtha'⁷ da ltar phyi mtha' ru //
 gdung⁸ (D1. 300a) byas gdung byed⁹ gdung byed 'gyur // 65
 de don rtag tu bsgom bya zhing //
 btson ra lta bu'i 'khor ba la //
 btson ltar skyo ba goms par bya //
 ji ltar btson ni btson ra yi //
 sdug bsngal mang myong de dran pas // 70
 skyo sems rtag tu ngang gis 'byung //
 ji ltar btson ni btson ra las //
 'bros pa'i glags ni byung ba'i tshe //
 ched ka gzhan dang mi snyoms¹⁰ par //
 de yi gnas nas 'bros¹¹ pa ltar // 75
 'khor¹² ba'i rgya mtsho che¹³ 'di las //
 rgal¹⁴ ba'i glags dag byung gyur na //
 ched dka¹⁵ gzhan dang mi snyoms¹⁶ par //
 srid pa'i khyim nas¹⁷ 'byung bar bya //
 bdag gzhan 'khor ba'i sdug bsngal dag / 80
 mthar dbyung phyr yang blo ldan dag //
 'dod pa me¹⁸ bzhin myur spangs te //

1 G2N2P2 *pa*. 2 G1 *bzhi*. 3 GNP *'phung*. 4 N1 *yi*. 5 G1N1P1 *yi*. 6 G1N1P1 *skye*.
 7 P1 *'tha'*. 8 D2 *gdungs*. 9 D2N2P2 *bya*, G2 *byas*. 10 G2N2P2 *mnyam*, D2 *bsnyam*.
 11 N2P2 *'pros*. 12 G1 *de yi gnas*. 13 D2 *tshe*. 14 G1N1P1 *rgol*, G2N2P2 *brgal*.
 15 D2G2N2P2 *ka*. 16 G1P1 *snyam*, D2 *bsnyam*. 17 G1N1P1 *gnas*. 18 G2 *med*.

chos sgrub (D2. 25a) gtsor bya mi rigs sam¹ //
 sgrub par 'dod pa'i gang zag gis //
 sa ltar chos nyid gzhir gyur pas // 85
 (C. 307a) dang po skyabs su² legs 'gro zhing //
 de yi³ bslab⁴ pa'i chos la bslab //
 (G2. 33a) rjes su⁵ dran drug rtag tu bsgom //
 sangs rgyas yon tan mtha' yas pa //
 sgrub⁶ pa pos ni dran byas la // 90
 de la dad pa brtan par bya //
 chos kun rtsa ba dad (N1. 345a) pa yin //
 rtswa⁷ rtse'i zil thigs lta bur ni //
 ring du mi gnas tshe 'di'i phyir //
 mkhas pas sdig pa yongs⁸ mi spyod⁹ // 95
 (G1. 482a) de 'bras ngan 'gro'i sdug bsngal 'byung //
 dge bcu tshul khirms dag bya zhing //
 so sor thar pa'i sdom dag kyang //
 ci nus rim gyis dag par bsrung //
 de ni 'phags nor kun gyi¹⁰ rgyu // 100
 mang thos nor yin de ldan bya //
 tshul khirms (P1. 349b) nor nyams gyur pa bzhin //
 mang thos nor las nyams pa'i mi //
 phyi phyir 'gyod par (P2. 32a) gdon mi za //
 rang la nga rgyal gzhom pa dang //¹¹ 105
 chos¹² smra ba la'ang gus par bya //
 theg chen chos sgor 'jug 'dod pas //
 mun sel gdung ba zhi byed pa //
 nyi zla lta bu'i byang chub sems //
 bskal¹³ par 'bad pas skye yang rung // 110
 dang por de bskyed rab¹⁴ sbyangs pas //
 ri rab lta bur brtan par bya //

¹ G1 *rigsam*. ² N *skyabsu*. ³ D2N2 *vis*. ⁴ P2 *brlab*. ⁵ N *rjesu*. ⁶ D1 *sbrub*. ⁷ G2 *rtsa*.
⁸ CDG2N2 *yong*. ⁹ G2N2 *spyad*. ¹⁰ G1 *gyis*. ¹¹ P1 /. ¹² P1 *tshos*. ¹³ P2 *bsgal*.
¹⁴ G2 *rabs*.

de bskyed sbyong bar 'dod pa yis //
 byams sogs tshangs pa'i gnas bzhi po //
 'bad pas ring du bsgom¹ byas pas //² 115
 chags dang phrag dog spang bya zhing //
 yang (N2. 27a) dag cho ga byas pas skye³ //
 bag (D1. 300b) yod chos las nyams pa'i mi //
 chos kun las ni nyams par 'gyur //
 chos de mal 'byor nyid du bya⁴ // 120
 bu gcig pha ma bu bsrung⁵ dang //
 zhar ba mig gcig mig bsrung dang //⁶
 lam zhugs rnam kyis⁷ ded dpon dang //
 sman shing chen po'i 'bras bu ltar //
 bag yod chos kyis⁸ sems de bsrung // 125
 sems de byang chub rtsa bar gsungs //
 byang chub sems dpa'i spyod pa yi //
 dkyil 'khor dag ni thams cad kyang //
 byang chub (G2. 33b) sems kyis mthu las byung //
 sems (G1. 482b) mchog de dang mi ldan pas // 130
 sbyin las⁹ shes rab bar dag gi //
 spyod pa drug la slob byed kyang //
 rten dang bral ba nyid kyis¹⁰ phyir //
 pha rol phyin pa'i ming yang med //
 nyan thos (D2. 25b) bse ru¹¹ drug po bzhin // 135
 (C. 307b) bsod nams (N1. 345b) thams cad sdud pa yi //
 ting 'dzin sems de ma bskyed¹² na //
 bsam gtan bzhi dang gzugs med bzhi //
 ting 'dzin lan mang thob 'gyur¹³ kyang //
 srid pa'i mtsho las rgal¹⁴ mi nus // 140

¹ D2G2N2P2 *bsgom*s. ² G2/. ³ P1 *skyes*. ⁴ G1 om. ⁵ P1 *srung*. ⁶ G2/.
⁷ D2GNP *kyis*. ⁸ G1N1P1 *kyi*. ⁹ G2N2P2 *nas*. ¹⁰ G1N1P1 *kyis*. ¹¹ G2N2P2 *ru'i*.
¹² D2G2N2P2 *skyes*. ¹³ D2G2N2P2 *gyur*. ¹⁴ D2G2N2P2 *brgal*.

byang chub sems kyi bzhon¹ pa la //
 brten² nas 'chi ba rjes dran gyi³ //
 lcag⁴ ni yang dang⁵ yang brdab⁶ cing //
 srid lam 'jigs pa⁷ che sa⁸ yi //
 lam 'di myur du 'da' byas la // 145
 'jigs med (P2. 32b) sangs rgyas sar phyin bya //
 skyabs 'gro lhag pa'i tshul khriims dang //
 (P1. 350a) smon⁹ pa'i gzhi la¹⁰ gnas pa yis //
 sems dpa'i sdom pa rab bzung zhing //
 pha rol phyin drug la sogs pa // 150
 sems dpa'i spyod pa thams cad la //
 ci nus rim gyis tshul bzhin spyad //
 'jug pa'i spyod pa gtsor ston pa'i //
 mdo sde blta¹¹ zhing bstan bcos¹² mnyan //
 chos kyis¹³ mi ngoms mtsho 'dra'i mis // 155
 rin chen nor bu'i rgya mtsho bzhin //
 yon tan kun 'byung 'byung gnas gang¹⁴ //
 theg chen gzhung las bsngags pa yi¹⁵ //
 bshes¹⁶ gnyen ring du tshul bzhin bsten //
 rgya mtsho chen por chu bo bzhin // 160
 de yi rten la yon tan 'du //
 sems dpa'i spyod la¹⁷ de mkhas 'gyur //
 sems dpa' spyod pa che ba la //
 dad pa shin tu brtan¹⁸ par bya //
 bag (G1. 483a) yod dran dang shes bzhin dang¹⁹ // 165
 tshul bzhin yid la byed pa yis //
 kun nas nyon mongs dmigs pa la //
 rang sems yan pa phyir bzlog ste //

1 P1 *bzhom*. 2 G1N1P1 *rten*. 3 G1N1P1 *gyis*. 4 P1 *lcags*. 5 G1 *om*. 6 D2G2N2P2 *brdeg*.
 7 G1 'jig for 'jigs pa. 8 D *ba*. 9 G2N2P2 *sman*. 10 G1N1P1 *las*. 11 D2G2N2P2 *lta*.
 12 G1N1P1 *chos*. 13 G1N1P1 *kyi*. 14 D2 *dag*, G2N2P2 *dang*. 15 P1 *yis*. 16 G1N1P1 *gshes*.
 17 D2G2N2P2 *pa*. 18 D1 *brten*, GN2P2 *bstan*. 19 D2G2N2P2 *du*.

sangs (N2. 27b) rgyas (G2. 34a) chos kyi¹ dmigs pa la //
 (D1. 301a) rtag tu gzhag² pa nyid du bya // 170
 de ltar slob pa'i rgyas sras gang //
 de yi spyod las nyams³ mi 'gyur //
 dge ba'i bshes kyi⁴ gdams pa bzhin //
 rtsom⁵ pa dag ni thams cad kun //
 theg⁶ chen gzhung dang bstun⁷ de⁸ brtsam⁹ // 175
 gros kyi phugs ni chos la gtad¹⁰ //
 chos dang 'gal na gang yang spang¹¹ //
 chos dang mthun pa'i spyod pa spyad //
 blo ldan gang zhig rtsom pa kun //
 chos gtsor byed pa (N1. 346a) dpal ldan po¹² // 180
 de la 'di dang gzhan du yang //
 bde bar 'gyur bar the tshom med //
 thos pa nyung dang 'khor spangs shing //
 bas mtha' dgon par gnas par bya //
 zhi ba dang ni dul ba yi // 185
 sbyor ba de la brtson 'grus pa brtsam //
 (C. 308a) khyim ni gang la 'ang¹³ mi blta zhing //
 (D2. 26a) gzhan skyon mi brtag rang (P2. 33a) skyon blta //
 gzhan gyi snying la mi 'bab pa'i //
 tshig kyang mkhas pas ring du spang // 190
 'di dag dang ldan rgyal sras gang //
 (P1. 350b) phyi mtha'¹⁴ dus su mi nyams par //
 bde bar thar zhes thub pas gsungs //
 gzhan brnyas¹⁵ khyad du gsod¹⁶ cing smod //
 de yis bdag nyid nyams par 'gyur // 195
 kun la ston pa'i 'du shes sbyang¹⁷ //
 chos sgor zhugs dang rgyal sras la //
 khyad par du yang blo de (G1. 483b) sbyang //

1 P1 *kyis*. 2 GNP *bzhag*. 3 D2G2N2P2 *la mnyams*. 4 D2GNP *kyis*. 5 P2 *rtson*.
 6 G1 *theg pa*. 7 G2N2P2 *brtun*. 8 D2G2N2P2 *te*. 9 CD1 *tsam*. 10 G1 *om*.
 11 N1P2 *spangs*. 12 G2N2P2 *pa'o*. 13 G1N1P1 *om*. 14 D2 *mtha'i*. 15 G1N1P1 *brnyad*.
 16 G2N2P2 *bsod*. 17 G1 *sbyangs*.

rab¹ byung 'ching ba dam po gang //
 rnyed pa dang ni bkur sti² ste // 200
 de yi³ gzhi la chags pa spang⁴ //
 'ching ba de⁵ las grol ba gang //
 me yi nang gi padma bzhin //
 mkhas pa'i ngo mtshar gnas su 'gyur //
 rab tu⁶ byung ba'i sgrub pa pos // 205
 sangs rgyas chos kun 'byung ba'i rgyu //
 'phags pa'i rigs bzhi la gnas pas //
 'dod pa chung zhing chog shes bya⁷ //
 sbyangs pa'i yon tan (G2. 34b) bcu gnyis la //
 de yis bslab par thub pas gsungs // 210
 yo byad bsnyungs pa la gnas shing //
 yongs su⁸ 'dzin pa thams cad la //
 rgyab kyis phyogs te gnas par bya //
 rgyus med yul du grong rgyu zhing //
 bya bzhin 'tsho ba 'phral btsal bya // 215
 rang sems sbyong ba lhur len pa //
 ngo mtshar thub pa'i mdo las gsungs //
 gdul dka' sems rgyud yin⁹ btang nas //
 grags sogs 'jig rten chos¹⁰ kyi phyir //
 nyin mtshan gyi¹¹ ni dus kun tu¹² // 220
 rtsod pa slob (D1. 301b) phyir rtsod pa sbyong //
 nyan¹³ bshad la sogs chos la 'jug /¹⁴
 (N1. 346b) tshe ni don med myur du 'da' //
 mchog gi lam las de nyams 'gyur //
 'chi (N2. 28a) bdag nye bar gyur pa'i tshe // 225
 'gyod pas de rgyud gdung bar 'gyur //
 'jig rten chos la mnyam sems bslab //
 de yis byis pa slu¹⁵ bar byed //¹⁶

1 CD1 rang. 2 G1N1P1 bsti. 3 CD1 yis. 4 G1N1P1 spangs. 5 N1 des. 6 G1 om.
 7 N1 byas. 8 G2N yongsu. 9 D2GNP yan. 10 D2 nor. 11 N1P1 gyis. 12 CDG1P1 du.
 13 P2 nyams. 14 P2 G1 om. 15 G2N2 bsu. 16 G1 om. byed //.

'jig rten gang gi blo la yang //
 bdag gi¹ ming yang mi gnas shing // 230
 bdag gi² lus kyi³ rus pa'i rdul //
 shin tu phra ba'ang 'jig rten na //⁴
 gnas (G1. 484a) par mi 'gyur de dus 'byung //
 de tshe rnyed dang bkur sti dang //
 grags sogs med⁵ 'jigs⁶ smos ci dgos // 235
 de tshe bdag la (C. 308b) gang dben⁷ pa //
 blo dang (P1. 351a) ldan pas dpyad⁸ pa thob⁹ //
 las dang po yi¹⁰ gang zag gis //
 lus dben¹¹ pa la ma brten par //
 sems dben¹² rnyed par dka' ba'i phyir // 240
 'dre spangs nang du¹³ gnas par bya¹⁴ //
 'dres¹⁵ pas 'dris shing chags par byed //
 de yis 'khor ba'i 'khor lo bskor¹⁶ //
 de ltar 'dre ba spangs pa¹⁷ la //
 rtag tu bag dang ldan par bya // 245
 gnyid la dga' spangs chos kun phyir //
 der gnas de yis brtson 'grus brtsam //
 de yis chos kun rdzogs par byed //
 dran pa nyer gzhag¹⁸ bzhi bsgom¹⁹ zhing //
 phyin ci log bzhi rab tu spang²⁰ // 250
 smra la dga'²¹ (G2. 35a) yang²² don bsam²³ bya //
 bu ram shing shun snying po ci yang med //
 dga' bar bya ba'i ro ni nang na 'dug //
 shun pa zos pas²⁴ mis ni bu ram ro //
 zhim po rnyed par nus pa ma yin no²⁵ // 255

1 P1 gyis. 2 G1 gis. 3 N2 kyi. 4 G1 /. 5 G2P2 de. 6 GNP 'jig.
 7 D2 phan, P1 dpen, G2N2P2 sems. 8 D2 spyad. 9 D2 'thob. 10 G2N2P2 pa'i. 11 P1 dpen.
 12 P1 dpen. 13 G1 gnasu, N1P1 gnas su, D2G2N2P2 nagsu su. 14 G1 bya'o. 15 P1 'dris.
 16 D skor, G2N2P2 lor bsgor. 17 D2G2N2P2 spang ba. 18 G2N2P2 bzhas. 19 D2 sgom.
 20 G1N1P1 spangs. 21 D2 dgod. 22 D2GNP spang. 23 G2 bas. 24 D2G2N2P2 pa'i.
 25 G1N2 yino.

shun pa de bzhin 'di la smra ba ste //
 ro lta bu ni 'di la don sems yin //
 de lta bas na mi rigs¹ smra² spangs te //
 rtag tu bag yod kyis³ la don soms⁴ shig //
 nam mkha'i⁵ mtha⁶ klas sems can gyi⁷ // 260
 ched du⁸ go bgos rig mdzod la //
 'ga' yi ched du⁹ sgrub¹⁰ pa yi //
 spyod pa dag la¹¹ nyams mi bya //
 'khor dang rnyed pa bkur sti dang //
 grogs¹² 'dod pa yi blos (G1. 484b) bskyed¹³ nas // 265
 smra la dga' ba'i sems byung na //
 sgrub pa'i bar chad byed¹⁴ pa'i gdon //
 rang gi sems de yin (N1. 347a) rig¹⁵ mdzod //
 mdza' bshes la sogs gang la yang //
 gces dgos¹⁶ mkho ba¹⁷ chung bar bya // 270
 mkho ba'i sgo nas nyams 'gyur zhing //
 chos la'ang bar chad mang du 'byung //
 las la dga' ba rab spangs te //
 (D1. 302a) gdul dka'i sems gdul dge ba spyad¹⁸ //
 spros la dga' ba (P2. 34a) rab spangs te // 275
 bzod la des pas bdag nyid brgyan //
 bzod pa'i che ba dpag tu med //
 (N2. 28b) rnyed dang bkur sti la sogs pa'i //
 chos drug nyes pa mthong bar bya //
 sems dpa'i spyod pa grangs med kyang // 280
 (P1. 351b) bsdu¹⁹ na thabs dang²⁰ shes rab gnyis //
 thabs dang shes rab pha ma yis //
 sangs rgyas sras ni skyed par byed //

1 G1N1P1 ring. 2 D2 rnam. 3 D2GN gyis. 4 G1P1 sems. 5 G1N namkha'i. 6 G2P2 mthas.
 7 G1N1P1 gyis. 8 N2 chedu. 9 N2 chedu. 10 D2G2N2P2 bsgrub. 11 DG2N2P2 las.
 12 D2N2P2 grags. 13 G2N2 bskyod. 14 P1 byad. 15 G1N1 rigs. 16 G1 dgod. 17 P1 pa.
 18 G2N2P2 spyod. 19 G2N2P2 bsdus. 20 P2 thams cad for thabs dang.

bde¹ gshegs² sras ni don gnyer bas³ //
 thabs dang shes rab pha ma yin⁴ // 285
 sgrub pa 'di gnyis 'brel bar bya //
 sgrub pa 'di gnyis bral gyur (C. 309a) na //
 sangs rgyas sras skyed mi nus te //
 skyes pa dang ni bud med dag //
 gcig la gcig ni zla med bzhin // 290
 gang phyr ya⁵ bral 'ching (G2. 35b) ba⁶ gsungs //
 chos (D2. 27a) kun rtsa bar⁷ rab bstan⁸ pa'i //
 'dun pa rtag tu bsgom bya zhing //
 zla ba yar gyi ngo bzhin du //
 sgrub blo rtag tu 'phel bar bya⁹ // 295
 stobs dang ldan pa nyid du¹⁰ bya //
 sgrub pa'i blo ni 'phel 'gyur¹¹ na //
 rlan¹² ldan ri rtse'i rtsa¹³ shing bzhin //
 (G1. 485a) sgrub pa 'phel bar gdon mi za //
 sgrub blo¹⁴ stobs dang ldan gyur¹⁵ na // 300
 spyod pa'i khur lei yun ring du //
 khur yang skyo¹⁶ zhing ngal mi 'gyur //
 chos spyod rnam¹⁷ bcu la sogs pa'i¹⁸ //
 tshogs¹⁹ bsags sgo ni thams cad nas //
 tshogs gnyis bsags²⁰ pa lhur blang bya // 305
 slob pa'i²¹ dus na che ba gang //
 de yi rten la chos kun skye²² //
 sems can don la mthu ldan 'gyur //
 sku dang ye shes 'bras bu 'byung //
 thabs dang shes rab snying po gang // 310
 zhi gnas lhag mthong (N1. 347b) rnal 'byor bsgom //

1 CD *bder*. 2 G2 *gsheḡ*. 3 N2 *pa*. 4 D2GNP *yi*. 5 G1NP1 *yang*. 6 GNP *bar*.
 7 D2 *ba*. 8 D2 *brtan*. 9 D2 'gyur, G2 *byad*. 10 G1 *du*/. 11 GNP *gyur*. 12 D2 *brlan*.
 13 D1 *rtsa*. 14 N1 *blos*. 15 G2N2P2 *pa*. 16 G1N1P1 *skyon*. 17 D2 *rnam pa*. 18 D2 *om*.
 19 G1 *tshod*. 20 CD1 *bsag*. 21 G2N2P2 *ma'i*. 22 N1 *skyed*.

'jig rten 'das dang 'jig rten gyi¹ //
 chos kun de gnyis² 'bras bur gsungs //
 mngon shes mthu dang ldan bya³ dang //
 zag med lam ni bskyed pa'i phyir // 315
 dang po⁴ zhi gnas bskyed par bya //
 zhi gnas⁵ tshogs ni nyams pa yis //
 ring du 'bad kyang 'grub mi 'gyur //
Ting 'dzin tshogs la legs (P2. 34b) par bslab //
 ting 'dzin gnod pa kun spangs te // 320
 mthun pa'i dmigs pa gang yin la⁶ //
 spong ba'i 'du byed brgyad ldan par //
 de⁷ don gnyer bas⁸ gtsub⁹ shing ltar //
 chags pa'i rlan dang bral ba yis //
 rtag tu rgyun dang ldan¹⁰ par bsgom¹¹ // 325
 nyon (P1. 52a) mongs g-yul las rgyal (D1. 302b) bya'i phyir //
 zhi gnas la brten¹² lhag mthong bsgom //
 lhag mthong grub par gyur pa yis //
 mnyam ghzag¹³ langs pa'i dus dag tu //
 sgyu ma'i dpe (G1. 485b) brgyad lta bur ni // 330
 chos kun lta ba goms byas pas¹⁴ //
 rjes kyis¹⁵ (N2. 29a) rtogs (G2. 36a) pa¹⁶ sbyang ba dang //
 thabs la slob pa gtso bor bya //
 mnyam par gzhag¹⁷ pa'i dus dag tu //
 zhi gnas lhag mthong cha mnyam zhing¹⁸ // 335
 de rgyun rtag tu goms¹⁹ par bya //
 de ltar²⁰ tshul (C. 309b) bzhin bslabs²¹ pa'i mthus //
 drod sogs nges²² 'byed²³ bzhi thob²⁴ nas //
 sa bcu'i ye shes rim gyis skyed²⁵ //

1 P1 gyis. 2 D2G2N2P2 nyid. 3 D2 pa. 4 D2 por. 5 G1 gnas bskye. 6 CD1 pa.
 7 D2 me. 8 P1 pas. 9 G1N1P1 gtsubs. 10 D2G2N2P2 ldan gus. 11 G2 bsgom.
 12 GN1P1 rten. 13 P2 bzhag. 14 G2 las. 15 D2G2N2P2 kyi. 16 G2 om.
 17 GNP1 bzhag. 18 G1 mnyam shing. 19 G1 gos. 20 G1 go lta, N1P1 lta.
 21 G1N1P bslab. 22 N1 des. 23 G2N2P2 rnam pa for nges 'byed. 24 G1N1P1 thos.
 25 D2GN skye, P skyes.

de yis¹ myur du de 'tshang rgya // 340
 nor bu bzhin du gzhan gyi don //
 lhun gyis grub² par de byed 'gyur //
 shin tu bsdus na go mi 'gyur //
 shin (D2. 27b) tu spros na gzhung³ mangs⁴ 'gyur //
 blo dang ldan pas legs dpyad⁵ na // 345
 go ba'i tshad⁶ du bdag gis gdams //
 bdag gi bla ma yon tan mang mnga'
 rgya mtsho che dang mtshungs //
 'jig rten chos la mi gzigs nyid gzhan
 don phyir sgrub pa snying por 'dzin⁷ //
 'jig rten ma rig gis long shes rab
 mig 'byed mthu mnga' du ma yis //
 gdams pa'i don dang gtsug lag
 bstan bcos las bshad bslab dgos zhes⁸ // 350
 gzhan (N1. 348a) la phan pa 'byung srid
 bsam pas⁹ yi ger gnas par byas¹⁰ //
 dad dang shes rab nor ldan
 sgrub pa snying por byed 'dod gang //
*Theg pa*¹¹ *lam gyi sgrub*¹² *thabs*
 yang dag yi ger bsdus 'di la //
 gal te mos pa yod srid
 'di bzhin byas te¹³ rang gzhan¹⁴ don du 'gyur //

Theg pa chen po'i lam gyi sgrub thabs (P2. 35a) *yi ger bsdus pa* /¹⁵ slob dpon chen po
 dpal Mar (G1. 486a) me mdzad ye shes kyis zhal snga nas mdzad pa rdzogs so // //

rgya gar gyi mkhan po de nyid dang / lo tsā ba dge slong dGe ba'i blo gros kyis¹⁶ bsgyur
 cing zhus te gtan la phab pa'o¹⁷ //

1 G2 yi. 2 N2 'grub. 3 G1N1P1 gzhungs. 4 G1N1P1 ma, P2 mangs.
 5 D2G2N2P2 spyad. 6 G2N2P2 ched. 7 D2G2N2P2 mdzad. 8 G1N1P1 shes.
 9 D2 bsams nas. 10 D2 bsdus pa yin for gnas par byas.
 11 D2 theg chen, P2 theg pa chen po'i. 12 G2N2 sgrubs. 13 D2G2N2P2 na.
 14 P1 bzhin. 15 G2 //. 16 P1 gyis. 17 D1P1 pa.

15 Mahāyānapathasādhanasamgraha

#¹ // rgya gar skad du / *Ma hā yā na pa tha² sā dha na saṃ gra³ ha /*

bod skad du / *Theg pa chen po⁴ lam gyi sgrub pa thabs (G2. 36b) shin tu bsdus ba /*

sangs rgyas dang⁵ byang chub sems dpa' thams cad la phyag 'tshal lo⁶ //

'das dang da ltar bde gshegs kun //
skyed pa'i yab dang yum gyur pa //
sgrub pa'i chos la rab gus shing //
ngag (D1. 303a) yid dang bas phyag 'tshal lo⁷ //
bsam gyis mi khyab che ba mnga' // 5
bla med⁸ byang chub thob 'dod na //
byang chub bsgrub⁹ la rag las pas //
sgrub pa lhur blang¹⁰ snying por bya //
(N2. 29b) de yis gsum la skyabs 'gro zhing //
mi dge kun las ldog pa yis¹¹ // 10
lhag pa'i tshul khriims dag par bsrung¹² //
byang chub sems kyi bzhon pa la //
brten nas 'chi ba rjes dran gyi¹³ //
lcag ni yang dang yang brdab¹⁴ cing //
srid lam 'jigs¹⁵ pa che sa¹⁶ yi // 15
lam 'di myur du 'das byas la //
'jigs¹⁷ med sangs rgyas sar phyin bya //
smon pa'i gzhi la gnas pa yis //
sems dpa'i sdom pa rab bzung¹⁸ zhing //
(N1. 348b) pha rol phyin drug la sogs pa // 20
sems dpa'i¹⁹ spyod pa tshul bzhin spyad²⁰ //

1 G1N1P1 *theg pa chen po lam gyi sgrub thabs shin du bsdus pa bzhugs (P2: so) // #.*

2 D1 *thā.* 3 N1P1 *sang gra, G1 sa gra.* 4 D2G2N2P2 *po'i.* 5 G2P2 *dang /.*

6 G1 *'tshalo.* 7 G *'tshalo.* 8 CG1N1 *ma, D1P1 na.* 9 D2GNP *sgrub.* 10 G2N2P2 *blangs.*

11 N1P1 *yi.* 12 G2N2P2 *bsrungs.* 13 G1N1P1 *gyis.* 14 D2G2N2P2 *gdab.* 15 G1N1P1 *'jig.*

16 D2 *ba.* 17 G1 *'jigs rten.* 18 GNP *gzung.* 19 G1 *pa'i.* 20 G1N1P1 *spyod.*

de bsdus thabs (D2. 28a) dang shes rab la //
 mi gnas mya ngan 'das phyir bslab //
 de yi¹ snying po rnam pa gnyis //²
 me don³ gnyer bas⁴ gtsub⁵ shing ltar // 25
 chags pa'i rlan⁶ dang bral ba yis //
 rtag tu rgyun ldan gus par bsgom⁷ //
 de yis⁸ (G1. 488a) myur du de 'tshang rgya //
 nor bu bzhin du gzhan gyi don //
 lhun⁹ gyis grub par de byed 'gyur // 30
 theg chen sgrub thabs bsdus 'di la //
 skal ldan rnams kyis¹⁰ legs par bslab //
 snying la bdud rtsi'i thigs pa chags //
 bla ma sbyangs pas blos reg¹¹ (P2. 35b) dka' //
 'di bsdus dge bas 'gro ba kun // 35
 theg chen sgrub pa lhur len shog //
 bdag kyang sangs rgyas sa thob nas //
 'gro ba'i 'dren pa byed par shog //

Theg pa chen po lam gyi sgrub¹² thabs shin tu bsdus pa / slob dpon chen po dpal Mar me mdzad ye (G2. 37a) shes kyis (P1. 353a) mdzad pa rdzogs so // //

rgya gar gyi mkhan po paṇḍi ta¹³ de nyid dang / lo tsā ba¹⁴ dge slong ba'i Blo gros kyis bsgyur cing zhus te gtan la phab pa'o¹⁵ //

1 G2N2P2 yis. 2 G1 om. gnyis //. 3 G1 om. me don. 4 D2 ba, G2N2P2 bar.
 5 G1N1P1 gtsubs. 6 CD1 ldan. 7 P1 sgom. 8 G1 yi. 9 P1 lhur. 10 G2N2P2 kyis.
 11 D2G2N2P2 rig. 12 N1 sgrubs. 13 D2 om. paṇḍi ta. 14 N1 om. 15 CD1G1N1P1 pa.

16 **Samcodanasahitasvakṛtyakramavarṇasamgraha*

#¹ //² *Rang gi bya ba'i rim pa bskul ba dang bcas pa yi ger bris pa /*

sang rgyas dang³ byang chub sems dpa' thams cad la phyag 'tshal lo⁴ //

'khor ba thog ma med pa nas⁵ //
nyon mongs bag chags tshad med pas //
yul ngan rkyen dang phrad pa las //
nyon mongs sdug bsngal (D1. 303b) skye ba'i tshe //⁶
rang gi dran pa'i phyir du 'di // 5
byas pas de tshe dran par shog //
nang gi sems ni dul gyur na //
phyi yi dgra 'dis gnod mi nus //
rang gi nang sems g-yo ba na //
phyi yi dgra 'dis rkyen byas nas⁷ // 10
nang gi dgra 'dis (C. 310b) rang rgyud bsreg⁸ //
des na nang gi dgra 'di gzhom //
dug can (G1. 488b) snod kyis zas⁹ brlag bzhin //
(N2. 30a) nang gi dri mas dge (N1. 349a) tshogs brlag //
gnyen po¹⁰ chu yis khru byas nas¹¹ // 15
dag pas bde ba chen po 'thob //
gang na gnas tshe gang gi tshe //
gang gi dri ma ldang ba dang //
nang gi dgra 'di 'byung ba'i tshe //
thabs ni sna tshogs gsungs pas¹² spang¹³ // 20
dgra gzhom dri ma bkru ba'i phyir //
de tshe 'bad pa chen po¹⁴ bya //
gang gis rang gi¹⁵ rgyud 'di la¹⁶ //
nang du bltas te rang sems brtag //

1 C rang gi bya ba'i rim pa bskul ba dang bcas pa yi ger bris pa bzhugs // #.

2 GN om. # // 3 N2P2 dang /. 4 G1 'tshalo. 5 G1N1P1 na. 6 G2 /.

7 N1P1 na. 8 D2G2N2 P2 sreg. 9 G2 zag. 10 G2N2P2 po'i. 11 G2P2 na.

12 G1N1P1 pa. 13 GNP spangs. 14 G1N1P1 gis. 15 D2 pos. 16 G2N2P2 las.

de tshe yul la¹ shes pa skye² // 25
 shes (D2. 28a) pa skye ba'i yul rnam³ gsum //
 nyon mongs par ma dge ba skye //
 rgyu rkyen yul gyi bye brag gis //
 nyon mongs skye ba dag la gsum //
 chen po 'bring dang chung ngu'o // 30
 gnyen po'i rim pa'ang de bzhin te //
 chen po skye ba'i yul de la //
 brten te tshogs (P2. 36a) chen 'bad pas skye⁴ //
 (G2. 37b) 'bring gi⁵ yul la 'bring yin te //
 chung ngu la⁶ ni chung ngu'o // 35
 chen po kun la skyes⁷ na mchog //
 bar ma lung⁸ ma bstan pa⁹ yang //
 dran pas zin pa'i sems de yis //
 kun slong rjes kyis dge bar bsgyur //
 thabs sgo sna tshogs pa yis so // 40
 (P1. 353b) dge ba che 'bring chung ngu dag //
 ngang gis skyes pa'i yul de la //
 sbyor ba dngos dang rjes dag las //
 khyad 'phags bsod nams kun bsngo bya //
 shes na gang la 'ang tshogs 'phel 'gyur // 45
 thog med dus nas ji srid du //
 bdag ni dug¹⁰ gsum zhen pas 'khor //
 ji¹¹ srid skye shi¹² kha brgyud pas //
 de srid las rnams chud re¹³ zos //
 ji srid dge sems 'phel (G1. 489a) 'gyur ba // 50
 de srid sangs rgyas mngon sangs rgyas //
 bdag ni gti mug mun pas bsgribs //
 mun nag glog 'gyu snang ba tsam //

1 D2G2P2 las. 2 D2 skyes. 3 D1 rnams. 4 D2G2N2P2 bskyed. 5 G1N1P1 gis.
 6 G2N2P2 las. 7 D2G2N2P2 skye. 8 N2 lus. 9 G2 par. 10 G2N2P2 dus.
 11 D2G2NP de, G1 de gi. 12 G1N1P1 shing. 13 P1 ri.

ci zhig ltar stes¹ dran rnyed tshe //
 de tshe 'bad pas bsgrub par bya // 55
 'chi bar nges par² cha yod cing //
 gnas pa'i dbang ster med mod kyi //
 bdag ni re zhig mi 'chi snyam //
 (D1. 304a) dran pa (N1. 349b) btang ste byang chub bsgrubs³ //
 gzhan dag la yang sgrub⁴ par gyis // 60
 dper na byis pa rig⁵ med pas //
 me dang g-yang sogs 'jigs pa med //
 de bzhin 'gro ba gti mug rnams //
 ngan song dag la 'ang⁶ (C. 311a) 'jigs pa med //
 dper na zas mchog ro dang ldan // 65
 nad pa dag la byin pa'i tshe //
 zas la smod cing mi 'dod bzhin //
 (N2. 30b) thabs kyi bye brag 'di dag kyang //
 rmongs pa nyon mongs ldan pa la //
 bstan kyang de 'dra nyid du'o⁷ // 70
 dper na bza' la dga' ba'i mi //
 zos brlag bsags phan⁸ cha yod kyang //
 'dod pas mi⁹ tshugs za ba bzhin //
 snga phyi rgyu 'bras cha yod kyang //
 nyon mongs zhen pa stobs cha yod¹⁰ // 75
 dge med sdig pa sna tshogs spyod¹¹ //
 dper na kha bya mkhan dag gis¹² //
 kha la bya dgos (G2. 38a) (P2. 36b) kun bsgrub zer //
 gzhan gyi dran pa bskyed pa'i tshe //
 de bzhin dge ba bya dgos zer // 80
 kha cig (D2. 29a) kha la gleng byed cing //
 zhe la don du sgrub mi byed //

1 G2P2 *te.* 2 CDG2N2P2 *pa.* 3 G1N1P1 *bsgrubs.* 4 D2G2N2P2 *bsgrub.* 5 P1 *rigs.*
 6 D2 *om.* 7 D2G2N2P2 *du'ong.* 8 P1 *pan.* 9 N1 *mig.* 10 D2G2N2P2 *che bas.*
 11 N2P2 *spyad.* 12 D2G1N2P2 *gi.*

kha cig 'bras bu (G1. 489b) don chen po //
 btang nas bya ba chung ngu sgrub //
 de yang byis pa'i spyod pa can // 85
 kha cig bsam pa rlung bzhin g-yo //
 rung dang mi rung gnyis ka byed //
 kha cig (P1.3 54a) kha dog dkar po¹ bzhin //
 rkyen gang ldan pa de ltar 'gyur //
 kha cig rang nyid ngang gis dge // 90
 grogs kyis rbad pas nyon mongs skyed² //
 kha cig rkyen med rgyu dang ldan //
 dam pa'i grogs kyis zin pa na //
 sdig spong dge byed de la bskul //
 kha cig dge³ la bskul mi dgos // 95

Rang gi bya ba'i rim pa bskul ba dang bcas pa yi ger bris pa f⁴ slob dpon mkhas pa⁵
chen po dpal Mar me mdzad ye shes kyis zhal snga nas mdzad pa rdzogs so⁶ // //
rgya gar gyi mkhan po chen po⁷ de nyid dang f⁸ zhu⁹ chen gyi lo tsā ba dge slong dGe
ba'i blo gros kyis bsgyur cing zhus¹⁰ te¹¹ (N1. 350a) gtan¹² la phab pa'o¹³ // //

1 P1 pe. 2 G1N1P1 bskyed, D2G2N2P2 skye. 3 D2GNP dag. 4 N1 //, D2G2N2P2 om.
 5 D2 om. mkhas pa. 6 N2 rdzogso. 7 D2 om. chen po. 8 N1 //. 9 G2P2 zhus.
 10 D2 om. cing zhus. 11 G1 te /. 12 N1 te gtan. 13 CD1G1N1P1 pa.

17 *Sūtrārthasamuccayopadeśa*

#¹ // rgya gar skad du / *Sū trā rtha*² sa mu tstsha yo³ pa de sha /

bod skad du / *mDo*'i⁴ sde'i don kun las btus pa'i man ngag /⁵

dkon mchog gsum la phyag 'tshal lo //

rgya mtsho nam mkha⁶ ltar zab rgya che ba⁷ //

mdo sde'i sde snod ma mo kun⁸ bltas shing //

dpal ldan bla ma'i zhal nas byung ba yi //

rnyed par dka' ba'i don rnam bri bar (D1. 364b) bya //

'dir byang (C. 311b) chub sems dpa' rnam kyi⁹ nor¹⁰ lta bu'i chos ni lnga bcu ste /

[1] srog lta bu la sogs pa'o // de rnam cung zad bshad par bya ste / ji skad du /

srog ni tshe yin (G2. 38b) drod dang ni //

rnam shes rten nyid yin pa 'o //^{11, (1)}

zhes so // de ltar¹² sems can rnam¹³ la srog gces¹⁴ shing¹⁵ srog la brten pa de bzhin du¹⁶

¹⁷byang chub sems dpa' la yang srog lta bu'i¹⁷ byang chub kyi sems gces (P2. 37a) shing de la brten pa'o //

[2] pha ma lta bu'i (N2. 31a) chos ni¹⁸ stong pa nyid dang¹⁹ snying rje yin te /²⁰ des ma bskyed²¹ pa'i byang chub sems dpa'²² 'byung bar mi 'gyur ro //

[3] byan²³ mo lta bu ni²⁴ 'chi ba dang /²⁵ bsab²⁶ pa dang / las kyi²⁷ bsags pa bgrang ba rnam te / nyin mtshan lan gsum du 'grog dgos pa'o //

[4] khang pa lta bu ni²⁸ dge ba bcu po yin te / 'di ni khang pa nyid de ngan 'gro dag gi sgo gcod pa'i (D2. 29b) phyir ro²⁹ //³⁰

(1) *Abhidharmakośakārikā* 2.45ab.

1 G1N1P *mdo*'i sde'i don kun las btus pa'i man ngag bzhugs (P2: so) // #.

2 D2G2N2P2 *tra artha*. 3 D2G1N1P2 *ya u*. 4 CD1G1N1P1 *mdo*'i. 5 G2 om.

6 GN *namkha*'. 7 D2G2N2P2 *ba*'i. 8 N2P2 *la*. 9 G1N1 *kyis* /, P1 *kyis* //.

10 G2N2P2 *nor bu*. 11 G1N1P om. 12 P2 *ltar* /. 13 G1N1P1 om. 14 G2 *gces*, P2 *ces*.

15 D2 *shing* /, P2 *shing* // . 16 G2N2P2 *du* // . 17 G1 om. 18 G1 *ni* //, N1P1 *ni* /.

19 CD1G1N1P1 *dang* / . 20 P2 // . 21 G1N1P1 *skyes*. 22 P2 *dpa*'i.

23 G1N1P1 *bya*, G2N2P2 *bran*. 24 D2G1N1P1 *ni* / . 25 G2 // . 26 P1 *slab*. 27 G1N1P1 *kyi*.

28 G1 *ni* //, N1P1 *ni* / . 29 CD1G1N1P1 om. 30 CD1G1N1P1 /.

[5] nor lta bu ni¹ (P1. 354b) 'phags pa'i nor bdun dang /² 'dod pa chung ba dang / chog shes pa'o //

[6] grogs po lta bu ni³ sbyor ba kham s gsum na byed kyang bsam pa mya ngan las 'das pa dang / sbyin pa rgya (G1. 491a) chen po gtong yang rnam par smin pa la re ba med pa dang /⁴ chos thams cad⁵ s-kye ba med par shes kyang las kyi⁶ rnam par smin pa mi⁷ 'dor ba dang / chos thams cad⁵ bdag med par shes kyang⁸ sems can⁹ la snying rje bskyed pa'o //¹⁰

[7] rtsa ba lta bu ni¹¹ (N1. 350b) dad pa dang /¹² thos pa dang /¹³ gtong ba dang /¹⁴ bzod pa'o //

[8] zhing lta bu ni¹⁵ tshul khri ms so¹⁶ //

[9] nye du lta bu ni¹⁷ pha rol tu phyin pa bcu'o //

[10] slob dpon lta bu ni¹⁸ rjes su¹⁹ dran pa drug go //²⁰

[11] mkhan po lta bu ni²¹ 'Phags pa 'Od srung kyis²² zhugs pa'i mdo'i²³ byang chub kyi sems mi brjed par 'gyur ba'i chos bzhi'o //

[12] tshong²⁴ dpon lta bu ni²⁵ bslab²⁶ pa kun las btus²⁷ kyi²⁸ gnod pa bcu bzhi'i gnyen po rnam s so //

[13] sring mo lta bu ni²⁹ tshad med pa bzhi'o //

[14] bran lta bu ni³⁰ bsdu ba'i dngos po bzhi'o //

[15] 'bangs lta bu³¹ ni³² khyi dang bran dang gdol ba lta bur nga rgyal (G2. 39a) bcag³³ pa'o //

[16] mig lta bu ni³⁴ bsam pa dang /³⁵ lhag pa'i bsam pa rnam par dag pa'o //

[17] ma ma lta bu ni³⁶ dge ba'i bshes (C. 312a) gnyen yin no //

[18] rgyal po lta bu ni³⁷ dkon mchog gsum yin no //

[19] chu lud³⁸ lta bu ni³⁹ 'khor gsum yongs su⁴⁰ dag (D. 305a) pa yin no⁴¹ //

1 D2 ni /. 2 G2N2 //. 3 D2G1N1P1 ni /. 4 N1 //. 5 G2 om. 6 G1 kyis. 7 G2 ni.
8 G2 kyang /. 9 D2 can rnam s. 10 D2 /. 11 D2P1 ni /. 12 D2N2 om. 13 D2N2 om.
14 D2N2 om. 15 G1N1P1 ni /. 16 G2 khri ms. 17 G1 ni //, D2N1P1 ni /.
18 D2N1 ni /, G1P1 ni //. 19 G2N2 rjesu. 20 CGNP /. 21 D2N1 ni /, G1P1 ni //.
22 D2 srung gyis. 23 D2 mdo las /. 24 P1 tshod. 25 D2 ni /, G1N1P1 ni //.
26 P2 bslab bslab. 27 G1 btud. 28 D2 pa'i. 29 G1N1 ni //, P1 ni /.
30 G1 ni //, N1P1 ni /. 31 G1 om. 32 D2N1P1 ni /, G1 ni //. 33 G1 ba cag.
34 D2N1P1 ni /, G1 ni //. 35 N2 //, D2 om. 36 D2G1N1P1 ni /. 37 D2G1 ni /, N1P1 ni //.
38 G2NP lung. 39 D2G1N1P1 ni /. 40 G2N yongsu. 41 G1 pa'o for pa yin no.

[20] (P2. 37b) lam mkhan lta bu ni¹ dran pa dang /² shes bzhin³-dang /⁴ tshul bzhin³ mas pa dang / bag yod pa dang / phyin ci log bzhi'i gnyen po bsten⁵ pa'o //

[21] pags⁶ pa lta bu ni⁷ sems can mi gtong⁸ zhing rjes su⁹ 'dzin¹⁰ pa'o //

[22] rgyan lta bu ni¹¹ (G. 491b) ¹²-dad pa dang /^{12, 13} tshul khrims dang /¹⁴ gtong ba dang /¹⁵ thos pa dang / shes rab po //

[23] nad dang zug rdu lta bu ni¹⁶ phyi nang gi dngos po la zhen pa'i sems so¹⁷ //

[24] skyes bu mnar sems¹⁸ lta bu ni¹⁹ khyim (N2. 31b) pa'i byang chub sems dpa' 'di snyam du²⁰ bdag nam zhig na tshangs par spyod par 'gyur zhig gu zhes pa dang / rab tu byung ba 'di²¹ snyam du nam zhig na bdag gis²² (P1. 355a) 'gro ba rnam sdug bsngal las thar bar²³ nus zhes²⁴ pa'o //

[25] le lo can lta bu ni²⁵ khyim pas zhing la sogs pa ma spangs pa'o // rab tu byung bas tshul 'chos la sogs pa ma (D2. 30a) spangs pa'o // *Tshul khrims kyi*²⁶ *phung po'i mdo* las /²⁷

dge slong dag rab tu byung bas glang po che 'thab pa la bltas na yang (N1. 351a)

²⁸-log pa'i tsho²⁹ ba⁻²⁸ yin no

zhes gsungs so³⁰ //

[26] gshis³¹ bzang po lta bu ni³² tshul bzhin sems pa dang ldan pa'o //

[27] dig pa lta bu ni³³ gzhan gyi³⁴ nyes pa dang 'khrul pa mi brjod pa dang / rang gi yon tan mi brjod pa dang / gzhan la mi smod pa'o //

[28] long ba lta bu ni³⁵ gzhan gyi 'khrul pa la mi blta³⁶ ba'o //

[29] rkun ma zin pa lta bu ni³⁷ dam pa'i chos 'jig³⁸ pa na dam pa'i chos 'dzin pa'o //

[30] byis pa lta bu ni³⁹ bka'⁴⁰ blo bde ba dang / nga lo yang ba dang / 'grog na (G2. 39b) bde ba dang / mgu sla ba dang / gso sla ba dang / dgang sla ba dang / chog shes pa'o //

1 D2G1N1P1 ni /. 2 D2N1P1 om. 3 G1 om. 4 P2 //. 5 D2 brten. 6 N1 'phags.
7 D2G1 ni /, N1P1 ni //. 8 P gdong. 9 G2N rjesu. 10 P 'jin. 11 D2G1N1P1 ni /.
12 G1 om. 13 D om. 14 D om. 15 G1N1P1 om. 16 D2G1N1 ni /, P1 ni //.
17 N1 semso. 18 CD1N1P1 sems can. 19 D2G1 ni /, N1P1 ni //. 20 G2 du /, P1 du //.
21 G1N1P1 ba'i for ba 'di. 22 G1N1P1 gi. 23 G1 par par, P1 par, G2 om. 24 G2 shes.
25 D2G1N1 ni /, P1 ni //. 26 G1N1P1 kyis. 27 P1 //. 28 D2 tshul khrims ma dag pa.
29 G2N2P2 'tsho. 30 G2N1 gsungso. 31 G1NP1 shis. 32 D2G1N1P1 ni /.
33 D2N1P1 ni /, G1 ni //.
34 G1N1P1 gyis. 35 D2G1N1P1 ni /. 36 G2N2P2 lta. 37 D2N1 ni /, G1P1 ni //.

38 P1 'jigs. 39 D2N1P1 ni /, G1 ni // . 40 C dka'.

[31] pho nya lta bu ni¹ byang chub sems dpa' don mang ba dang / bya ba mang ba dang /² (G1. 492a) snying las che ba'o //

[32] blon po lta bu ni³ dam bca' brtan pa'o //

[33] mdzangs⁴ pa⁵ lta bu ni⁶ sems can dang zhe⁷ 'gras pa med pa dang⁸ bcos su⁹ btub pa'o //

[34] slob ma lta bu ni¹⁰ nyin (P2. 38a) lan gsum mtshan lan gsum du bla ma la bsnyen bkur (C. 312b) bya¹¹ ba dang /¹² bsod nams kyi tshogs bsag¹³ pa dang / sdom pa gso ba'o //

[35] bsu skyel ba lta bu ni¹⁴ sems can thams cad sangs rgyas par byas nas¹⁵ gdod bdag nyid 'tshang¹⁶ rgyas par¹⁷ 'dod pa'o //

[36] long¹⁸ khrid pa¹⁹ lta bu ni²⁰ bdag (D1. 305b) sangs rgyas par byas nas²¹ gdod gzhan gyi don byed pa'o //

[37] bskal pa dang po'i mi lta bu ni²² spyod lam dang /²³ tshul khirms dang /²⁴ 'tsho ba dang /²⁵ cho ga dang /²⁶ lta ba phun sum tshogs pa'o //

[38] skyes bu 'dod pa can lta bu ni²⁷ spyod lam thams cad²⁸ gzhan la bsngo ba ste / 'Phags pa dKon mchog sprin las 'byung ba lta bu'o //

[39] mun pa lta bu ni²⁹ dbu ma chen po'i don la rtag tu gnas pa'o //

[40] (P1. 355b) gshed ma lta bu ni³⁰ log par lta ba skyes pa de³¹ spang³² bar³³ bya'o //

[41] chom rkun lta bu ni³⁴ bag med pa dang /³⁵ ma gus pa ste spang bar bya'o //

[42] dgara lta bu ni³⁶ ngo tsha med pa dang³⁷ bag med (N1. 351b) (N2. 32a) pa'o //

[43] glen pa lta bu ni³⁸ dran pa dang shes bzhin med pa'o //

[44] ra ro ba³⁹ lta bu ni⁴⁰ nag por gyur pa bzhi'o //

[45] byol song lta bu ni⁴¹ bslab pa'i tshul rnam mi shes pa'o //

1 D2G1N1P1 ni /. 2 CD om. 3 D2G1N1P1 ni /. 4 GN2P2 'dangs. 5 G2 pa pha.
6 D2G1N1P1 ni /. 7 N1 zhes. 8 D2GNP dang /. 9 G2N2 bcosu. 10 D2G1N1P1 ni /.
11 G2N2P2 om. 12 P2 //. 13 CD1 bsag. 14 D2G1N1P1 ni /. 15 D2 nas /. 16 D2 sangs.
17 GNP rgya bar. 18 G2N2P2 long ba. 19 CD1 om. 20 D2G1N1P1 ni /. 21 G1 na.
22 D2G1N1P1 ni /. 23 P2 //, D2 om. 24 D2 om. 25 D2 om. 26 D2 om. 27 G1N1P1 ni /.
28 G2 can. 29 D2G1N1P1 ni /. 30 D2G1N1P1 ni /. 31 D2GNP ste. 32 N2 spangs.
33 N2P1 par. 34 D2G1N1P1 ni /. 35 D2 om. 36 D2N1P1 ni /, G1 ni //. 37 GNP dang /.
38 D2N1P1 ni /, G1 ni //. 39 G1 pa. 40 D2G1N1P1 ni /. 41 D2P1 ni /, G1N1 ni //.

[46] shan¹ pa lta bu ni² snying rje dang (G1. 492b) bral ba'i spyod (D2. 30b) lam can no //

[47] byas pa la drin du mi gzo ba lta bu ni³ so sor thar pa'i sngom pa bzhag⁴ pa'o //

[48] dva phrug lta bu ni⁵ thabs mkhas pa dang bral ba'o //

[49] smyon⁶ pa lta bu ni⁷ bya ba dang bya ba ma yin pa mi shes pa'o //

[50] bdud kyis brlams⁸ pa (G2. 40a) lta bu ni⁹ bar du gcod pa'i chos lnga bcu rtsa lnga dang /¹⁰ sum cu rtsa gnyis mi shes pa'o //

lnga bcu rtsa lnga po yang gang zhe na / 'Phags pa Byang chub sems dpa'i sde snod las 'byung¹¹ ba lta bu ste /¹²

[1] 'di ltar bar du gcod pa'i chos ni gcig ste /¹³ bag med¹⁴ pa'o // [2-3] bar¹⁵ du gcod pa'i chos ni gnyis te / (P2. 38b) ngo tsha¹⁶ med pa dang / khrel med pa'o // [4-6] gsum ste¹⁷ /¹⁸ 'dod chags dang / zhe sdang dang / gti mug go //¹⁹ [7-10] bzhi ste / dam pa ma yin pa'i 'gro ba bzhi'o // [11-15] lnga ste²⁰ / srog gcod pa dang / ma byin par len pa dang / 'dod pas log²¹ par g-yem pa dang /²² brdzun du smra ba dang /²³ chang 'thung ba'o //²⁴ [16-21] drug ste / sangs rgyas dang /²⁵ chos dang / dge 'dun dang / tshul khrims dang / slob dpon dang / rgan pa rnam la ma gus pa'o // [22-28] bdun te /²⁶ nga rgyal rnam pa (C. 313a) bdun no²⁷ // [29-36] brgyad de /²⁸ log pa brgyad do²⁹ // [37-45] dgu ste /³⁰ kun nas³¹ mnar sems kyis³² dngos po rnam pa dgu'o // [46-55] bcu ste /³³ mi dge ba bcu'o^{34, (2)}

zhes 'byung ngo³⁵ //³⁶

bar du gcod pa'i chos sum cu rtsa gnyis kyang / 'Phags pa Theg pa'i chen po'i man ngag gi mdo (D1. 306a) las (G1. 493a) 'byung ba lta bu ste /

ji skad du / bu mo theg pa'i chen po'i bar du gcod pa'i chos ni sum cu rtsa gnyis te / bar du gcod pa de dag gis thams cad mkhyen (P1. 356a) par³⁷ myur du nges par mi

(2) *Bodhisattvapiṭakasūtra.*

1 G2P2 gshan, N2 shes. 2 D2N1P1 ni /, G1 ni //. 3 D2N1 ni /, G1P1 ni //.
4 D2 gzhas. 5 D2G1N1 ni /, P1 ni //. 6 D smon. 7 D2G1N1P1 ni /. 8 D2 brlabs.
9 D2G1N1P1 ni /. 10 P // . 11 D1 byung. 12 D om. 13 CD om. 14 D cad.
15 G1P2 rab. 16 D2 cha. 17 P sta. 18 D om. 19 CGNP /. 20 G1 sde, P1 sded.
21 N2 logs. 22 N1 // . 23 G1N1P1 om. 24 P1 pa'o. 25 N2 om. 26 D2 om.
27 G1 bduno. 28 CD1 om. 29 G1 brgyado. 30 D2 om. 31 D1 nar. 32 G1N1P1 kyis.
33 CD2 om. 34 P1 bcu'o // . 35 G1N1P1 om. 36 G1N1P1 /. 37 G1 pa.

'byung ngo // sum cu rtsa gnyis gang zhe na / 'di lta ste /¹ [1] nyan thos dang² rang (N1. 352a) sangs rgyas kyi theg pa 'dod pa dang / [2] brgya byin dang³ tshangs pa 'dod pa dang / [3] skye ba la gnas te tshangs par spyod pa dang / [4] dge ba'i rtsa ba gcig la chags pa dang / [5] longs spyod bdog pa rnams la⁴ ser sna byed pa dang / [6] sems can rnams la mnyam par mi sbyin⁵ pa dang [7] tshul khirms la (N2. 32b) lhod pa dang / [8] gzhan⁶ (G2. 40b) gyi⁷ sems mi bsrung⁸ ba dang / [9] gnod sems dang /⁹ [10] khong khro ba'i bag la nyal byed pa dang / [11] des sems zhum pa dang / [12] brjed ngas pa dang / [13] thos pa don du mi gnyer ba dang / [14] dpyod¹⁰ pa med pa dang / [15] 'phags pa ma yin pa'i spyod pa dang / [16] nga (D2. 31a) rgyal las kyang nga rgyal 'phel ba dang / [17] lus dang ngag dang sems kyi las yongs su¹¹ ma dag pa dang / [18] dam pa'i chos yongs su¹² mi bsrung ba dang / [19] slob dpon¹³ chos¹⁴ 'chab pa dang / [20] bsdu ba'i dngos po rnams 'dor ba dang / [21] yang dag par dga' bar 'gyur ba'i chos gtong ba dang / [22] sdig pa'i grogs po bsten¹⁵ pa dang / [23] byang chub tu yongs su¹⁶ mi bsngo ba ste¹⁷ phung po gsum¹⁸ dang mi mthun pa dang / [24] dge ba'i rtsa ba chung ngus¹⁹ rlom sems (G1. 493b) su byed pa dang / [25] thabs med par lhung²⁰ ba'i²¹ blo dang / [26] phyir zhing dkon mchog gi²² bsngags pa mi smra ba dang / [27] byang chub sems dpa' la gnod par sems pa dang / [28] ma thos pa'i chos spong ba dang / [29] bdud kyi las khong du mi chud pa dang / [30] 'jig rten rgyang pan²³ pa'i gsang tshig 'dzin pa dang / [31] sems can yongs su²⁴ smin par mi byed pa dang / [32] 'khor (C. 313b) bas²⁵ yongs su²⁶ mi²⁷ skyo ba ste / bu mo sum cu rtsa gnyis po 'di dag ni²⁸ sreg pa chen po'i bar du gcod pa'i yang dag pa'i phul yin te / bar du gcod pa de dag gis²⁹ thams cad mkhyen par nges par mi 'byung ngo // de lta mod kyi 'on kyang bu mo theg pa chen po'i yon tan ji (N1. 352b) tsam pa de tsam du bar du gcod (P1. 356b) pa yang de (D1. 306b) tsam mo⁽³⁾

(3) *Mahāyānopadeśasūtra*, Tib. P. No.836, Phu 320a8-b8.

1 D om. 2 D2G2N2P2 dang /. 3 D2GNP dang /. 4 G1N1P1 las. 5 G2P2 byin.
6 D2 byang chub. 7 D2 kyi, G1N1P1 gyis. 8 G1N1P1 srung. 9 D om.
10 D2G2N2P2 spyod. 11 G1N yongsu. 12 N yongsu. 13 D2G2N2P2 dpon dang.
14 G2N2P2 om. 15 D2 brten. 16 G2N yongsu. 17 D2 dang /. 18 D2 gsum pa.
19 G1N1P1 ngu. 20 P2 lung. 21 P1 pa'i. 22 D2G2N2P2 gsum gyi.
23 C phan, D2 'phan. 24 G2N yongsu. 25 G1N1P1 ba. 26 G2N2 yongsu.
27 *Mahāyānopadeśasūtra* om. 28 D2 ni /. 29 G1N1P1 gi.

zhes gsungs so¹ // gzhan yang bar du gcod pa'i chos dpag tu med pa dag mdo sde du mar
 mthong mod kyi² / 'dir gzhung mangs par 'gyur bas ma bkod de /³ lam 'di la ched cher byed
 pa'i byang chub sems dpa' las dang po pas⁴ mdo de dang der⁵ blta⁶ (G2. 41a) bar bya zhing
 nyams su⁷ blang⁸ pa la brtson par bya'o //

gtam⁹ du bya ba gzhan yang mang du yod de / rtsub cing¹⁰ drag la yun ring¹¹ sdug bsngal
 bzod dka' bzod par byed pa¹² ngo mtshar che //¹³ chu mo bzhis g-yengs yang dang yang du
 keng rus bzhon pa zhon¹⁴ pa de yang ngo mtshar che //¹⁵ chung ma khyim spangs brtul
 (G1. 494a) zhugs bzang¹⁶ blangs rtag tu lus dag yid g-yengs 'di¹⁷ yang ngo mtshar che //¹⁸
 dge ba'i rsta ba chung du tsam yang med par de nyid don gyi¹⁹ sangs rgyas ye shes rtsad
 gcod tshol ba 'di yang ngo mtshar che //²⁰ (N2. 33a) so sor thar pa'i bslab pa med par theg
 pa²¹ chen byang chub mchog gnyis rtsad gcod tshol pa 'di yang ngo mtshar che //²² de la
 sogs pa ngo mtshar che ba (D2. 31b) mang du yod mod kyi // 'dzam gling skye bo'i²³ rtog
 dang spyod²⁴ pa smra bar²⁵ ga la nus //²⁶ de bas thar 'dod mkhas pa khyed cag smyon pa de
 dag dang // lhan cig 'dre bar ma byed bag yod gnas par gyis // 'di ltar de dag snying rje'i²⁷
 yul du ma²⁸ byas²⁹ ma gtogs par // lam mchog bshad³⁰ kyang de la 'jug par mi 'gyur bdag³¹
 gis³² ji ltar bya //³³ ji srid mngon par shes pa ma thob par du gzhan dag smin par mi nus bse
 ru³⁴ lta bur³⁵ gnas par bya // bla ma bzang po btsal bya rtag tu mdo sde dag la blta bar bya //
*mDo sde'i don kun las btus pa'i man ngag / slob dpon mkhas pa chen po dpal Mar*³⁶ me
 mdzad ye shes kyi³⁷ mdzad pa rdzogs so³⁸ // //

rgya gar gyi mkhan po chen po³⁹ de nyid dang /⁴⁰ (C. 314a) zhu⁴¹ chen gyi lo tsā ba dge
 slong Tshul khriims rgyal bas (N1. 353a) bsgyur cing zhus te gtan la phab pa'o //⁴²

1 N gsungso. 2 P1 kyi. 3 N1 //. 4 G2N2P2 pas /. 5 P2 dar. 6 N1 lta.
 7 G2N1 nyamsu. 8 G1N1P1 blangs. 9 P1 gtan. 10 G2 shing. 11 D2G1N1P1 rings.
 12 G1N1P1 par. 13 G2 /. 14 C bzhon. 15 G /. 16 P1 bzangs. 17 D2 pa.
 18 G2P1 /. 19 G1N1P1 gyis. 20 G2 /. 21 D2GNP om. 22 G2 /. 23 D2 bos.
 24 D2N1P1 dpyod. 25 G2N2P2 ba. 26 G2 /. 27 N2 rjes. 28 D2GNP om.
 29 D2GNP bya ba. 30 G1 om. 31 G1 ba dag. 32 N1P1 gi. 33 G2 /.
 34 CDG1 rur. 35 CDG1 om. lta bur. 36 G2 om. 37 G1N1 kyi. 38 N rdzogso.
 39 D2G2N2P2 om. chen po. 40 G2N2P2 om. 41 N2P2 zhus. 42 CG2P1 ///, N1 /.

18 *Daśākuśalakarmapathadeśanā*

#¹ // rgya gar skad du / *Da shā ku sha² la karma pa³ thā⁴* /

bod skad du / *Mi dge ba bcu'i las kyi lam bstan pa* /

dkon mchog gsum la phyag 'tshal lo⁵ //

gang zhig bde 'gro thob par 'dod pas spang⁶ bar⁷ bya ba'i⁸ mi dge ba bcu'i las kyi lam
rang bzhin gyis⁹ kha na ma tho ba dang bcas pa 'di lta ste /

lus kyi las ni rnam gsum (D1. 307a) dang //

ngag gi rnam pa bzhi dag dang //¹⁰

yid kyi rnam pa gsum po dang //¹¹

'di bcu mi dge ba ru gsungs //¹²

'di rnams rab tu phye nas bshad par (P2. 40a) bya ste / de la re zhig lus kyi¹³ ni srog gcod
pa dang / ma byin par¹⁴ len pa dang / 'dod pas log par spyod pa'o // ngag gi ni brdzun¹⁵ du
smra ba dang / phra ma dang / ngag rtsub po dang / tshig 'khyal¹⁶ pa'o // yid kyi ni brnab¹⁷
sems dang / gnod sems dang / log par lta¹⁸ ba'o //

de la srog gcod pa ni //¹⁹ srog chags su²⁰ gyur pa dang / srog chags su²¹ 'du shes par gyur²²
pa dang / gsod²³ pa'i sems nye bar gnas par gyur pa dang / de'i thabs kyang byed pa dang /
srog 'gags²⁴ par gyur pa ste //²⁵ yan lag lnga po de dag dang ldan na srog gcod pa yin no //

de la ma byin (N2. 33b) par len pa gang zhe na / gzhan gyir²⁶ gyur pa dang / pha rol gyis
yongs su²⁷ bzung bar yang 'du shes pa dang / rku²⁸ ba'i sems kyang nye bar gnas par
(G1. 496a) gyur²⁹ (D2. 32a) pa dang / de'i thabs kyang byed pa dang / gnas nas bskyod³⁰ pa
ste //³¹ yang lag lnga po de dag dang ldan na ma byin par len par 'gyur ro³² //

1 G1N1P *mi dge ba bcui las kyi lam bstan pa bzhugs* (P2: *so*) // (G1.495b, P1 357a) #.

2 G1N1P1 *shā*. 3 G2N2P2 *pā*. 4 G1N1P1 *tha*, G2N2P2 *da de sha*. 5 G1 'tshalo.

6 G1N1P1 *spangs*. 7 G1N1 *par*. 8 G2 *nga*. 9 D2P1G1N1 *gyi*. 10 G1N2 /.

11 G1N1 / . 12 G1N1 / . 13 G1 *kyis*, N1P1 *gyis*. 14 G1N1P1 *pa*. 15 G1N1P1 *rdzun*.

16 G2N2P2 *khyal*. 17 P1 *rnab*. 18 G2N2P2 *blta*. 19 D1G2N2P2 *om*.

20 G2 *chagsu*. 21 G2N1 *chagsu*. 22 P1 'gyur. 23 N1P1 *bsod*. 24 N1G1P1 'gag.

25 G1N1P1 *om*. 26 G2N2P2 *gyi*. 27 N1G *yongsu*. 28 G2N2P2 *brku*.

29 G1 *bar gyur*. 30 D2 *spos*. 31 CD1G1N1P1 *om*. 32 G2N2 'gyuro.

'dod pas log par g-yem pa ni¹ rnam pa bzhi ste / yul ma yin (N1. 351b) pa dang / dus ma yin pa dang / yan lag ma yin pa dang / 'gro bar² bya ba ma yin pa'o //

de la yul ma yin pa³-zhes bya ba³ ni⁴ dam pa'i chos dang / sku gzugs la sogs pa dang⁵ byang (G2. 42a) chub sems dpa'i gnas dang / slob dpon dang / mkhan po dang / sbyin gnas dang / ⁶pha ma la sogs pa dang / ⁶bla ma (C. 314b) dang nye bar gyur pa'o //

dus ma yin pa zhes bya ba ni⁷ nyin (P1. 357b) par⁸ dang / zla mtshan⁹ dang ldan pa dang / sbrum¹⁰ ma dang / bu chung 'tsho ba dang / mi 'dod pa dang / sdug bsngal ba dang / yid mi bde bas nye bar gdungs pa dang / bsnyen gnas yan lag brgyad la gnas pa'o //

yan lag ma yin¹¹ pa zhes bya ba ni¹² kha dang /¹³ bshang¹⁴ ba'i lam dang / khye'u dang bu mo'i mdun dang¹⁵ rgyab kyi bug pa dang /¹⁶ rang gi lag pa'o //¹⁷

'gro bar¹⁸ bya ba ma yin pa ni¹⁹ gzhan gyi bud med thams cad²⁰ dang / (P2. 40b) chos kyi²¹ rgyal mtshan dang²² rigs kyis bsrungs²³ pa dang / rgyal pos²⁴ bsrungs pa dang / gzhan gyis blangs pa'i smad 'tshong ma dang / gnyen 'brel can dang / byol song ngo²⁵ //

de ltar²⁶ rang (D1. 307b) gi chung ma la brten²⁷ nas²⁸ 'dod pas log par g-yem²⁹ par 'gyur ro³⁰ //

de la brdzun du smra ba zhes bya ba ni³¹ dngos por yang ma³² gyur pa dang / (G1. 496b) dngos po'i gnas skabs³³ las nyams par gyur³⁴ pa dang / log par 'du shes par gyur pa dang / log pa'i thabs kyang nye bar gnas par gyur pa dang / de'i thabs kyang byed pa dang / brdzun³⁵ gyi tshig kyang smras pa ste / yan lag lnga po de³⁶ dag dang ldan na brdzun³⁷ du smra bar 'gyur ro³⁸ //

phra ma zhes bya ba ni³⁹ nyon mongs pa'i sems kyis gzhan 'byed pa'i tshig go /⁴⁰

1 G1N1P1 pa'i for pa ni. 2 D2 bsgrod par, G1N1 bgrod par. 3 D2 om.
4 D2G1N1P1 ni /. 5 G2N2P2 dang /. 6 G1 G1 repeats. 7 D2 ni /. 8 G1 om.
9 P1 mchan. 10 G1 sbrum. 11 G1 yin te. 12 G1N1P1 ni /. 13 CD1G1N1P1 om.
14 P2 bshad. 15 D2P2 dang /. 16 CD1G2N2P2 om. 17 G2 om.
18 D2G1P1 bgrod par, N1 'grod par. 19 CDG1N1P1 ni /. 20 G1 thamd.
21 CD1 dang /, G1P1 dang, N2P2 kyi /. 22 CD2P1 dang /. 23 N1 srungs.
24 N2 po'i. 25 G1 songo. 26 G2N2P2 lta bur. 27 G1 rten, G2N2P2 bsten.
28 D2 na yang. 29 D2 spyod. 30 G1 'gyuro. 31 G1N1P1 ni /. 32 D2 om.
33 G1 gnaskabs. 34 D2 par yang. 35 G1N1P1 rdzun. 36D1N1P1 'di.
37 G1N1P1 rdzun. 38 G 'gyuro. 39 D2 ni /. 40 D1 //.

tshig rtsub po¹ zhes bya ba ni /² pha rol gyi gnad la phog³ pa'i sdang tshig go /⁴
tshig 'khyal⁵ pa zhes bya ba ni⁶ 'dod pa dang nye bar ldan pas sam / chags
(N2. 34a) pa dang⁷ nye bar ldan pas smra bar bya ba ma yin pa smra ba'o //

brnab (G2. 42b) sems zhes (N1. 354a) bya ba ni⁸ pha rol gyi rdzas dang⁹ dbang phyug
dang¹⁰ (D2. 32b) longs¹¹ spyod rnams la chags pa'i sems mi bzad pa'o //

gnod sems zhes bya ba ni¹² sems can¹³ la rnam par¹⁴ sdang ba dang /¹⁵ sems can 'di dag¹⁶
gsad¹⁷ do // bcing ngo // brdeg go¹⁸ /¹⁹ gtag²⁰ go²¹ zhes sems pa'o //

log par lta ba zhes bya ba ni²² sbyin pa med / sbyin sreg med / 'jig rten 'di med / 'jig rten
pha rol med / dge sbyong med / bram ze med / (P1. 358a) lha med / sangs rgyas bcom ldan
'das med / ²³-dgra bcom pa med /²³ rang sangs rgyas²⁴ med /²⁵ legs par²⁶ spyad pa med / nyes
par (C. 315a) spyad pa med / legs par byas pa dang /²⁷ nyes par byas pa'i las rnams kyi 'bras
bu rnam par smin pa med ces pa'o //

bcom ldan 'das kyi bka' stsal pa / 'Phags pa Dam pa'i chos dran pa nye (G1. 497a) bar
gzhas²⁸ pa (P2. 41a) zhes bya ba dang / theg pa chen po'i mdo las 'byung ba²⁹ mi dge ba
bcu'i las kyi lam 'di dag³⁰ ni dmyal ba chen po'i rgyu³¹ yin te / mi dge ba bcu'i las kyi lam
bsten³² ³³-pas sems can dmyal bar ltung bar 'gyur ro³⁴ //

*Mi dge ba bcu'i las kyi lam bstan pa*³⁵ / slob dpon chen po dpal Mar me mdzad ye shes
kyi zhal snga nas mdzad pa rdzogs so³⁵ // //

rgya gar gyi ³⁶-mkhan po³⁶ de nyid dang /³⁷ zhu³⁸ chen gyi lo tsā ba dge slong Tshul
khrims rgyal bas bsgyur cing zhus te gtan la phab pa'o³⁹ // //⁴⁰

1 N2 pa. 2 G1N1P1 ni /. 3 G2N2P2 'phog. 4 D1 //. 5 G2N2P2 khyal.
6 G1N1P1 ni /. 7 P2 dang /. 8 G1 ni //, N1P1 ni /. 9 CDG2N2P2 dang /.
10 D2G2N2P2 dang /. 11 N1 long. 12 G1N1P1 ni /. 13 N2 semn. 14 N2 om.
15 N1 //. 16 D2 om. 17 G2N2P2 bsad, CD2 gsod. 18 N1 brdego. 19 D1 //.
20 G2 brtag. 21 D2 go /. 22 D2G2N2P2 ni /. 23 G1 repeats (bcom).
24 G1 sangyas. 25 N1 //. 26 G1 ler for legs par. 27 CD1G1N1 om.
28 D2P1 bzhas. 29 CD1 ba /. 30 CDG1N1P1 om. 31 G1N1P1 rgyun.
32 D2G2N2P2 brten. 33 G2 repeats. 34 G2N2 'gyuro. 35 N2 rdzogsso.
36 G1 repeats. 37 D1G2N2P2 om. 38 G2 zhus. 39 D1G1N1P1 pa.
40 D2 //, G1 // // sarba mangga lam // //.

19 *Karmavibhaṅga*

#¹ // rgya gar skad du / *Karma bi bhaṃ ga*² nā ma /

bod skad du³ / *Las rnam par 'byed pa zhes bya ba* /

dkon mchog gsum la phyag 'tshal lo⁴ //

ding⁵ (G2. 43a) sang dus kyi skye bo 'di dag gis //

mtho ris bde ba dag kyang⁶ thob dka' na //

mya ngan 'das la re ba yod min pas //

bdag nyid kho na dran phyir⁷ bri bar bya //

yod med rtag chad dang bral ba //

(N1. 354b) bde ba'i longs⁸ spyod phun sum tshogs //

'gro rnam yongs su⁹ smin mdzad pa //

dam pa'i¹⁰ skyes mchog de la 'dud¹¹ //

bcom ldan 'das gang 'jig rten dang¹² 'jig rten las 'das pa'i chen po las kyang phul du¹³
byung zhing khyad par du 'phags pa de la phyag 'tshal nas /¹⁴ ji ltar bya zhe na / las (N2.
34b) dge dang¹⁵ mi dge ba rnam par dbye bar bya ste /

mngon par mtho ba mtho ris lha dang mi //

thob par byed pa sdom pa'i tshul khriims yin //

de nyams gyur pas ngan song (D2. 33a) 'gro ba ni //

(P1. 358b) dmyal ba yi dags¹⁶ byol song 'di dag go //¹⁷

lha dang mi'i¹⁸ gtam rgyas pa 'di ni¹⁹ 'Jig rten gzhaḡ pa dang / 'Jig rten gdags²⁰ pa
dang /²¹ *Bye brag tu bshad pa chen po*'i nang nas che long du btus pa²² mDzod kyi gnas
gsum pa la sogs par blta bar bya'o // 'di ltar

tsha ba'i sems can dmyal ba ni²³ 'dzam bu'i²⁴ gling (C. 315b) 'di'i 'og na dpag tshad

(P2. 41b) khri phrag gnyis na²⁵ sems can dmyal ba chen po²⁶ gnas so²⁷ //²⁸

1 G1N1P *las rnam* par (G1: *rnam*) 'byed pa zhes bya ba bzhuḡs (G1: *zhud*) // # //,
G2 om. #.

2 G1N1P1 *karma bi ta*. 3 N2 *skadu*. 4 G2N1 'tshalo. 5 D2 *deng*. 6 G1 *kyang* /.

7 G1 *phyi'i*. 8 G1P *long*. 9 GN *yongsu*. 10 G2N2P2 *pa*. 11 G1 *bdud*. 12 D2P2 *dang* /.

13 G1N1P1 om. 14 C //, G2P2 om. 15 G1N1P1 *dang* /.

16 D2 *dwags*. 17 CD2GP /.

18 P2 *mi yi*. 19 D2G1N1P1 *ni* /.

20 G1 *gdas*. 21 G2 om. 22 D2 *pa* /.

23 D2 *ni* /.

24 D2 *bu*, GN1P *dza mbu'i*, N2 *dzam bu'i*. 25 G2N2P2 *na* /.

26 G2N2P2 *por*. 27 G1 *gnaso*.

28 G1 // *de dag gi tse'i tshad kyi*.

gzhan bdun ni de'i steng na rim pa bzhin du gnas so // de dag gi tshe'i tshad kyi rim pa ni¹ mi rnams kyi lo'i rim pa rnams la² /³ 'dod pa'i kham s kyi lha rnams dang / yang sos⁴ la sogs pa dmyal ba rnams kyi nyin zhag dang zla ba dang lo'i rim pa rnams bsgres nas shes par bya ste / 'di ltar mi rnams kyi tshe lo lnga bcu la sogs pa las bsgyur nas⁵ shes par bya'o⁵

zhes bshad pas so // grang ba'i⁶ sems can dmyal ba yang ni⁷ ti se'i 'og na snga ma de⁸ dag gi thad ka⁹ na gnas pa (G2. 43b) ste / de dag gi tshe'i tshad kyang yul dbus kyi bres bcal ba'i til khal brgyad cus byur bur bkang ba'i¹⁰ nang nas /¹¹ skyes bu zhig gis lo brgya brgya na¹² til re re phyung bas zad par gyur pa na sems can dmyal ba chu bur can gyi tshe zad pa yin te / 'og ma rnams kyi tshe ni nyi shur bsgyur ro // 'di dag gi don (N1. 355a) yang *Cung zad tsam*¹³ zhig¹⁴ mdo las bshad pa (D. 308b) bri bar bya'o //

de ltar de dag dmyal ba ni //

bcu drug ces bya rgal bar dka' //

drag po'i las kyis¹⁵ kun du¹⁶ gang //

re re la yang lhag bcu drug //

rtsig pa¹⁷ bzhi dang ngos bzhi ste //

rnam phye ris su chad pa yin //

lcags kyi ra bas kun nas bskor //

lcags¹⁸ dag gis ni¹⁹ gang ba yin //

dpag tshad brgya phrag du mar ni //

me lce dag gis²⁰ khyab par gnas //^{21, (1)}

zhes bcom ldan 'das kyis gsungs so // mDzod las kyang /²²

de dag gi²³ ni ngos (N2. 35a) bzhi na //²⁴

(P1. 359a) me mar²⁵ mur dang ro (G1. 499b) myags dang //²⁶

spu gri lam sogs²⁷ chu bo yin //^{28, (2)}

(1) *Abhidharmakośabhāṣya*, Pradhan ed., p.163.12-17. Cf. Pāsādika 1989, [240].

(2) *Abhidharmakośakārikā* 3.59cd-60a.

1 D2G1N1P1 ni /. 2 D2 las. 3 G2N2P2 om. 4 G2N2P2 sos pa. 5 D2 om. 6 P1 pa'i.
7 G2N2P2 om. 8 P1 da. 9 G2N2P2 om. 10 P1 pa'i. 11 D2 om. 12 G1 na /. 13 D1 cam.
14 D2 cig. 15 GNP kyi. 16 D2G2N2P2 tu. 17 P1 ba. 18 D2 lcags srog. 19 D2 om.
20 G1N1P1 gi. 21 G1NP1 /, P2 om. 22 G2N2P2 om. 23 GN1P gis. 24 N2P2 /. 25 D2 ma.
26 N2 /. 27 G1 sog. 28 G1NP1 /, P2 om.

zhes bshad do // sngon gyi mkhas pa chen po kha cig na re

tsha ba la sogs pa bdun po de¹ dag ni mnar med pa'i sems can dmyal ba'i g-yas²
ngos dang g-yon ngos na gnas so

zhes zer ro³ // nyi tshe ba dang⁴ nye 'khor ba'i sems can dmyal ba dag la ni⁵ gnas kyi nges pa
med de⁶ / (D2. 33b) chu bo dang⁷ ri dang⁸ mya ngam⁹ la sogs (P2. 42a) pa'i thang dang¹⁰
steng na gnas so // gтам rgyas par ni¹¹ *Dran pa nye bar gzhang*¹² pa dang /¹³ 'Jig rten gzhang
pa dang / 'Jig rten gdags pa la sogs par blta'o¹⁴ //

yi dags¹⁵ (C. 316a) kyi rtsa ba'i gnas ni¹⁶ rgyal po'i khab kyi grong khyer chen po'i 'og
dpag tshad lnga brgya na yod de¹⁷ / de na¹⁸ yi dags¹⁹ kyi rgyal po gshin rje gnas so²⁰ //
(G2. 44a) gzhan ni de las 'phros pa yin no²¹ // gтам rgyas par ni yi dags²² kyi rtogs pa brjod
par blta bar bya'o //

byol song gi rtsa ba'i gnas ni rgya mtsho chen po yin no²³ // thang dang /²⁴ chu dang /²⁵ ri
dang / dur khrod la sogs pa na ni²⁶ de las 'phros pa yin te / rgyas par ni de dang de dag tu
blta bar bya'o //

gnas gsum po na bde ba med //

sdug bsngal rgyu dang bcas pa'i gтам //

mdo dang bstan bcos dag na (N1. 355b) gsal //

blo dang ldan pas blta bar gyis //²⁷

dmyal ba dang / yi dags²⁸ dang / byol song gi sdug bsngal rgyu dang bcas pa mdo dang
bstan bcos dag na gsal lo²⁹ //

mi'i³⁰ sdug bsngal brgya rtsa bcu dag ni³¹ (G1. 500a) 'phags pa Thogs med kyi³² mdzad
pa'i *Yo ga tsārya*³³ blta bar bya'o //

lha dag la ni sdug bsngal gzhan ni med kyi³⁴ 'on kyang 'chi ltas lnga dang³⁵ nye ba'i³⁶
'chi ltas lnga 'byung ste /³⁷ 'di ltar gos la³⁸ dri ma 'chags³⁹ pa dang / me tog gi phreng ba
rnyings⁴⁰ pa dang / mchan khung (D. 309a) nas rdul 'byung ba dang / lus la

1 G2N2P2 'di. 2 P1 ga yas. 3 N2 zero. 4 GN1P dang /. 5 N2 om. 6 N2 mede.
7 D2GNP dang /. 8 GN1P dang /. 9 G1N1P1 ngam pa. 10 GNP dang /. 11 D2 ni /.
12 N1P1 bzhang. 13 G1N1P1 om. 14 D2 blta bar bya'o. 15 D2 dwags. 16 D2 ni /.
17 N2 yode. 18 G2 ni. 19 D2 dwags. 20 GN2 gnaso. 21 N2 yino. 22 D2 dwags.
23 N2 yino. 24 D2 om. 25 D2 om. 26 D2 G2N2P2 gnas pa ni, G1 pa ni na, for pa na ni.
27 G1 /. 28 D2 dwags. 29 N2 gsal. 30 D2 mi yi. 31 G2N2P2 ni /. 32 N2 kyi.
33 G1N1P1 tsarya, D2 tsaryar. 34 G2 kyi //, N2P2 kyi /. 35 G2N2P2 dang /. 36 G1 bar.
37 G2N1 //. 38 CD1G1N1P1 om. 39 D2 chags. 40 G1N1P1 brnyings.

dri ma 'byung (N2. 35b) ba dang /¹ rang gi stan la mi dga' bar 'gyur ro² // (P1. 359b) nye ba'i 'chi³ lta lnga ni⁴ gos dang rgyan dag las yid du mi 'ong ba'i sgra 'byung ba dang / lus kyi 'od chung bar 'gyur ba dang / khrus byas pa'i chu'i thigs pa lus la 'chags par 'gyur ba dang / g-yo ba'i bdag nyid can yang blo yul gcig la 'chags par 'gyur ba dang / mig 'byed pa dang 'dzum⁵ pa srid par 'gyur ba dag ste / nye ba lnga ni ma nges pa'o //

sdug bsngal de dag (P2. 42b) ci las byung zhe na /

las ni lci dang yang ba dag //

yul dang bsam⁶ pa'i dbye ba yis //

nyan thos theg pa chen po'i lugs //

rnam pa gnyis su⁷ shes par bya //

lci (G2. 44b) ba ni gnyis te / yul gyis lci ba dang / bsam pas lci ba'o // yang ba yang de dang 'dra'o // de yang nyan thos dang theg pa chen po'i lugs kyi⁸ lci ba dang⁹ yang ba so sor¹⁰ tha dad par (C. 316b) (D2. 34a) shes par bya'o //

de la¹¹ nyan thos kyi¹² yul gyis lci ba ni /¹³ 'di ltar mtshams med pa lnga las pha bsad pa ma gtogs pa bzhi'o // de las kyang dge 'dun gyi 'khor lo'i (G1. 500b) dbyen lci ba'o // gzhan yang byams pa'i ting nge¹⁴ 'dzin¹⁵ la snyoms par zhugs pa dang / rdo rje lta bu'i ting nge¹⁶ 'dzin¹⁵ dang / srid pa'i rtse mo'i ting nge 'dzin las langs pa'i rnal 'byor pa dang / mkhan po dang / (N1. 356a) slob dpon dang /¹⁷ dge slong dang / dge slong ma dang / pha dang¹⁸ ma dang / srid pa tha ma pa'i¹⁹ byang chub sems dpa' dang / nad pa dang /²⁰ chos smra ba²¹ dang / nges pa'i sa la gnas pa'i byang chub sems dpa' dang / rgyun du²² zhugs pa dang / lan cig phyir 'ong ba dang / phyir mi 'ong ba dang / dgra bcom pa dag gsod pa dang / de dag²³ la rdeg²⁴ pa dang / lcags sgrog²⁵ la sogs pas sdom pa dang / de dag²⁶ gi yo byad rku ba dang / mchod rten gyi dang / dge 'dun gyi dang /²⁷ chos kyi dang / sangs rgyas kyi yo byad rku ba dang / gang zag snga ma de dag dang / dkon mchog gsum la brdzun²⁸ du²⁹ (N2. 36a) smra ba dang /³⁰ tshig rtsub po dang /³⁰ de dag phan tshun 'byed pa dang / tshigs su³¹ (P1. 360a) bca³² pa ma yin pa smra ba ni yul gyis lci ba'o //

1 D1 om. 2 G2N2P2 ba'o. 3 CDG1N1P1 om. 4 C ni /. 5 CD1 'dzums. 6 D2 bcas.
7 G2 gnyisu. 8 D2GNP kyi. 9 D2 dang /. 10 D2 so. 11 G2N2P2 la yang. 12 N2 gyi.
13 D1 om., P2 //. 14 N1 tinge. 15 G1 repeats. 16 N1 tinge. 17 D1 om.
18 C dang /, D2 om. 19 CD1 ma'i. 20 P1 om. 21 G1N1P1 om. 22 CG2N2P2 tu.
23 G1N1P1 om. 24 N1 rdang. 25 G1N1P sgrogs. 26 G1 bdag. 27 G1N1P1 om.
28 G1N1P1 rdzun. 29 CDG1N1P1 om. 30 D2 om. 31 G2N1 tshigsu. 32 G1 gcad.

bsam pas lci ba ni¹ log par lta ba chen po² skyes pa dang³ yid kyis⁴ nyes pa chen po'o //
yul gyis yang ba ni⁵ byol song dang / dur (D. 309b) khrod⁶ kyi sha za gsod pa la sogs
pa'o //

bsam pas yang ba ni⁷ de las gzhan pa rnamso⁸ //

de la theg (P2. 43a) pa chen (G2. 45a) po'i yul (G1. 501a) gyis⁹ lci ba ni¹⁰ 'di ltar bla ma
rnamso dang / sems dang po bskyed pa la sogs pa'i byang chub sems dpa' dang /¹¹ pha dang¹²
ma dang /¹³ de kho na nyid kyis¹⁴ rnal 'byor pa dang / rang gi lha dang / dkon mchog gsum la
sogs pa la snga ma'i tshul rnamso bzhin du byed pa'o // don 'di¹⁵ nyid la dgongs nas /¹⁶ becom
ldan 'das kyis *rDo rje gtsug tor*¹⁷ *zhes bya ba*¹⁸ rnal 'byor chen po'i rgyud las 'di skad du /

gsang ba pa'i¹⁹ bdag po nyes par spyod pa de dag ni lci bar gyur pa dang / tha mal
par gyur pa'o // de la pha mar²⁰ gyur pa²¹ la sogs pa gsod pa dang /²² rdeg pa²³ ni lus
kyi²⁴ nyes par spyod pa lci ba'o // srog (C. 317a) gcod pa la sogs²⁵ pa gzhan gsum ni²⁶
lus kyi nyes par spyod pa tha mal pa'o // dam (N1. 356b) pa'i chos spong ba dang / (D2.
34b) lha rnamso la tshig rtsub po smra ba dang / pha ma dang /²⁷ bla mar gyur pa la sogs
pa la tshig ngan pa²⁸ smra ba ni²⁹ ngag gi nyes par spyod pa lci ba'o // skyes bu 'ga' zhig
dad pas dge ba³⁰ nyams su³¹ len cing rtsom pa'i³² gtam gyi³³ skabs su³⁴ 'jig rten pha rol
med do zhes bya ba'i tshig³⁵ 'jig rten las 'das pa'i brdzun³⁶ du³⁷ smra ba ni³⁸ ngag gi
nyes par spyod pa³⁹ lci ba'o // dge ba'i bar chad byed⁴⁰ pa'i tshig 'khyal pa smra ba dang
/ lkog 'phyas⁴¹ byed pa dang / mi dge ba'i las kyi gtam rnamso ni ngag gi nyes par (G1.
501b) spyod pa tha mal pa'o // yid kyi nyes par spyod pa ni gsum ste / de nyid las sems
kyi nyes pa dang / sems las byung ba'i nyes pa dang / ma rig pa'i nyes pa'o⁴² // de dag
kyang dge ba bcu'i las kyi lam⁴³-de (P1. 360b) nyid la⁴³ ma chags pa nyid ni⁴⁴ sems

1 D2N1P1 ni /, G1 ba'o //, 2 G1N1P1 po dang, 3 D1GNP dang /, 4 D2GNP kyi, 5 C ni /,
6 G1 khros, 7 C ni /, 8 G2N1 rnamso, 9 G1 yul gyis, 10 D2 ni /, 11 N1 om, 12 D2 om,
13 CD1 om, 14 G1 kyis, 15 G2N2P2 de, 16 D2GNP om, 17 P1 gtor, 18 G2N2P2 ba /,
19 D2G2N2P2 ba'i for ba pa'i, 20 G2N2P2 ma, 21 G2N2P2 om, gyur pa, 22 D2 om,
23 D2 pa la sogs pa, 24 G1N1P1 kyis, 25 P1 srog, 26 D2 ni /, 27 G2N2P2 om,
28 D2 om, 29 D2 ni /, 30 G1 bas, 31 G1N nyamsu, 32 G1 om, rtsom pa'i, 33 G1N1P1 gyis,
34 G2N2 skabsu, 35 G2N2P2 tshig /, 36 G1N1P1 rdzun, 37 GNP om, 38 G2N2P2 ni /,
39 G2N2P2 pa'i, 40 D2 mi byed, 41 G1P1 'phyas pa, 42 D2 pa dang /, 43 G1 om,
44 N2 ni /.

kyi nyes par spyod pa'o // dregs pa (G2. 45b) dang / nga rgyal dang /¹ khro ba dang /
 sems can rnam par 'jig pa dang / 'dod chags kyi sems kyis² (N2. 36b) gzhan gyi bud
 med la chags pa dang / gzhan gyi (P2. 43b) srog 'phrog pa³ dang / bla mar gyur pa la
 sems gya⁴ gyu⁵ zhing rab tu sdang ba ni sems las byung ba'i nyes pa'o // dge ba
 bcu'i las kyi lam rnams dang / pha rol tu phyin pa drug 'dor zhing brjed⁶ ngas pa dang /
 som nyir gyur pa dang / yid (D. 310a) shin tu rmongs par gyur pa ni ma rig pa'i nyes
 pa⁷ spyod pa'o //^{8, (3)}

zhes⁹ gsungs so //

de la bsam pas lci ba ni / theg pa chen po pa¹⁰ sems¹¹ snying rje'i dbang du gyur pa¹² /
 sems can thams cad mi¹³ gtong bar rjes su¹⁴ 'dzin pas¹⁵ lci ba ni /¹⁶ 'di ltar zhe sdang kho
 na yin te / slob dpon Zhi ba lha'i zhal nas /

bskal pa stong du bsags pa yi¹⁷ //

sbyin dang bde gshegs¹⁸ mchod la sogs //

legs spyad gang yin de kun yang //

khong khro gcig gis 'joms par byed //^{19, (4)}

ces (N1. 357a) gsungs so²⁹ // 'di kho na nyid²¹ lci ba yin pa'i khungs mang du yod²² mod
 kyi²³ re zhig gzhas²⁴ go //²⁵

yang ba'i las (C. 317b) kyang tshul 'di las shes par (G1. 502a) bya'o²⁶ //

theg pa gnyis po 'di²⁷ dag tu //

lci dang yang ba'i las rnams bshad //

'dod chags zhe sdang gti mug gis //²⁸

rnam pa gsum du 'gyur ba'o //⁽⁵⁾

de la²⁹ srog gcod pa 'dod chags las skyes pa ni³⁰ 'di (D2. 35a) ltar lus kyi yan lag gi phyir
 ram /³¹ nor gyi phyir ram / rtsed mo'i phyir ram / bdag dang mdza' bo yongs

(3) *Vajrasīkharanahāguhyayogatantra*. Tib. D. No. 480.

(4) *Bodhi(sattva)caryāvatāra* 6.1

(5) *Abhidharmakośabhāṣya*, Pradhan ed., p. 240.15-16.

1 CD1 om. 2 G1N1P1 kyi. 3 N1 'phrogs for 'phrog pa. 4 P2 gyi. 5 D2 gyur gyur.
 6 N2 brjed. 7 N2 par. 8 CD1 om. 9 G1 om. 10 D2 pos for po pa. 11 G1N1P1 sems can.
 12 D2 pas. 13 G1 mi mi. 14 G2N rjesu. 15 D2G1N1P pa'i. 16 G2 //. 17 G1N1P1 yis.
 18 G2N1 gshed. 19 G1N1P1 /, P2 om. 20 N1 om. 21 G2N2P2 om. 22 G1 yod yod.
 23 G2N2 kyi /, P2 kyi //. 24 GNP bzhas. 25 CD2GNP /. 26 D2 sta'o. 27 P2 om.
 28 G1 /. 29 G2 las. 30 D2G2N2P2 ni /, G1 om. 31 G1P1 //.

su¹ bskyab pa'i phyir srog gcod pa'o // zhe sdang las byung ba ni² rtsod³ pa dang⁴ khon⁵ gyis byas pa'o // gti mug las byung ba ni⁶ mchod sbyin byed pa dang / rgyal po'i⁷ chos 'don pa tshad mar byas nas (G2. 46a) chos kyi blos gsod pa dang / mi mi bgrungs⁸ pa dag la chad pas bcad⁹ na¹⁰ rgyal po'i¹¹ bsod nams kyi snod du 'ong zhes zer nas gsod pa lta (P1. 361a) bu dang / sen dha pa¹² dag 'di skad du /

pha dang ma rgas sam¹³ nad tshabs po ches¹⁴ thebs na gsod¹⁵ do // sbrul dang¹⁶ sdig pa dang¹⁷ sbrang bu tre¹⁸ ma bu ka la sogs pa ni¹⁹ mi rnams (P2. 44a) la gnod par²⁰ byed pas gsod²¹ do // ri dags²² dang /²³ phyugs dang /²⁴ bya dang²⁵ ma he la sogs pa ni²⁶ longs²⁷ spyod pa'i phyir²⁸ gsod²⁹ do⁽⁶⁾

zhes zer ba lta bu'o //

ma byin par len pa chags pa las byung ba ni /³⁰ gang zhig gang don du gnyer ba des (N2. 37a) 'phrog³¹ pa 'am /³² gzhan gyi rnyed pa 'am³³ /³⁴ bkur sti³⁵ 'am / grags pa'i phyir ram³⁶ /³⁷ bdag dang mdza' bo yongs su bskyab pa'i phyir 'phrog pa'o //

zhe sdang las (G1. 502b) skeyes pa ni³⁸ sngar bzhin no //

gti mug las byung ba ni³⁹ rgyal po'i chos 'don pa tshad mar byas nas mi bgrungs⁴⁰ pa dag chad pas bcad⁴¹ nas 'phrog pa lta bu dang / bram (D. 310b) ze dag na re⁴²

'di thams cad tshangs pas bram ze rnams la byin pa yin pa las / da ltar⁴³ bram ze rnams nyams pas rigs gzhan spyod du zad mod /⁴⁴ de bas⁴⁵ bram (N1. 357b) ze 'phrog pa na⁴⁶ /⁴⁷ rku ba ma yin gyi⁴⁸ bram ze bdag nyid kyi⁴⁹ len par byed par zad pas bdag nyid kyi⁵⁰ za ba dang / bdag nyid kyi⁵¹ 'thungs pa⁵² dang /⁵³ bdag nyid kyi⁵⁴ gyon pa dang /⁵⁵ bdag nyid kyi⁵⁶ sbyin pa yin no^{57. (7)}

zhes zer ba lta bu'o //

(6) *Abhidharmakośabhāṣya*, Pradhan ed., pp. 240.19-241.1.

(7) *Abhidharmakośabhāṣya*, Pradhan ed., p. 241.2-6.

1 GN1 yongsu. 2 D2 ni /. 3 G2N2P2 gsod. 4 G1N1P1 dang /. 5 GNP 'khon. 6 D2 ni /.
7 G1N1P1 rgyal po chen po'i. 8 G1N1P1 'grungs. 9 G1N1P1 gcad. 10 G2N2P2 nas.
11 P1 lo'i. 12 G2N2P2 par sig pa. 13 G2P2 sam /. 14 D2 chen pos. 15 D2 gsad, G2N2P2 bsad.
16 D2G2P2 dang /. 17 D2 dang /. 18 G2 trai. 19 G2N2P2 ni /. 20 CDG1N1P1 pa.
21 D2G1N1P1 gsad, G2N2P2 bsad. 22 D2 dwags. 23 D2GNP om. 24 D2GNP om.
25 C ni /. 26 D2 om. 27 P1 long. 28 G2N2P2 phyir /. 29 D2G1N1P1 gsad, G2P2 bsad.
30 G2N2P2 om. 31 G2P2 'phrogs. 32 G1N1P1 om. 33 G2N2P2 pa'o. 34 GNP //.
35 P1 bsti. 36 N1 ram. 37 G2P2 om. 38 D2 ni /. 39 D2 ni /. 40 G1N1P1 'grungs.
41 N1P1 gcod. 42 C re /. 43 D2 lta. 44 G2P // . 45 G2N2P2 bas na. 46 D2G2N2P2 ni.
47 D2G2N2P2 om. 48 N2P2 gyi /, G2 gyi // . 49 D2G1N1P1 kyis. 50 G1NP kyis.
51 D2GNP kyis. 52 D2G2N2P2 'thung ba. 53 P1 // . 54 D2G2NP kyis. 55 D1 om.
56 D2GNP kyis. 57 D2GN2P2 no // .

de la¹ 'dod pas log par² g-yem pa³ 'dod chags las byung ba ni⁴ gzhan gyi chung ma la
chags (C. 318a) pa 'am / rnyed⁵ pa 'am / bkur sti'i phyir ram / bdag gam mdza' bo yongs su⁶
bskyab pa'i phyir mi tshangs par spyod pa'o // zhe sdang las byung ba ni snga ma bzhin no //
(G2. 46b) gti mug las byung ba ni⁷ par sig⁸ pa dag na re /⁹

ma la sogs pa la nyal ba dang / ba lang¹⁰ 'brang¹¹ gi mchod sbyin la cho ga can¹²
gyi¹³ chu¹⁴ 'thung ngo // rtswa gcod¹⁵ do // ma'i gan du nyal po la 'gro ba'o¹⁶ // srin¹⁷
(D2. 35b) mo'i gan¹⁸ du dang / rus gcig pa'i gan¹⁹ du 'gro bar bya'o^{20, (8)}

zhes bya ba dang /

ba (P1. 361b) lang la sogs pa la yang spyad par bya'o⁽⁹⁾

zhes zer ba lta bu'o // de lta bas na 'di lta bu byung ba na²¹ ni /

rgyal po bzhad gad²² lta bu byed pa (P2. 44b) dang //

bag ma len pa'i (G1. 503a) tshe dang gsod²³ pa dang //

nor kun²⁴ 'phrog tshe brdzun²⁵ ²⁶⁻smras gnod med de //²⁶

brdzun²⁷ lnga ltung bar byed pa min zhes bshad //^{28, (10)}

ces zer ba dang / gang yang log par lta ba'i brdzun²⁹ du smra ba'o // mi dge ba lhag ma dag
kyang snga ma bzhin no //

yid kyi gsum ni 'dod chags la sogs pa gsum gyi mjug³⁰ tu skyes pa'o //

srog gcod pa ni bsams³¹ bzhin du //

ma nor bar ni gzhan gsad³² na'o //

ma byin len pa gzhan gyi nor //

mthu dang 'jab bus bdag gir byed //

log g-yem bgrod min pa (N2. 37b) la 'gro³³ //³⁴

'du shes gzhan bsgyur³⁵ brdzun³⁶ tshig don //

(8) *Abhidharmakośabhāṣya*, Pradhan ed., p. 241.

(9) *Abhidharmakośabhāṣya*, Pradhan ed., p. 241.

(10) *Abhidharmakośabhāṣya*, Pradhan ed., p.241.

1 G2N2P2 las. 2 N1 pa. 3 D2 pa la. 4 D2G2N2P2 ni /. 5 D1P1 rnyad. 6 GN yongsu.
7 CD2 ni /. 8 G1N1P1 sigs. 9 CDG1N1P1 om. 10 D2 glang. 11 CDG1N1P1 phreng.
12 P1 cad. 13 D2 gyis. 14 G2 chung. 15 D2 bcad. 16 D2G2N2P2 'gro'o. 17 N2P2 srin.
18 D2 gam. 19 D2 gam. 20 D2 bya'o //. 21 D2 yin na. 22 G1 gzhad gang.
23 G1 bsod nams, G2 gsad, P2 sos. 24 D2 rkun. 25 G1N1P1 rdzun. 26 G1 om.
27 G1N1P1 rdzun. 28 G1N1P1 om. 29 G1N1P1 rdzun. 30 D2G1N1P1 'jug. 31 P1 bsam.
32 D2 gsod, G2N2P2 bsad, G1 gsad //. 33 N1 bgrod. 34 C /. 35 D2 sgyur.
36 G1N1P1 rdzun.

nyon mongs sems kyis¹ pha rol 'byed² //
 tshig rtsub po ni mi snyan pa'o //
 ngag 'khyal glu dang zlos gar dang //³
 bstan bcos ngan dang 'du 'dzi'i gtam //
 brnab sems gzhan gyi nor la chags //
 gnod sems sems can⁴ la sdang ba'o //
 rgyu 'bras med zer log lta'o //⁽¹¹⁾

de ltar theg pa (N1. 358a) chen po'i 'di ltar yin te / de yang rNam par snang mdzad mngon
 par byang chub (D. 311a) pa'i rgyud las /⁵

bcom ldan 'das kyis bka' stsal pa / byang chub sems dpa' ched du bsams⁶ nas srog
 gcod pa las slar ldog par bya'o // dbyung ba⁷ spang zhing⁸ khon du 'dzin pa yang⁹
 spang bar bya'o // des bdag nyid la (G2. 47a) ji lta ba de bzhin du gzhan gyi srog kyang
 yongs su¹⁰ bsrung bar bya'o //¹¹

(C. 318b) ma byin par len pa las slar ldog par bya ste / des gzhan gyis¹² yongs
 (G1. 503b) su¹³ bzung ba'i longspyod la chags pa bskyed par yang mi bya na /¹⁴
 gzhan gyis yongs su¹⁵ bzung ba'i longspyod la ma byin par len pa lta ci smos //¹⁶

'dod pas log par g-yem pa las ldog par bya ste /¹⁷ des gzhan gyis¹⁸ yongs su¹⁹ bzung
 ba'i chung ma dang / rigs dang /²⁰ mtshan ma dang / (P1. 362a) chos kyis²¹ bsrungs pa
 rnams la chags pa bskyed²² par (P2. 45a) yang mi bya na / yan lag²³ ma yin par²⁴ spyod
 pa dang / dbang po gnyis sprod pa lta ci smos //²⁵

brdzun²⁶ du smra ba las ldog par bya ste / des ched du bsams²⁷ nas gang
 (D2. 36a) gis sangs rgyas kyis byang chub slu²⁸ bar 'gyur ba'i brdzun²⁹ gyi³⁰ tshig srog
 gi phyir yang smra bar mi bya'o //

(11) *Abhidharmakośakārikā* 4.73, 74, 76-78.

1 N1P1 kyis. 2 G1P1 byed. 3 G1 /. 4 G1 semñ for sems can. 5 N2 //, D1G1N1P1 om.
 6 G2N2P2 bsam. 7 P1 dbyur pa, D2N2G2P2 dbyug pa. 8 D2 spangs shing. 9 D2 om.
 10 G2N yongsu. 11 C byas /. 12 G2N2P2 gyi. 13 N2 yongsu. 14 D2 om.
 15 GN2 yongsu. 16 CDN2 /. 17 G1N1 //. 18 G2N2P2 gyi sems. 19 N yongsu.
 20 D2 om. 21 G1N1P1 kyis. 22 G1N1P1 skyes. 23 N2 lags. 24 G1N1P1 pa.
 25 CDG2P2 /. 26 G1N1P1 rdzun. 27 G2P2 bsam. 28 G2N2P2 bslu. 29 G1N1P1 rdzun.
 30 P1 gyis.

tshig rtsub po las ldog par bya ste /¹ des² sems can rnam la mnyen pa dang / 'jam pa dang /³ yid la 'bab pa de lta bu'i tshig smra bar bya'o // de ci'i phyir zhe na / gsang ba'i bdag po byang chub sems dpa' sems can thams cad kyi⁴ don bya ba'i thog mar 'gro ba ni tshig snyan pa yin pa'i phyir ro //

phra ma las ldog par bya ste / de⁵ ci nas kyang dbyen du mi⁶ 'gyur ba'i tshig de⁷ dang / gnod par mi 'gyur ba'i tshig de ltar bsgrub par bya'i⁸ byang chub sems dpa' rnam ni sems can⁹ dbye ba la zhugs¹⁰ pa ma yin no¹¹ //

(N2. 38a) tshig 'khyal pa¹² las ldog par¹³ bya ste / des yul dang¹⁴ dus dang¹⁵ don dang ldan pa'i rjes su¹⁶ 'jug pas sems can thams cad la yid du (N1. 358b) 'ong ba dang¹⁷ ran par (G1. 505a) spyod pa'i tshig smra bar bya'o // de ci'i phyir zhe na / byang chub sems dpa' ni tshig bzang po dang ldan pa'i phyir ro¹⁸ //

(G2. 47b) brnab sems las ldog par bya ste / des gzhan gyi¹⁹ longs spyod dang²⁰ gzhan gyi^{19,21} nor la chags pa'i sems kyang²² bskyed par mi bya'o // de ci'i phyir zhe na / byang chub sems dpa' ni sems²³ ma chags pa²³ yin no²⁴ // gal te byang chub sems dpa' bdag²⁵ sems chags na²⁶ thams cad mkhyen pa nyid kyi sgo'i phyogs (D. 311b) gcig las nyams par 'gyur ro²⁷ // gsang ba pa'i²⁸ bdag po byang chub sems dpa'i²⁹ rab tu dga' ba bskyed pa des 'di (C. 319a) ltar bsam par bya ste / gang dag³⁰ gis bya dgos pa de dang des rang 'byor bar³¹ gyur³² pa de legs so³³ (P1. 362b) snyam³⁴ nas³⁵ sems can de dag gi³⁶ (P2. 45b) longs spyod de dag chud mi za ba la yang dang³⁷ yang du dga' ba bskyed par bya'o //

gsang ba'i bdag po gzhan yang gnod sems las ldog par bya ste / des thams cad du³⁸ bzod pa dang ldan pa dang / byams pa dang /³⁹ khong khro ba med cing sems snyoms par bya'o // des mdza' bo la ji lta ba bzhin du dgra la yang de bzhin du bya'o⁴⁰ // de ci'i phyir zhe na / byang chub sems dpa' ni yid gyi⁴¹ gnas ngan len dang ldan pa ma yin gyi /⁴² byang chub sems dpa'⁴³ ni rang bzhin⁴⁴ gyis⁴⁵ bsam pa yongs su⁴⁶ dag pa yin no⁴⁷ // gsang ba'i (D2. 36b) bdag po de lta bas na byang chub sems dpa' gnod sems (G1. 505b) dang bral bar bya'o //

1 CD1P1 om. 2 D2 om. 3 D2 om. 4 D2 gyi, P1 kyis. 5 G2N2P2 des. 6 G1N1P1 om.
7 D2GNP om. 8 N1P bya'i //, GN2 bya'i /, D2 bya'o // . 9 G1P1 can gyi. 10 G1N1P1 bzhugs.
11 G2 yino. 12 P2 'chal ba. 13 N2P2 pa. 14 D2 dang /. 15 D2 dang /. 16 G2N1N2 rjesu.
17 P2 dang /. 18 N2 phyiro. 19 G1 om. 20 D2G2NP dang /. 21 P1 gyis. 22 G2N2P2 can.
23 G2 repeats. 24 N2 yino. 25 D2 bdag gi. 26 D2 na /. 27 N1 'gyuro.
28 D2G2N2P2 ba'i for ba pa'i. 29 N1 dpa'i sa. 30 GNP bdag. 31 D2G1 par. 32 D2 'gyur.
33 N1 legso. 34 D1 snyom. 35 G2N2P2 nas /. 36 G1N1P1 gis. 37 N1 dag. 38 G2N2P2 la.
39 P2 //. 40 CD1 du'o. 41 CD2G2N2P2 kyi. 42 D1G1N1P1 om. 43 P1 dpa'i. 44 P1 bzhin.
45 G2N2P2 gyi. 46 G2 yongsu. 47 G1 yino.

gsang ba'i bdag po gzhan yang byang chub sems dpa' log par lta¹ ba las ldog par bya ste / des yang² dag pa'i lta ba dang / 'jig rten pha rol la 'jigs³ par lta da dang / g-yo med pa dang / gya gyu med pa dang / drang ba⁴ dang / sangs rgyas dang⁵ chos dang⁶ dge 'dun dag la bsam pa nges par bya'o // de ci'i phyir zhe na / gsang ba'i⁷ bdag po log par lta ba ni⁸ byang chub sems dpa'i (N2. 38b) kha na (G2. 48a) ma tho ba chen po ste / dge ba'i rtsa ba thams cad⁹ gcod par 'gyur ro¹⁰ // 'di ni mi dge ba'i rtsa ba thams cad (N1. 359a) kyī phyi mo'o // gsang ba'i bdag po de lta bas na¹¹ tha na bzhad gad tsam du yang log par lta ba skyed¹² par mi byed pa'o^{13, (12)}

zhes gsungs so //

yul dang bsam pa nyon mongs dang //
 dus dang grangs dang yan lag sogs //
 chung dang 'bring dang chen po ste //
 rnam pa gsum du shes par bya //

las kyī lam bcu po de dag kyang yul la sogs pa de dag gi¹⁴ dbang gis chung ngu dang¹⁵ 'bring po¹⁶ dang¹⁷ chen por 'gyur ro //

de la yul gyis 'gyur ba ni¹⁸ sngar ji skad brjod pa'i tshul de las shes par bya'o //

de la bsam pas gsum du 'gyur ba ni /¹⁹ (C. 319b) mi (P1. 363a) shes pas byas pa ni chung ngu'o // bag med pas byas (P2. 46a) pa ni 'bring po'o²⁰ // ma gus pas byas pa ni chen po'o //

de la nyon mongs pas gsum du 'gyur (G1. 504a) ba ni²¹ 'dod chags la sogs pa'i nyon mongs pa chung ngu dang²² 'bring²³ dang²⁴ chen pos srog gcod pa la sogs²⁵ pa'i²⁶ las kyang de bzhin (D. 312a) du byed pa'o //

de la dus kyis²⁷ 'gyur ba ni /²⁸ sbyor ba dang / dngos gzhi dang / mjug rnam las²⁹ gcig dang ldan pa ni chung ba'o³⁰ // gnyis dang ldan pa ni 'bring po'o // de dag gsum ga³¹ rdzogs pa ni chen po'o //

(12) *Mahāvairocanaḥśambodhivikurvatyadhīṣṭhānavaipulyasūtra*. Tib. P. No. 126, Tha 183b5-185a4.

1 P1 blta. 2 G1 yang. 3 G2N2P2 'jig. 4 C drad pa. 5 CG2N2P2 dang /. 6 CG2N2P2 dang /.
 7 G1N1P1 ba'i for ba pa'i. 8 C ni /. 9 G2 thamd. 10 G2N2 'gyuro. 11 D2 na /.
 12 D2GNP bskyed. 13 D2 D2G2N2 pa'o //, D2 bya'o for byed pa'o. 14 G1N1P1 gis.
 15 G2N2P2 dang /. 16 D2 om. 17 G2N2P2 dang /. 18 D2G1N1P1 ni /.
 19 D1 //, G2N2P2 om. 20 G2P2 ngo. 21 CD2G1N1P1 ni /. 22 CG2N2P2 ngu /.
 23 D2 'bring po. 24 C dang /. 25 N2 sod. 26 D2 pa. 27 G1N1P1 kyī. 28 DG2N2P2 om.
 29 G1 las /, N1 las //. 30 D2 ngu'o. 31 D2G2N2P2 ka.

de la¹ las kyi lam bcu po de dag grangs kyi² 'gyur ba ni /³ lan gcig⁴ byas⁵ pa⁶ ni⁷ chung ba'o⁸ // lan gnyis byas pa ni 'bring po'o // lan gsum phan chad byas pa ni chen po'o //

de la yan lag gi⁹ 'gyur ba ni¹⁰ srog gcod pa la sogs pa de dag gi yan lag phal cher ma tshang ba ni chung ba'o // phal cher tshang ba ni 'bring po'o // thams cad rdzogs shing tshang ba ni chen (G2. 48b) po'o //

sogs zhes¹¹ bya ba ni srog gcod pa la sogs pa¹² de dag las gang yang rung ba lan cig byas pa (D2. 37a) tsam ni chung ba'o // de la 'gyod pa med pa ni 'bring po'o // de la gnyen po bsten¹³ pa ni chen po'o // bsdam par bya ba ni chung ngu'o // bshags par bya ba ni 'bring po'o // pham pa ni chen po'o // rtsed mo dang¹⁴ gzhan gyi g-yam¹⁵ la rgyugs kyi byas (N1. 359b) (N2. 39a) pa ni chung ngu'o // rang nyid la nyon mongs pa dang nyes pa med (G1. 504b) kyang dpya¹⁶ zhing gzhan gyi sdig pa byed pa'i rkyen byed¹⁷ pa ni 'bring po'o // rang nyid la nyes pa yod cing gzhan gyis spyad¹⁸ pa ni chen po'o // gzhan yang sdig pa'i grogs po dang¹⁹ mi dge ba'i bshes gnyen gyi dbang gis rang dbang med par byas pa ni chung ngo²⁰ // grags pa²¹ snyan pa'i phyir byas pa ni 'bring po'o // rnam par smin pa la mi 'jigs pa ni chen po'o //

gzhan yang (P1. 363b) las kyi lam bcu po 'di dag gi don rgyas pa²² ni²³ 'Phags pa *Dran pa nye bar gzhag pa* la (P2. 46b) sogs pa'i mdo sde dang / slob dpon bram ze Chos ldan rab 'byor dbyangs kyi mdzad pa dang / (C. 320a) 'phags pa²⁴ Thogs med kyi mdzad pa'i rnam par gtan la dbab pa bsdu ba la sogs pa'i²⁵ *Yo*²⁶ *ga tsā*²⁷ *rya'i sa chen por* blta'o //

gzhan yang /

bsam²⁸ bzhin pa dang rdzogs pa dang //²⁹

mi 'gyod gnyen po med pa dang //³⁰

'khor dang rnam par³¹ smin pa las //

bsags pa'i las zhes bya ba yin //^{32, (12)}

(12) *Abhidharmakośakārikā* 4.120.

1 G1 om. 2 G1N1P1 kyi. 3 D1G2N2P2 om. 4 GN1P cig. 5 G1 phyir. 6 N2 pa'i.
7 CD1 'di. 8 D2 ngu'o. 9 CD1G1N1P1 gi. 10 CD2G1N1P1 ni /. 11 D2 rdzogs shes for sogs zhes.
12 G1N1P1 om. 13 D2GNPP mi bsten. 14 G2N2P2 dang /. 15 P1 g-yem. 16 G2P2 gzhan dpya.
17 G1N1P1 om. 18 D2G2N2P2 dpyas. 19 D2 dang /. 20 D2GN2P ba'o. 21 G2 dang /.
22 D2 par. 23 CG2P2 ni /, N2 ni //. 24 D1 om. 25 D2 pa, G2P2 pa /. 26 G2P2 g-yo.
27 D2G1N1P1 tsa. 28 D bsams. 29 G1P2 /. 30 P2 /. 31 G1 om. 32 G1 /, G2N2P2 om.

yang¹ /²

'khor ba'i³ las ni lci gang dang //
nye ba gang dang goms pa gang //
sngon byas⁴ de dag gang yin⁴ las //
snga ma snga ma rnam smin 'gyur //⁵

yang⁶ /

shin tu yid la gcags pa dang //
las de gsar du byas pa dang //
yang dang yang du byas pas⁷ (G. 49a) goms //
de las gang rung sngar myong 'gyur //
mthong ba'i chos la⁸ (D. 312b) myong 'gyur dang⁹ //
(G1. 506a) skyes nas myong bar 'gyur ba dang //
lan grangs gzhan du¹⁰ myong¹¹ 'gyur¹² dang //¹³
myong bar 'gyur bar ma nges pa'o //
las ni dkar dang gnag¹⁴ pa dang //
'dres¹⁵ ma'i las dang rnam pa gsum //
mdo dang bstan bcos dag na gsal //

de bas na /¹⁶

las rnams bskal pa brgyar yang ni //
chud mi¹⁷ za ba¹⁸ nges bsags nas //
smin nas lus can rnams la ni //
'bras bu nyid du ston par byed //¹⁹

ces bya ste /²⁰ de lta bu la yang nges par yid ches par bya'o //

'gro ba²¹ rgyud lnga'i²² sems can thams (D2. 37b) cad dag //
'dzam gling 'dir skyes dge ba bcu spyad de //
mthar gyis bla ma bzang po bsten²³ byas nas²⁴ //
zag pa med pa'i tshul khriims thob gyur cig //

1 D2 *gzhan yang*. 2 G2P2 //, D1 om. 3 D2 *ba*, G2 *bar*. 4 D2 *gang yin de dag*. 5 N1 om. 6 D2 *gzhan yang*. 7 GP2 *pa*. 8 CD1N1P1 *las*. 9 G2 *bar 'gyur*. 10 D2 *la*. 11 G1 *myong bar*. 12 G2 *'gyur ba*. 13 G1 /. 14 G2 *gnags*. 15 G2N2P2 *'dren*. 16 G2N2 P2 om. 17 G1 *ma*. 18 D2 *bar*. 19 G1 /. 20 CD1 om. 21 D2G2N2P2 om. 22 D2G2N2P2 *lnga yi*. 23 D2 *bsten*. 24 G2N2P2 *te*.

Las (N1. 360a) *rnam par 'byed pa zhes bya ba* /¹ *slob dpon mkhas* (N2. 39b) *pa chen po dpal Mar me mdzad* (P1. 364a) *ye shes kyis*² *mdzad pa rdzogs so* // //

*rgya gar gyi mkhan po de nyid dang / zhu*³ *chen gyi lo tsā ba dge slong Tshul khriims rgyal bas bsgyur cing zhus te gtan la phab pa'o*⁴ // //

1 G2 // 2 P1 *kyi*. 3 G2P2 *zhus*. 4 CD1G1N1P1 *pa*.

20 *Caryāsamgrahapradīpa*

#¹ // rgya gar skad du /² *Tsā*³ rya sam⁴ gra ha⁵ pra dī pa⁶ /

bod skad du /⁷ *sPyod pa bsdus pa'i sgon ma* /⁸

'jig rten dbang phyug la phyag 'tshal lo⁹ //

gang gi¹⁰ gsung gi 'od zer gyis¹¹ //

bdag sogs rmongs pa ma lus pa'i //

snying gi padma kha 'byed (C. 320b) pa'i //

dam pa'i skyes mchog de la 'dud //

gsang sngags pha rol phyin pa la // 5

brten nas byang (G2. 6b) chub bsgrub¹² po zhes //

bla ma sangs rgyas gsungs pas¹³ na //

de don bdag gis bri bar bya //

gsang sngags 'di ru brjod mi bya //

pha rol phyin lugs spyod pa yi¹⁴ // 10

byang chub sems dpa'i spyod pa dag //

mdo tsam bdag gis bshad par bya //

sems bskyed¹⁵ sngon du song ba yis //

byang chub sems dpa'i sdom pa blang //

mdo sde ma lus kun blta zhing // 15

bstan bcos mtha' (P2. 6a) dag mnyan par bya //

lus dang ngag dang yid gsum gyis //

ji skad bshad pa'i sdom¹⁶ pa rnams //

ma nyams gtsang mar bsrung¹⁷ byas la //

tshul khrims rnam par dag par bya // 20

1 D2 om., G1N1P1 # // *spyod pa bsdus pai sgron ma bzhugs* (P2: so) // (G1.507b) # //

2 P2 // 3 D2G1N1P1 *tsa* 4 G1N1P1 *sang*. 5 G1N1P1 *hā*. 6 D2G2P2 *paṃ*.

7 P2 // 8 P2 // 9 G1 'tshalo. 10 N2P1 *gis*. 11 P2 *gyi*. 12 G1N1P1 *sgrub*.

13 D2G2N2P2 *gsung bas*. 14 G1N1P1 *yin*. 15 G2N2P2 *skyed*. 16 P2 *stom*.

17 D2GNP2 *bsrungs*, P1 *srungs*.

zas (D2. 5a) kyi tshod kyang rig par bya //
 dbang po rnams kyi¹ sgo yang bsdams² //
 nam gyi cha stod cha smad la //
 mi nyal rnal 'byor brtson par bya //
 kha na ma tho phra rab la 'ang // 25
 shin³ tu 'jigs pa bskyed par bya //
 mtshan mo (G1. 508a) cha gsum bgo bya ste //
 tha ma'i cha la ldang bar bya //
 gdong la sogs pa bkru⁴ ba 'am //
 yang na ma bkru⁵ pa⁵ yang rung //⁶ 30
 bde ba'i stan⁷ la 'dug nas ni //
 (P1. 364b) chos rnams chos nyid dran par bya //
 mtshan mas g-yengs pas⁸ ma nus na //
 langs (D1. 313a) la dngos po⁹ snang ba kun //
 sgyu ma lta bur nye bar brtag //¹⁰ 35
 bar skabs der yang dge (N1. 360b) sbyor yang¹¹ //
 yan lag bdun pa rdzogs par bya //
 (N2. 6b) smon lam shin tu rgya chen gdab¹² //¹³
 yang na sngar gyi sgom la¹⁴ bsgom //
 de nas zas kyi dus dag tu // 40
 snying po med pa'i lus 'di yis¹⁵ //
 snying po dam pa btsal bya zhes //
 lus la gru yi blo gzhag¹⁶ la //
 rgyags pa skyed¹⁷ phyir mi bza' zhing //
 ro la chags pas mi bza 'o¹⁸ // 45
 zas la cha bzhir bgo bya ste¹⁹ //
 dang po lha la bshos gtsang dbul //

1 G2N2P2 *kyis*. 2 D2G2N2P2 *bsdams*. 3 P2 *bzhin*. 4 G1 *bkru*. 5 D2 *par*.
 6 G1 /. 7 G *bstan*. 8 D2G2N2P2 *sam*. 9 D2 *por*. 10 G2 /. 11 D2G2N2P2 *ni*.
 12 G1 *gdab pa*. 13 N1 *om*. 14 D2G2N2P2 *pa*. 15 D2 *las*. 16 D2GNP *bzhag*.
 17 D2G2N2P2 *bskyed*. 18 P2 *ba za'o*. 19 D2 *byas te*.

de rjes (G2. 7a) chos kyi srung ma la //
 gtor ma shin¹ tu rgya chen btang² //
 rang gis zos shing 'thungs pa yi³ // 50
 lhag ma 'byung po kun la sbyin //
 bar skabs der yang sgrung rgyud⁴ dang //
 ngo mtshar can gyi gtam yang bya //⁵
 de nas langs la cung zhig bcag //
 yang na rten la (C. 321a) bskor ba bya // 55
 bzlas brjod glegs bam bklag⁶ pa 'am //
 yang na bde gshegs gzugs brnyan bya //
 ji srid⁷ rdul⁸ ni ma byung bar⁹ //
 de srid⁷ (G1. 508b) bskor¹⁰ ba ma yengs¹¹ par //
 byas la smon lam rgya chen gdab // 60
 (P2. 6b) mdor na mgon po Byams pa yis //
 bshad pa'i chos spyod bcu po rnam //
 yid ni rab tu ma yengs shing //
 sgyu ma lta bur dran pas spyad //
 gal te yod na dge 'dun mchod // 65
 yang na byis pa'i ston mo bya //
 mgon med dag la sbyin pa ni //
 rnal 'byor bsod nams tshogs su¹² 'gyur //
 nyin¹³ mo'i bya ba rdzogs pa dang //
 mtshan mo'i cha ni dang po ru // 70
 chos nyid spros pa dang bral ba¹⁴ //
 shes pa 'ang (P1. 365a) spros dang bral bar gzhag¹⁵ //
 mtshan mo'i gung la bab pa na //
 ldang dang snang ba'i 'du shes kyis¹⁶ //
 seng ge ji ltar nyal ba ltar // 75
 dge ba'i gnyid ni log par bya //

1 G1 yin. 2 D2G2 *gtong*, P2 *gtang*. 3 G1N1P1 *yis*. 4 G1N1 P1 *brgyud*. 5 N2 om. 6 N2P2 *klag*.
 7 G1 repeats. 8 P2 *rtul*. 9 G2N2P2 *ba*. 10 GNP *skor*. 11 G2 *g-yengs*. 12 G2N2 *tshogsu*.
 13 G2 *nyi*. 14 D2 *la*. 15 D2GNP *bzhag*. 16 G2N2P2 *kyi*.

spyir (D2. 5b) na¹ mnyam gzhag² sems brtan na //
 lus ngag dge ba gtsor mi bya //
 yang na mnyam gzhag mi gsal na //
 'jig rten mthun 'jug bya ba'i phyir // 80
 lus ngag dge ba ci nus bya //
 'jig rten sems dang ma mthun na //
 'di ni bdag gi³ chos min zhes //
 bsam pa bzang po sngon btang la //
 'jig (G1. 509a) rten yul chos dri bar bya // 85
 ne pa la yi yul du ni //
 rang gi⁴ (N1. 361a) grogs pos bskul nas byas //
 gsang sngags lugs la mi mos na //
 'di ltar mdzod cig stha⁵ bi⁶ ra //

sPyod pa bsdus pa'i sgron ma slob dpon mkhas pa chen po dpal Mar me mdzad ye shes
kyis⁷ mdzad pa (G2. 7b) rdzogs so // //

rgya gar gyi mkhan po paṅḍi ta Dī paṃ ka ra shrī dznyā (N2. 7a) na de nyid
 dang / lo tsā ba dge slong Tshul khriṃs rgyal bas bsgyur cing zhus pa'o //⁸

1 D2 ni. 2 G1 bzhaḡ. 3 G2N2P2 gis. 4 G1N1P1 gis. 5 D2G2 sthā.
 6 C ba ri, G1 pa'i, N1P1 ba'i. 7 G1 kyi. 8 N1 // bkris //, G2 // // .

21 *Cittotpādasamvaravidhikrama*

#¹ // rgya gar skad du / *Citta utpā da*² *samba*³ *ra bi dhi kra ma* /
bod skad du / *Sems bskyed pa dang*⁴ *sdom pa'i cho ga'i rim pa* /
'jam dpal gzhon nur gyur pa la phyag 'tshal lo⁵ //

ngan song thams cad 'jig⁶ pa dang //⁷
sgrib pa thams cad las grol zhing //⁸
rdzogs (G2. 54b) sangs go 'phang⁹ stsol mdzad pa //
byang chub sems la phyag 'tshal lo¹⁰ //
rdzogs sangs rgyas dang dam pa'i chos //
byang chub sems dpa'i tshogs la yang //
de¹¹ bzhin byang (G1. 374a) chub sems dpa' yi //
sdom pa'i rim pa bri bar bya //

de la dang por¹² sangs (N2. 42b) rgyas dang byang chub sems dpa' thams cad la phyag
'tshal ba dang / mchod pa'i cho ga la sogs pa sngon du song bas /¹³ dge ba'i bshes gnyen la
ston pa'i 'du shes bskyed nas /¹⁴ 'di skad ces gsol ba gdab par bya ste / ji ltar

sngon gyi de bzhin gshegs pa dgra bcom pa yang dag par rdzogs pa'i sangs rgyas
rnams¹⁵ (D2. 40b) dang / byang chub sems dpa' sa chen po la bzhugs¹⁶ pa rnams kyis¹⁷
dang por bla na med pa yang dag par rdzogs pa'i byang chub tu thugs bskyed¹⁸ pa de
bzhin du bdag ming 'di zhes bgyi ba yang¹⁹ slob dpon gyis²⁰ bla na med pa yang dag
par rdzogs pa'i byang chub tu sems bskyed du gsol zhes

lan gsum gyi bar du brjod do²¹ //

de ltar gsol ba btab²² nas²³ dkon mchog gsum la skyabs su²⁴ 'gro ba ni /
slob dpon dgongs su²⁵ gsol / bdag ming 'di zhes bgyi bas²⁶ dus 'di nas bzung²⁷ nas /
ji srid byang chub²⁸ snying po la mchis kyi bar du /²⁹ (C. 256b) rkang gnyis rnams kyi
mchog³⁰ sangs rgyas bcom ldan 'das rnams³¹ la skyabs su³² mchi'o //

1 GN om., P # // *sems bskyed pa dang sdom pa'i cho ga'i rim pa bzhugs* (P2: so) // #.

2 D2 *udpāda*, G1N1P1 *cittotpa ta*, G2N2 *cittotpā da*, P2 *cittotpā dā*. 3 CN1P1 *samba*.

4 D2 *dang* /. 5 G2N 'tshalo. 6 G2 'jigs. 7 G1 /, P2 om. 8 G1P2 /. 9 G2P2 'phangs.

10 N1 'tshalo. 11 G2P2 ji. 12 CD1 po. 13 P1 //, G2N2P2 om. 14 G2N2P2 om.

15 G2N2P2 om. 16 G2N2P2 zhugs. 17 N1 kyi, D2 kyis /. 18 G1N1P1 skyed.

19 D2N2P2 yang /, G2 yang //. 20 G1N1 gyi. 21 N1 brjodo. 22 G2N2P2 gdab.

23 D2 nas /. 24 G2N skyabsu. 25 G2 dgongsu. 26 D2G2N2P2 ba. 27 G2N2P2 gzung.

28 G2N chub kyi. 29 G2N2P2 om. 30 D2G2P2 mchog /. 31 G2N2P2 om. 32 G2N2 skyabsu.

slob dpon dgongs su¹ gsol /² (D1. 245b) bdag ming 'di zhes bgyi ba dus 'di nas bzung³ nas /⁴ ji srid byang chub⁵ snying po la mchis kyi (P2. 50b) bar du⁶ chos rnams (P1. 284b) kyi mchog⁷ zhi ba 'dod chags dang bral ba'i chos rnams la skyabs su⁸ (N1. 273b) mchi'o // (G1. 374b) slob dpon dgongs su⁹ gsol //¹⁰ bdag ming 'di zhes bgyi ba dus 'di nas bzung nas /¹¹ (G2. 55a) ji srid byang chub¹² snying po la mchis kyi bar du¹³ tshogs rnams kyi mchog¹⁴ 'phags pa byang chub sems dpa' phyr mi ldog pa'i byang chub sems dpa'i dge 'dun rnams la skyabs su¹⁵ mchi'o¹⁶

zhes lan gsum du brjod do //

de ltar skyabs su¹⁷ 'gro ba khyad par can byas nas / bcom ldan 'das shākya thub pa dang¹⁸ phyogs bcu'i sangs rgyas dang byang chub sems dpa' thams cad yid kyis¹⁹ dmigs te / phyag btsal²⁰ ba dang /²¹ ci 'byor pa'i mchod pa la sogs pa²² byas la / slob dpon mdun du byas te²³ /²⁴ pus mo g-yas pa'i lha nga sa la btsugs pa 'am /²⁵ tsog pur²⁶ yang rung bas 'dug ste /²⁷ thal mo sbyar bas²⁸ sems bskyed par bya ste /

phyogs bcu (N2. 43a) rnams na bzhugs pa'i sangs rgyas dang byang chub sems dpa' thams cad²⁹ bdag la dgongs su³⁰ gsol //³¹ slob dpon dgongs su³² gsol //³³ bdag ming 'di zhes bgyi bas³⁴ skye ba 'di dang skye ba gzhan dang³⁵ gzhan dag tu sbyin pa'i rang bzhin dang /³⁶ tshul khirms kyi rang bzhin dang / bsgom³⁷ pa'i rang bzhin³⁸ gyi dge ba'i rtsa ba bdag gis³⁹ bgyis pa dang / bgyid du stsal⁴⁰ ba dang / bgyid pa la rjes su⁴¹ yi (D2. 41a) rang ba'i dge ba'i rtsa ba des / ji ltar sngon gyi de bzhin gshegs pa dgra bcom pa yang dag par rdzogs pa'i sangs rgyas rnams (G1. 375a) dang / sa chen po la rab tu bzhugs⁴² pa'i byang chub sems dpa' chen po rnams kyis /⁴³ bla na med pa yang dag par rdzogs pa'i byang chub tu thugs⁴⁴ bskyed par mdzad pa de bzhin du / bdag ming 'di zhes bgyi bas kyang dus 'di nas bzung⁴⁵ nas⁴⁶ ji srid byang chub kyi⁴⁷ snying po la mchis kyi bar du⁴⁸ bla na med pa yang dag par rdzogs pa'i (P1. 285a) byang (G2. 55b) chub chen po la⁴⁹ (P2. 51a) sems bskyed par bya'o⁵⁰ // sems can ma brgal⁵¹ ba rnams

1 G2N2 dgongsu. 2 P1 //, G2N2P2 om. 3 N2P2 gzung. 4 G2P2 om. 5 G2NP2 chub kyi.
6 D2N1 du /. 7 D2G2N2P2 mchog /. 8 G2N skyabsu. 9 G2 dgongsu. 10 CD2G1N gsol /.
11 GNP om. 12 D2G2NP chub kyi. 13 D2 du /. 14 G2N2P2 mchog /. 15 G2N skyabsu.
16 D2G1N1P1 mchi'o //. 18 G2N2 skyabsu. 18 D2G2N2P2 dang /. 19 N1 kyi. 20 D2 'tshal.
21 N2P2 om. 22 G1N1P1 par. 23 P1 de. 24 CD1G1N1P1 om. 25 CD1G1N1P1 om.
26 P1 por. 27 G2P2 om. 28 G1P1 nas. 29 G2 thad. 30 G2N1 dgongsu. 31 D2G1N1P1 /.
32 G2N1 dgongsu. 33 CDGNP1 /. 34 D2 bas /. 35 G2 dag. 36 P2 //. 37 D2G2N2 bsgoms.
38 N2 om. 39 G2N2P2 om. bdag gis. 40 D2 bstal, GN2P rtsal. 41 N1 rjesu.
42 G2N2P2 zhugs. 43 G2N2P2 om. 44 G2N2P2 mngon par thugs. 45 G1N1P1 gzung.
46 D2 nas /. 47 CD1 om. 48 D2 du /. 49 D2 por for po la. 50 D2 bgyi'o. 51 D2 bsgral, GNP rgal.

bsgral bar bgyi'o // ma grol ba rnams dgrol¹ bar bgyi'o // dbugs ma phyin pa² rnams
dbugs³ dbyung bar bgyi'o // yongs (C. 257a) su⁴ (N1. 274a) mya ngan las ma rdas pa
rnams⁵ yongs (D1. 246a) su⁶ mya ngan las bzla bar bgyi'o⁷

zhes lan gsum du brjod par bya'o //

de ltar slob dpon med kyang⁸ bdag nyid byang chub tu sems bskyed pa'i cho ga ni⁹ /¹⁰ de
bzhin gshegs pa shākya thub pa dang¹¹ phyogs bcu'i de bzhin gshegs pa thams cad yid la
bsams te /¹² phyag 'tshal ba dang / mchod pa'i cho ga la sogs pa byas nas /¹³ gsol ba gdag pa
dang¹⁴ slob dpon zhes pa'i tshig spangs pa'i skyabs su¹⁵ 'gro ba la sogs pa'i go rim¹⁶ gong ma
bzhin du bya'o // de ltar sems bskyed pa'i gang zag gis¹⁷ byang chub kyi sems spel bar bya
ba'i phyr tha na nyin lan gsum mtshan lan gsum du /

sangs rgyas chos dang tshogs kyi mchog rnams la //¹⁸

byang chub bar du bdag ni (G1. 375b) skyabs su¹⁹ mchi //²⁰

bdag gis²¹ sbyin sogs bgyis²² pa 'di (N2. 43b) dag gis //²³

'gro la phan phyr sangs rgyas 'grub par shog //^{24, (1)}

ces byang chub tu sems bskyed par bya'o //

byang chub kyi sems nyams par byed pa'i chos bzhi las ldog par bya ste / bzhi gang zhe
na / bla ma dang mchod par 'os pa slu²⁵ ba dang / gzhan 'gyod pa'i gnas ma yin pa la 'gyod
pa bskyed pa dang / sems bskyed pa'i byang chub sems dpa' la²⁶ zhe sdang gis tshigs su²⁷
bcad pa ma yin pa brjod pa dang / sems can thams cad la g-yo dang sgyus spyod pa'o //

byang chub (G2. 56a) kyi sems mi nyams par byed pa'i chos bzhi la bslab (D2. 41b) par
bya ste / bzhi gang zhe na / srog gi phyr yang bsams bzhin du brdzun mi smra ba dang /
sams can thams cad la²⁸ (P1. 285b) lhag pa'i bsam pa rnam par dag pas gnas par bya'i²⁹ g-yo
dang sgyus ma yin pa dang /³⁰ (P2. 51b) sems bskyed pa'i byang chub sems dpa' la ston pa'i
'du shes bskyed cing phyogs bcur yang dag pa'i yon tan brjod par bya ba dang / sems can

(1) *Cittotpāḍavidhi* of Mañjuśrīmitra ('Jam dpal bshes gnyen), Tib. D. No. 2561, Ngu 24b2-3.

1 D2G2 grol. 2 D2 phyung ba for phyin pa. 3 N2 dbugsu, D2 om. 4 N yongsu. 5 G2N2P2 rnams /.
6 G2N yongsu. 7 D2 bgyi'o //, N1P1 bya'o. 8 G2N2P2 kyang de ltar. 9 G1N1P1 'di. 10 G2N2P2 om.
11 D2G2N2 dang /, P2 dang //. 12 G2N2P2 om. 13 G2N2P2 om. 14 D2G2N2P2 dang /.
15 G2N skyabsu. 16 CD1 rims. 17 G1N1P1 gyi. 18 G1 /. 19 G2N skyabsu. 20 G1 /.
21 G2N2P2 gi. 22 D2 byas. 23 N2 /. 24 G1P1 om. 25 G2N2P2 bslu. 26 D2 la /.
27 G2N tshigsu. 28 CD1G2 om. 29 D2N2P2 bya'i /, G2 bgyi'o //. 30 N1 om.

'ga'zhig dge ba la 'god¹ pa de dag bla na med pa yang dag par rdzogs pa'i byang chub la 'god² kyi³ nyan thos dang⁴ rang sangs (N1. 274b) rgyas la ni ma yin no⁵ //

khyad par du mngon par shes pa myur du thob par 'dod pa'i byang chub sems dpa⁶ 'Phags pa sPyan ras gzigs dbang phyug gis zhus pa'i chos bdun pa zhes bya ba'i⁷ theg pa chen (G1. 376a) po'i mdo la⁸ bslab (D1. 246b) (C. 257b) par⁹ bya'o // byang chub tu sems bskyed pa'i phan yon ni /¹⁰ sDong po bkod pa'i mdo la sogs pa las shes par bya'o //

de la dang por cho ga bzhin du byang chub tu sems bskyed pa'i byang chub sems dpas¹¹ byang chub sems dpa' thams cad kyi tshul khirms kyi bslab pa la legs par slob¹² par 'dod pas /¹³ byang chub sems dpa' byang chub sems dpa'i sdom pa la gnas pa dang / byang chub sems dpa'i sdom pa'i cho ga shes pa dang / byang chub sems dpa'i sdom pa 'bogs pa'i sgo nas slob ma rjes su¹⁴ gzung¹⁵ bar nus pa'i dge ba'i bshes gnyen la phyag byas te¹⁶ / de'i rkang pa la gtugs nas gsol ba gdab (N2. 44a) pa ni /

slob dpon khyod las bdag byang chub sems dpa'i tshul khirms (G2. 56b) kyi sdom pa¹⁷ yang dag par blang ba de len¹⁸ par 'tshal gyis / de la gnod pa ma mchis na¹⁹ bdag la thugs brtse ba'i²⁰ slad du cung zad cig gsan cing stsal ba'i rigs so^{21, (2)}

zhes de ltar lan gsum gyi bar du gsol ba gdab par bya'o //

rigs kyi bu khyod nyon cig / khyod 'di ltar sems can ma brgal²² ba rnam bsgral ba dang / ma grol ba rnam dgrol²³ ba dang / dbugs ma phyung ba rnam dbugs (P1. 286a) dbyung ba dang / yongs su²⁴ mya ngan las ma 'das pa rnam yongs su²⁵ mya ngan las (P2. 52a) bzla ba dang / sangs rgyas kyi gdung rgyun²⁶ mi 'chad²⁷ par 'dod dam / de las²⁸ khyod kyis sems bskyed (G1. 376b) pa brtan²⁹ pa dang³⁰ yi dam brtan³¹ par bya'o // gzhan dang³² 'gran³³ pa'i ched du³⁴ ma (D2. 42a) yin nam / gzhan gyi³⁵ nan gyis³⁶ len³⁷ du bcug pa ma yin nam^{38, (3)}

zhes 'dri'o³⁹ //

(2) *Bodhisattvabhūmi*, Dutt ed., p. 105. Tib. D. No. 4037, Wi 82b1-2.

(3) *Bodhisattvabhūmi*. Tib. D. No. 4037, Wi 82b3-4.

1 P2 D2G2N2 *dgod*. 2 D2G2 *dgod*. 3 D2 *kyi* /. 4 G2N2P2 *dang* /. 5 N1 *yino*.
6 D2 *dpas* /. 7 G2N2P2 *ba*. 8 D2G2N2P2 *las*. 9 D1 *bslang bar*. 10 G2N2P2 *om*.
11 GNP *dpa'*, D2 *dpas* /. 12 D2 *bslab*. 13 G2N2P2 *om*. 14 N *rjesu*. 15 G2N2P2 *bzung*.
16 D2 *bya ste*. 17 G1N1P1 *par*. 18 D1 *lan*. 19 D2 *na* /. 20 G2 *brtse* 'i. 21 G2N *rigso*.
22 D2 *bsgral*, GNP *rgal*. 23 D2 *grol*. 24 G2N1 *yongsu*. 25 G2N *yongsu*. 26 D2 *om*.
27 D2 *gcod*. 28 D2 *la*. 29 G2N2P2 *bstan*. 30 D2G2N2P2 *dang* /. 31 G2 *bstan*.
32 G1N1P1 *yang*. 33 G1N1P1 *'dren*. 34 N1 *chedu*. 35 D2G2N2P2 *gyis*. 36 D1 *lan*.
37 G2 *gyi*. 38 D2 *nam* /. 39 P2 *dri'o*.

de'i 'og tu de bzhin gshegs pa shākya thub pa'i lugs sku 'am¹ ras bris² la sogs pa mdun du bzhugs³ pa dang / de bzhin gshegs pa shākya thub pa la sogs pa phyogs bcu'i 'jig rten gyi⁴ (N1. 275a) khams thams cad na bzhugs pa'i sangs rgyas dang⁵ byang chub sems dpa' thams cad mdun du bsams la⁶ / ci nus pa'i phyi'i mchod pa lngas mchod pa dang phyag byas la / de ma thag tu dge ba'i bshes gnyen stan mthon po la 'dug pa⁸ la ston pa'i 'du shes kyis phyag byas te⁹ / pus mo g-yas pa'i lha nga sa la btsugs pa 'am¹⁰ tsog¹¹ tsog por¹² 'dug ste¹³ thal mo sbyar nas dge ba'i (D1. 247a) bshes gnyen la byang chub sems dpa'i sdom pa nod pas 'di (C. 258a) ltar bskul¹⁴ bar bya ste /

slob dpon gyis byang chub sems dpa'i (G2. 57a) tshul khirms kyis sdom pa yang dag par blangs pa¹⁵ bdag la myur du stsal du gsol^{16, (4)} zhes de ltar lan gsum du dge ba'i bshes gnyen la bskul nas / de nas dge ba'i bshes gnyen¹⁷⁻ 'dug pa 'am langs pa yang¹⁸ rung ste / des^{17, 19} byang chub sems dpa'i sdom pa nod pa de dag²⁰ la 'di skad ces dri bar²¹ bya ste /

ming (N2. 44b) 'di zhes bya ba khyod byang chub sems dpa' yin nam / byang chub tu smon lam btab bam

zhes dris pa na / len pa'i byang chub sems dpa' des kyang btab (G1. 377a)

lags so²²

zhes khas blang bar bya'o //

de nas mi zad pa dpag tu med pa bla na med pa'i bsod nams kyis gter chen por gyur (P1. 286b) pa sangs rgyas thams cad kyis yon tan rin po che'i 'byung gnas²³ byang chub sems dpa'i²⁴ sdom pa ring por²⁵ mi (P2. 52b) thogs par thob par 'gyur ro²⁶ zhes²⁷ snyam du bsam zhing²⁸ sems rab tu dang bar²⁹ gyur pas dga' ba dang bcas pas cang mi smra bar thal mo sbyar te 'dug par bya'o //

de nas dge ba'i bshes gnyen des dus gsum gyis byang chub sems dpa' thams cad kyis bslab pa'i gzhi thams cad dang³⁰ tshul khirms thams cad de /³¹ sdom pa'i tshul khirms dang /³² dge ba³³ chos sdud³⁴ pa'i tshul khirms dang /³² sems can³⁵ gyis don byed pa'i tshul khirms mdor bsdus pa slob ma la³⁶ go³⁷ bar byas te³⁸ / byang chub sems dpa' thams

(4) *Bodhisattvabhūmi*, Dutt ed., p. 105. Tib. D. No. 4037, Wi 83a1.

1 D2G2N2P 'am/. 2 CD1 ris. 3 D2 bzhag. 4 N2 gyis. 5 D2 dang/. 6 C om. 7 P1 //. 8 N2 om. 'dug pa. 9 D2 bya ste. 10 D2G2N2P2 'am/. 11 D2 om. 12 D2 pur. 13 D2 ste/. 14 G2N2P2 skul. 15 D2G2N2P2 blang ba. 16 D2 gsol/. 17 G1 la. 18 D2 'ang. 19 P1 de. 20 D2G2N2P2 om. 21 CD1G1P1 ba. 22 G2 lagso. 23 D2 gnas/. 24 G2N2P dpa'. 25 GNP po. 26 G2N 'gyuro. 27 D2 om. 28 D2 zhing/. 29 D2 dad par. 30 D2G2N2P2 dang/. 31 D2 om. 32 G1 repeats. 33 D2G2N2P2 ba'i. 34 G2N2P2 bsdus. 35 G1 semn. 36 P om. 37 P2 bgo. 38 G2N2P2 bya ste.

cad kyi slob¹ pa'i gzhi rnam dang /² byang chub sems dpa' (N1. 275b) thams cad kyi tshul
khrims de (D2. 42b) dag³ ci bdag las len par 'dod dam⁴ zhes slob ma la 'dri⁵ bar bya'o //

des⁶ de ltar len par 'tshal lo⁷ zhes khas len par gyur⁸ na / byang chub sems dpa'i sdom
pa sbyin par bya ste /

(G2. 57b) btsun pa 'am / tshe dang ldan pa 'am / rigs kyi bu ming 'di zhes bya ba
khyod bdag byang chub sems dpa' ming 'di zhes bya ba las /⁹ 'das pa'i byang chub sems
dpa' thams cad kyi bslab pa'i gzhir (G1. 377b) gyur pa gang yin pa dang / tshul khrims
su¹⁰ gyur pa gang yin pa dang / ma byon pa'i byang chub sems dpa' thams cad kyi
bslab pa'i gzhir gyur pa gang yin pa dang /¹¹ tshul khrims su¹² gyur pa gang yin pa
dang / da¹³ ltar¹⁴ phyogs bcu'i 'jig rten na da ltar byung ba'i byang (D1. 247b) chub
(C. 258b) sems dpa'¹⁵ thams cad¹⁶ kyi bslab pa'i gzhir gyur pa gang yin pa dang / tshul
khrims su¹⁷ gyur pa gang yin pa'i bslab pa'i¹⁸ gzhi¹⁹ gang²⁰ dag dang /²¹ tshul khrims
gang dag la /²² 'das pa'i byang chub sems dpa'²³ thams cad²⁴ kyis bslabs²⁵ par (N2. 45a)
gyur pa dang / ma²⁶ byon pa'i byang chub sems dpa' thams cad kyis²⁷ (P1. 287a) slob
par 'gyur²⁸ ba dang / phyogs bcu dag na da ltar byung ba'i byang chub sems dpa' thams
cad da ltar slob pa'i byang chub (P2. 53a) sems dpa'i bslab pa'i gzhi thams cad dang /²⁹
byang chub sems dpa'i tshul khrims thams cad de /³⁰ sdom pa'i tshul khrims dang /³¹
dge ba³² chos sdud³³ pa'i tshul khrims dang / sems can gyi³⁴ don bya ba'i tshul khrims
nod dam³⁵ zhes smros shig / des kyang nod lags so³⁶ zhes smros shig / de ltar slob dpon
gyis lan gsum gyi³⁷ bar du len nam zhes brjod cing /³⁸ slob mas rab tu len lags so^{39, (5)}
zhes lan gsum brjod pas sdom pa blangs par⁴⁰ 'gyur ro⁴¹ //

de nas dge ba'i bshes gnyen des /⁴² slob ma la byang chub sems dpa'i sdom pa byin nas /
phyogs bcu'i sangs rgyas dang byang chub sems dpa' thams cad la yan (G2. 58a) lag lngas
phyag 'tshal ba sngon du 'gro bas thal mo sbyar te /⁴³ 'di skad ces lan gsum

(5) *Bodhisattvabhūmi*, Dutt ed., pp. 105-106. Tib. D. No. 4037, Wi 83a1-b1.

1 D2G2N2P2 bslab. 2 G1N1P1 om. 3 D2 dag /. 4 D2 dam /. 5 P2 dri.
6 D2 len par 'tshal lo zhes gdab par bya'o // des. 7 G2N 'tshalo. 8 G2 'gyur. 9 G2N2P2 om.
10 G2N khrimsu. 11 G1N1P1 om. 12 GN khrimsu. 13 D2 de. 14 N2 lta. 15 G1 semda'.
16 thamd. 17 G2N khrimsu. 18 G1 pa. 19 D2 gzhir gyur pa. 20 G2N2P2 om.
21 CD1G1N1P1 om. 22 G2N2P2 om. 23 G1 semda'. 24 thamd. 25 P2 bslab. 26 G1 da ltar ma.
27 D2G2N2P2 om. 28 P1 gyur. 29 CD1G1N1P1 om. 30 D2 om. 31 CD1G1P1 om.
32 D2G2N2P2 ba'i. 33 P1 sdus. 34 D2 om. 35 D2 dam /. 36 G2N lags. 37 N2 gyis.
38 CD1G1N1P1 om. 39 D2 so //, G2 lags. 40 D2G1N1P1 blang bar. 41 G2N 'gyurro.
42 D2G2N2P2 om. 43 D2 om.

brjod par bya ste /

byang chub (G1. 378a) sems dpa' ming 'di (N1. 276a) zhes bya bas / bdag byang chub sems dpa' ming 'di zhes bya ba las /¹ byang chub sems dpa'i tshul khirms kyi sdom pa yang dag par blang bar bya ba lan gsum gyi² bar du (D2. 43a) mnos³ lags te / byang chub sems dpa' ming 'di zhes bya ba⁴ 'dis /⁵ byang⁶ chub sems dpa'i tshul khirms kyi sdom pa yang dag par blangs pa la / bdag ming 'di zhes bgyi ba⁷ dpang⁸ du gyur par 'phags pa'i mchog lkog tu gyur kyang⁹ / phyogs bcu'i 'jig rten gyi khams mthas gtugs pa'i chos¹⁰ thams cad lkog tu¹¹ ma gyur pa'i thugs mnga' ba thams cad la mkhyen par gsol lo^{12, (6)}

zhes lan gsum¹³ gyi bar du¹⁴ phyogs bcu'i sangs rgyas dang¹⁵ byang chub sems dpa' rnam la brjod de¹⁶ / phyag btsal nas bla ma dang slob ma ldang bar bya'o //

(P1. 287b) de nas langs la¹⁷ dge ba'i bshes gnyen gyis byang chub sems dpa'i sdom pa mnos pa'i byang chub sems (P2. 53b) dpa' de la 'di skad (C. 259a) (D1. 248a) ces brjod par bya ste /

byang chub sems dpa' ming 'di zhes (N2. 45b) bya ba khyod nyon cig / 'di ni chos nyid yin te¹⁸ / gang gi tshe byang chub sems dpa' byang chub sems dpa'i sdom pa yang dag par len pa'i las brjod pa rdzogs pa de'i tshe /¹⁹ phyogs bcu'i sangs rgyas kyi zhing thams cad du²⁰ sangs (G1. 378b) rgyas dang byang chub sems dpa' rnam la 'di lta bu'i ltas 'byung bar 'gyur te / sangs rgyas dang²¹ byang chub sems dpa' de dag gis 'di ltar sangs rgyas kyi zhing ga ge mo zhis na /²² byang chub (G2. 58b) sems dpa' ming 'di zhes bya bas /²³ byang chub sems dpa' ming 'di zhes bya ba las²⁴ byang chub sems dpa'i sdom pa yang dag par blangs²⁵ pa²⁶ mnos so²⁷ zhes yang dag par mkhyen par 'gyur ro²⁸ // de la sangs rgyas bcom ldan 'das de dag dang²⁹ byang chub sems dpa' de rnam kyi chos kyi brtse bas bu dang spun zla'i dgongs pa mdzad³⁰ la /³¹ de ltar dgongs pa mdzad³⁰ pas bsod nams dang ye shes kyi tshogs 'phel bar 'gyur ro^{32, (7)}

(6) *Bodhisattvabhūmi*, Dutt ed., p. 106. Tib. D. No. 4037, Wi 83b3-6.

(7) Cf. *Bodhisattvabhūmi*, Dutt ed., p. 106.

1 D2 om. 2 N2 gyis. 3 D2G2N2P2 yang dag par mnos. 4 G2 bas. 5 G2N2P2 om.

6 G1 byang chub sems dpa' ming 'di zhes bya ba khyod nyon cig / 'di ni chos nyid yin te / gang gi 'dis byang.

7 D2 ba la. 8 G2 dbang. 9 D2 pa. 10 D2 'jig rten gyi chos.

11 G1N1P1 du. 12 N1 gsolo, D2 lo //. 13 G2 gsum. 14 G2N2P2 du /. 15 GP dang /.

16 N1 brjode. 17 D2 nas. 18 D2 de for yin te. 19 CD1G1N1P1 om. 20 CD1G1N1P1 du /.

21 G2N2P2 dang /. 22 G1N1P1 om. 23 CD om. 24 G2P2 las /. 25 D2 blang.

26 D2 ba, G2P2 par. 27 N1 mnoso, D2 so //. 28 N1 'gyuro. 29 D2G2N2P2 dang /.

30 G1 om. 31 CDN1P1 om. 32 G2N1 'gyuro.

zhes bya ba¹ brjod par bya'o //

de nas dge ba'i bshes (N1. 276b) gnyen des byang chub sems dpa' de la 'di skad ces
brjod par bya'o //

byang chub sems dpa' ming 'di zhes bya ba khyod nyin² cig /³ byang chub sems
dpa'i sdom pa yang dag par blangs pa 'di dad pa med pa rnams kyi mdun du smra bar
mi bya ste / gang gi phyir⁴ dad pa med pa rnams la byang chub sems dpa'i sdom pa rab
tu bstan na / dad pa med pa'i sems can de dag⁵ byang chub sems dpa'i (D2. 43b) sdom
pa la ma dad pas spong bar⁶ byed de⁷ / des na ji snyed⁸ byang chub sems dpa'⁸
(P1. 288a) byang chub sems dpa'i sdom pa la gnas pa la⁹ bsod nams kyi phung po dang
ldan par 'gyur ba¹⁰ de snyed kyi bsod nams ma yin pa'i phung po (G1. 379a) ma dad pa
de¹¹ dang ldan par 'gyur ro¹² // gang gi phyir byang chub (P2. 54a) sems dpa's¹³ sems
can sdug bsngal thams cad las yongs su¹⁴ bsrung bar bya ba yin pas gzhan sdig pa las
bzlog par bya ste / de'i phyir mchog tu dge ba'i byang chub sems dpa's¹⁵ gsang bar bya
ba yin no¹⁶ //(8)

de nas bslab pa'i gzhi pham pa'i gnas su¹⁷ gyur pa¹⁸ sdom pa 'jig pa'i rgyu bstan cing /
nyes (N2. 46a) byas kyi ltung ba (C. 259b) nyon mongs pa can dang¹⁹ nyon mongs pa can
ma (D1. 248b) (G2. 59a) yin pa yang bstan par bya'o // dge ba'i bshes gnyen gyis mdor
bsdus pa *Byang chub sems dpa'i sdom pa nyi shu pa dang / Byang chub sems dpa'i sa'i tshul
khrims kyi le'u bshad par bya'o //*

*Byang chub tu sems bskyed pa dang²⁰ byang chub sems dpa'i sdom pa'i cho ga / slob²¹
dpon chen po dPal Mar me mdzad ye shes kyis²² mdzad pa rdzogs so²³ // //*

rgya gar gyi mkhan po de nyid dang /²⁴ zhu²⁵ chen gyi lo tsā²⁶ ba dge slong dGe ba'i blo
gros kyis bsgyur ba lags so²⁷ // //²⁸

slad kyis²⁹ pañdi ta de nyid dang / lo tsā³⁰ ba dge slong Tshul khrims rgyal bas bcos
shing gtan la phab pa'o³¹ // //³²

(8) *Bodhisattvabhūmi*, Dutt ed., pp. 107-108.

1 G2 om. *bya ba*. 2 D2N1N2 *nyon*. 3 D1 om. 4 CD1 *phyir /*. 5 G2N2P2 *dag /*.
6 N2 *spongs par*. 7 N1 *byede*. 8 D2 om. 9 D2 om. 10 P2 *pa*. 11 D2 *de snyed*.
12 N1 *'gyuro*. 13 D2G1N1P1 *dpa'*, G2 *dpa's*. 14 G2N *yongsu*. 15 GNP *dpa'*. 16 N1 *yino*.
17 N1 *gnasu*. 18 G2N2P2 *'gyur ba*. 19 D2G2N2P2 *dang /*. 20 D2 *dang /*. 21 P1 *shi slob*.
22 D2 *kyi zhal snga nas*. 23 N1 *rdzogs*, G1P1 *s-ho*. 24 P1 om. 25 G2N2P2 *zhus*.
26 G1P1 *tstsha*. 27 N1 *lags*. 28 D2G2N2P2 // . 29 G1N1P1 *kyi*. 30 G1P1 *tstsha*.
31 P1 *pa*. 32 D2 // .

22 Āpattideśanāvidhi

#¹ // rgya gar skad du / \bar{A} ² pa tti de sha na bi dhi /

bod skad du / lTung ba bshags pa'i cho ga /

sangs rgyas la phyag 'tshal lo³ //

bla ma rdo rje 'dzin pa chen po la sogs pa phyogs bcu na bzhugs pa'i sangs rgyas dang⁴
byang chub sems dpa' thams cad bdag la dgongs su gsol //⁵ btsun pa bdag la dgongs
(G. 390a) su⁶ gsol //⁷ bdag ming 'di zhes bgyi bas 'khor ba thog ma ma⁸ mchis pa nas tha ma
da lta la thug gi bar du 'dod chags dang⁹ zhe sdang dang gti mug gi dbang gis lus dang ngag
dang yid kyi sgo nas mi dge ba bcu bgyis pa dang / mtshams med pa lnga dang / de dang
nye ba lnga dang / so sor thar pa'i sdom pa dang 'gal ba dang / byang chub sems dpa'i bsלב
pa dang 'gal ba dang / gsang sngags kyi dam tshig dang 'gal ba la sogs pa mdor na mtho ris
dang thar pa'i gegs su¹⁰ gyur cing / 'khor ba dang (P. 297b) ngan song gi rgyur gyur pa'i
nyes ltung gi tshogs ci (N. 284b) mchis pa de dag thams cad bla ma rdo rje 'dzin pa la sogs
pa phyogs bcu na¹¹ bzhugs pa'i sangs rgyas dang¹² byang chub sems dpa' thams cad dang /
btsun pa'i sryan sngar mthol lo¹³ bshags so¹⁴ // mi 'chab bo¹⁵ // mthol zhing bshags na bdag
bde ba la reg par gnas par 'gyur gyi / ma mthol ma bshags na de ltar mi 'gyur ba lags so¹⁶
zhes lan gsum brjod do¹⁷ //

de nas mthong sdom dris¹⁸ la thabs yin no¹⁹ // legs so²⁰ zhes brjod do²¹ // dang por sbyor
ba'i cho ga ni //²² bdag ming²³ 'di zhes bgyi ba la 'khor ba thog ma med pa nas kyi nyon
mong pa (C. 266b) mang ba 'am / bag med pa la sogs pa'i stobs kyis (G. 390b) nyes ltung
gi tshogs mang po bdog ste mchi bas //²⁴ de dag dge 'dun gyi sryan sngar bshags par

1 GNP # // *ltung ba bshags pai cho ga slob dpon dpal mar me mdzad ye shes kyis mdzad pa bzhugs so //*.

2 GNP a. 3 N om. 4 G dang /. 5 N /. 6 N dgongsu. 7 GN /.

8 G om. 9 G dang /. 10 N gegsu. 11 G nas. 12 G dang /.

13 C om., GP lo //, N mtholo. 14 N bshagso. 15 N 'chabo. 16 N lagso. 17 N brjodo.

18 P dril. 19 N om. 20 N legso. 21 N brjodo. 22 GNP om. 23 G ming /. 24 P //.

'tshal bas thugs kyis gzung¹ 'tshal zhes pa dang /² mjug ltung ba las bslang ba shin tu bka'
drin che lags zhes pa dang / chos bzhin du mdzad pa rjes su³ yi rang zhes brjod par bya'o //

*lTung ba bshags pa'i cho ga slob dpon dpal*⁴ Mar me mdzad ye shes kyis mdzad pa
rdzogs so // //

rgya gar gyi mkhan po de nyid dang / bod kyi lo tsā⁵ ba dge slong Tshul khriims rgyal
bas bsgyur cing zhus te gtan la phab pa'o // //

1 GNP *bzung.* 2 C *dang /.* 3 N *rjesu.* 4 G *om.* 5 G *tstsha.*

23 *Adhyayanpustakapāthanapuraskriyāviddhi

#¹ // Kha ton² glegs bam klag³ pa'i sngon du bya⁴ ba'i cho ga /

sangs rgyas dang byang chub sems dpa' thams cad la phyag 'tshal lo⁵ //

dang po⁶ re zhig bayng chub sems dpa' chos⁷ kha ton du bya bar 'dod pa dang /⁸ glegs⁹ bam du bya ba¹⁰ klog par 'dod pas¹¹ phyogs bcu'i 'jig rten gyi khams kyi sangs rgyas dang byang chub sems dpa' thams cad la gsol ba btab ste / yid kyis kun tu¹² dmigs la / byang chub (P1. 305a) sems dpa' sems dpa' chen po kun tu¹³ bzang po'i spyod pa'i smon lam gyi cho gas¹⁴ /¹⁵ phyag 'tshal¹⁶ ba la sogs pa yan lag bdun gyi tshul du mchod pa rnam kyis yang dag par mchod do¹⁷ // de'i rjes la sems can thams cad la byams pa'i sems nye bar gzhag¹⁸ ste / yang dag pa'i lhag pa'i bsam pas¹⁹ de ltar bsams pa'i rjes (N1. 290b) la /²⁰ tshig lan gsum brjod par bya ba ni /²¹

bcom ldan 'das kyis (G2. 51a) gsungs pa'i chos kyi tshig gcig²² gi don gang yin pa de ni²³ chos thams cad kyi yang yin na²⁴ / 'on kyang bdag ni rang gi las kyi²⁵ nyes pas shes rab chung zhing blo zhan²⁶ te / de lta²⁷ yin du zin kyang /²⁸ gang bcom ldan 'das kyi²⁹ gsung rab bzung nas³⁰ des³¹ bdag³² gi³³ (P2. 48b) kha ton byas te³⁴ / chos kyi³⁵ sgra de sems can gang gi rna lam du grag³⁶ pa de / de bzhin gshegs (G1. 398b) pa'i spobs pa thob³⁷ par gyur³⁷ cig³⁸ /

1 G2N2P2 om., G1N1P1 kha ton glegs (G1: gleg) bam klag pa'i sngon du bya ba'i cho ga bzhugs (N1: bzhugso) // #.

2 G ton dang. 3 D2 klog, GN1P1 bklag, N2P2 bglag. 4 D2 'gro. 5 G2N1 'tshalo.

6 D2G2 por. 7 D2 theg chen gyi chos. 8 CD om. 9 G2N2P2 gleg.

10 G2N2P2 byas pa. 11 D2 pas /. 12 CD1G1P1 du. 13 CD1P1 du. 14 G1N1P1 ga.

15 D2G2N2P2 om. 16 GNP btsal. 17 N1 mchodo. 18 D2N1 bzhag. 19 D2 pa.

20 G2N2P2 om. 21 G2N2P2 om. 22 G2N2P2 om. 23 D2 ni /. 24 D2 la.

25 G1N1P1 kyis. 26 CD1 zhen. 27 N2P2 lta na. 28 G2N2P2 om.

29 G2N2P2 kyis. 30 D2 nas /. 31 D2GP de. 32 N2P2 dag. 33 D2G2N2P2 gis.

34 D2 bya ste. 35 P1 gyi. 36 D2N1P1 grags. 37 G1 repeats. 38 D2 cig ces sam.

bcom ldan 'das kyis¹ gsungs pa'i chos² tshig gcig gi don gang yin pa de ni /³ chos thams cad kyī yang yin na /⁴ (C. 267a) 'on kyang (N2. 41a) bdag ni⁵ rang (D2. 39a) gi las kyī⁶ nyes pas shes rab chung zhing blo zhan⁷ te⁸ / de ltar⁹ yin du zin kyang /¹⁰ gang bdag gis (D1. 256a) glegs bam du byas pa'i chos klag¹¹ par bya ste / chos kyī sgra de sems can gang rnams kyī rna lam du grag¹² pa de dag / de bzhin gshegs pa'i spobs pa thob par gyur cig /¹³

ces¹⁴ lan gsum du¹⁵ brjod par bya'o //

Kha tog dang glegs bam klag¹⁶ pa'i¹⁷ cho ga /¹⁸ slob dpon mkhas pa chen po dpal Mar me mdzad ye shes kyī zhal snga nas mdzad pa rdzogs so¹⁹ // //²⁰

1 P1 kyī. 2 D2 chos kyī. 3 D2G2N2P2 om. 4 G2 //. 5 G2 gi. 6 G1N1P1 kyīs.
7 CP zhen. 8 P1 om. 9 G2N2P2 lta. 10 G2N2P2 om. 11 G1N1P1 bklag, G2N2P2 bglags.
12 D2G1N1P1 grags. 13 G2N2P2 om. 14 G2P2 ces /. 15 G2P2 om. 16 D2 klog, G1N1P1 bklag.
17 D2 pa'i sngon du 'gro ba'i. 18 G1P1 om. 19 N1 rdzogsso. 20 D2 //.

24 *Pāramitāyānasācchanirvapaṇavidhi

#¹ // *Pha rol tu phyin pa'i theg pa'i tsha tsha² gdab pa'i cho ga /*

sangs rgyas dang byang chub sems dpa' thams cad la phyag 'tshal lo³ //

na mo⁴ bha ga ba⁵ te / bai ro tsa na⁶ pra bha rā zdā ya / ta thā ga tā⁷ ya / arha te sa
mya ksaṃ bu ddhā⁸ ya / ta dya thā / om su kṣme⁹ sa me sa ma ye¹⁰ sa ma te¹¹ sa¹² mā ro
pe¹³ a na bar ṇe¹⁴ / ta raṃ bhe /¹⁵ ya sho¹⁶ / ma hā te dze¹⁷ /¹⁸ ni ra¹⁹ ku le / ni²⁰ ra ba²¹
ṇi²² /²³ sa rba²⁴ (G2. 51b) ta thā ga ta²⁵ /²⁶ hṛ da ya /²⁷ a dhi^{28,29} ṣṭhā³⁰ na³¹ a dhi ṣṭhi³²
te swā hā /

gzungs 'di³³ 'jim pa'i gong bu 'am bye ma'i gong bu la lan nyi shu rtsa gcig bzlas la³⁴
mchod rten bya'o // mchod rten de³⁵ la rdul phra rab kyī³⁶ grangs ji snyed yod pa de snyed
kyi mchod rten bye ba byas par 'gyur ro³⁷ // rdul phra rab kyī³⁸ grangs ji snyed yod pa de
snyed kyi lha dang mi rnam kyi skye ba phun sum tshogs pa thob par 'gyur ro³⁹ // gang
dang gang du skyes pa na⁴⁰ skye ba dran (G1. 395a) par 'gyur ro⁴¹ // myur du bla na med pa
yang dag par rdzogs pa'i byang chub tu mngon par rdzogs par 'tshang rgya bar 'gyur ro⁴² //
dang por 'jim pa brdung ba bdag gam gzhan yang rung bas byams pa⁴³ dang snying rjes⁴⁴
byang chub tu⁴⁵ sems bskyed⁴⁶ par bya zhing brdung ngo⁴⁷ //

1 G2N om., C tsha tsha gdab pa'i cho ga bzhugs // #, P1G1 pha rol tu phyin pa'i theg pa'i sā tsha tsha gdab pa'i bzhugs so // #.

2 D2 GNP sā tsha. 3 N 'tshalo. 4 G1N1P1 om na mo. 5 D2 wa. 6 GNP nā ya.

7 GP2 ta. 8 G2 bud dha. 9 D2G1NP1 su (D2: sū) kṣme su (D2: sū) kṣme (D2G1: /).

10 D2GNP ye /. 11 D2GNP sānte dānte /. 12 D2G1N1P1 a sa. 13 G1N1P1 pe /.

14 G1N1P1 lambhe, G2N2P2 lambhe. 15 D2G2N2P2 om /.

16 D2GN1P1 sho / wa (D2G2: ba) ti. 17 GNP dza. 18 D2 om. 19 D2G2N2P2 nī.

20 G2N2P ri. 21 D2 bā. 22 D2 ni, G1N1P1 ṇe, N2 na. 23 D2 om. 24 P2 rba /.

25 GNP bud dha. 26 D2 om. 27 GNP om. 28 D2 om. / 29 D1 ti. 30 P2 ṣṭha.

31 D2 na /, G2 om. a dhi ṣṭhā na. 32 D2G1P2 ṣṭhi. 33 G1N1P1 'dis. 34 G2N2P2 te.

35 G2 om. 36 D1 gyi. 37 N 'gyuro. 38 CD1G1N1P1 om. 39 N1 'gyuro.

40 G2N2P2 skyes nas. 41 N1 'gyuro. 42 N1 'gyuro. 43 D2 om. 44 D2 rje. 45 D2 kyi.

46 P2 bskyod. 47 N brdungo.

de nas 'bi 'bi byin gyis rlab¹ pa /² 'og min nas³ bcom ldan 'das rnam (N1. 288a) par snang
mdzad 'od kyi rgyal po //⁴ de bzhin gshegs pa dgra bcom pa yang dag par rdzogs pa'i sangs
rgyas⁵ bzhugs pa la phyag 'tshal⁶ bar bsam zhing /⁷ sngags kyi grangs gong ma bzhin du
brjod do // de nas rten⁸ 'brel gyi sngags⁹ bzlas shing gdab po // de nas 'bru 'am me tog la
rten¹⁰ 'brel (N2. 41b) gyi sngags lan gsum mam¹¹ bdun bzlas la dbul lo¹² // de nas /¹³

bsod nams 'di yis thams (C. 267b) cad (D2. 39b) gzigs pa nyid //

thob nas nyes pa'i dgra rnam pham byas te //

rga nad 'chi ba'i¹⁴ dba¹⁵ klong 'khrugs¹⁶ pa yi //

srid pa'i mtsho las 'gro ba 'don¹⁷ par shog /^{18, (1)}

ces smon lam gdab po¹⁹ //

pha rol tu phyin pa'i theg pa'i sātstsha (G2. 52a) gdab pa'i cho ga / slob dpon mkhas pa
chen po dpal mar me mdzad ye shes kyi zhal snga nas mdzad pa rdzogs so²⁰ //²¹

om²² ye dha rmā he tu ²³-pra bha bā he tu⁻²³ nte²⁴ ṣān²⁵ ta thā ga to hya²⁶ ba²⁷ dat /²⁸ te ṣā
nyca²⁹ yo ni ro dha e bam³⁰ bhā dī ma hā shra ma ṇaḥ ///

**Cittotpāda*vidhi of Mañjuśrīmitra ('Jam dpal bshes gnyen), Tib. D. No. 2561, Ngu 24a7.

1 D2GN2P brlab, N1 brlabs. 2 P1 //, G2N2P2 ni. 3 D2 na, G2 nas /. 4 G1 /, P2G2 om.
5 G2 rgyas bzhin gshegs. 6 N1P1 btsal. 7 G2N2P2 om. 8 G1P1 brten. 9 G1 sngaḍ.
10 G1N1P1 brten. 11 D2G2N2P2 mam /. 12 D2 'bul lo, N dbulo. 13 G1N om.
14 G2N2P2 skye rga na 'chi'i. 15 D2 rba, P1 dpa'. 16 D2G2N2P2 'khrug. 17 P2 'dren.
18 P1 om. 19 N1 gdabo. 20 N1 rdzogso. 21 D2 ///. 22 CD1 om. 23 P2 om.
24 D2 dun te for tu nte. 25 GN2P2 ṣānta. 26 G2 dya. 27 G1N1P1 om. 28 D2G1N1 om.
29 D2G1N1P nytsa. 30 waṃ.

25 Gurukriyākrama

#¹ // rgya gar skad du / Gu ru kr² ya kra ma /

bod skad du / Bla ma'i bya ba'i rim pa /³

sangs rgyas dang⁴ byang chub sems dpa' thams cad la phyag 'tshal lo⁵ //

dang (G1. 395b) por tshad dang ldan pa'i slob dpon gyis⁶ slob ma la dad pa⁷ dang⁸ yid ches pa dang⁹ 'dod pa'i dad pa bskyed¹⁰ la / de nas byang chub kyi sems kyi phan yon brjod la spro ba bskyed par bya'o //

de nas gnas khang khyad par can du¹¹ mchod pa'i tshogs khyad par can bshams la /¹² 'phags pa'i tshogs spyang drangs te /¹³ phyag 'tshal¹⁴ ba dang / zhabs bsil zhing gdan dbul¹⁵ ba dang /¹⁶ bla na yod pa dang /¹⁷ (P1. 302b) bla na med pa'i mchod pa'i tshogs kyis legs par mchod cing / mchod pa'i sprin gyi sngags kyang lan gsum brjod do¹⁸ // bstod¹⁹ pa byed pas bde bar gshegs pa'i yon tan khyad par (P2. 49b) can dran pa'i sgo nas gus pas²⁰ bstod cing / de dang de 'phel ba'i tshig kyang brjod do²¹ //

de nas bshags pa dang /²² rjes su²³ yi rang ba dang / bskul (N1. 288b) ba dang / gsol ba gdab pa dang /²⁴ bsngo²⁵ ba la sogs pa bya ste²⁶ / de nas /²⁷ slob ma dad pa dang ldan pas²⁷ slob dpon la phyag byas la / gsol ba gdab pa la sogs pas byang chub kyi sems rnam pa gnyis legs par bskyed la / de dag gi rang gi ngo bo dang / dbye ba dang / khyad par yang brjod do²⁸ //

de nas byang chub kyi spyod pa pha rol tu phyin pa drug dang / bsdu ba'i dngos po bzhi dang / tshad med pa bzhi²⁹ la sogs pa'i mtshan nyid dang / rgyu dang³⁰ 'bras

1 P1GN1 # // bla ma'i bya ba'i rim pa mdo bsdu pa bzhugs (G2 bzhugso). 2 P2 kri.
3 G1N1P1 om. 4 G2N2P2 dang /. 5 'tshalo. 6 CDG1N1P1 gyis /. 7 D2GN2P2 dang ba.
8 D2G2N2P2 dang /. 9 D2G2PP2 dang /, N2 dang //. 10 N1P1 skyes, G2P2 skyed.
11 D2 du /. 12 G2N2P2 om. 13 D2 om. 14 G1N1P1 btsal. 15 N1P1 'bul. 16 N2 om.
17 D2N2 om. 18 N1 brjodo. 19 G1N1P1 stod. 20 G1 par. 21 N1 brjodo. 22 G1N1P1 om.
23 G2N rjesu. 24 G1N1P1 om. 25 G2N2P2 sngo. 26 D2 byas te. 27 G2N2P2 om. 28 N1 brjodo.
29 G2N2P2 bzhi po. 30 CDG2N2P2 dang /.

bu dang / bslab (N2. 54a) pa'i go rim¹ dang / nyams pa dang² ma nyams pa'i skyon³-yon
dang / (G2. 54a) tshul ji ltar bslab pa la sogs pa yang rgyas par bstan par bya'o // de yang
bag (D2[2nd].40a) yod pa dang / shes bzhin dang / dran pas zin par bya'o⁴ zhes bslab par (G1.
396a) bya'o // de dag gi mtshan nyid dang / go rim⁵ dang / nyams pa dang⁶ ma nyams pa'i
skyon yon^{3,7} la sogs pa yang bslab par (D1. 257a) bya'o //

de dag byed pa la yang brtson 'grus (C. 268a) drag po⁸ bskyed⁹ la¹⁰ ji mi¹¹ snyam pa
dang / sdug bsngal dang du len pa'i bzod pa dang / ma yengs pa'i bsam gtan dang / shes rab
kyi¹² rang bzhin med par shes par byas la /¹³ bslab pa gsum mam / shes rab rnam pa gsum la
mnyam par gzahag¹⁴ pa dang / spyod lam gyi (P1. 303a) tshul gyis bslab par bya'o zhes bstan
par bya'o // mthar smon lam gyis yongs su¹⁵ rdzogs par gyis shig ces kyang brjod par
bya'o //

'di ni slob dpon gyis¹⁶ bstan pa'i las kyis go rim mo¹⁷ // slob mas kyang tshul ji ltar bstan
pa de bzhin du bslab par bya'o // 'di ni mtshan nyid theg pa chen po'i sems bskyed pa
dang /¹⁸ bslab pa bstan pa'i tshul lam¹⁹ go rim²⁰ che long tsam bstan pa yin no²¹ // rgyas par
ni gzhan nas²² shes par bya'o //

*Bla ma'i bya (P2. 50a) ba'i rim pa mdor bsdu pa /²³ slob dpon²⁴ mkhas pa chen po dpal
Mar me mdzad ye shes kyis zhal snga nas mdzad pa rdzogs so // //*

1 CD rims. 2 CD2G2N2P2 dang /. 3 D2 repeats. 4 D2[2nd] bya'o //, N2 bya'o /. 5 CD rims.
6 CD1 dang /. 7 G2P2 om. 8 D2GNP pos. 9 D2G2P2 bskyod. 10 D2N2P2 la /. 11 CD1 om.
12 G1N1 kyis. 13 D2 om. 14 GN P bzhag. 15 G2N1 yongsu. 16 N2P2 gyis rang bzhin.
17 CD1 rims so, G2 rimso, N2P2 rim so. 18 CD1 om. 19 D2 lam /. 20 CD1 rims.
21 N1 yino. 22 D2 las. 23 G2N2P2 om. 24 G1 dpon gyis bstan pa'i las kyis.

26 *Prajñhrdayavyākhyā

Shes rab snying po'i rnam par bshad pa ¹jo bo rjes mdzad pa'o¹ // //

// shes rab kyi pha rol tu phyin pa la phyag 'tshal lo //

bde bar gshegs pas gsungs pa'i chos kyi 'khor lo gnyis pa'i don thams cad bsdu na gnyis te / mngon (N. 343a) par rtogs pa'i don dang / snying po'i don no // de la mdo rgyas 'bring gsum gyis ni gang zag gsum gyi dbang du byas nas / mngon par rtogs pa gtso bor ston pa yin la / *bDun brgya pa* la sogs pas ni snying po'i don ²bstan pa yin ³la / 'di yang Bi ma la mi⁴ tra ltar na don⁵ brgyad kyis⁶ mda' don⁷ ma lus pa bstan pa yin⁸ no //

don⁹ brgyad kyang da glang slang ba dang zhes bya ba la sogs pas lus rnam par² gtso bor ston³ to // lam mngon par rtogs pa ye shes kyis¹⁰ dmigs pa gtso bor ston pa'o // de la rgyas 'bring gsum gyis gtso bor mngon rtogs bstan // ¹¹ yang snying po'i don shugs (G. 443b) la bstan / *bDun brgya po*¹² la sogs pas gtso bor¹³ snying po'i don bstan / mngon rtogs zhar la bstan to //

'dir yang snying po'i don bstan pa yin la / ¹⁴ 'di yang Bi ma la mi tra ltar na don brgyad kyis mdo'i¹⁵ don ma lus pa bstan pa yin no // don brgyad kyang gleng slong ba dang zhes bya ba la sogs pas lus rnam par bzhas¹⁶ pa yin no // de la slob dpon Phyogs kyi glang po la (D. 313b) sogs pas mdo'i don gzhan du yang bshad pa yod de / mdo 'byung ba'i rgyud¹⁷ dang / mdo dngos so //

dang po la gnyis te / gleng bslang ba dang gleng gzhi'o // 'di gnyis kyi khyad par ni / tshig 'byung ba'i rkyen dang / mdo 'byung ba'i rgyu'o // de yang sngon byung ba dang / rjes 'jug ste / gleng bslang ba'o // gleng gzhi la gnyis te / thun mong dang khyad par gyi gleng gzhi'o // 'di gnyis kyi bye brag ni mdo thams cad la thun mong du yod pa dang / mdo 'di la yod pa gzhan la med pa'o // thun mong la bzhi¹⁸ ste / dus dang ston pa dang / gnas dang 'khor ro // khyad par gyi gleng gzhi la gnyis te / gtso bo dang 'khor ting nge 'dzin la zhugs pa'o // de ni bsdu don no //

1 CD *bzhugs*. 2 GNP om. 3 N om. 4 G *ma*. 5 G *dan*. 6 G *kyas*. 7 G *dan*.
8 G *yan*. 9 G *dan*. 10 D *kyi*. 11 CDG /. 12 CD *pa*. 13 CD *gtsor* for *gtso bor*.
14 CD om. 15 CD *mdo 'di'i*. 16 CD *gzhas*. 17 CD *rgyu*. 18 GNP *gzhi*.

dgos pa'i don ni sdud pa po rang nyid tshad ma'i skyes bur 'gyur bar bya ba'i phyir te / dus de tsam na ston pa 'di la 'khor 'di rnam dang gnas 'dir thos so zhes dbang po dang don brtags dang bcas pa'i (C. 313b) tshig brjod na / 'o na 'di (N. 343b) bshad pa 'di bden no zhes sdud pa po la yid ches par 'gyur te / 'di lta ste / 'jig rten na (G. 444a) yang dbang dang dan rtags zhib pas kho'i de bden no zhes rtogs pa bzhin no // de skad du yang¹ slob dpon Phyogs kyi gleng pos /²

dad ldan 'jug pa'i yan lag tu //
 rang nyid tshad mar rab bsgrub phyir //
 ston pa dang ni 'khor dbang po //
 yul dang dus sogs bstan pa yin //
 sdud par byed pas 'jig rten du //
 yul dang dus sogs bstan pa ni //
 dbang por bcas pa'i tshig brjod na //
 rang nyid tshad mar 'gro ba yin //^{3,(1)}

zhes gsungs so // 'di rnam kyi tshig don dang tshig rnam par sbyar ba ni gsal lo // des na mdo thams cad de ltar bshad par bya ba yin par *brGyad stong pa'i bsdus don* nas bstan to // lhag ma ni mthun no //

'dir dri ma med pa'i bshes gnyen gyis de bkag ste / rang gi lugs gsal bar byed pa la dang po sun 'byin te / de la⁴ skyon⁵ gnyis te / mi nus pa dang⁶ dbang por mi 'gyur ba'o // de la mi nus pa ni dgos pa de sgrub par mi nus pa ste / da lta ni dad pas rjes su⁷ 'brang ba rnam 'jug pa'i yan lag tu rang tshad ma'i skyes bur bsgrub pa'i phyir de smos so // dbang po'i dgos pa yang physis de la the tshom za ba la sogs pa byung tsam na / de la thug pa yin la / de ltar na rdzu 'phrul dang (D. 314a) mngon par shes pa thob pa rnam kyi mdo'i don gtan la 'bebs pa mi srid par 'gyur te / dbang po 'ga' zhig na⁸ mya ngan las 'das la / kha cig gzhan⁹ bzhugs pa ste //¹⁰ de yang¹¹ (G. 444b)

zab cing mtha' yas mdo sde yi //
 dkon mchog thos pa'i sred pa yis //
 'jig rten khams ni thams cad du //
 don byed par ni 'gro phyir te //¹²

(1) *Prajñāpāramitāpiṇḍārthasamgraha* 3-4.

1 C yang /. 2 D //. 3 N /. 4 N om. 5 N skyon la. 6 C dang /. 7 N rjesu. 8 C ni.
 9 D gzhan na. 10 CP /. 11 C yang /. 12 N /.

zhes bya ba'i tshul gyis so // kha cig ni (N. 344a) 'di na bzhugs kyang mthong ba'i skal ba med de /¹ 'Od srungs chen po la sogs pa lta bu'o //

skyon gnyis pa de dgos pa de bsgrub par nus su chug kyang dbang po nyid du mi 'gyur te / dbang por 'gyur ba la 'di dang 'di dag ste zhes 'khor rnams kyi ming bstan pas dpang por 'gyur bar 'dod na / Rab 'byor dang zhes bya ba la sogs pa dngos su ming bstan pa de ltar dbang du 'gyur ba la rag na / mdo 'di bzhin du 'khor gyi ming med (C. 314a) pa dang dbang du ji ltar 'gyur zhes zer ro //

des na 'di ltar bshad de / sngon byung ba'i gleng gzhi dang bcas pa'i mdo bshad pa'i sngon rol tu de'i gleng slong bar byed pa ni² 'di skad bdag gis thos pa gsungs pa yin no // 'dis ni dbri bskyungs med par yang dag par thos par bstan te / des 'khor rnams kyis phyin ci ma log par bstan par shes pas sdud pa po la legs par rna ba gtod pa la sogs par 'gyur ba'i phyir ro //

da ni gang la brten nas mdo 'di 'byung ba'i skabs su gyur pa'i gnas skabs de rtsom pa ste / de la³ 'jug par byed pa ni dus gcig na bcom ldan 'das zhes bya ba la sogs pa'o // 'o na skabs de lta bu la brten nas byung ba'i mdo'i dbang du byas pa'i gang zag ji lta bu yin snyam nas (G. 445a) bstan⁴ par gtogs pa 'dus pa ste / dge slong gi dge 'dun chen po dang zhes bya ba la sogs pa ste / chos nyan⁵ pa'i skal ba yod pa tshogs pa la bstan⁶ par gtogs pa 'dus pa zhes bya'o //

khyad par gyi gleng gzhi gang zhe na / de'i tshe zhes bya ba la sogs pa gtso bo dang 'khor ting nge 'dzin la snyoms par zhugs pa gnyis bstan to // 'o na gleng gzhi de gnyis rgyur byas (N. 344b) pa las rtsom pa 'byung ba'i mdo de⁷ gang zhe na / dris pa dang lan gnyis kyis ston pa ni de nas zhes bya ba nas⁸ de ltar bslab par bya ba'i bar (D. 314b) gyis bstan to // 'o na de de bzhin gshegs pas ma gsungs par spyen ras gzigs kyis bshad pa 'di cang yin nam snyam pa'i 'khor gyi log rtog bzlog pa'i phyir⁹ shākya thub pa nyid kyis mthun 'gyur byin pa'o // 'o na 'di yang snyigs ma lnga bdo ba'i dus su sangs rgyas pas / sangs rgyas gzhan pas 'od la sogs pa chung bas de kho na ltar yin nam ma yin snyam pa la / de bzhin gshegs pa rnams kyang rjes su yi rang ngo zhes bya bas¹⁰ de kho na ltar zad do snyam du dgongs pa'o // 'di gnyis ni mthun 'gyur ro // yang na de bzhin gshegs pa rnams kyang zhes bya bas ni rjes su¹¹ yi rang ba dang sbyar ro // de ltar na mdo sde rin po che bshad pa la dga' ba skyes

¹ CD do //. ² C ni /. ³ C yang. ⁴ G bsten. ⁵ N can. ⁶ CD dang ldan for la bstan.
⁷ CD om. ⁸ C nas /. ⁹ C phyir /. ¹⁰ C ba. ¹¹ N rjesu.

nas rjes su yi rang bar byed pa ni bcom ldan 'das kyis zhes bya ba la sogs pa'o // de ni spyi¹
don bsdus pa tsam mo //

(G. 445b) de la dris pa ni de nas zhes bya ba la sogs pa'o // 'di'i don ni rten gyi gang zag
gang la la 'dod pa ste / bye brag med pa la² sems bskyed pa'i byang chub sems dpa'o // ji ltar
bslab par bya ba ste / tshogs lam dang / sbyor lam dang / mthong lam dang / bsgom lam
dang / mi slob pa la'o // 'di lnga yang bsam pa dang / sbyor ba dang mngon du bya ba dang³
sgrub pa dang / rtogs pa zhes bya ba rnams kyi rang bzhin no // de la gdams ngag ni 'di yin
te / rigs dang ldan pa'i gang zag byang chub tu sems bskyed pas lam lnga la ji ltar bslab par
bya zhes dris pa'i don to //

lan ni lam rnam⁴ pa lnga la rnam par phye nas bstan pas bcu gcig tu 'gyur
(N. 345a) ro // de la yang gnyis te / dbang po rtul po'i dbang du byas pa dang / rnon po'i
dbang du byas pa'o // de la dbang po rtul po ni lam lnga la slob pa'i tshe / lam re re'i dbang
du byas nas kyang mtshan nyid thams cad yongs su rdzogs par bstan pa la bltos pa yin la /
de'i dbang du byas nas lam lnga la slob pa'i tshul rnam par phye na bcur 'gyur ro⁵ // dbang
po rnon po ni mgo smos pas go ba yin la de'i don du sngar don bcur bstan pa de nyid bsdus
nas sngags kyi don du bstan pa ste / de ltar na lan btab pa bcu gcig tu 'gyur ro //

spyir na 'di gnyis ka yang dbang po rnon po yin mod kyi de la yang khyad par yod pas
gnyis su (D. 315a) phye ba yin no // 'dir (G. 446a) dbang po rtul po la bstan pa de yang
dbang po⁶ gzhan la bltos⁷ nas gsang sngags su 'gyur ba yin te / ma gsangs kyang gsangs te
bstan pa bzhin du song ba'i phyir ro // de yang gsang ba dang mi gsang ba ni blo la yod pa
yin gyi / dngos po la ni bstan par bya ba la khyad par med la / ston pa la yang dpe mkhyung
mi mnga' ba'i phyir ro // des na 'dir yang gsang sngags kyi don bshad pa de nyid snga ma la
yang gsang ste bstan pa bzhin du 'jug pas gsang sngags kyi nges tshig dang ldan no //

de la dang po mdo la rten rigs dang ldan pa'i gang zag gis byang chub mchog tu sems
bskyed pa ni lam bskyed pa'i rten gyi gang zag yin pas de bshad pa ni / Shā ri bu zhes pos
nas rigs kyi bu 'am (C. 315a) rigs kyi bu mo gang la la zhes bya bas rigs dang ldan pa'i gang

1 CDN *spyi'i*. 2 CD *sbyang ba dang*. 3 CD *dang /*. 4 G *rnam*. 5 N *'gyuro*.
6 CD *po rtul po*. 7 CD *ltos*.

zag bstan la / shes rab kyi pha rol tu phyin pa (N. 345b) zab mo zhes bya ba dang / spyad pa spyod par 'dod pa zhes bya ba gnyis kyis dmigs par bya ba'i yul dang / 'dun pa'i mtshan nyid kyi sems bskyed pa gnyis bshad de go rim bzhin no // 'dis ni dbang po rno rtul ma phye bar spyir bstan pa'o //

dbang po rtul po'i dbang du byas pa'i lan bcu yang¹ 'Phags pa dGongs² pa nges par 'grel pa las³ dmigs pa rnam pa bzhi⁴ bshad pa des don gyi kho ga dbub⁵ par bya ste / rnam par rtog pa dang bcas pa'i gzugs brnyan lhag (G. 446b) mthong gi dmigs pa dang / rnam par mi rtog⁶ pa'i gzugs brnyan zhi gnas kyi dmigs pa dang / dngos po mtha'i dmigs pa dang / dgos pa yongs su⁷ grub pa'i dmigs pa'o // 'di⁸ bzhis tshogs lam dang / sbyor lam dang / mthong lam dang / mi slob pa'i lam bzhi rim bzhin bstan par shes par bya'o // 'dir bsgom lam ni dmigs pa snga⁹ ma gsum nyid la dmigs pa ma gtogs pa dmigs pa lhag pa gzhan med pas logs su¹⁰ ma bstan te / de skad du¹¹ yang mgon po Byams pas /

nges 'byed yan lag dang mthong ba'i //¹²

lam dang bsgom pa'i lam nyid la //¹³

yang dang yang du sems pa dang //¹⁴

'jal dang nges rtog bsgom pa'i lam //⁽²⁾

zhes bshad do //

de la rnam par rtog pa dang bcas pa'i gzugs brnyan lhag mthong (D. 315b) gi dmigs pa ni 'di ltar rnam par blta bar bya ste zhes bya bas bstan to // 'dis ni tshogs kyi lam gyi gnas skabs na yod pa'i de kho na nyid la so sor rtog pa'i shes rab bstan to // mthong lam du ni dmigs pa thams cad mnyam pa nyid du rtogs pas dmigs pa rnam pa sna tshogs su lta ba med la / 'dir ni stong pa nyid la sogs pa rnam pa sna tshogs su¹⁵ dngos po la yod par zhen cing rtog par byed pas na'o // rnam par rtog pa ni (N. 346a) mi 'dra ba 'am sna tshogs su rtog par byed pa'o // de ltar rtog pa'i shes rab de nyid ting nge 'dzin med pas na lhag mthong (G. 447a) tsam gyi rang bzhin yin la / mthong lam du skye ba'i mi (C. 315b) rtog pa'i gzugs brnyan tsam yin pas na / rnam par rtog pa dang bcas pa'i gzugs brnyan lhag mthong gi dmigs pa zhes bya'o // des na rnam par blta bar bya ste zhes 'byung ba ni rnam pa sna tshogs

(2) *Abhisamayālamkārikā* 4.53.

1 C yang /. 2 GNP dgos. 3 C las /. 4 C bzhis. 5 GNP om. 6 CD rtogs. 7 N yongsu.
8 GNP 'dis. 9 GNP lnga. 10 N logsu. 11 C du /. 12 D /. 13 D /. 14 D /.
15 N tshogsu.

su so sor brtag par bya'o¹ zhes bstan pa'o // dris pa'i skabs nas kyang bshad do // de ltar tshogs lam skyes pa la shes pa gzhan gyis bar ma chod par drod la sogs pa nges 'byed skye ba yin pas mdo'i tshig 'dis ni rnam par mi rtog pa'i gzugs brnyan zhi gnas kyi dmigs pa yang 'di nyid kyis bshad pa yin no // de la rnam par mi rtog pa ni gong du bstan pa'i thos bsam gyi shes pa kha phyir bltas nas dmigs pa sna tshogs la rtog²-pa de ltar mi rtog² cing gcig tu nang nyid du rtog pa bsdu pa ste / de nyid kyang chos thams cad mnyam pa nyid du rtogs pa'i lhag mthong mthong lam du skye ba de lta bu med kyang zhi gnas kyi rang bzhin yod pas / rnam par mi rtog pa'i gzugs brnyan zhi gnas kyi dmigs³ pa ste snga ma bzhin no //

de ltar dmigs pa gnyis bshad nas / da ni gsum pa dngos po'i mtha'i dmigs pa ston te /⁴ de la dngos po ni gzugs la sogs pa'o // de'i mtha'⁵ ni rang bzhin nam chos nyid de / de la dmigs pa ni dngos po'i mtha' la dmigs pa'o // 'di ni mthong lam mo // de la yang gsum ste / dmigs pa dang / dmigs pa de (G. 447b) la 'jug pa'i rnam pa dang / rnam pa des rnam par bltas (N. 346b) pa'i 'bras bu'o // de la phung po lnga po de dag la yang ngo bo nyid kyis stong par yang yang dag par rjes su blta'o zhes bya ba ni gong du (D. 316a) bstan pa ltar dngos po dang / mtha' dang / de la dmigs pa gsum bstan pas mthong lam gyi dmigs pa bstan pa'o // tshig don ni 'grel pa nas gsal lo // dmigs pa de la rnam pa gang gis zhugs na yang dag par rjes su lta ba⁶ phyin ci ma log par lta⁷ bar 'gyur ba yin zhe na / gzugs stong pa'o zhes bya ba la sogs pa'o //

'di la yang gsum ste / rnam pa so so'i mtshan nyid dang / grangs nges pa dang / go rims⁸ nges pa'o // de la dang po ni gsal lo // grangs nges pa ni 'dir snying po'i don bshad pa yin la / snying po'i don gyi gtso bo yang rnam par thar pa'i sgo gsum yin no // (C. 316a) rnam par thar pa'i sgo gsum yang zab mo'i don brgyad kyis bsdu te / dngos po rnams kyi ngo bo nyid stong pa nyid dang / rnam par thar pa'i sgo stong pa nyid yin la / stong pa dang⁹ mtshan ma med pa gnyis kyis kyang rang gi ngo bos stong pa dang / spyi'i ngo bos stong pa gnyis bshad pas¹⁰ lta ba'i dbang du byas nas de gnyis su stong pa nyid kyi don thams cad 'dus pa yin pas de bshad do // mtshan nyid med pa ni rgyu mtshan dang bral ba ste / rgyu yang 'bras bu la bltos¹¹ nas rgyur 'jog pa yin la / de yang kun nas nyon mongs pa rgyu (G. 448) 'bras

1 GNP *bya'o* // 2 GP om. 3 N *dmiḍ*. 4 D // 5 GNP *mtha'i*. 6 N *blta ba*. 7 GN *blta*.
8 GNP *rim*. 9 C *dang* /. 10 *pas* /. 11 CD *ltos*.

dang / rnam par bya ba'i rgyu 'bras gnyis su 'dus pa yin pas¹ ma skyes pa² ma 'gags pa³ dri ma med pa⁴ dri ma dang bral ba med pa ste / rim pa bzhin no // smon pa med pa ni 'bras bu la smon pa'i yul gnyis te / skyon dang bral ba dang⁵ yon tan dang ldan par smon pa'o // de gnyis dang bral ba ni smon pa med pa'o // des na rnam par thar pa'i sgo gsum gyi rang bzhin (N. 347a) la / dgag bya brgyad bkag pa'i rnam pa yang brgyad kho nar nges so // de ni grangs nges pa'o //

go rims⁶ nges pa ni mdo sde thams cad du bde bar gshegs pas stong pa nyid kyi rnam par thar pa sngon la bstan la / de nas mtshan ma med pa tha mar smon pa med pa'o // 'dir de nyid kyi nges pa yin no // sangs rgyas kyi lta ba dang / spyod pa dang 'bras bu gsum rim gyis skye la / de gsum la zhen pa'i gnyen po gsum rims⁷ bzhin du bstan la⁸ grangs nges pa de nyid kyi go rims⁹ yang nges so // des na mdo 'di'i bshad bya gtso bo yang zab mo'i don brgyad po 'di nyid yin no zhes (D. 316b) Dri ma med pa'i bshes gnyen gyis bshad do //

da ni dmigs pa de la rnam pa 'di brgyad kyi sgo nas rnam par bltas pa'i 'bras bu shes pa'i snang ba ji lta bu skye ba de bstan pa'i phyir / Shā ri'i bu de lta bas na de'i tshe stong pa nyid¹⁰ zhes bya ba la sogs pa ste / de lta bas na zhes bya ba ni 'di¹¹ skad gsungs pa'i rnam pa rnam kyis dmigs pa de la rnam par bltas pa (G. 448b) na'o // de'i tshe ni de'i dus na ste / rnam par bltas pa'i dus na'o // 'bras bu ci 'byung zhe na / stong pa nyid la gzugs med ces bya ba la sogs pa ste / stong pa nyid mthong ba la gzugs la sogs pa yang dag par mi¹² dmigs pa'i shes pa skye ba'o // des na dmigs pa de la rnam pa 'di brgyad kyi sgo nas goms par byas pa la stong pa nyid du snang ba'i shes pa 'di 'dra ba skyes pa ni mthong ba'i lam gyi 'bras bu yin no zhes bstan pa'o //

de ltar mthong lam skyes pa la¹³ sgom¹⁴ lam skye bas de ston pa ni / Shā ri'i bu de lta bas na zhes bya ba la sogs pa ste / 'grel pa na gsal lo // de'i rjes (N. 347b) thogs su bar chad med pa'i lam rdo rje lta bu'i ting nge¹⁵ 'dzin skye ba yin pa las de ma bstan par sangs rgyas kyi sa'i spong ba che ba ston pa ni¹⁶ bsgom¹⁷ lam gyi¹⁸ sgrib pa gnyis spangs pa la slong ba che bar 'dod pa na / de ni bsgom¹⁹ lam dang 'brel par shes

1 C pas /. 2 C pa /. 3 C pa /. 4 C pa /. 5 C dang /. 6 GNP rim. 7 CD rim.
8 C la /. 9 GNP rim. 10 D nyid la. 11 CD ji. 12 GNP ma. 13 CD la /.
14 GNP sgom. 15 GN tinge. 16 C ni /. 17 GNP sgom. 18 GNP gyis. 19 GNP sgom.

par bya ba'i don du bsgom¹ lam gyi rjes la bstan to // de yang 'dir spong ba ni lan² gcig yin no // de ni sems la sgrib pa med de zhes bya ba nas mthar phyin to'i bar go sla'o // bar chad med pa'i lam bstan pa'i phyir dus gsum du rnam par zhes bya ba nas brten nas zhes bya ba'i bar ro // sangs rgyas thams cad ces bya ba 'dir sangs rgyas ni yin la yang dag par rdzogs pa'i sangs rgyas ni ma yin no zhes 'byung ba nas / sa bcu'i khyad (G. 449a) par gyi lam la gnas pa'i byang chub sems dpa'o // de'i lam ni³ rdo rje lta bu'i ting nge 'dzin yin par 'grel pa nas gsal bar bshad do //

'dir ni mdo las rtogs pa che ba dang /⁴ sems dpa' che ba gnyis gtsor⁵ bstan pa'i zhar la bar mchod pa'i rgyu 'di yang zhar byung du bstan pa yin no // de ltar spangs pa'i bdag nyid bstan nas / rtogs pa'i bdag nyid rnam pa gnyis bstan pa'i phyir bla na med (D. 317a) pa zhes bya ba la sogs pa la⁶ de la gnyis te / ji snyed yod pa mkhyen pa dang⁷ ji lta ba mkhyen pa ste / sems dpa' che ba dang⁸ rtogs pa che ba gnyis yin pas lan gnyis su gzhas pa yin no // de la bla na med pa zhes bya bas ni dmigs par bya ba'i yul dang / de⁹ rjes su¹⁰ sgrub pa'i rgyu dang / 'bras bu thob pa bla na med pa ste / de gsum gyis ni ji snyed mkhyen pa'i ye shes (C. 317a) bstan pa yin te / de gsum dang ldan pas shes bya'i dngos po thams cad sgyur ru ra lag mthil du gzhas¹¹ pa ltar mkhyen pa'o // yang dag par mnyam pa'i byang chub tu mngon (N. 348a) par rdzogs par sangs rgyas so zhes bya bas ni ji lta ba bzhin mkhyen pa'i ye shes bstan pa ste / 'grel pa nas gsal bar bstan to //

de ltar na dbang po rtul po'i dbang du byas nas / tshogs lam sbyor lam gnyis la lan re re dang / mthong lam la gsum / bsgom¹² lam la gcig / bar chad med pa'i lam (G. 449b) la gcig / sangs rgyas kyi sa la gsum ste / de ltar lan btab pa bcus lam lnga la slob pa'i tshul legs par bshad pa yin no //

da ni dbang po rnon po'i dbang¹³ byas nas¹⁴ shes rab kyi pha rol tu phyin pa'i don mdor bsdus nas gsang sngags kyi don du bshad pa ni / Shā ri'i bu de lta bas na zhes bya ba la sogs pa ste / lam lnga po de dag¹⁵ shes pa'i don dang¹⁶ skyob pa'i don dang / de nyid¹⁷ gnyis kyi phan yon dang¹⁸ sngags nyid bshad pa ste¹⁹ / de ni lan bcu gcig pa yin no //

1 GNP *sgom*. 2 GNP *lam*. 3 CD *na*. 4 CD *om*. 5 G *gcor*. 6 CD *la* /. 7 C *dang* /.
8 C *dang* /. 9 D *de de*. 10 N *rjesu*. 11 CD *bzhag*. 12 DGNP *sgom*. 13 D *dbang du*.
14 C *nas* /. 15 GNP *nyid*. 16 C *dang* /. 17 C *om*. 18 GNP / *for dang*. 19 C *dang*.

da¹ ni dri ba'i skabs su² ji ltar bslab par bya zhes dris pa'i lan yongs su³ rdzogs so zhes
bstan pa'i phyir de ltar bslab par bya'o zhes bstan pa yin no //

dge slong legs pa'i shes rab kyis //⁴

Mar me mdzad dpal ye shes la //⁵

gsol btab Legs par bshad pa yin //

de don bdag gis gzhung du bris //

deng sang bod kyi rgyal khams 'dir //

sngar gyi lugs ngan la zhen pas //

da dung dam pa'i gdams ngag la //

legs bshad yin par mi shes kyang //

'on kyang shes rab ldan pa la //

phan snyam snying rje'i bsam pas bris //

rgyal yul legs par rtogs byed cing //

sdang bas smra bar ma gyur cig //

rgya gar gyi mkhan po Dī paṃ ka ra shrī dznyā na dang / lo tsā⁶ ba dge slong Tshul khrims
rgyal bas bsgyur cing zhus te gtan la phab⁷ pa'o ///

1 CD de. 2 CD om. 3 N yongsu. 4 GNP /. 5 GNP /. 6 G tsa. 7 G om.

27 *Prajñāpāramitāpiṇḍārhapradīpa*

//¹ rgya gar skad du / *Pra dznyā pā ra mi tā² pindā rtha³ pra dī pa⁴ /*

bod skad du / *Shes rab⁵ kyi pha rol tu phyin pa'i don bsdus sgron ma /*

bcom ldan 'das ma shes (N2. 436a) rab kyi pha rol tu phyin pa⁶ la phyag 'tshal lo //⁷

[Introduction]

dus gsum rgyal ba bskyed pa'i yum //
shes rab⁸ pha⁹ rol¹⁰ phyin pa la //
phyag 'tshal nas ni shes rab kyi //
pha rol phyin pa'i bsdus don bshad //
mngon rtogs rnam pa bzhi yin te // 5
mkhyen¹¹ pa gsum dang chos sku la //
mngon sum rtogs pas mngon rtogs te //
sbyor ba bzhi ni mngon phyogs yin //
'phags pa Thogs med de¹² ltar bzhed //
rNam par grol sde'i gzhung gis ni // 10
mngon rtogs rnam pa bzhi yin te //
sbyor ba bzhi po kho na ste //¹³
mkhyen pa gsum (P2. 463b) dang chos sku ni //
yul¹⁴ dang 'bras bu dag tu 'dod //
gSer gling Shā nti¹⁵ rnam¹⁶ gnyis kyi¹⁷ // 15
mngon rtogs bdag nyid bdun¹⁸ yang ste //
sges rab pha rol (P1. 253b) phyin bdag¹⁹ 'dod //
'bras bu chos sku mdzad pa yin //
brgyad ka mngon rtogs Seng bzang dang //
Bud dha²⁰ shrī dznyā na 'ang²¹ bzhed // 20

1 G1P1 # // *phar phyin bsdus pa jo bo rjes mdzad pa bzhuga /* (G. 337b)

G2N1N2P2 # // *shes rab kyi pha rol tu phyin pa'i don bsdus sgron ma bzhugs //* (G. 568b)

2 G2N2P2 *ta.* 3 G2N2P2 *pin twar tha.* 4 G1G2N1N2P1P2 *paṃ.* 5 G2 om. 6 CD *ma.*

7 G2 om. 8 N2 *rab kyi.* 9 G1 *kyi.* 10 N1 *rol tu.* 11 P1 *khyen.* 12 P1 *ji.* 13 P2 /.

14 CD *yum.* 15 CDG2N2P2 *shānti.* 16 P1 *rnams.* 17 G2N2P2 *kyi.* 18 N2 *bdu.*

19 G2N2P2 *dag.* 20 CDG2N2P2 *buddha.* 21 CD 'di.

mngon rtogs shes rgyud rim pa ste //
 dngos po brgyad ni brjod bya la //
 skabs ni rjod¹ byed Shān ti² gsungs³ //
 kha cig skabs brgyad dag gis ni //
 gang zag⁴ brgyad kyi cha⁵ rkyen⁶ zhes // 25
 kha cig thams cad mkhyen pa dang //
 byang chub sems dang nyan⁷ thos kyi //
 gsum gyi lam⁸ du bstan to zhes //
 Seng ge⁹ bzang po'i gzhung gis ni //
 thams (G2. 269a) cad¹⁰ (N1. 262a) mkhyen pa'i lam du ni // 30
 gnyis ka tshang bar 'dod pa yin //
 de ltar min na rdzogs zer //
 (G1. 338a) bla ma gSer gling bzhed pa yis //
 'ga' zhig yum¹¹ la¹² 'jug pa na //
 gzi ma ma dag dus¹³ dag tu // 35
 gang¹⁴ zag brgyad kyi lam¹⁵ du 'dod //
 ma dag dag par byed par byed dus su¹⁶ //
 gang zag gsum¹⁷ gyi lam¹⁸ du 'dod //
 dag pa lam¹⁹ du byed dus²⁰ (N2. 436b) su //
 gang zag gcig gi lam yin gsung²¹ // 40
 de las bsdus don bshad pa ni //
 grangs (C. 236b) nges²² go rim²³ zlos spong dang //
 rang rang ngo bo bshad pa'o //
 grangs nges dag ni bstan pa na²⁴ //
 thos bsam yul²⁵ du kun mkhyen (D. 231a) gsum // 45
 sgom pa'i dus su sbyor ba bzhi //
 'bras bu mthar thug chos kyi sku //

1 G2P1P2 *brjod*. 2 CDG2N2P2 *shānti*. 3 G2N2P2 *gsung*. 4 N2 *dag*. 5 G1N1P1 *chag*.
 6 G1 *rgyen*. 7 C *can*. 8 G1N1P1 *lan*. 9 P1 *sengge*. 10 N2 *thang* for *thams cad*.
 11 CDG2N2P2 *yum*. 12 GN2P2 *na*. 13. G2N2P2 *sa*. 14 C *ngag*. 15 N2 *lam*.
 16 N2 *byedusu*. 17 N2 *zagsum*. 18 N2 *lam*. 19 N2 *lam*. 20 N2 *byedus*. 21 N2 *gsungs*.
 22 G1N1P1 *med*. 23 CD *rims*. 24 G2N2P2 *nas*. 25 CD *yum*.

thos bsam dus su 'bras bu dang //
 rgyu dang mi mthun phyogs dag tu //
 gtan la phab pa rdzogs pa yin // 50
 sgom pa'i dus su¹ sbyor ba dang //
 gnas skabs 'bras bu brtan² byed dang //
 rgyu yi mthar thug dag³ gis rdzogs //
 de ltar na ni grangs nges so⁴ //
 go rim⁵ skye ba'i rim pa ste // 55
 dang po thos bsam byed pas na //
 (P2. 464a) de yi yul ni sngon du bshad //
 de yang dang po⁶ 'bras shes byed //
 de nas rgyu dang spang bya dag //⁷
 rim pa bzhi du gtan la 'bebs // 60
 sbyor ba bzhi yi rim pa yang //
 rnam kun mngon rdzogs tshogs lam nas //
 yod pas dang por bstan⁸ pa yin //
 de nas gsum⁹ po rim bzhi skye¹⁰ //
 de ltar de ni go rim mo¹¹ // 65
 zlos spong zhar la bstan pa 'o //
 rang rang ngo bo bshad par bya //
 thams (G2. 569b) cad mkhyen pa'i don bcu yang //
 Seng ge¹² bzang pos gnyis su¹³ bsdu //
¹⁴rgyu dang 'bras bu dag tu 'o //¹⁴ 70
 rgyu la rnam pa gsum du ste //
 dang po sems bskyed¹⁵ rnam dag gi¹⁶ //
 (G1. 338b) gdams ngag dag la bslab par bya //
 de nas sgrub pa rnam bzhi ste //
 sgrub pa'i rten dang dmigs pa dang // 75
 sgrub pa'i ched¹⁷ dang sgrub pa dngos //

1 N2 dsu. 2 G2N2P1P1 bstan. 3 P2 rag. 4 N2 ngeso. 5 CD rims. 6 D pa.
 7 CDG2N2P2 /. 8 G2 brtan. 9 N2 gsum. 10 G1N1P1 bskyed. 11 CD rims so.
 12 P1 sengge. 13 G1G2N2 gnyisu. 14 G2 repeats. 15 G1 skyed. 16 CDG2N2P2 gis.
 17 C che, G1N1P1 phyed.

de ni (P. 254a) rnam bzhi go cha dang //
 'jug pa tshogs dang nges 'byung ngo¹ //
 (N1. 262b) sa mtshams sbyor bas bzhi ru bstan //
 'bras bu² 'dod pa bstan pa ni // 80
 nges 'byed dag gis mtshon te³ bshad //
 thams cad mkhyen pa'i bsdus don ni //
 dbye ba ngo bo mtshan nyid dang //
 sa mtshams zlos spong byed pa ste //
 (N2. 437a) rnam pa drug tu yang dag 'dod // 85
 dbye ba rgyu yi sa dang ni //
 'bras bu⁴ sa yi⁵ mkhyen pa 'o //
 'bras la ji snyed ji lta ba //
 thams⁶ cad dag ni shes pa'o //
⁷ngo bo shes rab snying rje ste // 90
 mtshan nyid thams cad shes pa'o //⁷
 sa mtshams gnas skabs tshogs lam nas //
 'bras bu⁸ sa ni sangs rgyas sa //
 chos kyi sku dang mi zlos te⁸ //
 'di ni spyi ru bshad pa ste // 95
 chos sku⁹ rang las skye ba 'o //
 byed pa chos kyi 'khor lo bskor //
 (D. 231b) lam shes pa yang de bzhin drug //
 dbye na sangs rgyas byang sems (P2. 464b) lam //
 nyan thos lam dang (C. 237a) gsum du 'dod // 100
 yang na theg gsum lam (G2. 570a) du 'dod //
 thams cad la¹⁰ shes thams cad kyi //
 shes pa¹¹ gnyis su¹² 'dod pa yin //
 ngo bo shes rab snying rje ste //
 mtshan nyid lam gsum skye med shes // 105

1 N2 'byungo. 2 G2N2P2 bur. 3 CD de. 4 G1N1P1 bu. 5 N1 sa'i.
 6 G2 nges byed dag gis mtshon te bshad // thams. 7 G2 repeats. 8 G1N1P1 ste.
 9 G2P1 sgu. 10 CD lam. 11 CD la. 12 G1G2N2 gnyisu.

sa mtshams gnas skabs sems bskyed nas //
 rdzogs pa sa drug dag tu 'dod //
 mthar thug sangs rgyas sa yin no //
 'di ru mthong lam bshad pa ni //
 rgyud la skye ba'i cha nas bshad // 110
 gzhi¹ ru mthong lam bshad pa ni //
 ldog pa'i cha nas bshad pa yin //
 yang na² 'di ru bshad pa ni //
 lam la shes pa'i cha nas bshad //
 (G1. 339a) 'og tu gzhi³ shes tshul nas bshad // 115
 des na⁴ zlos pa'i skyon dang bral //
 byed pa sems can smin⁵ byed do //
 gzhi⁶ shes kyang ni de bzhin drug //
 dbye ba spang dang blang gnyis so //
 blang bya gzhi⁷ shes ngo bo ni // 120
 shes rab dang ni snying rje 'o //
 spang⁸ bya gzhi⁹ shes ngo bo ni //
 shes rab dag tu 'dod pa yin //
 mtshan nyid gzhi¹⁰ la bdag med gnyis //
 shes pa blang bya'i mtshan nyid do // 125
 gang zag bdag med shes pa ni //
 spang bya'i gzhi¹¹ shes mtshan nyid do¹² //
 sa mtshams gnas (N2. 437b) skabs da¹³ ltar gnas¹⁴ //
 rdzogs pa brgyad pa'i¹⁵ sa na 'o //
 mthar thug¹⁶ (N1. 263a) sangs rgyas¹⁷ sa na'o // 130
 zlos spong¹⁸ lam du bshad pas shes //
 byed pa nyon mongs sgrib pa spong¹⁹ //
 de ni mkhyen gsum bsdus don yin //
 rnam kun mngon rdzogs de bzhin²⁰ drug //
 (P1. 254b) dbye ba yul gyi²¹ rnam gnyis so²² // 135

1 G1N1P1 bzhi. 2 G2N2P2 ni. 3 G1P1 bzhi. 4 G1N1P1 de nas. 5 CD smon. 6 G1P1 bzhi.
 7 G1P1 bzhi. 8 G2N2P2 blang. 9 G1P1 bzhi. 10 G1P1 bzhi. 11 G1P1 bzhi. 12 G1 nyido.
 13 C de. 14 CDG2N2P2 nas. 15 G1P1 po. 16 G1G2P1 thugs. 17 G2 rgya.
 18 G1N1P1 spongs. 19 G1N1P1 spongs. 20 P1 bzhan. 21 CD gyis. 22 G2 gnyiso.

gnas skabs kyis ni bcu gcig (G2. 570b) go //¹
 ngo bo shes rab snying rje 'o //
 mtshan nyid ma lus skyed² pa'o //
 sa mtshams³ tshogs lam chung ngu nas //
 rdzogs pa brgyad pa'i sa na 'o // 140
 mthar thug⁴ sangs rgyas sa na 'o //
 zlos spong mkhyen gsum mtshan nyid nas //⁵
 (P2. 465a) 'dir ni rgyud la⁶ bskyed⁷ pa nas //
 zhing dag thabs mkhas byed pa 'o //
 rtse mo mthar gyis skad cig ma // 145
 gsum yang drug drug shes par bya //
 rtse mo'i dbye ba (D. 232a) drug gam bdun //
 ngo bo lhag mthong zhi gnas so⁸ //
 mtshan nyid phul du byung ba 'o //
 spang bya spong bar byed pa 'o //⁹ 150
 sa mtshams drod¹⁰ chen rnam grol nas //
 bar chad med pa'i lam na yod //
 bar chad med pa'i cha nas bshad //
 skad cig byang chub rgyu yi (G1. 339b) chos //
 skad cig gcig la rdzogs pas na¹¹ // 155
 zlos pa'i skyon dang bral ba (C. 237b) yin //
 mthar gyis dbye ba de¹² bzhin no //
 ngo bo de bzhin mtshan nyid ni //
 mkhyen gsum rim gyis¹³ sgom¹⁴ pa yin //
 kha cig na re bskyar yin zer // 160
 gzhung las snga ma dag ni gsal //
 rtse mo¹⁵ ma thob thob byed dang //
 brtan¹⁶ par byed pa byed pa yin //
 thob byed sa mtshams drug nas yod //

1 CG1G2N1N2P1P2 /. 2 P2 *bskyed*. 3 G2 *'tshams*. 4 G1N1N2P1 *thug*. 5 G2 *om*.
 6 N2 *las*. 7 CDG2 *skyes*, N2P2 *skyed*. 8 G2N2 *gnaso*. 9 P1 *om*. 10 CD *grol*.
 11 CD *pa nas*. 12 P2 *da*. 13 G1N1P1 *gyi*. 14 CD *bsgom*. 15 N1 *mo'i*. 16 P1 *bstan*.

brtan¹ par byed pa'i sa mtshams ni // 165
 drod chen khyad par lam na yod //
 'dir ni pha rol phyin pa drug //
 rim pa'i cha nas bshad pa yin //
 gzhan du de ltar ma bshad pas //
 sngar bzhin zlos pa'i skyon dang bral // 170
 mthar gyis pa ni rnam gnyis te² //
 rtse mo thob par (N2. 438a) byed pa dang //
 thob pa brtan³ par byed pa (G2. 571a) las⁴ //
 Seng ge⁵ bzang⁶ po brtan⁷ byed ni //
 'ba' zhig gsal bar⁸ bshad pa yin // 175
 skad cig dbye ba rnam bzhi te⁹ //
 gzhung nas¹⁰ gsal bar bshad pa yin //
 ngo bo zhi gnas lhag mthong ngo //
 skad cig gcig la rgyu yi chos //
 dkar po (N1. 263b) thams cad rdzogs pa ni¹¹ // 180
 mtshan nyid dag tu 'dod pa yin //
 sa mtshams dag ni sa bcu yi¹² //
 bar chad med pa'i lam na yod //
 kha¹³ cig rnam grol lam ni //
 yod do zhes kyang (P. 465b) zer ba yod // 185
 byed pa chos sku skyed¹⁴ pa'o¹⁵ //
 zlos spong sngar ni spangs¹⁶ zin no //
 chos sku'i 'og nas ston pa'o //
 de ni shin¹⁷ tu bsdus don no //

[Chapter 1]

de nyid rgyas par bshad pa las //¹⁸ 190
 dang po¹⁹ sems bskyed bshad pa ni //

1 G1N1P1 *rtan.* 2 G1N1P1 *ste.* 3 G1 *bstan.* 4 G2 *pa las.* 5 P1 *sengge.* 6 G2 *zang.*
 7 G1N1P1 *rtan.* 8 G1 *ba.* 9 CD *ste.* 10 G2N2P2 *las.* 11 CD *yin.* 12 G1G2N1P1 *yi.*
 13 D *ba.* 14 G1N1P1 *bskyed.* 15 D *pa po.* 16 G2N2P2 *spang.* 17 G2 *shin na.*
 18 G2 /. 19 CD *po'i.*

dbye dang (G1. 340a) de yi¹ rgyu mtshan dang //
 ngo bo mtshan nyid sa mtshams dang //
 byed pa dang ni zlos² skyon med //
 de yi rgyu dang (P1. 255a) bcu ru 'dod // 195
 dbye ba smon 'jug rnam gnyis dang //
 yang na nyi shu gnyis (D. 232b) su³ 'dod //
 blangs dang chos nyid thob la sogs //
 mdo sde rgyan la sogs nas bshad //
 smon la dbye ba med pa ste // 200
 'jug la dbye ba zhes bya'o //
 Shes rab 'byung gnas blo gros zer //
 sems bskyed dang po smon pa ste //
 lhag ma 'jug⁴ la dbye'o⁵ zhes //
 lHa yi⁶ dbang po⁷ blo gros zer // 205
 dbye ba'i rgyu mtshan grogs yin zhes //
 Seng ge⁸ bzang pos gsal⁹ bar bshad //
 dmigs pa yul gyis¹⁰ dbye'o zhes //¹¹
 'Phags¹² (G2. 571b) pa rnam grol bzhed do¹³ zer¹⁴ //
 dang po ngo bo'i sgo nas dbye // 210
 lhag ma grogs kyi¹⁵ shān ti¹⁶ gsungs¹⁷ //
 tshogs na gsum ste sbyor na gcig /
 sa bcu na ni bcu yin te //
 (C. 238a) lnga¹⁸ ni khyad par lam na yin //
 gsum ni sangs rgyas sa na'o // 215
 kha cig sa mtshams (N2. 438b) med do¹⁹ zhes //
 'dod pa mdo sde²⁰ rgyan dang 'gal //
 khyad par can la dmigs pa yis²¹ //
 yid kyi rnam shes ngo bor 'dod //

1 G1N1P1 *yi*. 2 P2 *zos*. 3 G2N2 *gnyisu*. 4 CD *mjug*. 5 G1 *dbye ba'o*. 6 P2 *lha'i*.
 7 CDG2N2P2 *po'i*. 8 G2N2P1 *senge*. 9 G2 *gsol*. 10 G2N2 *gyi*. 11 P1 *om*. 12 G2 *'phad*.
 13 G2 *bzhedo*. 14 P2 *zhes*. 15 G1G2N1N2P1P2 *kyis*. 16 CD *shāntis*, G1N2P2 *shānti*.
 17 G2N2P2 *gsung*. 18 N1P1 *snga*. 19 N2 *medo*. 20 G2P2 *med do*, G2 *medo* for *mdo sde*.
 21 C *yin*, DG2N1N2P2 *yi*.

gzhan gyi don du sangs rgyas 'dod // 220
 mtshan nyid du ni Byams pas bshad //
 zlos¹ spong² 'og tu bshad par bya //
 byed pa rnam³ pa lnga ru ste //
 rnam par smin dang rgyu mthun⁴ dang //
 dbang dang bral dang skyes bu 'o // 225
 rgyu ni rnam pa mang⁵ yang ni //
 gtso bo'i rgyu⁶ ni snying rje ste //
 mdo nas yang dag gsal bar bshad //
 (P2. 466a) gdams ngag rnam pa brgyad⁷ du ste //
 dbye ba yul (G. 340b) gyis⁸ bcu yin no⁹ // 230
 byed pas dbye na gnyis su¹⁰ ste //
 gdams dang rjes su¹¹ gdams pa 'o //
 ngo bo dag¹² gi 'khor lo yin //
 gzhan (N1. 264a) slob la 'doms¹³ mtshan nyid do //
 ma thob thob dang thob mi nyams // 235
 'di yi¹⁴ byed pa yin par 'dod //
 sems bskyed nas ni sa bcu'i bar //
 'di yi¹⁵ sa mtshams yin par gsungs //
 tshogs na gsum ste sbyor na lnga //
 mthong sgom¹⁶ gnyis na re re ste // 240
 go rim¹⁷ bzhin du yin no¹⁸ zhes //
 de skad¹⁹ kha cig 'dod pa yod²⁰ //
 go rim²¹ skye ba'i rim pa yin //
 'di tsam gyis rdzogs grangs nges so //
 'di dang lam shes gnyis su²² yang // 245
 (G2. 572a) bsgrub pa gnyis su²³ bshad pa yang //
 nyan dang (D. 233a) sgom pa'i cha nas ni //
 bstan pas zlos skyon med pa 'o //

1 N2 *zlas*. 2 G1N1P1 *spangs*. 3 P1 *rnams*. 4 G2 'thun. 5 N1 *med*. 6 G2N2P2 *rgyun*.
 7 G1N1P1 *khyad*. 8 G1N1P1 *gyi*. 9 G2 *yino*. 10 G1G2 *gnyisu*. 11 G2N2 *rjesu*.
 12 G1N2P1 *ngag*. 13 G1N1P1 'don. 14 G1N1P1 *yis*. 15 G1N1P1 *yis*. 16 G1 *sgoms*.
 17 CD *rims*. 18 G2N2 *yino*. 19 G2N2P2 *dag*. 20 C *yin*. 21 CD *rims*. 22 N2 *gnyisu*.
 23 G1N2 *gnyisu*.

nges 'byed dbye ba rnam bzhi yin //
 sa mtshams sbyor lam¹ kho na ste // 250
 byed pa mthong lam² skyed³ pa yin //
 (P1. 255b) ngo bo dbang snga stobs lnga yin //
 sgom⁴ byung shes rab yin zhes⁵ bshad //
 lam shes nges 'byed nyan thos kyi //
 rnam⁶ kun nges 'byed kun rdzob kyi⁷ // 255
 'di ni don dam cha nas te //
 bstan pas zlos skyon med do⁸ zhes //
 Bud dha⁹ shrī dznyā na 'di¹⁰ 'dod //
 nges 'byed bden pa rtogs pa ste //
 de cha¹¹ sdug bsngal chos shes¹² bzod // 260
 de dang mthun pa mtshan nyid yin //
 sbyor lam mos spyod cha mthun ni //
 (N2. 439a) 'di yi ming gi rnam grangs¹³ yin //
 rten gyi dbye ba dkyus na gsal //
 ngo bo¹⁴ chos dbyings yin yang ni // 265
 de yi¹⁵ 'dod pa mi mthun no //
 yon tan skyed pa mtshan nyid do //
 (C. 238b) sa mtshams chos drug gsal ba ste //
 bdun po chos drug re re la //
 yod pa nyid du dpyad na¹⁶ snang¹⁷ // 270
 dper na drod kyi (P2. 466b) bar chad (G1. 341a) med //
 gnyen po¹⁸ spong ba rnam grol na¹⁹ //
 yongsu²⁰ gtugs²¹ pa bzhi po ni //
 khyad par lam na yod pa'o //
 chos drug gzhan yang de bzhin sbyor²² // 275

1 C las, G2N2P2 ram. 2 CD las. 3 G1N1P1 bshad. 4 CD bsgoms. 5 C shes.
 6 G2 rnam kun ngas 'byad nyan thas kya // rnam. 7 G1N1P1 kyis. 8 G2 medo.
 9 CD buddha, G2N2P2 buddhā. 10 G2N2P2 om. 11 G2N2P2 la. 12 P1 om. 13 C gangy.
 14 N2 om. 15 G1N1P1 yis. 16 CD na. 17 G2N2P2 sdang. 18 G1N1P1 po'i.
 19 G1N1P1 ni. 20 G1N1N2P1 yongsu. 21 N1P1 gtug. 22 G2N2P2 sbyar.

'dir ni rang bzhin dmigs par ni //
 'gyur cha bstan pas zlos¹ skyon bral //
 'Phags pa rNam² grol de skad gsungs³ //
 yon tan skyed pa'i byed pa yod //
 dmigs pa dbye ba bcu gcig ste // 280
 go rim⁴ skye ba'i rim (G2. 572b) pa ste //
 'di tsam kho nas dmigs rdzogs pas //
 grangs kyang bcu gcig kho nas⁵ bshad //
 (N1. 264b) dang po gsum ni tshogs lam dang //
 sbyor dang mthong sgom mi slob lam // 285
 bzhi la rim bzhin gnyis gnyis su⁶ //
 dpyad pas de ltar 'dra bar snang //
 ngo bo chos kun⁷ mtshan nyid ni //
 spang blang gnyis su⁸ dmigs so⁹ zhes //
 Seng ge¹⁰ bzang pos¹¹ 'grel chen nas // 290
 kha cig bcu po gsum po las //
 gnyis bzhag¹² dge ba la dmigs nas //
 de la gnyis las¹³ phyi ma la //
 lhag ma kun la de ltar 'dre¹⁴ //
 'di ru dngos su¹⁵ ched (D. 233b) du¹⁶ ni //¹⁷ 295
 brgyad pa'i sgo nas dmigs pa ni¹⁸ //
 phog dang sbyor ba lta bus ni //
 zlos skyon med ces rNam grol gsungs¹⁹ //
 ched du bya ba rnam pa gsum //
 ngo bo sems can thams cad yin // 300
 de don sgrub pa mtshan nyid yin //
 sa mtshams dmigs pa de²⁰ lta nas //
 grub pa sems can sangs rgyas na²¹ //
 Seng ge²² bzang po 'dod pa yin //

1 G2N2P2 zlog. 2 N2 rnams. 3 CDN2P2 gsung. 4 CD rims. 5 CD nar. 6 G2N2 gnyisu.
 7 G2N2P2 rkun. 8 G2 gnyisu. 9 G2N2P2 po. 10 N2P1 sengge. 11 G1N1P1 po'i.
 12 G2 gzhang. 13 G2N2P2 la. 14 G1N1 'gro, P1 'gro ba, P2 'dres. 15 G2 dngosu.
 16 G2 chedu. 17 P1 om. ni // 18 G2N2P2 ste. 19 N1P1 gsung. 20 G2P2 da. 21 CD ni.
 22 N2P1 senge.

spong ba rdo rje lta bu na¹ // 305
 sems pa² dang rtogs³ sangs rgyas sa //
 Bi ma⁴ mi (N2. 439b) tra rgya 'grel nas //
 ngo bo rang la sbyar⁵ ba dang //
 gzhan la sbyar bas⁶ mi mthun pas //
 sa mtshams dag (P1. 256a) kyang mi mthun no // 310
 go cha'i ngo bo brtson 'grus te //
 dbye na panydzi⁷ ka nas⁸ drug //
 'di nas sum cu drug tu (G1. 341b) bshad //
 (P2. 467a) re re la ni drug drug tu⁹ //
 dge ba sgom pa mtshan nyid do¹⁰ // 315
 sa mtshams tshogs lam na yod ces //
 slob dpon chen po Thogs med gsungs¹¹ //
 'dir ni mos pa tsam gyis so¹² //
 'jug pa mngon¹³ 'jug (G2. 573a) zlos skyon med //
 'jug pa¹⁴ dbye dgu dkyus nas gsal // 320
 sa mtshams (C. 239a) sbyor lam na yod ces //
 snga ma bzhin du¹⁵ Thogs med gsungs¹⁶ //
 ngo bo dbang lnga stobs lnga'o //
 mtshan nyid pha rol drug drug la //
 dngos su 'jug par byed pa'o // 325
 tshogs kyi¹⁷ sgrub pa bcu bdun te //
 sa mtshams gzungs¹⁸ tshogs man chad ni //
 chos mchog man chad du rdzogs zer //
 gnyis ni mthong sgom gnyis na 'o //
 ngo bo shes rab snying rje ste // 330
 mtshan nyid thams cad mkhyen pa yi //
 rgyu rdzogs pas ni rNam grol gsungs //

1 CN2 ni. 2 G1N1P1 dpa'. 3 G2P2 rtog. 4 G1 mi. 5 G2N2P2 sbyor. 6 G2N2P2 ba.
 7 G2N2P2 pan tsi. 8 G2N2P2 na. 9 CD bshad. 10 N2 nyido. 11 G1N1N2P1P2 gsung.
 12 CD ni, P2 su, G2Ns gyisu. 13 CDG2N2P2 dngos. 14 CD pa. 15 N1 ru.
 16 G1N1N2P1P2 gsung. 17 G1 pa. 18 G1N1P1 gzung.

nges 'byung brgyad du¹ bshad pa las //
 grangs² nges yod pa ma yin yang //
 'khor (N1. 265a) nye ba la dgongs nas bshad // 335
 ngo bo shes rab snying rje ste //
 nges par 'byung ba mtshan nyid yin //
 sa brgyad nas ni sangs rgyas sa //
 de nas yod de³ 'grel chen nas //
 Byams pas dpe ru blangs nas bshad // 340
 kha cig sgrub pa yin pas na⁴ //
 sangs rgyas sa na med ces zer⁵ //
 kha cig sangs rgyas sa kho na //
 yod de sgrub pa yin pas na //
 zer yang dang po kho na 'thad // 345

[Chapter 2]

thams cad mkhyen pa rgyas phyir dang //
 (D. 234a) lha yi log rtog bsal⁶ ba dang //
 'dod chen ma yin byang sems kyi //
 lam ni bstan phyir lam shes bshad //
 mog mog por byed la sogs la // 350
 kha cig rten sogs tha snyad 'dogs //
 lam (N2. 440a) gyi yan lag bstan to⁷ zhes //
 Shes rab 'byung gnas blo gros zer //
 (G1. 342a) snod du rung bar (P2. 467b) bya ba'i phyir //
 'od (G2. 573b) kyis mtshon nas⁸ nga rgyal gcag⁹ // 355
 byang chub kho na¹⁰ sems bskyed pas //
 yul nges pa ste de la rtsod //
 byang chub kho nar mi 'thad de //
 rigs lnga zhes ni smra bas na //
 rigs lnga drang don¹¹ yin pas na // 360
 khyab¹² pa zhes ni 'thad pa yin //

1 G2N2P2 *pa*. 2 G2N2P2 *grang*. 3 G2N2 *yode*. 4 D *ni*. 5 G2 *zer na*. 6 G1 *gsal*.
 7 G2 *to //*. 8 G2 *mtshonas*. 9 CDG2N2P2 *bcag*. 10 CD *na'i*. 11 G2 *sdon*. 12 G2 *de khyab*.

'dod chen ma yin byang sems kyis¹ //
 gtso bor nyon mongs mi spong bas //
 nyon mongs ma spangs rang bzhin yin //
 'o na sgrub² pa ci yin zhes // 365
 zer ba'i lan du sems can ni //
 smin par byed pa las³ yin no⁴ //
 (P1. 256b) theg gnyis sgom⁵ lam mi 'chad⁶ de //
 rang rang sngar rgyun yin pas gsal //
 byang sems la ni mi bshad de // 370
 shes nas 'da' bar byed pas su //
 sgom⁷ pa ma yin pas ma bshad //
 sbyor lam gsal te⁸ mthong lam ni //
 bden pa bzhi la dmigs nas su⁹ //
 skad cag bco lnga bcu drug (C. 239b) ni // 375
 sde pa rnam gnyis 'dod pa yin //
 'dod pa dmigs pa chos kyi¹⁰ bzod //
 khams gnyis la dmigs rjes su¹¹ bzod //
 bzod dang shes pa'i khyad par ni //
 bar chad med dang rnam grol te¹² // 380
 de ltar bden pa re re la //
 bzod gnyis shes (N1. 265b) gnyis brgyad brgyad 'ang¹³ //
 kha cig lam 'di¹⁴ bshad pa ni //
 shes pa'i don sdug bsngal gcig ni //
 rgyud la¹⁵ skye ba'i¹⁶ don yin zer // 385
 rgyud la skyed pa mi mthun te //
 kha cig mthong ba'i lam gnyis ni //
 drod dang bzod pa na yod zer //
 kha cig mthong¹⁷ lam na¹⁸ yod kyang //
 ldog pa'i¹⁹ (G2. 574a) dbye bas tha dad zer // 390

1 G2 kyis. 2 G1 bsgrub. 3 G2N2P2 la. 4 N2 yino. 5 CD bsgom. 6 CD 'thad. 7 CD smon.
 8 G2 te // 9 G2N2 dmigsu med, P2 dmigs su med. 10 CD kyis. 11 G2N2 rjesu.
 12 G2N2 ste. 13 CD yod. 14 G1N1P1 ni. 15 G2N2P2 rim. 16 CD skye ba'i, P2 bskyed pa'i.
 17 CD mthong ba'i. 18 CD om. 19 P2 pa'i pa'i.

de ltar mthong lam rnam gsum ste¹ //
 gang zag brda² dang chos kyi brda //
 gnyis ka'i brda³ bsal⁴ mthong ba'i (G1. 342b) lam //
 de⁵ yi⁶ rten ni gling gsum⁷ (N2. 440b) gyi //
 mi rigs gsum⁸ dang lha rigs⁹ drug / 395
 (P2. 468a) yin zhes bstan bcos chen por (D. 234b) bshad //
 sa ni drug la brten¹⁰ zhes kyang //
 sde¹¹ pa rnam gnyis 'dod pa'o //
 theg chen bsam gtan bzhi pa¹² la //
 brten¹³ pa yin te bskyed sla zer // 400
 spang bya thun mong du bstan pa //
 rtog¹⁴ pa brgya rtsa brgyad dang ni //
 brgya¹⁵ rtsa bcu gnyis nyon mongs so //
 rim gyis spong¹⁶ ba ma yin te //
 bar chad med pa'i lam du ni // 405
 thams cad spangs zhes¹⁷ theg chen gzhung //
 rnam grol lam gyis spangs¹⁸ zhes¹⁹ pa //
 theg pa chung ngu'i 'dod pa yin //
 ngo bo zhi gnas lhag mthong yin //
 byang chub yan lag bdun bshad pa // 410
 zhi gnas lhag mthong ngo bo yin //
 mtshan nyid ma mthong mthong²⁰ ba ste //
 chos kyi dbyings la dmigs pa'o //
 mthong lam rjes shes med do zhes //²¹
 zer ba yod de gzhung dang 'gal // 415
 shes pa dus rdzogs zer ba'i lan //
 theg chen 'dod pa skad cig ma //
 bcu drug gis ni rdzogs so²² zhes //
 bstan pa rnam gzhang²³ spros pa yin //

1 CD *te*. 2 P2 *brda'*. 3 G2N2P2 *brdar*. 4 CD *gsal*. 5 P1 *da*. 6 G1N1P1 *gis*. 7 N2 *gsum*.
 8 CD *drug*. 9 G1P1 *rig*. 10 G2N2P2 *rtan*. 11 P1 *bde*. 12 P1 *pha*. 13 G2N2P2 *rtan*.
 14 G2 *rtogs*, N2 *rtag*. 15 N2 *rgya*. 16 G2 *spongs*. 17 G1N1P1 *spang shes*.
 18 G1G2N1N2P1P2 *spang*. 19 G1N1P1 *shes*, G2N2P2 *bas*. 20 G2 *om*. 21 N2 *om*.
 22 G2 *rdzogso*. 23 G2N2P2 *bzhag*.

skad¹ cig ma ni gcig gam gnyis // 420
 rdzogs pa don dam rig² pa yin //
 bzod³ gnyis gzung 'dzin gnyis su⁴ ni //
 (P1. 257a) rim pa bzhin du med pa ru //
 rtogs⁵ pa yin zhes Seng bzang⁶ gsungs⁷ //
⁸bzod pa zhes⁹ pa snga ma bzhin //⁸ 425
 bzod¹⁰ (G2. 574b) pa ma dag shes pa ni //
 bden pa dag la dmigs pa'o //
 mthong lam bsdus pa de tsam mo //
 sgom¹¹ lam byed pa drug kyang ni //
 grangs nges go rim¹² (C. 240a) yod ma yin // 430
 zag bcas zag med gnyis ka yis¹³ //
 byed pa yin¹⁴ zhes Seng¹⁵ bzang gsungs¹⁶ //
 zag med kho na'i yin zhes pa //
 Shān ti¹⁷ (G1. 343a) pa¹⁸ yi¹⁹ (N. 266a) 'dod pa yin //
 dang por bshad pa nyung ba dang // 435
 'bras la brod²⁰ pa yin pas su //
 sgom²¹ lam rnam gnyis zag bcas (P2. 468b) dang //
 (N2. 441a) zag pa med pa'o²² zag bcas ni //
 dbye na rnam gsum kho na ste //
 sbyor dang dngos bzhi²³ rjes kyis su²⁴ // 440
 yang na bsod nams bsogs²⁵ pa dang //
 bsgyur²⁶ dang spel bar byed pas so²⁷ //
 ngo bo kun rdzob shes pas ste²⁸ //
 mtshan ma phra mo yod pas su²⁹ //
 zag bcas brjod pa mtshan nyid yin // 445
 kha cig dmigs pa zag bcas zer //
 skye ba'i rim pa (D. 235a) go rim³⁰ yin //

1 P1 ska. 2 G1 rigs. 3 P2 bzon. 4 G2N2 gnyisu. 5 CD rtog. 6 G1 gzang.
 7 CDG2P2 gsung, N2 gsung ba. 8 G2N2P2 om. 9 CD shes. 10 N2 ba bzad. 11 CD bsgom.
 12 CD rims. 13 CDG2N2P2 yi. 14 D med. 15 D sang. 16 CDG2N2P2 gsung.
 17 CDG2N2P2 shānti. 18 P2 la. 19 G1N1P1 yis. 20 CD bros. 21 CD bsgom. 22 CD pa'i.
 23 CDG2N2P2 gzhi. 24 N2 kyisu. 25 CDG2N2P2 sogs. 26 CDG2N2P2 sgyur. 27 G2 paso.
 28 CD pas so. 29 C so, N2 pasu. 30 CD rims.

de la mos pa'i spyod yul ni //
 shes rab yin pas mtshon pa¹ ste //
 pha rol phyin pa gzhan yang yin // 450
 ngo bo 'dun² pa yin zhes zer //
 la la shes pa zer ba yod //
 gnyis nas sa bcu'i bar gyi ni //
 rjes na yod pa sa mtshams yin //
 dbye ba rang bzhin³ gnyis ka la // 455
 ltos⁴ pas dgu tshan⁵ gsum yin no //
 byed pa bstod⁶ bkur bsngags gsum ni //
 rang dang gzhan gyi gnyis⁷ ka⁸ la //
 rim pa bzhin du sangs rgyas gsung⁹ //
 sa bzhi¹⁰ sa bdun sa bcu yi¹¹ // 460
 bar du mos pa gsum¹² (G2. 575a) po ni //
 go rim¹³ bzhin du sbyar¹⁴ ba ni //
 nang tshan gyis¹⁵ ni sa mtshams so //
 bsngo ba bcu gnyis grangs nges med //
 ldog pa'i bye brag gis su bshad // 465
 ngo bo smon¹⁶ lam mtshan nyid ni //¹⁷
 de ltar 'dod pa smon pa'o //
 bsod nams mi zad byed pa yin //
 sa mtshams sa dgu'i rjes shes na'o //
 rjes su¹⁸ yi rang ngo bo ni // 470
 sems byung shes rab dag pa'o //
 mtshan nyid gsal te byed pa ni //
 gzhan gyis byas pa'i dge ba la //
 bsod nams mnyam por thob ces¹⁹ pa //
 zer te de (G1. 343b) bas rang gi sngar // 475
 byas pa la yang yi rang bas //
 bsod nams spel bar byed pa yin²⁰ //

1 G2 *mtshan ma.* 2 G1N1P1 *bdun.* 3 CD *gzhan.* 4 G2N2P2 *bltos.* 5 G1 *mtshan.* 6 G2 *stod.*
 7 G1 *bzhan.* 8 G2N2P2 *gyi,* CD *gzhan gyi gnyis ka.* 9 G1 *gsum.* 10 G2N2P2 *gzhi.*
 11 G1N1P1 *gis.* 12 G2 *gsum.* 13 CD *rims.* 14 CD *sbyor.* 15 CDG2N1N2P2 *gyi.*
 16 G2 *sngon.* 17 G2 *om.* 18 G2N2 *rjesu.* 19 G2N2P2 *zhes.* 20 P1 *min.*

dbye ba don dam kun rdzob tu //
 'dod pa Shānti seng bzang ni //
 gnyis ka tshang na yin (P2. 469a) pas na // 480
 de gnyis dbye bar mi bzhed¹ do² //
 (N2. 441b) (P1. 257b) sa mtshams sa dgu'i³ rjes na yod //
 zag med rnam⁴ gnyis bsgrub pa ni //
 ldog pa'i bye brag gis su⁵ bzhi //
 grangs nges go rim⁶ yod pa (N1. 266b) yin // 485
 sa mtshams sa dgu'i⁷ (C. 240b) mnyam gzhag gi⁸ //
 bar chad med pa'i lam na yod //
 ngo bo zhi gnas lhag mthong ste //
 dag pa skyed par byed pa'o //
 zlos pa gdams ngag skabs su bshad // 490
 'bad pas sgrub pa mtshan nyid do⁹ //
 dag pa thob rgyu mi thob rgyu //
 dngos la spyi dang bye brag gnyis //
 bye brag rnam bzhi nyan thos dang //
 rang rgyal byang¹⁰ sems sangs rgyas so¹¹ // 495
 sa mtshams (G2. 575b) sa¹² gnyis sangs rgyas sa¹³ //
¹⁴ngo bo (D. 235b) sgrib pa bral ba ste //¹⁴
 bye brag mtshan nyid dkyus na gsal //

[Chapter 3]

gzhi zhes¹⁵ bstan par bya ba ni //
 rkang pa gnyis kyis ngo bo bstan // 500
 bzhi yis gzhi shes¹⁶ dbye ba ste //
 lhag ma gzhi¹⁷ shes¹⁸ dngos yin zhes //
 de skad tha snyad 'dogs¹⁹ pa yod //

1 P1 bzhad. 2 G2N2 bzhedo. 3 G2N2 dgu yi. 4 G2 rnams. 5 G2 gisu. 6 CD rims.
 7 G2N2 dgu yi. 8 G1N1P1 gis. 9 nyido. 10 G2 byang chub. 11 G2N2 rgyaso. 12 G2 om.
 13 CD so. 14 G2N2P2 om. 15 G2N2P2 shes. 16 G1N1 zhes, P1 zhis.
 17 G1G2N1N2P1 bzhi. 18 G1N1P1 zhes. 19 G2N2P2 'dod.

gzhi¹ shes gnyis ka bstan kyang ni //
 sgom² lam sbyor ba zer ba'ang yod // 505
 blang bya gtso ru bstan zhes pa //
 slob dpon chen po Seng bzang gsungs³ //
 dor bya gtso bor bstan pa ni //
 slob dpon Bud dha⁴ shrī dznyā⁵ gsungs⁶ //
 sbyor ba rnam bcur bstan kyang ni //⁷ 510
 grangs nges go rim⁸ nges pa med //
 sbyor yul bzhi yin sbyor ba dngos //
 gsum yin gnyis 'bras⁹ gcig dpe zhes //
 de skad sdud par byed pa yod¹⁰ //
 mthong lam na yod kha cig zer // 515
 sgom¹¹ lam sbyor (G1. 344a) ba zer ba'ang¹² yod //
 la la sbyor lam na yod de //
 sbyor lam ma bstan gsungs pa¹³ ni //
 bzhi¹⁴ ru ma bstan la dgongs gsungs¹⁵ //
 zlos skyon sngar spangs ngo bo ni // 520
 rjes kyi¹⁶ lhag mthong snying rje yin //
 rlom med¹⁷ rnam (P2. 469b) bzhi bstan pa yang //
 Seng bzang 'dod pa dkyus nas¹⁸ gsal //
 gzugs la gzugs kyis gzugs su¹⁹ dang //
 bdag gir²⁰ rlom sems mi byed pa // 525
 rNam grol Shān ti²¹ rnam gnyis (N2. 442a) bzhed //
 sa mtshams sbyor bzhin²² ngo bo ni //
 shes rab yin te bcu bo yi²³ //
 re re la yang bzhi bzhi yi //
 rnam yod ces²⁴ pa slob dpon ni // 530
 Shes rab (G2. 576a) 'byung gnas blo gros zer //

1 N2P2 *bzhi*. 2 CD *bsgom*. 3 CDN1P1 *gsung*. 4 CDG2N2P2 *buddha*. 5 G2N2P2 *om*.
 6 CDG2N2P2 *gsung*. 7 P1 *om*. 8 CD *rims*. 9 P2 'bas. 10 C *yin*, D *yid*. 11 CD *bsgom*.
 12 G1 *om*. *ba*. 13 CDG1N1N2P2 *gsung ba*. 14 CD *gzhi*. 15 CDP2 *gsung*. 16 G1N1 *kyis*.
 17 CD *sems*. 18 CD *na*. 19 G2N2 *gzugsu*. 20 N2 *gi*. 21 CDG2N2P2 *shānti*.
 22 G2N2P2 *bzhi*. 23 G1N1P1 *yis*. 24 G2N2P2 *zhes*.

mthong lam¹ bsdus don sngar bshad de //
 'di ru bshad pa'i khyad par ni //
 bzhi (N1. 267a) pa skye ba'i tshul dang ni //
 thun² mong³ ma yin tshul gyis su⁴ // 535
 bstan to zhes ni brjod pa yod⁵ //
 dor ba'i tshul nas bstan to zhes //
 Seng ge⁶ bzang po de skad gsungs⁷ //
 (C. 241a) sgom⁸ lam⁹ mi ston¹⁰ rgyu mtshan ni //
 (P1. 258a) sngar bstan zin te sbyor lam ni // 540
 byang sems thams cad mkhyen la ltos¹¹ //
 nyan thos lam shes su bstan to //

[Chapter 4]

rnam kun mngon rdzogs yul gyis gnyis //
 shes dang shes byed rnam gnyis so¹² //
 yang na shes pa'i rgyud¹³ then pa // 545
 rnam kun shes bya blang ba'i (D. 236a) rim //
 rten dang brten¹⁴ pa 'bras dang lnga //
 shes bya rnam pa brgyad¹⁵ dang ni //
 bdun cu rtsa gsum bstan pa yi //
 grangs la nges yod ma yin yang // 550
 mkhyen pa gsum¹⁶ la brten¹⁷ nas ni //
 re zhig de tsam zhig brjod do //
 go rim¹⁸ skye ba'i rim pa ste //
 sa mtshams (G1. 344b) lam ni lnga¹⁹ na yod //
 cis shes slob dpon Seng bzang gis // 555
 ye shes tshogs ni nyi shu yang //
 lam ni lnga kar sbyar bas so²⁰ //

1 N2P2 ram. 2 G1P1 mthun. 3 N1 mongs. 4 N2 gnyisu. 5 CD yin. 6 P1 sengge.
 7 CDG2N2P2 gsung. 8 CD bsgom. 9 N2 lam. 10 G1 bston. 11 G2N2P2 bltos.
 12 G2N2 gnyiso. 13 CD rgyun. 14 G2N2P2 rten, N1 brtan. 15 G2N2P2 brgya. 16 N2 gsum.
 17 G1N1P1 bsten. 18 CD rims. 19 G2N2P2 lnga gang for ni lnga. 20 N2 baso.

ngo bo 'dod pa mi mthun te //
 rnal 'byor rgyud la skye ba dang //
 bden bzhi'i rnam pa yin zhes dang // 560
 nyan thos byang sems sangs rgyas kyi //
 ye shes yin zhes 'dod pa gsum //
 rnam par rgyas dang mkhyen par bsdu //
 yang na (P2. 470a) gtan la dbab pa dang //
 bskyed pa'i¹ rim pas bstan pas na // 565
 (G. 576b) zlos pa'i skyon dang bral ba yin //
 nyams len mnyam par bzhag² pa dang //
 rjes kyi dus su nyams len no³ //
 mnyam gzhag sbyor ba (N2. 442b) nyi shu ste //
 de yi⁴ yon tan bcu bzhi'o // 570
 bzhi bcu rtsa drug sbyor ba'i skyon //
 sbyor ba'i mtshan nyid dgu bcu gcig /
 sbyor ba'i ngo bo zhi gnas dang //
 shes rab yin te zlos⁵ pa'i skyon //
 med de sbyor ba rnam bcu ru // 575
 rjes kyi cha nas 'di ru ni //
 mnyam gzhag⁶ cha nas bstan pas so //
 don la zlos sbyor mtshan nyid de //
 dang po gnyis ni sbyor ba dngos //
 gsum ni⁷ 'bras yin yang na⁸ yul // 580
 bco lnga sa mtshams (N1. 267b) bsgoms⁹ nas te //
 rgyu mtshan des ni nyi shu'o //
 kha cig sa mtshams 'di ltar 'dod //
 lnga ni kun na gcig gi¹⁰ tshogs //
 lung bstan sbyor¹¹ lam phyir mi ldog // 585
 sa bdun man chad nges 'byung nas //
 gsum ni brgyad nas sa bcu'i bar //

1 CDG2N2P2 *skye ba'i*. 2 CD *gzhag*. 3 G2N2 *leno*. 4 G1N1P1 *yi*. 5 G1N1P1 *zlas*.
 6 N2P2 *bzhag*. 7 N2. *ni ba*. 8 N1 *ni*. 9 CDG2N2P2 *sgo*. 10 G2N2P2 *gis*. 11 G2 *sbyor ba*.

gzhan don yan chad sangs rgyas sa¹ //
 la la de las² gzhan du 'dod //
 yon tan sa mtshams nges med de³ // 590
 mdo las kun (C. 241b) la yod par snang //
 sbyor ba'i phan yon yin pas su⁴ //
 sbyor ba'i (G1. 345a) rjes la 'byung ba'o //
 grangs nges med do⁵ ngo bo ni //
 phyin ci ma log⁶ phan yon no⁷ // 595
 skyon spangs sa mtshams nges pa med //
 spyir na sa brgyad man chad (D. 236b) du⁸ //
 skyon 'byung zhes ni⁹ (P1. 258b) mdo las bshad //
 de tshe spangs nas sgom zhes zar //
 la la sgom pa nor las zer¹⁰ // 600
 mdor na skyon dang yon tan ni¹¹ //
 (G2. 577a) shes par byas nas bsgom¹² pa yin //
 mtshan nyid dgu bcu rtsa gcig¹³ kyang //
 grangs nges med kyang 'khor gyi ngor //
 de (P2. 470b) tsam¹⁴ kho na bshad pa yin // 605
 go rim¹⁵ skye ba'i rim pa ste //
 skye ba'ang rags pa kho na ste¹⁶ //
 sa mtshams sbyor ba'i rjes na ste¹⁷ //
 mnyam gzhas¹⁸ dus na'ang 'dod pa yod¹⁹ //
 mtshan nyid rdzogs pa sangs rgyas sa²⁰ // 610
 cha mthun²¹ da lta'i gnas skabs nas //
 'di ni sbyor ba'i mtshan nyid do²² //
 rnam pa zer ba²³ yod kyang nge //
 gzhung nas snga ma gsal bar bshad //
 mtshan nyid la (N2. 443a) yang mi mthun te²⁴ // 615

1 N1 so. 2 G1N1P1 la. 3 N2 do. 4 G1N1P1 so. 5 G2N2P2 de. 6 G2 logs.
 7 G2 yono. 8 G2N2 chadu. 9 G1 ni/. 10 D zar. 11 G2 tani. 12 CDG2N2P2 sgom.
 13 G1 gcig pa. 14 D rtsam. 15 CD rims. 16 G2N1P1 skye, N2P2 skyi. 17 P2 sti.
 18 G2N2 bzhags, P2 bzhag. 19 G2N2P2 yid. 20 CD so, G2N2P2 pa. 21 P2 'thun.
 22 G2N2 nyido. 23 G1N1P1 bas. 24 CD ste.

thun¹ mong ma yin mtshan nyid dang //
 gtan tshigs dag tu² 'dod pa 'o //
 de yang sbyor ba skor gcig³ dang //
 so sor 'dod pa tha dad do //
 phyin ci ma log⁴ dpog pa dang // 620
 sbyor ba so sor⁵ dpog pa yi⁶ //
 gtan tshigs⁷ dag kyang tha dad do //
 shes pa'i khyad par byed pa ni //
 'bras bu'i gtan tshigs⁸ ngo bo ni //
 rang bzhin gtan tshigs 'dod pa yod // 625
 Shes rab 'byung gnas blo gros ni //
 khyad par dag kyang rang bzhin zer //
 kha cig⁹ byed yin gzhan min zer //
 gsum ka¹⁰ gtan tshigs gcig tu ni //
 (N1. 268a) byed pa yod de mi 'thad do // 630
 sbyor ba dpag¹¹ pa'i dgos¹² pa ni //
 brtson 'grus cher ni 'jug pa (G1. 345b) dang //
 mthar gyis sgom¹³ pa'i mngon rtogs¹⁴ la //
 phan zhes 'dod pa tha dad do //
 brjod¹⁵ pa mang ba de tsam mo // 635
 thar dang nges 'byed kyis mtshon nas //
 rjes (G2. 577b) la nyams su¹⁶ blang ba¹⁷ bshad //
 thar cha'i¹⁸ rten ni gling gsum mi //
 thos bsam sa¹⁹ yin ngo bo ni //
 dad la sogs pa rnam pa lnga // 640
 Shānti sa dad sogs²⁰ dbye²¹ bar byas //
 tshogs lam che 'bring rnam gsum du //
 Seng ge²² bzang po'i dbye ba yin //

1 G1 thum. 2 N2 la. 3 CD cig. 4 P2 leg. 1 P1 so. 6 D ya, G1 yin. 7 G2 tshig.
 8 G2 tshig. 9 N2 cag. 10 G1N1P1 ga. 11 CDN2P2 dpags. 12 CD dgod. 13 G1N1P1 bsgom.
 14 G2 rtogs dag. 15 C rjod, D rjed. 16 G2N2 nyamsu. 17 CD bar. 18 G1N1P1 bya'i.
 19 G2N2P2 pa. 20 G2 sogs pa, N2 sags. 21 N2 dbya. 22 G2P1 sengge.

mi skrag¹ mi dngang (C. 242a) mi zhum pa //
 che 'bring gsum gyi rtags su² bshad //³ 645
 mya ngan 'das pa thar pa ste //
 de yi⁴ cha ni sdug bsngal (P2. 471a) bzod //
 de dang mthun pa nges pa yin //
 de nyid sbyin pa la sogs la //
 mi (D. 237a) dmigs pas ni zin pa ste // 650
 thar pa'i cha mthun⁵ mtshan nyid yin //
 nges 'byed bsdus don sngar⁶ bshad pas⁷ //
 rjes kyi nyams blangs⁸ 'ba' zhig bshad //
 dmigs pa sems can thams cad de⁹ //
 chung ngu'i rnam pa mnyam dang byams¹⁰ // 655
 'bring gi rnam pa phan¹¹ (P1. 259a) pa dang //
 khong khro med dang mi 'tshe¹² gsum //
 chung ngu'i rnam gnyis tshe¹³ 'di la //
 gzhan la 'tshe bar mi byed pa //
 (N2. 443b) 'bring gi rnam gsum phyi ma la // 660
 gzhan la phan par byed pa'o //
 chen po'i pha la sogs pa ste //
 'di dang phyi ma gnyis ka la //
 phan par byed pa kho na'o //
 rtse mo chung ngu'i mi dge las // 665
 ldog pa¹⁴ bdag spong gzhan 'jug la //
 'bring gi sbyin sogs dge ba la //
 bdag dang gzhan dag sbyor ba ste¹⁵ //
 gzhan bde'i rgyud la sbyor ba 'o //
 chen po'i bdag kyang stong sgom zhing // 670
 gzhan la¹⁶ sbyor te gzhan dag la //
 phyin ci log ni spong bar¹⁷ (G2. 578a) 'dod //¹⁸

1 P1 sgrag. 2 N2 rtagsu. 3 G2 om. 4 G1N1P1 yis. 5 P2 'thun. 6 G2N2 ltar.
 7 G2N2P2 kyang. 8 CD blang. 9 G2P2 do, N2 cado. 10 N2 byam. 11 G1N1P1 pham.
 12 G1N1 tshe. 13 P1 cha. 14 C om. 15 G1N1P1 de. 16 G2N2P2 yang. 17 G2 ba.
 18 G2 om.

bzod pa chung ngu'i (G1. 346a) bden bzhi la //
 bdag dang gzhan dag sbyor (N1. 268b) ba ste¹ //
 gzhan ni 'phags lam sbyor 'dod pa'o // 675
 'bring ni² rgyun zhugs la sogs lnga //
 shes shing mngon du mi byed la //
 bdag dang gzhan dag sbyor ba ste //
 gzhan dag 'bras bur sbyor 'dod pa'o //
 chen po'i byang chub skyon med la // 680
 bdag gzhan sbyor te³ gzhan dag ni //
 sangs rgyas la ni sbyor 'dod pa'o //
 chos mchog chung ngu'i sems can ni //
 smin par byed de don la ni //
 theg pa gsum la dgod pa 'o // 685
 'bring gi bdag gzhan gnyis ka yang //
 byang chub mngon shes skye (P2. 471b) la⁴ ste //
 sems can byang chub lam⁵ sbyor ba'o //
 chen po'i bdag ni rnam mkhyen pa'i //
 ye shes skye bar⁶ 'dod pa dang // 690
 gzhan dag⁷ phun sum tshogs pa yi⁸ //
 mthar thug la ni 'jog⁹ pa 'o //
 tshogs lam rten ni¹⁰ bshad zin pas //
 nges 'byed¹¹ mthong lam sgom¹² lam¹³ gyi¹⁴ //
 phyir mi ldog (C. 242b) pa'i gang zag gsum // 695
 bstan phyir rtags kyi sgo nas bshad //
 phyir mi ldog pa rnam gsum ste //
 'dir ni theg pa 'og ma ru //
 mi¹⁵ ldog pa yi rtags bshad do //
 dbang¹⁶ po rab 'bring tha ma (D. 237b) yis // 700

1 G1N1P1 de. 2 CDG2N2P2 gi. 3 CD dang, G2N2P2 de. 4 N1 ba. 5 P2 lam.
 6 G1N1P1 bskyed par. 7 CDN1N2 bdag. 8 G1N1P1 yis. 9 N1 'jig. 10 G2 rten.
 11 P1 'byad. 12 CD bsgom, G2 sgom. 13 G2 lam. 14 G1N1P1 gyis. 15 G2N2P2 phyir.
 16 G1 dang.

nges 'byed mthong lam sgom¹ lam² gyi //
 sa brgyad dag tu go rim³ bzhin //
 phyir mi⁴ ldog pa gsum yin no⁵ //
 mthar thug ldog pa⁶ ma yin yang //
 gnas skabs ldog pa⁶ yod pas na⁷ // 705
 rtags⁸ (N2. 444a) yod na ni gnas skabs kyi⁹ //
 ldog pa yang ni med do¹⁰ (G. 578b) zhes //
 rtags kyi sgo nas dpog¹¹ pa yin //
 rang la¹² dpog¹³ na rgyu tshogs pa'i //
 rang bzhin kho na'i gtan tshigs so¹⁴ // 710
 gzhan gyis¹⁵ dpog¹⁶ na rang bzhin dang //
 (G1. 346b) 'bras bu'i¹⁷ gtan tshigs gnyis kyi so //
 dpags¹⁸ pa'i dgos pa rang la ni //
 brnyas pa skyed¹⁹ pa dgag pa 'o //
 de ni spyi yi²⁰ bye brag gi / /715
 nges 'byed rtags ni nyi shu la //
 grangs nges med kyang de tsam zhig /
 'khor gyi ngo²¹ ru bshad pa yin //
 drod la bcu gcig rtse mo²² drug //
 bzod pa gnyis te chos mchog gcig // 720
 seng ge bzang po'i 'dod pa yin //
 Shān tis²³ de ltar ma (N1. 269a) phye 'o //
 mthong lam rtags ni bcu drug kyang //
 rjes kyi cha nas rtags yin te //
 'o na bzod pa zer ba ni // 725
 sngar gyi²⁴ nus pa mtshon pa yin //
 sgom²⁵ lam rtags ni zab mo brgyad //

1 CD *bsgom.* 2 G2 *lam.* 3 CD *rims.* 4 G1N1P1 *phyi ma'i.* 5 G2 *yino.* 6 G2N2P2 *om.*
 7 G1N1P1P2 *nas.* 8 G2N2P2 *rtag.* 9 D *gyi.* 10 G2 *medo.* 11 G11P1 *dpogs.* 12 G2N2P2 *na.*
 13 G1N1P1 *dpogs.* 14 G2N2 *tshogso.* 15 G1G2N1N2P1P2 *gyi.* 16 G1N1P1 *dpogs.*
 17 G2N2P2 *'bru yi.* 18 CD *dpag.* 19 CD *skyes.* 20 G1N1P1 *yi.* 21 G2 *do.*
 22 CDG2N2P2 *mo'i.* 23 CDG2N2P2 *shāntis.* 24 G1N1P1 *gyis.* 25 CD *bsgom.*

kha cig sa¹ ni re re la //
 2-zab mo re re yin zer ba //
 de ni³ 'thad de re re la //² 730
 brgyad ka yod kyang 'gal ba med //
 srid dang zhi mnyam rnam pa ste //
 (P2. 472a) gong gi gang zag de gnyis⁴ kyis //
 rnam pa 'di ltar sgom⁵ zhes pa //
 slob dpon Seng ge bzang po dang // 735
 Buddha⁶ shrī dznyā na bzhed do⁷ //
 sbyor ba nyi shu mi⁸ zlos te⁹ //
 rjes kyi¹⁰ cha nas bshad pa'o //
 nges¹¹ 'byed cha mthun¹² gyis mi zlos¹³ //
 'di¹⁴ ni sgyu ma'i tshul nas so¹⁵ // 740
 rmi lam chus¹⁶ khyer dper¹⁷ blangs nas //
 sa brgyad yan chad na yod ces //
Sangs rgyas phal po che nas bshad //
 srid dang zhi ba mnyam nyid¹⁸ kyis //
 mi slob (G2. 579a) rten bstan¹⁹ rNam grol gsungs²⁰ // 745
 'di tsam slob par byar yod ces //
 de skad rnam grol gsungs pas²¹ na²² //
 gtan mi slob pa'i mi slob min //
 zhing dag gnyis te sems can dang //
 (C. 243a) snod kyi 'jig rten dag (G1. 347a) pa 'o // 750
 sems can dag la²³ bkres²⁴ sogs dang //
 bral te theg gsum snod (D. 238a) du²⁵ rung //
 (N2. 444b) snod dag snod sogs gser la sogs //
 Seng²⁶ bzang sangs rgyas sa ru 'dod //
 Buddha²⁷ shrī yang de bzhin no // 755

1 G2N2P2 pa. 2 G2N2 om. 3 CD mi. 4 CDG2N2P2 nyid. 5 G2N2P2 bsgom.
 6 G1 bud dha, P2 buddhā. 7 G1G1N1N2P1P2 om. 8 C yi. 9 P1 ta. 10 G2N2 gyi.
 11 P1 nge. 12 P2 'thun. 13 G1N1P1 bzlos. 14 G2N2P2 'dir. 15 N2 naso. 16 CD chur.
 17 CD dpes. 18 G1N1P1 gnyis. 19 G2 brtan. 20 CDG2N2P2 gsung. 21 CDP2 gsung bas.
 22 G2N2P2 nas. 23 CD las. 24 N1 dkres. 25 N2 snodu. 26 G2P2 sang. 27 G2N2P2 buddha.

¹dag par byed pa yin pas na //¹
 sa bcu man chad na yod ces² //
 'Phags pa rnam par grol sde gsungs³ //
 thabs la mkhas pa rnam⁴ bcu yang //
 grangs nges med kyang go rim⁵ ni // 760
 bskyed bya skyed⁶ pa'i rim pa dang //
 bsgrub bya gtan⁷ tshig⁸ rim⁹ pas ni //
 bstan zhes Sangs rgyas ye shes gsungs¹⁰ //
 sangs rgyas sa¹¹ na yod pas na //
 gzhan don thabs la mkhas pa ste // 765
 de nyid kyis¹² ni mtshan nyid yin //
 mdzad pas 'bras yin 'dir ni rgyu //
 des¹³ na¹⁴ de gnyis zlos¹⁵ pa med //
 Seng bzang gsungs te¹⁶ rNam grol dang //
 (N1. 269b) Buddha¹⁷ shrī ni¹⁸ rnam gnyis ni // 770
 sa bcu man chad na yod de¹⁹ //
 thabs la²⁰ mkhas pa'i²¹ ngo bo ni //
 sangs rgyas rgyu la²² mkhas pa la //
 'dod pas (P2. 472b) sa mtshams mi mthun no²³ //

[Chapter 5]

rtse mo bdun la drod kyi rtse // 775
 rtags kyis bstan te²⁴ (G2. 579b) dbye ba ni //
 bcu gnyis bstan kyang grangs nges med //
 rtse mo (P1. 260a) brtags²⁵ gnyis so so ste //
 rtags kyi²⁶ rtse mo dpag ces²⁷ su //
 la la de skad 'dod pa yod // 780

1 G2 dag par byad pa yan na // dag par byed pa yin pas na // 2 G2N2P2 zhes.
 3 CDG2N2P2 gsung. 4 G2 rnams. 5 CD rims. 6 G2 bskyed, P2 skyad. 7 G1N1P1 gting.
 8 CD tshigs. 9 G2N2P2 rims. 10 CDG2N1N2P2 gsung. 11 G2N2P2 na. 12 CDG2P1 kyi.
 13 G1N1P1 de. 14 N1 ni. 15 G1N1P1 bzlos. 16 CDG2N2P2 gsung ste. 17 N2P2 buddha.
 18 G2N2P2 om. 19 G2P2 do, N2 yodo. 20 CD om. 21 CD pa yi. 22 N2 pa. 23 G2 mthuno.
 24 P1 de. 25 CD brtags. 26 G2N2P2 kyis. 27 P2 cas.

kha cig rtags gnyis¹ rtse mo ru //
 'dod de rtags kyi dpag bya ni //
 phyir mi ldog par dpog² pa ste //
 lung nas de ltar dpag go gsung //
 rnam 'phel bcu drug rtse mo yi // 785
 grangs nges med de go rim³ yang⁴ //
 med de⁵ 'dis kyang 'dis kyang ni //
 'phel lo zhes ni bya ba yin //
 bcu drug gang rung yod (G1. 347b) pas su⁶ //
 de yi rgyud⁷ la dge 'phel ba // 790
 rtse mo yin zhes la la zer //
 bcu drug nyid ni rtse mo zhes //
 kha cig de skad 'dod pa'ang yod //
 sngar ni yod par ma gyur la //
 rtse mo thob nas yod pas na // 795
 'phel ba zhes ni brjod pa yin //
 bzod pa'i rtse mo kun mkhyen nyid //
 gsum gyi⁸ chos ni ⁹rdzogs pa yin //⁹
¹⁰de gsum chos ni¹⁰ sems bskyed sogs //¹¹
 sngar bshad pa yi rim pa rnams // 800
 bzod (N2. 445a) par rdzogs par 'thad¹² snyam na //
 spang bya gzhi (C. 243b) shes rdzogs pa dang //
 lam shes rnam gnyis rdzogs pa dang //
 rnam kun bar du rdzogs pa la //
 rdzogs (D. 238b) pa'i tha snyad btags¹³ zhes¹⁴ zer // 805
 rtse mo sa dgu yan chad na¹⁵ //
 rdzogs par yod pas⁶ 'gal ba med //
 de skad kha cig rjod¹⁷ par byed //

1 G2N2P2 nyid. 2 G1 dpogs. 3 CD rims. 4 CDG2N2P2 kyang. 5 G2 mede. 6 N2 pasu.
 7 N1 rgyu. 8 P1 gyis. 9 G2N2P2 om. 10 G2N2P2 om. 11 G1 om. 12 N2 thad.
 13 CD brtags. 14 G1N1P1 shes. 15 P1 nas. 16 P2 las. 17 G1 brjod, G2N2P2 rdzogs.

Shān ti¹ pa yis² 'dod pas na³ //
 kun mkhyen chos ni rnam gsum yang // 810
 rang byung⁴ dang ni de bzhin gshegs (G2. 580a) //
 thams cad mkhyen pa gsum la 'dod //
 chos mchog rtse mo dpag med kyang //
 ting nge 'dzin la brten⁵ nas su⁶ //
 bsod nams dpag (N1. 270a) tu med pa ni // 815
 rtse mo ru ni bshad pa yin //
 mthong lam rtse mo spangs pa dang //
 rtogs (P2. 473a) dang yon tan rtse mo zhes //
 spangs⁷ sogs zhar la byung⁸ ba ste //
 rtse mo dngos ni pha rol phyin // 820
 re re la yang drug drug tu //
 rdzogs pa yin zhes kha cig zer //
 des na mthong lam rtse mo ni //
 rjes kyi gnas skabs na yod zer //
 spang⁹ bya rnam par rtog¹⁰ pa ni // 825
 gzung 'dzin gnyis su bsodus pa ste //
 zhib tu phye na re re la //
 yang ni dgu dgu yod pa yin //
 (G1. 348a) khams gsum spang¹¹ byas phye na ni //
 rtog¹² pa brgya rtsa brgyad yin no // 830
 grangs nges¹³ rgyu mtshan yul gyis te //
 che 'bring gis kyang zer ba yod //
 ngo bo 'khrul¹⁴ pa'i shes pa ste //
 rtog¹⁵ bcas rtog¹⁶ pa med pa yis¹⁷ //
 'khrul pa gnyis ka yin zhes zer // 835
 shes bya'i sgrib pa kho na ste //
 nyon mongs sgrib dang shes bya'i sgrib //
 la la gnyis char yin par 'dod //

1 CDG2N2P2 *shānti*. 2 CDG2N2P2 *yi*. 3 CDG1G2N1P2 *ni*. 4 CD *'byung*.
 5 N1 *brtan*, G2N2P2 *rten*. 6 G2N2 *nasu*. 7 CD *'byung*. 8 G2N2P2 *spangs*. 9 G2N2P2 *spangs*.
 10 G2N2P2 *rtogs*. 11 G2N2P2 *spangs*. 12 G1N1P1 *rtogs*. 13 P1 *nge*. 14 N1P1 *'phrul*.
 15 G1N1P1 *rtogs*. 16 G1N1P1 *rtogs*. 17 CDN2P2 *yi*.

bdag yod (P1. 260b) du ni rtog¹ la sogs //
 dman pa'i rtog² pa yin pa dang // 840
 bdag med du ni rtog la sogs //
 ngan rtog gis³ ni gnyen po dag //
 yin zhes 'dod pa mi mthun no //
 la la gnyis char zer ba ste⁴ //
 'di 'grel⁵ na ni tha ma gsal //⁶ 845
 (N2. 445b) ngan⁷ rtog⁸ bskal pa dpag med nas //
 de yi gnyen po'i rtog⁹ pa ni //
 'jig (G2. 580b) rten pa yi¹⁰ lam na yod //
 spong ba mthong lam bar chad med //
 theg pa chen po'i 'dod pa ste // 850
 nyan thos rnam grol lam gyis so¹¹ //
 rgya mtsho la ni chu bo bzhin //
 yon tan dpag med 'du ba ni //
 sgom pa lam gyi¹² rtse mo ste¹³ //
 sa brgyad yan chad na yod ces¹⁴ //¹⁵ 855
 la la 'dod de dpyad na (C. 244a) ni //
 sa bcu'i gnas skabs na yod 'dra //
 spang bya rtog¹⁶ pa'i mtshan nyid ni //
 (D. 239a) sngar bshad zin pas bye brag gi¹⁷ //
 mtshan nyid (P2. 473b) bstan par bya ba ni¹⁸ // 860
 Seng ge bzang po'i 'dod pas su¹⁹ //
 nges (N1. 270b) par 'byed²⁰ pa'i dus dag na //
 yod²¹ pa'i phrag dog²² yin zhes gsung²³ //
 rNam par grol sde sgom lam gyi //
 rjes kyi shes pa'i gnas skabs kyi²⁴ // 865
 dge ba zag bcas yin zhes zer //

1 G1G2N1P1 rtogs. 2 G2N2P2 rtogs. 3 CDG2N2P2 gi. 4 G1N1P1 de. 5 CD 'brel.
 6 G2 om. 7 N2 don. 8 G1N1P1 rtogs. 9 G2N2P2 rtogs. 10 G2 yi /. 11 G2N2 gyiso.
 12 P1 kyi. 13 G1N1P1 ni. 14 G2N2P2 zhes. 15 G2 om. 16 G1N1P1 rtogs.
 17 G2N2P2 gis. 18 G1N1P1 na. 19 N2 pasu. 20 G2N2P2 'byed par byed. 21 N2 yad.
 22 N1 phra dog, G2N2P2 phra rtog. 23 G2N2 gsungs. 24 G2N2P2 kyi.

bar chad (G1. 348b) med¹ pa'i rtse mo ni //
 ngo bo zhi² gnas lhag mthong ste //
 bar ni gang gis ma chod la //
 yon tan rdzogs mang mtshan nyid yin // 870
 zlos pa'i skyon ni sngar spangs te //
 sa mtshams rdo rje lta bu na //
 mnyam gzhag 'ba³ zhig yin pas na //
 'di yi⁴ dmigs pa dngos med yin //
 rang gi rgyud la log⁵ par rtog⁶ // 875
 bcu drug bsal⁷ la skye ba ste //
 log par rtog⁸ pa'i ngo bo ni //
 nyon mongs shes bya'i sgrib pa ste //
 gnyis char zer te⁹ la la ni //
 tha ma kho na yin par 'dod // 880
 grangs nges med de sdud¹⁰ pa ru //
 log¹¹ par sgrub¹² pa'i ming gis su¹³ //
 mang du bshad par 'dug pas su¹⁴ //
 (G2. 581a) rgyas par 'dir (P1. 261a) ni spro¹⁵ mi bya //

[Chapter 6]

mthar gyis pha rol phyin pa drug // 885
 rjes su¹⁶ dran drug don¹⁷ dam mo //
 pha rol drug dang bsgrub¹⁸ pa yang //
 'chol dang go rim¹⁹ yin pas na²⁰ //
 zlos skyon med de²¹ dkon mchog gsum //
 de bzhin yin pas zlos skyon med // 890

1 N2 mad. 2 N1 zhis. 3 D 'tha'. 4 G2N2P2 yid. 5 G1G2 logs. 6 G1N1P1 rtogs.
 7 CD gsal. 8 G1N1P1 rtogs. 9 N2 rte. 10 P1 sdus. 11 CD dpog. 12 G1N1P1 bsgrub.
 13 G2N2 gisu. 14 CDG2P2 so, N2 paso. 15 P1 sgro. 16 G2N2 rjesu, P1 rjas su.
 17 G1 dom. 18 CD sgrub. 19 CD rims. 20 G1N1P1 ni. 21 N2 mede.

sbyin dang¹ tshul khirms gnyis dang ni //
gtong dang tshul khirms dran (N2. 446a) pa yang //
dngos dang bras bu'i² cha nas su³ //
bstan pas zlos skyon med pa yin //
lha dang dkon mchog dpang po dang / 895
rten tshul yin pas zlos pa med //

[Chapter 7]

skad cig byang chub rnam bzhi ni //
ldog pas⁴ dbye ba yin pas su⁵ //
rim gyis skye ba ma yin no //
dang po gnyis ni 'bras bu yin // 900
tha ma gnyis ni rnam pa yis //
(P2. 474a) grangs nges yod pa ma yin yang //
'bras bu kun ni de ru 'dug⁶ //

[Chapter 8]

sku ni gcig gnyis gsum bzhi lnga //
grangs med⁷ 'dod pa (G1. 349a) dag tu 'o // 905
rang dang gzhan gyi⁸ don gyis su⁹ //
sku gsung¹⁰ zhes (C. 244b) ni Byams pas gsungs¹¹ //
rang don chos sku gnyis po ni //
rgyud dag ma dag rnam gnyis kyis¹² //
don du gzugs sku rnam gnyis zer // 910
mDo (N1. 271a) *sde thar* (D. 239b) *pa chen po nas* //
ngo bo nyid sku gsungs pa dang //
don dam gyi ni bden pa dang //
gsum po dag tu ma 'dus pas //
sku bzhi zhes¹³ ni Seng bzang gsung // 915

1 N1 *pas*. 2 G2N2P2 *bral ba'i*. 3 N2 *nasu*. 4 G2N2P2 *pa*. 5 G1N1P1 *so*, G2 *pasu*.
6 CD 'du. 7 G2P2 *nges*. 8 G1 *gyis*. 9 G2 *gyisu*. 10 CDG2N2P2 *gsum*. 11 G1N1P1 *gsung*.
12 CDG2N2P2 *kyi*. 13 CD *shes*.

sprul¹ pa yi² ni sprul la sogs //
 yod pas sku lnga gzhan dag zer //
 bdag gzhan longs spyod rdzogs (G2. 581b) pas su //
 sku lngar³ 'dod pa don gsang yin //
 ngo bo nyid⁴ sku'i ngo bo ni // 920
 dngos po'i gnas lugs⁵ yin pa ste //
 chos sku gnas lugs⁶ rtogs pa yin⁷ //
 ye shes yin no sku gnyis ni //
 gzugs⁸ la 'jog ste gzugs de yang //
 'khor gyi⁹ snang ba 'ba'¹⁰ zhig la¹¹ // 925
 'jog¹² pa Thogs med mched¹³ kyi gzhung //
 gnyis ka'i¹⁴ snang ba la 'jog pa //
 Phyogs kyi glang po la (P1. 261b) sogs pa //
 gnyis ka'i snang ba ma yin par //
 'dod pa Nā gā rdzu na sogs // 930
 ye shes lnga ka¹⁵ chos sku ru //
 la la 'dod pa yod kyang ni //
 Bud dha¹⁶ shri¹⁷ ni¹⁸ 'di ltar 'dod //
 me¹⁹ long²⁰ ye shes chos kyi sku //
 mnyam nyid so sor rtog pa ni // 935
 longs²¹ spyod rdzogs sku sprul pa ni //
 bya ba grub²² pa'i ye shes yin //
 de ltar 'dod (N2. 446b) pa tha dad do //
 chos nyid yin pas chos sku zhes //
 kha cig de skad 'dod pa yod // 940
 chos nyid rtogs dang chos ston pas //
 chos sku yin zhes 'dod pa'ang yod //
 nges pa bzhi ste 'khor (G1. 349b) (P2. 474b) dang ni //
 gnas dang ston pa chos su ste //

1 P1 *spul.* 2 G2P2 *vis.* 3 G2N2 *sngar.* 4 G1 *nyi.* 5 G2 *lug.* 6 G2N2P2 *om.*
 7 CDG2N2P2 *yi.* 8 N1 *gzud.* 9 N1 *gyis.* 10 G2N2P2 *'ga'.* 11 D *om.* 12 P1 *ljog.*
 13 CD *ched.* 14 P1 *ki'i,* P2 *ga'i.* 15 G1N1P1 *ka.* 16 CD *buddha,* G2N2P2 *buddhā.*
 17 G2 *shri.* 18 CD *dznyā.* 19 G1 *med.* 20 G2 *longs.* 21 N1 *long.* 22 CD *sgrub.*

des na ji ltar 'dod pa ru // 945
 longs¹ spyod byed pas longs spyod sku //
 'khor gyi² nges pa sa bcu pa //
 'ba' zhig yin zhes seng bzang gsung //
 Shān ti³ mthong lam yan chad kyi //
 byang chub sems dpa' yin zhes zer // 950
 gnas ni 'og⁴ min chos de ni //
 theg pa chen po kho na'i chos //
 ston⁵ pa mtshan dang dpe byad kyi⁶ //
 brgyan⁷ pa'i gzugs ni kho na yin //
 mtshan ni⁸ sum cu rtsa gnyis dang // 955
 (G2. 582a) dpe⁹ byad¹⁰ brgyad cur bshad kyang de //
 dpag tu med par yod pa ste //
 rab (N1. 271b) gnas mtshon nas dpag med bshad //
 gdul bya'i ngor ni 'di tsam gyis //
 skyes bu (D. 240a) chen po mtshon pas (C. 245a) ni¹¹ // 960
 mtshan gyi¹² mtshan¹³ nyid dag¹⁴ tu bshad //
 ngo bo spyir ni gzugs yin yang //
 phal du¹⁵ dbang po lnga la 'jog¹⁶ //
 sems kyi¹⁷ rnam dag mtshon pas na //
 dpe byad zer te¹⁸ yang na ni // 965
 mtshan ni rgyan¹⁹ par byed pas na //
 dpe byad du yang 'dod pa yod //
 sangs rgyas mtshan²⁰ nyid ma yin yang²¹ //
 ji ltar 'dul bar sprul pas²² na //
 gzugs sku zhes ni brjod²³ pa yin // 970
 nges pa bzhi dang bral nas ni²⁴ //
 ji lta ba dang ji²⁵ lta bur //²⁶
 ston pa sprul pa'i sku²⁷ yin no //

1 G2 long. 2 P1 gyis. 3 CDG2N2P2 shānti. 4 CD 'gog. 5 G1 bston. 6 G1 kyi.
 7 G2 brgyad. 8 G2 mtshani. 9 G2 dang / dpe. 10 byed. 11 G2N2P2 na. 12 P1 gyis.
 13 P1 mchan. 14 N1 tag. 15 CD dud. 16 N1 'jig. 17 P1 gyi. 18 N1P1 ste.
 19 CDG2N2P2 brgyan. 20 P1 mchan. 21 G2N2P2 kyang. 22 G1P1 bas. 23 G1N1P1 rjod.
 24 CDG2N2P2 su. 25 G2N2P2 de. 26 CD insert de lta ba dang de lta bur //. 27 N1 ma.

de yis¹ mdzad pa nyi shu bdun //
(P1. 262a) lhun gyis grub cing rgyun mi 'chad // 975
'jig rten 'jig rten 'da' 'god dang //
sangs rgyas la 'god rNam grol gsungs² //
yang na ji lta ji snyed pa //
ji snyed rten dang lam bzhi 'god //
mthar thug la 'god³ ji lta ba // 980
Bud dha⁴ shrī dznyā (P2. 475a) na zer ro⁵ //
de ltar mdzad pa dpag med kyang //
(G1. 350a) lam bden rang bzhin gnas skabs te //
mya ngan 'das⁶ 'god 'bras bur (N2. 447a) 'dod //
lhun grub rgyun mi 'chad pa yang // 985
thub pa kho na'i mdzad par bzhed⁷ //

[Colophon]

bham ga⁸ lar⁹ skyes dge slong ni //
Mar me¹⁰ mdzad dpal ye shes kyis¹¹ //
gzhung dang bla ma'i gsung gis ni //
Phar phyin¹² bsdus don sgron mar¹³ byas¹⁴ // 990
(G2. 582b) de dge¹⁵ dri med gang thob pas //
'gro kun log¹⁶ rtog¹⁷ rnam spangs te¹⁸ //
pha rol phyin nyid rtogs nas kyang//
gghan la phan phyir¹⁹ ston par shog //

Shes rab kyi pha rol tu²⁰ phyin pa'i don bsdus²¹ sgron ma zhes bya ba /²² dpal Mar me
mdzad ye shes kyis mdzad pa rdzogs so²³ // //

paṇḍi ta de²⁴ nyid dang lo tsā²⁵ ba mkhas pa chen po'i²⁶ chen po Tshul (N1. 272a) khrim
rgyal bas bsgyur²⁷ // //

1 CDG2N2P2 yi. 2 CDG2N2P2 gsung. 3 D dgod. 4 CD buddha, G2B2P2 buddhā.
5 G2N2P2 om., G1 zero. 6 G1N1P1 zlas. 7 P2 bzhad. 8 CD bhanga. 9 G1N1P1 la.
10 G1 med. 11 P2 gyis. 12 G2 phyir. 13 G2N2P2 ma. 14 N1 bya ba. 15 CDN2 dag.
16 C lag. 17 P1 rtogs. 18 G ste. 19 P2 phyin. 20 G1 om. 21 CD bsdus don.
22 G2N2P2 //. 23 P1 rdzogso. 24 P1P2 da. 25 G1N1N2P1 tstsha.
26 G2N2P1P2 om. chen po'i. 27 CD bsgyur ba'o.

¹-slad kyi² dpal bsam yas lhun gyi³ sgrub pa'i riga pa 'byung ba'i gnas su / Dī paṃ ka ra
 shrī dznyā nas *Nyi khri* bshad pa'i dus su⁴ 'dir⁵ bshad pa⁶ nas bston⁷ / phyis lo paṃ⁸ gnyis kyis
 bi bar ta⁹ yis¹⁰ gsungs pa¹¹ dag pa'i dper tshud¹² pa'o // 'di¹³ dpe phyi mo dang bi bar ta¹⁴ dang
 rgya dpe gsum mchims phu na //¹⁵ bai ro¹⁶ tsa nas bsgyur ba'i 'bum sha sgro can gyis¹⁷ nang
 na yod do¹⁸ skad // // //
 bkra shis¹⁹ // //^{1,20}

1 CD om. 2 G2N2 kyis, P2 gyis. 3 G2N2P2 gyis. 4 G2 dusu. 5 G2N2P2 'di.
 6 G2N2P2 par. 7 G2N2 gton. 8 G2P2 phan, N2 pan. 9 G2N2P2 pitbarta. 10 G2N2P2 yig.
 11 G2N2P2 pas. 12 G2N2P2 chud. 13 G2N2P2 'di'i. 14 G2N2P2 pitbarta. 15 G1 om.
 16 P1P2 re. 17 G2N2P2 gyi. 18 G1N2 yodo. 19 G1G2P2 om. bkra shis.
 20 G1 adds *bsod nams stobs rgyas kyang mtshan mar gyur 'gro ba yis // tshe rabs du mar bsags pa'i sdiḡ sgrib
 ma lus kun // dge 'dis dug lnga'i mi lce chu yis bcil ba bzhin // ring min byang chub snying po'i ge 'phang myur
 thob shog / ces mi dbang pho lha bas sge gsum chig dril byang smon lam btab pa'o //*

28 *Karmāvaranaviśodhanavidhibhāṣya*

#¹ // rgya gar skad du / *Karma ā ba² ra ṇa³ bi⁴ sho dha na bi dhi bhā⁵ ṣyaṃ⁶ nā ma /*
bod skad du / *Las kyi sgrib pa rnam par sbyong ba'i cho ga bshad pa zhes bya ba /*
sangs rgyas dang byang chub sems dpa' thams cad la phyag 'tshal lo⁷ //

thub pa dri mas ma gos shing //
ye shes dkyil 'khor rab gsal ba //
gsung gi zer gyis 'gro kun gyi //
sgrib pa med sred⁸ nyi ma rgyal //

dpa' bo gang dag 'gro bsdug bsngal gyi rgya (N. 230a) mtsho yang bar bying ba rnams kyi sems phrogs shing de dag gdon par 'dod pa'i yid can dag gis byang chub la blo gzhol bar bya ste / de thob pa'i lam dam par zhugs la mi nyams par bya zhing ji ltar bya ba de 'phel bar 'gyur ba'i thabs la brtson par bya ste / gal te rkyen 'ga' zhig gis nyams par gyur na yang de ma thag tu phyir ldang ba'i thabs la 'bad par bya ste / pham pha'i gnas lta bu'i chos spyad pas sdom pa⁹ slar blang ba dang / zag pa 'bring las gyur pa rnams gsum la bshags pa dang / chung ngu las gyur pa rnams gcig la (C. 196a) bshags pa dang / de dag las gzhan pa¹⁰ rang gi sems kyis bsngam¹¹ par bya ba rnams ji (P. 236b) ltar spyad pa¹² bzhin chos dang mthun par sor chud par bya'o // de dag gi¹³ las kyi sgrib pa lhag mar gyur pa dag dang / gzhan yang thog ma med pa'i dus nas kun nas bsags pa'i sgrib pa stug po ji snyed pa rnams kyis byang chub chen po la gegs su¹⁴ mi 'gyur bar bya ba'i phyir thub pas gnang ba'i *Byang chub sems dpa'i ltung ba* (G. 291a) *bshags pa'i* (D. 194b) *cho ga* 'dis nyin mtshan dus drug tu bshags pa la 'bad par bya'o //

1 NP # // *ltung bshags 'grel pa jo bos mdzad pa'o* // // #,

G # // *ltung bshags 'grel pa jo bos mdzad pa'o* // // *shog bu bdun nas phun po gsum pa'i sgrub thabs nag po pas mdzad pa de dang bsgrel 'dug lags* // (G. 290b) #.

2 D pa. 3 P pi. 5 G bhi, NP bha. 6 GNP ṣum. 7 N 'tshalo. 8 CD med sred for mes sred.

9 G pa pa. 10 CD lhag ma rnams for gzhan pa. 11 CD bsngom. 12 P pa pa. 13 CD gis.

14 GN gegsu.

de la yang gang la bdag gi sgrib pa rnam bshags par bya ba de dag la dpung gnyen du bzung¹ ste / gus pas phyag 'tshal la gsol ba gdab par bya ba yin pas thog mar skyabs su² 'gro ba ni³ bdag ming 'di⁴ zhes bgyi ba sangs rgyas la skyabs su⁵ mchi'o⁶ zhes bya ba la sogs pa ste / yang dag par rdzogs pa'i sangs rgyas dang / chos dang /⁷ de'i rjes su⁸ sgrub pa'i dge 'dun rnam⁹ ni rim pa bzhin 'khor ba las brgal¹⁰ ba'i lam ston pa dang / lam dang / de sgrub pa'i grogs yin pa'i phyir ro // gzhan dbyig gi snying po dang / 'phrog byed (N. 230b) dang /¹¹ seng ge dang / mthu bo che la sogs pa dang / ser skya¹² dang / gzegs zan la sogs pa ni ma yin te / rang nyid srid pa'i btson ra mi bzad par las dang nyon mongs pa'i lcags sgrog dam pos bcings¹³ shing 'chi ba¹³ la sogs pa'i srin po 'jigs su¹⁴ rung ba dag¹⁵ gis kun du¹⁶ bcoms¹⁷ pa'i phyir ro // de bas na 'di dag kyang srid pa'i btson¹⁸ ra nas thar pa sangs rgyas kho na la rag las pa'i phyir¹⁹ sems dang ldan pa su zhig sangs rgyas la sogs pa bor te gzhan la skyabs su²⁰ 'gro bar byed //²¹

phyag 'tshal ba ni de bzhin gshegs pa dgra bcom pa yang dag par rdzogs pa'i sangs rgyas shākya thub pa la phyag 'tshal lo (P. 237a) zhes bya ba la sogs pa ste / de bzhin gshegs pa sum cu rtsa lnga po 'di dag gis byang chub sems (C. 196b) dpa'i spyad pa spyod pa'i tshe bdag cag bla (G. 291b) na med pa yang dag par rdzogs pa'i byang chub tu mngon par rdzogs par sangs rgyas pa na / gang zhig bdag cag gi mtshan 'dzin cing phyag 'tshal ba de dag kyang las kyi sgrib pa zad par gyur cig ces smon lam btab po // des na²² smon lam gyi²³ stobs can yin pa'i phyir²⁴ 'di rnam phyag 'tshal ba'i gnas su²⁵ bkod de / gzhan rnam la phyag 'tshal bar bya ba ma yin no²⁶ zhes pa ni mi brjod do //

de la²⁷ de bzhin gshegs pa ni chos rnam kyi²⁷ de bzhin nyid rtog pa 'am der song ba'o²⁸ // dgra bcom pa ni a ra ni dgra 'am rtsibs te / de bcom zhing bcag pa dang had do²⁹ // nyon mongs pa bag chags dang bcas shing yang mi skye ba'i chos can du byas pas rten cing 'brel par 'byung ba'i rtsibs bcag pa'i phyir dgra bcom pa zhes bya ste a ra had do // yang na 'os pa ste /³⁰ khams gsum pa thams cad kyi mchod par 'os pa (D. 195a) la sogs pa'i phyir ro³¹ // yang dag par ram / mnyam par kun tu³² ma lus pa'i

1 CD *gzung*. 2 *skyabsu*. 3 CD *ni* /. 4 CD 'dis. 5 GN *skyabsu*. 6 P 'chi'o. 7 P om.
8 GN *rjesu*. 9 CD om. 10 CD *rgal*. 11 P om. 12 C *skyer sa* for *ser skya*. 13 CD *pa*.
14 'jigsu. 15 CD *bdag*. 16 N *tu*, CD om. 17 C *bcom*, D *pa cam*. 18 P *gtson*.
19 CD *phyir* /. 20 GN *skyabsu*. 21 DGN /. 22 CD om. *des na*. 23 CD *gyi*.
24 CD *phyir* /. 25 GN *gnasu*. 26 GN *yino*. 27 CD om. 28 CD *nges pa'o* for *song ba'o*.
29 GN *hado*. 30 GNP om. 31 N *phyiro*. 32 CD *du*.

phyir sangs rgyas pas yang dag par rdzogs par sangs rgyas pa 'di dag gis spangs pa dang
yon tan gyi che ba gnyis brjod do¹ // gzhan gyi yon tan² du yang blta'o //

shākya thub pa ni shākya'i rigs su³ thub pa byung⁴ bas de skad ces bya'o //

yang dag par rdzogs pa'i sangs rgyas kyi ye shes ni mi phyed pas rdo rje ste / de'i snying
pos 'jig tshogs su⁵ lta ba la sogs pa mi mthun pa'i phyogs thams cad 'joms pas rdo rje snying
po rab tu 'joms (P. 237b) pa'o // de bzhin du gzhan rnam la yang yon tan⁶ gyi (G. 292a)
mtshan gyi⁷ rjes su⁸ 'brangs nas ji ltar rigs par mtshan gyi don bshags⁹ par bya ste / yon tan
mtha' yas pas re re la thams cad kyi mtshan brjod kyang de'i rgyu mtshan gnas pa'i phyir
rang dga'i nyes par 'gyur du dogs par¹⁰ mi bya'o //

gsol ba gdab pa ni de dag la sogs te zhes bya ba la sogs pa ste / bcom ldan 'das ni nyes pa
rnam bcom pa'am /¹¹ dpal la sogs pa'i yon tan¹² dang ldan pa'o // ji snyed ni ma lus
(C. 197a) pa'o // bzhugs pa dang 'tsho ba dang gzhes pa ni rim pa bzhin du chos kyi sku la
sogs pa gsum gyis so¹³ // bdag la dgongs pa ni thugs gtad par gsol ba'o // bdag gis gsol ba
tshul dang 'thun¹⁴ pa yin gyi /¹⁵ sangs rgyas rnam bsnyel ba mi mnga' ba'i chos nyid brnyes
pa nam du yang sems can gcig la yang mi dgongs pa mi srid do //

de ltar na sems can rnam 'khor ba'i sdug bsngal yang ba 'di dag las ci'i phyir grol bar mi
mdzad ce na / sems can rnam rang rang gi nyes pa ste / ji ltar nyi ma'i¹⁶ dkyil 'khor gzi
brjid dang ldan pa'i 'od kyis phyogs thams cad (N. 231b) rgyas par byed pa¹⁷ nye bar gnas¹⁷
kyang dmus long¹⁸ dag gis mi mthong ba bzhin no // de nas¹⁹ dKon mchog ta la la las
kyang /

dmus long gis ni nyi ma mi mthong yang //²⁰

de med ma yin 'jig rten kun tu 'char²¹ //

mig dang ldan pas shar bar shes gyur nas //

kun kyang²² so so²² rang gi las la 'jug //^{23, (1)}

ces bya ba la sogs pa don 'di rgyas par bstan to //

(1) *Ratnolkadhāraṇīsūtra*. Tib. P. No. 472.

1 G *brjodo*. 2 G *ytan* for *yon tan*. 3 GN *rigsu*. 4 P *'byung*. 5 GN *tshogsu*.
6 G *ytan* for *yon tan*. 7 CD *nyid*. 8 GN *rjesu*. 9 CD *bshad*. 10 CD *pas*. 11 G //.
12 G *ytan* for *yon tan*. 13 GN *gyiso*. 14 CD *mthun*. 15 G //.
16 CD *mi'i*. 17 CD *nyid*.
18 G *longs*. 19 CD *des na* for *de nas*. 20 GNP /. 21 N *'chang*. 22 CD *so so*, G *saur*.
23 DGNP /.

yul de dag gang (G. 292b) la bshags par bya ba sgrib pa'i dngos po ni bdag gis byas pa la sogs pa ste / bdag gis ni byed pa po'o // skye ba 'di dang (P. 238a) skye ba thog ma dang tha ma ma mchis pa ni byas pa'i dus so¹ // 'khor ba na 'khor (D. 195b) ba'i tshe skye gnas gzhan dag ni byas pa'i gnas so // byas pa'i sdig pa'i rang bzhin spyir brjod pa ni sdig pa'i las zhes bya ba la sogs pa ste / gang ci yang rung ste / sdug bsngal gyi rtsa bar 'gyur ba'i las rang gis byas shing gzhan² la byed du bcug pa ni² de ltar ma yin yang byas pa la dga' bas rjes su³ yi rang ba dang / bye brag tu rnam par smin pa lci ba ni⁴ mchod rten gyi dkor ram zhes bya ba la sogs pa ste / ma byin par len pa rnams kyi nang na lci ba sbyin bdag dad pa can rnams kyis gnas chen po brgyad la sogs pa'i mchod rten gyi ched du phul ba'i yo byad dam / phyogs bzhi'i dge 'dun thams cad dbang ba⁵ (C. 197b) dang gang zag so so'i bdag gi⁶ ma byas pa phrogs pa la sogs pa'o // de dag gis ngan song ngan 'gro rnam pa gsum gyi bar du yang⁷ sdug⁸ bsngal mi bzad pa myong bar byed cing sbyang ba⁹ dka' bas rnam par smin pa lci ba'o //

shin tu¹⁰ sdug bsngal ba'i nyes pa'i rgyu ni mtshams med pa'i las zhes bya ba la sogs pa ste / pha bsad pa la sogs pa 'di dag gang gis byas pa la sogs pa ni shin tu bzod par dka' ba'i sdug bsngal nyams su¹¹ 'bab pa'i mnar med pa'i sems can dmyal ba gzhan las sdug bsngal khyad par can du 'gyur bar¹² skye (N. 232a) ba la (G. 293a) gang gis kyang bar mchod pas mtshams med pa ste / des na 'di dag shin tu¹³ sdug bsngal ba'i nyes pa'i rgyu zhes kyang bya'o //

gzhi thams cad kyis bsdus pa'i mi dge ba ni mi dge ba bcu zhes bya ba la sogs¹⁴ ba ste / ngan 'gro gsum ci rigs par rnam par smin par¹⁵ myong bar 'gyur ba lus la sogs pa gzhi¹⁶ thams cad kyi las te / lus la brten pa (P. 238b) srog gcod pa la sogs pa gsum dang / ngag la brten pa brdzun du smra ba la sogs pa bzhi dang / yid la brten pa gnod sems la sogs pa'o // de gsum gyis ni gzhi thams cad bsdus pa mi dge ba'i¹⁷ las kyi lam ma lus¹⁸ pa zhes bya'o //

de las gzhan pa'i sgrib pa de dang rjes su¹⁹ mthun pa rnams ni las kyi sgrib pa gang gis zhes bya ba la sogs pa'o //

1 GN *duso*. 2 CD om. 3 GN *rjesu*. 4 N *ba'i for ba ni*. 5 CD *ba dang*. 6 CD *gir*.
7 CD *yang /*. 8 N om. 9 CD om. 10 P *du*. 11 GN *nyamsu*. 12 GNP om.
13 P *du*. 14 G *sod*. 15 CD *pa*. 16 P *bzhi*. 17 P *ba*. 18 CD '*dus for ma lus*.
19 GN *rjesu*.

de dag kyang gang byas na rang dang gzhan gyi don sgrub pa la nus pa med cing bar du
chod¹ pa'i skye ba 'dzin pa /²

sems dmyal yi dags dud 'gro dang //

kla klo 'du shes med lha dang //

log lta sangs rgyas la mi 'dun //

lkugs pa³ mi khom gnas brgyad do //

zhes gsungs pa de dag tu skye bar 'gyur ba'i las⁴ te / chos zab mo (D. 196a) spong ba dang /
ltung ba phra mo dag la mi 'dzems pa⁵ dang / ser snas yo byad la sogs pa la zhen te cung zad
kyang mi gtong bar sog⁶ pa dang / sangs rgyas la sogs pa la mi gus pa dang / thabs mi
mkhas pas 'du shes med pa'i snyoms par 'jug (C. 198a) pa yid la byed pa (G. 293b) dang /
gzhan gyi mig gi dbang po la sogs pa dang bral bar byed pa dang / log par lta ba'i rjes su⁸
phyogs pa dang / smon lam ma sbyangs pa ste / ji ltar rigs par gzhan yang bgrang ba las 'das
pa shin tu phra bar 'gyur ba de dag thams cad do //

dngos po de dag ji ltar bshags pa ni (N. 232b) sangs rgyas bcom ldan 'das zhes bya ba la
sogs pa ste / sangs rgyas rnam mngon du byas te⁹ mthol ba la sogs pa byas te phyis sdom
pa'o // de la ye shes su¹⁰ gyur ba ni ji lta ba'i rnam pa don dam pa dang / ji snyed pa'i rang
bzhin du¹¹ kun rdzob thams cad mkhyen pa'i rang bzhin can no¹² // spyen du gyur pa ni
spyen lnga rnam par dag pas mkhyen pa'o // dbang du gyur pa ni¹³ don thams cad phyin ci
ma log (P. 239a) par mkhyen pa'o // tshad mar gyur pa ni dbang du gyur pa de nyid kyi
phyir ro // mkhyen pa ni ye shes kyis so¹⁴ // gzigs pa ni spyen gyis te de dag gi spyen sngar
ro¹⁵ // yang na mngon par shes ba drug dang sbyar ro¹⁶ zhes kha cig 'chad do¹⁷ zhes grag
go¹⁸ // mthol ba ni rang gi ngo bos 'di byas so¹⁹ zhes ngag tu brjod pa'o // de dag la nyes pa
rnam pa du mar lta zhing sems kyis mi mthun par bzung nas nyes pa can du ston²⁰ ba ni
bshags pa'o // mi 'chab pa ni bdag gis bgyis pa'i sdig pa rnam gzhan gyis tshor te 'ong ngo²¹
snyam nas de'i thabs yid la mi byed pa'o //

1 P chos. 2 CN //. 3 GNP dang. 4 CD gnas. 5 CD 'dzem ba. 6 CD sogs. 7 D //.
8 GN rjesu. 9 P te /. 10 N shesu. 11 CD om. 12 N cano. 13 P na. 14 N kyiso.
15 N sngaro. 16 GN sbyaro. 17 G 'chado. 18 N grago, P grags so. 19 GN byaso.
20 C bston. 21 N om.

slan chad kyang sdom pa ni gnyen pos kun nas bzung ste / snga ma'i rjes su¹ mi 'jug par rgyun kun nas gcod pa'o // de dag gis ni² bdag gis (G. 294a) byas shing bsags pa'i sdig pa'i las³ zad par 'gyur ba'i stobs bzhi yang bstan te / rten gyi stobs dang / rnam par sun 'byin pa'i stobs dang /⁴ gnyen po kun tu⁵ spyod pa'i stobs dang / sor chud pa'i stobs so⁶ // de la gang la sgrib pa rnam bshags par bya ba'i rten dkon mchog gsum dang / de bzhin gshegs pa rnam la skyabs (C. 198b) su⁷ 'gro ba dang / phyag 'tshal ba ni rten gyi stobs so⁸ // byas pa'i rnam⁹ grangs nye bar rtog¹⁰ cing nyes pa du ma'i 'byung (D. 196b) gnas su¹¹ bzung nas yid la gcags pas bdag nyes pa can du brjod pa ni rnam par sun 'byin pa'i stobs so //¹² gnyen po de dang de dag yid la (N. 233a) byas pas yang mi 'byung bar byed pa ni gnyen po kun tu¹³ spyod pa dang / sor chud pa'i stobs so // stobs bzhi bo de dag¹⁴ yid la byas shing sems thag pa nas kha ton du byas las kyi sgrib pa rnam (P. 239b) kun nas bsrabs par 'gyur te /

ji skad du /¹⁵ Byams pa chos bzhi po 'di dag ni sdig pa byas shing bsags pa rnam kun nas bsrabs par 'gyur ba ste / bzhi gang zhe na /¹⁶ rten gyi stobs dang / rnam par sun 'byin pa'i stobs dang / gnyen po kun tu¹⁷ spyod pa'i stobs dang / sor chud ba'i stobs so //¹⁸ des ni byang chub sems dpa' gang dag sdig pa'i las zad par 'dod pa dag gis mdo 'di mang du yid la bya'o // kha ton du bya'o zhes gsungs pa bzhin no¹⁹ //

de ltar las kyi sgrib pa rnam bshags nas / da ni bdag gis byas pa'i dge ba'i rtsa ba rnam yang (G. 294b) dag pa'i bsngo bas ma zin pas 'bras bu med pa 'am / yod kyang dman par gyur pas²⁰ srid pa'i rgya mtsho las brgal²¹ ba'i phyir dge ba rnam bsngo bar bya ste / des ni 'byung khungs nas 'dus byas pa'i gser gyi phung po mgar ba mkhas pas rgyan du byas na rang dang gzhan la²² nye bar mkho ba'i yan lag tu 'gyur ba bzhin du ji ltar 'dod pa'i 'bras bur 'gyur ro²³ // de la gang gi mdun²⁴ du bsngo bar bya ba dag la gsol ba gdab pa ni sangs rgyas zhes bya ba la sogs pa'o // gang bsngo bar bya ba'i dge ba ni bdag gis²⁵ zhes bya ba la sogs pa ste / bdag ces bya ba la sogs pa ni snga ma bzhin no //

1 N rjesu. 2 GN ni /, C ni de dag gis ni. 3 GNP las //. 4 GN om. 5 D du.
6 N stobso. 7 GN skyabsu. 8 N stobso. 9 CD rnam. 10 N rtogs. 11 N gnasu.
12 N stobso. 13 D du. 14 CD om. 15 P om. 16 GNP om. 17 DG du. 18 P om.
19 GN bzhino. 20 CD 'gyur bas. 21 CD rgal. 22 CD dang. 23 G 'gyuro. 24 P bdun.
25 CD gi.

dge ba'i rang bzhin ni rnam pa gsum ste / sbyin pa las byung ba dang / tshul khriims las byung ba dang / bsgoms pa las byung ba'o //

de la sbyin pa las byung ba ni / sbyin pa tha na zhes bya ba la sogs (N. 233b) pa ste / chen (C. 189a) por 'gyur ba'i sbyin pa snod du gyur ba la chos kyi sbyin pa dang / 'jigs pa la mi 'jigs pa'i sbyin pa dang / (P. 240a) byams pa'i sbyin pa dang / zang zing gi sbyin pa dangos po mig la sogs pa nas yongs su¹ btang ba dang / khyad par du 'phags pa dag la phyi rol tu² gyur pa'i sems can gyis bsdu pa'i bu la sogs ba btang ba dang / de las gzhan pa gling bzhi la sogs pa btang ba dang / rgyal srid dang /³ de'i phyed dang / yul 'khor dang /⁴ ljongs dang / grong la sogs pa (D. 197a) dang / zas dang skom la sogs pa btang ba dang / tha na dud 'gro'i skye gnas su⁵ skyes pa la (G. 295a) zas⁶ kham gcig tsam byin pa yan chad de / yul dang dangos po shin tu dman par 'gyur ba'o⁷ //

tshul khriims las byung ba'i dge ba theg pa⁸ thams cad la so sor thar pa'i sdom pas bsdu pa / bsnyen par rdzogs⁹ pa nas dge bsnyen gyi bar gyi thun mong gi tshul khriims bsrung ba'o // rab tu byung bar gtogs pa kho na ni tshangs par spyod pa kho na la gnas pa'o // byang chub sems dpa' kho na'i dbang du byas pa sems can rnam yongs su¹⁰ smin par bya ba dang / byang chub kyi sems kyi dge ba'i rtsa ba ste / sbyin pas¹¹ sems can smin par byed pa dang / bsam pas byang chub kyi sems yongs su mi gtong ba kho na byang chub sems dpa'i tshul khriims rnam par dag pa yin pa'i phyir ro¹² // de lta ma yin na dge ba'i las kyi¹³ lam¹⁴ bcu la bskal pa bye ba tsam¹⁵ du mi dge ba'i skabs ma phye yang tshul khriims dge ba zhes mi bya la / bsam¹⁶ pa dang sbyor ba de lta bus brtson na 'dod pa'i yon tan¹⁷ lnga dang 'dre bar spyod kyang tshul khriims rnam par¹⁸ dag pa zhes brjod de / de skad du¹⁹ yang bcom ldan²⁰ 'das ma las /

byang chub sems dpa'²¹ dang zhig (N. 234a) 'dod yon lnga spyod kyang //
sangs rgyas²² chos dang 'phags²³ pa'i dge 'dun skyabs song ste //²⁴
sangs (P. 240b) rgyas²⁵ 'grub bya snyam du kun mkhyen yid byed²⁶ na //
mkhas pa tshul khriims pha rol phyin gnas rig par bya //

1 GN *yongsu*. 2 D *du*. 3 P *om*. 4 P *om*. 5 GN *gnasu*. 6 CD *om*. 7 CD *gyur pa'o*.
8 CD *om*. *theg pa*. 9 G *rdzod*. 10 G *yongsu*. 11 CD *sbyor bas*. 12 G *phyiro*. 13 GP *kyis*.
14 G *lam*. 15 G *tsam*. 16 G *bsam*. 17 G *yon* for *yon tan*. 18 G *rnamr* for *rnam par*.
19 G *skadu*. 20 G *bcomdas* for *bcom ldan*. 21 G *sempar* for *sams dpa'*.
22 G. *sangyas* for *sangs rgyas*. 23 G 'phad. 24 P/. 25 G. *sangyas* for *sangs rgyas*.
26 P *byang*.

(C. 189b) gal te bskal pa bye bar dge ba'i las lam bcu //¹
 sbyong² kyang dgra bcom rang rgyal nyid du³ 'dod skyed⁴ na //
 de tshe tshul khirms skyon byung tshul khirms nyams pa yin //
 sems bskyed de ni phas pham pas kyang shin tu lci //⁵

zhes gsungs so⁶ // 'di yang gzhan gyi don gtso bor gyur⁷ pas gtso bor bzhag^{7,8} pa yin gyi /
 rang gi don 'dogs⁹ pa ni ma yin no //

bsgoms pa las byung ba ni bla na med pa'i ye shes kyi dge (G. 295b) ba'i rtsa ba zhes
 bya ba ste / bla na med pa'i ye shes ni rnam pa thams cad mkhyen pa ste / kun rdzob kyis
 bsdus pa ji snyed yod pa dang / don dam pas bsdus pa ji lta bar gnas pa thams cad mkhyen
 pa nyan thos la sogs pa thams cad¹⁰ las phul du byung ba'o // de ni chos rnams kyi rang
 bzhin stong pa nyid dang / sgyu ma lta bus¹¹ bsgoms pa las byung ba ste / de dag gom¹² pa
 phul du phyin pa na spros pa thams cad bcad do //¹³ rang bzhin med pa gsal ba rab (D. 197b)
 tu gyur nas ci yang mthong ba med pa'i tshul gyis chos rnams rang bzhin stong pa nyid ji lta
 ba yul du byed cing sgyu ma lta bu'i don nam mkha'¹⁴ dang mnyam pa rgyu dang 'bras bus
 bsdus pa'i chos thams cad lag mthil du skyu ru ra bzhag¹⁵ pa bzhin du sgrib pa'i dri ma
 spangs pa las mngon sum du 'gyur ro¹⁶ // des na slob dpon Zhi ba'i lhas kyang //¹⁷

nyon mongs shes bya'i sgrib pa ni //
 mun pa'i gnyen po stong pa nyid //
 myur du thams cad mkhyen 'dod pas //¹⁸
 ci phyir de ni sgom mi byed //⁽²⁾

ces thams cad mkhyen pa'i ye shes kyi rgyu stong pa nyid bsgom pa (N. 234b) gsungs te /
 de ltar sbyin pa dang tshul khirms dang bsgoms pa (P. 241a) las byung ba de thams cad
 bsngo bar bya'o //

ji ltar bsngo zhe na / bsngo ba'i rnam pa ni gcig tu bsdus shing zhes bya ba la sogs pa
 ste / de thams cad blos phyogs gcig tu byas te / gzhan las phul du¹⁹ byung ba rnam pas so²⁰ //
 de la gcig tu bsdus pa ni rang gi ngo bo'i sgo nas so²¹ // bzlums (G. 296a)

(2) *Bodhi(sattva)caryāvatāra* 9.55.

1 D /. 2 CD *sbyong*. 3 P om. 4 P *skyes*. 5 GNP om. 6 GN *gsungso*. 7 CD om.
 8 G *gzhas*. 9 CD 'gog. 10 CD om. *thams cad*, G *tham*d. 11 CD *bu*. 12 CD *goms*.
 13 CD *de* / for *bcad do* //. 14 G *namkha'*. 15 CD *gzhas*. 16 GN 'gyuro. 17 GN //.
 18 D /. 19 P om. 20 CD *rnams so* for *rnam pas so*. 21 G *naso*.

pa ni bya ba'i sgo nas so¹ // bsdoms pa ni nus pa'i sgo nas so² // bla na ma mchis pa la sogs pa gsum ni nyan thos dang rang sangs rgyas dang / byang chub (C. 200a) sems dpa' las khyad par du 'phags pa ste / de ltar bsngo ba'o // gang du bsngo ba ni bla na med pa zhes bya ba la sogs pa³ ste /⁴ gnas skabs der ro // thabs gang gis bsngo ba ni ji ltar zhes bya ba la sogs pa ste / 'das pa la sogs pa'i bsngo ba ji lta bas so // de yang sangs rgyas bcom ldan 'das kyis⁵ dge ba'i rtsa ba rnams yang dag par med par⁶ shes bzhin du mdun du byas nas dge ba'i rtsa ba de dag dang / bsngo⁷ bar byed pa'i sems dang / gang du bsngo bar bya ba'i bla na med pa'i byang chub kyang don dam pa'i mtshan ma cung zad du yang mi 'dzin par sems can gyi ched du bla na med pa'i byang chub tu bsngo ba⁸ mdzad pa de bzhin du bdag gis kyang bsngo ba 'am / de lta bu'i thabs bdag gis mngon du bya bar ma nus na yang / sangs rgyas bcom ldan 'das kyis dge ba'i rtsa ba ji ltar bsngos pa de bzhin du bdag gi dge ba'i rtsa ba 'di yang bsngo'o⁹ zhes tshul de ltar bsngo bar bya ba ni sangs rgyas kyis yongs su¹⁰ gnang ba thabs dang bcas pa'i bsngo ba yin no //

de ltar sdig pa bshags pa dang / dge ba bsngo ba gsungs nas / byang chub chen po thob pa'i thabs (P. 241b) bsdus te brjod pa ni sdig pa thams cad ni so sor bshags so¹¹ zhes bya ba (D. 198a) (C. 200a⁵¹¹) la sogs pa ste / srid pa'i btson rar 'khyams shing byang chub (G. 296b) (N. 235a) chen po mi 'thob pa'i rgyu ni rang gis sdig pa'i las bsags pa dang / gzhan gyi dge ba la zhe sdang ba dang / sangs rgyas kyis bstan pa med cing de 'jig rten na mi bzhugs pa dang / smon lam phyin ci log btab pa dang / sangs rgyas la ma gus pa dang / de'i skyabs dang bral ba las yin la / nyes pa de dag rim pa bzhin sdig pa bshags pa la sogs¹² pas byang chub chen po 'thob¹³ par 'gyur ro¹⁴ // des na slob dpon dByig gnyen gyis kyang /¹⁵

byang chub chen po 'thob pa'i rgyu ni /¹⁶ sdig pa thams cad ni so sor bshags so¹⁷ // bsod nams thams cad kyis rjes su¹⁸ yi rang ngo¹⁹ // sangs rgyas thams cad²⁰ la gsol ba 'debs so²¹ // bdag gi ye shes bla na med pa'i mchog thob par²² gyur cig ces bya'o⁽³⁾

(3) *Lokeśvarasādhana* of Nāgārjuna. Tib. D. No. 2850, Nu 191b3-4.

1 N *naso*. 2 GN *naso*. 3 G om. 4 CD om. 5 P *kyi*. 6 CD *pa*. 7 CD *sngo*.
8 CD *bar*. 9 NP *bsngo'o* // 10 GN *yongsu*. 11 C misses following sentence.
12 G *sogs pa la sogs*. 13 D *thob*. 14 'gyuro. 15 GP // 16 P om. 17 GN *bshagso*.
18 GN *rjesu*. 19 GN *rango*. 20 GNP om. *thams cad*. 21 GN 'debsu. 22 D *tu* for *thob par*.

zhes gsungs te / sngar bshad pa bzhin stobs bzhi'i sgo nas rang gis byas shing bsags pa'i sdig pa bshags pa dang / zag pa dang bcas pa dang / zag pa med pa'i dge ba rnams byed pa'i bsam pas phul du byung ba'i dga' ba thob pa dang / sangs rgyas bcom ldan 'das gang dag chos kyi 'khor lo bskor bar mi bzhed cing thugs las chud pa la gzhol bar mdzad pa dang / mya ngan las 'das pa kun tu¹ ston pa rnams la 'gro ba rnams kyi don du chos kyi 'khor lo bskor ba dang / mya ngan las mi 'da' bar bskal pa grangs med par bzhugs² par gsol ba 'debs pa dang / dge ba gang dang gang byas pa rnams kyi bdag ye shes (P. 242a) kyi mchog rnam pa thams (G. 297a) cad mkhyen par smon lam 'debs pa'o³ // sangs rgyas rnams la⁴ thal mo sbyar ba ni phyag 'tshal ba yin la / skyabs su nye bar mchi ba ni / 'jigs pa thams cad kyi dpung gnyen du gzung ba ste / des ni sangs rgyas rnams la gus shing skyabs kyi gnas su⁵ gzung ba'o //

de dag gis ni mdo sde gzhan nas phung po gsum (N. 235b) zhes gang bstan pa de yang bsdus te / sdig pa bshags pa ni bshags pa'i phung po'o // dge ba'i rtsa ba bsngo ba ni /⁶ bsngo ba'i phung po'o // byang chub chen po thob pa'i thabs kyis sdig pa ni bshags pas so⁷ // rjes su⁸ yi rang ba ni bsngo ba'i yan lag ste / rjes su⁹ yi rang ba'i dge ba bsngo bas so¹⁰ // gsol ba 'debs pa ni gsol ba gdab¹¹ pa'i phung po'o // smon lam 'debs pa ni bsngo ba'i rang bzhin yin¹² no // (D. 198b) phyag 'tshal ba dang skyabs su bzung¹³ ba ni rten gyi stobs te / sdig pa bshags pa'i phung por 'dus so // de dag sems thag pa nas nyin lan gsum mtshan lan gsum du rgyun mi 'chad par byas na¹⁴ byang chub sems dpa' de'i las kyi lam gyi sgrib pa rnams zad nas 'dod pa'i 'bras bu mngon du 'gyur bas 'di la brtson par bya'o // slob dpon Zhi ba'i lhas kyang /

nyin dang mtshan mo lan gsum du //

phung po gsum pa gdon bya zhing //

rgyal dang byang chub sems brten pas //

ltung ba'i lhag ma des zhi bya //^{15, (4)}

zhes gsungs so¹⁶ // ji ltar byang chub sems dpa'i las kyi sgrib pa rnams (P. 242b) 'dis sbyang bar (G. 297b) bya ba bzhin du gzhan thams cad kyang ltung ba rnams chos dang mthun par

(4) *Bodhi(sattva)caryāvatāra* 5.98.

1 D du. 2 G zhugs. 3 D so. 4 D pa. 5 GN gnasu. 6 D om. 7 GN paso.
8 GN rjesu. 9 GN rjesu. 10 G baso. 11 D 'debs. 12 G om. 13 D gzung. 14 D na /.
15 GNP om. 16 GN gsungso.

sor chud par byas nas las kyi sgrib pa lhag ma rnams 'dis sbyang bar bya ba kho na'o //
gzhan dag las kyi sgrib pa zad par 'dod pa su yang rung ba dag gis kyang 'di la brtson par
bya'o // de ltar na las kyi sgrib pa rnams zad par 'gyur ro¹ // sangs rgyas bcom ldan 'das nyes
pa ma lus pa drungs nas phyung zhing ma nor bar rtog² pa'i ye shes can brtse ba chen po
gzhan sdug bsngal dang dbral³ bar bzhed pa'i bdag nyid chen po yin pas 'di la yid gnyis
cung zad kyang med de / rdzun⁴ gsung ba mi srid pa'i phyir ro⁵ //

spyod yul ma yin 'dod chen la //
rang dang gzhan gyi don gyi ngor //
bdag gis 'dad⁶ bgyis nongs pa las⁷ //⁸
skye bo mkhas rnams bzod par mdzod //
(N. 236a) 'di byas pa las bsod nams ni //
dam tshig rdo rjes thob gang yin //
des ni 'khor ba ma lus pa'i //
ma rig thibs⁹ por¹⁰ dbyis¹¹ 'byin shog //

*Las kyi sgrib pa rnam par sbyong ba'i cho ga bshad pa zhes bya ba¹² slob dpon Dī paṃ
ka ra shrī dznyā nas mdzad pa rdzogs so // //*

paṇḍi ta de nyid dang / lo tsā¹³ ba dge slong Tshul khriṃs rgyal bas bsgyur
ba'o //

¹ GN 'gyuro. ² D rtogs. ³ D bral. ⁴ D brdzun. ⁵ G phyiro. ⁶ G 'dabs, D 'bad.
⁷ D la. ⁸ GNP /. ⁹ D 'thibs. ¹⁰ N po. ¹¹ D bying. ¹² GNP pa for bya ba.
¹³ GNP tsisha.

29 Sarvakarmāvarāṇaviśuddhikaravidhi

//¹ rgya gar skad du / Sarba karma ā ba ra ṇa bi shu ddha ka ra bi dhi /²
bod skad du / Las kyi sgrīb pa thams cad rnam par 'thag par byed pa'i cho ga /
rje btsun sgrol ma la phyag 'tshal lo //

bla ma'i zhal nas kyi bka'i gdams pas blo'i padma kha bye ba / snying rjes rgyud brlan
zhing byang chub kyi sems brtan pas /³ maṇḍala la sogs pa sngon du 'gro ba'i cho ga
(N. 447b) byas la /⁴ snying brtse ba'i sems kyi rdzogs pa'i byang chub kyi sems brtan por
byas nas /⁵ bsod nams kyi tshogs bsags par bya'o //

om a kā ro mu khaṃ sarba dharmā ṇaṃ ā dya nutpa nna twa ta /
tshig gi don rjes su⁶ dran pas ji tsam nus pas ngal gso bar bya'o //

dam bcas pa'i rjes su⁸ dran pas de nyid las ma bskyod bzhin du sems nyid sgra'i rnam
par gyur pa la sogs pas gzugs kyi sku mngon par 'byung bar 'gyur ro⁹ //

sku mdogs¹⁰ sngon¹¹ po zhal gcig phyag gnyis pa /¹² a ru ra dang bdud rtsi'i lhung bzed
bsnams // sems dpa' gnyis po ser dang dkar ba ste /¹³ nyi ma zla ba cig shos 'dud par byed /¹⁴
rnam par dag pa'i tshig rdzogs par byas la /¹⁵ gzhan thams cad snying po byang chub la
bzhag nas // bcom ldan 'das kyi chos kyi¹⁶ sku rjes su¹⁷ dran pa brtan por bsgoms la // bla ma
dam pa'i zhal gyi gdams ngag gi //

om bhāi ṣa dze bhāi ṣa dze ma hā ṣa dze sa mu dga te swa hā //

zhes (G. 584a) ji tsam nus pa bzlas la bcom ldan 'das mdun du bzhugs pa dang bstod pa bya
ste // bcom ldan 'das rje btsun de nyid kyi smon lam chen po bcu gnyis po lan cig brjod par
bya'o //

de'i rjes la rmi lam gyi shes pas dge ba'i las la 'bad par bya'o //

thun mtshams su¹⁸ ji 'jigs la sogs pa'i gnod sbyin chen po bcu gnyis la gtor ma dbul bar
bya'o //

1 G // las kyi sgrīb pa thams cad rnam par thag par byed pa'i cho ga zhes bya ba sman bla'i sgrub thab bzhugso
// (G.583b).

2 N // 3 G // 4 G // 5 G // 6 G rjesu. 7 G om.
8 G rjesu. 9 N 'gyuro. 10 N mdog. 11 N sngan. 12 G // 13 G //.
14 G // 15 G // 16 G skyi for kyi sku. 17 G rjesu. 18 GN mtshamsu.

gzhan yang thun bar¹ mtshams su bcom ldan 'das de nyid kyi mdo'i po ti klag pa dang
kha ton du gdon par bya'o // gal te las kyi sgrib pa shin tu che na mdo de nyid nas gsungs
pa'i cho ga rdzogs par (N. 448a) bya'o //

Las kyi sgrib pa thams cad rnam par 'thag par byed pa'i cho ga ² slob dpon chen po
dpal Mar me mdzad pa ye shes kyi zhal snga nas mdzad pa rdzogs so // //
paṇḍi ta de nyid dang lo tā ba nag tsho Tshul khriṃs rgyal bas bsgyur ba'o // //
manga lam //

1 N om. 2 N //.

30 *Vimalaratnalekha*

#¹ // rgya gar skad du / *Bi ma la ratna*² le kha nā ma //
bod skad du / *Dri ma med pa*³ rin po che'i phrin⁴ yig ces bya ba //⁵
bla ma rnams⁶ la phyag 'tshal lo⁷ //
rje btsun ma⁸ sgröl ma la phyag 'tshal lo⁹ //

ma hā gha tir sku bltams¹⁰ nas //
sangs rgyas bstan pa 'phel mdzad cing //
rgyal srid chos kyis skyong mdzad pa //
Nir ya pa¹¹ la rgyal gyur cig /
khyod kyis sngon chad sbyin pa dang // 5
dge ba bcu dang gso sbyong¹² dang //
bzod dang brtson 'grus la goms pas //
lha khyod da lta phun sum tshogs //
bla ma rnams kyī bka' lung dang //
mdo sogs¹³ chos kyī¹⁴ rjes 'brang 'di // 10
gus pas spyi bos blang mdzod dang //
bdag gzhan (P2. 246a) gnyis la phan par 'gyur //
the tshom thams cad rnam spangs shing¹⁵ //
sgrub la nan tan che bar mdzod //
gnyid rmugs le lo rnam spangs shing¹⁶ // 15
rtag tu brtson 'grus 'bad par¹⁷ bya //
dran dang shes bzhin bag yod pas //
dbang po'i sgo rnams rtag tu bsrung //
nyin mtshan dus su¹⁸ yang (G2. 297b) dang yang //
sems kyī rgyud la brtag par bya // 20
rang skyon rtog la mig bzhin bya //
gzhan skyon rtog la long ba bzhin //

1 P1 # // *dri ma med pa rin po chei phrin yig ces bya ba bzhugs so* // #. 2 CD *ra tna*.
3 G2N2P2 *pa'i*. 4 CD1 *spring*. 5 G2N1N2 /. 6 G1 *rnams*. 7 G1G2 *'tshalo*. 8 P2 *om*.
9 G1G2N1 *'tshalo*. 10 G1G2N2P2 *btams*. 11 D1G1G2N1N2P1P2 *pha*. 12 N2P2 *sbyod*.
13 CD1 *stsogs*. 14 P1 *gyi*. 15 G1N1P1 *spang zhing*. 16 G2N2P2 *zhing*. 17 CD1N2P2 *'bad par*.
18 N2 *gsum*.

dran dang nga rgyal med pa dang //
 stong nyid rtag tu bsgom¹ par bya //
 bdag gi² nyes pa bsgrag³ bya zhing // 25
 gzhan gyi 'khrul pa btsal⁴ mi bya //
 (N2. 234b) gzhan gyi yon tan⁵ bsgrag par bya //
 bdag gi yon tan sba⁶ bar bya //
 rnyed dang bkur sti spang bya zhing //
 (C. 70b) khe⁷ grags rtag tu spang bar bya // 30
 (D. 70b) byams dang snying rje bsgom bya zhing //
 byang chub sems ni brtan par mdzod //
 mi dge bcu ni spang bya zhing //
 rtag tu (N2. 316b) dad pa brtan par bya //
 'dod pa chung zhing chog shes dang // 35
 byas pa⁸ drin du (P1. 320b) gzo bar bya //
 khro dang nga rgyal spang bya zhing //
 dman pa'i sems dang ldan par bya //
 log⁹ pa'i 'tsho ba rnam¹⁰ spang zhing //
 chos kyi 'tsho bas 'tsho bar bya // 40
 zang zing thams cad rnam¹¹ spang zhing //
 'phags pa'i nor gyis phyug por¹² bya //
 rtag tu 'du 'dzi¹³ spang bya zhing //
 dgon pa la ni gnas par bya //
 'khyal pa'i tshig rnams spang bya zhing // 45
 rtag tu ngag ni bsdam par bya //
 bla ma mkhan po mthong ba'i tshe //
 gus pas rim gro bskyed par bya //
 khyad par can gyi skyes bu dang //
 gang zag chos kyi mig¹⁴ can dang // 50
 las dang po yi sems can la //
 ston pa'i 'du shes bskyed par bya //

1 N1P1 *sgom*. 2 G1N1P1 *gis*. 3 G2N2P2 *bsgrags*. 4 N2 *bcal*. 5 G2 *yotan*. 6 P2 *spa*.
 7 G2N2P2 *kheng*. 8 D1N2P2 *la*. 9 N1 *lag*. 10 CD1 *rnams*. 11 CD1 *rnams*.
 12 G1N1P1 *par*. 13 N1 *'ji*. 14 G1N1P1 *ming*.

sdug bsngal dag gis gdungs pa dang //
 sems can thams cad mthong ba'i tshe //
 byang chub sems ni bskyed bya ste // 55
 pha ma bu tsha'i¹ 'du shes bskyed //
 'jig rten bya ba kun spangs te //
 rtag tu ting (P2. 246b) 'dzin bsgom par² mdzod //
 sdig pa'i grogs po spang bya zhing //
 dge ba'i bshes la brten³ par mdzod // 60
 tshul khirms 'chal ba'i⁴ dge slong dang //
 chos kyis⁵ phongs pa gzhan dag dang //
 (G. 392b) (G2. 298a) sdig pa spyod pa mthong ba'i tshe //
 de dag yal bar dor mi bya //
 mi dge'i bshes gnyen thams cad dang // 65
 sdig pa'i grogs po⁶ thams cad dang //
 dkon mchog gsum dang bla ma dang //
 mkhan po slob dpon mi gus dang //
 byas pa⁷ drin du mi gzo dang //
 tshe 'di 'ba' zhig dran pa dang // 70
 gzhan yang dad pa chung ba dang //
 zhag gsum 'das par gnas mi bya //
 sdang⁸ (N2. 235a) dang mi dge'i⁹ sa spang zhing¹⁰ //
 gang du bde bar 'gro bar bya //
 gang la chags pa spang bya zhing // 75
 chags pa med par gnas par bya //
 chags pas bde 'gro (N1. 317a) mi 'thob¹¹ cing //
 (P1. 321a) thar pa'i srog kyang geod par byed //¹²
 gang du dge ba'i bshes gnas pa //
 der ni rtag tu gnas par bya // 80
 bla ma rtag tu bsten¹³ pa dang //
 rtag tu mdo sde blta bar bya //

1 N1 cha'i. 2 P2 'jin sgam bar. 3 C ston, D1 sten. 4 G1N1P1 pa'i. 5 D1G1N1P1 kyī.
 6 N2 pa. 7 CD1G2N2P2 la. 8 N1 spang. 9 G1G2N1N2P1P2 bde'i. 10 CD1 spangs shing.
 11 G1N1N2P1P2 thob. 12 P1 /. 13 P1 sten, G2N2P2 brten.

thog mar brtsams pa gang yin pa //
 dang por de nyid bsgrub bya zhing //
 gzhan du gnyi (C. 71a) ga¹ 'grub mi 'gyur // 85
 gzhan du sdig pa bshags pa dang //
 (D. 71a) bsod nams mchog la 'bad par bya //
 'jig rten spyod dang mthun² pa dang //
 rtag tu pha rol sems bsrung³ mdzod //
 gang tshe mtho ba'i sems skyes tshe // 90
 de tshe nga rgyal bcag bya zhing //
 gang du bag yod bral ba'i tshe //
 bla ma'i gdams⁴ ngag dran par bya //
 zhum pa'i sems ni byung ba'i tshe //
 sems kyi gzengs⁵ kyang bstod par bya // 95
 shes rab pha rol phyin dran te //
 spros pa ma lus zhi bar mdzod⁶ //
 gang du chags sdang⁷ yul byung tshe //
 sgyu ma sprul pa⁸ bzhin du (G1. 392a) blta //
 mi snyan tshig⁹ rnam thos pa'i tshe // 100
 brag ca lta bur mkhyen par mdzod //
 lus la gnod pa byung ba'i tshe¹⁰ //
 sngon¹¹ gyi las su¹² blta bar bya //
 bas mtha' dgon par rab gnas shing //
 ri dags shi ba'i ro bzhin du // 105
 gang du sus kyang (G2. 298b) mi shes par //
 bdag gis bdag nyid sba bar bya //
 rtag tu yi dam brtan¹³ par bya //
 'dod dang gnod sems gnyid (P2. 247a) dang rmugs //
 le lo snyoms¹⁴ las sems byung tshe // 110
 de tshe bdag la rngan bgrang zhing //
 brtul¹⁵ zhugs snying po dran bya dang //

1 C *gtis ga*, D1G2N2P2 *gnyis ka*. 2 G2N2P2 *'thun*. 3 CD1 *su*. 4 G2N2 *gdam*. 5 N2 *gzangs*.
 6 G1N1P1 *mdzad*. 7 D1 *sdong*. 8 C *ba*. 9 N2P2 *tshigs*. 10 N2 *cha*. 11 N2 *sngan*.
 12 G1N1 *lasu*. 13 N2 *brten*. 14 CD1 *snyom*. 15 C *btul*.

mi rtag pa dang 'chi ba bsam //
 gzhan gyi mdun du gnas pa'i¹ tshe //
 zhi des gsong por smra bar bya // 115
 khro gnyer ngo 'dzum² spang bya zhing //
 rtag tu (N2. 235b) 'dzum zhing gnas par bya //
 rtag tu gzhan la dga' bya zhing //
 (P1. 321b) ser sna med (N1. 317b) cing gtong³ la dga' //
 rtag tu phrag dog⁴ spang bar bya // 120
 gzhan gyi sems ni bsrung bya zhing //
 rtsod⁵ pa thams cad spang bar⁶ bya //
 ngo dga' med cing gsar 'grogs med //
 rtag tu zungs⁷ ni thub par bya //
 rtag tu bzod dang ldan pa dang // 125
 'dod pa chung zhing chog shes⁸ mdzod⁹ //
 gdol pa bran gyi 'du shes so //
 ngo tsha shes dang khrel¹⁰ yod dang //
 pha rol mgu bya de la brtson //
 rang gi sdom¹¹ pa bsdoms¹² par mdzod // 130
 gzhan la brnyas pa spang bya zhing //
 gus pa'i tshul gyis gnas par bya //
 gzhan la gdams¹³ ngag¹⁴ byed pa'i tshe //
 snying rje phan sems ldan par mdzod //
 sangs rgyas chos la gus pa (G1. 393b) dang // 135
 dam chos nam yang spang¹⁵ mi bya //
 rtag tu dkon mchog gus pa dang //
 'khor gsum yongs su¹⁶ dag par (C. 71b) mdzod //
 sngon du snying rje song ba yis //
 nyin dang mtshan mo lan gsum du // 140
 mchod pa bdun du rab grags pa'i //
 phung po gsum pa gdon par mdzod //

1 P1 ba'i. 2 N2P2 zum. 3 C btang, D1 gtang. 4 P1 dag. 5 P2 brtsod. 6 P2 par.
 7 N2 gzhungs, P2 gzungs. 8 N1 shas. 9 CD1 bya, N1 mjod. 10 N1 'khrel. 11 N2 sdam.
 12 C bsdom, D1G2N2P2 bsdam. 13 N1 gdams, G2N2P2 gdam. 14 P1 dag. 15 G1 spong.
 16 G1G2N1 yongsu.

(D. 71b) 'gro ba'i sdug bsngal bsal 'dod pas //
smon lam rgya chen gtab¹ pa dang //
sems can smon² dang byang chub 'dod // 145
thams cad byang chub chen por bsngo //
dus ni ring (G2. 299a) por dam bcas nas //
rtag tu brtson dang ldan par bya //
de ltar mdzad na³ tshogs gnyis po //
rdzogs 'gyur sgrib gnyis zad par 'gyur // 150
mi lus thob pa don yod cing //
mthong ba'i chos⁴ la mya ngan 'da⁵ //
bdag dang gzhan don rdzogs gyur nas //
dam pa nyid⁶ ni thob par 'gyur //
sos⁷ ka'i⁸ khu byug gzhan nu⁹ snyan sgrog¹⁰ ces¹¹ // 155
rma bya gzhan nu¹² skad¹³ snyan¹⁴ mi sgrog¹⁵ sam¹⁶ //
mkhas pa mang pos¹⁷ gsungs (P1. 322a) pa yod (N2. 236a) mod kyi¹⁸ //
rgyal po gdung ba gcad¹⁹ phyir²⁰ bris pa yin //
phan sems ldan pa'i gdam²¹ 'di²² legs par dgongs mdzod²³ la //
rtogs²⁴ dang ldan pa'i skye bo gzhan la²⁵ smra bar mdzod // 160
(N1. 318a) rtag tu lha drug dran mdzod dam tshig²⁶ gtsang bar²⁷ mdzod //
rgyal srid chos kyis skyong mdzod bdag la bzod par mdzod //

*Dri ma med pa'i rin po che'i phring²⁸ yig ces bya ba //²⁹ gnas brtan mkhas³⁰ pa chen po
Dī pam ka ra shrī dznyā nas³¹ /³² rgyal³³ po ni rya³⁴ pha la la brdzangs³⁵ pa³⁶ rdzogs³⁷ so³⁸ // //*

(G1. 394a) dus de nyid du bla ma de nyid dang /³⁹ lo tsā ba dge slong Tshul khriṃs rgyal
bas bsgyur ba⁴⁰ / shlo ka bzhi bcu pa'o //

1 D1 *gdab*. 2 G2N2P2 *smin*. 3 G2 *nas*. 4 N2 *chas*. 5 G2 'das. 6 G2N2P2 *gnyis*.
7 G2N2P2 *so*. 8 CG2 *ga'i*. 9 CD1G2N2P2 *nu skad*. 10 CD1G1N1P1 *sgrogs*.
11 G2N2P2 *zhes*, CD *zhes te*. 12 G2 *gzhonu*. 13 CD1G2N2P2 *skad mi*.
14 CD1G2N2P2 *snyam pa*. 15 G1 *sgroḍ*. 16 G1 *saṃ*, G2N2P2 *min*. 17 CD1 *pos legs par*.
18 CD1G1N1P1 *kyis*. 19 CD1G2N2P2 *bcad*. 20 CD1 *phyir bdag gis*. 21 CD1G2N2P2 *gtam*.
22 CD1 *de*. 23 N1 *mdzad*. 24 G2N1N2P1P2 *rtog*. 26 CD1G2N2P2 *la'ang*. 26 G2N2 *tshigs*.
27 CD1 *mar*. 28 CD1 *spring*. 29 G2N2P2 *om*. 30 C *mnas*. 31 N2 *na*. 32 G2N2P2 *om*.
33 N2 *brgyal*. 34 G2P2 *ra*. 35 CD1 *brdzongs*. 36 N1P1 *na /*. G1N1P1 *na shlo ka bzhi bcu pa*.
37 P1 *rjogs*. 38 N2 *sho*. 39 G2N2P2 *om*.
40 P2 *pa'o // // lan cig zhus // ma ngā lam //, G2N2 ba'o // bkris //*.

31 *Kulapranidhāna*

//¹ rgya gar skad du /² *Ku la pra ni dhā na nā ma /*

bod skad du / *Rigs kyi smon lam zhes bya ba* /³

'phags ma sgrol ma la phyag 'tshal lo⁴ //

bdag ni 'chi ba'i dus kyi tshe //

dbang po gsal bar 'chi ba dang //

gnad gcod sdug bsngal med pa dang //

srid pa bar ma do ru yang //

rang byung ye shes rtogs par shog // 5

rang byung ye shes rtogs nas kyang //

gar skye rang dbang yod par shog //

gang du⁵ skyes pa'i sa der yang //

nyon mongs mtha' dag chung ba yi //

chos ldan rigs su⁶ skye (G. 382a) bar shog // 10

chos ldan rigs su⁷ skyes nas kyang //

chos ldan grogs⁸ dang phrad par (P. 307a) shog //

chos ldan grogs dang phrad nas kyang //

gtso bo dkon mchog mchod pa dang //

sdom pa gsum la gnas par shog // 15

sdom⁹ pa gsum la gnas nas kyang //

stong nyid dam pa sgom¹⁰ pa dang //

thos pa'i chos rnams dran par shog //

thos pa'i chos (N. 299b) rnams dran nas kyang //

¹¹theg pa chen po'i don rtogs nas //¹¹ 20

rang don gtso bor mi byed cing //

'khor ba'i sems can thams cad kyi //

sdug bsngal bdag la smin par shog //

1 GN om. #//. 2 N // . 3 GN // . 4 GNP 'tshalo. 5 CD der. 6 GN rigsu. 7 N rigsu.
8 N groḍ. 9 N. sdom. 10 CD bsgom. 11 CD om.

s dug (D. 319b) bsngal (C. 322b) bdag la smin nas kyang //
lus ngag sems la¹ mi gnod cing // 25
mtshan pa'i spyod pas mi g-yel ba'i² //
gzhan don dmigs pa'i sems kyis su³ //
gzhan don thams cad⁴ byed par shog //
gzhan don thams cad⁵ mthar phyin nas //
ye shes lnga dang ldan pa yi // 30
sku gsum lhun gyis grub par shog //

*Rigs kyi smon lam zhes bya ba // slob dpon mkhas pa chen pod pal Mar me mdzad ye shes
kyi zhal snga nas mdzad pa rdzogs so⁶ // ⁷*

1 P om. 2 N ba'o. 3 GN kyisu. 4 G *thamḍ* for *thams cad*. 5 G *thamḍ* for *thams cad*.
6 N *rdzogs*. 7 CD //.

32 *Samādhisambhāraparivarta*

//¹ rgya gar skad du² / (G1. 103b) *Sa mā³ dhī⁴ saṃ bha⁵ ra pa ri ba rta /*
bod skad du / *Ting nge⁶* (P2. 47a) 'din gyi⁷ tshogs kyi le'u /⁸
'jig rten mgon po la phyag 'tshal lo⁹ //

dang po'i¹⁰ snying rje'i stobs las byung //
rdzogs pa'i byang chub sems brtan byas¹¹ //
srid pa'i longs spyod bde ma chags //
yongs su¹² 'dzin la¹³ rgyab kyis phyogs //
dad sogs nor ni phun sum tshogs // 5
bla ma sangs rgyas dang mnyam gus //
des (N1. 147a) bstan dam tshig¹⁴ spyod pa ni //
yongs su¹⁵ bskyang¹⁶ la rab tu brtson //
bum pa gsang ba'i dbang bskur¹⁷ ba //
bla ma'i drin gyis yongs su¹⁸ thob¹⁹ // 10
lus (G2. 49b) ngag sems ni rnam (D1. 135a) dag pa'i //
sgrub²⁰ pa po de dngos grub snod //
ting 'dzin yan lag las byung ba'i //
tshogs ni yongs su²¹ rdzogs pa las //
myur du dngos grub thob (C. 135a) 'gyur la²² // 15
de ltar gsang sngags tshul gnas yin //
ting²³ 'dzin yan lag nyams gyur cing //
de yi mi mthun phyogs gnas na //
skye ba bye ba stong gis kyang //
ting 'dzin rab tu grub mi 'gyur // 20
ting nge²⁴ 'dzin ni rab grub phyir //
gsang sngags spyod gnas rnal 'byor pas //
de las gzhan pa'i sems spangs te //

1 G1N1P1 # (G1P1 om.) // *ting nge 'dzin gyi tshogs kyi le'u bzhugs so // #.* 2 N2 skadu.
3 D ma. 4 D2G2N2P2 dhī. 5 G2N2P2 bhā, CD1 sambha. 6 N1 tinge. 7 C om. 8 P1 //
9 N1 'tshalo. 10 G1G2N2D2 po. 11 CG1P1 bya (D?). 12 G2N1N2 yongsu. 13 CD1 pa.
14 D2 chos. 15 G2N1N2 yongsu. 16 D1 bskyed. 17 G1N1P1 skur. 18 N1N2 yongsu.
19 D2 'thob. 20 G1N1P1 bsgrub. 21 G1G2N1N2 yongsu. 22 D1D2G1N1P1 ba.
23 G1 ting nge. 24 N1 tinge.

g-yeng¹ med brston pas 'bad par bya //
 ting nge² 'dzin gyi yan lag dang // 25
 mi mthun phyogs gang nges bya'i³ phyir //
 ting 'dzin yan lag⁴ mi mthun phyogs //
 de ni mdor⁵ bsdus nas bshad bya //
 tshul khirms phun sum tshogs pa dang //
 longs spyod rnams la bltos⁶ med nyid // 30
 bzod ldan dam bca'⁷ brtan pa (P1. 169b) dang //
 skye bo⁸ 'du 'dzi rnam par spong⁹ //
 lus dang ngag yid las rnams (G1. 204a) la //
 shes bzhin dang ni ldan pa dang //
 sangs rgyas skur¹⁰ dogs¹¹ dran pa yi¹² // 35
 lus kyi rjes dran yang dag¹³ ldan //
 dus gang du ni gang bya ba'i¹⁴ //
 (D2. 38a) rjes dran de la¹⁵ brtan pa dang //
 sgrib pa lnga ni spang ba¹⁶ dang //
 zas kyi tshod rig spyod lam ran // 40
 'jig rten chos ni thams cad la //
 rtag tu sems ni btang snyoms dang //
 yo byad bsnnyungs di (N2. 40a) yan lag (P2. 47b) ste //
 go bzlog pa ni mi mthun phyogs //
 Ting¹⁷ 'dzin tshogs kyi¹⁸ le'u bkod pa'i bsod nams des¹⁹ // 45
 'gro bas ting 'dzin rdo rje lta bu thob par shog //²⁰

Ting nge 'dzin gyi tshogs kyi le'u ^f²¹ slob dpon mkhas pa chen po dpal Mar me mdzad ye
 shes kyi zhal snga nas mdzad pa rdzogs so²² // //

rgya gar skad gyi mkhan po de nyid dang / (N1. 147b) zhu chen (G2. 50a) gyi lo tsā ba
 dge slong shā kya blo gros kyis bsgyur cing zhus te gtan la phab pa'o // //²³

1 G1N1P1 *g-yens*. 2 N1 *tinge*. 3 D2 *spang ba'i*. 4 D1 *yag*. 5 N2 *phyogs*. 6 CD1D2 *ltos*.
 7 D2 *bcas*. 8 G2N2P2 *bo'i*. 9 CD1D2 *spang*. 10 G2 *bskur*, D2 *bkur*.
 11 G2N2P2 *bstod*, D2 *la sog*s. 12 D2 *pa'i*. 13 D2 *yan lag*. 14 D1D2 *yi*, C *ba yi*. 15 D2 *dag*.
 16 P2 *spangs pa*. 17 N1 *tinge*. 18 G1G2N1P1P2 *om*. 19 D2 *kyis*. 20 CD1P1P2 /.
 21 CD1G2N2P2 *om*. 22 G1 *sho*. 23 CD1D2G2N2P2 //

33 *Samsāramanoniryāṅkāranāmasaṅgīti*

#¹ // rgya gar skad du / *Sam*² *sā ra ma na ni ryā*³ *ṅi*⁴ *ka ra nā*⁴ *ma sang*⁵ *gī tī*⁶ /
bod skad du / 'Khor ba las yid nges par 'byung bar byed pa zhes bya ba'i glu /
bla ma rnams la phyag 'tshal lo⁸ //
dkon mchog gsum la phyag 'tshal lo //

e ma'o //

'du byed sdug bsngal 'gyur ba'i sdug bsngal dang //⁹
sdug bsngal sdug bsngal la sogs brgya rtsa bcu¹⁰ //
sdug bsngal kun las skyob par mdzad pa yi //
sman pa'i rgyal po de la phyag 'tshal (G1. 347a) lo¹¹ //
kye kye kwa ye¹² grogs po dag /¹³
'khor ba'i rgyu ni nyon mongs pa dang las // 5
nyon mongs khams gsum gnas ni¹⁴ gdu (D1. 253b) bcu brgyad //
(G2. 15b) zag pa¹⁵ chu bo sbyor ba nye bar len //
rgyu dang yul dang sbyor ba'i stobs kyis¹⁶ byung //
kye kye kwa ye¹⁷ grogs po dag /
sna tshogs¹⁸ (C. 253b) 'di dag las las¹⁹ byung //
de yang nyon mongs stobs las byung // 10
dge dang mi dge lung ma bstan //
mthong la myong ba²⁰ skyes nas myong //
gzhan du myong dang ma nges pa'i //
dkar dang gnag dang 'dren mo'o //
'khor ba'i las ni lci gang dang // 15
nye ba gang dang goms pa gang //
sngon byas gang yin de las ni //
snga ma snga ma rnam smin 'gyur //

1 P1 'khor ba las yid nges par 'byung bar byed pa zhes bya ba'i glu bzhugs so // #.

2 CD1 san. 3 G1N1P1 ya, G2N2 rya. 4 G2N2 om. 5 G2N2P2 sya. 6 G1N1P1 te.

7 G1N1P1 //, 8 N2 'tshalo. 9 G1N1P1 /, 10 N1P1 dgu. 11 N1 'tshalo.

12 CD1G1N1P1 kwa'i. 13 N1 om. 14 D2N2P2 ni. 15 G2N2P2 pa'i. 16 G1N1P1 kyi.

17 CD1G1N1P1 kwa'i. 18 N1 tshod. 19 G1N1P1 la. 20 CD1G1N1P1 dang.

groggs dag soms shig thog ma med pa nas //
 ma rig la sogs bcu gcig rga shi'i mtha' // 20
 yan lag bcu (P2. 15a) gnyis cha gsum zo chu'i¹ tshul //
 nang gi rten 'brel yang dang yang du 'khor //
 tshe rabs tshe rabs grangs med de dang der //
 skye dang rgang dang na dang 'chi ba yi //
 sdug bsngal rnam kyis yang dang yang du gdungs // 25
 'khrul nas 'khor gyur 'khrul zhing 'khor bar 'gyur //

kyi hung /²

srid pa'i lam gyis dub pa'i (N1. 257b) 'gron³ po (N2.13a) (P1.268a) rnam⁴ //
 sdug bsngal bde bar mthong⁵ nas mi skyo bar⁶ //
 khyod⁷ yid de la rtag tu chags byed pa //
 phyugs dang khyad par med par bla ma gsung // 30
 bla mas zin pa'i skye bo⁸ mkhas pa dag //
 skad cig (G1. 347b) skad cig 'gro ba lnga po kun //
 'khor ba'i sdug bsngal tsher ma zug 'dra la //
 rus⁹ pa'i gting nas snying rje¹⁰ su mi skye //
 las ngan dbang gis 'khor ba'i rgya mtsho 'dir // 35
 yang yang skye zhing yang yang rga dang na //
 yang yang 'chi 'gyur 'di ni mi sems par //
 yul la chags byed bdag gis ji ltar bya //

¹¹kye kye kwa ye⁻¹¹ grogs po¹² dag¹³ /¹⁴

srid pa gsum (D2. 12a) nad gnas pa kun sdug bsngal //
 de yang mi yis¹⁵ sdug bsngal bdag gis mthong // 40
 mngal gyi sdug bsngal (G2. 16a) 'di lta bu ru gnas //
 nur nur mer mer gor gor nar nar po //
 ltar ltar mkhrang dang rkang lag rim gyis rdzogs //

1 CD1G1N1P1 chu. 2 CG1N1P1 om. 3 G1N1P1 mgron, P2G2 'dron. 4 G1N1P1 snams.
 5 CD1 bzung, G1N1P1 gzung. 6 CD1 ba, G1N1P1 skyab pa. 7 CG1N1P1 khyed. 8 G1N1P1 bos.
 9 D2 gus. 10 N2 rjes. 11 CD1G1N1P1 om. 12 CG1N1P1 om. 13 D1 om. 14 CD1G1N1P1 om.
 15 N2 yis, G1 ma'i, N1P1 mi'i.

nu zho mar gyis gso byed cing //
 shin tu nyam¹ chung gan rkyal² nyal // 45
 byis pa dar ma lang tsho dang //
 rgas pas slar yang byis par 'gyur //
 tshe ni mi rtag shin tu g-yo ba ste //
 yud tsam sdod pa'i mthu yang yod ma yin //
 bdag ni nges par 'chi 'gyur mi sems pa // 50
 grogs dag³ skyes bu de ni ngo mtshar che //
 'khor ba'i skyon dang nyes dmigs mi shes pas //
 phyin ci log pa (D1. 254a) bzhi la gnas nas su //
 bdag ni nges par 'chi 'gyur mi sems par //
 yul (C. 254a) la mngon zhen⁴ nyin mtshan don med 'das // 55
 dzam bu'i⁵ gling ba dus min 'chin ba ste⁶ //
 nges pa can yang zad par (P2. 15b) 'gyur bas na //
 yang dang yang du nges par 'chi'o⁷ zhes //
 bsam par rigs so⁸ kwa ye⁹ bzhin bzad dag //
 sos ka¹⁰ me tog (G1. 348a) rgyas pa'i dus 'di 'byung¹¹ bar 'gyur // 60
 zla ba gsal bas mtshon pa'i ston dus 'di 'byung zhes //
 skye bo thams cad dga' 'gyur bdag gi tshe 'di ni //
 zad par 'gyur zhes shin tu mi dgar 'gyur ba med //
 de ring (P1. 268b) 'di bya¹² sang ni 'di bya
 de nas 'di dang¹³ 'di bya zhes //
 srid pa g-yo ba'i rang bzhin (N1. 258a) ma shes
 don med yid brtan tshol byed pa'i // 65
 skye dgu 'chi bdag gi ni chu srin
 khar ni gru ni zhugs pa ltar //
 bya ba mthar ma phyin par yul gyi
 chu yi dba¹⁴ (N2. 14a) klong nang du lung //

1 G1N1P1 *nyams*. 2 N1P1 *rgyal*. 3 G1N1P1 *bdag*. 4 D1 *zhin*. 5 CD1G 'dzam bu'i, P1 'dzambu'i.
 6 CD1G1N1P1 *bas te*. 7 G1N1P1 'chi bo. 8 G2N1 *rigso*. 9 CD1G1N1P1 *kwa'i*.
 10 CD1 *so ga*, G1N1P1 *so ka*. 11 G1N1P1 *byung*. 12 D1G1N1P1 *byas*. 13 P1N1 om. 'di dang.
 14 G1N1P1 *chu'i rba*.

'di ni sang bya¹ 'di ni thang cig 'og tu bya //
 'di ni de'u re bya zhes skye bo sems pa na //
 gshin rje² be con³ lag thogs zur gyis lta byed cing // 70
 mig rtsa dmar khros ma rangs⁴ gang mo⁵ re snyam 'debs⁶ //
 rnal 'byor bstan bcos⁷ thams cad dang //
 sbyor ba du ma (G2. 16b) rab shes⁸ kyang //
 deng bya sang bya zhes⁹ smra zhing //
 bsam¹⁰ dang ldan par¹¹ 'chi bar 'gyur // 75
 tshe ni¹² gnod mang¹³ rlung gis btab 'dra¹⁴ yi //
 chu yi chu bur bas kyang mi rtag na //
 dbugs 'byung dbugs rngub gnyid¹⁵ kyis log pa las //
 sad khom¹⁶ gang lags de ni ngo mtshar che //
 kye kye kwa ye¹⁷ grogs po dag /
 tshe ni yun thung shes bya'i rnam pa mang // 80
 tshe yi tshad kyang ji¹⁸ tsam mi shes pas //
 ngang ba¹⁹ chu las²⁰ (D2. 12b) 'o ma len pa ltar //
 rang gi 'dod pa rang la blang bar gyis //
 kye kye kwa ye²¹ grogs po dag /
 'jig rten spyod pa dag la phar bltas²² na //
 byas (G1. 348b) pa thams cad don med sdug bsngal rgyu // 85
 ci la bsams²³ kyang phan par mi 'gyur bas //
 rang gi sems la lta ba goms par gyis //
 kye kye kwa ye²⁴ grogs po dag /
 tshad ma bdun dang brda²⁵ sprod²⁶ rnam pa bzhi //
 mngon pa dang ni yo ga ts rya'i sa //
 mdo sde dang ni (P2. 16a) 'dul ba mngon pa dang // 90
 gzhung du bkod pa ma lus thams cad kun //

1 G2P2 bya'i. 2 G2P2 rje'i. 3 G1N1P1 tshon. 4 D1 rungs. 5 CG1N1P1 mos. 6 N2 'dabs.
 7 G1N1P1 chos. 8 G2N2P2 shes rab for rab shes. 9 P1 zhis. 10 N1 bsam.
 11 D1G1N1P1 pas. 12 CD1 'di. 13 G1N1P1 ma. 14 CD1 pa. 15 N1 gnyid. 16 P1 khod.
 17 CD1G1N1P1 kwa'i. 18 D1N1P1 ci. 19 CD1 pas. 20 G2 la. 21 CD1G1N1P1 kwa'i.
 22 G1 P1 ltas. 23 G1N1P1 bsam. 24 CD1G1N1P1 kwa'i. 25 G1N1P1 brda'. 26 N1P1 spro.

ma mthong ma mnyam ma bshad ma bris zhes //
 de la gdung ba mi¹ bskyed bzhin bzang² dag //
 (D1. 254b) bla ma'i man ngag ces bya bdud (C. 254b) rtsi'i ro //
 gang gis sems mnyam 'jog pa de tsam zhig // 95
 yongs su³ btsal gyi⁴ gzhung mang⁵ ci zhig dgos //
 thams cad yid ni 'khrul par byed pa'i rgyu //
 'khor ba'i gnas 'di nges pa med (P1. 269a) pas na //
 pha ma la sogs pha mar ma nges pas //
 nye du 'brel pa dag la chags pa spang⁶ // 100
 dgra (N1. 258b) yang ma nges de la sdang ba spang⁷ //
 nad med lang tsho phun sum tshogs⁸ pa dang //
 'dod yon lnga la rang bzhin gyis chags spang⁹ //
 rnyed pa dang ni bkur sti¹⁰ grags pa dang //
 rigs dang rus dang tshigs su¹¹ bcad pa spang¹² // 105
¹³-slob ma yang slob chos kyi 'brel pa (G2. 17a) spang¹⁴ //¹³
 kye¹⁵ kwa yi¹⁶ grogs po dag /
 'jig rten stag¹⁷ sprul me dang dug 'dra¹⁸ bar //
 bsams¹⁹ nas spangs te dben par gnas par bya //
 bud med mtshan nyid (N2. 14b) skyes pa'i mtshan nyid dang //
 sman dang glang chen brtag²⁰ pa 'am gza' skar rtsis // 110
 mtshon cha brtag²¹ pa'am rta dpyad ²²-rang bzo 'am²² //
 bstan bcos²³ ngan pa (G1. 349a) slob dang klag²⁴ pa spang²⁵ //
 yul la mngon dga'i sems ni byung ba dang //
 rnam rtog de dag rnam ni byung ba na²⁶ //
 bdag ni nges par 'chi ba dran byas la // 115
 'og nas 'byung ba'i gnyen po rnam kyis²⁷ bzlog //
 rnam rtog mang ba dbugs bgrangs pa²⁸ yis gzhi //
 'dod chags sems byung rnam par rtog pa de //

1 CG1N1P1 *ma*. 2 CG1N1P1 *bzangs*. 3 G2N2 *yongsu*. 4 CD1 *gyis*. 5 CD1G1N1P1 *mangs*.
 6 CD1 *spangs*. 7 CD1 *spangs*. 8 N2 *sum tshod*. 9 CD1 *spangs*. 10 G1N1P1 *bsti*.
 11 G2N2 *tshigsu*. 12 CD1G1N1P1 *spangs*. 13 G1N1P1 *om*. 14 CD1 *spangs*. 15 G2N2 *kyai*.
 16 CD1G1N1P1 *kwa'i*. 17 G1N1P1 *rtag*. 18 G1 'bra. 19 G1N1P1 *bsam*. 20 CD1 *brtags*.
 21 CD1 *brtags*. 22 D2 *rin chen bzo*. 23 G1N1P1 *chos*. 24 G2N2 *klag*. 25 CD1G1N1P1 *spangs*.
 26 CD1 *nas*. 27 G2N2P2 *kyi*. 28 CG1N1P1 *bgrang ba*.

rang bzhin mi gtsang keng rus lta¹ bas bzlog //
zhe sdang la ni byams pa'i chu yis gdab² // 120
gti mug la ni rten 'brel lam gyis so //
mi gtsang ba dang byams pa rten 'brel gyi //
man ngag bla ma'i zhal³ nas 'byung⁴ bzhin bya //

'Khor ba las⁵ yid nges⁶ par (P. 16b) 'byung bar byed pa zhes bya ba'i glu⁷ slob dpon che
po⁸ dpal Mar me mdzad (D2. 13a) ye shes kyi zhal snga nas mdzad pa rdzogs so // //

rgya gar gyi mkhan po de nyid dang / zhus⁹ chen gyi lo tsā ba rgya brTson¹⁰ seng gis¹¹
bikrama¹² shī la'i gtsug lag khang du bsgyur ba'o // //¹³

slad nas bla ma de nyid dang / lo tsā ba Tshul khriims rgyal bas bcos shing gtan la phab
pa'o¹⁴ //¹⁵

1 G1N1P1 *blta.* 2 CD1G1 *btāb*, P1 *gtāb.* 3 G1N1P1 *zhabs.* 4 G2N2P2 *byung.*
5 CD1G1N1P1 *la.* 6 CD1 *ches, ngas.* 7 CD1G1N1P1 *glu //.* 8 CD1 *om. chen po.*
9 CD1G1N1P1 *zhu.* 10 D1 *bston.* 11 CD1G1N1P1 *ges.* 12 G1N1P1 *'bi ka mā la.*
13 CD1P1 // . 14 CD1 *pa.* 15 N1P1 // // .

34 Caryāgīti

//¹ rgya gar skad du / Tsā² rya gī tī³ /

bod skad du / sPyod pa'i glu /⁴

'phags pa⁵ 'jam dpal gzhon⁶ nur gyur pa la phyag 'tshal lo⁷ //
dpal rdo rje gdan (G2. 17b) la⁸ phyag 'tshol lo⁹ //

(P1. 219a) gzugs brnyan ci 'dra 'gro ba srid pa de 'dra ste //
rang gi ngo bo brtags na rang bzhin yod ma yin //
rang gi ngo bo gzugs brnyan 'dra shes ma skyes pas //
kwa ye¹⁰ rmongs pa'i sems khyod mi shes ma byed cig //
dri med mkha' dang rgyas pa'i nor bu me long la // 5
de la gsal bar snang ba bdag dang 'gro ba kun //
ji ltar byis pa rang gi gzugs brnyan la 'khrul ltar //
bdag gzhan 'byed pa'i (D1. 215b) 'khrul pa la ni ci phyir gnas //
gang gis gzugs brnyan la ni rtag par shes shing rtogs¹¹ //
de ni phyugs dang 'dra ste grib ma la rgol yin // 10
dkyil 'khor 'khor lo bsgom pa brtan par bya ba ste //
de (N1. 231b) nyid shes pa'i rnal 'byor pa (N2. 15a) yis der mi gnas //
mtshon par bya ba mchog tu bde chen gces¹² pa ste //
dkyil 'khor de la bsdu te bstan¹³ par bya ba yin //
khyed¹⁴ kyis (C. 216b) brtags shing bskyed pa'i tshul ni gang yin pa // 15
de la de nyid rang bzhin yin par ji ltar sems //
ji srid de nyid rang bzhin yongs su¹⁵ ma shes pa¹⁶ //
de srid byang chub bla na med pa ji ltar 'grub //
rnam rtog spros pa ma lus dngos po med pa ste //
de dag mchog tu bde ba chen po'i rang bzhin yin // 20

1 G2 om. #//. 2 P1 tsa. 3 N1P1 ta. 4 N1 //, G2N2 om.
5 CD1G1N1P1 om. 'phags pa. 6 N1 gzhan. 7 N1 'tshalo. 8 CD1G1N1P1 pa la.
9 N1 'tshalo. 10 CG1N1 yi. 11 D2P2 rtog. 12 G1N1P1 ces. 13 CD1G1N1P1 brtan.
14 CD1G1N1P1 khyod. 15 G2N1N2 yongsu. 16 CD1G1N1P1 pas.

'jig rten chos brgyad dag la sems ni mnyam pa dang //
 ting nge¹ 'dzin gyi tshogs la gnas par 'gyur bar gyis² //
 gnas na shin tu rnam par dag par 'gyur ba ste //³
 spros pa'i spyod pa ma lus yongs su⁴ spang⁵ ba yin //
 (G1. 292a) rnam par rtog pa sna tshogs kyis ni dngos gang bskyed // 25
 de ni mchog tu rnam par dag pa'i rang bzhin min //
 spros pa dang ni rnam⁶ rtog ma lus yod min la⁷ //
 de ni de bzhin nyid⁸ de mchog tu rnam dag (G2. 18a) dngos //
 de bzhin nyid kyi ting⁹ 'dzin me chen 'bar ba ste //
 nyon mongs sog¹⁰ (D2. 13b) ma ma lus sreg¹¹ par byed pa¹² yin // 30
 gang tshe 'jig rten yongs su¹³ shes par gyur pa na //
 de tshe 'gro ba thams cad nam mkha'¹⁴ bzhin du 'gyur //
 'gro ba'i rang bzhin mkha'¹⁵ 'dra ba¹⁶ la mig¹⁷ 'khrul zhing¹⁸ //
 rnam rtog rab rib kyis rmongs ldongs par ma byed cig //
 'gro ba sngon chad ci 'dra phyis kyang de 'dra ste // 35
 snga phyi dag dang bar la khyad par yod ma yin //
 rab rib can gyis ji ltar mkha' la skra mthong dang //¹⁹
 rnam rtog rab rib 'jig rten mthong la khyad par med //
 rnam rtog rang bzhin mkha' dang mnyam pa'i rang bzhin du //
 brtags pa'i rang bzhin ma lus pa dag bsgom pa²⁰ gyis // 40
 sdiig pa'i rnam smin chom rkun 'jigs pa mthong ba (N1. 232a) yis //
 kwa ye²¹ tshul khirms nor chen bsrung phyir me la tshe byos //
 srid pa'i mtshan ring²² dag la gti mug gnyid log gis //
 kwa ye²³ sems ni (D1. 216a) bag med ma byed me la tshe byos //
 nyi ma med na nyin mo yod pa min (N2. 15b) pa ltar // 45
 tshul khirms nor dang bral la bsam gtan ga la yod //
 gnyid log pa yi khang par chom rkun zhugs pa yis //
 kwa ye²⁴ khyod kyi²⁵ tshul khirms nor chen 'phrogs²⁶ sa re //

1 G1G2N1 tinge. 2 G1N1P1 ba na. 3 N1 /. 4 G1G2N1N2 yongsu. 5 CD1G1N1P1 spong.
 6 N2 rnam. 7 G1N1P1 pa. 8 G1 nyi. 9 G1 tinge. 10 P1 sogs. 11 N1P1 bsreg.
 12 G2 par. 13 G1N2 yongsu. 14 G1G2N1N2 namkha'. 15 G1N1 namkha', P1 nam mkha'.
 16 N1Pi om. 17 G1P1 'phrul. 18 D2 zhing. 19 G2 /. 20 G1N1P1 par.
 21 CN1P1 yi, G1 yis. 22 D1G1N1P1 rings. 23 G1N1P1 yi. 24 G1N1P1 yi. 25 N1 kyis.
 26 N1P1 phrogs.

skad cig tsam yang bya ba ngan la ma chags par //
 de nyid nyi ma ma shar bar du mel tshe byos // 50
 ji srid de nyid nyi (G1. 292b) ma dag ni shar ba na //
 de srid srid par¹ nor bu bzhin (C. 217a) du ci dgar² spyod //
 bdag ni gang yin 'gro ba khyed rnam de yin te //
 rang gzhan³ 'byed pa'i nang gi gnod pa ma byed cig //
 rnam rtog nang gi gnod pa 'di ni gzhom bya ste // 55
 sprul gdug⁴ lta bu⁵ de ni⁶ bdud rtsi'i ros zhi bya //
 nang gi gnod pa (G2. 18b) sprul gdug mgo mangs⁷ lta bu ste //
 'gro ba ma lus sna tshogs rtog par⁸ shes nas⁹ ni //
 de bzhin nyid de bdud rtsi chen po'i ro zhes bya //
 rnal 'byor chen po'i sems kyi ngal gso'i¹⁰ gnas gang yin // 60
 bdud rtsi¹¹ chen po'i ro ni rtag tu btung byas na¹² //
 bde ba chen po'i mya ngan 'das mchog shes par 'gyur //
 gcer bu sbyin sreg byed pa bram ze ma yin zhing //
 ral pa¹³ 'dzin pa dang ni rigs dang rgyud kyis¹⁴ min¹⁵ //
 gang zhig lus dang gang dang yid ni yongs dag na // 65
 de lta (P1. 219b) bu ni¹⁶ bram ze yin par sangs rgyas gsungs¹⁷ //
 sdig pa bcu po gang yin pa ni spang bya zhing //
 dge ba bcu po yon tan stobs dang ldan par bya //
 dman pa'i (D2. 14a) rigs su¹⁸ skyes kyang 'di ni gang gi tshe //
 ma shi bar du chos ma yin pa spyad mi bya // 70
 bzod pa'i chos 'dzin pa yis¹⁹ khro ba las rgyal zhing //
 yul gyi bde ba 'dod pa ma lus spang bar bya //
 bde ba'i chos kyi²⁰ (N1. 232b) mtsho la rtag tu khrus bya zhing //
 'dun²¹ pa'i skyon dang 'jigs dang gti mug bskyed mi bya //

1 G1G2N2P1 *pa*. 2 G1G2P1 *dga'*. 3 CG1N1P1 *bzhin*.
 4 G2 *gdugs*, CD1G1N1P1 *dug sprul* for *sprul gdug*. 5 G1N1P1 *bu'i*. 6 P1 *om*. 7 D2 *mang*.
 8 C *shing*. 9 D2 *na*. 10 CD1G1N1N2P1 *so'i*. 11 G1 *rtsa*. 12 CD1 *nas*. 13 N1 *ralpa*.
 14 N1 *kyi*. 15 D1 *yin*. 16 P1 *bui*. 17 CD1G1N1P1 *gsung*. 18 G1N1N2 *rigsu*.
 19 G2N2P2 *yi*. 20 CN1P1 *kyis*. 21 CN1 *'dus*.

yang dang yang du keng rus bzhon pa la zhon¹ zhing² // 75
 rtag tu mi gtsang 'dzag pa rmongs pas mtshor ram //
 'dod dang gti mug ngan 'gro'i lam ni spang bya zhing //
 kwa ye³ sems khyod rang gis⁴ rang gi dri ma khru⁵ //
 gus pas bla ma dam pa'i (G1. 293a) chu mig bsten bya zhing⁶ //
 gti mug chen po'i dri⁷ mas gang gos zad par bya // 80
 bla ma'i man ngag de (D1. 216b) nyid dri med⁸ chu yin pas //
 (N2. 16a) de blangs nas ni rang nyid bkru bar shes par bya //
 sems khyod yongs su⁹ go bar gyis la rang la ni //
 yongs su¹⁰ blta zhing gti mug dri ma¹¹ chen po sbyongs //
 mi ni gang zhid thub pa'i chos gtam mi mnyan pa // 85
 de ni chu dang nags kyi mi dang mnyam pa yin //
 nges par 'jig rten ma (G2. 19a) 'ongs¹² pha rol 'gro bas na //
 thub pa'i chos kyi gtam ni mnyan par bya ba yin //
 thub pa'i (C. 217b) chos thos nas ni chos min gnas mi bya //
 mnar med 'gro la sus kyang gzung¹³ bar mi zhus¹⁴ pas // 90
 chos thos nas ni chos kyi don bzhin gang bsgoms¹⁵ pa //
 des ni bde bar mtho ris thar pa'i 'bras bu thob //
 gti mug mun nag dag la chos ni sgron ma ste //
 srid pa'i mtsho las sgrol par¹⁶ byed pa'i gzings yin no¹⁷ //

slob dpon chen po dpal Mar me mdzad ye shes kyis mdzad pa'i Tshul khriims kyi spyod
 pa¹⁸ glur blangs pa rdzogs so¹⁹ // //

pañḍi ta badzra pā²⁰ ṅi dang /²¹ lo tsā²² ba dge slong Chos kyi²³ shes rab kyis bsgyur
 cing zhus te gtan (P1. 220b) la phab pa'o // //

1 N2 *bzhon*. 2 D1G1N1P1 *cing*. 3 CG1N1P1 *yi*. 4 G2N2P2 *gi*.
 5 G2N2P2 *bkru bar bgyis* (N2: *gyis*) for *khru*. 6 N2 *shing*. 7 G1 *dri ga*.
 8 CD1G1N1P1 om. *dri med*. 9 G1G2N1N2 *yongs*. 10 G1G2N1N2 *yongsu*.
 11 CD1 *mun nag*, G1N1P1 *mun pa* for *dri ma*. 12 CD1G1N1P1 'jig rten for *ma 'ongs*.
 13 CD1G1N1P1 *bzung*. 14 G1N1P1 *nus*. 15 G2N2 *sgom*. 16 CD1 *grol bar*.
 17 N1N2 *yino*. 17 G1 *pa'i*. 18 N1N2 *rdzogs*. 20 G2N2 om. 21 C om.
 12 N1 *tsa*. 23 N1 *kyis*.

35 Dharmadhātudarśanagīti

#¹ // rgya gar skad du / *Dharma*² dh tu sa ra gī ti /
bod skad du / *Chos kyi dbyings* (P1. 269b) su³ lta ba'i glu //⁴
thams cad mkhyen pa la phyag 'tshal (D1. 255a) lo⁵ //

gang zhig kun tu ma shes na //
srid pa (C. 255a) gsum du⁶ rnam 'khor bas⁷ //
sems can kun la nges gnas pa'i //
chos kyi dbyings la phyag 'tshal nas //⁽¹⁾
(G1. 349b) chos dbyings lta zhing gzhan min par⁸ // 5
de dag rim bzhin brjod par bya //
zab zhi spros bral de bzhin nyid //
'od (D2. 14b) gsal 'dus ma byas pa gang //
ma skyes ma⁹ 'gags¹⁰ gzod nas dag /
rang bzhin mya ngan 'das pa yin¹¹ // 10
chos dbyings mtha' dang dbus med par¹² //
blo mig zhib¹³ mo rtog bral ba //
bying¹⁴ rgod rab rib med pas blta¹⁵ //
gang zhig 'khor ba'i rgyur gyur pa //
de nyid sbyang¹⁶ ba byas pa las // 15
dag pa de ni¹⁷ mya ngan 'das //
chos kyi sku yang de nyid do //
ji ltar (P2. 18b) 'o ma dang 'dres pas //
mar gyi snying po mi snang ba //
de bzhin (G2. 19b) nyon mongs dang 'dres pas // 20
chos kyi dbyings kyang mi mthong ngo //
ji ltar 'o ma rnam sbyangs pas //
mar gyi snying po dri med 'gyur //

(1) *Dharmadhātustava* 1.

1 P *chos kyi dbyings lta ba'i glu bzhugs so // #.* 2 CD1G1N1P1 *dharmma.* 3 CD1G1N1P1 *om.*
4 D1P1 /. 5 G2 'tshalo. 6 D1 *du.* 7 CD1GNP *ba.* 8 CD1G1N1P *pa.* 9 D2 *mi.*
10 D2 'gag. 11 G2N2P2 *yi,* CD1G1N1P1 *yi.* 12 CD1GNP *pa.* 13 D2 *zab.* 14 G1N1 *byings.*
15 G1N1P1 *lta.* 16 CD1 *bya.* 17 G1 *na.*

de bzhin nyon mongs rnam sbyangs pas //
 chos dbyings shin tu dri (N2. 16b) med 'gyur // 25
 ji ltar mar me bum nang gnas //
 cung zhig snang bar mi 'gyur ba //
 de bzhin nyon mongs bum nang gnas //
 chos kyi dbyings kyang mi mthong¹ ngo //
 phyogs ni gang dang gang dag nas² // 30
 bum pa'i³ bu ga btod gyur pa //
 de dang de yi⁴ phyogs nyid nas //
 'od kyi rang bzhin 'byung bar⁵ 'gyur //
 gang tshe ting 'dzin rdo rje yis //
 bum pa de nyid bcag gyur pa // 35
 de tshe de ni nam mkha'⁶ yi //
 mthar thug bar du snang bar byed //
 chos kyi dbyings ni skye ma yin //
 nam yang 'gag par (G1. 350a) 'gyur ba med //
 dus rnams kun tu nyon mongs med // 40
 thog ma bar mtha' dri ma bral //
 ji ltar rin chen bai dūrya //
 dus rnams kun tu⁷ 'od gsal yang //
 rdo yi nang na gnas gyur na //
 de yi 'od ni gsal ma yin // 45
 de bzhin nyon mongs kyis (P1. 270a) bsgribs pa'i //
 chos dbyings shin tu dri med pas⁸ //
 'khor bar 'od ni gsal ma yin //(2)
 ji ltar sbun⁹ pas g-yogs gyur pa //
 so ba 'bras nyid mi 'dod (N1. 259b) ltar // 50
 de bzhin nyon mongs kyis g-yogs pas //
 de ni sangs rgyas shes¹⁰ mi brtag¹¹ //

(2) *Dharmadhātustava* 2-10c.

1 CD1G1N1P1 *snang*. 2 D1G1N1 *gnas*. 3 CD1G1N1 *pa*. 4 G1NP1 *yis*.
 5 G1 *ba*. 6 GN *namkha'*. 7 CDN2 *du*. 8 D2 *na'ang*. 9 P1 *spun*. 10 G1 *zhes*.
 11 CD1 *rtag*, G1N1P1 *rtags*.

ji ltar sbun¹ pa las grol na //
 'bras nyid snang bar 'gyur (D1. 255b) ba ltar //
 de bzhin nyon mongs las grol na // 55
 chos kyi sku nyid rab tu gsal //
 (C. 255b) ji ltar sbrum ma'i lto na bu //
 yod kyang mthong ba ma yin pa² //
 de bzhin nyon mongs kyis g-yogs pa'i //
 chos kyi dbyings kyang mthong ma yin // 60
 chos dbyings gang phyir bdag ma yin //
 bud med ma yin skyes ma (P2. 19a) yin³ //
 gzung ba kun las rnam grol bas⁴ //
 ji ltar 'dzin par (D2. 15a) (G2. 20a) brtag par bya //
 mi gtsang mi rtag sdug bsngal zhes // 65
 bya ba gsum pos sems sbyong⁵ byed⁶ //
 stong pa nyid ni ston pa'i mdo //
 rgyal bas ji skad gsungs pa ste //
 de dag kun gyis nyon mongs ldog //
 khams de nyams par byed ma yin // 70
 mchog tu sems de⁷ sbyong byed pa'i //
 chos ni rang bzhin med pa yin //(3)
 ji ltar ri bong mgo bo'i⁸ rwa //
 (G1. 350b) brtags pa nyid de med pa ltar //
 de bzhin chos rnam thams cad kyang // 75
 brtags pa nyid de yod ma yin //
 phra rab rdul gyi⁹ ngo bo yis¹⁰ //
 glang gi rwa yang dmigs ma yin //
 ji ltar sngon bzhin phyis de bzhin //
 de la ji zhig brtag¹¹ par bya // 80

(3) *Dharmadhātustava* 12-13, 27, 24, 26ab, 22, 26cd.

1 D1 *sdun*. 2 CD1G1P1 *pas*. 3 CD1G1N1P1 *pa min*. 4 D2G2 *ba*. 5 CD1G1N1P1 *spyod*.
 6 G2 *zhes*. 7 CD1G1N1 *ni*, G2N2P2 *zhi*. 8 CD1G1N1P1 *yi*. 9 G2N2P2 *gyis*.
 10 CD1G1N1P1 *nyid*. 11 G1N1P1 *brtan*.

brten¹ nas 'byung bar 'gyur ba dang //
 brten nas 'gag par 'gyur ba dang //
 (N2. 17a) gnas pa dag kyang yod min na //
 byis pa ji ltar rtog par byed //(4)
 chos dbyings rang bzhin nam mkha'² yi³ // 85
 khams ltar rgyu med rkyen med de //
 skye dang rga dang gnas pa dang //
 'jig pa med pa 'dus ma byas //(5)
 sangs rgyas chos dbyer med pa dang //
 de rigs de bzhin thob pa dang // 90
 brdzun med (P1. 270b) slu⁴ med 'tshe med pas //
 gdod nas rang bzhin zhi nyid do //(6)
 gang phyir de ni rgya mtsho ltar //
 sgra dang dpe dang blo rnam kyis⁵ //
 gting dang pha rol mi rnyed pa // 95
 de phyir rab tu zab pa nyid //
 chos kyi dbyings la dbyer med phyir //
 lta ba tha dad rung ma yin //
 'on kyang blo yi bye brag (N1. 260a) gyis //
 lta ba tha dad cung zad brjod // 100
 dbu ma nyid du smra ba rnam //
 de don dben pa gnyis su 'dod //
 kun rdzob dang ni don dam mo //(7)
 bden gnyis rnam dbye shes pa dag //
 thub pa'i bka' la mi rmongs te // 105
 de dag ma lus tshogs bsags nas //
 phun tshogs pha rol 'gro ba nyid //(8)

(4) *Dharmadhātustava* 30-32.

(5) *Ratnagoṭravibhāga* 1.87.

(6) *Abisamayālamkāra* 1.40.

(7) *Bodhi(sattva)caryāvatāra* 9.2ab.

(8) *Satyadvayavibhāṅga* 2.

1 G1N1 rten. 2 GN namkha'. 3 CD1G1N1P1 yin. 4 G2N2P2 bslu. 5 G1N1 gyis.

(D1. 256a) bdag dang bdag gi rtag chad dang //
 (G2. 20b) nyon mongs (P2. 19b) rnam¹ byang rgyu (C. 256a) 'bras dang //
 gzung dang 'dzin par gang spros pa² // 110
 'di ni kun rdzob (G1. 351a) bden pa'o //
 stong nyid bdag med zhi ba gang //³
 spros pa rnams kyis⁴ ma gos pa //
 tha dad don min rnam⁵ mi rtog //
 'di ni don dam bden pa'o //⁽⁹⁾ 115
 yang dag yang dag ma yin dang //
 rnam grangs rnam grangs ma yin pas //
 de gnyis so sor dbye ba byas //
 brtags⁶ sam snang grags dngos po dang //
 (D2. 15b) tha snyad 'khrul pa sgyu ma dang // 120
 kun rdzob nyid ni rnam grangs so⁷ //⁽¹⁰⁾
 stong pa nyid dang yang dag mtha' //
 mtshan ma med dang don dam dang //
 chos kyi dbyings ni rnam grangs so⁸ //
 gang phyir sgrib pas⁹ kun rdzob ste // 125
 'gyur ba med phyir don dam mo //
 yang dag yang dag ma yin pa'i //
 shes pa gnyis phyir bden pa gnyis //
 yang dag shes pa med ce na //
 bden te tha snyad tsam du yod // 130
 de nyid tshol la thog mar ni //
 thams cad yod ces brjod par bya //
 don rnams¹⁰ rtogs shing chags pa med¹¹ //
 phyis ni rnam par dben¹² don nyid //⁽¹¹⁾

(9) *Mūlamadhyamakakārikā* 18.9.

(10) *Madhyantavibhāga* 1.14.

(11) *Yuktiṣaṣṭikākārikā* 30.

1 P2 /. 2 GN1P1 rnams. 3 P1 om. 4 G2N2P2 kyī. 5 GN1P2 rnams.
 6 CD1 rtags, G1N1P1 gtags, P2 btags. 7 N2 grangso. 8 N2 grangso. 9 G2N2P2 pa.
 10 G2N2P2 dam. 11 CD1G1N1P1 med la for pa med. 12 CD1 dbye.

bden gnyis gcig dang tha dad min // 135
 nyes pa bzhi bzhi gsungs phyr ro //
 gcig dang tha dad gang (P1. 271a) rtog¹ pa //
 de ni tshul min zhugs pa yin //(12)
 dngos por khas len yod (N2. 17b) na ni //
 'dod chags zhe sdang mi bzad² 'byung // 140
 lta ba ma rungs yongs su³ 'dzin //
 de las byung ba'i rtsod par 'gyur //(13)
 dmigs pa'i 'du shes can la ni //
 thob pa med cing mngon rtogs med //
 rjes mthun bzod pa⁴ 'ang yod min na // 145
 mya ngan (N1. 260b) 'das pa'ang⁵ smos ci dgos //
 stong pa nyid la lta nyes na //
 shes rab chung ldan (G1. 351b) 'phung⁶ bar 'gyur //
 ji ltar sprul la gzung⁷ nyes dang //
 rig sngags log⁸ par⁹ bsgrubs pa bzhin //(14) 150
 rgyal ba kun gyis stong nyid ni //
 lta (G2. 21a) kun nges par 'byin par gsungs //
 gang dag stong pa nyid lta ba //
 de dag bsgrub tu med (P2. 20a) par gsungs //(15)
 gang dag rang dngos gzhan dngos kyi¹⁰ // 155
 dngos dang dngos med nyid mthong ba //
 de dag sangs rgyas bstan pa la //
 yang dag mthong ba ma yin no //(16)
 med pa yod pa'i zlas drangs¹¹ te //
 yod pa'ang med pa'i zlas drangs pas¹² // 160

(12) *Samdhinirmocanasūtra*. Tib. D. No. 106, Ca 6b.

(13) *Yuktiṣaṣṭikākārikā* 46.

(14) *Mūlamadhyamakakārikā* 24.11.

(15) *Mūlamadhyamakakārikā* 13.8.

(16) *Mūlamadhyamakakārikā* 15.6.

1 D1G1N1P1 rtogs. 2 G1N1P1 zad. 3 G2N2 yongsu. 4 G1N1P1 par. 5 D2 pa.
 6 CD1G1N1P1 phung. 7 CD1G1N1 bzung. 8 D1 lag. 9 G1N1P1 pa. 10 CD1N1 kyis.
 11 G1N1 grangs. 12 CD1G1N1P1 grangs pa.

de phyir med par (D1. 256b) brjod mi bya //
 (C. 256b) yod pa nyid du 'ang mi brtag go //(17)
 yod pa pa¹ ni bde 'gror 'gro //
 med pa pa² ni ngan 'gror 'gro³ //
 yang dag ji bzhin yongs shes phyir // 165
 gnyis la mi brten thar par 'gyur //(18)
 tshul gnyis shing rta zhon nas su⁴ //
 rigs⁵ pa'i srab skyogs⁶ 'ju⁷ byed pa //
 de dag de phyir ji bzhin don //
 theg pa chen po pa nyid 'thob //(19) 170
 gzugs sogs ji ltar snang ba nas //
 bde gshegs par gyi chos rnam kun //
 ri bong ba lang rwa yi⁸ dpes //
 dbu ma nyid du goms par bya //(20)
 yod min med min yod med min // 175
 (D2. 16a) gnyis min bdag nyid du yang med //
 mtha' bzhi⁹ las¹⁰ ni nges 'grol¹¹ ba¹² //
 de nyid dbu mar mkhas rnam bzhed //(21)
 dbu ma'i¹³ mtha' las rnam grol na //
 mtha' dang bral phyir dbu ma'ang med // 180
 mtha' dbus med par (P1. 271b) gang lta ba //
 de¹⁴ ni¹⁵ yang dag lta ba ste //
 bla na med pa'i lta ba yin //
 blo ldan rnam kyis rtag tu bsgom¹⁶ //
 gang zhig lta ba der¹⁷ zhugs (G1. 352b) pa // 185
 des ni thams cad mkhyen pa thob //

(17) *Lañkāvatārasūtra*. 3.82.

(18) *Ratnāvalī* 1.57.

(19) *Madhyamakālamkāra* 93.

(20) *Dharmadhātustava* 33.

(21) *Jñānasārasamuccaya* 28.

1 D2 po. 2 D2 po. 3 CD1G1N1P1 'gyur. 4 G2N2 nasu. 5 D1 rig. 6 G2N2P2 skyobs.

7 G1P1 'jugs, G2N2P2 'jug. 8 G1 yis. 9 P2 bzhin. 10 P2N2 yang. 11 CN1P1 grol.

12 G2N2P2 bas. 13 CG2N2P ma. 14 D1 da. 15 P2 yi. 16 D1G1N1P1 bsgoms.

17 CG1N1P1 'dir.

rnam rig tsam du smra ba rnams //
 ngo bo nyid ni gsum du 'dod //
 kun brtags gzhan dbang yongs grub po //
 brtags¹ dang rgyu las skye ba² dang // 190
 mi 'gyur phyir na³ go rim⁴ bzhin //(22)
 rnam par rtog pa gang gang gis //
 dngos po gang gang rnam brtags pa //
 de nyid (N1. 261a) kun tu⁵ brtags⁶ pa yi⁷ //
 ngo bo nyid de de med do // 195
 gzhan gyi dbang gi ngo (N2. 18a) bo nyid //
 rnam (G2. 21b) rtog yin te rkyen las byung //
 grub ni de la snga ma po⁸ //
 rtag tu med par gyur pa gang //
 yod dang med pa'i mtha' gnyis (P2. 20b) kyis // 200
 de phyir de nyid gzhan dbang las //
 gzhan min gzhan ma⁹ yin pa'ang min //
 mi rtag la sogs bzhin du brjod //(23)
 chu shel bai dūrya yi¹⁰ dpes //
 ngo bo nyid gsum shes par bya // 205
 bdag dang chos su brtags pa dang //
 rnam par dag dang ma dag dang //
 'gyur med phyin ci ma log pa //
 rim bzhin re re'ang gnyis gnyis so //
 blo gros bzang po thams cad ni // 210
 nang sems pa la brtson pa yin //(24)
 gzung¹¹ dang 'dzin pa las grol ba'i //
 rnam shes dam pa'i don du yod //(25)

(22) Cf. *Madhymakālamkāpadeśa*. Tib. D. No. 4072, Hi 224a7-b1.

(23) *Triṃśikā* 20-22c.

(24) *Ālokamāla* 3cd.

(25) *Jñānasārasamuccaya* 26ab.

1 P2 rtag. 2 CD1G1N1P1 skyes pa. 3 C phyi nang. 4 CD1 rims. 5 CD1 du.
 6 N2 rtags. 7 CD1 yis. 8 D2 mas so. 9 CD1N1G1P1 pa. 10 G1N1P1 yis. 11 G1N1P1 bzung.

chos rnam¹ gang¹ (C. 257a) (D1. 557a) yang skye ba dang //
 'gag pa cung zad yod min te // 215
 shes² pa 'ba' zhig kho na ni //
 skye ba dang ni 'gag par 'gyur //⁽²⁶⁾
 yod min chos rnam¹ de dag snang //
 bem³ po las min gzhan las min //
 med pa las min nyes gnyis phyir // 220
 de phyir shes pa'i bdag nyid (G1. 352b) yod //⁽²⁷⁾
 rnam shes bem⁴ po'i rang bzhin las //
 bzlog par⁵ rab tu skye bar 'gyur⁶ //
 bem⁷ min rang bzhin gang yin pa //
 de 'dir bdag nyid rig par 'dod //⁽²⁸⁾ 225
 nam mkha'⁸ sa rlung nyi ma dang //
 rgya mtsho phyogs dang⁹ 'bab¹⁰ chu ni //¹¹
 nang gi shes pa yang dag gi¹² //¹³
 cha yin phyi rol (P1. 272a) ltar snang ngo //⁽²⁹⁾
 gsal ba'i rang bzhin du snang bas // 230
 de dag 'brel pa (D2. 16b) lkog gyur min //
 gang dang 'brel pas gang rig pa //
 de yis rig bya de rig 'gyur //
 ral gri'i so dang sor¹⁴ rtse bzhin //
 blo yis rang 'dzin dor zhe na // 235
 rang nyid snang ba dor min par //
*dGongs pa nges par 'grel*¹⁵ las gsungs //
 de¹⁶ phyir blo yi¹⁷ mtshan nyid ni //
 rang rig par ni grub pa yin //⁽³⁰⁾

(26) *Prjñāpāramitopadeśa*. Tib. D. No. 4079, Hi 152a1-2.

(27) *Madhyamakālaṃkāravṛttimadhyamapratipādasiddhi*. Tib. D. No. 4072, Hi 105b3.

(28) *Madhyamakālaṃkāra* 16.

(29) *Ratnavṛkṣanāmarahasyasamājavṛtti*. Tib. D. No. 1846, Nyi 102b5. Cf. *Mahāyānasamgrahopani-bandhana*. Tib. D. No. 4051, Ri 207a7.

(30) *Prjñāpāramitopadeśa*. Tib. D. No. 4079, Hi 154a5-7.

1 CD1G1N1P1 'ga'. 2 CD1G1N1P1 *skyes*. 3 CD1G1N1P1 *bems*. 4 CD1G1N1P1 *bems*.
 5 D2 *ldog pa*. 6 CD1G1N1P1 *gsungs*. 7 CD1G1N1P1 *bems*. 8 GN *namkha*'. 9 G2 om.
 10 CD1 'dab. 11 G2 /. 12 G1P1 *gis*. 13 CG /. 14 CD1G1N1P1 *so*. 15 G2N2P2 'brel.
 16 G1N1 *de'i*. 17 G1N1P1 *yis*.

de nyid¹ rtogs² par dka' bas na // 240
 'di yi ngo bo dpyad³ mi nus //
 rang rig de yang phra ba'i (N1. 261b) phyir //
 sangs rgyas rnam kyis⁴ phra bar⁵ gzigs //
 (G2. 22a) rang la gnas kyang bdag 'dra bas //
 rmongs pa'i (P2. 21a) phyir na mthong ba med //(31) 245
 gsal dang blo ni bdag nyid kyi⁶ //
 'brel pa yod phyir blo⁷ tsam yin //
 shes pa'i rang bzhin bden pa ste //
 rnam pa (N2. 18b) brdzun zhing 'khrul pa yin //(32)
 sems ni rnam par bslad pa'i phyir // 250
 gcig nyid⁸ gnyis su⁹ snang ba yin //
 gzung dang 'dzin pa'i dbye ba la¹⁰ //
 shin tu mkhas pa cis ma yin //
 gzung ba'i rnam pa mi g-yo¹¹ phyir //
 phyi rol lta bur snang ba yin // 255
 'dzin pa'i rnam pa¹² rab g-yo bas //
 nang lta bur ni snang ba yin¹³ //(33)
 mtshan ma (G1. 353a) de ni spangs nas su¹⁴ //
 ye¹⁵ shes nam mkha¹⁶ lta bur bsgom //
 sems kyi¹⁷ rang bzhin zag pa med // 260
 zag bcas sa bon ma zad par //
 kun gzhi¹⁸ gnas skabs de dag¹⁹ nyid //
 zad nas zag pa med pa'i dbyings //
 rnam par grol ba'i sku dang ni //
 rtag tu nyi zer nyi ma bzhin // 265

(31) *Ālokamāla* 12c-13.

(32) *Prjñāpāramitopadeśa*. Tib. D. No. 4079, Hi 154a6-7.

(33) *Ālokamāla* 25-26.

1 C ni. 2 N2 rtog. 3 G2N2P2 spyad. 4 G2 kyi. 5 P2 phrar ba. 6 CD1G1N1P1 kyis.
 7 CD1G1N1P1 don. 8 CD1 gnyis. 9 G2N2 gnyisu. 10 CD1GNP las. 11 CD1G1P1 g-yo'i.
 12 GN par. 13 G1P1 nyid. 14 N2 nasu. 15 D2 yi. 16 GN namkha'. 17 G1N1P1 kyis.
 18 D2 gzhi'i. 19 G2N2 bdag.

sangs rgyas chos rnam gnas yin pas //
 skyob pa rnam kyi¹ chos (N1. 257b) sku'o //(34)
 (C. 257b) nyan thos theg par zhugs pa rnam //
 bdag dang bdag gi² dben pa yi //
 phung po kham dang skye mched dang // 270
 gzhi³ Inga'am dus ni gsum yang rung //
 yod pa thams cad gzung bya yin //
 dmigs dang bcas pas 'dzin par byed //
 de gnyis dam pa'i don du 'dod //
 bden pa (P1. 272b) mthong dang goms pa las // 275
 nyon mongs spangs pa zhes bshad pa //
 bden pa dag⁴ ni rnam bzhi ste //
 sdug bsngal de bzhin kun 'byung dang //
 'gog pa⁵ lam ste de lta na //
 de dag ji ltar mngon⁶ rtogs rim //(35) 280
 sdug bsngal nyer len phung po'o //
 kun 'byung las dang nyon mongs te //
 'gog pa mya ngan 'das pa gnyis //
 lam ni phyogs mthun sum cu bdun //
 (D2. 17a) tshul gnas thos dang bsam ldan pa // 285
 bsgom⁷ pa (G2. 22b) la ni rab tu sbyor //(36)
 dge sbyong tshul ni dri med (P2. 21b) lam //
 'bras bu 'dus byas 'dus ma byas //
 de dag brgyad cu rtsa dgu'o //
 grol lam zad pa rnam dang bcas // 290
 'bras bu bzhi⁸ rnam⁹ bzhag¹⁰ pa (N1.262a) ni //
 rgyu Inga dag ni srid phyir ro //(37)

(34) *Prjñāpāramitopadeśa*. Tib. D. No. 4079, Hi 154a7-b1.

(35) *Abhidharmakośakārikā* 6.1ab-2.

(36) *Abhidharmakośakārikā* 6.5ab.

(37) *Abhidharmakośakārikā* 6.51-52ab.

1 G2N2 bdag. 2 G2N2P2 gi. 3 D2 gzhi. 4 C bdag. 5 D2 dang. 6 CD1 gdon.
 7 D2 sgom, N2 bsgoms. 8 G1N1P1 bzhin. 9 CG1N1P1 rnam. 10 CD1G1N1P1 gzhag.

nyan thos rnam bzhi sprul pa dang //
 rdzogs (G1. 353b) pa'i byang chub 'gyur ba dang //
 zhi¹ bgrod grub mtha' 'dzin pa'o // 295
 de ni gnyis bzhi bco brgyad de //
 gnyis ni bye brag smra ba dang //
 de bzhin mdo sde smra ba'o //
 rnam pa med pa'i shes pa yis //
 gzugs la sogs pa'i² don rig³ 'dod // 300
 de ni bye brag smra ba yin //
 gang zhig don gyis phan btags⁴ pa'i //
 gzugs brnyan rnams la⁵ nyams myong⁶ bas //
 don rig 'dod pa mdo sde pa'o //
 (N2. 19a) bzhi⁷ ni dge 'dun phal chen dang⁸ // 305
 thams cad yod smra gnas brtan pa //
 mang pos bkur ba'o⁹ bco brgyad ni //
 shar dang nub dang gangs rir gnas //
 'jig rten 'das par smra ba'i sde //
 btags¹⁰ par smra ba'i sde pa dang // 310
 lnga tshan¹¹ dge 'dun phal chen pa //
 gzhi kun yod smra 'od srung¹² sde¹³ //
 sa ston sde dang chos¹⁴ srung¹⁵ sde¹⁶ //
 mang thos gos dmar slob ma dang //
 rnam par phye ste smra ba'i sde // 315
 thams cad yod par smra ba yin //
 rgyal byed tshal gnas 'jigs med gnas //
 gtsug lag khang chen gnas brtan pa //
 sar¹⁷ sgrogs (D1. 258a) ris dang srung¹⁸ ba po¹⁹ //
 gnas ma bu yi sde pa ni // 320
 kun gyis bkur (C. 258a) ba rnam pa gsum //

1 G1P1 zhe. 2 CG1N1P1 pa. 3 N2 rigs. 4 G1N1P1 gtags. 5 D2 rnam pa. 6 CD1 myongs.
 7 G1P1 gzhi. 8 G2P2 pa. 9 CN1P1 ba. 10 CD1G1N1P1 rtag. 11 G1N1P1 chen.
 12 CD1N2P2 srungs. 13 G2N2P2 te. 14 CG1N1P1 'od. 15 CD1 srungs. 16 N2P2 ste.
 17 CG1N1P1 sa. 18 G1N1P1 bsrung. 19 C dang, D2 po.

yul don slob dpon bye brag gyis¹ //
tha dad rnam pa bco brgyad do //(38)
rang rgyal byang chub don gnyer bas //
gzung ba'i rtog pa spangs phyir dang // 325
'dzin pa ma spangs phyir na de² //
rten gyis³ bse ru lta bu'i lam //(39)
bskal pa brgya yi mthar thug par //
bsgoms pas byang chub reg par 'gyur //
de ni rten cing 'brel (G2. 23a) 'byung ba // 330
yan lag bcu (G1. 354a) gnyis (P2. 22a) cha⁴ gsum mo //
sngon dang phyi mthar gnyis gnyis dang //
bar du brgyad yongs rdzogs ldan la⁵ //
ma rig nyon mongs sngon gnas skabs //
'du byed dag ni sngon las⁶ kyi⁷ // 335
rnam shes mtshams⁸ sbyor phung po yin //
ming dang gzugs (D2. 17b) ni de phan chad //
skye mched drug dod tshun chad do //
de ni (N1. 262b) gsum 'dus tshun chad do //
reg pa bde sdug la sogs kyi⁹ // 340
rgyu shes nus pa tshum chad do //
tshor 'khrig tshun chad sred pa ni //
longs spyod 'khrig pa chags bcas kyi //10
nye bar len pa longs spyod rnams //
thob par bya phyir yongs rgyug pa'o¹¹ // 345
de srid 'bras bu 'byung 'gyur ba'i //
las de nyid ni srid pa yin //
nying mtshams sbyor ba skye ba yin //
tshor ba'i bar ni rga shi yin //

(38) *Samayabhedoparacanacakraṅkāyabhedopadeśanasamgraha* 1-4.

(39) *Candraharipāda* of Ratnamāla 4.

1 CD1G1N1P1 *gi*. 2 CD1G1N1P1 *ste*. 3 CG1N1P1 *gyi*. 4 CD1 *chags*. 5 D2 *la*.
6 CD1G1N1P1 *'das*. 7 G1N1P1 *kyis*. 8 G2 *mtsham*. 9 G1N1P1 *gyis*. 10 G2 *l*. 11 N2P2 *pa'i*.

'di ni gnas skabs par 'dod do¹ // 350
gtso bo'i phyir na yan lag bsgrags //
sngon dang phyi mtha² bar dag la //
rmongs pa rnam par bzlog phyir ro //
nyon mongs gsum mo las gnyis so³ //
gzhi⁴ bdun de bzhin 'bras bu yin // 355
gnyis kyi rgyu 'bras mdor bsdus pa //
bar ma'i rjes su⁵ dpag pa las //
'dir ni 'byung ba rgyu yin te //
byung ba 'bras bu nyid du⁶ 'dod //(40)
yan lag bcu (N2. 19b) gnyis de dag las // 360
rgyu ni⁷ rnam⁸ lnga 'bras bu bdun //
'phen par byed dang 'phangs pa dang //
mngon par 'grub byed sgrub pa dang //
nyes dmigs kyi⁹ ni yan lag ste //
gsum bzhi gsum gcig gcig rim bzhin // 365
'du byed sdug bsngal (G1. 354b) 'gyur ba yi¹⁰ //
sdug (P1. 273b) bsngal nyid ni rim bzhin du //
lnga¹¹ dang gnyis¹² dang lnga yin no¹³ //
khams gsum du¹⁴ ni rim bzhin du //15
bcu gnyis bcu gcig bcu yis 'jug // 370
rdzus¹⁶ skyes yan (D1. 258b) lag bcu (C. 258b) (G2. 23b) gcig gis //
mngal dang sgong skyes bcu gnyis kyi //
drod gsher las skyes (P2. 22b) ci rigs 'jug //
de bzhin 'gro ba lnga la sbyar //
gsum po dag las gnyis 'byung ste // 375
gnyis las bdun 'byung bdun las kyang //

(40) *Abhidharmakośakārikā* 3.20-26, 28ab.

1 D1G1N1P1 lo. 2 G2 ma. 3 G2 gnyiso. 4 D2 gzhi. 5 GN2 rjesu. 6 G2 om.
7 G2 ni 'bras bu. 8 N1 rnam. 9 GNP kyi. 10 G1N1P1 yis. 11 C lngang. 12 C bzhi.
13 G2 yino. 14 CD1G1N1P1 na. 15 P2 /. 16 D2 brdzus.

gsum 'byung srid pa'i 'khor lo de¹ //
 nyid ni yang² dang yang³ du 'khor //(41)
 'khor ba'i ngo bo rnam⁴ pa dang //
 gang zhig gang du gang gis dang // 380
 ji ltar ji srid nyes dmigs ni //
 mtha' yas tshogs kyis rab tu 'jug //
 brtsam par bya zhing 'byung bar bya //
 sangs rgyas bstan la 'jug par bya //
 'dam bu'i khyim na glang chen bzhin // 385
 (N1. 263a) 'chi bdag sde ni gzhom par bya //
 gang zhig rab tu bag yod par //
 chos 'dul 'di la spyod gyur pa⁵ //
 skye ba'i 'khor ba rab spangs nas //
 (D2. 18a) sdug bsngal tha mar byed par 'gyur //(42) 390
 mya ngan gang las 'da' ba dang //
 gang zhig gang gis gang gi tshe //
 gang du⁶ gang phyir ji lta bur //
 ji srid ngo bo rnam pa dang //
 thob pa⁷ dbye ba phrin las dang // 395
 yon tan tshigs kyis ldog pa'o //
 mu stegs pa ni rnam pa gnyis //
 sprul pa pa dang rang rgyud pa //
 de yang skyes thob sbyor byung⁸ ngo //
 skyes⁹ thob rigs chad log sred can // 400
 sbyor byung bsam gtan rtog ge ba //
 bsam gtan pa ni mngon shes mthus //
 lta ba drug cu gnyis su¹⁰ rtog¹¹ //

(41) *Pratīyasamutpādhāṛdayakārikā* 3.

(42) *Vinayavastu*. Tib. D. No. 1, Nga 227b2-3.

1 CD1G1N1P1 *ste*. 2 CD1 *yid*. 3 CD1 *yid*. 4 N1 *rnams*. 5 CD1G1N1P1 'gyur *ba*.
 6 CD1 *gis*. 7 D1G1N1P1 *bya*. 8 CD1N1P1 'byung. 9 G1 *skye*. 10 G2N2 *gnyisu*.
 11 CD1G1N1P1 *rtogs*.

rtag par smra ba rnam bzhi dang //
 (G1. 355a) kha cig rtag par smra ba bzhi // 405
 mtha¹ yod sogs bzhi mi spong bzhi //
 rgyu med gnyis ni sngon mthar rtog //
 'du shes yod smra bcu drug dang //
 med smra brgyad dang de bzhin du //
 yod min med min smra ba brgyad // 410
 chad smra bdun dang tshe 'di la //
 mya ngan 'da' (P1. 274a) bar smra ba lnga //
 phyi ma'i mthar rtog lta ba'o //
 rtog ge pa ni grangs can sogs //
 tshad mas grub mtha' (G2. 24a) 'dzin pa'o // 415
 grangs can (N2. 20a) yon tan gsum du brjod //
 snying stobs² rdul dang (P2. 23a) mun pa'o //
 rangs dang mgu dang kun dga' dang //
 bde dang³ zhi⁴ ba'i⁵ sems nyid dag //
 res 'ga' yang ni snang 'gyur ba⁶ // 420
 de dag snying stobs⁷ yon tan no //
 mi dga' ba dang yongs gdungs⁸ dang //
 mya ngan 'dod dang mi bzod (D1. 259a) dag //
 gang du snang ba'i gtan tshigs kyis //
 de dag rdul gyi⁹ rtags su¹⁰ 'dod // 425
 rmongs (C. 259a) dang¹¹ de bzhin gti mug dang //
 bag med gnyid dang g-yel¹² ba dag //
¹³lan¹⁴ 'ga' yang ni snang gyur pa //¹⁴
 de dag mun pa'i yon tan no //¹³
 yon tan gsum gyi rang bzhin mchog // 430
 mthong ba'i lam du 'gyur ma yin //

(43) *Jñānasārasamuccayanibandhana* of Bodhibhadra. Tib. D. No. 3852, Tsa 38a3-4.

1 D1 *stha'*. 2 N2 *stob*. 3 CD1G1N1P1 *om*. 4 CG1P1 *bzhi*. 5 CD1G1N1P1 *pa yi*.
 6 CD1G1N1P1 *gyur pa*. 7 C *stogs*. 8 CD1P1 *gdung*, G1 *bdung*. 9 G1N1P1 *gyis*.
 10 G2N2 *rtagsu*. 11 CG1N1 *pa*. 12 C *gsal*, D1 *g-yal*. 13 G1N1P1 *om*. 14 CD1 *len*.

mthong ba'i lam du gang gyur pa //
 sgyu ma bzhin du shin tu gsog //⁽⁴⁴⁾
 rang bzhin las ni chen po ste //
 de las nga (N1. 263b) rgyal rnam gsum¹ 'byung // 435
 de las dbang po bcu gcig dang //
 de tsam lnga'o de lnga las //
 'byung ba lnga skye² nyi shu bzhi //
 gtso bo nyid dang rnam 'gyur ro³ //
 de dag sems pa yod ma yin // 440
 skyes bu kun rig⁴ sems pa can //
 de nyid⁵ nyi shu lnga⁶ shes na //
 ral pa'am⁷ byi⁸ bo'am⁹ gtsug phud¹⁰ kyis //
 bsti gnas¹¹ gang du (G1. 355b) dga' ba der //
 grol 'gyur 'di la the (D2. 18b) tshom med //⁽⁴⁵⁾ 445
 bye brag pa ni drug tu¹² 'dod //
 rdzas dang yon tan las dang spyi //
 bye brag 'du ba rnam pa drug //
 rdzas dgu yon tan nyi shu bzhi //
 las lnga spyi gnyis bye brag gnyis // 450
 de bzhin 'du ba'ang rnam gnyis te //
 de nyid drug shes rig pa'i mchog //
 rig byed kun gyi pha rol phyin //
 gcer bu pa¹³ rnams don dgu smra //
 srog dang zag pa sdom pa dang // 455
 nges par rga¹⁴ dang 'chi ba dang //
 las dang sdig dang bsod nams dang //
 thar pa zhes bya don dgu po //

(44) *Madhyamakālamkāravṛtti*. Tib. D. No. 3885, Za 80a6.

(45) *Jñānasārasamuccayanibandhana* of Bodhibhadra. Tib. D. No. 3852, Tsa 34b2.

1 G1N1P1 *la sangs rgyas rnams su* (N1 *rnamsu*). 2 CG1N1P1 *ste*. 3 G2N2 'gyuro.

4 G1N1P1 *rigs*. 5 CG1N1P1 *dag*. 6 CG1N1P1 *lngas*. 7 CD1 *pa*. 8 G2N2P2 *spyi*.

9 CD1G1N1P1 *bo*. 10 G1N1P1 *bud*. 11 P2 *nas*. 12 P2 *du*. 13 D1 *ba*. 14 CD1 *dga'*.

gang gis mthong de¹ rnam par dag //
 rigs (G2. 24b) (P1. 274b) pa can don bcu drug 'dod // 460
 tshad ma gzhal bya (P2. 23b) the tshom dang //
 dgos pa dpe dang grub mtha' dang //
 cha shas rtog ge gtan la dbab //
 rtsod dang brjod dang rgol ba dang //
 rgyu ltar² snang ba tshig dor dang // 465
 ltag³ chod⁴ chad pa'i gnas rnams te //
 bcu drug gis ni nges par 'byung //
 dpyod⁵ pa pa ni don bzhir brjod //
 sa dang chu dang me dang rlung //
 de dag 'dus ma byas pa ste // 470
 rtag tu skye 'gag med par gnas //
 de bas las 'bras yod ma yin //
 sngon dang phyi mtha' de bzhin med //
 gang zhig de ltar rnam spyod⁶ pa //
 mthong ba tsam gyis (N2. 20b) rnam grol 'gyur // 475
 khyab 'jug byed rgyur smra ba rnams //
 nyi ma'i nang na bdag khyab⁷ 'jug //⁸
 skar nang 'od gnas zla ba (D1. 259b) yin //
 rlung nang nga ni 'od zer can //
 (C. 259b) snang ba can na⁹ nyi ma yin // 480
 rig byed nang na snyan tshig dang //
 lha nang nga ni brgya byin te //
 dbang po'i nang na yid yin no¹⁰ //
 'byung ba'i nang nas yin zhing //
 nga ni bde byed drag (G1. 356a) po'ang yin // 485
 srin po gnod sbyin nang nor¹¹ bdag //
 nor lha'i nang na me lha nga //

1 CG1P1 *ste*. 2 G1N1 *skar*. 3 P2 *lhag*. 4 D1 *rgod*. 5 G1N1P1 *spyod*.
 6 CD1G1N1P1 *dpyod*. 7 CD1G1N1P1 *khyab bdag*. 8 D1P /. 9 D2 *nang*, G1N1P1 *ni*.
 10 G2N2 *yino*. 11 CD1G1N1P1 *rol*.

ri bo'i nang nang ri rab //
 nga ni yi ge'i nang na (N1. 264a) a //(46)
 nya dang rul sbal phag dang ni // 490
 mi yi¹ seng ge² mi'u³ thung dang //
 dga' byed rā⁴ ma ṅa⁵ nag pa⁶ //
 sangs rgyas kā li ka⁷ dang bcu //
 gang gis khyab 'jug yon tan rnams //
 rtag tu bsgoms na bde thob 'gyur // 495
 dbang phyug byed rgyur 'dod pa rnams //
 'gro ba 'di dag thams cad kyi //
 byed pa po ni dbang phyug yin //
 de ni yon tan brgyad dang ldan //
 rab phra yang ba mchod par 'os // 500
 bdag por gyur dang dbang du gyur //
 gar⁸ yang phyin dang 'dod dgur ldan //
 (D2. 19a) de bzhin dga' mgur gnas pa'o //
 lag pa dag dang rkang pa dang //
 mig dang dong dang lus (G2. 25a) rnams kyis⁹ // 505
 mang po bskyed¹⁰ (P2. 24a) cing 'jig byed pas //
 des na phra bar brjod pa yin //(47)
 mkha' dang rlung dang sa dang ni //
 chu dang me dag gnas (P1. 275a) byed cing //
 sdud pa dang ni rgyas byed pas // 510
 des na yang bar brjod pa yin //
 'jig rten gsum¹¹ na¹² mchod gyur cing //
 gnas pa dag¹³ dang rgyu ba dang //
 'byung po kun gyis rjed¹⁴ pas na //
 des na¹⁵ mchod par 'os pa yin //(48) 515

(46) *Devāṅśayastotraṅkā*. Tib. D. No. 1113, Ka 51a6-b1

(47) *Tarkajvāla*. Tib. D. No. 3856, Dza 296a4.

(48) *Jñānasārasamuccayanibandhana* of Bodhibhadra. Tib. D. No. 3852, Tsa 37b2-5.

1 G1 yis. 2 G2 sengnge. 3 G1N1P1 mi. 4 CD1N1 ra. 5 G1N1 na. 6 CG1N1 po.
 7 CD1 tsar ti ka, G1N1P1 tsa rti ka, G2N2P2 kar ki ke. 8 D2 gang. 9 CD1G1N1P1 kyi.
 10 D2 skyed. 11 G2 gsum. 12 P1 na //. 13 C bdag. 14 CD1G1N1P1 brjed. 15 CD1 ni.

'byung po kun la dbang byed cing //
 gnas pa dag¹ dang rgyu ba dang //
 gang dang gang 'dod des² byed pas //
 des na bdag por³ gyur ces⁴ bya //
 bdag la rag las rang dbang can // 520
 'ga⁵ la'ang 'jigs pa yod min⁶ te //
 thams cad dbang du gyur pas na⁷ //
⁸-des na dbang du gyur ces bya //⁸
⁹gzhan yang yid kyis gang bsams pa //⁹
¹⁰yid kyi rjes 'gro mi sdod cing //¹⁰ 525
 mtho ris (G1. 356b) ngan song kun khyab pas //
 des na gar yang phyin ces¹¹ bya //
 snying stobs rdul dang mun pa gsum //
 de dag gang la¹² gnas gyur pa //
 mig 'byed tsam gyis byed 'gyur bas¹³ // 530
 des na 'dod dgur¹⁴ ldan zhes bya //
 thar pa'am yang na lha yi¹⁵ lus //
 gang du bdag nyid¹⁶ 'dod pa dag //
 thams cad 'dod pas thob 'gyur bas¹⁷ //
 des na dga' mgur¹⁸ gnas zhes¹⁹ bya //⁽⁴⁹⁾ 535
 gang zhig phra gyur gcig²⁰ (D1. 260a) pu skyes²¹ nas²² 'dug //
 (N2. 21a) de yis 'di kun skye zhing²³ 'jig par byed //
 de ni dbang bdag²⁴ mchog (C. 260a) sbyin lha mchod bya //
 yon tan byed po shin tu zhi ba thob²⁵ //
 skye ba po 'di shes pa yod min te // 540
 bdag gi²⁶ bde sdug bdag la rang dbang med //

(49) *Jñānasārasamuccayanibandhana* of Bodhibhadra. Tib. D. No. 3852, Tsa 37b3-6.

1 CD1 *bdag*. 2 CD1G1N1P1 *de*. 3 G1 *po*. 4 CD1 *zhes*. 5 G1N1 *dga'*. 6 G2 *yod mi yin*.
 7 CD1 *zhes bya*. 8 CD1N2P2 *om*. 9 CD1G1NP *om*.
 10 CD1GNP *om*, D2 adds “*dpe gcig 'tshig rkang 'di gnyis snang*.”
 11 CD1G1N1P1 *zhes*. 12 G2P2 *las*. 13 CD1G1N1P1 *gyur pas* (C *par*). 14 D2 *rgur*.
 15 G1N1P1 *gis*. 16 N1 *nyid'ang*. 17 CD1P1 *gyur pas* (C *par*). 18 G1N1P1 *dgur*. 19 GNP *shes*.
 20 GNP1 *cig*. 21 D2 *skye*. 22 D2G2N2P2 *gnas*. 23 CD1G1N1P1 *skyes shing*. 24 CD1 *dag*.
 25 GNP 'thob. 26 G1N1P1 *gis*.

dbang phyug gis btang yang na mtho ris sam //
 g-yang sa dag tu 'gro ba kho nar 'gyur //(50)
 dbang phyug rdza mkhan lta bur sna tshogs
 'di sprul (G2. 25b) byed por ma gyur na //
 ri rab 'di mi 'grub¹ cing sa gzhi
 'di min rgya mtsho'ang ma yin te // 545
 nyi zla skar ldan 'di ltar bkod pa
 'di dag mig yul du mi² (P2. 24b) 'gyur //
 yod pa'i phyir na³ dbang phyug 'gro ba'i
 byed po⁴ yin zhes 'ga' zhig smra //
 phra zhing bsam gyis mi khyab rab srab
 byed pa kun rig kun byed pa //
 rnal 'byor goms pas thob pa blo can
 bsam gtan pa yi bsam (P1. 275b) gtan yul //
 nyi ma zla bas chu me rlung phyogs
 dang nam (D2. 19b) mkha'i⁵ lus can te // 550
 zhi ba'i bde dga' 'dod pa rnam kyis
 dbang phyug rtag tu bsgom⁶ //(51)
 dus la ltos⁷ par smra ba (G1. 357a) rnam //
 dngos kun dus kyis⁸ bsgyur ba ste //
 gang gi zhang po nor lha dang //
 gang pha nor rgyal⁹ yin pa yi // 555
 'jigs med khro bo'ang¹⁰ bsad¹¹ gyur pas //
 dus ni 'da' bar dka'¹² ba yin //(52)
 'byung ba rnam ni dus kyis 'byin //
 skye dgu rnam sdud dus kyis¹³ byed //
 dus kyis¹⁴ gnyid log sad¹⁵ par byed¹⁶ // 560
 dus ni 'da' bar dka' ba yin //

(50) *Jñānasārasamuccayanibandhana* of Bodhibhadra. Tib. D. No. 3852, Tsa 37b2-5.

(51) *Jñānasārasamuccayanibandhana* of Bodhibhadra. Tib. D. No. 3852, Tsa 40b5-6.

(52) *Jñānasārasamuccayanibandhana* of Bodhibhadra. Tib. D. No. 3852, Tsa 37b6-7.

1 CD1G1N1 *grub*. 2 CD1G1N1P1 *med*. 3 CD1 *ni*. 4 N2 *pa*. 5 GN *namkha'i*.

6 CG1N1P1 *bsgom*. 7 GNP2 *btos*. 8 G1N1P1 *kyi*. 9 G1N1P1 *rgyas*. 10 P2 *ba'ang*. 11 G1 *bsang*.

12 G1 *dkar*, G2N2 *dga'*. 13 P1 *gyis*. 14 CG1N1P1 *kyi*. 15 N1P1 *gsad*. 16 D2 *byed pas*.

srung¹ ba gsum brtsegs² 'obs ni rgya mtsho dang //
 dmag³ mi srin po nor ni nor sbyin sbyor //
 gang gi⁴ bstan bcos pa sangs tshad mnyam pa'i //
 sgra sgrogs bu de'ang dus kyi⁵ dbang gis nyams //(53) 565
 ngo bo nyid rgyur smra dngos rnams⁶ //
⁷dngos po ngo bo nyid kyi 'grub //⁷
 me yi dmar ba nyid dang ni //
 dam pa gzhan don byed nyid dang //
⁸dam pa min pa'i brtse med⁹ nyid //⁸ 570
 gsum po ngo bo nyid kyi¹⁰ grub //
 tsher ma rno bar gyur pa su yis byas //
 ri dags bya yi ri mo su yis byas //
 bu ram shing mngar nim pa¹¹ kha ba dag //
 'di dag thams cad ngo bo nyid kyi grub // 575
 nyi ma tsha zhing zla ba¹² rab bsil¹³ dang //
 skye bo chags shing thub pa de min la //
 bde ba rab tshim¹⁴ sdug bsngal rab gdung ba //
 drug po 'di dag (D1. 260b) ngo bo nyid (N2. 21b) kyi gyurub //
 gang dag rgyu (N1. 265a) med smra ba ni // 580
 thams cad rgyu (C. 260b) la ltos¹⁵ med par //
 dngos po rnams ni¹⁶ skye ba ste //
 (P2. 25a) nyi ma padma'i ge sar sogs //
 sna tshogs gang gis byas pa yin //
 rma bya'i mdongs la sogs pa yang // 585
 sna tshogs gang gis sprul pa yin //
 ji ltar char rlung la sogs pa //

(53) *Jñānasārasamuccaya* of Bodhibhadra. Tib. D. No. 3852, Tsa 38a1.

1 G1N1P1 *bsrung*. 2 G1 *rtse*, N1P1 *rtseg*, G2N2P2 *rtsegs*. 3 N2 *dmags*.
 4 CD1 *zhig*, G1N1P1 *gis*. 5 G1N1P1 *kyis*. 6 CD1G1N1P1 *smra ba ni*.
 7 G2N2P2 *ngo bo nyid kyi 'grub par byed* //. 8 G1N1P1 *om*. 9 P2 *min*. 10 G1N1 *gyis*.
 11 G1N1 *nimba*. 12 G1N1P1 *om*. 13 G1N1P1 *bsil ba*. 14 CD1 *bsil*, G1N1P1 *sil*, D2 *sim*.
 15 GNP *bltos*. 16 CD1 *kyis*.

glo bur 'byung phyir rgyu med ltar //
 sdug bsngal (G1. 357b) la sogs rgyu med nyid //(54)
 shin tu rgya chen rab zab la // 590
 skyid lug shin tu ma sbyangs pa¹ //
 bdag gzhan² smra³ dag gti mug gis //
 de ltar theg pa che⁴ la smod //
 tshul khirms las ni nyams bla yi //
 lta las cis kyang ma yin te // 595
 tshul khirms kyis ni mtho ris 'gro //
 lta bas go 'phang⁵ mchog tu 'gyur //
 gti mug dbang gis bsgribs gyur⁶ te //
 gang zhig yang dag gegs⁷ byed pa //
 de la dge ba'i 'gro ba'ang med // 600
 thar pa med pa smos ci dgos //
 gnod pa'i sa (D2. 20a) bon gyur pa yi //
 mu stegs byed mang mthong nas ni //
 thar 'dod skye bo⁸ pa⁹ rnam la //
 snying rjer mi 'gyur su zhig yod //(55) 605
 de phyir thar pa don gnyer rnam //
 chos kyi dbyings su blta¹⁰ bar gyis //

*Chos kyi dbyings su lta ba'i glu*¹¹ slob dpon chen po¹² Dī paṃ ka ra¹³ 14- shrī dznyā nas¹⁴
 mdzad pa rdzogs so¹⁵ // //

rgya gar gyi mkhan po de nyid dang /¹⁶ bod kyi lo tsā ba dge slong¹⁷ Tshul khirms rgyal
 bas bsgyur ba'o //¹⁸

(54) *Tattvasaṃgraha* of Śāntarakṣita 5.110-112.

(55) *Madhyamakālamkāravṛtti* of Śāntarakṣita. Tib. D. No. 3885, Sa 82b3-5.

1 G1N1P1 *la*. 2 CD1G1N1P1 *bzhin*. 3 G1N1P1 *sgra*. 4 G2N2P2 *chen*. 5 P2 *'phangs*.
 6 G2 *'gyur*. 7 G1N1P1 *bgegs*. 8 G2P2 *ba*. 9 CD1G1P1 *'dod*, G2P2 *po*. 10 CD1G1P1 *lta*.
 12 CD1G1N1P1 *glu* //. 13 G1N1 *po'i*. 14 CD1G1N1P1 *ras*. 15 CD1G1N1P1 *om*. 16 N2 *rdzogs*.
 17 N2 // . 18 G2 *om*. 18 GN1P1 // // .

36 Lokottarāṅgasaptakavidhi

//¹ rgya gar skad du / *Lo ka u tta ra aṃ ga sa pta² ka bi dhi³ /*
bod skad du / 'Jig rten las 'das pa'i yan lag bdun pa'i cho ga /⁴
sangs rgyas dang byang chub sems dpa' thams cad la phyag 'tshal lo⁵ //
dpal rdo rje sems dpa' la phyag 'tshal lo⁶ //

phyag gnas phyag byed phyag rnams ni //
gang tshe tha dad mi (D1. 235b) dmigs pa //
de 'dir sngags⁷ pa'i phyag yin te //
rdo rje phyag ces brjod pa yin //
mchod gnas mchod byed mchod pa rnams // 5
(C. 135b) gang tshe sna tshogs mi dmigs pa //
de tshe mchod pa chen po ste //
rdo rje mchod pa zhes brjod do //
(G1. 204b) bshags bya 'chags⁸ byed bshags pa rnams //
gang tshe rnal 'byor bas⁹ ma mthong // 10
rang bzhin dag par yang dag mthong //
(P1.170a) de 'dir bshags pa'i mchog yin no¹⁰ //
rjes yi rang bya thams cad dang //
bdag dang rjes su¹¹ yi rang ba //
rnal 'byor pa yis mnyam par mthong // 15
rjes su¹² yi rang dam pa yin //
sgyu mas sprul pa'i sangs rgyas la //
sgyu mas¹³ sprul pa'i lus can phyir //
brag cha¹⁴ lta bu'i chos rnams ni //
bstan par yang dag bskul¹⁵ 'debs pa // 20

1 G1G2 om. #//, P2 'jig rten las 'das pa'i yang lag bdun pa'i cho ga bzhugs so // 2 G2 ta.
3 CD1G1NP1 lo la ati ta sa pta ka bi dhi (CD1 dhiḥ). 4 D1 om. 5 G2N 'tshalo. 6 N 'tshalo.
7 D2 bsngags. 8 CD1 'chag, G2 chags. 9 D1 pas. 10 N yino. 11 N rjesu. 12 N rjesu.
13 D2 ma. 14 CD1NP1 ca. 15 CD1G1NP1 skul.

sprul pa dag dang mtshungs par ni //
 thal mo sbyar nas skul byed cing //
 rdo rje rnal 'byor mnyams¹ par mthong //
 skul² bar byed pa'i mchog tu 'dod //
 mya ngan las³ bzhed⁴ sangs rgyas rnam // 25
 'khor bar sprul pa bzhin du ni //
 sems can sprul pa'i don gyi phyir //
 bzhugs par gsol 'debs (P. 48a) de nyid rig⁵ //⁶
 'jig rten 'das pa nyid kyi (D2. 38b) phyir //
 de (G2. 50b) 'dir gsol 'debs mchog tu 'dod // 30
 dmigs pa can du 'jug pa nyid //
 thams cad 'jig rten pa nyid yin //
 rdzogs pa'i byang chub rmi 'dra la //
 de nyid rig pas rmi 'drar⁷ rig⁸ //
 rmi 'dra'i srid par gnas pa yin⁹ // 35
 sems can rnam la phan btags pas //
 chos dbyings bzhin du dpag med par //
 dge ba (N. 148a) thams cad yongs bsngos¹⁰ na //
 de 'drir bsngo ba dam pa ste /
 sangs rgyas kun gyis¹¹ rab tu bsngags¹² // 40

'Jig rten las 'das pa'i yan lag bdun pa'i cho ga¹³ slob dpon mkhas pa¹⁴ chen po dpal
 Mar me mdzad ye shes kyis¹⁵ dpal (G1. 205a) bsam yas lhun gyis grub pa'i gtsug lag khang
 chen por mdzad pa rdzogs so¹⁶ // //¹⁷

1 N mnyam. 2 G1NP1 bskul. 3 G1NP1 'das. 4 G2 zhes. 5 G1NP1 rigs. 6 CD1 /.
 7 N 'dra. 8 G2P2 rigs. 9 D2G2P2 yi. 10 CD1D2 bsngo. 11 D2G2N2P2 gyi. 12 C sngags.
 13 D2 ga /. 14 D1D2NP1P2 om. 15 P2 kyi, G1P1 kyis /, N kyi //. 16 G1P1 sHo, N rdzogsso.
 17 D1 /, CD2N1 /.

参考文献

Anonymous

- 1970 *Complete Biography of Atisha by Nagtso Lotsawa Tsultim Gyalwa*. Varanasi: Buddhist Temple.
- 1986-7 “Bodhipatha Pradipa,” *Bulletin of Tibetology* 1986-2: 16-39, 1987-2: 13-30.
- 1989 *Byang chub lam sgron rtsa 'grel dang sems tsam gzhung sum cu pa dang rtsa 'grel yi ge'i bshad pa mkhas pa'i kha rgyan bcas pa bzhugs*. Sarnath.
- 1994 阿底峽著『弟子問答語錄('brom ston rgyal ba'i 'byung gnas kyi skyes rabs bka' gdams bu chos bzhugs so)』青海民族出版社

Apple, James B.

- 2010 “Atiśa’s Open Basket of Jewels: A Middle Way Vision in Late Phase Indian Vajrayāna.” *The Indian International Journal of Buddhist Studies* 11: 117-198.
2013. “An Early Tibetan Commentary on Atiśa’s *Satyadvayāvātāra*,” *Journal of Indian Philosophy* 41: 263-329.
- 2014 “A Study and Translation of Atiśa’s *Madhyamakopadēsa* with Indian and Tibetan Commentaries,” *Acta Tibetica et Buddhica* 7.
- 2015 “An Early Bka’-gdams-pa Madhyamaka Work Attributed to Atiśa Dīpaṃkaraśrījñāna,” *Journal of Indian Philosophy* 43: 1-107.

Bureau, Andre

- 1954 “Le cycle de la formation des schisms,” *Journal Asiatique* 1954: 235-266.
- 1955 *Les sectes bouddhiques du petit vehicule*. Paris: Ecole française d'Extrême-Orient.
- 1956 “Trois traites sur les sectes bouddhiques,” *Journal Asiatique* 1956: 167-200.
- 2013 *The Buddhist Schools of the Small Vehicle*. Sara Boin-Webb Trans., Honolulu: University of Hawai'i Press.

Bendall, Cecil

- 1903 *Subhāṣita-Saṃgraha*. *Le Muséon*, N.S. IV: 375-402.
- 1897-1902 *Çikshāsamuccaya: A Compendium of Buddhistic Teaching*. St. Petersburg: Imprimerie de l'Académie Impériale des Sciences.

Bendall, C. and W.H.D. Rouse

- 1922 *Śikshā-samuccaya: a Compendium of Buddhist Doctrine*. London: Murray.

Beresford, Brian

- 1977 *Advice from a Spiritual Friend*, Boston: Wisdom Publications.

- 1980 *Mahāyāna Purification*. Dharamsala.
- Bernhard, Franz
- 1965 *Udānavarga Band I*. Göttingen: Vandenhoeck & Ruprecht.
- Beyer, Stethan
- 1988 *Magic and Ritual in Tibet: The Cult of Tārā*. New Delhi: Motilal Banarsidass.
- Bhattacharyya, Benoytosh
- 1925-8 *Sādhnamālā*, 2 vols. Gaekwad's Oriental Series XXVI, Baroda: Central Library.
- Bhattacharya, Vidhushekara
- 1957 *The Yogācārabhūmi of Ācārya Asaṅga*. Calcutta: Asiatic Society.
- 1960 *Bodhicaryāvatāra of Śāntideva*. Calcutta: Asiatic Society.
- Braarvig, Jens
- 1993 *Akṣayamatīnirdeśasūtra, Vol. I: Edition of extant manuscripts with an index, Vol. II: The Tradition of Imperishability in Buddhist Thought*. Oslo: Solum Forlag.
- van den Broeck, Jose
- 1977 *La saveur de l'immortel (A-p'i-t'an Kan Lu Wei lun)*. Louvain: Publications de l'institut orientaliste de Louvain.
- 1976 *Le flambeau sur le chemin de l'éveil (Bhodhipathapradīpa)*. Bruxelles: Publications de l'institut Belge des hautes études bouddhiques.
- Broido, Michael
- 1989 "The Jo-nang-Pas on Madhyamaka: A Sketch," *The Tibetan Journal* 14-1: 86-90.
- Cabezón, José I.
- 1984 (rev.) "Richard Sherburne, ed. and tr., *A Lamp for the Path and Commentary of Atīśa*," *Journal of International Association of Buddhist Studies* 7-2: 224-226.
- 1992 *A Doze of Emptiness*. Albany: State University of New York Press.
- Chakeavarti, Chintaharan
- 1984 *Guhyasamājatantrapradīpodyotanāṭikāṣaṭkoṭīvyākhyā*. Patna: Kashi Prasad Jayaswal Research Institute.
- Chakraborty, Bhabatosh
- 1982 "Did Atisa-Dipankara Srijnana Visit Sikkhim?" *Bulletin of Tibetology* 1982-3: 6-9.
- Chandra, Lokesh
- 1971 *Tibetan-Sanskrit Dictionary*. repr., Kyoto: Rinsen shoten.

- 1983 *Biography of Atisha and his Disciple Brom-ston*, 2 vols. New Delhi: International Academy of Indian Culture.
- Chang, K'e-ch'iang
- 1967 "Atiśa," *Encyclopaedia of Buddhism*, II-2: 311-315.
- Chattopadhyaya, Alaka
- 1967 *Atiśa and Tibet*. Calcutta: Distributors Indian Studies, Past and Present.
- Chattopadhyaya, Debiprasad
- 1980 *Tāranātha's History of Buddhism in India*. Calcutta: KP Bagchi & Company.
- Clayton, Barbra R.
- 2006 *Moral Theory in Śāntideva's Śikṣāsamuccaya*. Oxford and New York: Routledge.
- Conze, Edward
- 1954 *Abhisamayālaṅkāra*. Rome: Istituto Italiano per il Medio ed Estremo Oriente.
- 1957 *Vajracchedikā Prajñāpāramitāsūtra*. Rome: Istituto Italiano per il Medio ed Estremo Oriente.
- 1978 *The Prjñāpāramitā Literature*, 2nd ed., Tokyo: The Reiyukai.
- Cutler, Joshua W. C., with Guy Newland
- 2000 *The Great Treatise on the Stages of the Path to Enlightenment by Tsong-kha-pa, vol.1*. Ithaca: Snow Lion Publications.
- 2002 *The Great Treatise on the Stages of the Path to Enlightenment by Tsong-kha-pa, vol.2*. Ithaca: Snow Lion Publications.
- 2004 *The Great Treatise on the Stages of the Path to Enlightenment by Tsong-kha-pa, vol.3*. Ithaca: Snow Lion Publications.
- Dargyay, Eva K.
- 1977 "Tsong-kha-pa and his Relation to Atiśa and Padmasambhava," in *Buddhist Thought and Asian Civilization*, ed. L.S. Kawamura and K. Scott, 16-26, Emeryville: Dharma Publishing.
- Das, R.P. & R.E. Emmerick,
- 1998 *Vāgbhaṭa's Aṣṭāṅgahrdayasaṃhitā*. Groningen: Egbert Forsten.
- Das, Sarat Chandra
- 1893a "Indian Panditas in Tibet," *Journal of the Buddhist Text Society* 1-1: 1-31.
- 1983b "Bohi Patha Pradīpa (Byañ Chub Lam Gyi Sgron-ma) by Dīpaṅkara Śrījñāna," *Journal of the Buddhist Text Society* 1-1: 39-48, 1-3: 21-26.
- Davidson, Ronald M.

- 1995 “Atiśa’s A Lamp for the Path to Awakening,” in *Buddhism in Practice*, ed. D.S. Lopez, Jr., 290-301, Princeton: Princeton University Press.
- 2004 *Tibetan Renaissance: Tantric Buddhism in the Rebirth of Tibetan Culture*. New York: Columbia University Press.
- Decleer, Hubert
- 1995 “Atiśa’s Journey to Sumatra,” in *Buddhism in Practice*, ed. D.S. Lopez, Jr., 532-640, Princeton: Princeton University Press.
- 1996 “Master Atiśa in Nepal: The Tham Bahīl and Five Stūpas’ Foundations According to the ‘*Brom ston Itinerary*,” *Journal of the Nepal Research Centre* 10: 27-51.
- 1997a “Atiśa’s Arrival in Nepal,” *Buddhist Himalaya: Journal of Nagarjuna Institute of Exact Methods* 8: 1-15.
- 1997b “Atiśa’s Journey to Tibet,” in *Religious of Tibet in Practice*, ed. D.S. Lopez, Jr., 157-177, Princeton: Princeton University Press.
- Dietz, Siglinde
- 1984 *Die buddhistische Briefliteratur Indiens: Nach dem tibetischen Tanjur herausgegeben, übersetzt und erläutert*. Wiesbaden: Otto Harrassowitz.
- 1990 *Udānavarga Band III*. Göttingen: Vandenhoeck & Ruprecht.
- Dilgo Khenpo Rinpoche
- 1993 *Enlightened Courage: An Explanation of Atiśa’s Seven Point Mind Training*. Ithaca: Snow Lion Publications.
- Doboom Tulku
- 1983 *Atiśa and Buddhism in Tibet*. New Delhi: Tibet House.
- Driessens, Georges
- 1992 *Le grand livre de la progression vers l’éveil*. Jijurieux: Éditions dharma.
- 1992 *Le grand livre de la progression vers l’éveil. II*, Jijurieux: Éditions dharma.
- Dutt, Nalinaksha
- 1978 *Bodhisattvabhūmiḥ*. Patna: K.P. Jayaswal Research Institute.
- Eckel, Malcolm David
- 1987 *Jñānagarbha’s Commentary on the Distinction between the Two Truths*. Albany: State University of New York Press.
- 1992 *To See the Buddha: A Philosopher’s Quest for the Meaning of Emptiness*. Princeton: Princeton University Press.

Egberts, J. & M. Boswerger

1996 *Een Lamp voor het Pad naar de Verlichting*. Amsterdam: Maitreya Instituut.

Eimer, Helmut

1977 *Berichte über das Leben des Atiśa (Dīpaṃkaraśrījñāna), Eine Untersuchung der Quellen*. Wiesbaden: Otto Harrassowitz.

1978a *Bodhipathapradīpa: Ein Lehrgedicht des Atiśa (Dīpaṃkaraśrījñāna) in der tibetischen Überlieferung*. Wiesbaden: Otto Harrassowitz.

1978b “Life and Activities of Atiśa (Dīpaṃkaraśrījñāna),” in *Tibetan Studies. Presented at the Seminar of Young Tibetologists, Zurich, June 26 – July 1, 1977*, ed. M. Brauen and P. Kværne, 125-136, Zürich: Völkerkundemuseum der Universität Zürich.

1979 *rNam thar rgyas pa: Materialien zu einer Biographie des Atiśa (Dīpaṃkaraśrījñāna)*. 2 vols. Wiesbaden: Otto Harrassowitz.

1981a “Die ursprüngliche Reihenfolge der Verszeilen in der Bodhisattvamanyāvalī,” *Zentralasiatische Studien* 15: 323-329.

1981b “Suvarṇadvīpa’s “Commentaries” on the Bodhicaryāvatāra,” in *Studien zum Jainismus und Buddhismus*, ed. K. Bruhn and A. Wezler, 73-78, Wiesbaden: Franz Steiner Verlag.

1982 “The Development of the Biographical Tradition Concerning Atiśa (Dīpaṃkaraśrījñāna),” *The Journal of the Tibetan Society* 2: 41-51.

1983 “Stotra: The Hymn of Praise in Eighty Verses, The Earliest Source for the Life of Atiśa,” in *Atiśa Dipankar Millennium Birth Commemoration Volume*, 1-8, Calcutta.

1983b “(rev.) Richard Sherburne, ed. and tr., *A Lamp for the Path and Commentary of Atiśa*,” *The Journal of the Tibetan Society* 3: 63-67.

1985a “On Atiśa’s Bodhipathapradīpa,” *Bulletin of Tibetology* 1985-1: 15-18.

1985b “Ein weiterer Blockdruck des bKa’ gdams glegs bam in Faksimile,” *Indo-Iranian Journal* 28: 201-203.

1985c “Life and Activities of Atiśa (Dīpaṃkaraśrījñāna),” *Journal of the Asiatic Society (Calcutta)*, 27-4: 3-12.

1986 “Again: On Atiśa’s Bodhipathapradīpa,” *Bulletin of Tibetology* 1986-2: 5-15.

1989 “Nag tsho Tshul khirms rgyal ba’i Bstod pa brgyad cu pa in Its Extant Version,” *Bulletin of Tibetology* 1989-1: 21-38.

- 1989 *Der Tantra-Katalog des Bu ston im Vergleich mit der Abteilung des tibetischen Kanjur*. Bonn: Indica et Tibetica Verlag.
- 1993 *Location List for Texts in the Microfiche Edition of the Phug brag Kanjur*. Tokyo: The International Institute for Buddhist Studies.
- 1997 “Hymns and Stanzas prasing Dīpaṃkaraśrījñāna,” in *Glimpses of the Sanskrit Buddhist Literature* vol.1, ed. K.N. Mishra, 9-32, Sarnath: Central Institute of Higher Tibetan Studies.
- 1998 “The Sources for Sarat Chandra Das’s Life of Aiśa (Dīpaṃkaraśrījñāna),” *Zentralasiatische Studien* 28: 7-11.
- 2003 *Testimonia for the Bstod-pa brgyad-cu-pa: An Early Hymn Praising Dīpaṃkaraśrījñāna (Atiśa)*. Lumbini: Lumbini International Research Institute.
- Ferrari, Alfonsa
- 1958 *mK’yen brts’s Guide to the Holy Places of Central Tibet*. Roma: Istituto Italiano per il Medio ed Estremo Oriente.
- Gray, David B.
- 2013 *The Cakrasamvara Tantra (The Discourse of Sri Heruka): Editions of the Sanskrit and Tibetan Texts*. New York: American Institute of Buddhist Studies.
- Guenther, Herbert V.
- 1959 *The Jewel Ornament of Liberation by sGam po pa*. London: Rider & Co.
- Gyaltzen Namdol
- 1985 *Bhāvanākrama of Ācārya Kamalaśīla*. Sarnath: Central Institute of Higher Tibetan Studies.
- Hahn, Michael
- 1977 “Das Saptamaithunasamṃyuktasūtra, ein Sūtra des Ekottarikāgama,” in *Beiträge zur Indienforschung*, ed. H. Hartel, 205-224, Berlin: Museum für indische Kunst.
- 1982 *Nāgārjuna’s Ratnāvalī Vol. 1: The Basic Texts (Sanskrit, Tibetan, Chinese)*. Bonn: Indica et Tibetica Verlag.
- 1999 *Invitation to Enlightenment*. Berkeley: Dharma Publishing.
- Hahn, Michael und Sieglinde Dietz
- 2008 *Wege zur rechten Erkenntnis buddhistische Lehrbriefe*. Frankfurt am Main: Verlag der Weltreligionen.
- Harrison, Paul
- 1978 *The Tibetan Text of the Pratyutpanna-buddha-sammukhāva-stitha-samādhi-sūtra*.

- Tokyo: The International Institute for Buddhist Studies.
- 1981 “(rev.) Bodhipathapradīpa: Ein Lehrgedicht des Atiśa (Dīpaṃkaraśrījñāna) in der tibetischen Überlieferung,” *Indo-Iranian Journal* 23: 314-316.
- 1992 *Druma-kinnara-rāja-paripṛcchā-sūtra: A Critical Edition of the Tibetan Text (Recension A) based on Eight Editions of the Kanjur and the Dunhuang Manuscript Fragment*. Tokyo: The International Institute for Buddhist Studies.
- 2007 “The Case of the Vanishing Poet New Light on Śāntideva and the Śikṣā-samuccaya,” in *Indica et Tibetica: Festschrift für Michael Hahn*, ed. Konrad Klaus & Jens-Uwe Hartmann, 215-248, Wien: Arbeitskreis für tibetische und buddhistische Studien Universität Wien.
- Heitmann, Annette L.
- 1998 *Textkritischer Beitrag zu Bhavya’s Madhyamaka hṛdaya-kārikā Kapitel 1-3*. København: Videnskabsbutikkens Forlag.
- 2004 *Nektar der Erkenntnis: Buddhistische Philosophie des 6. Jh.: Bhavyas Tarkajālā I-III*. 26. Aachen: Shaker Verlag.
- Hopkins, Jeffrey
- 2006 *Mountain Doctrine: Tibet’s Fundamental Treatise on Other-Emptiness and the Buddha-Matrix*. Ithaca: Snow Lion.
- Hui-min 惠敏
- 1994 『「声聞地」における所縁の研究』 山喜房仏書林
- Huntington, C.W., Jr.,
- 1989 *The Emptiness of Emptiness*. Honolulu: University of Hawai’i Press.
- 1995 “A Lost Text of Early Indian Madhyamaka,” *Asiatische Studien* 49-4: 693-767.
- Jaini, Padmanabh S.
- 1977 *Abhidharmadīpa with Vibāṣāprabhāvṛtti*. Patna: Kashi Prasad Jayaswal Research Institute.
- Jamieson, R.C.
- 2000 *A Study of Nāgārjuna’s Twenty Verses on the Great vehicle and His Verses on the Heart of Dependent Origination with the Interpretation of the Heart of Dependent Origination*. New York: Peter Lang Publishers.
- Jamyag Norbu
- 1972 *bKa’ gdams kyi rnam par thar pa bKa’ gdams chos ’byung gsal ba’i sgron me by Las chen Kun dga’ rgyal mtshan*. 2 vols. New Delhi.

de Jong, Jan W.

1977 *Nāgārjuna: Mūlamadlyamakakārikāḥ*. Madras: Adyar Library and Research Centre.

Johnston, E.H.

1950 *The Ratnagotravibhāga Mahāyānottaratantraśāstra*. Patna: Bihar Research Society.

Joshi, Lal Mani

1965 *Śāntideva's Śikṣāmuccaya-kārikās*. Sarnath: Maha Bodhi Society of India.

Kargyud Relief and Protection Committee

1989 *Byang chub lam sgron rtsa 'grel dang / sems tsam gzhung sum cu pa dang / rtsa 'grel yi ge'i bshad pa mkhas pa'i kha rgyan bcas bzhugs*, Sarnath.

Kalsang Lhundup

1973-4 *bKa' gdams Glegs bam: Collected Teachings and Stories of Lord Atisha and his Disciple on the Practice of bKa' gdams pa Buddhism*, 2 vols. Varanasi: Kalsang Lhundup.

Kawamura, Leslie S.

1987 "Atīśa," in *The Encyclopedia of Religions*, Vol. 1, ed. M. Eliade, 492-493, New York: Macmillan Library Reference.

Kern, Hendrik, Bunyiu Nanjio

1977 *The Saddharmapuṇḍarīkasūtram*. repr., Tokyo: Meicho fukyu kai.

Khenpo Konchog Gyaltzen Rinpoche

1988 *The Jewel ornament of Liberation*. Ithaca: Snow Lion.

Khetsun Sangpo

1973 "Dī paṃ ka ra shrī dznyā na ni," in *Biographical Dictionary of Tibet and Tibetan Buddhism*, Vol. I, 592-632, Dharamsala: Library of Tibetan Works and Archives.

Krishnamacharya, E.

1926 *Tattvasaṃgraha of Śāntarakṣita with the Commentary of Kamalaśīla*, Vol. 1. Baroda: Oriental Institute.

Kritzer, R.

1996 "Ghoṣaka Abhidharmāmṛta," in *Encyclopedia of Indian Philosophies, Vol. VII: Abhidharma Buddhism to 150 A.D.*, ed. K.H. Potter, 489-509, Delhi: Motilal Banarsidass Publishers.

Lahulī, K. Angarūp

- 1987 *Vimal Ratna Lekha*. Leh: Central Institute of Buddhist Studies.
- Lamotte, Étienne
- 1935 *Samdhinirmocana sūtra*. Louvain: Université de Louvaine.
- Lee, Jong Choel
- 2001 *The Tibetan Text of the Vyākhyāyukti of Vasubandhu*. Tokyo: The Sankibo Press.
- Lessing, F.D. and A. Wayman
- 1968 *Introduction to the Buddhist Tantric Systems*. The Hague: Mouton.
- Lévi, Sylvain
- 1907-11 *Mahāyānasūtrālamkāra: : Exposé de la Doctrine du Grand Véhicule*. Paris: Librairie honoré champion.
- 1929 “Autor d'Aśvaghosa,” *Journal Asiatique* 1929: 268-269.
- Geshe Lhundub Sopa
- 2004 *Steps on the Path to Enlightenment*, vol.1. Boston: Wisdom Publications.
- 2005 *Steps on the Path to Enlightenment*, vol.2. Boston: Wisdom Publications.
- 2008 *Steps on the Path to Enlightenment*, vol.3. Boston: Wisdom Publications.
- Lie Zhen
- 2015 *The Dharmadhātustava*. Beijing: China Tibetology Publishing House.
- Lin, Guang ming 林光明
- 2001 『新編大藏全咒』台北：嘉豐出版社
- Lindtner, Christian
- 1981 “Atīśa’s Introduction to the Two Truths, and its Sources”, *Journal of Indian Philosophy* 9: 161-214.
- 1982 *Nagarjuniana: Studies in the Writings and Philosophy of Nāgārjuna*. Copenhagen: Akademisk Forlag.
- 1984 “Mātr̥ceta’s *Pranīdhānasaptati*,” *Asiatische Studien* 38-2: 100-128.
- 1985 “A Treatise on Buddhist Idealism: Kambala’s *Ālokamālā*,” in *Miscellanea Buddhica*, ed. Chr. Lindtner, 109-221, Copenhagen: Akademisk Forlag.
- 1998 *Mahāyāna: Den senere indiske Buddhisme*, Copenhagen: Spektrum.
- 2001 *Madhyamakahrdayam of Bhavya*. Chennai: The Adyar Library and research Centre.
- 2015 *Revelation of Bodhicittam*. Frankfurt: Angkor Verlag.
- Geshe Lobsang Dargyay
- 1978 *Atīśa’s «Juwelenkranz des Bodhisattva»* . Rikon: Tibet Institut.

Lobsang Dorjee Rabling

- 1999 *Five Treatises of Ācārya Dīpaṃkaraśrījñāna*. Sarnath: Central Institute of Higher Tibetan Studies.
- 2001 *Āryatriskandhakasūtram and its three Commentaries by Ācārya Nāgārjuna, Jitāri and Dīpaṃkaraśrījñāna*. Sarnath: Central Institute of Higher Tibetan Studies.

Lozang Jamspal

- 1995 *Tibeto-Sanskrit Index to Abhidhānaviśvalocana of Śrīdharaśena*. Narita: Naritasan Shinshoji .

Lopez, Donald S., Jr.

- 1988 *The Heart Sūtra Explained*. Albany: State University of New York Press.
- 1996 *Elaborations on Emptiness: Uses of the Heart Sūtra*. Princeton: Princeton University Press.

Makransky, John J.

- 1997 *Buddhahood Embodied: Sources of controversy in India and Tibet*, Albany: State University of New York Press.

Mathes, Klaus-Dieter

- 2015 *A Fine Blend of Mahāmudrā and Madyamaka: Maitrīpa's Collection of Texts on Non-Conceptual Realization (Amanasikāra)*. Wien: Verlag der Österreichischen Akademie der Wissenschaften

Meadows, Carol

- 1986 *Ārya-Śūra's Compendium of the Perfections*. Bonn: Indica et Tibetica Verlag.

Mishra, Ramprasad

- 1995 *Bodhipathapradīpa of Dīpaṃkara Śrījñāna*. Delhi: Kant Publications.

Moudud, Hasna Jasimuddin

- 1992 *A Thousand Year Old Bengali Mystic Poetry*. Dhaka: University Press Ltd.

Mukhopadhyaya, Sujitkumar

- 1997 "A Critical Study of the *Śārdūlakarṇāvadāna*," *Vishva Bharati Annals* 12-1: 1-108

Negi, Ramesh Chandra

- 1992 *Atīśaviracitā Ekādaśagranthaḥ (Eleven Treatises by Atisa)*. Sarnath: Central Institute of Higher Tibetan Studies.

Ngodrup and Sherab Drimey

- 1979 *Byang chub lam gyi sgron ma sogs Chos chung brgya rtsa dPal ldan A ti shas*

mdzad pa. Paro: Kyichu Temple.

Obermiller, E.

- 1931 *The History of Buddhism (Chos ḥbyung) by Bu-ston. I. Part, The Jewelry of Scripture*. Heidelberg.
- 1933 “The Doctrine of Prajñāpāramitā as exposed in the Abhisamayālaṃkāra of Maitreya,” *Acta Orientalia* 9: 1-133, 334-354.

Orofino, Giacomella

- 1999 “(rev.) Enlightened Courage: An Explanation of Atisha’s Seven Point Mind Training by Dilgo Khyentse Rinpoche,” *The Tibet Journal* 24-2: 84.

dPal brtsegs bod yig dpe rnying zhib ’jug khang (百慈藏文戶籍研究室)

- 2006a *Jo bo rje dpal ldan A ti sha’i gsung ’bum* (阿底峽卷). 北京：中国藏学出版社
- 2006b *bKa’ gdams gsung ’bum phyogs sgrig thengs dang po’i dkar chag bzhugs so*. Si khron mi rigs dpe skrun khang.
- 2007 *bKa’ gdams gsung ’bum phyogs sgrig thengs gnyis pa’i dkar chag bzhugs so*. Si khron mi rigs dpe skrun khang.
- 2009 *bKa’ gdams gsung ’bum phyogs sgrig thengs gsum pa’i dkar chag bzhugs so*. Si khron mi rigs dpe skrun khang.

Bhikkhu Pāsādika

- 1989 *Nāgārjuna’s Sūtrasamuccaya, A critical Edition of the mDo kun las btus pa*. København: Akademisk Forlag.

Patel, P.

- 1932 “Catustava,” *Indian Historical Quarterly* 8: 316-331.

Penpa Dorjee

- 2008 *Ācārya Āryadeva’s Jñānasārasamuccayaḥ with the Commentary of Ācārya Bodhibhadra*. Sarnath: Central Institute of Higher Tibetan Studies.

Pensa, C.

- 1967 *L’Abhisamayālaṃkāravṛtti di Ārya Vimuktisena*. Roma: Istituto Italiano per il Medio ed Estremo Oriente.

Pezzali, Amalia

- 1968 *Śāntideva*. Bologna: Editrice Missionaria Italiana.

Pingree, David

- 1978 *The Yavanajātaka of Sphuḥidhvaja*, Harvard Oriental Series, No. 48, Cambridge: Harvard University Press.

Potter, Karl H.

- 1996 *Encyclopedia of Indian Philosophies, Vol. VII, Abhidharma Buddhism to 150 A.D.*
Delhi: Motilal Banarsidass.

de la Vallée Poussin, Louis

- 1898 *Bouddhisme, Études et Matériaux*, London: Luzac & Co.
1912 *Madhyamakāvātāra par Candrakīrti*. St. Petersburg: Imprimerie de l'Académie
Imprémiare des Sciences.
1913 "Les Quatre odes de Nāgārjuna," *Le Muséon* XVI: 1-18.
1914-1918 *Vasubandhu et Yaçomitra*. London: Kegan Paul.
1971 *L' Abhidharmakośa de Vasubandhu*, tome III. Bruxelles: Institut belge des hautes
études chinoises.

Pradhan, P.

- 1967 *Abhidharmakośabhāṣya of Vasubandhu*. Patna: K.P. Jayaswal Reserach Institute.

Ricard, Matthieu

- 2003 *Path to Buddhahood: Teachings on Gampopa's Jewel Ornament of Liberation*.
Boston & London: Shambala.

Roerich, George N.

- 1949 *The Blue Annals*. Calcutta: Royal Asiatic Society of Bengal.

Salen, Maurice

- 1986 *Quel Bouddhisme pour le Tibet?* Paris: Librairie d'Amérique et d'Orient.

Samdhong Rinpoche

- 1987 *Aṣṭasiddhisāṅgraha*. Sarnath: Central Institute of Higher Tibetan Studies.

Sanderson, Alexis

- 2009 "The Śaiva Age: The Rise and Dominance of Śaivism during the Early Medieval
Period," in *Genesis and Development of Tantrism*, ed. S. Einoo, 41-349, Tokyo:
Sankibo busshorin.

Śānti Bhikṣu Śāstrī

- 1953 *Abhidharmāmṛta of Ghoṣaka*. Visvabharati: Santiniketan Press.
1955 *Jñānaprasthānaśāstra of Kātyāyanīputra*. Santiniketan Press.

Sarkar, H.B.

- 1986 "A Note on Atīśa Dīpaṅkara, Dharmakīrti and the Geographical Personality of
Suvarṇadvīpa," *Bulletin of Tibetology* 1986-3: 36-41.

Śāstrī, T. Ganapati

- 1920-1925 *The Āryamañjuśrīmūlakalpa* 3vols. Trivandrum: Superintendent Government Press.
- Scherrer-Schaub, Cristina Anna
- 1991 *Yuktiṣaṣṭikāvṛtti*. Bruxelles: Institut Belge des Hautes Etudes Chinoises.
- Schmithausen, Lambert
- 1991 *The Problem of the Sentience of Plants in Earliest Buddhism*. Tokyo: The International Institute for Buddhist Studies.
- Schoening, Jeffrey D.
- 1995 *The Śālistamba Sūtra and Its Indian Commentaries*, 2 vols. Wien: Arbeitskreis für tibetische und buddhistische Studien Universität Wien.
- Seyfort Ruegg, David
- 1966 *The Life of Bu ston rin po che*. Roma: Istituto Italiano per il Medio ed Estremo Oriente.
- 1971 “Le Dharmadhātustava de Nāgārjuna,” *Etudes Tibétaines. Dédiées à la Mémoire de Marcelle Lalou*, 448-471, Paris: Librairie d’Amérique et d’Orient.
- 1981 *The Literature of the Madhyamaka School of Philosophy in India*, Wiesbaden: Otto Harrassowitz.
- 1982 “(rev.) H. Eimer, rNam thar rgyas pa. Materialien zu einer Biographie des Atiśa (Dīpaṃkaraśrījñāna),” *Indo-Iranian Journal* 24: 74-76.
- 1994 “Pramāṇabhūta, pramāṇa(bhūta)puruṣa, pratyakṣadharman and sāksākṛtadharman as epithets of the ṛṣi, acārya and tathāgata in Grammatical Epistemological and Madhyamaka Texts,” *Bulletin of the School of Oriental and Asian Studies* 57-2: 303-320.
- 2000 *Three Studies in the History of Indian and Tibetan Madhyamaka Philosophy I*. Wien: Arbeitskreis für tibetische und buddhistische Studien Universität Wien.
- 2002 *The Prolegomena to Madhyamaka Philosophy: Studies in Indian and Tibetan Madhyamaka Thought Part 2*. Wien: Arbeitskreis für tibetische und buddhistische Studien Universität Wien.
- Shashibara
- 2013 *Atiśa Dīpaṃkara Jñānaśrī and Cultural Renaissance*. New Delhi: Indira Gandhi National Centre for the Arts.
- Shastri, Losang Norbu
- 1984 *Bodhipathapradīpaḥ of Ācārya Dīpaṃkara Śrījñāna*. Sarnath: Central Institute of

Higher Tibetan Studies.

Sherburne, Richard, SJ.

- 1983 *A Lamp for the Path and Commentary*. London: George Allen & Unwin Ltd.
2000 *The Complete Works of Atīśa, Śrī Dīpaṅkarajñāna, Jo-bo-rje. The Lamp for the Path and Commentary, together with the newly translated Twenty-five Key Texts*, New Delhi: Aditya Prakashan.

Shih Ru-shi (釈如石)

- 1997 『《菩提道燈》抉微』台北：法鼓文化出版社

Shukla, Kurunesha

- 1973 *Śravākabhūmi of Ācārya Asanga*. Patna : K.P. Jayaswal Research Institute.

Silk, Jonathan A.

- 1994 *The Heart Sūtra in Tibetan: A Critical Edition of the two Recensions Contained in the Kanjur*. Wien: Arbeitskreis für tibetische und buddhistische Studien Universität Wien.
1994b *The Origins and Early History of the Mahāratnakūṭa: Tradition of Mahāyāna Buddhism with a Study of the Ratnarāśīsūtra and related Materials*. A Dissertation, University of Michigan.
2002 “Possible Indian Sources for the term *tshad ma'i skyes bu as pramāṇa-bhūtapuruṣa*,” *Journal of Indian Philosophy* 30-2: 111-160
2008 *Managing Monks: Administrations and Administrative Roles in Indian Buddhist Monasticism*. Oxford: Oxford University Press.
2008b “Forbidden women: a peculiar Buddhist reference,” in *Aspects of research into Central Asian Buddhism: in memoriam Kōgi Kudara*, ed. Peter Zieme, 371-378, Turnhout: Brepols.

Singh, Bireshwar Prasad

- 1977 “On Atisa’s Itinerary in Tibet,” *Bulletin of Tibetology* 1977-3: 15-19.

Sinha, Nirmal C.

- 1985 “Dharma, Tantra and Atisa,” *Bulletin of Tibetology* 1985-2: 33-48.
1986 “What Constitutes the Importance of Atisa?” *Bulletin of Tibetology* 1996-1: 5-16.

Snellgrove, David L.

- 1959 *The Hevajra Tantra. A Critical Study*. London: Oxford University Press.

Geshe Sonam Rinchen

- 2000 *The Bodhisattva Vow*. Ithaca: Snow Lion Publications.

Sonam, Ruth

1997 *Atisha's Lamp for the Path*. Ithaca: Snow Lion Publications.

1999 *Una Luz en el Camino*. Castellano: Ediciones Dharma.

Sonam Rabten

2000 *Satyadvayāvātārādigranthacatuṣṭa: Four Treatises-Entering into the Two Truths etc. of Ācārya Dīpaṅkaraśrījñāna*. Sarnath: Central Institute of Higher Tibetan Studies.

Sonam Rinchen

1997 *Atisha's Lamp for the Path to Enlightenment*. Ithaca: Snow Lion Publications.

Sorensen, Per K.

1986 *Candrakīrti: Triśaraṇasaptati*. Wien: Arbeitskreis für tibetische und buddhistische Studien Universität Wien.

von Staël-Holstein, Baron A.

1926 *The Kācīyapaparivarta: A Mahāyānasūtra of the Ratnakūṭa Class*. Shanghai: Shangwu Yinshuguan.

Stcherbatsky, Theodore

1929 *Abhisamayālaṅkāra-prajñāpāramitā-upadeśa-sāstra*. St. Petersburg: Imprimerie de l'Académie Impériale des Sciences.

Suzuki, Daisetsu Teitaro, and H. Izumi

1934-36 *The Gaṇḍavyūhasūtra*. Kyoto: The Sanskrit Buddhist Texts Publishing Society.

Takur, Anantlal

1959 *Jñānaśrīmitranibandhāvali*. Patna: K.P. Jayaswal Research Institute.

Tatz, Mark

1985 *Difficult Beginnings*. Boston & London: Shambala.

1986 *Asaṅga's Chapter on Ethics with the Commentary of Tsong-Kha-Pa, The Basic Path to Awakening, The Complete Bodhisattva*. Lewiston: Edwin Mellen Press.

Lama Thubten Kalsang

1974 *Atisha, A Biography of the Renowned Buddhist Sage*. Bangkok: Mahayana Publications.

Thupten Jinpa

2008 *The Book of Kadam*. Boston: Wisdom Publications.

Tola, Fernando

1995 *Nāgārjuna's Refutation of Logic (Nyāya): Vaidalyaprakaraṇa*. Delhi: Motilal Banarsidass.

Tsering Dolkar

2004 *Ācārya Bodhibhadra-Kṛṣṇapāda-Viracitau Samādhisaṃbhāraparivarta*. Sarnath: Central Institute of Higher Tibetan Studies.

Tucci, Giuseppe

1933 *Indo-Tibetica II: Rin c'en bzai po*. Roma: Reale Accademia d'Italia.

1958 *Minor Buddhist Texts, Part II*. Roma: Istituto Italiano per il Medio ed Estremo Oriente.

1971 *Minor Buddhist Texts Part III*. Roma: Istituto Italiano per il Medio ed Estremo Oriente.

Vaidya, P.L.

1960a *Gaṇḍavyūhasūtra*. Darbhanga: Mithila Institute.

1960b *Aṣṭasāhasrikāprajñāpāramitāsūtra*. Darbhanga: Mithila Institute.

1961 *Samādhirājasūtra*. Darbhanga: Mithila Institute.

1964 *Mahāyānasūtrasaṃgraha*, 2 vols. Darbhanga: Mithila Institute.

1998 *Bodhicaryāvatāra of Śāntideva with the Commentary Pañjikā of Prajñākaramati*. 2nd ed. by S.Tripathi, Darbhanga: Mithila Institute.

Vogel, Claus

1965 *Vāgbhaṭa's Aṣṭāṅghrdayasaṃhitā*. Wiesbaden: Otto Harrasowitz.

Vorobyova-Desyatovskaya, M.I.

2002 *The Kāśyapaparivarta Romanized Text and Facsimiles*. Tokyo: International Research Institute for Advanced Buddhology.

Walleser, Max

1914 *Prajñāpradīpa: A Commentary on the Madhyamakasūtra by Bhāvaviveka*. Calcutta: Asiatic Society of Bengal.

Wayman, Alex

1978 *Calming the Mind and Discerning the Real: Buddhist Meditation and the Middle View from the Lam rim chen mo of Tson-kha-pa*. New York: Columbia University Press.

1973 *The Buddhist Tantras: Light on Indo-Tibetan Esotericism*. New York: Samuel Weiser.

1991 *Ethics of Tibet: Bodhisattva Section of Tsong-Kha-Pa's Lam Rim Chen Mo*,

Albany: State University of New York Press.

Willson, Martin

1986 *In Praise of Tara: Songs to the Saviouress*. London: Wisdom Publications.

Wogihara, U and C. Tsuchida

1934 *Saddharmapuṇḍarikasūtra*. Tokyo: The Seigo-Kenkyūkai.

Ye, Shaoyong

2007 “The *Mūlamadhyamakakārikā* and Buddhapālita’s Commentary (1): Romanized Texts Based on the Newly Identified Sanskrit Manuscripts from Tibet,” 『創価大学国際仏教学高等研究所年報』 10: 149-170.

2008 “The *Mūlamadhyamakakārikā* and Buddhapālita’s Commentary (2): Romanized Texts Based on the Newly Identified Sanskrit Manuscripts from Tibet,” 『創価大学国際仏教学高等研究所年報』 11: 105-151.

2011 『《中論頌》与《仏護釈》—基于新發現梵文写本的文献学的研究』 上海: 中西書局

Zhang, Fu-cheng (張福成)

1993 「阿底峽《菩提道燈》内容研究」 『中華佛學學報』 6: 329-347.

Zimmemann, Michael

2002 *A Buddha Within: the Tathāgatagarbhasūtra, the Earliest Exposition of the Buddha-Nature Teaching in India*. Tokyo.

Zorin, Alexabder

2009 *Hymns to Tārā*. Moscow: Otkryty Mir Publishers.

Zysk, Kenneth G.

1984 “(rev.) Atīśa and Tibet by Alaka Chattopadhyaya,” *Journal of the American Oriental Society* 104-4: 783.

浅野守信

1991 「Śikṣāsamuccaya における Ratnameghasūtra の引用」 『印度学仏教学研究』 40-1: 117-121.

東武

1968 「カマラシーラの教学について」 『文化』 31-4: 27-62.

1972 「カマラシーラと密教」 『密教学研究』 4: 138-150.

阿部慈園

1987 「般若経の頭陀支」 『高崎直道博士還暦記念 インド学仏教学論集』 春秋社: 49-60.

- 2001 『頭陀の研究—パーリ仏教を中心として』 春秋社
天野宏英
- 2000 『梵文 現觀莊嚴頌論釈』 平樂寺書店
新井慧誉
- 1972 「薬師経」『仏教文化』4-1: 83-93.
荒牧典俊
- 1974 『大乘仏典 8 十地経』 中央公論社
井内真帆
- 2000 「カダム派の祖ドムトンについて」『橘史学』15: 123-138.
2004 「トゥケン『一切宗義』カダム派の章研究」『大谷大学大学院研究紀要』21:
283-310.
2010a 「ロ寺—初期カダム派寺院の変遷」『大谷大学研究年報』62: 37-77.
2010b 「カラホト出土のカダム派関係写本」『仏教学セミナー』92: 35-47.
井内真帆、吉水千鶴子
- 2011 『西藏仏教宗義研究第9巻—トゥカン『一切宗義』「カダム派の章」—』 東洋
文庫
- 池田澄達
- 1932 『根本中論疏無畏論訳註』 東洋文庫
- 石田貴道
- 2004 「Kṛṣṇapāda の『入菩薩行論』理解について」『駒沢大学仏教学部論集』35: 55-78.
- 磯田熙文
- 1970 「Cittotpāda について」『印度学仏教学研究』19-1: 71-76.
1986 「仏教タントリズムの展開（序）」『日本文化研究所研究報告』22: 113-132.
1989 「pūjā について」『藤田宏達博士還暦記念論集 インド哲学と仏教』 平樂寺書
店: 555-576.
- 一郷正道
- 1985 『中觀莊嚴論の研究』 文栄堂
2011 『瑜伽行中觀派の修道論の解明—『修習次第』の研究—』 京都光華女子大学
- 一島正真
- 1993 「『スートラサムッチャヤ』の法華思想」田賀龍彦編『法華経の受容と展開』
平樂寺書店: 475-499.
2001 「カマラシーラの方便と般若」『石上善應教授古稀記念論文集 仏教文化の基調
と展開』 山喜房仏書林: 15-30.

伊藤秀憲

1975 「和訳 チベット訳 解深密経（四）」『駒澤大学仏教学研究学会年報』9: 1-8.

稲葉正就

1966 「チベット中世初期における般若中観論書の訳出（上）」『仏教学セミナー』4: 15-33.

今西順吉

1986 「kula の概念について」『日本佛教学会年報』51: 541-555.

岩本裕

1975 『仏教経典選書第7巻 密教経典』読売新聞社

字井伯寿

1961 『大乘莊嚴経論研究』岩波書店

植木雅俊

2011 『梵漢和対照・現代語訳維摩経』岩波書店

氏家昭夫

1974 「ネパールの仏教儀礼の紹介—‘Gurumaṅḍalārcana-pūjā’について—」『密教文化』105: 72-96.

瓜生津隆真

1974 「勸誡王頌（友人への手紙）」「宝行王正論」『大乘仏典 14 龍樹論集』中央公論社

1985 『ナーガールジュナ研究』春秋社

瓜生津隆真、中沢中

2012 『全訳チャンドラキールティ 入中論』起心書房

江島恵教

1966 「『入菩薩行論』の注釈文献について」『印度学仏教学研究』14-2: 190-194.

1970 「Atīśa の無自性論証」『印度学仏教学研究』19-1: 39-45.

1980 『中観思想の展開』春秋社

1983 「アティージャの二真理説」壬生台舜編『龍樹教学の研究』大藏出版: 359-391.

2003 『空と中観』春秋社

遠藤祐純

1981 「Atīśa その世界一戒律を中心として」『勝又俊教博士古希記念論集 大乘仏教から密教へ』春秋社: 673-689.

1982 「十善業道について」『智山学報』31: 1-12.

1984 「タントラの分類について」『牧尾良海博士頌寿記念論集 中国の宗教・思想

と科学』国書刊行会: 81-91.

1987 「金剛頂経における戒について」『智山学報』36: 1-14.

大鹿實秋

1970 “Tibetan Text of Vimalakīrtinirdeśa,” *Acta Indologica* I: 1-103.

1998 『維摩経の研究』平楽寺書店

大竹晋

2009 『新国訳大蔵経积経論部一九 能断金剛般若波羅蜜多経論积他』大蔵出版

大塚伸夫

2001 『蘇婆呼童子請問経』に見られる初期密教修行者像について『密教学研究』33: 37-74.

大南龍昇

1984 「チベット訳ナーガールジュナ造『聖稲竿経頌』・和訳」『長谷川仏教文化研究所年報』11: 1-18.

1989 「チベット語訳稲竿経広疏・広釈和訳(II)」『長谷川仏教文化研究所年報』17: 59-89.

1990 「チベット語訳稲竿経『広疏』・『広釈』和訳(III)」『三康文化研究所年報』22: 91-125.

1991 「チベット語訳稲竿経『広疏』・『広釈』和訳(IV)」『長谷川仏教文化研究所年報』18: 53-85.

1992 「チベット語訳稲竿経『広疏』・『広釈』和訳(V)」『長谷川仏教文化研究所年報』19: 55-112.

大八木隆祥

2001 「Vimalamitra 造 *Prajñāpāramitā-hṛdaya-ṭikā* 和訳研究(1)」『豊山教学大会紀要』29: 1-23

2002 「Vimalamitra 造『聖般若波羅蜜多心広疏』研究序説—真偽問題・成立背景・依用の『心経』テキストについて—」『智山学報』51: 153-175.

2002b 「Vimalamitra 造『聖般若波羅蜜多心広疏』に見られる『大日経』『密教文化』208: 21-39.

2003 「『般若心経』Śrīsimha・Vairocana 註に見られる密教思想について」『印度学仏教学研究』51-2: 115-117.

2007 「『般若心経』の修道論的解釈(1)～『般若心経』Kamalaśīla 註の修道論的解釈」『豊山教学大会紀要』35: 5-7.

2009 「Vimalamitra 造 *Prajñāpāramitā-hṛdaya-ṭikā* 和訳研究(2)」『仏教文化学会紀要』

18: 24-36.

小川一乗

1975 「月称造『三帰依七十』管見一中観説における信仰の問題一」『印度学仏教学研究』24-1: 213-216.

1976 『空性思想の研究』文栄堂

荻原雲来

1971a 『梵文菩薩地経』(repr.) 山喜房佛書林

1971b 『梵文俱舍論疏』(repr.) 山喜房佛書林

1973 『梵文現観莊嚴論より見たる般若波羅蜜多釋』(repr.) 山喜房佛書林

奥住毅

1983 『中論註釈書の研究 チャンドラキールティ 『プラサンナバダー』和訳』大蔵出版

越智淳仁

1992 「新校訂チベット文『大日経』」『高野山大学論叢』27: 25-53.

小野妙子

2001 「菩提道灯論細疏における菩薩戒について」『仏教大学大学院紀要』29: 25-38.

小野田俊蔵 (Onoda, Shunzo)

1983 *rJe btsun pa'i Don bdun cu*. Nagoya: The Association of Indian and Buddhist Studies, Nagoya University.

梶山雄一

1983 「般若思想の形成」『講座大乘仏教2 般若思想』春秋社: 1-86.

1989 *Studies in Buddhist Philosophy: Selected Papers*. Kyoto: Rinsen Bool co., Ltd.

1994 『悟りへの遍歴 華嚴経入法界品 上・下』中央公論社

梶山雄一、丹治昭義

1974 『大乘仏典第8巻 八千頌般若経 I』中央公論社

柏木弘雄

1981 『大乘起信論の研究』春秋社

春日井真也

1980 『インド仏教文化の研究』百華苑

金倉圓照

1965 『悟りへの道』平楽寺書店

金倉圓照、山田龍城、多田等観、羽田野伯猷

1953 『西藏撰述仏典目録』東北大学印度学研究会

加納和雄

- 2006 *rNgog blo-ldan-shes-rab's Summary of the Ratnagotravibhāga: The First Tibetan Commentary on a Critical Source for the Buddha-nature Doctrine. Dissertation Thesis submitted to Hamburg University.*
- 2007 「ゴク・ロデンシェーラブ著『書翰・甘露の滴』一校訂テキストと内容概観一」『高野山大学密教文化研究所紀要』20: 1-58.
- 2009 「ゴク・ロデンシェーラブ著『書翰・甘露の滴』一訳注編一」『高野山大学密教文化研究所紀要』20: 121-178.
- 2012 「アティシャに由来するレティン寺旧蔵の梵文写本—1934年のチベットにおける梵文調査を起点として」『インド論理学研究』4: 123-161.

川越英真

- 1981 「Rin chen bzañ po 伝研究」『印度学仏教学研究』30-1: 31-36.
- 1982 「Rin chen bzañ po の生涯とその活動」『文化』46-1/2: 44-43.
- 1984 「rNog blo ldan shes rab と彼をめぐる人々」『印度学仏教学研究』32-2: 114-118.
- 1993 「Dīpaṃkara-rakṣita について」『知の邂逅：仏教と科学 塚本啓祥教授還暦記念論文集』校成出版社: 455-471.
- 2000 「Nag tso Lo tsā ba について」『東北福祉大学研究紀要』25: 293-316.
- 2001 「Nag tso Lo tsā ba について(2)」『東北福祉大学研究紀要』25: 275-295.
- 2002 「Rin chen bzañ po 伝の伝承の様相」『東北福祉大学研究紀要』27: 193-218.

川崎信定

- 1992 『一切智思想の研究』春秋社

荻谷定彦

- 1972 「法華経安楽行品の『四法』について」『印度学仏教学研究』20-2: 331-335.
- 1982 「法華経安楽行品の夢」『桂林学叢』11: 166-183.

岸根敏幸

- 2001a 「『プラサンナパダー』第24章「聖なる真理の考察」校訂テキスト(1)」『福岡大学人文論叢』33-2: 1003-1024.
- 2001b 「『プラサンナパダー』第24章「聖なる真理の考察」校訂テキスト(2)」『福岡大学人文論叢』33-3: 1761-1782.
- 2001c 「『中観への入門』和訳研究(1)」『福岡大学人文論叢』33-1: 259-275.
- 2002 「『プラサンナパダー』第24章「聖なる真理の考察」校訂テキスト(3)」『福岡大学人文論叢』34-1: 197-232.

北村太道

- 2001 「チベット所伝毘沙門天の研究(4)—プトン著作の毘沙門天儀軌—」『密教資料研究所紀要』4: 1-17.
- 2001b 「チベット所伝毘沙門天の研究(5)—プトン著作の毘沙門天儀軌—」『密教資料研究所紀要』4: 19-41.
- 北村太道、タントラ仏教研究会
- 2012 『全訳 金剛頂大秘密瑜伽タントラ』起心書房
- 2014 『全訳 降三世大儀軌王／同ムディタコーシャ註釈』起心書房
- 北村太道、ツルティム・ケサン
- 1994 『ガワン・パルデン著 大秘密四タントラ概論』永田文昌堂
- 1995 『ツォンカパ著吉祥秘密集会成就法清浄瑜伽次第』永田文昌堂
- 紀野一義
- 1962 『法華経の探究』平楽寺書店
- 木村泰賢
- 1968 『木村泰賢全集第4巻 阿毘達磨論の研究』大法輪閣
- 木村高尉
- 1992 「『梵字貴重資料集成』にみる十万頌般若」『真野龍海博士頻寿記念論文集 般若波羅費多思想論集』山喜房仏書林: 145-168.
- 清田寂雲
- 1970 「Çikṣāsamuccaya における法華経の引用文」『印度学仏教学研究』19-1: 217-220
- 久保継成
- 1968 「法華経にみられる戒律的要素」『印度学仏教学研究』28-2, 1968: 50-52
- 1987 『法華経菩薩思想の研究』春秋社
- 久留宮圓秀
- 1978 『梵文宝星陀羅尼経』平楽寺書店
- 1979 『蔵訳宝星陀羅尼経』平楽寺書店
- クンチョック・シタル
- 1999 「チベットにおける四種タントラの認識」『シリーズ密教2 チベット密教』春秋社: 110-120.
- 2000 「プトンによる四種タントラの解釈について」『大正大学総合仏教研究所年報』22: 157-174.
- クンチョック・シタル、ソナム・ギャルツェン・ゴンタ、齋藤保高
- 1995 『実践チベット仏教入門』春秋社
- 現銀谷史明、野村正次郎

1996 “Byang chub lam gyi rim pa chen mo'i 'khrid kyi sa bcad,” in: *Basic Studies for Tibetan Buddhism Vol1, The Collected Sa-bcad of rJe yab sras gsungs 'bum (1)*, Tokyo: Toyo Bunko.

五島清隆

1983 『チベット訳・修習次第・中篇』五島清隆

小玉大圓

1967 「ラムリムタルゲンについて」『日本西蔵学会会報』14: 1-2.

1969 「チベットにおける成律の伝統について」『仏教大学研究紀要』53: 79-120.

小林守

1990 「後期中観派」塚本啓祥・松長有慶・磯田熙文編『梵語仏典の研究 III 論書篇』平楽寺書店: 250-311.

1991 「Ācārya dPaṅ bo 作『勝義菩提心修習次第書』蔵訳テキスト」『インド思想における人間観』平楽寺書店: 179-200.

1992a 「カマラシーラの離一多論証一『中観明』試訳(上)一」『論集』13: 19-37.

1992b 「カマラシーラの離一多論証一『中観明』試訳(下)」『文化』53-1/2: 95-103.

1992c 「シュリーグプタ作『真実への悟入』一和訳研究(上)一」『論集』19: 37-56.

1994 「シュリーグプタ作『真実への悟入』」『密教文化』185: 99-80.

近藤隆晃

1936 『梵文大方広仏華嚴経十地品』大乘仏教研究会

三枝充憲

1971 『般若経の真理』春秋社

1985 『中論偈頌総覧』第三文明社

1987 『インド仏教人名辞典』法蔵館

斎藤明

1986 「敦煌出土アクシャヤマティ作『入菩薩行論』とその周辺」山口瑞鳳監修『チベットの仏教と社会』春秋社: 79-109.

1989 「一乗と三乗」『岩波講座 東洋思想第10巻 インド仏教3』岩波書店: 46-74.

1993 *A Study of Akṣayamati (=Śāntideva)'s Bodhisattvacaryāvatāra As Found in the Tibetan Manuscripts from Tun-huang.* Mie.

1994 「『入菩薩行論』の謎と諸問題」『東方学』87: 147-136.

1996 “Śāntideva in the history of Madhyamika Philosophy,” in: *Abroad: An Integrating Influence in Vedic and Post Vedic Perspective*, ed. K. Sankaranarayan, M. Yoritomi, S.S. Joshi, 257-263, Mumbai: Somaiya Publications.

- 2000 *A Study of the Dung-huang Recension of the Bodhisattvacryāvātāra*. Mie.
- 2002 「アクシャヤマティとシャーンティデーヴァ」『木村清孝博士還暦記念論集 東アジア仏教』春秋社: 533-552.
- 2003a 「セルリンパが伝承する『入菩提行論の要義』とその思想」『阿部慈園博士追悼論集 仏教の修行法』春秋社: 372-406.
- 2003b 「セルリンパの秘説「11の主要義」とは何か」『日本西蔵学会会報』49: 3-12.
- 2010 “An Inquiry into the Relationship between the *Śikṣāsamuccaya* and the *Bodhi(sattva)cryāvātāra*,” 『インド哲学仏教学研究』17: 17-24.

酒井真典

- 1956 『修訂増補 チベット密教教理の研究 (一)』国書刊行会
- 1959 「龍樹に帰せられる讃歌」『日本仏教学会年報』24: 1-44.

佐久間秀範

- 1982 「五法と三身の結び付き—仏地経論を中心として—」『印度学仏教学研究』31-1: 124-125.
- 1984 「〈智〉と〈識〉」『豊山学報』28/29: 125-141.
- 1987 「〈三身〉と〈五法〉—両者の結合関係とその成立過程—」『高崎直道博士古稀記念論集 インド学仏教学論集』春秋社: 387-411.
- 1991 「『現観莊嚴論』第八章をめぐるインド諸注釈家の分類」『四天王寺国際仏教大学文学部紀要』24: 1-30.

桜井宗信

- 2004 「Atīśaの説く〈観想上の灌頂〉: Abhisamayavibhangaを中心に」『印度学仏教学研究』53-1: 147-153.
- 1996 『インド密教儀礼研究』法蔵館

桜部建

- 1969 『俱舍論の研究 界・根品』法蔵館
- 1974 「護国尊者所問経」「郁伽長者所問経」『大乘仏典9 宝積部経典』中央公論社
- 1996 『俱舍論』大蔵出版

桜部建、小谷信千代

- 1999 『俱舍論の原典解明 賢聖品』法蔵館

佐々木教悟

- 1977 「戒学研究序説—十不善業道を中心にして—」『大谷大学研究年報』30: 1-48.

佐々木現順

- 1958 『解脱道論 : 頭陀品チベット校訂本文並びに訳註』法蔵館

- 1980 『業の思想』 第三文明社
- 1990 『業論の研究』 法蔵館
- 佐々木閑
- 1999 『出家とは何か』 大蔵出版
- 佐藤密雄
- 1963 『原始仏教教団の研究』 山喜佛書林
- 定方晟
- 1990 「仏教の地獄説」 坂本要編『地獄の思想』 北辰堂: 144-177.
- 佐野靖夫
- 1988 「大乘教典における星辰信仰」『立正大学大学院年報』 15: 107-137.
- 静春樹
- 2009 「クリシュナ阿闍梨のガナチャクラ儀軌」『密教文化』 222: 108-73.
- 2012 「金剛乗の比丘アティシャと秘密・般若智慧灌頂禁止の問題」『印度学仏教学研究』 61-1: 107-112.
- 2013 「アティシャと金剛乗の行」『印度学仏教学研究』 62-1: 102-107.
- 2015a 『ガナチャクラと金剛乗』 起心書房
- 2015b 「マイトリパの僧院追放とアティシャ」『高野山大学密教文化研究所紀要』 28: 148-127.
- 2015c “Expulsion of Maitri-pa from the Monastery and Atiśa’s Participation,” 『印度学仏教学研究』 63-3: 221-227.
- 篠田正成
- 1987 「阿毘達磨雜集論における修行道」『筑紫女学園短期大学紀要』 22: 1-15.
- 1988 「雜集論・中辺分別論・莊嚴經論における三十七菩提分法について」『筑紫女学園短期大学紀要』 23: 1-16.
- 声聞地研究会
- 1998 『瑜伽論 声聞地 第一瑜伽処』 山書房佛書林
- 2007 『瑜伽論 声聞地 第二瑜伽処』 山書房佛書林
- 白寄顕成
- 1988 「Jitāri の菩薩過犯懺悔註菩薩学次第(1)」『神戸女子大学紀要』 21-1: 129-168.
- 1989 「Nāgārjuna の菩薩過犯懺悔註」『教育諸学研究論文集』 3: 91-125.
- 1989b 「Jitāri の菩薩過犯懺悔註菩薩学次第(2)」『神戸女子大学紀要』 22-1: 95-121.
- 1990a 「Jitāri の *Bodhicittotpādasamādānavidhi* (1)」『神戸女子大学紀要』 23-1: 36-56.
- 1990b 「Jitāri の菩薩過犯懺悔註菩薩学次第(3)」『神戸女子大学紀要』 24L: 221-245.

- 1990c 「Jitāri の *Bodhicittotpādasamādānavidhi* (2)」『教育諸学研究』4: 61-89.
- 1991 「Nāgārjuna の『菩薩過犯懺悔註』研究(2)」『教育諸学研究論文集』5: 55-88
- 榛葉元水
- 1932 『般若心経大成』代々木書院
- 1938 『西藏文般若心経註釈全集』相模書房
- 善波周
- 1952 「摩登伽経の天文暦数について」『三教授頌寿記念 東洋学論叢』仏教大学: 171-213
- 1956 「仏典の天文暦法について」『印度学仏教学研究』4-1: 18-27.
- 1957 「大集経の天文記事」『日本仏教学会年報』22: 101-116
- 1960 「インドの古暦と仏教天文暦」『中野教授古希記念論文集』中野教授古希記念会: 201-218.
- 1968 「宿曜経の研究」『仏教大学大学院紀要』1: 1-27
- 副島正光
- 1980 『般若経典の基礎的研究』春秋社
- 相馬一意
- 1987 「梵文和訳「菩薩地」(2)」『仏教研究』43: 20-43.
- 高井観海
- 1978 『改訂増補 小乗仏教概論』山喜房佛書林
- 高崎直道
- 1974 『如来蔵思想の形成』春秋社
- 1977 「菩提道灯論」『新・仏教解題事典 (第2版)』春秋社: 160.
- 1989 『宝性論』講談社
- 1989 『如来蔵思想 II』法蔵館
- 高橋尚夫
- 1992 「アーディカルマプラディーパ『初行のしるべ』和訳」『興教大師覚鑿研究: 興教大師八百五十年御遠忌記念論集』春秋社: 551-589.
- 1993 「*Ādikarmapradīpa* 梵文校訂—東京大学写本による—」『宮坂宥勝博士古稀記念論文集 インド学・仏教学研究』法蔵館: 129-156.
- 2001 「七種供養の文について」『石上善應教授古希記念論文集 仏教文化の基調と展開』山喜房仏書林: 137-164.
- 高橋尚夫、西野翠
- 2011 『梵文和訳維摩経』春秋社

武邑尚邦

1995 『インド仏教教学』法蔵館

田久保周誉

1972 『梵文孔雀明王経』山喜房佛書林

1975 『燉煌出土于闐語秘密經典集の研究』春秋社

拇尾祥雲

1985 『理趣経の研究』臨川書店

立川武蔵

1973 「チベット資料にみられる中観ブラーサンギカ派の系譜」『アジア文化』10: 66-74.

1986 「金剛ターラーの観想法」『論叢仏教美術史』吉川弘文堂: 65-98.

1987 『西藏仏教宗義研究第五巻 トゥカン『一切宗義』カギユ派の章』東洋文庫

1989 「カギユ派」『岩波講座・東洋思想第11巻 チベット仏教』岩波書店: 172-189.

1994 『中論の思想』法蔵館.

立花孝全

1968 「Atīśa における大悲および浄戒」『印度学仏教学研究』16-2: 325-331.

田中公明

2001 『チベット密教・成就の秘法』大法輪閣

2007 「『金剛場莊嚴タントラ』の成立とインド密教史上における位置」『東洋文化研究所紀要』152: 209-228.

谷口富士夫

1992 “Quotations from the First *Bhāvanākrama* of Kamalaśīla Found in Some Indian Texts,” in *Tibetan Studies: Proceedings of the 5th Seminar of the International Association of Tibetan Studies NARITA 1989*, Vol. 1, 303-307, Narita: Naritasan Shinshoji.

1993 『西藏仏教宗義研究第六巻—トゥカン『一切宗義』チョナン派の章—』東洋文庫

2002 『現観体験の研究』山喜房佛書林

田村智淳、一郷正道

1975 『大乘仏典 10-11 三昧王経 I・II』中央公論社

丹治昭義

1988 『中論釈 明らかなことば I』関西大学出版部

塚本啓祥

- 1966 『初期仏教教団史の研究』 山喜房佛書林
- 1989 塚本啓祥・松長有慶・磯田熙文編著『梵語仏典の研究 IV 密教經典篇』 平楽寺書店.
- 津田明雅
- 2006 『Catuḥstava とナーガールジュナ：諸著作の真偽性』 学位論文（京都大学）
- 2011 「*Sattvārādhana*stava について」 *Acta Tibetica et Buddhica* 4: 73-108.
- 津田真一
- 1995 『和訳 金剛頂経』 東京美術
- ツルティム・ケサン
- 2001a 『尊者ツォンカパの『菩提道灯論』』 西藏仏教文化協会
- 2001b 「『中観ウパデーシャ』のヴァスバンドウ二人説とアティーシャの中観の見解」『印度学仏教学研究』 50-1: 223-229.
- 2004 『尊者ツォンカパの『菩提道灯論』上巻』 西藏仏教文化協会
- 2005c 「カダム派・ゲルク派の隆盛と道次第の修行について」『印度学仏教学研究』 53-2: 180-187.
- ツルティム・ケサン、小谷信千代
- 1991 『仏教瑜伽行思想の研究』 文栄堂
- ツルティム・ケサン、高田順仁
- 1996 『ツォンカパ 中観哲学の研究 I』 文栄堂
- ツルティム・ケサン、藤仲孝司
- 2005a 『チベット仏教の原典『菩提道次第論』 悟りへの階梯』 UNIO
- 2005b 『ツォンカパ 菩提道次第大論の研究』 文栄堂
- 2007 『チベット仏教成就者たちの聖典『道次第・解脱莊嚴』 解脱の宝飾』 UNIO
- 2014 『ツォンカパ 菩提道次第大論の研究 II』 UNIO
- 寺本婉雅
- 1928 『ターラナータ印度仏教史』 丙午出版社
- 1938 寺本婉雅・平松友嗣『藏漢和三訳対校異部宗輪論・異部宗精釈・異部説集』 黙働社
- 1974 『梵漢独対校・西藏文和訳中論無畏疏』 国書刊行会
- 常盤義伸
- 1994 『ランカーに入る一梵文入伽経の本文全訳と研究一』 二巻, 花園大学研究報告 第二冊
- 戸崎宏正

- 1973 「善勇猛般若経」『大乘仏典 1 般若部経典』中央公論社
長尾雅人
- 1954 『西藏仏教研究』岩波書店
- 1964 *Madhyāntavibhāga-bhāṣya: A Buddhist Philosophical Treatise edited for the first time from a Sanskrit Manuscript*, Tokyo: Suzuki Research Foundation.
- 1974 「維摩経」『大乘仏典 7 維摩経・首楞嚴三昧経』中央公論社
- 1976 「中辺分別論」『大乘仏典 15 世親論集』中央公論社
- 1982 『撰大乘論 上』講談社
- 長尾雅人、桜部建
- 1974 「迦葉品（カーシャパの章）」『大乘仏典 9 宝積部経典』中央公論社
- 長島潤道
- 2004 “The Distinction between svātantrika and prāsaṅgika in late Madhyamaka: Atiśa and Bhavya as prāsaṅgikas”, *Nagoya Studies in Indian Culture and Buddhism: Saṃbhāṣā* 24: 65-98.
- 2007 「後期中観派における帰謬派の系譜」『松濤誠達先生古稀記念 梵文学研究論集』大祥書籍: 377-402.
- 中御門敬教
- 2005 「阿弥陀仏信仰の展開を支えた仏典の研究(1)陳那、釈友、智軍の〈普賢行願讃〉理解—七支供養の章（1-7章）」『浄土宗学研究』32: 1-60.
- 2008 「世親作『仏随念広註』和訳研究—前半部分・仏十号に基づく三乗共通の念仏観—」『仏教大学総合研究所紀要』15: 105-130.
- 2010 「無着作『仏随念註』と『法随念註』和訳研究」『仏教大学総合研究所紀要』17: 67-92.
- 中村薫
- 1978 「華嚴経に於ける魔について」『印度学仏教学研究』27-1: 124-125.
- 那須真裕美
- 1999 「*Prajñāpradīpa-ṭīkā* 第 24 章の試訳」『龍谷大学大学院紀要人文科学』21: 16-33.
- 2000 「*Prajñāpradīpa-ṭīkā* 第 24 章の試訳(2)」『龍谷大学大学院紀要人文科学』22: 1-19.
- 生井智紹
- 1996 『輪廻の論証』東方出版
- 2008 『密教・自心の探究—『菩提心論』を読む』大法輪閣
- 奈良康明
- 1985 「サラハパーダ作ドーハー・コーシャ(翻訳および研究ノート)(I)」『駒沢大学

研究紀要』 24: 13-33.

南條文雄

1926 『梵文入楞伽經』 大谷大学

西岡祖秀

1980 「『プトゥン仏教史』 目録部索引 I」 『東京大学文学部文化交流研究施設研究紀要』 4: 61-92.

1983 「『プトゥン仏教史』 目提部索引 III」 『東京大学文学部文化交流施設研究紀要』 6: 47-201.

西沢史仁

2011 「サンプ寺の帰属問題—サンプ寺はカダム派所属の寺院であるのか」 『真宗総合研究所研究紀要』 30: 33-52

2012 「サンプ教学の歴史的展開に関する一考察」 『日本西藏学会会報』 58: 1-14.

西山亮

2012 「*Prajñāpradīpa-ṭīkā* 第一章和訳(2)」 『龍谷大学佛教学研究室年報』 16: 23-41.

二本柳賢司

1994 『佛教医学概要』 法蔵館

能仁正顕

1992 「『知意のともしび』 第 1 章の和訳(1)」 『仏教と福祉の研究』 永田文昌堂: 45-66.

1992b 「『知恵のともしび』 第 1 章の和訳(2)」 『仏教学研究』 52: 85-103.

2002 「『知意のともしび』 第 1 章の和訳(3)」 『仏教学研究』 56: 70-93.

野口圭也

1987 「*Indrabūti* の *sahaja* 説」 『豊山教学大会紀要』 15: 25-43.

野沢静証

1954 「徳慧・提婆設摩の中論疏の残簡」 『印度学仏教学研究』 2-2: 90-95.

1957 『大乘佛教瑜伽行の研究』 法蔵館

袴谷憲昭

1987 「業」 早島鏡正監修 『仏教・インド思想辞典』 春秋社: 112-118.

1989a 「チベットにおけるインド仏教の継承」 『岩波講座 東洋思想 第 11 巻 チベット仏教』 岩波書店: 119-151.

1989b 「チョナン派と如来蔵思想」 『岩波講座 東洋思想 第 11 巻 チベット仏教』 岩波書店: 191-211.

1994 『唯識の解釈学 『解深密経』 を読む』 春秋社

2002 『仏教教団史論』 大蔵出版

長谷岡一也

1983 「善財童子の遍歴」『講座大乘仏教 3 華嚴思想』春秋社: 121-150.

羽田野伯猷

1954 「カーダム派史」『東北大学文学部研究年報』5: 286-182.

1955 「カーダム派 (Bkha'-gdams-pa)について」『印度学仏教学研究』3-2: 252-258.

1956 「カムの仏教とそのカーダム派並びに衛蔵の仏教に与えた影響について」『文化』21-5: 719-697.

1959 「密教者としてのアティーシャ」『宗教研究』160: 14-52.

1960 「菩提心法者としてのアティーシャ」『中野教授古稀記念論文集』中野教授古稀記念会: 145-163.

1965a 「衛へのアティーシャ招請」『高野山開創千百五十年記念密教学密教史論文集』高野山大学: 411-428.

1965b 「チベットにおける仏教観の形成について」『文化』29-2.

1966 「アティーシャおぼえ書」『金倉博士古希記念 印度学仏教学論集』平楽寺書店: 439-460.

1986 『チベット・インド学集成』Vol. 1. 法蔵館

1987 『チベット・インド学集成』Vol. 3. 法蔵館

八田幸雄

1985 『真言事典』平河出版社

服部正明

1961 「ディグナーガの般若経解釈」『大阪府立大学紀要』9: 119-136.

林純教

1994 『蔵文和訳般舟三昧経』大東出版社

早島理

1985 「経律論一MAHĀYĀNASŪTRĀLAMKĀRA 第 XI 章第 1~4 偈一」『長崎大学教育学部社会科学論叢』34: 27-46.

1987 「『讚法界頌』考 (On the Dharmadhātustava)」『長崎大学教育学部社会科学論叢』36: 41-90.

早島鏡正

1964 『初期仏教の社会と生活』岩波書店

原実

1974 『大乘仏典 13 ブッダチャリタ』中央公論社

1987 「Garbha 研究」『高崎直道博士還暦記念論集 インド学仏教学論集』春秋社:

23-38.

干潟龍祥

1958 *Suvikrantavikrāmi-Paripṛcchā Prajñāpāramitā-Sūtra*. Fukuoka: Kyushu University.

干潟龍祥、高原信一

1990 『ジャータカ・マーラー 〈本生談の花鬘〉』講談社

兵藤一夫

1991 「セラジェーツウンパ『現観莊嚴論八句義七十義決択』和訳(1)『仏教学セミナー』69: 1-23.

2000 『般若経釈現観莊嚴論の研究』文栄堂

平川彰

1964 『原始仏教の研究』春秋社

1970 『律蔵の研究』山喜房仏書林

1973 『俱舎論索引 I』大蔵出版

1989 『平川彰著作集第4巻 初期大乘仏教の研究 II』春秋社

1993 『平川彰著作集第14巻 二百五十戒の研究 I』春秋社

福田洋一

1988 「アティシヤ」『岩波 哲学・思想事典』岩波書店: 21.

2008 『聖ツォンカパ伝』大東出版社

福原亮徹

1982 『業論』永田文昌堂

藤井教公

1992 『法華経下』大蔵出版

藤田光寛

1983a 「『菩薩律儀二十』について」『中川善教先生頌徳記念論集 仏教と文化』同朋舎: 255-280.

1983b 「Byañ chub bzañ po 著『菩薩律儀儀軌』について」『密教文化』141: 100-87.

1983c 「チベットにおける菩薩戒の受容の一断面」『印度学仏教学研究』36-2: 108-115.

1989 「〈菩薩地戒品〉和訳(I)」『高野山大学論業』24: 31-51.

1991a 「〈菩薩地戒品〉和訳(III)」『高野山大学論叢』26: 21-30.

1991b 同「〈菩薩地戒品〉の受戒法」『東北大学印度学講座六十五周年記念論集 インド思想における人間観』平楽寺書店, 1991: 133-158.

2000 「菩薩戒の受戒儀軌—Nāgārjuna 著〈発菩提心儀軌〉と Bodhibhadra 著〈菩薩

律儀儀軌〉を中心として一」『高木神元博士古希記念論文集 仏教文化の諸相』
山喜房佛書林, 2000: 237-249.

2001 「インド・チベット仏教における大乘の菩薩戒：無著流と寂天流」『密教学研究』33: 1-17.

2002 「Candragomin 著〈菩薩律儀二十〉とその注釈2種一校訂テキスト」『高野山大学密教文化研究所紀要』15: 1-131.

2003 「Śāntarakṣita 著〈菩薩律儀二十〉について」『高野山大学密教文化研究所紀要』15: 192-174.

2013 『はじめての「密教の戒律」入門』セルバ出版

伏見英俊

2010 「カダム派」沖本克己編『新アジア仏教史 09 チベット 須弥山の仏教世界』
佼成出版社: 146-159.

舟橋一哉

1954 『業の研究』法蔵館

1987 『俱舍論の原典解明 業品』法蔵館

舟橋尚哉

1985 『ネパール写本対照による大乘莊嚴經論の研究』国書刊行会

古坂絃一

2001 「『般若灯論広註』に見る『灯論』著作の動機と意義」『密教文化』207: 1-22.

北条賢三

1981 「十不善業道の源流とその展開」『勝又俊教博士古希記念論集 大乘仏教から
密教へ』春秋社: 166-184.

阿理生

1985 「ekajātipratibhidha—いわゆる一生補処について」『印度学仏教学研究』43-2:
198-204.

堀内寛仁

1968 「初会金剛頂經発本ローマ字本（一）」『高野山大学論叢』3: 19-118.

1974 『梵蔵漢対照初会金剛頂經の研究 梵文校訂篇』密教文化研究所

梵語佛典研究会（大正大学総合佛教研究所）

2004 『梵蔵漢対照『維摩経』『智光明莊嚴経』』大正大学出版会

2006 『梵文維摩経—ポタラ宮所蔵写本に基づく校訂』大正大学出版会

本庄良文

1984 『俱舍論所依阿含全表』京都

- 1987 「馬鳴詩のなかの経量部説」『印度学仏教学研究』36-1: 87-92.
- 2014 『俱舍論註ウパーイカーの研究 訳註篇』（上下）大蔵出版
- 前田崇
- 1976 「《mūlakalpa》五十三章と Bu-ston 《Chos-'byun》」『天台学報』18: 126-132.
- 1977 「《Mañjuśrīmūlakalpa》53 章蔵梵固有名詞索引」『大正大学大学院論集』1: 1-22.
- 牧達玄
- 1981 「八寒大地獄をめぐる諸問題」『京都文教短期大学研究紀要』20: 8-20
- 1982-91 「十六小地獄をめぐる諸問題(1)-(10)」『京都文教短期大学研究紀要』21: 8-15, 22: 9-19, 23: 19-36, 24: 7-16, 25: 1-11, 26: 1-8, 27: 1-8, 28: 9-16, 29: 1-9, 30: 71-78.
- 松下了宗
- 1984 「ジュニャーナガルヴァの二諦分別論—和訳研究（上）—」『龍谷大学大学院紀要』5: 27-49.
- 1985 「ジュニャーナガルヴァの二諦分別論—和訳研究（下）—」『龍谷大学大学院紀要』5: 27-53.
- 松田和信
- 1982 「梵分断片 Lokaprajñapti について」『仏教学』14: 1-21.
- 松田真道
- 1981 「執事人 veyyāvacchakara と守園人 ārāmika」『印度学仏教学研究』30-1: 124-125.
- 松田慎也
- 1997 「大集部」勝崎裕彦他編著『大乘経典解説辞典』北辰堂: 171-194.
- 松長有慶
- 1978 『秘密集会タントラ校訂梵本』東方出版
- 1998 『松長有慶著作集第5巻 秘密集会タントラの研究』法蔵館
- 松村巧
- 1990 「『世起経』地獄品・訳注」坂本要編『地獄の思想』北辰堂: 57-96.
- 松村恒
- 1982a 「薬師経の諸伝本（一）」『仏教学』132: 73-103
- 1982b 「薬師経の諸伝本（二）」『四天王寺国際仏教大学文学部紀要』15: 95-112.
- 1983a “Recensions of the Bhaiṣajyagurusūtra (3),” 『四天王寺国際仏教大学文学部紀要』16: 175-196.
- 1983b 「ギルギット所伝の密教図像文献」『密教図像』2: 71-79.
- 松本史朗

- 1987a 「アティーシャ」三枝充恵編『インド仏教人名辞典』法蔵館: 14-16.
- 1987b 「ボーディバドラ」三枝充恵編『インド仏教人名辞典』法蔵館: 235-236.
- 1988 「アティーシャ」古田紹欽編『仏教大事典』小学館: 13.
- 1989 『縁起と空』大蔵出版
- 1997 『チベット仏教哲学』大蔵出版
- 真野龍海
- 1972 『現観莊嚴論の研究』山喜房仏書林
- 水野弘元
- 1981 『法句経の研究』春秋社
- 1996 『水野弘元著作選集第一巻 仏教文献研究』春秋社
- 光川豊藝
- 1972 「清弁の『般若灯論』にみられる提婆設摩論師への所見」『龍谷大学仏教文化
密教聖典研究会
- 1988 「アドヴァヤヴァジュラ著作集—梵文テキスト・和訳(1)—」『大正大学総合佛
教研究所年報』10: 1-57.
- 1997 『不空羼索神変真言経梵文写本影印版』大正大学総合仏教研究所
- 蜜波羅鳳洲
- 2004 『宝聚経 梵蔵漢和対照』山喜房仏書林
- 三友健容
- 2007 『アビダルマディーパの研究』平楽寺書店
- Mimaki, Katsumi (御牧克己)
- 1976 *La Refutation Bouddhique de la Permanence des Choses (Sthirasiddhidūṣaṇa) et
la Preuve de la Memontaneite des Ckoses (Kṣaṇabhaṅgasiddhi)*. Paris: Institut de
Civilization Indienne.
- 1982 *Blo gsal grub mtha'*. Kyoto: Zimbun Kagaku Kenkyusho, Universire de Kyoto.
- Mimaki, Katsumi and Toru Tomabechi (御牧克己、苔米地等流)
- 1994 *Pañcakrama: Sanskrit and Tibetan Texts Critically Edited with Verse Index and
Facsimile Edition of the Sanskrit Manuscripts*. Tokyo: The Centre for East Asian
Cultural Studies for Unesco.
- 三宅伸一郎
- 1998 「ランリタンパの伝説」『大谷大学大学院研究紀要』15: 79-98.
- 宮崎泉
- 1993 「『中観優婆提舍開宝篋』について」『仏教史学』36-1: 1-31.

- 1995 「Atiśa の菩提心説の一考察」『印度学仏教学研究』 43-2: 195-197.
- 1999 「菩薩戒受戒儀式の一断面—アティシャの『儀軌次第』」『日本仏教学会年報』 65: 93-106.
- 2002 「アティシャと戒律」『印度学仏教学研究』 50-2.
- 2003 「アティシャの家族に関する記述について—『中観優波提舍開宝篋』と『菩提心釈』の引用をめぐって」『日本仏教学会年報』 69: 65-79.
- 2005 「アティシャの論理学に対する立場」『哲学研究』 580: 15-37.
- 2006 「『中観宝灯論』にみられる「bdag gis bkod pa rTog ge 'bar ba」について」『印度学仏教学研究』 55-1: 60-65.
- 2007 「『中観優波提舍開宝篋』テキスト・訳注」『京都大学文学部研究紀要』 46: 1-126.
- 2008 「アティシャ作『菩提道灯細注』に説かれる律について」『印度学仏教学研究』 56-2: 120-125.
- 2009 「アティシャの二諦説再考」『印度学仏教学研究』 58-1: 128-132.
- 2012 「アティシャの中観説」『シリーズ大乘仏教 6 空と中観』春秋社: 139-167.

望月海慧

- 1988 「Seeking Refuge in the Three Treasures in the *Bodhipathapradīpa* ll. 25-36」『印度学仏教学研究』 37-1: 38-40.
- 1990 「『帰依の説示』試訳」『仏教学論集』 19: 1-20.
- 1991a 「Atiśa の *Prajñāhṛdayavyākhyā* について」『印度学仏教学研究』 39-2: 203-206.
- 1991b 「Atiśa の *Sūtrasamuccayasāñcayārtha* について」『印度学仏教学研究』 40-1: 167-171.
- 1991c 「『般若灯論』第14章試訳」『棲神』 63: 47-65.
- 1992a 「ジュニャーナミトラ著『般若心経解説』」『大崎学報』 148: 50-56.
- 1992b 「『般若灯論』第10章試訳」『棲神』 64: 1-38.
- 1993 「中観派文献にみられる『法華経』の受容」田賀龍彦編『法華経の受容と展開』平楽寺書店: 539-569.
- 1995 “Die von Atiśa im *Mahāsūtrasamuccaya* zitieren Sūtren,” 『印度学仏教学研究』 44-1: 16-19.
- 1996a 「Der Bodhicitta-Abschnitt in Atiśas *Ratnakaraṇḍoghāṭa*」『勝呂信静博士古希記念論文集』山喜房佛書林: 51-85.
- 1996b (菅野龍清共著)「馬鳴に帰される『十不善業道説示』の研究」『仏教学論集』 20: 1-24.

- 1996c 「アティーシャの著作にみられる業思想」『仏教学』38: 1-23.
- 1997 「アティーシャの『経義集説示』にみられる五十の教え」『宗教研究』70-4: 179-181.
- 1998a 「アティーシャの『菩提道灯論細疏』和訳(1)」『身延論叢』3: 1-33.
- 1998b 「アティーシャに帰される二つの『心髓撰集』について」『宗教研究』71-4: 205-207.
- 1998c 「Dīpaṃkaraśrījñāna の *Bodhisattvacāryāvatārabhāṣya* について」『印度学仏教学研究』47-1: 177-181.
- 1999a 「ディーパンカラシュリージュニャーナの『菩提道灯論細疏』和訳(2)」『大崎学報』155: 25-62.
- 1999b “Zum *Bodhisattvacāryāvatārabhāṣya* des Dīpaṃkaraśrījñāna,” 『法華文化研究』25: 39-121.
- 1999c 「Dīpaṃkaraśrījñāna の *Karmāvaraṇaviśodhanavidhibhāṣya* について」『印度学仏教学研究』48-1: 138-142.
- 2000a 「ディーパンカラシュリージュニャーナの『菩提道灯論細疏』和訳(3)」『身延論叢』5: 1-32.
- 2000b 「Atiśa の『入菩薩初学道説示』について」『宗教研究』73-4: 222-223.
- 2000c 「Dīpaṃkaraśrījñāna の *Prajñāpāramitāpiṇḍārthapradīpa* について」『身延山大学仏教学部紀要』1: 53-106.
- 2001a *A Study of the Mahāsūtrasamuccaya of Dīpaṃkaraśrījñāna*. Minobu: Minobusan University.
- 2001b 「星宿を排除する経典」『田賀龍彦博士古稀記念論集 仏教思想仏教史論集』山喜房佛書林: 147-171.
- 2001c “On the *Prajñāpāramitāpiṇḍārthapradīpa* of Dīpaṃkaraśrījñāna,” 『印度学仏教学研究』49-2: 50-56.
- 2001d 「ディーパンカラシュリージュニャーナの『菩提道灯論細疏』和訳(4)」『身延論叢』6: 1-31.
- 2001e 「ディーパンカラシュリージュニャーナの『大経集』に引用される正法念処経」『身延山大学東洋文化研究所所報』5: 1-68.
- 2001f 「ディーパンカラシュリージュニャーナの『大経集』に引用される法華経」勝呂信静編『法華経の思想と展開』平楽寺書店: 295-324.
- 2001g 「Atiśa に帰される *Śatasāhasrikāprajñāpāramitā* について」『身延山大学仏教学部紀要』2: 13-39.

- 2002a “On the *Śatasāhasrikāprajñāpāramitā* of Atiśa,” 『印度学仏教学研究』 50-2: 39-45.
- 2002b 「ディーパンカラシュリージュニャーナの『菩提道灯論細疏』和訳(5)」『身延論叢』 7: 1-18.
- 2002c 「アティーシャと般若経」『宗教研究』 75-4: 185-186.
- 2002d 「執事を説く経典」『佐々木孝憲博士古希記念論集 仏教学仏教史論集』山喜房佛書林: 103-130.
- 2002e 「Dīpaṃkaraśrījñāna の *Madhyamakopadeśa* について」『身延山大学仏教学部紀要』 3: 9-48.
- 2002f 「Blo bzang dpal ldan bstan 'dzin snyan grags による *Bodhipathapradīpa* の注釈書について」『身延山大学仏教学部紀要』 3: 49-66.
- 2002g “The Root Verses Cited in the *Bodhimārgadīpapañjikā*,” 『印度学仏教学研究』 51-1: 27-31.
- 2003a 「ディーパンカラシュリージュニャーナの『菩提道灯論細疏』和訳(6)」『身延論叢』 8: 1-59.
- 2003b 「アティーシャのもう一つの『中観説示』」『宗教研究』 76-4: 369-370.
- 2003c 「Blo bzang chos kyi rgyal mtshan による *Bodhipathapradīpa* の注釈書について」『身延山大学仏教学部紀要』 4: 35-98.
- 2003d 「Bu ston rin chen grub の *Chos spyod bde lam* について」『印度学仏教学研究』 52-1: 67-71.
- 2004a *A Study of the Mahāsūtrasamuccaya of Dīpaṃkaraśrījñāna II*. Minobusan University.
- 2004b “Some Remarks on the Small Texts Attributed to Dīpaṃkaraśrījñāna,” *Joong-ang Sangha University Magazine* 20: 61-74.
- 2004c 「ディーパンカラシュリージュニャーナの『菩提道灯論細疏』和訳(7)」『身延論叢』 9: 1-35.
- 2004d 「アティーシャに帰される二つの『大乘道成就撰集』について」『宗教研究』 77-4: 244-245.
- 2004e 「ガムポパの『ラムリム・タルゲン』に引用される『菩提道灯論』」 *Bul gyo hak yeon gu (Journal of Buddhist Studies)* 8: 325-251.
- 2004f 「Thub bstan chos kyi nyi ma による *Bodhipathapradīpa* の注釈書について」『身延山大学仏教学部紀要』 5: 9-42.
- 2005a 『チベットにおけるラムリム思想の基盤に関する研究 [改訂増補版]』身延山

大学

- 2005b “On the Commentary to the *Bodhipathapradīpa* by Co ne Grags pa,” 『印度学仏教学研究』 53-2: 45-49.
- 2005c 「ツォンカパの『ラムリム・チェンモ』に引用されるディーパンカラシュリージュニャーナ」『禅学研究』 特別号: 195-208.
- 2005d 「三種の『三昧資糧論』について」『身延山大学仏教学部紀要』 6: 49-81.
- 2005e 「ラトナーカラシャーンティ『経集解説・宝明莊嚴論』和訳(1)」『身延論叢』 10: 1-40.
- 2006a 「Bodhibhadra の *Samādhisambhāraparivarta* について」『印度学仏教学研究』 54-2: 70-76.
- 2006b 「ボーディバドラとアティシヤ」『宗教研究』 79-4: 252-253.
- 2006c 「ディーパンカラシュリージュニャーナの『法界見歌』について」 *The Proceedings of Korean Conference of Buddhist Studies* 3-1: 789-799.
- 2006d 「中観と唯識を融合する「大中観」とは何か」『大崎学報』 162: 83-94.
- 2006e 「ラトナーカラシャーンティ『経集解説・宝明莊嚴論』和訳(2)」『身延論叢』 11: 1-50.
- 2006f “What are major sutras in Indian Buddhism?” 『身延山大学仏教学部紀要』 7: 29-71.
- 2007a 「Dīpaṃkaraśrījñāna に帰される三種の gīti 文献について」『印度学仏教学研究』 55-2: 104-110.
- 2007b 「アティシヤに帰される vidhi 文献について」『宗教研究』 80-4: 314-315.
- 2007c “Is Dīpaṃkaraśrījñāna a Mādhyamika?” *Nagoya Studies in Indian Culture and Buddhism: Saṃbhāṣā* 26: 99-126.
- 2007d 「ラトナーカラシャーンティ『経集解説・宝明莊嚴論』和訳(3)」『身延論叢』 12: 29-64.
- 2008a 「ディーパンカラシュリージュニャーナに帰される『金剛座金剛歌』について」『坂輪宣敬博士古希記念論文集 仏教文化の諸相』 山喜房佛書林: 159-183.
- 2008b “On the Commentary to the *Bodhipathapradīpa* of Rol pa'i rdo rje,” *Acta Tibetica et Buddhica* 1: 45-57.
- 2008c 「dKong mchog rgyal mtshan による *Bodhipathapradīpa* の注釈書について(1)」 *Acta Tibetica et Buddhica* 1: 105-133.
- 2008d “On the Commentary to the *Dharmadhātustava* by Dol po pa (II),” *Acta Tibetica et Buddhica* 1: 17-44.
- 2008e 「ラトナーカラシャーンティ『経集解説・宝明莊嚴論』和訳(4)」『身延論叢』

- 13: 65-130.
- 2009 「ラトナーカラシャーンティ『経集解説・宝明莊嚴論』和訳(5)』『身延論叢』
14: 21-42.
- 2010 「ラトナーカラシャーンティ『経集解説・宝明莊嚴論』和訳(6)』『身延論叢』
15: 1-90.
- 2011a 『TĀRANĀTHA の *DMU MA THEG MCHOG* 研究』身延山大学チベット学研
究室
- 2011b 「Dīpaṃkaraśrījñāna に帰されるターラー成就法関連の文献について」『中澤
浩祐博士古希記念論文集 インド仏教史仏教学論叢』山喜房佛書林: 93-115.
- 2011c 「アティシャに帰される秘密集会タントラ関連の文献について」『宗教研究』
84-4: 322-323.
- 2011d 「Dīpaṃkaraśrījñāna に帰される三種の gīti 文献について(2)」『身延山大学仏教
学部紀要』12: 1-20.
- 2012a 「Dīpaṃkaraśrījñāna に帰される秘密集会タントラ関連の文献について(2)」*Acta
Tibetica et Buddhica* 5: 91-150.
- 2013a 「シャーンティデーヴァとディーパンカラシュリージュニャーナ」『伊藤瑞叡
博士古希記念論文集 法華仏教と関係諸文化の研究』山喜房佛書林: 723-735.
- 2013b 「アティシャの顕教文献において言及される密教文献」『宗教研究』86-4:
34-235.
- 2013c 「Dīpaṃkaraśrījñāna が説く根本過について」*Acta Tibetica et Buddhica* 6: 61-77.
- 2014a 「ヴィクラマシーラ僧院における Dīpaṃkaraśrījñāna」『奥田聖應先生頌寿記念
インド学仏教学論集』佼成出版社: 860-870.
- 2014b 「ディーパンカラシュリージュニャーナが伝えた発心律儀の儀軌について」
宮川了篤編『日蓮仏教における祈りの構造と展開』山喜房佛書林: 469-490.
- 2014c 「Dīpaṃkaraśrījñāna に帰される vidhi 文献について(2)」*Acta Tibetica et
Buddhica* 7: 151-158.
- 2015a 『全訳アティシャ 菩提道灯論』起心書房
- 2015b “On the *Ekasmṛtyupadeśa* of Dīpaṃkaraśrījñāna and his view on Nāgārjuna」『印
度学仏教学研究』63-3: 88-95.
- 2015c 「アシュヴァゴーシャに帰される密教文献について」『宗教研究』88 別冊:
281-28s.
- 2015d “Sūtra Anthologies,” in: eds., *Brill’s Encyclopedia of Buddhism, Volume One*, ed.
J.A. Silk, 292-303, Leiden: Brill.

- 2016a 「Dīpaṃkaraśrījñāna の『種姓誓願』について」『三友健容博士古希記念論文集 智慧のともしび インド・チベット・東南アジア篇』山喜房佛書林: 745-758.
- 2016b 「Dīpaṃkaraśrījñāna による二つの所作次第について」『印度学仏教学研究』64-2: 88-95.
- 2016c 「アティシャとパーラ王」『宗教研究』89 別冊: 284-285.
- 2016d “Dīpaṃkaraśrījñāna’s activity at the Vikramaśīla Monastery in Relation with the Pāla Dynasty,” 『東洋文化』96: 63-80.

元山公寿

- 1998 「アティシャの顕密観」『密教学研究』30: 45-57.

森雅秀

- 1991 「インド密教儀礼における水」『国立民族学博物館研究報告』15-4: 1013-1047.

矢崎正見

- 1954 「アティシャの入蔵と其の功罪」『大崎学報』101: 30-43.
- 1987 「アティシャの入蔵とガリのチベット仏教」『野村耀昌博士古希記念仏教学論集』春秋社: 137-153.
- 1989 「アティシャにおける仏道の体系」『日本仏教学会年報』54: 353-370.
- 1993 『ラダックにおけるチベット仏教の展開』大東出版社
- 1999 『初心者のための独習チベット語文法』出帆新社

安井広済

- 1976 『梵文和訳入楞加經』法蔵館

矢野道雄

- 1980 『インド天文学・数学集』朝日出版社
- 1986 『密教占星術』東京美術選書
- 1988 『インド医学概論』朝日出版社
- 1992 『占星術師たちのインド』中公新書

矢野道雄、杉田瑞枝

- 1995 『占星術大集成』2 vols, 平凡社

山口益

- 1973 『山口益仏教学文集 下』春秋社
- 1975 『中観仏教論攷』山喜房佛書林

山口益、舟橋一哉

- 1955 『俱舍論の原典解明 世間品』法蔵館

山口端風

- 1982a 「カダム派の典籍と教義」『東洋学術研究』 21-2: 68-80.
- 1982b 「チョナンパの如来蔵説とその批判説」『田村芳朗博士還暦記念論集 仏教教理の研究』 春秋社: 590-591.
- 1989 「チベット仏教思想史」『岩波講座 東洋思想 第11巻 チベット仏教』 岩波書店: 21-115.
- 2004 『チベット 下 [改訂版]』 東京: 東京大学出版会
- 山崎守一
- 1982 「大乘集菩薩学論(*Śikṣāsamuccaya*)の原典研究」『仏教学論集』 12: 24-35.
- Yamada, Isshi
- 1981 *Sarvatathāgatattvasaṃgraha nāma mahāyānasūtra*, New Delhi.
- 山本侍弘 (弘史)
- 2005 「Ambarāja (文殊師利) の発菩提心偈—中観儀礼の一側面—」『論集』 32: 51
- Yuyama, Akira
- 1976 *Prajñā-pāramitā-ratna-guṇa-saṃcaya-gāthā (Sanskrit Recension A)*. Cambridge: Cambridge University Press.
- 1969 「Kamalaśīla の *Bhāvanākrama* に引用された維摩経」『東方学』 38: 105-99.
- 2002 “Restoration-Translation-Emendation, Along the Way to Revisit the *Vimalakīrti-nirdeśa* Cited by Kamalaśīla in his *Bhāvanākrama* III,” in: *Buddhism and Indian Studies in Honour of Professor Sodo Mori*, ed. Publication Committee for Buddhist and Indian Studies in Honour of Professor Sodo Mori, 215-224, Hamamatsu: Kokusai Bukkyoto Kyokai.
- 吉田宏哲
- 1982 「瑜伽行唯識から密教へ—四智から五智へ—」『講座・大乘仏教 8 唯識思想』 春秋社: 235-261.
- 芳村修基
- 1959 『大乘稻竿経の註釋』 龍谷大学東方聖典研究会
- 1974 『インド大乘仏教思想研究』 百華苑
- 吉水千鶴子
- 1989 *Descriptive Catalogue of the Naritasan Institute Collection of Tibetan Works Volume 1*, Narita: Naritasan Shinshoji.
- 四津谷孝道
- 2000 「鳩摩羅什訳『中論』「観法品第十八」覚え書き」『平井俊榮博士古稀記念論集 三論教学と仏教諸思想』 春秋社: 17-45.

2006 『ツォンカパの中観思想』 大蔵出版

2010 「二つの空性理解と三転法輪」『駒沢大学仏教学部論集』 39: 1-17.

頼富本宏

1972 「Āpatti 論書群について」『密教学』 9: 56-83.

1973 「伝馬鳴作「事師法五十頌(Gurupañcaśikā)」をめぐって」『印度学仏教学研究』
21-2: 116-118.

1977 「Advayavajra 研究 1」『密教学』 13/14: 139-156.

1984 「八難救済ターラー考」『インド古典研究』 6: 423-442.

1990 『密教仏の研究』 法蔵館

頼富本宏・下泉全暁

1994 『密教図像図典』 人文書院

渡辺章悟

1997 「1 般若部」 勝崎裕彦他編『大乘経典解説事典』 北辰堂

2009a 『金剛般若経の研究』 山喜房佛書林

2009b 『金剛般若経の梵語資料集成』 山喜房佛書林